

ジェガン、 I S 世界に立つ！！

RABE

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガンダムシリーズ、特に量産型機、更に言えばジエガンをこよなく愛する少年は気づけばIS世界に転移していた！

更にその身には量産型モビルスーツであるジエガンが世界で468個目のコアを持つISとして纏われており!?

これはジエガンを愛する少年の、ジエガンによる、ジエガンの為の物語である

※暇潰しと息抜きのための投稿のため、気が向いたら更新します

なお途中からジエガンの原型なくなったり、そもそもガンダムに乗り換えたりする事になるので酷いタイトル詐欺になります

目次

キャラクター紹介	1
ジエガン、IS世界に立つ!!	
1話 気付けば森(林)の中	7
2話 不思議の国へ	22
3話 翔べ!ジエガン	36
4話 織斑一夏	48
5話 IS学園入学	61
6話 ユニコーンの日	74
7話 VS蒼い雫	83
8話 模擬戦色々	94
9話 織斑一秋という男	106
10話 中国からの転入生	119
11話 一夏VS鈴	133
12話 蒼い死神	145
13話 事後処理、そして	159
R型の鼓動	
14話 ボーイ・ミーツ・ボーイズ	175
15話 転校生	189
16話 ライトアーマー	203
17話 ラウラ・ボーデヴィツヒ	216
18話 シャルロット	229
19話 真実	243
20話 トーナメント開幕	252

2 2 話 狂戦士

2 3 話 事後処理色々

群青覆うは骸の軍勢

2 4 話 誕生日

2 5 話 誕生日2

2 6 話 海に眠る巨影

2 7 話 群青

2 8 話 群青2

2 9 話 K A T A N A

3 0 話 死の軍団

3 1 話 死の軍団2

3 2 話 最終兵士

3 3 話 暗雲

再会、友よ

3 4 話 撮影

3 5 話 屍山血河

3 6 話 戦う理由

3 7 話 教導

3 8 話 教導2

3 9 話 教導3

4 0 話 教導4

4 1 話 正義の女神

4 2 話 紅い流星

4 3 話 いつもの日常へ

一夏の夢(ひとなつのゆめ)

266

277

293

307

318

330

344

357

371

383

395

409

421

433

444

457

469

481

494

508

520

533

546

4 4 話 対話

4 5 話 機体評価試験

4 6 話 自由の国

4 7 話 研究所強襲

4 8 話 不死鳥狩り

4 9 話 二つの世界

5 0 話 決意

5 1 話 水色の髪的少女

5 2 話 妹たち

5 3 話 夏祭り

5 4 話 鋼のレジスタンス

5 5 話 変わる世界

新たなる剣

5 6 話 墜ちた翼の真実

5 7 話 小兎の短剣

5 8 話 生徒会

5 9 話 仮想の戦場

6 0 話 教典に近いもの

6 1 話 兎の巣穴

6 2 話 Zの鼓動

6 3 話 学園祭

6 4 話 学園祭2

6 5 話 灰被り姫

6 6 話 摂理

6 7 話 折れた剣

555

568

579

592

606

620

633

644

657

670

682

694

704

715

727

738

753

769

780

794

806

819

831

845

68話 新たなる剣

短編集①

ラビットフット社の歌姫

インフィニット・フォーチュン

人の革新

69話 高速機動訓練

70話 砲弾よりも速く

71話 人の革新

72話 亡国機業

73話 亡国機業2

74話 成長する者たち

75話 反撃開始

76話 脱出

859

869

874

886

896

910

925

936

943

958

972

キャラクター紹介

□ラビットフット社

◎紫藤康太しどうこうた イメージCV：中村悠一

……本作の主人公、ガンダムシリーズを愛する何処にでも居る平凡な一人の少年だったが、高校入学前の春休み中、ジオラマ作成の途中で寝落ちしていたところ、何故かIS世界に流れ着いた漂流者。

その後、漂流時に身に纏っていたIS化していたジェガンの反応を見付けた篠ノ之束により保護、支援を受けると同時に幼い頃に夢見、歳を重ねると共に薄れていた『宇宙を目指す』という夢に向かい束の同志となった。

普段はジェガンの開発企業としてカムフラージュで設立されたラビットフット社のテストパイロットとして活動、IS学園の一年一組に編入され、日々訓練に励んでいる。

戦闘ではジェガンを駆り射撃メインの戦闘スタイルを取る、既存の戦闘スタイルとは違いガンダムシリーズにて見た動きや装備、戦術を駆使し戦闘を行う為、多くの相手にとって初見殺しに近い状態になり、例え手の内がバレたところで引き出しが多すぎる為に完全に対応し切るのは不可能に近い。

独自にAMBAC機動などを編み出し、瞬時加速や高速切替などのISのテクニクも身に着けている、また束より教えられた結果メカニクとしてもそれなりの腕を有しており、主に既存技術の改良、組み合わせによりパイロットに合わせた機体のカスタマイズを得意とする。

後に死線を幾度となく潜り抜けた事でニュータイプ能力に覚醒、感応波によりサイコミュの使用が可能となるまでに成長していく。

しかし戦闘に於いて自身の生存を軽視する傾向があり、勝利する為に身体が耐え切れないような機動をする事も珍しくはない。

また、女性権利団体ヴァルハラとの戦闘以降、非正規戦を初め生身

での戦闘含め積極的にその身を投じる事になる。

因みに誕生日は9月18日、憧れの人物は性能差を己の技量のみで覆した姿からグラハム・エーカーであり、幼少期の口調に影響が出ており、現在もテンションによってはその口調が出てくる。

ジエガンに関しては量産機としての機能美に溢れていて、スターク・ジエガン等の能力からグラハムの次に魅入られた存在。

使用機体：ジエガンA型↓ジエガンD型（スターク・ジエガン）↓
ジエガンR型↓ストライク・ジエガン↓ストライク・ジエガンE↓
ジエガンR型（サイコミュ搭載型）↓??（ガンダムタイプ）

◆ ◎リナIIゴールドエンバーク

……元ネタはアーマーガールプロジェクトのMS少女、FAZZを纏う少女から。

カナダ系のハーフであり、幼少期に日本に引っ越して来た際に迷子となり、康太に助けられる。

その後家が隣同士という事もあり家族ぐるみで付き合いがあり、互いに日本語と英語を教え合っていた。

小学校卒業と共にカナダへと帰った後も康太とはメール等でやり取りを続けていたが、康太がIS世界に漂流した後で日本に来日した後に行方不明となっていた事を知るが、どういう理屈か康太の部屋に置かれていたフェネクスが動き出し、それに導かれる形で同じくIS世界に流れ着いた。

突然の事態に見舞われるも康太の位置を感じ取った後、銀の福音やフアング・クエイクと半ば暴走し交戦、康太の介入により止められ、後にラビットフット社に合流する。

合流後、康太と同じくIS学園一年一組に編入されるが、日々クロエと恋敵として火花を散らすのであった

康太と交流していた頃、英語を洋画で学んでいた康太からアニメで

日本語を覚える事を提案されてからジャパニメーションにハマリ、実はアニメ二期までの『インフィニット・ストラトス』を観た事もある為、IS世界に於いて情報という大きなアドバンテージを持っている、なお原作小説を読んでいない為に差異に翻弄されたりもする。この作品は原作小説準拠である。

使用機体：フェネクス

◆
◎紫藤奏しどうかなで

……女性権利団体ヴァルハラに囚われていた十四歳の少女。
ヴァルハラ殲滅の為に襲撃を行っていた康太と出会い保護され、その後は康太の義妹として他の保護された少女達と共に暮らしながらISパイロットとして腕を磨いている。

ISに関しては良い感情を持っていなかったが、救われたのもまたISである為に複雑な感情を抱いている、そんな本人のIS適性はSである為に大人達によって人生を翻弄される事となった。

普段は聖マリアンヌ女学院に通いながら妹達の面倒も見ている、同い年である五反田蘭と友人となり、共にIS学園への入学を目指している。

自衛の為もあり専用機を与えられており、戦闘スタイルは近接戦闘を得意とし、逆に射撃を苦手としている。

また、実戦への参加はまだ認められていないがラビットフット社の裏部隊SNARKの一員でもある。

使用機体：ジェガンR型ライトアーマー（近接格闘戦仕様）

◆
◎紫藤菊代しどうきくよ

……奏と同じく康太に保護された少女達の一人。

十歳であり、年少組の中で一番の歳上。多少生意気な性格をしているが、何だかんだと康太の事は義兄として慕っている様子。

◆
◎紫藤萌しどうもえ

……奏と同じく康太に保護された少女達の一人。

九歳であり、天然でおっとりとした性格。語尾に「なのです」と付くのが特徴、年少組の中では一番素直に康太に懐いている。康太としては、もう少し警戒心を持った方が良いと思っっているが。

◆
◎紫藤静流しどうしずる

……八歳であり、年少組の中で一番の歳下ながらしつかり者の少女。読書や絵を描く事などが趣味。直接伝えた事はないが、密かに将来は義兄である康太を支えられるような事がしたいと決めている。

◆
◎ミネツサ・トムソン

……アメリカの秘匿された研究所にて非合法的な人体実験に参加させられていた年若き天才少女。十五歳にして大学を卒業し機械工学や生体工学、脳科学といった分野にて博士号を取得している。

元は膝を悪くした祖母の為に歩行をサポートするスーツや義肢を開発しようと科学の門を潜ったが、篠ノ之束という若き天才が白騎士事件を引き起こした事から、歳不相応な才能を危険視された事で何処の企業や研究室にも所属出来ず困っていたところを言葉巧みに誘われ、研究所に招かれる事となった。

しかしそこで行われたのは子供達の健常な手足を切り落とし機械の手足にする事で常人より優れた力を持つ兵士を生み出す研究であり、ミネツサの願いととは裏腹に非道な実験への参加を強要される。

無力さに打ち拉がれながらも、せめてもの償いとして被験者となった子供達にお菓子などを分け与えるなど、寄り添おうとするも、最終試験にて一人を除く全ての被験者は処分するという内容を知り、可能な限りで研究所の人間を毒殺しようと決意する。

そんな時、康太が研究所を襲撃し、後述するリリアナより保護を頼まれていた為にラビットフット社に合流する事となった。

合流後は自身の研究を誰にも歪められる事なく、予算の許す限りで行えるようになり、服のように着るパワードスーツなど、介護やリハビリの現場で使用出来そうな発明品を生み出していった。

また自身を救ってくれた康太に対しては恩もある為、忌避していた兵器としてのパワードスーツを開発、それ用の銃火器を含めISの仕様が厳しい屋内戦で康太をサポート出来るよう装備開発にて支援する。

なお、東や康太といった常識から外れた思考をする者達の中で唯一と言っていい常識人である為、そんな彼等から振り回されたりする苦勞人である。



◎リリアナ・トムソン

……アメリカの秘匿された研究所にて人体実験を行われた少女。十三歳であり、両手両足が常人より強力な身体能力を発揮出来る機械式の物に置き換えられている。

最終試験を潜り抜け、研究所より裏ルートを通して兵器として出荷されたところを康太に保護され、研究所で受けた恩義からミネツサの保護を依頼してくる。

IS適性はそこまで高くなく、C寄りのBである為に母親から捨てられ、それ以降はスラムで生活していた。

その為、倫理観や死生観が世間一般とは大きくズレているが、その辺りはラビットフット社との合流後、ミネツサによって少しずつ矯正されている。

そんな生まれ育ちから、食べられる時には食べられるだけ食べるという主義であり、小柄な体躯に見合わずかなりの大食漢でもある。

普段はおっとりとして間延びした口調で話すが、本気でキレると……？

スラム育ちや研究所での経緯から戦闘能力に優れている、生身で銃火器を扱うのは勿論、義肢による高い身体能力により普通の人間では扱うのが難しい重機関銃等もその身一つで扱う力を持つ。

例えばそれが殺人だとしても躊躇わない事からSNARKの一員としてISの訓練を行っている、義肢によって生身では不可能な可変機構を備えた機体を操る。

使用機体：リゼル一般機（ウイングユニット装備）



ジエガン、IS世界に立つ!!

1話 気付けば森（林）の中

「——此処は、何処だ？」

酷く頭が痛む中、オレは目を覚ました。

目を開けてみれば焦点が合わずにぼやけた風景が見えている、はつきりとは分からないが視界の大半を緑色のものが占めているという事は、森とか林の中に居るということだろうか、少なくともオレの記憶では最後に居たのは自分の家の自分の部屋の筈だ

酒を呑んで泥酔していたから記憶が無い、なんて事はあり得ない、そもそもオレは未成年である為に飲酒は出来ないからな

だがどうしてこのような状況になっているのか痛みで上手く働かない頭でなんとか考えようとして少し経つと頭痛は治まり、ぼやけていた視界もはつきりと認識できるようになってきた

それで確認した周囲の風景は予想通り小さな林の中であり、光が差し込む方を見れば舗装された通路が見える、少なくとも人の気配はあるのだ、誰かに声をかけて今の位置を知れば自ずと帰り道も分かるだろう、運転も出来ない俺が夢遊病のように意識のないまま歩いているとしたとしてもその距離はたかが知れている、そう遠くまでは来ていない筈だ

「ん？」

そうと分かれば取り敢えずはと通路に出ようとしたところで視界が普段とは違うことに気付いた

普通、人間の視界はありのままを映すものだ、何らかの装置でも身に付けていない限りは計器のような表記は視界に浮かび上がってはこない

「ん、んんん？」

だがオレの視界に映るのは高度計やらエネルギー残量といった意味の分からない表記が複数表示されており、慌てて顔に手を当てようとし、その手にも異常が起きている事に気付いた

ライトグリーン腕と手の甲、指や手のひらの側は黒い色をした、機械の腕

当然であるがオレは人間である、五体満足な身で別に義手だとか、そういう訳ではないのでオレの体に繋がっている手は生身のもの
筈

だが見えるのは機械の腕だ、オレが意図した通り、例えば上下に振ったり両手でそれぞれ別の手を繰り出してじゃんけんをしたり出来るのでオレの腕には違いないのだが、どうしてこうなった？

「落ち着け、落ち着け、オレは誰だ？」

名前は紫藤^{しどうこうた}康太、あと数日後には高校デビューを控える15歳だ

家族構成は係長で普通のサラリーマン親父と専業主婦のお袋の三人家族、容姿は平凡、黒髪黒目の生まれも育ちも生粋の日本人であり、成績だって順位は多少は上下こそすれ平凡だった

全てが特筆すべき点がなく平凡すぎる程に平凡だが、唯一の特徴であり誇れる、かどうかは別にして間違いなくオレの個性として見れるものがある

それは、ガンダムシリーズに対する熱い情熱である！

良いよねガンダムシリーズ、全ての始まりである初代は勿論、続編のZやZZといった宇宙世紀の歴史とも言える展開も好きだが、GやWといったアナザーと呼ばれる作品での独立した世界観や展開も好きだ

モビルスーツという人型兵器を用いて戦争を描きつつ人間ドラマを重視したあのストーリー、主人公ではあるが元は民間人であるが故の心の脆さとか、初めて初代を見た時には衝撃的だった

そして何よりも全ての作品において主力兵器として登場するモビルスーツ、そのデザインや兵装といった見た目は当然のことながら、開発経緯などがちゃんと練られていたり、戦闘機や車などのように時代や技術と共に進化しているのだと感じさせる統一性のある姿にはフィクションでありながらリアルさを感じる

オレはその中でもジム系統の量産型モビルスーツが好きだ、ジオン

なんかの丸みを帯びつつも武骨さや重厚感を感じさせるデザインも好きだが、やはりバイザー状の頭部カメラを始めとして全体的なシャープさはコストを優先しつつも発展性を考慮し余裕のある設計という、兵器として理想的な性能には機能美さえも感じられる

そしてオレ個人のイチオシとして挙げるならば傑作機として君臨するのはRGM-89ジエガンこそを推させてもらう

目立った特徴がない？やられ役？馬鹿を言え、戦闘に必要な能力はきちんと揃えつつ量産性があり整備性も良好、余裕のある設計から多数のバリエーションが存在しアップデートを繰り返す事で30年もの長い時間、連邦を支えた名機体だぞ

そういえばオレの記憶だと、一番新しいものは確か宇宙での戦闘を再現したジオラマ作成だったな

プラモデルで組み立てた多数のジエガンとギラ・ドーガを並べて逆襲のシャアをモチーフにしたシーンを演出しようとしてたんだ、上から見えにくい細い糸を使って吊るす事で宇宙での立体的な戦闘を再現し、高校入学までの余った時間を注ぎ込んで作った大作、確か夜中までやってて、それで寝落ちしたのか、目が覚めたらこの状況か？

そこでふと自分の腕を見る、ライトグリーンの装甲に覆われた機械の腕、その形状には見覚えがあった

オレは即座に自分の体を見下ろしてみると、やはり体の方も同じような装甲に覆われていたが、その形状と両の腰に備えられた物を見て確信した

「オレが、ジエガンそのものなのか!？」

確かにジエガンは好きだとも、好きではあるんだがな……

「ふざけるなあアアアアアアアアアアアッ!？」

折角の現実に見れたジエガンなのに、これじゃあその勇姿を外から客観的に見れねえじゃねえか!

確かに夢として叶うなら乗り込んで動かしてみたくもあつたき、けどそれはオレがコックピットに乗り込んで直接操縦するのであって、自らの肉体として動かすとか望んでねえんだよ!

「ちくしょう……こんなの、悲しすぎますよ……」

あまりのショックに地面に手を着いてorzの体勢になってしま
うが気にしない、もし神がこうしたというのなら、オレは絶対にその
神を呪ってやる

そんな怨念を撒き散らしていたのだが、耳に入ってきた航空機のよ
うなエンジン音に顔を上げる

聞こえてくるのは複数、それも凄まじい勢いでこっちに近付いてき
ている!?

「な、何だ!?!もしかしてネオ・ジオンか!?!それともマフティー!?!まさ
か、クロスボーン・バンガードじゃねえよな!?!」

だとしたら、この大型ジエガンタイプでは駄目だ!

大慌てで逃げようとしたが既に速度の乗っていた向こうの方が早
かったらしい、鉄のような色をした機体と緑色の機体が三機ずつ、オ
レを包囲するように展開した

「そのIS、直ちに武装を解除し、投降せよ!受け入れられない場
合、実力を以て排除する!」

だが現れた六機の存在は直ぐにオレを攻撃する意思はないらしい、
ちゃんと警告と降伏勧告をしてくれた為に少し冷静さを取り戻す

急いで両手を挙げて無抵抗である事を示しつつ、混乱する頭で状況
の把握に努める

「オ、オレは紫藤康太だ!信じて貰えるか分からないけど、オレ自身ど
うしてこんなところに居るか分からないんだ!だから頼む、撃たない
でくれ!」

鉄色の機体は日本刀のような刃物を、緑色の機体は銃を装備してい
るのが見えたが、オレの武装は右腰のビームサーベルと左腰のハン
ド・グレネードのみ、そもそも話し合いで解決出来るなら使う必要の
ないものだ

何でこんな状況になってしまったのかは分からないが、もしかした
ら事情を話せばオレの今のジエガンになってしまった状態も解決す
るかも

「お、男!?!」

「二人目、なのか!?!」

「まさか、そんな……」

「でも、さっきの名前とこの声は」

「へっ?」

だが名乗ったりしたにも関わらず、向こうは逆に大きく混乱しているらしい

オレは無闇に刺激しないように気を付けて無言で待っていたが、冷静さを取り戻すべきと判断したのか先程警告してきた女性が武器を構え直して告げた

「とにかく、まずはISを解除するんだ。妙な動きをすれば即座に攻撃する、良いな?」

「あ、はい。えっと、解除?どうすれば……」

取り敢えず解除と念じていると、多少の浮遊感と共にジェガンが消えて、代わりに白を基調とした薄めの宇宙服みたいなものに切り替わった

それと同時に視界に写っていた計器類も消えており、どうやら解除に成功したらしい

体の方も宇宙服、というかガンダムシリーズの内、宇宙世紀の方で主に連邦軍のパイロット達が着ていた軽装型ノーマルスーツだし、顔には風を感じるようになった

そして、オレの手元には新たにライトグリーンのバスケットボールくらいの球体が存在しているのだが、それを見た時には苦笑いをしてしまった

『ハロ、ハロ』

手元にあるのはガンダムシリーズを通して多くの作品に大小や設定の差異はあれど登場するマスコットメカ、ハロだ

耳のようにも見える普段は腕が格納されている上部の蓋をパタパタと動かしながら目を点滅させてオレを見ている

ジェガンが消えてハロが現れたという状況から察するにこのハロはジェガンと何らかの関係があるのだろう、だがそのハロはいつの間にか近付いてきていた緑色の機体の女性に取り上げられ、代わりにオレの手には手錠が掛けられた

「大人しく指示に従った事には感謝する。だが貴様が不法侵入者である事に変わりはない。大人しくついてきて貰うぞ」

「デスヨネー」

自ら解除したとはいえオレの手元に既にジエガンとハ口はない

こうして手錠を掛けられたオレは周囲を謎の兵器を身に纏った女性達に囲まれつつ言われるがままに連れていかれるのであった、ドナドナ



「それで、単刀直入に聴こう。お前の目的は何だ？」

「目的は無いです。気がついたらあそこに居ました」

「……では、お前が所属している国家、もしくは組織は何処だ？」

「産まれも育ちも日本です。組織とかは、高校入学前なのでまだ何も所属してないと言えます」

「……あまり手間を掛けさせてくれるなよ。正直に話せば直ぐに終わるんだ。このままだと、多少強引な手段を使っても聞き出す事になるぞ」

「本当に本当なんです！信じて下さいー！」

「ならそれなりの誠意を見せる事だな」

はい、あの後連れてこられた刑事ドラマで見ると言うような取調室において、オレは目付きの鋭いスーツ姿の女性に取り調べを受ける事になりました

とはいえ全ての質問にはしっかりと答えているものの、まあ何だか重要施設の敷地内に入ってしまったらしく、簡単には信じて貰えそうにありません

第一、オレの方が色々質問したいさ、此処が何処なのかも全く分かってないんだから

「ハア、では質問の種類を変えていこう。お前乗っていたIS、あれは何だ？」

「あいえず？：そういえば、あのパスワードスーツみたいな物に乗っていた人達にも訊かれましたが、何ですかそれ？」

「お前の乗っていた機体の事だ。今のこの世界において、よもやISを知らんというつもりは無いな？」

「いえ、全く知りません」

あれだけの兵器なのだから何らかの情報はあっても良いのだが、生憎と多少の知識はある戦車や戦闘機と違いアイエスなる兵器は聞いた事がない

それにジェガンはモビルスーツだ、サイズこそ人間が身に纏うような姿になっているが、略称をアルファベットにするならMSとなる

だがオレの回答がお気に召さなかったらしく、スーツ姿の女性は殺気の籠った目をオレに向けてきている、例えジェガンがあつたとしても、この人を相手にしたら相手が生身だとしても負けそう……

ハッ、もしかしてアイエスとは発表前の新兵器であり、此処はその極秘の研究施設だとか!?

ヤバい、それだと非常にヤバい、下手しなくても口封じとして殺されるかも!

まだだ、まだ終わらんよ! オレにはこれから先登場するであろう新たなガンダムシリーズやガンプラ、ゲーム、漫画、小説が待っているんだ! こんなところで死ぬるか!

「そうか、本来ならばこのような手は使いたくなかったのだが——」
「うおっ!? 待った待った、暴力反対! ラブ・アンド・ピースの精神で行こう!」

だから両手の骨をこれ見よがしに鳴らさないで下さい!

「ならば知っている事を全て吐け。あのISは何だ? 何処の組織の物だ?」

「おっと、そんな事を聞きたいなら先に言って下さいよ。それなら喜んで喋る、いや寧ろ語りますとも!」

「む、ならば話せ。例えばだな——」

「あの機体はRGM-89 ジェガン、劇場版アニメである機動戦士ガンダム 逆襲のシャアに初登場した地球連邦軍の量産型モビルスーツです。本来ならモビルスーツとしてのサイズで、全高20メートルを超えるサイズなんですけど、何故かアレは人の着込むパワードスー

ツミたいになってました。まあ初代ガンダムでは初期案のモビルスーツが人間が着込むパワードスーツだったという事を考えればある意味原点回帰とも言えますね。と、話しはそれでしたがジエガンの特徴は高い完成度を誇る量産型としての性能にあります。装備は基本的に見えますが後に多数のバリエーション機を生み出す素体としても有用であり、D型なんかは最初からスターク・ジエガンとして換装する事を前提としたアタッチメントが追加されて任務に応じて切り替える事で様々な状況に対応する事が可能です。他にもR型やM型といった初登場から30年の月日が経つてからも運用されており、正に量産機としての完成形と呼べるでしょう。まあ、その頃には旧式化して殆んどやられ役という悲しい事になってましたが。それでも、ガンダムUCでは一話目にして前述のD型とスターク・ジエガンの活躍は一度見れば忘れられないものです。量産機の特務仕様でありながらNT用のワンオフ機であるクシャトリヤとの激戦、素のD型はリゼルと協力してバンシィに組み付くという戦術次第で量産機でもやれるのだと示したのは、ジエガンもまた可能性の獣なのだと言えるでしょうね。他にも――」

「長いわ」

「グフっ!？」

ジエガンについて教えろというから話してたのに理不尽にも頭にチヨップを叩き込まれてオレの話は強制的に中断させられた

だが、それで止まるようならガンダムファンとしては二流だ！

「な、殴ったね」

「ふん、腑抜けたことを言うな。それより妙な事を言っていたな。アニメだと？少なくともアニメを基にしたISなど聞いたこともないな」

「え、そこはもう一発殴るところじゃないの？折角『二度もぶつた、親父にもぶたれたことないのに!』って台詞に繋がらなかったのに」

「やかましい」

「ドムっ!？」

な、殴るタイミングが違う……

けど、ジエガンはアニメの機体だからそうとしか言えないしなあ
「でもいくらなんでもガンダムって名前くらいは聞いたことあります
よね？1979年から放送された日本が世界に誇るロボットアニメ、
リアル系ロボットの先駆けとも言えるアレですよ？」

「知らんな」

「ハハハ、ご冗談を」

「いや、本当に知らんぞ。ほれ、試しに検索してみたがそんな物は存在
していない」

「へっ？」

スーツ姿の女性を取り出したスマートフォン画面、世界的に有名な
検索エンジンを使い『ガンダム アニメ』で検索されているものの、
検索結果は0件となっている

何でだ？何で何でなんでナンデ——

「おい、どうした!？」

「ハハハ、ガンダムが存在しない。存在、しない。アニメも、ゲームも、
漫画も、小説も、なによりガンプラも……」

全て全て全て、この世に存在していない

「鬱だ、死のう……」

何だその苦行しかない世界、そんな世界に価値など無い、消えろ消
えろ、もしくは夢なら覚めろ

『ミトメタクナイツ！ミトメタクナイツ！』

「織斑先生、待機状態の筈のISが勝手に!？」

そうして世界の全てを呪おうとした時、取調室の扉が開いて緑色の
球体、ハロが入ってきた

追ってきたのはさっきのアイエスとか言うのを動かしてた人かな
？どうでも良いけど

「おお、ハロ。どうやらこの世界に残ってるガンダム要素はもうお前
とジエガンだけみたいだ」

『ミトメタクナイツ！』

「そうだなあ、認めたくないよなあ。どうしようか、これから」

ガンダムが無ければ再現しようにも、ジエガンだけじゃ敵もない

もんな、いつそのこと〇〇みたいに世界を敵に回そうか？

ああ、それも良いかもなあ、少なくともオレが死んでもジェガンという存在は永遠に世界に刻まれるもんなあ、アハハハハ

が、その瞬間大きな衝撃音と共に地面が揺れた

大地震のように立っていられない程ではないがしつかりと揺れが感じられる程の衝撃だ、まあ何でも良いか

「クツ、さつきから何なんだ!?!」

「お、織斑先生、大変です!?!」

「今度は山田先生か。何があつた?」

「それが、この建物の近くに巨大なニンジンが落ちてきましたッ!」

「待つんだ山田先生、大丈夫か? 疲れてはいないか?」

「で、ですからあ、そのニンジンからですね、きやつ!?!」

「やつほくちーちゃん! 大親友の束さんだよ!」

「束か。此処は関係者以外立ち入り禁止だ。何しに来た」

「そりゃあ勿論、大々好きなちーちゃんに会いに! っつて、ウソウソ、ウソだからその今にも掴みかかつて来そうなアイアンクローは止めて!?!」

「なら早く要件を言え。こっちはこの侵入者の件で忙しいんだ」

「うう、ちーちゃんに会いたかつたのは本当なのに……でも束さんもその侵入者の件で来たんだよ。束さんの知らない、世界で468個目のI S コアを持つ、その子のね」

「何だ?!? それは本当なのか!?!」

「うん、私は全てコアをちゃんと記憶してる。でもそんな私の知らないコアが突然コア・ネットワークに現れたんだよ? ならそれを確認しない訳にはいかないよね。ねえそこのキミ、そのI S ちよつと見せてくれる? というか見るね、それっ!」

「あ、オレのハロが……」

どうやって世界を滅ぼそうか計画していたら抱き締めていたハロが横からウサミミに童話みたいなワンピースとかいうふざけた格好の女性に奪われた

『ハロ、ハロ』

「うわあ、アクセサリーとかでもなくペットロボみたいな形の待機状態にしてるって面白い！束さんも今度やってみよつと！でもでも、今は中身のデータの確認からね！」

ハロに手を伸ばすが、女は何かのデバイスを操作するとハロと接続、空中にディスプレイが浮かび上がる、なにそれカッケエ

「ふむふむ、記録は……えっ、今さっき生まれただけか?!それに、武装とかのデータも、こんな材質に理論、見たことないよ?!ミノフスキー粒子?ナニソレツ!?こんなの、今の素粒子物理学に完全に終止符が打たれちゃうよ!?!」

と、そのディスプレイを幾つか見ていたウサミミの女性が驚愕の声を上げているが、オレの耳はそんな事よりも大事な単語を捉えた

「ミノフスキー粒子は主にレーダーの阻害を目的として散布する事で敵の長距離誘導ミサイルの無効化を可能とします。それだけでなく、戦艦の主砲の他ガンダムからはモビルスーツに携行可能なビーム兵器として使用されており、これによりモビルスーツの機動性に戦艦並みの火力という、既存の兵器を上回る性能を得ました。そもそも、幾ら宇宙空間での使用が前提とはいえ、人型兵器というある意味では合理性を捨てた兵器が全ての兵器の頂点に立ったのは単にひとえミノフスキー粒子によってレーダーが使用不能になり、有視界戦闘という近距離での戦闘が主流になったからになります。その為、ミノフスキー粒子を用いない戦闘では長距離誘導ミサイルにより一方的な攻撃によりモビルスーツは地上では鈍重的となってしまう。またミノフスキー粒子には反重力を発生させる能力もあり、航空力学を無視した飛行を可能とするミノフスキークラフトも存在します」

他にも圧倒的な加速力を生み出すミノフスキー・ドライブというF-99やV2ガンダム、ファントムといった機体に搭載された光の翼があるが、それは後回しでいいだろう

それよりも面白い話を聞いた、ハロの中にはガンダムに関するデータが存在しているだど?

「ふーん、そんなに知ってるってことは、このデータはキミが作ったのかな?」

「いやまさか。オレが知ってるのは単にガンダムの設定資料集を読み込んでいたからですよ」

「キミ、変なことを言うね。設定資料集っていうけど、この子の中にはちゃんとミノフスキー粒子の精製方法もあるんだよ?」

「へっ?」

今日何度目だろうか、間抜けな声が漏れてしまう

ミノフスキー粒子の精製方法? いやいや、流石に架空の物質なんだからいくら設定を見ても精製方法なんて存在する訳がないでしょうに

「それにほら、これはスペースコロニーの図面だよ。寸法に材質、建造用のコロニービルダーって設備まで用意されてる。それから現行のロケットなんかとは比べ物にならない重量を宇宙に打ち上げられるHLVと、コロニー建造用の資材を火星との間にある小惑星帯から運んでくる為のエンジンとかね。この世界の技術を何十年どころか何百年も超えてそんな技術だって、凡人には理解出来ないだろうけど天才の東さんなら今にでも実現可能なレベルだよ。それでもキミは、これらの知識が全てアニメだって言うのかい?」

「間違いない、確かにオレが知っているのはアニメとしてのものだけなんだ。それこそ、宇宙世紀だけじゃない。新暦や正暦、リギルド・センチユリー、未来世紀、アフターコロニー、アフターウォー、コスミック・イラ、なによりも西暦の、その全てのガンダム知識がオレにはある。連続性のない世界を幾つも知っている、それがオレの知るガンダムがアニメだという事への証明だ」

ターンエーとか幾つの世界と繋がってるのか知らないが、少なくともSEEDやOOの世界は宇宙世紀と繋がっていない

だからそれを根拠にウサミミの女性に伝え、それから少しの間、誰も言葉を発しない状態が続いた後で、そのウサミミの女性がため息を一つ吐いた

「なくんだ、残念。もしキミが宇宙世紀から来た人間だったらとってもし面白いことになりそうだったのになあ」

「オレだっけで行けるならガンダム世界には行ってみたいけどな。モビ

ルスーツでの戦闘云々は抜きにして」

多分オレには戦闘は無理だから、SEED世界で知識を身に付けてジャンク屋とかやってみたい、まああの世界のジャンク屋、割りと自衛の為に戦闘してるけども

「それじゃあ、やっぱりこれはダメーって訳じゃないんだね。このデータ、キミが言ってたアニメの方のガンダムでしょう?」

と、ウサミミの女性が一つのディスプレイを大きくするとそこには懐かしの手書き作画による昭和のアニメ、初代ガンダムの姿が映し出され、更にBGMやSE、声優の演技と共にガンダムが立ち上がっていくところだった

ああそうだ、あれこそがオレの愛して止まないアニメ、それこそが

「ガンダアアアアアアアアアアムツ!!」

「やかましい」

「ゲルググっ!?!」

気分は神を見た刹那の気分、その後でスーツ姿の女性から一撃食らわなければ最高だったのだが

だが今のオレにその程度の攻撃、痛くもなんともないわあッ!

いや、痛いには痛いんだけど、そんなことよりも優先すべき事があるのだから!

「あの、それって他の作品もありますか!?!」

「そうだね、幾つもの作品が入ってるけど、これ全部ガンダムなの?」

追加で表示されたディスプレイに書かれていたのは作品のリスト、そこには今まで映像化されたガンダムの全てが並んでいた

「ひゃっほう、やったぜ! やっぱりガンダムは消えてなかったんだ!」

この作品があるだけで、オレはあと十年は戦える! ガンプラや新作があるなら追加で死ぬまで行ける!

「東、一人で納得してないで説明しろ。結局、アイツは何者なんだ?」

「ん、簡単に言うなら平行世界人って感じかな? 詳しくはこっちの世界に来た方法が分からないから流石の東さんもお手上げだけど、ま

「ず間違いないと思うよ」

「それは本当なのか？」

「うん！だって既存の技術体系を凌駕したデータの数々が否定のしようもないからね。彼の世界ではフィクションだったみたいだけど、何かの拍子にそれまで流れてきてISの形を取ったみたい。そしてそれは私の夢にとって非常に有用な物だったの。でも、一つだけメツセージがあったよ」

「中身は？」

『私のたった一つの望み』ってフランス語で書かれてたよ」

『貴婦人と一角獣』！現実でもフランスの博物館にあるタペストリー！ガンダムUCにおいて物語の重要な要素を為す一節！ガンダム関連ってオレのことをお呼びかな!？」

「分からないが、無関係ではないのかもな。それにしても、平行世界人だと？俄には信じがたい話だが……」

「この天才束さんの名にかけてそれだけは保証するよ。それでちーちゃん、この子の扱ってこれからどうなるの?」

「普通ならば目的等を徹底的に調べた後、不法侵入として警察に突き出して終わりなのだがな、恐らくは戸籍すら存在していないのだろうか？ましてや世界で二人目の男性IS操縦者だ。正直に言ってこれから荒れるな」

「そうだよね。広告塔として操縦者にするならまだマシ、最悪研究材料として解剖されちゃうかもね」

「おや、何やら不穏な単語が聞こえてきたような……」

「ウサミミの女性のお陰で侵入者としての罪はなんとか晴れそうだけど、解放されてからが大変な事になりそうだぞ?」

「それでなんだけどね、そんな諸々の問題を一気に解決する手段があるんだよ!」

「お前の言う手段が今までまともであった試しがないが良いだろう、話してみろ」

「うん、この子の身柄なんだけどね、私に出来ない?」

「だがウサミミの女性のお陰でまた助かりそうになってきた」

そしてこれがオレとウサミミの女性、この世界で【天災】と呼ばれている科学者、篠ノ之束との出会いだった

2話 不思議の国へ

「コイツの身柄を引き取る？お前がか？」

「むう、私のこと信用してないな？」

「当たり前だ。少なくともお前に誰かの面倒を見るなんてことが出来る訳がないだろう」

「ヒドツ!?そこまで否定されると流石にちーちゃんでも許せないよ!?」

「日頃の行いのせいだ。それで、何が目的なんだ？」

「ん、何のこと？」

「惚けるな。お前がただの善意で他人の面倒を見る訳がないだろう」

「本当に他意はないよ。望む望まないに関わらず、この子は私の夢に必要な物を持ってきてくれた。ならそのお礼として力を貸してあげるのには普通じゃないの？」

「そういう殊勝な心掛けが既にお前らしくないという事だ」

「ふふくん、やっぱりちーちゃんは私の事なら何でも分かってるね！まあ隠すようなことでもないし、別に良いよ。ねえキミ。キミは今の自分の状況について、どれだけ理解しているのかな？」

しばらく二人だけで話していたスーツ姿の女性とウサミミの女性、その流れからオレに話が振られた

あまり口を挟める状況ではなかったので二人の話には耳を傾けていた、ガンダム関連だけは反応したが、後は静かだった

その為、今の会話の流れで聞いていた情報から知りえた内容を吟味し整理していたので、その質問には即座に答えることが出来た

「此処が平行世界だということ、恐らくはオレという存在を証明する戸籍とかの一切が無いこと。そして貴方に協力して貰えば戸籍なんかの問題点は解決できそうだったこと。後は、まだよく分かってはいないけど、アイエスという物を動かせる、数少ない男だったことくらいですかね？」

「うん、大体その認識で合ってるよ。それで、キミに相談なんだよね。キミには今から二つの選択肢がある。まずは私が戸籍を用意するか

ら、それを利用してこの世界で生きていく。この子が居るからキミは世界で二人目の男性I S操縦者としての地位を得ることが出来るけど、これは正直オススメしないかな。後ろ楯も名にもないキミは世界中から狙われる。I Sを動かせることを隠して生きていくつもりなら問題はないけどね」

——それともう一つ

「キミにはこの天才である束さんの夢に協力するって道だよ」

自らを天才と称するウサミミの女性、目の前の女性、その夢とは何なのか、何故オレという凡人の力を必要とするのかは分からない

だがその道はオレが今までの人生で歩んできたような平凡な道とは違う、様々な波乱に満ちたものになるだろう、不思議とそんな予感がする

だからオレは、迷わずにその手を取った

「ならオレは貴方の夢に協力しよう。こんな凡人が何処までやれるか分からないが、それでも力になるというのなら」

「……ふくん、まだ私は何も話してないけど？単に恩返しとかのつもりなら止めておいた方が良くよ？その代価は既に貰ってるからね」

「恩返しなんてつもりはない。ただオレの勘がそう告げていたからだ」

「キミ、やっぱり面白いね。でもそれは公平な取引じゃないから先に簡単に説明するね。私はね、宇宙に行きたいんだ。月とか火星とか、そんな近くじゃない。太陽系の外、広大な星の海を見に行きたいの。その為の前準備、宇宙開発の起点としてI Sという手段を作ったんだからね。キミはどうか？宇宙、興味がある？」

改めて聞かされた彼女の夢、それはとてもではないが荒唐無稽とも言える話だった

だが宇宙へと、星の海へという話には心惹かれる、それはその過程で人類が宇宙に拠点を持つようになるだろう事を意味する、ガンダムで見た世界を現実にする事に

地球の周囲に浮かぶスペースコロニー群、コロニー間を行き交うシャトルが人や物を運び、旅行感覚で月へと降り立つ、そんな光景を

幻視したとき、ふと昔の事を思い出した

『康太、お前は大きくなつたらどうしたい?』

『ボク、宇宙に行きたい!』

——出来る筈がないと思つたのはいつからだろうか

『宇宙? 宇宙飛行士になりたいってことかい?』

『ううん、宇宙にあるコロニーに住みたい! ガンダムみたいなコロニーに!』

『ハハハ、そうか。康太もガンダムが大好きだもんな。でも、まだ技術が足りないから先は長そうだぞ? それでも宇宙に行きたいかい?』

『だったらボクが作るよ! 今からいっぱい勉強して、ボクが宇宙にスペースコロニーを作るんだ!』

——自分には無理だと諦めてしまつたのはいつからだろうか

『そうか、康太になら出来るかもな。その時は父さんも連れていってくれよ?』

『うん、ボクがお父さんを宇宙に連れていくよ! そして一緒にガンダムに乗ろうね!』

——そもそもそんな夢を見ていた事さえも忘れてしまつたのはいつからだろうか

現実を知り、誰かがやるだろうと逃げ、熱さえも失つてしまつた小さな頃の夢

まだ真実を知らない、希望しか見えていなかった子供が語つた、大人からすればとるに足らないような荒唐無稽な夢だ

オレは何処までも平凡で、突出したものなんてなかった、宇宙への憧れを教えてくれたガンダムも、ただの趣味になつてしまつて、叶う筈のなかつた夢を、目の前の彼女は現実にしようとしている

それはとても眩しくて、心の何処かではまだ無理だと言つていて、それでもオレを惹き付けてくれる、絶対に叶えるのだとその眼が語つている

そんな姿を見る限り、オレは何度でも、何があろうとも立ち上げられる気がする

だからオレが持ち合わせている答えなど、何を言われようとも最初

から決まっていたのだろうか

「オレは宇宙に行きたい。コロニーを作って、地球という揺り籠から出たい。子供の頃の夢を、ただの空想だけで終わらせたくない。一度は忘れてしまった夢を再び見たい」

惰性で生きていた人生は今日で終わりにする、知識の面では明らかに頼りきりになってしまいうだろうが、それでも彼女の手助けをした、宇宙への道を閉ざしたくない

そんなオレの答えに満足したのか、彼女は満面の笑みを浮かべて手を差し伸べてくれた

「うん、百点満点の答えだよ！改めて自己紹介するね！私は篠ノ之束！星の海を夢見る一人の天才科学者だよ！」

「オレは紫藤康太です。オレに何が出来るのははまだ分からないけど、お役に立てるよう頑張ります」

まだ未来は分からない、だが篠ノ之博士の手をオレはしっかりと握り返した

彼女がオレを引き取ろうとした事が会いならば、これは契約だ

オレは彼女の為に非才である事を自覚しつつも全力を以て雑事を処理する、彼女は己の夢へとひたすらに突き進む、その先にオレが見たい世界があるのだから



それから先はとにかくあつという間だった

互いの夢を確認したと思いきや、握手した手をそのまま引つ張られて、スーツ姿の女性が後ろから制止する声も何のその、取調室から出て建物の外に刺さっていた巨大ニンジンに押し込まれた

扉が閉まって真っ暗になったと思えば唐突に上下が反転、何も分からないままに振動と共に強烈な慣性を感じて数分間そのままとなった

閉所恐怖症な人間なら発狂すること間違いなしな状況が終わり、再び地面に突き刺さっていたニンジンから出て周囲を見渡せば白い砂浜だ

あまりの急展開に頭が混乱しそうになったが、ニンジンの上には篠

ノ博士が腰掛けている

状況から察するに、このニンジンに乗ってたのはオレだけだと思うのだが、彼女はどうかやって此処まで来たのだろうか？

「ふふくん、驚いてるね？此処は束さんのラボがある秘密の島だよ！世界中の人間が探し出そうと血眼になってる、世界でも最先端の科学が存在する不思議の国なんだ」

「いや篠ノ之博士？さっきの場所もよく知らないんですけど、どれだけ移動したんですか？」

明らかに絶海の孤島なんですけど、大陸どころか他の島さえも見えませんかよね？

「細かいことは気にしない気にしない♪取り敢えず、キミには此処で三日間過ごして貰うね。色々この世界のこと、ISのことを教えな」といけないからね」

「ハア、それでも何故三日間？」

「それはね、キミにはまたさっきの場所、IS学園に通って貰う為だよ」

さっきの場所、という事は先程の新兵器の実験施設だと思っていた、オレの目覚めた場所という事だろう

あそこ、学園だったのか……それにしてもつもないセキュリティレベルだった気がするけども、それはあのパワードスーツ、アイエスなるものが関わっているのだと予測は出来る、学園の名前にもついていることだし

「そして此処が今からキミの拠点にもなる、束さんのラボ、【吾が輩は猫である】名前はまだないよ」だよ」

砂浜から歩いて少し、篠ノ之博士に続いて島の中へと進んでいたのだが、彼女が立ち止まり手で示した場所にはただの岩壁が聳え立っているだけだ

それにオレが首を傾げていると篠ノ之博士は特別なことは何もないかのように岩壁に向かって歩きだし、そして壁の中へと消えていった

そんな現実離れた光景に目を疑うが、恐る恐る壁に手を触れると

あるべき筈の岩の感触はなく、手は壁の中に沈み込む

篠ノ之博士も問題なく向こうへ行つた事だし、意を決して体ごと壁の方に飛び込むと、そこは今までの自然しか無かつた場所から一転して人工物で埋め尽くされた建物の中であつた

「ふふふん、驚いたでしょう？ラボの入口は普段は誰にも気付かれなないようにホログラムでしつかりと隠してあるのです！でも中からは見えるから、キミが恐る恐る手を伸ばしてる様子は面白かつたよ」
「ぐぬぬ……」

まんまとしてやられた、という事なのだろう

イタズラっぽい笑みを浮かべて微笑ましいものでも見たような目を向けてくる篠ノ之博士の様子に遊ばれたのだと理解して羞恥心が込み上げてくる

しかも当の本人は直ぐに切り替えると奥にあつた重厚そうな金属扉の解錠作業を行つていた

短い付き合いなのだが、この人のやる事に一々驚いていたら駄目なのだ、こういつた非常識な光景を作り出すのが平常なのだと理解した

網膜認証とかDNA照合とか、生体認証と思われる様々なセキュリティを受けた篠ノ之博士が端末を操作し、扉を開いた後、オレを手招きしてくる

割りとSF的な光景に感動していたのだが、それから今度はオレのセキュリティ登録をする事になった

「これをしとかないと侵入者として排除されちゃうからね。此処に入るには必要な事なのです」

「具体的に、その侵入者ってどのくらいのレベルを想定してます？」

「うん、それなりに誤差はあるだろうけど、大国の軍隊が入り込もうとしても撃退出来ると思うよ？実際に試した事なんてないから分からないけどね」

軽く言つてのける篠ノ之博士だがとんでもない事を言っているのにそれが嘘だとも誇張だとも感じられない、大真面目なのだとその口調が語つていた

この人と契約した時から薄々予感はしていたのだが、やはりオレが進もうとしている道とは予想もつかないような出来事が起こりそうな気がする

でも後悔なんて気持ちは微塵もない、一度は夢破れたんだ、この胸に灯された火が消えれば今度こそオレは何者にもなれないで終わるだろう

無くしたと思っていた夢を再び掴めそうな、この先に絶対に無いであろう折角の幸運を、その程度の些末な事で捨てるなんて真似は出来ないのだから

やがて登録が完了したのか、目の前の扉がゆっくりと開いていくさつき言っていた軍隊を想定してなのか知らないが重厚な扉はそれこそメートル単位でありそうな代物であり、開くのに多少の時間が掛かった

そして少しずつ上へと上がっていく隔壁の向こうに人影が見えた
流れるような銀髪に白と青のゴスロリ系ドレスに身を包んだ人形のように容姿が整った少女、その瞳は閉じられているがそれがよりミステリアスな雰囲気有助長している

見たところオレと歳は変わらないか少し年下くらいか、そんな彼女は見えていない筈なのに篠ノ之博士の方を向くと恭しく頭を下げた

「お帰りなさいませ、東様」

「ただいま、くーちゃん！私が留守にしていた間、何もなかった？」

「はい、特に問題はありませんでした。それと、そちらの方は？」

「この子はね、私が知らない468番目のコアを持っていたクーくんだよ！なんと、平行世界から来た二番目の男性IS操縦者なのです！」

「この方が……それに、やはり男性だったのですね。初めまして、私はクロエ・クロニクルと申します。此処で東様の研究のお手伝いをさせていただけます」

「あ、どうも。紫藤康太です。何が何やら分からなかったところを篠ノ之博士に拾って貰いました。よろしく願います、クロニクルさん」

「クロエと呼び捨てで結構です。それに敬語も不要です。貴方の方が歳上ですので」

「あ、はい。えっと、よろしく、クロエ」

「はい、よろしくお願いします」

最初に見た時からかなりの美少女と思っていたが声も綺麗で物腰もお淑やかなクロエ

あまり同年代の女性経験なんてないものだから気後れしつつもクロエと握手する

一先ずは互いの自己紹介を終え、それを見届けた篠ノ之博士が満足そうな笑みで口を開いた

「くーちゃんは私の娘みたいなものだからくーくんも仲良くしてあげてね」

「はい。というか、くーくん？」

「うん、康太だからくーくんだよ！」

「束様は気に入られた相手をあだ名で呼ばれるのでお気になさらないで下さい」

「くーくんも私のことをあだ名で呼んで良いよ！くーちゃんも、様付けなんて畏まった呼び方をしないで、お母さんって呼んでも良いんだよ？」

「私は此方の方が慣れてますので。それで束様、康太様の御部屋はどうされますか？空いている部屋がありませんが」

「適当な場所に拡張しちゃって良いよ。私はくーくんが持っていたデータを解析してるから、くーちゃんはくーくんに通リラボを案内してくれる？それとお互いに話して親睦を深められたら良いかもね」
「分かりました、居住区に一部屋追加しておきます。それではコウタ様、御案内しますので私の後に続いて下さい」

トントン拍子で話が進んでいき、流れるように空中に表示されたディスプレイで何らかの、恐らくはオレの部屋の拡張を機械か何かに指示したであろうクロエの後に続きラボの中を進む

先程の会話の内容から篠ノ之博士がクロエの事を大切に想っている事は十分に伝わってきていた

どのような出会いがあったのか、二人の素性さえもはつきりとは知らない、だが互いの事を大切に想い合う二人は血の繋がり等はなくとも家族なのだと感じられるものであった

オレは何も言えずに別れる事になってしまったが、親父とお袋、二人はどうしているだろうか？

元の世界に帰れるのかは分からない、でも篠ノ之博士の夢に魅せられたオレは帰れる道があったとしても、宇宙を見てみたいと思っただけだった

心残りがあるとすればちゃんとした別れが出来なかった事だけだ、あの二人なら例え会えなくても夢に進むオレの事を応援してくれる、そのくらいの確信は二人の息子としてちゃんとあるのだから

「一番始めは此方です。主に束様が発明された物の性能テストに使う実験場になります」

と、この世界には居ないであろう両親の事を想っているといつの間にか目的地に着いたようだった

道は通路を進んで最初の十字路を左折してから真っ直ぐだったので迷う事はないと思うが、折角案内してくれているんだから真面目に聞かないとな

改めて気持ちを切り替えた後、案内された場所を見渡してみる

最初に訪れたのは四角い広大な空間、実験場という事もあってか頑強に作られているらしく、周辺の壁には焼け焦げた跡や何かで削られた跡が見える、何らかの兵器の実験をした、と見るのが普通だろうな

「そういえばISSコアを所有していたという事でしたが、専用機があるのですか？」

「ああ、オレの世界のアニメの機体として一緒にな。今は篠ノ之博士が持つてるぞ。多分、データを解析してるんだと思う」

最初に突然やってきたと思ったらハ口を取り上げてデータ確認だったからな、此処に来てからもずっと抱えていたし

「束様が認めていたので嘘ではないと思いますが、平行世界というのは俄には信じがたい話です。機体の方は後日返却されると思います

ので、その際は機体の練習は此処で行って下さい」

「分かった。オレも動かしてはみたかったから助かるよ」

「いえ、お気になさらないで下さい。それにしても、束様が興味を示されたデータとは何なのですか？差し支えなければお教えしていただけますか？」

「別に隠すような事でもないから構わないぜ。簡単に言えば、オレの世界ではアニメだった筈の物が現実の技術としてハロ、あのアイエスの中に入っていたんだ。一部を見ていて、スペースコロニーとかエンジン、ロケットとかの図面とかが詰まってきたらしい」

「成る程、納得しました。束様の夢に関するデータだったのですね」

「そういうこと。で、オレはその後で博士に保護された。そのアニメと同じ、宇宙にコロニーが浮かんで人類が地球という揺り籠から羽ばたく光景を、小さい頃の夢を見せてくれると思ったから、その力になりたいと願ったんだ」

——凡人でも出来る事があるのなら、と続けるとクロエは微笑んだ

彼女からすればオレは得体の知れない人物であり、警戒するのは当たり前前だ

それでもオレの夢に、篠ノ之博士と同じ宇宙を目指すという夢に納得してくれたらしい

「この世界では本当の意味で束様の味方になってくれる方は貴重です。その夢へと心から賛同されているだけでもありがたい事です。今後ともよろしくお願いいたします」

「いちいちそ」

改めて互いの事を認識した後、食堂やら建設中のオレの部屋の位置やらを確認し、オレ達は食堂に居た

というのも、篠ノ之博士は自らの研究室に籠って作業をしており、機体もないので訓練も出来ない、食事までの時間もまだあるので、今はお茶でも飲みながらクロエと色々話をしていたところだ

とはいえ特別なことを話していた訳ではない、オレの世界のことや日常でのことをメインにして、クロエが聞きたい事に答えるといった

感じだ

どうにも彼女はあまり外の世界というのを知らないらしく、普通の生活での光景を知りたがっていた

オレにとつては何気ない日常でも彼女にとつては経験した事のない特別なこと、だから知りたかつたらしい

この世界とは違うのかもかもしれないが、そこは平行世界ではそうなのだと言う点も楽しんでいたので問題ないだろう

そんな会話を暫く続けていると篠ノ之博士が食堂に入ってきた

その顔には溢れんばかりの笑みが浮かんでおり、閲覧したデータの内容がお気に召したようだ

「いや、とつても有意義なデータだったよ！今にでも作って宇宙に飛び出したいくらいだからね！」

だけど、と切り替えた篠ノ之博士はオレに向き直ると真面目そうな表情をして話を続ける

「幾つかのデータに意図的に作ったみたいなの欠損が見えたんだよね。私ならその穴を自分で埋められるけど、それには時間も掛かる。そして、そんな事をしなくても良いかもしれない方法が見付かったんだよね」

「方法？欠損していたデータが、例えば何処かに存在している、と？」
「うん、その通り！実はこーくん以外にも、こーくんと同じような反応が世界中で見られたんだよね。とはいえこーくんの時よりもかなり小さくて、私も色々なパターンで世界中を見ていたからこそ見付けられたような反応だったんだけどね。多分だけど、こーくんの世界から同じような物が流れてきたんじゃないかな？」

何やら漂流物みたいな扱いをされた気がするが、篠ノ之博士は空中にディスプレイを投影すると説明を続けた

そこに写されたのは世界地図、それはオレの知る物と全く同じであり、篠ノ之博士の言うように平行世界という言葉が合っていたのだと感じた

そしてその地図には五つの光点が記されており、日本への一つがオレだったとするのなら残りは四つになる

「これが観測された異常なデータのあった場所だよ。そして、この場所に無人機を飛ばして確認させてただけど、さっき一つ回収してきただから確認だね」

地図の光点の内、日本と太平洋のど真ん中にあつた二つが消えた。篠ノ之博士の手に握られているアタツシケース、それが今回回収したという物だろう

オレの世界の物なのかという確認を含めてこの場で開けるらしい、中身は本人もまだ見ていないという事か

そして、そのアタツシケースの鍵を何らかの工具であつさり切断した博士は机の上に置かれたケースを勢いよく開いた

それを覗き込む三人だが、篠ノ之博士とクロエは首を傾げて、逆にオレはガッツポーズをした

「ん、何だろうコレ？プラモデル？」

「ガンダムシリーズのプラモデル、通称ガンプラですね！それもガンダムUCの機体ばかり！」

1/144スケールのHGUCである、ラインナップはユニコーンガンダムから連邦軍の量産型、そしてシナンジュ等のジオン側の機体のセットであつた

そして恐らくは未開封、つまりは自分で組み立てられるという事だ！

「あ、コレはこーくんの機体と一緒にだね。こっちの白いのは同じ機体なのかな？」

そんな中ら篠ノ之博士が手に取つた箱はスターク・ジエガンとユニコーンガンダムの箱であつた

「ああ、そっか。ユニコーンガンダムはHGだと変形が再現されてなかつたのか。同一機体の、リミッター解除の有無と思つて貰つて大丈夫ですよ」

見た目でデストロイモードの方が解除した方と分かるだろう

「成る程、こういった仕組みの機体も面白いね。うん、IS開発のインスピレーションがグッと刺激されるよ！ただのプラモデルと侮れないなあ」

「これの一個上のスケールなら変形まで完全再現してるんですけどね」

この中にはHGモデルしかないが、オレはそのシリーズの方が好きなので問題ない

とはいえまさかのガンプラ入手である、これならばオレはまだまだ戦える！

「ねえ、この説明書に書かれてるNT-Dってシステムはどんなシステムなの？」

「それはニュータイプ・ドライブ、という偽装をしたニュータイプ・デストロイヤーというシステムであり、その名の通りニュータイプかそれに準ずる強化人間を抹殺する為のシステムです。具体的には相手のニュータイプの脳波を感じた時点で圧倒的な機動性を発揮する為のリミッター解除、デストロイモードへの移行に加えて敵のニュータイプ用の兵装であるサイコミュ兵器の制御を奪うサイコミュ・ジャック等を使用する事も可能です」

もつとも、ユニコーンガンダムに於いては真の意味でニュータイプ・ドライブとも呼ぶべきシステムに変化していたのだが、ネタバレになるので割愛

ユニコーンは表現も良いので是非とも自らの目で確認して欲しいのである、ハロの中にデータあったから尚のこと、な

「ふーん、つまりは特定の相手を倒す為だけに特化したシステムってことだね。それで、その特定の相手であるニュータイプってのは何なのかな？」

「ニュータイプはガンダムシリーズの中で多く語られ登場しますが、一言で言うのであれば『人の革新』です。宇宙に出た人類が宇宙に適応した事で出現する進化した人類ですね。とはいえテレパシーや未来予知のような超能力とも言えるような力の発現はしていても何を以てニュータイプとするか明確な定義は無く、その劇中での扱いとしては単に戦闘能力にのみ傾けられる事も多いです。その他にも、ガンダムシリーズに於いてはそのような特別な、人類の進化した姿とも呼ぶべき存在が多く登場しています」

初めてニュータイプという言葉が出た初代ガンダムを手掛けた富野監督ですら明言していない概念であるそれを、オレは篠ノ之博士に説明した

それを聞いた篠ノ之博士はかなりの間、思考をしていく

やがて考えが纏まったのか、篠ノ之博士は一つ頷いて告げた

それは当面のオレの目的となる一言であった、少なくとも普通の人間であれば一笑に付すような考えであろう、それを

それが後に、全ての人類に広がっていく思想となる事も知らずに

「ねえこーくん、ならそのニュータイプになる事を目指してみない？」

3話 翔べ！ジエガン

「ニュータイプに？オレが？」

「うん、まあ仮説を立てただけだから確証は無いんだけどね。それでもまあ、宇宙開発の片手間にも出来ることだよ」

「その仮説っていうのが何か分かりませんが、教えて貰っても？」

「まあ当然だね。まず、人間って色々な事が解明されてるけど、脳の研究にはまだまだ分かってない事が多いんだけどさ、普段私達が使ってる脳は全力で動いてる訳じゃないんだよね」

——私の脳はそうじゃないのかもしれないけど、と加えて続けられる

「それで、もしかしたらニュータイプっていうのは宇宙という過酷な環境において普段は使われていない脳の部分が解放された人類の事を指すと思うんだよね」

「その結果が予知やテレパシー能力だと？」

「そうだね。予知はそれこそ未来予測と間違える程に未来を演算して求めている、テレパシーも今までの会話パターンとかから相手の言いたい事を予測している。そんな風に普段はリミッターの掛かっている人間の脳が解放されてより強い力を発揮出来るようになった人間、それがニュータイプだと東さんは仮定したんだ」

一概に間違っているとは言えないがニュータイプの定義も明確なものはないので否定も出来ない、そもそもどうしてニュータイプが生まれるのかも分かってないのだからまず試してみない事には始まらない

ただ、一つ気になる点がある

「ニュータイプは宇宙に出た人間が進化した姿、という事ですが地上でも大丈夫なんですか？」

「多分、大丈夫じゃないかな。進化に必要なのは進化が必要だと本能が感じる程の極限状態だと思うよ。宇宙はその過酷な環境がそれを後押ししてるだけだと思うんだ。だからISでの戦闘はその極限状態にするには丁度良いと思うんだよね」

「成る程、取り敢えずはその方向で探ってみます」

それで進化可能なのかは一先ず置いて、まずは実験だ

とはいえオレはまだ戦闘どころかアイエスすらまともに動かした事のない素人なのだが

「だからお昼を食べるまで実験場を使って練習をしても良いよ。私はそれが終わるまでにこーくん勉強の準備をしておくからさ、お昼からはISとか、今のこの世界の事について勉強しよう!」

「分かりました、今から行つてきます」

「こーちゃん、こーくんのお手伝いをお願いしても良いかな? 一人だと動かし方も手探りだろうからね」

「はい、ではお昼までには戻ります」

「うん、頑張つてね、二人とも!」

こうしてオレは新たな目標を持ちアイエスの訓練へと向かった

ハロはデータ収集が終わったので返却されており、昼までは凡そ一時間、軽く動いて慣れるくらいなら出来るだろう

クロエと共に実験場に来たオレは早速ハロを抱えた

「ISはユーザーの意思で展開します。まずは機体呼び出してみて下さい」

「了解。来い、ジエガン!」

どうなるか分からなかったが、一瞬の浮遊感の後に機体が展開されるこの世界で目覚めた時と同じような視界になる

機体が大きめだからかいつもよりも視点が高いのだが、慣れるまで少し掛かるかもな

「それがコウタ様の機体なのですね」

「おう、ジエガンだ。それと、オレに様は付けなくていいよ。そんな偉い人間じゃないしな」

「では、何とお呼びすれば?」

「普通に呼び捨てで良いさ、オレもそうさせて貰つてるだろう」

「成る程、ではコウタさんで」

「応! さてと、取り敢えず機体は出したけど、次はどうすれば良いんだ?」

「まずは歩行からですね。その後走って、それが終われば飛行に移りましょう」

「よし、それくらいなら」

まず歩行だがこの世界で目覚めた時も無意識に歩いていたから別に意識せずとも出来た、なので走ってみたのだが歩幅の違いからバランスを崩し派手に転倒する

それでも立ち上がり再び、今度は少しペースを落として走り、慣れたら全力で走り出す

今度は転倒する事もなく実験場を一周する事が出来た

「正直、予測以上の習熟ペースです。普通なら歩かせるだけでも何日も訓練するものですよ」

「と言われても体の延長みたいな物だろう？なら歩幅とかの間合いを掴めればなんとかなるよ」

「それに至るまでが長いのですが、これなら予定を繰り上げて飛行訓練に移っても良さそうですね。ISはPIC、パシップ・イナーシャル・キャンセラーというシステムにより飛行します。それだけではあまり速度は出ないので背面に存在するカスタム・ウイングのスラスターで速度を確保しますが、まずはPICのみでの飛行にしましょう」

「成る程、ところでどうやってそのPICを起動するんだ？」

「頭で飛行しているところをイメージするとISが脳波を読み取って自動的に飛行します。客観的に、自分がどのような姿で飛ぶかイメージすると尚安定します」

「成る程、成る程」

客観的に、つまりはアニメやゲームで見ているジエガンの動きをイメージすれば早い訳だろうか？

ならばそうだな、まずは地面を蹴って五メートル程の位置で停止、そこから左右に方向転換、前後左右への移動を行ってみる

イメージしたのはゲームなんかで最初にやるチュートリアル時の様子、更に途中から動き方が宇宙マップとかの時の挙動に似ていた事からそつちをイメージの中核にして動く

それにより二次元的な動きから上昇下降も含めた三次元的な動きに変わり、P I Cが慣性を制御する物だと理解した辺りで瞬間的に宇宙と同じように慣性をゼロにした状態で足を蹴り上げて上下に反転、足を戻して反動を相殺して慣性を元に戻す事で重力のある地上でも擬似的にA M B A C機動を再現する事に成功した

「よし、やれるな！」

「普通は乗って一目目で飛行を、それも完全に使いこなすなんて真似は出来ません。それに最後の挙動、今までのI Sの稼働データに類似する物が存在しないです。どのような手品を使ったのですか？」

「P I Cを使って慣性を無くした上での機動だ。A M B A Cっていう、ガンダムシリーズに登場する宇宙での操作方法だな。現実でも宇宙飛行士とかがやる姿勢制御を発展させたとも思ってくれ」

なお設定ではあっても作画の関係で本編に使われていない事も多い、それでもこうして使えたのだから

「コウタさんが普通でないのは分かりました。後はカスタム・ウイングを用いた飛行ですが、これは特に変化はありません。スラスターによってより速度が出た機動が可能になる点が異なります。使用されるスラスターはイメージによって読み取った挙動に応じて自動的に稼働しますが、その際に出力やどのスラスターを使用するかもイメージすると更に細かな機動も可能となります」

「分かった、やってみよう」

カスタム・ウイング、というよりはバックパックのメインブースターに点火して加速していく

まだ武装は使用していないのだが適当な場所に敵が居る事を想定してその周辺を飛行する

旋回、下降、上昇、腰のビームサーベルを使用している事を想定して腕を振るい、ビームライフルを持つている想定で腕を向ける

それなりの速さで動いてはいるが反応出来る、というよりもまるで周囲の全てが見えるかのように知覚出来ている

別にこれだけでニュータイプとして覚醒したとかではないのだから、ならばI Sの能力だろうか

そして動き回っている内に機体の挙動にも最適化してきた、通常のモビルスーツと違いP I Cという機能がある事からスラストターに關係ない動きを出来るというところから、ガンダムO Oの太陽炉搭載型モビルスーツの動きに切り替えてイメージするとしっくりきた

付け加えると武装なんかのバランスも考えたと近接やら狙撃やらの尖った性能のガンダムではなく量産型であるGN-X^{ジンクス}の方が動きを想像しやすいか

GN-Xの動きをするジェガン、アイエスと化している事からも既にジェガンという機体からかなり解離してきているような気がするなあ……

「時間です。コウタさん、一度降りてきて下さい」

「了解」

と、夢中になって動かしていたらいつの間にか時間となっていたらしい

だが予想よりも動く事は出来た、イメージが大事だと言うが機体と同じだからな、アニメとゲームで見ているのは大きかったようだ

そして別に同じ機体だけではなく、その気になれば他の機体、それこそエースやガンダムの動きまで再現可能なだからより練習すればより動けるだろう

「取り敢えず、オレの動きってどのくらいのレベルなんだ？」

「少なくとも素人と言える物ではないです。今の状態でも代表候補生を相手に良いところまで食らいつけるかもしれません」

「代表候補生？」

「その名の通り国家代表、その候補生です。詳しくは午後からの座学で話しましょう。今から昼食です。準備をしますますので、先にシャワーを使用してリフレッシュする事をオススメします。ISの操縦は心身にかかなりの負担が掛かりますので」

「了解。そういえば、朝から何も食べてなかったのか……色々あつてすっかり忘れてたな」

言われて空腹に気付いたし、体を動かそうとするとかなり足取りが重い

今は初めて機体を動かした事による興奮で気付かなかったのかも
しれないが、体はしつかりと疲労している事を伝えてきている

うゝむ、これは少しオレ自身の体を鍛える必要もありそうだな、少
なくともこれからは頻繁に機体を動かすのだから体力は必須だろう

オレは中学時代は帰宅部だったし基本家から出ずにアニメやガン
プラといったガンダム関連の物に時間を使って部屋に籠っていたモ
ヤシだ

取り敢えずはこれから毎日ランニングをしよう、以前なら億
劫だと思っていたが今は体力の必要性を感じているだけに、気持ちの
入り方も違う

そうして決心をつけたところでオレは居住スペースに向かう、シャ
ワートイレは各個室に備え付けというホテルのような構造をしてお
り、オレに割り当てられた部屋は既に完成していた

今日の訓練前に作業に取り掛かっていた筈なのだが既に完成して
いる辺り、この世界の技術の高さを思い知らされる

尤もこれは篠ノ之博士が特別なのもかもしれないが、例えそうだとし
てもこんなレベルは前の世界ではないだろうし

「ベッド、机、クローゼットか。まあ、私服の類いは無いわな」

部屋に入り中を見ると白い部屋に必要最低限の物を置いてあるの
が見えた、後々カスタマイズ出来るらしいのでその時は組み立てたガ
ンプラを並べる棚でも貰おう

さて、それは兎も角としてクローゼットの中を確認する、そこに
あったのは男性用のシャツとズボン、下着類だ

篠ノ之博士とクロエと二人とも女性なのに何故男物の衣類がある
のかは不思議だが着替えという事だろう、有り難く使わせて貰おう

今の今まで着ていたパイロットスーツを脱ぎシャワーを浴びる
それが終われば用意されていた着替えを身に付けていく、黒色の
シャツにカーキ色のカーゴパンツ、一緒に入っていた靴下とブーツも
履いて着替え完了だ

何処かの軍隊の支給品みたいな印象を受けるが動きやすい格好な
のは好都合だ、部屋から出て食堂に向かう

部屋には既に篠ノ之博士とクロエが待つており、湯気の立つ温かな料理が並んでいる

「待つてたよ、こーくん。どうかな、くーちゃんの作ったご飯は？」

「束様、全て冷凍食品です。私が作った訳ではありません」

「えー、そこは黙っていてこーくんをドキドキさせようよ。くーちゃんみたいな美少女の手作りだぞーって」

「……私の料理は、その、束様だけの為ですのぞ」

「そっか、嬉しいなあ！ごめんね、こーくん。そういう事だつてさ」

「いやまあ、オレとしては食べ物を用意して貰えただけでも嬉しいんですが。訓練の後で手伝いとかも出来ませんでしたし。あ、片付けはオレがやります。皿洗いくらいなら出来るので」

「じゃあお願いするね。でもまずは早速食べようよ。いただきます！」

「いただきます」

クロエの料理とやらも気にはなるがまずは空腹を訴えている自分の胃を落ち着けたい

冷凍食品とは言うが味は申し分なく、空っぽの胃にどんどん入っていく

自分の前に並んだ料理を全て平らげ、最後のピザの一切れを腹の中へと収めた後、満足して息をつく

そして食後のお茶を飲んで少し経った時、篠ノ之博士から話を切り出した

「よし、それじゃあ真面目なお話をしようか。くーちゃん、こーくんのISの操縦はどうだった？」

「はい、少なくとも素人とは思えない動きでした。コウタさんにも伝えましたが、実力は既に代表候補生レベルはあります」

「おー、良かったね、こーくん！自分の事を凡人つて言つてたけど国に数人のレベルだつて！やったね凡人卒業だ！」

「正直に言えば実感が湧かないんですけど、それなりに動けたのであれば良かったです。これからも精進します」

「うんうん、向上心があるのは良いことだよ。それで、キミにはIS学

園に通って貰おうと思うんだけど、何でか分かるかな？」

「うーん、この世界の事についてまだあまり分かってないんですけど、ニュータイプとして覚醒する為に必要だから？」

「それもあるね。けど、後一つ理由があるんだよね。まずはこーくんの機体、ジエガンですが、量産して他にも売ろうと思います！」

「はあ、それはまた、何故？」

確かに量産型だけど、量産する意味があるのか疑問である

まあ量産されればオレの機体も損傷しても直ぐに予備パーツがあるのは助かるのだが、その真意が読めない

「深い理由はない、寧ろ俗物的な答えだけどね、一つはお金の為だね。私も今までこっさり少しずつ資材を買ったりしてただけど、コロニー建設とかH L Vとか色々使うから一気に大量の資材を購入する必要が出てきたのです」

「成る程、それでも何でジエガンなんです？量産型機として優秀ではありませんけど、突出して性能が高いつて訳でもないですよ？」

「単純に私が楽、というか早く宇宙開発がたくて余計な研究に時間を割きたくないって事だよ。それに、これはこーくんの為でもあるよ。何処の企業が開発したのかも分からない新型の I S、そんなの怪しき満点じゃない？それが別の世界から来たなんて分かる人間はいないだろうし、殆どどの人間は私が後ろに居ると思うだろうね。だから企業を隠れ蓑にしてジエガンを量産するんだよ」

「ああ、そういう事か。でも、企業なんて即座に作れますか？幾らなんでも普通は設立一日目で機体を開発なんて真似は出来ませんよ」

「その辺は抜かりないよ！実は、東さんは I S 関連の会社を持っているのです！元は第一世代機を作っていた会社なんですけど、第二世代機の開発でコケてね、倒産しそうになってたのを私がこっさり買い取ったんだ。勿論、他に社員は居ないし名義も私の名前じゃないから大丈夫だよ。細々と研究を続けて第三世代機を開発したとしても何も問題ないからね」

篠ノ之博士の説明に納得していく、確かにオレには社会的には何も後ろ楯がない状態であるが、それが企業に所属しているとなれば身分

も出来る、オレにはメリットしかない

「そもそもは私の研究で使う資材を購入する為のカムフラージュだったんだけど、何が役に立つかわからないね。いっそのこと、心機一転ということで社名も変更しちゃおっと」

「ジェガンの開発元ってアナハイム・エレクトロニクスっていうんですけど、出来ますか？」

「残念ながら住所が東京だから難しいかな」

「なら仕方ないですね」

流石にアメリカのカリフォルニア州アナハイムに本社が無いのにアナハイム・エレクトロニクスは名乗れないか

仕方ないが此処は妥協するしかない、不審な点は可能な限り潰していかなくては

「それからジェガンの性能だけど、分類的には第二世代機だね。第二世代機の定義は『後付武装イコライザによって戦闘での用途の多様化』という点に主眼を置かれた機体なんだ。ジェガンにぴったり当て嵌まるよね」「成る程、確かに。そういえば今は第何世代機まであるんですか？」

「世界中で研究されてるのは第三世代機だね。『操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊武装の搭載』を目標とした機体だね。でも操縦者に適性を求められるから第二世代機以上に人を選ぶ機体になるよ」

「その中で第二世代機であるジェガンを売り出すんですか？」

「大丈夫だよ。分類が一つ前ってだけでジェガンは今の第三世代機に極端に劣るなんて事はないから。単に特殊武装がないだけで機体自体のスペックは優秀だからね、そこは安心して良いよ。既存の第二世代機なんて引き離している性能だからね」

そこは安心したというか、この世界のアイエス開発に少し疑問を抱いた

普通、兵器として使うなら万人に扱える物を作るものだ

だが各国は特殊武装の開発に躍起になって基礎の性能を高める事をしていない

ガンダムシリーズでもファンネルやらインコムといった武装から

EXAMやHADESといったシステムによる特異な機体はあったがジム系統を始めとして量産型は大きく武装構成を変える事なく純粹な技術の発展として存在してきた

にも関わらず、既存の技術を高める事をせず最新鋭技術にのみ頼る姿はオレには単なる愚行としか思えない

「まあ、そんな訳でジェガンは第二・五世代機つてところかな。けど第三世代機を作れない国とかは第三世代機に対抗可能な第二世代機、しかもパイロットに特別な適性を求めない機体っていうのは好まれると思うから売れるよ、きつと」

「またアバウトな……」

「いつもなら束さんが適当な発明品を名前隠して売れば皆買っていくけど、今回は資材の量が量だからね。やっぱり単価の高いISを使うのが手っ取り早いよ。それに量産するとなれば必要素材を多少の水増ししても怪しまれないしね。宇宙での資源の確保が出来るようになる、そこまでに必要な資材の確保。それが私達の当面の目的になるね。そして宇宙で集めた資源を使って月面に都市を作る。そこを拠点にコロニービルダーを建造してコロニー建設に着手する。月面都市が完成したら私も表舞台に出るよ。人類は既に宇宙に飛び立てるんだって、今度こそ世界に証明するんだから」

「分かりました。ならオレはジェガンが売れるよう、学園でその性能を示せば良い訳ですね」

「その通りーやっぱり人間って目に見える成果に飛び付くからね。極限状態による進化に至る為の他に、そういう目的も追加しよう。これでこーくんがIS学園に通う理由は理解出来たかな？」

「はい、大丈夫です」

よし、やってやろうじやないか、オレとジェガンがこの世界に名を刻んでやる、量産型機とは万人に扱える、基本性能の追求にこそその真価があるのだということ

「じゃあ説明が終わったところでISの勉強に移るよ。でもその前にこーくんとかーちゃんに紹介したい人が居ます。今連れてくるね」

と言って手元の端末を操作した篠ノ之博士

すると少し経ってから食堂の扉が開きその奥から一機の黒いアイ
エスが現れた

やたらと腕が巨大なその機体だが、その手に一人の人間を捕まえて
おり、食堂に到着すると無造作に手を離した

すると当然ながらその人物は落ち、床に盛大に腰を打ち付けていた
「いてえっ!?!」

「やつほー、いっくん! 久しぶりだね、私のこと覚えてるかな?」

「た、束さん!?! どうして此処に、っていうかもしかして今の I S は束さ
んの差し金ですか!?!」

「ピンポーン! 大正解! ご褒美に飴ちゃんあげるね」

「あ、どうも……じゃなくて、いきなり家に I S が飛んできたと思っ
たら拉致するって何を考えてるんですか!?!」

「いやあ、実はいっくんにとっても大事な用があつてね。いっくんのこ
れからの事にとっても重要な事なのです」

連れてこられた人物、オレとそう歳が変わらない男、黒髪で柔和そ
うな顔つきの彼は篠ノ之博士とも親しい仲のようだ

だがオレはそういった点にはあまり驚いていない、顔立ちが整つて
おりイケメン爆ぜろとは思ったが、問題はその声だ

「バナアアアジイイイ!!」

「うおおっ!?! な、何だ!?!」

「すまん、知ってるアニメキャラにとつともなく声が似ていたから取
り乱した」

まさに内山さんが中に入っているかのような声だった、弾みだ許せ
「よく分からないけど、アンタは?」

「そうそう、その件なんだよね。いっくん、この子はこーくんだよ。そ
れと、あの子はくーちゃんです! 束さんの娘だよ」

「紫藤康太だ。よろしく」

「クロエ・クロニクルです。よろしくお願いたします」

「ああ、俺は織斑一夏だ。よろしくな、二人とも」

「うん、それじゃあお互いに名前が分かったところで話の続きをする
ね」

篠ノ之博士の説明だと名前すら正確に伝わらなかったのだが博士は続けた

「いっくん、こーくんはね、世界で二人目のISの男性操縦者なのです。そしてこーくん、いっくんはね、三人目の男性操縦者なんだよ」

4話 織斑一夏

オレと同じく男の身でアイエスを扱える存在、数は少ないと聞いていたが目の前の男、織斑で三人目というのは初耳だ

実際にジェガンを操ってみて分かったがアイエスはかなりの性能だ、兵器として見てもあれ程までに小型で小回りが利く兵器は既存の兵器で相手するにはさぞや骨の折れることに違いない

「待って下さい、東さん！一秋兄がかすあきアイエスを動かした後、俺も適性試験を受けさせられたけど俺にアイエスは動かせなかった筈だ！そんな俺が三人目の操縦者だなんて、あり得ねえよ!」

「大丈夫だよ、いっくんが動かせなかったのは東さんが裏で細工したからなんだから。本当ならいっくんはちゃんとアイエスを動かせるよ」
「なっ!？」

うーむ、話が見えてこない

どうにも織斑の親戚か何かがアイエスを動かしたのは何らかのイレギュラーであり、織斑もまたイレギュラーな存在の筈なのに篠ノ之博士が隠した、という事か？

「なあクロエ、アイエスってのはそもそもどういった存在なんだ？篠ノ之博士が作ったパスワード・スーツってくらいしか分からないんだが」

「ISとはインフィニット・ストラトスの略称で頭文字を取ってISです。本来は束様の夢である宇宙開発の為に作られた存在です。ですがとある事件を切っ掛けに軍事利用され、今では世界各国の軍事力に大きな影響を与えています」

「で、話を聞いていると男だと動かせないって事で合ってるのか？」

「はい、その認識で間違いありません。ISはそれまでの既存の兵器を圧倒した性能を持ち、文字通り一騎当千の存在です。ですが女性にしか動かせず、結果としてISを使える女性の方が偉い、女尊男卑の風潮が広がっています」

「とんでもない世界情勢なんだな……そこまで極端になるとは」

「更に付け加えればISの核でありエネルギーの供給源等になってい

るISコアなのですが、世界に467個しか存在せず、またコアの製造も束様にしか出来ないのも、よりエリート思想が強まったといった感じですよ」

「予想以上に篠ノ之博士の能力が高かったのは分かった。それに、こうして隠れ住んでいる事を考えればその理由も分かるな」

「世界中が束様の身柄を狙っていますので、その推測は正しいかと」

「もしも篠ノ之博士を手に入れる事が出来ればアイエスもといISの数を増やせる可能性がある」

そしてそれは他国に対する絶対的なアドバンテージとなる、世界中が血眼になって篠ノ之博士を狙っていることなど想像に難くない、月並みな考えだが世界征服すら可能となるだろうしな

そして篠ノ之博士と織斑の方はまだ口論、というか織斑が何か言っても篠ノ之博士がのりくらりと受け流している感じが

「というか織斑で遊んでるといった様子だ、話を進める為にも介入するべきだろうか」

「博士、そろそろ本題に入られては？」

「ん、確かにそうかもね。じゃあいつくん、何で私がいつくんのIS適性を揉み消したか話をしよっか」

「……色々納得いきませんが、ちゃんと説明してくれるなら」

「大丈夫だよ、きつといつくんも分かってくれるから。こーくんも何やらくーちゃんから色々聞いてみたいだし、補足として聞いてね。まず事の発端は二月、いつくんの双子の兄に当たる織斑一秋が高校の試験会場に一角にあったIS学園保有のISを起動させた事にあります」

そこはまあクロエから聞いた、織斑との関係までは知らなかったがそうか、双子の兄が居たのか

「そしてもしかしたらと世界中の男性にISの適性検査が行われたのですが、他には見付からなかったのです、いつくんを除けばね」

「あの、束さん。もう一人居ますけど？」

「こーくんに関しては後でね。いつくんが私の事を本当に信用してくれるまでは秘密だよ」

「おや、織斑にはオレの素性を話すつもりなのか？」

「まあ篠ノ之博士が愛称で呼んでいる人物だし、信頼しているのか
「それでいつくんにこんな事をした理由なんだけど、実は織斑一秋の
件で既に解剖やらして男性でISを起動出来た理由を調べようとい
う話が出てたんだ。でも世界でたった一人の男性操縦者を使い潰す
なんて真似はしたくない。でも二人いれば？片方を実験に使っても
問題ないなんて考えを持つ人間が居てもおかしくないよね？」

「それは、でもそれなら俺に適性がある事を隠せば」

「本当に？世界に絶対なんて事はそれ程ないよ。何かの拍子に露見す
るかもしれない。抜き打ちで検査がされて、今度は私が隠蔽出来な
いかもしれない。そんな時、いつくんはどうするの？大人しく実験材料
にされる？」

「それは……」

「でもそんな事はさせないよ。この私がさせない。だからこうして
色々やってるんだ。まずはちーちゃんに手伝って貰っていつくん
もIS学園に入学させる。これはちーちゃんにもちちゃんと許可を
貰ってる事なんだよ」

「千冬姉が!?でも、IS学園にどうやって?」

「あ、そっか、ちーちゃんまだいつくん達には話してないんだったね、
IS学園で教師をしてるってこと。まあいつか、どうせ学園に行つた
ら分かるんだし、気にしない気にしない♪」

「気にしますよ!」

「もう、細かい事はばかり気にしてたら眉間にシワが出来ちゃうぞ。そ
れで、IS学園に入れる理由だけどISの事を学べるからって理由の
他に、あそこは各国の影響を排除出来るんだ。絶対って訳じゃないけ
ど、入学さえしちやえばそう簡単には手出し出来ないよ」

「……分かりました。束さんが俺の為に色々としてくれたって事は感
謝します。ありがとうございました」

「気にしなくて良いよ、私も大好きないつくんの為に勝手にやってた
事だからね」

「どうやら第一段階、というか織斑の警戒心を解くという事には成功

したらしい

と、そこでクロエに袖を引かれた

クロエの方を見てみればあまり聞かれたくない事なのか手でメガホンを作り小声で話し掛けてきたので、オレも身長差があるので姿勢を低くして話しやすくする

「あの、コウタさん。東様が織斑様を大好きと言われたのは、そういう意味なのでしょうか？」

何の相談かと思つたが思いの外可愛らしい内容であつた

つまりは焼きもち、という事なのだろうが二人の様子を改めて確認してみるがクロエが心配するような雰囲気はない、対人経験が少ないのか、クロエはそういった事に疎いようだ

「お前さんの心配するような事は何もなからうよ。千冬姉っていう人とかーちゃんって人が同一人物なのは間違いないとして、織斑はその弟か何かだろうな。そして篠ノ之博士は千冬という人物を大親友といつていたから、博士にとつて織斑はその大親友の弟、なんだろう」「そうですか、ありがとうございます」

可能な限り分かりやすく、色々と証拠を並び立てて説明してやるとクロエはホツとした様子を見せて元の落ち着いた表情に戻つた

というか論理立てて考えてみればIS学園でオレを事情聴取していたあのスーツ姿の女性、織斑の姉なのか

何というか、雰囲気がるで違うな、柔和そうな織斑とあの威圧感たつぷりの姉、ここまで違うとは

おっと、その前に篠ノ之博士達の会話も聞いておかないと

「さてきて、それでは私がいつくんを連れてきた理由を話すね。実は織斑一秋には既にデータ収集の目的もあつて日本から専用機が与えられる事が決定しているのです。いつくん、流星に専用機の意味は分かるよね？」

「一秋だけの機体って事ですよね？それがどうしたんですか？」

「うん、間違つてはいないんだけど本質までは理解してないみたいだから説明するね。現在、世界に存在するISはコアの関係でどうしても467機となつてしまします。更にそれを国ごとに分配してるか

ら国力の差で数の多い少ないに違いはあっても一国の保有台数は限られています。ここまでは理解出来た？」

「な、なんとか……」

「続けるね。日本が保有するコアの数は十個くらいだったかな？当然、ISは国の戦力として大きな意味を持つ存在だけど、そんな存在を男性だからって理由で簡単にくれると思う？」

「思いません」

「うん、当然だよ。で、既に織斑一秋に一機渡される事でいつくんがこのまま適性があると名乗り出ても機体が支給されない可能性の方が高いんだ。そして日本が織斑一秋に専用機を与えるのにはデータ収集の他に自衛の為の手段っていう理由があるの。そうなれば必然的に敵はISを相手にする事になる。すると敵も迂闊には手を出せない。けどもしも、そんな自衛手段を持たない男性操縦者がもう一人居たらどうする？」

「それは……」

「どうやら織斑も気付いたらしい、少なくとも研究目的で手段を問わずに拉致しようとするならば楽な方を狙うだろう」

「その際に自衛の手段がない状態で今まで一般人だった人間に何が出来る、拳銃どころかナイフを使われただけでも危険だ」

「そして解剖を含めた実験材料扱い、誰もそのような未来は望まないだろう」

「もしかしたら他の国がコアをくれるかもしれない。でもそれはその国に対して借りを作る事になる。卒業したらその国で働け、なんて言われたらいつくんも断れないでしょう？」

「はい……」

「でも全ての問題を解決する手段があります！この天才にしてISの産みの親である束さんがいつくんの為の専用機を用意すれば良いんだよ！こーくん、ちよつと来てくれる？」

「了解」

呼ばれたので篠ノ之博士の元へ向かう、さて何の話だろうか？

「いつくん、こーくんの事なんだけどね、実を言うと平行世界から来た

んだ」

「……………へ？すみません、東さん。よく聞こえなかつたです」
「だから、平行世界人だよ。私達の世界とは別の日本からやってきたんです」

「からかうのもいい加減にして下さいよ。その人も迷惑でしように」
「いや、残念ながら事実だ。オレの知る日本、世界にはISなんていう
パワード・スーツは存在しない。そして、この世界にはオレの生き甲斐であるガンダムが存在しないんだ」

「いや、だからって。ガンダム？」

「ああ、ガンダムだ。リアル系ロボットアニメの先駆けとなり、重厚過ぎる程の設定を持つ日本が誇る代表アニメ。それが！この世界には！存在しないんだよオオオ!!」

「えっと、何というか、ゴメン…………」

「おう、信じてねえな？よしよしよし、ならば証拠を見せてやる。この世界で、オレと共に世界にやってきたガンダムの存在を。とくと見るがいい、富野監督が産み出し、継承されしガンダムの姿を！」

ハロの中にあるガンダムのアニメのデータ、それを呼び出して空中に可能な限りの大画面、大型テレビくらいのサイズで投影する

織斑の声があれだからこの作品にするとして、やっぱり一番の目玉は戦闘シーンだよな、あんまり後の方だと時系列が分からないから序盤で、かつ人の目を惹く部分、よし！

『私のたった一つの望み、可能性の獣、希望の象徴…………父さん、母さんごめん、俺は…………行くよ!』

やっぱりOVA版の第一作、ユニコーンの日の最後の場面だよな
これなら最初の方だから一部を見ても大丈夫だし、何よりバナージの見せ場だし、ガンダムという存在を示すにはぴったりだ、劇場版だから作画も良いし

そしてクシャトリヤからのファンネルをサイコフレームの発生させた力場で屈折させガンダムへ変形、ビームサーベルを抜き放ったところで映像を止めた

「これがガンダムだ」

「おー、本当にいっくんと声がそっくりだったよ！」

「俺ってあんな声してるのか？」

「そこに反応するのなあ……」

悲しい、やっぱりファーストから教え込まないと駄目なんだろうか
全話見るのは時間的な問題もあるし、見せるなら劇場版三部作だな
とはいえ時間が惜しいから今すぐという訳にはいかないが

「でも、何でこれが証拠になるんだ？俺はアニメに詳しくないけど、訳
が分からないぞ」

「適当にインターネットでガンダムと検索してみろ。ヒットが一件も
ない筈だから」

そう伝えると織斑は検索してみたが結果は当然ながらゼロだ

「本当だ。こんなアニメなら何か一つでも情報が出る筈なのに……」

「取り敢えずはこれで理解出来たか？そんな訳でオレは平行世界から
来たんだ。自分でもどうやって、どうしてなのかは分からないけど
な」

「嘘みたいな話だけど、嘘じゃないんだな？」

「うん、ちーちゃんにも同じように言っただけど、正真正銘、平行世界の
住人だよ。あ、勿論他の人には内緒ね」

「言いませんよ、そんなこと」

「言ったら頭のおかしな人扱いだからね。それで、こーくんなんて
ど実は平行世界、それもアニメの技術が現実になって流れてきてるん
だ。それが私の夢にとっても役立つ物なんだよね」

「オレはこの世界で生きていくという理由以外にも、篠ノ之博士が目
指している宇宙に行きたいからって理由で協力してる。ガンダムの
ようにスペースコロニーが浮かぶ世界を現実にする為に」

「で、その為に企業を立ち上げたんだけど、いっくんもそれに所属して
ね」

「ええっ!？」

「だって、いっくんにも専用機を与えらなればカムフラージュがい
るよね？こーくんの機体もそうやって隠すんだよ。なら、二人で所属
した方が良くよ。例えば拉致目的の襲撃があつてもISを二機も相手

にするなんて生半可な戦力じゃ太刀打ち出来ないんだから」

篠ノ之博士の考えは理にかなっている、一機でも厄介なISが二機だ、しかもIS学園は名前からも何機かISを保有しているだろう、それも警備として出てきたら同数以上のISでの襲撃くらいしか勝算がない、そしてそんな数は一国の全ISを使用してやつとの数だ、現実的ではない

つまりオレ達の身の安全は学園に居る限りは保たれる、卒業する頃には篠ノ之博士も表舞台に出てくるだろうから、そこに合流する、そうして宇宙への道を進むつもりだ

「別に強制じゃあないんだけどね」

「選択肢があるようでないのは強制と変わりありませんよ。でも分かりました。東さんが俺の事を考えての行動なんですよね？ならその話、受けます」

「ありがとう。それじゃあこーくんとは同僚になるね。扱いとしてはこーくんは会社の量産型ISのテストパイロット、いっくんには技術試験機のテストパイロットという事にしておきます」

「了解。これからよろしく頼む、織斑。オレの事は康太でいいぞ」

「なら俺も一夏で良いよ。俺の方からもよろしくな、康太」

「応」

こうして織斑一夏が仲間になった

その後、篠ノ之博士からISについての授業を受けたが、教科書の内容を椅子に拘束された状態で頭を覆う機械を被せられた状態で焼き付けられる事になった

一時間程で終わったその授業によりオレと一夏はISに関する教科書の内容を全て覚える事が出来たのだが、終わってから少しの間、頭痛に悩まされる事になる、でもあの電話帳みたいな参考書をこれで覚えられたので実際はお得と感じてしまっていた

更にその頭痛から解放されること少し、オレ達は全員で実験場を訪れていた

「今度は何をするんですか？」

「いっくんは見るの初めてだよ。実はこーくんの世界から流れてき

た漂流物が他にも幾つかあって、他の物を回収してきたところなので
す」

実験場の中央、そこに並べられたのは一つのコンテナと二つのア
タツシユケースだった

コンテナはまあデカイ、よく船で運ばれるようなサイズであり、ア
タツシユケースは両方とも逆にガンプラの入っていた物よりも小さ
かった

「これだけ大きいから、今度はガンプラが詰まってるなんて事はない
筈だよ！」

「全てのガンプラを集めたらこのコンテナでも足りないのが怖いんで
すけど」

「嫌なこと言わないでよ!?流石に何かのテクノロジーが流れてきても
良いじゃん！」

「どういった基準で流れてくるんですかね?まあ、まずはこのコンテ
ナの方から」

取り敢えずこのサイズでガンプラのみだったら篠ノ之博士が可哀
想なのでそろそろ何か出て欲しいと思い、コンテナの扉を開く

すると中に入っていたのは三メートル程の歪な人型をしたオレン
ジ色の機体だった

「おー、トロハチだ。やりましたね、篠ノ之博士。割りと当たりじゃな
いですか?」

「人型の機械?ガンダムとはまた別だね」

「ガンダムの事をモビルスーツと分類しますが、これは主に作業用等
で使われるプチモビルスーツ、プチモビという種類です。さつき見せ
たガンダムUCの主人公、バナージ・リンクスもアルバイトで操作し
て宇宙のデブリと化したジャンクの回収をしました。つまり、学生
がアルバイトで動かせる宇宙でも使える作業機械、という訳です。こ
れからの宇宙開発でも船外作業用として役立つと思いますよ」

「おお、良いね!操作も簡単なら、数を増やして一気に宇宙での人手が
増やせるよ!」

「コンテナの中身は完品が一機に、後は予備パーツ一式でした。後は

小さなケースに取扱説明書があったので、後でデータとして読み込んでおきます」

「お願いね、くーちゃん。ふふん、これは残りの二つも期待出来るよ」

「サイズからして、データ端末ですかね？取り敢えず一つを、と」

まずトロハチという宇宙での作業用重機が手に入りテンションが上がっている篠ノ之博士、これが続けば良いがと思いつつ一つのアタッシュケースを開ける

中に入っていたのはピンク色の小さなハロ、多分だがSEEDでのハロだな、サイズの的に

「うーん、またデータ端末になってるみたいだね。取り敢えず、それ！」

どうやらオレのジェガンと同じようなハロらしく、また端末を繋いで中のデータを確認していく

そこに写されていくのは銃の写真、それが幾つも並んでいき、やがて剣やバズーカ等に切り替わっていく

「武装データ、それもU.C. 100年頃までの物か」

連邦、ジオンとか関係なく様々なデータの集まりだな、一応は陣営や種類でも分類可能なようだが

おや、アレは試作2号機用の核バズーカ……

「ねえ、こーくん。もしかしてガンダムって、核兵器運用能力ある？」

「もしかしなくても、オレのジェガンに装備追加したスターク・ジェガンの三連ミサイルポッドの側面にも二発ずつ、計四発搭載可能ですよ……」

「核は止めとこうか……流石にISに核兵器持たせるなんて絶対にさせたくないし」

「爆撃機でもなく、ミサイルでもなく、街中で展開出来るISで核攻撃とか世界が軽く終わりますね」

このデータは封印、といってオレ達はそれを見なかった事にした、流石に一般人の一夏でもその危険性は分かったようだ

「でも、ニュータイプ用の兵器のデータもあったし、これもまた収穫だ

ね！」

「そうですね、残りの一つも期待大ですね！」

そのまま無理矢理にでも話の流れを変えて今の記憶を消そうと努力した

そして、最後のアタツシケースが開かれて中身が露となる、それはT字型の金属であった

「コイツはまさか、こんな物まで流れてきていたのか……」

「んー、今度はデータチップも一緒みたいだね。それで、これは何なのかな？」

「サイコフレーム、サイコミュの基本機能を持つコンピューターチップを金属粒子レベルで鑄込んだ代物です。これだけでサイコミュとして機能するのでサイコミュ装置の小型化に成功したんですが、何故か単体でもフルサイコミュ装置と同じか、それ以上の性能を発揮したりと、謎が多い物です。他にもビームバリアーや機体出力の増大等、科学的に説明のつかないオカルトの域に達している物です。他のサイコフレームと共振する事で強力な力場を発生、それこそ既に地球への到着コースを辿った小惑星を押し戻す力さえあります。確か、設定だと約一億トンの小惑星が地球の重量に引かれた際の落下エネルギーでしたかね」

「待って、軽く計算したけどそれ水爆三百万発ぐらいのエネルギーだよ。それを、押し戻したの？」

「それもコックピット周りに使用したサイコフレームだけで、ですね。ガンダム世界でも『アクシズ・ショック』と呼ばれる現象です。さつき見せたガンダム、ユニコーンが変身した際に赤く光っていた箇所、あれ全てサイコフレームですよ。そして後にユニコーンが起こした数々の奇跡、それによりサイコフレームは技術的特異点として封印処理がされる事になりました。そもそも謎が多すぎて、これだけでも能力を発揮しますよ」

「まさに未知の技術だね。でもそう言われると科学者としての本能が疼くなあ」

「まあ今は唯一のサイコミュですからね。他にも人の意思をエネルギー

ギーに変えますが、これがアクシズ・ショックを起こした機能かと。また使用者の意思を増幅させたり、逆に他者の意思を受信したりしてニュータイプのテレパシー能力みたいな物を発動させたりもしています」

「扱い次第では危険だけど、捨てるには惜しい存在かあ。うん、なら使おっか！いつくんの機体もユニコーンにしちやおう！」

「言っておいてなんですが、大丈夫ですか？それに複製出来ますかね？」

「ニュータイプへの進化が分かりやすい形で見れるからね、利用しない手はないよ。それにデータチップの方もサイコフレームの製造方法が記されているし、複製は可能だよ。現物が目の前にあるなら尚更ね」

「分かりました。ならオレからは何もありません」

確かに使わないには惜しい存在だ、それに封印されたのもニュータイプの力を恐れた地球連邦政府の思惑が大きいからな

資料によつてはF91にも使われたとか、後の時代にG―フェネクスとして蘇っていたりするし、大事なものは使い方か

「さてと、それじゃあ漂流物の確認が終わったところで色々を始めようか。いつくん、IS貸すからちよつとこーくんと模擬戦してね。

ジェガンのデモンストレーション動画を撮影します」

「分かりま、って無理ですよ!?!せめて練習時間を下さい!」

「大丈夫、いけるよ。いつくんは昔からぶっつけ本番に強かったでしょう?」

「仕方ない時にやるのと、余裕があるのにやるのとでは全く違いますって!」

「しようがないなあ。じゃあ、あそこに適当にいじった打鉄あるからそれで練習して良いよ。それまでにこーくんには海上で標的用のドローンを撃墜していいこうか。その後でいつくんの打鉄との模擬戦の様子を撮影して広報映像にしよっか」

こうして唐突にオレと一夏の模擬戦、というかジェガンの販売用のデモンストレーションが行われる事となった

それを篠ノ之博士が編集、オレ達が所属する事になる企業を通じて世界中のマスコミに同時に提供、全世界が二人目と三人目の男性IS操縦者の存在を知ったのはIS学園の入学式の前日になったのである

5話 IS学園入学

四月のとある日、多くの学校が入学式を迎える前日というその日の朝、それは唐突に発表された

通勤前の時間、何気なくテレビをつけていた多くの人が目にする事になるその事実は連日報道されていた世界初のIS男性操縦者である織斑一秋に続き世界に衝撃をもたらす事となる

『——世界中が注目を集めるIS学園ですが、今年は更に注目を浴びています。世界で唯一の男性操縦者である織斑一秋氏の入学が決まっております……と、速報です。えっ、嘘!?し、失礼しました!日本のISメーカーであるフジヤマ社が第二世代IS、並びに第三世代ISの開発を発表しました。そしてその搭乗者として世界で二人目と三人目となる男性操縦者を起用したとの事です。またフジヤマ社は今回の発表と共に『貴重な男性操縦者を起用する事が出来た幸運にあやかっ』とラビットフット社へと社名変更を行うとの声明を出し、また操縦者両名もIS学園への入学が決定していると——』

全世界で同時に通達されたその発表に加え、添付された動画データはフジヤマ社改めラビットフット社の新型機の映像であった

ニュースでその映像には一機のISらしき姿が映っており、現行のISでは殆んど見なくなった全身をライトグリーンで覆ったその機体は海上にて射撃を行い次々と標的であるドローンを撃墜していた

右手に持ったライフルから青白いレーザーが放たれる度に空中に炎の華が咲き、ドローンから放たれる火線はそのISを捉える事が出来ずにその数を減らしていく

そして全てのドローンを撃墜し終えた後、同空域にもう一機のISが現れる

それは日本の第二世代である打鉄であったが通常のそれとは姿が大分異なっていた

基本的に楯やアーマーを備え防御力に優れた打鉄はそれらの装備を取っ払い、機動力を確保する為に背部のカスタム・ウイングが大型

化していた

だが多くの人が驚いたのはそのパイロットについてであろう、女性にしか動かせない筈のIS、にも関わらずそのパイロットは明らかに男性であり、更に言えばその容姿は連日報道されていた織斑一秋とてもよく似ているのだ

しかしそのように驚いている暇もなく映像の中の二機は激しい空中戦を繰り広げる事となる

打鉄が標準装備であるアサルトライフルである【焰備】を両手に持ち放つがライトグリーンの機体はそれらを悠々と回避している

そのまま機動性を誇るのかと思えば、唐突に空中で静止するライトグリーンの機体、そこに追い付いた【焰備】の銃弾が殺到し、誰もが撃墜を予想した

だがライトグリーンの機体の装甲はそのような銃弾など物ともしなかったのである、左手に備えられたシールドすらも使わずに自前の装甲のみで受けきったのだ

そのあまりの装甲の頑強さに多くの人間が呆気にとられるが、【焰備】を捨てた打鉄が日本刀型のブレードである【葵】を抜きライトグリーンの機体に迫る

それにはライトグリーンの機体も動き出すが、右手に持っていたライフルを格納すると右腰から棒状の物を取り出し先端からエネルギーによる刃を出力し、迎え撃ちにかかる

空中で斬り結び一撃離脱を繰り返して飛ぶ両者ともその機動は鋭くとても素人の動きには見えない、それなりに訓練をしたのであろう動きをしている

互角に見えた攻防が終わりを告げたのは【葵】がエネルギーによる刃の熱量に耐えきれなくなり融け落ちた事が原因だった

獲物を失った打鉄、そこに叩き込まれた横薙ぎの一閃が打鉄に当たり絶対防御と呼ばれるISの搭乗者保護機能が発動する

なお、本来ならばそれで終了なのだがライトグリーンのISがだめ押しとばかりに蹴りを入れ、そのまま打鉄は海中に没する事になったのである

そして場面が切り替わり、搭乗者紹介といったタイトルが表示される。そのタイトルに映像を見ていた全員が注目していたのだが、次に映ったのは海岸で口論をしている少年二人の映像である。

『お前、康太、最後なんで海に沈めやがった!?あのまま降りれば終わりだったろうが!』

『うるせえ、ノリだ!それよりもお前こそなんだよ一夏!何が練習要るだ一時間もしない内にまともに動けてるじゃねえか!』

『あの、お二人とも。既にカメラが回っているのですが』

『お前だって同じだろうが!あの人から聞いたけど同じように一時間くらいしか動かしてないんだろう!?なら同じレベルって事だ!この野郎、お陰で全身海水まみれだぞ!』

『知るか!落とされる方が悪い!』

『お前の機体新型だろうが!不公平だろ!』

『お前の機体は第三世代機のユニコーン与えられる予定だから良いだろ!オレのジエガンあれでも分類上は第二世代機なんだぞ!』

『そんなの関係あるか!ほら、お前も海に落ちやがれ!』

『うおっ!?おま、やめ、ヘルメットないから潜水服にはならねえんだぞ!?!』

『知るか、お前も道連れだ!』

どったんばったん、取っ組みあいになって海で沈んでいく二人、画面には映っていないが後ろの方では一人の女性が爆笑していたりする。

その後、一暴れした二人が息を切らした頃にカメラを回している少女が仕切り直し、名前のみを告げて映像は終わった。

なおその映像を見てポニーテールの少女が驚愕していたり、スーツ姿の女性が頭を抱えて大きなため息をついたりしていたりしたが、それはまた別の話である。

◆
そして時は流れ、IS学園の入学式の日が訪れた。

IS学園に入学するまでの間に篠ノ之博士から知識を詰め込まれ、一夏と模擬戦による訓練を行い過ぎた三日間、遂に入学式の日が

やってきたのだが、オレと一夏は入学式に出席せず、既に生徒達が各自教室に居る中で廊下を歩いていた

というのも入学は決まっていたものの実技試験だけは受けろと言われたのだ、なので朝に到着して今まで実技試験を受けていた

世界で三人のみの貴重なIS男性操縦者なので試験の結果は問わず入学する事が決まっていたのだが入学時点での実力の把握という意味があるらしい

そしてその試験を終え、オレ達はあの日オレを聴取したスーツ姿の女性、一夏の姉である織斑千冬教諭の後に続いて一年間学習する場である一年一組の教室前に来ていた

「私 まずは入る。お前達は私が指示するまで此処で待っている」

「了解」

「分かった、千冬姉」

「織斑先生だ、馬鹿者」

「痛っ」

公私はしっかりと分けるタイプらしい織斑教諭が一夏の頭にチョコップを食らわせる

まだ軽くではあるが、本気でやると出席簿が来るらしいので怒られないように気をつけよう

そして織斑教諭は教室に入っていたのだが、丁度今は自己紹介の場だったらしい、聞こえてくるのは男性の声、一夏の兄だろうか

『——以上です』

がたたつ、という椅子が動くような音が聞こえてきて『げえっ、呂布!』『誰が三国志の英傑か、馬鹿者』などのやり取りが続いた

その後は女子生徒達の黄色い声上がる、事前の学習で織斑教諭がISを用いた世界大会モンド・グロツソの初代優勝者、ブリュンヒルデだというのは聞いていた

そして此処はISを学ぶ為の場所、彼女達にとっては憧れのプロスポーツ選手が現れたような感覚だろう、きつと

そんな歓声を一喝によって封殺した後、幾つかの自己紹介を交えた後に指示が来た

『——それと諸事情により遅れていた二名を連れてきた。丁度良い、自己紹介して貰うとしよう。入って来い』

「失礼します」

名前順で並んで教室に入るオレと一夏、入ってから目に入るのは殆んどが同年代の女子の姿、大半は日本人のようだがISを学べるのは世界でもここIS学園のみである為に外国人の姿も見える

一名のみ見える男、一夏とよく似た顔をしているのが双子の兄だという織斑一秋か

分かつてはいたがこれだけの女子の視線に晒されるといっなのは中々にキツイ、中学時代はあまり女子と接点がなかっただけに切実にとはいえ今日からは殆んど女子しかいない学園で生活する事になるのだ、頑張つて慣れよう

オレ達は教壇の近くに立ち、クラスの全員と相対し自己紹介を始める、名前順で一夏からだから気が楽だ、事前に考えていたとはいえない「えー、世界で二人目の男性操縦者になりました織斑一夏です。ISに触れての時間はまだ短いですが精進します。よろしくお願いします」

「同じく世界で三人目の男性操縦者の紫藤康太です。所属は一夏と同じくラビットフット社。専用機は第二世代量産型ISジエガンです。コイツはジエガンの待機形態のハロ。色々と試験段階の機能を搭載していますが、相棒共々よろしくお願いします」

『ヨロシク、ヨロシク』

取り敢えずは順調に自己紹介が出来た、と思うがクラスは静まり返っていた

何か失敗したか、と思った次の瞬間、今度は逆に耳が痛くなる程の歓声へと変わる

「男、それも三人！」

「片方は地味だけど、専用機持ち！」

「ハロかわい〜」

「担任は千冬様だし、私もう死んでも良い！」

「男子をこのクラスだけで独占！これは情報が売れるわね！」

等々、その反応は様々ではある、あと地味で悪かったな、自覚して
るわ

ただしハロを可愛いと言ってくれた子は許す、袖がやたら長いが顔
は覚えた

そして最後の一人、勝手に人の情報を売るな、一夏のなら提供して
やらんでもないが

と、そろそろ收拾がつかなくなりそうな雰囲気になってきたところ
で教壇を叩く音が響き教室に静寂が戻る

その音を発生させたのは他でもない、織斑教諭である

「色々と聞きたい事もあるだろうが今はSHRの時間である事を忘れ
るな。取り敢えず自己紹介は今ので最後だったか？まだの者は挙手
しろ。織斑弟と紫藤は学校生活の中でクラスメイトの名前と顔を覚
えろ。良いな？」

『は、はい……』

「ならば席につけ。これより半月の間にISの基礎知識を諸君に叩き
込む。その後には実習となる。ISは扱いを誤れば簡単に人の命を奪
えるような危険な物だ。全員、その事を念頭に真剣に授業に打ち込む
よう。分かったな」

織斑教諭から放たれる気迫、それに気圧される全員は何度と首を縦
に振った

そう、ISは今や兵器だ、篠ノ之博士が夢の為に作った時とは違い
そのあり方は歪んでしまったが兵器である

そんな物を学ぶという心構え、それを織斑教諭は説いた

そして授業が始まる

◆ 「何とかなったな」

「ああ、あの頭痛に耐えた甲斐があったというものだ」

取り敢えず一時限目の授業を受けたのだがISの基礎についての
授業であり、篠ノ之博士特性の勉強マシンで頭に刻み込まれたオレと
一夏は授業内容をしっかりと把握する事が出来た

なおオレ達の席は教室の後ろの方である、急遽入学が決まったので

追加で配置されたらしい

後ろの方なので授業中は女子からの視線に晒される事はない、前々から入学が決まっただけで名前的にも前の席に座る事になっている織斑兄には申し訳ないがな

そうしてオレ達が二人で話しており、他の女子が遠巻きに見ている中で一人の女子生徒が近付いてくるのが見えた

「ちよつと良いか？」

「ん？誰だ？」

「おお、箒か！久しぶりだな、去年の大会以来か？」

オレ達の方に話し掛けてきたので訝しんでいると一夏が相手の名を呼ぶ、どうやら一夏の知り合いらしい

「う、うむ、そうだな。あれから大事はなかったか、一夏？」

「はは、こうして男なのにIS学園に入学する事になったのが一大事だよ」

「それはそうだな。私も驚いた。一秋の件は知っていたが、お前までISを動かせるとは思わなかったからな」

「でもこうして一緒にまた勉強できるんだから悪い事じゃないな」

「そ、そうだな。私もそう思う」

ふむふむ、どうやら彼女は一夏に気があるらしい、やっぱり顔が良いからモテるのか

そして一夏だが、これ多分特別な意識とかせずに天然で言っているな、一夏は彼女に対する恋愛感情があるのだろうか

なんだか一方通行な気がするなあ、不憫な

「あ、そうだ。箒、こっちは紫藤康太、同じ会社の同僚、になる」

「紫藤康太だ。一夏と同じくラビットフット社のテストパイロットをしている。康太でいい。よろしく」

「ああ、篠ノ之箒だ。一夏とは幼馴染に当たる。私の事も箒で構わない、名字はあまり好きではないので……とにかく、よろしく頼む」

「名字……ああ、そういう事か。分かった、箒」

「すまない、感謝する」

篠ノ之博士と同じ姓、という事は箒が篠ノ之博士の言っていた妹か

改めて箒の事を確認するがおちやらかした雰囲気の篠ノ之博士と凛とした雰囲気の箒とでかなり印象が異なる

「ふむ、なんだか侍って感じの人間なんだな」

「箒の実家は剣道の道場をやっている。俺も小さい頃に通ってたんだ。箒は実力もスゴいんだぜ、去年の全国大会の優勝者なんだ」

「そういう一夏も去年は中学の全国大会で優勝していたではないか。何を謙遜する必要がある」

「オレからすれば全国大会出場してるレベルでも十分にスゴい事なんだけどなあ」

「というか二人とも剣道やってたのか、道理で一夏がIS乗った時は近接格闘戦がやたら強い筈だ、機体性能がなければ押されてたからな、あの模擬戦」

それから予鈴が鳴るまで話していたが箒とは仲良く出来そうだな、他の女子も興味がありそうな様子で見えていたし、案外なんとかなるかな

そして二時限目、IS関連の教育に特化しているこの学園では一日の授業の殆んどがISの授業で締められていた

相変わらずオレ達は授業内容をしっかりと把握出来ており、先生からの質問にもちゃんと答える事が出来る

この調子なら学校での勉強はなんとかなりそうだな、中学時代は平均的な成績だったのが嘘のようである

こうして迎えた二時限目の休み時間、そろそろ他のクラスメイトとも会話をしなければと思いい夏と回ろうとしたのだが一人の女子生徒から声を掛けられる、デジャヴ

「ちよつと、よろしくて?」

「む、セシリア・オルコットか」

「誰だ?」

「あら、そちらの殿方は私のことをご存知のようですね。織斑一夏さんの方は少しお勉強が足りないのではなくて?」

「イギリスの代表候補生だ。事前に渡された資料にあったらどう?」

「あ、あれか!あまり目を通してないんだよなあ」

「お前な……現在学園に在籍中の代表候補生並びに専用機持ちの名前と顔は把握しろって言われただろうが。実戦を行う際に有用なデータが取れる、操縦技術の向上に役立つって」

「そうは言っても、あまり興味なかったからなあ」

ああダメだこりや、本当に資料に目を通してないや

まあ必須という訳でもなかったから仕方ないにしても、クラスメイトでもあるのだから覚えておいた方が良いでしょう

「ちよつと、この私を無視しないで下さいませ？」

「悪いな、えーつと、オルコット。悪気はないんだ」

「ふん、別に構いませんわ。男性など所詮は愚図なノロマですもの。そんな事に一々目くじらを立てていては身が持ちませんもの」

「良いからさつさと本題に入れ、まだるっこしい」

「何なんですの、その態度！この私を誰と心得て——」

『コウタ、ツウシン！コウタ、ツウシン！』

「おつと、会社からだ。すまないが後にしてくれ」

まだオルコットが何かを言ってくるが意識からシャットアウトする

ハ口経由での通信というのは篠ノ之博士達からの連絡で重要な案件になる、些事に関わっている暇はない

取り敢えずは通信に出る為にハ口を地面に放る

そのままハ口の上部カバーが開いて半球状になると映写機のような光と共に人間が現れる

とはいってもそれはホログラムであり、映し出されたのはクロエだ

『コウタさん、一夏さんはそこに居ますか？』

「一夏、呼ばれてるぞ」

「俺？分かった」

『た……プロフェッサーからの連絡です。一夏さんの機体が完成したので、本日の放課後に受け渡しを行うとの事です。機体の調整を行いますので私が向かいます。放課後に校門前までお願いします』

「早いな。流石はた……プロフェッサーか」

『本来なら一夏さんの入学前に完成させる予定でしたが予想以上にシ

STEM関係で手間取ったとの事です。ですが予定通りの性能に仕上がったとの事で、プロフェッサーも喜んでいましたよ』

「成る程。なら放課後に頼むよ。康太も来るだろ?」

「当然だ。じゃあクロエ、また放課後に」

一夏の専用機、つまりはユニコーンが完成したという事はサイコフレームの複製に成功したという事か

データと現物があつたとはいえ、よくもまあこの短期間だと思う

まあ何はともあれ早く完成してよかったよかった、通信を終えてハロを拾い上げた時に丁度予鈴も鳴ったしうるさいオルコットの相手をせずに済む、良いことづくめだな

しかしそんな時間も長くは続かない、三時限目の授業の頭に織斑教諭が告げた出来事が事の発端である

「そういえば再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決めていなかったな。誰か立候補、または他薦はあるか?」

その言葉に生徒全員がざわつく、そもそも説明が少ない

「クラス対抗戦は文字通りクラスから代表となる生徒を一人選出してISでの試合を行う。そしてクラスの代表として選ばれた者は他にも生徒会の会議や委員会への出席とまあ簡単に言えば中学までの間にもあつたであろう、クラス委員長という訳だ。なお一度決定すれば一年は変更出来ん。その辺りの事をよく考えて選ぶんだな」

成る程、つまりは面倒な雑事もくつついてくるという事だな

試合だけなら出ても良い、というか戦闘経験を積むために是非とも出たいのだが篠ノ之博士からジェガンで試作兵装のテストが来る可能性があるんだよなあ、なんでもジェガンの方がデータ収集には適しているとかで

なら此処は辞退だな、よし、気配を消しておこう

地味という事はこういう時に役立つ、背景に溶け込んでしまえば人の意識から外れる事が出来るのだからな

「はい、織斑くんが良いと思います!」

「えっ!?!」

「織斑は一人居るぞ。どっちだ?」

「両方を候補にして、模擬戦で決めたら良いと思います！」
「なっ!?ちよつと待ってくれ！」

「織斑弟、推薦された以上は拒否権はない」

「クツ、なら俺は康太を推薦します！」

「あ、テメエ、一夏！折角人が気配消してたのに！」

「お前なら俺より強いから大丈夫だろ！」

「機体性能考えて言え！そもそも、オレは本社から試作兵装のテストが来るからそんな暇はねえって！」

「二人とも黙れ。何がどうあれ推薦された以上は拒否権はないと言った筈だ。織斑兄、貴様は何かあるか？」

「千ふ……織斑先生に逆らえないって分かっているので反論もしません……」

織斑一秋か、そう言えばどういった人物なのかあまり知らないな

篠ノ之博士も興味ないって言ってたし、一夏から後で訊くか本人と話してみるか

一夏の反応から悪い人間ではないらしい、篠ノ之博士いわく面白い人間でもないようだが

「他に居ないか？ならこの三人で決着を——」

「納得いきませんわ！」

何だかオレ達男性三人がクラス代表として決められそうになった時、それに待ったをかける声があがる

とうるかまたお前か、オルコット

「ほう、なら理由を言ってみろオルコット」

「勿論です。単に男性だからと、物珍しさだけで選ばれるなどあつてはならない事です。クラス代表とは文字通り、そのクラスの中でも最も相応しい者にこそなる権利と義務があります。そしてこの中でそれに一番近い人物はこの私を置いて他にありません！」

「つまりはプライドか、下らねえ……」

セシリア・オルコット、事前の資料で調べていたが彼女の實力は高い、今年の入学生では学年首席である

それを誇りに思うなどは言わない、だが他者を陥れるような発言だ

けはいただけいな

「聞こえてますのよ、紫藤康太さん。専用機持ちとはいえ、貴方は所詮第二世代機の、それも量産型のパイロット。第三世代機を持つ私に敵うと思ってますの？」

「予想以上に地獄耳か……まあいい、取り敢えず持論でよければ言わせて貰おうか」

第三世代機、特殊な兵装を備えたISの分類されるカテゴリーではあるが、それが総じて性能の高さを示す物ではない

「取り敢えずお前さんの専用機であるブルー・ティアーズについての資料は見た事がある。だがその上で言おう。人間ではなく機体が乗り手を選ぶなど、ナンセンスだな」

「はい？」

「兵器とは、万人に扱えてこそその代物だ。だがお前さんの機体に搭載されているそれは適性を必要とする。そのような欠陥品を誇るか、三流め」

「なっ!?!言うに事欠いて、私のブルー・ティアーズを欠陥品ですって!?!」

「フンツ、事実だろうに。確かに複数方向からの射撃は脅威だ。しかし、そんな物は複数機を相手にするのと同じであり、オールレンジ攻撃ならば常人にも扱えるインコムで事足りる」

データがあるから後程試作で作って組み込んでみると篠ノ之博士が言っていたが、実を言うといんこムのデータも存在する

それもまた試作兵装の一つであり、ジエガンでテストする予定である

何やら色々機能をつけると言っていたのに不安を感じなくはないが、それが完成してしまえばオルコットの機体はその有用性を失う事になる

無線と有線、その違いはあれどオールレンジ攻撃が凡人にも可能となるのだから

「よくも私のブルー・ティアーズを馬鹿にしてくれましたわね……良いでしよう、紫藤康太さん、貴方に決闘を申し込みます!」

「ハッ、上等だ！先に第二世代機だと馬鹿にしたんだ、撃墜して赤っ恥をかかせてやる！」

「それと残りの二人も一緒ですわ。纏めて叩き落として差し上げます！」

「おい康太、こつちまで飛び火したぞ?！」

「うるせえ、量産機の良さも分からねえヤツにコケにされたまま黙ってられるか！凡人には凡人の、量産機には量産機の意地があるって証明してやらあつ!!」

戦闘経験を積むという目的もあるのだがそんな物はこの際放つておく、オレの愛機を馬鹿にしたんだ、コイツだけは何としても墜とす！

だが先にオレの頭に何か落ちてきた、出席簿？

「ヒートアップしているところ悪いが少し頭を冷やせ二人とも」

痛みが引いてきたところで顔を上げてみれば織斑先生がオルコツトの頭にも出席簿を叩き付けていた

「ハア、なんにせよ決闘にてクラス代表を決めるという方向で来週の月曜日の放課後にアリーナにて四名での模擬戦を行う。それまでに全員、機体の調整を行っておけ。以上。これより授業を始める」

普通にまずは口頭で注意すればいいのに、真っ先に実力行使してくる織斑教諭怖い

だが決闘の事は容認してくれている、ならば後は模擬戦で撃墜してやるだけだ

オレは静かに闘志を燃やしつつ、授業へ参加していく

そして放課後、遂に一夏の専用機であるユニコーンの受領が行われた

6話 ユニコーンの日

約束通り放課後に校門前まで行くと既にクロエが到着していた

とはいえ機体やその他の試作兵装を運んできた、というにはクロエは何も荷物を持っていないように見えるが恐らくはIS技術を用いた量子化を行ってコンパクトに纏めているのだろう、篠ノ之博士ならそれくらい普通にやる

「すまない、待たせた」

「いえ、問題ありません。それより、お一人多いようですが？」

「ああ、見学希望との事だ。安心しろ、企業スパイとかの類いじゃないのは確実だ」

それと今回は箒も同行している、昼休みの昼食時に食堂で模擬戦のことをどこから聞き付けたのか三年生の女子生徒がISの訓練を申し込んで来た際に反射的に箒が答えた事による成り行き、という形だが箒なので別に良いかとそのままだ

「突然で申し訳ない。私は篠ノ之箒という。一夏とその、ISの訓練に付き合う約束でな……」

「そうですね、貴方が。申し遅れました、クロエ・クロニクルと申します。ラビットフット社のパイロット候補兼メカニックになります。よろしく願います、篠ノ之様」

「箒でいい。名字はあまり好きではないのでな……」

「承知致しました、箒様」

篠ノ之博士を心から慕っているクロエからすれば同じ名字である事を疎ましく思っている箒はあまり相性が良くなさそうだがクロエはいつものポーカーフェイスを崩さずに応対した

取り敢えず立ち話もなんなので午前中の内に織斑教諭に申請を出して受理された第二アリーナに向かう

この学園には幾つかISの試合、訓練用のアリーナが存在しており、その中の一つである第二アリーナは基本的な円形状のアリーナだ。それとこのアリーナだが機密保持の観点からという理由をつけて模擬戦までの間、貸切にさせて貰った

オレの場合、初見殺しとも言える技能が多いからな、情報を隠すに越した事はない

そうしてアリーナのピットにまで移動したオレ達はまず一夏の機体のセッティングから行う事にした

オレの方の各種武装はインストールして後で確認するだけだ

「これが一夏の機体なのか？なんとというか、白いな」

「ユニコーンだからな。ジエガンと同じく全身装甲フルスキンの機体だ。一夏、

調子はどうだ？」

「スゴいな、軽く手足を動かしてみても打鉄とは大違いだ。体に完全にフィットしてるよ」

「プロフェッサーが一夏さんの専用機とする為に身体データを完全に反映させたと仰っていました。恐らく、一次移行にはそう時間も掛からないかと。いえ、既に完了しました」

「早いなあ。それでクロエ、武装の方はどうなっているんだ？」

普通のISは最初の姿から使用者に最適化する事で形状が変わると聞いていたがユニコーンの姿に変化はない

まあユニコーンはユニコーンだからな、変わったらオレが困惑するそんなユニコーンの武装だが一夏に合わせた調整がされていた

「はい、まずこれが専用武装である「クレセントムーン」です」

まずはメインとなる武装、身の丈程の長さの巨大な剣、「クレセントムーン」からだ

片刃の大剣、といった形の「クレセントムーン」であるが、これは篠ノ之博士が設計した武器である

一夏との模擬戦から一夏は射撃より剣を使った近接戦闘が得意な事は分かっていた、故にその剣に威力を持たせたのである

なお実体剣としても使えるがその刀身に沿ってビームを通す事で威力が底上げされる、どうやらオレが話したクロスボーンガンダムのムラマサブラスターやSEED系の対艦刀を意識したらしい

更に刀身の部分にもサイコフレームが使われるというハイパー・ビーム・ジャベリンのデータも反映されているようだ

ふむふむ、大きさによる取り回し難さを考えて峰の方には小型のス

ラストもついているのか

「——以上が特徴になります。そしてもしも近距離まで近付かれた場合はビームサーベルを使うようお願いします。次に射撃武装ですが、このビーム・ガトリングガンになります」

次に紹介されたのはビーム・ガトリングガン、原作でもユニコーンが持ち出して色々な場面で使っていた武装である

これが選ばれた理由は単に弾幕を張るのに適しているから、一夏は射撃があまり得意ではなかったのだから、適しているのだ

「他にもビーム・マグナムやハイパー・バズーカもありますが、一夏さんが使いこなせるかは未知数です」

「うっ……精進します……」

「はい。それとハイパー・バズーカですが通常の炸薬のみでなくベアリング弾を発射する散弾仕様とありますので、当てられないのであればそちらを使用するのも手です。装甲に対しては威力は落ちますがISですので生身の搭乗者を狙えばシールド・エネルギーを使用しますので有効です」

正直に言えばオレがISで驚いた点が此処である、いくらシールドバリアーがあるとはいえ生身を晒す事だ

機動性を上げる為に装甲を削るのは解るさ、アストレイ系の機体だって『当たらなければどうということはない』というコンセプトで装甲を削り軽くしてるからな

でもせめて散弾くらいは防げる装甲は欲しい、精神的にも

「むう、銃を使うのか？」

「何だ、箒は嫌いなのか、銃？」

「その、なんだ。千冬さんが現役の頃は一振りの剣のみで世界の頂点を取ったのを思うとな」

「アレは極端な例外と思った方がよい。オレも映像は見たがあれって第一世代機の試合だろう？今は機動性も火力も装甲も当時とは大違いだ。オマケにオレや一夏の機体みたいな全身装甲な機体はあの能力と相性が良い。あの程度のレーザーブレードならある程度は耐えられるし、実体剣でも装甲で受け止められる。技術は日々進歩してい

るんだ。その状況で剣のみで天辺取るなんてそれこそ世界大会の織斑先生以上の腕が必要とされるだろうな。けど銃で牽制でもいいから撃てば相手は動く。牽制にしろ攻撃にしろ、相手は動く。そこからあの大剣による一撃だ。少なくとも剣のみと銃があるのでは戦術の幅が段違いであり、それ故に例え銃が苦手だとしても——」

「ああ、すまない、私が間違っていた。要は剣道とは違うという事だな」

「まだ語り足りなかったんだが……概ねそうだな。というか剣道基準で考えてたのか？ 剣道は空を飛ばないだろう」

「確かに、それもそうか」

「まあ完全に無駄じゃないとは思うけどな。体の使い方は経験がある方が鋭くなるだろうし。まあ、空中だと踏み込みをどうするかが問題なんだが」

ビルド系みたいに宇宙や空中でも足場を生成出来れば良いんだがな、その辺りは篠ノ之博士ならやってのけそうではあるが

「では一夏さんはアリーナの方で実際に動かして慣れて下さい。今までの打鉄も速度に特化させた改良をしていましたがユニコーンはそれ以上です。その高速機動に慣れなければまずまともに動く事さえ出来ません。そして次にコウタさんですが」

「よし来た」

「武装に関しては完全にデータの通りの仕様なのでコウタさんの方がよく理解しているかと。ただ有線でのオールレンジ攻撃可能な武装、という要求の例の兵器なのですが、機能自体は完璧に仕上がっています。ただ、色々と機能を詰めたいとプロフェッサーが仰られています、結果このサイズになりました」

「こ、これは」

一夏の方はカタパルトに乗ってアリーナへと飛んでいったので、次はオレの番となったのであるが、スターク・ジエガンへの換装パーツを含む各種武装についてはクロエの言う通りオレはそれがどんな武装かは見れば分かるので説明は割愛、篠ノ之博士に頼んでいたインコムの方だけ説明して貰う事になったのだが、クロエが空中に表示した

ディスプレイに映し出された画像を見て驚く

確かにこのデータもあつたとは思うのだが、こうして組み合わせると不思議な物だな

まずインコムとはガンダムMkⅤに初めて搭載された有線式の遠隔操作式攻撃端末である

円形状のユニットが一般的であり、ビームガンを備え本体から射出、有線で制御を行い敵機の背後等に展開、射撃を行う

ガンダムシリーズに於けるファンネル等の兵器に近いが一番の特徴は一般兵にも扱える点である

有線という関係上、射程距離や角度に制限が掛かるもののニユータイプ能力を持たない一般兵でも擬似的なオールレンジ攻撃が可能となる点が画期的だろう

なおガンダムMkⅤは後にネオ・ジオンの手に渡りドーベン・ウルフとなり、それが連邦軍に接收されてシルヴァ・バレットになるという数奇な運命を辿った機体でもある

それはさておき、インコムではあるが実は似たようなコンセプトの地球連邦軍の兵器が過去に存在している、それが今日の前の画面に映し出されている【遠隔誘導操作用ボールユニット】である

見た目はファーストにも登場しているモビルポッドであるボール、それをオレンジに塗装したような感じだ

それが左右二機、画面の中のジェガンのバックアップに接続される形で備えられていた

機体本体がジェガンである事を除けばその姿はまさにNT試験用ジム・ジャグラーのものであつた

「二応、コウタさんの要求にあつた仕様は全て備えています。武装にも改良が施されていますので別物です。ご確認下さい」

「ああ、分かった」

促されて確認、篠ノ之博士がどういった改良をしているのか記されたデータを閲覧する

まずボールの上下に備えられているビームキャノン、設定ではモビルスーツ用のビームライフルの転用であつたそれは出力の向上から

威力はジェガン用のビームライフル並みになっていた

更にZ系列の武装データを取り入れたらしく砲口部からビームサーベルの発振も可能、射撃のみでなく格闘戦にも持ち込めるらしい
それからサイコミュの追加、基本は自動操縦だが手動での指示を出す際に脳波でのコントロールも可能、これはニュータイプ能力がなければ使えないがシステムの切り替えを可能としていた

そしてボール本体もジェネレータの内臓によりビーム兵器の使用が無制限、射出後に撃ち切ったボールを本体に回収してエネルギー供給という手間が省けている

まさにジェガン時代の技術で蘇ったジム・ジャグラー（ジェガン・ジャグラー？）といった様相である、不満どころか強化されて嫌な筈がない

「予想外だけど、これは良い機体だ！特にスターク・ジェガンと装備の干渉がないのが良い！併用した際の機動力は格段に上がるだろうな！」

唯一干渉するのは肩部のミサイルランチャーのみだが、ISは武装を量子化して格納しておけるのであまり問題がない、必要なら場にに応じて切り替えるだけだ

そしてその場合でもボールのビームキャノンを使用可能なので火力が下がるなんて事はない、むしろ連射可能な分火力は向上している
「喜んで頂いて何よりです。プロフェッサーも作った甲斐があるというものです」

「色々と準備して貰って、本当にプロフェッサーには頭が上がらないな。次の模擬戦、勝ってジェガンの性能を世界に示して機体の売上に繋げない」と

第二世代機であるジェガンが第三世代機であるブルー・ティアーズを打ち負かす、それは絶好の宣伝の機会となるだろう

それだけに負けられない、愛機ジェガンを馬鹿にされた事も当然許せないが、そうして売上に繋げる事が出来れば篠ノ之博士が必要とする資金確保の役に立てるのだから

「よし、今から訓練してくるな！」

「あ、一つだけプロフェッサーからの伝言です。ビーム兵器ですが現在使用に関して制限されています。その為、各種ビーム兵器は全てレーザー兵器としての使用になります。理由はお分かりですね？」

「電波障害の危険性だな。余計な事してジェガンの売上に響いてもだし、了解」

「はい。ですがレーザーでも通常のIS相手には十分な威力となりますのでご安心を」

「分かった。確かオルコットのブルー・ティアーズもレーザー主体だったな。なら一夏の訓練としては十分な相手になれるか」

そうと決まれば早速機体の訓練に移る、先に出ている一夏はどんな動きをしているか分からないが、このジェガン・ジャグラーなら一夏も対ブルー・ティアーズ戦に対する訓練となり、オレは武装の練習と一石二鳥だ

機体を展開してジャグラーに換装、カタパルトまで移動してアリーナへと発進する

「紫藤康太、ジェガン・ジャグラー、出撃る！」

発進時の掛け声は大事、やれば気分が上がる

その後、アリーナにてまだユニコーンの機動性に慣れずに振り回される一夏を的にレーザーの雨を降らせる事になるのだが、それは割愛しておこう

アリーナの使用時間ギリギリまで練習し、クロエを校門まで送った後は寮に帰った

暫くは自宅から登校という事だったが急いで学園側が寮の部屋を確保したとSHRの際に副担任の山田先生から鍵を渡されたのだ

「そういえば康太の部屋って何処なんだ？俺はまさかの筈との相部屋だったけど……」

「オレか？オレはほら、そこだ」

寮の入口を通って早速、一夏が疑問を口にした

幼馴染とはいえ年頃の男女が同じ部屋なんて、と思うが事情を知っているだけにその組み合わせは必然と理解している

というのも、こっそり学園のコンピューターにハッキングを仕掛け

て一夏と箒が相部屋になるように手を回した人がいるのだ、具体的には頭にウサミミつけた女性である

IS学園のセキュリティは当然だが高度な防壁が存在するのだが物ともせず突破してやった事がそれだけである、ある意味能力の無駄遣いと言える

なお本人達は知らない、世の中には知らない事が良いこともある、具体的には黙っていた方が面白いからな

そしてオレの部屋だが、オレは階段の下の部分を指差しておいた「なあ、俺の見間違いでなければ倉庫って上に書かれてるんだけど……」

「見間違いで何でもなく、元は倉庫だぞ。個室用意されるまで、何処でも良いから女子と相部屋とかマジ勘弁、精神的に緊張で死ぬるって交渉したら通ってな。一応、中にはある程度改装済みって話だ」

どうなってるかは知らん、が今鍵を開けて中を確認した階段の下だから斜めになった天井がまず特徴だろう、細長い部屋は四畳程のスペースがあり、フォークリフトで使うようなりフトの上に敷かれた畳がある

ふむふむ、天井は秘密基地的な感じがして好きだし、私物も着替え程度しかこの世界にはないから横にある小さめのタンスに収まる

私物となる物は後日買い足していくとして、寝床は敷き布団と完全に和室になっているな

結論、十分暮らすに問題ない部屋だ、特に畳最高、寝転がれるぜ！

「和室だといふズルいぞ康太、私とて洋室より和室の方が良い！」

「残念だったな、此処はオレの部屋だ。というかシャワーがないからアリーナとかまで行かないとならないのが面倒な点だな」

普通の部屋はシャワー付きらしいのだが元が倉庫である為に指定のシャワー室を使うしかないのだ

そこが不便といえれば不便だが我が儘を通して貰ったので気にしない、その程度の事は受け入れよう

その後、尚も和室に関して強いこだわりがある箒が近くにある寮長室から出てきた織斑教諭に注意されてお開きとなった

シャワーは訓練後にアリーナで浴びていたし、その後は食堂で夕飯を済ませてから布団を敷いて寝る

その時に胸元から一つのT字型の金属片、サイコフレームを取り出して眺める

クローエが去る時に渡されたのだが首にかけられるように紐を取り付けてある、複製したサイコフレームの一つらしい

これ単体でも力を発揮出来るなら、もしニュータイプとして覚醒した時に何らかの反応を示す筈、そう篠ノ之博士から預けられたそうだなので今後はこれも肌身離さず持ち歩く事にした、アクセサリーとしては武骨だがその意味を知っているだけに気にはならない

とにかく初日は終わりだ、今のところはオルコットとのトラブルがあつたものの上手くやっている

明日からも学業の他に訓練や体力作りとしてトレーニングをするんだ、テレビなんかの娯楽もないし、寝てしまおう

こうしてオレのIS学園での初日は幕を閉じるのだった

7話 VS 蒼い雫

時間の流れとは早いもので、一週間あった準備期間はとっくに過ぎ
てしまい、遂に模擬戦の日が訪れた

場所は学園の第一アリーナ、今まで特訓で使用していた第二アリー
ナと同様の造りであり、その辺りの説明は不要であろう

そして放課後となり模擬戦が行われる現在、観客席にはこの事を聞
き付けた生徒が学年やクラスを問わずに集まっており満員となつて
いるのをピットで確認し、オレ達は試合の準備を進めていた

「いよいよだな」

「何でこんなに人が居るんだよ……緊張するなあ」

「気にするなつて。剣道の大会で優勝してるんだろう？ならこの程
度、それと同じだつて」

「そうだぞ一夏。康太の言う通り、この程度の視線は何度も受けてき
たではないか」

「そうは言うけどな、やつぱり剣道とISじや違うつていうか……て
いうか、康太は何でそんなに落ち着いていられるんだ？」

「そりゃあ、オレはオレの相棒ジエガンの性能を信じてるからな。オレ達なら
やれる、あの高慢女の鼻っ柱を叩き折ってやるつてな」

オールレンジ攻撃は確かに脅威ではあるがやりようはある、ならそ
の全てをぶつけて勝利という結果を勝ち取るだけだ

「さてと、そろそろ時間だな。行ってくる」

「ああ、何にせよ頑張れよ。俺も一秋兄との勝負、勝つからな」

「その辺りはお互い様だな。そうしたらその後はお前との試合だ。特
訓ではああだが、決着を着けようぜ」

「そうだな、今度こそ俺が勝つ」

今回の模擬戦だが総当たり戦となつているが、その組み合わせは第
一試合がオレとオルコット、第二試合が一夏と織斑一秋だ

その次の試合は最初の二戦から様子を見て順次調整となる

結局織斑一秋とは話す機会があまり無かった、自己紹介程度はした
が互いに今回は対戦相手という事もあり必要以上の接触はしなかつ

ただ

その専用機も先程届いたばかり、正直に言えば此方はあまり強敵と認識してはいない、オレの意識はセシリア・オルコットとその専用機ブルー・テイアーズに向いている

オレは機体を身に纏いカタパルトへ移動、アリーナへと向かう

「準備完了。紫藤康太、高機動型ジェガン、出撃^でる！」

さあ、決着の時だ、セシリア・オルコット！



アリーナでは既にセシリアが専用機であるブルー・テイアーズを展開しており、康太の到着を待っていた

蒼を基調としたカラーリングに四枚のフィン・アーマーを備えたどこか騎士甲冑のような気高さを感じる機体、ブルー・テイアーズ

対するは全身にライトグリーンの装甲を持ち、追加で胸部と脚部に灰色の追加装甲とブースターを備えた高機動型ジェガン

ピットから飛び出した康太はセシリアと向かい合う形で空中で静止、試合開始の合図を待つ

「逃げずによく来ましたわね。そこは誉めて差し上げます」

「何で勝てる相手から逃げる必要がある？」

まずは互いに挑発から始まるがプライドの高いセシリアの方は既に眉間に皺を寄せていた

「……どうやら、男でもISを扱えるからと少々調子に乗っている様子。ですが見せて上げましょう、本当のIS操縦者の実力というものをー！」

「なら見せて貰おうか、イギリスの第三世代機の性能とやらを」

『セシリア・オルコット対紫藤康太、試合開始！』

アナウンスが流れ、それと同時にビーツという電子音がアリーナ中に響き渡る

それにより互いに手持ちの武器を構え相手に向ける、セシリアは二メートルはある長大なレーザーライフルであるスターライトmkIIIを、康太は両手にそれぞれ持った二丁のビームライフルを

殆んど同じタイミングで互いの銃口からレーザーが放たれ、それら

はトリガーと同時に双方とも右に移動していた事で宙を貫く

そのまま右回りで旋回しつつ二人の間ではレーザーの応酬が続く、
だが取り回しの悪いライフルでは狙いを付けるのも時間が掛かり、射
程では劣るものの二丁持ったビームライフルは銃身も短く連射が効
く、直径二百メートルという狭い空間ではブルー・ティアーズの長距
離精密射撃など用を為さず、立て続けに放たれるレーザーに対してセ
シリアは早々に回避に専念する事となった

そしてミノフスキー粒子ではなくレーザー用のバッテリーとなっ
ているビームライフルのEパックを撃ち尽くすまで続いたその銃撃
戦が終わると康太は素早くEパックを交換する

だがそのリロードの隙をセシリアが逃す筈もなく今までのお返し
とばかりにスターライトmkⅢを放つ

その一撃は康太に難なく回避されるものの、それで更に時間を稼い
だセシリアは自らの機体の名を関する兵器に指示を飛ばす

「お行きなさない、ブルー・ティアーズ！」

腰のフィン・アーマー、そこに備えられた四基の無線式遠隔操作端
末が射出され康太を包囲するように配置される

康太はその動きを見てビームライフルのリロードを中断、ビームラ
イフルを量子化して拡張領域バスターレットに収納、そこから新たな武装を取り出し
て装備した

それは二連装ミサイルランチャーが二基の備えられたジェガン用
のシールドであり、右手にはブルパップ方式の実弾ライフルであるジ
ム・ライフルが握られていた

四基のビットが包囲した途端に康太を砲撃、ライフルから放たれる
物よりは威力の劣るものの普通のIS相手には十分なレーザーが放
たれる

康太は即座に身を捻って二発を回避、残りを構えたシールドで受け
止めて反撃としてジム・ライフルから銃弾を放つものの的が小さく、
小回りの利くビットには当たらない

そうして康太がビットの相手をしていると上空からスターライト
mkⅢを構えたセシリアからの狙撃が入る、だが撃ってくるタイミン

グを予想していた康太は足を勢いよく蹴り上げてAMBAC機動を行い、狙われた頭への狙撃を回避する

そんな教本にも載っていない動きを前に動揺したのはセシリアの方であり、更にジエガンの持つシールドから放たれたミサイルを認識した事で一時的にビットの制御が甘くなり動きが鈍ってしまう

すかさずそこをジム・ライフルと頭部側面のバルカンポッドにより射撃を行う康太、二つのビットに銃弾が向かうがAMBAC機動により体勢が不安定な状態での射撃はビットを掠めるだけに終わる

それを見たセシリアは自身に迫るミサイルに対処する為にもビットを呼び戻して四発の追尾してくるミサイルを迎撃した

それによりビットはエネルギーを使い果たした事で補給の為にブルー・ティアーズ本体へ戻っていく

康太もまたジム・ライフルとビームライフルをリロードしていき、互いに最初の攻防は終わりを告げた

だがその短い攻防の中でも見る人が見ればそれがどれだけの技量が必要とするか分かるものであった

◆
そんな激闘が繰り広げられる中、衝撃を受けていたのは観客席の生徒達である

当初、彼女達は世界でも珍しい男性のIS操縦者が模擬戦を行うという事で単なる好奇心からアリーナを訪れていた

だが如何に専用機を持ちこの一週間特訓を積んだとはいえそれは付け焼き刃に過ぎず、今までもイギリスで訓練を積んできた者、それもイギリスの代表候補生という国家の中でも専用機を与えられる程のエリートであるセシリアには及ばない、そう考えていた

だが実際に模擬戦が始まると康太はとても付け焼き刃とは思えない動きを見せてビットが投入されてからも被弾はゼロ、対するセシリアにもダメージは与えられていないものの、ビットに対応しきって反撃さえして見せた動き、特にAMBAC機動については学園で学んできた三年生ですら驚愕していた

「ねえ、今の動き、あんた出来る?」

「無理よ、確かにISはハイパーセンサーで全方位の情報を取得出来るけど、あんな瞬時に全部の攻撃に対処なんて、出来る訳ないじゃない」

「そうよね……でも、あの子って確かISに触れて精々が十日程度よね?」

「それは……そうだけど。天才ってこと?」

「多分、そういう事よね……」

こうして平凡な人間と思われていた康太の評価は本人の知らない内に高まっていた

そしてアリーナのピットでもまた同じように衝撃を受けている者達は存在する

「ふわあ、紫藤くん凄いですねえ。あんな動き、とても素人の動きじゃありませんよ。それにあの旋回方法、今の教本にも載ってませんよね」

「そうだな。だがあの特殊な旋回、あれ自体は学園に来る前からの物だ。土壇場でやったという訳でなく、狙ってやったのだろう」

「織斑先生はご存知なんですか、あの動き」

「ああ、入学時に実技試験としてな。織斑弟も不完全だが再現していた。本人が黙秘しているが、恐らくはPICを利用し慣性を利用した高速旋回だろう。それと細かな調整にも使っているらしい。紫藤の機体のバックパックから伸びるサブスラスター、あれも小刻みに動いているな。手足の動きのみに意識が向きがちだが、ああいう姿勢制御にも用いているようだ」

「へえ、凄いですね。自分で考えたんでしょうか?」

「本人は真似てるだけだそうだ。さて、そろそろ動き出す頃合いだろうか」

ピットに居る教員二名、織斑千冬と山田真耶の二人は視線をモニターに集中させた



幾ら新型とはいえ所詮は第二世代機、大した時間も掛けずに終わると思っていたセシリアは先程の戦闘からその認識を改めていた

仕留めきれない程度ならまだ理解は出来る、だが一撃も直撃させる事が出来ずにブルー・ティアーズの攻撃を凌がれる等という事は一切予想出来なかったのだ

本国でさえ完全に避けきった者は居なかった、にも関わらず目の前の、それも男がそれをやってのけたというのは彼女にとって大きな衝撃をもたらしていた

「まずは素直に称賛を。私とブルー・ティアーズの円舞曲を踊りきったのは貴方が初めてですわ」

「そりやどうも。だが本気じゃないだろう？オレもまだ手札は残ってるんでね」

康太がそう言うのとジェガンの武装が変化、ジム・ライフルとシールドが格納され代わりに右手にバズーカが、両肩には三連装のミサイルポッドが展開され、それと共に腕にも胸部や脚部と同様に灰色の追加装甲が現れる

「ビットの補給も既に終わった筈だ。此処からは高機動型ジェガンからスターク・ジェガンで相手させて貰おう」

「ええ、私も貴方を見誤っていた事を認めます。その上で宣言しましょう。全力を持って落とさせて頂きますわ、紫藤康太さん」

「やれるものならな！」

セシリアがビットを展開しようとするが、それよりも先に康太の手からバズーカの砲弾が放たれる

「そのような遅いバズーカで、私を捉えようなどと——」

だがそれは先程まで見ていたレーザーに比べれば格段に遅い、余裕を持って避けられる、そう思っていたセシリアだが砲弾が破裂、中から無数の鉄球が雨のように降り注いだ

「散弾!?クッー!」

咄嗟に腕を上げてガードするセシリア、だが広範囲を攻撃する散弾には防御面積が足りず装甲の存在しない部分にも被弾、シールド・エネルギーが消費されていく

この試合に於ける初のダメージを格上と思われていたセシリアが負う、その展開がまた他の生徒達の間にも衝撃を与えるが、それに気を

取られる間もなく康太の攻撃は続く

最初のバズーカを放った後、康太は上昇しセシリアの上を取つていた

そこからセシリアに向かってブースターを噴かす康太、上を取ったのは重力を味方につけて加速度を上げる為である

当然セシリアもまた迎撃しようとはするが康太は先に両肩の三連装ミサイルを全弾発射、同時にバズーカも放つ事で散弾とミサイルの爆発により間に合わず攻撃による被害の及ばない場所まで退避する事になった

だがそこにスターク・ジェガンが突っ込んでくる、康太は爆発の範囲を設定してセシリアが逃げる方向を限定していたのだ

「クツ、ブルー・ティアーズ！」

それでもビットを展開するセシリア、四基の移動砲台からレーザーが放たれ康太に向かう

弾を撃ち尽くしデッドウェイトとなるバズーカとミサイルポッドをパージしていたスターク・ジェガンだが、康太は自らに迫るレーザーに対して腕によりセンサー類が集中している頭部等の重要な部分のみをガードし、右腕や左足といった箇所には被弾するのもお構い無しに突き進む

そしてレーザーの雨を抜けた康太は右手の追加装甲内部に格納してあったビームサーベルを取り出しレーザーの刃を形成、既に剣の間合いへと入ったセシリアに縦に一閃する

「インターセプター！」

その一撃は辛うじのタイミングで呼び出したセシリアの対IS用のブレードであるインターセプターにより防がれるものの、交差するのは一瞬、直ぐに速度を落とす事なくセシリアの真横を駆け抜けた康太はスピードを落としつつ旋回、再びセシリアに斬りかかる

今度は鏢迫り合いの形となる康太とセシリア、一度力任せに康太を弾き飛ばそうとするセシリアだが、康太はそれに合わせて一度後ろに飛びすさり、ビームサーベルを突き構えでもう一度突進する

その瞬間、セシリアは小さく笑った、それと同時にスカート状の

アーマーが動き中からミサイルの弾頭が姿を現す

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六基ありましてよ！」

回避は間に合わない、既についた勢いを殺す事など出来る筈もなく突き進む康太へとミサイルが命中、巨大な火球を生み出した

◆ その様子を一夏と同じくピットにて見ていた箒は友人が爆発に飲み込まれたのを見て悲鳴を上げていた

「康太!？」

「大丈夫だ、箒。アイツは無事だ」

だがその反面、一夏の態度は落ち着いたものであった

しかしISの持つ絶対防御を信頼しているのだとしても目の前で友人と呼べる人物がミサイルの直撃を受けた光景を見て箒は気が気ではなかった

「しかし、あの威力では!？」

「大丈夫なんだよ。康太ならこの程度の事でやられたりなんかしないって。ほら、見てみるよ」

一夏はどこか確信に近いものを感じさせる言葉で画面を促す

◆ そして空中に漂う黒煙を切り裂き現れる物があった

◆ 確実に仕留めた、その確信がセシリアにはあった

今まで使った事のないミサイル型のブルー・ティアーズ、過去の試合でも一度も披露した事のないその隠し玉を使ったもののセシリアの心に後悔はなかった

それを使うに足る相手だったとセシリア自身が認めていたのだ

だがいつまで経っても試合終了のアナウンスが流れない、その事をいぶかしんでいると黒煙の中から飛び出す物体があった

セシリアはそれを康太の駆るジェガンだと思っただがそれはオレンジ色をした球体であり、それが宙を駆け二門上下に備えられた砲台からレーザーを放ってきていた

慌ててそれを回避したセシリアだが更に下方にも同様の存在を確認、上下から同時に行われる砲撃を回避していく

何発か掠めたものの距離を取ったセシリアは先程まで康太が居た場所へと視線を向ける

黒煙が晴れたその場所には追加装甲を全て失ったものの本来のライトグリーンノの装甲を持つ一機のIS、康太のジェガンが佇んでおり、そのバックパックには周囲を飛び回る球体へとケーブルが伸びていた

その姿が完全に現れると同時にケーブルが巻き取られ球体がジェガンの背部に収まると康太は口を開いた

「よもやあんな奥の手があったとはな。勝利を確信して油断した」

「ええ、あれを使ったのは貴方が初めてですわ。でも一つだけ分からない事がありますの。康太さん、あの爆発をどうやって防いだのですか？」

「完全には防げなかったけど、急減速すると同時に追加装甲をパーズ、慣性で前に飛んでいったそれが先にミサイルに当たったからギリギリのところまで直撃は免れたんだ」

「成る程、あの一瞬で見事な判断ですわ。それにまた装備が変わってますわね。今度は何てお名前ですの？」

「ジェガン・ジャグラード。遠隔操作端末であるボールユニットを扱うからジャグラード」

「私のブルー・ティアーズと同じような攻撃を行えるというは先程見せて頂きました。では、今度こそ決着と参りましょうか！」

「望むところだ！」

康太が手に持つのは今までとは違い長い銃身を持つリゼル用のビームライフルである

撃つのは相変わらずレーザーではあるがその威力は段違いであり、セシリアの持つスターライトmkⅢより強力である事が伺える

「なんて火力ですの!？」

「威力重視モード、ギロチンバーストだ!にしても当たらん、良く動く!」

互いに高速で動きつつ射撃戦に突入するが、ジェガン・ジャグラードは巨大なボールを二機背負っているとは思えない速度を出していた

これはボール自身が持つブースターも使用する事でジエガン本来の物より機動性が上がっている事が要因であり、更に機体の加速方向に相手を捉えればボールの持つ計四門のビームキャノンも砲撃を行えるので、康太は何とかセシリアを正面に捉えようと機体を操る

セシリアもまたその事を理解しているので単純な軌道を描かないよう機体を振り回しているのだが、その状態では満足に狙いをつける事も儘ならない為に互いに有効打を与えられずにいた

そして再び、最初の頃のように康太の持つリゼル用ビームライフルのエネルギーが切れる、特に大出力のギロチンバーストを使用していたのでエネルギーの消耗が激しいのだ

その事を先程の戦いから見抜いたセシリアは今が好機とビットを展開、勝負を決めに掛かる

それに呼応して康太もボールを射出、互いの遠隔操作端末が宙を駆けパイロット達本人も射撃を行う

セシリアは気付いていなかったがこの時、ビットの操作を行いつつ自身も動きながら狙撃するという芸当を行っていた、それまでは機体かビット、どちらかのみしか動かせなかったにも関わらずである

手数の差により徐々に被弾が増えていくのは康太であるが、ジエガンは持ち前の装甲の堅牢さを以て攻撃に耐え続ける

そして遂に勝負の命運を分ける瞬間がやってきた

「クツ、ブルー・ティアーズのエネルギーが……！」

「貰ったアツ！」

無線式であるが故にエネルギーに限りがあるビットと、ケーブルで繋がり本体からのエネルギー供給に加えジエネレータを内蔵するボール、その違いによりセシリアはビットによる攻撃が出来ず、康太は今まで耐えた分を返さんとばかりにボールを伴ってブルー・ティアーズへと追い続ける

不利な状況の中、それでもなお足掻こうとするセシリアだが、その周囲にボールが展開、挟み込むように動いたと思えば自らに繋がっているケーブルを利用してセシリアを拘束する

完全に捕らえた、その状態を康太が逃す筈もなく、そしてセシリア

はケーブルが巻き付いた事で腕も動かせずビットの補給も終わっていない

「これで、終わりだアアアッ!!」

完全に詰んだ状況、だがセシリアの表情は試合開始時とは打って変わって清々しい笑みが浮かんでいた

「ええ、認めますわ、紫藤康太さん。貴方の勝ちです」

リゼル用ビームライフルの先端からロング・ビームサーベルとして利用したレーザーの刃が伸び、それを構えた康太の一閃がセシリアを捉える

それによりブルー・ティアーズのシールドエネルギーがゼロになり、勝敗が決した

『ブルー・ティアーズ、エネルギー残量無し！勝者、紫藤康太！』

こうして一年一組のクラス代表を決める為の模擬戦における第一戦は紫藤康太とジエガンの勝利となった

8話 模擬戦色々

かなり被弾したもののオルコットとの試合を制したオレはピットの方へと戻る

装甲の方はダメージレベルB、結構傷ついたな

おまけにスターク・ジエガン用の追加装備は全損、機体本体の装甲は予備パーツがあるから損傷の酷い箇所を交換すれば良いとはいえ、ジエガン・ジャグラでなければ機動性の向上はない、か

第二試合が行われている間に交換して慣らし、それから第三試合に出場か……やるべきことは色々あるが、まずは一言

「あぶねえ……あんだだけ啖呵切つといて負けたら洒落にならなかった……」

特に隠し武器であるミサイルはヤバかった、直撃すればジエガンの装甲でも抜かれていただろう

それで即負けにはならなくとも機動性が落ちてビットにやられていたかもしれない、あの状態で負ければ赤っ恥も良いところだ、よく咄嗟で装甲パージして楯に出来たな、あの時のオレ

「心配はしてなかったけど、思ったより元気そうだな、康太」

「あ？ああ、一夏か。そつちも今から試合だろう、準備は良いのか？」

「誰かさんが派手な戦いをしてくれたんだ。俺も負けてられないよ」

「そうか。なら勝って来い。兄貴を超えるんだらう？」

「ああ、俺は今日こそ一秋兄を超える。お前に教えられた事を実践してやる。じゃ、行ってくるぜ、康太」

「おう、行ってこい」

ユニコーンを展開した一夏の背を見送り激励する

カタパルトから射出されてアリーナに向かうのを確認してピット内のモニターの方に視線を移すと、既に箒がモニター前で一夏の様子を見ていた

「む、康太か。まずは勝利おめでとうといったところだな」

「ありがとう。かなり厳しいところがあったけどな」

「あのミサイルだな。あれは私も驚いた。よく凌げたのだと感心す

る」

「あれで終わったと思ったよ。あの一瞬で対処出来たオレを自分で誉めてやりたい」

モニターに近付くと箒はオレに気付いたのか劳いの言葉を掛けてくる

オレはそれに応えつつも視線はモニターに向ける、そして先に出ていた一夏のユニコーンとは別に白い機体が現れる

IS特有の完全にはその姿を隠していない装甲が脚や手を中心に纏われているが、それ以上に肩の辺りで浮遊している装甲と大きな翼のようなスラスタが目を引く機体だ

初めて見る機体ではあるものの、その存在は知っている、篠ノ之博士が設計に一部関わっているという機体、白式だ

武装は近接ブレード一本という完全に剣での戦闘しか想定していない機体、速度等の性能はかなりのものだがピーキー過ぎる

どうやら一次移行は終わっているようだが、正直に言えばユニコーンとの、というよりも全身装甲の機体とは相性が悪い機体だ

「なあ箒。オレは織斑一秋の事をあまり知らないんだが、どういう人間なんだ？一夏から聞く限りでも優秀な人間としか聞かされないし、他の知っている人間は面白味がない人間って言っていた。お前さんの目から見て、どういう試合展開になると思う？」

「そうだな。一秋は確かに幼少の頃から一夏より一步は上に居た感じだ。無論、一夏とてそんな一秋に追い付こうとしていたが、兄としての矜持か、一夏と同じように努力もしている。それを知っているだけに、一夏もまた尊敬しているのだろうか」

「成る程、天才とか才能ではなく、努力家なのか」

「ああ、剣道の腕も中々のものだ。中学に上がってからはバイトに専念するといつて剣を捨てたが、それも一夏の為にとの事だった。一秋と一夏はその時には殆んど同格の剣士であったが、今はどうだろうな。一夏は一秋が剣道を続けるようにと奨めたお陰で中学の全国大会優勝だ。その間のブランクとISへの習熟具合、この試合は一秋が何処まで一夏に追い付けるかが問われるだろう」

「へえ、そういう事なのか。いや参考になった。なったんだが、二つ言える事があるんだ」

「ほう、それは？」

「一夏の性格からして、まず間違いなく射撃武器は捨てるな。兄貴に勝つという意思があるなら相手と同じ土俵で勝負する筈だ」

「だろうな。一夏はそういう性格だ。ふむ、どうやら早速捨てたようだな。ガトリングガンを格納した」

モニターに映し出されるユニコーンは出撃時には右手に持っていたビームガトリングガンと左腕に固定していたシールドを格納した。そして背中にマウントしてあったクレセントムーンを抜き放ち構える

おお、あれはサンライズパス！カメラアングルもうちよい下からなら完璧だった

コホン、それはさておき試合開始のブザーが鳴る、だが織斑兄弟は互いに仕掛けずに地上に降りた

どうやら剣道と同じように踏み込みの出来る地上で決着を着けるつもりのような

「そういえば康太。もう一つは何なのだ？」

「ん？ああ、二人とも剣の腕で競い合うつもりなのは間違いないんだが、一つ問題があつてだな」

「問題？何だというのだ？」

剣道なら白黒ハッキリ付けられたかもしれないんだけど、これはなあ……

「あの二機、性能差が割りとあるんだよなあ」

特に装甲とか機動性とか、鍛えた肉体をぶつけ合うのとは違うわけ

で
「ぶつちやけ、一夏に有利しかない」

◆
そこまで言ったところで両者は同時に剣を振るっていた

時間は少し巻き戻り一夏が一秋と対峙した頃、二人は互いの機体を確認していた

とはいえ一秋の白式は武装が近接ブレードの雪片式型のみであり、それを事前に情報として篠ノ之東より教えられていた一夏は迷わず武装をクレセントムーンのみに変更する

「自分に付き合う必要なんてないのに……」

「それでもだよ、一秋兄。アイツに言ったからな、俺は今日こそ一秋兄を超えるんだって」

「……とつくにお前は自分なんて超えてるよ。強くなった。ISの動きにも迷いが無い。四苦八苦しながら動かしている自分とは段違いだ」

「確かに練習した時間の差はある。でも一秋兄は直ぐにコツを掴むのが上手いだろう？なら、手加減の必要だってない。一秋兄はもう俺と同等くらいには白式を動かせる筈だ」

「それも買いかぶりなんだけどなあ……」

あくまでも自分と同格の相手であると信じて疑わない一夏と苦い笑みを浮かべる一秋、だが試合開始を告げるブザーが鳴ると共に表情を真剣な物に変えた

そして互いに地上に降り、剣道のように地上を移動しながら剣を振るう

「ハアアアアッ！」

「イヤアアアッ！」

気迫と共に振るわれる二本の剣、だがその特性は違う

片や日本刀のような形状と細身の刀身を持つ雪片式型、片や片刃とはいえ機体の全高に匹敵する長さを持つ大剣のクレセントムーン、その違いが同じ流派を剣術の基礎とする二人の動きに違いを持たせた

レーザーが刀身に沿って展開されている以上は鏝迫り合い等をすれば雪片式型が損傷する、そうさせない為に一秋は斬り結び事をせず可能な限り回避を選択し隙を見ては細かな動きで反撃を加える

対して一撃必殺とも言える威力を持つ大剣のクレセントムーンを持つ一夏は武器の持つ重量に振り回されていた

大剣である以上は当然ながらその重量もかなりの物となる、幾らISのパワーアシストがあるとはいえ、その質量から生み出される慣性

を制御するのは並大抵の事ではない

加えて刀身の峰に備えられたスラストを噴かせばその勢いほとでもではないが制御出来るものではない、何かにつづかるか勢いが弱まるまで止める事さえ出来ないのだ

一週間その扱いを康太と共に訓練していたとはいえ、まだまだ完全に使いこなすには到っていない

それに対して一秋はというとブランクがあるとはいえ武装のバランスは剣道の頃に近い、その為に慣れない武器を扱う一夏よりも早くに武器の扱いについて習得する事が出来ていた

それでも反撃として放つ斬撃が有効打とならないのはひとえにユニコーンの装甲の堅牢さ故である

そしてこのまま続けていけば一夏はやがて武器を扱えるようになる、そう確信していた一秋は早めに勝負を付ける事にした

その為に白式の持つ特殊な能力を発動させる

「なっ、レーザーが!？」

「零落白夜！エネルギー兵器は無効化させて貰った！」

「千冬姉の武器か！けど、その為のクレセントムーン！」

切断力を上げる為のレーザーが無力化されるものの、本来の刃は実体である為にエネルギーを消滅させる零落白夜の効果は及ばない

その事を承知で武器破壊を狙った一秋だが一夏が左手に展開したビーム・トンファーを見ると後ろに飛び退く

刀身の長さこそ本来の竹刀とは違うものの二刀流の姿となった一夏、しかし直ぐにクレセントムーンを構え直すと互いに仕切り直しとなった

「強くなったな、一夏」

「ああ、当然だよ、一秋兄。でもまだなんだ。まだ俺は一秋兄に勝てるっていうビジョンが思い描けない」

「諦めるのか？」

「前までの俺ならそうだったかもな。一秋兄に負けても、『相手が一秋兄だから仕方ない』って言い訳して諦めていた。でもな、アイツが、康太が言ってたんだ。『それでもと言い続ける』って。この先、俺の力を

否定したりする人間に出会うだろうけど、それでも、俺自身が諦めてしまおうとするだろうけども、それでも、可能性を捨てるなつて言ってくれたんだ。アニメの受け売りだなんて言ってたけど、その通りだと俺は思う」

——だから、と一夏が言った時、ユニコーンの姿に変化が、装甲の継ぎ目から赤い光が溢れ出した

その光は少しずつ強くなり、一定量を超えた時、機体に明確な変化が訪れる

光が漏れ出している継ぎ目を境に装甲が開き、フレームが露出、赤く光り輝いていた部分は使用されていたサイコフレームであった

脚部から順に装甲が展開していき残ったのは頭部のみ、側頭部のパーツが百八十度回転し、額の辺りのパーツが上部に稼働、その下には機械による双眸が現れ、ユニコーンという名に相応しい特徴的だった一本角が左右に割れV字状のアンテナへと変化する

「俺は今日こそ、一秋兄を超える！可能性の獣である、このユニコーンで！」



「おお、遂に起動したか！」

「康太、アレは一体何なのだ!?一夏の機体が変身したぞ!？」

「あれはユニコーンの真の姿、デストロイモードだ。普段は抑えている機体のリミッターを解除して戦闘を可能にするシステムになる」

「リミッター、そんな物が……」

「プロフェッサーによるとISでも搭乗者の保護の限界を超えるような機動性を引き出す事が出来るらしい。アレはそんな機動性を獲得すると引き換えに、時間制限付きではあるがISの限界を超えた動きを可能とする。効果は五分だ」

「それは大丈夫なのか？一夏の体が耐えきれぬのか？」

「下手に制限時間を延ばそうとしなければ平気らしいぞ。尤も、それだけの機体を制御するんだ、その疲労は半端な物ではない。リミッターの解除条件もISが搭乗者の強い思いに応える為に外れるようにしてある。今回は一夏の兄貴を超えたいって思いにユニコーンが

応えてくれたんだろう。信じてやれ、一夏の可能性を」

「可能性……そうだな、行け、一夏！」

◆ 「ハアアアアアアアアアアアッ！」

「クッ、この力は!?!」

デストロイモードへと変化したユニコーンの機動性は圧倒的という一言に尽きた

更に言えばデストロイモードは人間の限界を超える力、その制御の為に機体が一夏の動きに合わせた動きをするのに対して今の一夏はユニコーン自体を己の肉体のように動かしていた

ユニコーンの手足の中に入っている一夏本来の手足はユニコーンの動きに追従しているだけだ

しかし自らが思い描いた通りの動きをするユニコーンの事を一夏は目まぐるしく切り替わる視界の中でしつかりと信賴していた

そしてその迷いの無さは太刀筋に顕れ、リミッターの外れたユニコーンの臂力が、機体本体と同じようにサイコフレームの輝きを放つ刀身を持つクレセントムーンを軽々と振るい、一秋の白式を強かに打ち据える

それにのり弾き飛ばされた一秋はその勢いに逆らわずに流されるまま大きく距離を取る

しかし離れてから体勢を整えた時、目の前には既にユニコーンがクレセントムーンを両手で上段に構え、今にも振り下ろさんとしている姿があった

最早避ける事は叶わない、勝敗は決した

機体性能の差も当然ながらあっただろう、だがそれを成したのは一夏の意思の強さと、その機体を制御出来るだけの技量である

それを理解したからこそ最後の瞬間、一秋は呟く

「——お見事」

◆ そして白式の絶対防御が発動、第二試合は織斑一夏の勝利で終わった

ふむふむ、機体の性能差があつたとはいえ一夏が勝つたか

普通に射撃を有りにすればより簡単に勝てただろうがそこは男の意地というもの、何も言うまい

完全に実力だったかは少し怪しいが、慢心しない為の念押しをしておくか

ピットへとユニコーンが、一夏が戻ってくる

ふらついているのは疲労の為だろう、心配をした筈が機体へと駆け寄っていく

「一夏！」

「あ、ああ、筈か。どうかしたか？」

「どうかしたか、ではない！体の方は大丈夫なのか？康太からアレは体にも大きな負担を掛けると聞いたぞ！」

「俺は大丈夫だよ。確かにちよつと疲れたけど、それだけだ」

「そうか……何はともあれ、おめでどう。遂に一秋を超えたのだな」

「実感は薄いけどな。でもやつと勝てたよ。これも動きの基礎を教えしてくれた康太と、近接戦の稽古をつけてくれた筈のお陰だ」

「そうか、まずはおめでどう。だが忘れるなよ。お前が勝つたのではない。そのガンダムの性能のお陰だという事を忘れるなよ！」

「康太、一夏が勝つたというのにそのような言い方は……って、何だそのヒゲは」

「最初は一夏が慢心しないように言いたかったけど、いつの間にか名言を再現する方に比率が偏った結果の付け髭だ」

ランバ・ラル大尉の名言を少しアレンジしたのだが、元ネタを知らない筈には通じないか

とはいえガンダムという単語から一夏はなんとなく察してくれたらしい、苦笑いを浮かべつつも言葉を返してくる

「分かってるよ。それと筈、康太はたまにこういったアニメとかの台詞を使うのは良くある事だから、普段と違う口調とかだったらネタに走ってると思った方が良いで」

「そうなのか。だが、もう少し時と場所を選ぶべきだと思うぞ」

「善処しよう。これは半ば本能みたいなもんだからな」

簡単に止められるようならガノタなんてやってないわけで、これは既にオレの中では遺伝子レベルまで組み込まれていると思うんだ

「次は康太との試合だな。今まで模擬戦では負け続けてきたけど、今度こそは、俺が、勝、つ……」

「お、おい、一夏!!大丈夫なのか!?!おい、おい!」

「……寝てる、のか?疲労がそれだけ溜まっていたのが、さつきので糸が切れたのか?。何はともあれ、医務室に連れていくか」

その前に織斑教諭に報告しないと、確かIS初心者織斑一秋に説明とかの為に向こうのピットに居るんだったな

えっと、確かこのコンソールを使つて、ああこれだこれ

『む、紫藤か。何かあったのか?』

「ええ、さっきの試合の疲労からか一夏が眠りこけまして。今、箒が介抱しています」

『何?ふむ、次はお前と織斑弟の試合だったが、目覚めそうか?』

「まだ分かりません。それで、どうしますか?」

『先にオルコットと織斑兄の試合から始めるとしよう。本来なら不戦敗だが、そのような結果を他の生徒も納得するとは思えないからな。それでも目覚めなければバケツで水でも掛けてやれ。それで駄目なら不戦敗とする』

「分かりました。オレからは以上です」

通信終了、相変わらず実の弟でも容赦のない人であった

箒も今の通信は聞いていたようだし、取り敢えずは一夏をベンチに寝かせておいてやるか

「全く、余計な心配をさせおつて」

「膝枕でもしてやればどうだ?その方が疲労も抜けるかもしれないぞ」

「な、ななな、膝枕だど!?!そ、そのような不埒な真似が出来るか!?!だ、大体、私と一夏はそのような関係ではない!」

「あんまり問題ないと思うんだけどなあ」

それとそのような関係でなくても、箒の方は一夏に惚れてるといのが分かりやすいんだよなあ

とはいえ枕も無しだと一夏も辛いだろうし、適当なタオルでも丸めて頭の下に置いてやるか

そして箒も名残惜しそうな表情をするなら、始めから膝枕してやれば良いのに

この二人の仲は前途多難だな、鈍感な一夏と奥手な箒とで、進むのか？

篠ノ之博士からは特にオーダーとかないから、俺は見守るだけに徹させて貰うけどさ

さて、オルコットと織斑一秋の試合も始まったし、オレはバケツの準備しつつモニターで観戦するか

なお結果から言うとも一夏がこの日に目覚める事は無かった、ジェガンで両足掴んで逆さ吊りにして水入れたバケツに頭突っ込んだけど駄目だった、オレとの試合で勝つとあれだけ言っておきながらコレである、訓練じゃ機体の損傷に気を遣って本当の意味で本気にならないからデストロイモードは使わないだろうし、一夏との全力勝負はいつになるだろうか

この日の模擬戦での結果は一夏は一勝二敗で終わった

その後、オルコットが一切の油断をせずに最初から本気で試合をした結果、織斑一秋は距離を詰める事が出来ず、中距離以遠から一方的な射撃により試合を終えた

そしてオレと織斑一秋の最終戦が始まろうとしていた



アリーナに到着した康太と一秋、互いにあまり言葉を交わした事のない二人はこの場で試合開始前に会話をしていた

「まずは一夏を鍛えてくれた事、礼を言う。まさかあんなに強くなっていたなんて、自分には思いもよらなかったよ」

「その点は気にするな、同じ会社の同僚だ」

「そうだね。でも一つ訊きたい事がある。君の所属するラビットフット社、そのプロフェッサーっていう人についてね」

「他の企業からの引き抜き対策としてその素性は一切明かせない。当然ながら素顔は愚か、名前さえもな」

(というかどちらかでも晒してしまえば世界中から余計な手が来る事は想像に難くない。だがこの男、プロフェッサーが篠ノ之博士であると見抜いたか?)

「だろうね。大体予想はついているけど、その反応からすると当たりかな。大丈夫だよ、特にこつちから何かする気はないから」

「そう言われて素直に『はいそうですか』とはならないんだよなあ」
(怪しきしかない言葉だからな、もし匿名で何処かに洩らされでもすれば篠ノ之博士に迷惑が掛かる事になる。よし、速攻でコイツの意識を刈り取ってその間に篠ノ之博士と相談しよう、あの人ならその辺りの事も上手くやれるだろう)

なお一秋にはそのように脅そうとか交渉材料とかの考えはなく単なる確認だけなのだが、その意図を理解していない康太に盛大な誤解を与える結果となった

そしてブザーと共に試合が開始、元より武装が雪片式型しかない一秋は瞬間^{イグニッション・ブースト}加速で距離を詰めようと試みるも康太はジェガンの左腰にあるハンド・グレネードを展開、広い範囲に拡散するように放り投げる

炸薬が詰まっている攻撃用と判断した一秋はそれを避けようと急減速したのだが、炸裂したグレネードの中身はスモークであった

「爆弾じゃない!? ハイパーセンサーが!?!」

そのスモークはISのハイパーセンサーを阻害する物質の入った篠ノ之博士特性のスモーク・グレネードであった

そして一秋はセンサーの封じられた中でスモークの向こうに見える影に対して攻撃する

だがそれは確かにジェガンの姿をしているものの零落白夜を発動させた雪片式型が触れると破裂、追加のスモークを周囲に拡げていく
それこそは康太がスモークで相手の視界とセンサーを封じた後に放ったダミーバルーンである

ジェガンの指の辺りに格納されているそれは使用するとガスの膨張により一気に展開されてジェガンとそっくりの見た目になる

とはいえ間接等が動いたりする訳でもなく直立した姿をしている

のだが、こうしてスモークの中に紛れる形で展開されると本物と見分ける事は難しくなんとISコアの偽装情報まで発信しているのである

更にダミーバルーンを割れば追加でスモークが拡がるという悪循環を生んでいた

ダミーバルーンは全部で八個展開されていたのだが既に三個が斬られスモークは拡がる

そこでスモークからの脱出を最優先に考えた一秋は頭上に向けて一気に加速、それによりスモークの中から抜け出す事に成功するが、地上を見下ろした時には此方を向く巨大な砲が目についた

頭部をエコーズ仕様と同じ開閉式の狙撃用バイザーユニットに換装しメガ・バズーカ・ランチャーで狙いを定めていた康太、一秋がスモークから出てくるのをチャージを完了して待っていたのだが、驚愕に表情を歪ませているのを見て即座に引き金を引く

「なんじゃそりゃあああああああッ!？」

相変わらずミノフスキー粒子は使えないもののその巨大な砲から放たれた既存のISのどのような武装よりも強力なレーザーが白式を包み込む

当然、そのような攻撃に白式が耐えきれぬ訳もなく全身の装甲の大部分を破損、ダメージレベルDという損傷を受け絶対防御も発動、試合が終了した

零落白夜を起動出来ればレーザーを無力化出来たかもしれないのだがそこまで頭が回らなかつた一秋はそのまま意識を失い一夏と共に医務室送りとなるのであった

9話 織斑一秋という男

I S 学園一年一組クラス代表決定戦が終了した翌日、朝の S H R にて先日の試合結果などを参照してクラス代表が決定した

「はい、という訳で一年一組の代表は織斑一夏君に決定しましたあ。あ、一繋がりじゃ覚えやすいですね」

「えっ?」

わああ、とクラスメイト達から拍手と歓声で応援される一夏、だが当の本人は困惑したまま周囲を見回している

「ちよ、ちよつと待ってくれ! 康太、あの試合結果だとお前が三戦三勝だろう! 何で俺がクラス代表なんだよ、おかしいだろう!」

「そりゃ、当然辞退したからに決まってるだろうが」

「いやいや、辞退出来ないって言ってたじゃないか! 何で辞退出来るんだよ!」

成る程、その辺りの説明からか

「確かに候補に選ばれたら拒否権はないが、誰も模擬戦で強かった奴がクラス代表だなんて言っていないぞ」

「えっ?.....あつ!」

「という訳で、勝者としてお前に票を入れさせて貰った。それこそ三勝したから三票は貰えたぞ」

それ全部を一夏に投票してやった、勝利した数だけ発言力があるのだ、試合前には分からなかった事も試合を通して分かり合える事もある、故にそこからは模擬戦参加者全員で投票制となったのである

「それなら、俺が康太に投票すれば——」

「既にお前に四票入ってるから無理だぞ、諦めろ」

「四票って.....それじゃあまさか」

「ええ、私も一票投じさせて頂きましたわ」

だがセシリアがオレと一夏に一票ずつ入れたので一夏に四票入った事になり、全部で六票ある投票権の過半数以上が一夏に入った事により一夏の投票を待たずして全てが決まったのだ

「それと一つ、織斑一夏さんと一秋さんに謝罪をさせて頂きます。康

太さんには昨日謝罪したのですが、お二人は医務室でしたので。男性だから等と悔った事、実際に試合を行い自らの浅慮さを後悔しましたの。康太さんは私を降し、お二人は互いに信念を持ちぶつかった、その姿勢、心の有り様に敬意を表します。今後は私もまた共に学びお互いに切磋琢磨したく思います」

「あ、ああ、別にアレは康太が暴走したような物だし、俺は気にしてないぜ」

「自分もな。というか、自分は全戦全敗、一方的に負けたしな……」

なお昨日、試合後にセシリアはピットまで来てオレと一対一で謝罪した

とはいえオレもセシリアの愛機を欠陥品と呼んだので同じように謝罪をしたのだ

その後は互いに全力を出し切った試合が出来た事を称賛し、似たような兵装を扱う者同士という事で改めてセシリアからライバル宣言をされた

オレもセシリアの実力は身を以て体感したし、何よりもあの試合は途中から相手を倒すよりも楽しさが勝っていた、だからライバルという言葉も受け入れた

とはいえ普段は共に技術を磨く為に一緒に訓練しよう、という関係なので良き友人である、付け加えると互いに認めあつた仲なので名前呼びになった

以上が今朝の顛末である、そして今現在、模擬戦にて実際にISを動かしてみせたので授業の一環として他のクラスメイト達の前でISを動かしてみせるといふ事でオレと一夏とセシリアの三人はアリーナに来ていた

なお織斑一秋に関しては白式が大破しているので見学に回っている、壊したオレが言うのもなんだがな

それと模擬戦の後、部屋に戻ってからハロを使ってISネットワーク経由で篠ノ之博士に連絡を取ったのだが、織斑一秋に対しては現状放置、少なくともラビットフット社に篠ノ之博士が居るといふ情報を使って何かしてくるといふ事はないそうだ、そのくらいの付き合いは

あると篠ノ之博士本人が言っていた

なのでオレからは特にアクションを起こす気はない、今後も普通に学生として勉学に励むつもりだ

「ではこれより実際のI Sの動きを見て貰う。先日、アリーナで実際に見ていたとは思いますが、今回はより近くで速度を落とした状態での動きとなる。織斑弟、オルコット、紫藤、準備は良いか?」

「大丈夫です」

「問題ありませんわ」

「準備万端、いつでも行けます」

それぞれがI Sを展開する、のだがセシリアの銃口が一夏の方を向いていた、変にポーズをつけるから……

「オルコット、そのまま何処に撃つ気だ。私は言ったと思うのだがな。I Sは扱いを間違えれば簡単に人の命を奪えてしまう。その扱いには細心の注意を払えと」

「うっ、申し訳ございませんわ……」

「次からは気をつけろ。よし、各自高さ二十メートルまで上昇、その後降下、完全制止をやってみせろ。目標は地上から十センチだ」

織斑教諭の指示を受けオレ達は上昇する

そして規定高度に達すると反転、地上へ向けて降下する

バックパックのメインブースターを利用した加速はかなりの物だ、たかが二十メートルの距離は一瞬で過ぎる

故にハイパーセンサーで強化された知覚を用いて制動をかけるタイミングをしっかりと計る、今だ!

足を蹴り上げてA M B A C機動、百八十度反転してメインブースターで急制動、ある程度まで速度を下げたところで再びA M B A C機動を行い体勢を整える

あとはP I Cでゆっくりと微調整すれば完了だ

「ふむ、紫藤は二センチオーバーだな。派手な機動を行わなければ行けたか? 何にせよ、もっと励めよ」

「ぐっ、了解……」

とはいえオレにはあの機動がやり易いのだから同じ方法を練習す

るのだが

それでもAMBAC機動だけでなく通常のISの機動も訓練しないとな、瞬時加速という芸当、軌道は単調だがあの速度は魅力的だより上位の技もあるというし、訓練して使えるに越した事はない「オルコットは高さも問題ない。だが少し慎重過ぎるな。より思い切りを持てれば更に切れのある機動が出来るだろう」

「精進しますわ」

「そして織斑弟、誰が着地しろと言った。全体的に精度も甘い、更なる鍛練を行うんだな」

「はい……」

他の二人もそれぞれの結果が告げられる

セシリアは兎も角として、一夏はまだ細かな動きに無駄が多い

その調整も不得手と来ているからな、今日からの訓練はオレも基礎的な技術を磨くとしよう、今までは一夏と模擬戦続きだったから尚更な

「ああ、それと紫藤。お前の特殊旋回であるAMBAC機動だがな、正式にIS委員会から新技として認定された。だがこれに倣る事なく、今後も鍛練を励めよ。気を抜いて墮落するパイロットも多いからな」
「アレは模倣だって言ったと思うんですけど……」

「宇宙飛行士の模倣とはいえそれをISの操縦技術として組み込んだのはお前だ。故にIS委員会はお前が編み出した技術として認定した。恐らくは来年から教本にも掲載されるだろうな」

「マジか……」

ガンダムの操縦技術を真似ただけの動きで、此処まで変わるとは
とはいえまだ昇華しきってはいない技術、なら更に研鑽してより鋭い機動にしてみせよう

だがその事を知らない他のクラスメイト達は首を傾げており、その中の一人、相川さんが手を挙げた

「はい、織斑先生！アンバック機動って何ですか!？」

「先日の模擬戦にて紫藤がオルコットとの試合で見せた旋回技術だ。知っての通り、ISはその移動にもエネルギーを使う。当然ながら旋

回するだけでもな。だが紫藤のそれは手足を動かす事で旋回、エネルギーの消費を殆んどゼロにした。短期決戦で見れば些細な物だが長期戦に於いては長引けば長引く程にその差は大きくなる例えば短期決戦を仕掛けたが凌げば相手は残りのエネルギー残量を気に掛けて試合を続けなければならぬ。対して此方は温存したエネルギーを使い高機動なマニューバを仕掛けるという戦法が使える。防御が得意なパイロット等にとってその戦法を得意とする者が居るが、そういったパイロットからは重宝されるだろうよ。例えそれが僅かな差でも一線級のパイロットにとっては死活問題だからな」

そこまで織斑教諭が説明すると皆からは感嘆の声が上がる

というかこの流れ、実演しろとか言われそう

「まあ実際に見た方が早い。紫藤、簡単に幾つかやってみせろ」

「了解……」

デスヨネー、まあやるけどさ

とはいえ試合でやった時と、改めてクラスメイト達からの視線を受けているのを意識しながらだと緊張の度合いが違う

取り敢えずは適当な物を、基本的な宙返りや横旋回を行うとするか
まず右足を蹴り上げて縦に反転、足を戻して制止、そこから左手を振って旋回、戻して制止、といった具合に繰り返す

基本的にISとは地上で使う物、そういった固定観念があるからISを動かす際に上下反転した状態なんていうのは殆んどない

だがオレは反転しても飛行したりするので、割りと相手の意表を突けたりするのだ、どうやって反転している相手を斬るのか、訓練ではいつも一夏が悩んでいた

「よし、そこまでで良い。このように、ふとした拍子に新たな操縦技術を編み出す事がある。紫藤はこの動きを宇宙飛行士から得たと言っている。何事も発想だ。もしもその新技が認められれば開発者として教本等に自分の名前が載る事もある。新技開発のみに注力しろとは言わん。基本無くして発展も無いからな。だがISはまだその歴史も浅い。もしかしたらこの中でも他に新たな技を生み出す者が出るかもしれないな」

自分の名前が残るといふ事に沸き立つクラスメイト達だったが、授業を再開する、という織斑教諭の声で全員の意識が切り替わる

ガンダムの模倣、という事を織斑教諭は知っているのだがガンダムという存在が世界に存在しない以上はカバーストーリーというのが必要となる、それが宇宙飛行士から発想を得た、という設定だ

だが授業が終わってからオレはAMBAC機動の事でクラスメイトの皆からの質問責めに遭うことになった、確かにISで再現したのはオレだが、完全に自分で編み出した訳ではないだけに心が痛むのだった



織斑一秋は模擬戦によるダメージから目覚めた後からずっと紫藤康太という男について考えていた

世間的には世界で三人目の男性IS操縦者という事になっているが弟の一夏と共に現れたその存在について色々気になる点があった

実を言うと一秋には幼少の頃から強い既視感を感じる事があったのだ

自分の家族である織斑千冬や織斑一夏、生まれた時から一緒に居る筈の二人を、何故かそれより昔から知っていたような気がする

それは幼馴染である篠ノ之箒やその姉である篠ノ之束に対しても、その事を昔から不思議に思っていた

篠ノ之束がISを造り上げ世界に発表した時にもその存在を知っていたように感じた、その時はいつも宇宙への夢を語る篠ノ之束の姿からそう思っただけだろうと考えたのだが、その後の世界の動きに関しても知っていた、当たり前だと思ふ己の事を不思議に感じている

それからの事も、白騎士事件と呼ばれるISが兵器として扱われるようになった事も、姉である織斑千冬がISを用いた世界大会の日本代表となった事も、全てに既視感があった

しかし自分でも良く分かっているにも関わらず、はつきりと覚えているものがあつた

それは一人の少女の事である、長い銀髪に紅い瞳、左目は眼帯に覆

われているが何故か自分はその下に金の瞳がある事を知っている

小柄な体躯でありながら凜とした表情の彼女は、黒い機体に乗っている

今となつてはそれがISだろうと分かるのだが篠ノ之束が実際にISを発表するまで知らなかった筈のそれを知っていたという矛盾がある

一秋はその少女の事を知っている気がした、そしてこの世界に確かに存在するのだと半ば確信に近いものがあつた

知らず知らずの内に惹かれていく心、彼女に関して思い出す事はそう多くはないが、喜怒哀楽様々な表情を浮かべる彼女に逢いたいと、一秋はそう願う

織斑一秋にとつてそんな自らの記憶は、まるで未来の出来事を教えているかのような感覚だつた

テレビで夢で未来の事を視る人間が居ると知つた時は己もそうなのではないかと思つた、がどちらかと言えば視ているというよりは思い出したと感じるのだ

そんな事を思いながら、中学に上がつて直ぐの頃、姉が二度目の連覇を賭けたISの世界大会、モンド・グロツソへ参加する

時を同じくして一夏もまた剣道の大会への出場があり、どちらを応援に行くか悩んだ

一秋は剣道を一夏の方が適性があると見て辞めており、一夏が気負わぬようバイトを始めた、元より中学になればバイトが出来るので一夏も共に働こうとしたのだが剣道を続けさせていた、その方が一夏にとつて良いような気がしたからだ

己が見込んだ通りに大会への出場を決めた一夏の方を兄として誇りに思い、世界の舞台で競う姉に憧れた、その二人を天秤にかける事など、本来なら出来なかつた

だが自分の中の何かが叫ぶのだ、織斑千冬の応援にドイツまで行けと、行かなければならないのだと訴えかけてくる

結局はドイツに向かう事を一夏に伝えると、一夏は世界大会の方が重要だとあつけらかんと言つた

その声にも押されてドイツへと向かった一秋、だが応援している途中で、よりにもよって決勝戦を前にして一秋は何者かに誘拐された。己の中の声に従ってドイツへと応援に来たのに何という事だ、結局は姉の足を引っ張るだけなのかと一秋は自分で自分を責める。

にも関わらずこれで正解なのだと感じる自分が居た

その後、織斑千冬に救助された一秋だが自分の為に決勝戦を放棄し世界連覇という偉業を達成出来なかった姉に対して罪悪感を感じる事となる

何故自分は知っていた筈なのにドイツへ向かったのか、剣道を辞めて一夏の応援に回ったのも自分が剣道から逃げたかったからではないのか、そのように考えた

およそ一ヶ月に渡り家に引きこもり自責の念に駆られていた一秋だったが、その中で天啓を得た

自分が弱いからこのような結果になったのだ、ならば強くなれば良い

引きこもる自分を支えてくれた家族の為にバイトは復帰した、それと同時に今度は誰の足も引っ張らない為に護身の術を独学で学び始める

道場などには通っていない、それまで以上にバイトに打ち込んでいたのでそのような暇は無かった、剣道の素振りと柔道等の型の確認くらいである

正直に言えばあまり効果はないように思えたが、何もやらなければ罪悪感に押し潰されそうだから続けた

そして運命の日がやってきた、高校の受験会場にて一夏と共に迷い、偶然にも待機状態で置かれていたISを見付けた

篠ノ之束が生み出し、今となっては世界の軍事力を左右する絶対の力、女性にしか動かせないその力、一秋が求める強さを象徴するその存在に無意識の内で手を伸ばす

動かせる訳がない、頭ではそう理解している筈なのに一秋は遂にISに触れる

そこからは劇的だった、自分はISを身に纏い動かしている、一緒

に居た一夏は呆けた表情をし、異変を嗅ぎ付けた人がISを扱う自分を発見、そのまま検査やら取材やら周囲が慌ただしく変化していき、殆んど強制的にIS学園への入学が決まった

だがそれさえも既視感がある、最早不快とまで思えるようになってしまったその感覚、それはいつになったら消えるのかと思いい入学の日を迎えた

だがそこに一夏と、そして三人目だという紫藤康太が現れた

物覚えがついた頃から感じる既視感、そんな中で自分が全く知らないと言ってくる人間との出会い、それはとても新鮮なものだった

是非とも彼と話したい、その思いは休み時間の度に入れ替わりで話し掛けてくる他のクラスメイト達によって果たされず、いつの間にか模擬戦を行う事になっていった

その際に言葉を誤り誤解を与える事になってしまい、模擬戦にて酷い目にあつたが、彼の事は嫌いではない

彼ならば自分の中にある既視感の正体を突き止められるのではないかと、全く根拠のない考えだが一秋には希望が見えた

そして康太と関わりのあるクロエという銀髪の少女、自分の記憶の中にある少女と何処か似通った印象を受ける彼女の姿を見て、自分が恋い焦がれるあの少女への手掛かりが見付かったと内心で歓喜した

あのクロエという少女は、眼帯の少女の親族か何かだろうという予測が立てられる、なら一目で良いから逢いたい、そう願った

眼帯の少女と自分の中の既視感、全ての鍵は紫藤康太にある、だからこそ一秋は彼と接触しようと試みる

◆ 「えっと、紫藤。少し話したい事があるんだけど、良いかな？」

オレがそう話を聞いたのはアリーナの更衣室にてISスーツ（というか軽装ノーマルスーツ）から制服に着替えていた時の事だ

授業を終えて今から昼休み、食堂にでも行こうかと考えていた時に着替える必要のない織斑一秋が来てオレにそう訊ねてきた

昨日の模擬戦での会話内容に関しては篠ノ之博士から心配はいらないと言われていたが、話の内容によっては要警戒だな

「何だ？今から昼飯だぞ。食堂で食べながら話すか？」

「いや、あまり人には聞かれたくない話なんだ。その、突然こんな話をされて、頭がおかしい奴だと思うかもしれないけど、真剣に聞いてくれるか？」

織斑一秋の態度はなかなか煮え切らないものであったが、取り敢えずは篠ノ之博士関連という訳ではなさそうだな

なので簡単に訊いてみることにした

「実はな、自分には昔から強い既視感を感じる事があるんだ。例えば東さん、篠ノ之博士がISを創った時にも、それを知っていた気がするし、今のこのISのある世界の事も、IS学園で生活する事にも、全てに既視感があるんだ。それは自分の白式も例外じゃない、初めて見た時からコイツは零落白夜を使えるって確信があつたんだ」

「それで？」

「自分はこの既視感について知りたい。以前、千冬姉の第二回モンド・グロツソの応援に行った時、自分は行かなければ絶対に後悔する事が起きるっていう予感に駆られた事がある。その時はそれが正しいって思ってたんだけど、その時に自分は誘拐された。それから自分は自分の既視感が何か気味の悪いものに思えて仕方がないんだ」

「……何でそれをオレに頼む？そういうのは医者の仕事だ」

「お前だけなんだよ、自分が既視感を全く感じなかった人間は！それに、あのクロエっていう女の子の事だ。実はあの子に似た雰囲気の子をはつきりと顔まで思い出すんだ。長い銀髪で、紅い瞳で、左目は眼帯で隠していて、黒いISに乗っている。でも誰か分からない。何で自分がこんな物を視るのか、本当に分からないんだ。だから頼む、お前だけが頼りなんだ！何かを知っているなら教えてくれ」

「……残念ながら何も知らない。クロエには他に家族は居なかった筈だ。でも調べてはみよう。その黒いIS、他に特徴は？」

「確か、右肩に巨大な砲があつたと思う。悪いけど、他は分からないんだ。こんな中途半端な情報しかないけど、頼む。自分は、俺はこの既視感の正体を知りたいんだ！」

「分かった分かった。確約は出来ないけどな。やれるだけやってみる

よ」

「そうか！頼んだ、何か必要な事があれば言ってくれ、可能な限りで手伝うからな！」

話は終わり、一秋は機嫌良さそうに更衣室から出ていった

「さてと、この話は完全に篠ノ之博士のエッサー案件だな」

オレに調査なんて出来る訳ないだろう、だから出来る人に頼む、それだけだ

それになる事もあるしな、もしも一秋の言っている事が本当に未来の事ならば、それは予知能力だ

ニュータイプの力の一端とも言える予知能力、それが本物かどうか、確かめる必要があるからな

という訳でその日の夜、オレは自室でハロを介した通信を篠ノ之博士と行っていた

『こんな時間にコーくんから連絡なんて珍しいね。何かあったの？』

「二つ調べ物を頼まれましたね。篠ノ之博士、今現在開発中、または表にまだ発表されていないISの事って分かりますか？」

『そんな物、天才の束さんに掛かればハッキングでちよちよいのちよいだよ！でも、どうしたの？コーくんがそんな事に興味を示すなんて思えないんだよね』

「ええ、実は織斑一秋が興味深い事を相談してきましたね。実は——」

別に黙っている、他に話さないなんて約束はしていないからな、篠ノ之博士に調べて貰う為にも情報を隠しては何も教えて貰えないだろうし、全てを話した

『へえ、そんな事がね。つまらない人間かと思ってたけど、そんな悩みを抱えていたなんてね』

「本人にとっては気味の悪い現象なんでしょうが、ニュータイプ能力の片鱗かもしれませんからね。要観察、といったところでしょいか」
『そうだねえ。じゃあ調べたいISのキーワードを教えてください？簡単な物なら直ぐに分かるよ』

「はい、黒いISで右肩に巨大な砲があり、パイロットは銀髪に眼帯の人物だそうです」

その時、ほんの一瞬だけ篠ノ之博士の表情が固まったように見えた。本当か作り物かの違いはあれど基本的には笑みを浮かべている篠ノ之博士にしては珍しい事だが触れずにスルーする。

触らぬ天災に祟りなし、篠ノ之博士がどういった人物かは短い付き合いながら分かっている。

『ふーん、それなら知ってるよ。はい、これ資料。普通はこーくんが知る事が出来ない物まで入ってるから、見終わったら破棄してね。ハロなら削除したデータも復元させないなんて可能だから心配いらないよ』

「それはそれで不安なんですけどね、うっかりミスでとか。それは兎も角、ありがとうございます」

『良いって良いって。でもそれを伝えるのは止めておいた方が良くもね。誤魔化しかたはこーくんに任せるよ。じゃあね』

「はい、お手数をお掛けしました」

通信終了、ハロから投影されていた篠ノ之博士の映像が消える。

そしてオレは送られてきた資料を確認する。

ドイツの第三世代であるシユヴァルツェア・レーゲン、それとそのパイロットであるラウラ・ボーデヴィツヒの写真、その姿は確かに織斑一秋の証言と一致する。

機体は現在はドイツにて試験中、詳細なスペックデータもあるが、これが普通ならば知り得ない情報だな。

機体名、パイロット名ともに軍属、機密保持の為に両方とも写真さえも公開されていない、とあるがそこは篠ノ之博士か、最初の写真もまた普通は知り得ない訳だ。

だがそれを織斑一秋は知っている、本人の証言からそれも少なくとも小学生の頃から、当然その当時には第三世代機なんて存在しない訳であり、確かに予知能力は本物と言える。

「さて、本物のニュータイプか、それとも何か他の要因があるのか。調査は必要だな」

取り敢えずこのデータは全て破棄だな、持っていて何らかの火種になっても困る

頼まれ事の件も適当に誤魔化すでしょう、下手に知っても面倒な事になるだけだからな

とはいえそれを抜きにしても中々に面白そうな人間だと思う、織斑一秋とは普通の友人としても付き合えそうだ

それからラウラ・ボーデヴィツヒの写真を見て確かにクロエと似た雰囲気を感じた、だが本人や篠ノ之博士が語らない事ならばオレから言うべきことは何もない

明日も学校だ、ISの試合を通して己の体力不足も感じてからは早朝のランニングと放課後のトレーニングも行っている

今も体は疲労でキツイ、娯楽もあまり無いし今日も早めに寝るとしようか

10話 中国からの転入生

クラス代表が一夏に決まってから三日、それはクラスメイトである相川さんからだった

「パーティー？」

「うん、折角織斑くんが代表が決まった訳だから、そのお祝いをしようと思って！」

「本当なら代表になるの紫藤くんでも良かったんだけどね、スイーツの無料券的には！」

「みんなでお菓子とか、軽い食べ物を持ち寄って集まるんだよ」

上から順に相川さん、谷本さん、のほほんさんの台詞だが、この三人はよく一緒に居るので覚えた

それにしてもパーティーか、クラスの親睦会的な意味でも良いかもしれないな

「成る程。で、オレは何を準備すれば良いんだ？」

「特には必要ないかな。あ、でもお菓子とかいくらあっても足りないかもだから、何か持ち込んでくれると嬉しいかな」

「分かった。何か売店で買っておくよ」

「うん、時間は夜の七時に寮のレクリエーションルームだからね！」

という事である、放課後までにはお菓子を買っておこう、今日の訓練もパーティーの時間を考えると短めで、六時には切り上げるとするか

さてと、一夏にもこの事は伝わっているだろうが、念のために話しておくか



その日の授業が終わり、放課後となり生徒達もそろそろ部活を終えようかという時間になった頃、IS学園の門前では一人の少女が腕を組み立っていた

「此処がIS学園ね」

そう言う少女の肩には小柄な体躯に反して大きなボストンバッグが掛けられていた、通常は外に出掛けるにせよそれだけの大荷物を持

つ事は少ない、それもその筈、彼女は今日初めて此処に来たのだ
「それにしても大きな学園よね。まあISの事を考えればこれで普通
なんでしようけど。えっと、まずは本校舎一階の総合事務室……つ
て、何処よ！地図すらないじゃない！」

学園に着いてからの事を記したというメモを渡されていた少女、だ
がそこには淡々と文字で次の指示が書かれているだけ、手書きの簡易
な地図さえも書いてはいなかった

セキュリティの関係でIS学園の地図は外にはあまり出回らない
ようになっている、その為にメモを用意した人間も手続きを行う為の
場所を名前で聞いてはいたのだが詳細な場所までは把握していない
為に地図を書けなかったのだ

とはいえそのような事を少女が知る筈もなく、苛立ち自分一人で何
とかすると門を通ってどんどん先に進んでいく

誰か居ればソイツに道を訊けば良いだろう、そんな考えでいた少女
が学園の寮の近くを通り掛かった時、その誰かを見付けた

「じゃあ、オレは急用があるから、お前達は先に行つてろよ」

「おう、また後でな、康太」

「うむ、私も向かうからな。また後で会おう」

殆んど女性しか居ない筈のIS学園で聞こえる年若い男の声、しか
も片方は聞き覚えのある声と気付き少女は反射的に物陰に隠れると
話し声が聞こえる方を覗き見ると二人の男子と一人の女子が居るの
が見えた

会話を終えたのか片方の男子は此方に向かってきていたが、声に聞
き覚えのある方の男子の姿を見て少女は胸が高鳴るのを感じた

「居た、やっぱり一夏だ！」

声を潜めつつ、だが歓喜の思いを一杯に詰めた言葉を呟いた少女
は、しかしまだその時ではないと今にでも出ていきたい気持ちを必死
に押し殺す

というのも彼女が気になる男子、一夏の隣には何度か顔を合わせた
事のある恋敵の姿を見たからだ

此処で偶然に出会ったとしても印象深い再会にはならない、もつと

より劇的ではつきりと今の自分の姿を刻み付けるような再会でなければ、と考える少女、だがその様子を、まるで不審者を見るような目で見ていた少年の姿には、声を掛けられるまで気付かなかったのである

◆ 「何だアレ？」

放課後、訓練も終えてパーティー会場であるレクリエーションルームに向かおうかという時になって寮で織斑教諭に呼び止められ、荷物が届いているから受け取って来いと言われた

普通に寮まで届けて貰えば良かったのだが、中身がジエガン用の実弾等の補給品なので事務室で受け取り手続きをするようにとの事だ

なのでオレの事を呼びに来た一夏と箒には悪いが先に行つて貰い、オレは荷物を受け取りに寮の外に出たのだが、その寮の門の辺りで百面相しながら奇妙な動きをする少女の姿を見付けたのだ

普通なら不審者として警備に突き出すのだがIS学園の制服を着ているし、生徒の誰かかと思いい取り敢えずは声を掛ける事にした

「あー、大丈夫か？」

主に頭が

「うひゃいっ!？」

と、声を掛けるとすつとんきような声を上げて驚く少女、それから色々しどろもどろしながらバタバタする少女だが、一度深呼吸すると少しは落ち着いたので勝ちな眼でしつかりとオレを見据えて答えた

「だ、大丈夫よ！」

「まあ、それなら良いんだが……」

ビシツという音が聞こえそうな程に姿勢を正した少女、大慌てしていたのを見なかつた事にすれば格好が付くんだがなあ

「それより！ねえアンタ、本校舎一階の総合事務室って何処か分かる？」

「ああ、それなら向こうの建物に入って廊下を右だ。オレも弾薬受け取りの手続きがあるし、一緒に行こうか？」

「あ、そうなの？助かるわ！今日転入してきたんだけど、行き先だけのメモ渡されて地図もなくて困ってたのよねえ」

成る程、彼女は転入生だったのか、道理で見掛けない顔だと思った。そのまま二人で本校舎まで歩いていくのだが、彼女は何というか、全く止まらない性格で会話を続けてくる

「そう言えばまだ名乗ってなかったわね。私は鳳鈴音、一応は中国の代表候補生よ！」

「へえ、意外だな。代表候補生なら既に全員入学してきていたと思っ
ていたが」

「本国で教官に学ぶ娘も多いのよ。私もそうするつもりだったんだけど、今年の入学生では面白い人が多いじゃない。そうでしょう、世界で三人目の男子IS操縦者の紫藤康太？」

まあ知ってるだろうとは思ってたさ、世界中でも稀少な男のIS操縦者だからな

しかもオレの場合は見た目で、織斑兄弟じゃない方、という識別が可能である為に、三人の中で一番に覚えられる事が多かった
「よくご存知で」

「まあ資料には目を通したからね。名前と顔だけは覚えたわ」

「そうか。と、着いたぞ」

「えっ、もう？んー、まだ色々と言いたい事があったけど、またにするわ。それじゃあね、紫藤」

「康太で良いさ」

「そう、なら私の事も鈴で良いわ。じゃ、私は手続きがあるから」

「おう、またな」

共に事務室に入るが向こうは転入生、対してオレは実弾とはいえ受け取り手続きだけ、ISを扱う学園だけに普通なら扱わない代物ではあるが此処では毎日消費される物だ、そこまで複雑化はしていない

結果、オレは手早く処理を済ませた後、事務室から出て寮に戻りパーティー会場へと向かうのだった



「という訳で、織斑一夏くんクラス代表就任おめでどうパーティーを

始めます！」

『イエーイツ!!』

女三人寄れば姦しい、とは言うが此処には三十人程は居る訳で、必然的に賑やかになる室内

あの後、自室でパーティー用に用意していたお菓子を持ってレクリエーションルームを訪れたオレが最後だったようで、まだ予定の時間ではなかったがパーティーを始める事になった

それぞれの手に紙コップに入れた飲み物を手に乾杯の音頭を取るのには相川さんである、イベント大好きな性格なのかこういった事をよく提案しているらしい

オレも一夏と、それと既視感の件で打ち解ける事になった一秋と共にパーティーに参加し、たまに他のクラスメイトと会話をしながらパーティーを楽しんでいると見慣れない、クラスメイトではない人が部屋に来た

「どうも、新聞部の副部長、二年生の黛薫子です。噂の男子生徒三人組が参加してるって聞いてやって来ました！取材、良いですか？」

そういえば新聞部もこの学園にはあるんだったな、とはいえオレ達は基本的にはアリーナで訓練してたから向こうも取材の申し込みが出来なかったようだけど

「ではでは、早速インタビューしていきます！まずはクラス代表になった織斑一夏くん！今の心境はどうですか？」

そして有無も言わずにインタビューをしてきたよ、まあ別に校内新聞くらいなら構わないけどさ

「えっと、精一杯頑張ります」

「うくん、もうちよつと何か欲しいかなあ」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的!? まあいつか、適当に捏造しとくね。じゃあ次は、お兄さんの織斑一秋くんね。弟さんがクラス代表になってどんな心境ですか？」

捏造って、それは記者として良いのだろうか、等と疑問に思う暇もなく次に質問が飛ぶ

なんというか、黛先輩もまた逃げ道を与えずに質問する姿勢、確かに記者としては向いてそうだよな

「ええと、一夏の剣術を始め自分より実力があるので、頑張つて欲しいと思います」

「んー、そこは嫉妬に燃えるコメントとか欲しかったなあ。まあいつか、次、紫藤康太くんね。一夏くんとは同じ会社の所属だけど、何か思うところは？」

ああ、オレの番か

そうだなあ、今の一夏は操縦にも慣れてきたし、模擬戦の頃よりは更にレベルも上がってる

その中で言うとするならば、やっぱりアレかな

「もつと射撃も上手くなれ、ですかね。ガトリングとバズーカは使ってますけど、他の強力な射撃兵装持つてて使えないとか宝の持ち腐れですよ」

「うぐっ……」

ビーム・マグナムを使えるようになれば射撃戦でも有効打を与えられるんだけどなあ、一夏の場合ガトリングとかも撃ちながら狙いを合わせるからまず初弾が当たらない

牽制にはなるが、どんなに強力な攻撃も、当たらなければどうということはないぞ、一夏よ、そこで胸を押さえて崩れ落ちてる場合か

「良いねえ、そういうコメント待ってたの！うんうん、じゃあ次は——」

「このイギリスの代表候補生である私がコメントを——」

「あ、そういうのいいから」

「何ですかの!?!」

そんな中で意気揚々とインタビュウに答えようとしたセシリアに黛先輩がバツサリ斬り捨てたが、それに周囲がどつと湧く

その後もコントのようなやり取りが続いたり、オレが持ち込んでいたきのこの山が原因できのこたけのこ戦争が起きたり、のほほんさんがそれを天然のおっとり気質で終結させたりと、色々あった

そんな楽しい時間ではあったが、残念ながら物事には終わりが訪れ

るものだ

「はい、それじゃあ最後に男子三人組で写真撮ろうか。代表になった織斑一夏くんを真ん中に、左右に挟むように立ってね」

最後に記事に載せる為の写真をと、という事になって黛先輩の指示通りにオレが一夏の右、反対に一秋が並ぶ

「それじゃあいくよ、はい、揚げチーズ」

そこは普通にチーズで良いのでは、と思ったがシャッターが切られる

と、一体いつの間にか他のクラスメイトの皆も写真に入っていた

どうやって示し合わせたのか知らないが、誰も被る事なくカメラに顔が収まるようにだ

「あ、ちよつと!?!」

「いやあ、やっぱり思い出作りとしては皆で撮りたいと思って」

「後で焼き増しして下さいね、先輩」

「あー、もう、分かったわよ。でも記事には必要なんだから、次は邪魔しないでね」

はい、という返事と共に二度目のシャッターが切られ、その写真は後日見掛けた校内新聞に載っていた

そして最初の皆で写っていた写真は約束通りに参加者全員に一枚ずつ配布される事となる

オレはその写真をこの世界に来てから作り始めたアルバムに綴じておいた

その後、夜遅くまでパーティーは続き、寮長の織斑教諭が来た事でお開きとなった

それなりに疲れもしたが悪くはない、そう思いながらオレは布団に入った



翌日、教室に入るとクラスメイトの女子、というか相川さんが話し掛けてきた、よく話をするからすっかり女子との会話も慣れたな

「ねえねえ、紫藤くん。転入生の話って聞いた?」

転入生、それも今朝からとなれば思い当たる人間は一人しかいない、鈴こと鳳鈴音だろう

「昨日、弾薬受け取りに行った途中で会ったよ。事務室の場所を訊かれたから、一緒に行ったけど」

「えっ、そうなの!? ねえ、それってどんな人だった!?!」

予想以上の食い付きだったが、改めて鈴について思い出しながら答える

「そうだな、鈴の特徴と言えば

「まず小柄だったな。それに勝ち気な性格。本人いわく中国の代表候補生って話だ」

「中国なら私達の知ってる情報と同じだし、確定だね! で、他には?」
「そうだなあ、髪型がツインテールにしたのと、あとやたら元気というか、勢いがあるというか、兎に角グイグイ来るタイプだったな。誰にでも物怖じしない、というべきか。短い付き合いだったし、この位かな」

後は知らない、そういえば代表候補生って話だったがセシリアのように専用機を持つてるのかも聞いてないな

まあISは数に限りがあるから、余程の成績でないと学生の身に専用機なんて割り振られる事はないのだが

「中国、ツインテール、勝ち気な性格……何だろうな、俺の知り合いも似たような感じなんだよなあ」

と、そこに一夏が来た

「どうやらさっきのオレの話聞いていたらしい

「案外、その知り合いだったたりしてな」

「ハハハ、まさかそんな偶然がそうそうある訳がないじゃないか」

まあそりゃそうだ、ISの操縦者は狭き門、人口の多い中国なら尚更であり、それこそどれだけの倍率かと考えれば可能性なんてかなり低いからな

ああ、そういえば鈴の名前も聞いてたんだった、それも付け加えないとな

そう思った時、教室の扉が勢いよく開かれ腕組みして仁王立ちする

小柄な人影が見えた

「そうね、偶然なんかじゃないわ。私が此処に来たのは必然よ！」

自信満々な笑みを浮かべて立つ人物、昨日会った鳳鈴音がそこに居た

「鈴？お前、鈴か!？」

おや、一夏の知ってる相手だったか、というか本当にその知り合いだったんだな

「ええ、そうよ。中国の代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来てやったわ！」

ビシツ、という音が聞こえそうなポージングで一夏に指を指す鈴、昨日もやってたなそれ

だが一夏の反応は違っていた

「何格好つけてるんだ？似合っていないぞ、それ」

「何てこと言うのよ、アンタは!？威厳出してたのに台無しじゃないの！」

そういう雰囲気を出そうとしていたのだろうか背が低いから威圧感あまりなかったな、多少は出ていたのも一夏へ反射的に返した言葉で更に台無しだ

そういつた威圧感とか、威厳っていうのは、それこそ織斑教諭レベルでないといけないものだ、それこそ今教室の入り口に立っているような——あつ

「おーい、鈴、後ろ後ろ」

「は、何よ？後ろに何か……あつ」

オレの声で後ろを振り向く鈴だが、その正体を確認すると冷や汗を流して固まった

本物の威圧感を放つ存在、織斑教諭が肩に出席簿を乗せて立っていたからだ

「ふん、気付かなかったのなら一撃加えていたが、紫藤のお陰で命拾いしたな」

「ち、千冬さん……!？」

「織斑先生だ。もうSHRの時間だ。早く自分の教室に戻れ。それと

いつまでも入り口に立つな。通行の邪魔だ」

あの鋭い眼光で睨まれた鈴は素早く教室から出ていった、一夏の知り合いならば織斑教諭とも知り合いだろうが今のやり取りで何となく力関係が分かった

その後は何もなかったかのように授業が行われていく、何か変わった点があったかといえば箒が上の空になって織斑教諭から叩かれたくらいだな

そして昼休み、昼食を取ろうと食堂まで行った時の事だ

「待ってたわよ、一夏！」

食券販売機の前に仁王立ちする鈴の姿が、というか邪魔になるぞ、他の生徒も困ってるから

「あー、取り敢えずどいてくれるか？周りの迷惑にもなるぞ」

「わ、分かってるわよ」

おっと、先に一夏が注意したか

それにしても近くに置いてあるお盆には既にラーメンが載っていた、わざわざ一夏を待っていたんだろうな

あのままだと麺が伸びて冷めるだろうし、オレ達も早く買って付き合ってやるか、どうせ一緒に食べるつもりなんだろうし

という訳で一夏と一秋は日替り定食、箒はきつねうどん、セシリアはサンドイッチセット、オレは適当に選んだカツ丼を手にテーブルへと座った

そして食べながら会話をする

「さて、それで二人はどういう関係なんだ？」

「それは私も気になりますわね。普通の友人にしては少し距離が近いようにも感じますが」

まず口を開いたのはオレだ、セシリアも同意見のようだが今朝から二人のやり取りを見ていて知り合いというのは分かっていたが、それがどのような仲なのかは知らない

「ああ、そういえば話してなかったな。俺達と鈴は幼馴染なんだ」

「正確には、箒が小四で転校して小五の頭で入ってきたんだ。丁度、入

れ替わる形だな。そして中二の終わりに中国に帰った訳だが」

「成る程なあ。さしずめ、箒がファースト幼馴染、鈴がセカンド幼馴染といった感じか」

箒が転校したのは確かISが軍事的に利用されるようになった例の事件の影響だったと篠ノ之博士が言っていた気がする、まあそれはそれとして

「まさか鈴が来るとはな。それも、代表候補生とは……」

「そういうアンタは普通の一般生徒としてみたいね、箒。ま、私が優秀だったって事ね」

「クツ……」

「箒と鈴も知り合いなのか？」

互いに、というか鈴の方から挑発しているな

箒は悔しそうな顔をしている、というかあまりの力に箸が折れた

「箒と鈴は、鈴が俺の剣道の大会で応援に来てくれた時に会ったんだ。けど、顔を合わせるといつもああなってるさ」

「原因に心当たりはあるが、この調子だからな……」

「あー……」

互いに同じ相手に好意を寄せる恋のライバル、という事か

一秋の何とも言えない表情が今までの気苦労を表しているかのようだった、恐らくは本人達の問題とどちらにも肩入れしないよう気を遣ってたんだらうな

「それで鈴、いつ日本に帰って来てたんだよ。おじさんとおばさんは元気してるか？」

「あ、うん、元気よ……それより、アンタもだけど、一秋がISを動かしたのにはびっくりしたわ。おまけに康太まで三人も男でISを動かせる人間が居るなんて思わなかったわ」

うん？少し強引に話題を変えてきたような……けど一瞬だけ鈴が浮かべた表情を考えれば触れない方が良い話題という事か

「それは、済まない……」

「何で一秋が謝るのよ。別に責めてる訳じゃないけど、あれから気弱になるの、治ってないのね。前も言ったけど、一秋のせいじゃないわ

よ、アレは。そもその犯人が悪いんだから」

「そうだな、ありがとう、鈴」

「別に良いわよ、幼馴染なんだし」

「そうだけ、一秋兄。この間の試合でも強かったじゃないか。もっと自信を持とうぜ」

「一夏……そうだな、自分もISを扱えるんだ。こんなんじゃない、駄目だよな」

一秋が誘拐されてそれを気にしているのは知っていたが、そういうえば時期的には鈴もその事を知っているんだったな

勝手に振り回す人間かとも思ったが、ちゃんとフォローも出来る、良いやつだな、鈴

ならついでに、この中で一人だけ接点がなくて会話に混ざれない人間が居るのに気付いてやってくれ

「あの、鈴さんと仰いましたわね。貴方も代表候補生なのでしょう？なら、私と同格ですわね」

「うん？誰よアンタ？いつから居たの？」

「最初から居ましたわ!?それより、この私をご存知ありませんの!?!イギリスの代表候補生であり、今年の入学首席であるセシリア・オルコットを！」

「あー、何となく知ってるわ。康太に負けた代表候補生でしょ？」

「なっ!?!確かに康太さんには敗れましたが、今は対等なライバルですわ!これからは互いの力量を高め合い、そしていつかはリベンジを――」

「でも敗けは敗けでしょ？」

「キイイイイイイッ！」

悔しさから金切り声を上げるセシリアだが、すまん、ジェガンの宣伝の為に『第三世代機に迫る性能を持つ第二世代機』と銘打つてあの模擬戦の試合、一秋の分と含めて一部を会社のホームページで公開してるんだ

当然、見せ場となるトドメのシーンはちゃんと入れてる訳で、一撃で消し飛んだ一秋よりインパクトは劣るが、セシリアが敗れた時のも

入ってるんだった

「確かに康太も強いとは思うけど、ISの操縦時間はアンタの方が上よね？なら、負けはないわよ、負けは」

「そ、そこまで言うのでしたら貴方も康太さんと戦ってみれば良いのですわ！そうすれば康太さんの実力という物を理解出来るでしょう」
あれ？いつの間にかオレが巻き込まれてる？

嫌だなあ、鈴の性格からして勝っても敗けても面倒な事になりそう
だ

「んー、確かに気になるけど、今は止めとくわ」

「あら、逃げるんですの？」

「違うわよ！私、二組のクラス代表になったのよね。それで専用機もあるんだけど、どうせなら今度のクラス対抗戦、そのタイミングで御披露目したいじゃない？」

ザワリ、専用機持ちちという事実が分かった途端に周囲の空気が変わった

話によると鈴が国に帰ってから一年程度しか経っていない、にも関わらず専用機を与えられる程の実力を国から認められている

その技量はどれ程のものか、この場の全員が戦慄した

「という訳で一夏、アンタが一組のクラス代表だつて聞いたわよ。その時まで首洗つて待つてなさい」

それじゃあね、と言って丁度食べ終えた鈴は席を立つ

残されたオレ達はその様子を眺めながら軽く息を吐くのだった

「取り敢えず、オレの新装備を慣らしながら一夏の相手をするか。中国の新型、情報が何もないんだよなあ」

篠ノ之博士に頼めば分かるが、そうして事前準備ばかりをしても不測の事態への対処能力が下がりそうだし、スイーツの半年フリーパスを狙っているクラスメイトには悪いが、今回は自力でなんとかする方向で行こう

「そうだな。ていうか、また新装備が出来たのか？早くないか？」

「早さに関してはあのプロフェッサーだぞ？今回は近距離メインでの装備だったけど、なに、上手く扱ってみせるさ」

近距離は一夏の得意距離でもある、それへの対処にはオレも慣れる必要があるからな、これも良い機会だ

という訳でオレと一夏は打倒鈴に向けて放課後の訓練に臨む

クラス対抗戦までは残り二週間程度、みっちり訓練をして本番の日を迎える、予定だったのだがなあ……

「どうしてこうなった」

「うぐっ……ひぐっ……一夏が、一夏があ……！」

今日の訓練終えて寮に戻ってよし寝よう、という辺りで部屋を何度も何度もノックする音が聞こえてきたので出てみれば鈴が号泣して部屋の前に立っていた、正直怖い

それで部屋の前で泣いている女の子をそのままというのも居心地が悪いので部屋に上げたのだが、何だかまた面倒事の予感がするなあ……

11話 一夏VS鈴

取り敢えず鈴が落ち着くのを静かに待つ、ある程度泣き止んだところで部屋に新しく置いといた小型冷蔵庫の中からオレンジジュースの缶を渡しておく、喉が渴いただろうしな

「ぐすつ、ありがとう……」

「どういたしまして。それで、何があつたんだ？」

「うん、実は——」

それから鈴が話し始めたのだが、簡単に纏めると一夏と昔の約束の件で大喧嘩したとの事だ

一夏の部屋に行ったら箒と同室だと知り、その事で揉めた流れで約束の件に流れ着いたのだが、一夏と鈴で約束の内容に齟齬があり、それにキレた鈴が怒鳴り、売り喧嘩に買い喧嘩とばかりに一夏も意固地になり鈴が部屋を飛び出した、と

「ふむ、大体分かった。まあ女の子泣かした時点で一夏の非が大きい気がするな」

「でしょ、それなのに一夏ったら、女の子の心を弄んで！」

「けど、そんな約束を詳細は違えど覚えてはいた事にも驚きなんだよなあ、あの一夏だし」

「うっ、否定出来ないわね……」

短い付き合いではあるが一夏の女性関係に於ける評価は唐変木である、明らかに好意を寄せている相手が傍に居るというのに気付かない鈍感だ

だがそれとは別に聞いておかなければならない事もある、その件の約束とやらの内容だ

「それで、鈴はアイツといつ、どんな約束をしたんだ？」

「そ、それは……一夏には絶対内緒にするって誓える？」

「そうだな、何にと言われればオレは信心深くはないから神よりも、オレが命を懸ける愛機に誓って一夏に話さないと誓おうか」

「ええ、それで良いわ。中二の終わり、私が中国に帰る事になったあの日、空港に見送りに来てくれた一夏に言ったのよ。『私が料理を上手

くなつたら、毎日酢豚を作つてあげる』つて」

「あー、味噌汁的なアレで？」

「そうよ。それなのに、一夏つたら、『酢豚を奢つてくれる』つて勘違いしてたのよ！女の子の必死の告白をあんな風に覚えてるなんて信じられない！思い出したらまた腹が立ってきたわ！」

怒髪天を突く、ツインテールを振り乱して怒りを表す鈴の言葉から大体の事情は理解出来た

まあ悪いのは一夏だな、短気過ぎる鈴も悪い点はあつたと思うが、八割くらい一夏が悪い、残りは鈴の短気で状況がややこしくなつた事かな

「取り敢えず暴れば収まるだろうし、丁度今度のクラス対抗戦では一夏とも戦うんだ。その時に全てぶつけてやれ」

「そうさせて貰うわ。ありがとう、誰かに話したら私もスッキリした。今度のクラス対抗戦、康太には悪いけど優勝は二組が貰うわね！」

「オレは賞品には興味ないが、立場上は一夏を鍛える事になる。そこに手を抜くつもりはないから、精々気を付けるんだな」

「当然よ、そうでないと勝つ意味がないわ。それじゃあ私はもう行くわ。またね、康太。おやすみ！」

そうして鈴はオレの部屋から出ていく、その表情は最初の頃の陰りはなく寧ろ獰猛な笑みが浮かんでいる

「さて、オレも明日の訓練の準備をするか」

近接戦闘用装備を設定して、一夏をボコボコに出来るようにする

えーつと、確かジーライン・アサルトアーマー用のヒートランスがあつたな、ヒート機能を切っておけば一夏をどつき回すには十分か

それから数日、訓練を行っているアリーナでショットガンを食らい体勢を崩したところをランスで突かれたり、グラップル・シールドで拘束されてぶん回される一夏の悲鳴が上がったとかなんとか、一体誰がやったんだろうな、恐らくは面倒事を持ち込まれた誰かがやったんだろう、きつと

◆ 数日間に及ぶ特訓という名を借りた一夏へのシゴキが終わりを告

げ、クラス対抗戦が行われる事となった今日、既に多くの観客がアリーナに来ている中、オレと一夏、箒の三人はピットに通じる廊下に居た

「あれだけ訓練したんだ。不安はないな？」

「あれって訓練か？俺には訓練という名のイジメに感じられたんだが……」

「わざわざオレがお前の得意な距離で戦ったんだぞ。得られた数少ない情報から鈴も近接戦闘が得意って事は分かったんだ。オレだけじゃなく、箒も手助けしたんだぞ。何を弱気になっっているんだか」

得られた数少ない情報というのはネットに公開されている試合映像の事だ、機体も中国の第二世代機だったから今の機体とは違う

それでも近接戦闘に秀でているという鈴のスタイルが把握出来ただけでも収穫と言える

「そうだぞ、一夏。私も手助けしたのだ。これで敗けたのであれば、この次は私と康太の二人同時に相手するぞ」

「それはヤバいな……うし、そんな事にもならない為にも、勝ってくるぜ！箒！康太！」

「ああ、勝ってくるのだぞ、一夏！」

「敗けたら一日鈴の下僕って条件も付けておくか。勝ったなら、そうだな、食堂の高いステーキ肉奢ってやるよ」

「お前、アレって一万もする高級ステーキだぞ!?本当に良いのか!？」
「安心しろ、アテはある」

その為にもこの後に一つ仕事があるのだが、なに、楽しみながらやらせて貰うさ

そして一夏は一気に士気を揚げてアリーナへと向かう、普段は質素な食生活をしているからな、たまにはお祝い事として高い物を食べるのも良いだろう

そろそろ始まる時間だし、オレも移動するか

「じゃあ、オレはこっちだから」

「うむ、康太も己の仕事をしっかり果たすのだぞ。ではな、今回は私もセシリアと観客席で応援させて貰うとしよう」

というより関係者以外ピットに立ち入り禁止だから観客席に行くしかないんだけどな、オレは仕事の為に箒と別れて通路を進んでいくさあ、仕事の時間だ

◆ クラス対抗戦はそれぞれの学年毎に別れて開催されるのだが、やはり一年一組のクラス代表は織斑一夏という世界でも三人だけの男性IS操縦者の中の一人である為に注目度は高い

自分の学年の試合も見ずに二年生や三年生の生徒の姿も見える観客席の中、箒はセシリアと共に並んで座っていた

「いよいよだな。セシリアならこの試合をどう見る？」

「そうですね、まず鳳さんの実力ですが、一夏さんと同じく近接戦闘に秀でているのは確認済みです。それも、青竜刀型のブレードによる二刀流、手数では一夏さんを上回りますわ。それに加えて中国の第三世代機の特種兵装が気になります。どのような武装なのか、全く情報がないんですもの。対して一夏さんは既に試合を行い手の内を見せた後。対策をされていると見て間違いないでしょう」

共に放課後に訓練をする事が多い二人はすっかりと打ち解けており、今も試合の内容について語っていた

「そうだな。確かに剣道でも二刀流はあるが、使い手は少ない。故に一夏もその相手をした経験が少なくなる。それに対し、どのようにして一刀で立ち向かうかな」

「威力では一夏さんに分がありますが、取り回しの問題ですわね。あの変形、デストロイモードとやらが発動するかどうかも一気に戦術が変わりますわ」

二人は共に訓練時の一夏の様子を思い返す

意思の強さに応じてデストロイモードへの変形が行われるという説明は聞いたが、訓練中に一度もデストロイモードへと移行した事はなかったのだ

それだけ嚴重にロックされているのもパイロットへの負担が大きい能力であると知っているだけに仕方ないとは思いますが、それが本番でも使えるか分からない点が不安であった

そうこうしている内に試合の予定時刻が迫ってきた、だがアリーナに一夏達が現れる前に音響設備から声がアリーナ中に響き渡る

『はい、試合開始三分前になりました！今回の実況はこの私、放送部二年のミホシがお送りします！そして今回は解説としてゲストをお呼びしています！どうぞ！』

『ラビットフット社所属、一年一組の紫藤康太です。未熟な身ではありませんが、解説を務めさせていただきます』

スピーカーから流れる声、片方は放送部として学園内で様々な連絡事項等を伝えていた女生徒だが、もう一人の声は康太であった

この試合に於ける解説こそが康太が頼まれていた仕事であり、報酬として食堂高級ステーキの半額クーポン券が渡されるのだ

『康太くんは知っての通り今回の出場者である織斑一夏くんの同僚であり、専用機ユニコーンの知識もあり、またテストパイロットを勤めている関係で幾らかの武装にも詳しいという事でお呼びしました！では康太くん、今回の試合について何か一言お願いします』

『どちらも得意な距離は近接戦闘ですので、激しいぶつかり合いに期待したいですね』

『ありがとうございます！それでは試合開始の時刻になりました、選手入場です！』

ワアッ！とアリーナ全体が湧き、両端に設けられたピットから一夏と鈴が現れると試合開始位置で静止する

両者共にその目には戦意が溢れ、間にある空間がビリビリと音を発しているかのようだ

『待ちわびたわ、この時を。それで、素直に謝って降参するなら今の内よ？』

『残念ながら、俺に訓練をつけてくれた皆の為にも戦わずに敗けを認めるなんて出来ないんだ。真剣勝負で行かせて貰うぜ、鈴！』

『そう、よく分かったわ。なら——』

『試合、開始！』

「全力で叩きのめして、謝らせてあげる！」

ブザーの音と共に動き出す両者、一夏は大剣であるクレセントムー

ンを、鈴は一对の青竜刀型のブレードである双天牙月を構え真正面からぶつかり合う

上段から振り下ろされるクレセントムーンに対して交差させた状態の双天牙月で受け止めた鈴は、そのまま宙返りし、勢いの止められたクレセントムーンの柄を蹴り上げた

それにより両腕が跳ね上げられた一夏は腹部が無防備な状態となり、そこに双天牙月の柄を連結させて長刀状にした鈴の連続攻撃が炸裂する

バトンのように回転する双天牙月により何度も腹部に攻撃を受けた一夏は、牽制として頭部バルカンを放つが鈴はより一夏の懐に飛び込む形で避けつつ、分離した双天牙月を振るう

小回りの利かないクレセントムーンでは対処出来ない距離、それに対して一夏が取った行動はクレセントムーンを手放し、両手のビーム・サーベルを抜き放つという対処だった

「なっ!?!」

「二刀流には、二刀流だ!」

今度はまさか一番の威力を持つ得物を手放すとは思ってなかった鈴の反応が遅れる

その気を逃さずに畳み掛けるようにビーム・サーベルを振るう一夏、だがレーザーの刃が鈴に届くかという時、その体に強烈な衝撃が加わった

「何だ!?!」

「まさかこうも早く使わせられるとは思わなかったわ」

鈴の両手は双天牙月により塞がっている、ならば康太やセシリアのような砲撃かと思えば周囲にはそのような砲身を持つ物は見当たらない

そんな正体不明の攻撃を受け混乱する中、鈴の反撃が始まった

その様子を見ていた放送室でも実況は行われる

『僅か短時間の間に怒濤の剣劇!しかし、両者とも二刀流という更なる剣劇が起こるのかという状況で鳳選手から不可視の攻撃!康太くん、あれはどのような武装なんでしょうか!?!』

『肩に砲を担いでいるとか、イギリスのブルー・ティアーズのように移動式の小型砲台を放っていたという訳ではなく、不可視という点が謎ですね。とはいえ威力は実弾程高くはないようです。装甲が売りの全身装甲機であるユニコーンは私のジエガンよりも強固な装甲で覆われています。その衝撃こそ一夏へと響くものの、シールドエネルギーは殆んど減少していませんから』

ほら、と康太が促せばアリーナに表示されている一夏のユニコーンと鈴の甲龍、その二機のシールドエネルギーは殆んど試合開始時点から変動していない

それは何度も攻撃を受けた筈のユニコーンの装甲の性能は、鈴の攻撃をシールドバリアーを使うまでもないと判断した証拠であった

『本当ですね!?これは鳳選手にとって非常に厳しい戦いです!ブレードによる攻撃も、あの不可視の攻撃も、織斑選手のユニコーンの前には通じていません!康太くん、貴方ならあの装甲をどう突破しますか!?!』

『私のジエガンもですが、ラビットフット社の機体は強固な装甲に覆われ、実弾ではISの標準的なライフル程度なら防ぎます。なのでより火力の高いミサイルやバズーカ、レーザー等のエネルギー兵器にて対処します。ですが鈴の甲龍は見たところ武装はブレードと不可視の攻撃のみ。なので普通は勝ち目がないとお思いでしょう。ですが一つだけ突破口があるんです』

『突破口、ですか?それは一体?』

『殴って殴って殴り続けて、一夏の意識を飛ばせばルールでは一夏の戦闘不能により勝利となります』

『成る程、鳳選手が織斑選手の守りを崩せるか、それとも先に織斑選手が勝負を決めるのか、勝負の行方はまだ分かりませんね!』

アリーナでは一夏と鈴が未だに激突を繰り返していた

だがその様子は明らかに一夏が不利であった

まともに剣を振ろうにも鈴からの不可視の攻撃が的確に動きの起点を潰し、まともな行動を封じていた

一夏も全身装甲により明確なダメージこそ負っていないものの、そ

の動きは精細さを欠いていた

度重なるダメージにより意識が朦朧としており、それにより更に被弾が増えるという悪循環により、意識を手放すのも時間の問題である。だがその眼はまだ闘志を失ってはおらず、ふらつく頭の中で逆転への道を模索している。

今もまた謎の衝撃を肩に受け体勢を崩したものの、即座に立て直すと、体勢を崩した瞬間を狙ってきた鈴の双天牙月の一撃を避ける

「チツ、立て直しだけ異様に上手いわね！」

「生憎と、最近の訓練で似たような事をしてたんだ。その対処には、嫌でも慣れるよ！」

あまり距離を詰められるのは得策ではない、そこで一夏はビーム・サーベルを収納し両肩にハイパー・バズーカを担ぎ散弾を放つ

これが康太であったなら『散弾ではなあ！』と言いつつ弾雨の中を突っ切って来るのだが甲龍は全身を装甲で覆わずに機動性を高めた現行で主流のタイプである為に装甲の無い部分に被弾、シールドエネルギーが減っていく

その後も不可視の攻撃により一夏が体勢を崩す事はあるが立て直しがより短時間で済むようになり隙が減っていく

有効打こそ与えられていないが一夏が反撃をするようになった為に鈴も攻めあぐねていた

『織斑選手、慣れてきたのか立て直しが早い！というより、なんか手慣れてませんか？』

『あー、実はなんですけど最近の一夏との訓練で私はジェガンの近接戦闘用装備が新しく届いたので、習熟がてら使ってたんですよ。それでその装備がショットガンという、相手の体勢を崩す装備を使つてまして、更に言えば刀身こそエネルギー兵器なんですけど、剣も二刀流であり柄を連結して長刀として使つたりで、偶然とはいえ鈴の戦闘スタイルと似通ってた訳でしてね』

『つまり、その経験が今こうして活かされているという訳ですね』

『そういう事です。メイン武装には槍を使ってたんですが、サブに切り替えての訓練もしていた訳で、鈴には申し訳ないんですが、偶然に

も対甲龍戦とも言える訓練を一夏に施していた事になります』

そんな放送室からの声に鈴が「ふざけるなっ！」と憤慨していたが、その時、ユニコーンのセンサーが遂に不可視の攻撃の正体を暴いた

そしてそれは放送室で解説をしている康太も同時だった

『それと不可視の攻撃の正体が分かりました。一夏のユニコーンもセンサーで捉えたようなのでネタバレしますね。両肩のユニットで周囲の空間に圧力を掛けて空気を砲弾にする兵器のようです。空気なので目には見えませんが、それがあの攻撃の正体でした。分かりやすく言えば未来から来た猫型ロボットの持つ秘密道具だと思って下さい』
『それって対処法あるんですか？不可視ってだけで避けられませんよね？』

『はい、その不可視である事こそが最強の特性のようです。砲弾は当然ながら砲身さえも空気なので見えませんが、まああの肩のユニットから放つというのは分かるので、後は一夏が自分で答えに辿り着けるかですね。そして鈴が一夏をより早くノックアウト出来れば勝利ですが、状況は一夏が有利になってきました。此処からどのように逆転出来るか見物ですね』

この試合の流れがどうなるのか、誰もが見守る中、アリーナで対峙する二人の顔には笑みが浮かんでいた

「凄いな、鈴。こんなに強いなんて思わなかったよ」

「当然よ。けど、アンタもよく動けてるじゃない。機体の性能があるとはいえ、此処までできてまだ勝負が決まらないなんて思わなかったわ」

「そうだな、俺もビックリだよ。でもこれは皆のお陰なんだ。皆と一緒に訓練したから俺は此処まで強くなれた。だから——」

地上付近まで降りていた二人、そして一夏が今拾ったのは試合開始当初に自ら手放したクレセントムーンであった

それを両手で構えた一夏は真っ直ぐな視線で鈴を見据えて言う

同時に、ユニコーンの装甲の継ぎ目から赤い光が漏れだしている

「俺は負けられない。それと鈴、この試合が終わったら伝えたい事がある。大事な事なんだ」

「はっ!? えっ、ちよつと待ちなさいよ!? それこの状況で言う!」

「今だからだよ。そして、俺は今からお前に勝つ。このユニコーンで!」

次の瞬間、ユニコーンの装甲がスライドしデストロイモードへと移行していく

データとしては知っている、まだ一秋との試合でしか見せていないそれを見て鈴は身構えた

その眼には既に先程の一夏と言葉で動揺していた様子はなく、一人の戦う者としての姿があつた

また激突が始まる



(ようやくか。それにしても、思わせ振りの発言だな。あれだと鈴なら別の事を想像するだろうに)

そんなアリーナの様子を見ていた康太は口には出さず苦笑していた

まるで告白するかのような一夏の言葉に、しかし一夏がどういった人間か大体理解してきた康太は伝えたい事が告白ではないと理解していたのだ

そして一夏は勝つという意思によりユニコーンをガンダムへと変形させた、それがどのような戦いを見せるのか、康太は解説を半分忘れ試合に注視する

だがそこにISのコアネットワークを通して通信が入る、一夏や鈴は試合中は繋がられない為、セシリアかと思っていたが相手は一秋だった

朝から既視感からか頭痛がする、今までにないレベルだといって寮の自室で寝ていた筈の一秋からの通信に首を傾げつつ応答した

『寮に居ると聞いていたが、何かあつたのか?』

『康太、直ぐに試合を中止させて皆を避難させてくれ、頼む!』

コアネットワークを通じた通信は実際に声を出す必要はない、それで解説の仕事と平行して通信していた康太だが、大した要件ではないだろう、そう思っていた一秋からの声には普段からは信じられないよ

うな焦りがあつた

このような状態の一秋の事を、己の既視感の事を話した時と同じ逼迫感を感じた康太は意識を切り替えて一秋の話しに集中する

『何があつた？何か、見えたのか？』

『空から何かが来る！閃光が見えて、そこから何か！』

空、そう言われてアリーナの上空を見るが康太の視界には何も存在していない、ハロのセンサーで見ても同じだ

『ごつちからは何も見えない。ハロもそう言っている。取り越し苦労じゃないのか？いや待て、今反応が——』

センサーの範囲内に現れた一機のIS反応、その解析を行おうとした次の瞬間、康太の胸に激痛が走る

——逃げて！

「ぐうっ!」

「康太くん!?!どうしました!?!えっ、何これ、光が?」

康太の苦悶の声に反応したミホシが見れば康太が首から掛けていたもの、サイコフレームが金色の光を放っていた

そのような状態でどうしたら良いのか分からないミホシを余所に、康太は窓から見える空に光が集まっているのを見た

それを見て急ぎ放送室のマイクを掴み、出せる限りの声で叫ぶ

『一夏!鈴!上だ、逃げろ!!』

「えっ!?!」

「上だっつて!?!」

デストロイモードとなり全ての機体性能が向上したユニコーンと、それに食らいつこうと動く甲龍、それを駆る二人は呼ばれた声に剣を振るう事を忘れて動きを止める

それが明暗を分けた、停止した二人の間、もしそのまま剣を振るつていれば居たであろう場所に極大な出力を持つ閃光が降り注ぐ

その余波の衝撃波により吹き飛ばされる二人、それを見下ろしながら、今の閃光により穴が空いたアリーナのシールドバリアーを通り抜け、その存在は地上へと舞い降りる

圧倒的な威力の閃光を放った存在、その姿を見た時に一夏と鈴は戦

慄した

それは血のように紅い眼をした死神だったのだから

12話 蒼い死神

空から地上へと向けて放たれた閃光、それに眼を焼かれぬように放送設備の載った機の陰に身を潜めてから数秒、収まったらしい様子を確認したオレはアリーナに降りていく一機のISを、オレも知る機体の姿を見た

全身の装甲は蒼、その上に追加装甲を身に付け、両腕にはフルアーマーガンダム等と同じような、ジム・ドミナンスの試作装備であった二連装ビーム・キャノンを持ち、肩部にはガンキャノンIIのビーム・キャノンを背負い、両肩側面には陸戦型ガンダム等が持つミサイルランチャーを改造して備えている

何よりもジエガンにも受け継がれているジム系統の頭部、ベースとなった陸戦型ジムの物から移植されたシステムが収まっているその頭部に備えられるバイザー状のカメラは紅く染まっている

ああ、知っているとも、ゲーム本編では登場しない機体、漫画版のみに登場する機体だとしてもな

型式番号RX-79BD-1FA、ブルーディスティニー1号機フルアームド、それが奴の、『蒼い死神』と呼ばれた機体の名だ

そして死神と呼ばれる所以のシステム、ニュータイプを抹殺する為だけにパイロットさえも使い捨てとする非人道的なEXAMシステムを備えている

それだけに疑問は尽きない、何故ガンダム世界の機体が此処に居る？パイロットは誰だ？紅く光る事からEXAMが発動している事は分かる、ならそのシステムの元になっている人物は？

EXAMシステムはニュータイプの意識をコピーして作られた物だ、大本となるニュータイプの意識は何処から手に入れた？

何もかもが不明、それでもオレは行動に移す、あの機体を止める、その為に放送室からピットへ、そしてアリーナへと

だが放送室から出ようとした途端、部屋の出入口を隔壁が降りてきて閉鎖された

ISを扱う学園の設備だ、それこそ機体を展開しなければこじ開け

るなんて真似は出来ない

「クソツ、何だこれは!?!」

ならば通信して状況把握をと思ったが、コンソールを利用した有線通信さえも使えないし、無線で呼び掛けようにもさっきのビーム兵器、ミノフスキー粒子の影響かノイズだらけだ

次にコアネットワーク、これは接続可能か

距離なのか、そもそも電波を使っていないのか原理は分からないがミノフスキー粒子にジャミングされないというのは都合が良い、オレはアリーナの様子を見ながら戦闘中の一夏に通信を繋ぐ

『聞こえるか、一夏!』

『康太か!?!こっちは今それどころじゃねえよ!あまり余裕がない!』

見れば両手の連装ビーム・キャノンを一夏に集中させているブルーデイスティニー、それを必死に回避しているユニコーンの姿がある

『良いから聞け!ソイツはブルーデイスティニー1号機フルアームドだ!ジム頭だと油断するなよ、機体の方は真正銘のガンダムだからな!』

『ガンダム!?!何でそんな機体が!?!うおっ!?!』

『ソイツは頭部カメラが紅くなっている。ニュータイプ抹殺用のシステム、EXAMが動いている証拠だ。敵の殺気を感じして動くシステム、だが複数の殺気を感じすると無差別に周囲の殺戮を始める暴走状態にもなる』

『殺戮って、そんなマシンが!?!』

『一人の男の狂気から始まったマシンだ。聞け、ソイツの懐に潜り込むんだ。フルアームドは本来ならEXAMを使わせない為の足枷の役割を持つ。機体本体の速度は抑えられているんだ。ソイツがその枷を全て取り払う前に撃破、または損傷を与えろ!オレも直ぐに向かう、持ちこたえろよ!』

『クツ、やってやるよ!』

よし、取り敢えず奴の対処方法、弱点も教える事は出来た

本当なら機体のオーバーヒートを狙いたいが、あれが本当のブルーデイスティニーと同じか分からないしな、確実な情報だけを渡した

後は此処から出てアリーナへ、最早待っている時間もない、ユニコーンのデストロイモードも残り短い時間しか使えないだろうからな

隔壁をジェガンのビーム・サーベルで焼ききる、その為にハ口からジェガンを呼び出そうとした時、今度はオレに向けてコアネットワークからの通信が来た

送信者は、篠ノ之束

『ごーくん、あの機体を止めて！』

『篠ノ之博士、つまりアレは貴方が組み上げた訳ですね。詳しい情報をお願いします』

『うん、まずあの機体だけだね。実はジェガンの中に丸々、欠損なしで設計図が入ってたの。試作だからデータのままで手は加えていないよ。性能はジェガンに軍配が上がると思う』

『EXAMさえなければ、ですけどね』

ジェガンの中に入っていた………成る程、ユウ・カジマ繋がりか！

『でもそこはどうでも良いんだよ！問題なのは、暴走したその機体に乗っているのが、くーちゃんだって事なの！』

『なっ!?!』

クロエがブルーデイスティニーに乗っている？何故、どうしてそんな事に!?!

『くーちゃんはね、自分が戦闘面で役に立たないって悩んでたみたいなの。それで自分にも戦えるだけの力をもって頼まれたんだけど、私はくーちゃんを戦闘に出すつもりはなかったから、取り敢えず護身用の機体だけあげようと思って、EXAMが操縦のサポートシステムだって記載されていたから乗せただけど、試験中にいきなり暴走して、それで——』

『分かりました、機体を止めて、クロエを助け出します。けど今現在、アリーナへの経路が封鎖されています。博士、ロックの解除は可能ですか？』

『任せて！恐らくはくーちゃんの力を利用してロックしてるんだろう

けど、ハッキングなら私の方が上だから！ハロをコンソールに接続して！コアネットワーク経由でハッキングを行うよ！』

『了解、任せました！』

一度通話を終了、ハロの腕を伸ばしてコンソールの接続端子に繋げる

すると様々な情報が表示されては消え、ロックと表記されていた部分が解除されていく

放送室を閉じていた隔壁も上がり、外へと出られるようになる

『これでピットまでの道は開放したよ。ルートを送るから、ジエガンで一気に駆け抜けて！』

『ありがとうございます。それと、観客席の生徒達の避難の為に、他の隔壁の開放も引き続きお願いします』

『そんな有象無象なんか放っておいて良いよ！大事なのはくーちゃんなんだから！』

さつきまでの様子だとブルーデイスティニーは一夏を執拗に狙っていた、理由は不明だが今は助かる

だがもしも肩のビーム・キャノンが観客席に向けばアリーナのシールドは抜かれる、そうなれば死者が出るだろう

そうでなくても流れ弾でそうなる可能性だってある、そして何よりも、これはクロエの為だ

『貴方はアイツに人殺しをさせたいんですか!!』
だから声を荒げるような形になってしまった

篠ノ之博士が身内と判断した人間以外はどうでも良いと考える人間なのは分かっている、それでもクロエが人を殺す姿なんて見たくない

『……そうだね、ごめんね、こーくん』

『いえ、オレも言葉を荒げるなんて真似を……兎に角、オレはアリーナへ向かいます。観客席の件は頼みました』

『任されたーあと少し、これで行けるよー』

コンソールの表記は全ての隔壁を開放した事を示している

窓からも生徒達が我先にと避難を開始している様子が窺える、これ

でクロエが流れ弾で人を殺めるなんて事はない筈だ、後はクロエを、ブルーデイスティニーを止める

「ミホシ先輩、今すぐに避難をお願いします。オレはアリーナへ」

「へっ?ま、待って康太くん!?あんな中に割って入るなんて無茶よ!」

通路に出たオレはジェガンを展開、通路内を篠ノ之博士の記したマップのルートに従い飛行する

途中、一ヶ所だけ避難する生徒が通る道と交差する地点があるが、そこが最短経路だ

ブースター停止、PICを利用して慣性航行に移行、天井が高い事も幸いして頭上を抜ける

オレの通過に驚いたような表情をしていたが今は無視だ、曲がり角の所でAMBAAC機動により方向転換、壁を蹴ると同時にブースターを点火、速度を上げていく

そうして何度かカーブしてピットへと辿り着く、ここではハツキングが解除されたからかアリーナへ出撃しようとしている教員部隊の姿が見えた

なんとか間に合ったというところか

「ジェガン、という事は紫藤か。何故来た。此処からは教員の仕事だ」
「織斑先生、数を集めてもアイツには勝てません。それに、ラファールや打鉄の火力じゃ装甲を抜けませんよ」

「何?紫藤、あのISについて知っているのか?」

「奴はガンダムです。詳しい事はプロフェッサーから、通信を繋げます」

ガンダム、この中だと織斑教諭くらいにしか伝わらない名前だがそれで十分だ

織斑教諭も出撃するつもりだったのか打鉄を纏っている、そこにジェガンを経由してコアネットワークで通信を繋げる

これで篠ノ之博士から説明がなされるだろう、その間にピットの画面からアリーナの様子を確認する

そこにはユニコーンモードに戻り地面へと倒れ伏すユニコーンの姿があった

◆ 時間は少し遡り、一夏が康太からブルーデイスティニーの弱点を聞き終えた所から始まる

「クツ、やってやるよ、なんて言ったけどー!」

直ぐ脇を掠めていくビームに顔をしかめつつ接近を試みる一夏だったが、それに対してユニコーンを中心に広範囲をミサイルで焼き払う事で接近を阻もうとするブルーデイスティニー

「それは康太がやった事ある!」

訓練にて康太はありとあらゆる武装、戦法を用いて一夏と対戦してきた

その中にはミサイルを大量に装備した姿もあつた為に、一夏の危機回避能力は上がっている

今も自分へと迫るミサイルを左手のシールドに固定した二門のビーム・ガトリングガンで撃ち落とし、このまま爆炎に紛れて接近する為に瞬時加速で加速した

そして爆炎を抜け相手の苦手な格闘戦に持ち込もうとしたが、視界が開けた時に見たのは肩のキャノンに向けているブルーデイスティニーの姿だった

「しまっ!?!」

既にチャージも終わっているのか砲口からピンク色の粒子が漏れ出ているのを確認した一夏は直ぐに回避しようとする、だが瞬時加速によりついた速度を殺す事は難しく、そのまま自分からビーム・キャノンの一撃を受けに行くような形となる

回避不能、アリーナのシールドバリアーを貫く程の火力を前に死を覚悟する一夏、だがその身が貫かれる事はなかった

「こんのおおおおおッ!!」

ビーム・キャノンを発射体勢に入っていたブルーデイスティニー、その横合いから双天牙月を振りかぶる鈴が乱入したからだ

砲撃を中止して鈴の対処をするブルーデイスティニー、両手のシールドを兼用する連装ビーム・キャノンで二振りの青竜刀の連撃を防ぐと頭部と胸部、四門のバルカンにて至近距離からの銃撃を浴びせた

それに反応した事で回避行動をとる鈴だが距離が近かった為に数は被弾してしまう

それでもダメメージとしては微量、戦闘継続には問題ないレベルだ
「すまん、鈴。助かった!」

「良いから次よ!それにしてもコイツ、何なのよ!?硬いし、大火力だし、おまけに動きを予想してるみたいなきするし!」

「康太が教えてくれた情報だと、殺気を感じして反応するシステムを積んでいるらしい!それで動きが読まれるんだ!あと、装甲も多分俺と同じものだ!」

「アイツ、何でそんな事まで知ってるのよ!もしかしてコイツもラビットフット社の新型!?なんか頭とか康太の機体に似てるし!」

それに対してしまったと自身が口を滑らせた事を悟る一夏、だがそれを後悔するよりも先に連装ビーム・キャノンが一夏を狙って連射される

ユニコーンの機動性によりそれらを回避していくが、接近する事が出来ずにいる

「兎に角、鈴の武装じゃ無理だ!俺が攻撃するから、鈴はサポートを!」

「仕方ないわね、頼んだわよ一夏!」

ならば二機掛かりでと一夏がメインになり挟撃しようとするも、ブルーデイスティニーは冷静に受け流し、逆に反撃のビームを放つ

圧倒的な防御、それを突き崩そうにもなかなか崩せない二人、やがてその攻めにも限界が訪れる

今までデストロイモードによる高機動により支えていた均衡、それが制限時間により強制終了されたのだ

「制限時間が!?まだまだ、まだ戻るな、ユニコーン!戻らないでくれ!」
懇願する一夏、だが機体は完全にユニコーンモードへと戻ってしま
い、それにより発揮されていた速度も失われる

そこを逃すブルーデイスティニー、そしてEXAMではなかった

まだ使える武装が残っているにも関わらずその全てをパーズ、通常の状態のブルーデイスティニー1号機の姿になると脚部に装備して

いるビーム・サーベルを抜き一夏へ接近する

それを阻もうと鈴も双天牙月を振りかぶるがブルーデイスティニーはそれを一蹴、右手に握る一振りのみで双剣を捌くと回し蹴りを放ち甲龍を吹き飛ばした

「ぐうつ!?!」

「鈴ッ!」

一夏も鈴のフォローに向かおうとするがデストロイモードの反動に体が悲鳴を挙げて思うように動けずにいる

地面へと倒れ伏す一夏、それにビーム・サーベルを振り下ろそうとするブルーデイスティニー、だがそれを一条の閃光が、ピンク色の粒子を放つビームの一撃が阻む

一夏がビームの放たれた方向を見ると最近の訓練にて見慣れていた機体が居た

「康太ッ!」

「かなりギリギリだったな! ジェガン・ストライカー、紫藤康太、戦闘を開始する!」

それは通常のジェガンとは違う機体であった

高機動型ジェガンをベースとして全身にウエラブル・アーマーを装備、バックパックも変更され二本の専用ビーム・サーベルを備え、左手に先端がクロー状に変化するグラップ・シールドを装備していた

これこそがジム・ストライカーのデータをジェガンへと組み込んだ近接格闘用装備、ジェガン・ストライカーである

今はバックパックにツイン・ビーム・スピアを背負っているがヒートランス等を始め兵装も近接格闘戦に特化した物が揃っている

そして康太はユニコーンに通信を接続すると武装関連のシステムにパスワードを入力していく

「ミノフスキー粒子使用兵装制限解除。向こうがバカスカ撃つて来てるんだ、今更電波障害だの何だの気にする必要はない。一夏、鈴を連れて一度退け! エネルギーを補給して来い!」

「そんな、康太一人でアイツを相手に出来るのか!?! あんなに速いんだぞ!?!」

「なに、やりようはある。リメイク版で疲弊していたとはいえアイツを撃破したのは量産機だからな」

言うとな康太は右手に持っていたビーム・ライフルを量子化し、背負っていたツイン・ビーム・スピアを握る

その様子に一切の迷いはなく、目には確かな覚悟が表れていた

「それにな、アレに乗ってるのはクロエなんだ。システムに呑まれているアイツを解放する。オレと同じ世界から流れた物だ。オレの手でけりをつける」

「……分かった。負けるなよ、康太！」

「フンッ、当然！」

男としての覚悟を聞いた一夏はその意思を尊重して康太の指示通りに鈴の元へ向かう

同時に康太もブースターを噴かしてブルーデイスティニーに接近、渾身の突きを放つ

ブルーデイスティニーは可能ならば一夏への追撃を狙っていたが康太の攻撃がその隙を与えない

壁際まで蹴り飛ばされていた鈴を回収した一夏はまず鈴の容態を確認する、ISによってモニターされている鈴のバイタルを見て気絶しているだけだと分かれると安堵の息を吐いた

それから鈴を抱えてピットまで戻ると待機していた千冬へと鈴を託す

「千冬姉、鈴を頼む！」

「織斑先生と、いや今はそんな事を言っている場合でもないな。校医に診て貰う、心配するな」

「頼んだ、俺は康太のところ！」

そのまま再びアリーナへ向かおうとする一夏、だがそれは千冬に呼び止められた事で停止する

「何だよーアイツが一人で戦ってるんだぞ!？」

「そのエネルギーが枯渇しそうな機体で出て、何をするつもりだ？」

「それは……けど、困くらいなら！」

「場の流れを良く読め、馬鹿者！紫藤からの情報だと、奴は複数からの

殺気を感じると暴走状態になるという事だ。聞いてないのか？」

「それは……」

言われて思い出す、確かにそのような事を言っていた、周囲の存在全てを殺し尽くすまで止まらなくなると

「暴走した後の状態でどの程度の範囲が対象となるのかは分からない。だが此処は都市にも近い。暴走し、取り逃がすような事態となればどれだけの被害が出るか分からない。だからこそ我々も一度には出られないんだ」

見れば他にも複数人の教員部隊がこの場には居る、そんな彼女達がブルーデイスティニーの鎮圧に乗り出せないのはその危険性を康太が報告したからだ

「この件はアイツ束にもイレギュラーな事態のようだ。さつき私宛にも同様の説明が来たよ。だから今は信じるしかない。確実に奴を捕縛可能となるまでに疲弊するのを待つ。残念ながらそれしか手がないんだ」

そう言つて千冬が握り締めた手を震わせているのを見て一夏も冷静さを取り戻す、責任感の強い姉が教え子に戦わせて自分は見ているしか出来ない、それがどれだけ口惜しい事か、生まれてから一緒に居た一夏には理解出来たからだ

「……俺はユニコーンに補給をしてくるよ。康太に何かあつたら、その時は千冬姉、頼む」

「当然だ、私は教師だからな」

答えて、千冬は視線をピットに向けた、いざとなれば即座に割り込めるよう身構えて

その視線の先では康太はブルーデイスティニーに圧され始めていた

◆ 「これが、ニュータイプのかか!？」

紛い物、本物のコピーでも能力の一端を垣間見た康太の心情はその一言だった

己が戦闘に関してはまだ訓練を受けたプロと比較して素人である

事を差し引いても力の差は大きいと感じている

それは単なる練度の違いではない、根本的な、戦いに関するセンスとでも言うべきものだ

それでも康太は食らい付こうとしていた、既にツイン・ビーム・スピアは柄を斬られて短くなった時点で破棄しており今は量子化させていたストライカー・カスタムのナックル・ダガーを装着してビーム・サーベルと斬り結んでいる

その中でバルカンによる銃撃を受ける康太、だが両手のナックル・ダガーのビーム発振器の部分を合わせる事でビームの形状を保っていたIフィールドを意図的に崩しビームの幕にする事で擬似的なシールドを作成、銃撃を防ぐ

更にはその幕により相手との視界が塞がれた事を利用、ナックル・ダガーを投擲して不意討ちを狙う

だが殺気を感じたブルーデイスティニーは視界が塞がれて尚、その向こうからの攻撃を感知、半身になる事でナックル・ダガーを避ける

そしてバックパックのビーム・サーベルを二本とも抜いた康太の一閃を身を屈める事で回避、その腹部へと肩からタックルを見舞いジェガン・ストライカーを弾き飛ばす

「ぐあつ!？」

背中から地面へと打ち付けられる康太、だがその意識も両手の剣も手放してはいない、折れぬ戦意の中でそれを見る

次の瞬間、ブルーデイスティニーの左腕、右足にビーム兵器による斬撃が見舞われた、それは康太が先程投擲したナックル・ダガーであり、ブーメランのように帰って来たそれがブルーデイスティニーの背後から襲ったのだ

「やはり、殺気のない攻撃ならー!」

投擲されてから時間の経っていたナックル・ダガー、康太もブーメランとしての攻撃は当たれば良いな、くらいの感覚で投げた為に殺気と言うような物は無かった

故に殺気を感じするシステムであるEXAMは反応しなかった、そ

して被弾した、それも機動力の要たる脚部に損傷を与えたのだ、康太はその気を逃さず、両手のビーム・サーベルを振るう

だが死神はやはり死神であった、損傷を受けたにも関わらず全く変わらないような動きで康太を迎撃していく

損傷を受けていない右手のみでビーム・サーベルを振るい、その場から動かずに康太が繰り出す二本のビーム・サーベルを捌く

康太はその動きに執念のような物を感じていた、ニュータイプを必ず殲滅するのだというEXAMの開発者クルスト・モーゼスの執念を画面の向こう、ゲームとして見ていた時とは違う本物の殺意、現実の物となったEXAMの発する殺意を

そしてそれに対する自分自身の持つ怒りを

「そこまでして人類進化の道を閉ざそうとするか、クルスト・モーゼス！」

目指すべき場所、それを一部目の当たりにした康太が思ったのは怒りだった

ニュータイプという人類の進化、それがどのような形であれ戦闘能力のみに目を向け、恐れ、排除しようとする行い、その為のシステムに対する憤怒、それを赦せなかったのだ

「クロエを返して貰うぞー！そしてその妄執、此処で終わらせる！」

決意を新たにビーム・サーベルを構える康太、ジェガンの胸部装甲からは青い光が漏れ出ていた

康太が胸に掛けていたサイコフレーム、それが康太の怒りに反応し光を放っているのだ

対するブルーディステイニーもまた康太を排除すべき対象として最優先目標に設定していた、康太がニュータイプなのか、それともサイコフレームによって増幅された感応波に反応したからなのかは分からない、それでも完全に敵と認識したシステムが康太を見据える

次の瞬間にはどちらからともなく駆け出し、互いに光刃が宙を舞う、その動きは必ず相手を仕留めるという覚悟が現れたかのようにであり、康太も被弾する事を躊躇わずに剣を振るい続けた

二機の装甲はあつという間に傷だらけになっていく、だが勝敗を分

けたのもその装甲だ

康太は機体にウエラブル・アーマーを装備していた、爆発して攻撃を防ぐ代物だがビーム・サーベルに斬られる時に爆発させる事でビーム・サーベルの粒子を吹き飛ばして防いでいたのだ

対してブルーデイスティニーは通常の装甲である、更には被弾した左腕が上手く動かない事で右手のみで武器を振るうしかなく、手数之差があったのも大きい

康太のジエガンも全身に損傷を受けてきてはいたが限界になるのはブルーデイスティニーの方が早い、動きが鈍ったのを見て好機と捉えた康太がEXAMシステムの収まっていると思える頭部を破壊しようとしてビーム・サーベルを向けるが、ブルーデイスティニーはその手を掴む事で頭部を破壊される事を防ぐ

既にウエラブル・アーマーも無く、逆に腕の装甲が軋みを上げていく中で康太は視線をブルーデイスティニーに向け、バルカンポッドから銃弾を放つ

それと全く同じタイミングでブルーデイスティニーもバルカンを放っており、ジエガンの頭部、更にはバルカンポッドまで破壊される「うっ、まだだあッ！」

そこでブルーデイスティニーの方もバルカンは弾切れになり二機は単純な力比べの様相を呈していたが、康太はあろう事か頭突きを繰り出した

それによりボロボロになっていた二機の頭部に亀裂が走る、そして康太はまだ頭突きを繰り返す

「絶対に、負けねえ、此処で、終わらせる！」

康太の執念で何度も何度も激突する二機の頭部、そして二機の頭部が五度目の激突をした時、互いの頭部が砕けた

完全に覆われていた視界が広がり、風を感じるようになった中、康太は己の目でしっかりと見た、気を失ってはいるようだが確かに呼吸をしているクロエの顔を

EXAMが動かしていたブルーデイスティニーも止まっているのか機体は動いていない、そこまで確認し、康太は大きく安堵の息を吐

いた

その時、クロエの瞼がピクリと動くどゆつくりと目が開けられるそれは異形の眼だった、瞳が金色なのは珍しいが特別ではない、問題は白目である部分が漆黒だったのだ

康太はその眼を見て一瞬だけ驚いたが表情は変えない、変えられる程の余裕がない程に疲労していたとも言えるが、直ぐに珍しいが変ではない、満月のような眼だと思ったからである

「コウタ、さん……？」

「おう、目が醒めたか？体に異常を感じたりは？」

「大丈夫、です。それより、私は……」

「無理をするな、今はゆつくり休め。また後で話そう、直ぐに博士も来る筈だ」

全てが終わった、クロエも見たところは無事だが無理はさせない方が良く、そう考えてクロエの体を楽になるよう支えようとした時の事だった

「——ッ!?コウタさん、逃げて!」

「——えっ?」

朦朧としていた意識が覚醒したクロエが放った警告、その意味を理解する間もなく、康太の腹部に強烈な衝撃が走った

見れば動かなかったと思っていたブルーディスティニーの左腕、それが装備する陸戦型ガンダム等と同様のシールド、先端が打突武器としても使用出来るそれがジエガンの装甲を貫き刺さっていたのだ

油断した、ブルーディスティニーはモビルスーツではなくISだった、EXAMが頭部に必ずある訳ではなかった、薄れゆく意識の中で康太はそう後悔する

だが倒れていく視界の中で今度こそ消えていくブルーディスティニーの姿を見て今のが最期の一撃だったのだと確信し、小さく笑みも浮かんでいく

そのまま何度も己の名を呼ぶ声を聞きながら康太は意識を手放すのだった

13話 事後処理、そして

目覚めたのは水の中だった

いや、正確には水のような物に満たされた何かに入れられているのだ

呼吸は口に付けられているマスクからホースが伸びているからこれで行われているのだろう、だが何故このような状態になっているのかが分からない

確か、そう、オレはクロエが乗っていた暴走状態のブルーデイスティニー1号機と交戦して、それから……

「ぼうば、ばればらぼうばっば（そうだ、あれからどうなった）!？」
状況の確認を、そう思い外に出ようとしたが手を伸ばすとガラスのような物に触れ、完全に閉ざされた中に居るといいうのが分かる

どうやったたら出られるのか、そう悩んでいると電子音と共に蓋が開き外に出られるようになった

横になっていた体を起こして周囲を確認すると、消毒液の匂いなどがするし、カーテンで仕切られているのを見ると、どうやら病室のようだ

さてと起きたは良いが、外には出られないな……恐らくは医療用の物なんだろうポッドから出てきたのは分かったんだが、今の姿は全裸だ

此処が何処であれ、フル・フロンタル 全裸ではなあ、変態扱いである

待っていれば誰か、それこそ治療をしてくれた人が来るだろう、そう思い待っているとバタバタと誰かが駆けてくる音が聞こえた

「うわ、本当に目覚めてる……あれだけの怪我、普通なら全治半年とか、それ以上になってもおかしくないのに……」

現れたのは白衣の女性、何度か訓練中に倒れた一夏を運んだりしているのを知っている、IS学園の校医の先生だ

ISを扱っているので事故等でも対応出来るよう医師免許を持つ人だが、その人が居るといいう事は此処はIS学園の医務室か

「先生、あれからどれだけ経ってますか？」

「ふむ、意識は正常のようだね。まず三日、キミは医療用カプセルの中で眠っていたよ。病状は全身の筋肉に疲労、これはまあ良いね。この学園ならいつもの事だ。問題は二つだ。一つは腹部に受けた衝撃による内臓破裂、特に骨折した骨が臓器を酷く傷つけてね、ISの搭乗者保護機能がなければ即死してもおかしくない怪我だ」

「IS乗りで良かったと心底思いました」

何だその重症、よく生きていたなオレ、篠ノ之博士がISの基本性能としてそこまでの機能を持たせてくれて良かった

「それで先生、もう一つは？」

「それは鏡を見た方が早い。今のキミの状態だが、こんな感じだ」

手渡される手鏡、そこに写し出されるオレの姿は以前と変わらないように見えて一つだけ明確に違う点があった

左頬にかけて大きな傷痕、一直線に何か鋭利な物で斬ったかのような傷だ

「今は塞がっているが、破損したISの頭部パーツで自傷したみたいだね。あの頭突きした時に刺さったみたいで、一部は口内まで貫通していたよ。命に関わる腹部の傷の再生が最優先だったから傷痕が残ったらしい。まあ命あつての物種とは思うけどね」

つまりは消えない傷という事か、ふむ……

「背中以外の男にとって勲章みたいなものでしょう。それに、パイロットとしてスカーフェイスなんて箔がつかますよ。歴戦の戦士みたいだね」

それが女の子を助ける為に負った傷だというのなら尚更だ、初対面の相手には避けられるかもしれないが男であるオレには別に顔に傷なんて惜しくもない

手鏡を返すと先生はからからと声を挙げて笑っていた

「キミならそう言うと思っていたよ。さて、取り敢えずキミの負傷に關しては以上だ。何か他に聞きたい事は？」

「オレが眠っていた間、何が起きました？」

三日だ、クロエの事は篠ノ之博士が迎えに来てくれたかもしれないが、一夏とか他の人間には心配を掛けていただろう

今すぐにも動けるのなら一度顔を見せた方が良いと思うんだが、今の時間帯なら授業中か？

「それに関しては本人達から話を聞くのが早いだろう。機密事項として私の権限では閲覧出来ない情報もあるからね。今呼んでいるから、もう少しすれば来るよ」

それまでは服を着て待っていると良い、と言われて示された方向を見れば男物の下着や入院服がある

下着の方はオレの持っていた下着と同じものだから誰かがオレの部屋から持ってきてくれたのだろう、先生がカーテンを閉めて出ていったので近くにあったタオルで体を拭き、用意されていた服に着替える

これで退院とならないのは経過観察とかでもう少し入院するからか、放課後には一夏達も来てくれそうだな

今の今まで眠っていたからか体が少し重いが耐えられない程ではない、ゆっくりさせて貰おう

と思っていたがまた誰かが駆けてくる足音が聞こえる、なんとというか聞き覚えがあるんだよな、この足音

ドンツと勢いよく医務室の扉が開かれる音も聞こえてきたし、恐らく予想通りの人物が居るんだろうなあ

「こーくんが目覚めたと聞いて!」

「あー、篠ノ之博士? 足音から察してましたが、どうしてIS学園に?」

三日もあればてつきりクロエを連れてラボに帰っていると思ったんだが

「流石に束さんでもこーちゃんを命懸けで助けてくれたこーくんを見捨てて帰ったりなんてしないよ。あ、その医療用カプセル取りに一回は帰ったけどさ」

「ああ、これ博士のだったんですね」

道理で校医の先生がオレの回復を信じられないとばかりに見ていた訳だ、そもそも学園の備品ではないのだから

「束、無闇に一人で出歩くなと言っただろうが。紫藤もよく目覚めた

な。とはいえ一人で無茶をしたのは褒められた事ではないがな」

「織斑先生も。今は授業中だと思っただんですが」

「自分のクラスの教え子が目覚めたんだ。コイツの監視と状況説明を兼ねて私が出てくるのは当然だ。授業は今は山田先生に任せてある。お前が目覚めた事もクラスには伝えたから放課後に誰かしら来るだろう。さて、目覚めたばかりで済まないがあれから何があったのか簡潔に説明してやろう。まずは――」

織斑先生から語られた今の状況、それを纏めると次のようになる

○強力なジャミングを行いながら不明機が学園を襲撃、撃破するもオレが負傷という結果になる

○学園では諸々の事情から犯人は篠ノ之博士と断定、しかし篠ノ之博士という世界中が行方を探っている人物の為、公表はしていない

○同様にパイロットであったクロエの事も未公表、現在二人の身柄は学園で預り織斑先生が監視している。尤も篠ノ之博士だけは勝手に抜け出して歩き回っているようだが

○学園は現在では日常と変わらない様子を見せている、だが現場検証の為にアリーナは閉鎖、実際に戦闘を行った一夏や鈴、ピットで待機していたらしいセシリア、そしてオレにも箝口令が敷かれるとの事だ

「――主な点は以上だ。何か質問はあるか？」

「クロエの処遇はどうなりますか？」

「現在それも検討中だな。追って処罰が下るとは思うが、よりによってコイツの関係者だからな……」

どうしたものかと悩む織斑先生の視線の先には篠ノ之博士が

まあそうだな、これで犯罪者として逮捕とかされる事になれば即座に襲撃してくるな、この人なら

とはいえ対外的にも何らかの発表は必要となるだろう、特に犯人の機体を撃破したとなればパイロットは拘束したと見られる、ISの安全装置から見ればそれは確実だろう

「あっ」

そこまで考えて一つだけ抜け道というか、かなり無理矢理な方法を

思い付いてしまった

EXAM、そしてブルーデイスティニーという機体を知っているからこそその策とも言えるが

「おやおや、コーくんは何か思い付いたのかな？」

「まあ、一つだけこの状況で全て丸く収める事が出来る策が、無くはない、ですかね」

その為には関係者全員の協力が必要となる訳だが、余計な問題を抱えたままにするよりはマシかなと思う

「一応は聞いてみよう。どんな策だ、紫藤」

「全部架空の犯人に罪押し付けて篠ノ之博士は正義の味方として登場するとかで良いのでは、と。まず篠ノ之博士に訊ねますが、もしもパイロットの事を一切考慮しない、それこそ乗れば死ぬような性能を發揮するISが居たらどうします？」

「そんなの絶対壊すね。あと作った奴等全員殺すと思うよ。データも何もかもこの世から消滅させてね」

「まさにそんなシステムなんですよ、EXAMは。で、だったらパイロットは機体の負荷で死亡した事にして、篠ノ之博士はそんなシステムを作った人間に対する怒りで表舞台に出てくる。そんな脚本はどうですか？」

これなら一般的な民衆にも受け入れられやすいエピソードだ、そもそも宇宙開発用に作ったISを軍事転用されてご立腹なのだから無理なエピソードではない

実際に犯人が居る訳ではないし、名前だけ適当に付けて公表して殲滅したとかすれば誰にもバレない、関係者のオレ達が黙っていればなそう思っていたのだが、オレは少し篠ノ之博士の事を理解していなかったようだ、具体的には彼女が天災と呼ばれている所以を

「んん、良いねえ、やるなら盛大にやっちゃおつか！あのシステムって何故かいつくんやコーくんを集中して狙ってたから、女尊男卑主義者のせいにして、アーリーナのカメラ映像を一部使って、ブルーデイスティニーはジェガンの改造機って事にしておこう！そういえば最近、私の名前を大義名分に使ってるイヤなテロリスト集団が居たんだよ

ねえ、女尊男卑主義の団体だし、目障りだから生け贄にしちゃおうか。規模もそれなりだし、関係者全員始末しちやえば分らないよね！」

「あー、博士？」

「待て束、私の前でそのような計画を立てて止められないと思っっているのか？」

「なんだか篠ノ之博士の中の闇が見えてきているがそこに織斑教諭が待ったをかける

流石は織斑教諭、頼もしい

「えー、相手はテロリストだから良いじゃん。なんか色々言ってるけど、海外の男子校に爆破テロ起こすような連中だよ？居なくなっても誰も困らない、寧ろ世界の為だよ」

うわあ、標的が標的だけに止められない

流石に相手がそんな組織だと知らなかった為に織斑教諭も沈黙している

「私とくーちゃんは無実になれてハッピーだし、ちーちゃんも面倒な後処理が少なくなっただけハッピー、世界もテロリストが減ってハッピー、誰も損はしないね！」

正確には身に覚えのない罪で殲滅されるテロリスト達が不幸だがやっける事が事なので因果応報と思っただけ貰おうか

ウキウキとまるで遊びの計画を立てているような篠ノ之博士を置いて、オレはポツリと呟いた

「オレ、余計な真似しましたかね？」

「言わなくて良い、紫藤。アイツは元からああいう奴だ。遅かれ早かれ、似たような事になっていたさ」

寧ろ一般市民を巻き込まないだけマシだ、とまで言われた

この数日後、それなりに大きなテロ組織が壊滅する事になり、篠ノ之博士からのメッセージが添えられる事になるのだが、まだ少し先の話だ

そして、同時にクロエの罪もなくなる事となった、学園には謝罪と見返りとして、表向きは今回の事件から今後の警備として篠ノ之博士からISコアが五つ機体ごと提供された

しかもその機体がジェガンであり、ラビットフット社の経営者が篠ノ之博士本人である事まで世界中に暴露する始末である

更に付け加えると篠ノ之博士が世界中から追われているのに対する布石として身元がI S学園預りになっていた、小さいながら研究室を設けて基本的に常駐する形となったのだ

当然、世界中から篠ノ之博士とコンタクトを取ろうと色々な手段でI S学園に取り次ぐよう連絡が来たらしいが、オレは知らない

テストパイロットという事で何処から聞いたのかオレにまで連絡を取ろうと電話に着信が来る事になるのだが、オレには知る由も無かったのだ

それはともかくとして、篠ノ之博士達が帰った後、暇になったので手元にあつたハロを使ってガンダムシリーズを観ていた

経過観察という事で入院したが体調は至つて健康的、それでも動き回れないのでたまには見返してみるのも良いかと思ひハロの中のデータを観ていたのだ

特に動きの参考にといい事で対ニュータイプ、強化人間戦の部分を入念に、またEXAMのような事があるかもしれないから手本にはなるだろう

そうして趣味と今後のイメージトレーニングを兼ねた一人観賞会をしているといつの間にか放課後だ

やはりというか一夏達が見舞いに来てくれた

「思ったより元氣そうだな」

「まあな、そっちは変わりないか？」

ハロの映像を停止して一夏達に向き直る、来てくれたのは一夏と一秋と箒、セシリアに鈴だ

他にも相川さんや谷本さん、のほほんさん達も来てくれていたらしいが病室に大勢で押し掛けるなど校医の先生から止められたらしい、なので今は専用機持ちで共に訓練している時間も長いメンバーから集まったらしい

「康太が居ないのでな、何故か皆訓練が温く感じるようになった」

「そうですね、一夏さんや鈴さんも腕は良いのですが、何かもの足り

「ませんわ」

「私もアンタと早く戦ってみたんだから、さっさと退院しなさいよね」

「そうか、なら早く復帰しないとな。とはいえ体は問題ないから、経過観察だけなんだが」

女性陣からはそんな言葉を掛けられる、心配してくれているのかわからないが、変に気を遣われるよりは楽でいい

そして最後の一人、一秋が見てわかる程に沈んでいた

「その、康太。すまない、自分もつと早く見えていれば……」

「ハア、何を気にしているかと思えば……一秋、お前が教えてくれたお陰で敵に早く気付けたんだ。そこからオレが一夏達に警告をしてなければ、あの時に一夏達は死んでいたかもしれないんだ。その後でオレが奴と交戦してれば、この怪我で済まなかったかもしれない。お前は敵の襲撃を防げなかったんじゃない。オレや一夏、鈴を救ったんだ」

一秋があこの時に発してくれた警告、アレがなければ一夏達はブルーデイスティニーのビーム・キャノンに貫かれていただろう

そしてオレは武装の残っているフルアームドの状態を相手にしていただろう、下手すればEXAMの暴走もあり得たかもしれない、全てはたれば論だが結果として被害は無かったんだ、オレの怪我くらいは必要経費と受け止めるさ

「そうか、ありがとう……」

少しは持ち直したようだが、根本的な部分では納得していない様子の一秋、コイツが悪い訳ではなく、今回の件は全て事故なんだがな

「はいはい、折角皆無事なんだから暗い話は無しよ」

「そういえば一夏と鈴は仲直りしたんだな」

「うっ、その件では迷惑を掛けたわね……」

「けど進展は無さそうだな」

「煩いわよ！仕方ないでしょ、相手が一夏なのよ！」

「俺がどうかしたのか、鈴？」

「な、なんでもないわよ！」

あー、コイツ等もまた前途多難だな、主に一夏の察しの悪さのせい
で

とはいえそれに対して籌が不機嫌になったり、セシリアとはまた訓練での模擬試合の約束をしたりと話している内に寮の門限が迫り、皆帰っていった

それから一人で病人食を食べてベッドに寝転がるだけ、自室なら特に感じないんだが病室だと少し寂しくなるな

またガンダムシリーズを観ながら眠るか、そう考えていたら部屋の扉が開かれた

校医の先生かな、と思っていたのだがカーテンに映る影はそれより小柄だ

暫くの間、何か躊躇するような仕草を見せていたが意を決したのか遠慮がちではあるもののカーテンが開かれる

そこにはいつもの格好をしたクロエが居た

「見た感じ、何処も怪我はなさそうだな。体は平気か、クロエ」

「はい……でも、コウタさんは、私が……」

「オレは平気だ、ISのお陰で命に別状はない。そしてクロエがこの怪我を気に病む必要もな。あれはEXAMがやった事だ」

「それでも！私が束様にあんな機体をお願いしなければ……」

やはりというべきか、クロエはオレに怪我を負わせた事に対して責任を感じていた

今ほどのような扱いになっているのかは知らないがわざわざ自分から謝罪に来てくれた、そしてさっきも言ったようにEXAMのせいだからとオレが気にしていなくてもだ

「篠ノ之博士の事だ、いつか組み上げていたさ。それに、サイコフレームの影響かは知らないがアレはオレを明確な敵と認識した。つまりは目指しているニュータイプとしての片鱗がオレにも備わっている事になる。オレとしてはそれが分かっただけでも十分だ」

オレでもやれる、条件さえ整えばニュータイプのコピーを相手に戦える、特に秀でた能力の無かったオレにそれがどれだけの自信に繋がった事か

それでもクロエは俯いたままだ、立ち直るには時間が掛かるかもしれない、けどど一つだけ聞いておきたい事があった

「なあ、クロエ。どうして戦う為の力が欲しかったんだ？」

「それは……」

「力を求めるからには、それなりの理由がある筈だ。それが攻める為でも、守る為でもな」

オレは宇宙開発に備えて篠ノ之博士の手伝いをする為に、ならばクロエは何を思っただけ戦いたいと思っただのか、それが知りたかった

話すべきか悩んでいる様子のクロエ、だが少し経つとすっかりとオレを見据えて話し出した、その瞼の下に隠していた眼を開いて

「私は羨ましかったです。コウタさんの戦闘データはこの世界の誰も知らない、未知の塊でした。兵器としての運用方法がまだ明確に固まっていない、研究中のI Sを確固たる兵器として運用出来るコウタさんが。訓練や試合の時に新たな発見をするコウタさんの事を話す束様の姿を見て、私も同じように戦えるのだと証明したかった。そして、結果としてコウタさんにこんな怪我を……」

「成る程」

それだけでクロエが力を求めた理由は分かった、突如として現れたオレが彼女の居場所を奪うかもしれないと、そう思ったのだ、自分は戦えないからと

だがそんな物はクロエが呟いた一言で吹き飛んでしまった

「結局、私は失敗作だったんですね……」

「何だって？」

本人は言うつもりは無かったのかもしれない、だがしんと静まり返るこの部屋でその呟きは大きく聞こえた

だからなのか、オレに聞かれたと知ったクロエはどうせならと諦めるような形で話し出した

「コウタさんにはお伝えしておきますね。私は普通の人のように両親が居て生まれたわけではありません。遺伝子进行操作して最適な兵士として生み出された遺伝子強化試験体、機械の子宮から生み出された人造人間です」

「遺伝子、操作？」

「はい。他にも体内にナノマシン等を取り込んだり、様々な処置がされています。この眼もその内の一つです。尤も、私はこれに適合出来ずこうして異形の眼になってしまいました」

「そうだったのか」

つまり、コーデイネイターだな！」

「えっ？」

「いや、その後の処置を考えると強化人間か？まあ広義的な意味では同じような物か」

「その、気持ち悪くはないのですか？」

「何でだ？生まれが特殊なだけで、クロエ・クロニクルという人間である事変わらないだろう？」

「こんな普通とは違う眼をしているんですよ？」

「個性だろ。個性がないオレが言うのもなんだが。いや、この傷の陰で少なくとも印象が薄いとかは言われなくなるけども」

「そんな事を言ってくれたのは束様に続いてコウタさんが二人目です」

「オレは何も特別な事は言っていないさ。それに、ガンダムシリーズではそういう生まれの人間も居る。特に遺伝子操作で生まれた人間が主人公のシリーズもある。憧れこそすれ、憎悪や差別する気はないさ」

それではブルーコスモスと同じだ、才能の有無を卑下して排除など馬鹿げている

それにクロエが悪い人間ではないなんて分かりきっている事だ、今更生まれが何だと言うのか

「それに、力はただ力だ。どう振るうも、その本人に委ねられる。ああ、それとオレの力が羨ましかったって言ってたが、オレからすればクロエの方が羨ましいよ。生まれだとかではなく、今の役割がな」

「私の、役割？」

「そうだ。オレには戦う力があると言ったが、逆に言えば戦うしか能

のない人間だ。宇宙開発に協力すると言っても、オレが手伝える事なんて殆んどない。こうしてIS学園でジェガンを駆って戦い続けるしかない。その点、クロエは篠ノ之博士の研究の手伝いをしている。オレにはそんな頭はないからな、それだけの事を出来るお前が羨ましいよ」

かつて見た夢を追い掛ける事も出来なかったオレからすれば、今もその夢に向かって駆ける事の出来るクロエは眩しすぎる

オレが彼女を羨ましいと思える要因があるとすればそれだけだ

そして、ようやくクロエは笑ってくれた、まだ惚げだが心からの笑顔だろう

「同じだったんですね、コウタさんも。お互いに無い物を、お互いに羨ましいと思っていたなんて」

「まあな。そして、それが人間だ。オレも、クロエも、同じ人間だったって事だ。それと、オレの怪我に関しては改めて気にするな。そもそもEXAMなんてシステムのデータを保持していた事を言わなかった篠ノ之博士が悪い。ガンダムに関する知識ならあの天災とは天と地程の差がある。一言相談してくればそれがどんなシステムか、どんなメリットデメリットがあるのか、ちゃんと説明出来る」

誰かが一言伝えてくれるだけで防げた事故だ、オレ達の意志疎通がもつと上手くいっていれば起きなかつたさ

「それに、戦い方なら少しは教える事も出来る。オレも手探りだし、まだまだ修行中だけど、誰かに教えるのも復習になるからな。そこから新しい発見もあるかもしれない。まあ、何だ。もつと頼ってくれ。その方がオレとしても嬉しい」

「はい、その時はそうさせて貰いますね」

もうその笑顔に陰はない、ちゃんと自分を許せたのだろう

さて、そろそろだろうな

「話は終わったか？」

「居るとは思っていましたよ、織斑先生。例え故意による事故であったとしても、責任感の強い貴方がクロエを放っておくとは思えない」

クロエがオレと話したかったのか、理由は分からないがクロエが此

処に来るのに織斑教諭が居ない筈がない

恐らくは篠ノ之博士も近くに居るだろうな

「それが大人としての役割だからな」

「そうですね。クロエ、戦闘訓練の件、篠ノ之博士にも伝えておいてくれ。それと、ガンダム関連の技術なら一言相談して欲しい事も」

「はい、しっかりと伝えておきます。ではコウタさん、またお会いしましょう」

「ああ、またな」

こうしてクロエは織斑教諭と共に医務室から出ていった

これでオレが気掛かりだった件は全て解決した事になる

明日は丸一日精密検査だったな、それで問題なければ退院して明後日から普段通りに登校する

まあ、何にせよ今日はゆっくりと眠れそうだ、おやすみ



翌日、検査の結果特に異常は見られないという事でオレは退院、そして登校の日となった

それでもやはりというべきか、多少は体の疲労が溜まっていたのかもしれない、少しいつもより寝坊する形となってしまった

遅刻ではないが朝のSHRまでの時間も少ない、殆どどの生徒は既に教室に居るだろう

数日間入院していたからな、しかもこうして最後に教室に入るとか妙に緊張する

とはいえ早く入らないと織斑教諭から出席簿が頭に降ってくる、覚悟を決めて入るしかない

「おはよう」

「あ、紫藤くん！体はもう平気なの？」

「おはよう、紫藤くん！」

「しどっちおはよー」

教室の扉を開けて挨拶をしながら中に入ると、クラスの皆からそう声を掛けられる

温かく迎えてくれた皆に感謝し、取り敢えず何か返そうと思ったが

もう一つの扉から織斑教諭が現れた

「諸君、おはよう。知っているとと思うが今日から紫藤が復帰する。紫藤、休んでいた分のノートは誰かに写させて貰え」

「分かりました」

詳しく話をするのは次の休み時間だな、そう思いつつ席に着くとS
HRが始まる

だが今日はいつもとは違った

「それとSHRに入る前にまた転入生の紹介だ。入ってこい」

織斑教諭がそう言うのと教室の扉が開かれ、一人の少女が、見慣れたいつものゴスロリ系ドレスではなくIS学園の制服を身に纏ったクロエが現れたのだ

「自己紹介をしろ、クロニクル」

「はい、ラビットフット社所属、クロエ・クロニクルと申します。未熟者ではありますが、これからよろしくお願いいたします」

「席は紫藤の隣だ。紫藤、同じ会社の人間なんだ。お前が面倒を見ろ」
「りよ、了解です」

まさかクロエが入学してくるとは思わなかっただけに反応が遅れた

だが予想外だったのは、その後のクロエの行動だった

「織斑先生、その前に一つだけクラスの皆さんにお伝えしたい事があるのですが、よろしいでしょうか？」

「手短にな。まだ自己紹介の範疇だ」

「はい、それでは」

未だに教壇近くに立つクロエは一つ深呼吸をすると瞼を開いた、気味悪がられるからと閉じていたその眼をクラス全員の前でだ

「私は生まれつき、こうして目に普通の人とは違う特徴を抱えています。見た目ですが、見えないのではなく目が良すぎるのです。普段は眼を閉じて、調整したセンサーを使っているので問題ありません。その、気味が悪いと思われるとも思いますが、よろしくお願いいたします」

その事を告白するのにどれ程の覚悟が必要か、奇形は排斥されるも

のが多々ある、虐めに繋がる可能性だっただろう

だがクロエはそれを包み隠さずに話した、これから共に学ぶクラスメイト達に隠し事をしたくなかったのかもしれない

そしてもしも虐めになるならオレは守るつもりでいる、だがその必要はないだろうと思っている、このクラスならば

「気にしなくて良いよ、クロエちゃん！そんなの個性だつて！」

「そうそう。それに、お月様みたいで綺麗だし」

「月見うどん食べたいねー」

最後ののほんさんの言葉はともかく、他のクラスの皆も好意的に接してくれている

良くも悪くもこのクラスの皆は多少の奇異など気にしない

「皆さん、ありがとうございます」

「うむ、では席に着け、クロニクル。これよりSHRを始める。連絡事項を伝えるから、全員きちんと聞くように」

織斑教諭が教壇にて声を掛ける事で全員の意識が切り替わる

そしてクロエもまた自分の席、オレの左隣の席に着く

織斑教諭が幾つか連絡事項を話しているが、オレはこっそりとクロエに声を掛けた

「入学おめでとうな。これからよろしく、クロエ」

「はい、コウタさん。約束通り、色々教えて下さいね」

笑顔を浮かべて言うクロエ、色々あったがこれからは共に学ぶ仲間だ

「紫藤、私が話している時に余所見とは余裕だな。病み上がりでも私は容赦しないぞ。休んでいた分だけ他より遅れているんだ。取り戻す為にも気を緩めるなよ」

「了解です、織斑先生」

本当に色々あった

知らない世界に迷い混んで、ISという存在に触れ、こうして女子校とも言えるIS学園に通い学んで、ジエガンを駆って実戦を行っている、将来はかつて諦めた宇宙を目指している

これだけでも波乱万丈だ、平凡だった今までの生活とは比べ物にな

らない程に目まぐるしい時が過ぎている
だけでもこれだけはしっかりと見える、オレはこの世界に来て本
当に良かったと

R型の鼓動

14話 ボーイ・ミーツ・ボーイズ

六月頭、最初の金曜日、元は宇宙開発を目指し開発され現在は世界最強の兵器として君臨するインフィニット・ストラトス、通称IS、その扱いを学ぶ世界で唯一の学園であるIS学園の保有するアリーナでは二機のISが互いの武器をぶつけ合っていた

「クツ、流石に速い！それに、何なのよあの動きは!？」

一機は中国の第三代機である甲龍と呼ばれる機体であり、パイロットは茶色のツインテールをした小柄な少女、鳳鈴音だ

「例え不可視の砲撃と言えど、その発射タイミングが読めるなら！」

対する一機は全身が装甲で覆われた機体であり、本来ならばこの世界ではなく別の世界にてリアル系ロボットアニメであるガンダムシリーズに登場するモビルスーツという兵器だった筈の機体ジェガンであり、パイロットは本来ならば女性にしか動かせないISを駆る男であるオレ、紫藤康太だ

元は此処ではない別の世界の人間だったオレはある日、何の因果かこのISという兵器が存在する世界へと迷い込んだ

そして同じ世界から来たジェガンがISとなり、オレにもIS適性があるという事からこうしてパイロットとしてIS学園に通いながら学んでいる

今もISの操縦技術を磨く為に学園施設のアリーナにて試合の最中だ、今は鈴と一対一で真剣勝負をしていた

そしてオレのジェガンだが実は原作ガンダムの物とは違い手が加えられている

オレは装備を変更して様々な兵装を切り替えて戦うスタイルなので割りと機体の外見が一定ではないのだが、ベースとなる本体、その頭部がガンダムタイプの物に変更された

これは以前、とある事件の際にジェガンの頭部を破損した為に修復ついででの強化だ

まあガンダムタイプとはいえ実際にはジエガンD型エコーズ仕様の頭部をバイザーではなくガンダムと同様のデュアルアイセンサーになっているだけだ、狙撃用のセンサーが搭載されたバイザーが未使用時は額部に来るのでガンダム特有のアンテナは備えていない

機体本体はジエガンD型のままだし、ガンダム擬きだな

とはいえ大事なオレの愛機だ、今もこうして試合でオレの思いに応えて存分に力を振るってくれている

折角新調した頭部の性能も試したいし今は射撃戦で応戦している、リゼルと同様のメガ・ビーム・ランチャーを右手に持ち、左手はバズーカを持つ

バズーカの弾頭は通常弾頭と散弾を交互に入れてある、二つを撃つ事で鈴の動きを牽制している

通常弾頭の威力と爆風で牽制、散弾で動きを鈍らせ、弾倉にある分を撃ち尽くせば次はガトリングガンとミサイルランチャーの複合武器、ヘビーガンダムの持つフレーム・ランチャー（ハンドウェポン・ヘビー・ランチャーとも言うが）を取り出す

「高速切換!?ラビッド・スイッチアンタ、そんな技まで使えるの!？」

「ああ、これ高速切換だったのか。割りと無意識でやってたわ」

「ふざけんじやないわよ! って、ヤバッ!？」

「相手の得意な事を先回りして潰すのは戦闘の基本だ。甲龍は精々が中距離まで、距離を離せば龍咆の威力も落ちる」

後はミサイルとガトリングガンから放たれる大量の銃弾が動きを阻害、普段なら機動性の高い相手には当たらないメガ・ビーム・ランチャーも当てられる

結果、胴体部に直撃した事で絶対防御が発動、甲龍のエネルギーが尽きたのでオレの勝利が確定した

「安心しろ、レーザー兵器として使ったから貫通はしない」
「死ぬかと思ったわよ、このバカアツ!」

罵倒出来るだけの元気があんなら十分だろう、試合終了でジエガンを解除したオレは鈴の攻撃を避けながらピットまで戻るのだった

これが今のオレの日常だ、兵器となったISを駆りスポーツとして

試合を行い腕を磨く

今までの平凡な生き方とは全く違う日常だが、オレはこんな日々を気に入っていた



こんな生活になつてからというもの、生活リズムはかなり変化した
IS学園敷地内にある寮の自室、そこにあるベッドで目覚めたのは
朝の五時、まだ外は薄暗い

だがいつも通りの時間だ、オレは運動用のジャージに着替えると自
室から出て外に向かう、ランニングをするのだ

ISというものは戦闘機以上に加速を行いヘリコプター以上の機
動性を持つ

特にオレは自分のスタイルから基本的に激しい機動を行う事が多
くなる、故に体力という物は基本中の基本だ

なのでオレは朝に走る事にした、元はインドアな生活だっただけに
始めた当初はキツかったものの、今ではそれなりに慣れてきた

というのもこの世界にはガンダムシリーズが存在しないので趣味
と呼べる物が他に無くなったとも言える、それでも今までのアニメ作
品のデータは持っているので禁断症状こそないものの、その量は控え
めだ

その理由も分かっている、子供の頃の夢を、宇宙を目指すという夢
をまた追っているからだろう

ISをより上手く操れるようになるのもその一環、それ故に今のオ
レは何処までも努力出来そうな程だ

取り敢えず日課の五キロを走り抜く、最初は一キロで息切れしてい
たのだが、少しずつでもこうして成果は出ている、来月までには更に
倍に増やせそうだな

そうして自室に戻ってからはシャワーを浴びて朝食の為に食堂へ
向かうのだが、部屋に戻った頃にはルームメイトも起きている

「おはようございます、コウタさん」

「ああ、おはよう、クロエ」

自室に戻ると声を掛けてきた銀髪の少女、彼女の名はクロエ・クロ

ニクルという

オレがこの世界の人間ではない事を知っている数少ない内の一人であり、オレが所属している企業であるラビットフット社の人間だ尤も、そのラビットフット社すら最初はとある人物の隠れ蓑だったのだが、最近ではそれも意味はなくなっている

それはさておき、クロエがオレと同室で過ごしているのは五月に起きた事件の後、クロエが転入してきた日からである

あの日、元は倉庫だった部屋を改造して作られた一人部屋に住んでいたオレは放課後に副担任の山田先生から部屋の移動を告げられたそれまでの部屋も悪くは無かったのだが他の生徒達と同じ部屋に移る事となったのである

移ってみて分かるがシャワー室に簡易的なキッチン付きとそれまでの部屋とは比べ物にならない程に設備が整っていた

そして、同時にルームメイトとしてクロエが同じ部屋に住む事も伝えられたのである

最初は戸惑った、年頃の女の子と同じ部屋になるという事に緊張しない思春期男子が居るか、それもクロエという美少女と言っても過言ではない容姿の女の子とだ

最初こそぎこちない態度になったが五月の事件、クロエが乗る機体の暴走により起きた事件の後で互いの胸の内をさらけ出した後という事もあり、今ではそこまで緊張もしない

それで礼節を欠くという事はないが、それでも気の抜けた様子を見せる程度には落ち着いたのだ

「先程、東様より連絡事項があるとメールがありました。シャワーを浴びたら一度通信をしましょう」

「了解、手早く済ませるよ」

毎日ではないが時折こうしてクロエに通信が入る事がある

その場合は割りと重要な事を伝える事が多いので急いだ方が良い、シャワーを浴び終えたオレは学園の制服に着替えてクロエと共に通信を開く

『お、早かったね、こーくん。くーちゃんから話は聞いた？』

「はい、篠ノ之博士。連絡事項があるという事で手早く済ませました」
オレのISであるジェガンの待機形態となっているハ口から空中に投影されるディスプレイ、そこに映るのは不思議の国のアリスみたいなワンピースにウサミミを着けた女性、篠ノ之束博士だ

現在の肩書きはIS学園技術顧問とラビットフット社の社長兼技術主任となっているが、少し前まで世界中から追われていた人物である

理由は簡単で、世界を変えた兵器であるISの開発者でありISを構成する心臓部であるISコアを唯一製造出来る人物だったから

そんな人が何故こうして表舞台に出てきたかというのと五月の事件での後始末からである

不幸な連鎖で起きた事件だが本人の思惑もあり様々な偽装工作までしてIS学園に所属した、そこは国際条約でどの国の干渉も受けないという場所だからこそとも言えるが

なおその際にラビットフット社の社長だとか色々暴露してくれたお陰で何処から番号を知り得たのか知らないがオレにまで世界中から電話が、それこそ重要な役職の政治家や果てには国家の首相レベルの人間から電話が掛かってくるという出来事があったのだが割愛させて頂く、出来ればあまり思い出したくもないので

それはそうと、篠ノ之博士が連絡してきた用件の方に入るとしよう
「それで博士、用件とは？」

『そうだね、時間もないからね。まずは嬉しいニュースからだね。まずくーちゃんの機体が完成したのです！朝食の時に渡しに行くからね、遅れちゃダメだよ』

「ありがとうございます、束様」

クロエの機体というと、例の専用機か

以前の機体であるブルーティニー1号機はEXAMの暴走の末にオレと相討ちになりコアを初期化して解体されたが、今度の機体はその心配はないだろう

どんな専用機か、オレも意見を出したから知っているのだが直接見るまでの楽しみとしておこう

「これでクロエも放課後の訓練に本格参戦だな」

「はい、これで皆さんと同じように戦えます」

暴走事件の後で約束したのだ、オレがクロエに戦い方を教えると今までは学園の機体を借りていたがこれで気兼ねなく機体をぶん回せる、機体性能が低いなんて事もないからより無茶な機動も試せるというもの

『うんうん、クーちゃんが頑張る姿が見れて私も嬉しいよ。それと次に、こーくんの機体の強化改修ね。データをあげるから良く確認して。これも朝食の時にパパッと装備換装するよ』

合わせてディスプレイの隣に追加で表示されるデータ、それを見てオレは感嘆の声を上げる

「よく完成しましたね、ジェガンR型」

『そもそもD型の技術は第二世代でも初期の物と同等だったからね。でもちゃんと私が設定通りの性能に仕上げたから、真正面から第三世代機も倒せるよ』

そこに写っているのはジェガンの中でもF91に登場したR型だ。Aタイプとも呼ばれる指揮官クラスが搭乗する高機動型であり、殆んど最後に生産されたジェガンと言える

簡単にデータを見ただけでも主武装が大型化した代わりに威力の大幅に上がったビームライフルに両腰のビームサーベル、火力の増強したバルカンとシールド内蔵のミサイルが分かる

だが何より特筆すべきは今までのD型に比べて総推力が約2.5倍に跳ね上がっているという事だ

ガンダム本編ならば三十年程の時代が経っているので納得だがこれを短期間で用意した篠ノ之博士の頭脳には恐れ入る

『文句なしにジェガンの最高級モデルだよ。具体的に言うと、それだけ高性能な分、生産コストが五倍になりました。あと、エネルギー消費が少しだけ多くなってるから、長期戦は可能なら避けた方が良くかな』

とはいえ何処かで皺寄せは来るもの、技術の発展したガンダム本編ならば兎も角、今の技術で再現するにはコストという犠牲が必要とな

るらしい

ぶつちやけ、数が揃えられるならば性能約2.5倍の機体一機より素の機体五機備えた方が良く、ISは数を確保出来ないからこんな高コスト機でも売れるつちや売れるだろうけど

そしてエネルギー消費は従来の三割増しである、下手にエネルギー兵器をバカスカ撃てば苦境に立たされる事は間違いない

つまりは性能だけを追求したエース用のピーキーな機体という訳だ

「分かりました、迂闊に壊さないように善処します」

『そこは確実に保証して欲しいところなんだけどね。まあ良いや、取り敢えず良いニュースとかはこれで終わりだね』

「その言い方だと、悪いニュースもあるみたいですが？」

『流石はこーくんだね、その通りだよ』

どうせなら悪いニュースなんて無い方が良いに決まっているのだが、あるのだから仕方がない

今までの飄々とした態度から一変、真面目な表情をした篠ノ之博士は告げた

『新しい漂流物を確認したよ。全部で四つ、でも確保したのは二つだけ。残りの二つは何処かへと消えている』

漂流物、それはオレと同じ世界から流れてきたとされる代物であり、どういう訳か現実に則したデータや現物として流れ着くものだ

オレ自身もまた漂流物と呼べる存在であるが、そんなデータが消えたとなれば穏やかではない

「あの、束様。それは海に落ちたとかで、流されたとかではないのですよね？」

『残念ながらね、反応があったのはどっちも地上なんだよ。一つは場所が悪かったんだ。アメリカのアラスカ州ユーコン・デルタ国立野生動物保護区。どうにも漂流物って隕石みたいに落ちてくるみたいだね、人目に触れて今頃はもう回収された頃だよ』

「中身がまともな物である事を願いますよ。下手に使って世界が滅びました、なんて事になったら目も当てられない」

ガンダムシリーズにはかなりの数、世界をも破滅させられる力がある

まだ宇宙に出てはいないが初代ガンダムのようにコロニー落としを行えば地図が描き換えられる程の威力があるし、更にはそれにより世界中が荒廃したガンダムXの世界がある

無限に増殖し進化しあらゆる物を侵食する存在がいる、最終的には地球さえも吸収しようとしたデビルガンダムが居るGガンダムの世界がある

地球上の文明の全てを砂にした月光蝶のあるターンエーの世界がある

最大出力で地上へ向けて撃てば地球上の殆んど生物を死滅させられる巨大なガンマ線レーザー砲の存在するSEEDの世界がある

そんな人が手に入れてはならない力がある、もしも今流れ着いた物がそのような代物であった場合、下手すれば世界が終わるのだ

『今後はもつと目を光らせておくよ。無害そうな物なら放置するけどね。そしてもう一つ、これがもつと重要かもしれないね。落ちたのは南米のギアナ高地、それも人の手が入らないだろう奥地だね。にも関わらず、即座に消えた。もしかすると、私達と同じように漂流物の事を把握している人間が居るのかもしれないよ』

「確かに世界を一変させる可能性がありますからね。それにしても、ギアナ高地か……」

『何か思い当たる節があるの？』

「ええ、下手をすれば世界が滅ぶかもしれない物が」

恐らくギアナ高地が出てくる作品としてはこれ以上の物もないだろう、機動武闘伝Gガンダムの主人公ドモン・カッシュの修める流派東方不敗の修行の原点とも言える土地だ

そこに流れ着いたのにも因果関係があるとすればシャイニングガンダムとかのデータならまだ良い、だが前述のデビルガンダムのデータだった場合が問題だ

その事を篠ノ之博士に伝えると目の色が変わった

『成る程ねえ。分かったよ、そつちを最優先で追うね』

「お願いします。杞憂なら良いんですが」

漂流物の中身は分からないが、もしも知らずに使われた場合の被害の大きさが懸念される

そして追跡は篠ノ之博士に任せるしかない、己の無力さをこういう時に痛感するな

「そういえば、四つの内の残り二つは確保したんですか？」

『うん、そっちは海のご真ん中だったからね。それぞれ太平洋とインド洋だったよ。片方は設計データだね。それも聞いて驚くと良いよ、なんとマストドライバー施設の図面なのです！』

「マジですか!？」

マストドライバー、それは方法は色々だが物体を第一宇宙速度まで加速させる事で宇宙へ物資の大量輸送を可能とする技術だ

ガンダムシリーズにも作品を問わず多く登場している、オレ達の夢である宇宙開発に近づく為の鍵だ

『レールで加速して、多段式のブースターで第一宇宙速度まで持っていく方式みたいだね』

「SEED系のマストドライバーですかね。イズモ級とかの艦船か、独自に設計する必要がありますね」

恐らくはSEED世界でのマストドライバーだろう

とはいえそれに対応する船も必要となるのでデータの回収は続けなければならぬ

『その辺りはマストドライバー建設と同時進行かな。あと、もう一つは船かな？小型なんだけど、飛行能力があったりするんだよね。これは現物だったよ』

続いて写されるデータ、それは写真付きなのだがかなり大きめだ、それこそモビルスーツを一機くらい載せて飛行出来そうな程に

「ノックセルですか。クロスボーンガンダムに出てくるサブフライトシステムですね。大気圏突入能力と飛行能力があります。それと、見た目の通りに水上艦としても使用可能です。メガ粒子砲を四門搭載してるので戦闘も可能ですよ。あと、中にキャビンがあるので長期間の移動にも耐えられます。出来ないのは単独での大気圏離脱くらいで

すね。まあ、その高性能とは裏腹に『単独での地球侵攻を企む者』位しか必要としない微妙なセールスポイントの機体でもあるんですが。けどオレ達みたい少数で動くには良い機体には違いないですね」

控えめに言ってもこれだけで宇宙船として使えるのだ、外付けでブースターを作れば大気圏離脱も問題にはならない

なのでこれはかなり当たりの部類と言えるので、その辺りも説明しておいた

『おおー、見事に大当たりだね！それにサブフライトシステムっていう概念も面白い。ISの長距離移動用にも同じような物を作れそうだし、良いインスピレーションが湧いてきたよ。それと、ノッセルは少し改造してから学園の敷地内に備え付けておくれ。いざという時には貴重な移動手段だし』

なお改造の内容というのはモバイルスーツ運搬用の操作ユニットの除去との事だ

機体上面は完全に貨物輸送用に作り替えるとの事なので、本格的に移動拠点となりそうである

その後、残りはあまり今後の事に関係のない内容という事なので朝食の時に済ませる事にした

とはいえ、その朝食の時にも一つ問題はあったのだが

「おっ・やつほー、箒ちゃん！一緒にご飯食べよう！」

「……結構です。それと、他にも利用している人は居るのでお静かに願います」

食堂で会い、クロエの機体の受け渡しやオレのジェガンのアップデートが終わった後、雑談しながら篠ノ之博士との三人で朝食を食べていた時の事だ

長い髪をポニーテールにし凜とした表情の女子生徒、篠ノ之博士の妹である篠ノ之箒と会った

だが箒はそれだけを告げると別の席へと向かう

箒と同室であり、オレと同じくラビットフット社所属の男性IS操縦者である織斑一夏もまた、軽くこっちに謝罪をしてその後を追った篠ノ之姉妹の間の確執は多少は聞いている、篠ノ之博士がISを作

り出した事で世界中から追われるようになり、その家族である箒も幼少の頃から転校を繰り返す羽目になったと

そんな何年も会わなかった姉が突然現れてIS学園の技術顧問である、全ては分からないがその胸中は察するに余りある

そしてそれは八つ当たりであろうとも、その存在を黙っていたオレ達にも向いている

想い人である一夏はまだ例外のようだが、篠ノ之博士がラビットフット社の代表であると知ってからは接し方がぎこちない

放課後にアリーナを借りて行っていたISでの訓練にも顔を出さなくなつた辺りは頑なだ、それでも自分の感情を抑え込んでいるのか、話し掛ければちゃんと答える程度には冷静なのが救いか

「箒さんは、やはり私達の事もよく思つてないのでしようか……」

「その辺りは本人しか分かるまい。家族と言つても、その関係はそれこそ千差万別だ。互いを思い合う関係もあれば、殺意を抱いてしまうような関係もある。そしてそれは他人が軽々しく口を挟んで良いものではない」

全ては自分達でしか解決出来ないのだ、だからこそオレは何も口を挟まない

家族というものをよく知らないクロエに答えつつ、オレは篠ノ之博士を見る

一見、気にしていないように見えてどこか悲しげな様子を感じられる、この人は他人にはとても冷徹だが身内にはとことん甘いのだから「何にせよ、まだ面と向かつて話せるだけマシというものだ。オレが言うべき事ではないかもしれないけどな」

「あはは、こーくんが言うと言得力あるね……」

「時間が必要なんだと思いますよ。でも篠ノ之博士らしくもない。相手の考えなんてお構い無しに行くかと思いましたが」

「どうでもいい相手ならそうするよ。でも箒ちゃんにもっと嫌われるのは嫌だからね。ちゃんと見極めて、ね」

この世界に来た事でオレは親父やお袋に会えなくなつた

その事に関しては悲しくはあるが、どのように足掻いても元の世界

に戻る方法が分からない以上はこの世界で生きるしかない

そして戻れるのだとしても、オレは別れの挨拶だけをしてこの世界に留まるだろう、此処がオレの夢を果たせる場所だから

この世界に於ける表向きのオレの戸籍は孤児という事になっている、両親不明で今は篠ノ之博士が保護者という形になる

それ以前の記録は無い、そもそも存在していないのだから当然ではあるのだが

そういえばオレのプロフィールが明らかになってから、両親を名乗る電話が掛かってくる事もあったか

大方、IS操縦者という経歴に釣られた人間だろう、当然ながら偽物と分かっているので直ぐに切ったがな

そこまで考えて、オレは息を吐いた

「難しいですね、家族って」

筈がこれからどうするのかによるが簡単には収まるまい

そこからは気分を変える意味でも話題を変えて雑談をした

朝食を終えて教室に到着、先に来ていたクラスの皆へと挨拶をして授業に備えておく、今日の一時限目はISの実技だったな、それも一般生徒も本格的に実機を使つての授業だったと思う

篠ノ之博士と話していたから少しギリギリだったか、直ぐにでもSHRが始まりそうだな

「諸君、おはよう」

『お、おはようございますー』

思った通りというか一年一組の担任である織斑千冬教諭、その後ろに副担任の山田先生も続く

山田先生はともかくとして、織斑教諭の気迫により教室内の空気が一気に引き締められた

黒のスーツに身を包んだ織斑教諭だが第一印象は怖いという人が多いだろう

実際にとっても厳しい人なので恐れられている、それと同時にISの世界大会であるモンド・グロツソの初代優勝者でもあるのでカリスマ性も高いので主な感情は畏怖だろう

その織斑教諭は前の教壇に着くとSHRが始まった

「今日からは本格的な実技訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業となるので各人気を引き締めるように」

そして予想通りというか、今日の実技に関する話題が出た

その後は授業で第二グラウンドに学校指定のISスーツ着用の上で集合と注意事項になる

なおISスーツを忘れた場合は水着で、それも忘れた場合は下着姿らしいが、流石にISを学ぶ学園なのにスーツの用意を忘れる人間はいないだろう

「ああ、それと山田先生は去年二回程下着で授業を行った。悪い例なので全員真似しないように」

「お、織斑先生、その事は!?!」

副担任の山田先生だが見た目は童顔で身長も低めなので同年代、下手をすると年下にも見られる

そしておっとりした性格でもあり生徒からも親しまれている、だからだろう、織斑教諭が暴露したエピソードを聞いてクラスの誰もが思っただろう、『山田先生ならあり得るな』と

「では山田先生、ホームルームを」

「え、ええっ!?!」

え、この状況で何事も無かったかのように山田先生にバトンを渡す?

いや、きっと織斑教諭もストレスが溜まってたまには発散したかったんだろうな……最近では織斑教諭の部屋に何処ぞの天災兎が我が物顔で出入りする事が多いらしいし

そうして織斑教諭が取り合わないまま山田先生は若干涙目でホームルームを続けた

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します!しかも二名です!」

「え……」

それは誰の眩きだっただろうか、だがその直ぐ後にクラス中が驚きの声に包まれる

「また転校生か。クロエ、何か聞いてたか？」

「いえ、私も初耳です」

「という事は篠ノ之博士にも知らされていないという事か」

始めから教える気がなかったのか、それとも教える暇がない程に急な事だったのか分からないが、また転校生、それも二名もとなるといきなりな話だな

そう考えていると教室のドアが開かれて件の転校生が現れて、クラス全員が押し黙った

それはそうだろう、二名の転校生の内の片方は男の格好をしていたのだから

15話 転校生

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、よろしくお願いします」

シャルル・デュノアと名乗った人物、男性の格好をしてはいるがその容姿は中性的に過ぎる

だがシャルルというのは男性名だ、となれば男性なのだろう

「お、男……？」

誰かが呟いたそれは他に音が聞こえない中ではよく聞こえる

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々が居ると聞いて本国より転入を

——」

まあ既にオレを含めて一夏とその兄の二秋、三人も男性IS操縦者が居るのだから世界でもあと二、三人居たとしても不思議ではないかそれにしてもオレ達とはまた違うタイプの男だな、華奢だし、線も細いし、何より動きが礼儀正しく見えるのに気取ってはいない自然体だ

貴公子や王子様といった言葉が浮かんでくるような人間だ、おまけに美形ともなればな、顔自体は平凡なオレからすれば羨ましい

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああああ！」

そして誰かの叫ぶ声が聞こえる、だがそれは黄色い歓声というもので、教室中央辺りから放たれたそれは直ぐに周囲に伝播した

「男子！それも四人目の！」

「しかも美形！守ってあげたくなる王子様系の！」

「熱血系イケメンの織斑一夏くんとも、陰のあるイケメンの織斑一秋くんとも、傭兵風味な紫藤くんとも全く違うタイプ！」

このクラス、というかこの年頃の女子は元気なものだと思いが最後の方はよく分からない、何だよ傭兵風味って

傷か？この左頬にある大きな傷からその印象なのか？

そしてしれっとオレだけイケメンって評価抜けてるよな、自分でも

美形ではないって分かつてはいるけどよ！

「静まれ馬鹿者共が！」

しかしそこに織斑教諭の一喝が炸裂、雷に打たれたかのように教室が静まり返る

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介も終わってませんから！」

既に静かです、そう心の中で思ったが口には出さずにおく、後が怖いから

そう、転校生とはもう一人居る、そちらは女子だがオレは此方の方にこそ注目をしていた

その人物の事は知っている、前に一秋から言われた手掛かりをヒントに篠ノ之博士に頼んで調べて貰った人物だからだ

腰まである長い銀髪だがそれよりも顔に着けてある眼帯に目が行くその人物、隠されていない右目は赤いがその目の温度は氷のように感じられる

そして何よりも周囲と明確に違うというのはその身に纏っている雰囲気だろう、触れれば斬れる刃のような雰囲気を持つ人間、背は低く鈴といい勝負だろうその人物の名はラウラ・ボーデヴィツヒというドイツ軍IS配備特殊部隊隊長、階級は少佐、それが彼女の役職だったと思うのだが、まさか現役の軍人がIS学園に来るとはな

「挨拶をしろ、ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

「此処では織斑先生と呼べ。私は既に教官ではなく、此処ではお前も一人の生徒に過ぎない。分かったな？」

「了解しました」

教官、そういえば篠ノ之博士から織斑教諭は一時期だがドイツにて教官を務めていたと聞かされたな

確か、一秋が誘拐された時にドイツ軍に協力して貰ったのかなんとか

他のクラスの皆はそんな軍人然とした（職業軍人なので間違いはないのだが）様子に啞然としている中、ラウラ・ボーデヴィツヒは堂々とした様子で一歩前が出る

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

告げられる名前、だが続きを待っていても口を開く様子がない

流石に見かねて山田先生がフォローに入る

「あの、以上ですか？」

「以上だ」

取り付く島もないとはこのことか、また山田先生が涙目になっているがお構い無しにボーデヴィツヒは教室を見渡し、そしてクロエを見て少し驚いたような表情を見せたが直ぐに取り繕い、先頭に座る一秋のところまで視線を止めた

クロエを見れば少し苦しそうな表情をしている、何処と無く似たような雰囲気を感じてはいたが、それが原因だろうか

そしてパシンッ！と何かを叩くような音が聞こえそちらに目を向けるとボーデヴィツヒが一秋の頬に平手打ちをしていた

一秋も何がなんだか、といった表情で固まっており口を開けて呆けている

「織斑一秋、私はお前を認めない。お前があの人の弟であるなど、決して認めるものか」

「え……」

「フンッ、言い返す気概もないか、腰抜けめ」

そう言い残してボーデヴィツヒはオレ達と同じく最後列の空いている席に腰掛ける、廊下側に座っているオレ達とは明確に距離を空けて窓際の席にだ

殆んどの人間が呆気に取られている中、二回手を叩く音が聞こえ、全員が覚醒する

「えー、予想外の事もあったがこれからは通常通りだ。それとボーデヴィツヒ、転校初日からあまり問題を起こしてくれるなよ」

「……善処します」

「そこは確約しろ。各自着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で授業を行う。では解散！」

何はともあれ時間とは有限である、そして授業の時間も迫っているので素早く行動に移す必要がある

だがその前にオレはクロエに声を掛けた

「クロエ、何かあるなら相談に乗るぞ。今は無理だが、また後でな」

「それは……はい、今日の放課後、寮でお話ししますね」

「分かった」

明らかにクロエとボーデヴィツヒには何らかの確執があると見た

それが何かは分からないが、もしかするとクロエの出生の事まで話が及ぶかもしれない

それはあまり他人に話して良いことではない、だから寮で話そうとなつたのだろう

とはいえ相談してくれるようになっただけでもオレとしては信頼された証拠だ、それは仲間として素直に嬉しいものだ

「康太、そろそろ行くぞ！」

「分かった、今行く！」

此処からは移動の時間だ、クロエの他にも一秋の様子やら四人目の男子であるシャルルの事も気になるが今は更衣室までダツシユしなければ

という訳でいつもの如くオレと一夏、一秋の三人に加えてシャルルの四人でアリーナを目指す

目指すのだが、この学園の女子はやたらと活発というか好奇心旺盛なので最速で駆け抜ける必要があるのだ、そうでなければ――

「ああつ、転校生発見！」

「チイツ、もう見付かったか！」

捕まれば質問責めにあうのは間違いない、シャルルを見付けた女子生徒の声に反応してか他のクラスの女子が集まってくる

別に質問に答える程度なら良いんだが授業に遅刻するのは避けたい、特に織斑教諭は言い訳も何も関係なしに罰としてグラウンド十周とか普通に言うからな

なので後ろから騒がしい声を聞きながら教室の方から離れてから階段を降りて外へ出る

「ね、ねえ、何でこんな事になってるの!？」

「そりゃ、転校生だぞ？それも男。ならあの年頃の女子が興味を示さ

ない訳がないだろう！」

走りながら、少し余裕が出来たからかシャルルが訊ねてくるのを一夏が律儀に返す

なお今はオレが先導、一夏が次で、学園の構造をまだ把握していないシャルルの手を一夏が引き、後ろを一秋が詰めている

「あ、それもそうか。けど、いつもこういうの？」

「今日はいつもより騒がしいな。オレも、ちよつと前までは壁際で気配消してれば見付からずにやり過ごせたんだけどなあ」

具体的にはブルーデイスティニーの暴走事件の後からその辺りの手が使えなくなった

平凡な顔だから見付からなかったんだが、どうやら左頬の傷が大きな特徴となつたらしい

傷がある事は男としての勲章だから構わないんだが、こういったデメリットがあるとは思わなかった

とはいえこれはこれで良いトレーニングになる、最近更に脚力が鍛えられている気がするぞ

と、そうこうしている内に更衣室に到着、ドアの横の端末に触れてドアを開放する

「つて、時間が少ないな。手早く済ませようぜ！」

「あ、オレのスーツ新型なんだつた……」

手にあるケースの中身、それは以前までなら白の連邦軍軽装ノーマルスーツだったのだが、今朝のジェガン強化の際に共に渡された物だ
何でも、今後の事を見据えて今の内に慣れておくように、との事だった

中身を確認しきつてないので不安になるが恐らくはノーマルスーツだろうし手順は一緒だろう、そう思いケースを開く

「こ、こいつは!？」

え、これ着るの？確かに今後の事を考えたら必要になるかもしれないけど、手早く着替えられるかな？

……無理だな、急いでもいつもより手間取るのは確実だ

「あー、三人とも先に行つてくれ。ちよつと手間取りそうだ」

「うん？まあ、分かった。康太も急げよ」

「自分はもう終わったが、それなら先に行くぞ」

むむ、一秋は既に中に着込んでいたか、要領が良いな

というかオレもそうしたいけど、ノーマルスーツって軽装でもそれなりの厚さがあるから無理なんだよな、今は三分あれば問題なく着れるけどさ

「シャルル、着替えないのか？」

「えっ？あつ、着替えるよ！で、でもこっちは見ないでね……」

「野郎の着替えを覗く趣味なんてない。というかオレにそんな余裕はない」

えっと、基本はノーマルスーツと一緒に、このアタッチメントに固定していくのか

それで次は……えっ、これも装備の一つなのか？

授業に持って行って良いのかな……けど、同じケースに入ってたって事は必要って事だよな？

取り敢えず今はアタッチメントを埋めて……よし、後はこれをスリングに掛けて、ポーチにはマガジン詰めて、よし！

て、時間がギリギリになってるし、一夏もシャルルも既に先に行ってる！

いや、まだだ、まだ終わらんよ、今から全力ダツシユすれば間に合う！

おっと、このバックパック使えば良いじゃないか、これなら余裕だ

◆ 「で、何か言い訳はあるか？」

「プロフェッサーの新型が悪いと思います」

取り敢えず授業には間に合った事は言っておこう、だがオレはグラウンドに正座させられている

というのもバックパックを使って、文字通り飛んできたのが問題らしい

「ハア……授業には間に合ったが、次からはそれを使うな。それと、何だその装備は」

「恐らく、以前の教訓を元に装甲をスーツに施したんだと思います。一般的なライフル弾ならまず貫通されないと説明書にあります」

新型のノーマルスーツだが、エコーズ隊の物と同様の代物である
即ち、防弾性のあるアーマーと一体化しているのだ

おまけに腹部にはマガジンを収納可能なタクティカルベルトに加えて肩にはエコーズ隊のサブマシンガンのスリングを使って掛けていた

そして背部にはガンダムシリーズでお馴染みの宇宙で移動する用のバックパックだ

一年戦争よりも小型化しているし、地上でもそこそこ飛行可能となる代物だ

「お前は一体何と戦っているんだ？いや、良い、どうせアイツの差し金だろう」

「最近この銃を使った実弾射撃訓練が追加されました。生身でもある程度戦えるようにとの事です」

具体的にはいざという時にクロエの護衛が出来るように、との事らしい

加えてなんか訓練用ロボットとか作って格闘戦の訓練まで始まったからな、本当にオレは何処を目指しているのだろうか

とうか確実に歩兵としての訓練である、ISを展開不可能な状態での訓練とのお題目だが、篠ノ之博士がオレに何をさせるつもりなのか、割りと不安が尽きない

分かるのは確実にパイロットとしての能力にも反映可能である技能が身に付けられ、平凡な人間から兵士へと変わっている事くらいか
「……このくらいにしておくか。気を取り直して授業を始める。本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する！」

『はい！』

「まずは全員の前で戦闘の実演をして貰うか。紫藤、さっきのペナルティだ。お前がやれ」

「オレですか？まだ新型に換装してから一度も乗ってないんですが」

「それで敵が待ってくれるか？いいからやれ」

「了解……」

整列している中から出てジェガンを展開、飛ぶのは無理だが腕や脚を動かして調子確かめる

前のD型より反応が僅かだが早い、この辺りのラグにも気を付けないとな

それで、対戦相手はと思っていると上の方に反応があった

同時に、空気を切り裂くような高音も聞こえてくる

さては上方からの奇襲か、そう思い全速でバックブースト、後方へと退避した

「うおおおおおっ!?!」

尤も、脚部の推力だけでも関わらずとんでもない速度が出て振り回されたのだが

メインブースターを点火して制動を掛けるのも、その推力が予想外過ぎて直ぐに止めても慣性までは殺せずたたらを踏む事になってしまった

そしてようやく落ち着いた所で見たのは地面に仰向けで倒れていた山田先生と、その豊満な胸へと片手をつく形になっている一夏だった

「ふむ、これは」

確実に死んだな、一夏が

多分だが落ちてきた山田先生に巻き込まれてユニコーンを展開したのだろう、それでも勢い余ってもつれている間にあのような体勢になったか

一夏に非はなくともユニコーンの手越しにでも山田先生の胸を掴んでいる事になりなく、そしてそれに対して嫉妬の炎を燃やしている人物が二人、内片方は専用機持ちだ

柄の所で連結された二本の青竜刀型の武器、双天牙月が一夏を狙って飛んでいく、下手人は当然ながら鈴だ

自らに近付いてくる双天牙月に気付いた一夏は大きく仰け反って回避したが、双天牙月はブーメランのように帰ってくる

初動が遅くブースターも加速には時間が掛かる、まずかわせないが

動いたのは意外な人物だった

今の山田先生が纏っているのはラファール・リヴァイヴ、つまりはISである

その山田先生がライフルを取り出して二発発砲、それだけで双天牙月は方向を逸らされて一夏には当たらなくなった

おまけに、山田先生は倒れたまま上体を僅かに起こしてその射撃精度なのだ、誰もがポカンとした表情を浮かべている

そして、織斑教諭がしてやったりといった顔をしながら口を開く
「これでも山田先生は日本の元代表候補生だ。今の射撃程度なら造作もない」

「む、昔の話ですよ。それに、代表候補生止まりでしたし……」

起き上がり、ずれていた眼鏡を直している山田先生

その様子には先程までであった鋭さは微塵も感じられないが、さっきの動きを見て油断するのは余程の馬鹿だけだ

「それで紫藤、準備は……聞くまでもなさそうだな」

「はい。機体の慣熟云々言ってもらえませんか」

もしもこのレベルの敵が実戦で現れて機体に慣れていませんでした、なんて言ったらられるか

これが訓練で良かった、そう思える相手であり、満身に扱えない機体でも食らい付けるか、良い経験になりそうだ

右手に強化型ビームライフルを、左手にシールドを、基本的なジェガンの装備を構える

それは山田先生も同じであり銃を手に構えた瞬間、その眼は戦う者のそれになった

そして、それを確認すると同時にオレはビームライフルを撃ち、空へと飛翔する



そうして授業の中で始まった戦闘の実演、だがそれは当初の予定に反して長丁場になっていた

というのも中々に決着が着かず、今も上空で砲火の応酬が繰り広げられているからだ

「凄い……」

それは誰の言葉だったのか、ポツリと呟かれた言葉はしかしその戦闘を見ていた生徒の殆んどが抱いた心境だった

以前に一組のクラス代表決定戦にて見た事のある生徒も多い康太の機体であるジェガンは当時のD型から機動性に秀でたR型へと換装されており、その性能は以前とは比べ物にならない程に高い

今はそのあまりの性能にパイロットである康太が振り回されているのが見てとれるが、その全ての能力が山田先生のラファール・リヴァイヴを上回っているのが分かる

ならば対する山田先生はというと、全ての性能が劣った機体であるにも関わらず康太と互角以上に渡り合っているのは単にパイロットの腕があるからだ

そんな対極にある二人は高速で移動しながらも砲火を交えている康太は機体に振り回されつつも射撃は的確であり遠くに外れるといった事はない、同じく山田先生も射撃精度が高く先程の地上での一件が単なるまぐれ当たりではないという事を証明していた

康太はかなりの数を被弾していたが全て装甲に阻まれてダメージは少ない、そしてジェガンの装甲を抜けられそうなミサイルやバズーカは確実に避けるように注意しているので致命傷も負ってはいない
全ては機体性能が違うから、それを理解している康太は納得すると同時に喜んでいた

(ジェガンと同じ汎用性に優れた機体、そして正確無比な射撃精度、それも高速機動を行いながらだ。これを学ばずにして、何を学ぶ)

自らの成長するべき先、それを目の当たりにして学習しようとしているのだ

これがもしも同じ機体であつたら自分は何度撃墜されているか、それだけに康太は一時たりとも見逃さないとその一挙一動に注目している

そんな二機の様子を眺めながら地上に居た千冬は生徒達の方に声を掛ける

「さて、見ながらで良い。解説といこう。デュノア、山田先生が使つて

いるISについて解説をしてみろ」

「あつ、はい」

未だに上空で繰り広げられている戦闘、それを見ながらだがシャルルは上で銃声が鳴っていても聞き取れるしつかりと声を出して解説をしていく

「山田先生の使用されているISはデュノア社製のラファール・リヴァイヴです。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です」

「ふむ、そこまでで良い。では次に紫藤の機体を、お前の私見を含めてで良いから解説しろ」

その言葉にシャルルは一瞬だけ言葉に詰まるが、直ぐに気を取り直して解説をする

「紫藤くんの機体はラビットフット社製のジエガンです。分類はラファールと同じく第二世代型であり、現時点で最新の第二世代型ISですが、その基本性能は現行の第三世代型ISにも劣りません。またラファールと同様に安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装がありながら、全身装甲というスタイルと採用されている新型装甲により実弾兵器に対して高い耐久性があります。それでいて推力も高いので機動性にも優れ、性能で言えば、その、ラファールの上位互換になると言えます……それから、さっきの会話からも今の機体は量産されている物とも違い、より上位の機体だと思われます」

「よろしい。確かにジエガンの方が性能では上だろうな。おまけに特性も似ている。だがそれが全てではない、見てみる」

「えっ?」

千冬に言われて上空の戦闘を注視したシャルル、その視線の先には大口径ライフルにより体勢を崩されたところをバズーカに吹き飛ばされ墜落してくるジエガンの姿があった

康太も空中で立て直し減速して着地した後でビームライフルを向けるが、そこで千冬が耳元のインカムから二人に待ったを掛ける

「二人とも、そこまでで良い。此処で切り上げる」

「……了解」

「ふう、かなりヒヤヒヤしましたあ」

ジエガンを解除した康太は大きく呼吸を繰り返し、山田先生は地上へと着地してきたが少し息が上がっている程度、そこでも体力に大きな差がある事を示していた

「宜しい、では今の戦闘を踏まえて解説を始めるとしよう」



高速機動戦闘による疲労はあれど、気分としては悪くない、そんな中でオレは整列している他のクラスの中に戻り織斑教諭からの解説を聞く

「さて、諸君も見ての通りあれが本格的なISでの戦闘だ。見ていて色々知りたい事もあると思うが、紫藤、先程の戦闘を貴様はどう反省する？」

「前までの機体性能との差に振り回されました。もし機体が同型なら。いえ、山田先生の武装がジエガンの装甲により通じる物であればより早くに撃墜されていました」

「その通りだ。諸君も知つての通り、機体の性能だけが全てではない。先程のように機体性能を活かせなければ宝の持ち腐れだ。逆に卓越した技量があれば機体の性能差を覆す事も出来る。今は無理でも、お前達の成長次第では学園の練習機で専用機持ちに勝てるかもしれないぞ」

山田先生のやったようにな、と続けられる言葉だが実際にラファール・リヴァイヴ、それも山田先生が過去に使っていた仕様ではなく通常の何もカスタムされていない機体のだ

それと、他にはあるか、と織斑教諭に聞かれたが、素直に答えるでしょう

「高速機動戦闘にも関わらず、射撃精度が高かったです。しかも此方の攻撃は当たってません。流星は銃^{キリング・シールド}央矛塵と呼ばれていたエースだと思いましたが」

「そ、その名前は忘れて下さい!!」

オレが口にした二つ名を聞いた途端に顔を真っ赤にする山田先生、

他の生徒の皆は知らないのか首を傾げている

まあそうだよな、代表候補生だったというのも知らなかったのだ、四枚の楯を備えたラファール・リヴァイヴを駆っていたエースとは思わないよな、普段の様子を見ていると

「その話は置いておけ。それで、山田先生からは紫藤の動きについて何かありますか？」

「あ、はい。えっと、まだ新型に慣れていないって事を差し引くと、基本的な能力は高いと思いますよ。武装も強力的になってましたし、後は慣れだけです。勿論、更に能力を伸ばす為の努力も怠ってはいけません。今回は見てませんけど、確か全体的に格闘戦で技量が劣っている所があったと思うので、そこもカバーしなければなりませんよ」

「精進します……」

全て自覚あるだけに反論出来ないもんなあ、反論する気もないけど山田先生に言われた通り、暫くはR型の機動性に慣れなければならぬ、格闘戦は一夏や一秋、筈に鈴と、周囲のレベルが高いのもあって射撃で仕留めようとする事が多かったからな、最近は武器によるリーチの変化にも対応されるようになってきたから小手先の技術ではなく純粋な技量の向上に努めなければ

「よし、ではこれより実際に実機での訓練に移る。訓練機を用意しているので班に別れて訓練をする。全員搭乗し、午前中までには歩行が出来るまでになるように。専用機持ちは各班のサポートだ。内訳は織斑兄弟で一つ、紫藤とクロニクルで更に一つ、残りのオルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィツヒの四名は一人でサポートに回って貰う」
それでは均等に班に別れる、と織斑教諭が言うのだがそのような適当な決め方では後で何が起こるか予想はつく

「織斑一夏くん、私と一緒に！」

「一秋くんの雰囲気が好きです！」

「デュノアくん、一緒に訓練しよう！」

「紫藤くんが一番優秀そうだから！」

等々、色々な理由で男子が居る班に集まろうとする

これには流石に織斑教諭も頭を痛めたのか一つ溜め息を吐き、次に

一喝する

「全員名前順に並べ！手間を掛けさせるな！」

鶴の一声、とは違うな怒号に恐れて動いているだけだし

とはいえそれにより綺麗に並んだので良しとしよう、オレがクロエと組まされたのはそれぞれの経験不足からだろうな、他の全員は代表候補生だし、役職無しはオレ達くらいな物だ

とはいえ任された以上はやるしかあるまい、全員が歩くだけでも出来るようにサポートしないとな

16話 ライトアーマー

取り敢えず班分けが行われ、オレが割り振られた班の方に向かう

六機用意されていた訓練機の内の一機も既に確保済みとの事だったが、その機体を見てオレは納得する

「ジェガン・ライトアーマーか。確かにオレが教えるには打ってつけだな」

用意された訓練機の内訳は打鉄が三機、ラファール・リヴァイヴが二機、そしてジェガン・ライトアーマーが一機だった

その三機の中では一番の新型であり一機のみだから競争率も高かったらしいがオレという要素で勝ち取ったらしい、そう班の一人であつたクラスメイトの四十院さんが語っていた

「しどっちが教えるならこの機体だよね」

「まあな。軽く説明するが、全身装甲機であるジェガンを現行のスタイルに再設計した機体だ。ベースは汎用性に長けたD型で、従来の機体に慣れたパイロット向けになっている。統計で被弾率が多い箇所のみ装甲で覆い、他は可能な限り装甲を外し軽量化した。だから防御力は落ちたが機動性では上だ」

同じ班ののほほんさんに答え、軽く説明をしていく

この機体が開発された経緯としては出荷された機体を実際に使用した他のパイロットからの要望もあつた

全身装甲だと圧迫感がある、直接風を感じなければ機動が取りにくい、今までと感覚が違いすぎるといった要望が寄せられたので開発され、そして概ね満足する評価を得られた

それに機動性が高いからな、キャノンボール・ファストといったレース系の装甲より速度が重視される競技であればオレでもこの機体を使う

このライトアーマーも篠ノ之博士から学園に提供された機体の内の一機だ、五機の内三機が通常のD型、二機がライトアーマーになっている

それとあまり関係ない話ではあるが顔が見えないから華がないと

かいう意見は無視したがな、寧ろISジェガンとは装甲が売りの機体なんだから

「さて、取り敢えずは名前順に乗って歩いてみるか。オレ達もISを展開するな。クロエ、手伝い頼む」

「はい、分かりました」

オレはジェガンを身に纏い、クロエも今朝に篠ノ之博士から与えられた専用機を展開する

基本的な色は黒で、所々に金が入るカラーリングの機体、一夏のユニコーンと同様の形状を持つ装甲の機体、ユニコーンの2号機、バンシイだ

とはいえその外見は大きく変わっている、どのように違うのかと言えばオレのジェガンと、ジェガン・ライトアーマーくらいに

理由としては、篠ノ之博士が『くーちゃんが使うなら無骨な機体より可愛さを損なわないデザインがいいよね!』と言っていたからだ

なのでクロエの乗るバンシイはモビルスーツというよりMS少女といった方がしっくりくる姿となっていた、それを言えばジェガン・ライトアーマーも同様なのだが

「おー、くーちゃんの機体は黒いね。でも、綺麗な配色がされてる」

「ありがとうございます、布仏さん」

「のほほんって呼んで良いよ。私も勝手にくーちゃんって呼んでるしね」

篠ノ之博士と同じニックネームを偶然だがのほほんさんは呼んでいる

その事で篠ノ之博士がちよつと気になったのほほんさんの事を調べてたけど『見ると敵意が抜けてく変な子』との評価だった辺り、のほほんさん恐るべしといったところか

まあそれはそうと訓練も始めないと、最初は四十院さんから搭乗者はなく、そして待機形態にもなっていないジェガン・ライトアーマーは膝立ちのような姿勢になっている

そこに四十院さんが入り込み、機体を起動していく

「まずは立ってみるところから、手助けは？」

「なんとか頑張ってみます。けど、普段とは手足の間合いが、きやつ!？」

「おっと」

立ち上がろうとした四十院さんだが生身とは歩幅も何もかも違う為、感覚の差からか後ろに倒れそうになったので手を伸ばして支える

周囲の人間、それこそクロエも初めてISに乗って即座に飛行までしていたから此処まで馴れていない人間というのは初めてだな、まあクロエは他に持つてるISで飛んだ事があると言っていたが

「大丈夫か？慌てなくていい、まだ時間はある」

「は、はい。その、少し肩をお借りしても宜しいでしょうか？」

「ああ、何かに掴まってた方が立ちやすいからな。重量もパワーもオレの機体の方が上だ、問題ない」

ついでに足裏のツメを使って地面に機体を固定すれば安定性は更に増す、立ち上がるのに支えるくらいは簡単だ

四十院さんも今度はゆっくりと動作を確認しながら立ち上がり、しっかりと視線を前に向けた

「や、やりました！立てましたわ！」

「おめでとう。普段と比べて視点はどんな感じだ？」

「少し高く感じます。これが普段、専用機持ちの皆さんが見ている景色なのですね」

初めて乗ったIS、そこから見える周囲の様子に感激している四十院さん、だがISから見える景色はそんな物だけではない

「このまま練習すればいずれは飛行訓練にも入る。その時の景色はこんな物の比じゃないぞ。自分の意思で、自由に宙を舞う。それも飛行機とかの乗り物よりも身近に風を感じてな。今で感動していると、その時には泣くんじやないか？」

「そうですね。でも、紫藤さんは全身装甲の機体で風を感じるのですか？」

「たまには気ままに飛びたくもなるさ。その時には頭部装甲を別の

に、それこそ外したりライトアーマーと同型にしたりな」

試しにライトアーマーの頭部パーツと同じ物を装備してみる

ヘルメットの様に頭に装着された装甲と、ゴーグルのように配置されたジェガンのバイザー部分がある

逆にフェイスクバーは無くなっており、他のパイロットからの要望があつた風を感じるといふ点に対応している

オレも実際にこの頭部パーツを使って気付いたが、風を味方につけて飛行するなんて芸当は全身装甲では分からなかつた要素だ

「しどつちく、教えるならちゃんど相手の目が見えるその方が良くないく？」

「あー、それもそうだな。普段のパーツも、使ってる時は全面モニターだから圧迫感もなく、気付かなかつたし。ありがとう、のほほんさん」

「良いよく、私もその方が良いからね」

という訳で頭部パーツをライトアーマーに変更して訓練を続行する事になった

四十院さんも立てたし、次は歩行訓練だな

「気を取り直して、まずはゆっくり、一歩ずつ、確実に歩いてみようか」
「はい」

「歩幅にも差があるから、足元を見ながらね。慣れると生身と変わらずに動けるけど、まずは基礎からだ」

流石にそこは分かっているのか、四十院さんはゆっくりと足を前に出す

持ち上げて、前に動かして、下ろして、一歩を踏み出すのに一々動作を目で見て確認しながら

でもそれで良い、いきなり戦闘可能な一夏や一秋の方がおかしいのだ、戸惑つて当たり前、初心者であればこんな物だろう

その後は倒れないように手を貸しながら少し歩き、元の場所まで戻る、一先ずはそこまでにしておいて次の人に交代だ

「それじゃあ次の人は――」

「ねえねえしどつちく、これどうやって乗るの？」

「どうやってって、普通に……あつ」

次の人に気を取られていたからのほほんさんに言われて気付いた、ISが立ったまま解除されていた

織斑教諭も座らせて解除するように言ってたからな、この状態だと次の人が乗り込むのに苦労する事になる

「も、申し訳ございません！私がつい夢中になってしまったせいで……」

「いやまあ、気持ちは分かるから。うーむ、これならシールドを横にして階段にするか」

そのISを立たせたまま解除してしまった四十院さんは謝っているが、初めて乗ったISに興奮して忘れてしまったのだから無理はない

そんな事を責めるくらいなら乗り込む方法を考えた方が建設的だしな

シールドでの階段は、これもちよつと高さが厳しいか？

「ねえねえ紫藤くん。それならお姫様抱っこで運べば良くないかな？」

「は？いや、どうしてそうなった？」

「だって、ほらアレ」

と、同じ班になった谷本さんの指差す方を見れば織斑兄弟の班があり、そこでは一夏が他の生徒を抱えてISに乗せている姿があった

どうやらオレ達の班と同じように立たせたままISを解除してしまつたらしい

「成る程な。確かに、普通の人間が乗るには厳しい高さではあるし、その方が効率的なのか？」

「そうだよーだからほら、私の事も抱き上げて！」

「まあ、それで良いのなら」

どうせこの一回だけなんだ、それに女の子の体に触るとは言ってもジェガンの装甲で触れてる感触なんてないからな、逆に力加減を間違えて怪我をさせないように気を付けないとならないから、その調整に意識が割かれる

「それじゃあ、いくぞ」

「はい、お願いします！」

やたらと張り切っているが谷本さんの足と背中の方に手を回して抱えあげる

そのまま重力制御による飛行で駐機状態のライトアーマーの後ろに回る

そして後は同じ手順だ、機体を起動し終えた次は歩行訓練に移って交代、それを続けていくつもりだったのだが

「またか」

「いや、ごめんね、紫藤くん。けど他の皆からの期待に逆らえなくてさ」

「ハア……まあ良いか、やることは変わらないし」

次ののはほんさんも、その次も、同じように抱え上げてISへの搭乗を続けていく

取り敢えず一組は終了したし、次は二組の方が

「はい、二組の雪菜って言います！紫藤くん初めまして！」

「ああ、どうも。それで、またISは立ったまま解除されてる訳だけど……」

「私もお姫様抱っこで良いよ。むしろお願いします！」

「お、おう……」

どうして誰も彼もお姫様抱っこに拘るのか、女の子としての憧れがあるのかは分からないがそこまで勢いよく言われると少し引く

とはいえ手早く終わらせてしまう事に異論はなく、二組の……えつと、雪菜さんも抱えてISへと乗り込ませ、歩行訓練を行う

その後も一組と同じ流れで授業が進む、此処まで来るとオレもわざとISを立たせたままにしている理由に気付くさ、面倒だから指摘はしないが

だが二組の人間も半分が終わった頃、また騒動が起きた

「はい、次の人」

「姫島茜よ」

「了解。それで、姫島さんも抱えて運べば良いのか？」

「いいえ、そんな必要はないわ。アンタ、踏み台になりなさいよ」

その言葉に周囲がざわめく、のだがオレは逆に安堵していた、ようやくまともな人が来たか、と

わざわざ乗り降りするのに抱えるのが不自然なんだよ、最初から座らせて解除すれば良いのに、抱えられたいが為に立たせたまま解除するんだから

そして中にはあまり男に触れられたくないという人も居る筈だ、装甲越しとはいえ無闇に触れられるのに良い気がする筈もないからな
「なら姿勢的には片膝立ちになるか。機体の左側を掴んで登つてくれ」

左膝を地面に着いて左手を背後に回して足場にする、これなら左足、左手、左肩と足場を伝つて少し厳しいものの階段のように登れるだろう

それにジエガンは掴める場所も多いからな、バックパックの左側にあるサブスラスターを掴めばより登り易くなるだろうし、悪い案じゃない

ジエガンには靴跡がつくだろうが、そんな物は磨けば落ちる、余計な波風立てるよりは面倒も少ない

それに、たまたま視界に入ったが一夏も同じような事になっているしな、筈も何やらせてるんだか

「コウタさん、それは——」

「良いさ、クロエ。その方が楽だ」

何人が続けたから力加減も分かってきたとはいえ神経を使う作業な事には変わりはない、それが省けるならオレも楽だしな、愛機を足蹴にされるのに思うところがない訳ではないが、事故が起きる可能性よりはマシだ

なので実際に膝立ちになって待っていたのだが、その姫島さんが来ない

「どうした？やるなら早く済ませろ」

「アンタ、もしかしてMなの？もっと渋ると思ったのに……」

「抱えられるのが嫌な人も居ると思つてたからな。それに、機体の

制御を誤って事故が起きるよりはマシだ。この機体も前に比べるとレスポンスが上がってるからな。ちよつとした操作で怪我させた、なんて事にならないか不安だったし。あと、そのつもりは無いんだが、どちらかといえば周囲の評価はS……まあこれこそあまり関係ないか」

普段の放課後の訓練、オレは普通にやってるつもりなのに誰もS認定してくるんだよなあ、ちよつと実戦形式で戦闘してるだけなのになあ

とはいえ時間は掛かったものの姫島さんはオレの機体を足掛かりにISへと乗り込んだ

そして機体を起動させて歩行訓練に移ったのだが、バランスを崩し前のめりに転倒しそうになるのを肩を抱えて止めた

「危なかったな。どうする、手を繋いでの訓練に移行するか?」

のほほんさんとか立ってるだけなのに転倒しそうになってたからな、泳ぐ練習の時みたいに両手を掴んで歩く練習をしていたから、それと同じように片手だけでも繋ぐかと思ひ提案するが、返答は拒絶だった

「うるさい!アンタみたいな奴に頼らなくても、アタシ一人でやれるのよ!」

「それで転倒しかけただろうが。変な意地張ってないで、必要なら頼れよ」

「ツ!?アンタなんか何が分かるつてのよ!」

「この、馬鹿野郎!」

「えっ、キヤアツ!?!」

反射的に掲げたシールドにライトアーマーの拳が激突する

その拳の軌道上には別の生徒の姿があり、もし振り抜かれていれば只では済まなかつただろう

ISが動いてるのに不用意に近付いた生徒にも色々言いたい事はあるが、一番の原因となるのは姫島さんだ

「感情に流されて無闇に振り回すんじゃない!」

「あ……クツ、アンタが!単に篠ノ之博士に気に入られたから専用機

持つてるようなだけのアンタに、何が分かるのよ！アタシがIS学園に入学するのに、どれだけ頑張ったと！それなのに、あのブリュンヒルデの身内でもなく、ただISを動かせるってだけの男が、アタシと何も変わらない一般人だった筈のアンタが、専用機まで与えられて黙ってられる訳がないでしょうが!!」

その叫びは普段から感じていた視線そのものだった、食堂とかで他のクラスや学年の生徒から受ける嫉妬の籠った視線、それが改めて言葉として突き付けられたのだ

そんな事は分かっているさ、天才の篠ノ之博士に明らかに依怙鼻肩されていると見られている事はな

それでもオレは動いていた、姫島さんがライトアーマーの右腰に備えられているビームサーベルを抜いたから、火器管制がロックされているから使えないとはいえ武器を抜いたのが問題だ

オレはシールドを格納し右手にビームライフルを出し、左手ではビームサーベルを抜き素早くライトアーマーの懐に潜り込んだ

ビームライフルの銃口を相手の眼前に突き付け、ビームサーベルはビームこそ出力していないものの発振器の部分を相手の左脇腹の部分に押し付ける形にし、警告した

「そこまでにしておけ。それ以上は遊びで済まんぞ」

自分の口から出たのは予想よりも低い声だったが、それが効果的だったのか姫島さんは右手に握っていたビームサーベルを取り落とした

これで一安心、といったところで足音が聞こえてくる、それもやけにはつきりと、威圧感と共に

「何があった?」

飛んできた言葉は端的に、しかし有無を言わさぬという気迫が籠っていた

オレは即座に武装を解き、背筋を伸ばして声の主、織斑教諭に向き直った

「訓練中に生じたミスを発端とした誤解です。今は誤解と分かり問題も解決しましたので、何も心配はありません」

「ほう、その割には両機共に武装を抜いていたようだが？」

「先程の説明と同じく、訓練中に生じたミスを発端とした誤解、些細な行き違いです」

そこだけは断固として譲らない、オレもその意思を込めて織斑教諭へと返答する

暫くの間、織斑教諭と睨み合いのような状況となるが織斑教諭は溜め息を一つ吐くと纏っていた威圧感が霧散した

「分かった。問題はないんだな？」

「はい、何も問題ありません」

「ふん、だが余計な騒動を起こした責任は取れ。具体的には、この訓練中に使った訓練機の内、三機の片付けだ。良いな？」

「了解しました」

これでやり取りは終わりとなり、織斑教諭は周囲に「何をしている、訓練を続けろ」と決して大きくはないがよく通る声で告げて別の班の監督に戻っていく

その姿を眺めていたオレはようやく緊張がほぐれ、大きく息を吐いた

「ふう、なんとか乗りきったか。それとクロエ、デストロイモードは解除しておけ。あとヴァイブロ・ネイルとか物騒だから普通は使うな」

「……はい」

危なかったのはもう一点、姫島さんがビームサーベルを抜いた時点でバンシイのアームド・アーマーXCを利用してデストロイモードに移行していた

それから左腕に装備しているアームド・アーマーVNを起動していたのだが、その武装は下手するとISの保護機能を突破してパイロットまでダメージがいく可能性があるから原則使用禁止の筈の武装だ

その事をクロエが覚えていない筈はないのだが、使わないで済んだのは幸いだっただ

そして次に不用意に近付いた生徒、ティナ・ハミルトンに訊ねた

「起動中のISには不用意に近付かない、アメリカの代表候補生なら知ってると思っただが」

「うん、確かに不注意だったよ。二人の喧嘩、というか茜ちゃんの一方的な言い掛かりを止めようと思ったんだけど、裏目に出ちゃったね。ゴメンね、紫藤くん」

「別に、気にしていないさ。それに、避けようと思えば避けられたんだろう?」

「ん〜、何の事かなあ?」

白々しい真似を、とも思うが口には出さない

あの時、人影が近くに居たから咄嗟に庇ったがその時にはテイナ・ハミルトンは既にバックステップをしようとしていた

オレがシールドを掲げたからか尻餅をつく形になっていたが、恐らくはISの危険性を周囲に知らしめる為の演技だろう

「今度、放課後の訓練に一緒に参加するか?その時は訓練機の使用申請は自分で出して貰う事になるが」

「おっ、それは良いね。楽しみにしているよ」

「此方こそ、と言うべきだろうな」

アメリカ代表候補生の実力にも興味はある、専用機こそ持たないが技量の高さは歩行訓練を難なくこなしていた事から予想もつく、そこそ戦闘ささえも可能な練度なのだろう、どのような戦術を取るか楽しみだ

「さて、それじゃあ訓練を続けるか。姫島さんも、まだ行けるよな?」

「——でよ……」

「うん?」

「どうして、全部一人で抱え込めるのよ!?悪いのは全部アタシじゃない!それなのに、全部自分のせいにして、少しは恨みなさいよ!アンタには当然の権利じゃない!」

「ああ、その事か。別に気にしてない、そういう事を思われても仕方のない立場なのは事実だ。だから姫島さんが言っていた事も間違いではないさ。たまたまあの人に拾われただけで、そこは間違っていないだからな」

「そういう事を言ってるんじゃないわよ!アタシがむしゃくしゃして暴れて、その責任をアンタが取らされるのよ!?なのに、何でも言わ

ないのよ！」

「あー、そつちか。別に、怒つても恨んでもいないさ。同じ班である以上、その責任は班長が、この場合は先生から任されている専用機持ちに責任が行くのは当然だ。ともすれば班の人間を纏められなかったオレの責任だろうか？ それにな——」

任された責任感もあるし、それ以上にオレが許容出来ない事もあ
る、それこそ愛機であるジェガンを足蹴にされる事以上にな

「——女の子に全部の責任負わせて自分は何も悪くありませんだなんて、そんな選択こそ糞食らえだ。男らしくない、そんな情けない真似するくらいならオレはジェガンから降りるさ。だから気にするな、全部オレの自己満足だよ」

ISのパイロットだとかそういう事の前一人の男として失格だ、だからオレが責任を負った、そこに何の問題がある

「だからまあ、気を取り直して訓練しようぜ。とは言っても、オレの手助けは借りたくないだろうけど」

「良いわよ、別に……」

「えっ？」

「だから、手を貸してって言ってるの！ アタシ一人だと無理だから！ それと、その、ごめんなさい……アンタの事、ちゃんと見ずに決め付けて掛かってたから、その……」

「だから気にしてないって。それに、反省するなら訓練で成果を出して返してくれ。班の練度が高ければ全員の評価も高くなるさ。それこそ、さっきの失敗も帳消し以上になる程にな」

「う、うん……あの、ありがとう……」

「どういたしまして、というのは早いか。ちゃんと歩けるようになったからもう一度頼む」

「わ、分かったわ！ だから宜しく、紫藤」

「了解した」

その後、オレが頼んだ通りに姫島さんはISでの歩行を何の補佐もなくとも出来るようになった

他の人も同じように補佐がなくとも歩けるようになったし、途中で

あつたあのアクシデントも良い方向に作用したのかもな

そのまま授業も終わり、オレはペナルティである訓練機の片付けをするのだった

その際にISで運ぼうと思っていたら生身でやれと言われた事でちよつとだけ後悔したのだが、結果的には成果も上がったし、これはこれでトレーニングになっているので前向きに受け入れた

何事も前向きに受け取る事が疲労を感じなくする秘訣だな、全く！

17話 ラウラ・ボーデヴィツヒ

「まさか、あそこまで重いとは……」

本来なら何人かで押すISの乗ったカートを片付け終えたオレは更衣室で一人制服に着替えていた

とはいえペナルティが一台のみで残りはジエガンを使って運んで良いと言われて助かった、どうやら織斑教諭も鬼ではなかったらしいとはいえ最初の一台で結構な時間を消費したので時計もかなり進んでいる、遅くなるから昼食は別で摂ると伝えたのは間違いではなかったか

というよりは助かったと言うべきだろうか、今日はいつもの面子の中で女性陣が弁当を作ると言っていたのだが、その中でもセシリアの料理を食べなくて済んだと安堵している

本人はイギリスの代表候補生だからとあまり関係ない事を言っていたが、言うだけあって綺麗な見た目の料理を作る

尤も、見た目だけであって味は衝撃的だ、見た目がまともで美味しそうに見えるだけに落差が酷かった、具体的にはサンドイッチを例に挙げるとやたらと辛い卵サンドや、やたらと甘いBLTサンドなどだ
繰り返し言うが、見た目が普通で美味しそうに見えるだけに、余計にだ

前に一度食べた時は気合いで呑み込んだ、今頃は一夏や一秋が犠牲になっっているだろうが、黙祷を捧げておこう

さて、オレは学食に行くか、そう思い着替えたスーツを収納したケースを片手に更衣室を出て廊下を進もうとしてそこにクロエが居たのに気付いた

「あ、コウタさん」

「クロエ、どうして此処に？まさか待っていてくれたのか？」

「はい、他の皆さんには先に昼食を頂いて貰っています」

「気にしなくても、オレは一人でも平気だったのに」

「それでもです。一人より、誰かと一緒に食べた方が良いと、前にコウタさんも言っていましたから」

「そうか、ありがとうな」

「いえ、私が自分で選んだ事ですから」

そう言う事なら悪い気はしない、むしろ気恥ずかしい気持ちになる数秒、互いに無言になっていたが、クロエが先に口を開いた

「あの、コウタさん。実はお弁当を作ったので、一緒に食べませんか？今日は自分でも上手に作れたと思うので、その感想も貰えると嬉しいです」

「ああ、例の。分かった、付き合うよ」

以前、クロエに料理に関するアドバイスを頼まれた事があった

美味しい料理を作って食べて貰いたい人が居る、その練習に付き合って欲しいと

篠ノ之博士の事だと思うが、それを受け入れた当初の様子は大変というか、前途多難だと思った

まず包丁で食材を切る時から危なっかしいと思った、猫の手が基本と教えるまで、指を伸ばした状態で食材を押さえていたからだ

案の定、それまでも何度か指を切った事があったようで、驚いた表情をされた

そしてその他にも、食材を炒めたりと火を使う作業の時、フライパンを火に掛けながら食材を切っていた

料理に慣れた人なら問題ない手順かもしれないが、包丁の扱いに慣れていないクロエは一つの食材を切り終えるまでの時間が長くなり、付け加えて切った食材はフライパンに投入され、クロエは次の食材を切るのに移って、その間にフライパンの食材は焦げていった

結果、出来たのは簡単な炒め料理の筈が炭化した食材の成れの果てに変わっていく、あらかじめ全ての食材を切っておき一気にフライパンで炒めればとアドバイスしたら、その手があったか、と言葉ではなく表情で語られた

他にもスープを作ろうとしたら、半分くらいぶよぶよとしたゲル状になったりだ、粉末スープの素を入れすぎか原因だったので、箱の裏に書かれている目安を教えたりと、まあ誰からも教わってない中でレシピ本に書かれたりしていない物を自分なりにやって失敗したらし

い

なので今は簡単な料理ならこなせるようになっていた、あれならば焼くか炒める程度しかレパートリーがないオレよりも直ぐに上達するだろう

そんなクロエが自信作という料理だ、期待が高まるのと、空腹が気になってきた事もあり近くにあった木陰にあるベンチに座って戴く事にした

「今日作ったのはこれです。簡単で私一人でも上手く作れそうな料理でしたので」

そう言ってバスケットの中から取り出されたのは一見するとホットドッグのように長めのパンに焼いた長いソーセージが挟まれて、そこにソースが掛けられた物だ

「ケチャップと、マスタードじゃないな。匂いからしてカレーか？」

「カーリーヴルストです。ドイツのホットドッグとでも呼べば良いんでしょうか？ベルリンやハンブルクで広く食べられている大衆食になります」

「成る程、確かにドイツと言えばソーセージだもんな」

後はビール、年齢的に呑めないけど

ソースの掛け方が多少不恰好ではあるが手についたりする心配もなさそうだ、片手で掴んで食べられるし、篠ノ之博士が研究で忙しい時でも助かりそうだな

「じゃあ、いただきます」

後は味だけど、ケチャップの酸味とカレー粉の辛味がアクセントになり、パンの柔らかさとソーセージを噛んだ時に出てきた肉汁の甘味といい、冷めていても美味しいと感じられる美味しさだ

「あの、お味はどうですか？」

「十分だよ。お手軽だけど、ちよつとソースの配分を変えたりしたら色んな味が楽しめそうだ」

「はい、色々と合いそうなソースも作ってみたいです。けど、ちよつとだけソースがはみ出してしまいました……」

「このくらいは誤差の範囲だよ。見た目より味が重要だからな。セシ

リアの料理とか、一度食べれば分かるけど、かなり特徴的な味だったからなあ……」

今頃はその料理を食べているであろう二人はどうしてるだろうか、前と同じように表向きは何事もないかのように振る舞っているのか
真実を伝えて料理の腕前を向上させるのが良いのか、頑張ってるのか、
真実を伝えて料理の腕前を向上させるのが良いのか、頑張ってるのか、
頑張ってるのか、どっちが幸せなんでしょうか

「と、そういえばドイツ料理なのはクロエの故郷だからか？」

「はい。とはいえ育てられた施設の外を知らないのですが、生まれた国というのは変えられないので」

戦う為だけに生み出されたが、それを受け入れた上でか、強いなクロエは

改めてカレーヴルストを食べる、やはり何度食べても美味しい物は美味しいな

「ヴルストの焼き加減も分かってきたので、今度は温かい方を食べて下さいね」

「ああ、楽しみに待っているよ」

「はいーそれと、いつかジャガイモでフルコースの料理を作れるようになってみせます」

「あー、そういえばジャガイモもドイツの定番か。それだけジャガイモ料理もあるって事なんだな」

思い付く限りだとアイントプフかな、色々な野菜と一緒に煮込んだスープで農家のスープとも呼ばれる物らしいし、楽しみだ

それに作って貰ってばかりだとなんだか悪い気もするし、たまにはオレも料理をしてみるかな

焼くか炒める程度しかレパートリーないとは言ったが、中でも生姜焼きは中々に自信があるんだ、今度市販の生姜焼きのタレを買っておこう

◆ そう思いながらカレーヴルストを食べ終え、用意されていたおかわりの分も含めて五つも食べてしまうのだった

昼食の後、水筒に用意してくれていたキャラウェイのハーブティーを飲みながらベンチでゆつくりと過ごしていた

ちよつと食べ過ぎたと思っていたがキャラウェイには消化促進効果もあると言われて、よく考えてるなあ、と実力を伸ばしているクロエの料理の腕前を実感した

その休憩もそろそろ昼休みの終わりが近付いてきた事から教室に向かおうかとなってベンチから立ち上がり、クロエと並んで歩く

「やっぱりちよつと食べ過ぎたかな？午後の授業、寝ないか心配だなあ」

「作り過ぎましたか？今度からはもつと調整します」

「いや、美味しかったからこそだよ。腹八分目を考えなかったオレが悪いからクロエが気負う必要はないって」

多少、お腹の辺りが重く感じるが問題はない、午後からの授業は座学だし、ISで飛び回る訳でもないから平気だ

問題は午前中の授業での疲労と、満腹からくる眠気だが、それはオレの自己管理の問題なのでクロエに責任はない

だからそんな申し訳なきような顔をする必要は――

「クロエッ！」

気付いたのは偶然か、微かな風を切る音と小さな足音、後は曖昧だが勘とでも呼ぶべきものによってオレは即座に振り返り、その背にクロエを庇うように立つ

同時に右手に持っていたケースは放しジェガンの待機形態であるハロも左手から後ろに投げる

そして空いた両手を使って勢いよく飛んできた蹴りを受け止めた

「ほう、少しはやるな」

「本職の人間に誉めてもらえるとは光栄だ。それで、何の用だ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

遊びでじゃれついたという訳ではあるまい、そう訊ねたが返ってきたのは笑みと、拳だった

「くっ……！」

顔を狙って放たれたそれを首を傾げる事で避けた後、一度牽制とし

て右手でジャブを放つ

だがそれは容易く回避され、拳げ句にはその繰り出した腕を支点に倒立、オレの背中に組み付こうとしてきた

そのまま首を絞める気か手が回ってくるのを感じたがその前にオレは背中の方から勢いよく壁に叩き付ける

これで制圧出来ればと思ったがそこまで甘くはなかった、オレの意図を察したのか直前で逃げられた

オレは咄嗟に受け身を取ったとはいえ、向こうは余裕といった笑みを浮かべている、事実向こうの方が実力では上だろうよ

「コウタさん！」

「よし、ナイスタイミング！」

だが時間稼ぎは終わった、クロエがオレの落としたケースから拳銃を取り出しオレに投げ渡してくる

それを掴んだオレは即座に安全装置を解除、両手で構えてボーデーヴィツヒに向けた

「何が目的だ？」

「フツ、あの篠ノ之博士が近くに置いてある人間がどのようなものか知りたかっただけだ。まあ、単なる素人よりはマシなレベルだったな」

「生憎と少し前までは一般人だったんでね。付け焼き刃もいいところだ」

「格闘戦はお粗末だが、銃の構え方は様になってるじゃないか。その様子だと命中精度もそれなりに高いな。動きにも迷いが無かった。やはり貴様は他とは違う、覚悟も、訓練内容も」

「それで、まだ続けるか？軟質ゴム弾とはいえ、当たればそれなりだぞ」

流星に実弾は訓練時にしか使っていない、普段から装填されているのは暴徒鎮圧等にも使われるゴム弾だ

それでも頭部などの重要な器官に当たれば死亡する危険性もある、衝撃もプロボクサーのパンチ並の威力はあるから体に当たっても効果は高い

オレ達の背後に篠ノ之博士が居る関係から所持を許可されている武器でもある、ISが展開不可能な場合に備えての護身用としてな

それでも使わないに越した事はないが、いざという時には、だ

オレはボーデヴィツヒの腹部の辺りを照準して問い掛けた、そこが人体で一番動きが遅い、確実に当てるならそこを狙うべきだから

「いや、生身での実力の程はある程度分かった。これ以上は必要ない」
「流石に銃が相手だと分が悪いか？」

「そうだな。だが下手な挑発はしない方が良いぞ。まさかさつき動きが私の本気だと思っているのか？」

「いいや、訓練を短期間しか受けていないオレが本職の軍人相手に捌けるなんて思える程、慢心していないからな」

さつきの動き、明らかにオレが反応出来る程度に抑えていた、本気で襲っているなら気付かせもしなかっただろう

だから続ける気が無いのは本当なのだろう、それだけが用件とも思えないが

「それとは別に、クロエが目的でもあるな。何をしに来た。祖国の暗部を知られるのがマズイと考えているのか？」

「成る程、貴様は知っているのだな。なら話は早い。私は確かめに来ただけだ。何故、私の知らない同類が此処に、篠ノ之博士の下に居る？お前は誰だ？」

その言葉を聞いた途端、クロエの体が小さく震えたのを感じた

オレはボーデヴィツヒへの敵意を強め、引き金に掛かる指に力が入るのを押し止める

「私と同じ存在は全て私の所属するシュヴァルツェ・ハーゼに居る筈だ。なのに私の知らない存在が居る。それも見たところ私と同様の遺伝子か？」

「わ、私は……」

「答えろ、お前は何者だ？」

「逆に問うぞ、お前は誰だ？」

流石に我慢の限界だ、衝動に任せて撃ってしまわないよう、リスクを承知で銃を下ろしてオレはボーデヴィツヒへと問い掛ける

「何を言っているのだ、貴様は？ 私はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍 I S 配備特殊部隊 シュヴァルツェ・ハーゼ隊長、階級は少佐だ」

「だろうな。けどそれは与えられた物だろう。クロエは違う。幸運もあつただろう。けどな、クロエ・クロニクルとして自己を確立し、自分の夢と目標を持つ、お前とは天地程の差がある、人間だ」

兵器として生まれた、だから何だ？

兵器が兵器としてではなく、単なる対抗意識から戦えるようになりたいと思うか？

食べて欲しい人が居るからと料理を上達したいと思うか？

そうだと、それは兵器ではない、人間だ、何処にでも居る普通の女の子だ

目の前の似通った容姿を持つ相手とは断じて違う、人間だ

「コウタさん……」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、お前は何の為に戦っている？ 何の為に I S を駆る」

「何を言うのかと思えば。私は兵士だ。命令を受ければ戦うに決まっているだろう。それが何の問題がある」

「そうか」

それを聞いてオレは銃の安全装置を掛けてクロエが拾っていたケースへと戻した

この事は予想外だったのか、ボーデヴィツヒは怪訝そうな顔をしながら訊ねてきた

「何をしている？ 敵を前に銃を仕舞うのか？」

「その理由は自分で考えろ、と言いたいが教えてやる。命令がないと戦えないんだろう？ 人間ですらない駒に付き合う時間が勿体ないというだけだ。ああ、それとな——」

オレは続いて拾い上げたハロを操作して、空中に時計を表示させた、さつき腕時計を見て確認した時間を

「——あと五分もしない内に次の授業だ」

言うや否やクロエの手を引いて廊下を走る

クロエも少しだけ驚いたような表情をしたが直ぐに歩調を合わせ

てオレと一緒に廊下を走る

途中、オレの顔には自然と笑みが浮かんでくるのが自覚出来た

「ククツ、アイツの間の抜けた顔、笑えたな」

オレ達の今の立場は軍人でも篠ノ之博士の部下でもない、学生だ
当然ながら学業こそがオレ達の本分であり、授業への遅刻などもつ
ての他である

その事を失念していたのか、オレがそれまでのやり取りを一気に切り上げて学生として走り出した時に見えたボーデヴィツヒの表情は呆気を取られて口を開けるといふものだった、少なくとも軍人の表情ではないだろうな

そして何事もなければオレ達は授業までに教室に間に合う、ボーデヴィツヒの足の速さは知らないがさっきので出遅れたのが影響すれば最悪は遅刻だ

結果、授業の開始一分前には教室に辿り着く事が出来たのに対して、ギリギリのところまで教室に入ってきたボーデヴィツヒの姿を見て、クロエは小さく笑っていた

そこには先程までの震えもなく、いつもの様子が見える姿だった
とはいえオレは今回のやり取りで一つだけ心に決めた事がある、今後ラウラ・ボーデヴィツヒがクロエの事で余計な真似をするというのなら、オレの手で対処するという事だ

篠ノ之博士にも頼らず、オレの手で、その為にまずは放課後に行っていた生身での訓練に、より気合いを入れて取り組むのだった



色々とおつたあの日から五日が過ぎた、IS学園では土曜日も午前中は授業が行われ、昼からは自由時間となる

しかし土曜日はアリーナが完全開放される為、専用機持ちも一般の生徒もISの実機訓練をする事が多い、特に一年生は本格的な実習も始まった事でより多くISに触れたいという生徒も多く、複数人で訓練機を借りていたりする

オレは専用のジェガンがあるからアリーナの使用申請のみで済むのだが、今回はちよつと違っていた

「一夏、上だ！」

「うおおっ!?何だこれ、セシリアのビットより厄介だぞ！」

「は、速いっ!?これが、通常の三倍……?」

「どういう設定したらこうなるのさあ!?うわ、瓦礫を足場に加速した!?」

オレ、一夏、一秋、シャルルの四人は宇宙にてクシャトリヤとシナンジュを相手に苦戦していた

オレと一夏はクシャトリヤが放つファンネルと本体からのビーム攻撃に翻弄され、一秋とシャルルはシナンジュに翻弄され、だ

その数分後には全員が撃墜され、シミュレーションが終了した

「皆お疲れ〜!中々に面白いデータが録れたよ〜!」

「多分何も知らない人間が見たら変なパントマイムをしてるみたいに見られるとは思いますがね。けど、彼処までする必要ありますか?どちらか一機だけでもキツイですよ、あれ」

オレはジェガンを解除して一息吐き、一夏も同様にユニコーンを解除した

一秋とシャルルは機体の解除に加えて頭に付けていたゴーグルも外す、今までののは全て映像であり、実際にクシャトリヤやシナンジュと宇宙で戦闘を行っていた訳ではない

そしてこの出来事の原因でもある篠ノ之博士は笑顔で持ち込んだパソコンの画面を眺めていた

隣には監視役というべきか織斑教諭も居た

「でもでも、こうやって新型シミュレータの実験が出来たから良いでしょ?それに簡単にクリアされたらつまらないしね!それでちーちゃん、どうかなこのシステム?将来的には複数のISを利用して、被弾すれば衝撃とか機体へのダメージを計算して、それに合わせて機体の出力を落として機体へのダメージを再現とかも出来るようになるよ。そうすれば一回一回ISを修理しなくても本物と変わらない訓練が出来るでしょう?」

「確かに悪くはない。学園にも機体の修理予算はあるからな。それが抑えられるならそれに越した事はない。お前もたまには役に立つ物

を作るな」

「まるで私がいつも変な物ばかり作ってるような言い方だね」

このように、全ては篠ノ之博士が作った新型シミュレータの稼働実験なのだが、アリーナで訓練していたら男子四人呼ばれてシミュレータを使うように言われたのだ

因みに映像に向けて撃つても現実の機体が本当に発砲しないようにシミュレータを使った時にシステムが変更されている

なので映像を見ているオレ達は本当に宇宙にてクシャトリヤやシナンジュを相手に奮闘しているのだが、傍目からは何も無い空間に銃を向けてながら何かを相手に戦っている変な集団に見えていた筈だ

「それでも動きを基に取り敢えずプログラムを組んだだけで、相手の性格とかまで再現し切れなかったんだよね。だけど可能性は見えた。こーくん、次は部隊運用のデータを録らせてくれる？ 仮想データで一機のジエガンD型を付けるから、それを上手く指揮してみてね。各ジエガンの装備はこーくんが決めて。指示を出した後はAIが機体操作を行うから、こーくんは大まかな指示だけで良いよ。勿論、明確にイメージすればその動きをしてくれるけどね。ああ、それとAIの動きはこーくんのデータが基になってるからね」

「成る程、やってみます」

「十二人の康太とか、勝てる気がしねえ……」

「ガンダムなら割りとよくこの戦力差でも負ける事があるんだよなあ」

まあ後で『ぜ、全滅!? 12機のジエガンが全滅!? 三分ももたずにか!?』とならないように努力はするけどさ

改めて部隊編成をするが、ジエガンは全て通常のビームライフルとシールド装備で出撃する

まずは試しという事なので指揮の方法を確かめてみる、口頭で指示を出すと応えてくれて、脳内でどのような動きをすれば良いか想像すると確かにその通りに動く

とはいえ戦闘になれば細かな指示までは行き届かないだろうから、ある程度しか期待は出来ないな

そしてシミュレーションが始まり、センサーが敵の反応を捉えた
「機種照合、ヤクト・ドーガか」

これならまださっきのシミュレーションよりは楽だが、相手は黄色
ベースなので強化人間のギユネイ機だな

それに向こうAIも完全じゃない、単にアニメの動きから算出して
いるだけだ、ならやりようはある

「ファンネル射出確認、密集隊形！」

頭でイメージし、かつ口頭で指示を出す

すると他のジェガンが集まってきて円陣を組むとオレの動きに合
わせて回転、四方八方にビームライフルを放ち、周囲を囲もうとした
ファンネルを撃墜していく

ガンダムOOにて頂武ジnkクス部隊が見せた戦術、対ファンング用に
見せた物をジェガンにて再現した

あれは疑似太陽炉搭載型だからこそその動きだが今のオレの機体は
ISだ、似たような動きは出来る

それにより六機のファンネルを撃墜し、ヤクト・ドーガ本体からの
射撃により後で此方も三機が撃墜されたものの、ヤクト・ドーガを包
囲し撃破した

流石にパイロットがニュータイプの勘の良さを持っていけば違っ
たかもしれないがそこまで再現されておらず、精々が反応速度が早い
くらいだったから倒せた

それで一度篠ノ之博士の所に戻ってみると面白そうな様子でモニ
ターを確認していた

「やつぱりこーくんは私の思った通りに部隊での動き方を知ってた
ね。ISって数が少ないから部隊運用って精々が二機とか三機にな
るんだけど、最初の戦術とかはあの弾幕となるとそれなりの数を揃え
た部隊でないと出来ないよ」

「そういえばそうですね。けど、その数なら篠ノ之博士なら簡単に揃
えられますよね？」

「確かにね。けど部隊運用なんてデータが無いから知りたかつたんだ
よ。うん、有意義なデータになったし、ありがとうね、こーくん」

「役に立てたなら何よりです」

「このデータもきつと何かの役に立てるよ。私はシミュレータの仕上げがあるから今日は戻るね。完成したシミュレータは学園に設置されると思うし、その時は使ってみると良いよ。それじゃあちーちゃん、行こうか」

「唐突に人を引っぱり回したと思えば今度は帰るか。まあいい、そのシミュレータは確かに役立つ物だ。それだけの価値はあったと考えるでしょう」

と、そこで篠ノ之博士は織斑教諭を連れてアリーナから去っていった

オレ達も元は訓練の為にアリーナに来ていたのだ、時間が余ったというのなら残りは訓練に入るとしよう

それを伝えて他の男子三人と、さっきまでは見学に回っていたクロエを加えて訓練に入ろうとした時、アリーナの一角が不意にざわめき始めた

「アレは……」

「ドイツの第三世代機だな。パイロットは当然ながら、アイツだ」

咄嗟に口に出たのだろう、一秋からすれば見た覚えのある機体の筈だ、夢で見ているというあの機体、シュヴァルツエア・レーゲンの事は

そして最新鋭機であるそんな機体を保有する人物などこの学園では一人しか居ない

近頃は望む望まないに関わらずよく会う相手である、ラウラ・ボーデヴィツヒだ

18話 シャルロット

予想外の相手が来た事に警戒するも、どうにもボーデヴィツヒは落ち着きなく周囲を見渡して此方には気付いていないように見える

その様子に何だか毒気を抜かれたが、その視線が合ったから改めて警戒を強める

そのボーデヴィツヒはISを歩かせて此方に来た、先日のも考えると今度はISでの實力を見せてみるとか言いかねないからだ

「紫藤康太、お前に訊きたい事がある」

「何だ？」

何かあった際にはその初動を見逃さない、そう構えていたのだが、ボーデヴィツヒからの質問にそれも吹き飛んだ

「教官は、織斑教官は何処だ？」

「……………は？」

「だから織斑教官だ！このアリーナに来ていると聞き、駆け付けたのにそのお姿が見えないから訊いているのだ！」

「あ、あー、そういう……」

コイツが織斑教諭の事を慕っているのは初日の自己紹介の時になんとなく察していたが、その為に普段の平静さを失う程か

「可憐だ……」

そして一秋はそんな様子のボーデヴィツヒの事を見て頬を赤らめていた、お前がボーデヴィツヒの事を好きなのは知っていたがそこまでか

とはいえこれでは話しも進まない、取り敢えずは事実を伝えるか

「織斑先生なら、さっきまで確かに此処に居た。篠ノ之博士の開発した新型シミュレータの稼働実験に、博士の監視役としてな。その博士のテストが終了して帰ったから今はその付き添いだな」

「な、何だと!?クツ、一足遅かったか、あれから成長した私の力を見て欲しかったのだが……」

ああやっぱりそういう目的だよな

ボーデヴィツヒは暫くの間悔しそうな、悲しそうな表情をしていた

が立ち直ると普段の冷徹な表情になり、同時に殺気まで飛ばしてくる
「織斑教官が居なかつた事はとても残念だが、此処でこうして出会えたのは運が良い。織斑一秋、私と戦え」

「えっ?」

そんなボーデヴィツヒから告げられた言葉が予想外だったのか一秋は呆けた表情をしている

だがその顔が気に食わなかつたのか、シュヴァルツェア・レーゲンの右肩に装備されたレールカノンの砲口が白式に向く

「織斑教官の名声を傷付けた過去がありながら危機感を持たないその意識、此処で叩き潰してくれろ!」

「な……あ……」

放たれる砲弾、オレはジエガンを駆ってそれを防ごうとしたが間に合わない

白式を纏っているから直撃しても死にはしない、だがこんな不意打ち紛いの攻撃を受けて体に何のダメージもないとはいかないだろう

だから一秋の被弾は覚悟してその後のフォローに回るつもりだった、しかし聞こえてきたのは一秋の悲鳴ではなく甲高い金属音と二回の着弾音だった

「なっ!?!」

「マジか……」

「えっ?…えっ?」

ボーデヴィツヒは驚愕の表情を隠せず、オレもその光景に目を疑った、唯一それを成し遂げた一秋だけが状況を理解せずに左右を見回している

オレは見ていたから分かるがあの一瞬、一秋が持ち上げた通常時の雪片式型がレールカノンから放たれた砲弾の射線に入り砲弾を縦に切り裂いて一秋の左右斜め後方の地面へと着弾したのだ

一秋の様子からすると完全に紛れ当たりだったんだろうが、何て豪運だアイツは……

「す、少しはやるようだな!だが二度目はない!」

「させると思うか!」

再びレールカノンを放とうとするボーデヴィツヒだが横合いからクレセントムーンを構えた一夏が斬り掛かり妨害する

「クッー」

それを後方に下がる事で回避したが完全に一秋へのロックオンが外れている、ならば此処で逃さない手はない

「二秋、シャキツとしろ！一夏はそのままボーデヴィツヒを牽制、当てなくて良い！シャルルは好きに動いてくれ、お前の動きよく知らん！」

「応！一秋兄はやらせねえ！」

「ボクだけなんか適当じゃない!?けど、やってみせるよ！一夏、ボクが射撃で援護するから目の前だけに集中して！」

実際にシャルルの動きはまだあまり見ていないから何が得意とか知らないからな、そういう指示を出すしかない

だが手元に二挺のアサルトカノンであるガルムを展開して射撃で一夏の援護を始めた

「この、フランスの第二世代アンティーク風情が！」

「量産化の目処が立たないドイツの第三世代キーに言われたくないよ！それに、戦う気のない人をいきなり撃つなんて間違ってると思うしね！」

ガルムを撃っていたかと思えば次の瞬間にはショットガンのレイン・オブ・サタデイに切り替わっている、オレと同じ高速ラピッド・スイッチ切か
「舐めるなよ、たかが二機程度で！」

それに対するボーデヴィツヒの反撃は小型のブレードが付いたワイヤーによる攻撃だった

しかし、オレへの注意は薄れているらしく、隙があった

「残念ながら、三機だ」

左右から挟み込むように展開している一夏とシャルルに対してオレは正面から突っ込んだ

両手に二本のビームサーベルを持ち、その懐に飛び込もうとする
「まだだ！」

そう言っただけで空いていた左手を此方へと向けてくるボーデヴィツヒ、

オレは嫌な予感がした為に右へ回避する

その際、少しだけ機体が重く感じられたがブースターの出力を最大にして抜け出した

「避けただど!?!」

「そうか、今のはアクティブ・イナードナル・キャンセラー慣性停止結界か。捕まっていれば危なかったかもな」

以前にシユヴァルツェア・レーゲンのデータを見た時にあった能力であり、A I Cと短縮して呼称される能力だ

I Sの基本機能であるP I Cの発展型であり、対象の動きを止めるという能力だな

とはいえ使用者が集中する必要があるとも書いてあった、ならば三機での波状攻撃ならば止められる事もあるまい

「それでも!この私に!届くと思うなあ!」

「うおっ!?!」

「うわあっ!?!」

だが相手の底力を侮っていたというべきか、右手首に展開したプラズマの手刀により一夏を押し退け、機体を反転させてシャルルへとレールカノンに向けて砲撃、直前で左手のシールドで防いだとはいえ着弾の衝撃だけでシャルルを吹き飛ばした

「次は貴様だ、紫藤康太!避けられる物なら避けてみろ!」

そうして一時的にはいえフリーになったボーデヴィツヒは六本のワイヤーブレードをオレへと向かわせる

確かに鞭のように動きが読めず、更には自由に軌道を変えられるワイヤーブレードは単体でも避けるのに苦労するし、それが六本ともなれば被弾するのは目に見えている

だが、避けられずとも一向に構わん!

「なんとおー!」

両手に持っているビームサーベルをしっかりと握り、オレはジェガンの手首を高速回転させる

それにより円形の盾のような物が出来、そこに飛び込んできたワイヤーブレードは全て切断された

「何なんだその動きは!？」

「安心しろ、オレの手は引つ込めてるから捻れる事はない」

「そんな事を言っているのではない!」

別におかしくはないだろう、ISは確かに人型ではあるが本質は機械だ、ならば人間では不可能な動きでも出来る

そしてモビルスーツも人型の機械なのだからその動きがISで出来ない筈がない

「それと、流星にこれ以上続けるのはマズイ。貸し切りならともかく、他にも生徒が居る。流れ弾に当たる可能性も低くない。一度、この辺りで手打ちにしよう」

一夏とシャルルも再び戻ってきたしこれで三機、戦力差は歴然だ
それでもボーデヴィツヒは認めないのか、レールカノンでオレを照準する

「何だ!? ふざけているのか! 例え武装を失ったとしても、貴様等ごときに遅れをとる私では——」

「——ふむ、ならば私の権限で止めるとしよう。全員、そこまでだ。下手な真似をすれば処罰を与える」

砲撃される前にその砲身を切り落とそうと試みたその時、外から凜とした声により制止された

声の方を見ればそこには生身にも関わらず打鉄のブレードを軽々と抱えている織斑教諭の姿があった

「教官!? どうして此処に!？」

「織斑先生だ。なに、そこまで離れていなかった時に戦闘をしていれば嫌でも耳に入るさ。それで、私は止めろと言ったがまだ続けるか?」

「そ、それは……」

言葉に詰まるボーデヴィツヒだがオレは素早くジエガンを解除した

少し遅れて一夏やシャルルも同じように機体を解除し、それを見てボーデヴィツヒも渋々ながらシユヴァルツエア・レーゲンを解除する
「よろしい。決着を着けたいというのであれば今度の学年別トーナメ

ントで着ける。それまで、全生徒には一切の私闘を禁止する。以上だ。ああ、それと機体の動作訓練をするなら続けて構わんど。そこまでは禁止していい。実弾ではなく、ペイント弾やセンサーを利用した模擬戦も同様だ」

それだけ告げると織斑教諭は去っていった

ボーデヴィツヒも敬愛する教官に言われては反抗する気はないのかアリーナから去っていく

残されたオレ達もまた元より計画していた通りに模擬戦を開始、ペイント弾によって白式やユニコーンが面白い色になって今日の訓練は終了となったのだった



訓練を終えたオレとクロエは寮にある自室へと戻ってきていた

夕食の時間まではまだ時間がある、だがオレ達は今日は食堂ではなく自炊をしている

前に考えていたが、クロエのお弁当のお礼にとオレも料理をしようと思いき生姜焼きを作っている、既に材料は昨日の内に用意したので後は作るだけだ

そしてオレの料理を勉強として見ているクロエと雑談しながらオレは材料の豚肉を焼いている

「クロエの動きもかなり様になってきたな。トーナメントでも上位を狙えるんじゃないか？」

「はい、最初に比べれば動きは良くなったと思います。でも、今日のシユヴァルツエア・レーゲンとの戦闘では何も出来ませんでした……」

「気にするな、複数で一機を狙ったんだ。誤射や味方の動きを阻害しないようにするなんてのは、それこそ経験が必要になる。そこは今から積んでいけば良い」

その辺りはゲームでもしていると自然と身に付いたりするぞ

味方の動きを見ながら、自分がどう動けば力になれるのか、立ち位置や装備の選択、そういった物は経験し、失敗しながら学ぶしかない威力はあるが当て難い武装も仲間と連携すれば当てられる、逆にど

んな武装であれ仲間を巻き込むようなら意味など無くなってしま
うからな

その辺りはオンラインゲームで学んだ、中には『連携とか知らん、自
分にポイントが入れば良いのだ！』なんてゲームもあつたけどな、お
のれ同業者め、取られるからとコンテナを破壊するなど許さん、オレ
もやったけど

別のゲームで上手く連携出来た時は面白かったし、教材代わりに
ゲームでも買ってみようかな、ISを操作する対戦ゲームもあるみた
いだし、役には立つだろう

「と、此処で混ぜておいたタレを投入して、後はタレが無くなるまで煮
詰めれば完成だ」

一工夫として豚ロース肉を焼く際には小麦粉をまぶして弱火で焼
いていた、こうすると柔らかかな生姜焼きになるからな

煮詰める時は強火で、最初から最後まで強火にしても良いんだがそ
の場合は肉が固くなる、食べ応えはあるが今回は時間もあつたし手暇
掛けてだ

ご飯も炊けたし付け合わせの野菜も切つてある、後は焦げないよ
う見張つていれば何も問題はない

「良い匂いですね」

「この辺りはお袋直伝の秘伝のタレだな。お袋は婆ちゃんから教わつ
たし、紫藤家代々の味つてところか。最近暑くなつてきたし、生姜の
辛みが食欲を刺激する、夏バテにも効果のある料理だ」

お袋からもこれだけは免許皆伝と言われた、単にオレが好きな料理
だから将来独り暮らしの時の為に覚えてただけだがこうして別の人間
に振る舞う事になるとは思わなかつたけど

この甘辛い肉とご飯の甘味が最高に合うんだよなあ、そう思つてい
たら部屋のチャイムが鳴らされた、こんな時間に来客か？

「私が出ます」

「頼んだ、とはいえ直ぐそこだけど」

この学園の寮つて入つたら玄関とキッチンが見えるからな、此処で
料理してると玄関開けた時に相手も見える

なのでクロエがドアを開けた際にはオレにも来客の姿が見える、そこに居たのは一夏とシャルルだった

「あー、悪い、出直した方が良さそうだよな？」

オレが料理しているのを見て一夏が気まずそうに謝ってきたが、こんな時間に大した用もなしに来るとは思えない、夕食に誘いに来たならもう少し遅い筈だ

となれば大事な用件という事だろう、オレは料理が焦げないように注意しつつ二人に提案する

「良かったら食べながら話すか？」

久し振りに作るから失敗した時の為に多めに材料は買ってきておき、付け加えるとオレが沢山食べたいが為に二人前ではなく四人前作つてあるのだ、二人に分けても問題はない

なので提案したのだが、二人はおずおずと頷いたのだった

そんな訳で二人には部屋の中で待ってもらい、仕舞ってあった簡易テーブルに完成した料理を並べて食べ始めたのだが

「う、うめえー！この生姜焼き、何でこんな肉が柔らかいんだ!？」

「ほ、本当だ……！しょうが焼きっていうのは初めて食べたけど、康太っけ料理が出来たんだね……」

「本当に美味しいです。私もいつかこのレベルまでなってみせます」

「唯一と言っても過言じゃない得意料理だからな。久し振りに作ったが、まあ上手く出来たよ」

その反応は三者三様ではあるものの総じて好評なものだった

少しは不安もあったのだがこの反応ならば問題はないな、作った甲斐があったというものだ

なお一夏とクロエは箸で食べており、まだ箸の使い方慣れていないシャルルだけはフォークで食べている、切る必要もないサイズにしてあるからナイフも出してはあるが使ってはいない

話しは食べながらと思っていたが他の皆が夢中で食べているので食事の後にしよう、そう考えてオレも生姜焼きを口に運ぶ、うむ美味い

そうして食事を終え、皿洗いを引き受けた一夏とシャルルが部屋に

来たところで本題に入る

「いやあ、あんな美味しい料理をご馳走して貰って悪いな」

「何て言うか、温かかった味だよ」

「お袋の味だからな。それより、何か相談があつて来たんじゃないのか？」

「あつ」

……まさか本題を忘れていたとは思わなかったが、一夏が気を取り直して咳払いを一つしてから口を開く

が、それをシャルルが手で制した

「これはボクの問題だからボクから話すよ。その、ボクは本当は女の子なんだ」

「ああうん、知ってた」

というかその胸見れば分かるわ、此処に来たときは一夏の上着で隠してたけど、食事の時とか外してたからな、普段との違和感で直ぐ気付く

「ええっ?! い、いつから?」

「前々から男にしては線細いとか、声高いとか、なんか感覚がずれてる事があるなあ、とかは感じてたが、確信したのは今さっき、その胸を見てからだな」

「えっ? …… ああつ?!」

どうやら隠しているのを忘れていたらしい、それなりに豊かな脹らみがあるのを今更になって両腕で隠した、その胸で男は無理でしょう

と同時にオレの左頬に痛みががが

「今のは流石にコウタさんでもデリカシーがないです」

「すみませんでしたふみまへんへしは」

確かにデリカシーがなかったが事実なので仕方がない、なのでクロエさん頬をつねるのは止めてくださいお願いします

数秒後、解放されてもまだ少し痛む頬を擦りながら話を元に戻す、

その際にクロエが『私だつて遺伝子設計的にはもっと大きくなります……』とか呟いていたのは無視する

「すまん、それで何で性別を偽って転入して来たんだ?」

「う、うん、それはね——」

その後には語られたのはシャルルの身の上話だった

自分の母親はフランスのＩＳメーカーであるデュノア社の社長であるアルベル・デュノアの愛人であった事

その母親の死を切っ掛けにアルベル・デュノア引き取られ、その高いＩＳ適性からデュノア社のテストパイロットとなった事

そしてデュノア社はラファール・リヴァイヴという名機を生み出したが第三世代機の開発に難航、欧州の統合防衛計画、イグニッション・プランから外され、フランス政府からの資金援助も危うく経営難である事

この学園に男装して転入したのは数少ない男性ＩＳ操縦者としての広告塔としての役割と、同性である事を利用して他の男子のＩＳのデータを盗み出す事が目的だったとの事だ

そして同室になっていた一夏によるちよつとしたハプニングか原因で性別がバレたが、一夏が『ＩＳ学園の関係者はどのような国家、組織の干渉も受けない』という国際規約を思い出した事で、取り敢えずの時間稼ぎにはなったという事、そしてその状況を打開する方法をオレにも相談したというのが現在の状況らしい

「成る程な」

食後に温かい緑茶を飲みながら一通りの事情を聞き終えたオレはそう述べた

シャルル改め本名をシャルロット・デュノアという彼女は不安そうな表情をしながらオレの出方を窺っている

「取り敢えず、大まかな事情は分かった。それで一夏、お前は何故オレが協力すると考えた？」

「えっ？」

「正直に言えばこれは一介の学生の手に負える問題ではないぞ。より高度な、政治的な内容が多分に含まれている話だ」

「だからって、シャルロットが牢屋に行くのを見過ごせるかよー！」

「とはいえ学生の身で何が出来る？成る程、三年はフランスからもデュノア社からも干渉されないだろう。だがどうやって三年も隠し

通す？忘れていたようだが、学生の身なんだ。当然ながら定期的に身体検査もあるぞ」

「それは……」

一夏は己の正義感からシャルロットの事を助けたいのだろう、だが具体的な策がない、三年は猶予があるとはいえ、三年も隠し通せはしない、二学期には身体検査もあるのだから、そこで確実に露見する「それと、オレの所属も関係する。お前はその意識が薄いだろうが、オレ達はラビットフット社の所属だ。オレがこの情報を利用してデュノア社から口止め料として多額の金銭を要求する可能性とか、考えなかったのか？」

その事を伝えて返ってきた一夏の拳をオレは受け止める

「康太、お前がそんな奴だとは思わなかったよ！」

「人を無条件に信用するなという良い教訓になっただろう？」

怒りの籠った目でオレを睨む一夏、分かってはいたがコイツは純粋で真つ直ぐな奴だからな

「い、一夏、大丈夫だよ。ボクはもう諦めてるから……」

「けど……」

「と、まあ一介の学生ならば諦めるだろうな。が、一夏、忘れたか？オレ達もラビットフット社の所属、単なる一介の学生とは違うだろう？」

さて本題に移るとしよう、さつきまでとは違うオレの言葉に一夏とシャルロットは困惑した表情を見せている

「いやなに、お前の真つ直ぐな所は美点だが欠点にも成りうるという事だ。好ましく思うが、罣に嵌めるのも容易い。勉強になっただろう？」

「もしかして、わざと俺を怒らせるように仕向けたのか？」

「さつきも言ったが、この件は政治的な内容を多分に含んでいる。そんな権謀術数渦巻く世界を相手取るんだ、お前も少しは学ばないとな」

その感情に任せて交渉で不利になる事もあるのだ、その辺りの事を勉強させなくてはならない

まあ憎まれ役が必要だったのだからオレが引き受けたただけだ、しかし一夏は腰を九十度折ってオレに深々と頭を下げた

「済まない、康太。少しでもお前を疑った」

「構わないさ、必要だからやっただけだ。とはいえオレもそこまで頭が良いわけではないからなあ……因みに一夏、お前はどうかやってシャルロットを保護するつもりだったんだ？」

まさか自分では何も考えておらず、オレに丸投げするつもりだった訳ではあるまい、もしそうだった場合は迷わず殴るが

「えっと、ラビットフット社から給料は出てるから、それを使えばシャルロット一人養うくらい訳ないと思っただけど、その後は……」

その言葉を聞いてオレは少し頭を抱えた、が確定ではないからより詳細を聞き出す

「あー、養うって、具体的には？」

「えっ？うーん、もし学園を追い出されたら何処か部屋を借りて、俺の給料の中から生活費を渡して、かな？あ、でもデュノア社の人間が無理矢理連れ戻そうとかしてくるなら俺が守るつもりだったぜ！安全な場所まで逃げて、そこで隠れて生活すれば大丈夫だろう！」

「……シャルロットは、まあこうなるわな」

途中の方はかなり適当で無計画もいところだが、一夏の語った内容は世間一般で言うところの駆け落ちだ

当然、一夏にそんなつもりは無いんだろうが、シャルロットはそれを聞いて顔を真っ赤にしてる、恐らくは駆け落ちだと気付いたんだろうな

もうコイツ等放っておこうかな、と一瞬思ってしまったが頼まれた以上は最後までやり遂げるさ、面白そうだし

「取り敢えず一夏が微妙に考えが足りないって事は分かった。それで解決策だが、幾つか思い付きはしたぞ」

「本当か!？」

「ああ、どれも難易度高いけどな。一つはシャルロットの秘密を知った事を条件に、その事をバラすぞとデュノア社を脅す。さっきオレが挙げた悪どい方法だが、要求は金銭ではなくシャルロットのラビット

フット社への移籍だ。まあ、出来なくはない策だな」

バレればデユノア社もイメージダウンは免れない、なら乗ってくる
とは思うが跳ね除けられる可能性もある、シャルロットに全て押し付
けて知らんぷりとかな

後はこの方法だと向こうの恨みを買うのもデメリットになる、まあ
あまり良い手段とは言えない

「二つ目は金でシャルロットを移籍させる方法だ。とはいえ金銭の用
意はオレ達には無理だからISのデータを代わりに対価とする。
シャルロットは盗めと言われたが、別に交換でも向こうとしては喉か
ら手が出る程に欲しいだろう。本来なら国に帰される所を取引しよ
うと言うんだから」

メリットは向こうに貸しを作れる事だ、わざわざ慈悲を与えてやつ
たとな

そして前述の策に比べると恨みは少ない、だがシャルロットを救い
だすというのが目的だと知られば足元を見られかねない、交渉する
時に注意が必要だ

取り敢えずはこの二つ、出来るなら後者が望ましいかな、それが一
番波風を立てなくて済む

他にもあるにはあるが、それは条件が居る

「流石は康太だ！これなら行けそうだけぞ！」

「ハハハ、そう褒めるな。と、まあ良い面だけを見た策なんだよなあ。
デメリットが、それもデカい障害があるんだ」

「障害？そんなの、頑張つて乗り越えられるようなものなのか？」

「ああ、頑張ればいけるかもな。本当に、本気で頑張れば」

「俺に出来る事なら協力するぜ。元はと言えば俺が言い出した事だか
らな」

「そうかそうか、なら篠ノ之博士との交渉頼んだわ」

オレがそう言った途端、一夏の表情が固まった

そう、ラビットフット社を利用する以上は決して避けては通れない
最大の難関、それが篠ノ之博士である

まあ端的に言って身内でも何でもないシャルロットの為にといつ

て動く人じゃないよな、それどころかオレが始めに挙げたように研究費目的に脅迫するかもしれない

それには付き合いの浅いオレよりは一夏の方が適している、とはいつてもあの人が自分の組み上げた機体のデータを素直に渡すとは欠片も想像出来ないしな

その辺りの篠ノ之博士の性格は一夏もよく分かってるだろう、今も額に冷や汗を流しながら必死に考え込んでいた

さて、オレはこの間に別の策を考えるか

だがその前に頭の回転で言えばオレより上であろう人物に訊ねた

「それでクロエは何か気付いた事はあるか？例えば、変な違和感とか」「恐らくはコウタさんが感じている物と同じような物を私も感じます。一見、筋が通っているように見えて引つ掛かる部分を」

どうやらクロエも気付いていたらしい、なら続きはISのコアネットワークワーク経由で会話するとしよう

先に挙げた二つの下策、中策よりもより良い未来を掴める可能性のある上策の話

19話 真実

コアネットワークを介した通信は言葉を発する事なく思考のみでの会話が可能となる、故に聞かれたくない会話はこれを使えば良い
オレとクロエは表面上は何事もないかのように装いつつ会話を始めた

『さっきも話したが、シャルロットの命じられた内容には穴が多すぎると思うんだ。少なくともデュノア社長の指示じゃないと思う。最
後期とはいえあれ程に汎用性の高く、その性能故にシェア率の高い機
体を開発可能なだけの技術を擁し、実際に成功させるだけの経営手腕
を持つ人間にしては不用意に過ぎる』

『私も同じ意見です。本当にデータを盗み出す事が目的ならもつと上
手くやれる人間を選ぶ筈です。少なくともシャルロットさんの動き
は訓練を積んだ物でもなく、本人にも隙が多すぎると思います。広告
塔として利用するにしても男装させてまで送り込むにはリスクが高
過ぎます。シャルロットさんの容姿は確かに中性的に見えますが、そ
れよりも女性のままでハニートラップを仕掛けた方が成功率も高そ
うに思えます』

『だよなあ。そうなるとデータ云々は後付けで別の目的があると考え
た方が良いな』

『命令系統の違いとかでしょうか？シャルロットさんの話だと正妻の
方から嫌われていたようですが、そのようにシャルロットさんを疎ん
でいる勢力による干渉があったと考えてみれば、わざと捕まるように
仕向ける事で排除しようとしたのだと思います』

『だが命令は社長のアルベール・デュノア本人から直接受けたいらしい。
ならどんなメリットがあるのか、そこを考えた方が良い』

そもそもシャルロットを手駒としか扱ってないにしては色々と待
遇が良すぎる、愛人の娘なんて企業としては外聞が悪い、にも関わら
ず引き取ったのはIS適性が高かったから……というのも理由の一
つか

テストパイロットにしても専用機として与えたままにするのもな、

信用というか裏切られる可能性もある存在に兵器を預ける、ならばそのリスクに対するメリットは？

適性が高いのは理由付け……テストパイロットとしたのも表向き
の理由……目的はシャルロットにISを持たせる為だとするのなら
『そもそも、アルベール・デュノアはシャルロットを疎んでいない。表
立って伝える事が出来ないが、寧ろ愛している？うん、その前提で
ちよつと組み立て直してみよう』

まずデュノア夫妻に子供はシャルロットしか居ない、デュノア夫人
が子供を生めない体質というのは聞いていたから、自然と跡取りは
シャルロットになる

デュノア夫人がシャルロットを疎んでいるのは話を聞く限り可能
性が高い、そして愛人の娘に跡を継がせる事も面白いとは思わない筈
だ

逆にアルベール・デュノアにとっては愛人の娘、愛人という事はあ
る程度の愛情を抱いているのは間違いない、となると彼はシャルロッ
トを保護する事が目的と言える

そうなるとシャルロットにISを渡した事も辻褃は合う、身を守る
のにIS程便利な物はないだろうからな

更に言えばデュノア夫人の実家は資産家と聞く、もしもシャルロッ
トが居なくなればデュノア社を継ぐの者が夫人の一族から出てくる
かもしれない

途端に構図が見えてきた気がする、シャルロットを保護したいアル
ベール・デュノアと、排除したいデュノア夫人とその家族、そう見え
ば何となくが見えてくる物もある

全ては推測でしかないが遠くはない筈だ、後はそれを補完する情報
さえあれば

「なあ二人共、一つオレの推測を聞いてはくれないか？」

その為にもシャルロットに確かめなければならぬ事がある、だか
らオレは今の推測を二人に話した

一通りオレの推測を聞いた二人は一部は納得したような、だが釈然
とはしない顔をしている

「話しは分かったけど、それなら何でシャルロットはIS学園に送り込まれたんだ？それも男装してまで」

「学園に入れたのは学園のセキュリティが目的だと思う。仮にシャルロットの暗殺を夫人側が企んでも、フランスに居た頃に比べるとその難易度は天地程に差がある。が、男装の理由がなあ……そこだけが矛盾の塊なんだよ。それらしい理由としては、夫人側から社長へと圧力が掛かった、とか。そうまでしないとイケない程に経営が切羽詰まっている、とか」

「あ、そういえば……」

「何か心当たりが？」

「う、うん、実は日本に来る飛行機に乗ってる途中でISにタイマー式で開封されるメッセージデータがあったんだ。その、お父さんが映像で直接言葉で話してくれていた物なんだけどね」

「ほう、その内容は？」

「えっとね、その、始めに『改めてお前のIS学園での目的についての説明だが——』って所で、また同じ男装して同じ男性操縦者のデータを盗めって指令だと思って、途中で閉じたら勝手に消えちゃったんだけど……」

「それだな」

「それだよな」

「それですね」

重要な鍵となる情報に間違いはない、だが問題は再生された後は消えたという事だ、残すのはマズイと思ったのか予めそうプログラムされていたんだろうな

「シャルロットさん、私がデータの復元を試みます。ISへのアクセスを許可して下さいますか？」

「う、うん、それは是非とも」

「では失礼します」

と、篠ノ之博士に頼むしかないかと思っていたらクロエが先にシャルロットの首飾り、待機状態のISに触れた

クロエはそのままの姿勢を保ち、傍目には何をしているのか分から

ないが一分と経たない内に手を放した

「復元完了です。これでデータの閲覧が可能になりました」

「は、早いな……」

「私は元は戦闘よりもこのような情報処理の方が得意でしたので」

その復元の早さに一夏が驚いているが、確か篠ノ之博士が言っていた電子戦に特化した特殊な黒鍵とかいうISをクロエが持っていたと思うから、それが理由だろうな

とはいえ復元出来たのなら問題ない、後は閲覧して真実かそれに準ずる物がある事を期待しよう

「それじゃあ、再生するよ」

オレ達にも見えるように空中に投影する形でデータを表示するシャルロット、そこに映っている男性がアルベル・デュノアか

『これを見ている時、お前は既に飛行機に乗りフランスを発っている事だろう。改めてお前のIS学園での目的についての説明だが――』

此処からがシャルロットの見ていない先だ、部屋の中の誰もが食い入るように注目する

『男装し、他の男子生徒と接触、専用機のデータを盗み出す。私は確かにお前にそう命じた。だがその全てを忘れる』

「これって!?!」

「ビンゴ、という事か。静かに、まだ続きがある」

シャルロットは見て分かる程に動揺している、だが可能性があるだけだ、まだ決まってはいない

『男装する必要もない。事実上の学園長でもある轡木氏とも話しは着いている。お前は何も気にする事なく学生生活を送りなさい』

途端に映像の中のアルベル・デュノアの表情が変わる、それは経営者としての威厳のある顔から、娘を想う一人の父親の顔だ

『済まなかった、シャルロット。サラにも悪い事をした。愛すと言ってまともに会う時間さえ取ってやれなかった。捨てたのだと、今更になつて何をおもわれても仕方のない事をした。それでも言わせて欲しい、私はサラの事を今でも愛している。サラとの間に生まれたお前

の事もだ』

「お父、さん……っ……」

『今はまだ会う事は出来ない。社の派閥の一部がお前の暗殺を企んでいたからだ。表向き、お前は男子という事になっている。政略結婚の駒にしない為にだ。それでも、いつまでも隠し通せるものではない。これから私は社内の不穏分子を一掃する為に動く。誰もお前の未来を邪魔しない為に。シャルロット、お前はお前の生きたいように生きなさい。会社を継ぐ義務もない。継ぎたいというのなら応援するが、それはサラの最期の願いにも反する』

「お母さんの……っ？」

『サラが入院した後、私は一度だけ見舞いに行く事が出来たんだ。その時お前は学校に行っていたが、サラが私に言ったんだ。『あの子の、シャルロットの夢を応援してあげて』と。お前が何を願っているのかはまだ分からないが、私もそれを応援しよう。それが彼女との、サラとの最期の約束だ』

「あっ……ああ……」

『ふう、もう時間がないな。シャルロット、私達の愛しい娘、例え離れていても、私はお前を愛している。だがお前は何も心配する事はない。私も、サラも、そしてああいう言動こそしたがロゼンダも、お前の事を愛しているんだよ。今度会う時、三年後に学園を卒業した時にはサラの事を話そう。その時までには私も掃除を終わらせておく。その時の事を楽しみにしているぞ』

「お、父さん……お母、さん……うっ……うわあああああんっ!!」

映像はそこで終わった、それと同時にシャルロットは今まで抑えていた物が決壊したかのように泣く

オレは一夏を連れて廊下まで出た

「女の涙は見ないのがマナーだ」

「でも、慰めた方が良かったんじゃないか？」

「あれは良い涙だ。母親を失って不安に押し潰されそうになって、それでも自分は愛されていたと知った、喜びの涙だ。今は泣かせるだけ

泣かしておこう」

「そう、だな。けど、あの父親も、何もあなるまで放っておかなくても良かっただろう！もっと早く話せばアイツがあなるなんて事は！」

「そうかもな。だが、アルベール・デュノアは父親であると同時に大企業の社長でもある。その背には自分の家族だけでなく、大勢の社員の生活も乗っているんだ。甘さを切り捨てなければならぬ程にな」

「けど、けどよ……やっぱり俺は納得出来ねえ！」
感情に任せて憤る一夏、それは一般的には正しいのかもしれないが、それでもオレにはアルベール・デュノアの気持ちも分かるよ

「一夏、お前確か両親が居ないって言ってたな」
「ん？ああ、そうだけど、それがどうした？」

「なら分からないかもしれないがな。父親ってのはいつも一言足りないんだよ。その分は、子供が自分で埋め合わせなくちゃならない」

「康太の父親もそうだったのか？」

「さてな。けどお前にだつてあるんじゃないか？意地になって、自分で全部背負ってしまったおうって事が」

親父も一度だけあったな、無茶して仕事を続けて体調を崩して、普段から病氣しないだけにその時はオレも取り乱して、理由がオレが何気なく言つた幼馴染と会いたいという一言だったからな

幼い頃に隣の家に住んでいたその幼馴染は父親の仕事の都合で日本に来ていた

そんな幼馴染も八歳を迎えた頃にまた父親の仕事の都合で国に帰つた、カナダにだ

そんな幼馴染と会うとなればカナダに向かうしかない、オレの親父は遠出する為に休日出勤繰り返して長期休暇を取れるようにしてさ、そんなもの夏休みとかの日程を使えば良かったのに、直ぐに行けるようにと仕事を片付けようとして、結局は体調を崩していた

言つてさえくればそんな事にはならなかったのに、子供の我が儘を叶える為に一人で背負つて、嬉しさよりも不用意な発言をした事の後悔と悲しみが勝つた程だ

シャルロットの事情はオレのそれよりも重いが、父親の想いという点に関しては大差ないだろう

それが親から子への愛に変わりはないのだから

一夏も意地になる事を自覚したのか考え込んでいる、オレも親父の事を思い返していると、少し経ってから部屋の扉が開いた

「もう大丈夫との事です」

「分かった、話の続きだな」

シャルロットの気持ちが落ち着いたのか呼びに来たクロエに続いて部屋に戻る

中に居たシャルロットは目こそ赤く腫らしているが視線は真っ直ぐであり、そこには不安など一切見られない

オレ達の姿を確認したシャルロットはまず最初に深々と頭を下げた

「一夏、康太、二人共ありがとう。クロエには言ったけど、三人のお陰でお父さんの本当の気持ちを知る事が出来たよ」

「気にするなよ、シャルロット。俺達が力になりたいと思ったからやっただけだぜ！」

「そうだな。シャルロットだけならオレは動かなかったと思う。真っ直ぐな熱い馬鹿が居たから手伝ったような物だ。それに、推測する以外には何もしていないしな。そういう点で言えばデータを復元したクロエと、早い内にラッキースケベ発動して問題解決の切っ掛けになった一夏の手柄だろう」

「あ、あはは……」

「康太、お前実は俺の事嫌いだろう？」

「何を言う、一夏。普通は男だと思っただけでもシャワー室に入ろうとは思わないだろう。オレは事実を言ったただけだ」

「ぐっ……」

さてと、一夏が黙ったところで今後の方針を話すか

「それで、シャルロットはこれからどうする？もう男装する必要もない訳だが」

「うん、それについてはもう少し続けるよ。近い内にボクは一度、お父

さんに会いに行こうと思うんだ」

「……理由を聞いても?」

「あの映像でお父さんの想いは知れた。でも、何も知らないままでは居たくない。直接会って、ボクの気持ちも伝えたいんだ」

「それが父親にとつて余計なお世話だとしてもか?」

「お父さんが言ったんだよ、自分の好きなように生きろって。だってら本当の親子になりたいっていうボクの願いも叶えて良いよね?」

「成る程、そう来たか。別に止める権利もないしな。だが一つだけオレからも良いか?」

「どうしたの?」

「いや何、どうせならシャルロット経由でアルベール・デュノア氏にアポイントメントを取ろうかと思つてな」

「えっ? ええっ!?!」

あの映像からアルベール・デュノアという人物の人となりは知れた、ならばオレの夢にも一つ関わって貰おうかと思つてな

娘の問題も解決したんだ、おまけにラビットフット社の社員であるオレなら向かうも断れまい

具体的に言えばラビットフット社とデュノア社の提携だな、今までも様々な企業から打診があつたが利権やら何やら面倒だからと篠ノ之博士が断つていたのだ

だが正直に言つて他の企業も巻き込んで宇宙開発を目指した方が早いからな、もしも信頼出来る企業が相手ならば巻き込もうというのは篠ノ之博士も言つていた

付け加えればデュノア社もISメーカーだし、開発に難航しているというのなら技術を見返りに交渉可能だ、資金集めの必要もない

デュノア社が宇宙開発に参加して他の企業もラビットフット社と接点を作ろうと宇宙開発に力を注ぐのなら、それは篠ノ之博士の求める夢に、オレの夢に近付くという事だ

寧ろそうなるように仕向ける、アルベール・デュノア氏は人間としても信用出来る人物と分かつた以上、利用しない手はないからな

「な、何か悪い事を企んでる顔だよ!?!」

「あー、気にしない方が良いで。多分、康太の夢にちよつと協力させよう」と画策してるだけだと思おうから」

「そこは確信してるの!? デュノア社、大丈夫かな……」

「大丈夫、大丈夫、ちゃんとI S の設計思想のデータをあげるから、その代わりにちよつと協力して貰うだけだから」

具体的にはマストドライバー施設の部品生産とかでちよつとライン借りたりしたいだけだから、篠ノ之博士の説得もオレがやつとくから手土産の設計思想も汎用性の高いラファールならちよつとの改良で直ぐに対応出来るさ、寧ろその汎用性を伸ばせるぞ

「さて、篠ノ之博士へのプレゼン資料作るか。後はデュノア社へのプレゼン資料に、普段から纏めてたデータの整理と、色々やる事が増えたなあ。フフ、フフフフ……」

「ボク、もしかして相談する相手間違えたかな?」

「だ、大丈夫だって。康太も根は善人だから、悪い事にはならないって。康太に相談するのを決めた責任もあるし、もしもの時は俺が身を挺してでも……」

二人が何か言ってるけど気にしない気にしない、さてと漂流物の中にデータがないからオレの記憶の中から設定を全部拾ってこないとなあ、画像に関してはアニメを基に3Dデータを作成する必要があるけど、これは後でやるか

まだ宇宙に出てないから装甲材を開発出来ないのは惜しいが、篠ノ之博士にもプレゼン資料として組み込むか

その日、一夏達が帰った後もオレは資料を作成し、切りの良い所でデータを保存しておいた、フォルダのタイトル部分には『G A T | X 105』と名付けてだ

20話 トーナメント開幕

シャルロットの件が起きた後、初の登校日となった月曜日、オレは欠伸を噛み殺しながら授業を受けていた

というのも資料を纏めていたなら楽しくなってどんどん掘り下げて、それにイラスト加えて、無ければ3DCG作ってと、広く手を出し過ぎたのが原因だ

完璧に自業自得なのだが、それだけに割り与会心の出来となった資料は昨日の夜に篠ノ之博士に提出してある、ストライカーパックの話はかなり食い付きが良かった、あれなら試作品の規格を合わせるのも楽になるとの事だった

それとは別にR型にする当たって目標性能に達するように割りとな茶な強化をしたジエガンの性能底上げも可能になるとの事だ、データが存在しない為に本物ではなく篠ノ之博士が独自の技術で強化した為に、R型は少し余裕がない設計になってしまったらしい

それを外付けのパーツで補う為にもストライカーパックを使用したいらしい、実装は学年別トーナメント後という事だ

そしてその学年別トーナメントなのだが、より実戦的な戦闘を行う為という名目でタッグ戦となっていた、実際には先のクラス対抗戦に於けるブルーディステイニーの乱入というアクシデントを踏まえて不測の事態が起きた際の対処能力を高める為らしいが

なので参加する際はパートナーを決めて申請するか、当日の抽選で決まった相手と組むか、どちらかを選ぶ必要がある

一夏はシャルロットと組むようなので、オレはクロエと組むか、そう思っていた放課後なのだが

「すまない康太、自分と組んでくれ！」

「あー、一秋、どうしてそこまでオレに拘るんだ？」

「ちよつとでも勝率を上げたいっていうのもあるんだけど、そうした方が良くなって気がするんだ」

「例の既視感か？」

「ああ、次の学年別トーナメントでも、何か起きるって予感がある」

一秋の既視感、それは以前にブルーデイスティニーの乱入を言い当
てているだけに無視は出来ない

間接的とはいえクロエがそれに救われただけに、オレ達はそれを
受け入れる事にした

「本当に大丈夫か、クロエ？」

「私の事なら気にしないで下さい。それに、抽選で決まった即席のペ
アの方が連携するには勉強になりそうです。いつもコウタさんと連
携していたので即興で何処までやれるか、やってみたいんです」

「お前がそう言うのであれば止めないけど、何か分からない
事があれば聞いてくれ。可能な限りで手伝うぞ」

まだ戦闘に関して是不安なところが残るクロエだ、機体性能からも
他の一般生徒よりは戦えるだろうが、連携となるとな

とはいえ他の生徒もISの搭乗時間からして連携なんて無理か

殆んどの試合は同じ舞台で二対一が二つ繰り広げられるだけ、先に
倒されればそのまま二対一になるだけだろう

そうなると性能も技量もクロエが上になる、なら一般生徒と組んで
もある程度は勝ち抜けるかもな

それでも一応はクロエの師匠だから頼っては欲しいのだが

その後、放課後での訓練はトーナメントでは敵同士という事で一夏
達やセシリア達とは別で訓練をする事になった

とはいえクロエはオレや一秋と三人で訓練している、クロエと組む
相手が誰であれ訓練機を使うだろうから機体性能の差がある、仮にオ
レ達のペアと当たっても問題ないとの判断からだ

そして今、オレは一秋とクロエの攻撃を捌き、逆に対艦刀による一
撃を両者に当てたところだった

「げほっ、ちよっとは手加減してくれよ……」

「二対一ならハンデだろ。そしてオレは使い慣れていない新装備だ。
しかもあまり慣れてない刀剣、これ以上の手加減は無理だぞ」

オレの両手に握られているのはI・W・S・Pに搭載予定の対艦
刀、その試作品である

昨日、ストライカーパツクの説明を篠ノ之博士にした後で即席で作

られた代物だ、どうにも要求性能に達しているかテストして欲しかったらしい

設定ではビーム兵器に継ぐ切れ味との事だったが、試作品の段階でも既にそれなりの切れ味を持っている

一秋が乗る白式にはエネルギーを消滅させる零落白夜がある、ビームサーベルでの斬り合い等が出来ないので助かってはいるが、やはり実体があるだけ重い、ビームサーベルと同じ感覚で扱うのは無理か

とはいえ悪くはない、このまま採用されても問題ないと思える仕上がりだ

ビームサーベルの代わりに設けられた両腰のアタッチメントに對艦刀を格納しつつオレは一秋とクロエに告げる

「トーナメントまで残り二週間。それまでは徹底的に動きの精度を上げて、連携を物にする。一秋の勘も何かが起こると言ってるんだ。やれる事は全部やるぞ」

何が起こるかまでは分からない、それでも備えて力を付けるに越した事はない

一応は織斑教諭にも話してはあるが、何が起きるか分からないのは対策のしようもないので、警備レベルを上げるに留まっている

当日は学園の外からも来賓として他の企業の人間が来たりする、そこにも人手を割いてるが最善を尽くすと言っていた

それでもその言葉にただ甘えるだけでは居たくないからな、一秋もその事を思い出したのか目の色が変わる

その後、二対一での訓練はメンバーを入れ換えたり、全員が敵の三つ巴で行ったり、ひたすらに実戦形式で鍛え上げた

そして遂に運命の日が訪れる



学年別トーナメント、その名の通りに各学年ごとに三つのアリーナを用いて行われるIS学園の毎年の恒例行事だ

一年生は触れたばかりのISで何処までやれるのかを、二年生は一年間学んだ事で何処まで技量の伸ばせたかを、三年生にもなると進路にも大きく影響してくる、自分の実力を企業等に大きく宣伝する為の

場である

それだけに三年生のアリーナは遠目に見ても剣呑な雰囲気が漂っているものの此所一年生のアリーナでの空気はまだ緩い

とはいえ別に手を抜いている訳ではない、それこそ一部の生徒は普通の学校行事とは思えない程に鬼気迫る雰囲気を纏わせている

そんな彼女達の繰り広げる試合をオレは観客席から眺めつつ、その試合内容を分析していた

今回、試合の相手は通常は公開されているのだがオレ達の相手は伏せられたままだ、理由としては相手のペアが抽選組なので試合本番の数試合前に決まる為である

そんな中、見知った人物が舞台に登場してきた

「おっ、弟の出番だぞ、一秋」

「そうだな。にしても、相手は箒か。相方は四十院さん、大和撫子ペアか？康太は知ってる相手か？」

「ああ、前に実機訓練の時に一緒になった事があるが、筋は悪くない。寧ろ、早くに慣れていた方だったな」

出てきたのは一夏・シャルロットのペアであり対するのは箒と四十院さんのペアだ

箒と四十院さんの機体は共に訓練機の打鉄、二人共技量は悪くないのだが運が悪い、専用機持ちのペアを相手にするには厳しい物がある「さて、どうなるかな」

性能だけで勝負が決まる訳ではないが、搭乗時間にも差があるだけに箒・四十院ペアが不利に思える中で試合開始を告げるブザーが鳴った

打鉄を纏う二人は同時に加速、日本刀型のブレードを展開して一夏を集中して狙う

「あれは駄目だな。ユニコーンの機体特性を理解していない。開幕速攻で一機を集中的に狙うのは悪くないが、狙うならシャルルを狙うべきだった」

その動きを見てオレは悪いとは思いつつ箒・四十院ペアの敗北を悟った

狙いは悪くないが恐らくは箒が一夏を意識し過ぎたのだろう、標的を間違えている

ユニコーンの装甲は固く単なる実体ブレードでは抜けない上に全身を覆う装甲である為にダメージを与えるには間接部等の装甲が薄いか存在しない箇所を狙うしかない

織斑教諭ならそれをやってのけるのだが、まだ実機に乗って日が浅い二人にそれだけの技量を求めるのは酷だ、やるなら機体の性能差も小さく攻撃の通りやすいシャルロットを狙うべきだったのだ

そこから素早くシャルロットを倒して二対一で一夏を相手にするなら勝機はあった、だが一夏が二人を引き付けている間にシャルロットが武装を展開している

アサルトカノンであるガルムの二挺撃ち、それにより気を取られた二人に振るわれるユニコーンの持つ大剣クレセントムーン、只でさえビームにより威力が高く、慣性の乗った、だめ押しとばかりに峰のブースターで加速するそれを受けて二人纏めて吹き飛ばされる箒と四十院さん

吹き飛ばされ壁に激突し、シャルロットが展開したミサイルランチャーによって二人のシールドエネルギーが尽き、試合が終了となった

一夏とシャルロットはまずは一勝とばかりにハイタッチを交わしてアリーナを後にする

それから数試合は続き、また知っている名前が出た

『セシリア・鈴ペア 対 更識簪・布仏本音ペア』

「またバランスが良いな。遠距離型のセシリアと近距離型の鈴、機体が特化型だけに役割と連携が明確になる」

そして何だかんだ言いながらあの二人の仲は悪くない、共に訓練をしてきただけに互いの動きも知っているから連携のタイミングも合わせられるだろう

そして対する二人だが片方ののほほんさんは同じクラスで何度か授業も一緒だったから知っている、普段ののんびりした性格と同様、ISの操作も緩慢というか、たまに転けそうになる事もあった

だが射撃は多少は出来ていた、少なくとも牽制くらいは出来るさ、多分

そしてもう一人の更識簪という水色の髪をした少女だが名前は知っている、日本の代表候補生であり専用機の打鉄式を有すると、入学前に篠ノ之博士から渡された各代表候補生の資料には書かれていた

だがその資料の内容と今の姿には違和感があった

「式式ではなく、通常の打鉄？」

そう、機体が違うのだ

あの時はまだ開発中と聞いていたから仕方ないにしても、外装系は完成してたと聞いていたから完成まで秒読みだと思っていたのだが、まだだったのか

とはいえ操縦者は代表候補生だ、その機動は他の生徒と同じ打鉄でありながら別物の機体と思わせる程に鋭い

得物も珍しい薙刀型の武器であり同じく前衛を務める鈴と互角以上に立ち回っている、槍や薙刀の使い手を相手にするには相手の三倍の技量が必要となるというのは剣道三倍段だったか、ともかく鈴が攻めきれていない

鈴の得物も青竜刀であるから一概に同じとは言えないまでも、あそこまで優勢を勝ち取れるというのも珍しい

加えてのほほんさんの射撃だ、狙っているのかいないのか当たりこそしないものの嫌な位置に嫌なタイミングで飛んで来る

加えて機体はジェガン・ライトアーマーだ、装甲こそ薄いものの火力はオレのジェガンとも同等である、それをオレと手合わせた事のあるセシリアと鈴も知ってるからこそ警戒しているのか

だが状況は膠着しているかに見えて実はセシリア・鈴のペアが押し込んでいる、というのも途中で鈴が更識簪の足止めに移行して、セシリアがのほほんさんを確実に仕留めに掛かったからだ

それにはのほほんさんも気付いたのだろう、だがのほほんさんは他の三人程の機動はまだ出来ない、被弾も増えていき遂には撃墜されるそして残った更識簪も機体が打鉄で尚且つ代表候補生が二人では

耐えきれずにシールドエネルギーを減らし敗北した

だが今日行われた試合の中で一番に盛り上がった試合に変わりはない、観客席からも大きな歓声と拍手が巻き起こる

「康太、そろそろ自分達も試合だ」

「ん？ああ、もうそんな時間か。対戦相手も、もう決まっ、た……な……」

アリーナの巨大モニターに表示されているトーナメント表、そこにあるオレ達の名前の下の枠に書かれている名前、それを読んで言葉をオレは失った

『織斑一秋、紫藤康太 対 ラウラ・ボーデヴィツヒ、クロエ・クロニクル』

……………マジで？

◆
アリーナにあるピットの一つでは二人の少女が互いに向かい合っていた

同じ髪色をし、顔の造形も何処か似たような雰囲気を持つ二人、クロエとラウラであった

「まさか貴様とペアになるとはな」

「はい、私も驚きました」

「フンッ、紫藤といったか。確かにこの学園の一年の中では抜きん出ている男だ。だがそんな男に現を抜かす貴様がペアとはな。もしもその男の気を惹こうと妙な真似をするようなら覚悟するんだな」

「そのような真似は絶対にしません。確かに私はコウタさんの事を、その、好意を抱いてはいますが、それは夢に向かって決して止まる事のない、前に進むのだという強い意思を見せているからこそです。それは戦闘も同じ。ジエガンではコウタさんの顔は見えませんが、あの人の強い意思はその機動からもしっかりと伝わってきます。私はそんなコウタさんに戦い方を教えて貰いました。なのに私がそんなコウタさんの名を貶めるような戦い方をする訳にはいかないんです」

これから共に戦うパートナーだというのに殺気さえ感じさせる視線でクロエを睨むラウラ

そんな視線を受けてもクロエは怯むどころか凜として返して見せた、その言葉の内容に感じられる本気さには同じように試合開始を待つ他の生徒も感嘆させられる程だ

しかしそんなクロエの様子をラウラは無言で切って捨てた、兵士に色恋の感情等は不要と、こんなに腑抜けた存在が自身と同じように生み出された者であるという事に苛立ちつつ

だがそれも些末な事だとラウラは思う、ならばその兵士としての欠陥品が想う相手を、自身の敬愛する教官の汚点とも言える存在共々、正面から叩き潰す、それだけの力が自分にはあるのだと信じて疑いもせずに

「そうだ、力こそが全てなのだ。私は運が良い、織斑一秋、そして紫藤康太、あの二人を一度に叩きのめす機会がこうも早く訪れたのだから」

憎悪すら感じさせるその声は誰にも聞かれる事なく消える

そして試合の時間が訪れた、力こそが自分の存在意義だと疑わぬ少女と、同じ遺伝子情報を持ちながらも兵器ではなく人間となった少女、二人は何の因果か共に同じ舞台に立つ

それに対するのは、本来ならばこの世には存在しない筈の異物イレギュラーである二人の少年だった



アリーナに四機のISが降り立ち、相対していた

片方は白式を纏う一秋とジェガンR型を纏う康太、対峙しているのはシュヴァルツエア・レーゲンを纏うラウラとバンシィ・ノルンを纏うクロエだ

試合開始までの僅かな時間、一秋は緊張した面持ちでラウラを見ており、ラウラは敵意を隠そうともせずに一秋を睨んでいる

そんな張り詰めた雰囲気霧の二人に反して康太とクロエは苦笑していた

「まさか第一試合で当たるとはな」

「はい、私も驚きました。でも、これで良かったのかもしれない。途中で他の専用機持ちの方達と当たっていたらコウタさんに教えて

貫った本気を見せる事も出来ずに負けていたかもしれないから」

「そうだな。確かに、自分が教えた相手の実力はこういつた時くらいしか見れないかもしれない。そう考えると今で良かったのかもな」

普段と変わらない雰囲気です。二人、だが次の瞬間にはその雰囲気も霧散する

「はい、なので私は――」

「だからこそオレは――」

アリーナ中に試合開始を告げるブザーの音が鳴り響き、四人はそれぞれに動き出した

「此所で散れ、織斑一秋！」

「自分は、過去から逃げない。立ち向かうんだ！」

「今日こそは貴方に勝ちます！」

「先任としても負けられない！」

白式が瞬時加速により一気に加速し、シュヴァルツエア・レーゲンがA I Cを発動する

ジェガンが強化型ビームライフルとシールド内蔵のミサイルを放ち、バンシィ・ノルンが本来よりは威力の抑えられたビームマグナムを撃つ

無鉄砲に突っ込んだ一秋はA I Cに捕まり、シュヴァルツエア・レーゲンのレールガンが白式をロックする

だがセンサーからの情報を受けたラウラは直ぐにその場を移動し、直前までラウラが居た空間を高出力のビームが通り過ぎる

「動きが直線的過ぎるぞ一秋！訓練を思い出せ！」

「クツ、康太、すまん！」

「チツ、足止め一つ満足に出来んのか貴様は！」

「今のは私のミスです。ですが向こうは単機でも強いです。連携を推奨します」

「ふざけるな！そんな物は弱者の使う手だ！邪魔だ、私が全て振じ伏せてやる！」

ビームマグナムを回避した後、康太は足を止められた一秋の援護にビームライフルを撃っていた

連射の利かないビームマグナムの発射ラグを把握しての射撃であり、クロエはそのフォローが間に合わなかった

その為、今は左手にジエスタ用のビームライフルを別で取り出ししており、射撃による支援を行おうとした所で合流した康太達が先手を打った

「二秋、例の戦術だ！プランB、一気にブツ放せ！」

「OK！」

その時には既にジエガンが全身にミサイルを装備していた、肩に三連装ミサイルポッドを備え、その外側に計四発の大型ミサイルを載せ、両腰のビームサーベルがあつた場所にはM型と同様の五連装ミサイルポッド、更には両手に陸戦型ガンダム等の六連装ミサイルランチャーを持ち、両腕には四連装ミサイルランチャーを二門備えたシールドを固定している

おまけに一秋の白式も康太からロックの解除されている六連装ミサイルランチャーを二つ構えており、次の瞬間には暴力的なまでの数のミサイルが大量の白煙と共に放たれる

それらは広い範囲を狙っており到底避けられる数ではない、その為に迎撃という手段を取ろうとするラウラだが自分へと向かってくるミサイルの数だけでもそれなりに多い

連射の利かないレールガン、AICでも止められるのは二つだけ、迫るミサイルの中には威力の高い大型ミサイルも含まれており、ワイヤーブレードを犠牲にしても迎撃しようと思悟を決める

だがそれより先にシュヴァルツェア・レーゲンの前に割り込む影があつた、クロエのバンシィ・ノルンである

「たあああああつー！」

右腕のビームマグナムで複数のミサイルを巻き込み、左手のビームライフルをマシンガンのようにフルオートで発砲、頭部のバルカンと背負っていたアームドアーマーDEのビーム砲で迎撃する

シュヴァルツェア・レーゲンの武装では確実に被弾していた攻撃を、しかしクロエは得意の情報処理能力で瞬時に驚異度の優先順位を付け効率的に迎撃したのだ

それによりクロエ達が居る空間だけはミサイルの脅威は無くなつており、周囲では爆発が立て続けに起きる中で無傷になった

「お前――」

「来ます！」

何故、と訊ねようとするラウラを遮ってクロエはビームマグナムの銃身下部に備えられたリボルビング・ランチャーを未だに残るミサイルの爆煙に向けた

次の瞬間、爆煙を切り裂いて少しでもセンサーに感知されないよう対艦刀を右手に携えたジェガンが現れる

その姿を確認した途端、素早く狙いを合わせたクロエがリボルビング・ランチャーより瞬光式徹甲榴弾を放つ

四発放たれたそれはジェガンが構えていたシールドに命中した後、一拍時間を置いてから発光し爆発する

その武装を知っていた康太は既にシールドを投げ捨て後方に退避している、クロエが康太の奇襲に気付けたのは普段から康太の戦い方を見ていたからこそだった

「次は白式に警戒、コウタさんだけが奇襲を仕掛けるとは考えられませんが――」

「ならば、そこか！」

言われて周囲を見渡したラウラは不自然に爆煙が動いている箇所を見付けてレールガンを撃ち込む

それは直撃こそしなかったが爆煙を晴らし白式の姿を暴く事に成功する

「二秋、上がれ！」

「ッ！分かった！」

奇襲を防がれた、だが爆煙の外から康太が呼び掛けると二秋は白式を上空へと飛翔させる

それを見たクロエはアームドアーマーDEを前面に展開、爆煙の向こうに隠れた康太を想定し、行動に移す

「ビームが来ます、私の後ろに！」

「了解！」

クロエの声にラウラも可能な限りバンシィ・ノルンの後ろに隠られるよう機体を屈ませる

一拍置くと赤い色をしたビームが水平に薙ぎ払われるも、アームドアーマーDEの備えたIフィールドによりビームが拡散、直撃を回避した

更にはビームの照射により残っていた爆煙も完全に晴れ、三脚に固定したメガ・ビーム・ランチャーを構えるジエガンの姿を露出させた
「チッー！」

「させんー！」

即座に第二射を放とうとする康太、だがラウラがワイヤーブレードを放った事で退避し、ブレードは残されたメガ・ビーム・ランチャーを破壊する

更には追撃としてクロエがビームマグナムを放つが、それは零落白夜を発動させた一秋が射線上に割り込み切り裂いた

それにより両チーム共に合流した事になり、仕切り直しとばかりに互いに距離を取り、武装を整え出した

短い間に行われた攻防、そこに含まれる連携に観客席からは歓声上がる

だがそんな彼等の事を悪意を持った眼で見ている存在が居た事は他の誰も気付いてはいなかった



アリーナの観客席の中でも来賓用に設けられた個室、その中では軍服を着た氷のように冷たい眼をした男と、端末を持った白衣を着た瘦身の男が居た

「博士、自慢の人形は学生にも手こずっているようだが？」

「そ、そんな筈はない！アレは成功品なんだ！たかが学生に遅れを取る等！」

「しかし実際には攻めきれしていない。それどころかパートナーの手が無ければ早々に被弾、撃墜されていた様子も多々ある。おまけに相手は学生でも入学前まで一切ISに触れた事のない男子生徒だ。この事はどう説明するのかね？」

「そ、それは……あ、あれは篠ノ之博士の部下だぞ!? ならばその機体がどのような新技術を持っていても不思議ではない!」

「確かに片方はかの篠ノ之博士の手が入っている機体だ。しかし量産機でもある。多少の手は入っていても、素人だった人間に負けるような物なのかね、君の自慢の人形とやらは。まあいい、その件は今置いておこう」

「そ、そうか。そうだな、今は問題点を洗い出す方が先決という物だ」
「そうだとも博士。それで、その問題点だ。あの人形のパートナーである少女は明らかに人形と同じものだろう。博士、君は失敗作は全て処分した、そう言うてはいなかったかね?」

「ッ!」

白衣の男は遂に來たと悟った、試合開始時点でその姿を目にした時からずつと気にしていた事だ

そう、処分した筈なのだ、記録でもそうなっている、だが現実にアリーナに居る少女は他人の空似で片付けるには不可能な程に人形ラウラと似ていた

「フンッ、まあ今はそれも置いておこう。だが後日、責任を追及する事は忘れるな。ああ、しかし貴様の研究が有用な物であると証明されたのであれば処罰は軽くなるかもしれないな」

「わ、分かった、成果を出せば良いのだな? それなら簡単な事だ、直ぐに結果は出る。それと、私は少し席を外させて貰う」

そう言うて白衣の男は廊下に出ると少し離れて人気が無くなった辺りで直ぐに端末を操作しだした

「クソッ、何故私がこのような目に! あの失敗作が生きているのも、私以外の人間が余計な情を人形達に抱いて逃がしたからだろう! 何故私が責任を追及されねばならない!」

そう毒づきながら男は端末を操作し、目当てのプログラムを呼び出す

「このままでは他の無能共の生け贄にされてしまう。蓄積した研究データは惜しいが、大本の研究内容は私の頭の中にある。それを手土産に別の国に売り込めば私は研究を続けられる」

その為の手を打つ、白衣の男は呼び出したプログラムを走らせ、そしてアリーナから、学園から立ち去ろうとする

「忌々しい役立たずの人形め、せめて最後の最後まで役は役に立ってみせろ。クククツ、あの胡散臭い男が渡してきたシステムのテストも出来るしな。ふふふ、これで最後まで邪魔にしかならなかった面倒な失敗作も屠れる。そうだとも、私はこんな所で終わる人間じゃないんだ。あの人形も、失敗作も、余計な力を見せた男達も、私の障害になるのであれば全て死んでしまえ！」

どす黒い感情を抱きながら白衣の男は素早くその場を立ち去っていく

彼が持っていた端末、その画面には小さくではあるがしっかりと『Berserker SYSTEM』と表示されていた

22話 狂戦士

アリーナで行われている試合は更に白熱し、互いに戦闘を行う相手が入れ替わる事がありながらも互角の勝負を繰り広げていた

その中でも当初から連携を行ってきた康太と一秋が場の主導権を握っていたのに対して後半はクロエとラウラも拙いながらも連携を意識するようになり今では自然と背中を預け合うようになっていた

そして康太がクロエの動きを格闘戦で抑えつつ一秋を射撃で援護し、先にラウラから仕留めようと動き出した時、それは起こった

「何だ!? き、機体が私の制御を!?!」

「ど、どうしたんだ!?!」

「私も知らん!? 何だ、バーサーカー? それに、VTシステムだど!? 私は知らんぞ、そんな物! クツ、止めろ、止めろおおお!!」

突如として起こった異変に一秋は動きを止め、ラウラは何とか機体の制御を行おうと身を振るもシユヴァルツェア・レーゲンは動かないそんなラウラの尋常ではない様子にビームサーベルで斬り結んでいた康太とクロエも試合を中止し、シユヴァルツェア・レーゲンに視線を向ける

「あれは!?!」

「暴走、とは違うな。何が起きている?」

何かがこのトーナメントの中で起きるかもしれないというのは康太達も一秋からの話で聞いていた、だがそれがいつなのか、何が起きるのかまでは分からなかった為に反応が遅れたのだ

「違う、こんな物ではない! このような機械任せの力などではない! 私が求めるのは全てを斬り伏せる、意思のある剣なのだ! グウ、ガアアアアアツ!?!」

苦悶の声を上げるラウラ、それと同時にシユヴァルツェア・レーゲンの機体がタールのように溶けていく

そんな機体の中に取り込まれていくラウラは必死に手を伸ばすも、その願いは叶う事はなかった

「助、け……………て……………」

そして狂気に囚われた戦乙女はその姿を現す

◆ 完全に元の形を失っていくシュヴァルツエア・レーゲン、その中に取り込まれそうになっているラウラは言い様のない恐怖を感じていた

自らの機体に積まれていたシステムは敬愛する織斑千冬の力を完璧に再現するものであり、それは彼女自身が求めていた力でもある。だがそこに加えられている謎のシステム、その存在を認識した時、ラウラは直感的にそのシステムが織斑千冬という存在を否定する代物だと感じた

故に抵抗しようとしたが結果は御覧の通り、何も出来ずに無力なまま、こうして為す術もなく機体に取り込まれてしまった

現在、表向きはどの国もISは無人機の開発に成功していない、可能だとすればISという存在を生み出した篠ノ之束だけである

故にVTシステムを発動するにもISを起動する必要がある、それには人間が乗っている必要がある、ラウラはそのパーツとして乗せられているだけだ、その動きにはラウラの意思は介在しない

(結局、私は何も出来ない、昔の無力な自分のままという事か)

次第に薄れ行く意識の中でラウラはそう独りごちる

思い返すのはこの世界に生まれてからの記憶、機械の子宮から生まれた人造の命、戦う為だけに生み出され、それに疑問を抱くこともなく戦闘訓練に明け暮れる日々だ

ありとあらゆる兵器の扱いでは他の、自らと同じように生み出された者達でさえも追従を許さずスコアの差を伸ばした

しかし順調に成績を伸ばしていたラウラはISの適性が低かった、それどころか左目に移植されたナノマシンの不適合、その制御が出来ずに成績も低迷、出来損ないの烙印を押された

そのまま他の出来損ないとされた個体と同様に廃棄されるのかとも考えた時にラウラは光に出会った

絶望の中で差し込んだ光、圧倒的な強さを誇るその光によってラウラは再び成績を伸ばし部隊でも最強の座を手に入れた

だからラウラは求めた、その光と同じ物を、その強さを自分の物にする為に

そこまで思い返してラウラは自嘲した、そこまでして得た力はどうのようによに役立った？何をやる事が出来た？

結局は群れなければ何も出来ないと思っていた相手に一方的に押されていたではないか、それも己と同じ遺伝子情報を持つあの者が居なければ確実に押し負けていた

（無様だな、私は。全てを賭けて戦っていたのは私だけではなかったのに、それを見ていなかった。即席で連携を組んだクロエ・クロニクルも、量産機のカスタム機であれだけの動きを見せる紫藤康太も、そしてただ憎かったあの男も、織斑一秋誰もが死に物狂いで戦っていた。ああ、そうか、黒兎隊の面々も同じか。それを私は一方的に拒絶していたのだな）

次に思い返すのは自らが隊長を務めていた部隊の面々を思い出す、最強である自分だけで任務を進められると先行しても見捨てずに後方から援護をしてくれていたのを、今になって思い出した

（叶うのならクラリツサを始めとした皆にも謝りたい……最早その資格もないのかもしれないが……）

既に意識が消えそうになっており、いつ完全に吞まれてもおかしくない状態だった

このような自分など誰が好き好んで助けると言うのか、いつそのまま完全に意識を手放してしまった方が楽になるのではないか、そう考えてしまっていた

だがその時、何も見えない暗闇の中で視界が白く塗り潰されていった

（光……う？）

それはかつて見た光に似ていた、無意識にその光へと手を伸ばしたラウラ、そしてその手を掴む力強い手があった

「ラウラアアアア!!」

「お前……!?!」

それは彼女の敬愛する教官と同じ剣を持つ者、織斑一秋の姿だった

◆ 時間は少し遡りシユヴァルツエア・レーゲンが完全に変化を終わらせた時の事だ

V Tシステムにより変化したシユヴァルツエア・レーゲンは暮桜の姿を取るとバーサーカーシステムによる外部操作で最優先目標をクロエに設定、リミッターを外されパイロットの負担を無視した加速でバンシイ・ノルンに迫る

「狙いはオレ達、いやクロエか！」

しかしそこに零落白夜を警戒して対艦刀を持ったコウタが上段からの一撃を交差させた剣で受け止める

「グツ、重い!？」

だがリミッターが外れたその一撃は通常のISとは比べ物にならない程に重く、ジエガンの間接部が軋みを上げる

何とか堪えたところで康太の背後から出たクロエがビームマグナムを発砲、暮桜を後退させるも、ダメージはなく再び加速する

『こーくん、くーちゃん、聞こえる!？』

「束様、聞こえます。コウタさんも聞こえてる筈ですが戦闘中です」

『見てるから状況は分かるよ。それで、アレの事について情報を教えるね。あれはV Tシステム、モンド・グロツソの優勝者である各ヴァルキリーの動きをトレースして繰り出すシステムだよ』

「えっ? 束様、確かそれは……」

『うん、アラスカ条約で使用どころか研究も禁止されてるね。でも目の前の機体は搭載してる。しかも改造されてるのか、やけに機体出力が高い。まず普通のISだと剣を合わせても簡単に押し負ける筈だよ』

「それではコウタさんが——えっ?」

どれだけの技量があろうとも機体性能の差が決定的では不利だ、相手が織斑千冬のコピーという事はその技量もずば抜けている

だがクロエが見た光景は今の情報を覆す物だった、暮桜の左足、それを足首の辺りで康太が斬り飛ばしたのだ

「確かに動きはコピーですけど、やれなくはないですね。博士、これ不

完全なシステムだったりします?」

『こーくんの言うとおり、不完全なシステムでもあるけど、見た所はまた別に要因があるね。混ざってるもう一つのシステム、どうにも外部からISを操作可能な物みたいだけど、それが原因かな?それにしてもこーくん、かなり冷静だね』

「入学試験の時に織斑先生が相手で助かりましたね。あの時と比べれば目の前の相手はフェイントにも引っ掛かるし、何よりも気迫がないから怖くありません。あと、外から何か操作してるって言ってましたけど、それが原因なのか動きがちぐはぐな時があります。そこを突けば善戦出来くはないですよ」

康太はかつて打鉄を駆って試験の相手をした人物の事を思い返す

当時、康太はその人物に全く敵わなかった

だが目の前のコピーはその技こそ盗めているが絶対に勝つという思いがない、そして此方の動きに反応して動くだけだからフェイントにも引っ掛かる、少なくとも織斑教諭ならば絶対に引っ掛かる事のない動きで釣れる

おまけに何処かでコイツを動かしている何者かは戦闘経験が少ないと見た、何故なら動きに合理性がなくその場で動いているに過ぎない

その機体出力こそ脅威ではあるが、言ってしまったえばそれだけの敵だ『ふーん、なら大丈夫そうだね。それじゃあこーくん、その見るに堪えない贋作、完膚なきまでに叩き潰してくれろ?元のVTシステムさえ私の気に障るのに、それを更にダメダメな存在にするとか、それでちーちゃんの姿を取るとか、逆に感心しちゃうくらいなんだ。この私をそこまで怒らせた人が居たんだってね』

「了解しました。パイロット、ラウラ・ボーデヴィツヒに関しては何?」
『んー、どうでも良いよ。生きてても死んでも、私は気にしないからね。まあ、あの加速だと常人はとづくに意識を失ってるよ。その後生きてるか否かは本人の頑丈さ次第かな』

あくまで自分の事が優先な篠ノ之束の言葉に一瞬だけ呆気に取られた康太だが、即座に暮桜を瞬殺すれば済む話だと考え直し対艦刀を

構え直す

だがそこに一秋が割って入った

「康太、自分にも協力させてくれ！」

先程までの通信は一秋にも通じていた、故にラウラの生死を問わな
い篠ノ之束の方針に反射的に出た言葉だったが、篠ノ之束は普段と変
わらない笑顔を浮かべたまま一秋に告げた

『やあカズくん、こうして直接話をするのは久し振りだねえ。けど大
丈夫だよ、アレならこーくん一人でも時間を掛ければ制圧出来る。キ
ミの出番は必要ないよ』

「けど！それだと時間が掛かって、アイツが……」

『どうても良いよ、あんなの。こーちゃんに取って邪魔になるだけの
相手だし、それにカズくんは知らないと思うけどアレは人間じゃな
い、人形だよ。戦う為だけに生み出されて、それを何とも思わない人
形。それが死んでも誰も困らないじゃないか』

「そんな、アンタは！」

『これ以上、余計な事はしない方が良いよ。今ので向こうの再生の時
間は終わる。余計な口を出して、むぎむぎアレを討つチャンスを逃し
た。他の誰でもない、カズくんが余計な口出しをしたからね』

戦闘に於いて康太は対艦刀で暮桜の片足を斬り飛ばしていた

それにより暮桜は機体の修復に専念、斬り飛ばされた片足を使い修
復していたのだ

剣を使う上で踏み込みは重要な要素となる、織斑千冬ならまず機体
の修復が出来ないので片足でも剣を振るうが真似るだけのシステム
には出来ない、その違いから生まれた隙だったが一秋と篠ノ之束のや
り取りの間に暮桜は完全に復活を果たした

『もう良いね。こーくん、見ての通り相手は修復するけどそれにもエ
ネルギーを使う。再生出来なくなるまでエネルギーを消費させれば
勝ちだよ』

「了解、斬って斬って斬りまくれば良いって訳ですね」

話は終わりとばかりに篠ノ之束が康太へと指示を出す、だが一秋は
食い下がる

「待ってくれ！」

『ハア、カズくん、キミがどれだけすがつても、そうやって迷ってる間に事態は動くんだよ。例えば——』

「チツ、一秋退け！」

復活した暮桜、それが再びクロエを狙おうと動き出すがまずは間にいる相手を排除しようと、一秋の背後から雪片を振り下ろす

そこに康太が対艦刀を伸ばすが、それより先に一秋が掲げた雪片式型がその刃を止める

「自分が、俺がやる。束さん、アンタが俺をどう思っている関係ない。けど、例え康太やクロエを使って俺を止めようとしても、俺は自分でアイツを止めてやる！」

受け止めた剣を跳ね返して即座に反転、遠心力の乗せた刃で暮桜の左腕を飛ばす一秋

その目には普段とは違う、信念を込めた光があった

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

そのまま烈火の如く雪片式型を振るい暮桜と互角以上に斬り結ぶ一秋、康太は対艦刀を握っていた両手を下ろして通信を繋げ直す、今度は広域通信ではなく相手は篠ノ之束のみだ

「それで、どういうつもりなんです？」

『ん〜？何の事かなあ？』

「わざと通信を一秋にも聞こえるように繋げて、そこでラウラ・ボーデヴィツヒを見殺しにする発言。少なくとも合理的ではないでしょう。目的は一秋に発破を掛ける事ですか？」

『ふふ〜ん、こーくんも分かってきたね。ちよつと昔話をしようか。とある所に最強の姉と双子の兄弟が居て、途中から双子の兄は剣を捨てた。最強の姉を助けたかったからね』

それを聞いて直ぐに康太も織斑家の話だと気付き、黙って続きを促す

『姉は余計な事をすると思いつつも兄弟の心遣いを有り難く思いそれまでよりも心に余裕を持てるようになった。けどある日、世界大会に出た姉を応援に行った双子の兄は何者かに誘拐される。何とか助け出さ

れた双子の兄だけど、姉が助けに行つた事で大会は不戦敗になった。姉にとつては優勝なんて些末な事、兄弟を自らの手で救い護れた事こそが何よりも誇りとなつた。でも、その周囲は違つた。「お前さえ居なければ」、姉の栄光を汚した存在だと誰もが双子の兄を責めた。そして双子の弟と比べられた。弟は兄のお陰で剣を捨てずに己を磨き続けて頭角を現していた。それが余計に双子の兄を貶めた。こゝろんならこんな時、どうする?」

「一度挫折した身では兄の気持ちは何となく察する事は出来ませけど、逃げた、ですか?」

『そうだよ。大きい挫折かもしれないけど、折れたなら打ち直せば良い。私はね、その三人の事を刀みたいに思つてる。日本刀のように強くありながら美しく、ね。だから赦せないんだよ。折れたまま放置して、錆びにまみれた刀なんて意味はない』

「だから打ち直した。憎まれ役を買つて出ても、ですか?」

『うん、そうだよ。私はね、面白い人間が好きなんだ。折れても躓いても前に進む、止まらない、足掻いてでも夢に、目指す場所に向かう人間が。その歩みだけが私には輝く宝石のように見える。それが無いならそれは人間じゃない、そう思える程にね』

康太はそれが偽りのない篠ノ之束という人間の価値観なのだと思ひ解した、そしてお気に入りだつたからこそあそこまでしてでも打ち直したいと思つたのだと、納得した

「なら、オレも負けてられないですね。取り敢えずは一秋が足りなかつた時の為に後詰めとして——」

いつでもフオローに回れるように控えておく、そう決めて一秋の様子を確認した康太は白式と暮桜が繰り広げる剣劇の舞台に目を奪われた

康太とて一秋の剣の腕は知っている、ブランクがあつたとはいえ剣道を基礎とした剣術は隙の少ないものだった

しかし今はそのような型通りの動きは見られない、それどころか暮桜の雪片を手で逸らし、時として足技でもって暮桜の体勢を崩そうとしている

更にはその表情である、普段の気弱な表情とは一変して険しい物となり、言葉も発する事もなく唸り声を漏らすだけだ

『羅刹とか修羅とか、カズくんが本気で剣を振るった時の評価はそんな感じだよ』

「確かに頷ける物ですけど、あれはどちらかと言えば……いや、まさかな」

後半の康太の眩きは激しい剣劇の音に掻き消される

康太の脳裏に浮かんだのはとある世界では虎に狂戦士と呼ばれた、SEEDを持つ者とある者達と同じ力に思えたからだ

しかし一秋の動きに対して白式の出力は暮桜に劣っている、徐々に力負けする場面が見え、損傷が増えてくる

そろそろ援護するか、そう思った時、ジエガンのバイザー部分に届いたメッセージが表示された

「これは、白式から？」

「コウタさんもですか？ 私にも来ました」

一秋は戦闘に専念している以上このメッセージを送る暇はないだろう、ならば誰が送ったのか、それは白式のコアに他ならない

ISには疑似人格がある、それは篠ノ之束から教わった内容であるから真実だと康太とクロエは知っている、だから二人は即座にそのメッセージに応えた

「グッ……」

「白式に、届いて下さい」

康太の方に届いたのは康太の記憶へのアクセス許可、そしてクロエに届いたのは装備の提供であった

両者がその申し出を了承した次の瞬間、康太は頭に鈍い痛みが走り、クロエは量子化していた予備のシールドを取り出して白式に向けて投げる

一秋はそれを認識すると一度暮桜を引き離して後退、投げられたシールドをキャッチしたその瞬間、白式が光に包まれた

そこに暮桜が接近しようとするも目の前をビームが貫く、康太とクロエが手に持ったビームライフルで牽制したのだ

「変身中の攻撃は御法度だろう、空気を読めよ」

「その法則はよく分かりませんが、今の一秋さんを邪魔してはいけない事は分かります」

連続して放たれるビームによって後退を余儀なくされる暮桜、その間に白式の光は収まり、そこには生まれ変わった白式の姿があった

セカンドシフト
「二次移行、この状況で発現しましたか」

「あれが……」

大型化したウイングスラスターを二機背部に備え、両肩にも同様に大型スラスターを備えており、手に持つのはメインの武装であった雪片式型であるがその姿は刀身を更に長くした大太刀のように変わっている

また背部にはスラスターとは別に形状の変化したシールドを備えており、アームによって新たに追加された専用ライフルと共に保持されている

「白式・刃風^{たちかぜ}！」

そう名乗りを挙げた一秋は新たな雪片を手に駆ける

暮桜も向かってくる白式・刃風に雪片を向けて構えるが、刃と刃が激突した後、鏝迫り合いになったのは少しの間だけであり、次の瞬間には暮桜の雪片は刀身の半ばから両断される

得物を失った暮桜はそのような状況など想定していなかったのか動きを止め、その時間は今の一秋相手には致命的な隙となった

再び構え直さした雪片から繰り出される一撃、それは暮桜の表面を薄く切り裂き、その中に居たラウラには届いていない

「ラウラアアアア!!」

「お前……!?!」

一秋は左手をラウラに向けて伸ばすとその体をしつかりと掴み引っぱり出す、暮桜が抵抗しようとするがそこに接近してきた康太が対艦刀でラウラと繋がっている部分を切り裂き、全員が離脱すると康太が叫んだ

「クロエー！」

「はい、ビームマグナム、リミッター解除。撃ちます！」

全員が余波の及ばない所まで退避した事を確認するとクロエが
ビームマグナムを構える

一拍置いて放たれたビームは試合中の物とは比べ物にならない火
力を引き出し、暮桜の上半身を跡形もなく蒸発させた

そのまま地面に倒れたまま活動を停止する暮桜、こうして学年別
トーナメントにて起きた騒動は幕を閉じるのだった

23話 事後処理色々

ラウラ・ボーデヴィツヒが目を覚ました時、そこは自分の見慣れない部屋だった

周囲を見渡し、自らが眠っていたベッドとそれを仕切るカーテン、そして消毒液などの独特な匂いから此処が医務室だと理解した

その際、椅子に座ったまま眠っている一秋を発見し、コイツは何故此処に居るのかと疑問に思っているとカーテンが開かれた

そこにはスーツに身を包んだ女性、ラウラの慕っている織斑千冬の姿があった

「教官」

「織斑先生だ。ボーデヴィツヒ、目覚めたところ早速で悪いが何処まで覚えている？」

「それは……試合中に謎のシステムとVTシステムが起動、それにより制御を奪われた所をこの男に救われた。それから……申し訳ございません、それ以上は何も」

「いや、それで十分だ。お前はVTシステムから解放された後、気を失って此処まで運ばれた。どうやら後遺症の類いは心配なさそうだな」

そう言つて千冬は手元の端末を操作すると今回の顛末を記した資料を表示する

そこには様々な情報が記されており、更にそれは現在も更新中のものだ

「束の奴が暴走中もシュヴァルツエア・レーゲンのコアにアクセスしていた。制御こそ奪えなかったようだがログは確保していた。その結果、二つのシステムによりシュヴァルツエア・レーゲンは遠隔操作されていた形跡が見付かっている。これによりお前自身が何らかの罪状に問われる心配はない」

「それは、ありがとうございます」

「礼を言うなら相手が違う。が、お前は直接会えないだろうから私から伝えておこう。さて、この判決だがお前個人へ、学園からの処罰に

対してだ。ドイツ、お前の祖国からは別の通達が来ている」

「そ、それは……」

「病み上がりの身で辛いとは思うが、今後のお前の進路にも関わる物だからな。色々と形式張って書いているが一言で表すなら『ラウラ・ボーデヴィツヒの軍籍の剥奪』だそうだ」

軍籍の剥奪、それは兵士として生まれ生きてきたラウラにとっては自らの存在意義の否定に他ならず、ラウラは自分の足元が崩れるような感覚に襲われた

自然と心拍数が上がり、息苦しい中でなんとか冷静さを取り戻すと千冬へと訊ねた

「……理由を」

「お前に過失が無かったとはいえコアの喪失が大きかったらしい。何者かが保身に走ってお前に責任を押し付けた。誰がどう見てもそのような構図になる。実際、この動きは早かったよ。事件が終息して一時間経つか経たないかで通知が来た。既に話がついているのだろう、これを覆すのは難しいぞ」

「そう、ですか。クツ、ハハハ……私は、祖国の為に……その祖国から見捨てられたのだな……所詮、性能が高かろうと人形は人形だと……ハハ、ハハハ……」

それは絞り出すかのような乾いた笑い声だった、自分の滑稽さを笑う、笑わなければどうしようもなく壊れてしまいそうな自分を繋ぎ止める為の笑いだ

だがそれを止めさせる、大きくはないが相手に響かせる声があった「ラウラ・ボーデヴィツヒ、お前は何者だ？」

「えっ?」

「お前の出生は知っている。それで、与えられた物以外に、お前は自分を持つているのか？」

「わ、私は……」

「そうだ、軍人としてのラウラ・ボーデヴィツヒ以外にお前は持っていない。ならば此処から始めれば良い」

「……此処から?」

「ああ、与えられた任務でもなく、お前の意思でお前の道を選ぶんだ。そうした時、お前は本当の意味でラウラ・ボーデヴィツヒになる」

「本当の、私に……」

まだその言葉の意味を完全には理解出来ていないラウラだが、今度は優しく千冬が語り掛けた

「それに、そう悲観する事もない。日本には『捨てる神あれば拾う神あり』という言葉がある。割りと近くに希望という物はあるものさ」

「希望、ですか？それは——」

「失礼します」

その希望とは何か、訊ねようとしたところで医務室に誰かが入ってくる声がした

聞き覚えのある男の声、その人物はラウラが寝ているベッドの近く、千冬の元へとやってきた

「織斑先生、シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されていた例のシステム、バーサーカーシステムに関するオレの知る限りの情報です。篠ノ之博士が言うにはオレの知る物とはかなり違ったみたいですけど、参考までに」

「分かった、後で確認しておく。それと紫藤、ボーデヴィツヒが目覚めた。あの話を通すなら早くしておけ」

「了解しました」

その人物とは紫藤康太の事だった

康太はラウラの顔を見ると一つ頷き口を開く

「ボーデヴィツヒ、お前の処分について織斑先生から聞いたか？」

「ああ、問題ない。それと、お前にも迷惑を掛けたようだな。済まなかった」

「気にするな、一秋をサポートしてやっただけだ。それよりも本題なんだが単刀直入に行こう。お前、ラビットフット社に入る気はないか？」

「は？」

それは普段のラウラからは考えられない程に間の抜けた声だったが康太は気にせずに続けた

「知つての通り、ラビットフット社は篠ノ之博士の会社だ。だが如何せん人数が少ない。特に手勢として使えるのはオレとクロエくらいだからな、一夏はその辺りは使えない。で、軍で隊長務めたような人材がそこに転がってるなら、是非とも確保しておきたいと思つてな」

「待て、何を言つているのだ貴様は!?!私はあるような事件を引き起こしたのだぞ!それを身内に引き入れるなど正気か!?!」

「さつきも言つたが別に気にしてないからな。アレは馬鹿やった連中が原因だし、お前は不器用なだけだ。なんか角が取れてるし、引き入れても問題ないと思う。因みに給料は日本円で約五十万、専用機も支給されるぞ。で、どうだ?無理にとは言わないが、悪くない条件だとは思うぞ」

実際にそれは悪くないどころか破格の条件である、何よりも篠ノ之東という世界のパワーバランスを簡単に左右出来るような存在の下で、更には専用機も用意される等、例え現役のIS操縦者で国家代表だとしても迷わずに飛び付く程だ

しかし今まで築いていた自信を失つたラウラは直ぐには首を縦に振らなかつた

「今の私にはそのような期待に応えられないとは思えない。そもそも、どうして私にそこまでしてくれる?同情なら余計なお世話だ」

「まあ、そうだよな。けど、それを言えばオレとかクロエもそこまで突出した技量がある訳でもないし、そういった意味ではお前も十分に活躍出来る。あと、クロエの願いでもあるからな」

「クロエ、あの者が?何故私に構う?」

「本当ならもうちよい上を狙うつもりだったみたいだが、結果としてシュヴァルツェア・レーゲンのコア消滅させたのを気に病んでいてな。それと伝言も一件ある。『妹とは思ってませんが、同じ顔で路頭に迷つてる姿を見るのは気分の良いものではありませんから、仕方なくです』だよ。素直じゃないよな、どっちも」

それを伝えた時のクロエを思い出しているのか康太は苦笑して

実際のところ、クロエの珍しいお願いに、頼られた篠ノ之東は一も

二もなく許可を出したのだ

その時までクロエは普段とは違ってオロオロとした様子だったので康太には本気で心配していたのだとバレバレだった

「……分かった、少し考えたいから一晩時間をくれ」

「分かった。まあ、ラビットフット社以外には一秋のところまで永久就職って手もあるしな」

「む？何故そこでこの男が出てくる？」

「あー、まあ気付かないか。一秋だが、お前の事を好きだぞ」

「なっ!? なななな——」

康太が暴露した一秋の想い、それを聞いたらは途端にラウラは顔を真っ赤にして言葉は意味を成さなくなる

「な、何を根拠に！」

「いや実際そうだしな。でなければ命懸けでお前を助けようとはしないさ。その想いの強さに応えて白式も二次移行した。今もこうして心配で近くで見守っているだろう？一切疑問の余地もなく、一秋はお前を好いている」

「あ、う、あ……」

「ああ、それと初対面が最悪だったとか気にするな。好きの反対は嫌いじゃない、無関心だからな。好き嫌いなんで簡単に引っくり返る、良くも悪くもな」

「——ッ!？」

「ん、あれ、眠ってたか……」

最早言葉を発する事さえ出来ずにただ口を開閉する事しか出来なくなったラウラ、そしてタイミング悪く良く椅子で寝ていた一秋が目覚めた

それを見た康太は千冬と目配せすると共に無言で医務室から立ち去った

そんな二人にすぎるように手を伸ばすラウラだがその手は届かず、一秋は寝惚けていた意識がはつきりとしてきていた

「あつ、ラウ……ボーデヴィツヒ、目が覚めたんだな！」

「うっ、あつ……グッ、嫌い！少しの間、私にその顔を見せるな！」

「えっ、ええっ!?!」

堪らずに取り敢えず手元にあった枕を一秋に投げ付けるラウラ、一秋は自分が目覚めて突然の事に混乱して枕を顔面で受けていた

そんな喧騒を背に廊下に出ていた康太は多分に笑いを含んだ声で話す

「いやあ、青春してますねえ、織斑先生」

「フツ、焚き付けておいてよく言う。だがあれでボーデヴィツヒも多少は前向きになれただろう。礼を言う」

「いえいえ、オレも自分の所の戦力の為なので。そういえば織斑先生はそういうった相手は居ないんですか? クラスとかでもそういうった話って聞きませんか?」

「手の掛かる弟が二人居るからな。なに、いつかは私もそんな日が来るさ」

「いつかは、やがていつかはと、そんな甘い毒に踊らされ一体どれほどゴオツ!?!」

この日、廊下で口を滑らせた一人の馬鹿が床に沈んだ、何故だ? 坊やだからさ

織斑千冬、家庭の事情があったとはいえ今まで一人も恋人が居なかった過去に少しは危機感を感じ始めるお年頃なのである

なおその馬鹿は後に風呂上がりの一夏とシャルロットに発見されるまで廊下に倒れたままであつたとか



学年別トーナメントが中止となり、試合をしていない生徒は第一試合のみを行う事となったが、それらが終わって週末の土曜日となった現在、オレ達は青空をノッセルに乗って移動していた

乗客はオレとクロエと一夏とシャルロットの四人、ノッセルのキャビンも四部屋なので丁度良い数となった

オートで飛行を続けるノッセルはこの世界に流れてきた物を回収した物で、サイズは完全にクロスボーンガンダムで出てきた物そのままである

なので原作通り移動拠点として使える本機を使って向かうのはフ

ランス、シャルロットの実家であるデュノア社だ

予てより計画していたデュノア社との提携の為の面会、その実現が叶ったのだ

交渉役がオレとクロエ、シャルロットは仲介、一夏は正直必要ないのだが本人の希望とシャルロットからの懇願で参加となっている

既に日本を発って12時間、通常の航空機と同じ程度の速力で飛行していたのでそろそろ到着の時刻だ

当面の目的地はフランスの首都であるパリにあるシャルル・ド・ゴール国際空港である

オレ達も既にシートに着席してベルトで体を固定している、ノツセルの試験飛行を兼ねての移動であり、色々と手探りながら機体はオートで飛行を続け着陸まで行う

この辺りは流星は宇宙世紀の代物といったところか、パイロットの訓練時間短縮の為にオート化が進んでいる

その後は指定された格納庫にノツセルを停めてオレ達は入国手続きを済ませる

そこからは車で移動となるのだが、そこには既に一台の車が手配されていた、デュノア社からのお迎えだ

それに乗り込んでパリの街を進む、デュノア社はISの実験施設も含めてパリの郊外へと本社を置いてあるらしい、そこまでの足としての車だ

「此処がパリか。海外に来た事はないが、可能なら後で観光したいものだな」

「あ、うん。もしも時間があれば案内出来るよ。希望はあるかな？」

「なら国立中世美術館を頼む。あそこには確かあのタペストリーがあった筈だ」

「タペストリー？国立中世美術館と言えば……あつ、『貴婦人と一角獣』の事かな？」

「タペストリーって、何で康太はそれを見たいんだ？なんか、いつもの様子からすると芸術とか関心なさそうなのに」

「そりゃ勿論、聖地巡礼だよ。というか一夏よ、お前のユニコーンとク

ロエのバンシイ、その二機のモデルになつてゐるタペストリーだぞ。そしてお前、今遠回しにオレのこと馬鹿にしただろ？ 3号機としてフェネクス作つて締めるぞ。同性能の機体ならなお、お前には負けん」

「あ、いや、それは……」

当然ながらガンダムファンとしては実物を見てみたい一品である、眺めながらビスト邸の光景に思いを馳せたい

まあそれは兎も角として、今ので少しは空気を和らげる事が出来たパリに近付いてからずっと気を張り詰めていた一夏とシャルロットの二人はもう少し肩の力を抜いた方が良さ

「まあ何にせよ緊張するな、とは言わないがもう少し肩の力を抜け。交渉はオレの担当、お前は黙って座ってれば良いんだよ」

「えっ？ あ、ああ、悪い」

「それとシャルロットもだ。例の装備のテストは良好だった。なら後はそれを認めさせるだけだからな」

「うん、そうだね。ありがとう、康太」

改めて指摘すると一夏とシャルロットの表情は多少は改善されたが完全に緊張が解れる事はなかった

とはいえ適度な緊張感を持つのは良いことだ、後はどうにかするのがオレの仕事だからな

それにストライカーパックの運用試験も上手く行っている、技術概念検証としてオレのジエガンを改装、背部をストライカーパック対応型にした

その後は実際にI・W・S・P.を装備して試験を行い空中換装といった試験でもストライカーパックの優位性を証明出来たのだ

ならば後は如何にそれを売り込むか、性能を疑っていないからオレはそこしか心配していない

車はいつの間にか街を抜けて郊外に出ている、そこから三十分程経つとオレ達は広大な敷地を持つ施設の中に入った

いよいよ直接相対する時だ、本社受付のロビーに入ると迎えに来た車の人が先に受付を済ませてオレ達はすんなりと奥のエレベーターを降り降りして重厚感ある扉の部屋へと通される

そこには一人の男が座っていた、かなり太ったカエルみたいな面の男だ、少なくともアルベール・デュノアではない

「ようこそ、デュノア社へ。私は——」

「デュノア社長は何処だ？」

相手が名乗るよりも先に、オレははつきりと告げた

今回の面談に関して、事前にシャルロットが確認をしたところアルベール・デュノア本人とロゼンタ夫人が応対すると言っていた

その事に間違いがない以上、こうして木っ端の人間が出てきても相手にする必要はない、今回の交渉に当たって篠ノ之博士からは『仮にも私の名代として行くんだからしっかりと対応してね。その社長とやらは知らないけど、こーくんが信用したなら社長だけを相手にしてね。向こうも社長が出るって言ってるんだから』と言われている、元よりシャルロットの事に関しても話す予定だったのだ、本人でないなら相手にする必要もない

「そ、それはだね、デュノア社長は多忙の為、なかなか手が離せないだろうから、こうして私が——」

「ならば待たせて貰おう。デュノア社長以外の人間には興味がない」

なのでアルベール・デュノアとしか交渉はしない、これは篠ノ之博士の面子もあるが、もし商談が纏まれば『アルベール・デュノアが商談を纏めた』という外への分かりやすい功績を示す事で彼の地盤を固めやすくする、援護射撃のような物だ

だから待つ、オレは表向きは泰然とした態度を崩さず、クロエも涼しい顔をしている、落ち着きのない動きをしてるのは一夏とシャルロットだけだ

だが今回の対談で全権を握っているのはオレだ、二人が慌てふためこうが逆にオレの冷静さを相手に意識させるカードになる

「た、確かシドウ君と言ったね。君は何か勘違いしているようだが、子供の御使いで社長が出てくると思っっているのなら、それは思い上がりというものだ。だからこうして私が——」

「シャルロットを通じて本人が応対すると約束している以上、それが筋というものだ。それとオレを子供扱いか。学生服を脱ぎスーツで

此処まで来たのは子供ではないという意味表示だったが、無駄だったか」

仮にも全権を委任されたのだ、ならば年齢等は関係ない

その為にスーツを着込んで此処まで来た、意識を切り替えるにも格好からというのは悪くないしな

と、そこで背後の扉が開かれた

「専務、此処までの応対、ご苦労だった。後は私が代わろう。元より私の客だ」

「グツ、社長……」

「初めましてデュノア社長。ラビットフット社より篠ノ之博士の名代として参りました、紫藤康太と申します。本日は宜しくお願い致します」

「ああ、デュノア社社長のアルベール・デュノアだ。今日は遠いところをわざわざご足労頂き感謝する。此処ではなんだ、社長室にて詳しい話をするとしよう」

「ええ、是非ともそうさせて頂きます、デュノア社長」

部屋に入ってきた相手が誰か分かった瞬間にオレはにこやかな笑顔を浮かべてアルベール・デュノアへと挨拶をする

さつきまでの無愛想な受け答えとは違い丁寧で友好的に振る舞ってだ

その変わり身の早さには専務と呼ばれたカエル顔の男も呆気に取られていた、こうすればデュノア社長との仲が良いように見えるものな

そして社長自らに案内された社長室、そこに入るとオレとデュノア社長は揃って安堵の息をついた

「全く、抜け目のない。済まなかった紫藤君。どうやら受付か送迎の者が取り込まれていたようだ」

「いえ、お気になさらずに。寧ろ利用してやったのは此方ですので」「えっ？…えっ？」

「康太、その、シャルの親父さんと知り合いなのか？」

互いに今の状況を確認し合うオレとデュノア社長、その雰囲気は一

夏とシャルロットは混乱している

「教えなかつたから仕方ないが、実はシャルロットを介さずに一度だけ、篠ノ之博士も交えて画面越しに通信をしているんだ。そして実を言えばその時点で既に交渉は殆んど済んでいる。今回のこれは、言つてしまえば対外的なポーズに過ぎない」

「ええっ!？」

「アレは中々に強烈な対談だった。私の理想とする光景から何から、全てを暴かれたのだからな」

「それじゃあ、俺達の覚悟は……」

強いショックを受けた一夏とシャルロットだが、実を言えばラビッツトフット社とデュノア社の提携は決まっている

それというのも対談の方法が電脳空間を作つてそこで対談するという物だ、オレ達の意識もそこに入り込んでだ

ISの技術を応用した電脳ダイブは理論上は可能なのだ、そこで対応機器をデュノア社長とロゼンダ夫人に送り電脳空間で対談した

そして更に加えると、そこでクロエのISである黒鍵の「ワールドページ」と呼ばれる能力を使い二人の理想とする世界を見た

そこではアルベール・デュノアとロゼンダ・デュノアの他にシャルロットと、そのシャルロットの母親であるサラという女性が共にデュノア邸で笑い合いながら過ごす光景が広がっていた

その人柄を見てオレ達はデュノア社との提携を決めたのだ、デュノア社ではなくアルベール・デュノアという人物を信用してだ

今回来たのはその大詰め、提携の証明となる契約書とストライカーパックのデータの受け渡しである

紙の契約書はアナログだがそれだけに偽造もし難い、篠ノ之博士が認証用のICチップを埋め込んでいるから余計にだ

後はストライカーパックの方だが送信するよりは漏洩の危険が少ない為、データ端末に入れて持ってきた、後はデュノア社長が信頼する人間に渡すだろう

なので此処でオレ達の目的は殆んど完遂したような物である、後は別の目的を果たすだけだ

「これが契約書です。後はデユノア社長の署名で終わります。それとこれが新システムのデータです。扱いは任せます」

「ありがとう、紫藤君。篠ノ之博士にも宜しくお伝えして欲しい。我々も博士の期待に応えられるようにパーツを早く送り出すとしてしよう」

「お願いします。あのパーツは博士の悲願です。実験が成功すれば本格的に建造に入りますので、宜しくお願い致します」

そして篠ノ之博士がデユノア社と提携するに当たり、まずラビットフット社からは技術提供を、そしてデユノア社にはマストライバー施設のパーツの製造を請け負う事になっている

此方でも製造可能だが小型のマストライバーで実験するにもそれなりに大きな施設となる

それだけにパーツの量も増えるので、それなら簡単なパーツは別けて製造した方が早い、少数の精密なパーツはラビットフット社で、多くの大型なパーツはデユノア社で、そういう契約だ

契約書にデユノア社長が署名し、控えとして片方はデユノア社が預かる

これにて契約は完了、後は商談を続けているように見せる為に暫く部屋の中で時間を潰すのだが、そこは予め考えてあった

「シャルロット、何か言いたい事があるなら今だぞ」

「あ……お、父、さん……」

「シャルロット……」

此処で離れていた親子の仲を取り持つ、それはシャルロットの願いだ

本人は商談が終わった後だと思っていたかもしれないが、こうしてオレ達は早々に契約を交わしたので時間はたっぷりとある

「ボク、私は……」

「済まなかった、シャルロット。護る為と言いながら、お前を傷付けてしまった。本当に済まなかった」

「お父さん……私は、この国を出た時は貴方を恨んでいました。でも、IS学園で大切な友人達に出会って、本当は私は誰よりも愛されてい

たんだって気付けたんです。一夏に相談して、康太とクロエに出会って、三人のお陰で私は過ちを犯さずに済みました。あの日、飛行機に乗った時に再生されたメッセージを、私は最初は見ずに直ぐに消してしまっただけです」

「それは……!?!」

「その後は男として過ごし、言われたままに産業スパイの真似事をしようとしてました。でも、それを一夏が止めて、康太が論理的に推理して、クロエがメッセージを復元してくれた事で、私は最後の一线を越えずに済みました」

「そんな事が……私は、そこまでお前を追い詰めて……」

「でも、今はお父さんに感謝しています。だって、今の私には本当に信じられる友人が三人も出来たから。一つでも違っていたら私は三人と今みたいな関係にはなれなかつたと思います。だからお父さん、自分を責めないで。そして、私を愛してくれてありがとう」

「ああ、シャルロット……サラ、私は……」

それは紛れもなくシャルロットの本心なのだろう、確かに辛いと思つた事も多かつたかもしれない、だがシャルロットが勘違いをせずに最初から女の子として入学してきたとして、オレ達はそこまで仲良くなつただろうか？

答えは否だ、そこまで積極的に関わろうとはしなかつただろう、全ては偶然の積み重ねだがこうして最後には父娘の不幸な誤解は無くなつたのだからこれが最善の結果なのだろう

デュノア社長は人目も憚らずに涙を流していた、その背を撫でながらロゼンダ夫人もシャルロットと対面する

「随分と良い顔になつたじゃない。それと、あの時はごめんなさい。何も知らない貴方に酷い仕打ちをしたわね」

「はい、あの時は本当に心が折れそうになりました。でも、あれからずっと考えていました。ロゼンダ夫人は私のお母さんの事を知ってるんですよね？」

「ええ、勿論よ。平民の生まれながら同じ相手を好きになつて学生の時から張り合つた仲間。けど疎んだりなんかしていないわ。私は名

家の生まれ、周囲の女の子達は私の太鼓持ちだったわ。そんな中で正面から対等に渡り合う相手なんて後にも先にもあの子だけよ。だからなのかしら、初めて貴方を見た時に、貴方があの子の娘だなんて認めないと思つたの、あまりにも鬱ぎ込んでいてとてもあの子とは、サラとは似ても尼つかなかったから。気付けば先に手が出ていたわ」

「私の知つてるお母さんは優しく争いなんて考えられない人でした。そんなに張り合つてたなんて信じられません」

「そうね。貴方の前だとそうだったのかもしれないけど、かなり積極的だったのよ？例えばこの人に手作りのお弁当を作つて来て胃袋をガツチリ掴まれたわ。他にも、やたらと距離が近かったり、胸を押し付けるような真似をしたり、ね。一番困惑したのは、スポーツの後でこの人がシャワーを浴びている時に、シャワールームに水着とはいえ乱入していった事ね。あの時は寧ろ感心した程よ」

「お母さん!？」

「ロ、ロゼンダ!?その話は……」

「お黙りなさい。大体、あなたが優柔不断だからこんな事になったのよ。愛人ではなく、さつきと側室として迎えていれば良かったのよ。あの日も、此処を立ち去ろうとしたサラを引き留めようか迷うだなんて、男として失格よ。その他にも——」

どうやらシャルロットの母親はかなり積極的な人物だったらしい、それはシャルロットの中の母親のイメージともかけ離れているからかシャルロットでさえ困惑している

それにしてもシャワールームに乱入か、最近似たような事をやった人を知ってるな

「つまりシャルロットが一夏の入浴中に乱入したのは母親譲りという事か」

「なっ?!ばっ、康太!?何で今それ言った!？」

「ちよつと康太!お父さん達の前でそんな事バラさないですよ!？」

「シャルロット、貴方、未恐ろしい娘ね……」

「ハ、ハハハ、そうか、娘と入浴を……織斑一夏君、少し屋上で話そうじゃないか。なに、直ぐに済むよ。直ぐにね」

「あの、親父さん？その手に持つてるのって、ペーパーナイフじゃ？」
「選びたまえ織斑一夏君。死ぬか、殺されるかを」
「そんなのどっちも一緒だ！康太、笑ってないで助けてくれ！お前のせいだろう！」

「一夏、聞こえていたら自分の女難の相を呪うがいい。君は良い友人だったが、君の唐変木さが悪いのだよ。フッフフ、ハハハハハ」

篠ノ之博士のラビットフット社との提携により今後、世界中から注目される事になるだろうデュノア社、その社長室ではとてもではないがそんな雰囲気は全く感じられない有り様となっていた

だがそれまでであった暗い雰囲気はなく、シャルロットの顔にも今は笑顔が浮かんでいる

親子が気兼ねなく笑い会える光景、それは真つ当な親子の関係に他ならない

後日、デュノア社とラビットフット社は同時に業務提携の声明を発表、篠ノ之束というISの第一人者が関わるという事でデュノア社の株価は急激に上昇、フランス政府もデュノア社への補助金打ち切りを撤回、また第三世代機としてラビットフット社からの技術協力により「ストライク・ラファール」の開発を発表、ラファール・リヴァイヴの汎用性を伸ばす機体として開発が開始された

同時にラビットフット社も試作のマスドライバー施設建設を発表、追加でHLV、トロハチ、コロニービルダーといった宇宙開発に必要な物を次々と発表、世界に宇宙開発が本格化するという可能性を見せる事に成功、その他にもミノフスキー・イヨネスコ型核反応炉の発表によりエネルギー関連に革命を起こす事となったのである

余談ではあるが核反応炉の発表の際、篠ノ之博士が「ミノフスキー博士に感謝だね！」とコメントした為に、世界中でミノフスキー博士なる人物を探しだそうとした動きが見られたりした

何にせよラビットフット社は、篠ノ之博士は本格的に宇宙を目指す事を決めた

当面の目標はマスドライバー施設の試作と、それが成功した後は月

面都市の開発が予定されている

最早止まる事は出来なくなつた、それでもオレは止まるつもりなんて全くない、後は突き進んであの宇宙^{そら}へと昇るだけなのだから

群青覆うは骸の軍勢

24話 誕生日

六月も下旬に入ったとある土曜日、アリーナでは二機のISがテストを行っていた

片方は宇宙世紀のガンダムシリーズに出ているながらSEED系のストライカーパックであるI・W・S・P.を装備したジェガン、
「ストライク・ジェガン」だ

対するもう一機は一見するとフルアーマーZZガンダムに見えるが右肩に巨大なビーム砲を担いでおり、備えていた変形機構はオミットされている

元よりモビルスーツであるならば兎も角、人間大のISでの変形機構の搭載はかなり無理がある、だがこの機体にはそもそも変形機構は搭載されていない
F.A.Z.Z、Z.Zガンダムのフルアーマー時の性能を検証する為の試験機であるその機体は完全に射撃オンリーな機体である

元となるZZガンダムより総合的なスペックでは劣るが火力は寧ろ上回る点もある、その典型とも言える武装が今オレへと向けられているハイパー・メガ・カノンだ

コロニーレーザーの二割の威力とかいうとんでも設定なZZガンダムのハイ・メガ・キャノンの六割増しという、ぶっ飛んだ火力を誇る

まず既存のISが直撃すれば一撃で撃墜必至な火器だ

戦艦の主砲と遜色ないとされるその一撃、まず掠りそうになる時点で危険な為にI・W・S・P.の肩部から伸びるレールガンにて牽制、その下に備えられている単装砲で追撃を仕掛けて撃たせる真似はしない

とはいえ向こうもパイロットの腕は一流だ、その火力に固執する事なく全身に装備された大量の小型ミサイルを撃って此方の動きを抑えようとする

この対処に追われている間にハイパー・メガ・カノンを撃とうというのだろう、だがオレはジェガンの頭部バルカンポッドと左腕に装備しているコンバインドシールドのガトリング砲で迎撃、進路を確保してミサイルの雨を切り抜ける

機体重量も増えているがI・W・S・P・はそれで尚、モビルスーツに大気圏内で飛行能力を与える推力を誇る装備だ、その速度は強化されR型となったジェガンのそれを更に上回り直線での加速は最近になって二次移行した一秋の白式・刃風にも劣らない

弾幕を突破してきたそんなオレをFAZZはバックパックの左側に備えたビームカノンを抜く、元になった機体はビームサーベル機能を備えていないがこの機体はZZガンダム同様にハイパービームサーベルとして使えるのだ

それに対してオレもコンバインドシールドを捨てて両脇に備えられている対艦刀を抜く

そして二刀とビームサーベルが触れそうになった時、ブザーが鳴りオレとFAZZは動きを止めた

「お二人共、これはテストなので熱くなり過ぎないで下さい。機体の損傷は無しでお願いします」

バンシイに身を包み今までのテストの情報収集をしていたクロエからの制止により取り敢えずISを解除するオレ達

ストライク・ジェガンのパイロットであるオレの相手をしていたのは様々な事情からラビットフット社のパイロットに正式に加入したラウラ・ボーデヴィツヒである

今はラウラの専用機の選定を兼ねた機体の評価試験となっている、その模擬戦なので本来なら機体が壊れるところまでは行わないのだが、少し熱くなり過ぎたようだ

とはいえ今ので機体の候補は全て試した、後はラウラの好みになる「それで、ラウラはどの機体にするんだ？」

「そうだな。私としては今のFAZZの火力は惜しいが、少し重量が気になる。機体としてはシルヴァ・バレットが気に入ったから、それにあのハイパー・メガ・カノンを装備して欲しい」

「……そうすると機体の重心が右に傾くぞ」

「重心が左後方に傾いてる機体を使う男が何を言う」

「ご尤もで」

その他にも要望を聞き入れていき、言われた内容でクロエが持つ端末でデータ上のシルヴァ・バレットに手を加えていく

そうして生まれたのは右肩にハイパー・メガ・カノンを備え、全身にFAZZのミサイルポッドを外付けした機体であり、フルアーマーシルヴァ・バレットとも言える仕様だ

「ミサイル撃ちきつた順にパージするから機動性の低下は抑えられるか。ハイパー・メガ・カノンに対するカウンターウエイトにもなるし、有効だな。敵陣に乗り込んで大火力をブツ放す戦術になりそうだ」

「うむ、武装を全て使い切れれば後は通常のシルヴァ・バレットとして使える。だから汎用性を損なう心配もない。だが良かったのか？新参の私が初期から居る貴様より先にワンオフの機体など」

「気にするな。オレのジェガンも原型機とは比べ物にならない程のカスタムがされているからな。そこに加えられた手間はワンオフ機にも引けを取らない。それにジェガンは思い入れもある。まだ使える内は大事に乗っていくさ」

いずれ機体性能で大きく離される日が来るかもしれないが、オレが乗り換えるとしたらそんな時だろう

愛着はある、誇りもある、だがそれに固執して敵に後れを取る事だけはしたくない

それにほいほい新型に乗り換えるよりも一つの機体を極めるのも悪くない、コイツだって色々改修されているがオレと一緒にこの世界にきた存在だからな、オレはコイツを誰よりも扱いこなして見せるさ
「そういえば時間は良いのか？そろそろ夕食の時間だろう。約束があると聞いているが」

「なに!？」

「片付けと篠ノ之博士への報告はオレ達で行ってこいよ」

「すまない、助かる！ではな康太、姉上！また月曜日に会おう！」

「姉ではないです。でも、また月曜日に」

テストも終わりキリのいいところで解散しようと思ったがラウラはこの後で一秋と共に夕食を食べる約束をしていた

暗くなるのも遅くなってきた中で、その時間が近付いている事を教えるとラウラは大急ぎでアリーナを去っていった

先日の学年別トーナメントでの一件の後、ラウラと一秋は付き合う事になったのだ

それもクラスの中でラウラから告白し、その唇を奪うという積極的な行動でだ

その後で喜びの余り昇天した一秋を蘇生したり、他にもシャルロットがちやんと女の子として転入し直してきたり、一夏とシャルロットが同じ風呂に入っていた事が発覚して隣のクラスから殴り込んで来た鈴に一夏がノックアウトそれたりと、色々だ

そんなゴタゴタした日々も落ち着きを取り戻してラウラがラビツトフツト社への加入を決め、距離のあったクロエとの関係も改善されてきている

なお遺伝子的にはクロエはラウラの姉になるらしいがクロエはその事を頑なに認めようとしな

普段のクロエからは考えられない事だが、自分にはその資格がないとの事らしい

オレは気にする事はないと思っっているのだが本人が認めないので特には介入する気はない、なおラウラがクロエを姉と呼ぶのは遺伝子的なもの他にもかつての部隊で一部にあった「尊敬する女性の事をお姉様と呼ぶ」という事かららしい、同じ生まれで自分より人間らしいクロエに対する尊敬からのようだ

何にせよ、この不思議な姉妹の今後はこれからだ、少しずつ歩み寄っていけばいつか本物の姉妹になれるさ

「さて、オレ達も行くか」

「はい、機体は待機状態にしました。データも纏めたので後は束様に提出するだけです」

クロエの手には先程のFAZZの待機形態である赤色のハ口がある

オレのジエガンと違い機能は多くない代わりにコンパクトなハロ、SEED系のサイズだ

オレのハロもその位に小さければもう少し持ち歩きが楽になるんだがなあ、バスケットボールサイズで持ち歩くのはちよつと面倒だ

一応、機能制限すればこのサイズに収まるらしく、近い内に何とかするとは言われたがこうして実際に見るとそれも近そうだ

それからアリーナを出て寮に向かうオレ達、一階にある寮長室が目的地になる

「失礼します。篠ノ之博士、テスト結果のデータとISを持つてきました」

「いい加減に離せ束！紫藤達が来たぞ！」

「やだやだやだ〜！私もちーちゃんや箒ちゃん達と臨海学校に行くの〜！」

織斑教諭による監視という名目で寮長室に居る篠ノ之博士に会いに来たのだが、そこでは部隊のスーツとは違いTシャツに短パンというラフな格好の織斑教諭にしがみつくウサミミの生えた不思議の国のアリスといったいつもの格好な篠ノ之博士の姿があった

「大体の事情は分かりました」

「だな」

オレとクロエはその様子を見て大体の事の顛末を把握した、そのくらしいの付き合いはある

「だってちーちゃんだけじゃなくて、こーくんもくーちゃんも、箒ちゃんもいつくんもカズくんも海に行つて私一人だけお留守番なんだよ!?!そんな中に私一人くらい入り込んでも良いじゃない!」

「お前の立場を考えるというんだ！セキュリティの充実したIS学園ならいざ知らず、バスでの移動中に善からぬ事を企む輩が狙つてこない道理はないだろう！お前だけならまだしも他の生徒も居るのにそのようなリスクは取れない！」

子供のように駄々をこねる篠ノ之博士に対して正論をぶつける織斑教諭、普通なら織斑教諭が正しいのだが自分が正義なこの人には言葉で納得させるのは並大抵の苦労ではない

なのでオレ達が出来るのは仲介というか妥協案を出すくらいだ

「織斑先生、篠ノ之博士の同行は認める方向で進めた方が早いですよ」

「しかしだな、紫藤」

「さっすがこーくん！キミは私の味方だって信じてたよ！」

「考えても見てください。一人置いていったとしても、絶対について来ますよ。だったら始めから手綱握ってた方が良くありませんか？」

「む、確かに一理あるな」

「こーくんも私の扱い酷くない!?でも置いていかれたら絶対にやるから間違いないね！」

少しは悪びれる事をしないのだろうかこの人は……しないな、してたら明日は雨を通り越して槍が降る

そして予め篠ノ之博士が同行する前提で考えた方が建設的である以上、織斑教諭も本格的に検討を始める

「束、お前が防御策を講じるとしてどれだけの性能がある？」

「まず無人機を12機は動かせるよ。前に作ってたシミュレーターでこーくんの指揮したようなジェガンD型がね。それを連れていけば表向き私を狙う輩は慎重になるでしょう？」

「一国の戦力と同等か、悪くない」

「後は携行式の簡易シールドバリアだね。ポールを設置して、それを線で結んだところにアリーナと同等のシールドバリアを張れるよ。動力に関しては一緒に小型の核融合炉を持ってくから安心してね。その二つで何処でも要塞に出来るから防御は簡単だよ」

「……理由をつけて同行を無しにしようかと思っただが、無理だったか。良いだろう、その防御策を使いお前だけでなく他の生徒達の身を護る。それに同意出来るならば同行を認める。私から学園長に伝えよう」

割りと無理難題に思えて篠ノ之博士には難しい事なんて全くなかったようである

調整はあるかもしれないが、こうなると既に篠ノ之博士の参加は決まったような物である

「まっかせてよ！ふふくん、箒ちゃんの専用機の為にも絶対に間に合

わせるよ!」

「待て東。お前、今何と言った?」

「だから、箒ちゃんの専用機だよ。誕生日プレゼントとしてあげるの! ほらほら、こーくんの意見も取り入れて箒ちゃん用に調整したんだよ!」

「あれ完成したんですね。というか箒の奴、誕生日なんですか? 何も聞いてないんですけど」

「箒ちゃんは自分から言わないだろうね。七月七日だからよかったらこーくんもプレゼントをあげてね。箒ちゃんきつと喜ぶから」

「そうですね、臨海学校用の水着も必要なので明日一度買い物に行つてきます」

「それなら私も行きます。コウタさん、一緒に行きませんか?」

「そうだな、そうするか」

わざわざ別れて行く必要もないだろう、何かあれば荷物持ちとしても手伝えるし

オレの返事にクロエは嬉しそうに微笑むが、何かを思い出したかのように訊ねた

「そういえばコウタさんの誕生日はいつなのですか?」

「オレか? 九月十八日だ。三ヶ月くらい先だな」

何の因果か、宇宙世紀0079に於いて同日はガンダムが大地に立った日でもある、乙女座の私にはセンチメンタリズムな運命を感じられずにはいられない

それはさておき、訊かれたからには訊きたくなるというものだ

「そういうクロエは?」

「私は決まった誕生日がありません。なので便宜上、東様に拾って頂いた日を誕生日としています。六月一日です」

「成る程、六月一日か。ふむ……………過ぎてるじゃねえか!」

これによって明日の休日に遅くなったがクロエの誕生日プレゼントを購入する事も追加されたのだった



という訳で休日となった日曜日、オレはモノレールを使いIS学園

のある人工島から本土に渡った

あまり学園の外に出る事の少ないオレ達だが目的地はレゾナンスという名前のショッピング・モールだ

駅舎を含む建物であり様々な物を扱っているこの施設は以前に買物先としてオススメを聞いた際に『此処に無ければ市内の何処にも無い』くらいだという、なお情報提供者は同じクラスの相川さん達である

IS学園と本土を結ぶモノレールは利用者の少なさから駅が違ふ為に一度外に出る必要がある、そして駅前の噴水がある広場に行く目当ての人物を見付けた

「すまない、待たせた」

「大丈夫です、私も今来たばかりですから」

その相手とはクロエである、最近では学園の制服姿だったので久し振りに見る白と青のゴスロリドレスに身を包んだ姿で噴水前に立っていた

少し用事があるからとオレより先に本土に渡っていたクロエだが、その用事とやらは終わり待ち合わせ場所としていた此処に先に着いていたようだ

というか、このやり取りだとまるでデートの待ち合わせだったかのように思えて何だか気恥ずかしい……周囲の野郎共の視線も痛いし

分かっていた事だがクロエは美少女だ、さっきもオレを待って噴水前に立っていた姿は周囲から一際目立って見えた程に

ミステリアス系な美少女のクロエと頬に傷があるものの顔立ちは平凡なオレ、どうみても釣り合っていないだろうオレ達二人が恋人だとしたら周囲の野郎共が納得いかないような顔をしているのも頷ける、オレも端から同じような光景を見たらそう思うだろうし

「どうかされましたか、コウタさん？」

「いや、何でもない。それより、行こうか」

「はいー」

このまま此処に居ても野郎共からの嫉妬の視線か、何だか微笑ましい物を見たかのような温かい視線だけなので早々に移動する事にし

た

その際、クロエが自然とオレの左手をとり手を繋いできた、滑らかで柔らかい、オレとは違う手の感触と体温にちよつと緊張したが、これは人が多いからはぐれないようにする為の行為だ、そう納得してシヨツピング・モール、レゾナンスに入る

外から見てもかなりの大ききなのは分かっていたが、こうして中に入ると多種多様な店が出店しているのに圧倒される

そんな中でまずは最初の目的であった水着を探す事にした、地図によると二階か

エスカレーターを使い二階に上がった後、その水着売り場に辿り着いたのだが、何やら見知った顔が

「あ、康太にクロエじゃないか！二人も水着を買いにきたのか？」

「そういう一夏もな。それにシャルロットと一緒に。そっちはデートか？」

そこに居たのは一夏とシャルロットだった

二人とも私服姿で他のいつもの面子の姿は見えない、つまりは二人つきりで来たという事だ

「デデデデートオツ!？」

「いやいや、単に買い物に來ただけだって。なあシャル」

「あ、うん、そうだね……」

オレが言ったデートという言葉に過剰に反応していたシャルロットだが、一夏の反応で一気に冷めた反応になる

うーむ、これが唐変木として有名な一夏の対応か、そりゃ箒や鈴も苦戦するわな

「そういえば、そっちはどうなんだ？俺達がデートに見えるなら、そっちもそうだろう？」

「オレ達も水着選びと、プレゼント探した。箒が今度誕生日だって篠ノ之博士から聞いてな」

「康太も聞いたのか。俺も久し振りに誕生日を祝うからな、後で選ぶつもりだぜ」

「そうか。なら後で一緒に回るか。箒の好みとか、和風というくらい

しか知らないからな」

「確かに和風が好きだから、その辺りを選べば間違いないと思うぜ。けど後で一緒に回るのは賛成だ。だから先に水着を選んでおこうか」シャルロットには気の毒であるが、箒との付き合いが長い一夏には箒の好みとかで色々聞きたいからな

とはいえ今ので大体分かったから、後でアクセサリーの店とかで髪飾りでも買おうと思っっているのだが

「ねえ、その男二人」

「ん？」

一先ずは水着選びから、そう思っていたのだが見知らぬ女性から話し掛けられる

何処かで会った事があるのかと記憶を探るが思い出せない、恐らくは初対面だな

「どっちでもいいけど、その水着、片付けておいて」

「は？何で？」

「何でって、あんた男でしょう？」

「そうだな」

「なら黙って女の言うことに従っておけばいいのよ！」

「その理由が分からないから聞いてるんだがな」

いきなり見ず知らずの人間に、自分が見ていた商品を片付けろと言われて『はいそうですか』となる訳がない

それに、男だ女だと、何を言ってるんだ？

「たくつ、これだから男は！いい、今の世界で国を護ってるのは私達女なのよ！男が使えないISを使って、私達女が国を護ってあげてるの！だから役立たずの男は女の命令に黙って従ってれば良いのよ！」

「成る程、そういう理屈か」

確かに既存の兵器を上回るISは基本的に女性にしか扱えない、そしてISにはISで対抗するのが手っ取り早い、というかIS以外だと一気に勝率が低くなる

だから女が国を護っているという理屈はまあ領けるものではある

「分かった？ならさっさと片付けなさいよ」

「だが断る」

理解はしたのだが、オレの結論としては『だからどうした?』である

確かに国防を担うのは女性だが、目の前の女がISのパイロットという訳ではない

なのに実際に現場で身を張っている人間の力を笠に着ているだけの人間に従う義理も何もない

「別におかしな話じゃないだろう?そこまでISを誇示するならば、お前のISを展開してみる。その上でオレに勝ったなら話を聞いてやろう」

「はあ?馬鹿じゃないの?ISは貴重なのよ?私が持つてる訳がないじゃない」

「ならお前が威張れる理由もないな」

「グツ、けどいざという時にはISを起動出来る。起動すら出来ないあんたとは比べ物に——」

「起動出来ますよ」

痛いところを突いてやったが、尚も屁理屈を捏ねようとする女に横からクロエが言葉を挟んだ

「誰よ、あんた」

「私はコウタさんと同じ企業に所属する者です。そして、コウタさんはISを起動出来ます」

「はあ?こいつは男なのよ?男がIS、なん、て……まさか!」

「はい、コウタさんはラビットフット社のテストパイロットで、世界で三人しか居ない男性操縦者の一人です。そして専用機としてストライク・ジェガンを与えられています。そして、私も同じくラビットフット社のパイロットです。専用機はバンシイと言います」

「なっ……あっ……!?!」

「序でに俺もラビットフット社のパイロットで、専用機はユニコーンだぜー」

「あ、ボクはデユノア社だけどテストパイロットをやってるよ。専用機はラファール・リヴァイヴ・カスタムⅢね」

「どうやらオレがISの操縦者だと思いついたらしく、クロエがオレのプロフィールを簡潔に話す」

「そしてクロエもまた専用機持ちであり、更に便乗して一夏とシャルロットもまた専用機持ちだと明かすと女の顔色がどんどん悪くなつていく」

「す……」

「す?」

「すみませんでしたああああッ!」

次の瞬間、女は脱兎の如く逃げ出していった、女という特権を振りかざしていたら、本物のISパイロットに遭遇したのだから仕方あるまい、というかIS学園に程近いこの場所で専用機持ちに遭遇しないと何故思ったのか、男の操縦者が今年から入ったからか?

「まあ何にせよ、頭のおかしな女が走り去っていったから問題ないか? あるいは康太、アイツ片付けろとか言ってた水着、そのまま置いていつてるけど、どうする?」

「あつ」

「しまった、そもそもの原因となった水着がそのままだ」

「しかも女物の水着だからな、それを男のオレが片付ける? うん、社会的に死ねるな」

「さてどうするか、そう思っていると救世主が現れた」

「何をしているんだ、お前達は?」

「あ、織斑先生。それと山田先生と……あの、出てきて大丈夫なんですか、篠ノ之博士」

「仕方あるまい、コイツも一緒に行く以上は水着が必要になるんだ」

「その為に学園の機体の持ち出し許可まで降りたんです。一時的とはいえ専用機なんて、学生の時以来ですよ」

「それに、東さんの事を本人って思う人は少ないよ! この天才の私が此処に居るなんて思う人間は少ないって、こーくん!」

「現れたのは織斑教諭と山田先生、そして篠ノ之博士の三人である」

「昨日、買い物する予定は話していたがこうして会うとはあまり考えてなかった」

「それで、何かあったのか？先程、顔色の悪い女性が此方から走ってくるのを見たが」

「千冬ね……織斑先生、実は——」

「今は学園の外だから普段通りの態度で構わないぞ、一夏」

「あ、そうなのか？なら言うけど、実はな——」

そう言つて一夏は先程の顛末を説明していく

それを聞いた三人は納得し、そして織斑教諭と山田先生は頭を押さえていた

「前にも増して女尊男卑の影響が強くなってきたと思つていたが、そこまでか……」

「身近だとオルコットさんがそんな感じでしたね。今は紫藤君との試合から改善されましたけど、もしあのままだったらと思うと頭が痛くなります。他のクラスでも幾らかは存在しているみたいですし、悩ましいですね」

「うーん、そんな連中は皆吹っ飛ばしちやえば良いんじゃないかな？私はそんな下らない事の為にISを作ったんじゃないのにさ」

と、このように三者三様の反応を返された

篠ノ之博士だけは平常運転だが、やはり先程の女性のような人間は増えてきているらしい

「オレには全く実感のない事ですね。そこまで酷いんですか？」

「そうか、紫藤は思えばそういう生まれだったな。なら仕方ないか」

「え？………あつ、そうでした！紫藤君は生まれが特殊なのを忘れてました」

女尊男卑という思想の事だが普通の世界に居たオレにはあまり分からない、だからその一片を目の当たりにしても、実感が湧かないのだ

だが今の状態が続くようなら、先程の女性よりも更に酷い思想の人間が居るといふのなら、きつとその跳ね返りは存在する

「もしもISに対抗可能な男でも扱える兵器が出てきたら。そう考えると恐いな」

自然と呟いたその一言、それが後々になって現実となるなんて事を

オレはこの時はまだ知らなかった

25話 誕生日2

その後、取り敢えず水着を選び終えたオレ達は、どうせならとレゾナンス内にあるフードコートにて一緒に昼食を済ませる事になった

しかも道中で偶然に出会った、デートをしていたらしい一秋とラウラのペア、気が合うのか学年別トーナメント以降も一緒に行動する事が多くなったセシリアと鈴も合流してだ

そして結果として天災、ブリュンヒルデ、元代表候補生、加えて代表候補生含む専用機持ちが八人という大所帯となった

この場に居る人間だけで戦争が起こせるレベルである

「それにしても、こうまで集まるとはな」

「そうね。本当に偶然だわ」

「よく言いますわ。一夏さんとシャルロットさんの姿を見付けて尾行するように動き出したのは鈴さんではありませんか」

「ちよつとセシリア!?何言ってるのよ!私がそんな事する訳ないじゃない!」

「折角出し抜けたと思ったのになあ……」

「シャルロット、あんたは後でゆっくり話し合いましたよね」

「姉上達も一緒だったのだな。やはり水着を買いに来たのか?」

「そうなります。あと姉ではないです」

「大丈夫か、一秋。ラウラの奴、織斑先生の姿を見た途端にこっちに走ってきたが」

「大丈夫だ、そんなラウラも可愛いから」

「駄目だコイツ、早くなんとかしないと」

「お前達、今日の私は教師ではないがあまり騒ぎすぎて周りに迷惑を掛けるなよ」

「そういえば、こうしてちーちゃんと一緒に外でご飯食べるのって久しぶりだね!」

「うう、最近お腹周りが……でも食べたい……ああでもカロリーが……」

等々、割りと賑やかな集団となっている、周囲も国際色豊かな面々

に興味津々といった様子である

そして面々か料理を注文したところで篠ノ之博士が唐突に話を振ってきた

「あ、そうだこーくん。今度の臨海学校で二日目にISのテストやるって話だったよね。色々作ってるから、他の皆と片っ端から試していったね」

「以前に聞いた話だとデユノア社とも合同って話でしたよね？」

「あ、ボクもその話は聞いたよ。何でも、お父さんが直接篠ノ之博士と話し合って決めたって」

「そうそう、しゃるるんの言う通り、デユノア社と提携したからね。約束の時間より早く仕事をしてくれたし、ならちゃんと応えないとね。無人支援機のテストが合同試験の内容だよ」

「ああ、コスモグラスパーですか」

SEED世界のモビルスーツとISはエネルギーに限りがあるという共通点がある

その為、ストライカーシステムを採用したデユノア社は戦場にて大容量バッテリー内蔵のストライカーパックを換装する事でSEEDのように戦闘可能時間の延長が出来るようになる

試合では使えないだろうが、実戦にて使用するISとしてその機能は何処も欲しがれる能力だ、何せISの弱点であるシールドエネルギーの問題を克服したような物なのだから

なおコスモグラスパーなのは人が乗り込むサイズではなく、無人機として製作したところでガラス張りキャノピーなんて必要ないのでカメラと保護の為の装甲を施した見た目からである、その為にエールストライカーも原作と同様に再設計してある

「私の方も本国が何とか狙ってたみたいだけど、そりゃ提携出来ればこうなるわよね」

「私は既にドイツ軍人ではないが近くで見てもあの機体の利点は分かるぞ。あれは試合ではなく戦場に立つ事を想定している機体だ」

「全くですわ。お陰でイグニッション・プランでも私のブルー・ティーズが選ばれる可能性が低くなっちゃいましたもの」

「作ってはいないがドラグーン・ストライカーっていうブルー・ティ
アーズと同様の武装を積んだプランもあるぞ」

「その話、ちよつと本国に話をしておきますわ」

「ぶつちやけ、ストライク・ラファールが採用されて各国で独自のスト
ライカーパックを作製していく未来が見えるんだよな」

まだ実機が存在せずにシャルロットのラファールを改修しての試
験段階でストライカーパックの有用性のテスト段階とはいえ、そのコ
ンセプトから既にイグニッション・プランでの最有力候補となったフ
ランスのデユノア社

それはまさに世界中が羨む程の逆転劇と言えるだろう、他の国の代
表候補生であるセシリアや鈴が羨ましがるのも無理はない

「最初は男装して入学してきたっていうのに、あまり納得いかないわ
ね……」

「確かに、不公平ですわ。私だって篠ノ之博士にブルー・ティアーズを
見て頂きたいのに」

「まあ早とちりした挙げ句に産業スパイの真似事をしそうになり、寸
での所で大どんでん返しだから無理はあるまい」

「あ、あはは……」

最早シャルロットは乾いた笑いか出てこなかった

まあ確かにそうだよな、一手でも差し方が違っていればシャルロッ
トは犯罪者だったのだ、それが巡り巡ってこのような形になっている
のだからかなりの強運と言える

「それに、提携企業だから何かと一緒にになる機会も多くなるわよね？
誰と、とは言わないけど」

「その点は残念ながら、というべきか機体テストに関してはオレが一
緒になる事の方が多い。これでもテストパイロットだからな」

なおもう一つの理由としてシャルロットと一夏と一緒にする事を
アルベール・デユノアが避けたがっているという理由があったりする
今まで構ってやれなかった分の反動か、デユノア社長は少しばかり
シャルロットに対して過保護になっている様である

そしてそんなオレの言葉に対して鈴は満足そうに頷いていた

「なら良いわね。康太、そのまま足止め頼むわ」

「別に誰の味方もしてないけどな」

「うう……お父さんの為にもテストは頑張らないと……でもアピールの場が……」

「お二人共、仮にも代表候補生なのですから、あまり恋愛にかまけてもいけませんわよ?」

代表候補生という立場は重いものである、だが時として恋愛の方を優先しようとする二人にセシリアから苦言が入る

「そういうアンタも恋すれば分かるわよ。というか、アンタは気になる相手とか居ないの? 一秋とか、康太とか」

「私ですか?」

「そうよ。ちよつと聞いた事あるけど、アンタ始めは男を見下す発言してたみたいじゃない。どういう心境の変化があったのよ? その後の試合で康太に負けて惚れたとか?」

「た、確かにあの時の態度は私も酷かったと恥じ入っています! そして康太さんとの試合で男性の事を見直したのは事実ですわ。ですが! この私、セシリア・オルコットは負けたからと直ぐに相手に惚れ込む等、そんなチョロい女ではありませんわよ!」

しつかりと言い切るセシリア、まあ普通に考えてただ負けただけで相手に惚れ込むとか、そんな事があるわけないしな

「それと、その後で一対一で話してライバル宣言されたな」

「へえ、それで今のところの勝率ってどんな割合なのよ?」

「種目によって違うな。機体性能の差もあるし、同じ射撃でも早撃ちはオレの方が上だが、狙撃はセシリアが上だ」

「そして近接では康太さんが上ですわ。ですが私もまた成長していません。今ではインターセプターもコールせず呼び出せるようになり、不意の一撃を受ける事は少なくなりましたの」

「ふーん、それで試合形式だとなるの?」

「うっ……それは、康太さんが八割、ですわね。それというのも、ジェガンの装甲が硬すぎるのが原因です! 私の攻撃で装甲が抜けませんのよ!」

「そういう機体だからな。あと、残りの二割はセシリアに頭部センサーを抜かれて負けた数だ。油断すると直ぐに抜かれるから割と気を抜けないんだ」

その点、装甲を抜かれる心配のない鈴とかが相手だと割りと楽に勝てる

食らえば殴り飛ばされるから警戒すべき双天牙月も間合いに入らなければ良いからな、遠距離から射撃すれば向こうは衝撃砲の威力も満足に発揮出来ずに完封可能だ、それも鈴が持ち前の勘で避けたり、一瞬でも油断すると直ぐに距離を詰められるから言うほど簡単ではないが

それとシャルロットに関しては能力やら機体性能やらが殆んど同等である為に五分五分である

向こうもSEED系のビーム兵器を装備してきた為にジェガンでも装甲が抜かれるのだ

おまけにオレと同じく高速切換ラビットスイッチを使う事から間合いも関係ない、共にどちらかと言えば射撃が得意な為に射撃戦になるのだが、その時は絶え間なく火線の応酬となる

次にラウラに関してはまだ付き合いが短いからあまり戦っていない

それでも機体特性を直ぐに理解して堅実に戦ってくる為に手強いと感じさせる相手だ、今度の新型に慣れてきたら勝率が何割になるだろうか

なお一夏は未だに勝率十割である、クレセントムーンの威力が大きいのは分かるが射撃をいい加減に覚えろといたい

そして最後に一秋だが、二次移行を果たした白式・刃風の能力が能力の為に、ビーム兵器が封じられた

それというのも機体バランスはオレの記憶にあつたゲイルストライクをベースにしていたのだが、背部にアームで保持しているシールドとライフルがスタービルドストライクの物と同じ機能を備えていたのだ

つまりシールドがアブソープシールドになっており、エネルギー兵

器ならそれだけで吸収し自身のシールドエネルギーに変換するのだ、加えてスタービームライフルがベースらしいライフルもあるので遠距離にも対応してきた

そして肩部ブースターの追加により機動性は向上、実弾兵器による射撃も狙いを付けるのに苦勞する

更に剣も雪片参型と刀身が延長されるだけでなくゲイルストライクのウイングソーと同様に此方の装甲に対して振動周波数を調整して切断するという能力が追加されていた

元からある零落白夜とはどちらか片方しか発動させられないが、そんな訳でオレは一秋との戦闘では損傷を受けて白式に装甲材を解析されないよう細心の注意を払っている

というより今のところ一番厄介な相手になるのは一秋だ、ISの二次移行という可能性の塊みたいな現象をまざまざと見せ付けられた

なのでオレも、自身の進化だけではなくジエガンの進化を目指している、条件は不明だから何とも言えないが、目標があるに越した事はない

と、そこまで考えた辺りで呼び出しがあった、オレは自分の料理を受け取りに番号札を持ってその場を離れるのだった

◆ 昼食を終えた後は全員がそれぞれに予定があるという事で解散となった

そんな中でオレとクロエは当初の予定通りに誕生日プレゼントを探す事にした

ショッピングモールの中でも贈り物として良さそうな小物が並ぶ中でオレはまず箒宛のプレゼントを選ぶ

「こういうった時に何を贈れば良いのか、分からないです」

「相手にもよるけど、今回は箒のプレゼントだから和風の物が良いらしい。例えば、湯呑みとか手拭いとかな」

マグカップやハンカチを送るのも良いが、箒の趣味となると和風が良い

だが湯呑みは割れ物なので今回は省くか、そうなると実用性のある

物も良いな

箒……和風……刀……あつ

「オレは包丁でも贈るか。日本刀と同じで関の包丁なら喜ばれるだろう」

箒は料理も上手いらしいし、良い道具を贈るのは悪くない筈だ

どうにも家に伝わる日本刀を持っているようなので、同じように日本刀をとも考えたがいくらレゾナンスとはいえ普通に売ってる訳がないので候補から外す

逆に探してみれば案の定というか包丁はあつた、値段は少し張るがこのくらいの品を贈れば良いだろう

メッセージカードを同封可能なので一筆添えておく、『未来を切り開くという願いを込めて』と、だ

刃物を贈ると縁を切る、とネガティブに受け取られる事もあるので念押しだ、お袋からこの辺りは習った

昔から刃物を贈る事はあるらしい、さっきのような理由で『新たに切り開く』という意味で、例えば花嫁衣装での懐刀とか、七五三の守り刀とか

篠ノ之博士は箒にISを与えるらしい、ならばそのISパイロットとしての新たな門出にも相応しいだろうからな

使い勝手の良い三徳包丁を選び包装して貰い学園に郵送して貰う事にした

クロエも手拭いを選んでいたので、それもまた郵送して貰う事になる

「よし、それじゃあ次はクロエの番だな。何か欲しい物ってあるか?」「私の、ですか?」

「ああ、前も言ったが誕生日もう過ぎてるから遅くなったけどな。希望がないなら色々見て回って、気になった物を選ぶ。そんな感じで良いんじゃないか?」

「分かりました。でも、私なんかがプレゼントなんて、良いんでしょうか?」

「良いんだよ。日頃、オレも世話になってるから、そのお礼としてもオ

レはお前に何か贈りたい。取り敢えずは適当な店に入ろう。意外な掘り出し物があるかもしれないからな」

どうにも希望する品が特にないらしいので、一緒に店を回りながら選んでいく

例えば、近くのぬいぐるみを主に扱う女子向けのファンシーショップでウサギのぬいぐるみを見てみた

「モフモフで気持ちいいです」

「抱き枕にもなるみたいだな。にしても、ウサギか」

「ウサギです」

クロエが抱えているのは大きな白いウサギのぬいぐるみである

そしてウサギとなると身近に居るとある人物を思い浮かべる、肉食獣くらい簡単に葬れるようなウサギを

クロエも同じ人物を思い浮かべたのか、小さく笑みを浮かべているその後、ぬいぐるみは買わずに別の店を回っていくと、何軒か回った後でアクセサリーショップに辿り着く

そこにも多種多様なアクセサリーが並んでいる、ネックレスやブレスレット等のメジャーなジャンルだけでなく、スーツに使うカフスボタンまで揃えていた

普段、こういったアクセサリーをあまりつけないクロエも興味があるのか色々と視線を向けている(普段から目を閉じているからIS黒鍵のセンサーで見ているらしいが)

そして一つの品の前で止まると、それをジッと眺めている、今までにはない反応だな

「それが気に入ったのか？」

「はい、これが一番綺麗です」

クロエが見付けたのは一对の指輪だった

ショーウィンドウの中にある黒と銀の大小の指輪、そこには三日月と月桂樹の葉が描かれている

一对の指輪、つまりはペアリングか

「ならこれにしようか？」

「良いんですか？」

「それが今までで一番の反応だったからな。そういう直感っていうのは大事だぞ」

オレもこれだ、と思った品物で外れた事は一度もない

だからクロエがこの指輪に惹かれたというのならば、それはクロエが理屈ではなく直感で良いと感じた事に他ならない

そんな訳でこのペアリングを購入する事にした、値段は先程の包丁よりも高いが問題ない、その程度の給料は貰っている

携帯端末で支払いを済ませた後、ペアリングを受け取ってクロエに渡す

「ありがとうございます、コウタさん」

「普段の礼だからな」

「そうですね。それとコウタさん、この黒の指輪はコウタさんにです」
「オレに？」

「はい。コウタさんからのプレゼントですけど、コウタさんと分かち合いたいんです」

「そうか。とはいっても、どの指でも少し大きいな」

大人用だったのだろう、指輪はまだオレの指には少しだけ大きく、親指でもすり抜けてしまう

折角のクロエから渡された指輪だけにそれだと勿体ない、なのでオレは首に掛けているドッグタグを外し、そのチェーンに指輪を通す

「コウタさん、それは」

「ああ、ジエガンの新しい待機形態だ」

どうにもオレのISはハロ以外の形にはなりたくなかったらしく、妥協に妥協を重ねてドッグタグの形に落ち着いたらしい

だがこれで嵩張る事がなくなった、ハロでやってた仕事は別に携帯端末を所持したのだが、それでもバスケットボールサイズのハロを持ち歩くよりは現実的である

そんなドッグタグを再び首に戻そうとしたが、上手く留め具が留まらない

まだ慣れていないからな、大人しく留めてから首に掛けるか、そうしようとした時、クロエが前から手を伸ばして留め具をつけてくれた

「助かった、ありが、とう……」

「あ……」

だがその体勢がまずい、クロエがオレの首に手を回すように持っていつている事から、互いの顔が直ぐ近くにあったのだ

それを認識した途端、オレもクロエも視線を逸らした、互いの吐息が分かるくらい近くに美少女であるクロエの顔がある、そう理解しただけで自分でも顔に熱があるのが分かる

「すまない……」

「いえ、私の方こそ……」

同時に謝りつつ素早く距離を取る、同じ部屋で過ごすようになって慣れていたつもりだったが、やはりそう簡単には慣れないものだな

「……………」

「……………」あの、コウタさん」

暫く二人で無言になっていたが、やがてクロエの方から口を開いた「あ、何だ？」

「その、私の分の指輪なんです、コウタさんが付けてくれますか？」

「ぶっ……それは、どうして？」

「あんな形ですけど、コウタさんに指輪を付けたような形になったので、駄目でしょうか？」

「まあ良いが……どの指が良い？」

「上手く嵌まるのは薬指ですけど……その、右手にお願いします」

指輪を付けてあげるといふ行為と、右手の薬指と言われて心臓が跳ね上がるような感覚になったが、よく考えれば結婚式とかでやるのは左手の薬指だった

それでも似たような状況に心臓が鳴りっぱなしだったのだが、クロエの手を取り指輪を右手の薬指に通してやる

そして、それと同時に周囲から拍手が響いてきた、さっきのリングをチェーンに通した時から、此处がまだショップの中だとすっかり忘れてた

「お似合いですよ。折角なので、記念撮影はいかがですか？というかは非とも店頭に飾りたいのでお願いします一枚だけでも！」

「結構です」

そんな事を言つてカメラを持っている店員、というよりはこの場から即座に駆け出す

その時にクロエの手を引いて移動したのだが、その時にも周囲からは歓声が聞こえてくるのを無視して適当な場所で止まる

あー、顔から火が出そうだ

「ごめんなさい、コウタさん。私の我が儘で……」

「あ、いや。確かに恥ずかしかつたのはあるけど、別に嫌な訳じゃないさ」

寧ろこういったデートみたいなシチュエーションは自分には縁のない物だと思つていたからな、色々新鮮だった

「それより、クロエは大丈夫か？今日は色々回つたけど、楽しめたか？」

「はい、こんな日は初めてだったので、全てが新鮮でした。それに、コウタさんから戴いたこのプレゼントも嬉しかったです」

そういつて本当に嬉しそうに右手の薬指につけた指輪を撫でるクロエ、その笑顔には嘘など欠片も混じっていないものに見えた

「そうか」

ならばこの日の行動に無意味な事などなかったのだろう、目的は別にあつた今日の買い物だが、こうしてクロエが笑ってくれたというのが一番の収穫かもしれない

その後は適当なカフェにて休憩してからオレ達もIS学園への帰路についた、こんな日も悪くない、そう感じながら

26話 海に眠る巨影

臨海学校の初日、IS学園のモノレール乗り場ではバスに乗る為に本土に渡る前に一年生の全員が集合していた

各クラスの担任、副担任の教師に引率される生徒達だがそんな中で織斑一夏は周囲を見渡して一年一組の中に居ない二人を探していた

「千冬ね……織斑先生、康太とクロエが見当たりません」

「かなりギリギリだったが、言い直したからよしとしよう。紫藤とクロニクルの両名は緊急出撃だと昨日の夜に出た。後で現地合流となる。というか、お前もラビットフット社の所属だろうに、何も聞いていないのか?」

「あの二人、というか束さん絡みだろうから俺は知らない事が多くて……」

「どうもお前は社員として見ていないようだな。ラビットフット社に入れたのも専用機を与える口実だろう。ラウラはどうなんだ?何か聞いているか?」

「ハッ、私の方にも別行動とだけ連絡が来ました、教官」

「織斑先生と呼べ。聞いての通り、紫藤とクロニクルは別行動となった。まあ束の奴が共に居ると襲撃のリスクも高まるから分散しての移動は効果的と言えるだろう。では全員モノレールに乗り込め。移動するぞ」

千冬の言葉に生徒達は元気よく返事をしてモノレールに乗り込んでいく

康太達が居ない事も話題には上がるが、全員がこれから向かう臨海学校の話題で持ちきりである

そんな生徒達の様子を眺めつつ千冬は独り言を呟く

「また余計な厄介事を持ってこなければ良いのだがな……」



「接触回線オープン、データ受信完了。博士、そちらはどうですか?」
『問題ないよ、こーくん。それと、今回は水中だけど機体の様子はどうか?』

「此方も問題なし。この辺りの深度なら被弾しない限り問題なく行動可能みたいですね」

さて、臨海学校が今日から始まるというのだがオレとクロエ、そして篠ノ之博士は別の場所に居た

ある意味ではこれも臨海学校と呼べるかもしれないが、今のオレは太平洋の水深五百メートル程の場所にいる

クロエと篠ノ之博士は海上で船のように停泊しているノツセルの中だ、オレだけがジエガンを使って此処まで潜航している

何故このような事になっているのかというと、昨日の夜に篠ノ之博士が突然部屋までやってきて理由の説明なくノツセルに詰め込まれて移動した

そのまま移動している途中で説明を受けて理解したのだが、篠ノ之博士が急ぐ理由も分かる

オレの元いた世界に存在するガンダムシリーズというアニメの品物がこの世界に流れ着くのは今更だが、今回の反応は今までの物とは比べ物にならない程の巨大な物だったのだ

全長三百メートル程という段階で既に驚きなのに、一瞬だけとはいえ新たなISコアの反応が四つも確認された

恐らくはガンダム世界に於ける艦船の類だろう、既に篠ノ之博士が無人機を派遣して確保しているが直接確認する必要はないのだという

更には秘匿性を上げる為に通信は有線で限定、現物を確保した無人機からのデータは直接受け取るようにして、更にはガンダム関連なら大体の知識を持つオレが駆り出された訳だ

問題となるのは確認した場所が海中であるという事で、全身装甲のジエガンは元から水中での運用に適していたが、更に篠ノ之博士が最適化する為にシージエガンというジエガンの水中用バリエーションへと装備を換装した

それにより潜航していたのだが、そこで先に確保していた無人機であるゴーレムと接触、それを經由してオレのジエガンへとデータが転送されて、更にジエガンに繋がっているケーブルを通してノツセルま

でデータが行った

そうしてデータの確認をしていたのだが、外から確認された形状を見てオレは即座に艦名を識別する

「データを確認しました。艦名、「エウクレイデス」。機動戦士ガンダム00西暦世界に登場する宇宙ファクトリー艦です」

『こつちでも見たよ。それで、この船の特徴って何かな?』

「この艦がいつの時の存在かによりますね。もし最後に登場した頃なら四機のガンダムと、あの世界でも最高の量子コンピューターであるヴェーダのターミナルコアが存在してる筈ですよ」

『成る程ねえ。となると、確認されたISコアの反応はそのガンダムの物かな』

「そうだと良いんですが……これに乗員が居たら手が付けられなくなりますよ」

少なくともオレでは勝てないだろう相手だ、念のために後ろに十二機の無人機のシージエガンが居るが、全機でも勝てないだろうな、あの最凶には

なので出来るなら乗員までは再現されていませんように、そう思いながらオレはエウクレイデスのハッチに取り付く

ロックが掛かっていると思っただがジエガンを使いアクセスすると簡単に扉がスライドして開いた

それと同時に海水も流れ込んでくるがそこは宇宙艦、後続のシージエガンも内部に入ると扉が閉まり排水される、エアロック機能は万全らしい

ともかくこれで排水はされた、後は艦内の探索だが広い艦内を纏まっても非効率だ、幾らかは分散させる事にする

よって二機一組の部隊を別に三つ編成して艦内の探索に当てる、オレは残りの六機を連れて移動だ

居るかも分からない存在に対して備えるよりも効率を取る、最悪撤退だけなら他の無人機を楯に下がる事も可能だ

ケーブルは扉の時に外しているから篠ノ之博士達に連絡はコアネットワークを通じての物になる、いざという時は情報だけでも向こ

うに送ろう

何が潜んでいるのか分からない艦内を警戒しつつ進む、幾つかの部屋を見て居住区らしい区画を進む、今のところは誰かが居た痕跡はないし、センサーに反応もない

そして幾つかの扉や通路を抜けた時、大きな空間に出る、此処はハンガーか？

本来ならモビルスーツが四機は格納されるのだろう場所、マンガでも見たが原作ならソレスタルビーイングの第二代ガンダムが存在する場所には何も無いがらんだ

だがある意味でこの世界を大きく変えてしまう存在は見付かった

ハンガーの中央にある幻想的にも見えるデザインの球体を擁する柱、ヴェーダのターミナルコアだ

「そうになるとOOFより後の時代の物か。だがガンダムの姿はない。コアの反応もない。誰かが持ち去ったと考えるのが普通だが」

周囲を改めて見渡すがモビルスーツとしてのガンダムはなく、ISになったと思われるガンダムの姿もない

コアネットワークで繋がっている他の場所を探索している無人機からも何の報告もない、反応はあっても艦内を移動している事から無事だと分かる

一瞬だけ確認されたコアの反応が嘘ではないのなら、やはり誰かが持ち出したか、ならば誰が？

この艦は篠ノ之博士のゴーレムが確保していた、その間に誰かが出入りしたという記録はなかった

なら考えられるのはゴーレムの到着前に艦を放棄して何処かへと去っていったという事だが、その人物は何が目的なのか

本当にガンダム世界の人間ならばこの今の世界を見て何を思うのか、何をするのか、そもそも誰が此処に居たのかも分からないのでは推測も出来ない

「仕方ない、今は先に進むか」

ハンガー内には他にも幾つかの物がある、ヴェーダはこの世界では単なるコンピューターとしてしか使えないが既存の物を上回るス

ペックの演算機となれば篠ノ之博士は喜ぶだろう

他にはソレスタルビーイングが所有していた整備マシンのカレルがそれなりの数並んでおり、使えれば色々と利用出来る

この艦もまた装甲材はEカーボン製だ、現実に存在するカーボンナノチューブの二十倍もの引張り強度があるらしいし、炭素系素材なので生産さえ出来れば鉱物資源に生産を依存せずに済む、コロニー開発の素材としても有用な筈だ

無人機部隊も他の区画を粗方確認したらしいし一度戻ろう、そう思った時に無人機部隊から反応が来た

「生体反応!」

確認されたのは居住区の近くであり、その中の一室だ

オレは全ての機体をその場所に向かわせるよう指示を出し自らもそこに向かう

部屋の前で集結した後で武装を確認、何が起きても良いように覚悟を決めて一気に突入する

「動くな!」

部屋の中を確認すると同時に生体反応の出所を探す、だがそこに人影はなく、あるのは治療用の医療ポッドだけだ

「反応の正体はコイツか」

生体反応の位置は目の前の医療ポッドが中心となっている、誰かが眠っているのは確かだ

他に反応もないので取り敢えず武装を下ろしてポッドの中を覗き込む、そこには白髪の老人の姿があり、オレはその人物を知っていた「まさか、レイフ・エイフマン教授!?!ほ、本物なのか?」

医療ポッドにて眠っていた人物、それは機動戦士ガンダム00のファーストシーズンに登場してユニオンの技術者だった

ユニオンフラッグの開発者、世界的な機械工学、材料工学の権威、技術力だけでなく洞察力にも優れた天才的な人物である

その能力は『知りすぎた』故に暗殺される程のもの、そんな人物がアニメではなく現実として目の前に居る、そんな状況にオレは必死に自分を落ち着かせるよう努めていた

まさかパイロット等ではなく技術者が居るとは思わなかった、ガンダムに殺されたこの人がソレスタルビーイングの艦に居る理由が分からないが、それでもこの人だけは是非とも味方へと引き入れたい。何にせよこれは一番の発見である、オレは今まで封鎖していたコアネットワーク経由の通信を篠ノ之博士に繋げた

「博士、大至急報告したい事があります」

『お、ようやく繋がったと思ったなら何かな？ガンダムでも見付かった？』

「ある意味ではそれ以上の存在です。ガンダム世界の技術者を発見しました。西暦2307年に於いて最高の頭脳を誇る技術者です」

『本当に!?コーくん、その人は今どうしてる!?交渉なら私も直接会おうか!』

「そうですね。今は医療ポッドで眠ってますが、交渉するにしても組織のトップが直接顔を合わせるのは良いと思いますよ」

人間性に問題はある篠ノ之博士だがオレやクロエのトップだ、エイフマン教授を仲間として引き入れるなら三顧の礼に倣うのも良い

篠ノ之博士の到着までオレは近くに資料か何かが無いか探して待つのだった



「この人がガンダム世界の技術者。なんだか見た目は普通のお爺ちゃんだね」

「まあ御歳73歳ですからお爺ちゃんって表現は間違ってますね。それと調べた結果、ポッドの方で眠らせてあるみたいです。操作すれば目覚めさせる事は可能ですよ」

「成る程ねえ。けどその前に、このお爺ちゃんって具体的に何処まで凄いの？東さんより上かな？」

「博士と比べるのは分野が違いますから一概に言えませんけど、少なくとも天才と表現して不足ないですよ。何の手掛かりもない手探りの状態で同じ世界の天才科学者であるイオリア・シュヘンベルグの計画の全容に辿り着いた人物です。その後、口封じとしてガンダムに殺されましたが……少なくとも、その知性は本物です」

「ふーん。ガンダム世界の技術者、今から約三百年後の人物。興味は尽きないね」

「ポッド、開きます」

クロエと篠ノ之博士と合流した後、篠ノ之博士にはエイフマン教授に関する説明を、クロエは医療ポッドを操作していた

そしてクロエの操作によりポッドが開放される、患者衣に身を包んだエイフマン教授が呻き声を上げながら上体を起こす

「此処は？わしはガンダムにやられた筈では？」

どうやらトリニティに暗殺された時の記憶があるらしい、図らずもエイフマン教授が何処までの記憶があるのか知る事が出来た

この部屋が医務室だと周囲を見渡して理解はしたらしいエイフマン教授の視線は次に此方へと向く

「初めまして、エイフマン教授。私の名前は紫藤康太、コウタ・シドウと言います。御加減はいかがですか？」

「ふむ、どうやら君達が治療してくれたようだな。わしはどれだけ眠っていた？」

「その辺りを説明する前に、幾つか確認させて頂きます。今現在、記憶の欠損などはありませんか？」

「ふむ……少なくとも、自覚出来る範囲ではない」

「分かりました。では質問です。貴方が開発した現在のユニオンの主力機の名前は？」

「ユニオンフラッグだな」

「そのテストパイロットを務めた者の名前は？」

「グラハム・エーカー、当時は少尉だった」

「貴方の弟子で長い髪を後ろで纏めていた人物の名前は？」

「ベリリー・カタギリかね？そういうえば、彼等はどうなった？ガンダムは？」

「分かりました。結論から言うと両名とも無事です。それと、今が何年か分かりますか？」

「わしの記憶では2307年だ。あれからどれだけ経った？」

さて、此処からが本題である

誤魔化す事は出来ない内容、だからこそ事実だけを伝える

「残念ながら、今は2022年です。そして恐らくはエイフマン教授の居た世界とは違う歴史を辿っているかと思えます」

「待ちたまえ。そのような事があり得る筈がない。第一、此処が過去の世界だというのであれば、君は何者なのかね?」

「私もまた、この世界の人間ではありません。教授と同じように別の世界の人間です。そこはまた、教授とは違う世界ですが」

「俄には信じられん話だ……君が嘘を言っている可能性もある」

「その点は空を見れば分かりますよ。この世界には軌道エレベーターはなく、ユニオン、AEU、人革連といった三大勢力も存在しない。そして日付は全て2022年です。混乱される気持ちも分かりますが、それは紛れもない事実なのです」

「つまり嘘ではないのだな。長く生きてきたが、このような状況になる等とは考えた事もない」

それはそうだろう、オレも別の世界に渡る事になるなんて思ってもみなかったのだから

「それで、シドウ君。君は何故、わしの事を知っているのかね?先程の質問といい、やたらと詳しいように思えるが」

「荒唐無稽な話に聞こえるかもしれませんが、私の元いた世界には一つのアニメシリーズがありました。機動戦士ガンダムシリーズです」
「ガンダム?」

「はい。ガンダムシリーズというアニメ作品があり、その中の一つにエイフマン教授が登場します。こうして世界が幾つもあるなら、そんな世界があるとは思いませんか?例えば今この瞬間、私達は生きていますがこの世界での出来事もまたアニメ扱いな世界があってもおかしくはない筈ですよ」

例えばこの世界にはISという超兵器がある、こんな存在をアニメとして設定にするなら面白そうだ

前の世界のオレの日常もアニメになってるかもしれない、平凡な人間の日常なんて全く面白くもないが

「成る程、確かにな。ふむ、ならば君はガンダムの、ソレスタルビーイ

ングの、イオリア・シュヘンベルグの目的も知っているのかね？」
「ある意味では神様視点でしたからね。色々といレギュラーな要素がありました。ソレスタルビーイングの目的は紛争根絶、だけではありません。全世界の悪になる事で地球圏の統一という目的がありました」

この辺りは劇中でもエイフマン教授が独自に辿り着いていたところだ

「だろうな。紛争根絶などという夢物語を本気で信じている筈がない。そしてあれだけの性能を誇るガンダム为数が少ない理由。あの特殊な動力源にも秘密がある」

「その通りです。木星の高重力下でのみ精製可能なTDブランケット、教授の読み通りかつての木星有人探査の時に開発された物です。そしてそこから放出されるGN粒子、それを圧縮した高濃度圧縮粒子を使えば人は齟齬のない意思疎通が可能となり、粒子を介さずとも脳量子波により同様の事が可能なイノベーターと呼ばれる種へと進化を促す。それにより外宇宙に出た時に地球外生命体との対話を行う。それがイオリア・シュヘンベルグの目的です」

「成る程、まさかガンダムの動力炉にそのような能力があったとは。やはり恐ろしい男だったのだな、イオリア・シュヘンベルグは」

「あとソレスタルビーイングの活動開始から七年後に逆に外宇宙から金属生命体ELSの襲来があったので、下手するとその段階で地球が滅んでました。ガンダムのパイロットの一人がイノベーターとして覚醒し、対話を果たした事でその危機は回避され、人類はELSとの共存の道を選ぶ事が出来ましたけど」

流星にそれはイオリア・シュヘンベルグでさえも予見していなかった事態であり、殆んど綱渡りみたいな状況だった

エイフマン教授も同様なのか呆然とした表情の後、自嘲気味に笑う
「ガンダムにより殺された私だが、ガンダムは後に地球を救ったか。皮肉なものだな」

「あの新型の三機は本来の計画には存在しないイレギュラーでした。それに、最初の四機とは別の存在で、対立した挙げ句に全滅してます

よ」

「ほう、詳しく聞かせて貰おう」

「はい。それより、まず時系列順に行きますと——」

その後、オレはアニメ本編の流れを簡潔に説明していった

エイフマン教授の死後に起きた事、ソレスタルビーイングの壊滅、地球連邦政府による統一、その後の独立治安維持部隊アロウズによる反連邦勢力の行き過ぎた弾圧とそれに対するソレスタルビーイングの再起と、色々だ

その中でもエイフマン教授と関わりの深いグラハム・エーカーやビリー・カタギリの事に関しては詳しく説明した

二人が憎しみを超えて前に進み始めた事を知った時は感慨深そうにし、グラハム・エーカーがソレスタルビーイングに入った話には呆れ、ビリー・カタギリが結婚して子供も授かったと話した時には意外そうにしていた

そしてある程度話終えると、穏やかな笑みを浮かべていた

「世界は良き方へ歩み始めたのだな。そこに立ち会えなかった事は残念だが、死人が出る物でもなからう。本来知るはずの無かった未来を教えてくれた事、礼を言おう、シドウ君」

「いえ、此方もユニオンの高名な技術者と直接言葉を交わす事が出来て光栄です」

アニメの登場人物と会話する、それだけでも感無量なのに相手はユニオンフラッグの開発者だ

オレは00では一番はジンクスが好きだが、引けを取らないレベルでフラッグも好きだ

当時の最新鋭機ではあるが圧倒的なガンダムの性能には及ばなかった

だがグラハム・エーカーはその操縦技術を以て時としてガンダムを圧倒してみせたのだ

あのスローネの腕を斬り落とした名場面は感動した、即座にガン普拉を確保しようと走り売り切れていたのは良い思い出

「では、今度は我々の未来についてだな。期せずして得た第二の生。

それをどう生きるか。シドウ君、君はわしに何かを期待しているのではないかね？」

「それは……」

正直に言えば宇宙開発の為に力を貸して貰いたい、だがこうして言葉を交わした事でエイフマン教授には何者にも縛られずに残りの余生を過ごして貰いたいという思いも生まれている

それは篠ノ之博士の本意ではないが、それでもそう願わずにはいられない

だからオレは意を決して偽りのない言葉を口にする

「本音を言うなら私の、オレの夢である宇宙開発にその力を貸して欲しいと思っっています。ですがエイフマン教授は自らの人生がありません。教授程の頭脳ならこの世界でも自由に研究を続けて過ごせるでしょう。なのでオレは教授が望まれるならこの世界で自由に生きられるよう微力を尽くします」

「ちよつと、こーくん！折角の技術者なのにそんなの勿体ないよ！」

「申し訳ありません、篠ノ之博士。それでもオレは尊敬するエイフマン教授を自分だけの都合で無理矢理協力させるなんて真似は出来ません！」

この人はアニメの登場人物じゃない、現実に生きる一人の人間なのだ、そんな人を犠牲にしてまでオレは自分の夢を叶えたくはない

「ふむ、良かろう。わしの技術、存分に使うと良い」

「……えっ？」

「意外か？シドウ君の今の目は純粋な目だ。長く生き、時として権力者とも対面していたわしが断言しよう。わしとて宇宙開発には興味もある。わしの研究にも手助けすると言った。ならばその思いに応えてみようとも思おう」

「良いんですか？こんな初対面の相手を信用して」

「これでも人を見る目はあるつもりだ。でなければ当時は無名だったあグラハム・エーカーの男にフラッグのテストパイロットを任せようとは思わんよ。

例え本人が志願してきたのだとしてもな」

そういうとエイフマン教授は篠ノ之博士の方を向き、不敵な笑みを

浮かべる

「さて、ミス・シノノノと言ったか。改めてわしの名はレイフ・エイフマン。ユニオンの技術者だ。この世界でその技術がどう役立つか未知数だが、宜しく頼む」

「むむ、そう言つて全然自分が劣るだなんて思つてない顔してるね。こーくんの言うガンダム世界の天才技術者でもこの世界で一番の天才はこの私、束さんなんだからね」

「フツ、己に自信が持てねば政治にしか関心のない者達の相手は出来んよ」

「そうして篠ノ之博士とエイフマン教授は握手を交わすが二人の間にはピリピリした雰囲気の流れている

とはいえこうして正式にガンダム世界の技術者であるレイフ・エイフマン教授が仲間として加わった

未だにこのエウクレイデスについての謎は残るが一先ずは良いスタートが切れた、そう思える結果となったのだった

27話 群青

さてエイフマン教授がラビットフット社に授かった加入する事となったのだがオレとクロエは学生の身でもある、その為にこの後は臨海学校の行われる場所まで移動する必要がある

直ぐには引き揚げられないエウクレイデスは無人機のゴーレムを置いておくとして一度海上に停泊してあるノツセルまで戻った

篠ノ之博士達がどうやって此処まで来たのかと思えば小型のカプセルらしき物があり、そこに入ってゴーレムに運んで貰っていたらしい

オレはジェガンを使って一人で戻りゴーレムと共にカプセルの運搬を行う、クロエもバンシイを使えば水中をいけなくはないのだが全身装甲よりも生命維持にエネルギーを消費する為に効率が悪いらしい

だがオレが手伝った事で往復回数は少なくなり、取り敢えずはノツセルの甲板にて全員が集まる

「こうして共にガンダムと行動するとなると不思議なものだな」

「オレの機体は顔だけで、中身は量産機と構造は変わりませんよ。カスタムはしてありますけど」

ストライク・ジェガンならともかくシージェガンでの性能はセンサー系が多少強化されているくらいらしい

言うなればアクア・ジムと水中型ガンダムの違いである、アレもガンダムとは名ばかりで実態はジムだし、ガンダム顔でも中身ジェガンなオレの機体と似ている

「それにしてもインフィニット・ストラトス、ISか。この世界には面白い物が存在するのだな」

「あ、そうだ！お爺ちゃんの実力がまだ分からないから、まずこのISコアの解析からやってみようよ！これ完全にブラックボックスになってて誰も作れないんだよね」

「博士……」

この人、完全に対抗意識から言ってるな

とはいえ確かに篠ノ之博士しかISコアは作れない、この勝負の結果でどちらの能力が上か白黒つけたいのだろう

「ふむ、良かろう。必要な機材はあるのかね？」

「幾つかの道具ならこのノッセルにも載ってるから自由に使って良いよ。それまでの間、ノッセルは移動するね」

「ではその間は部屋に籠るとしよう。到着までの時間は？」

「たまにはクルージングを楽しむってのも良いよね。IS学園のバスが到着する予定時間を考えて、四時間くらいかな？」

という訳で四時間のクルージングが始まった、ノッセルには飛行能力もあるがゆっくりと海上を船のように進む

クルージングなんて洒落た経験はないのでオレは甲板の上で海原を眺めたり、船内のキャビンで仮眠をとったり、クロエと話したりとゆっくりとした時間を過ごした

そして航行から三時間程が経過した時、エイフマン教授が籠っていた部屋から手に一つの端末を持って現れた

「ハード面だけが一通りの解析はしてみた。これで合っているかね？」

「えっ、ウソ!? 本当に終わったの!？」

「ソフト面には一切手を付けてはいないがね。取り敢えず経過報告とあったところだ」

篠ノ之博士とクロエと三人でトランプで勝負していた中での事で、篠ノ之博士はそんなエイフマン教授の言葉に信じられないような面持ちで端末を引つたくるように奪うと中のデータを確認していく

オレには何が示してあるのかさっぱりなデータだが、ある程度確認したのか篠ノ之博士は震えるような声で、しかし確かに呟いた

「ちよつと非効率的な部分もあるけど、基本的な機能はちゃんと再現してある……コアは大型化するけど、これを使えばISは完成する……」

「マジか……」

天才だとは思っていた、三百年先の人間だから可能性はあると思っていた、だが実際に天災とも評される篠ノ之博士の生み出したISコ

アをエイフマン教授は解析してみせた

それはこの世界の誰もなし得なかった偉業、ISという世界のパワーバランスを崩す存在を生み出せるたった二人の人間となる

「だがミス・シノノ。あの部屋なのだが、設備の他にこれ見よがしに特殊な鉱石が置いてあった。あれがなければわしでも解析は出来なかつただろう。あれこそがISの核となる物で間違いないな？」

「時空石だね。うくん、迂闊だったなあ。まああれの精製方法は私しか知らないから量産は無理でしょう？」

「そこはまた長い研究となるだろうな。しかしその歳で凄まじいものを生み出したものだ。だがこの力、元は兵器ではないな？」

「どうやらこの短時間で解析してみせたのは環境もあつたらしい」

だがそれよりもエイフマン教授は的確にISが元は兵器ではないという点を言い当ててきた

「んー、どうしてそう思ったのかな？」

「元から兵器として設計したのであればより洗練されたデザインとなる。武装として転用しても精々がデブリを排除する為の物だろう。わしは兵器であるモビルスーツを開発していたが、それとは違う理念を感じた。少し調べたがISコアにはそれぞれに自我のような物を持たせてある。普通の兵器にはそのような機能はあまり必要ではない。シドウ君が語っていたが、ISとは元はミス・シノノ自身が宇宙開発の為に開発したのではないかね？」

「……分かるの？」

「少なくとも兵器としてのISは何処か歪なのだよ。元は違う目的を持っていたが何らかの理由によりその在り方を歪められるという事は研究開発を続けていけばまある。わしの作っていたモビルスーツとして当初は作業用だったのだ」

ワークローダーと呼ばれる作業用の機械がEカーボンの登場により兵器として有用になった、西暦世界でモビルスーツが主力兵器となった理由だ

エイフマン教授はアニメ本編では登場時からモビルスーツの開発者であり、その過去の設定は少ない

もしかすると教授にも似たような過去があるのかもしれない

「だが本来の目的に沿って生み出されたISは何処まで行けるのか。広い宇宙を旅するのに独りでは寂しすぎる。ISに擬似的な自我を持たせているのはISとは兵器でも道具でもなく、共に宇宙を進むパートナーとして設計したのだろう。わしは兵器を作る事に疑問を抱かなかつた。しかしミス・シノノはまだ世界に抗おうとしている。その歳でな。その事をわしは同じ技術者として心から尊敬しよう」

「お爺ちゃん！」

「ぐふっ!？」

「教授!？」

「束様!？」

次の瞬間、篠ノ之博士がエイフマン教授に抱きつき、鳩尾に頭突きを喰らう形となったエイフマン教授が苦悶の声をあげる

更には篠ノ之博士の勢いに負けて体勢を崩し、床に腰を打ち付けたエイフマン教授を慌てて助け起こしたのだが、篠ノ之博士はしがみついたままだ

「うわあああああんっ!!私の、私の想いを全部理解してくれた人なんて、初めてだよ!もうお爺ちゃんが私のお爺ちゃんて良いよ!今日からお爺ちゃんの孫になる!」

「ぐぬぬ、腰が……」

「教授、大丈夫ですか?」

「こんな束様、初めて見ました……」

泣きながら喜んでいる篠ノ之博士という珍しい光景が広がっているが腰を痛めたらしいエイフマン教授を頑張つて助けたり、クロエが篠ノ之博士を落ち着かせようとしたり、途端に船内が混沌とした状況になった

だが世界からISの力の部分しか認められなかつた篠ノ之博士の事を一端でも理解出来るエイフマン教授という存在は博士にも良い影響を与えてくれるだろう

尤も、目的地までの残りの一時間をずっと篠ノ之博士を宥める事に

費やす事になるとは思わなかったが

◆ 織斑千冬がバスを降りて海で見付けたのは以前に束から教えられた宇宙船兼航空機兼水上船という色々な機能を盛り込まれた船であるノッセルだった

別行動と伝えられ、ノッセルが無くなっていた事からこれを使って移動していたのは理解出来る、急用というのも康太の事を知っているから漂流物絡みの事だろうと予測は出来ていた、だが目の前で他人に一切の興味を持たない親友の束がとて、それこそ肉親に向けるかのような親しみを持って接している老人に関しては全く予想が出来ていなかった

「束、この人は誰なんだ？」

「レイフ・エイフマン教授だよ。私のお爺ちゃん！」

さてこの天災はいつから自分の祖父の事を認識出来なくなったのだろうか、そう千冬が考えていると事情を知っていそうな康太が来る「教授、もうちよつと頑張つて下さい。宿には温泉があるらしいので湯治が出来ますよ」

「ぐつ、よもや此処まで響くとはな。わしも老いたか」

が、腰を痛めているらしい件の老人に肩を貸して宿まで向かっているとところだった、流石に老体に無理をさせるつもりは千冬にはなかった

ならば他に誰か居ないかと思渡し、クロエに視線を合わせる

◆ その後、クロエから無事に事情を聞き出す事に成功したのであった

取り敢えず旅館の女将さんに事情を説明してエイフマン教授を温泉に連れていった後、オレ達もIS学園の生徒なので一度クラスに合流した

色々な説明事項があったり、旅館の女将さんに改めて挨拶したりだそして今日は夕方まで自由時間という事もあり早速海で遊ぼうという事になった

あとエイフマン教授はまだ温泉である、服は何故かアニメ本編で教

授が着ていた物がエウクレイデスの中に幾つかあったので着替えには困らない、今はゆつくりと休んで貰おう

IS学園の生徒達もそれぞれ水着に着替えて砂浜に来ている、オレもこの間購入した水着に着替えているが、さてこれからどうするかな
気ままに海の中を泳ぐか、久しぶりに来た海にオレは手持ちぶさただった

「康太、向こうでビーチバレーやるっていうから一緒に行こうぜ」

「ん？ああ、分かった。今行く」

だが一夏に呼ばれてそちらに行くと専用機持ちの面々が集まっていた

三対三で別れてやっているらしい、バレー自体あまりやった事はないが、こういうのはノリだ

「来たわね康太！いつも訓練で負けてばっかだけどこれなら負けないわよー！」

「そうですね。たまには勝たせて貰いますわ」

「お前らな……」

そして砂浜に即席で描かれたコートには既に鈴とセシリアが居てオレを待っていた、一夏を見れば苦笑いしながら手を合わせている事から知ってたな

まあいいや、少し相手しておこう、経験少ないから上手く出来ないだろうがたまには二人に花を持たせるのも良いだろう

という訳で一夏と一秋を巻き込んで男三人でチームを組み、鈴とセシリアは適当にその場に居たシャルロットを入れた三人で組んで勝負となった

なつたのだが、展開は一方的である

「受け止めましたわー！」

「上げるよ、鈴！」

「任せて！喰らいなさい康太！」

「お前オレばっか狙うの止めろよ!？」

こうして執拗に鈴から狙われるのである、どうやら日頃の訓練で負け続けている事への仕返しらしい、あまり一夏と一秋もオレと技量は

大差ないがオレだけ狙われてるのはそういう事だろう

「ふふん、その程度かしら？」

「くそ、小さいくせによく跳ねる」

バレエって身長高い程に有利なスポーツだったと思うんだが鈴はそんな事関係ないとばかりにジャンプ力を駆使してスパイクを打ち込んでくる

「けど、一部は跳ねてないよな」

「それな」

「コロス」

が、不用意な発言をした一夏と一秋へとヘイトが向いた途端にオレにボールが飛んでくる事はなくなった

巻き込まれないよう可能な限り息を殺して嵐が過ぎ去るのを待つ、

残ったのは顔面レシーブをして倒れる男が二人だけだ

「これは一体何があったんだ？」

「アホが二名、口滑らせて倒れただけです、織斑先生」

と、そこに織斑教諭がやってきて目の前の惨状に困惑した声を発した

「成る程、おおかた一夏の辺りが原因だろう。適当な場所に運んでおくといいいい」

「了解です」

という訳で二人を適当なパラソル下に引き摺っていく

だが運んだ後で二人を気絶させた当の本人はどこから持ってきたのかスコップで砂を掛けていた、頭は出ているから砂風呂みたいになっっている

「ふふふ、これで起きた時が楽しみね」

「これ本当に周りの助けがないと抜け出せないからなあ」

目覚めたら体が動かかせないとかパニックになるだろうが口は災いの元という言葉もあるように今回は一夏達の自業自得なので放っておくでしょう

とはいえビーチバレエの人数が足りなくなったのでオレは端で見学に回る、織斑教諭と一緒に篠ノ之博士と山田先生が来たので教師

チーム+αで組んでビーチバレーを再開したようだしそれを眺める

そして普段は研究室に籠っていて全く予想出来なかった事だが篠ノ之博士の動きが凄い、体を動かすのが得意だと分かる織斑教諭に劣らない動きでボールを捌いている

「さつきまでオレ達を圧倒していた鈴、セシリア、シャルロットの三人が手も足も出ないとは思わなかった

「うっ……あれ？俺、何で寝てるんだっけ？」

「あー、頭がガンガンする……」

「おっと、意外と早く目覚めたな、二人共」

そんな試合を眺めていると一夏と一秋が目を覚ました、どうやら衝撃で記憶が飛んでいるようだ

「あれ、何で砂に埋まって……抜け出せねえ!？」

「それ鈴が埋めたんだよ。理由は覚えてるか？」

「えっ？あっ……ヤベエ……」

「という訳で助けたらオレまで巻き込まれそうなんだ。自力で抜け出してくれ」

一応片方の手の付近だけ砂を少し崩しておく、頑張れば自力で抜け出せるようになるだろう

後ろの方で二人が何か言っているのを無視してオレはその場を離れた、が何をしようか……適当に泳ぐかな

「お暇ですか？」

「ん？ああ、クロエか。まあな、折角の海だから少しは泳いでいこうかと思っただけ。さつきので体に砂もついたし」

シャワーで洗い流すにしても海に入ってからだと二度手間だしそのまま入ろうか、そう考えていたらクロエが近くに來ていた

「そういうクロエは良いのか？篠ノ之博士とかあつちで盛大に砂煙上げてるけど」

篠ノ之博士がスパイク打つと地面に当たった時にかなりの勢いなのか砂煙が大きく舞うのだ

セシリアとかが受けた時でも威力が強すぎて受け止めきれない、普段が研究ばかりではあるが篠ノ之博士の身体能力の高さが伺え

る

「束様は織斑先生と一緒に遊べて楽しそうなので邪魔をしてはいけな
いと思ひまして。コウタさんは今から泳ぐのですか？」

「そのつもりだぞ。クロエも泳ぐか？」

「そう、ですね。あの、コウタさん。実は私、泳ぐのが初めてなんです」
「そうなのか？」

「はい。普段はこうして外に出る事も少なかったので……なので泳ぎ
方のコツとか教えて貰ってもよろしいですか？」

「それくらいならお安いご用だ。とはいってもオレも人並み程度だけ
どな」

25メートルプールを泳ぎきる事なら簡単だが何度も往復出来る
程に得意という訳ではない、それでも初心者クロエに教えるくらい
は出来る

海は波があるが塩分が高いからプールよりな浮きやすい、流石にテ
レビで見た死海のような浮力はないが気休め程度にはなるだろう

「それではお願いします」

そう言つてクロエは海に入る為に上に羽織っていたパーカーを脱
いだ

そして露になるのは黒のフレアビキニに身を包んだクロエの素肌、
普段はあまり肌を見せる事はないが白色人種特有の白い肌が黒の水
着と対になるようでより強調されている

「あの、似合ってるでしょうか？」

「あ、ああ……何と言うか、綺麗だ……」

「そ、そうですか……」

つい素直な感想を述べてしまふが仕方のない事だと思ふ、それだけ
クロエが魅力的に見えたのだから

だからといって顔を赤らめて俯かないで欲しい、こつちまで余計に
恥ずかしくなってくる

「と、取り敢えず海に入るか！」

「そ、そうですね！時間は有限です！」

そのまま無言で居るのも気まずいので無理矢理にでも流れを変え

る、一先ずは足がつつたりしないようによく準備運動をしてから海に入る

泳ぎは初心者という事なのでまずは水に慣れるところから、プールとかなら水中で目を開けたりと練習するのだが海水だと難易度高いか

なのでゴーグルをと思い持つてるか確認したのだが

「私は黒鍵のお陰で目を開けずとも周囲の様子を目視と同じ感覚で知覚出来ますよ」

「やっぱ便利だな、黒鍵」

という訳でゴーグル要らずとなった、黒鍵は生体同期型、つまりはクロエの肉体の一部となっているのでクロエがゴーグル等を必要とする必要もないだろう

なので初めから泳ぐ練習に入れる、まずは水に浮かぶ事からだ

水面が胸の辺りになるくらいの水深の場所で練習を始める事にした

「体を真っ直ぐにして力を抜いておけば自然に浮けるぞ。こんな感じだ」

試しに脱力して水面に浮かんでみる、少ししてから顔を上げクロエにも同じように促してみると、まだ力が抜けていないのか足の方から沈んでいく

そして足がついた辺りで立ち上がった、少し落ち込んだ様子だ

「初めは誰でもそんなもんだって。気にするな」

「はい……」

「まだ不安そうだったから手を繋いでおくか？何かあれば直ぐに助けられるって分かっていれば力も抜けるさ」

という訳でついでにばた足の練習を含めてクロエと両手を繋いで浮かぶ練習をする

クロエはコツを掴むのが上手いのか浮くのは直ぐに出来た、後はばた足やら手で水を掻いたりすれば取り敢えず前には進める

そんな訳でオレが教えられる泳ぎ方であるクロールと平泳ぎでの息継ぎ方法を教えたなら直ぐに習得し一人でも十分に泳げるように

なっていた

「やっぱりクロエは運動神経も良いんだな」

「コウタさんが教えてくれたお陰です。でも水の中で泳ぐ事がこんな気持ちのいい事だとは知りませんでした」

「そうだな。此処の海は綺麗だし、海の中も色々な光景が広がってる。プールとはまた違った自然の魅力がある。けどプールはプールで色々な種類があるからな。流れるプールに、波の出るプール、ちよつとしたスリムの楽しめるウォータースライダーとかな」

「楽しそうですね。コウタさん、夏休みになったら一緒にプールでも泳ぎませんか？」

「良いな、それ。じゃあ夏休みの予定に一つ追加だ」

この臨海学校が終われば後は期末試験の後でIS学園も夏休みに入る、少し早いかもしれないがプールに行くくらいは普通だろう

他には夏の風物詩と言えば山でキャンプとかだが、そういうえらビットフット社でも色々と予定があつた気がする

プールは一日あれば行けるから確実にして夏休みに入る前に一度確実に予定を見直しておいた方が良くもな

「コウタさん、何だか潮の流れが変です」

「ん？そう言えば、波が高くなってる？」

そんな夏休みの事を考えているとクロエからの指摘で周囲の波が高くなっているのに気付く、それに流れも速くなっているし、太陽の方向から見ると陸から離れるような流れだ

「あ、コウ、タさ、ん!?!」

「クロエ!」

次の瞬間、大きな波が来てクロエがそれに飲み込まれる、オレは急いでその行方を追い、水中でもがくクロエの姿を見付けて水の中を進む

うねるような水流の中、なんとかクロエを抱き留めたオレは必死に水を掻いて水面を目指す

「ぶはっ!?大丈夫か、クロエ!?!」

「けほっ、けほっ、コウタさん……」

「大丈夫だ。落ち着いて対処すれば何とかなる」

水流は強く岸からどんどん遠ざかるようにオレ達を押し流していく、それに対してオレは敢えて流れに逆らわず太陽の位置から割り出した陸地の海岸線とは並行方向に泳ぐ

するとそこまで幅が広くなかったのか直ぐに流れからは抜け出し、そこからゆつくりと岸に向けて泳ぎだした

「コウタさん、今のは何だったんですか？」

「離岸流だ。海岸に打ち寄せた波が沖合いに戻ろうとする時に起きる事がある」

その流れの速さはオリンピック選手でも抗えない、だがその流れの幅は大きくても三十メートル程度、横に向かって泳いでその流れから抜け出せばそれ以上押し流される事はない

「とはいえ少し流されたな。オレに掴まってる。岸まで泳ぐ」

慣れてきたとはいえクロエは初心者だ、体力も少ない方だからオレが引つ張っていく方が良い、背中から首に手を回してオレにしがみついたクロエを連れて水を掻いていく

岸を目指すのに今度は追い波だから楽だ、ゆつくりでも確実に岸に近付いている

そして流されてから体感で十分くらいだろうか、ようやく足が届きそうな場所まで戻ってこれた

「ふう、此処まで来れば一安心だな」

「ありがとうございます、コウタさん」

「気にするな、当然の事だ」

「それでも助かったのは事実です。それにしても、海にあんな現象があるなんて知りませんでした」

「オレもテレビでたまたま見て知っただけだからな、運が良かった」

夏場が近いからか水難事故特集をやっていたのだ、離岸流についてもそれにあつたから対処出来た

そういった意味では運が良かったと言える

と、海から上がった時に胸元でチェーンが小さく音を立てた、オレが首から下げているドッグタグ、ISであるジェガンの待機形態だ

「あ」

そして思ったのだ、最初からIS展開して飛んでいけば泳ぐ必要なかったじゃん、と

オレはドツグタグを手を持ってクロエに見せる、クロエも首からバシンの待機形態である獅子を模したペンダントを掛けているのでオレと同じように「あ」と呟いている

どうやらオレも焦ってまともな判断が出来ていなかったらしい、簡単な方法があった事に全く気付かなかったという事実には自然とオレもクロエも笑っていた

一頻り笑い終えた後、気を取り直そうとした時、砂浜の方で誰かが声を上げているのが聞こえてくる

「かんちゃんーん！どーこー!?!」

それは狐か何かの着ぐるみ、型の水着らしい物を纏ったのはほんさんだった

だが普段のおっとりした様子からは考えられない程に声に焦りが見えた

「のほんさん、どうかしたのか？」

「あ、しどっち！かんちゃんが、かんちゃんがあ！」

「落ち着いてくれ。そのかんちゃんって子がどうかしたのか？」

その切羽詰まったような様子にオレが声を掛けるとのほんさんは涙目でオレに抱き着いて来た

そんなただならぬ様子に非常事態だと察したオレは意識を切り替える

「うん、実はさつき海で速い流れがあつてね、そこに一緒に居たかんちゃんが巻き込まれたの。私、何も出来なくて……それで、どうしたら良いか分かんなくて、私、私……!」

さつきの離岸流か、どうやらオレとクロエだけでなく他の生徒も巻き込まれていたらしい

「分かった、オレが探してくる。クロエ、のほんさんについてあげてくれ。それと先生達に連絡を」

「分かりました。コウタさんもお気をつけて」

「分かっている。のほほんさん、そのかんちゃんって人の特徴は？」

「えっと、水色の髪で赤い目をした女の子だよ。浮き輪を持ってたら大丈夫だと思うけど、でも遠くに流されていって……」

「分かった、ありがとう。大丈夫だ、浮き輪があるなら溺れたりなんて絶対してない。直ぐに見付けて帰ってくる」

「うん、お願いね、しどっち」

「ああ、任せろ！」

さつきは使わなかったがジェガンを身に纏う、背中には機動性重視で普段使っているI・W・S・P.ではなくスペキュラムストライカーを装備する

「紫藤康太、スペキュラム・ジェガン、出撃^で！」

戦闘ではなく人の命を救う為に、オレは群青の海へと飛翔した

28話 群青2

海上に出たオレはジェガンで演算する、先程の離岸流に巻き込まれた時のデータが待機形態のジェガンにも残っていたので海流の速さから現在位置の予想を立ててその周辺を重点的に搜索する

全長一メートル以下の生命体をセンサーの反応から消していく、浮き輪があるという事から溺れる可能性は限りなく低いが沖合いになれば波は浜辺付近よりも高い、何かの拍子に投げ出される可能性も少なくないのだ

「機動性は上がっている。後は時間との勝負だ」

今のストライク・ジェガンに装備されているのはスペキュラムストライカー、エールストライカーを再設計した物でスラスタの増設、翼下にパイロンや各種ミサイルの装備を可能とした事で全ての性能はエールストライカーを上回っている

今回は速度重視という事で翼下には何も装備していない、その速度を以て現在位置と予想される範囲を搜索する

センサーのみに頼らず自分の目も使って搜索を行う、そうしているとセンサーが海の真っ只中に漂流している浮き輪を見付けカメラで捉えられたそれを拡大表示する、だがそこに探していた人間の姿はない

「まずい、何処だ!？」

大急ぎで浮き輪の周辺まで飛び周囲を見渡す、だがセンサーに捉えられる人間の生体反応は感じられず最悪の事態が頭を過る

まだ諦めるなどそんな考えを振り払う、だが海の中へと沈んでしまったのならば一刻の猶予もない、焦る気持ちをなんとか押さえ付けながらセンサーを稼働させる

それでも見付ける事は出来ない、浮き輪だけが流されて別の場所に居るのではと思った時、一瞬だが海の中に別の色が見えた気がした

センサーには何の反応もない、それでもそこに居るのだと不思議な確信があり、オレはそこまで飛翔すると一度スペキュラムストライカーを外し素体となるジェガンのみで海中に潜る

そして見付けた、のほほんさんの言っていた特徴と一致する少女の姿を

苦しそうにもがいているがまだ生きている証拠だ、シージェガンではないから思ったよりも真っ直ぐ進まないが確実に前進し、しっかりとその少女の手を掴んだ

◆ 「あれ、私……？」

康太が救助した少女、更識簪が目覚めた時、そこは見慣れない和室だった

何故海に居た筈の自分がそこに居るのか、その事に疑問を抱いたが直ぐに思い出した、浮き輪に乗って沖合いに流された事と、そして冷たい海の中で自分へと伸ばされる手を

一瞬だけ見えたその姿、あの機体は確か――

「かんちゃくくん！」

「きやつ!?ほ、本音!？」

「良かった！本当に良かったよ〜！」

しかしそんな思考を打ち切るかのように横から自らの従者でもある少女に抱き付かれた

今は前と違って少し距離を開けてしまっていたのほほんさんこと布仏本音、だが彼女は一方的に距離を開けられても昔と変わらないように自分を心配してくれているのだと簪は感じる

「ごめんね、本音」

「うん、大丈夫だよ。でも本当に良かったよ。しどっちのお陰だね〜」

「そういえば……ねえ、本音。私を助けてくれたのって――」

「救助に向かったのは紫藤で間違いない」

のほほんさんの言葉から自分が見た姿を思い出した簪は確認の意味でその事について聞こうとしたところに第三者の声が聞こえてくる

先程ののほほんさんの事といい、自分が周囲をちゃんと確認していなかった事を思い出した簪は周囲を一度見渡し、そして部屋の入り口

の襖を開けて一年一組の担任である織斑千冬が立っていた

「簡単に説明すると浜辺で遊んでいた紫藤とクロニクルが布仏からお前が沖合いに流されたと説明を受け、クロニクルが私達に知らせに、紫藤が先行して捜索に向かっていた。即座に各専用機持ちや教員部隊を動員して救助活動を行おうとしたところで紫藤からお前を発見したと連絡があった。医師の話では体に問題ない筈だという事だ。何か不調はあるか?」

「いいえ、大丈夫です」

聞かれて思い返すが特に不調は感じられない、少しの疲れはあるがそれだけだ

「それと紫藤だが今は報告書兼反省文の作成をしている。それというのも、お前は救助された直後は意識もはっきりしていたらしい」「え?ならどうして……」

「紫藤がその後で加減を間違えたらしくてな。シールドは張っていたが移動時に掛かったGによって気絶したらしい。緊急時につきISの展開等、その辺りの点は責任を問われないが、その後の対応の仕方がだな……」

「ええ……」

自分が意識を失っていた理由を説明されて簪は微妙な気分になった、なんとも締まらない理由で気絶していたからだ

「だが紫藤の機体ログを見る限りお前の救出はかなりギリギリだった。一分でも遅れていれば危険だっただろう。その点は感謝しておけ」

「はい」

千冬に言われるまでもなく簪はその気だった、最後こそ締まらなかったものの自分の命の恩人である事は間違いない

なので直接礼を言おうと思いい、伝える事は全て伝えたとばかりに千冬は部屋を出ていった

「ところで本音、今は何時なの?」

「えつとね、今夕方の六時回ったくらいだよ。もうちよつとでご飯だね」

ならばその前後で声を掛けよう、簪はそう決心したのであった

◆ 「ふむ、まあこれで良いだろう」

「後は機体のログを渡しておきますよ。映像もあるのでそれを参照して下さい」

救助活動を行った後、オレは織斑教諭から言われた報告書の作成を行い夕食の少し前の時間に完成させた

それを織斑教諭に提出しようとしたら何処かへ向かったらしく、少し待っていたら戻ってきたのでそのまま提出した訳である

「分かった。それにしても、ISのセンサーよりも先に直感で位置を捉えた、か」

「本当にそうとしか言い様のない感覚でしたからね。自分でも分からないですし、もしかしたらニュータイプとして覚醒したりするんですかね?」

「人類進化の可能性か。束の奴から聞いた時は眉唾物だと思っていたが別の世界の住人であるお前が此処に居るんだ。そのような可能性もまたあるのかもしれないな」

あの時に感じた感覚、あれは不思議なものだった

それこそまるでニュータイプのような、本当に覚醒する事が出来るのだとしても、こんな短時間に覚醒したとは思えないが今度サイコミユ兵器でも試してみよう、まともに動けばニュータイプとして覚醒した証拠になるからな

「まあその辺りはお前達の領分だ、私は関与しない。後少しで夕食の時間になる。早めに行動して損はないぞ」

「分かりました。それとエイフマン教授の分も手配してくれた事、感謝します」

「確かに急ではあったが、その立場を考えると放り投げる訳にもいかないからな。とはいえISコアを作製出来る二人目の人物、おまけに束のように人間性が破綻している訳でもなく良識的な人物ときている。このような情報が外に漏れてみる、間違いない世界は荒れるぞ。それこそ戦争を起こす事も躊躇わんだろう」

「ですね。教授が表舞台に出るにしてもまだ先の話になると思いますよ」

「そう願いたいものだな。よし、もう行け。時間だ」
「はい」

という訳で部屋から出て夕食を食べる為に宴会場となっている大部屋に向かう

既に多くの生徒が集まっているようで、オレも自分の席に、いつもの面々が集まっている辺りに座った

「お、康太、報告書は終わったのか？」

「まあな。一応は合格だとき」

「アンタもよくよくトラブルに巻き込まれるわよね。でも無事に救助出来て良かったじゃない」

「そうですね、その生徒も無事に見付かって何よりですわ」

「ボク達にも召集が掛かった途端に発見の報告が来たからね。状況的にギリギリだって聞いてるよ」

「うむ、こういったイベントは皆が楽しんでこそと教わった。その者も感謝しているだろう」

「そういえば、その相手とは話したのか？」

席に着くなり口々に言葉を掛けてくる面々、オレも無事に救助出来たというのは喜ばしい事だ

「オレも織斑先生から聞いたんだけど、先程目覚めたらしい。まあ、その気を失っていた原因がオレな訳だが……」

「康太がそんなミスやらかすなんて珍しいよな」

「うるさいぞ、一夏。お前なら救助したら速攻で瞬時加速するだろう」

「いやそんな事は！しない、ぞ……」

「声が震えてるぞ、一夏」

と、アホな会話をしていると時間となり織斑教諭等も大部屋にやって来た

最後の方に篠ノ之博士とエイフマン教授も続く、それと篠ノ之博士に同伴してクロエも一緒だ

「康太さん、あのお年寄りの方はどなたなのでしょう？お昼頃に康太

さんが肩を貸していたところは見ていたのですが、何も聞いておりませんわよ」

「エイフマン教授の事か？詳しくは言えないがラビットフット社の技術者だ。今日合流した」

「ああ、それで康太達は最初別行動だったんだね。でも篠ノ之博士も一緒だったって事は、かなり優秀な人だよな？IS業界でそんな人、聞いた事ないけどな？」

「私も本国に居た頃に世界的に有名な技術者の名前と顔は覚えさせられたけど、そんな名前の人なんて聞いた事がないわよ」

「その辺りも含めて、必要な話すさ。今はまだ、本当に色々あつて話せないんだ」

初耳というのは当然だ、一体誰が異世界から来た技術者だと思うのだ

そしてその能力、ISコアの明確な作製方法を知る人物など、簡単に口外すればどのような反応が起きるかは明白、特に各国に所属している形となるセシリア、シャルロット、鈴にも話せない

だがそこに丁度織斑教諭が全体の注意を集めた事で切り抜けられた

「さて、全員揃っているな。食事の前だが一つ追加で説明事項がある。皆も気になっていると思うが此方のご老人についてだ。教授、自己紹介をお願いします」

「うむ。お初お目に掛かる。わしの名はレイフ・エイフマンという。ラビットフット社に所属する技術者だ。先程、織斑教諭とも話し合いたまにだがISに関する授業を受け持つ事となった。よろしく頼む」

が、聞かされた内容はオレでも初耳の内容だった、確かにエイフマン教授は名前の通り教鞭を取る事も出来る、ベリー・カタギリやスメラギ・李・ノリエガことリーサ・クジヨウも彼の教え子だからだ

とはいえまさか今日の内に関わったばかりのISでの教鞭を取るとは思わなかった

そして此処までなら篠ノ之博士も認める技術者が学園で授業を行う、それだけで済んだ

しかし次の瞬間、その予想は吹っ飛んだ

「むふふ、お爺ちゃんはスゴいよく！なんと、この束さん以外にISコアを製造出来る数少ない人なのです！」

「ぶっ!?博士!?!」

選りに選って一番秘匿しなければならぬ情報を篠ノ之博士が暴露してしまった

これは予定になかった行動なのだろう、織斑教諭でさえ驚いた表情で篠ノ之博士を見ている

そしてISコアは篠ノ之博士にしか製造出来ない、そんな常識を打ち砕かれた他の人間の反応など分かりきっている

『えええええええっ!?!』

途端に大部屋の中に事情を知らない大多数の人間の声が響いた

その大音量に耳を塞いだ後、その大音量にも負けないレベルの織斑教諭の一喝が響く

「静かにしろ、馬鹿者共が!!」

その声により一度は収まる生徒達の声、そこに静かに織斑教諭が言葉が続けた

「色々と気になるがあるだろうが質問は受け付けん。余計な真似も許さん。分かったな」

『は、はい……』

「宜しい、では説明事項は以上だ。ゆっくり、そして静かに食事を摂るとしよう」

そう言って織斑教諭やエイフマン教授、篠ノ之博士は自分の席に着いた

そうして夕食が始まった訳だが、エイフマン教授に余計な真似はしなければ良いだけで事情を知っている人間に声を掛けてはならないとは言われていない

「どういう事ですか、康太さん!?!」

「そうよ、本当にISコアの製造出来る技術者なの!?!」

「道理で詳しく話せない訳だよね……」

「まあこうなるよな。ハア……」

結局、その後は国家代表候補生でもある面々から質問責めに遭うのであった

◆ 「ふう、疲れた……」

怒濤の如く続いた質問責めにある程度答えた後、オレは一人入浴道具を持って温泉へと向かっていった

オレも逃げようとしたさ、だが国に報告する義務もある三人の圧力からは逃れる事が出来なかった

取り敢えず自分は関係ないからとそそくさと逃げていった一夏は後で締める、まあ関係ないのは事実なのだが、ムカつくから八つ当たりだ

「それにしても、篠ノ之博士も何を考えているのやら……」

いや、あれは何も考えてなかったのか？何でも良いから誰かに自慢したかった子供みたいな雰囲気を感じたぞ

どれだけ嬉しかったのやら、分からないが明日以降、確実に世界が荒れるな

取り敢えず、この臨海学校までの間はゆっくりするとしよう、その為にも今から温泉だ

「あ、あのー！」

「ん？」

だが背後から声を掛けられた為に足を止め振り返る、そこに居たのは動物みたいなパジャマを着たのほほんさんと水色の髪の毛、昼にオレが助けた少女が居た

「確か、更識簪、だったか？体調はもう良いのか？」

「えっ？どうして私の名前を？」

「学園に在籍している代表候補生並びに各専用機持ちの情報は入学前に叩き込まれたからな」

「そ、そうなんだ……」

「それと、昼間はすまなかった。生身にも関わらず、無茶な機動をしてみました」

「それは、気にしてない。私を助ける為だったから」

「そうか。それなら良いんだが……」

「うん……………」

「……………」

……気まずい、気にしていとは言っているが、ならばどのような用件で此処まで来たのか分からない

向こうも無言になったし、どう切り出せば良いのやら

「かんちゃくん、しどっちに伝えたいことあるんだよね〜?」

「本音……うん、そうだね。あの、紫藤くん。遅くなったけど、助けてくれてありがとう!」

「えっ?あ、うん、どういたしまして」

「う、うん、それだけ伝えたかったから。じゃあね、助けてくれて本当にありがとう」

「分かった」

「しどっち、おやすみ〜!また明日ね〜!」

「ああ、のほほんさんもまた明日」

それだけ伝えると更識簪はのほほんさんと一緒に去っていった、どうやら本当にお礼を伝えただけだったらしい

「さて、温泉に行くか」

そして用件が終わったのでオレもまた温泉に向かい廊下を進んでいくのであった



康太が温泉へと向かっている頃、千冬と束が泊まる予定の部屋には一年生の簪を除く各専用機持ちと箒が集められていた

唐突な呼び出しに何事かと身構えていた少女達だが、千冬は楽しんでと言つて冷蔵庫から飲み物を取り出して各自に配る

何が目的かは分からないが緊張から口の中が乾いていた全員がその飲み物に口をつけたのを見て千冬がニヤリと笑う

「よし、飲んだな」

その言葉を聞いて何か入っていたのかと警戒するが千冬はなに食わぬ顔で再び冷蔵庫を開けると中から缶ビールを取り出し、内片方を束へと渡した

そしてプシュツという音と共にプルタブを開けると勢いよくその缶ビールを呷った

「ふう、美味しい！」

「ちーちゃんとお酒なんて久し振りだね！それに、私もこんなの用意して来たよー！」

「ほう、中々に上物じゃないか。今から楽しみだな」

あつという間に缶ビールを一本ずつ飲み干した千冬と束、更に何処に仕舞っていたのか束が日本酒の瓶を取り出したのを見て他の全員は呆けた顔をしていた

「む、どうしたお前達？」

「いえ……その、お酒を……」

「私だって酒くらい飲むさ。それに今は勤務時間外だ、問題はない。それに口止め料も払っているだろう？」

その指摘に全員が手元にある飲み物を見て「あつ」と声をあげる
だがそんな普段とは違う千冬の様子に一先ずは緊張の解けた面々であった

「さて、こうして読んだ理由だが別に深い意味はない。単なる飲み会だ」

「恋バナとかしようぜ！という訳で箒ちゃんから！」

「何故私からなのだ、姉さん!？」

「そりゃ私が知りたいから！ほれほれ、箒ちゃんはいっくんの何処に惚れたのかなあ？」

グラスに氷と日本酒を入れて飲みつつ束はニヤニヤと笑みを浮かべながら箒を弄る

「私は別に、一夏の事など……」

「そう言うが周囲からはバレバレだぞ。ふむ、なら次は鈴だな」

「アタシ!?ア、アタシはほら、一夏とは腐れ縁だけで……」

「私は誰も一夏などとは言っていないぞ？」

「なあっ!？」

してやられた形になった鈴だが既に千冬の興味は別に移っている、その視線の先に居るのはシャルロットだ

「で、デユノアは一夏の何処に惚れたんだ？」

「えっと、ボクは……私は、その、優しいところ……です」

顔を赤くしながらも好意を抱いている事を隠さずに話すシャルロット、その反応に千冬からの質問を誤魔化していた箒と鈴の二人は戦慄する

「ほう、だがアイツは誰にでも優しいぞ？」

「そうですね、そこはちょっと悔しいかなあ、アハハハハ……」

「うーん、これはしやるんが一步リードかなあ。頑張らないとね、箒ちゃん！」

「クツ、精進します……」

「ぐぬぬ、本当の敵はシャルロットみたいね……」

一夏とは一番付き合いの短い相手、だが幼馴染ではない故に強敵となり得る存在に危機感を抱く二人、そしてそれを煽る束、場がピリピリしてきた中で次に千冬が狙ったのはラウラだ

「それで次はラウラだな。お前は一秋と付き合っているが、何処がそんなに気に入ったんだ？」

「それは、その……まずは強いところです」

「いや、弱いだらう。強さでいけば一年では紫藤がダントツだぞ？」

「そうですが、一秋の強さは心が強いです。それに、あの、私にあれだけの好意を向けてくれるなど……兵士だった私には縁のない事だと、下らない事だと思っていたのですが、それでもと……」

「成る程、お前が義理の妹になる日も近そうだな」

この中で一人だけ恋人として相手が居るラウラ、その様子に周囲の恋する乙女達は羨望の目で見つめる

そしてまずは千冬の弟達の様子を聞き終えた訳であるが、そんな中に入っていない面々も居る

「オルコットは居ないのか、気になる相手が」

「私は今は居ませんわね。三人の中でしたら康太さんになりますが、ライバルであって恋愛対象ではありませんもの」

「そうか。行き遅れなければ良いな」

「どういう意味ですの!？」

「んー、高飛車で、家の格も高く、おまけにエリートだから相手が尻込みするって意味だと思うよ」

「そ、その程度で尻込みする相手など此方から願い下げですわ!」

「行き遅れ確定だな。将来酒を奢ってやるぞ」

「そ、そんなの認めませんわ!絶対、絶対に素敵な殿方を射止めてみせます!」

なお自分も行き遅れになる可能性は千冬の頭から抜け落ちていた。東の方はそもそも自分に釣り合う男が居るわけないと確信している。結婚する気はさらさらない。

そしてセシリアが騒ぎ立てる中、順番的に最後の一人となったクロエに視線が集中する。

「最後はお楽しみ、くーちゃんの番だね。まあ誰が好きなのかは知ってるけどさ!」

「まあ紫藤だな。普段の様子を見ているも分かる」

クロエの好きな相手、それは既に全員の知るところとなっていた。

なので千冬言葉にも全員が頷く。

「それで、クロニクルはアイツの何処が好きなんだ?」

「……言わなければダメですか?」

「ダメだ、全員言ったからな、一人だけ逃げるのは許さん」

「分かりました」

千冬は酔ってきたのか多少言動が怪しくなっていた、そしてそんな絡み方をしてくる千冬の様子に観念してクロエは口を開く、その表情は無表情に見えるがしっかりと頬が赤くなっていた。

「その、まず雰囲気が好きです。普段は緩んだ雰囲気ですが戦闘中の凜とした雰囲気とのギャップが好きです」

「ほう」

「そして優しいところが好きです。色々ところで私を助けてくれます」

「ふむ」

「それと、あの大きな手が好きです。頭を撫でて貰った時、とても落ち着きます」

「成る程な」

「あと、匂いが好きです。たまに、その、コウタさん留守中にベッドで転がったりします」

「……………うん？」

「それから、声が好きです。時々、その喉笛を食べたいと思ってしまうます」

「…………………………」

何やら猟奇的な方に向かっていくクロエの思いに千冬がどんどん言葉を無くしていく

そして周りで聞いていた面々もまた引いている

その後もちよつとそれはどうなんだ、と思うようなクロエの『好き』が本人から語られていくがクロエは止まらない

そうして全員のSAN値がガリガリと削られていき、そろそろ誰か止めろという雰囲気になった時の事だ

「……………でも、一番好きなのは自分の夢に向かって進むコウタさんの姿なんです。コウタさんの事は好きですけど、恋愛でコウタさんの足を引っ張りたくないんです。だから私は近くでコウタさんを支えつつ、あの人を想っているだけで良いんです」

最後に締めるように語られたクロエの一途な思い、がそれまでに語られた狂愛とも言える数々の思いに一人を除いて素直に受け止める事が出来ずにいた

「うんうん、ならくーちゃんがこーくと結ばれる為にも早く宇宙に出ないとね！くーちゃんの想いを初めて聞けたし、心機一転私も頑張っちゃうよ！」

「ありがとうございます、束様。勿論、束様の事も尊敬しています」

「まあ、お前達が良いのなら私は何も関与しないさ。だが法に触れるような真似はしてくれないなよっ」

周りを置いて盛り上がる主従の二人、その二人を眺めながら千冬はこの場に居ない康太の冥福を祈るのであった

29話 KATANA

IS学園の臨海学校二日目、今日からは実際にISを用いての実習が行われる事となる

学園のアリーナとは違い広い空間を使えるというだけに学園では行えない試験も可能だ、それが朝から夜まで丸一日も予定されているそんな中でオレは自分の予定していた装備の試験をする為に砂浜にコンテナを運んでいた

「さて、残りは一つか」

幾つもの装備、ジエガンは汎用性の高い機体だけにテストでの評価に持ってこいの機体だ、それだけに数も多い

おまけに今回はデユノア社とも共同で行うテストがある、休む暇はない

此処まで来る時に乗ってきたノツセルの甲板に載せられたコンテナ、その最後の一つを運び終えたところで一休みする

「ふう、終わった。後はコイツを渡すだけか」

目の前にある一つのコンテナ、その中身は篠ノ之博士が生み出した一機のISだ

今日の日の為に博士が造ったのだ、その性能もまた現行のどの機体よりも優れている

そしてオレが博士に教えた結果装備された特殊兵器も同様に積まれている、それで何を斬るか、そこだけは間違つて欲しくないものだ
「コウタさん、そろそろ時間です」

「分かった、こつちも今終わったところだ」

コンテナを眺めているとクロエがオレの事を呼びに来た、一度全体で集まって織斑教諭からの説明事項があるからだ

なのでオレもクロエと一緒に皆が集まっている場所に向かう、何故かオレとクロエと一緒に居るところを見て専用機持ちの女性陣と箒の表情が引きつっていたが何故だろうか？

まあそれは兎も角として、全員が集まって色々と説明された後、専用機持ちと一般生徒と別れて試験が行われる事となる

「ああ、篠ノ之。お前は今日から専用機持ちだったな」

「その通り！箒ちゃんに頼まれてた物、ちゃんと出来てるよ！こーくん、ちよつとよろしく！」

「了解です。例の刀も一緒に、ですな」

篠ノ之博士に言われてオレはジェガンを展開、先程のISを収めていたコンテナを運んでくる

そうしてコンテナが開かれ、中から現れたのは鮮やかな赤を基調とした機体だった

「じゃじゃくん！これぞ箒ちゃん専用機こと紅椿！全スペックが現行のISを上回る束さんお手製のISなんだよ！」

「これが……」

「近接戦闘主体の万能型に仕上げているから箒ちゃんとの相性も悪くない筈だよ。ちよつとこーくんの話にあった近接武装を幾つか追加したけど、要らないなら外せるよ？」

「康太が？」

篠ノ之博士の言う通り、ガンダムシリーズで近接戦闘特化の機体の武装を聞かれたから幾つか教えてある

例えば爪先にビームブレードを展開する機構やら、長さの調整が可能で柄を連結出来るビームサーベルやら、掌に仕込んだ短射程のビーム砲とか、折り畳み式のナイフとか、SEED系の技術を基本にしてみた

今は全て積んであるが、それとは別でもう一つの武装がある、それだけはオレが別のケースに収めて持っていた

「まあ外せるとは言っても、必要ないと思えば紅椿が自動で外すし、外しても必要と思えばまた後で展開するから何か手間を加えるって事はないんだけどね。それが紅椿の真骨頂、展開装甲なんだよ！」

「展開装甲？」

「うん、それ自体が形を変えて幾つもの役割をする装甲だよ。白式の雪片式型に組み込んでただけど、紅椿は更にその発展型で攻撃・防御・機動の全てに対応するんだ。分かり易く言えば武器にもなるし、装甲としてそのまま使えるし、スラスターに変形するって訳だね。そ

の時の状況に応じてその場で機体特性を変化させる事が出来る万能機、世界中で研究してるけどまだ机上の空論となっている第四世代機、それがこの紅椿なんだよ！」

篠ノ之博士のその言葉に聞いていた全員から、特に各国が必死になつて第三世代機を開発し、それを受領している専用機持ち達の間には動揺が走る

「第四世代……そんな物が」

「まあ、この方式だと装甲を破壊されたら機能が制限されるって事でもあるから、諸刃の剣とも言えるな。まあ、装甲を破壊出来るならば、と付くが」

シヨックを受けた様子のセシリアに一応のフォローはしておくが、その装甲を抜けるとするならばビーム兵器しかないから難しいところだ

それとオレが先程言った武装は基本的に予備であり、メインとなる武装は両腰にある日本刀型のブレードだ

そこに加える三本目の刀をオレが持っている

「まず武装ね。右手が雨月、左手が空裂だよ。データ送るから見てね」

「これは……！」

「見たね。じゃあテストだよ！……こーくん、軽く相手して！」

「了解！」

さて、此処からはオレの出番でもある

事前に伝えられていた事、それはこの紅椿の相手になる事だ

篠ノ之博士が造った万能型のISと、I. W. S. P. という万能型のストライカーパックを装備したオレのストライク・ジェガンの比較試験だ

即座に飛翔、左手に装備したコンバインド・シールドに格納されているガトリング砲を向け発砲する

分間6000発という圧倒的な連射力から放たれる銃弾の雨、突発的な奇襲になるが筈は反応して上空に逃れる

「康太、いきなり攻撃とは卑怯ではないか!？」

「前に言った筈だ。力を求めるには代償が要ると。その力、この先に

も狙われる。ならばこの程度、凌いでみせろ！」

右手をライフルから対艦刀に持ち変え、オレは紅椿との空中戦へと突入する

◆ その中でオレはふと、あの日の事を思い出していた

箒が放課後に相談があると言って屋上に呼び出されたのは、オレがクロエと水着を買いに行こうとした日の前日だった

オレがラビットフット社と、篠ノ之博士と関わりがあると分かってからは避けられていたのだが、此処に来て相談というのに違和感を感じながらもオレは指定された通りに一人で放課後に屋上に来た

そこには既に箒が待っており、此方に背を向けて立っていた

「来てくれたのか」

「違和感が拭えないからな。それで、わざわざ呼び出して相談ってのは何なんだ？」

「ああ、どうしても聞いておきたい事があったのだ。お前と姉さんについての事だ」

「オレと博士と、か」

「そうだ。知っての通り、姉さんは世界中から追われ、隠れていた。そんな姉さんと、どうやって知り合ったのだ？」

「オレがI Sを起動させた後、向こうから接触があったんだ。そのまま何も分からないオレを色々と面倒を見てくれた。詳しい事はすまないが機密事項でな。だが一言で言うのなら、オレにとってあの人は恩人だ」

それは偽りのない事実だ、何故オレがこの世界に来たのか、右も左も分からない中で拾い、この世界での戸籍をくれた

一人ではどうしようもない事態を救ってくれた、それに恩を感じないなんて事は絶対にあり得ない

「そして、またオレに夢を見させてくれた。オレは宇宙に行きたい。篠ノ之博士のように星の海を巡るんじゃないやなくて、地球という揺り籠を出て宇宙に新たな人類の大地を作りたい、そう思ったんだ」

スペースコロニーの建造、月面都市の建設、ガンダムの世界を実現

するという荒唐無稽とも言える夢、それを実現出来るかもしれないという可能性を見せてくれた

「だからオレは篠ノ之博士に従っている。博士の行く道がオレの夢と重なるからだ」

「そうか……」

「お前は、篠ノ之博士を恨んでいるんだろう？」

「っ!?当たり前だ!あの人のせいで、私達家族がどのような事になったか!」

「聞いているさ。国に家族をバラバラにして監視されるようになった。転校を繰り返す事になったとな。何かを成すには代償が必要となる。篠ノ之博士は宇宙に出る可能性を獲た代わりに、家族を失った訳だ」

「そんなもの、あの人の勝手な都合で私達は巻き込まれたんだぞ!?それを恨んで何が悪いというのだ!」

「そのお陰でオレは夢への可能性を掴んだ訳だがな」

「き、貴様!」

わざと煽るように箒に言うと、予想通り箒はオレへと殴り掛かってくる

以前までならその攻撃を避けるような真似は出来なかっただろう、だがこの世界に来てから訓練に明け暮れたオレは剣道をしているとはいえ素人の拳を受け止めるくらいなんて事はなかった

「お前はさっきから何が言いたいんだ?悲劇のヒロインのつもりか?ああ可哀想だ、篠ノ之博士が悪い、そんな風に薄っぺらな同情が欲しかったのか?」

「くっ、放せ!」

「言われずとも放すさ。そんな重みもない攻撃、当たったところで高が知れてる」

受け止め、掴んでいた拳を放してやる、箒は敵意の籠った視線で睨むが、そんなものは軽く受け流せる

「フンッ、何が不幸なんだか。家族は別居しているとはいえ生きている。電話で言葉も交わせる。その何が不満なんだ?」

「何だ?!?お前に、私達の何が分かるというんだ!?!」

「分からぬさ!だがお前もオレの事を知らないだろう?ならお互い様だ」

「何を——」

「オレの家族はこの世界には居ない」

「なっ!?!」

「唐突に別れて、言葉を交わす術もない。そして他に身寄りもない。親戚なんて存在もない。オレの家族は、血の繋がった存在はこの世界に一人として存在しないんだ。親父ともお袋とも、明日もまた顔を合わせて何気ない日常が続くんだと、そう思っていた時に、突拍子もない出来事のせいで、だ」

ああそうだと、親子とまたガンダムの話をしたり、それをお袋に苦笑されたり、三人で食卓を囲んで普段の日常を過ごしていくと思っていた

この世界に来てからは子供の頃に親子に話した夢に向かって進んでいく事で誤魔化していた

それでもふと思うんだよ、また顔を見て馬鹿みたいにはしゃいでいたあの時のような日常に戻りたいって事も!

「そしてオレはこの世界で貴重な男性操縦者だ。身寄りのない子供一人、消えても誰も気にしない。それこそ、人体実験のモルモットにしても問題ないとは思わないか?」

「そ、それは……」

「それに、セシリアもだ。三年前、列車事故で両親を失っている」

「ッ!?!」

「それから両親の遺した資産を、家を、貴族としての誇りを、欲にまみれた俗物共の手から守る為に一人努力して今の地位を手に入れたと聞いた」

「……………」

「何もせずにオレも、セシリアも、シャルロットも、鈴も、ラウラも、そしてクロエも、今の地位に居る訳じゃない。皆、何かしらの事情を抱えている。今のお前はただ甘ったれてるだけだ。自分の事しか見

ずに、周りを見ていない。だから視野が狭くなる。覚悟も何もない、そんな身でよくもまあ恨みだけを吐けた物だな」

「わ、私は……」

「取り敢えずは良く考えておけ。お前が何を思うかは、何を目指すかは自由だ。その後でお前はお前の道を行け」

そうしてオレは屋上から去っていった、箒からの相談が何だったのか、その目的の本当のところは分からない

だがその後、篠ノ之博士が箒と直接会って話をしたと嬉しげに話していた事からきつと良い方向に動いたのだろう



空中戦は苛烈を極め、砲火と剣劇の音が響き渡る、そんな中でオレは紅椿の圧倒的な性能に振り回されていた

「クツ、速い！」

「あの時、私は何も返せなかった。今もまだ明確な答えは見出だせていない。だが姉さんと話をして、これからこの紅椿と共に探すと、そう決めた！康太、あの日の答えがこれだ！」

両手に握られたブレード、箒がそこからビームを放ちオレを狙ってくる

連射の利く雨月、威力と範囲に優れる空裂、その二つを使い分けて追い込むように、だ

実際、シールドが限界に近くなってきた、あと少しで碎ける、そんな状態で再び始まるビームの嵐、可能な限りで回避して無理な物だけシールドで受け止める、だが遂に限界が訪れてシールドが碎け散った

「貫った！」

「誰が！」

だが碎けたシールドから溢れ落ちた一つの武装を左手で掴んで即座に放つ、I・W・S・P.の追加武装の中で唯一のビーム兵器、ビームブーメランだ

「何ッ!？」

「どれほどの性能差であろうと！」

不意打ちとも言える一撃を横に回避する箒、だがブーメランである

為に攻撃は戻ってくる

それに対処する間もなくオレが二刀を抜いて接近、前後から挟まれた状況に箒の判断が遅れて無防備な隙を晒す

「今日の私はー！阿修羅すら凌駕する存在だー！」

ブーメランの進路上から退避してオレの迎撃に当たるつもり箒、しかしその体勢が整うよりも早くオレの二刀による斬撃が紅椿を捉える

「ぐあっ!？」

だがその装甲に明確な傷が入り、更なる追撃を仕掛けようというところで通信が割り込んだ

『ストップストップ！こーくんもヒートアップしてるところ悪いけど、あくまで模擬戦だから勝敗着くまでやらなくて良いんだよ!？』
「あっ」

つい熱くなってしまい加減するのを忘れていた

その後、篠ノ之博士の制止の通りにオレと箒は試験を中止して砂浜へと戻る

そこで待ち構えていた篠ノ之博士によって今回の総括が行われた

「はい、まず箒ちゃんからね。まず自分で紅椿を動かしてみて、どう感じた？言っておくけど、紅椿の性能はチューンしてるとはいえジエガンなんて歯牙にも掛けない程だよ」

「それは……最後に斬られたところからも、私の未熟さを痛感したところですよ」

「うんうん、今まで第二世代機の打鉄だったから性能の差に戸惑うのは分かってたよ。でも紅椿は完全に性能を引き出すならそれこそブリュンヒルデくらいの技量が要るから、頑張っただけ」

「精進します、姉さん」

そうして箒の評価は終わった、その二人の様子からも前よりは幾分か打ち解ける事が出来たらしい

「じゃあ次はこーくんね。うん、ぶっちゃけ予想外。何が予想外って、性能的に絶対に紅椿の圧勝だと思ってたからだね。見てよこのグラフ、一時的とはいえこーくんのIS適性がなんとSになってるんだ

よ。これブリュンヒルデとかヴァルキリーレベルだからね？ジエガンの性能が殆んど引き出されてたんだよ」

「そんな戦闘中に変化する物なんですか？」

「まあね。こーくんってかなり適性が不思議だよ？例えば、普通の機体ならBで、ジエガン系列だけA、過去のデータを遡ると、二回だけ。どっちも試合じゃなくて実戦の時だけSに届いてるんだ」

「つまり？」

「極限状態で本人の資質が引き出されてるって事かな？データが少ないから何とも言えないけど、これはこれで興味深いデータだね。技量に関しては問題ないから、これでどんどん経験を積みば近い内に世界大会レベルに到達してもおかしくはないね。その時は日本代表になるのかな？まあそれはその時に考えれば良いか！」

「そんなに、ですか？」

「うん、そんなに。自信を持って良いよ、こーくん。君は確実に成長してるんだからね」

「そうですね。オレが……」

改めて篠ノ之博士に言われると感動してきた、今までの出来事は全くの無駄ではなかったのだと実感したのだから

「終わったか？ならば予定外の事もあったがこれより各種試験を開始する。それぞれの持ち場に急げ！」

と、そんな余韻に浸る間もなく織斑教諭から駆け足の指示が出た為にオレはラビットフット社の試験場所へと移る事となったのだった

「そういえばこーくん、なんか途中でいつもと様子違ってたけど、アレって何？」

「自己暗示というか、単に自分で自分に発破かけてただけですわね」



さて、オレはデュノア社の開発チームと合流して合同テスト、となる前に筈のところに着いた、渡すべき物があるからだ

「康太か。どうしたのだ？」

「さっきの模擬戦の結果を見て、渡しても良いかなと思ってな。受け取れ、これが紅椿の三振り目の刀だ」

そう伝えてオレは量子化していた刀を取り出す

「妖刀フカサク、可能ならば使いこなしてみせろ」

「う、うむ。それにしても妖刀とは……なぜそのようなネーミングなのだ？」

「安心しろ、妖刀と呼ばれたシステムは積んでないから名前だけだ。色々と理屈はあるが、そいつは超振動により刃の触れた相手を砂塵にする。本来なら機体本体で放つ技だが、機体が先に潰れる可能性もあるから安全策でその形になってる。気をつけろよ、それは理論上は斬れない物は存在しない。吞まれれば自分が斬りたくない物まで斬ってしまうぞ」

「それを聞くと妖刀と呼ばれても仕方ない物に聞こえるな。後は私の心の持ちよう次第か……精進するでしょう」

「そうだな、普段は量子化して格納しておくの良い。あと、これは個人的な誕生日プレゼントだ。時間が見付けられないから先に渡しておく。料理用の包丁だ」

力の意味を理解してくれていれば良いが、そこは箒の今後の成長次第となる

そしてオレが買っておいた箒への誕生日プレゼントの包丁を渡しておく事にした、量子化して持ち歩いてはいたが渡すタイミングが掴めそうにないからな

「そういえばそうだったな。ありがたい、大事にさせて貰う」

「応。それじゃあオレは仕事に戻るから、そっちはそっちで頑張れよ」

「うむ、先程のような結果とならぬよう、私も己を磨くでしょう」

こうしてオレは箒に新たな刀を託した

この後、篠ノ之博士は箒の他に一夏とクロエ、それからラビットフット社に移籍したラウラが新たに得たの機体のテストをする予定だ

それとは別で同じストライカーパックスシステムを導入しているオレがデュノア社との合同テストに参加する事になっている、そして当初の予定とは違うがエイフマン教授も此方に参加となる

「あ、康太、エイフマンさん！こっちだよ！」

「少し寄り道した。それで、そっちの人がデユノア社の開発スタッフか？」

「初めまして、デユノア社IS開発部の開発主任を務めていますレナル・マルタンと申します。本日はよろしくお願いいたします」

「初めまして、マルタン主任。ラビットフット社テストパイロットの紫藤康太です」

「わしはレイフ・エイフマンだ。ラビットフット社では新参者となるが、よろしく頼む」

他にも色々とスタッフの人は居たがそのトップの人とまずは挨拶をする

マルタン主任は五十代程だろうか、初老の男性で少し猫背で禿頭、丸眼鏡が特徴な人だ

「お二人の事はお嬢様からお聞きしておりますよ。今回は試作ストライカーパックのテストという事で、よろしくお願いいたします」

「ええ、此方も別の設計思想で開発されたストライカーパックには興味があります」

「それはそれは、ラビットフット社のテストパイロットにそう言って貰えると技術者冥利に尽きます。それにしても、ストライカーパックシステムというのは本当に素晴らしいですね」

「そうですか？」

「ええ、今までのように初めから機体を設計せずとも規格さえ合わせれば既存の機体にも新装備を実装出来る。予算という厄介な制限があつても、全て新規設計するより安く自分達のやりたい事が出来る。この方式が私達開発部にとってどれ程の役に立った事か……」

確かにストライカーは汎用性の高さが特徴である、例え機体の性能が落ちてこようとストライカーパックの性能を加えれば第一線でも使える、そんな芸当も可能となる

「フッフ、今まで予算で五月蠅く言われて実装出来なかったアレコレを現実に……これ程にそそのる物はありませんよ」

「なあシャルロット、この人大丈夫か？色々な意味で」

「悪い人じゃないのは確かなんだけどね……」

どうにも闇が見えるマルタン主任の様子にシャルロットも言葉を濁していた、何か過去に予算に関して嫌な事でもあったのだろうか？
とはいえその技術は確かなようで、試作品の一つを早速見せて貰った

「これが我が社の開発した試作ストライカーパック、ガンナーストライカーです」

「機体全高と同じくらいの長さの銃と、大型のセンサーモジュールか。ふむ、どうやらビームの収束率を上げる事で射程距離を伸ばしているようだな」

「遠距離から狙撃で倒す、もしくは損害を与える装備ですね。例えば被弾せずとも長距離からの狙撃を避けながら距離を詰めるという過程で精神的にも損耗します。敵として出会いたくはないですね」

発想としてはクロスボーンガンダムゴーストに出てきたバイラリナのニードル・ヴェスバーに近い装備だが、あれが機体の構造で少し無理していたのに対して、これは装備そのもので完結している

スラスターとかはないから完全に静止しての狙撃に特化しているな、同じ射撃型のランチャーストライカーに比べると一撃の威力では劣るが射程、連射力では此方が上か、面白い装備だ

「センサー系はそもそもISのハイパーセンサーがあるがそれを更に大型化して補助する……このビームは荷電粒子だがミノフスキー粒子を用いればそこ成層圏まで狙えるか？」

デュノア社に提供したビーム兵器の技術はSEED系の技術である為に大気の影響を受けるがミノフスキー粒子を使ったオレ達ラビットフット社の武装は磁場や電場の影響を受けない事がない

なのでこのガンナーストライカーを狙撃すれば地上から宇宙の標的も狙えるだろう、普段は制限されているがISのハイパーセンサーならば可能な筈だ

しれっと戦略級の兵器を開発しているがその実力だけでもマルタン主任の腕は確かだと理解出来た

「良い装備ですね。此方でも導入したい位です」

「ありがとうございます。それで、ラビットフット社は確か新たな支

援機の開発を行ったとか。そちらの方も見せて頂けますでしょうか？」

「当然です。実機はあのコンテナに。此方が詳細なデータになります」

「一通りガンナーストライカーについて確認した後はラビットフット社の装備を御披露する事になった

とはいえコレはストライカーパックではなく、支援機なのだが

取り敢えずはデータをマルタン主任とシャルロットに渡して感想を貰う

「こ、これは!?」

「ストライカーパックを前線のISに運ぶ為の機体……そしてストライカーパックは追加のエネルギーパックを内蔵してるから……凄い、戦場でISのネットワークになるエネルギー補給に対して一つの解決策だよ！」

「見せたのはラビットフット社で篠ノ之博士が開発したコスモグラスパーのデータだ

コスモグラスパーは簡単に言えばSEED本編に出てきたスカイグラスパーの宇宙版であり、専用に再設計したエールストライカーを装備している

「何でコスモグラスパーの名前にしたのかと言えば無人機なのでスカイグラスパーのコックピットに当たる部分がカメラと装甲で埋まっている姿がコスモグラスパーの方に近かったからである」

そして二人はこのコスモグラスパーが生み出す戦術的な優位性に直ぐに気付いた様子だ

「これは直ぐに全ての試作ストライカーパックをコスモグラスパーに対応するよう再設計しなくては！いやしかし、実際に換装する様子を見ないと……ええい、悩ましい！」

「試合だと使えないだろうけど完全に実戦を想定した機体だね。いざという時に他国のISに対して稼働時間で圧倒的なアドバンテージを握る事が出来る。これは一種の革命だよ！」

そんな二人の反応から次のテストは予定を変更してコスモグラス

パーの試験を行い、実際に空中換装を披露する事となった

その結果からデユノア社でもコスモグラスパーの導入を決定、ストライカーパックの新規開発にコスモグラスパー対応可能な規格を再設計する事となる

そうして他にも二社の間で様々な装備のテストが行われ、一度昼休憩に入ろうかという時であった

「たっ、た、大変です！お、お、お、織斑先生っ！」

割りと普段から慌てている事が多いような山田先生が普段とは全く違うレベルの慌てようで織斑教諭の元へ走ってきたのだ

一般生徒の監督を行っていた織斑教諭が山田先生と何やら話し合おうと大きく手を叩いて生徒全員の注目を集める

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

唐突に発生した異常事態、そしてこれこそが今後この世界に大きな影響を与える事になる事件の幕開けとなるのだった

30話 死の軍団

「では現状を説明する」

唐突に集められた専用機持ちと教師部隊の面々を前に旅館の一番奥にある大座敷、風花の間で千冬はそう切り出した

部屋の中は持ち込まれたパソコンや大型の空中投影ディスプレイによつて臨時の司令室となっている、そしてその空中投影ディスプレイに新たな情報が映し出される

「二時間前、ハワイ沖で稼働試験を行っていたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS、シルバリオ・ゴスベル銀の福音に所属不明の武装勢力が襲撃を仕掛けた。情報によれば試験に当たっていた部隊は全滅、銀の福音とその護衛として配備されていたアメリカの第三世代機、ファング・クエイクの二機はその場を離脱、だがアメリカ本土への方向に敵の包囲網が敷かれていたらしく、この日本方面へと逃れて来ている。どうにも在日米軍との合流を目指しているらしい」

「織斑先生、それだと我々が召集された理由が分かりません」

「その疑問も尤もだと思う。今回の任務は銀の福音、ファング・クエイクの撤退支援となる。現在も二機は敵勢力の追撃を受けているとの事だ」

「分からないな。IS学園は如何なる組織の干渉も受けたくないという決まりになっている。米軍から要請があつて受け入れたんですか？」

「それに関してもこれから説明する。今回の任務を出したのは学園上層部ではなくIS委員会だ。学園はそれを請けた形となる。そしてその理由というのが、武装勢力はISではなく、ISに似た兵器を使用しているという事だ。その数、現時点で確認されているだけでも二百機を超える」

「に、二百……!?!」

「ISに対抗可能な兵器だなんて……」

伝えられる内容に対して違和感を感じていた康太の質問に千冬が答え、その回答に対してこの場に集まっていた誰もが驚愕していた

落ち着いている者と言えは千冬と康太、そして東とエイフマンくら

いのものだ

「成る程、政治的な理由による介入ですか」

「そう言うな。ISの存在による影響はお前も知っているだろう?」

「当然ですよ。ISを倒せるのはISだけ。そんな認識によって生まれたクリーンな戦争。授業でも習いましたからね」

この世界ではISの数がパワーバランスをそのまま決定着けている

だから戦争が起きればまずIS同士がぶつかる、ISでの決着が着けばそこで勝敗は決する、それまでの兵器ではISに対抗出来ないからだ

そしてISが敗ればその時点で降伏する事になっている、抵抗は無意味、その後の余計な武力行使は行われぬ

そんなIS絶対論とも言える戦略がこの世界の戦争を変えた、ISも絶対防衛により死者が出ない、ISの戦闘だけで誰も死者を出さないクリーンな戦争、それが歪ながらもこの世界で平和を維持していた、全てではないが金食い虫と呼ばれた通常戦力の縮小による軍人のリストラという犠牲を払いつつもだ

だが此処でもしもISに対抗可能な兵器が出たでしょう、それは量産可能であり、更にはISを倒せたでしょう

そうなるかどうかの結果になるかは明白だ、ISが抑止力足り得なくなり戦争は以前と同じく無数の屍を積み上げる物となるだろう

その為にも今の状況で、しかも世界最強を自負するアメリカの新型ISが敗れるというシナリオだけは避けたい、そんな上層部の思惑によりIS学園に白羽の矢が立ったのだ

「紫藤の言ったように、今回の任務は極めて政治的な理由による物だ。だがこの先、戦争による死者を出さないよりはずっと良い。その為にも諸君の力を貸して欲しい」

千冬の言葉に反対する者は居なかった、教員や代表候補生、正義感の強い一夏は元より余計な戦乱により宇宙開発に支障が出る事を懸念した康太も異論はない

そんな全員の様子を見た千冬はディスプレイを操作、具体的な作戦

の内容に移る

「今回の作戦は速度を重視したい。可能な限り早く米軍の二機と合流、敵部隊に打撃を与えつつ即座に撤退する。敵の航続距離は不明だがISよりは短いと見て良いだろう」

目的は殲滅ではなく回収、なので足の速い機体の出番となる

「織斑先生、敵部隊の詳細についてお願いいたします」

「勿論だ。敵部隊の使用する兵器は、個々の性能はISに大きく劣る。そこを数でカバーしているようだが、厄介な事に自己修復能力を備えているらしい。損傷を与えても暫くすると修復するようだ。威力の高い攻撃で大きく破損させると機能を停止するらしいが、数で押されてその隙を見出だせないらしい。それと、これが向こうから送られてきた敵機の画像だ。ISで撮影した物だから確度は高い」

セシリアの質問に答えた千冬はディスプレイにその敵機の姿を映し出す

大型の翼を備え、エネルギー兵器の砲身を兼ねた巨大な腕が大きく目を引く機体だ、その中央には暗い緑色をした機体が存在し、それがコアユニットとなるのだろう、頭頂部にある角と大きな一つ目が特徴的な機体がそこに居た

既存の機体とは系統が異なる敵機の姿を見て考察する面々だが、その中で大きく反応した者が居た、康太だ

座っていた椅子から立ち上がり驚愕した表情を浮かべていたが直ぐに視線を鋭くし、その雰囲気には殺気さえも滲んでいた

「紫藤、この機体について何か知っているのか？」

「ええ、知ってますよ。そしてこれが何で起動してるのか知りませんが、もし何者かが目覚めさせたというならソイツを殺してやりたいと思える程ですね」

千冬は康太の正体を知っている、だから大きく反応を示したという事は敵機の正体に関しても掴んでいるという事だ

「成る程、お前の案件か。なら敵機に関する情報を頼む。それが全員の役に立つ筈だ」

「分かりました。以前、篠ノ之博士に聞いた話でもしやと思つてまし

だが、嫌な予感が当たりましたね」

千冬に言われて康太は前に出ると端末に自身が持っていた端末を接続、中のフォルダを開いていくとそこに先程の敵機の3Dモデルが表示される

「機体名デスバーデイ、とある存在が自らの尖兵として生み出したデスアーミーと呼ばれる機体の空戦仕様。武装は見ての通り格闘も可能なクロー状のビーム砲。また飛行ユニットを切り離す事でデフォルトのデスアーミーになる事も出来る。その際の性能はデスアーミーと色以外差はない」

追加でデスアーミーのデータも表示されるが武装が金棒型ビームライフルのみと書かれている

まだ見ぬ敵の情報をあつさり提示してみせた康太に事情を知らない者達は困惑するが康太は無視して説明を続ける

「デスアーミーを始めとしてこれ等の機体の一番の特徴はDG細胞による自己修復機能にある。これは一種のナノマシンと思つて貰いたい。このDG細胞は自己再生の他にも自己増殖、自己進化の能力を持つ。よつて機体のエネルギーを生み出したり、機体の構造材の生産さえも可能としている」

その能力に聞いていた全員がどよめく、もしもそれがISに使用出来ればその性能が何れだけ高くなるか想像したからだ

だがうまい話には裏がある、そんな幻想は直ぐに康太が続けた説明で碎かれる

「しかしその活動には健康な生命体を必要不可欠である。これはDG細胞が人の意思に大きく作用するからであり、一定のエネルギー供給が無ければ活動は促進されない。だがDG細胞は無機物でありながら有機物を侵食し個体そのものを変化させてしまうという特性がある。完全に侵食された際の姿がこれだ」

「ヒツ……!?!」

ディスプレイに追加で表示されたのは体中をチューブに繋がれた、まさにゾンビとも言うべき姿であり、その姿を見て大きく悲鳴を上げた山田先生以外にも恐怖を感じた人間は多かった

「脳や生命器官を侵食されるとこの姿になる。最早この段階になると自我や知性は消失し、人としては死んだと言える状態となる。侵食が軽度なら侵食された場所を外科的に除去する事で助かるが、こうなると完全に息の根を止めてやるしかない。他にも今回の作戦では海が近い事から水中型のデスネービーや四脚狙撃型のデスビーストの出現も考えられる。以上がオレの知る限りの情報だ」

そこまで伝えると康太は自身の端末からデータをコピーして学園側の端末に移す

その後はまた千冬に任せる形となるが、千冬から呼び止められて席には戻らない

「情報提供に感謝する。各自、他に質問はあるか？紫藤が伝え忘れてる、または些細な内容だと話してない内容があるかもしれない。聞いている通り今回の作戦で対峙する敵機は凶悪だ。後で後悔する事になるかもしれない」

そう言つてパイロット達を見回すと一人の教員が手を挙げた

「その、織斑先生。彼は何者なんですか？此処まで詳細な情報を持っているとなると、その……」

「紫藤が敵と繋がっている、という可能性については無いと断言出来る。それは私と束が保証しよう。寧ろあの兵器に先程の人でなくなった者が乗せられている事に対する怒りを隠しきれていなかった点から信用して欲しい」

「こーくんなら信用して良いよ。詳しい事は内緒だけど、敵じゃないのは確かだからね」

この場で指揮を執る千冬と、ISの生みの親である束の言葉、その二人が言うのならとその教員は完全には納得していないが引き下がる

「はい」

「ふむ、どうしたオルコット」

「康太さんの事は信頼してますので、私がお聞きしたいのは敵の性能に関してですわ。どの程度の戦力差だとお考えですか？それと、まだ何か話してない名称等がありましたらそれもお願い致します。そこ

からまた何か分かるかもしれないので」

「成る程。オレが知る存在とかなり違うから予想だが、織斑先生と同じで単機なら圧倒的にISが上だ。けどこれは数で圧倒する機体だからタイマンは殆んど有り得ないと思ってくれ。それと、名称だが……ああ、そうだ。敵機の生体ユニットとして取り込まれた人間の成れの果てだが、ゾンビ兵と呼称してる。他はあるか？」

「ならば次は私だ。お前は敵機をとある存在の尖兵と呼んだな。とある存在とは、何だ？」

セシリアからの質問に答えた後ラウラが康太に訊ねる、だが康太はその質問に答えるべきか悩んでいた

「……………デスアーミーを始めとした機体は、全てデビルガンダムと呼ばれる存在の尖兵だ。時としてデスアーミーは自らをデビルガンダムのエネルギー源とする。自我を失ったゾンビ兵を統率しているのがデビルガンダムという存在だ」

そう言ってモニターに端末を再接続して映し出したのはアルティメットガンダムと呼ばれていた頃のデビルガンダムの姿であった

それに続いて様々な形状に変化しているデビルガンダムの姿も映し出される

「成る程、それが親玉か。しかし、デビルは分かるとして、ガンダムとは何だ？」

「ガンダムは……んー、改めて問われると……オレの人生の半分以上を形作ってる概念？」

「そ、そうか。ならば質問を変えよう。お前の機体や一夏のユニコーンが変身した姿とそのデビルガンダムと呼ばれる機体の頭部の意匠が似ているのは何か理由があるのか？」

「ああ、それならオレの機体はストライク・ジエガンガンダムヘッド仕様だし、一夏の機体はユニコーンガンダムだからな。目が二つついててアンテナ生えてりやマスコミがみんなガンダムにしちまうのさ！バカのひとつおぼえだよ。とまあ、二つ目とV字アンテナがガンダムという分類の条件の一つだ。色々な種類が居るから一概には言えないけどな」

「うむ、どうにも要領を得ないが……取り敢えずは納得しておくでしょう」

ガンダムという存在を語ると康太の正体を語らなければならない、その為、康太は有耶無耶にして質問を流した

そしてラウラの次に手を挙げたのは鈴だ

「そんな危険な存在、アンタなら作られた理由も知ってるんじゃないの？」

「そうだな。元はアルティメットガンダムと呼ばれ、地球環境の再生を目的として生み出された。DG細胞もアルティメット細胞、U細胞と称されていた。それこそ汚染物質を分子レベルで除去する事が出来た。だがある時、アルティメットガンダムは自己再生・自己増殖・自己進化の三大理論を飛躍させ、一つの結論に行き着いてしまった。それが原因で人間の侵食等が始まり、その危険性からデビルガンダムと名を改められたんだ」

「その結論って何なのよ？」

「地球環境を破壊する最大要因の排除、すなわち人類の抹殺だ。だから破壊された、筈なんだけどなあ……」

「アンタにも予想外の事態って事ね。取り敢えず私が知りたい事は分かったわ」

「そうか。他は……シャルロットか」

「うん。そのデビルガンダムって存在が目覚めたとして、それが今米軍のISを狙うのって何か理由があるのかな？」

「分かん。誰かが意図的に目覚めさせて制御下に置いているなら、それは目覚めさせた連中の狙いだろう。そしてデビルガンダムが自ら目覚めたとするなら……そうだな、デビルガンダム本体の生体ユニットとする為、かもしれない。さっきも言ったがDG細胞が活動するには生体ユニットが必要不可欠だ。その大本のデビルガンダムの生体ユニットともなればそれはかなり限定される。そしてそれに対する一つの結論がある。生体ユニットとして最も適しているとされるのは『次世代の生命を生み出す力を持つもの、すなわち女性である』とな。ISの、それも新型のパイロットを任される程の女性なら、と

判断してもおかしくはない」

「そっか……うん、ありがとう。あまり気持ちの良い物じゃないけどね……」

「まあな。デスアーミー軍団が居るといふ事は、その数だけ既に犠牲者が居るといふ事だ。予想だが、デビルガンダムはまだ完全に目覚めてはいないと思う。その復活の阻止、またはそれを妨害する為にも目の前の敵は放置出来ない」

他に質問は、と康太が促すが今度は誰もが質問を終えたのか誰も手を挙げない

それを見て後ろに回っていた千冬が前に出る

「諸君、聞いての通りだ。紫藤からもたらされた情報により、敵の強大さは良く分かった事だろう。今回の作戦、与えられた任務によるもの以上に重要な物となる。では編成を伝える。今回は速力重視だ。それと作戦目標を変更する。第一目標は米軍ISの回収、そして第二目標を敵部隊の殲滅とする。この為、部隊を三つに分ける。第一部隊を足の速い機体で構成する。これで第一目標を達成、そして敵の誘引を行う。第二部隊は主力だ。誘引した敵部隊を殲滅、また第一部隊の撤退支援だ。第三部隊はこの場の防衛、紫藤からの情報で水中にも敵が潜んでいる可能性がある以上、他の生徒の身も守らねばならない。これは足の遅い機体の他、適した者を選出する」

その言葉により次々と部隊の編成が行われる、第一部隊として機体特性や性能を鑑みた結果、康太、クロエ、シャルロット、箒、一夏、一秋の六名が選出された

これはまず康太は情報を持っている事から確定し、機体の速度がある箒と一秋が選ばれ、次に長距離の移動となるのでストライカーパツクの換装によりエネルギーの補給手段があるシャルロット、そしてラビットフット社で開発していた支援機であるベースジャバー二機の操作としてクロエと一夏が選ばれた

康太もまた機体はストライカーパツク対応型なので補給は可能だ、というよりも複数のストライカーパツクを拡張領域に収納している事から一番エネルギー量に余裕が出来ていた、更には第一部隊の指揮

を執る事が決まった

そして第二部隊だが、此方は殆んどが主力であり、セシリアと鈴、ラビットフット社の用意した無人機仕様のジエガンが八機、教員部隊からジエガンを扱う者が二名出る事になった

最後の第三部隊は機体が重武装となったシルヴァ・バレットを扱うラウラと残っている無人機仕様のジエガン四機、そして性能的に残された打鉄とラファール・リヴァイヴを扱う教員四名からなる部隊だ

そうして全ての準備が整ったのはブリーフィングから三十分が経ってから、砂浜ではスペキュラムストライカーを装備した康太のストライク・ジエガンとエールストライカーを装備したシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムⅢ、二機のベースジャバーに二人ずつ乗り込んだクロエ、箒、一夏、一秋が発進しようとしていた

「全員、準備は良いか？」

「コスモグラスパーとの連動完了。空中換装はぶつつけ本番になるけど大丈夫だよ」

「ベースジャバー一番機、問題ありません」

「二番機も同じく」

「よし、なら行こうか。オレ達の目標は米軍ISの回収。突っ込んで適当に敵に向かって撃った後は一目散に逃げるのが目的だ。合流したら米軍ISはそれぞれベースジャバーに乗せる。箒と一秋は自身で飛行して戻る。クロエと一夏はベースジャバーの操作。それで良いな？」

編成の際に伝えられた役割、それとは別に康太にはデスバーディの性能を確かめるという役割もあった

康太の確認に全員が返事を返したところでブースターにエネルギーが集まっていく

◆ 目指す先に居るのは死者の軍勢、されに対する一矢となつて第一部隊の六人は太平洋へと飛翔していった

◆ 太平洋沖の海上、そこでは二機のISが戦闘を行っていた

一機はその名の通り全身を銀色の装甲で覆い背部に一对の翼を備

える機体、シルバリオ・ゴスベル銀の福音

もう一機は通常の四肢に加えて背面から巨大な腕が伸びる機体、フアング・クエイクだ

どちらも米軍に所属する第三世代機であり世界最強の大国が威信を懸けて開発した機体である、だが今の二機はそのような事が信じられない程に追い詰められていた

どちらも装甲は破損し、福音の翼は片方が半分の所で千切れており、フアング・クエイクは背面の片腕が根本から無くなっていった

「だーっ！クソッ！こいつらうざってえ！ナタル、そっちはどうだ!?!」
「こっちも似たようなものよ。全く、広域殲滅型が呆れるわね。まさか火力が足りないなんて……」

「チッ！大体コイツ等は何なんだ!?! ISに対抗出来るなんざ、どうなってるんだ!?!」

「知らないわよ。上も何も知らないみたい。けど片腕吹き飛ばしても再生してくるから無人機で間違いないでしょうね」

「その再生がうざってえんだよ！で、上は増援に関して何か言ってたか？もうエネルギーが残り二割しかねえ」

「こっちも同じね。一応、近くに居たIS学園から何機か派遣して貰える形で話がついているわ。私達はそこまで向かうのよ」

「IS学園だあ!?!ガキと旧式持った民間人で何になるって言うんだ！上のクソ共め、後で締めてやる!」

「そう言わないの、応援に来てくれるだけでも全然違うわよ。それに、上に文句言う為にも生き残らないと——イーリス、上よ!?!」

「なっ!?!この一つ目野郎が!?!」

軽口を叩き合いながらも迫り来る無数のデスバーデイを捌いていた二人、だが長時間の戦闘により機体へのダメージは積もり、パイロットも疲労していた

その注意が逸れた一瞬の隙を突いて一機のデスバーデイが巨大な腕でフアング・クエイクの頭部を掴んだ

フアング・クエイクのパイロットであるイーリス・コーリングの眼前に突き付けられるビーム砲の砲口、そこに光が集まってくるのを見

てやられるとイーリスが思った時、そのビーム砲を一条の閃光が貫いた

「うおっ!？」

「イーリス、無事!？」

「あ、ああ……けど、何が——」

自身を掴んでいた腕が突然千切れ飛んだ事で自由になるイーリス、その危機を救った閃光は立て続けに放たれ更に別のデスバーディの頭部を次々に貫いていく

一体何が、と二人が思っているとそこに赤と白の機体が躍り出る

「行くぞ一夏!」

「分かってる!」

それは紅椿とユニコーンであり、二機は周囲を囲むデスバーディにビームを放つ

紅椿の両の刀から放たれるビームがデスバーディを切り裂き、ユニコーンのビームマグナムが圧倒的な熱量で蒸発させていく

そんな二人に遅れて二機のベースジャバーと、それを護衛するラファールと白式・刃風も合流する

ベースジャバーの二番機、一夏と操作を代わり狙撃型のガンナーズトライカーを装備した康太がライフルを構えつつ困惑していたナターシャとイーリスの二人に声を掛ける

「米軍の二機、ナターシャ・ファイルスとイーリス・コーリングだな?」

「ええ、その通りよ。もしかしてだけど、IS学園の増援?」

「そうだ、学園上層部からの任務で来た。この後、少し連中に損害を与えてから撤退する。二人はこの機体に別れて乗ってくれ」

「分かったわ。イーリス、聞いたわね? 此処は退くわよ」

「あいよ。おい、さっきの狙撃はお前か? ガキのくせにやるじゃねえか!」

「もう、イーリスったら。ごめんなさいね、彼女口が悪いけど根は良い子なのよ」

「問題ない。オレもタメ口だしな。一夏、箒、下がるぞ! 各機、敵部隊に向け全ての火器を全力投射! 一撃加えた後に反転、主力部隊との合

流地点へ向かう！」

『了解！』

「同時攻撃、撃てッ！」

康太の出した合図と同時に全ての機体が装備した火器が火を噴き、何機とのデスバーデイを撃墜していく

それにはナターシャとイーリスも加わり、それぞれ銀の鐘シルバールと手持ち式のアサルトライフルで今までのお返しとばかりに火力を集中させた

「よし、退くぞ！一夏、ベースジャバーの操作を代われ！」
「分かった！」

それにより時間的に余裕が出来た事で一夏と康太はベースジャバーの操作を交代した、ガンナーストライカーからスペキュラムストライカーへと装備を換装し、シャルロットも少し離れた空域で待機していたコスモグラスパーからエールストライカーを受け取り換装、エネルギー補給を済ませると二人は最高速で飛翔する

クロエと一夏がそれぞれナターシャとイーリスをベースジャバーに乗せ、箒と一秋は自身の機体で飛行しその場を離脱した

これによりIS学園側が立てた作戦の第一段階は達成された

そして狙い通りに残存するデスバーデイは第一部隊並びに米軍ISの追撃を開始する、だがそれを伝えられた主力となる第二部隊もまた迎撃の為に行動を開始するのであった

31話 死の軍団2

第一部隊から無事に目標である米軍IS二機を回収したとの連絡を受けた第二部隊は所定の位置に待機する

旅館から十キロ程沖合いに離れた上空で待機し、それぞれ射程の長い武装を構えていた

この場に居るのはセシリアと鈴の二人の代表候補生、ジエガン・ライトアーマーを駆る二名の教員、そしてラビットフット社から提供された無人機仕様のジエガン八機だ

全十二機のIS、一国の戦力に相当する数がある場に待機していた
「来たぞー！各機、攻撃用意ー！」

そこにセンサーに第一部隊の反応が現れ、その後ろには数を減らされたとはいえまだ多くのデスバーディの姿があった

そしてデスバーディが第二部隊の射程距離に入る少し前に第一部隊が増速、誤射や射線に入る事を避ける為にデスバーディの群れを引き離しに掛かる

そんな第一部隊の動きを見て第二部隊の指揮を執る教員が合図を出す

「全機、攻撃開始！味方に当てるなよ！」

放たれる幾重もの閃光、それにより撃墜されていくデスバーディの数が増えていく

そして第一部隊からは康太と一秋が反転、第二部隊に加わる

康太は装備をI・W・S・Pに変更し、一秋はデスバーディが放つビームをアブソーブシールドで吸収しエネルギーに充てている

第一部隊の長距離を飛行しエネルギーを消費した紅椿とラファール、ベースジャバーの操作をするクロエと一夏が福音とファング・クエイクを連れて旅館に設けられた補給地点まで向かった

康太と一秋の二人が加わった計十四機による砲撃、だが敵機は数を削られたとはいえ未だに百を超える数を残している、例えば味方が撃墜されようとも自らが損傷を受けようとも恐怖という感情のないゾンビ兵達は愚直に突き進んでくる

「近接戦闘に移行する！各機、常に味方とフォローしろ！単独で動くな！」

『了解！』

可能な限りは遠距離から撃墜し、それが出来ない距離まで詰められたので武装を変更して乱戦へと持ち込む

一機一機の性能は大した事もなく、そして迎撃に当たっているISの数は十四機と多い、単純に一对十といった数の差はあるがその程度は簡単に覆せるのがISという物だ

数だけで連携もあまりしてこないデスバーディを殲滅するのにそこまでの時間は必要とされなかった

周囲に敵の存在が確認出来なくなったところで指揮を執っていた教員が撤収の指示を出そうとするが、そこに司令部で情報を整理していた山田先生から連絡が入る

「よし、良くやった。このまま我々も——」

『司令部から第二部隊に伝えます！前方より新手です！数、凡そ……五百!?!』

「なっ!?!」

今しがた二百の敵を殲滅したところに新手の、それも五百という数の存在に言葉を詰まらせる教員

何かの間違いではないか、そう返そうとした時、センサーが捉えた機影、その数が嘘ではないと証明する

「クッ、全機迎撃！まだ距離のある内に可能な限り敵の数を減らせー！」
即座に思考を切り替えて対処する事を決定した教員、それに従い十四機のISが再び遠距離からの攻撃を開始する

だがそんな彼等の足元を進む存在に誰もまだ気付く事はなかったのだった

◆ IS学園の一年生と教員達が宿泊していた旅館は現在、仮設の基地となっていた

篠ノ之束の持ち込んだ簡易式のシールドバリア発生装置と小型核融合炉により外からの攻撃を防ぎ、中でISのエネルギー補給を可能

としている

そこで先程米軍ISを回収してきた一夏を始めとした専用機持ちの四人は自身の機体のエネルギーを補給している途中で作戦の総指揮を執る千冬から現在の状況を聞いた

「今度は五百の敵だって!?!」

「そうだ。現在、主力部隊で可能な限り数を減らしているが状況は芳しくない。補給が終わり次第、お前達にも出て貰う事になるだろう。此処に置いてある無人機のジエガン四機も一緒だ」

戦闘は出会い頭の一撃のみ、その後は逃げながらの射撃だけだったので補給はエネルギーと弾薬のみで直ぐに終わる

その短い時間をもどかしく思いながらも四人は機体の補給が終わるのを待つ

そして補給作業が終わろうかというその時だった、轟音と共に強烈な爆発音が全員の身に伝わり、地が揺れる

一体何が起きたのか、千冬が確認しようとした時、耳に着けていたインカムから焦る山田先生からの声が届く

「お、織斑先生!別の敵集団が海から来ました!数、凡そ百!」

「紫藤の言っていた水中型か?飛行型以外の動きは鈍いと言っていたが、こうも近くては……第三部隊に迎撃させろ!織斑弟、篠ノ之妹、クロニクル、デユノア、お前達も迎撃に出ろ!他の生徒達をやらせるな!」

『りよ、了解!』

センサーが捉えた新たな敵集団、それは三叉槍を構え、砂浜で水中用のユニットを外したデスネービーの群れだった

水中というセンサーの有効範囲が落ちる場所からの奇襲に対してラウラを始めとした第三部隊は迎撃を始める

打鉄、ラファール・リヴァイヴは実弾主体の武装である為に今回はジエガン用のビームライフルとビームサーベルが貸与されていた、その火力もあり地上を歩いてくるデスネービーは次々にビームに貫かれていく

更に言えばデスネービーの武装は下半身の水中用ユニットを外す

と三叉槍のみであり射撃武器を持たない為に一方的に攻撃が出来た事も大きかった

「数は多いがこの程度ね。全く、なんて醜悪な機体なのかしら。全てが終わったら紫藤康太にはより詳細な事を聞き出さなければならぬいわね」

例え百の敵が居ようとISの前では無力、そして如何に尊敬するブリュンヒルデが庇おうが疑念のある人物を放置するなど出来ない、そもそも男がIS等というのがおかしいのだと、一人の教員が打鉄を操りながらそう思考していた時の事だ

突如として海の中から巨大な球体状の物体が現れる、それは複数のデスアーミーが溶け合ったらような外見で今も不気味に蠢いている

「な、何よ、アレは!?!」

その光景に教員が怯んでいる間にも球体は動きを止めない、やがて球体の動きが止まり一つの亀裂が入ると瞬く間に亀裂は全体に広がり球体が崩れる

それはまるで卵から何かが孵化するかのような光景だった、そして中から巨大な何かが現れると次の瞬間、強力な砲撃が放たれた

「しまった!?!」

その砲撃は旅館の方へと向かって飛んでいく、迎撃しようにも距離が近い事もあり直ぐに着弾してしまう

それは束の用意した携行型のシールドバリア発生装置により防がれたがあまりの威力にシールドの一部が揺らぐ

携行型とはいえ性能はIS学園のアリーナの物と遜色ないものだと聞かされていた、それが実弾兵器で此処まで消耗させられたという事実^に教員は焦りを抱く

砲撃の威力に目を奪われていた教員だが、その砲撃を行った敵がその歩みを進める

ISでは有り得ない程の重厚な足音、そこにはIS一機分のサイズはありそうな手足で地を踏み、巨大な砲と二本の角を備えた要塞のような機体がデスアーミーと同じ瞳で周囲を不気味に見回していた

そして四門ある砲は全て自身に向いているという事にその教員は

遅れながら気付いたのだが、その時にはもう間に合わない

圧倒的な火力に呑み込まれる打鉄、しかし最早それには興味がないとばかりに足を進めるその機体はかつて獅王争覇ししおうそうはとも呼ばれた存在、その成れの果てである

そして打鉄をあつさり屠った存在はその進路をより多くの生命力が集まっている旅館へと向けるのであった



時を同じくして海上にて戦闘を行っていた康太達もまた窮地に立たされていた

空を覆い尽くす程のデスバーデイの群れ、包囲され全方位から襲い来るビームを避けつつI・W・S・Pを装備した康太は両手に装備したD型のビームライフルと両肩のレールガンで的確にデスバーデイを撃墜する

だがそれは全体のほんの僅かな数であり、それ以上の数の攻撃により長くは続かない

一点に留まっては直ぐに数に押されてしまう、その為敵の狙いを分散させる為にも少数で別れて行動する中で康太は単騎で敵と対峙している

だが雨のような攻撃に被弾も重なる、機体本体はともかくI・W・S・Pには幾つか被弾してしまった為に黒煙を吐いている箇所も見られる

そしてこの状況を打開するには今の装備では不可能だと判断し、康太は通信を繋ぐ

「篠ノ之博士、装備の射出をお願いします！」

『分かったよ！何れにするの？』

「この状況だと、ガンバレルストライカーを——何だ!？」

手数を増やす、そう考えていた時、康太の視界に複数のデスバーデイが集まり、融け合っているのが見えた

その光景に嫌な予感を感じた為、少しの間だけ装備をサムブリットストライカーに換装、左手にアグニ改を握りその群れに向ける

「何を企んでいるかは知らないが、やらせる訳には！」

機体の全高と同じレベルの巨大さを誇る銃身から放たれるビームは真っ直ぐに融合するデスバーデイに向かっていく、だがその間に複数のデスバーデイが割り込み楯となる

貫いたのは数にして二十程のデスバーデイだが本命にまでは届いていない、しかも今もまた多くのデスバーデイが集まり楯となろうとしている

アグニ改はその威力から連射が利かない、おまけにエネルギー消費量も多く撃てるのは最大で二発が限界だ

「邪魔をするな！」

なので第二射までの間にその楯を破壊する、右肩に装備されたプラズマサボット砲のトーデスブロック改と左肩の八連装ミサイルが次々と火を噴き楯となるデスバーデイを蹴散らしていく

既にデスバーデイは康太を最大の脅威と判断して最優先で仕留めようと行動していた、複数の機体が康太へとビーム砲を向けていたが、康太が敵を惹き付けたという事は他の機体への注意は逸れるという事だ

康太を狙う五機のデスバーデイ、その全てが上空より同時に放たれた五発のレーザーによって貫かれ爆散する

「周囲への注意がお粗末でしてよ、康太さん」

「セシリアか、助かった」

「私も居るわよ。それにしても、何よアレ？」

「分からん、だからこうして何か起きる前に潰そうとしてる。済まないが残りの弾は一発だ、確実に仕留めたいからあの楯になってる奴等を排除してくれ」

上空から降りてきたセシリアと鈴、二人は多少の機体に損傷こそ負っているものの比較的軽微である

「確かに、何をするか分からない敵を放置する訳にはいきませんものね。この多数の敵を相手にする状況、私のブルー・ティアーズ以上に適した機体は居ませんわ！私が道を切り開いてみせますー！」

「康太、私の火力じゃちよつと遠距離が足りないわ。アンタ何か武器寄越しなさいよ」

「ならコイツを使え。ロックは外しておいた」

状況を見てセシリアは早速とばかりにライフルとビットで攻撃を開始、鈴も康太からビームライフルとEパックを受け取って射撃を始めめる

康太は康太でサムブリットストライカーとは別に手にバズーカを取り出すと脇に抱えて砲撃する

複数のビットを操作しつつも正確な射撃で確実にデスバーディを仕留めるセシリア、射撃はそこまで得意ではないのか正確とは言い難いが仕留められずとも動きを鈍らせる事には成功する鈴、そして実弾火力で押す康太によってデスバーディは数を減らしていく

そして敵が融合している球体状の物体、そこへ続く道が出来た時、康太がアグニ改を構え放った

二、三体のデスバーディがその射線上に割り込むがその熱量を抑えるには至らず、今度は直撃を許す

謎の物体はビームにより貫通され崩壊、内部から何かが溶け合ったような残骸を撒き散らして海へと落下していく

そんな中で康太は一つの残骸を見付けた、紫色をした半球状の装甲片、それに繋がる蛇腹状のクローを

「あのパーツは、まさか——」

「康太、上から何か来るわよ！速い！」

その正体を口にするよりも早く、鈴の警告によりその場から急速に離脱する康太

エネルギーも尽き重荷となるだけのサムブリットストライカーをパージし、身軽になった機体で前へと飛んだ一瞬後に何かが高速で通り過ぎていきパージされたサムブリットストライカーを一瞬で細切れに変え、康太は空中で体勢を整えた後で通り過ぎた何かを確認する

「あれは、鳥ですの？」

「あんなデカい鳥が居る訳ないじゃない！康太、アンタなら何か分かるんじゃないの!？」

それはまさに鳥のような姿をしていた機体であった

元は白かったのだろう機体は所々が黄色や緑色といった色で斑に

変わり、頭部はデスアーミーの眼球のような一つ目をしている

己が知る姿からはかけ離れているが面影はある、その機体の名を康太は呟くように告げた

「天劍絶刀、ガンダムヘブンズソード」

先程の残骸を確認した時からもしやと思っていた、デスアーミー軍団のみでなくデビルガンダム四天王と呼ばれた機体も存在するのではないかという考え、それを証明するかのように康太の前へと立ちはだかるのだった

◆ 「何なんだよ、アレは?!」

補給を終えて再出撃した一夏は旅館近くに迫ってくる巨大な敵に對して思わずそう叫んだ

今も教員が駆る四機の打鉄とラファール・リヴァイヴが集中攻撃を仕掛けている、だがビームやバズーカといった攻撃を受けてもその存在は止まらない、動きは鈍いが確実に一步一步、旅館の方へ歩みを進めている

そんな中、教員部隊とは比較にならない程の威力のビームが敵を直撃する、ラウラの乗るフルアーマーシルヴァ・バレットの装備したハイパー・メガ・カノンによる一撃である

既存のISの火力では有り得ない程の火力、それこそ康太が使っていたアグニ改をも上回る一撃に一夏は確実に撃破したと思った

だが土煙が晴れた時、そこには右半身を半壊しながらも原型は留めていた敵の姿だった

更に既に再生が始まっているのか損傷を受けた箇所が蠢き、更には残存のデスネービーが傷口に取り付くと溶けて損傷を受ける前の状態になる

そして何事と無かったかのように再び歩みを進める敵の姿に一夏だけでなく、同時に出撃してきた箒やシャルロット、クロエも呆然としていた

「何を呆けている！お前達も火力を集中させろ！」

だがラウラからの一喝により我を取り戻すとそれぞれの機体が持

つ最大火力を叩き込む

一夏とクロエはビームマグナムを、箒は二振りの刀からビームを、シャルロットはビームライフルを、それぞれの持つ火力の高い攻撃が降り注ぎ敵に殺到する

だが敵はそんな雨のような攻撃にも耐える、耐えて耐えて、そして砲撃を放ってくる

流石に油断をしていなければ当たらないがよりにもよって旅館が射線上にある為に避けられない、撃たれたら迎撃する為にわざとシールドを使つて受けるか、砲弾を撃ち落とさなければならぬ

まず近距離での迎撃は不可能な為、自分に向かってくる砲撃はシールドで受けるのが現実的となる

そんな中、シャルロットが一度旅館の方に戻りエールストライカーから換装した装備、ガーデンストライカーが役に立った

実体、エネルギー式の二種類の楯をそれぞれ左右に四本のアームで保持するデュノア社が開発したストライカーであり、ラファール・リヴアイヴ・カスタムⅡだった頃の専用装備として開発されていたガーデン・カーテンを転用した装備である

それにより防御の問題は解決しシャルロットが砲撃を受け止める事で他の機体は攻撃に集中出来るようになった

だが撃破までは至らない、高火力により消費されるエネルギー量の懸念もある中、司令部の千冬より情報が入る

『戦闘中の各機に通達する。紫藤から追加情報だ。新たに現れた強力な個体に関して、デビルガンダム四天王という名と共に機体情報もたらされた。現在、第三部隊が相手にしているのはグランドガンダムという、要塞のような特性の機体らしい。鈍重だが迂闊な接近は避ける。二本の角より電撃を発し、砲からもワイヤーで繋がった手を伸ばして攻撃するらしい。他にも未確認の格闘型があり、水中型は主力部隊で撃破したらしい。空戦型は現在、紫藤とオルコット、鳳の三名で対処しているとの事だ』

同時にアップデートされていく敵機体の情報、それはまさに今必要な情報だった

そして主力部隊の方では空戦型であるガンダムヘブンズソードとの戦闘が開始され、その支援として別のストライカーを装備したコスモグラスパーが飛んでいく

情報によりグランドガンダムと呼ばれる存在である事を確認したラウラ達は、その対処法も伝えられた事で一気に攻勢に出る

「全機、奴の生体ユニットを狙え！幾ら装甲が厚く再生しようとも、その根幹を為す生体ユニットを潰せば活動出来ん！」

その生体ユニットがあるのは胸部となっている、そこに向けて全ての機体が持てる火力を注ぎ込む

「どうだい！」

「……ダメだ、後一步というところで！」

しかしグランドガンダムは耐えきる、装甲は削られたが周囲に残存するデスネービーを吸収、修復の為のエネルギーと素材に変えて耐えきったのだ

全ての機体が持てる火力を注ぎ込んだ事でリロードが必要となっている、こうしている今も再生が始まるうとしているそんな中、一機で飛び出した機体が居た

「クロエ!？」

「姉上、何を!？」

されはバンシィ・ノルンを駆るクロエであり、撃ち尽くしたビームマグナムを捨てると左手にアームドアーマーVNを装備し、一直線にグランドガンダムへと突き進む

だが自らに止めを差そうと向かってくる敵の存在を認識したグランドガンダムは二本の角、グランドホーンより電撃を発して足止めをする

普通のISでは考えられないパイロット本人を狙った兵器、ISで守られているとはいえそれは最低限、全身を貫く電流の痛みにクロエは苦悶の声を上げる

だがその意志は折れてはいない、普段は閉じているその目をしっかりと開き、眼前の敵を見据える

「コウタさんいつだって、頑張ってるんです……私は、護られるだけで

なく、私もコウタさんを護りたいんです……だから、だから！」

電撃で動きを止めたクロエに対して四本の腕を伸ばすグランドガンダム、周囲の味方がそれを防ごうとするも腕が到達する方が早い間に合わない、誰もがそう思った時——

「貴方もガンダムだというのなら、私に力を貸して下さい、バンシィ！」

——全身の装甲部が展開し、黄金色の光が周囲に溢れ出てその腕を押し退ける

「ああああああッ!!」

アームドアーマーXCを介さないデストロイモードの発動、クロエの想いに反応したサイコフレームが力場を形成し電撃さえもはね除けた

そしてアームドアーマーVNが展開し再生を始めているグランドガンダムの胸部に組み付き、超振動により内部に存在する生体ユニットを破壊する

生体ユニットが無くてはDG細胞は活動出来ない、こうしてグランドガンダムは撃破された

「ハア……ハア……」

IS部隊による一斉射撃を耐える為にも全てのデスネービーをグランドガンダムが吸収していた為、周囲に敵影はない

その事により緊張感が緩んだクロエは砂浜に膝を着く、それに慌てて近寄ったラウラが肩を貸す

「全く、無茶をし過ぎだ姉上」

「コウタさんは二機の四天王と交戦しているみたいなので、私が先に倒れる訳にはいかなかったんです。あと、姉じゃないです」

「相変わらずだな、貴方は。こういう時くらい、受け入れて欲しいものだが」

何はともあれこの場合は勝ったのだ、ならばこのまま姉を休ませても問題あるまい、そうラウラが思っていた時、一機のISが近くに着陸する

それはエールストライカーを背中に備えたジェガンだった

「おお、康太か。此処に来たという事はそちらも終わったのだな。聞いてくれ、姉上が敵四天王に止めを差したのだぞ」

ストライカーパックを装備出来るジェガンなど康太のストライク・ジェガンしか存在しない

ジェガンは一度撃破され動かなくなったグランドガンダムを見た後、ラウラに肩を借りているクロエを見てゆっくりと歩み寄っていき

「——えっ?」

——次の瞬間、エールストライカーから抜き放ったビームサーベルでクロエとラウラを纏めて横薙ぎに斬り捨てた

32話 最終兵士

予想だにできなかったジェガンからの不意打ちを受けたクロエとラウラは回避も反撃もする事が出来ずにビームサーベルの一撃を受け、機体の絶対防御が発動する

それにより二人は命に別状はない、だが戦闘で消耗した状態での絶対防御の発動は残っていた機体のエネルギーを全て使い果たし、二人の機体が強制解除される

ジェガンはそれを見て今度こそ止めを差そうとビームサーベルを構え直し、そこにビームライフルの射撃が割り込む

「うおおおおおっ!!」

更に一夏がクレセントムーンを構えて瞬時加速により突進してくると執着することなく退いた

ジェガンが持っているビームサーベルはエールストライカーに装備されていたSEED系技術の物である、故に斬り結ぶという事が出来ないと分かっているからだ

「康太！お前、自分が何をしてるか分かってるのか!？」

振り抜いたクレセントムーンを構え直し、一夏が怒気を強めた口調でジェガンに向かって問い掛けるが返ってきたのは沈黙、そして振られるビームサーベルによる攻撃だ

先程ビームライフルを撃ったシャルロットはガーデン・ストライカーのシールドを前に向けて後ろにクロエとラウラを庇い、ライフルを向ける

何故味方である筈の康太が此方を狙うのか、デビルガンダムという存在を康太が予め知っていたという事を思い出したシャルロットは裏切りという可能性が脳裏を過る

だが後ろで倒れていたクロエが体を起こすとジェガンを見据えてはつきりした声で告げた

「アレは、コウタさんではありません。別の機体です」

「クロエ!?!体は平気なの!?!」

「はい、なんとかか……それより、アレはコウタさんじゃありません。別

の敵です」

「別つて、でもストライカーパックを——」

『くーちゃんの言ってる事は本当だよ。主力部隊に付けてた無人機のジエガンが一機、さつきから応答しないの。そして、こーくんは今も前線で四天王の一機と交戦してる。だから目の前のアレはこーくんを騙る偽物だ!』

「偽物!?良かった、なら遠慮なく行ける!」

康太との戦闘になるかと覚悟した一夏だったが、それが偽物と分かると躊躇う理由も無くなった

クレセントムーンを上段に構えての振り下ろし、ユニコーンの扱いにも慣れて生身と同じように全身を駆使して放つ一撃は並みのISでは受け止める事も出来ない

だがジエガンは攻撃が当たる瞬間に一歩横に動くという最小限の動きだけで避けた

「なっ!?!」

自分でもかつてない程に研ぎ澄まされた一撃だった、そう確信出来ただけに一夏は此方の対応を許さないギリギリで避けたジエガンの動きに驚愕する

更にはクレセントムーンを振った勢いを利用され足を払われると背中から地面に投げ飛ばされ、受け身も取る事が出来ずにその衝撃を背中に受けた

呼吸が詰まる、痛みで視界が明滅する中でジエガンがビームサーベルを構えて突きを放とうとする

「一夏!」

しかしそれは咄嗟に箒が放った空裂によるビームで阻まれた

広範囲を狙うビームが横薙ぎに放たれる事で地面に倒れる一夏の眼前を通り過ぎていく

ジエガンは上に飛ぶ事で回避し、攻撃が通り過ぎた後に着地した

何処から拾ったのかジエガンのシールドを構え、片膝を着いて新たに腰からビームサーベルを抜いて持つ姿には言い知れない威圧感が感じられた

「何なのだ、この動きは!?!あれは単なる無人機ではないのか!?!」

『箒ちゃん、皆、良く聞いて。無人機のジエガンは全てこーくんのデータが反映されてるんだけど、その機体はリミッターが外されてる。普段は模擬戦とかやってる時のデータなんだけど、リミッターを外すと実戦の時の、IS適性Sランクの時のこーくんのデータが使われるの。真正正銘、本気のこーくんを相手にしていると思って』

東の説明から全員の頭に浮かんだのは圧倒的な性能差をはね除けて第四世代機である紅椿に傷を付けた程の技量を見せた康太の姿だった

あの時、一時的にIS適性がSランクという世界レベルまで押し上げられたと聞いている

そんな存在を前にして専用機持ち達は足が止まる、だがそれを真に受けていない者達も居た

「例えそうだとしても、相手は一機!」

「複数機で囲めば勝機はある!」

「たかが学生ごときに!」

それはIS学園の教員部隊の三人である、それぞれ打鉄やラファール・リヴァイヴを身に纏い貸与されているビームライフルとビームサーベルでジエガンを狙う

だがそれらの攻撃は全て空を切る、ビームライフルは避けられ、接近したところでビームサーベルはシールドで受け止められる

ならば一機が注意を引き付けている間に他の二機でと掛かるが、即座に斬り結んでいた打鉄に膝蹴りを入れると反転、ビームライフルを構えるラファール・リヴァイヴとの間にもう一機のラファール・リヴァイヴを挟みビームサーベルを構えて接近、シールドで殴り付けた所でパイロットの頭を掴み、もう一機に接近する為の楯とする

味方を撃つ訳にはいかないその教員はどう対処すべきか判断に迷う、そしてその迷った一瞬の間にジエガンはビームサーベルでラファール・リヴァイヴを斬り捨てた

絶対防衛の発動、それに伴うエネルギーの枯渇による機体の強制解除、まだ残っているラファール・リヴァイヴもパイロットが殴られた

事で昏倒としている間に同じ結末を迎える

そして最初に斬り掛かった打鉄のパイロットが腹部の痛みから立ち直り顔を上げた時、そこにはラファール・リヴァイヴが持っていたビームライフルを此方に向けるジエガンの姿があった

「こ、こんな事が――」

普通ならば拾ったISの武器はロックが掛かっただけで使えないが、ジエガンはビームライフルをDG細胞で侵食する事でロックを無効化していた為にそのまま撃てた

こうして第三部隊に配属されたIS学園教員部隊は全滅する事となったのである

僅か五秒にも満たない時間で起きた一方的な戦闘、そしてジエガンは不気味に光るバイザー部分を残る専用機持ち達へと向けるのだった



一夏達が予想もしていなかった強敵を相手にしている頃、本物の康太もまた強敵を相手に戦闘をしていた

ガトリングガンを備えたI. W. S. P. のコンバインドシールドを左手に、散弾を装填したバズーカを右手に構えて実弾による攻撃で空を駆ける可変型のデビルガンダム四天王、ヘブンズソードを相手にする為である

「慣れない武装で、狙いが……!」

「しっかりとしなさい、セシリア!泣き言言ってる場合じゃないでしょ!」

「分かっていますわ!けど、相手が速すぎます……」

康太からの情報でヘブンズソードはエネルギー吸収能力がある事が分かっていて、その為にエネルギー兵器が主体となるセシリアは康太から貸与されたジム・スナイパーII用の75mmスナイパーライフルを構えている

鈴も同じく康太から渡されたブルパップ・マシンガンを両手に弾幕を張る、しかし空中を縦横無尽に駆けるヘブンズソードには掠りもしない

「厄介だな、完全に遊ばれてる」

「何か弱点はありませんの？」

「強いて言うなら可変型故の関節部の脆弱性だが、まず当たらない事にはな……」

ヘブンスソードの武装も基本は近接戦闘に使う為の物だ、康太達は弾幕を張る事で相手を近付けないようにしているが、その弾切れとなる瞬間を向こうはまっている

「残弾も残り僅か、となると向こうが接近してきた時を狙ってカウンターを放つべきでしょうか？」

「このままジリ貧になるよりは良いんじゃない？」

「他にも武器はあるが……いや、来た！追加装備のお出ましだ！」

リスクはあるが敵も近付いてくる事から攻撃も当たる近距離での戦闘に移行するか、そう三人で相談していると康太が受け取った信号に喜びの混じった声を上げる

見ればこの場へと一機の無人支援戦闘機、ラビットフット社のコスモグラスパーが向かってきている

それには後部にこれまでのストライカーパックとは違う装備が接続されており、康太は自分からもコスモグラスパーに向けて動く

「換装中の援護頼む」

「ちよつ、いきなりね!?!」

「けど打開策になるならやらない手はありませんわよ!」

当然ながら換装中は無防備となる為、ヘブンスソードが狙ってくる可能性もあった

鈴とセシリアは唐突に康太から言われたものの、ちゃんと弾幕を張って康太を守る、その間に康太は換装を済ませ、それまでの比ではない速度で空へと飛翔する

「何よアレ、戦闘機？」

「変形、しましたわね」

その新装備を身に付けたジェガンの姿は人型とは言い難いものであった

背部と両足には大型のブースターを装備し、左手には機体全体を覆

える程の巨大な楯を手に行している

だが一番の変化はその三つを合わせた時である、シールドを機体前面に固定し、シールドの端が翼として展開、センサーを備えたストライカーパックの機首と合わせて戦闘機のような姿に変わったのだ

Gフライト、それが康太の新たな翼だった

とはいえ擬似的に可変機としての能力を得ているのみに過ぎず、全体的にはヘブズソードに劣る

それでも対抗は出来るようになった康太は武装として展開した複合型特殊武装シエキナーを装備してヘブズソードを追う

ガトリングガンとしての機能、ビームランチャーとしての機能、マイクロミサイルランチャーとしての機能を一つに集約したペイルライダー・キャバルリーの装備である

連射力に長けたガトリングガンでまずは当てる事を優先してヘブズソードを狙う

それを避けたヘブズソード、後ろから追う康太、それはISの戦闘というよりは戦闘機が行うドッグファイトのようであった

互いに交差するような軌道を描く二機、そして不意にヘブズソードが変形して急減速、康太の後ろを取る

そのまま翼を広げてヘブズトルネードという竜巻を発生させて攻撃しようとした

しかしそれに対して康太も動く、変形し両足のブースターを全開にして急減速を掛ける康太、それまで前方に向かって進んでいた推力に対して正反対に掛けられた力によって康太の体にはPICでも打ち消せない程のGが掛かる

素人であれば意識を失う程の負荷、だが康太は普段のトレーニングと、何よりも自分の意思のみで耐えきるとヘブズソードに向けてシエキナーを向けた

そしてヘブズソードが竜巻を放つと同時にビームランチャーを発射、それはヘブズソードの翼を撃ち抜き、竜巻がGフライトを破碎する

だがジェガンの姿はそこにない、見失ったその姿を探すヘブズ

ソードだが、不意にその機体にワイヤー付きのクロウが食い込む
そのワイヤーの先に居たのは康太である

「敢えて言わせてもらおう……紫藤康太であると!!」

今の康太の手に握られているのは対艦刀シユベルトゲベル改、その切っ先は真っ直ぐとヘブンスソードに向けられている

そして逃げようにもワイヤーで繋がったヘブンスソードは逃げられない、ワイヤーを巻き取り、自身も加速しながら康太はヘブンスソードにシユベルトゲベル改を突き立てる

「斬り捨て、御免——つ!!」

そこで康太は止まらない、そのまま刀身にビームを展開し、突き立てた状態からヘブンスソードの頭上に抜けるようにシユベルトゲベル改を振り抜き、その上半身を両断する

内部の生体ユニットごと両断する一撃、これによりヘブンスソードも討たれたのだった

「康太、やったわね!」

「見事な太刀筋でしたわ、康太さん!」

敵四天王の撃破、それに喜ぶ鈴とセシリアが康太の側まで寄ってくる

だが康太は何も反応を返さない、その事を不審に思っていた二人だが、康太は左手を頭に伸ばすとジェガンの頭部を量子化させた

その表情は苦悶に歪んでおり、呼吸も乱れている、尋常ではないと判断した二人が焦る中、康太は吐血する

咄嗟に左手で口許を押さえる康太、その後でその左手についた大量の血を見た後、自嘲した

「この程度のGに、体が耐えきれんとはな……」

無理矢理に酷使した肉体から力が抜けていくのを自覚し、康太はそのまま意識を手放した

康太の纏っているジェガンもまた、制御を失い海へと向けて落下していく、それを慌てて鈴とセシリアが回収する為に機体を降下させていくのであった



「織斑先生、クロニクルさんとボーデヴィツヒさんの回収完了しました！」

「よし、後は主力部隊か。状況はどうなっている？」

「先程、オルコットさんより敵四天王の撃破の報がありました。ただ、その撃破した紫藤君が負傷してるとの事で……」

「紫藤が負傷だ?!? そうか、無事であればアレを抑えられると思ったのだが……」

「そう言う千冬の目の前の画面には旅館前で戦闘を行う一夏達の姿があつた」

「圧倒的なまでの力で教員部隊を蹴散らした後、一夏がなんとか抑えている状況だ」

「織斑先生、主力部隊から敵が退いていくと連絡が！」

「四天王の撃破が引き金となつたか……可能ならば殲滅したかつたが、此処までの被害を考えると深追いは禁物だな。主力部隊は可能ならば第三部隊の支援を行うように伝えろ。少なくとも奴等にI S コアを渡す訳にはいかん」

「幸いというべきか、デスバーデイが撤退しても侵食されたジエガンが撤退する様子はない」

「だがその能力は高く、普通のパイロットでは時間稼ぎにもならないという点が厄介となる」

「一夏達が撃破されずに持ちこたえているのも機体性能によるものであつた」

「自分が出撃しようにも今は機体がない、その無力さに千冬はきつく手を握り締めていた」



「ブルー・ティアーズ、帰投しました！ 康太さんをお願いします！」
「分かつた。にしても、これは……戦闘ログは見たけど、負荷の高い機動をして内臓破裂つて……」

「戦闘での負傷はそれなりに見てきた覚えのある校医はセシリアから受け取った康太の容態を見てそう呟く」

「このような症例などは過去に例がなく、一先ずは医療用ポッドに入

れて再生治療を行おうとした

しかしポッドに入れる前に束がやってきた、その手は未だに端末を操作しているが、視線は康太に向けている

「随分とポロポロだね、こーくん。正直、もう休んで良いと思うけど、まだ戦う?」

「ゴフツ……やりますよ。試作品ですけど、医療用ナノマシンがありましたよね?その投与をお願いします」

「んー、治療として使うだけなら分かるけど、そこまでして出撃したい?確かに私の子供とも言えるISコアを取り込んだのは許せないけど、いずれはエネルギー切れで止まるよ。こーくんがそこまでして出る必要はないと思うけど?」

「それでも、です。あれが過去のオレのデータなら、それを超えないとオレは前に進めない。ただのオレの意地ですよ」

「……………ふう、仕方ないね。けど無茶はしないこと。まあ、今の状態で出撃しようとしてる時点で無茶なだけだよ」

「そんな道理、オレの無理で抉じ開けてみせますよ」

「はいはい。装備はシラヌイにしておくよ。多分、今のこーくんなら使いこなせるからさ」

「分かりました。感謝します、博士」

「無理無茶無謀、それでも前に進もうと足掻き続ける。その姿勢は私も好ましく思うからね」

此処に辿り着くまでに目覚めていた康太は軽く咳き込みながらもしつかりとした目で束を見る

束もまた、康太の目に浮かぶ尽きない闘志から止める事は出来ないと悟り、量子化していた注射器を取り出すと康太の首に当てて中のナノマシンを投与する

「負傷箇所を設定して傷口を塞ぐように動かすけど完治まで数分は掛かるよ。それまでに出撃準備をするね。あと、あんまり急激な機動をすれば塞ぎきれなくなった傷口が開くから注意して」

「善処します」

「そこは確認して欲しいけど、まあこーくんだしね。それじゃあ、改め

て行つてらっしゃい」

「行つてきますよ、博士」

そして数分後、康太は完全に癒えてはいない体で再び飛翔した



「ぐわあっ!？」

「箒!? クツソオオオオツ!!」

ジェガンと対峙していた一夏、箒、シャルロットの三人は窮地に立たされていた

侵食されたジェガンの動きは普段の見慣れていた康太の動きでありながら、その反応速度がそれまでの比ではない為に攻撃は当たらず、防御の隙間を縫つて攻撃を当てて来ていた

現にシャルロットはガーデン・ストライカーの楯を保持していたアーム部分を全て切断され、今もまた箒が攻撃を受けて紅椿が墜落する

絶対防御があるから死なないとはいえそれはISが展開されている間だけ、エネルギーが尽きれば生身になってしまう

今の攻撃で紅椿のエネルギーは枯渇寸前であり、一夏は箒の補給の時間を稼ぐ為に前に出る

クレセントムーンは初めの内に刀身の半ばを斬られた為に今はビームサーベルを抜いて対処していたが、それも限界に近づきつつある

ジェガンの動きに着いていく為のデストロイモードの発動、その限界時間が直ぐそこまで迫っていた

「一夏、箒は下がったよ!」

「助かった、シャル!」

一先ずは狙い通りに箒を退避させる事に成功した一夏は安堵する、しかしその小さな緩みを狙いジェガンが動く

シャルロットがカバーしようにも射線上に一夏が被るように動く為に撃てない、結果一夏はビームサーベルによる攻撃でユニコーンの装甲の一部を斬られ、体勢を崩して尻餅をつく

続く二撃めを放とうとビームサーベルを構えるジェガン、その刀身

が振り下ろされた時、一夏とジェガンの間にビームによる幕が展開される

そして一夏のユニコーンに表示される新たな友軍の反応、それは康太のストライク・ジェガンを表すものだ

「康太！」

「これより戦闘を開始する。行け、ドラグーン！」

一夏とジェガンの間に幕を張っていた三基の砲塔、それと同様の物が更に四基、康太の機体のバックパックから飛び出し、それぞれが空中を移動して砲撃を行う

一撃がD型のビームライフルと同等の火力を持つその攻撃に対し、侵食ジェガンは空中へと退避したが、それを追って康太と七基の砲塔、ドラグーンが追う

全方位からの同時砲撃、それは一夏の知るセシリアのブルー・ティーズと同様の物だった

「すげえ……」

セシリアもかつては四基の制御が精一杯だったそれを康太は七基動かし、更には自身も戦闘を行っている

それがどれだけの処理能力を必要とするものなのか、一夏には想像もつかない

やがてドラグーンのエネルギーが切れたのか全てが康太のバックパックに戻っていく、それまで攻撃を避け、シールドで受け止め、更にはビームサーベルで斬り払うという動きをしていた侵食ジェガンはそこを狙い康太へと迫る

康太もまたビームサーベルを抜き、二機のジェガンは全く同じ動きで鏝迫り合いとなる

そして同じタイミングで蹴りを放ち、二機はその勢いを利用して離れる

全く同じ動き、同じ思考、康太とそのデータを元に生まれた存在の能力は同等だった

しかし、明確な違いが存在する、パイロットが同じでも機体が違うのだ

距離が離れたと同時に康太はドラグーンを射出、射撃を行いつつ自らはビームサーベルで侵食ジエガンと斬り結ぶ

そして鏢迫り合いとなった時、ドラグーンが侵食ジエガンを包围、砲撃を行おうとした時、康太と侵食ジエガンの間に放られたハンド・グレネードが炸裂する

侵食ジエガンの持っていた装備であり、自身が傷つく事も承知の自爆攻撃は同じ状況ならば康太も選択した事だが、機体の違いでそこまですいに至らなかった

機体のダメージによりドラグーンの制御が疎かとなり、その隙に侵食ジエガンがビームサーベルを振るいドラグーンを撃墜していく

そして康太は覆われているジエガン頭部の中で吐血する、グレネードの衝撃で傷口が開いたので

「ゴフツ、グッ……オオオオオオオオオオオオツ!!」

しかしその眼から戦意は消えていない、ビームサーベルを握り直し、その切っ先を正面に向け、瞬時加速を繰り返す

それは侵食ジエガンも同じであり、同様にビームサーベルを構え瞬時加速を行う

そして二機が交差した後、決着が着いた

康太は左脇腹の辺りを装甲ごと斬られ、絶対防御が発動、傷口が開いた上に瞬時加速による無茶な動きにより出血が増加、そのまま意識を失い海へと沈んでいく

だが侵食ジエガンはそれ以上のダメージであった、その胸部、ISCコアがある位置にビームサーベルが突き立てられており、致命的な損傷を受けていた

機体は砂浜へと落下していき、盛大に砂煙を上げて墜落したのだ

◆◆◆
それは間もなく活動を停止する筈だった

与えられた命令を果たし、敗れ、残された僅かな時間の中、死を迎える事になるまでの己を打ち倒した存在を見やった

敵だと言われたそれ、己の眼は確かにそれを敵だと認識している

だがその眼とは別の場所で、その認識を示す表示とは別に、その敵の中から何か小さな光を放っている事に気がついた

海原へと沈んでいこうとしている、消えてしまいそうな光を、それはどうすれば良いのか、知っているような気がした



「康太！康太どこだ!？」

「康太さん、返事をして下さい!！」

「康太、返事しなさいよ! 何処に居んの!？」

「康太ー! 何処に居るのー!？」

康太と侵食ジェガンの戦闘が終わった後、一夏とセシリア、鈴、シャルロットの四人は海へと墜落していった康太の搜索をしていた

だが搜索を始めても康太は見つからない、ジェガンを身に纏っていたから溺死はしないだろうが、最後に確認されたバイタルから傷口が開き出血しているのは確認されていた

更にはジェガンの反応も確認されないのだ、機体の機能に何らかの障害が発生したと見てまだ動けた面々での搜索が行われている

しかもISのハイパーセンサーを利用しても見付からない、その事に搜索に当たる四人は焦りを感じていた

「この辺りに落ちたのは間違いない筈なのに……!？」

「もう一度、今度は範囲を広げてみましょう。私は沖合いに向かいますわ!！」

「なら私は海岸に沿って探すわね。シャルロット、アンタは反対に向かいなさい!！」

「分かった! それにしても、本当に何処に行つたんだらう、康太……」
何故か見付からない康太、改めて範囲を広げ探そうとした時、四人の頭にイメージが浮かぶ

「な、何だ、このイメージ!？」

「アンタもなの! 私も、何か急に頭の中に浮かんで……」

「皆さんもですか!?! 今度は何が起きたんですか!？」

「で、でも、このイメージって……」

四人の中に浮かんだイメージは座標のような物で、視界にはその地

点に不思議な光が見えていた

ISのハイパーセンサーとも違う、不思議な光、だがそこに行かなければならないという思いに突き動かされてその場所へ、海中へと飛び込む

そこにはデスネービーの残骸が彼方此方に沈んでいた

そしてその残骸を試しに退かしてみると、そこにはジエガンが居た同時にISとのリンクも復活する、康太のバイタルは出血こそしているものの命はまだ無事だった

『康太！生きてる、まだ生きてるぞ！』

『ええ、急いで治療の為、搬送しますわよ！』

『なら邪魔な残骸を退かさないとね！』

『うん！まだ怪我が分からないけど、見付かって本当に良かったよ！』
こうして、康太は四人の手により救助され、全ての騒動に終止符が打たれた

未だに全ての問題が解決している訳ではない、だが一先ずは安息が訪れる、その為にも康太を連れ五人は旅館へと帰投した

33話 暗雲

全ての戦闘が終結し、IS学園の作戦行動は終了となった

結果として全ての機体が少なくない損傷を負い、教員部隊の機体に
関しては打鉄とラファール・リヴァイヴが全機大破、ジェガン・ライ
トアーマーに関しても中破という結果になった

他の専用機に関しても差はあれど損傷を負っている、中でもジェガ
ンが一機、敵の侵食を受けて敵に回り撃墜された

それも世界最強のISを二十以上投入しての結果である、この結果
は秘匿されたものの、関係者が受けた衝撃は大きい

そんな中、各専用機持ちは戦闘での疲労を癒やす為に温泉に浸かっ
ていた

「はあく、生き返るわねえ〜」

「今回ばかりは鈴さんに同意ですわ。こんな戦闘、これまで経験した
事なんて世界を見ても有り得ませんわよ。それこそ、数だけなら白騎
士くらいなものじゃないでしょうか？」

「そんな戦闘が初陣になったのだな、私は……」

「えっと、良い事じゃないかな？少なくとも、これから戦闘が行われて
も今回程大変じゃないって事だよ？」

「うむ、こういう時はポジティブに考えるべきだ。最悪を想定するの
は大事だが、あまり過ぎると士気を落とすからな」

「そ、そうだな。それにしても、あの後で康太があっさり目覚めるとは
……良い事ではあるが、少し頑丈過ぎやしないか、アイツ？」

箒の言葉に他の全員が無言で頷く、怪我をしてまた意識を失ってい
た康太だが治療用ポッドの中に放り込まれて一時間くらいで目覚め
たのだ

それには先に投与されていたナノマシンの効果があつたからなの
だが、それでも目覚めて歩けるようになって事からその頑丈さが分か
る

しかし後遺症が残るような怪我でなかった事が何よりだとも全員
思っていたのである

「そういえば康太で思い出したけど、何者なのかしらね？」

「鈴さん、あまり他人のプライバシーを詮索するものではありませんわよ」

「分かってるわよ。でも、色々予想するだけなら別に良いじゃない。ほら、何処か素人とは思えない所あるし、正体はあのデビルガンダムとかいう存在を追うエージェントとかじゃないの？」

「それなら、開発経緯を知ってたし、デビルガンダムを開発していた研究所とかに居たのかな？でもボク達と同一年だし、本人も研究者って感じじゃないか」

「なら両親が開発に関わっていた、と見るのが妥当だろう。同じ企業の所属とはいえ、私はまだ聞いていないからな」

「そういえば前に自分は孤児だと言っていたが、もしやそのような事が……」

今回の事件に於いて一番に事情を知っているであろう人物もまた康太である為、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの会話は康太に事についてとなる

そんな康太の正体に関して色々と考察する五人、結果として康太の正体に関して『デビルガンダムを開発していた研究所に両親が勤めていて、暴走した際に両親が巻き込まれて他界。それを止める為に動いている』という結論になった

傍らで同じく温泉に浸かりながらそれを聞いていたクロエは内心で苦笑しつつ、しかし康太が話さないのなら自分から言うべき事はないと黙っている

「あら、面白そうな話をしているわね。私達も混ぜて貰っても良いかしらっ。」

「貴女方は……」

「ナターシャ・ファイルス、アメリカ軍のISパイロットよ。今回は本当に助かったわ。改めてお礼を言わせて頂戴」

「イーリス・コーリングだ。同じく、世話になったな」

そんな会話をしている中に二人、米軍のISパイロットのナターシャとイーリスが現れた

共にバスタオルを巻き体を隠しているが、それが余計に成熟した大人の色香を放っているようにも見える

そしてイーリスが温泉にそのまま入ろうとして、それをナターシャが捕まえた

「ダメよ、イーリス。温泉に入る時はまず体を洗うのがマナーなの」

「えー、面倒クセエなあ」

「そう言わないの。貴女だって同じような事をされて、そのお湯に浸かるなんて良い気はしないでしょう?」

「分かった分かった、本当にナタルは真面目だなあ」

「貴方が不真面目なだけよ。そういう訳だからちよつと体を洗って来るわね。それからまたお話に混ざらせて貰うわ」

「え、ええ……」

と、どうやらまずはお礼を言いたかっただけらしく、話に混ざるのはついであらしいナターシャがイーリスを連れてシャワーの前まで向かう

そして体を洗ってから改めて湯船に浸かりながら会話の中へと混ざってきた

「それで、今回の事なんだけど、IS学園では敵の正体について知っていたという事で良いのかしら?」

「それは……」

専用機持ちとなった五人は返答に詰まる、康太の事を学園とは無関係な人間に話して良いものかと

「少し意地悪だったかしら? 正確には、アレに関する情報は学園側から提供されたわ。ただ、戦闘中に解析したにしては詳しいし、あの四天王っていう機体は出現していない機体の情報もあった。なら、誰か詳しい人が居たと見るのが普通ね」

根拠となる情報を挙げられて答えられない五人、がナターシャは一つ勘違いをしてくれた

「あんな馬鹿げた代物、まず間違いなく篠ノ之博士が関与してるわよね。だから私が知りたいのは篠ノ之博士は敵か味方か、それだけよ。本当に篠ノ之博士は信用して良いのか、貴方達の目から見た答えを教

えてくれないかしら?」

「え、ええ! 姉さんは人としてはアレですが、今回に関しては味方です!」

「そうですわ! 寧ろ止める為に動いていると言っても過言ではありませんもの!」

「そうね、あの人の事はあまり話した事ないけど、今回は大丈夫よ!」
「うんうん! ちゃんと自分の利益になる取引には応じる人だから大丈夫ですよ!」

「新参者ではあるが、社員として博士が関与している事は否定出来る。それだけは信じて欲しい」

勘違いしているならそのまま勘違いさせておこう、という事に全員の意思が統一された

その勢いに引つ掛かるものを感じつつも、取り敢えずは納得しておこうとナターシャが判断した事で一先ずはこの話は流れる

それからは話の流れを変えするという目的と、現役のISパイロットと話せるという貴重な体験からナターシャ、イーリスの二人との会話が続く

そんな中で出てきたのはIS学園の男性パイロット三人についての事だ

「三人とも良い子達よねえ。イチカ君は真っ直ぐで素直に好感が持てるし、カズアキ君も機体性能があったとはいえ最後まで敵と戦い続けた。そしてコウタ君はとてつもないタフね。あそこまで負傷して動けるISパイロットが他に何れだけ居るかしら」

「アレは、康太が特殊としか……」

「そうですね。あの執念は何処から来るのでしょうか?」

「あの坊主か。狙撃の腕もあったけど、あのガッツは私も気に入ったぜ。さつきナタルと見舞いに行ってきたついでにウチに勧誘したしな!」

『なっ!?!』

プロのISパイロットからの直々のスカウト、その事に全員が息を呑む

その中でも静かに、だが確かな怒りを放つ者が居た、クロエである
「ダメです。コウタさんは渡しません」

「あらあら、大丈夫よ、あっさり断られたから」

「そうそう、数年従軍すれば直ぐにアメリカ国籍も手に入るし、市民権も与えられる。おまけにパイロットとしてエリートコース間違い無しって勧誘したのに乗らなかつたからな」

「当然です。コウタさんは私と同じく束様の元で宇宙開発をするんですから」

康太に対して恋心を抱いているクロエだが、康太がちゃんと断つていたと聞いて多少は機嫌を直す

しかしまだ敵愾心は残っており、そんなクロエの様子を見てナターシャはクスリと笑みを浮かべる

「ふふ、そうね。彼もそう言っていたわ。でも気を付けてね。あの子は目的の為なら自分の命を簡単に投げ出すような危うさがあるわ。一緒に居たいのなら、ちゃんと繋ぎ止めてあげるのよ」

「それは……はい、分かっています。でも、コウタさんの邪魔はしたくないんです。それがコウタさんの望みだから……」

「難しいわね。なら、あの子が無茶な事をしないように支えてあげられないわね。大丈夫よ、恋する乙女は強いもの。貴女もきつと強くなれるわ」

「はい……」

「私達はもう上がるわね。明日此処を発つから、それまではお世話になるわ。それじゃあ、またね」

「頑張れよ。でないとまた勧誘に行くからな」

「分かっています!」

大人な二人に諭されるクロエは自身の想いを見つめ直す

今のままではこれから先も康太は無茶をするだろう、その時に自分はどうのような決断をすれば良いのか

夜空に浮かぶ月を眺めながらクロエはその答えを探して考え続けるのだった



「不思議な声のような物、か」

「そうなんだよ。俺だけじゃなくて、鈴とセシリアとシャルも聞いたんだ。康太は何か思い当たる事はないか?」

怪我から復帰したオレは部屋で一夏からオレが意識を失っていた時の事を聞いていた

そんな中で普通ではない現象が起きてそれまで見付からなかったオレを見付けたという

「それなんだけど、私が回収した侵食を受けたジェガンのISコアは破損が酷かったけど、実は最後の一瞬だけリンクが復活したんだよね。で、普通じゃない変化をしたの」

「そうなんですか、束さん?」

「そうなんだよ。ISにはそれぞれに独自の人格を設定してるんだけど、普通は表に出てくる事はないの。けど、侵食を受けたジェガンは最後の最後にその人格が強く出てきた。その思考パターンもこーくんのデータを流用してるから似ていたんだよね。で、既存の通信プロトコルには当てはまらない何かでいつくん達にメッセージを送ったみたい」

「何かって……」

「思うんだけど、こーくん。あのジェガンのISコアがニュータイプとして覚醒していたって可能性はない?」

共に話を聞いている篠ノ之博士が限られた情報の中から仮説を立てる

擬似的な人格があるとはいえ機械であるISコアのニュータイプ化、それは――

「絶対に有り得ない、なんて言えませんよ。あの世界ではバイオ脳と呼ばれる脳味噌と同じ生体部品を使った生体コンピューターが最強のニュータイプとも言われる人物の能力を再現してましたからね。DG細胞が何らかの作用を行って進化したとすれば、有り得なくはないと思います」

そもそも、猿がニュータイプ能力を持つ事さえあるのだから何でもありだろう、自己進化はDG細胞だけでなくISも行えるのだから

「そして、ニュータイプが心の声で仲間を無事に脱出させた事もありますし、それでオレの位置を把握して一夏達に教えたって事もおかしくはないと思いますよ」

「なるほどねえ。敵になったけど、助けてくれたのもあの子な訳かあ」
ニュータイプという種への進化の可能性、その一端でも知る事が出来たなら十分な収穫だろう

それがオレのデータを基にして生まれたのなら、オレもまたニュータイプになれる筈だから

知りたい事を知ったのか、篠ノ之博士はそのまま部屋から出て自分の部屋へと向かった

その後、同室である一夏と適当に話をして、そのまま時間が過ぎていくのだった



一夏からの話を聞き、康太からの情報を受け取った束は自室でモニターを眺めながら思考を続けていた

「やっぱり、コーくんにはニュータイプとしての素質がある。そして人と違うのは、やっぱりこのデータが示している」

そこに映るのは康太の脳波をモニタリングしたものであり、IS經由で入手したものだ

そのデータの中ではとある時間から一部の数値が跳ね上がっている、その時間は康太が負傷しながらも戦闘し、シラヌイのドラグーンを扱っている時である

「生存本能によって能力の底上げ。過去にも二度、実戦に於いて見られた事象。だけど、今回のはそれらとは桁違い」

比較として康太がブルーデイスティニーとシュヴァルツェア・レーゲンとの戦闘データも出す

どちらも同じように数値の上昇は見られるが今回程の劇的な物は見られない

そして今現在のリアルタイムなデータ、その康太の脳波は戦闘時程ではないにしても以前よりも数値が大分上昇したまま維持されている

「この波形が感応波なんだね。これがサイコミュを動かしてドラグーンを操作した。そしてミノフスキー粒子にも反応している。此処まで来ると間違いないね、こーくんはニュータイプとして目覚めつつある」

そこまで言って、東は笑う、それは無邪気なようであり、何処か歪んでいた

「くふくふ♪良いねえ、すっごく良い！天然物の私とも、人工的な天才であるちーちゃんとも違う、ただの人間の身でありながら私達とは違う方向へと進化している！私が一度は見限った人間という種に、新たな可能性を指し示してくれた！」

初めて会った頃はこんな事になるなんて思っても見なかった、ニュータイプを目指すというのも本気にはしていなかった、だが彼はそれをやってみせた、極限状態に於いて乗り越える為に進化してみせた

それがどうしようもなく彼女には楽しい、自分の予想を上回る人間なんて世界に何れだけ居るといえるのか

東の笑みは歪みながらも、彼女としては数少ない心の底からのものでもある

「もつともつと、その輝きを見たいなあ。あつと、そういえばちーちゃんからデビルガンダムに関するデータ提出を頼まれてたんだった。危ない危ない」

しかし彼女は多忙である、直ぐに自分が親友から頼まれていた仕事の事を思い出すと早速それに取り掛かる

「アレの危険性は私でも引くレベルだからねえ。あんなのに構って宇宙開発の邪魔されたくないし、凡人達が狩り出してくれるなら大助かりだよ。詳しいデータは今後の解析も加えるとして、基本的なデータはこーくんのが流用出来るね。ちゃんと執筆者のところにもこーくんの名前を入れておいてあげよつと！」

後日、世界各国の首脳陣に対してIS学園から警告としてデビルガンダムの存在が公表される事となる

その際に添付された資料にはデビルガンダム軍団の各機体の特性

や対処方が盛り込まれており、各国の軍はこのレポートを基に戦術を
組み立てる事になる

康太の用意したデータを多く流用したこれが俗に『シドウ・レポ
ート』と呼ばれるようになり、それに康太が巻き込まれるのはもう少
先の話である

◆ 某所にて、一切の明かりがない部屋の中に光が灯される、暗闇の中
から浮かび上がるのは円卓であった

しかしその円卓には座席という物が存在せず、人の代わりに黒いモ
ノリスが円卓を囲むように配置されていた

そんな中、モノリスの表面に数字が現れる、それは時間の差はあれ
ど円卓に設置された六基のモノリス全てにそれぞれ『01』から『0
6』の数字が表記される

『集まったようだな。では臨時ではあるが幹部会を始めるとしよう』
『やっとかい？僕は早く結果を知りたくて堪らなかったんだ。ようや
く報告されるんだね？』

『あら、せっかちな男は嫌われるわよ。それに、商人としても致命的
ね』

『そういつてやるな、03。今回の件に関しては02を責める事は出
来ん。特に、男であるならば尚更な』

『04の言う通りだよ。私だって今回の作戦には期待していたんだか
ら』

『その通り。要はそれが更なる金に繋がるかどうか、だ』

そんな中、01と書かれたモノリスから老人の声が聞こえると、0
2からは若い男性の声が、03からは女性の声、04から落ち着いた
様子の男性の声、05からは少し幼さの残るような女性の声、06か
らはあまり感情を感じられない男性の声が聞こえてくる

しかし彼等はそれが本当の姿と結び付く訳ではない、機械によって
作られた声を通じ、その役を演じている可能性もあると互いに知って
いるからである

『分かったわよ。それで今回の作戦、ギフトであるアルティメットガ

ンダムと呼ばれる兵器の実戦運用だけど、予想以上ね。少なくとも余計な第三者の介入が無ければ確実に米軍の最新鋭機を二機とも撃墜出来ていたわ』

03からの報告に各モノリスから感嘆の声が漏れる
彼等にとつてISとは金のなる木ではあるが、それだけで満足出来るような存在ではなかったからである

『素晴らしい！やはり理論に間違いは無かったという事だ！』

『その通りではあるな。が、03の言う余計な第三者とは何だ？』

声の聞こえる六人の中でも一番に喜びを表す02に対して賛同するが03の内容に気掛かりな事がある04は緊張感を持った声で問い掛ける

『かの天災と、その配下を含むIS学園による介入よ。第二段階として投入された四天王三機が全て撃破されたわ。しかも、入手した一部のログを確認したら四天王の名称も言い当てていた。これがどういう事か、分かるわね？』

03のその言葉に場が多少どよめく、予想はされていたが実際に耳にするとなるとやはり違う

『つまり向こうもギフトを確保してるって事だね！予想はしてたから、あまり驚きはないかな？』

『我々が確保出来なかったギフトの存在は確認されている。かの天災であれば、それに気付いても不思議ではあるまい』

しかし予想は出来ていただけに受け入れるのも早い、即座に状況に対応出来ないような患者はこの場には存在しなかった

『それで、そのギフトがどんな系統なのかは確認出来たのかい？ギフトは複数の系統に別れてる。アルティメットガンダムとその傀儡達に精通してるって事は、その系統って事かな？』

『さあ？そこまでは掴めなかったわ。けど、一つ言えるわね。向こうが手に入れたギフトの中に、生きた人間が居る筈よ』

その報告に先程よりも大きなざわめきが起きる、生きた人間というギフトは未だ彼等も目にした事がないからである

『成る程。我等でもまだ見た事のない存在か。よろしい、03は引き

続きその調査も進めると良い』

『了解したわ、議長。そういう訳で、IS学園側の素早い、そして的確な対処のせいで米軍ISの撃墜には至らなかった。でもその有効性ははつきりと示してみせた。詳しいデータはそちらにも転送しておくわ。一先ずは私からは以上よ』

03から他の五人に送られたデータは後で確認される事となるだろう

報告が終わった事で次なる議題は当然、今回の作戦の結果を踏まえてどのような手を打つか、である

『よろしい。全員、今回の作戦の結果は分かった事と思う。02、例のプロジェクトはどうなっている？』

『現在、ギフトから得た技術をフィードバックしているよ。アレは良いね、この世界を変える新たな力だ』

『ふむ、では後で進捗状況を纏めてデータを送れ。これより我々は本格的にプロジェクトを進める』

『了解した。これで、ようやくIS絶対論に終止符が打てるのだな』
『そうだよねえ。ISはISでお金になるけど、コアの数が限られてるのがネックだもん』

『当然、そこに投入される資金の額も決まってくる。それでは一定の利益しか見込めない』

『でも、このプロジェクトが成功すればそれも変わる。新たな概念は新たな争いの火種となり、経済を回すようになる。それこそ、私達を求めるべきもの』

『その通りだ。では改めてこの場で通達しよう。プロジェクトの第二段階への移行を開始する。概念検証用のアルティメットガンダムは封印処理を行い、その概念を受け継いだ新たな兵器開発の仕上がりに入る。此処に、【Project: Fallen Angels】を開始する。ISによって歪んだこの世界を、あるべき姿へと戻すのだ』

議長とも呼ばれる01からの号令に各モニリスが応えていき、その表面に浮かんでいた数字が消えていく

こうして誰も知らない内に事態は動いていく、その影は確実に世界

へと忍び寄っていくのであった

再会、友よ

34話 撮影

『2022年4月7日

親愛なるコウへ

そちらではそろそろ入学式もあり、新しい生活が始まっていると思います。きつと新しい出会いもある事でしょう。

私の方は9月に入学式があります。此方に引越してからこの違いにもすつかり慣れました。

おじさん、おばさんも元気ですか？私のパパとママは元気です。

それと、今度の夏休みには家族でそちらに行けそうです。久し振りの日本でまた会える日を楽しみにしています。

リナより』



七月も後半に入り、世間では学校は夏休みに入る

それはIS学園も例外ではなく、臨海学校による事件を経た後、何事もなかったかのように期末テストを行って終業式が行われて夏休みへと入った

そして夏休みが始まってから数日が経った頃、織斑家のリビングには一夏と一秋の他にも箒、鈴、シャルロット、セシリア、ラウラといったIS学園一年生の専用機持ちが集まり、学園から出された課題に集中している

「やっぱりこれだけ居ると捗るわね。康太達も来れば良かったのに」

「誘ったんだけど、別で仕事が入ったんだってさ。クロエも一緒だつてよ」

「姉上達はどうかやらラビットフット社としての仕事らしくてな。篠ノ之博士が珍しく外部からの仕事を請けたと言っていた」

「あの篠ノ之博士が請けた仕事だなんて、何ですか？確か殆どどの仕事は蹴っていると聞いてますわよ？」

「それより、一夏とラウラは呼ばれなかったのだな。仮にも同じ企業

だろうに」

「俺達はほら、あくまで籍だけ置いてある感じだから……それでいて給料が入ってくるのに、心が痛いけど……」

「まあパイロットと言っても私達は戦闘要員らしいからな。テストパイロットとしては康太の方が機体的にも適任らしい」

専用機持ち達が織斑家に集まっている理由というのは一夏が皆で勉強会を提案したからなのだが、この場に康太とクロエは居なかった。その時には仕事が決まっていたからである。

「まあ康太達については分かったわ。どんな仕事か知らないけど、流石に非合法って事はないでしょう?」

「ですがあのメンバーというのが少し不穏ですわね。何も無ければ良いのですが……」

「二人とも、康太達の評価酷すぎない?」

「流石にあんな事があつたら、ね。そういえばシャルロットの会社、新型のロールアウトが決まったって聞いたわよ。どんな感じなの?」

「あ、うん。今はボクの機体から得たデータの最適化作業中だよ。それで夏休みの最後、八月の三十一日に正式な発表会を予定しているんだ。実はね、そのテストパイロットとしてボクも参加する事になったんだよ」

「あら、それはおめでとうございます。イグニッション・プランでのライバル機ですが、お祝いさせて頂きますわ」

「けど確か、デユノア社の新型ってアレよね?ぶっちゃけ、他の国って勝ち目あるの?」

「うむ、私見だがデユノア社の新型が採用される可能性が高いだろうな。かつて私が乗っていたシュヴァルツェア・レーゲンよりも汎用性が高く、同等の砲撃能力を持たせる事も出来る機体だ。各国が開発した第三世代兵装もストライカーパックとして落とし込めば良いから、まず間違いない筈だ」

「そ、それでも、私のブルー・ティアーズのオールレンジ攻撃の優位性は——」

「確か臨海学校の時、康太が同じコンセプトのストライカーパック装

備してたわよね？しかも向こうは同時に七基動かしてたし」

「うっ!？」

「確かに私も見ていたが、素人目にも同じような兵器だったな。しかもエネルギーシールドを張っていたようにも見えた」

「ううっ!？」

「自分も、同じ装備でも選択式に出来るならその方が良いと思う。その、セシリアには済まないが……」

「コフツ……」

「あ、死んだ」

「デュノア社の新型機、『ストライク・ラファール』の情報は既に幾らか流れており、公式ホームページにもロールアウトの予定が掲載されている

既にその汎用性の高さから各国では採用の動きが出ており、欧州で行われているイグニッション・プランでは殆んど決まったと言っても過言ではない

だがイギリスのブルー・ティアーズを自身の専用機として持つセシリアはその事に対して机に突っ伏してしまった

「良いですわ、どうせ私なんて負け犬ですわよ。最近はライバル宣言した康太さんにも負け、イグニッション・プランでも負けるのですわ……」

「はいはい、拗ねないの。ほら、テレビでも見て気分変えなさいよ。皆もそろそろ休憩にしましょう」

取り敢えず昼も近くなったという事で休憩にしようと鈴がテレビを点けた

最初に映ったのはどうやらニュース番組らしく、鈴が番組表を見ようとした時、内容が新作映画の発表になる

それを見てからでも良いかとチャンネルを変えるのを待つ鈴、初公開という予告映像を見る

あらすじを聞くに女尊男♂が進んだ近未来を描いているらしく、行き過ぎたその思想により男性狩りとも言える迫害が起きている世界で、男女が対等に暮らしている小規模なコロニーが女性権利団体を相

手に戦い抜く様子を描いているという、昨今の風潮に真っ向から対抗する作品に珍しいと思いついて見たい

そして場面が切り替わると、赤と白の塗装が施されたジェガンが現れ、その背中から機体の全高程もある大剣を二本抜き放ち、地面に居た敵に向けて叩きつけた

『何でこんな事……また戦争がしたいのか！アンタ達は!!』

二本の剣の柄尻を合わせ頭上で回してから構え直すジェガン、それと同時に画面が斜めに分割され、ジェガンの顔の半分がパイロットの物と変わる

「「「「康太ア!?」」」」

そしてそれはこの場の全員が良く知る人物でもあった

◆ 『じゃあ、今は映画の撮影に協力してるのか?』

「ああ、珍しい依頼って事で博士が興味を持ってな。映画の内容を聞いたら、そのまま引き受ける事になったんだ」

その話が入ってきたのは夏休みが始まって二日が経った頃だった、ラビットフット社に来る依頼と言えば新型を寄越せだの、ISコアを寄越せだの、そんな馬鹿げた内容ばかりだった

既に入ってくるメールは件名で判断して中身も見ずに削除していた中で、映画撮影への協力依頼という一風変わった内容に目を惹かれたのは当然の事だろう

そして、それが反女尊男 \square 的な内容であるならば以前より女性権利団体を目障りに思っていた篠ノ之博士が乗らない訳がない、こうしてラビットフット社が撮影に協力する事となったのである

「紫藤さーん、そろそろ次の撮影の準備をお願いしますーす!」

「分かりました、今行きます!そういう訳だ、一夏。また何かあれば連絡する」

『ああ、そつちも頑張れよ!』

撮影スタッフに呼ばれた為、休憩を終えて端末を閉じる

どうやら話に聞いていた予告映像を見たらしく、一夏からの着信があったので連絡を取っていたのだ

夏休みの間、学生の身でもあるという事でオレの出番のシーンだけ優先的に撮影する事になっているが、それなりに出番が多いだけに時間は掛かる

おまけにオレは役者としては素人だ、その演技指導を含めてそこそこの数を撮り直している

撮り直しが少ないシーンはそれこそ戦闘シーンのみである、実戦経験者という事があるのか、その際の撮影だけは特に指摘が入った事はない、画の為に少しばかり殺陣を入れて欲しいとは言われたけどな

「おー、紫藤くん。今度は戦闘シーンだから、またよろしくね」
「はい、佐渡監督」

撮影場所に向かうとこの映画を取り仕切っている佐渡監督という人に挨拶される

映画の内容が反女尊男だから監督も男性かと思っていたが、佐渡監督は女性である

他にも出演者やスタッフの中にも女性がそれなりに居り、反女尊男映画の撮影とは思えないかもしれない

しかし監督を始め、その女性達も心から女尊男を疎ましく思っている人達である

佐渡監督は映画業界にも女尊男の波が来て自由な映画を撮れなくなる事を懸念して、他にも個人で理由は違えど反女尊男に賛同する人達を集めて映画を撮っている

先程公開されたばかりの予告映像だが、早いものでインターネット上では既にSNSを中心に女尊男を掲げる連中からのバッシングが始まっているらしいが、そんな物は何のその、全て無視している寧ろ荒れれば荒れるだけ注目度は高まる、もっとやれとまで言っていた

撮影に使うISは可能な限りで実機を用いている、例えばオレのジエガンだが、オレが演じる役である獅子堂劫火ししどうごうかの乗機という事になっている、役の名前がオレに似ているのは偶然だと思いたい……

そしてジエガンは今回はストライカーパックではなく、インパルスのシルエットシステムをベースにしてある

これは普段使用している装備を映画で映す事で手の内を晒す事を懸念しての事らしく、篠ノ之博士からの案である

とはいえ撮影中は火力を落としても、いざという時には戦闘にも使える辺り、実用性は全く損なわれていないのだが

と、そこまで考えてフォースシルエットを装備して空へと上がる、味方機との連携しての戦闘シーンを撮る為に、オレは意識を切り替えるのだった



本日の撮影を終え、オレは用意されていたホテルの自室に戻る

取り敢えずは慣れてきた事から撮影もスムーズに進むようになった為、今日で予定されているシーンの半分は消化した形となる

第三次大戦を経て荒廃した世界、男性狩りに遭遇し、そこで撃墜され行方不明とされたISを偶然に発見、起動した少年、獅子堂劫火、それがオレの役だ

そしてコロニーに拾われたところから物語の始まりである、なおオレは物語の鍵扱いで、男でもISを扱える理由を解き明かす設定である

「お疲れ様です、コウタさん。外出の準備は問題ありません。それとも先にシャワーを浴びられますか？着替えの方も用意してあります」
「ああ、ありがとう、クロエ。悪いけど、先にシャワーを浴びるよ。流石にこの時期にずっと外だとな」

「大丈夫ですよ。コウタさんのサポートは私の役目ですから」

今回の依頼を請ける時にクロエがサポート要員として一緒に来ていた

依頼では最初は男性パイロットとしてオレだけが呼ばれたのだが、佐渡監督はクロエを見た時にミステリアスな雰囲気のある事から急遽出演させる事を決定し、その撮影は既に終わっている

それで今は本来の目的だったサポート要員としての仕事をしようとしてくれているのだ

そんな訳でクロエが用意してくれた着替えを持ってシャワーを浴びた後、外出して適当な飲食店で食事を済ませる

費用は映画制作チームの方で負担となる、最初はもつと高いホテルだったが、辞退してある

そこに費用を掛けるなら他に、と遠慮させて貰ったからだ
予定ではあと五日、細かなシーンの撮影が残っている

上手くいけば四日で終わるかもしれないが、その為にも真剣に打ち込むとしよう



撮影に協力して更に三日が経過した、今回で実機を使った撮影は終了となる予定だ、ラビットフット社で用意出来る機体は今のところ、権利的な問題でもジェガンしかないので敵機は後でCGで差し替えの予定だ

そして最後の撮影に向けて監督との打ち合わせをしていた昼頃の事だった

「コウタさん、警戒待機中だった無人機のセンサーが近付いてくるISの反応を捉えました。機種は打鉄です」

「今日予定されていた、近くを飛行予定のISは？」

「ありません。事前に撮影場所としてこの辺りの空域も此方が貸し切っています。ISどころか民間機ですら立ち入り出来ません」

「そうなると思か。監督、招かれざるお客さんが来たみたいですね。迎撃に出ますので撮影スタッフには退避をお願いします」

「分かったよ。やれやれ、予想はしていたとはいえ仕方のない連中だねえ。悪いけど紫藤くん、お願いね」

「そういう契約でしたからね。フォースシルエット装備で出ます」

映画の内容から女性権利団体の横槍が何らかの形で入ってくるのは予想されていた事だ

それがどのような手段に出るかは兎も角、最悪としてISの投入も想定していた

だからISが出てきた時はオレ達で対処する、そういう契約が事前に交わされていたのだ

丁度装備は速度に優れたフォースシルエットを装備していたので迎撃に出るのは問題ない、なのでオレは空へと上がっていく

◆ その頃、撮影スタッフ達が避難した車内では――

「撮影用ドローンの方は大丈夫？」

「バツチリですよ、監督！様々な角度で高解像度で撮れますぜ！」

「うんうん、紫藤くんには悪いけど、生の戦闘の画なんてそうそう撮れないからね。戦闘には全く参加出来ないけど、この映像を使って映画のクオリティを上げるのと、誰か知らないけど面倒な連中に打撃を与える為に協力するから、許してね」

――退避中もドローンにて撮影を行うという、なかなかに逞しいスタッフ達であった

◆ さて、遠くから撮影されているとは知らない康太は所属不明の打鉄を迎え撃つべく、高度を上げて飛行していた

そしてあと少しで射程圏内に入るところで警告を出す

「接近中のISに告げる。これより先は現在立入禁止区域となっている。直ちに進路を変更されたし。繰り返し、これより先は現在立入禁止区域となっている。直ちに進路を変更されたし」

コアネットワークを利用した通信であり、IS同士であればまず間違いない聞こえているだろうそれに対する返答が来た

『男!? そう、貴様が世界で三人の例外ね！丁度いいわ。神聖なISを崇めないばかりか、醜い男共の味方をするような連中共々、此処で始末してあげる！』

「そうか。所属不明機を敵と断定。撃墜する」

相手の言葉から女性権利団体の手の者だと判断した康太は即座に戦闘体勢に移る

右手のビームライフルを接近中の敵ISに向けてロックするとま
ずは一撃、挨拶代わりに撃ち込む

『クッ!』

「威勢の良い事を言っていた割には大した腕じゃないな」

『黙りなさい！たかが一撃程度で!!』

牽制になれば良いな、程度で撃ったビームは打鉄の左肩を貫き、

シールドエネルギーを減少させる

あの程度の攻撃は専用機持ち達ならば簡単に避けられるものであり、相手の技量の低さを見た康太は拍子抜けといった表情を浮かべる。そして康太の挑発により距離を詰めた打鉄は標準装備であるアサルトライフルの焔備を使い康太を狙う

だが康太はバレルロールという飛行中に回転する技で銃弾を避けるとビームライフルからビームサーベルに持ち変えて更に距離を詰める

打鉄の方も武装を日本刀型のブレードである葵に変えようとしたが、それより先に康太のビームサーベルの方が早い

左肩から袈裟斬りにされ、大きくシールドエネルギーを減らした打鉄、康太はその横を通り抜けるように進んだ後、足を蹴り上げてAMBC機動により反転、背を向ける打鉄に対して瞬時加速で接近、左手にもビームサーベルを握りその背中をX字に斬り裂いた

「そ、そんな!?!」

「正規パイロットかと思っただが、所詮はテロリスト風情か。代表候補生にも遠く及ばないな」

機動力を担う背部のカスタムウイングが斬られた事でまともな戦闘も出来なくなった打鉄にそう言い放つと康太は駄目押しとばかりに蹴りを入れて打鉄を地面へと叩き落とす

それによって打鉄の減りに減ったシールドエネルギーがゼロとなり機体が解除される、康太は痛みに呻くパイロットを無視して落ちていた打鉄の待機形態であろうペンダントを拾い上げる

「篠ノ之博士、襲撃者のISを確保しました。コアの照合をお願いします」

『おっけー!ふんふん、それは日本にあげたコアで間違いないね。確か研究用に回されたコアの一つの筈だよ』

それから今頃は学園に設けたラボに居るだろう束と連絡を取りコアの照合を行う

そしてコアの出所が判明した後は倒れているパイロットに向き直る

「さて、お前には色々聞きたい事がある。覚悟しておくんだな」

「グ……男、なんかに……」

この後、拘束されたパイロットは司法機関に引き渡される前にラビットフット社からの尋問を受ける事になるのであった



その後、パイロットと機体を確保してからオレは一度IS学園内の篠ノ之博士のラボに向かった

撮影スタッフには念のためにクロエと無人機のジエガンを四機つけてある、生半可な戦力では仕掛けようとは思わないだろう

そしてそんなラボの一室に机と椅子を設置し捕らえたパイロットへの尋問を行っていた

ラボはIS学園のある人工島の地下にある為、こういう時は便利と言えた

「もう一度聞こうか。所属する組織の名、そしてその拠点は何処にある?」

「だから誰が答えるものですか!早く私にISを返して解放しなさい!」

しかし終始このような調子だ、無能で下等で醜く役立たずな男が話し掛けるな、ISを返せ、お前のISも寄越せ、罵詈雑言ばかりで聞き飽きた

だが根気よく付き合ってた、そして今ので三回目、仏の顔も三度までとは言うが、そろそろ良いだろう

「仮にその要求を叶えてやったとして、戻れると本気で思っているのか?」

「当たり前じゃない!?私はISパイロットなのよ!ISを持つ私が戻れば歓迎されるに決まっているわ!」

「そして隙を見てISを奪い、無能なパイロットは始末されるだろうな」

「な、何を……」

「お前はISパイロットじゃない。お前の仲間が言う、下等な男に負けた無能なパイロットだ。そんなお前が戻れば歓迎される?馬鹿を

言え、表向きは歓迎しておいて薬を盛って始末しISを奪うに決まっている。分かるか？元より貴様はもう戻れないんだよ」

「そ、それは……」

自分の置かれた状況が理解出来たのか、みるみる顔を青ざめさせる女

そこに部屋の扉が開かれて篠ノ之博士が入ってくる、いつものニコニコした表情で

「こーくん、もう大丈夫だよ。ISのログを確認して連中の正体は分かった。女尊男☒を掲げる世界的な女性権利団体ヴァルハラ、それが連中の名前だよ」

「成る程。けど、それならこの尋問の意味はなかったんじゃないですか？コアの確保で済んだでしょうに」

「ふふくん、分かっているねえ、こーくん。私はこれにチャンスを与えてやったんだよ。ちよつと頭を働かせれば分かる事なのに女尊男☒だなんて下らない事に囚われて思考を鈍らせないかどうかをね。もしも自力で答えに行き着いたなら、そうだねえ、まあパイロットとしての技量は低いけど飼っても良かったかもねえ」

「そ、そんな!?篠ノ之博士、私は——」

「けど駄目だったからね。警察にでもあげようかと思っただけど、別の拠点に戦闘時のログ付きで届けてあげよつか」

「あつ……ああ……」

最早希望など何処にもない死刑宣告にも等しい篠ノ之博士の言葉に顔色を青から白に変えていた

そしてあまりのショックにそのまま意識を手放してしまう、その様子に篠ノ之博士も呆れた顔をしている

「ハア、こんなのがISに乗れるんだからね。殺す気も失せたから警察にでも投げといてあげるよ。それでこーくん、女性権利団体ヴァルハラに対する報復なんだけど、ちよつと良いかな?」

「何ですか、博士?」

「此処ではなんだから部屋を移そつか。流石に機材とかなないとね」

もう興味がないパイロットは部屋の中に放置されオレは篠ノ之博

士に言われるがまま後ろをついていく

出る時に部屋の鍵をロックしたからあのパイロットが目覚めても出てくる事はない、そしてついていった先は篠ノ之博士の研究室であり、中ではエイフマン教授が機体の作成を行っていた、あの形状、まだ完全ではないがフラッグか？

「お爺ちゃん、前に頼んでた装備って出来てる？」

「ミス・シノノノか。前に聞かされた、わしの世界で後の世に出るガンダムを基にした装備の事かね？」

「そうそれ。今から行う作戦に使いたいんだけど」

「それならば向こうの2番と書かれたコンテナの中だ。しかし、その装備を使うという事は、対I Sではなく、対人戦か」

エイフマン教授はそう言うとおレを見た、その目には複雑な色が見てとれる

「その歳で、と思っってはいたがな」

「次の作戦で何が起るか、察しましたよ。ですけど、いつかは覚悟していた事です。きつと、必要な事になると、そう考えてはいました」

そうだ、いつかは来ると思っていた、試合ではなく、自分のエゴで引き金を引く時が来るといふ事を

そして予想は篠ノ之博士がモニターに表示した情報から現実に変わる

「これより報復行動として女性権利団体ヴァルハラの内支部の一つに強襲を掛ける。目標は施設の破壊、そして目撃者全員の殺害」

この世界に来て、宇宙を目指し、必ず邪魔になる物が出ると、それをどうするのか、考えていた

そして今日この日、オレは人を殺す事になる

35話 屍山血河

女性権利団体ヴァルハラの襲撃を迎撃してから二時間後、オレはとある山中でジェガンを展開して待機していた

眼下の麓付近には小さな人工の湖の畔に豪邸と言える建物がある、それこそが女性権利団体ヴァルハラの支部の一つであり、あのISが長期間あの支部の座標に留まっていた事から強襲する場所選ばれた

この場所まではジェガンを展開して飛行、音速を超えない程度まで加速した後はPICを利用した慣性航行で極力気付かれないように接近してきた

そして今も上空一万メートル程の場所でベースジャバーに乗って飛行しているであろう無人機のEWACジェガンが事前偵察で割り出した潜伏ポイントにて待機している

目の前には豪邸と共に様々な情報が映し出される、人間の位置、車両の位置、作戦開始と同時に狙うべき電波塔の位置、様々だ

あと十分もすれば予定時刻となる、そう思うと口の中が渴いた

「システムチェック、自己診断プログラム起動」

念のためにとプログラムを走らせて機体の状態を確認する

これも此処で待機してから何度もやっている、潜伏ポイントに到着してからはISのハイパーセンサーにも効果のある特殊繊維で編んだ迷彩布を被り、予定時刻まで待つ、その間に何度も何度も、自己診断プログラムを走らせていた

「落ち着けよ、オレ。これじゃあ出撃前の新兵じゃねえか」

自分に言い聞かせるように呟いて、そして自嘲した

今の自分はまさにその新兵だ、試合やIS相手の実戦、そもそも死んでいるゾンビ兵の相手ではなく、生きた人間相手にする戦いだ

時刻は一五〇〇ヒトゴーマルマル、作戦開始まで残り五分、オレは此処まで来る前に受けたブリーフィングを思い出すのだった



告げられた強襲任務、その内容は簡単に言えば報復行動と同時に示

意行為を兼ねたものである

目撃者を残さないのは此方が関与した証拠を残さない為、その為に作戦の途中で敵の警備システムをハッキングし監視カメラの映像などは全て削除する

そして明確な証拠は残さず、しかし状況的に見てオレ達がやった事は明白な状況、それを持って此方の意思を向こうに伝える、敵対するなら容赦はしない、と

「まずE W A C ジェガンが事前偵察を行って敵の戦力の把握を行うよ。そして作戦同時と共に電波塔を破壊して通信手段を断つ。こんな山奥だからね、まともな携帯だと電波も圏外だし、有線で引いてる可能性も低い。次に車やヘリといった移動手段を断つ。これで目標の支部は簡単に陸の孤島と化す。後はそこに強襲装備を施したジェガンでこーくんが乗り込んで中の人間を殲滅する。周囲には無人機のジェガンを配置して、万が一にも徒歩で逃げられるなんて可能性を潰す。以上だよ。何か質問はある?」

「敵戦力の予想は?」

「基本的に人間用の小火器くらいだろうね。あつてもI S が一機くらいだと思う。他には?」

「強襲装備の内容は?」

「今回は施設内部に突入するからね。ストライカーパックだと少し身動きが取りにくくなる。だから今回は普段外してるR型のサブスタスターを装備し直して、近距離での取り回しに優れた火器を装備するよ。これがそのデータね」

モニターに表示された機体のデータの名前はジェガン・サーガ、ケルデイルガンダムサーガをモデルにジェガンに基地突入用のコンセプトを落とし込んだらしい、武装もGN粒子ではないだけで構成は同じだ、ジェガンは両腰にビームサーベル残ったままだが

「まさかわしがソレスタルビーイングのガンダムを基に機体を開発する事になるとは思わなんだな」

「どうやら先程の話に出た新装備とやらがエイフマン教授の言っていたコレらしい」

機体バランスも取れているし、その調整だけでも教授の腕の良さが分かるというものだ

「これなら今回の作戦のコンセプトにも合ってるからね。大丈夫だよ、同じ装備の無人機を一機、バックアップとして用意しとくから、こーくんは自分の好きなように動いて良いからね」

◆ 「オレの好きなように、か……」

ジェガンの左肩に書かれた『SNARK』の文字を見る、今回の作戦に於けるコードネームであり、何らかの方法で此方の存在を知った相手に名乗る為の名だ

生きた人間は撃てないとオレが言えば同じサーガ仕様の無人機が代わりに任務を遂行するだろう

それを選べばオレは自分の手を汚さずに済む、だがその程度の覚悟しかないと篠ノ之博士から判断される

そうなれば宇宙開発から外される可能性もある、もうないだろうチャンスを、此処まで築いてきた努力を、全てを捨てる事になる

流星に何も無しで放り出される事はないだろうが、博士がこの作戦をオレに任せたという事は、出来ると判断しての事だ

それにオレも連中のやり方は腹に据えてかねている、叩けるのならば叩いておくべきと言える

作戦開始時刻の一分前、連中の事だから三時のティータイムとか洒落た事をやろうとするだろうという予測から茶会の始まった少し後を狙って強襲を掛ける

予測通りに茶会を開いているのを確認し、まずは電波塔を破壊しようとして右肩に備えていたビームアサルトカービンを保持する

それと同時にエコーズジェガンと同じ物に換装した頭部の狙撃用バイザーが下りて来る

しかしいざ狙おうとした時、最優先目標の変更がありそちらにセンサーを向ける

そこに居たのは一人の人間、照合された顔から日本の政党、『真に女性を守る党』の代表の女性である事が示される

党の名の通り女性を守る、などと謳っているが実際には男性限定で重税を導入しようとしたり、女性の労働時間を今の半分にして、それでいて賃金はそのままにしようという画策したり、荒唐無稽な政策を打ち立てていたので印象に残っている

当然ながら他の男性議員の党を超えた猛反発等から一つも実現していない、だが女尊男に染まった連中の支持を受けて徐々に議席を増やしているという厄介な連中でもある

そのトップが此処に居る、国会は今日も開いているが一足早い夏休みのつもりなのだろう、此処も連中がリゾート地にした避暑地だからな

ともかく、その女尊男の筆頭とも言える存在のトップを排除する絶好の機会という事で最優先目標とされたのだろう、作戦開始時刻に合わせて狙撃する為に照準を合わせる

ついでに何か有益な情報でも話さないかと集音マイクを起動して連中の会話を盗聴する

『——に貴女達のお陰で我が党の資金源は豊富だわ。いつもありがとう』

『いえいえ、私達女性が本当の自由を手にする為ですもの。これからも協力は惜しみませんわ』

話を聞くにテロリストと同列に扱われるヴァルハラから資金提供を受けているというスキャンダルとも言える内容を話す女達

この内容を世間に流してやるだけでも十分な打撃を与えられるだろうそれを録音しつつ、時間を待つ

『ただ、お願いと言ってはなんですけど、実は先日、薄汚い猟師が近くに居たものですから、思わず撃ち殺しちゃったの。警察が面倒ですし、どうにかありません？』

『そのくらいお安い御用です。伝手のある警官に話して適当な猟師が撃った事にしてしましましょう。猟師の誤射だなんて珍しい話でもありませんわ』

残り三十秒、引き金には指を掛けずに狙いを合わせたまま待機する『それは素晴らしいわあ！でも本当に嫌な世界よね。男なんてそこら

の害獣のように撃ち殺せないんですもの。将来は狐とかと同じように娯楽で男を撃てるようになっていね」

『人権だとか色々五月蠅い連中が多くて困るわ。男に人権なんて必要ないじゃない。あんなの獣と一緒にするのに』

残り二十秒、まだ引き金に指は掛けずに待機を続ける

『そんな女性の輝かしい未来の為に、これからもよろしくお願いしますねえ』

『ええ、そのつもりですわ。その為にももっと多くの資金の約束をお願い致しますね』

残り十秒、そろそろ引き金に指を掛ける

「スウー……ハア……」

センサーを通した向こう側には笑い声を上げる女達の姿がある、そして作戦開始時刻までの残り時間を示すカウントがゼロになり――

『オホホホホ――ガッ!?』

――引いた引き金は自分でも驚く程に軽かった



――SNARK 1、作戦行動を開始、最優先目標の排除を完了

――SNARK 2から11、ミノフスキー粒子戦闘濃度散布開始、敵通信、レーダー網のジャミングに成功

――SNARK 1、第二目標を破壊、第三目標を順次破壊開始、第三段階達成率87%、第三目標完全破壊を確認、第四段階へ移行

――SNARK 12、上空旋回を継続、現在敵性ISを確認出来ず

「良いねえ、私の信頼を裏切らないでくれて嬉しいよ、こーくん」

次々と流れてくる状況を知らせる情報を確認しながら束はほくそ笑む、撃てない可能性も考えていたが康太の覚悟はそれ以上だったのが分かったからだ

「人を殺していないニュータイプなんて滅多に存在しない。殆んどが戦争の中でその能力に目覚めて昇華させている」

ならば戦争を用意すれば良い、自分にとってもISを曲解して余計

な事やっっている連中を始末出来る、連中のせいで此方まで無用に怨まれてるのだ、加えてそれを覆せるならば一石三鳥、束はどれだけ人間が死のうがその程度の認識だった

「ふんふん、外に居た人間は排除しようだね。次は施設内の掃討、ISでも運用された事が少ないシチュエーションだね」

両膝に備えていたビームサブマシンガンで薙ぎ払った康太は施設の方に標的を定めた

ISは広い空間でその機動力を活かした戦法を得意とする、機動力が制限される屋内でどのような戦闘をするのか、適した装備を与えたとはいえ束はそちらにも興味があった

「フフツ、今のこーくんがどんな輝きを見せるのか、今から楽しみだなあ♪」



康太は外の人間を排除した後、建物の方に向かうとまず焼夷手榴弾ファイアナツツで出入口を燃やし封鎖した

逃げようにも炎の壁に阻まれ、特殊な燃燒剤を使用している為にスプリンクラーの水でも消火されない

その後は一階の全ての窓に腰部のコンテナからハンドグレネードを取り出して投げ入れていく、この時点で最早袋のネズミとなった女性権利団体ヴァルハラ幹部でありこの支部を統括する人物は立て続けに起こる爆発に混乱していた

窓から外を見ても炎上する車やヘリの黒煙が見えるばかりで何が起きているのか判断がつかない、襲撃を受けたという考えが抜け落ちているのだ

それにはISを信奉するが故に襲撃してくるなどという予測が頭から消えていたのがある

そしてそんな中に、一番内装が豪華な部屋だったから親玉が居るだろうと予想を立てた康太が窓ガラスを突き破り飛び込んで来た

「ヒィッ!？」

そんな襲撃者の姿を見てようやく襲撃を受けたという事実に向き着いたその人物は、しかし襲撃してきていたのがISであると知り驚

愕する

機体は男である康太が使っている点は気に食わないが篠ノ之博士が経営するラビットフット社のジエガンであり、そんなISが自分達に危害を加える筈がないと盲信している為、その人物の頭は更に混乱する

「あ、IS!?!何でISを扱っているのに私達を攻撃するの!?!味方でしよう!?!」

だが康太は答えない、無言のままに両足の付け根辺りに取り付けてあるホルスターからビームピストルを抜くと幹部にその銃口を向ける

「な、何なのよ貴方は!?!」

『私はスナーク……ブージャムだよ』

機械を通して元の声かどのような物なのかさえ分からないマシンボイスを最後に、その幹部の意識は永遠に閉じられる事となるのだった

幹部を排除した康太は部屋の中にあつた端末にジエガンの腕で触れる、そこを起点にISと接続、同時に通信を開いた

「博士、お願いします」

『はいはい！！コア経由でヴェーダに接続して、ちよちよいのちよいつと！うん、流石は第五世代量子コンピュータ、もう終わったよ。データ全部コピーして吸い出しとくね。それとセキュリティにも侵入したから監視カメラの映像も全て削除してあるよ。スプリンクラーも止めたから、残りは地下かな？入り口が隠されてるみたいだね』

「構いませんよ、自分で抉じ開けます」

そう言うと康太は一階まで降りていく、途中で出会った人間は例外なく始末し、適当な場所で地面にビームピストルを撃ち込み穴を開けると、その穴の中にハンドグレネードを放り投げる

それにより一階の床は吹き飛び地下へと続く穴が空いた

その穴を通って地下に向かうとしたその時、廊下の向こう側からISが接近してくるのをセンサーが捉える

ISは康太を捕捉すると真つ直ぐに突っ込んで来る

「この、よくもやってくれたわね！覚悟しなさい！」

左手にアサルトライフルを構えて銃弾をばら蒔きながら迫る打鉄、それに対して康太はバックパックのサブスラスターに沿って装備されたビームピストルⅡを二丁手に取り、両手に構える

康太のジェガン・サーガを完全な射撃型と見た打鉄はならばと右手に日本刀型のブレードを展開すると加速し距離を詰めていく

そしてブレードの間合いに入った途端、横一閃に薙ぐ

しかしそれは直前に身を屈めた康太によつて空振り、勢い余つて壁を切り裂き、その半ばで刀身を壁に埋める

慌てて引き抜こうとした打鉄だったが、それより先に康太が懐に飛び込み至近距離からビームピストルⅡによる射撃をお見舞いする

幾らシールドエネルギーによつてパイロットの身が保護されているとはいえ顔にビームを当てられて平静で居られるものではない

「わ、私の顔を狙うなんて!?もう許さないわよ！」

激昂し、ブレードを力任せに引つ張る打鉄のパイロット、だが康太はブレードの持ち手を打鉄の手ごとジェガンの足で踏みつけて抜けないようにする

そして逃げられなくなった打鉄に対して再び銃撃を加える康太、堪らず機体を暴れさせてもがく打鉄だが、巻き込まれる事を避けた康太が退いた事で自由になる

完全に掌の上で玩ばれている状況頭に血が上り康太を追撃する打鉄のパイロット、今度こそ壁からブレードを引き抜き追う

だが康太の姿が見えたと思えば周囲で爆発が起こる、コンテナから機雷モードで投下されていたハンドグレネードが起爆したのだ

普通ならばISのハイパーセンサーで捉えられる筈の物に冷静さを欠いた為に引つ掛かる、更にはジェガン・サーガの両手のビームピストルⅡと共に両膝のアタッチメントに固定したビームサブマシンガンからも銃撃が加えられシールドエネルギーがみるみる削られていく

そしてエネルギーがゼロになり機体が解除されるとISの護りが

失われたパイロットの眉間に一発撃ち込んだ後で待機形態になった打鉄を回収する

こうして全ての障害を排除した康太は改めて残りの目標を達成する為に地下へと降りていくと、そこは石造りの部屋に鉄格子が填められた牢獄のような、いや牢獄そのものだった

「何だ、此処は？」

窓もなくあるのは僅かに配置された電球のみ、ISのハイパーセンサーで補正を掛けて周囲を確認する康太だが、そこで生体反応を捉える

場所はその鉄格子の中だ

「誰!？」

『何者だ?』

「IS……そう、とうとう私達を殺しに来たのね。アンタ達が信奉するISでの処刑だなんて、随分と贅沢な死に方ね」

牢獄の中で見付けたのは複数人の少女達であった

一番の年長者と思われる少女が自らの背に怯えている少女達を匿い、康太の事を睨んでいる

会話の内容から康太は目の前の少女達は外にいる連中とは違うと考えた

『その口振りからすると、連中とは違うようだな。もう一度聞こう、何者だ? 何故此処に居る?』

「……ヴァルハラの中じゃないの?」

『連中ならば殺した』

「そう、さつきから聞こえてきた音はそういう事なのね……アハ、アハハハハッ! 良い気味だわ! 連中が盲信してるISで殺される、連中にとってはこれ以上ない程の死に方でしょうね!!」

『それで、お前は何者だ?』

「ああ、そうだったわね。私達は連中から不要って言われたのよ。この子達はIS適性が低いつて理由で此処に押し込められて、何かの人体実験に使うって言ってたわ。私はSランクだけど、男と付き合ったなんて理由で此処に居るわ」

それを聞いて康太は女尊男☒を掲げる女性権利団体の行き過ぎた思想を改めて知った、男性を目の敵にするだけでなくISへの適性や男性と交際しているという理由で同じ女性であろうと迫害するのだとは思いついもしなかつたからだ

そして、そんな彼女達を見て一つの事を思い付く、目撃者は全て排除という束の命令に背く事になるが、迷いはない

『もしも世界を変えたいのならば此処で待つと良い。そうでないならば好きに逃げろ。どちらを選んでもその意思を尊重しよう』

そう言つて康太は牢獄の鍵の部分を撃ち抜き彼女達が自由に動けるようにした後で背を向けた

「貴方はどうするの？」

その背へと声を投げ掛ける少女、康太は少し足を止めると振り返らずに一言だけ告げた

『決まっている、仕事の続きだ』

その場に少女達を残し牢獄の奥にある扉を開けて通路を進んでいく

そして石造りの通路とは別の、機械式の扉を見つけると左手にビームサーベルを握り、扉を切断する

扉の向こう側は研究室のような空間が広がっており、数人の白衣を着た者達が作業をしていた

どうやら防音になっていたらしく、その者達は康太が突入してくるまで全く外の出来事に気付いていなかったのか直前まで作業をしていたようだ

そして、康太の目には研究室の中に並ぶ幾つかのカプセル、その中身に移る

その中に居たのはゾンビ兵であつた、しかし康太の知るものよりも体格が小さく、元は子供であつた事が分かる

先程の少女が語つた人体実験、それが何であるのか、康太は理解した、そして両手に握るビームピストルIIのグリップを強く握り締めた「これが……こいつがっ！人間のやることか！」

子供を実験材料にする外道に、それがガンダム世界の技術による物

であるという事実には、康太は視界に映る全ての人間に引き金を引いていく

それから近くの端末から全てのデータを引き出すと完全に破壊した後でカプセルの中に浮かぶゾンビ兵を見る

完全に変貌してしまっている為に助ける手段は無い、それが分かっているからこそ康太は銃口を向け、引き金を引いていく、この作戦が始まる前までは思わなかった一つの思いを乗せて

「オレが必ず仇を取る。だから赦せとは言わない。けどせめて、安らかに眠ってくれ……」

殺す事で終わらせるしかない、全てのゾンビ兵を介錯した後で康太は元は普通の少女達だったのだろう子供達へと宣誓し、元来た道に戻る

牢獄があつた場所まで戻ると、先程の少女達はまだそこに残っていた

『此処に居るといふ事は、覚悟は決まったのか？』

「あれだけで全て分かった訳じゃないけど、貴方について行けばヴァルハラの中をぶっ潰せるんでしょう？なら行くわ、そう決めたから。でもこの子達は別。その手に銃を取るのは私だけで良い」

『そうか、ならば——』

康太はジェガンの頭部のみを量子化し、同時にマシンボイスへと変えていた声も自然な状態に戻す

「——共に世界を変えよう。ようこそ、SNARKへ」

そして自身の眼でしっかりと年長者の少女の目を見つめ、右手を差し出すのだった

36話 戦う理由

女性権利団体ヴァルハラの特拠点の殲滅、その任務を達成した康太は一度束のラボへと帰投していた、康太が保護する事を決めた少女達も周辺に展開していた無人機に抱えられて一緒である

そして報告として束の前に来ていた

「私は目撃者は全て排除してオーダーした筈だけどね」

「敵対している相手だけ排除すれば良いと判断しただけです。優秀な素質を持つ人間を仲間に取り込めると思えば十分でしょうか？」

「……まあ、こーくんのお願いだし良いけどさ。暫くはこのラボに部屋を与えておくよ。その後はダミーの名義を使って孤児院を作つてそこで保護するね。そつちの子はパイロットになるの？」

「かなで奏と言います、篠ノ之博士。ヴァルハラを倒せるなら、私は戦いますよ」

「ふーん、なら良いけどね。まあ直ぐには使わないよ。IS与えてもあつさりやられるような人間は要らないし、少しは訓練しないとね。それで、あの施設で色々情報を仕入れた訳だけど、こんな感じだね」
そう言つて束がモニターに地図を表示する

その全てがヴァルハラの特拠点であり、日本国内だけでも数十はある各拠点には何があるのかが簡単に示されており、その資金源と目されるような内容もあった

試しに束がその内の一つを拡大するとそこは麻薬の製造拠点となつている場所で、添付されている報告書によると過疎化が進んだ限界集落を占領し、そこに住んでいた住人達に大規模な麻薬農園を維持させているらしい

更には警察にも手を回し摘発される事もない、武装した人員が配置されて近くに来る者や逃げ出そうとする者を排除しているとも書かれている

「麻薬か……」

麻薬と聞いて渋い顔をしたのは同じ部屋に居たエイフマン教授である

「お爺ちゃん、何かあったの？」

「わしは麻薬という物が嫌いだな。かつてわしと同期に優秀な技術者が居たが、開発に難航した時に麻薬に手を出してその将来を断られた者が居たのだ。それがなければどのような物を生み出していたかと思うと、どうしても悔やみ切れぬのでな」

「そっか、なら次の標的にするならそこだね。こーくん、次の出撃だけど——」

「やりますよ。直ぐに出ます」

「えっ？あ、うん、それは別に良いけど、大丈夫なの？」

「何がですか？大丈夫ですよ、やれます。オレがやらないと、オレが……」

大丈夫、と言う康太ではあったが、誰の目にも大丈夫には見えない。しかし康太は機体の準備をすると出撃する、拡張領域に入っているストライカーパックを全て外し、空いた部分にベースジャバー用のエネルギータンクを兼ねた追加ブースターを幾つも入れ、ガンダム世界と同じく規格を合わせたそれを一基はジェガン・サーガの背部に付けて航続距離と速度を伸ばして、だ

弾薬も補給した康太はそのまま出撃していった、束が言っていた麻薬農園に向かって行く

「んー、何か調子が変わけど、こーくんが大丈夫って言うなら良いか！今度はちゃんと数値が伸びてるかな？」

そんな康太を見ても束はあまり気にしない、それよりも康太がニュータイプとしてどのような反応をするかを気にしてモニターを見ている

「コウタさん……」

「むう……」

「えっと、あの……？」

そして撮影スタッフの護衛から戻っていたクロエ、エイフマン教授、奏の三人はそんな束の様子に困惑しつつ、ラボから一度出るのだった

その後はクロエとエイフマン教授は奏と廊下で待っていた他の少

女達を取り敢えずの住居としての部屋に案内した後で二人になると、クロエの方からエイフマン教授へと話し掛けた

「あの、教授。コウタさんはどうしたのでしょうか？」

「ふむ。お嬢さん、時に人はどのような時に禁忌を犯すと思うかね？」
「禁忌、ですか？それは……」

「シドウ君の場合は殺人という禁忌を犯した。最初はミス・シノノがそう誘導した。しかし、今は必要のない殺人を行っている。確かにヴァルハラのは行いは見過ごせないが、シドウ君は自分でなければ、と思っている。それが何故か、分かるかね？」

言われてクロエは考えるが分からない、止める間も無く出撃していった康太の様子は尋常ではなく、彼女も見た事がなかったからだ
「人は殺人を禁忌としているが、その禁忌は実は簡単に犯してしまうものなのだよ。言うなれば普段は倫理という名の錠が掛かっているような物だ。しかし、それは対応する鍵があれば簡単に外れてしまうという事でもある」

「錠と鍵……」

「左様。例えば、強盗に襲われ、自分の手には銃がある。そして強盗は自分の家族にナイフを持って迫っている。その時、人は銃で強盗を殺してしまうだろう。自分が強盗を殺さねば家族が殺されるという状況が鍵となり、殺人を禁忌とする倫理という名の錠を開けてしまうのだ」

クロエは考えた、その理論で康太が虐殺をする事を忌避しない理由を

そして戻ってから教えて貰った情報を整理して考えてみる

「デビルガンダム……もしかして、DG細胞による人体実験が行われていたからでしょうか？」

「ふむ、その可能性は高いと言えるな。彼の言うガンダム世界の技術で、非人道的な技術を使っていた事が彼の逆鱗に触れたのだろう。わしの居た世界でも人革連という勢力が非道な人体実験をしていた。恐らく、その研究をしたとなれば彼は同じようにその手に銃を取るだろうな。そして、今の彼は初めの、ミス・シノノに半ば強制的に引

き金を引かされた時とは違う。自らの意思で引き金を引く覚悟を決めている。その彼が戻った時、その心が壊れぬよう引き留めるには君が適任と言えるだろう。どうか彼の傍に居て欲しい」

「エイフマン教授……分かりました、私がコウタさんを支えます」

「うむ、彼の事はわしも気に入っているのだな。頼んだぞ」

エイフマン教授に伝えられて決意を決めるクロエ、康太が戻ったのはそれから更に一日が経った夜であり、一睡もせずにヴァルハラの特攻点を襲撃し続け、補給が必要となれば無人機を使い、確認されていた日本国内全ての拠点を壊滅させてからだった



戻ってきた康太は報告も少なめに寮の自室へと戻っていったと聞いたクロエは直ぐにそこに向かった

康太とは同室であり、鍵を開けて中に入ると部屋は明かりも点けておらず、そこで康太は自分のベッドに腰かけて頭を抱えていた

クロエが部屋に入り、明かりを点けると顔を上げる康太、その目は隈が浮かび、誰が見ても憔悴し切っているのが見てとれた

「コウタさん……」

「クロエか……」

そんな普段の彼とはかけ離れている姿にクロエは少しだけ怯んだが、直ぐに意思を固めると康太の前へと進む

「コウタさん、あの時、貴方に何があったのですか？」

「なあクロエ、オレは誰なんだ？」

「えっ？」

康太は尋常ではなかった、ならば康太の身に何かがあったに違いない、そう思い訊ねたのだが返ってきたのは意味がよく分からない質問だった

「初めて引き金を引いて、あの女を殺した後、女の方から怨念みたいな気配が流れ込んでくるのを感じた。これ以上、撃ってはいけない、そう頭の何処かで感じているのに、撃たないといけなくて……………」
地下の牢獄や研究室に行った時には聞こえるんだ。子供達の声が、『痛い』『怖いよ』『怖い』『助けて』って、泣いて、叫んで、オレに訴

えてくる……」

「それは……」

「そしてヴァルハラのポイントに行くと何処に行っても聞こえるんだ。子供達の、男達の、老人達の、性別も年齢も何もかも別々なのに、誰もが痛がっていて、泣いていて、怨んで、怒って、それから誰もが言うんだ……『赦さない』『怨めしい!』『撃って』『撃てっ!』『殺して』『殺せっ!』『ころせコロセ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ』『奴等を全員殺し尽くせッ!』と、そう誰もがオレに望む、嘆願する、死んでいった者達の嘆きの声が!連中の勝手な理屈で虐げられて殺されていった者達の怨嗟の声が!!」

それは康太が戦闘を始めてからずっと聞こえてきた声だった

自発的に撃つように誘導されて、戦いを始めてからはそんな声達に背中を押されて、そうやってずっと引き金を引き続けてきた

「気付けば引き金を引いていた!撃って、更に撃って!殺して、もっと殺して!そうすれば声は消えていく!けど、新たな声が同じように言う!まだまだ、まだ殺せと!オレは……誰だ!?引き金を自分で引いたのか!?それとも彼等に吞まれて引かされたのか!?俺は、本当のオレは誰なんだ!?オレの本当の意思は!」

康太の目に浮かぶのは恐怖に泣く子供のような怯えた色だった

自分の知らない人間達が自分の中に入り込んで溶けていくかのような得体の知れない感覚、自分が自分でなくなるのではないかという恐怖に康太は怯えていたのだ

錯乱しクロエの肩を掴む康太、加減が利かなくなりその力は強いが、クロエは痛がる素振りもなく康太の頭を自分の胸に抱えるように抱き締めると、その背を優しく撫でる

「貴方は貴方です、コウタさん」

「オレは、オレは……」

「コウタさん、貴方は本当はどうしたかったのですか?与えられた命令ではなく、あの時、引き金を引く前に、貴方自身はどうしたかったんですか?」

「オレは……撃ちたくなんて、無かった……殺したくなんて、無

「かつたんだ……それでも……」

「なら、それが貴方の意思です。撃ちたくない、殺したくない、それが紫藤康太という人間の意思だったんです」

「だが、結果として引き金を引いた……何人も、何百人も、この手で殺した……」

「はい、それは事実です。ですが、自分ばかりを責めないで下さい。貴方はちゃんと、救いもしたのですから」

康太が撃たなければ人体実験に使われた子供達の数はこれからも増えただろう、壊滅させた拠点で無理矢理労働に従事させられたままの人々が居ただろ

そんな人々は康太の手で解放された、それもまた紛れもない事実である

「もしも貴方が罪の意識を抱えているなら私も背負います。またその手に銃を取るといふのなら、私もその隣に立ちます。これから先、貴方がどのような選択をしても、私はその傍で貴方を支えます。ですから、一人で抱え込まないで下さい。貴方は一人ではない、私も一緒に居ます」

「ぐ、あああああああつー！」

優しく、諭すように抱き締めてくるクロエの胸の中で康太は小さな子供のように泣いていた

その慟哭を受け止め、康太が落ち着くまでの間、クロエはずっとその背を撫で続けるのだった

暫くした後、昨日から一睡もしていなかった康太はそのまま疲れはてて眠ってしまう、クロエは康太の体に布団を掛けてから部屋を出るそして決意と共に束の居るラボへと向かった



「うーん、数値の伸びが良くないなあ。やっぱり生存本能が呼び覚まされる程の危機的状況に陥っていないからかな？そうすると無人機を使って臨海学校の時みたいな状況を作るべきかな？けど同じシチュエーションだと効果が薄いかもしれないなあ。あくあ、どっかにこーくんが死にかけるくらいの相手が居ないかなあ」

束は自らのラボの中で康太のデータを確認していた

しかし現在のデータと臨海学校の後のデータを見比べてもあまり変化が見られない、それどころか昨日は数値が大きく乱れるという結果となった

それはそれで貴重なデータではあるのだが真のニュータイプを見たい束としては不要なデータだった

これまでの傾向から実戦を行う度に康太のニュータイプ能力は上昇が見られ、臨海学校の時はそれまでに類のない程の上昇率を見せた。だからこそ束は実戦こそがニュータイプ能力を開花させる鍵と信じてきた、だが昨日から丸一日以上の戦闘を続けていたというのに康太の数値は殆んど変動していない

ならば足りない要因は何かと考え、それは康太の生存本能による能力の喚起であると結論付けたのだ

そうすると康太が苦戦するような、命の危機を感じるような相手を選ぶ事になるのだが、既に国家代表レベルに片足を突っ込んでいる康太が死にかける相手など、どのように準備するか悩ましいところであつた

それと付け加えるならば康太が死んでは意味がないのだ、現状でニュータイプ能力の覚醒の予兆が見られるのは康太のみ、そんなサンプルとしての面で死なれると困るのが束の現状である

さてどうしようかと束が思索していた時、ラボの扉が開いてクロエが入ってくる

「おや、クーちゃん。こんな時間に珍しいね」

「束様、私から無理を承知でお願いがあります」

「クーちゃんからのお願い？私はいくーちゃんのお願いなら叶えられる範囲でならいつでも良いよ」

「ありがとうございます。では単刀直入に、コウタさんにこれ以上の無理な出撃は控えさせて欲しいのです」

滅多にワガママを言ったりしないクロエからのお願いとあって束は興味を惹かれた、しかしその内容に雰囲気を変えさせる

「ふーん、成る程ね。でも何でそう思うのかな？」

「今のコウタさんでは危険です。少なくとも生きて人間を相手にする事は絶対に止めて下さい」

「ふんふん、それは何でかな？」

「コウタさんが死んだ人間の思念に取り憑かれてしまうからです。昨日からの戦闘で途中からコウタさんの様子が変貌したのはそれが原因です。ニュータイプに関連する資料は私も確認しています。あの場所に残っていた残留思念がコウタさんの機体に積まれてるサイコフレームに取り込まれて増幅され、コウタさんを蝕んでいると推測されます」

クロエの推測というのは束も当然ながら考えていた事だ

潰れてしまっても困るから対応策として康太のパイロットスーツに感応波を遮断する機能を盛り込もうかと考えていた

そして対応策があるなら出撃も可能だと考えるのが束だった

「理由は分かったよ。でもそれはこーくんのパイロットスーツに感応波を遮断する処理を施せば解決するからね、出撃をしない理由にはならないよ」

「それは一つの解決法ですが、コウタさんが人を殺す事に自責の念を抱かない訳ではありません。どうしてそこまでコウタさんの出撃に拘るのですか、束様？」

「こーちゃん、私はね、ニュータイプの可能性ってヤツを見たいんだよ。凡人達は色々な事をやりもしないで無理だと決め付けてしまう。そんな連中にニュータイプが起こす奇跡を見せたらどうなると思う？無理なんかじゃない、可能性はあるんだって世界に、凡人達に示せると思わない？そうなれば世界は宇宙にも行けるって、可能性があるんだって信じる。地球よりも、宇宙という極限環境で人は新たな種への進化が促されるって。それはこーくんの望みでもあるんだよ」

「それでも、ニュータイプは道具ではありません。コウタさんは一人の人間なんです」

康太の望みは束と同じ宇宙開発である、しかしクロエはそれが遅くなったとしても康太の身を案じる事を選んだ

康太が無茶をするのをそれまでにはただ見ている事しか出来なかつ

だが、今は自分も同じ道を共に歩むと決めたから

その為に康太を守る、それがクロエの選択だった

そんなクロエをじっと見つめる束は、少し経つと息を吐いて纏っていた敵意を霧散させる

「くーちゃんが本気でこーくんを想ってるのが分かったよ。うん、なら私の都合で無茶な出撃はさせない。くーちゃんが少しでも言葉に詰まるようなら取り合わなかったけど、本気も本気、これ以上ない程にこーくんを愛してるんだねえ。ハア、束さんジェラシーだなあ……」

「申し訳ありません、束様。ですが私が束様の事も尊敬しているのは変わりません。束様が居なければ私は今もこうして生きてはいなかったのですから」

「良いよ、子供がいつか反抗期を迎えるのは当たり前だからね。これもくーちゃんの成長の証、喜びこそすれ嫌に思う事なんてないよ」

束にとつてクロエは娘のような存在である、自分の命令には何でも従ってきたクロエが、自分自身の意思で束に反発してみせた

人形のようなだった彼女が見せた人間としての成長、それは束にとつて好ましい事でもあった

「くーちゃんはこーくんの所に戻って良いよ。こーくんの今回の後始末は私がやっておくからね。今はこーくんの傍に居てあげた方が良いんだと思うからさ」

「ありがとうございます、束様。では、失礼します」

「うん、おやすみ」

クロエが去っていった後、束はパソコンの操作を行いヴァルハラで得たデータの解析や康太が行った殲滅戦に対する情報操作を行う

とは言ってもラビットフット社が関わっている事を隠しながらヴァルハラ of 犯罪行為を纏めたデータをメモリーに入れて各報道局にばら蒔いたり、インターネット上にサイトを作って情報を拡散したりだ

実際に短時間でヴァルハラ of 悪行は世界に広がっていつている、康太が襲撃したヴァルハラ of 拠点の中には一部都市に構えられていた

物があり、そこでは麻薬農園で栽培した薬物や海外から密輸、または3Dプリンター等で製造していた銃火器等を纏めていた倉庫もあったので一般人の目にもジェガン・サーガの攻撃は一部目撃されていたのだ

ヴァルハラが襲撃を受けた、という事実新たにその理由が付加される、既にSNSを中心に出回っていた情報は新たな燃料を与えられてその勢いを増していく

インターネット上でこれだけ大々的に盛り上がっている大事件をマスコミが取り上げない訳がない、多くの目撃者も居る中で女尊男♂を掲げる世界的な組織の大スキャンダルにマスコミが食い付かない訳がないのだ

しかしその流れがあまりにも順調な事に東は違和感を覚える、女尊男♂派の声があまりにも少なすぎるのだ

確かに連中と同じ思想をする組織の大スキャンダルともなれば余計な飛び火を恐れて口をつぐむだろうが、現実が見えずヒステリックに喚き立てるような連中も出てこない事が気にかかる

何者かの介入が行われている、その何者かの正体に東は一つだけ心当たりがあった

「更識、かな？」

自身を知る対暗部用暗部とかいう日本に代々仕えてきた一族の介入を感じ取る束

その諜報能力の高さは束もそこそこ認めている、その現当主が今のIS学園で生徒会長を務めている事も知っている

「まあ良いか、邪魔してる訳じゃないしね」

此方の邪魔をしないのなら構わない、勝手に協力してくるなら見逃してやろう、束はそう判断して更識の介入を放置する

しかしその事に対して束は笑みを浮かべた

「更識が動くなら近い内にまた何か動きがある。クーちゃん、私は確かにクーくん、私の都合での出撃はさせないって言ったよ。けどね、向こうからやって来ないは訳がないし、今回みたいにガンダム世界の非道な技術を彼が放置する理由もないんだよ」

特にIS学園は今のところ何らかのイベントがある度に騒動に巻き込まれている、その中で康太は死にかけている

「私がニュータイプの光を早く見たいのは確か。でもそれを私の手で早めなくても、こーくんは直ぐに戦いに巻き込まれる。またその手に銃を取る」

科学者として運任せというのは少し気にかかるが、ニュータイプとしての覚醒は時間の問題、そう考えていたのもあつて束はクロエのお願いを受け入れたのだ

「ニュータイプに共通して言える精神的な脆弱性。けどその中にはある意味『パートナーとの共生』という形でアイデンティティーを保つ存在も居た」

それこそ、目の前で母親が無惨な死を迎えたとしてもアイデンティティーを見失わずに居た地球生まれ地球育ちのニュータイプの話を康太から聞いた

「こーちゃんがそのパートナーの役になってくれたなら、こーくんの精神的脆弱性は克服される。二人には是非ともそうなって欲しいね」
究極的には自身の命さえも駒としか見ない、篠ノ之束という人間の歪んだ望みがそこにはあつた

◆
「お嬢様、ヴァルハラに対する情報工作の方は全て手配が完了しました」

「そう、ありがとう、虚ちゃん」

IS学園の生徒会室、ここでは水色の髪と紅い目をした猫のような雰囲気少女と、ヘアバンドを付け眼鏡をかけた真面目そうな少女が夜遅くにも関わらず残っていた

水色の髪の少女は名を更識楯無といい、同じ頃にラボで束が思い浮かべた更識の現当主であり、この学園の生徒会長でもある

その彼女をお嬢様と呼んだもう一人の少女はその従者である布仏虚であり、康太と同じクラスに居るのほほんさんこと布仏本音の姉だ
そんな彼女達だが、今はIS学園の生徒会としてではなく暗部の更識として活動を行っていたところだ

とは言っても今回は情報操作であり、楯無が指示を出して虚が各所に連絡を取り、その部下達が命令を実行に移すという暗部としては軽い仕事であったが

「どのメディアもヴァルハラ襲撃犯とヴァルハラ犯罪行為を翌朝に大々的に取り上げるつもりようです。これで女尊男派の勢いと、それに関わる汚職、不正の摘発に移れます」

「機会を伺ってきたけど、まさかこうして暴けるとは思わなかったわ。このスナークさんには感謝しないといけないわね」

楯無の前にあるパソコンの画面、そこに映るのは一機の黒い塗装が施され、左肩に赤くSNARKと書かれているIS、ジエガンのカスラム機であった

都市部のヴァルハラの拠点を襲撃した際に偶然にも一般人が撮影した写真、多少のブレはあるが辛うじて文字が読み取れる写真は少なく、マスコミもこの写真を使うつもりであった

「その正体が不明だからこそ、警戒を怠れないのですが」

「そうね。スナーク、『不思議の国のアリス』で有名なルイス・キャロルのナンセンス詩、『スナーク狩り』に出てくる架空の生物。食用として狩られる立場みたいだけど、このスナークさんは一方的に狩っている。しかも私達が把握していた国内の拠点が全て短期間で壊滅していた事に加えて、集まった目撃証言から複数の機体による同時多発的な動きではなく、全てはこの一機による犯行ね」

「調べましたが、スナークの中にはブージャムと呼ばれる見た者を存在ごと消滅させる危険な種も居るとされていますね。この機体がスナークの名を冠しているのはそれが理由でしょうか？」

「恐らくはそうでしょうね。それでその正体だけど、この学園で一番有名なジエガン使いの彼の行動は？」

「篠ノ之博士のラボに昨日から入って例のエイフマン教授が手掛けた新型機のテストを行っている事になっています。ラボの内部は管轄外なので真実かどうかは不明ですが、その新型機の表面上のスペックデータが学園に提出されています」

「そうなの？って、何この機体?!可変機構の採用だなんて、エイフマン

教授って人はどういう発想をしてるのよ!？」

「私も初めて見た時は驚きましたが、どうやらコア同士をリンクさせて遠隔操作する無人機らしいです。名称はフラッグ。少なくとも一朝一夕で造れる機構ではない事から、そのテストをしていたと信じるのなら紫藤康太君の関与は否定されるかと思えます」

提出されたログやらテストの映像を見てもリンクしたISのコアは康太のジェガンのコアと同じ物である

しかし当然これは束が作ったダミーであり、実際のテストはまだ行われていない

だが精巧な映像によりダミーだと見抜かれる危険性は少ない、そして表向きなスペックも改良したとか言えば通る為に予想値よりも低く提出されていた

それでも楯無は康太が怪しいと睨む、報告書を読んだ臨海学校での康太の知っていた情報に関してもだが、何より彼女の勘がそう告げていた

「なら康太くんは私が調べるわ。近い内に仕掛けるとしましょう」

「よろしいのですか？ 下手に探って篠ノ之博士の逆鱗に触れるような真似はするなと政府からも釘を刺されていますが？」

「同時に、可能なら接触して交渉して欲しいとも言われてるわね。二律背反する命令をしてきてるのに痺れを切らしそうな連中が余計な事をする前に動くべきよ。大丈夫、まず接触するのは康太くんだけ。臨海学校の時に簪ちゃんを助けくれたから、個人的にそのお礼も兼ねてね」

公私混同とも言われかねないが、妹を助けてくれたお礼として接触するならば違和感とは受け取られない

実際、彼女は自身のISのオーバーホールにロシアまで出向いていた為に帰国したのは数日前であり、理由として不審なところは見られない

こうして建前の為に色々と準備を進めつつ楯無は康太への接触を試みるのだった

37話 教導

『2022年5月1日』

親愛なるコウへ

四月からメールの返信がありませんが、お元気ですか？

そちらではゴールデンウィークに入った頃と思いますが、どうお過ごしでしょうか？

私の方はもう少しで高校受験があるので勉強の日々を送っています。

今は大変ですが新しい学園生活の事を思えばそれも苦にはなりません。

また近い内に会えますが、メールでもお返事を下さい。待っています。

リナより』



あの生涯忘れる事はないであろう出来事から五日が経った

思い出す限りでも恥ずかしいのだが、クロエのあの行動のお陰でオレは立ち直る事が出来たのだ

とはいえ人を殺した事実を忘れた訳ではない、そして目覚めてからオレはクロエに感謝の言葉を伝えると共に一つの決断をした事を打ち明けた

あの日、襲撃した拠点の地下で行われていたDG細胞を使った人体実験、そこで犠牲になったと思われる幼い子供達の嘆きをオレは恐らくはサイコフレーションによって受け取った

その子供達の声と共に感じられた痛みと悲しみだけは忘れてはならない、だからクロエにも伝えたのだ『同じ思いをする子供達をこれ以上生み出さない為に、オレは引き金を引く。今度は怨念に囚われず、オレ自身の意思で戦う』という事を

ガンダム世界の技術を使った実験だけじゃない、似たような事が行われていると知ったなら、オレはそれを襲撃して潰す事にした

その為に篠ノ之博士にもその意思を伝えた、あの人の事だ、オレが

自らの意思で戦うと言えば喜んで調査も進めるだろう

クロエは支えると言っていたがオレは撃たせる気はない、それはオレがやる事だから

とはいえ流石に前の作戦の影響が残っている事から数日は安静にするようにも言われた、クロエから伝えられた仮説はオレも正しいと思うから逆らわず、自室でゆっくりと過ごすつもりだった

ISでの訓練も三日は禁止されていた、そこで何をしていたかと言うと――

「ティエレン、イナクト、フラッグ、オーバーフラッグ、ジンクス、ジンクスⅢアロウズカラー、ジンクスⅢ連邦カラー、アヘッド、ジンクスⅣ、ブレイヴ一般用試験機……」

――00系統の量産型機のガンプラ作成である

どうしてかと言うとまた流れてきた漂流物の中に大きめのコンテナがあり、中身が00シリーズの量産型モビルスーツのガンプラ詰め合わせだったからである

そして各キットがそれなりの数入っており、ならばと貰ってきて組み立てていたのだ

まず作ったのはオーバーフラッグである、キット数は十五個、まさにオーバーフラッグス隊を作れと言わんばかりの数に寝る事もせず組み立て続けた

一つ組んだ後で開発者本人であるエイフマン教授に見せてみたが、なかなかの再現度だと言っていた

全て組んだ後は一つだけリニアライフルのラインを青に変えてデیفエンスロッドとの位置を左右入れ換えておいた

その後は一先ず満足したので各キットを一つずつ組み立てて机に並べておいた、オーバーフラッグス隊のみ別のケースに入れて並べてだ

「コウタさん、コーヒーはいかがですか？」

「ありがとう、クロエ」

「いえ、丁度三時ですのでお茶にしようと思っていたところですよ」

全てを並べ終えた時、背伸びをしているとクロエが声を掛けてくれ

る

あの日からずっと一緒に居てくれるのだが……流石に風呂トイレ以外ずっと一緒というのは過保護すぎやしないだろうか？

気持ちはありがたいが、クロエは自分の為に時間を使っても良いのだがこうして今もコーヒーを淹れてくれている

お茶請けとして用意されたクッキーと共にコーヒーを飲んでいると自室の扉がノックされた

夏休みという事もあって実家に帰省している生徒は多く、この世界に実家のないオレ達を除けば学園内に残っている生徒は少ない

中には帰る暇を惜しんで今の生徒が少ない時に使える時間の増えたISの訓練に打ち込む生徒も居るが、オレ達の部屋を訪ねてくるような人間はどれだけ居たか、そう思いながらドアを開けると、そこに居たのはセシリアだった

「セシリアか、今日帰るって聞いてたけど、まだ飛行機の時間は良いのか？」

「ええ、まだ大丈夫ですわ。それに、自家用機ですので多少の融通は利きますの。それよりも、本日お訪ねしたのは康太さん達への招待状をお持ちしたからですわ」

「招待状？」

「はい、こちらですわ」

そう言うとセシリアは一通の封筒を手渡してくる

受け取ってみると触れて直ぐに解る程に紙の質が良いのが感じられた

古めかしく封蝋で留められており、更には印璽が押されている

その印璽は獅子と一角獣が王冠のついた盾を持っている絵だ、別にバンシイとユニコーンを指している訳ではないだろうが、細かく彫られている

「この紋章、イギリスの政府紋章ですね。という事はイギリス政府からの招待状、という事ですか？」

「ええ、クロエさんの仰る通りですわ。伝えられていた内容を簡潔に説明しますと、本国よりラビットフット社にイギリスの代表候補生へ

の教導依頼となります」

「成る程なあ。けど何でオレ達なんだ？確かにラビットフット社は世界から注目されているが、まだ学生だぞ？」

「私も本国から言われた事をやっているだけですが、恐らくは臨海学校でデビルガンダムとの戦闘が理由だと思われまます。本国からは特に康太さんを必ず連れてきて欲しいと念押しされましたもの」「オレをか？それはまた、随分と高く買い被られたものだな」

「あら、そうでしょうか？少なくとも実際に交戦し、あの『シドウ・レポート』の作者と考えれば不思議ではないように思えますわね」

「そうか、『シドウ・レポート』の……ん、ちよつと待て、何だそれは？」

「えっ？康太さんが書かれたのではないのですか？各国に配られて、デビルガンダムとその配下に関する詳細な情報と対処法から世界中のI Sパイロットは一度は目を通してしている程のレポートだと思うのですが……」

何だそれは、オレは全く身に覚えがない

確かにデビルガンダムに関してこの世界でオレ以上に詳しい人間は居ないと思うがそんな資料を作成して提出した覚えはないぞ、書けば確実に覚えてる筈だ

「電子データで良いのなら此処にあります、読みますか？」

「すまない、ちよつと貸してくれ」

セシリアが鞆から取り出したタブレットを借りて少し読んでみると、確かに文面は書いた覚えのある内容だった

そして軽く読み飛ばして最後のページを見ると『著・紫藤康太』『監修：篠ノ之束』とある

うん、思い出したぞ、これ前に篠ノ之博士に提出したデビルガンダムに関する報告書だ

「大体分かった、犯人は篠ノ之博士だ。オレの報告書をそのままレポートとして世界にばら蒔いた訳だな」

「そうだったんですね。ですが、間違った情報でもありませんわよね？実際に戦った私が読んでもおかしい点は見当たりませんかでした

もの」

「まあ、嘘は書いてないんだけどよ……」

再生能力やらD G細胞の特性やら四天王の情報やら、嘘は一切書いていないからこそ資料としてこれ以上の物はないように思える

しかも最初のページにでかかど『D G細胞は常に進化する。新たな情報が得られた場合は速やかな情報共有を望む』と注意書きがあったから、これを鵜呑みにするなと警告も十分だった

「そんな訳ですから、康太さんの参加を本国は是非とも望んでいるのです。ですが強制ではありませんわ。教導依頼は本当でしょうけど、きつと裏では世界にラビットフット社と仲が良いと見せ付けるチャンスだと思っているでしょうし」

「こつちとしてはそう言われるとありがたいが良いのか、そこまで暴露して」

「確かに私は本国からメッセンジャーとしての役目を任せられましたけど、後は康太さんの自由意思に任せます。私はご友人に無理な負担を強いるつもりはありませんもの」

「フツ、分かった。前向きに検討してみるよ」

「そうですね。確かに政治的な思惑も混じっていますが、私としても本国がデビルガンダムに対する備えをする事は望ましいですから、そのお言葉が聞いて嬉しいですわ。話では明日から二週間、本国では代表候補生を集めた合宿を行いますの。その中で一日だけでも良いとの事でしたので、もしもご参加頂けるのでしたら宜しくお願い致しますわ」

伝えるべき事を伝え終わるとセシリアは去っていった、これから行われるというイギリス本国での合宿に参加さるのだろう

「コウタさんはこの話、どうされるのですか？」

「受けるつもりだ。リハビリにもなるし、また改修したジェガンのテストにもなるからな」

政治的な思惑もあっさりと言ってくれたセシリアの期待に応えたといったのもあるが、何より多少のブランクがある

そういう訳で取り敢えず封筒の中身を確認、格式張った文面ではあ

るが要約するとセシリアの言っていた内容の通りだった

ただ、その中に面白い内容があったのでより参加の意思が強まる事となったのだ

篠ノ之博士達にも伝えるにしても旅立つ準備はしておこう、スーツケースに何日か分の着替えやらを詰めて足りない物は道中で補充するなどしてオレ達はノツセルにてイギリスへと飛び立ったのだった



「ふふん、布陣は完璧ね！」

そうして康太達が旅立った後、普段ならばISの訓練中である時間の内にピッキングで康太達の自室で待ち構えているつもりのも更識楯無は自信満々にそう言い放った

数日は行っていないが、昨日から同じ時間に訓練を再開した康太達、ならば今日もそうだろうと思いい、そして留守だった事から確信に変わり、水着にエプロンという格好で片手に京都の老舗菓子店から取り寄せた高級菓子を持っていた

最初は普通の格好だったのだが、お菓子の他にもどうせなら男の子が喜ぶような格好をと思いい、折角買ったのに忙しきで使う事なかった水着を使って一見して裸エプロンに見えるようにしたのは彼女の悪戯心からである

そして戻ってくるであろう予定時間の三十分前にやって来た楯無は待ってる間暇なので部屋の中を色々眺めていた

ベッドの下に何か隠してないかなあ、とか思っ探しても何も無かった事に残念がり、ならばと机の引き出しを二重底にしてないかとか、参考書のカバーの下とかを探ったりして、机の上に飾られているガンプラに気付く

その中でも数が多いオーバーフラッグス隊に気付くと、それを興味津々に眺める

「これ、エイフマン教授が先日データを送ってきたフラッグね。もうこんなに模型を作ってるなんて、商品化でもするつもりなのかしら？」

見れば他にも似たような物はある、これも全てラビットフット社が

計画している機体なのかと考えつつ、彼女の目にジンクスⅢアロウズカラーが留まる

不思議とシンパシーのような物を感じたそれを楯無がじつと見ていると携帯の着信音が鳴る

仕舞う場所がなかったので胸の谷間に仕舞っていたそれを取り出した楯無は発信者が虚である事を見て通話に出る

『お嬢様、今どちらでしょうか?』

「前に伝えていた通り、康太くんの部屋よ。それで、何かあったの?」

『はい。本日から数日、紫藤康太君はそちらには戻りません。先程学園側に外出申請があり、イギリスに発ちました』

「えっ!? ちよ、ちよつと待って!? 私、そんな話聞いてないわよ!」

『ですから、つい先程の話なのです。今待っていても無駄なので、その事をお伝えした次第です』

「もく! これじゃあ何の為にこんな格好したか分からないじゃない!」

こうして楯無の康太へ対するお礼を兼ねた接触は失敗に終わったのだった

後程、用意しておいたお菓子を消費期限の関係から生徒会室で食べている楯無の姿があったのだという



イギリスのロンドン郊外、そこに設けられたアリーナでは帰国したセシリアを始めとするイギリスの代表候補生が集まりそれぞれの技量を伸ばす為に訓練に励んでいた

帰国したばかりで時差もあるがセシリアは飛行機での時間を使い調整を行った為に翌日には直ぐに合宿に参加しているのだ

この合宿では対デビルガンダム軍団という明確な目的を持って訓練が行われている、通常のI.S.を想定した訓練ではなく如何に素早く多くの敵を倒せるか、その技量を磨く為の訓練を行っているのだ

だから複数の的にどうすれば的確な射撃が行えるか、セシリアはそんな代表候補生達の中でも機体特性と相まって抜きん出た成績を叩き出していた

それは実際に一対多の戦場を切り抜けた経験があったからであり、訓練だけの他の代表候補生とは一線を画している

そうして今もスコアを更新したところで休憩に入る、そんなセシリアに話し掛けてくるのは同じ代表候補生の少女である

「ねえねえ、セシリアさん。例の噂って本当なの？」

「噂とは、何の事ですか？」

「ラビットフット社のテストパイロットがこの合宿に参加するって話よ！ねえねえ、どんな人なの!？」

「ああ、そういう事ですよ。話は通しましたが確定ではありませんわよ。ですが、そうですね、一言で表すなら『強い人』でしょうか？」

「セシリアさんがそういう程!?!他には!?!」

セシリアは適性もありブルー・ティアーズという機体を駆り、その実力は元より同年代の間では頭一つ抜けていた

話し掛けてきた少女もそれは知っているだけに、そのセシリアが強いという相手に強く興味を惹かれたのだ

「くっだらない。何が強いよ。篠ノ之博士のIS使ってるんだから強いのは当たり前じゃない。そんなので強いなんて馬鹿じゃないの？」

しかしそれに対して難癖をつけてくる輩というのは何処にでも居るものだ

他の代表候補生の少女はセシリアの評価を一笑した、康太の事を性能頼りの男だと考えているようである

「確か、マリーさんでしたわね。康太さんの機体は確かにカスタムされてますが、ベースは第二世代機のジェガンですよ？」

「ならアンタが弱いだけよ。アンタなんてブルー・ティアーズに適性があっただけで、今のスコアもそのお陰でしょう？ブルー・ティアーズが無ければアンタなんて雑魚よ、雑魚」

マリーと呼ばれた少女はそう言ってセシリアを笑う、代表候補生として選ばれたという事はそれだけの自負が多少の差はあるものの、誰もが持っているのだ

そして彼女はセシリアの事を挑発する、それまで一番次の国家代表に近いとされていたセシリアが負けたという事が彼女の気を良くさ

せていた

しかし I S 学園に入学する前のセシリアならば兎も角、今のセシリアはそんな事で一々怒りを露にしたりはしない、それだけ学園での日々は彼女を精神的にも成長させていた

「そうですか。なら貴方は内臓が破裂した状態でも戦闘が出来るのですね？」

「は？何言ってるのよ？」

「私が康太さんを強いと言ったのは何も技量だけではないのですよ。あの人は敵を討つ為に P I C で打ち消せない程の G を体に受けても戦えますし、それで内臓が破裂しようと最低限の治療を受けて再出撃しました。今の貴方にそれだけの覚悟がありました？」

「な、何よ!?!私だって出来るわよ、それくらい！」

「言葉だけなら幾らでも。ですが本当に信念を貫くような方はそのように信じられないような戦い方をするので。それと、これはこの合宿で想定しているのと同じ、デビルガンダムの配下を相手にした時の話ですわよ」

それだけ言うとセシリアは休憩は終わりにして再び訓練に入ろうとする

マリーは納得いかないような顔をしており、最初にセシリアに話し掛けてきた少女の方は話を聞いて康太の事を筋骨隆々な大男として想像していた

そんな二人を置いてブルー・ティアーズを展開した時の事だった、セシリアは近付いてくる I S の反応に気付く

悠々と自らの存在感を示すかのように高度を取り一定の速度で此方に向かってくる機体、セシリアは直ぐ様何か予定にある機体か教官に確認するが、教官はこの時間に近付いてくる I S の予定は無いという

「正体不明、敵か味方かも不明。一度呼び掛けてみるしかありませんわね」

相手の意図も正体も分からない以上は一度通信で呼び掛けなければ後で問題になりかねない

その為、セシリアは油断なくライフルを構えながら近付いてくる機体に向けて全周波で呼び掛ける

「接近中のISに警告します。直ちに所属と目的を明らかにし武装解除しなさい。聞き入れられない場合は実力を以て排除します。繰り返します——」

数度繰り返される警告、向こうにも確実に通じている筈だが返答はない、そればかりか明らかに増速し此方に向かってきている

「反応なし、所属不明機を敵と判断し迎撃に移ります！」

「て、敵って、本当なの!?!」

「明らかに此方の警告を無視している時点で怪しいに決まっていますわ！先行し、敵の出鼻を挫きます！」

「ま、待て、オルコット!?!」

教官が制止するがまだ訓練機の出撃準備は整っていない為にセシリアは時間稼ぎを行う事を優先し迎撃に向かう

距離のある内に狙撃で敵の足を止められれば、そう判断してセシリアは機体を飛翔させ、射程圏内ギリギリのところまで静止して狙撃の体勢に移る

センサーで遠目に敵の姿を捉えると、それは既存のISとは大きくかけ離れた姿をしていた

戦闘機にしては人のような手が前に出ており、セシリアの脳裏に可変機という可能性が過る

ならば話に聞くイタリアのテンペスタIIかと思うが、それともシルエットが一致しない

一体何者が、と考える間も無く所属不明機はブルー・ティアーズの射程圏内に入って来た為に狙撃する

光速と同じレーザーによる一撃をこの距離で避けられる筈がない、そうセシリアは確信していたが次の瞬間には覆される

当たると思ったレーザーは発砲と同時に変形した所属不明機により空を切る

「私が外した!?ですが、二度目はありませんわ！」

偶然同じタイミングになったから外れたのだと見たセシリアは立

て続けにレーザーを放つ

しかし所属不明機は機体を左右に振ってそれも回避する

「二度も避けた!?何なんですか、この敵!？」

『敢えて言わせて貰おう、グラハム・エーカーであると!!』

此処まで来るとセシリアも相手が偶然ではなく撃つてくるのを分かって回避していたのだと認めざるを得なかった

だがそれよりも衝撃を受けたのは距離を詰めてきた敵が発した声は男性の物だったからだ

更にその隙に距離は縮まり、敵機が腕から取り出したナイフのような物からプラズマによる刃が伸びる

「インターセプター!」

最早ライフルの間合いではない、セシリアは慣れてはきたが少しでも早く武装を展開する為に音声で近接戦闘用のブレードであるインターセプターでプラズマの剣を受け止めた

「私に剣を使わせるなんて!」

『身持ちが固いな、ブルー・ティアーズ!』

プラズマを発生させているナイフ部分を押し付けてくる敵機、距離を取らなければ自分の不利は免れない、そう理解しているセシリアは自身の弱点をよく把握し、そしていつもその対処法を模索していた

「ですが!」

『何ッ!?!』

その答えの一つが鏢迫り合いになった時に相手の懐へとビットを飛ばし至近距離からの砲撃である

敵のパイロットはその動きに意表を突かれつつも素早く後退している、しかしセシリアは冷静に四基のビットによる射撃を行う

しかしその四発の攻撃は敵機が左腕に装備していた楯が回転し全て防がれる、多少は楯が凹んだが機体本体は全くの無傷である

「そんな、受け止めた!?!」

『よくも、私のフラッグを!!』

あの状況ならば絶対に直撃させる事が出来た、だが目の前の敵はそれに対処して見せた

そんな出鱈目なパイロットが何人居るのか、敵の技量に舌を巻きつつセシリアはライフルとインターセプターを持って構える

敵機もまた右腕のライフルと左手のプラズマの剣を持ち気迫を増す

「参りますわ!」

『ブルー・ティアーズウツ!』

そして再び二機が激突しようとした時の事だった

『ふむ、演習としてはその辺りで良かろう。二人とも剣を引くが良い』『なっ?!』

『流石にこれ以上は互いに危険か。了解した、王女殿下』

二機に向けて同時に流れる通信、それを聞いたセシリアはその声の主に驚き、可変機の方は素直に武装を格納しそれまで纏っていた気迫を霧散させる

所属不明機がそのようにあっさり戦闘を停止した事にも驚き、何が起こっているのかセシリアが理解出来ず混乱していると近くに一機のISが寄ってくる

白を基調としスカートのように広がる装甲、各所に見える青いクリアパーツはセンサーを兼ねており、肩部アーマーからは生身のそれよりも一回り巨大な腕が伸びている

「余興は此処までとする。これはレイネシア・ビクトリア・カミラ・ステュアートの命である」

「お、王女殿下!」

「うむ、久しいなオルコットよ。混乱するのも解るが今は剣を収めるが良い。コウタ・シドウも良い働きであった」

『お褒めに預り光栄です、殿下』

「シドウって……康太さんでしたの!?!た、確かに言われてみれば声が……」

『そうだぞ。詳しい事は後で話すとして、今は戻るとしよう。王女殿下が説明してくれるさ』

次々と明かされる情報にセシリアの許容量は限界寸前であったが、王女を先頭に三人は元の訓練場所へと向かうのであった

38話 教導2

「それで、どういう事なのか説明してくれまして？」

訓練が行われているアリーナまで帰還した三人、その中でセシリアはまず康太へと詰め寄る

だが康太は着陸すると機体の出力を落とすまま動かない、何をしているのかと思っているとアリーナの入り口から康太が現れて機体に触れると待機形態の黒と白の二つのラインが交差するデザインの腕輪に変える

「もしかして、遠隔操作型の無人機でしたの？」

「そうだ。コアをリンクさせてコアネットワークを介した操作を行う。そうでなければあそこまでの可変機構を実現出来ないさ。生身でやれば確実に関節が潰れる」

そんな光景にフラッグと呼ばれた機体の特性を見抜くセシリア、康太は軽く解説しているがこれを使えば以前のように康太が肉体を損傷させる事なく全力の機動が使える事に思い当たっていた

「さてと、それでオレが何故此処に居るのかだが、オレが参加するに至った経緯に関してはオレの方から説明するのでしょうか」

しかし先程の戦闘での康太の繰り出した機動を思い出して戦々恐々としているセシリアに気付かず、康太は語り出すのだった



荷造りを終えて向かったラボにて篠ノ之博士に訓練合宿へと参加する許可を取り付けたオレ達だったが、そこでエイフマン教授に呼び止められた

何事かと思えば一緒に奏の事も連れていく事を提案されたのと、ついでに参加するならフラッグのテストを頼まれたのである

取り敢えず完成したが比較が出来ないという事で今回の訓練で他国の機体相手に試して欲しいとの事だった

そうして渡されたフラッグだが、見た目は完全にオーバーフラッグだった

そのオーバーフラッグを受領してIS学園の教員室で織斑教諭に

も事情を話して出発、する前に招待状に書かれていた連絡先に連絡を取り、ロンドン・ヒースロー空港にノッセルで着陸、入国審査を済ませるのだが、IS学園に入学する際にパスポートは作ってある、奏に關しては篠ノ之博士が何処から手に入れてきたのか正規のパスポートを新しい苗字で作ってあった、母親と同じ苗字は名乗りたくないとの事らしい

そして何の問題もなく入国審査を終えて連絡にあった迎えの人物を待つ、すると黒服の護衛を連れた王女殿下が現れたのだ

「ようこそ連合王国へ。我々はラビットフット社の来訪を心より歓迎する。私はレイネシア・ビクトリア・カミラ・ステュアート。この国の王族の一人だ」

まさか王女殿下直々の出迎えがあるとは思ってなかったオレ達は驚きに固まる、そんなオレ達の反応を見てか愉快そうに笑う王女殿下は、一度笑うのを止めると早速仕事だとオレに告げるのだった



「——そして王女殿下から所属不明機としてこの場を襲撃するように見せ掛けて欲しいと頼まれた訳だ」

「よく初めて会った方からそう言われて従えましたわね……」

「セシリアから渡された招待状の中に一通だけ手書きで同じ事が書いてあったからな。話を聞いて、書いたのが王女殿下だって直ぐに分かったさ」

その王女殿下はこの合宿に参加している人員を集めていた

手紙にも、会ってからの説明にも現時点で代表候補生達が緊急時に対してどれだけ対応出来るのか、そのレベルを把握したかったとあったから、それに対する評価なのだろう

「このような策を使った事をまずは詫びよう。しかし緊急時でなければ見えない事もある。その事は全員理解して欲しい」

集められた人員の前に立ち王女殿下はまずこの事態についての説明を始めた

「今回の件は私がそこに居るラビットフット社のテストパイロットであるコウタ・シドウに協力を要請して行った事である。しかし、その

目的は有事の際に各自がどの程度動けるかを見極める為だ。そして実際にその対応を見て、総評を下す。残念ではあるが、極めてお粗末であったと言わざるを得ない！」

これに関しては当事者なのでオレは知っている、そして王女殿下が下した評価というのは一刀両断と言える程にバツサリと斬り捨てるものであった

「まず初動であるが、直ぐ様対応に移ったのがオルコットののみであった事。この場にはかつて軍属でもあった教官が居ながらろくに対応が出来ていない。仕方なくオルコットが自身で状況を判断し、所属不明機に呼び掛け、頭を押さええに向かった。そして、その間にお前達は何をしていた？」

ギロリと睨むように集まった全員を見据える王女殿下、王族からの視線に教官達が一番顔を青くする

一線は退いたとはいえ仮にも軍属であったのなら緊急時に速やかに対応出来て当たり前、にも関わらず初動が遅れた等言語道断であった

「現代表候補生各位もだ！この場にあるISは訓練機が三機、人数は十人。数が足りないとはいえ、誰が乗り込むかで揉めるなど何事か！」

そして次に標的となったのは代表候補生である少女達であった

彼女達もセシリアが出た後で出撃しようとしたらしいのだが、話を聞く限りでは誰が乗って出撃するかで揉めてしまったらしい

敵が一機で、こちらはセシリアを含めて四機、ならば武勲を得るチャンスだとも思ったらしい、確実に勝てると踏んでならば自分かと争ったとか

流石にそれは笑えない、勝ち戦に士気が上がるのは分かるが、もし相手が数的差を覆すような存在ならどうしていたのか

そんな理由もあって王女殿下は怒り心頭なのである

「よって、今回の評価は極めてお粗末だと言ったのだ」

「お、お言葉ですが殿下！今回は予想外の事態だっただけで、本来の我々の実力は——！」

「その予想外の事態に対処する為の合宿であろう！今回の合宿で想定するデビルガンダムという敵は神出鬼没、故に先程の演習だ！とはいえ、本来の実力とやらを見ていないのも事実。良かろう、一度その実力を見せてみるが良い」

反論を正論で返された教官は涙目になるが、泣いて許される事ではないのは事実だ、この場に居る全員が有事の際にはデビルガンダム軍団と戦う事になっているのだから

しかし代表候補生達は王女殿下の後半の言葉に顔色を変える、此処で実力を示せば汚名挽回……もとい名誉挽回の機会となる

オレもイギリスの代表候補生達の実力は気になるし、まずは見学に回らせて貰うと――

「ではコウタ・シドウよ！早速アグレッツサー^{仮想敵}として出るが良い！」

「あつれ〜？何かこつちまで飛び火したぞ〜？」

見学しようとしたら王女殿下に駆り出された、これ全員相手にするとかオレだけ負担多くな〜？

「報告書を読んでいるぞ。既に国家代表レベル、専用機持ちを二人相手に張り合えるそうではないか。なら量産機に乗った代表候補生を三人同時に相手にするくらいは出来るな？」

「誰だ、そんな報告書を書いたのは……」

セシリアは……無言で首を横に振っているし、違う……のか？

なら他に誰が、と思っていると代表候補生達の中で一人だけ露骨に目を逸らした人が居た

「サラ・ウエルキン、確かIS学園の二年生か」

専用機こそ持たないが確かに彼女もまた代表候補生だったな

誤魔化すかのように口笛を吹いているが、焦っているのか吹けてないし

とはいえ書かれていたのなら仕方ない、やるだけやってやるか

「改修した相棒の力、此処で試すでしょう」

「ほほう、それは楽しみだ。では候補生各位は三人でチームを組め。余った一人は私とオルコットの三人で組むでしょう」

「その組み合わせが一番難易度高いような……」

「ほれ、早く機体を展開するが良い。敵は待つてはくれんぞ」

「よし、やるか！とくと見るが良い……一人の天才が改良せし、我がストライク・ジエガン エンハンス Eの姿を！」

その後、量産機を使う三人一組を三度相手にし、量産機に乗るサラ・ウエルキンとセシリア、そして王女殿下という専用機持ち二名含むチームとの模擬戦を行う事となる

数的差を覆す為に量産機であるサラ・ウエルキンを速攻で狙い、手の内を知っているセシリアを倒した

それから残った王女殿下を相手に一騎討ちとなったのである、が――

「中々やるな、だが私は負けん！」

一対三では王女殿下が近接戦闘でオレの動きを押さえ、サラ・ウエルキンがマシンガンなどの連射の利く銃器で牽制、セシリアが高精度な狙撃により苦しめられたものの、王女殿下一人ならばそうはいかない

王女殿下の専用機カリバーンは近距離での戦闘を想定して大剣や片手剣、シールドといった武装に加えてライフルを装備していた事で中距離でも安定した戦闘が可能というバランスの取れた機体であった

おまけに一国の王女が乗るのだ、その性能もコストを度外したワンオフ機に相応しいものである

「あ、ちよ、ちよつと待て!?ワイヤーはズルいぞ!」

だがタイマンであればオレの方が上だった、強化改修の施されたオレのジエガンは今までのI・W・S・P.ではなくノワールストライカーを装備した為に機動性や後方に傾いていた機体バランスが改良されたのである

そしてストライクノワールと同じようにビームライフルショットイーを二丁に加えて各部へワイヤーアンカーを装備しており、両腕部にはライゴウガンダムをモデルにデフォルトでスモールシールドを装備し、そこにアーマーシユナイダーも収納した

更には両肩に追加されたサブスラスターだ、左右に向けて設けられ

たそれにより横への移動が早くなり攻撃の回避も容易となった

機体色も黒と白で塗り直してある、VPS装甲ではないので他のスライカーパックに換装しても色が変わらないのが残念である

「くっ、身動きが、待て、待て待て、タイムだ！」

今もワイヤーアンカーを利用した機動で旋回したり、ワイヤーでカリバーンを絡め取ったりしている、王女殿下は慌てているが聞く耳持たん

両手に抜刀したフラガラツハ3ビームブレイドを持ちカリバーンへと振り下ろした模擬戦を終えるのだった

うん、やはりストライクノワールの二丁拳銃に二刀流、黒い配色とワイヤーアンカーは中二心を擦られる機体だな

◆ 「うわあ、ダメージレベルがCに入り掛ける……」

模擬戦を終えてピットにて機体状況を確認しての一声がそれである

量産機のみ相手にしていた時は目立った損傷は受けなかった、連携もろくに取れていない上に技量も素人ではないがセシリアよりは下だったからだ

だが最後の模擬戦の際にセシリアから各関節部に狙撃を受けたのが悪かった、レーザーならば装甲で受け止められるが装甲のない関節部に撃ってくるからだ

これもセシリアとのタイマンならビットも落とせるのだが、王女殿下やサラ・ウエルキンを同時に相手取りながらだから難しかった

「お疲れ様です、コウタさん」

「クロエか。荷物の搬送を任せて悪いな」

「いえ、むしろ模擬戦を連続でしていたコウタさんの方が負担が大きかったと思います。それで、機体パーツを交換しますか？」

「ああ、こうなると各関節部のパーツをユニットごと取り換えた方が早いと思う。取り敢えずその作業は後でやるとして、何かあったか？」

「レイネシア王女殿下がお呼びです。改めて顔合わせだそうです」

「そうか。奏は？」

「先に向かっています。なので私達も行きましょう」

「ああ、分かった」

クロエに続いてオレもピットを後にする

此処に来てから直ぐに模擬戦の連続だったからな、振り返ってみればまともに挨拶もしていない

そういう訳でアリーナに集まっているイギリス代表候補生達のもとは向かう

向けられる好奇心な視線や敵意の混じった視線を無視して奏の隣に並ぶ、それを見て王女殿下が口を開いた

「集まったところで改めて自己紹介と行こうか。まずはラビットフット社の方から頼めるか？」

「了解。紫藤康ただ。専用機はストライク・ジエガンE。ラビットフット社のテストパイロットをやってる。さっき模擬戦で相手したから腕の方は心配ないと思うが、よろしく頼む」

「クロエ・クロニクルです。専用機はバンシイ。コウタさんに比べると腕は落ちますが、今回の合宿へ参加出来て嬉しく思います。よろしくお願いいたします」

「あ、紫藤奏と言います。まだISに触れ始めたばかりの初心者ですが、精一杯頑張ります」

まずはラビットフット社に所属する三人で自己紹介をしていく、そんな中でセシリアが奏の苗字に首を傾げた

「シドウ？」

「オレの妹みたいなものだ。同じ苗字だが血の繋がりはない」

そして以前保護した子供達だが、全員が姓を紫藤に変えている

かつての名前を隠す為、というのもあるが全員が前の苗字を名乗りたくないと言ったからである

そりゃ、自分を人体実験のモルモットとして差し出すような親の苗字など名乗りたくないだろう、そして新たな姓をどうするかという話になり、篠ノ之だと無駄な騒動を引き起こし、全員日本人なのでクロニクルやエイフマンは使えない、架空でつけるのも面倒だからとオレ

の紫藤が使われた

結果、孤児という設定だったオレの経歴が少し書き換えられ一つの孤児院の出身となり、その子供達は紫藤を名乗っている、という事になったのである

「そういう事ですね。よろしく願いますわ、奏さん」

「は、はい。此方こそよろしく願います」

そしてオレの表向きの経歴を知っているセシリアは事情を察したようだ

奏の方はまだ十四歳だからな、代表候補生という存在を前に緊張していた

さて、取り敢えずこれでうちの自己紹介は終わり――

「初心者って、素人を連れてきたの？この合宿がイギリスにとってどんなに大事なものか、アンタ分かっているの!？」

かと思ったが面倒な事になった、イギリスの代表候補生の一人が文句をつけたのだ

まあ、確かに奏は初心者ではあるが、面と向かって言ってくるか

「それは確かにそうだが、誰もが最初は初心者だろう？奏は素質はある、何しろIS適性がSランクだからな」

「え、Sランク……でも、だからって――」

「それにさつきオレにボロ負けしたお前はオレから見ても奏と大して変わらん」

ピシツと空気が凍った気がしたが、余計な問答に時間を使うよりは建設的だろう

突っ掛かってきた代表候補生の少女はわなわなと震えているが、実際奏が機体を動かしたのを見たが素人には見えなかった

適性はどれだけ自分の思った通りに機体を動かせるかによるものでそれが戦闘能力と結び付く訳ではないが、だからこそ奏を連れていく事にも賛成したのだ

「なら勝負して白黒つけてあげるわ!」

「さつきオレに負けてただろ、三対一で」

「あ、アンタじゃなくてそっちの子よ!」

そう言つて指を指した相手は奏である、ふむ……

「奏、行けるか？」

「んー、多分大丈夫だと思う」

「そうか。機体はどうする？」

「Gで行くわ」

ふむ、最初から本気モードという訳か、まあ仮にも代表候補生が相手、実際にISを動かした事があるとはいえ経験の少ない奏は不安だろう

こうして奏とイギリス代表候補生マリー・リードの模擬戦が行われる事になり、他の面々はアリーナから観客席へと移動する

模擬戦ばかりやっているが技量を伸ばすには良い機会だから積極的にやっているのだろう

それに他人の戦い方を外から見て分析するのも勉強になるからな

カタパルトから飛び出した機体を纏った二人が定位置に着き、王女殿下が取り仕切る

「これよりカナデ・シドウとマリー・リードの模擬戦を行う。では、始め！」

『墜ちなさいー！』

『誰が！』

マリー・リードの機体はイギリスの第二世代量産機シユーター・ティアーズ、セシリアの機体の前身でビットの無いブルー・ティアーズのような機体だ

コンセプトは高速で飛び回り精度の高い狙撃を行うというもので、前身だけあってブルー・ティアーズと変わらない

そして奏の機体だが、此方はジェガンR型をベースとしたライトアーマーであるが、装備を始め細部に手を加えられてある

まず機体出力の強化、ライトアーマーで軽量化した上に高機動戦闘に最適化した調整が施されている

そして一番目を引く装備は両肩にマウントされた二本の剣だろう

右肩には大型のライフルに刃が付いたような武器、左肩には幅も厚さもある巨大な大剣である

更には両腰にも二本の実体剣が装備され、脚にも短めの刀身のカタールがある

両腕にはスターク・ジエガンの腕部追加装甲があり、中にビームサーベルとグレネードランチャーが一基ずつ備えられている

「康太さん、あの機体は？」

「ジエガン・セブンソード スラッシュ / G、刀剣を使った戦闘に高い適性のある奏の為に用意された専用機だ」

その名の通りダブルオーガンダムのセブンソード / Gをモデルにしてある、カラーリングがインスペクションと同様に紅白になっているのは奏の趣味だ

なおダブルオーガンダムのようにGN粒子もクリスタル状の新素材もないので機能としてはカタールにヒート系の、他の剣にはコールドブレードの技術を投入してある、エイフマン教授がGNドライヴの研究してるけど、あの辺りの技術も手に入らないだろうか？

「近接戦闘タイプ、ですが右肩のはライフルとしての機能もありますわね」

「だから / Gという名前なんだ。あれを剣に含めたらエイトソードになるからな」

「ああ、GUN銃のGですね」

「そういう事だ。と、動いたな」

試合の流れは当初は奏が剣を抜いて突っ込むかと思われたが奏は右肩のコールドソードIIブラスターを持ち射撃戦に付き合っていた

舐めている、という訳ではなく自分の射撃の実力がどこまで通じるか確かめたかった感じだな

しかし流石に相手の方が上手だと感じたらしい、左肩のバスターソードIIを楯に使いながら撃ち合っていたがコールドソードIIブラスターを仕舞うと両腰にコールドソードIIを抜く

ダブルオーガンダムのGNソードIIをモデルにした武装であり、セブンソードでは大小の剣に変更されるが奏の持つ物は原型機の物と同様に同じサイズ物だ

それを見て接近してくると見たのだろう、対戦相手であるマリー・

リードは回避を止めて静止、狙撃の体勢に入る

奏がメインブースターを使って真っ直ぐに突っ込み、その馬鹿正直とも言える機動にマリー・リードが薄く笑う

だがコールドソードⅡはライフルモードへの可変機能を備えている、奏は接近しながら牽制としてビームを放ちながら近付いていく

当然、剣だと思っていたマリー・リードはその予想外の攻撃に動揺する、咄嗟に回避するが一発は被弾してしまう

「オレならあの状態から更に当てられたが……やっぱり射撃訓練追加しとくか」

不意打ちで十発は撃っておきながら初撃は外したし命中したのは相手の足に一発だけ、なんとも勿体ないその結果にオレは奏の訓練にもっと射撃訓練を課す事を決めた、コールドソードⅡブラスターも本来は遠距離で狙撃可能な程に射程、威力、精度の高い武装なのにあまり当たってなかったし、割りと本気で

対するマリー・リードだが、此方は射撃に関しては上手い、狙った瞬間には引き金を引けている、だが武装が合っていないように思えた「あの銃、もうちょい銃身を切り詰めてレート上げたら合うかもな」「どういう事ですか?」

「マリー・リードだが、たまに銃へのエネルギーチャージよりも先に照準が済んでいる事がある。僅かかもしれないが、本人にとってはもどかしく感じているんじゃないか?」

「康太さん、普通はそこまで見えませんかよ……?」

「単にオレがそう見えただけだ。それより、決まったな」

「えっ? あっ!」

試合の方を見れば射撃こそ当たらないが牽制程度にはなったビームに阻まれて身動きの取れないマリー・リードへと奏が距離を詰めていた

あそこは既に奏の距離だ、インターセプターを呼び出し必死に食い下がるうとするマリー・リードだが奏が抜いた二本のヒートカタールによりインターセプターが斬られた

二本のヒートカタールの刃を重ねるようにインターセプターの刃

に合わせて熱量で溶断、近距離での手段が無くなったところに左肩にマウントしているバスターソードⅡを使って吹き飛ばした奏、それによりエネルギーこそ残ってはいたが地面に叩き付けられた衝撃で気絶したマリー・リードは戦闘不能と判断され、模擬戦は終了するのだった

◆
アリーナでの模擬戦が行われていた頃、その上空では一人の人物がそれを見下ろしていた

「アレが紫藤康太か」

『はい、目標になります。このまま仕掛けますか?』

その人物の視線の先には観客席に居る康太の姿があった

そして確認するとその人物の通信機に少女の声で返答がある

「いいや、まだ仕掛けるには早え。やるならアイツ等が此処に留まる最終日だな。それまでに舞台の準備をしてやろうぜ」

『分かりました。プランは?』

「この上に聖剣があるからな、それを使う。それに、オレ様の持つガンダムを一機エサにしてやるんだ。アイツは必ず食い付く。それにな

——」
その人物はニヤリと笑う、事前に調べていた康太の性格を思いだしながら

「良いねえ、自分から困難に向かっていく奴は嫌いじゃねえ!そしてイオリアのジジイが提唱したのは別の進化、ニュータイプ!紫藤康太、お前の全てをこのオレに見せてみる!あげやげやげやげやげや!!」

姿の見えない何かは特徴的な笑い声を残してその場を去っていった

その際、地上では一時的な原因不明の電波障害が起きたのだが短時間での復旧に多くの人間は気にも留める事がなかったのであった

そして、康太の知らないところで新たな事態は動き出しているのがある

39話 教導3

模擬戦での勝利により奏はその実力を示した、それにより他の懐疑的だった者達も納得させた奏は自慢気にドヤ顔をしている

が、それは直ぐに終わる

「はい、今回の試合についての反省会を始める。まず自分で悪かった点を挙げてみる」

「うっ……その、射撃を外しました……」

「よろしい。初めに苦手とする射撃戦に挑んだのは向上心があって良い点だ。だが不意打ちの決まったあそこで、初弾を外すのはどういう事だ？あの状況、初弾命中ならどう状況が動いたか分かるな？」

「命中した場所によっては更に有利に事を運べました……」

「その通り。あの状況で敵の手持ち武器を狙ってもよし、射線が通るなら敵のスラスターを狙ってもよし、少なくとも敵に大きな弱点を作る事が出来た。という訳で今日は射撃訓練オンリーな」

「はい……」

涙目だが幾ら近接戦闘が得意とは言っても剣の間合いでは出来る事は限られる、だからこそ奏の機体にはコールドソードⅡに加えてコールドソードⅡプラスターも備えられているのだ

仲間のフォローにも射撃でなければ間に合わない時もある、そして撃つにしても腕がなければその仲間に合わせてしまうかもしれない

今回の合宿でも敵はデビルガンダム軍団を想定しているのだ、近接戦闘だけで相手にするには心許ない

そんな訳で訓練が開始された後はアリーナ内の的が浮かび出し、それを狙って射撃訓練を行っていく

デスアーミーの物量を想定して的大量に、そして当ててもまた直ぐに的が現れるように設定されての訓練だ

奏もコールドソードⅡをライフルモードで使用しているが、動かないのでまあまあな命中率である

それも狙ってから撃つのが遅い、隣で同じ訓練を受けているマリー・リードが的確に的を撃ち抜いており、奏に対してドヤ顔を決め

ている

「ぐぬぬ……！」

「お前ら割りと似た者同士だよな」

「誰が似た者同士よ、誰が！」

そういうところが、と言いたいが二人は同時に同じ事を話した為に、またしても同時に顔を背ける

そんな妙に息の合った二人に苦笑しつつ、オレは奏からコールドソードIIを借りて的に向ける

「距離の近い奴は撃破を優先するが、まずは素早く多く撃つ事からだな。こう、端から端を銃口でなぞるだろう。そして銃口が重なった瞬間に引き金を引けば——」

試しにオレが同じ武器を使ってやって見せ、十の的を撃ち抜いてやった

「は、早っ……！」

「実戦だとの的も動くから追い付かねえと当たらねえぞ。その訓練はまた後でやるから、今の内に慣れときな」

「ね、ねえ、それなら動局的でやってみせて。兄さんの機体で良いから」

「別に良いが、オレの機体は複数の敵をロック可能な装備だから、参考にはならないぞ？」

「良いから、やってよ」

「分かった」

シミュレーションのデータを変更、的の姿をデスアーミーに変えて、走ってオレの方に近寄ってくるように設定する

ISのセンサーを利用して表示される仮想の敵、その数は表示されるだけで三十機あり、撃破しても後ろの方から新たに表示されるので数は減らない

地上を移動するしかないデスアーミーだから普通は飛ばせばいいのだが、そうすると金棒型ビームライフルで全体からの対空砲火に晒される、なので敵が金棒型ビームライフルを金棒のまま使おうとする距離での戦闘を行っているという想定だ

だから早く捌かないと囲まれる、オレはビームライフルショットイーを構え近い順から撃っていく

取り回しの良いこの銃はこういった場合に重宝する、だが本来の仕様と違い荷電粒子ではなくミノフスキー粒子を用いる事でEパック方式に変えた事で威力と引き換えにリロードが必要となる

リロードは直ぐに済むがその短い間にも敵は動き続ける、だからその隙を晒さないように背部のノワールストライカーから2連装リアガンを展開し繋ぎとする

I. W. S. P. とは違い様々な方向に撃てるようになったノワールストライカーは背後にも撃てる為に敵の多い状況ではビームライフルショットイーと同じく有効だ

そうして五分間の訓練を続け撃破数が三百を超えた辺りで終了となる、まずまずのスコアといったところか

「ざっとこんな物だな。どうした、二人共?」

「いいえ……」

「何でもないわ……」

「ふむ、まあオレのは一对多に適した装備だからな。機体も違うのに比べるなよ」

自信を喪失したような奏とマリィ・リードだが、そもそも近接戦闘用の機体と狙撃型の機体とを、オレの万能型と比べるのが間違っている

とはいえ、それを言っても気休めにしかならないだろう、二人はそのままあでもない、こうでもないと言っているのだ

◆ 取り敢えず訓練の初日が終わり、今日は基本的な技能の向上に努めた

そんな中で問題となるのが、明日以降の訓練メニューに関してだ
今日と同じく射撃訓練をするか、イギリスの機体が軽視しがちな近接戦闘をするか、だな

デビルガンダム軍団の機体は近接戦闘が強い機体が多い、だからいざという時にはその場を凌げるだけの技量があった方が良い

高機動狙撃型という戦闘スタイルがイギリス機の特徴である、エネルギーの割り振りも移動用に多く割かれている為に格闘に使うパワーが少ない

オレの機体は全身装甲なのでシールドに張る分をパワーに割り振っている為、機動性と機体出力の両立がされている、その違いも問題だな

「防ぎ方だけでも教えるか」

身を守る術があるかないとでは大きな違いがある、パワーが無いのであれば打ち合うのではなく受け流す方向に持っていこう

「何にせよ、本命は三日目からのシミュレータ訓練だな」

今回の訓練でラビットフット社から持ち込んだシミュレータ、全てはそこに辿り着く為の前準備、そう結論付けてオレは与えられたホテルの一室で眠りにつくのだった



「ふふん、今日はまさに私の独壇場ね」

「そうだな、だから相手はオレがやるぞ、奏」

「あー、ちよつとは手加減してよね？」

「お前相手に手を抜ける程、まだオレの技量も高くないからな」

翌日、再びアリーナに来たオレは近接戦闘の訓練と聞いてやる気に満ちている奏に釘を刺す

そもそも近接戦闘用の機体で狙撃型の機体と近接戦闘しても苛めにしかならないだろうに、マリー・リードをライバル視している奏は昨日の射撃訓練でドヤ顔を決められた事を余程根に持っているらしい

「では私の相手もして貰うぞ、コウタ・シドウよ」

「王女殿下はクロエとやってください」

「な、何故だ!？」

「機体のパワー的に丁度良い相手だからです。オレの機体と奏の機体だとパワーでゴリ押ししますよ」

機体のパワー的には奏、オレ、クロエ、王女殿下、セシリアの専用機の順番になる

量産機に関してはセシリアのブルー・テイアーズと同等なので、相手にするならそうしなければ訓練にならない

まあ、慣れてきたらパワーが上の機体を相手にして貰う気ではあるが、まだ早い

取り敢えず実演、という事もありまずはオレと奏で模擬戦をする
模擬戦と言っても飛行なし、武器は剣のみ、牽制として装備しているならバルカンといった小口径の火器のみだ

アリーナの地面スレスレのところをブースターで飛ぶのはありだが、一定の高度を超えれば失格、といった感じで始める

オレは装備をキャリバーストライカーに変更し、奏に相對する
奏は早速バスターソードIIを構えている、オレもシュベルトゲベル改を抜いて構える

リーチ的には大差ないが刀身が分厚く幅広い為に重量では奏の持つバスターソードIIの方が勝る、まともに打ち合えば押し負けるのは必然、だからこそ受け流す事が鍵となる

互いに上段に構えての振り下ろし、だがオレは初めから真正面ではなくバスターソードIIの側面に叩き付けるように振り下ろした

それにより僅かに横に逸れるバスターソードII、オレはそのまま刀身の横に滑り込み、肩部スラスターを使い回転、一度引いていたシュベルトゲベル改を横薙ぎに一回転しながら振るう

奏も奏であっさりバスターソードIIを捨て、両脚からヒートカタールを引き抜く

その手数にシュベルトゲベル改では不利な為、オレは背中に背負い直した後、今度は大型ビームサーベル「カラドボルグ」を引き抜く
威力、リーチ共に優れ本体は柄のみである為に取り回しにも優れる
この武装、エネルギー消費量による連続使用時間の短さがなければかなり使い勝手の良い武装である

それに加えて左腰から通常のビームサーベルも抜き二刀流で構える、そこから先は剣劇の嵐であった

小回りの利くカタールの二刀流という奏と、一撃の威力に優れるビームサーベルで牽制し、更に小型のシールドによる防御もある為

有効打を許さない

状況が動いたのは大型ビームサーベルのエネルギーが切れた時である、エネルギー消費の多さからエネルギーCAP内のミノフスキー粒子が切れたのだ

「もらったー！」

絶好の機会とも言える大きな隙に奏はカタールを繰り出そうとする、だが甘い

「なっ、白刃取り!?!」

「ビート化するのは刃の部分だけ、なら刀身に触れなければ！」

カタールが振られる前に刃を挟むように手で掴み、奏の攻撃を防ぐ

「ふっー！」

「きやあっ!?!」

そこから更に膝蹴りを放ち奏の体勢を崩すと右手にアーマーシユナイダーを展開、投げて奏の右肩の稼働部の隙間に突き立てた

刺さったアーマーシユナイダーにより右腕の動きが制限された奏の首に左手に握っていたビームサーベルを突き付けて終了する

「うう、勝てると思っただのに……」

「これでもお前より長く乗って実戦も経験してるんだ。簡単には負けてやれないな」

悔しそうにしている奏にそう返しつつ、観戦していた代表候補生達に向けて告げた

「それじゃあ同じようにやってみろ。あそこまではいかななくても、同じような技量の相手で始めると良い」

流石に奏レベルを求めるつもりはない、奏の技量は殆んど天性のものだ、そうでなければ乗り始めて一月も経っていない人間が此処まで戦える筈がない

それを理解しているのかイギリス代表候補生の子達は自分達で相手を探して模擬戦を行う、オレもそれを手助けしたり、クロエに勝ったからと調子に乗ってきた王女殿下を斬り伏せたり、クロエと軽く模擬戦をしたりと、過ごしていく

そしてその日の訓練を終え、迎えた翌日はオレ達がこの訓練に参加

して三日目である

予定時間より早めに着いたオレ達はアリーナ内のミーティングルームにて準備を行っていた、此処に来た時にノッセルに積んできていた積み荷の一つであり、この三日目から使用する為の物だ

「コウタさん、全ての機材のセッティングが終わりました」

「こつちも状況設定が終わった。これでいつでも使えるぞ」

クロエには機材のセッティングを担当して貰い、オレは訓練で使用するデータの設定を行っていた

とはいえ状況設定は複数の種類を用意してある為に、色々大変ではあったがな、主に状況に対して齟齬が出ないようにするのに

「おはようございます、康太さん、クロエさん、奏さん。今日は一段とお早いですわね」

「ああ、セシリア、おはよう。見ての通り、三日目から使う機材を用意してたところだ」

「そうでしたの？それで、これはどのような機械なのですか？」

「それを説明するのは全員が揃ってからにしよう。だが、今までの訓練で培った事が存分に活かせる物である事に間違いない」

「それは楽しみですわね」

朝は訓練内容を話し合う為にミーティングルームに一度集まる為、ちらほらと人が集まり始める時間となってきた事からセシリアがやってきてオレ達が弄っている機械に興味を示す

直ぐに説明しても良いが、どうせならまとめて全員に説明した方が効率が良い

そうこうしている内に設定も完了し、参加メンバーも集まってきた「ふむ、ラビットフット社の設備か。どのような物か、興味深いな」

「王女殿下が待ちきれないみたいだし、早速説明をしましょう。これはISの電腦ダイブを応用して作ったシミュレータだ。今日からこのシミュレータを使って訓練したいと思う。随時質問は受け付けるぞ」

「はい」

「ではサラ・ウエルキンさん」

「電腦ダイブってアラスカ条約で使用に規制が掛かっていたと思うのだけど？」

「アレはISを用いての電腦ダイブであつて、ISを用いない電腦ダイブは対象外だ。つまりは何の問題もない」

「じゃあ、はい」

「はい、マリー・リード君」

「そのシミュレータを使ったとして、何が出来るのよ？」

「良い質問だ。その辺りを少し実践してみせるから、よく見ておけ。クロエ、後頼んだ」

百聞は一見に如かず、とも言うし何が出来るかは実際にその目で確かめて貰った方が良いだろう

オレは頭にシミュレータ本体と接続した機械を装着し、用意しておいた寝袋に入る

床に寝転がる事になるから体に負担が掛からないようにしての対処だ、クツション性が高くしてあるから下手な布団より寝心地が良い
◆ 全ての準備が整うと頭の上半分を覆う形となる装置の目に掛かったバイザーにカウントダウンが表示され、ゼロと共にオレの視界が暗転した

◆ 康太が装置を装着した後、イギリス代表候補生達はシミュレータに備えられた大型のモニターを眺めていた

白い部屋が映っていたそのモニターには康太が現れる、そこにクロエが身に付けたインカムから通信を行う

「コウタさん、そちらの状況はどうですか？」

『動作に問題なし。いつでも始められるぞ』

「分かりました。状況設定01、シミュレータ開始します」

モニターから返ってくる康太の声、それを確認するとクロエは端末を操作して何らかのデータを送る

すると画面内の康太が立っている場所が切り替わっていく

そこは荒廃した都市であり、康太が立っているのは東京タワーの真下である

「最優先目標はデビルガンダムの撃破、第二に敵戦力の漸減になります。当然、撃破されれば作戦失敗になります。良いですか？」

『問題ない。これより状況を開始する』

「分かりました。以降、コウタさんをアルファと呼称します。御武運を」

そう言うとき康太はISを展開し飛翔する

目標を示す表示が新宿駅のある北西に向かって存在している為に、そちらに向かう康太

その道中に別の敵性存在が現れる

「アルファ、敵部隊と接敵、数三十」

『全てデスアーミーか、迂回してやり過ぎす』

だが康太は戦闘を避けて先に進む、康太ならば即座に殲滅可能だろう数をわざわざ避けて進む事に代表候補生達は首を傾げるが、康太は更に奥へ奥へと進む

その後も数によっては迂回したり、極少数の敵のみを突破したりと康太らしくない動きが続く

何故そのような動きをするのか、理由が分かったのはセシリアが画面内の表示に気付いたからだ

「もしかして、エネルギーを温存していますの？」

表示されているのは康太の動きだけではなく、それが纏うISのコンディションからエネルギー残量まで表示されている

そして康太は移動にエネルギーを使っているのみで戦闘には殆んどエネルギーを割いていない

それにより殆んど万全の状態を維持しているのである

そのような動きをしている理由はその後に分かった、目的地である新宿駅の近くに辿り着いた時、康太の下へと砲撃が殺到する

何が起きたのか、小さく画面が分割されるとそこには康太に向けて砲撃を連射しているデスグラウンドの姿があったのだ

更に問題となるのはその数であり、臨海学校では一体だけでも専用機複数と渡り合ったデスグラウンドが広い道路に三体並んでいるのだ

「四天王級を三機確認。他、後方よりデスアーミー、数七十。上空から

もデスバーデイ、二十が接近」

「囲まれましたわね……」

康太が単機に対して敵は多数、しかも四天王が居るといふ状況にセシリアは自分に置き換えて考える

結果は敗北、少なくともそれだけの数を相手に勝てると思える程に自惚れてはいないセシリアは康太の動きに注視する

他の代表候補生達も似たり寄ったりであり、無言でモニターを見詰める

そして康太は動き出す、それまでの温存した動きではなく全力で動いていた

まず砲撃を回避しながらデスグランドの砲や背部から伸びている巨大な角に対して攻撃を行う康太、装備もノワールストライカーではなくサムブリットストライカーに変更し、アグニ改ではなく通常のアグニにより薙ぎ払うような砲撃で武装を立て続けに失うデスグランド

放電攻撃を行う為の武装でもあるデスホーンを失った事により康太は更に装備を換装し、仕掛ける

キャリバーストライカーに装備されていたシユベルトゲベール改、量子化していたそれを手に、背には機動性に優れたスペキュラムストライカーを装備し、一気にその懐に飛び込むと生体ユニットの存在する胸部を切り裂く

だが一体を倒して終わりではない、残る二体も再生を行い武装を修復しようと動き出している、しかし修復用のエネルギーや素材となるデスアーミーはまだ周囲には居ない為はその速度は臨海学校の時のものとは比べ物にならない程に遅い

そうしている内に康太が懐に飛び込み、残された二機もまた一機目と同じ運命を辿るのだった

デスグランドを最低限の労力で仕留めた康太は装備をノワールストライカーに戻すと遂に目的地へと到達する

そこに待ち受けていたのは地面から大量のチューブのような物を伸ばして地上に現れたデビルガンダム第二形態の姿だった

「あれがデビルガンダムか……」

「私もシミュレータとはいえ初めて見ましたわ。一体、どれ程の力を想定しているのでしょうか？」

デビルガンダムの脅威というのはIS学園を通じて各国に広く知らされているが、かといってそれがどれだけの力を持つのかと言われると誰も知らない

だからこそセシリアもレイネシアもラビットフット社がどの程度まで想定しているのかを知りたがっていた

そして、モニター内ではデビルガンダムが動き出す、それと同時に地面から複数のデビルガンダムヘッドが現れ蛇のような動きで康太へと殺到し、その巨大な頭部から開いた口で噛みつき攻撃を仕掛けてくる

康太はそれを避けると同時にデビルガンダム本体と繋がっているチューブをノワールストライカーのフラガラツハ3ビームブレイドを抜いてすれ違い様に斬り裂いていく

しかしデビルガンダム本体からのエネルギー供給が行われており、更には自己増殖により新たなデビルガンダムヘッドが出現、康太が反撃に転じる隙がない

「デビルガンダムに高エネルギー反応を確認、来ます」

『くっ！』

クロエからの警告を聞き、康太はその場で真横に瞬時加速を行う

康太が離脱した次の瞬間、デビルガンダム本体の口が開き内部から極大の閃光が放たれる

それは康太を囲んでいたデビルガンダムヘッドを巻き込み、その更に奥に広がっていた荒廃した街へと向かっていく

「街が、割れた……!?!」

その惨状を言い表すのであればまさにレイネシアの言葉が適当であつたであろう

デビルガンダムから放たれたビーム砲は荒廃した都市を真っ二つにするかのように地面を融解させ、射線上にあつたありとあらゆる物を消滅させた

予想だにできなかった信じがたい程の威力にモニターを見ていた代表候補生達は絶句する

「アルファ、機体ダメージ蓄積率三割を超過。戦闘能力に支障有りとの判断、撤退を推奨します」

『避けきれなかったか……一時後退する』

現実に引き戻されたのはクロエの状況を知らせる声だった

モニターにはノワールストライカーに被弾したのかブースターの部分から煙を吐いているストライク・ジェガンの姿があった

康太はノワールストライカーをパージするとスペキウムストライカーに換装し離脱を開始した

その背を狙いデビルガンダムが再びビームを放つが、先程と違い機動性に優れたスペキウムストライカーを装備した康太は余裕こかないものの回避を続け戦場を離脱していった

完全に離脱し、海へと出たところでシミュレータが終了、最初の白い部屋に変わった後、康太の姿がモニターから消えた

「んぐ……」

それと同時に現実世界で寝袋に入っていた康太がビクツと震えた後で頭に着けていた装置を外し、一度深呼吸をした後で寝袋から出てくる

「ふう……取り敢えず、これが対デビルガンダム用シミュレータだ。今回はオレ一人での出撃という普通有り得ない状況だったが、複数人のISでの出撃、既存兵器との共同作戦等、様々な状況を設定する事でよりリアリティーのある戦場を想定する事が出来る。その有用性は分かって貰えた事と思う」

「あの、康太さん。デビルガンダムとは、本当にあのような存在なのですか？」

あれ程の威力、ISの絶対防御が通じるかも怪しい程の威力のビーム兵器を目の当たりにしたセシリアは康太に問う

それは他の代表候補生達も全く同じ気持ちであった

「オレの知る限り、あれ位は可能な筈だ。少なくとも強く見積もって損はない。あれより性能が低ければ取り越し苦労で済む。だが、もし

も想定を超える程の力を持つていたのならば……」

それは想像もしたくない事態であろう、最強の兵器として君臨しているISを遥かに凌ぐ性能を持つ存在という事実でさえ彼女達は受け入れ難い事実であるからだ

「ふむ、ならば対抗策を身に付けるしかあるまい。有事の際は我々がアレを相手にする事になるのだからな」

「その通りだ。次の状況設定はロンドン防衛戦にしておく。想定としては海からテムズ川を通りロンドン中心部への侵攻が行われる設定で行こう。参加者は五人、一国のIS戦力としては一度に展開可能なのはその辺りだろうからな」

ISは国力に比例して配備数を決められており、欧州であれば一国に約十機が配備されている

イギリスに与えられているISの数も同じようなもので、そもそも五機ものISを同時投入するような戦闘などこれまで想像もされなかつた事態だ

だが康太が見せた戦闘を見れば嫌でも理解出来る、アレはISの性能云々でどうにかなる相手ではないという事を

その後、二つに分けられた代表候補生達に、レイネシアとセシリアの二人の専用機持ちが一人ずつ付いた六人での参加が決まる

まずはレイネシアを含むチームの参加からであり、残りは現実の方で見学に戻る

そうしてラビットフット社のシミュレーターによる訓練が始まった

40話 教導4

一番手として選ばれたレイネシアを含む六人のイギリス代表候補生達はシミュレータに関する説明を受けていた

聞けば聞く程に高性能なシミュレータであり、小型でありながら既存のコンピュータとは圧倒的な差を持つその演算能力は、聞けば量子コンピュータによるものだと返される

今のスーパーコンピュータが数年もの時間を掛けて計算するような問題を数秒で終わらせる事が出来ると言われている量子コンピュータ、その実物が目の前にある事に技術系に強い人達が驚いていたが、康太は意に介す事もなく人数分の用紙を取り出した、そこには誓約書と書かれている

「このシミュレータだが、電腦空間での処理だから痛覚も再現出来る。緩める事も出来るが、デフォルトだと軽減なしなんだ。そして様々な状況を再現出来ると言ったが、さっきの廃墟のような場所だけでなく市民の生活している街を再現する事も出来る。次のシチュエーションであるロンドン防衛戦だが、当然避難の完了していない一般市民の姿も再現可能だ。場合によっては彼等の避難誘導やら、防衛も任務に入る。取り敢えずは現実をとことん追求した戦場を用意したんだが、まず確実にトラウマになるだろう。冗談抜きにISパイロットとして再起不能になる可能性もある。その覚悟があるならば誓約書にサインしてくれ。サインした者のみシミュレータに参加だ」

誓約書の内容を見れば例え今回のシミュレータで心的外傷を負ったとしてもラビットフット社は一切の責任を負わないという内容が書かれていた

多くの者はどうせ強めに脅しているだけだろうと気負わずにサインをしていく

そんな中でサインする手を止めたまま考え込んでいるのはレイネシアとセシリアの二人である

このセシリアは康太の性格を把握している、レイネシアはその真面目さから、此処までやるからには本気だと感じ取っているのだ

「康太さん、参考までに康太さんが受けた痛みがどれくらいのもか聞いてもよろしいですか？」

「ん？オレのか？さっきのデビルガンダムのビーム、あれを直撃喰らった事があるんだが、全身を焼かれた痛みがあつて、現実に戻った後もその感覚が残つてたな。一瞬で塵になつたと思うんだが、死ぬないから永遠に続くかと思つた……だから可能ならばシミュレータ内でも撃墜されないようにすると良い。さっきみたいに、無理なら撤退しろ」

「それは……皆覚悟の上であろう」

「そうか。だったら一つだけ忠告がある。死ぬほど痛いぞ」

康太のその言葉に早まつたかと思うパイロットも居たが、その時には既に誓約書に署名し康太へと渡してしまつた後でありもう後戻り出来ない状態だつた

更には話を聞いたレイネシアとセシリアも誓約書に署名したので、今更自分だけ降りるなどと言ひ出せなかつたのだ

「よし、ならAチームはシミュレータへ。ロンドン防衛戦、状況を開始する」

◆
そうして地獄への幕が上がつた

レイネシアがシミュレータに接続した装置を身に付けると視界が暗転し、先程モニターで見えていた白い部屋に居た

『全員の接続完了。体の動きに違和感はあるか？』

部屋の中に響く康太の声に全員が軽く体を動かして確認する、その感覚は現実のものとは全く遜色ないものだつた

「凄まじいものだな。これを使えばISコアの不足により訓練を受けられない、という事が無いではないか。何よりどれだけ戦闘を行おうとも機体が壊れず修理する必要がない」

『欠点としてはISコアへの戦闘データが蓄積されない点がある。専用機を持たない者なら良いが、これに頼り過ぎると専用機持ちは二次移行が更に遠退く事になる』

なおシミュレータにISコアを接続すればその問題は解決するの

だがアラスカ条約に抵触する恐れがあるので康太は言わない、公にしないでただで康太はそれをしているがバレなければ問題ないのである

そして参加メンバーの全員が動きに何の問題もない事を確認したところでシミュレータが開始される、彼女達が最初に降り立った場所は今の訓練でも使用しているアリーナのグラウンドであった

全く現実と同じ感覚に感嘆の声を上げる彼女達、違いがあるとするならば視界の端にシミュレータという黄色い文字が浮かんでいる点だろう

そんな彼女達の首にはシミュレータ開始時に選択したISが待機形態で身に付けられている、その仮想のISから通信が入る

『緊急事態発生！ドバー海峡を北上する巨大物体を確認、データよりデビルガンダムと断定！各IS部隊は速やかに迎撃に向かわれたい！繰り返し——』

それは聞いた事のない女性の声だが、通信先はイギリス国防省の国防委員会からとなっている、その辺りも設定されたAIと合成音声で処理されているのである

「ふむ、成る程な。では全員行くぞ！我に続け！」

『了解！』

状況を理解したレイネシアは早速ISを展開し指揮を執る、号令に従い他の代表候補生もそれぞれにISを展開し飛翔した

内訳はレイネシアの専用機カリバーンとティアーズ型が三機、汎用に優れるラファールが二機の六機、これだけの数のISが同時に動いているというのは他ではIS学園でしか見られない光景である

そんな六機はロンドン市街上空を東へと飛行する、その途中で再び通信が入る

『沿岸警備隊より報告！テムズ川に向けて侵攻する多数の機影を確認！デビルガンダムの尖兵、デスネービーと推測！ロンドン市街が近い、IS部隊は至急確認、敵であれば迎撃を開始せよ！』

「成る程、敵の先陣という訳だな。全機、聞いての通りだ！針路変更、迎撃に向かう！」

ドーバー海峡を通過しているという報告を受けて真っ直ぐにそこから向かおうとしていたが、その報告を受けてレイネシア達は海へ出る

ISの速度ならば直ぐに海に出られる、だがそこに広がっていた光景はシミュレータと分かっていても戦慄するような物であった

「これは……」

「酷い……」

到着して目にした光景、それは炎と黒煙に包まれた海であった

小さい物は漁船から、大きい物は貨物船やタンカーまでもが襲撃され、砕かれた破片が海を漂い、漏れ出た燃料が引火して海面を炎で覆う

その光景を作り出しているのがデスネービーであった、今もまた一隻の貨物船が攻撃を受けその船体が傾斜していく

本体下部の水中機動ユニットを魚雷として使用し船体を破壊、傾斜していく船へと三叉の槍を手に乗り込み手当たり次第に人間を殺傷していくデスネービーにレイネシアは照準を合わせ引き金を引いていく

「各機、遠慮などするな！速やかに奴等を撃破せよ！」

『了解！』

これはシミュレータであり現実には何の影響もない、しかしこのような光景が現実になると突き付けられてレイネシア達の表情から一切の油断が消えた

此処で何も出来なければ有事の際に誰かを護る事など出来ない、そう理解したのだ

貨物船に取り付いていたデスネービーの数は十も居なかった為に即座に殲滅する事が出来た、しかし残りは水中に居る為にレイネシア達の装備では対処が出来ず、歯痒い思いをしていた

「クッ、此方から仕掛けられんとは……！」

狙うには先にデスネービーが攻撃を仕掛けて海上に現れるのを待つしかない、シミュレータで分かった対潜装備の不足に、レイネシアは技術者へその開発を行うよう決意した

『司令部
HQよりIS部隊へ。レーダーで方位180より接近する複数の機影を確認。恐らくデスバーデイと思われる。現在、ベンソン空軍基地よりタイフーンの一個飛行隊がインターセプトに向かっている。また、各地の基地より戦力を移動中だ。IS部隊からは念のため、一機を航空部隊の支援に可かわせて欲しい』

司令部とのデータリンクにより他の部隊の動きも分かる、レイネシアが確認してみると味方を示す光点が幾つもこの場に向かつて移動をしていた

その中にはポーツマス海軍基地から移動する艦隊の姿もあった、旗艦はクイーン・エリザベス級航空母艦であり、姉妹艦のプリンス・オブ・ウエールズもまた別方向より向かつている

時間が経てばそれだけ戦力は増える、まさに総力戦といった様相にレイネシアは一先ず安堵の息をついた

「ふむ、ならば支援に向かうのは——」

「王女殿下、私が志願します」

「ふむ、マリー・リードか。良からう、行くがよい」

「了解！」

レイネシアから下った下知にマリー・リードははつきりと返礼を返すと意気込んでデスバーデイの迎撃に向かう

その背中を見送ったレイネシアもまだ水中に潜むデスナービーを捉えようと視線を向けるが、立て続けに通信が入る

『HQより全部隊へ、方位090より新たに敵大部隊の接近を確認！敵主力と思われる、IS部隊は分散し対処に当たれ！』

「主力か。二機は此処に残りデスナービーの対処を、残りは私に続け！」

『了解！』

複数の方向からの攻撃、それに対してレイネシア達も戦力を振り分けて対処するのだった



マリー・リードは単機で移動し、デスバーデイの迎撃に向かう

その途中で味方を示すマーカーがあり、確認するとイギリス空軍の

一個飛行隊と表示される

数は八、対空ミサイルを装備したデスバーディを相手にする為の機体である

「旧式の兵器ね」

その姿を見てマリーはそう呟く、ISの台頭によって数を減らしている、無駄金喰らいと揶揄されてきた戦闘機、それがマリーの評価だ。そんな部隊の支援に来たは良いが、マリーはそれをあてにしている、一人で全てを相手にするつもりであった

『エコーより全機、アームオン。目標を被らせるなよ。アムラーム、全弾発射！FOX3！』

並走し眺めていると隊長機と思われる機体からの指示で八機のタيفونからミサイルが発射される

一機につき六発、計四十八発のミサイルがレーダーで捉えているデスバーディの群れに向かう

デスバーディの数は百に近い、向こうはレーダーを持っていない為に自らに飛来するミサイルに気付く事もないだろう、事実放たれたミサイルは全て命中、半数近いデスバーディを撃墜した

『全弾命中！次、サイドワインダー発射用意！射程に入るまでもう少しある。焦るなよ』

少し間を置いてから放たれたのはそれぞれが二発ずつ積んでいた短距離の対空ミサイルである

それもまた命中、敵の数は四十を下回った

「なかなか使えるじゃない。アンタ達は下がりなさい、後は私がやるわ！」

先程の短距離対空ミサイルでタيفونは全てのミサイルを撃ち切っている、なら補給に戻れば再び攻撃の機会がある、そう考えて残りはマリーが片付けるつもりであった

しかし下された指示はそれに反するものだった

『HQよりエコー隊へ。後続部隊が到着するまで現空域に待機。敵残存部隊の足止めに移行せよ』

『エコーよりHQ！こっちはミサイルを全部撃ち切っている、機銃

だけでやれって言うのか!？」

『その通りだ。積極的に仕掛ける必要はない。敵が抜けそうになったら撃墜しろ。以上だ』

『クツ、了解!』

つまりは足止めとして囷になれと言うような命令にマリーも眉をひそめる

それこそ足止めでなく、ISで殲滅してしまえば良いのだ

「司令部、何でISを投入しないのよ!? 私なら残りを全部やれるわ!」
『現在の敵戦力ならば通常戦力で対処可能だ。IS部隊は無用な消耗を避け、後詰めに回れ。以上だ』

「こ、このっ!」

だがマリーの進言は却下される、貴重なISは要所に投入する、それは理解しているが今がその時ではないのか

尚も反論をしようとするマリーだが、嗜める声が入ってきた、その戦闘機部隊の隊長機からである

『やめときな、嬢ちゃん。それが命令である以上、やるのが俺達軍人だ。それにな、ISの登場で今まで冷飯を食わされてきた中でようやく国の為になれる機会なんだ。嬢ちゃんだけ行かせて後ろに引っ込んでくなんて出来るかよ! 各機、ファイターパイロットとしての誇りを見せろ!』

『了解!!』

エコー隊と呼ばれた戦闘機部隊は士気も旺盛に接近してきたデスバーデイの編隊に機銃による格闘戦を仕掛けていく

ビームに翼を焼かれようとも、機体に組み付かれようとも、退くことなくデスバーデイと相対する戦闘機の姿に、マリーはISがなくなりながら何もさせて貰えない状況に、何の為のISなのかと己へと問い続けるのだった



「一度見て、理解したと思ったのだがな……」

敵主力への攻撃を始めたレイネシア達は他の戦力も合わせれば勝てると思っていたのだが、それは呆気なく覆される事となった

レイネシアの駆るカリバーンも右側の大型アームが破壊され、パワーアシストに劣る自身の腕で大剣を保持している

序盤はまともに戦っていた、中盤も四天王クラスの敵が現れたが通常戦力からの支援砲撃により動きを止めたところをレイネシアの大剣で切り裂いた

しかし今現在、最終目標であるデビルガンダムと対峙してからは全く歯が立たない状況になっているのである

無数に沸いて出るデビルガンダムヘッド、そしてデビルガンダム本体からの高出力ビーム砲の攻撃、三機居たIS部隊だが既に一人はデビルガンダムからの砲撃で消し飛んでいる

そして残っていた一人も今、疲弊したところに後ろからデビルガンダムヘッドに喰らい付かれてしまう

「ヒッ!? いやっ、だ、誰か、誰か助けて!!」

「クリスティーナッ! おのれ!」

クリスティーナと呼ばれた少女はラファールを纏っている為に胴体部分に喰らいつかれてもシールドバリアによってパイロット自身が傷付く事はないが絶対防御の発動はエネルギーを多く消費してしまう

送られてくるデータからクリスティーナの機体のエネルギー残量もかなりの勢いで削られていた、レイネシアはデビルガンダムヘッドを大剣で斬りつけるが切断には至らない

そうしている内にラファールのエネルギーが枯渇、機体が強制解除され生身で空中に放り出されたクリスティーナはそのままデビルガンダムヘッドに喰い千切られる、その寸前で消えた、シミュレータからログアウトしたのだ

味方がやられたがシミュレータから出たのを見てホッとしたレイネシアだが、その油断はこの状況では命取りである

他のデビルガンダムヘッドがレイネシアの背後から突進、その背に強烈な体当たりを仕掛け、レイネシアの体が跳ね上げられる

「がはっ……!?!」

やけにゆっくりと見える視界の中でレイネシアの目が偶然にもデ

ビルガンダム本体を捉える、その口に巨大なエネルギー反応がある事もISを通して見ていた

「や、めろ……」

そして悟る、デビルガンダムが向いている方向、その射線上には自分の他に何かがあるのかを

「やめろおおおっ!!」

レイネシアは叫ぶが無情にもデビルガンダムからビームが放たれた、それはレイネシアを掠め、その向こうへと一直線に突き進んでいく

着弾したのはロンドン、護るべき筈だった自らの国、自らの故郷である

掠めたとはいえ機体と肉体の半分を消し飛ばされ、薄れゆく中でレイネシアが見たのは、先程のシミュレータで見たのと同じように割れて焼かれていく街の姿であった



「か、ハアツ!？」

「王女殿下もお目覚めか。まあ、あの負傷なら遠からず死ぬわな」

今の今までシミュレータに挑戦していた代表候補生達の姿をオレ達はモニターで観察していた

今日覚めた王女殿下で六人全員が目覚めた事になる、あの前にもデビルガンダムにやられた者以外でデビルガンダム四天王に撃破され死亡判定されたのだ

そんな彼女達の顔色も悪い、中でもデビルガンダムヘッドに喰われ掛けたクリステイナー・ホワードは自分の体を抱き締めて震えている
他のパイロット達も死ぬような負傷を負う前に戻したが、程度の差こそあれ一様に青い顔をしていた

「さて、諸君もデビルガンダムとの戦闘を軽くとはいえ、感じる事は出来ただろう」

「アレが、デビルガンダムか……しかし、この有り様は……」

王女殿下は先程までシミュレータに参加していた面々を眺める、少なくとも直ぐにまたシミュレータに参加出来るような奴はいないだ

ろうな

「少なくともあれだけの強さは想定しているという事だ。Bチームは今のAチームの動き等から反省点を見付けて活かしてみると良い。各自シミュレーターに接続しろ」

「ちよつと待ちなさいよ！クリス達を放っておく気!？」

「事前に誓約書を書いただろう。シミュレーターで負った心的外傷に関して一切の責任を負わないと」

「そ、それは……けど、仮にも教官ならフォローするでしょう!？」

「そうだな、確かに教官役だ。だがオレは先に言っていたぞ。確実にトラウマになると、場合によってはISパイロットとして再起不能になる可能性もあるとな。その覚悟があつて、誓約書に署名したのではないのか？」

反発してくる人間が居ると思っていた、だがオレから言わせればそんなものは甘えだ

「ならどんな訓練が良かったんだ？優しく温い訓練を受けさせてやれば良いのか？それであのデビルガンダムに挑ませると？無駄に死体を増やすだけだな」

「ぐっ……」

「何の為の訓練を受けている？デビルガンダムを倒す為ではないのか。生半可な力をつけさせて、それで戦場に送り出しても直ぐに落とされるだけだ。それは先程のシミュレーターで理解したと思つたのだがな」

「それは、デビルガンダムが強すぎるからで……他にも、四天王も強いし……」

「少なくともあれ位の力はあると想定しているからだ。それに、四天王に関してはヘブンズソードとグラランドは以前の交戦データを基にしてある。ウォルターは回収出来た残骸からしか試算出来ないが、概ね正しいだろう。マスターに関しては少し物足りないかもしれないと危惧してはいるがな」

反論は必要な物は潰していく、少なくとも数の暴力と四天王の強さ、デビルガンダムの強さはISであっても危険なものだ

ISは絶対の兵器などと夢見ているのなら今の内に醒まさせてやるのが最善だろう

それに彼女達の中から実際にデビルガンダムとの戦闘に駆り出される可能性があるのだ、ならば彼女達が生き残れるように情けは不要、下手な情は彼女達を殺す事になるのだから

その事を話すつもりはない、教官役は憎まれるくらいで丁度良いのだ

とはいえ多少のフォローはしてやるか、互いに冷静になる為にもな「頭を冷やして考え直してくると良い。戦術を構築するもよし、仲間のフォローをするもよし、今から三十分の休憩時間としよう。その後で改めてシミュレーターへの参加を——」

『あげや、甘えな』

「何ッ!？」

突如としてミーティングルーム内のスピーカーより響く男の声、そのような予定など無かっただけにオレは意表を突かれる

そして同じように今までシミュレーターの内容を映し出していた大型モニターが切り替わっていく、そこに現れたのは黒いパイロットスーツに身を包み、首を一周するように大きな傷を持つ一人の男と、ネコミミのようなものを頭に着けた小さな少女だった

男の方は好戦的な笑みを浮かべており、スピーカーから聞こえてきた声の正体もこの男だ

そしてオレはこの男と少女を知っている、この世界に来ているかもしれないと高い可能性を感じていた存在、エイフマン教授と同じガンダムに於ける西暦世界の最凶のガンダムマイスター

「フォン・スパーク……!」

『ハッ、やっぱりオレ様の事を知ってるか。だがオレはテメエを知らねえ。ヴェーダにも情報が無かった。ならその正体として考えられる可能性はそう多くねえ』

「……………」

フォンに指摘されて口をつぐむ、頭がキレルフォンに対して余計な情報を与えるのは悪手でしかない

『黙りか、つまらねえな。まあ良い、オレ様が用があるのはテメエだ、紫藤康太』

「オレだと?」

『ああ、ニュータイプって言葉に聞き覚えがあるだろう?』

当然ながらガンダムシリーズを見ているのだからその単語は知っている、だがオレが驚いたのはフォン・スパークという男の口からその言葉が出た事にだ

「ニュータイプ?」

『普通の人間は知らねえだろうな。極限状態に置かれた人間が進化した存在。強力な感応波や未来予知にも近い能力を持つ、宇宙に適応した人類。定義はどうでも良い、オレ様が知りたいのはその力がどれだけの物かって事だけだ』

ニュータイプというこの世界には存在しない概念にセシリアが首を傾げ、フォンが軽く説明する

その後にはフォンがモニター越しにオレを指差して告げた

『人類初のニュータイプの可能性がある人間、つまりはテメエの事だな、紫藤康太。オレ様の要求は唯一つ。オレ様と戦え。オレ様にお前の全てを見せろ、ニュータイプ!あげやげやげやげや!!』

その名の由来ともなった笑い声を上げて宣告するフォン、だがオレにそのメリットは今のところない

「貴様の實力は知っている。その上で勝負しよう等と考えないさ」

『だろうな。けどテメエは受けざるを得ねえ。コイツを見てみな』

オレの言葉に反論するフォン、モニターの一部に宇宙の映像が流れ、その中央には剣のような形の何かが浮いている

それが何なのか、この場の誰もが分からずにいるとフォンが口を開いた

『その様子だとお姫様も知らねえか。コイツはエクスカリバー、米国と英国が共同開発した衛星兵器だ。コイツの制御をオレ様が奪った』
『なっ!?!』

そのような兵器が存在していた事にも驚きだが、その兵器の性質によつては宇宙条約に違反するような代物である事にこの場の全員が

息を呑んだ

そして、もしもそれが実際に撃たれる事があれば――
「イギリスに、ではなく他国に撃てば戦争だな。テロリストに制御を奪われたと真実を言っても、どれだけの人間が信じるか。逆に管理体制などの責任を問われる事になるだろう。オレが行かなければ撃つ、そういう事か」

『そういう事だ。それからそこに居るセシリア・オルコットは出てきな。テメエにも話がある』

「私ですの？」

この状況で更にセシリアに用とは何か、理由は分からないが呼ばれたセシリアがフォンと相對する

『テメエのメイドのチエルシー・ブランケットを呼べ。なに、「エクシアは預かった」と伝えれば飛んで来るだろうよ』

「エクシア？」

『テメエの考えてるエクシアとは別だな。詳しくはチエルシー・ブランケットが来てから説明してやる』

エクシアという言葉からガンダムエクシアを連想したが、それとは別のものか

セシリアは直ぐに連絡を取る為に部屋を出た、到着を待つまでの間、フォンはオレに更に条件を付け加える

それはオレが思ってもみなかった条件であった

『オレ様はテメエとは戦いたい。だが無理矢理駆り出してもモチベーションが上がらねえだろう？それじゃあ本気が見れねえ。だからよ、オレ様の居る場所まで来ればその時点でテメエにオレ様の持つガンダムを一機くれてやる』

「成る程、オレに対するエサという訳か。ガンダムを持ち出せば食い付く、中にデカイ釣り針が入ってそうだな。普通ならそんな見え見えの罠に飛び込む輩など居ないだろう」

「そう言いながら着々と準備している姿は全く説得力が感じられんぞ、コウタ・シドウよ」

「私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ。しかも、ガンダムに関して

は殊更目がないときている。毘だと分かりきってはいるが、動かずにはいられない！」

フォン・スパークとの戦闘に向けて装備の取捨選択を行う、色々と持って行きたいが容量の関係で選ばなければならないからな

『あげや、テメエもエクシアのパイロットとは別でガンダム馬鹿って事だな』

「褒め言葉として受け取っておこう」

『そういう所も一緒って訳か！あげやげやげやげやげや！』

心底愉快そうに笑うフォン・スパーク、ガンダムエクシアのパイロットである刹那・F・セイエイと並んで評されるとは光栄の一言だ
そうしている間にセシリアが呼んでいたチエルシー・ブランケットというメイド服に身を包んだ少女が現れ、事態は更に進んでいくのだった

41話 正義の女神

「エクシアを預かったというのは、貴方ですか？」

『意外と早かったな。エクシア・カリバーン、本名エクシア・ブランケット。間違いねえみたいだな』

「答えなさい、エクシアは何処に居るのですか!？」

『そう慌てなくても見せてやるよ。ハナヨ、カメラの映像を外のに切り替える』

『了解』

ミーティングルームに現れたチエルシー・ブランケットはモニターに映るフォンを見るや否や問い詰める

その剣幕、そしてエクシア・ブランケットという名前から家族か何かか

そしてフォンの指示でモニターに映るもう一人の少女、ガンダムマイスター874、ハナヨがカメラの映像を切り替え、フォンの言う外の光景が映し出された

そこは宇宙であり、先程のエクスカリバーがカメラ中央に鎮座している

『オレ様が制圧した時に知った事だが、エクスカリバーは単なる衛星兵器じゃねえ。生体融合型のISだ。その搭乗者、というよりはISを展開する為に意識封じて搭載されてたのがエクシア・カリバーン。エクスカリバーにあったデータを見ると、そのチエルシー・ブランケットの妹って訳だな』

「チエルシーに、妹!? そのような事、私は一度も聞いた事はありませんでしたわよ!？」

「居たのです、私に妹が。戸籍から抹消され、ずっと捜し続けていた妹が……」

チエルシーという少女の事は分からない、だがセシリアの様子からただの主従という訳ではないのだろう

家族を事故で喪ったセシリアに仕え続けていたメイド、その絆は血の繋がった家族にも引けを取らないように思える

そして、それをオレに見せた理由は――

「成る程、つまりは人質という事か」

『理解が早くて何よりだぜ。来な、紫藤康太。オレ様は衛星軌道上に居る。オレ様とお前の一对一の勝負だ。位置情報は送ってやるから、そこを目指して来い!』

「フンッ、望むところだと言わせて貰おう!」

そこで通信は終わった、モニターにはフォン・スパークが居るであろう座標が示されている

オレは改めてパイロットスーツの気密性を確認しつつ、ミーティン
グループから出ようとする

だが背後から呼び止められ、その足を止める

「康太さん、先程の相手なのですが……」

「フォン・スパーク、幼少期からテロに関与しているテロリストだ。世間一般の倫理観ではなく、己に課したルールに従って動く。今は敵だが、場合によっては此方に協力してくる事もあるだろう。誰に縛られる事もない、自由に生きている人間だ」

「良くご存知なのですね。お知り合いですの?」

「オレが一方的に知ってるだけだ。向こうもオレの事を調べていたみたいだがな」

「ニュータイプ、ですわね。康太さんが色々秘密を抱えているのは知っていますから、今更問い詰めたりはしません。ですが、一つだけお願いがあります。チエルシーの妹の事ですわ」

何も聞かなくてくれる事は正直にありがたい、そんなセシリアの隣に並ぶメイドの少女、チエルシー・ブランケットと目を合わせる

「康太様、初めてお会いする貴方にいきなりこのようなお願いをする事は失礼な事だと分かっています。ですが、どうか妹を救って下さい!あの子さえ戻ってくれるのなら私はどのような要求にも応えます」

「……確約は出来ない。フォン・スパークはそれだけの相手だ。だが一つだけ誓おう。非才の身ではあるが、その全力を尽くす」

「分かりました。では、どうか御武運を」

チエルシー・ブランケットからの激励を受け取り、オレはアリーナの中に置いてあるコンテナの一つを開ける

「そこにあるのは全長がISの倍以上の大きさを誇るブースターだ
「行くのですね」

「ああ、このまま何もしなければフォン・スパークは実際にエクスカリバーを撃つだろう。アレは意味のない事はしない男だ。やると言えば必ずやる。その結果第三次世界大戦が勃発する可能性もある。それは宇宙を目指すオレにとって大きな障害にしなければならない。それに、セシリアの友人の妹の事も頼まれてしまったからな」

ブースターを運び出そうとした時、ミーティングルームから追い掛けてきたクロエに声を掛けられる

その声には心配するような色が含まれているがやらねばならない、オレも今回ばかりは初めから死を覚悟して臨むつもりだ

「コウタさんの無理無茶無謀は今に始まった事ではありませんから仕方がないです。ですが、一つだけ私とも約束して下さい。必ず生きて戻ると」

「……分かった。例えどのような形になっても、オレは戻る。そう約束しよう」

「はい、約束です」

また新たに約束が増えた、これではどうやっても生きて帰らなければならぬ

フォン・スパークを打ち破り、エクスカリバーからチエルシー・ブランケットの妹を救出して生きて戻る、言葉にすれば簡単だがそれがどれだけ困難な事か

だが今のオレは前に進む事しか知らない、どれ程の困難であろうと、その全てに立ち向かうまでだ

その後はクロエの手を借りつつブースターを簡易的に設置した発射台に固定、ISを展開しブースターの先端部分にジェガンの下半身を固定する

装備はノワールストライカーを装備、強化型ビームライフルとジェガン用のシールドを腕に保持した

全ての準備が整った後、ミーティングルームでオペレーターとしてサポートしてくれる事になったクロエからの合図と共にブースターを点火する

『進路クリア、オールグリーン。ストライクブースター、発進どうぞ』
「了解！紫藤康太、ストライクブースター、出撃る！」

次の瞬間、体に強烈なGが掛かる

念のためにと超長距離移動用に作りノツセルに積み込んでいたストライクブースター、それが原作と同様に宇宙へと上がる為に使用される

◆ この日、オレは初めて望んでいた宇宙へと辿り着いたのであった

「イギリス本島より宇宙に上がって来る物体を確認。小型のロケットのようです」

「あげや、来たか。そうでねえと面白くねえ。エクシア・カリバーンを見付けたのは運が良かったな。本来なら人間が密集する中に爆弾を仕掛ける予定だったが、その手間が一気に省けたぜ」

宇宙では康太がストライクブースターにて上がって来るのをフォオン達が確認していた

「ハナヨ、ガンダムを用意してやれ。オレ様はアストレアで出る」

「分かりました。フォオン——」

「あん？」

「相手の能力は未知数です。ヴェーダのターミナルユニットを経由して機体情報を得たとはいえ、御武運を」

「ハッ、オレ様に必要なのは運だとか不確かなモノじゃねえ。望むならそれは実力で掴まねえと面白くねえからな」

そう言うとフォオンは格納庫に行きこの世界に来てからはISとなったガンダムを呼び出す

「ガンダムアストレア、オレ様出る！」

プロレマイオスと呼ばれた艦にも採用されていた輸送コンテナ、その前部ハッチが開くとフォオンはGNドライブの出力を上げて機体を発進させた

◆ 地上ではミーティングルームを臨時の司令部として使用し、大型モニターに康太のジェガンから得たデータが表示されていた

ジェガンの頭部カメラから得られた映像の他にもハイパーセンサーによって収集された情報から作られたジェガンを中心とした周辺状況を3Dモデルで表示している

それらの情報を纏める為に端末を操作しているクロエの他に、セシリアやレイネシアを始めとしたイギリス代表候補生達は後ろでモニターを見つめていた

「テロリストを相手に何も手を打てんとは……何の為のISだというのだ……!」

「王女殿下、それは私も同じ気持ちですわ。チエルシーの妹が人質とされているのに、こうしてただ見ている事しか出来ないのですから……」

フォン・スパークの事を知っている康太から要求通りに単独出撃を行った方が余計なリスクを負わなくて済むと説得され、専用機を持つ人間であっても地上で待機するしかない事にセシリアとレイネシアは悔しさを胸を一杯にしていた

そんな彼女達が見つめる中で、モニターに映るレーダーにノイズが走る

「敵機接近、それと同時にレーダーに障害……いえ、通信自体も妨害されています! 回線をコアネットワーク経由に変更……これでも多少の障害が発生しています!」

「なっ?! コアネットワークを使っているのだぞ?! 間違いないのか?!」
「コウタさん、聞こえますか?! 通信状況が悪くなっています! 何か原因は分かかりますか!?!」

『多少のノイズが聞こえるが、通信は繋がってる。フォン・スパークの使うガンダムなら基本能力と言えるからこの程度は想定範囲内だ。それより、現れたな』

ジェガンの頭部カメラからの映像に捉えた一機の全身装甲のISがモニターに映し出される

それは深紅の機体であり、頭部は先程のシミュレータで見たデビルガンダムと同じように二つの目と額にV字アンテナを備えた意匠、そして機体背面からは赤い光の粒子を放出しながら康太のジエガンとの距離を詰めてくる

『初めましてだな、ガンダム！』

『良く来たな、歓迎するぜ』

『やはりガンダムアストレアTYPE-Fか。しかもその武装の数、フルウェポンだな。加えてGNハンマーの姿も見える。エウクレイデスがあつた事からも予測していたが、ビサイド・ペインとの決着は着いた後か』

康太はフォンの駆るアストレアの姿を見て今のフォンがいつのフォンなのか推測する

彼の知るガンダム世界の知識ではアストレアは更にもう一段階強化された姿があるのだが、それが無い事から少なくとも外伝作品である001の時系列だと見抜いていた

固有名詞を並び立てた康太の言葉をこの世界の者達は理解出来ない、しかしフォン・スパークはその少ない情報からでも康太の正体に大まかな当たりをつけている為に反応は少ない

『成る程、テメエの正体は二つの内、どっちかだったが今ので確定したな。まあそれは良い、今のオレ様が興味あるのはニュータイプの力だけだ。先に報酬を渡しとくぜ。受け取りな、テメエのガンダムだ』

フォンがそう言うのとセンサーに新たな機影が現れる、カメラに捉えられた姿は白に青や黄色、赤といったトリコロールカラーの機体であり、フォンのガンダムと同じように背面から赤い光の粒子を放出している

『ガンダムプルトローネか、良い機体だ。この機体があれば人類は新たな段階に進める可能性が手に入る』

プルトローネと呼ばれた機体は康太の前まで来ると量子化し待機形態のネットワークスになった

それを機体の頭部部分を解除しISの保護機能で問題ないとはいえ何の躊躇いもなく宇宙空間でヘルメットを脱いで首に掛ける姿に

地上で見ていた全員がドン引きしているのだが、康太は気にしない
『ハッ、イオリアのジジイの計画を進めるつもりか?』

『まさか。オレの目的は人類が宇宙に進出する事だけだ。だがイオリア計画はそれに役立つ内容もある。初期型の擬似太陽炉ではあるがGNドライブが手に入った事は大きい』

『夢物語だな。この世界で本気で宇宙に上がろうなんて考えている人間がどれだけ居る?』

『少なくとも此処に一人。そして天災が一人。そんな二人を支えてくれる女の子が一人。まあ正気とは思えないよな。けど、自分の手で世界を変える。面白いと思うだろう? 他ならぬお前にはその気持ちが見る筈だ』

『あげやげやげやげやげや!! そりやそうだ! 誰もが思う、自分の手で世界を変えられたらってな! そうだ、それでこそ面白い! けど、まずはその世界と戦えるだけの力をオレ様に示しな。待っててやるから、ガンダムに乗り換えろよ』

フォンの駆るアストレアの性能は未知数だが康太が死を覚悟して挑む相手という事から、代表候補生達は同型の機体があるならその方が良いと感じていた

だが康太はその申し出をはっきりと拒否した

『断固辞退しよう』

『ほう?』

『乗り慣れていない機体で挑めるような相手ではない事は重々承知している。その性格からして機体に細工をしてくるような男ではないのは分かっているが、プルト・ネが汎用性の高い機体だとしてもそこは譲れない。何より、私はこのストライク・ジェガンでガンダムを超える。この世界で私と共に歩み続けてきた、このジェガンで!』

『それがどれだけ困難な事か分かっていてもか?』

『機体の性能差が勝敗を分かっ絶対条件ではないさ。それに、困難だからこそ面白いのだろうか?』

『良いねえ、実に良い。ならお前の全てをオレ様に見せてみる!』

『望むところだ、ガンダムウツ!』

話はそこで終わりだとばかりに二人は同時に動いた

康太がビームライフルを撃ち、フォンが右腕に装備したGNランチャーを放つ

互いに右に避け、追撃にフォンが右腕に装着しているGNハンドミサイルユニットからミサイルを打ち出す

自身を追尾してくるそれを康太はビームライフルと頭部バルカンポッドで迎撃する、だが先頭のミサイルを撃ち落とすと内部から緑色のスモークのような物が広がっていき、康太の放つビームを拡散させ効果を発揮させなくする

『粒子攪乱幕か！ならば！』

即座に武装をビームライフルからジム・ライフルへ持ち替えてミサイルを迎撃する康太、粒子攪乱剤入りのミサイルは最初の数発だけで残りは通常弾頭であり、命中していれば確実に損傷を受けていただろう

しかし康太がミサイルに気を取られている間にフォンがGNプロトソードを構えて接近する、それに対して康太もまた粒子攪乱幕の影響を受けない実体剣、I. W. S. P. 用の対艦刀を呼び出し切り結ぶ

だが鏢迫り合いに持ち込めたのはほんの一瞬、アストレアのパワーによりジェガンは後方へと弾き飛ばされる

「何てパワーですの……!?!」

「あれが、ガンダム之力……」

「兄さん……」

弾き飛ばされ体勢を崩した康太へと追撃の一撃を放とうとするフォン、それを後ろへの瞬時加速という器用な真似で距離を離れた康太、そのまま粒子攪乱幕の範囲内から離脱する

そしてまだ粒子攪乱幕の中に居るフォンに対して両肩に三連装ミサイルポッドとその左右に大型ミサイル四発、両手に六連装ミサイルランチャーと腕に固定されたシールド二枚からもミサイルを放つ

圧倒的なミサイルの弾幕、通常であればどのような機体でも損傷を与えられるそれをフォンはまずNGNバズーカで大型ミサイルを迎

撃した後、シールドとGNハンドミサイルユニット、NGNバズーカをその場に置き迫るミサイルからの楯にする

それから粒子攪乱幕を抜けると再びGNプロトソードで斬りかかるフォン、撃ち尽くしたミサイルポッドを全て投棄した康太は今度は両手に対艦刀を持ち、二本の剣をクロスさせるようにして受け止める。今度は鏢迫り合いとなった両者、端から見れば康太が劣勢に見える戦いに代表候補生達は戦慄する

だがスピーカーから聞こえてくる康太の声は喜びの色が強く表れていた

『素晴らしい、それでこそガンダムだ!』

苦戦しているにも関わらず寧ろ敵の性能を褒めるような康太、二機は鏢迫り合いの状態から剣を使った格闘戦に移行する

力強く、それでいて繊細さも持ち合わせた剣劇の中、更に康太の言葉は続く

『私の中にある一番古い記憶、それはモニター越しに見たガンダムエクシアの姿だ!その巨大な剣と、全身に装備した様々な剣、それらを使い分け数多の敵を圧倒する姿に私は魅了され、心奪われた!それからというもの、私はその力に、その姿に憧れ、焦がれている!そうとも、この気持ち、まさしく愛だ!!』

『愛イ?!』

唐突な康太の告白じみた台詞にイギリス代表候補生達の全員が裏返った声で驚愕する

だがそんな彼女達の声が聞こえていない、例え聞こえていたとしてもお構い無しに康太は続ける

『その機体、ガンダムアストレアはエクシアのプロトタイプ。言うなれば私の初恋相手の姉のような存在だ!そしてそれを駆るパイロットは最強のガンダムマイスターとして議論にも名が挙げられるフォン・スパーク。これ程の相手を目の前にして、血が滾らぬ男がいるだろうか?いや居ない!!』

最早一人で自問自答するようになった康太、これだけでもイギリス代表候補生達はドン引きなのだが、この男はまだまだ止まらない

『認めよう、宣誓も約束も、行動の源であるが、しよせんは建前でしかなかった。この感情はごまかしようもない。私、紫藤康太は、愛機をもってガンダムと戦えることに、これ以上もなく——喜びを感じている……!』

「本当にチエルシーとの誓いが台無しですわよ!」

出撃前は格好良く決めていたように見えたが、本当に見えていただけのようだ

それ程までに今の康太の声は本当に感極まった調子であった

『私は純粹に戦いを望む!ガンダムとの戦いを!そしてガンダムを超える!それが私の、生きる証だ!あの日恋い焦がれた憧憬に辿り着き、私は私の夢を超える!そうとも、この私がガンダムとなるのだ!』
もうコイツは何を言っているんだ、殆んどの人間がそう感じている中で一人、違う反応をしている者が居た

「カッコいい……」

「ちよつ、クリス!?目を醒ましなさい、アレはただの変態よ!」

「えっ?でも、自分の信念を貫ける人って、物凄く好みなんだけど……」

「それを差し引いても有り余る程の変態でしょうが!?だからアンタは男の趣味が最悪って言われるのよ!」

「ええ、でもお——」

少し前にシミュレータでデビルガンダムヘッドに喰われそうになりトラウマとなった少女クリスティーナ・ホワード、友人でもある他の代表候補生から突っ込まれてもめげずに康太の良いところを挙げようとしていた

心的外傷後ストレス障害

P T S Dを発症し掛けていた彼女だが、この事が理由で回復している辺り、彼女もまたある意味でタフであった

なお、それとは別の反応をしている人間もこの場には居た

「そうですか、私のライバルは他の誰でもなく、ガンダムだったんですね……」

「クロエさんも落ち着いて!?ガンダムは無機物だから!大丈夫だから!」

「ガンダムは……敵!!」

「クロエさんの機体もガンダムだよ! だから正気に戻って!」

「私が……ガンダム……? なら私が……コウタさんの恋人……!」

「もうそれで良いから、オペレートしないで! 兄さんの馬鹿! 私ツツコミ役じゃないのに、状況がカオスになってるじゃん!!」

もはや場が混沌としてきているが、宇宙で戦闘を行っている康太には関係がない

それどころか発言に比例して戦闘力が上がり、フォンのアストレアの動きに追隨してきていた

『チツ!』

舌打ちをしつつ左手に持ったGNハンマーを射出するフォン、それをバレルロールで避けた康太は対艦刀から背中中のフラガラツハ3ビームブレイドに持ち替えて迫る

しかしその背後からスラスターを使い方向転換を行ったGNハンマーが襲い来る、だが康太はそれを予想していた為に当たる直前に宙返りをする。GNハンマーが繋がっているケーブルを切断した

『何ッ!』

『その技は既に見た事がある!』

慣性によってケーブルを切断されたGNハンマーはフォンへと向かう、それを避けたところに康太がビームブレイドを振るう

GNプロトソードで受け止めたフォンが空いた左手でGNビームピストルを抜くが、同時に康太も左手のビームブレイドをその場に置く。と左腰からビームライフルショーテーターを抜き、同時に引き金を引いた

互いに至近距離からのビームによる射撃、双方の機体にダメージが入り、同時に放った蹴りで二人の距離が開く

そんな中で先に体勢を立て直したのはISでの戦闘経験で勝る康太だった。AMBCやPICといった全てを駆使し素早く武装を構えるとそれまでの比ではない速度で一直線に宇宙を駆けつける

それは瞬時加速よりも高等技能とされる二重瞬時加速ダブルイグニッションブーストと呼ばれる技能であった

通常の瞬時加速よりも強力な推進力を生み出す事が出来る技、それによりビームブレイドの切っ先がアストレアへと迫る

確実に仕留めた、そう確信した康太だったが次の瞬間にはアストレアの姿がその場から掻き消える

何処に消えたのか康太は周囲を見渡す、そして視界の端に宇宙を駆け回る紅い軌跡をその目に捉えた

42話 紅い流星

宇宙を駆ける紅い軌跡、その正体に康太は心当たりがあった

それと同時に笑みを浮かんでいる、西暦世界のガンダムならばそれを打ち破らねば超えた事にはならないと思っただからだ

しかしその切り札の存在を知らない地上組は混乱していた、計測される速度は軽く見ても先程の三倍はある

機体性能ではアストレアが上なのだ、にも関わらず更に機体性能が上がる等とは思ってもみなかった

それには先程までの康太の奇行に振り回されていた者達も冷静さを取り戻し、固唾を飲んでモニターを見詰めていた

『トランザムシステムか！そうだ、これとやりたかった！』

それに対して康太の様子は変わらないが、少なくともその切り札についての知識は持っているらしい、ならばその対処法も準備しているだろうと安堵する

だが康太が剣を振るうもアストレアには当たらない、それ程の差が二人の間には存在していた

そして遂には完全に背後を取られ、背中に装備しているノワールストライカーがアストレアの持つ二本のビームサーベルによつて破壊される

『グウツ、これほどとは!?!』

焦りの色を含んだ康太の声に流星に本気で追い込まれているのだと全員が理解した時には既にビームサーベルを構えたアストレアが康太へと迫っていた

だがジェガンが貫かれる寸前でピンク色のビームの幕がその攻撃を阻む

それと同時に複数の方向から放たれたビームがアストレアを狙い、それにはフォンも後退する

「増援!? いや、あれは!」

「前に一度、臨海学校の時に見た事がありますわね」

ビームを放ったものの正体、それは小型の移動砲台のような物で、

ある程度の射撃でフオンを引き剥がすとジェガンのバックパックへと戻っていく

そこにはフオンに破壊されたノワールストライカーとは別に新たなストライカーパックが装備されていた

『賭けには勝ったか。危機的状况に陥った際の生存本能からの能力の喚起。進んでやりたいものではないな』

『ハッ、ようやく本気を出しやがったか。今度こそニュータイプの方、見せて貰うぜ！』

『行け、ドラグーン！』

新たに装備されたストライカーパックに関してセシリアは見覚えがあった、臨海学校で一度だけ見た自身の機体であるブルー・テイアーズと同コンセプトの装備、シラヌイである

あの時は細かに観察する事が出来なかったが今はその全てを見る事が出来る、このような状況ではあるがセシリアはその動きに注視していた

宇宙空間を飛ぶ七つの遠隔操作型の移動砲台、初めて見た他の代表候補生達はそれとは別に大きく衝撃を受けていた、イギリスの開発している第三世代武装と全く同じ武装を康太が使っている事に対してだ

「あれはBT兵器?でも、動きが!」

セシリアも自分と康太の違いは分かっている、かつては機体かビツトか、どちらかしか操作出来なかった己に対して康太はドラグーンによる射撃を加えながらもビームサーベルを両手に握り戦闘を行っているのだ

初めて康太と戦った時にその欠点は改善されてきているとはいえず、セシリアには今の康太のように動けるかと言われれば否と答えるしかない

そして、ドラグーンの動きもまた格段に上だった、セシリアの場合は移動させる時にどうしても直線的な動きになりがちなのだが、康太が操るそれはまるで生きているかのように動く

狙われても蛇行して回避し、別のドラグーンがカバーし、それらが

全て一個の生命体であるかのように錯覚する程である

未だにフォンのアストレアを捉えるには至っていないが、その精度は確実に上がってきている

しかし完全に決める前にドラグーンのエネルギーが切れ康太のもとへと帰還していく

背部のシラヌイに装着されエネルギーの補給が行われるのだが、その間は康太の戦闘力が下がってしまう

シラヌイは機動性が大きく上がるといった機体本体の変化は少ない、多少は上がるがメインとなるのはドラグーンによるオールレンジ攻撃なのだ

その為、肝心のドラグーンが使えないのでは話にならない、アストレアが康太の周囲を高速で飛び回り攪乱するのをまた見ている事しか出来ないのだ

ISのハイパーセンサーでさえも全てを追いきれない程の機動性、だがビームライフルに持ち替えた康太は一度目を閉じると意識を集中させる

その場で静止している康太の様子を怪しみつつもニュータイプの力を見る為に仕掛けるフォン、高速移動により十分にセンサーを攪乱したところで頭上より襲い掛かる

だが康太はそれを直感で悟り、ビームライフルだけを頭上に向けて発砲する

相手の姿を全く見ていないにも関わらず放たれた射撃、それは違わずフォンへの直撃コースに乗り、回避するも右肩部を掠め装甲に傷をつける

トランザムの使用から明確なダメージにフォンが舌打ちするが、康太は更に射撃を続ける

ダメージを受けたが足を止めるような愚行をフォンは犯さない、だが康太へと攻撃は全てフォンの進路上へ置く形で放たれたものだ

それは康太がフォンの動きをセンサーではない部分で察知し対応している事に他ならない

『成る程、大まかに分かかって来たぜ。お前、オレ様の殺気を感じしてい

るな？オレ様が攻撃に移ろうとした時だけ、先んじて射撃が来る。それがニュータイプ力の一端つて訳だ。ならよ、この状況ならどうするんだ？』

『ッ？しまった!?!』

宇宙空間に漂っていた武装を回収したフォン、それは最初に撃つた後で取り回しが悪いからと放棄していたGNランチャーである

そして康太は今の全体の位置関係を即座に理解した、もしフォンがこのままGNランチャーを放った後、それを康太が避けると射線上にはエクスカリバーが存在していた

チエルシーの妹であるエクシア・カリバーンの救出も目的としているだけに避けられない、特にトランザムを使用し威力の上がっているGNランチャーの直撃を受ければエクスカリバーやエクシアにどれだけの被害が出るか未知数なのだ

更に言えばフォンが使っているアストレアの持つGNドライヴは初期型の擬似太陽炉、そのGN粒子には毒性があり、撃たれば現状では治療する術がない

だからこそ康太は避けられない、防がなければエクシアの命を危険に晒すと理解してしまっているからだ

『ニュータイプは奇跡を起こせるんだろう？ならその奇跡、オレ様に見せるよ』

『クッ!』

トランザムによって強化された出力より放たれる高濃度の粒子ビーム、それを康太はエネルギー補給の終わったドラグーンを展開し三基ずつでビームシールドを二枚展開する

更には自身もシールドを二枚持ち、重ね合わせるようにして粒子ビームを待ち構える

そして遂に粒子ビームが一枚目のシールドを破り、二枚目も多少は威力を軽減させたものの破られる

そこに七基目のドラグーンが割り込み、ビームを放ち相殺しようとするが押し切られ、康太へと直撃する

数々の防御により放たれた当初よりはエネルギーを消費していた

粒子ビームは、しかし簡単にシールドを破壊し、ジェガン本体の装甲に達する

ISの基本機能であるシールドバリアに加えて絶対防御の発動、そこでようやく粒子ビームを相殺する事に成功するが代償は大きかった

『ぐあああああああッ!?!』

「コウタさん!?!」

「兄さん!?!」

康太の痛みに呻く声と、粒子ビームを喰らったジェガンの姿に地上で見ている者達からも悲痛な声上がる

そして爆発の中から現れたジェガンは機体の上半身を半壊させ、頭部は砕けていた

パイロットである康太は生きてはいる、だが着弾の衝撃によりヘルメットのバイザーは割れ、その破片で切ったのか頭部から血を流している

まだ生きているISの保護機能で窒息するような事はないが、それはジェガンが解除されれば保護機能も失われ気密の失われたパイロットスーツでは生存が出来ない事も示していた

『サイコミュとかいうのを使えば防御出来ただろうが、それだけの力が無かったのか? まあいい、その程度だつて言うなら見る価値もねえ。此処で殺してやるぜ』

ニュータイプの力が見える事を期待していたフォンはそのような結果に落胆した様子で改めてビームサーベルを構え直す

そして康太へと止めを刺そうと推力を全開にしてビームサーベルを突き付ける

だがその切っ先が康太へと触れる瞬間、康太は自身の血で閉じていた右目を開き、機体を操作する

すると今度は康太の姿がフォンの目の前から掻き消える事態になり、その動きにフォンが意表を突かれると背後から突き立てられたビームサーベルによりアストレアの右脇腹を貫かれる

『これは、お前とは別のガンダムマイスターが見せた技だ!』

『へっ、やれば出来るじゃねえか……』

自らにビームサーベルが突き立てられる直前に肩部スラスターによる瞬時加速と背部スラスターの調整で敵の背後に回り込む、ワンセコンドトランザムを基に咄嗟に康太が機体制御方法を編み出したのだ

そのまま互いに距離を離す二人、アストレアの装甲の輝きが消える事でトランザムの限界時間が来た事を示していた

『紫藤康太、お前の強さの理由は分かったぜ。ニュータイプ能力だけじゃねえ。様々な機体、戦術に精通し状況に応じて使い分け応用する、それがテメエの強さって訳だ』

絶対防御を抜かれ負傷しているにも関わらずフォンは楽しそうに笑う

『トランザムはもう使えない。擬似太陽炉が焼き切れる前に止めたようだが、機体に蓄積したGN粒子は大分消耗した筈だ。まだ続けるか？』

『いいや、今日はこのくらいで十分だ。紫藤康太、次はそのニュータイプ能力をもっと引き出しておくんだな。あげやげやげやげや！』

『逃がすと思うか!?!』

『思わねえな。けど、お前はオレ様を逃がすしかない』

『何をツ?!』

『ハナヨ、やれ』

機体の損傷は大きいが戦意は全く衰えていない康太、それに対してフォンは負傷したが余裕のある態度を崩さない

そしてフォンの合図と共に宇宙空間に浮かんでいたエクスカリバーの各所から爆発が起きる

『エクスカリバーが!?!』

『事前に爆弾を仕掛けといたのさ。なに、パイロットの居る中央部分は無事だ。けどよ、早く助けないとどうなるか分からねえぜ?』

『グツ、そういう事か……!?!』

エクスカリバーの接合部等を集中的に狙った爆破、しかしパイロットであるエクシア・カリバーンは無事だとフォンは言う

そして地上でエクシアの救出を誓っている以上、康太は直ぐにエクスカリバーへ向かうしかない

『……口惜しさは残るが、私とて人の子だ!』

救助を最優先に、康太はストライカーパックシステムのコネクタがある背部が比較的無事である事を確認するとスペキウムストライカーに換装しエクスカリバーへと向かう

その間にフォンは自身の保有する輸送コンテナへと帰還していた

「フォン、直ぐに治療を」

「いや、まだ平気だ。望遠カメラは回してるな? 最後まで見届けようぜ」

輸送コンテナに戻ると専用のハコから現れたハナヨがフォンに治療を勧めるが、負傷を放置してフォンはモニターに映した康太の様子を眺めるのだった

「テメエはまだまだ強くなる。また近い内に会おうとしようぜ、紫藤康太! あげやげやげやげやげや!!」



一方、エクスカリバーに向かった康太は近くまで行くと中枢部分をハイパーセンサーで搜索していた

多少の破片が飛び回っており、康太も万が一の為に破損したパイロットスーツを無傷の予備と交換はしている

しかし宇宙空間でのスペースデブリは速度によっては銃弾や、砲弾と全く変わらないレベルの威力になる事もある為に全く油断は出来ない状況だった

そして搜索を初めてから一分、エクスカリバーを調べていた康太は生体反応を捉え、その周辺の装甲を剥がす

そこには体のラインがかなり浮き出る形の宇宙服らしき物を纏った一人の幼い少女が居た

顔に面影もある事からその少女こそがエクシア・カリバーンだと見抜いた康太は直ぐに周辺の機械を見て動かして良い物かを探る、そしてエクスカリバーのコア反応がエクシア自身から発信されている事

に気付いた

「これは……そういう事か」

クロエと同じ生体融合型のISだと思いついた康太はそのコアの保護機能が動いている事を確認するとエクシアの体を抱き抱えてエクスカリバーより離れる

残骸が漂う中をエクシアの保護の為にドラグーンで張ったビームシールドを頼りに進み、宇宙に来るのに使ったストライクブースターに到着する

そのまま康太はストライクブースターに設けられたハッチを開くと内部に詰め込んでいた予備の武装を放出する、貨物用に輸送スペースを確保しており、そこにエクシアの体を収容、ベルトを使い固定すると通信を開く

「クロエ、エクシア・カリバーンの身柄を保護した。ストライクブースターをそつちで制御して帰投させてくれ」

『確認しました。コウタさんもお早く』

「いや、まだやるべき事がある」

『やるべき事、ですか？それは？』

「エクスカリバーを砕く。クロエ、コアネットワーク経由でヴェーダに接続。現在のエクスカリバーの軌道を演算してくれ」

『は、はい！これは………エクスカリバー、爆発の衝撃で軌道上より移動！このままではイギリス首都ロンドンに落下します！』

「やはりか」

司令部ではイギリス代表候補生達が息を呑む声が聞こえてきていた

康太だけがフォンがただエクスカリバーを爆破するだけで終わりではないと見抜いていたのだ

『エクスカリバーの装甲材は不明ですが、ISの装甲材なら大気圏で燃え尽きない可能性が高いです』

「分かっているさ。だから燃え尽きるサイズになるまで砕く！」

スペキュラムストライカーのブースターに点火し康太は再びエクスカリバーに向かい飛ぶ

それからエクスカリバーに追い付くとその周囲をハイパーセンサーで調べ、そのデータをヴェーダへと送る

「クロエ、最も効率的な破壊箇所を試算してくれ！サムブリットストライカーを使う！」

データを送った後は機動性ではなく火力が必要になる為に康太はサムブリットストライカーに換装した

通常はアグニ改を装備しているサムブリットストライカーだが、エネルギー消費が激しすぎる為に今回は通常のアグニを装備している

それでも十発も撃てばエネルギーが切れるだけに、康太は一発でも無駄にしたくないとより確実性を取った

そしてヴェーダによる演算結果が送られ、その指示通りに康太が狙撃していく

次々に碎けていくエクスカリバー、的確に装甲の薄い箇所を狙い放たれるビームがその巨大な剣を粉碎していく

だが予想外の事態が起きる

「駄目だ、予測よりもエクスカリバーの装甲材が強固だ！」

『外周部分は今の状態でも燃え尽きます。ですが、中枢部分が！』

「分かっている！やれるだけやるだけだ！」

アグニで足りないのならばとトーデスブロック改やミサイルによる攻撃を中枢部分へと集中させる康太

だが中枢部分だけは他の物とは比べ物にならない程頑丈に作られており、碎くには至らない

『サムブリットストライカー、全武装エンプティ！これ以上は！』

「ぐっ、まだだっ！」

実弾もエネルギーも使い果たしたサムブリットストライカーを量子化し、康太はスペキュラムストライカーを装備し直すと未だに外観を留めている中枢部分に組み付いた

『コウタさん、何を？！』

「このサイズでも宇宙から落とす訳にはいかない！」

中枢部分に組み付き、そのまま宇宙へと押し返そうとする康太だが、既に地球の重力に捕まりつつある中枢部分は落下する事を止めな

い

スペキュラムストライカーの推力を全開にしてもそれなのだ、地球への落下は避けられないと思われた

「まだだーまだ終わらんよー!」

通常の推力で駄目ならばと康太は瞬時加速を行う、それにより多少は押し返す事が出来たが瞬間的なものではまだ足りない

同じ理由で二重瞬時加速でも足りないだろう、だから康太が取った手段は一つだった

「上がれえええええッ!!」

スペキュラムストライカーに備えられた四基のブースター、それを全て連動させて絶え間なく瞬時加速を行うという離れ業、リボルバー・イグニッション・ブースト個別連続瞬時加速と呼ばれる技である

その技を編み出したアメリカのイーリス・コーリングでさえ成功率は低い、戦闘ではないとはいえその高難易度の機動を康太は土壇場で実行してみせた

瞬時加速の爆発的な推力が連続し、中枢部分を宇宙へと押し上げていく

『もうすぐ地球の重力圏から抜けます! コウタさん、それ以上は貴方が危険です! 早く離脱を!』

「いいや、確実に行く!」

『それではコウタさんが帰還する為のエネルギーが残りません!』

エネルギーをかなり消費する瞬時加速、それを連続して使えばどうなるかは明白である

目に見えて減っていくジェガンのシールドエネルギー、それが残り一割を切ったが、康太は噴射を続けている

『これは死ではない! 地上に住む人々が生きる為の——!』

エクスカリバーの中枢部分が完全に重力圏から抜ける、少なくともこれで地上に被害が出る心配はなくなった

だが、それと同時にストライク・ジェガンのシールドエネルギーもゼロとなり、機体が解除され康太の体がパイロットスーツのまま宇宙へと投げ出されていった

◆ 「早く救助隊を編成しろ！ 恩人を死なせたとあつては何と顔向けすれば良いか！ 絶対に生きて連れ帰るのだ！」

司令部ではレイネシアが軍に連絡を取り、軍のIS部隊の派遣を行おうとしていた

機体は解除されてもISのコア反応は宇宙に健在だ、そこまで辿り着ければ救助も出来る

だからこそパイロットスーツの酸素が持つ僅かな時間を無駄にしない為にも迅速な行動を行っているのだが、軍の動きは鈍い

『しかし王女殿下。いくら王女殿下の御命令とはいえ、いきなりロケットを打ち上げるには時間が——』

「ISだけを送れば問題ない！ 適当なミサイルにくくりつけるなり何なりしてでもあの座標へと向かうのだ！ 事態は一刻の猶予もないのだぞ!？」

『ですが、他国にミサイルの打ち上げを伝えるにもその理由が宇宙条約に違反していた兵器をテロリストに奪われ、その奪還に向かったパイロットの回収となると、共同開発をしていたアメリカにも影響が——』

「既にテロリストに奪われていたという時点で醜態だ！ その奪還に協力した恩人を見捨てて更なる醜聞を作るのか!？」

腰の重い軍部とのやり取りは続く、そうしている間にも残り時間は少なくなっている

それとは別にセシリア達も自分達で動けないか話をしていた

「クロエさん、あのブースターはもう一度使えないのですか?」

「エネルギーが殆んど空です。もう一度宇宙に上がる為には、最低でも三時間はエネルギー補給に要します」

「それでは間に合いませんわね。せつかくチエルシーの妹を助け出してくれたいというのに……!」

「出来るなら私が出ています。ですが、今はコウタさんを信じるしか……」

クロエの言葉に暗い表情をするイギリス代表候補生達

そんな中、モニターを見ていた一人が異変に気付く

「ああっ!? ジェ、ジェガンの反応が!」

その言葉に全員がモニターに注視する、そこには康太のジェガンのコア反応を指し示していた反応が途切れた事を示す表示が行われていた

「何ッ!? 一体、何があつたというのだ!」

「分かりませんが! ですが、記録を見る限り何らかの手段により妨害されたようです!」

「妨害だ?!? そのような事が出来るのは、まさか!」

「皆、外を見て! 空にアレが!」

更に司令部の外を映していたカメラの映像に切り替わる

そこに映された空には砕かれたエクスカリバーの破片が大気圏で燃え、火球となっていた

昼でも見える流れ星、そんな中に真紅に光り輝く物体が同じように降下してきている

そしてこの場に居る全員がその光を知っていた

「アレは、まさか!」

「……ガンダム!」

先程まで康太が戦闘を行っていたフォンのアストレア、それが背部より放出していた光と同じという事実全員が身構える

だがクロエだけはそれが敵ではないと感じていた

「違います、アレは——」

『GN粒子、最大散布から散布中止。全く、理屈の上では可能と分かっているとはいえ、ぶつつけ本番になるとは』

通信機より聞こえてくる声、それは宇宙空間を漂っていると思っていた康太の声だった

それと同時に外部カメラに映っていた赤い球体が崩れトリコロルカラーの機体、康太がプルトローネと呼んでいた機体が現れる

それを見てクロエが通信機を掴み、通信を行う

「コウタさん、無事ですか!」

『問題ない。ただ、通信プロトコルとか全く違い過ぎて手こずった。』

「これは聞こえてるのか？」

「はい、聞こえています。ちゃんと、聞こえていますよ」

『そうか。ならこのままアリーナに着陸する』

「分かりました。コウタさん——」

『うん？』

「お帰りなさい」

『ああ、ただいま』

その後、ガンダムプルトローネを動かしていた康太は先に伝えていた通りにアリーナへと着陸した

そんな彼をクロエの他にもその場に居た全員が出迎え、康太はあまり慣れない敬礼で応えるのだった

43話 いつもの日常へ

地上へと帰還してからは簡単な事情聴取を一時間程受ける事となった

その後は箝口令として今回の事件に関しては他言無用と誓約書を書いたり、この件で今日の訓練を中止にしたりと、色々あった

そして今日もホテルにて休息を取ろうとしたのだが、今回の件で話があるという事でセシリアから自宅に招かれる事になったのである

普段は割りとお転婆なところがあるから忘れかけているがセシリアは貴族でお嬢様、自宅というのが実際には屋敷という表現が適切な建物だ

その応接室にてオレとクロエと奏、そして家主でもあるセシリアとチエルシー・ブランケットは相對していた

「改めて康太様には妹のエクシアを救って頂いた事、感謝致します」

「いや、別にそこまで気にしなくても良い。オレへの報酬はフォン・スパークから貰ってるからな」

ガンダムと擬似太陽炉、この二つを得られただけでもオレにとっては今回の件でお釣りがくる程の収穫となったのだから

傷の方も割れたバイザーで頭を少し切っただけだ、ガーゼを貼り付けて止血もしてあるから直ぐに治る

「それでも康太様が成してくれた事で私は妹と再会する事が出来たのです。そして、それだけではありません。あのまま闇の中に墮ちそうになっていた私も結果的に貴方様に救われたのです」

「チエルシー、それはどういう意味ですか?」

セシリアの言葉はオレも気になった点である、何がどう繋がればチエルシー・ブランケットを救う事に繋がるのか分からない

問われた彼女は少し思い悩む様子を見せたが、しっかりと顔を上げて言葉を紡ぐ

「これから話す事は私が独自で調べていた事と、とある組織よりもたらされた情報です。決して、誰にも話される事のないようお願い致します。そして、セシリアには辛い話になるかもしれません。お嬢

様、御両親の死に関する真実を知る覚悟は御座いますか？」

「ッ!？」

チエルシー・ブランケットより聞かされた言葉、その言葉に息を呑む声がセシリアから発せられる

だが動揺は一瞬、セシリアは先程よりも強い意思を宿した瞳でしっかりとチエルシー・ブランケットを見詰め返した

「お願いします、チエルシー。あの事故が事故でないのなら、私は何があったのか知りたいのです」

「分かりました。ではそこに至る為に、まずエクシアについてお話します。エクシア、入りなさい」

「エ、エクシア・ブランケット、入ります！」

チエルシー・ブランケットが名を呼ぶとノックの後でメイド服に身を包んだエクシア・ブランケットが現れる

「驚いたな、もう動けるのか」

「は、はい！康太様、この度は私を助けて頂き、誠に感謝申し上げます！」

「いや、お姉さんの方にも言ったが気にするな。必要だからやっただけだ」

救出した後は意識もなく検査の為に医務室に運ばれていたらしいが、こうして目覚めて動いているのを見るに特に問題はなかったのだろう

まあ挨拶は軽くにして、本題に入るとしよう

オレはチエルシー・ブランケットに続きを促す

「彼女は生まれながらにして心臓に病を抱えていました。ですがその命を繋いで下さったのが前当主様、セシリアの御両親なのです。国際法にて禁じられている、ISとの生体融合措置という形で」

「それは……」

フォン・スパークが言っていた事である、エクスカリバーは生体融合型のISであると

それを改めて聞かされれば確かに何故そのような手段を使つてと疑問に思う

「前当主様はエクシアの為でもありませんが、何よりもセシリアの為に
独自にＩＳコアを入手して実行に移しました。それがあのエクスカ
リバーなのです。あれを、来るべき戦いの時に、セシリアの力になる
ようにと」

「そんな……!?!」

「ですが、それは国を裏切る行為でもありません。そのＩＳコアとは
ある組織よりもたらされた物だったのです。そして、その結果として
セシリアの御両親は……」

「そうだったのですね。お母様とお父様は、私の為に……」

命を賭してでも娘の為に力を残した、それはそれだけセシリアの両
親が子供の事を想っていた証左だろう

だがまだ謎が残る、そのとある組織の事、そして数に限りがあり国
が嚴重に管理しているＩＳコアをどうやって渡したのか、だ

「康太様は既にお気付きのようですね。前当主様にＩＳコアを渡した
組織、その名を亡国機業ファントムタスクと言います」

「亡国機業……」

「私も後で知った事ですが、彼等は各国のＩＳを強奪しているテロリ
ストです。そんな彼等が前当主様にＩＳコアを渡した理由はエクスカ
リバーの掌握にあります」

「成る程、兵器を自分達で作るより安上がりで足も付きにくい、そうい
う事か」

「恐らくはその通りです。ですが、そんな彼等との取引によって前当
主様、セシリアの御両親は……」

「口封じの為に、事故に見せ掛けて殺されたのですね……」

「はい、私はそう教えられました。他ならぬ、亡国機業より」

「ッ!?!」

再びセシリアが息を呑む、オレは万が一の事を考えて首に掛けてあ
る待機形態のプルトローネに手を伸ばす

「エクシアの行方を独自に追っていた私は、その途中で彼等に声を掛
けられました。エクシアの居場所を知っていると。いざという時に
はＩＳコアを奪取する手引きをしろと、そう取引を持ち掛けて来たの

です。今のエクシアがどのような状態なのか、エクスカリバーの詳細な事は教えて貰えませんでした。既にその情報は伝えられています」

「そんな、チエルシー、貴方は……」

「はい、それは祖国を裏切るも同然の行為。長く葛藤しましたが、エクシアの為ならと覚悟を決めようとした時です。今日、康太様のお陰でこうしてエクシアと再び会う事が出来ました。罪を犯す前に、貴方様が全てを解決してくれた。だから感謝を、妹だけでなく、私自身を救って頂いた事に深く感謝致します。例えどのような要求でも生涯を賭けてでもこのご恩はお返し致します」

「成る程、だからか」

彼女自身が救われたという理由に納得がいった

だが、だからと言ってそんなに畏まる必要もないのだが

「何度も言ってるが、オレは自分がやりたいからやっただけだ。その結果、勝手にそっちが助かっただけの話だから、感謝される謂れはないさ。そんな訳で気にするな」

「ですが……」

「くだい。オレが良いって言ってるんだからそれで良いんだよ。それでもと思うなら、その亡国機業に関して知っている限りの事を教えてくれ」

「分かりました。貴方様がそう望むなら」

「その前に、ふと思ったのですが、あのフォン・スパークという男が亡国機業に関与している、という可能性はありますか？」

「フォンが？いや、その可能性は低いだろうな。まずエクスカリバーを手中に収めようとしていた亡国機業と行動が噛み合わない。亡国機業とやらの真の目的にもよるが、あの男ならむしろ亡国機業は気に入らないと感じる筈だ」

「そうなのですか？」

「あの男はテロで父親を失っている。テロを憎んで、自らもテロリストになって。それでも困難に立ち向かうような人間には手を貸したりする。今回のエクスカリバーを爆破した件もそうだろうな」

オレをエクシア・ブランケットの救助に向かわせるつもりだったのは間違いない、だがその救出に向かう為には一つ問題点があった

「エクスカリバーはフォンが制御を奪ったとはいえ、その預かりはイギリスだ。オレがエクシア・ブランケットを救出する為には、エクスカリバーを破壊する事になる。一介の協力者であるオレがアメリカとイギリスの共同開発した兵器を破壊するのは政治的によろしくないだろう?」

「あつ……」

その説明でセシリアも合点がいったらしい、今回の出撃は割りと此方の独断専行であった

あの場でオレに対して王女殿下からの依頼があつたから表向きは問題ないが、それでも越権行為と取られかねない行為を王女殿下はしていたのだ

「だがフォンはオレの足止めとしてエクスカリバーを爆破した。それによりエクスカリバーは地球への落下コースに入る。オレは人道的な観点からエクスカリバーのパイロットであるエクシア・ブランケットを保護。都市部に向けて落下するエクスカリバーの破壊を行うしかない。オレの力を確かめると同時に、その行動は全て予測されていた。テロもフォンにとっては今更罪状が一つや二つ増える事なんて気にしないから、そうしたんだろうな」

ジエガンのエネルギーが尽きてもオレにはプルトローネとフラッグ、そして実は巧妙に偽装してあるがフラッグの待機形態の腕輪と一体になっているジエガン・サーガがあつたのだ、帰還するのに問題はなかった

むしろその程度も思い付かないならそのまま死ぬとか考えるだろうな、フォンならやりかねない

「全てはあの男の掌の上、という事ですのね」

「一見粗雑な言動に見えてその実、頭がキレるからなフォン・スパークという男は。あのエクスカリバーを使ったのも亡国機業を炙り出す為、なんて理由があるのかもしれない。何処まで見通しているか、オレには見当もつかん」

扱いに困ったアリー・アル・サーシエスですら追放という形を取るしかなかった男だ、排除なんて考えれば先手を打って爆弾仕掛けられて終わる

そういう、キレすぎるが故に危険視される程の人物なのだ、フォン・スパークという人間は

「ともあれ、フォンに関しては今は置いておこう。テロリストだけあって潜伏も上手いからな。警戒はするが、今はより身近に迫る脅威についてだ」

取り敢えずフォンの事は置いておく、何か企んでいるのは確かだが亡国機業への対処の方が先だ

セシリアによって中断されたチエルシー・ブランケットの話に戻る
亡国機業、第二次世界大戦の頃から存在が確認されている謎の組織、ISコアの強奪、それによる戦力は未知数、そういった情報が彼女から伝えられる

しかし肝心の亡国機業の目的そのものは彼女も聞かされていないらしく、今後何をするのかも不明らしい

「私が知る情報は以上になります」

「目的不明が一番厄介だな。少なくとも、目的さえ分かれば敵の動きも予想が立てられるんだが。とはいえ、近く仕掛けてくるのは確かだろうな」

「それは何故ですか？」

「連中が保有する予定だったエクスカリバーは破壊した。ならば計画の修正と共に、エクスカリバーのコアを回収しようと動く筈だ」

オレはエクシア・ブランケットを見る

その心臓の代わりに埋め込まれたISコア、連中が保有する数は正確なところは分からないが何もせず放置するとは思えない

「彼等は動くでしょうね。恐らくはお嬢様が居なくなつた時を狙つて」

「そんな!? チエルシー、直ぐに軍部に保護を申し出ますわよ! そんなら少なくともリスクを減らせる筈です!」

「その代わり、エクシアは研究対象として見られる事になるでしょう。」

それでは今までと何も変わらないのです」

「ですが、相手もISを持って以上は……」

そこでオレに視線を向けてくるセシリア、何が言いたいかは分かるがオレは困った時のドラえもんか何かかな？

「ラビットフット社も色々抱えられんぞ？パイロットは流石に五人も居れば十分だし、技術者って訳でもないだろう。表向き周囲を納得させて、かつその安全を確保出来るような役職なんて———あ」

一つだけ仕事があった、それも割りとは大急ぎで欲しい人材として改めてチエルシー・ブランケットを見る、彼女はセシリアのメイドだ、当然ながら炊事洗濯掃除といった家事全般は出来る

そしてラビットフット社が管理してる中で一つだけその能力を可能な限り早く欲しい場所があった

おまけに素性もセシリアに仕えていたという事ではつきりしてる、特にこれが一番ポイントが高い

「何かありますのね？」

「まあ、子供達の面倒を見る人が欲しかったからな。紫藤院っていう孤児院の管理だ。奏の他に小さいのが三人居る」

「そこは安全ですよ？」

「昼間は学校もあるが、奏には専用機を渡してあるし、無人機が二機、常に施設を警備してる。今は世話をする人が居ないから色々大変なんだが、引き受けてくれるなら色々助かる」

普段は奏が面倒を見てくれているが、今回の教導の間はエイフマン教授が見ている

「必要ならば機体を貸す事も出来る。適性によつてはカスタム出来るし、少なくとも生半可な戦力で手を出してくる事はない筈だ」

ラビットフット社が関わっているだけに誘拐などが危惧されるだけに緊急時にはその事を報せる発信器も持たせてあるからそうそう大きな事件が起きる事はないと思うし、そういう意味では安心ではある

「良いですね。チエルシーとエクシアがそこに入るのは可能ですの

？」

「能力は十分だし、何よりも素性がはつきりしているって点は何物にも変えがたい信頼だ。オレから話を通しておく事は出来る」

「決まりですわね。チエルシー、本当ならIS学園と一緒に連れていきたい所ですが、不可能な以上は手段を選んでられませんわ。康太さんのお話通り、ラビットフット社で厄介になりましたよう」

IS学園は基本的に関係者以外立ち入り禁止である、いくらセシリアが代表候補生で貴族でも使用人の同伴は認められていない為に学園に居る事は出来ない

そして転入も代表候補生のレベルになってようやく認められる程だ、そのような肩書きを持たない二人の身の安全を確保するなら、オレには他に思い付かない

「しかし、それではこの御屋敷の管理は——」

「そんな物より貴方達の命が大事ですわ！チエルシーだって長年探し続けていた妹とようやく再会出来たのですから、もっと我が儘を言っても良いのです！他ならぬ、お母様とお父様の死後も私に仕えてくれた大事な家族なのですから」

「セシリア……分かりました、これより暫しのお暇を頂きます。ですが、私は貴方の使用人である事に変わりはありません。状況が落ち着いたら必ず貴方の下に戻ります」

「ええ、それで構いませんわ。康太さん、改めてチエルシーとエクシアの二人の事、お願い致します」

「分かった。可能な限り早く安全が確保出来るようにしよう」

こうして、ラビットフット社で経営している孤児院にチエルシー・ブランケットとエクシア・ブランケットの二人が管理人として入る事になったのであった

その為にも簡単な経緯を篠ノ之博士に確認したら二つ返事で返ってきた

許可が降りた事を伝えると、二人は早速就労ビザの取得など慌ただしく動き出す事になるのだった



某所、地下に存在するその施設の中で一人の女性が通信を介して報告を受けていた

「そう、エクスカリバーが破壊されたのね」

『正体不明の男と偶然その場に居合わせたラビットフット社の紫藤康太との戦闘の末に爆破、地球への落下コースに入った為に完全に破壊されました』

「正体不明の男の方について何か分かった事は？」

『イギリスに潜ませてある諜報員からの報告によれば、名前はフォン・スパーク。偽名だと紫藤康太本人が語っていたそうです。互いに既知の存在なのか、彼の口から幼少期からテロ活動に従事していたと判明しています。また、両者の交戦記録を確認したところ、フォン・スパークと呼ばれる男が使っていた機体を「ガンダム」と呼称していました』

ガンダム、その名を聞いて女性は納得した

彼女はそれが何なのか知っていた、組織でも限られた人間しか知り得ないその名前に隠された真実を知るが故に

「良く分かったわ。フォン・スパークもイレギュラー認定。今後その動向を探りなさい。そして紫藤康太をイレギュラーから特異点シンギュラリティーに変更。可能な限り捕獲を最優先とするわ。良い、彼の頭の中には貴重な情報が詰まっているのは確実。必ず生かして捕らえるのよ。他の部隊にもその事を徹底させなさい」

『了解しました、スコール』

端末に映っていたウィンドウが消え、報告を行っていた者との通信が途切れる

それを確認したスコールと呼ばれた女性はその美貌に相応しい妖艶な笑みを浮かべるとソファアーへと体を預ける

「特異点、彼はデビルガンダムに精通し、尚且つ他の技術体系から生まれたと思われるガンダムにも精通している。なら他のガンダムを知らないとは言えない」

フォン・スパークに関しての情報は少ないが、康太が多くを知っている事だけは確定した、故に扱いをイレギュラーから特異点へ格上げ

したのだ

「本格的に捕獲する為の計画を練らないといけないわね。その前にレインに接触させるべきかしら？いえ、そこまで器用な真似が出来る子ではなかったわね。それに今は他の子に御執心みたいだし、その子を取り込めれば更にI Sコアを確保出来る。それならあの子はそれに使うべきね。そうになると、やはり手段は強襲しかないのだけど」

今は夏休みであり、ラビットフット社に所属している為にかの天災の気紛れで突発的に動く事がある為に予想出来ない、だからI S学園の行事が行われている時を狙えば確実に彼はそこに居る

「一番近いのは九月にある学園祭の日。オータムに頼んで、Mにバツクアップをお願いするのが良さそうね」

そうしてより詳細な計画を煮詰めていくスクール、だが彼女は知らない、そんな計画を立てる前から知っているまだ見ぬイレギュラーが現れようとしている事を



チエルシー・ブランケットとエクシア・ブランケットに関して色々動き出したものの、オレは自分に依頼されていた教導の件を放り出すつもりはなく、翌日も訓練を行っていた

参加メンバーであるイギリス代表候補生の全員も昨日、実際に戦闘が行われたのを見たからか気合いの入り方が違っていた、士気が高いのは良いことなので昨日も使ったシミュレータで再びデビルガンダムに対抗する為の訓練を続ける

シミュレータを行ってはフィードバックされた痛みにもたうち回り、何処が駄目だったのかを反省し、次に活かす

それまでとは違い全員が真剣に訓練に打ち込んだお陰か、四日目は有意義な訓練が出来たと思う

そして最終日となった五日目、代表候補生全員とラビットフット社からオレと奏、そして追加としてラビットフット社無人機部隊のジェガン十二機を加え、シミュレータの操作を行うクロエを除く全戦力とも言える戦力で挑んだところ、無人機のジェガンがデビルガンダム本体の背に乗り、背後からビームサーベルでその頭部を貫き生体ユニット

トの撃破に成功した

「通常戦力は周囲でデスアーミー軍団を引き付け、IS部隊が戦力を集中し一点突破で本体を叩く」という王女殿下の作戦が上手くいった結果である

結果として何度か失敗したが一度だけとはいえ成功したという事実が全員の自信に繋がった

その時の喜びようはそれまでの比ではなく、シミュレータから現実に戻った時には割れんばかりの大歓声となった程だ

とはいえ成功はその一度だけ、同じ戦法でも失敗する時は失敗したので過信は出来ないが、残念ながらその時点でオレは帰る事となった
シミュレータは王女殿下にそのまま預ける事となった、彼女が今回の訓練で得た教訓を基に欧州で動く為に使わせる為である

その試みが上手くいくかはまだ分からないが慢心する事もなく成長した事を信じてだ

帰る際にはイギリス代表候補生にならないかと強く勧誘されたりしたが丁重に断った

そうしてノッセルで日本に、IS学園に戻ったオレ達だったが篠ノ之博士のところへ報告に行ったら、疲れているだろうから後回しで良いと言われ、お言葉に甘えて自室で休む事にした

「今回は色々大変だったな。暫くはゆっくりしよう」

「そうですね。ですが、どうやら第二回の開催を各国から打診されているみたいですよ。今度は是非うちの国で、と」

「勘弁してくれ……流石に夏休みで何度も海外に行くのは疲れる」

「束様もそのつもりのようなので、暫くは大丈夫だと思います。レイネシア殿下も動かれるみたいですし、それで何件かは減ると思いますよ」

研究室から出て夏休みですっかり人の減った学園の寮の廊下をクロエと並んで歩く

奏はエイフマン教授が預かっていたチビ共三人を連れて孤児院に戻っている頃だろう

部屋の前に着いたオレ達は鍵を開けて中に入る、数日放っておいた

から埃が積もっているかな、と思っていたのだが――

「よう、お帰り」

「フォン・スパーク……」

人のベッドに寝転がってマイペースにガンブラの説明書を読んでいるフォン・スパークが居た

また会う事になるとは思わなかったが、まさか此処に侵入してきているのは予想外だった

………あと、ベッドの横に簀巻きで転がされている生徒会長は何をしているのだろうか？



彼女は知らない場所で目覚めた、周囲を見渡しても直前まで覚えていた場所とは全く違う風景が広がっている

「此処、どこ？」

一人呟くが彼女に答えてくれる者などそこには誰も居ない、その場を動こうにも周囲には何も見当たらない、それでも何か手掛かりはないかと目を凝らす

そして遠目にアスファルトに覆われた道路を見付ける、人工的な道だ、その道を辿ればいつかは人の居る場所に辿り着ける、荒野の中を希望を持って進んでいく彼女は一時間程歩き続けて、ようやく道路に辿り着いた

辿り着いた先、そこには人の姿は見えないが看板が設置してあった、現在地が分かるかもしれないと彼女はその看板に書かれている文字を読む、「United States Highway 95」、そう書かれている看板に彼女は正確ではないまでも今居る国を知った

「アメリカ……」

そこは彼女の祖国に近いと言えば近い、だがそれは北のカナダである

どうして自分がそんな場所に、全く理由の分からない彼女は愕然とする

それからどうやって帰れば良いのか、カナダ大使館は何処だった

か、調べようにもスマートフォン類は見当たらない、今のところ時間帯が悪いのか人通りもない

空には太陽が上り容赦のない日射しが肌を焼く、遠くない内に脱水症状を引き起こしかねない状況に彼女はどんどんと絶望していく

だがそんな中で彼女は直感のように西を向いた、何故だか分からないがその方角に彼が居る、そう感じたのだ

「コウ？」

ならばそちらに向かおう、そう決意した時、彼女の胸元で、彼女が身に付けた覚えのないペンダントが光った

そのペンダントは翼を広げた鳥のような形で銀色に輝いていた

一夏の夢（ひとなつのゆめ）

夏休みも後半戦に突入しようかという時期になってきたある日、一夏はIS学園からの呼び出しによりアリーナに来ていた

まだ本国に帰ったりしているメンバーが居るのでIS学園に居る人間だけでも集まるように言われている

何でも対デビルガンダムの為の部隊として世界中からISが派遣されて大部隊が結成されるという話なのだ

なのでアリーナのピットには既に多くの人が集まっていた、色々な人が居るが例えば一番後ろの方で控えていた黒髪の青年などが――

「つて、男!?!」

自分や兄、そして同じ企業の同僚を除けば四人目となる男性IS操縦者の存在に一夏は驚きの声を上げる

その声に反応したのか黒髪の青年が振り返り、一夏と目を合わせる「あ、悪い。えっと、アンタは?」

「俺の名はガンダム・刹那・F・セイエイ、ソレスタルビーイングのガンダムだ」

「ガ、ガンダム……?」

それは同僚である紫藤康太の魂とも言うべき名だった筈、何故その名を知っているのか、聞き返そうとしたが向こうは既に一夏を見ていない、というよりも――

「俺がガンダムだ、俺がガンダムだ、俺がガンダムだ、俺がガンダム俺がガンダム俺がガンダムガンダムガンダムガンダムガンダムガンダムガンダムガンダム……」

一人でずっとガンダムと呟き始めていた、どう見ても狂人の類いに一夏は関わらない方が良くとその場を離れる

そしてピットの中を進むとアリーナでは模擬戦が行われているらしく、モニターで二機のISが戦闘を行って――

『ハルフォーフ大尉、ラウラを、離せえええッ!』

『邪魔をするな、織斑一秋ッ!』

「……何やってるんだ、一秋兄？」

戦闘を行っているのは自身の兄と見慣れない黒いISを纏ったこれまた知らない女性だった

何があつたのか全く分からない一夏は、近くに鈴が居たので訪ねる「なあ鈴、アレ何があつたんだ？」

「何って、あの人ラウラの元部下らしいのよ。復隊出来るように上に掛け合うって、だから帰って来てくれってお願いしてたんだけど、一秋との関係を優先したいってラウラが言ったら、あんな状況になつたのよ」

「ええ……」

それで決闘に、何とかいうかラウラ本人の意思は何処にいったのかと思つた一夏だが、モニターの中の二人は止まらない

『ラウラを惑わして！』

『貴様の言うセリフかあああッ！』

黒いISがレールガンを放ち一秋の白式のシールドを弾き飛ばす

対する一秋もまたライフルで黒いISのカスタムウイングを破壊し、一進一退の攻防が続く

『ならば！』

だがそこで黒いISが仕掛ける、杭のような物を掴み白式へと迫る『墜ちろ、織斑一秋ッ！』

鋭い加速からの一撃、武装を持ち替える暇もない速度の攻撃に一夏は兄の撃墜を悟る、だが突如として割り込んで来た射撃により黒いISは回避を余儀なくされる

そしてモニターがその攻撃を行った機体を捉える

「あれは!？」

その機体は赤い装甲を持ち頭部に何処か鎧武者を思わせる意匠の施された機体であつた

パイロットの顔は見えるが、そのパイロットもまた面頬を彷彿とさせる仮面を身に付けている

が、その相手は一夏の知っている相手だ

『とんだ茶番ダム。いい加減止めたらどうだ?』

『康太?』

同じようにその正体に気付いた一秋がその名を呼ぶ、だが康太は不敵に笑うだけだ

『違うな。最早紫藤康太を超え、ISをも超越し、今の私はガンダムだ!』

「な、何それ……?」

隣に居る鈴が引き気味に呟くが一夏も全く同じ気持ちだった

割りと奇行に走る事がある康太だが、此処までぶっ飛んでいただろうか、と

しかし康太はそんな声など知らぬとばかりに続ける

『私はガンダムとなった!』

力強く力説して――

『ガンダムガンダム、私はガンダム!愛を斬り裂き、その手に勝利を抉じ開ける!人呼んで、シドウガンダム阿修羅スペシャル!』

抜き放ったビームサーベルを振るい、やけにリズムの良い言葉に乗せて名乗った

『これがやりたかった(コウタ&作者)!生き恥を晒した甲斐が、あったというもの!』

既にこれ以上ない程の生き恥を晒していると思うが、ツツコミを入れるだけ野暮だろうか?

一夏が現実逃避をしようかと検討していると、立ち直ったのか黒いISのパイロットが溢す

『貴様、痛いな……』

「どっか行けバーカー!」

見れば鈴が待機形態のISに向かって怒鳴っていた、どうやらコアネットワークを介して通信しているらしい

『何だと……邪険に扱われるとは!ガンダムとは、死ぬことと見つけたり……!』

『何をやってるんだお前は!』

まるでハラキリでもするかのようにビームサーベルを握る康太、すかさず一秋が止めに入る程である

『私は豆腐メンタリズムなガンダムだという事を忘れるな!』

『言ってくれなきや、分からないじゃないか……』

『熟知しているさ。だがしかし、敢えて言わせて貰おう。私が、ガンダムだ!』

お前の何処か豆腐メンタルだ、そうツツコミを入れようとした時だった、アリーナのピットから紅く発光する何かが飛び出す

『違ああああうツ!俺がアアアツ、ガンダムだツ!!』

それは先程自らをガンダムと名乗った青年であった、彼の機体が凄まじい速度で移動すると康太の機体の腕を斬り裂く

『俺がガンダムだ……』

『そうか……御免——ツ!』

『お前ら、何処かおかしいよ……』

『口にしないで分かるわよ』

結局、何があったのか完全に分からぬまま、ぐだぐだと時間が進んでいくのだった



その後、なんやかんやあって学園の外に出て訓練が行われる事となった

流石に人数が多いだけに部隊行動となるとアリーナだけでは足りなくなつたのだ

そして予定されているポイントに向かう途中であった

『ガンダムガンダムガガンダム!ガガンガガン、ガガンダム!』

またしても無駄に良いリズムで意味不明な歌のようなものを口にしながらそれは現れる

というかさつき聞いたばかりの声である

『そこかツ!』

『待ちかねたぞ、少年!』

『やはり貴様か!』

先程撃破された機体から乗り換えたのか、今度はより鎧武者らしいシルエットとなつた黒い機体で現れた康太、それに先程は紅く発光していた青と白の機体を操る青年が反応する

先程と違うのは康太だけではなく、その青年の機体にも背中に戦闘機のような物がドッキングしているところだろう、だが一夏は既にこの二人の相手が面倒に思えてきていた

「そうとも、この私、シドウガンダム！そして盟友が造りしガンダム、マスラオ改めスサノオ！」

そう堂々とガンダムを名乗るが、一夏はそれに対してツツコミを入れる

「ガンダムじゃない」

二つの目とV字アンテナがガンダムの特徴だと他ならぬ康太が言っていた筈だが、この男は何を言っているんだ、そう一夏がげんなりとしていると康太はある一点を示した画像を送ってきた

「とくと見るがいい。正しく、ガンダムだ！」

送られてきた画像はスサノオとやらの頭部の一部を拡大したものらしい、そこには『GUNDAM』と文字が刻まれたプレートが溶接されている

「と、言われても……」

それでガンダムなのかと一夏も思う、だが

「ガンダム……!?!」

「刹那？」

「ガンダムだ！」

「お前は何処かおかしいよ……」

というよりは二人ともおかしい、だがそんな周囲の反応もお構い無しに二人は止まらない

「だが貴様は違う！貴様は歪んでいる！」

そう言って両腰から剣を抜き放つ刹那、対する康太も刀のような実体剣を組み合わせ長刀ナギナタのような形にする

「歪んでいる——」

「ガンダム！人呼んで——」

「歪ンダム!!」

「よく言ったンダム!!」

そして二人にしか通じ合っていないノリで激突する、共に近接戦闘

型であるだけに双方の剣が激しく火花を散らす

「私は純粹にガンダムという存在!」

「貴様はガンダムではない!」

「シドウガンダム!」

「絶対に違う!」

「何度言えば解る、だから私はガンダムで——」

「——ガンダムで、あるものかあッ!」

激しく繰り広げられる剣劇の舞台、明らかに狂人同士の会話なのでそこで交わされる攻防は無駄にレベルの高いものであった

「埒が明かンダム……ならばガンダムとは、何だ!」

「俺だ!!」

「フンッ、何を根拠に」

「そんなもの、あるものか!!」

「グッ、これ程とは……それでこそガンダム!!」

そして再び剣劇が始まる、最早勝手にやっていると二人を残して全員が移動していくのだった



その翌日、一夏はまたアリーナのピットに居た

所属不明の I S コアの反応が確認された為、何人かで正体確かめに向かうのだ

ピットにあるカタパルトを利用し、何人かの機体が発進していく

一夏の前に居るのは刹那である

「ガンダム・刹那・F F・セイエイ、出る!」
ダブルエフ

何か昨日名乗ってた名前より増えてるが一夏は気にしない、気にするだけ無駄と分かっているからだ

「織斑一夏、行きます!」

カタパルトに到着、そして掛け声と共に発進をしようとするのだが

「違う!織斑・ガンダム・一夏、出る!」

「なあっ……!?!」

「織斑・ガンダム・一夏!」

「出来ねえよお……」

「お前はガンダムになりたくないのか？」

「当たり前だ」

「貴様は歪んでいる!!」

「俺は刹那&コウタお前らとは違うんだ!一緒にするな!!」

◆ 発進するところから既に一夏は疲弊するのだった、主に精神的に

「なんやかんやあったものの無事に全員が発進したところで所属不明機に当たろうとする、だがそれより先に立ちはだかる者が——」

「そうとも、シドウガンダムである!」

「貴様かあああああッ!」

「そうですそうです、刹那・F・セイエイ、会いたかったぞ!」

「違う!ガンダム・刹那・FF・セイエイだ」

「ナンセンスだな!」

「貴様が言うか!」

恒例の流れとなりつつある康太の出現、流石に慣れたもので馬鹿コウタの相手は馬鹿刹那に任せて他の全員は先に進む

一応、一夏だけがこの場に残り念のために待機となった、完全に貧乏クジである

再び剣劇を繰り広げつつ、鏢迫り合いになりながら康太は告げた

「少年!私は見付けた!……」

「何を!?!」

「自らの歪みを断ち切るべく、私は武道を身に付けた。そうとも、武を得た紫藤。つまりはブシドー!」

「何ッ!?!」

「そうとも、ようやく理解した!つまり私は、グラム・エーカーという存在だ!」

勝ち誇るかのように告げる康太、一夏は既に半分以上を聞き流すようにしている

「人種が違う!」

「あつ!」

「貴様は日本人、アメリカ人ではない！」

「オオオオオオオオオオオオツ!!」

何故か康太のスサノオの頭部が砕け散る、そして機体を翻すと捨て台詞を残してそのまま何処かへと去っていく

「覚えておくが良い！」

「とんでもねえ馬鹿だ……」

どうやって收拾つけるんだこれ、というかアイツは何がしたかったんだ、と一夏は思う

だが深く考える必要はないと先に向かっていったメンバーと合流する

そして所属不明機と接触するという時に刹那とそのオペレーターが恋仲のようにも思える会話をしていたのを聞いた後、何処から飛んで来たのか分からない巨大なビームに巻き込まれて一夏は死んだ



「ていう夢を見たんだよ」

「何よそのカオス過ぎる夢……」

いつも通りの日常を過ごす一夏は学園の食堂で朝食を食べていた
そして今朝見た夢の事をたまたま一緒になった鈴に話していたのである

そのあまりに荒唐無稽かつ混沌とした内容に鈴の頬は引きつっていた

特に康太の変貌振りが凄まじい、秘密は多いがそのような狂人とも言える振る舞いはなかったもので、何があればそこまで変化するというのか

「本当、夢で良かったよな」

「そうね。それと、自分が死ぬ夢は縁起が良いみたいだから良かったじゃない」

「そーいや何かそんな話聞いた事があるな」

「何の話をしている？」

と、そこに背後から聞き慣れた声、件の康太の声が聞こえてくる
どうやら康太も朝食をとりに来たようだ

「聞いてくれよ、康太。今朝見た夢なんだけど、康太が仮面を着けててな」

「ほう、それはもしや、このような仮面かな？」

その言葉に一夏は背筋が凍る思いだった、そしてゆっくりと振り返り後ろに居る康太の姿を確認する

そこに居たのはIS学園の制服を陣羽織風に改造し夢で見たものと全く同じ仮面を着けた康太の姿だった

44話 対話

数日振りに部屋に戻ったらそこにはフォン・スパークが居た、そんな状況にあって真っ先に機体を展開しようとしたクロエを手で制する

「止めておけ、クロエ」

「ですが……」

「オレ達と戦うつもりならまた襲撃を掛ければ良い。オレを引っ張り出すしかない状況にすればタイマンでやれるからな。それに、殺すのが目的なら此処に爆弾でも仕掛けとけば良い。そういったやり方も得意だからな」

フォンを見れば余裕綽々といった笑みを崩さないまま動かない、それを確認しつつ続ける

「それにコイツは生身でも強い。この距離だと片方犠牲になって漸く機体展開まで持つていけるか、というところだな」

非武装で此処に居る訳がないからな、拳銃くらいは持つてるだろうし、そもそもガンダムを展開されれば止めるのは難しい

「ハッ、戦力差は分かっているみたいだな」

「天柱でテロリスト取り押さえたり、リジエネ・レジェッタをあつさり押さえ込んだりしたのを知っていればそう判断するさ。その生徒会長も、何で此処に居るのかは知らないがお前が捕らえたんだろう？ ISを展開する暇も与えずに」

「当たり前だ。それにしても監視者の件も知ってるか。やっぱりテメエの正体は——この女は邪魔だな、ちよつと放り出すか」

「なら風呂場に放り込んでくか。こっちも後で聞きたい事があるし」

無駄に防音性は高いからな、風呂場、脱衣場と二つ扉を挟めば余程の大声でもなければ聞かれる事はない

という訳で簀巻きになっている生徒会長は風呂場に放り込んでおいた、もともと芋虫みたいにもがいていたが猿轡を噛まされてあつたので呻き声しか聞こえない

「ようやく本題だな。色々とはあるが、まずは確認だ。お前、この世

界の人間じゃねえな」

「まあな」

一番最初に投げ掛けられた質問は想定内のもの、というよりガンダムを詳細に知っている事からフォンなら簡単に思い至る事だ

「最初はオレ様と同じ世界の未来から来たマイスターだと思った。オレ様とヴェーダが知らない、だがオレ様より後の時代を知ってる人間、その当時のソレスタルビーイングのメンバーだとな」

「確かに、細かな点は知らないが西暦2364年に起きた事までは分かっているさ。正確に知っているのは今のところ2314年までの出来事だけだな」

「やっぱりな。けどそれは真実じゃない。その証拠がニュータイプ、そしてソレスタルビーイングの物とは違う、違い過ぎる技術系統のガンダムの存在だ。こうして別の世界にオレ様が来ている以上、更に別の世界と繋がってねえ保証はない。で、ヴェーダを通じて最終確認してみればお前の持つデータの中に答えはあった。オレ様の世界の他にもガンダムが存在する世界を、アニメ作品として視ていた。一見荒唐無稽な話に見えて、筋は通っている。別の世界があるなら、そういう事もあってもおかしくはないからな」

完全に見抜かれているという事だ、だが色々話していたからそこまで辿り着いている事はまだ想定内ではある

「その通り、オレはガンダムという存在をアニメや漫画、小説といった媒体で見してきた一般人だ。少なくとも、何の因果かこの世界にやってくるまではな」

「そうだろうな。まあこれは確認だ、答えを知れただけで良い。オレ様はお前の持つニュータイプの力に興味があるだけだ。紫藤康太、お前がこの先も戦い続けるって言うならオレ様は何もしねえ。ただ見るだけだ。けど、立ち止まるって言うなら、そんな面白くねえ真似をするなら、その時はオレ様がお前を殺す。その覚悟はあるか？」

フォン・スパークは真っ直ぐにオレを見る、かなり自分本位な事を言っているが、それに対する答えはとうの昔に決まっている

「無論だ。一度立ち止まった後、オレは死んだように生きてきた。今

度は違う、オレだけの夢じゃない。どんな敵が相手だろうが、どんな邪魔が来ようが前に進む。例えその先で死んだとしても、前に向かつて倒れてやるさ。お前に殺されるまでもなく、な」

止められるなら止めてみる、そう意気込みを籠めてフォンへと返すその答えに満足したのかフォンは笑う、その名の通りに

「あげやげやげやげや！それでこそ見る価値がある。なに、気が向いたら手伝ってやるよ。それまでオレ様は世界を見て回る事にする。ああ、それとコイツをくれてやる」

そう言つて手渡されたのは今の時代で使われている記録媒体、USBメモリだった

「これは？」

「ちよいと襲撃掛けたマフィアの連中が持つてたデータだ。見付けたのは偶然だが、お前なら何か知ってるんじゃないやねえか？」

「ふむ。それはそれとして、何故マフィア？」

「単純に金だな。この世界でメシを喰うにも金がいる。マフィアは狙い目だぜ。連中は差し押さえられる事を避ける為に現金や貴金属、宝石、美術品を溜め込んでやがる。おまけに世間様は誰も困らねえから、警察も血眼で探そうとはしてこねえ」

「あー、うん、いざという時はオレもそうするわ」

間接的に人の世に役立つ事をしてるだけに何も言わない、というか資金を奪つてはいないが犯罪組織を潰したオレが言う資格はない

マフィアを襲撃してた理由は分かったからオレは受け取ったメモリをパソコンに接続する

中のファイルを開くとアルファベットが並んでおり、読めない

「……ヴェーダを使って翻訳するか」

「ヴェーダの無駄遣いだな。ソレスタルビーイングの連中が聞いたら泣くぜ？」

「読めなかったら仕方ないだろう。と、早いな、流石は量子コンピューター」

パソコンからISコアに繋いでコアネットワーク経由でヴェーダに翻訳を依頼、どうやら原文はスペイン語だったらしいが、日本語に

訳されている

そしてその最初に大文字でつけられた題名を見る

「強化兵士計画？」

「多かれ少なかれ、この手の研究は何処でもやってるだろうな。このマフィア連中はその研究所と繋がってやがった。根城にしてたスラム街でオークションをやってる。出品されるのは人間だけだな」

「人身売買か。実験台になる人間を売ってるのか、それとも強化兵士とやらを売ってるのか」

「どっちも、らしいぜ」

資料の続きを見てみると強化兵士とやらのスペック表みたいな物があった

同時に施された強化内容も、である

体の各所を機械化したり反乱防止用に特定の化合物を定期的に摂取する必要があるように改造したり、色々だ

とはいえそれは人間としての限界を高める類いの物が大半でガンダムシリーズの強化人間のように脳を弄くったりという内容はあまり見られない、一応は強化兵士という言葉がない訳ではないが肉体の改造も含めて強化人間と一括で呼ばれる事が多い

「どうにもこの世界の技術で作られた存在のようだな。ガンダムで出てくる人工的なニュータイプ再現といった意味の強化人間なんかとはまた別物だ」

「そうか、違ったか。ならばはどうするかはテメエで決めな。放っておくもよし、潰すもよしだ。まあ知ったなら潰すつもりなんだろう、SNARK？」

そこまで知っているか、と思ったがヴェーダにアクセス可能ならその辺りのデータも見られているから納得だ

非人道的な実験、ガンダム世界の技術による物ではないがあの日、実験台となって死んでいった少女達への誓いを守る為にも放っておけないか

「その顔はやる気みたいだな。ならオレ様はそろそろ帰るぜ。あばよ、紫藤康太！」

そう言うとフォンは窓から飛び降りて空中でガンダムを展開、アブルホールを使って空へと飛翔していく

「可変機構が単純とはいえ、生身で搭乗して変形を可能とするか」

そのメカニズムも気になるが今から追い付くのは無理だな

それはそれとして、オレはフォンに渡されたデータを見て、そこに書かれているマフィアの本拠地が記された座標を見る

研究所の方が何処にあるかは分からない、フォンが潰したのはマフィアの持つ支部の一つだったらしい

だからなのか研究所の場所は不明、フォンは興味がないが本拠地なら詳しい情報もあるだろうとこの座標を送ってきたのだろう

そしてその座標が示している場所というのが――

「アメリカか……」

カリフォルニア州オークランド、全米一危険な街とも呼ばれる場所だった



さて、フォンからの情報提供により倒すべき敵の姿が見えたのだが、その前にやるべき事がある

「ふう、ようやく自由になれたわ。まずはお礼を言っておくわね」

そう言つて『感謝』と書かれた扇子を広げて口元を隠してこの学園の生徒会長である更識楯無は笑う

あれだけ無様な姿を晒しておいて格好をつけるのは滑稽を通り越して素直に尊敬する

「で、生徒会長は人の部屋で何を？」

「以前に私の妹を、簪ちゃんを助けてくれたでしょう？今更になつちやっただけ、そのお礼を言いたかったのよ」

これお礼の菓子折ね、といって包装の施された箱を渡してくる、表記から和菓子のようだ

それはクロエが受け取って一先ずは机に置く、簪巻きになっていたのを解放した時からずっとオレは拳銃を突き付けたままだ

「ところでその拳銃、あの男と同じ物よね？何処のメーカーとも違う、ラビットフット社で独自開発した物かしら？」

「性能が良いもので。それこそ、反動がないから無重力空間でも撃てる優れたものです」

オレが構えている拳銃はエウクレイデスに残されていた物、ソレスタルビーイングが使用している拳銃だ

予備がかなりの数あったのと前述の通り性能が良いから乗り換えた物だ、他にもアサルトライフルやスナイパーライフルもあった

そしてそんな銃だからこそフォンも持っていたのだろう、生徒会長が何処も撃たれてない所を見るに見せただけらしいが

「お礼も理由なんでしょうが、不法侵入した理由は別ですよね？」

「そこは驚かせようとしただけよ。さっきまでの格好を見れば分かるでしょう？」

確かにさっきまでの格好は中々に衝撃的だった、一見裸エプロンに見える水着エプロンだったからな

まあシートにくるまれて縛られて簀巻きになってたから、それが見えた途端にクロエが脱衣場まで連れていったからあまり見えてないけど、今はISに量子化しておいたらしい学園の制服姿である

「職業柄警戒しないといけないんですよ。ISを返したのはせめても
の誠意を見せた証なんですけどね」

「まあそうね。じゃあ正直に言うわ。簪ちゃんの件は私個人の更識楯無としての用件ね。大事な妹を助けてくれた事は本当に感謝しているわ。でも、お姉さんにも仕事がある。これは更識としての用件ね。キミが預かっている日本のISコア、それを引き渡して欲しいの」

とはいえ拳銃を突き付けていてもISは返還したので警戒しているというポーズだけだ、学園内で本気で敵対する気はない

ラビットフット社は篠ノ之束という存在が居る事から数多の勢力が接触しようとしてくる

だから日本政府も独自でコンタクトを取ろうとしているのは知っていた、生徒会長はその日本政府側の人間だ

「勿論タダでは言わないけど、持ってるわよね？ヴァルハラが保有していた二機の打鉄のコアを」

「二機？オレが知ってるのは撮影場所を強襲しようとしてきた一機だ

けですよ?」

やはりその質問が来るか、とある程度は予想出来ただけにス
ムーズに返す

「あら、二機であつてるわよ、スナークさん」

「スナーク……ああ、あのニュースに出ていた。そんなテロリストが
オレだと?」

「ええ、私の勘ではキミだと思つてるわ。こう、動きの端々がそう感じ
るのよね」

あの時は正気と言える状態ではなかったとはいえ機動を理由に正
体に行き着くとは思わなかった

そもそもジェガン・サーガの武装と普段使いのジェガンとは意図的
に装備が被らないようにしてきたのだ、同じハンドガンでもマシンピ
ストルとハンドガンといった具合に分けてある、それで見抜くのは余
程の観察眼があるのか、本人の言う通り勘が鋭いのか

「仮に、オレがそのスナークだとしたら?」

「別に私は何もしないわ。他に漏らすつもりもない。あのスナークさ
んのお陰で私がやろうとしていた事が楽になったもの。その上で康
太くんに訊くわね。キミは何者なのかしら?」

「随分と曖昧な質問ですね。日本人で、ラビットフット社のテストパ
イロットですよ」

「そうね。少なくともキミは日本人だと思うわ。でも戸籍は何者かに
偽造された物で、その親族は一人として知れない。その上でデビルガ
ンダムといった機体に精通し、先日イギリスでテロを起こしたテロ
リスト、フォン・スパークと知己の関係でもある。本当の貴方は誰な
のかしら?」

その質問にオレは沈黙する、真実は並行世界から来た人間だ、だが
それを言つて信じると思うか?

とはいえ相手も日本の暗部、オレの戸籍が篠ノ之博士の偽造した物
である事を見抜いていて、それを利用する事が出来る相手だ

「私は確かにIS学園の生徒会長よ。でも日本の暗部である更識の当
主でもあるの。そんな私からすれば正体不明の貴方は警戒しなけれ

ばならない相手なのよ」

「……………」

「他には、貴方の出身となっている施設、紫藤院ね。でも名前が変えられたのは数日前。そこに居る子供達も戸籍を偽造している。ラビツトフット社が絡んでいるのは知っているけど、その子供達は行方不明になっていた子供達と同一人物だと分かったわ。そしてその親族はヴァルハラの関係者。此処まで揃っていてスナークではないというのは無理があるわね」

そこまで言われてオレは降参する、フォン相手なら性格とかを知っているから出来るが、そもそも本職の人間が相手で向こうはこの短時間でどうしても整合性の取れなかった部分を突いて来ている

ため息を一つ吐いて、オレは銃を下ろす

「で、何が知りたいんです?」

「コウタさん、それは……………」

「オレには無理だ。だから余程の情報でなければ素直に話す事にした」

「そう、ありがとう。じゃあ最初の質問に戻るわね。貴方は何者?」

「紫藤康太が本名なのは間違いなく、今の役職はラビツトフット社のテストパイロット。そしてラビツトフット社の裏の部隊とも言うべきSNARK唯一のパイロット、ですね。オレ自身の目的は宇宙開発。そして、人類進化の可能性の模索。SNARKとして動くのは違法な人体実験に対する武力介入、といったところです」

とはいえ並行世界人とは言わない、それはまともに聞けば荒唐無稽な話だから

「成る程、それぞれの理由を教えて貰っても良いかしら?」

「宇宙を目指すのは単に憧れから。人類進化はそもそもオレ自身が変革を始めているらしいですよ。人体実験に関しては義憤から、ですね。ヴァルハラに対する武力介入ですが、奏達に関してはこういう事です」

オレはジェガンのコアを通じてデータを表示していく、それはヴァルハラの手掛を襲撃した時の画像だ

牢獄に囚われた奏達の姿、拠点地下の研究施設、そしてその中にあったD G細胞によりゾンビ兵となった子供達の成れの果ての姿を

「これは……!?!」

「恐らくは会長達も調査したとは思いますが、地下の研究施設に関しては完全に焼き払いました。そして奏達を保護して、紫藤院という孤児院を作りました」

「そうね、確かに報告では何らかの地下施設があったと記されていたわ。そう、人体実験にまで手を出していたのね」

ヴァルハラの中が人体実験をしていたから襲撃した、と取れるように言ったが最初は報復、見付けたのは偶然、その後はオレの暴走なので全て偶然の産物だ

とはいえ勘違いするように誘導するようにはしよう

頭の良い人間なら情報を小出しにして、そこから繋げようとするだろう

少なくとも並行世界人だなんて答えに行き着く事はまともに話していれば有り得ないのだから

「取り敢えずヴァルハラと紫藤院の子供達については分かったわ。それで次はそうね、人類進化って何かしら？普通、そんな事は考えないわよね？貴方が変革しようとしているって言うけど、それも何なのか気になるわ」

「良いですよ。宇宙開発で人類が宇宙に進出したとして、そこは過酷な環境です。そしてそこに住まう人々はそんな極限状態に於いて適応しようとしています。宇宙に適応した人類、それをニュータイプと呼んでいます」

「ニュータイプ、ね。康太くんはそのニュータイプなの？」

「元から素質があったのか、理由は分かりませんがIS学園に来てからは戦闘による極限状態に何度も晒されて生死の境をさ迷いましたからね。まだ完全とは思えませんが高い空間把握能力と、強力な感応波を発する事が出来るようになってきているみたいです」

「にわかには信じがたい話ね」

「篠ノ之博士が研究中ですから詳細はその内論文でも出るんじゃない

ですか？少なくとも、能力の向上は目指しますけどオレはそれだけです」

「それならそれを待つわ。じゃあ次、康太くんの出自についてね。どう過ごして来たのか教えてくれる？例えば住んでいた場所とか、その情報ね」

質問が続き、ある意味で一番の難問ではあるが時間を置いたので出自に関してでっち上げる余裕が出来た

なので此処からが正念場だ

「さあ？」

「さあって、何かあるでしょう？学校とか、その地域の名前とか」

「少なくともこの世界でオレが通っていた学校とかは無いですね」

嘘は言っていない、オレが通っていたのはオレの世界の学校だからだ
例え同じ地域に同じ学校があったとしてもそこに居る人間はオレの事など知らないだろうし、オレが通っていたという記録もないのだから

「通っていた学校がない？」

「というよりもこの世界での記憶は一年あるか無いかですね」

この世界に来てから半年も経ってないから実際にはその半分ではあるが

「目覚めてみればいつの間にかIS起動してそこは見知らぬ土地で偶然に篠ノ之博士に保護されてラビットフット社のテストパイロットに。この世界でオレの一番古いの記憶はそれですよ」

「そう……貴方が人体実験を潰して回るのはその事が関係あるのかしら？」

「嫌悪とかは抱きますけど、それとは別ですね。ニュータイプは死者の念を、残留思念を感じ取る事が出来るんですが、想像出来ますか？暗い地下に押し込められた小さな子供達が泣き叫んで、一緒に耐えてきた仲間が実験でゾンビ兵にされて、その姿を見ながら自分が同じようにゾンビ兵に変わっていく感覚を」

ゾンビ兵やDG細胞に関する資料は生徒会長も見ているのだろう、オレが説明した状況を想像したのか眉をひそめている

「なのでオレは人体実験を行う国、組織、企業、その全てに対して武力による介入を行います。デビルガンダムも、強化人間も、戦いの道具という理由で人が人の命を弄んで良い訳がないんですから」

ガンダム00に於いてソレスタルビーイングが紛争根絶の為に戦おうとした理由が少しは分かった気がする

そんなオレの言葉に生徒会長は考え込むように黙っているが、少し経つと一つ頷く

「一先ずは康太くんの事が分かったわ。そうね、日本国内で動く時だけ事前に教えてくれるなら更識は何もしないわ。その上で利用させて貰うわね」

「良いですよ、秘密にしてくれるなら何でも」

生徒会長がオレの正体をどのように判断したか、与えた情報から恐らくは何処かで人体実験を受けた被験体として見ているだろう

ニュータイプ能力を持つ事、この世界でオレが居たという記録がない事、人体実験を憎悪している事、これらを組み合わせればそう思っても仕方がない

何しろオレは一つも嘘を言っていないのだ、生徒会長が人の嘘を見抜く能力に長けていたとしても、オレが並行世界見抜いていたなら寧ろ驚きだ

尤も、セシリアとかイギリスの件とは矛盾する部分もあるから照らし合わせればバレるんだけどな、どうにもフォンと戦った事は把握していても細かな所までは把握出来ないらしい

「ならば——」

「この辺りが限界ですかね。流石に守秘義務とかもあるので、話せるのは此処までです」

「そうなの？まだ根掘り葉掘り、聞きたい事が一杯あるのに」

「今のはオレの事情ですからね。これ以上踏み込むと会長を殺さないといけなくなります」

「ふふ、一つ教えてあげるけど人間を殺した後処理って結構大変なのよ。完全犯罪がなかなか成り立たないように、何処かでボロが出るわ」

「いえ、先程の会長が簀巻きになつてる写真と、水着エプロンの写真を新聞部に渡して、痴女な生徒会長が夜這い掛けてきたけど撃退したつて言いふらすだけです」

「社会的に殺すつもり!?けど残念ね。記事が出る前に生徒会長権限で新聞部の予算を削ると脅は……交渉すれば良いのよ」

「ならサブプランとして会長の妹さん、更識簪に同様の文面で抗議しておきます」

「それだけはやめて!?!ただでさえギクシャクしてるのにそんな情報渡つたら関係が修復不能になっちゃう!」

どちらかと言えば後者の方が会長へのダメージが大きそうである、いざという時はそのカードを切る事も辞さない

まあその後で会長からの必死のお願いで実行には移さないでおい

た
「では、戸籍の件はお願いします。報酬は打鉄のコア一つ返還出来るように説得しときます」

「分かったわ。因みに回収したコアってどう使ってるのかしら?」

「一つは放置、もう一つは奏の専用機になってますよ。なので返還は一機だけです。それも篠ノ之博士との交渉なので確約は出来ませんが」

「流石に二機の損失は日本としても痛いのだからありがたいわ。でも新規のコアでも良いのよ?」

「テロリストにコアを好き勝手させてた日本の管理体制に問題があるので無理です」

「分かったわ。少なくとも、コアが一つあるか無いかで大きく変わるもの。今日はありがとう、康太くん。戸籍の件はしっかり対処してあげるわ。流石に被験体の子供達の保護をしているのを潰す真似なんて良心的にも堪えるもの」

「オレがやった事ですが、奏達に罪はないですからね」

「ええ、本当に。今日はコアに関する交渉だったけど、今度は更識との取引もお願いしたいところね」

そう言つて生徒会長は部屋から出ようとする

だがそこでオレは会長に伝えるべき事を思い出すのだった

「あ、会長。戸籍なんですけど近々海外の研究所を襲撃する予定があるので増えた時は戸籍お願いします」

「今すぐ詳細を話しなさい知ってる事を洗いざらい一つも余さずに！」

と、まだまだ会長との対話は続くのだった

45話 機体評価試験

フォン・スパークからの情報提供によりアメリカへの出撃が決まった翌日、オレは篠ノ之博士のラボに来ていた

イギリスに行っていた間の報告書を昨夜の内に纏めておいて、その提出と共に今はラボの中に設けられた実験場にフォンから受け取ったガンダムプルトローネを展開し待機している

装備は元から通常のGNビームライフル、GNシールド、GNビームサーベルといった基本的な物しか装備されてない

そんな中で実験場の中には標的となるドローンに照準を合わせ引き金を引いていく

赤い粒子ビームが次々と放たれドローンを貫いていき、近付いてくる物は左手で抜いたビームサーベルで切断する

その際の照準速度や旋回性、機動性といった要素をデータ収集していき、ある程度が終わったところで攻撃を止める

次に無人機のジェガンが出てくるのだが攻撃はしない、今度は防御性能の試験だ

まずはGNシールドを構えてジェガンのビームライフルを受ける、GN粒子を用いて防御力を高めてあるシールドはビームライフルの攻撃にもかなり耐えている

そしてガンダムプルトローネの機能の中でも重要なのがGNフィールドである、以前に大気圏突入の際に使ったとはいえ戦闘でどのくらい使えるかは未知数、球体状のバリアが張られていきそこにジェガンのビームライフルが撃ち込まれる

だがGNフィールドはそのビームを弾いてみせる、その防御力もまたかなりの物だという証明となった

『うん、大体分かったよ。それで、あの機能は使えるの?』

「そう改良されてるみたいですね。行きますよ、高濃度圧縮粒子、全面解放!」

この試験を管制室でチェックしている篠ノ之博士からのオーダーで機体を動かす

たちまちプルトーネの装甲が赤く染まっていく、トランザムシステムの使用だ

全ての性能が三倍に引き上げられるシステム、その力は凄まじくその後のテストは模擬戦相手となったジェガンを圧倒する程の性能を發揮したのだった

◆ 「スゴいねえ、ガンダム！特にトランザムなんか時間制限ありとはいえ紅椿のスペックも超えてたよー！」

「^げ実に恐ろしきはソレスタルビーイングの技術力であろう。よもや表舞台に現れる十五年前にはこのような機体を完成させていたとは……」

GNドライブ搭載型機の圧倒的な性能を知っているだけにテストを見ていた篠ノ之博士とエイフマン教授の内、教授の方が驚愕は大きかったらしい

機体を戻した後でオレも管制室に来ていた、実際にテストパイロットとしての意見を求められたからだ

「あの世界だと、まだフラッグも無い時代ですからね。ユニオンリアルドが最新鋭機だった時代にガンダムが……あの時に武力介入が行われていれば戦力差は更に絶望的だったでしょう」

ただでさえGNドライブ搭載型は二百年は先の技術と称されていたのだ、それに比べれば誤差の範囲かもしれないが少なくともグラハム・スペシャルが可能なフラッグあつてこそスローネに一矢報いる事が出来たのだからその差は大きく思える

「とはいえ今はプルトーネの話だよ。コアから送られたエネルギーを擬似太陽炉でGN粒子に変換して動いてるのは分かったけど、シールドエネルギーといった既存のISの能力はちゃんと備えてたね。とはいえその容量はかなり少ない、完全にGN粒子に依存した構成だったよ」

「うむ、確かに粒子の特性に偏った機体ではある。だがそれだけの価値がある機体だ。シールド以外の自前の装甲でさえGN粒子を通す事で圧倒的な防御性能を發揮している。材質はフラッグ等と同じE

カーボンとはいえその違いは大きな差がある」

篠ノ之博士とエイフマン教授は技術的な観点からプルトーネを評価するのが仕事だ

そしてオレはパイロットとしての目線からの意見を求められる

「こーくんはどう？率直に言っつてジェガンより性能が上だけど、乗り換える？」

「遠慮します。乗って動かして分かったのですが、機動をGNバーニアで行っているので既存の機体のように瞬時加速が使いませんでした。その代わりトランザムシステムがあるのですが、シールドエネルギーの他にも粒子残量も気にかける必要があるのが厄介ですね。何よりも初期型の擬似太陽炉を使っているので粒子ビームに毒性があるのが使いたくない理由ですね。現状では治療法が無いのが一番ネックです」

「毒性かあ。やっぱりそこは改良する必要があるんだよね」

「ですが上手くやればその恩恵は十分だと思えますよ。無害化すれば人類進化の可能性の一つであるイノベーターへの覚醒が促されます。更にイノベーターの脳量子波と合わせツインドライブシステムを搭載出来ればトランザムバーストで純度を高めた高濃度圧縮粒子の精製が可能です。そうすればイノベーター化する可能性も高まり、毒性のあるGN粒子による細胞異常なども治療可能になりますし、何よりも高濃度粒子領域を展開出来れば言葉を交わさずに対話を、例えば外宇宙に出た後で地球外生命体とも意志疎通が可能になります」

「そう、それなんだよね。特に最後のを聞いたらやらない訳にはいかないもん」

「イオリア・シュヘンベルグの目指した物か……ならばGNドライブの改良はわしが担当しよう。元より研究していたものだ。理論も分かる」

その研究だけでトランザムシステムの存在まで辿り着いていたエイフマン教授なら問題ないだろう、篠ノ之博士もそこには異論はないらしい

そして一通りGNドライブとプルトーネの扱いについて話し合い

が終わると次に試験を行う機体についてだ

「こーくんの機体を元のR型と同じ仕様にする事と、一つ機能の追加だよ。これはもうやってあるけど、また実験場の方に行つて実際に見てみようか」

イギリスから帰つて来てから修理を兼ねてジエガンを篠ノ之博士に預けていたが、どうやら改修も行つていたらしい

元からストライカーパックの運用は試験のみであり、今後はまた別の機体を使つてテストを行うらしい

その機体もまた実験場に置いてあるらしいが、まずは蘇つた相棒についてだ

「これは、壮観ですね」

「こーくんが私の予想を超えて成長していったからね。結構大盤振る舞いしたよ」

実験場に並んでいる機体はオレの一機だけではない、その指揮下に入る十二機の無人機も共に並んでいた

まずはオレの乗るジエガンR型、頭部がガンダムヘッドから通常のバイザーになりエコーズジエガンと同じ狙撃用のバイザーが額に備えられている以外は以前と同じだ

小さな違いだが左側頭部にあるバルカンポッドとは別に右側頭部からもアンテナを備えたユニットが増設されてくるくらいか

だが気になるのは後ろに控える機体達だ

「両腰の武装が5連ロケット・パックになってますね。M型ですか？」
「こーくんのR型を一部簡略化してコスト削減と生産性の向上をしたんだ。で、どうせならつて聞いてたM型の仕様に見たんだよ」

その機体が全部で七機居る、主力という事だろうか

「それからエコーズジエガン頭部が二機、それからキャノンガン二機にEWACジエガンですね」

頭部が違う以外は他のM型と同じに見える二機と、キャノンガンと呼ばれるジエガンA2型をベースとする中距離支援用の機体が二機、そして頭部と一体化するような大型のセンサーユニットを搭載した偵察仕様が一機である

「どっちも素体はM型だよ。これにこーくんのR型を加えた十三機一個中隊、全部をこーくんに預けるね」

「これだけの数を、ですか？」

既にフラッグとジェガン・サーガの二機も手持ちにある中で元のジェガンと合わせて追加で十三機とは、少なくとも個人で持つ戦力ではない

これまでも無人機の指揮を執った事はあるが管理は篠ノ之博士がやっていた

「それだけこーくんを信用してるのもあるけど、普段はコアの形で量子化してR型に格納しておけるからね。展開にどうやっても五秒は必要とするからギリギリの戦闘だと展開する隙がないかもしれないけど、コアを経由して十二機分のエネルギーもR型のシールドエネルギーとして利用出来る。これは私が全部のコアを調整して実装した機能だから普通は出来ないんだよ」

「……コレ、単機で国に喧嘩売れますね」

十三機で部隊行動をして、更に隊長機のみでも普通のISの十三機分のエネルギーで行動が可能となる

どっちを相手にするにしても生半可な戦力では相手にならない程の機能が盛り込まれているのが分かる

「まあね。だけど今までと一番の違いは無人機の制御方法だよ。これまでと同じくこーくんの戦闘データを参照するのは同じだけど、R型の右側頭部にアンテナとか増えてるでしょう？あれはサイコミュだよ。とはいっても通信だけの能力だけだね。そしてこーくんの感応波によって無人機と時間差なく通信で繋がっている。この辺りまで説明すれば私が何を目指したか、分かるよね？」

「フラッシュシステム、ですね」

ガンダムXに登場するニュータイプタイプの動かす無人機ビットモバイルスーツ、その制御を行うシステムこそがフラッシュシステムである

それまでのガンダムシリーズでは移動砲台といった感じのビット兵器だったのがモバイルスーツになる、結果としてそれはパイロットであるニュータイプが乗っているのと変わらない動きをする上に一切

の齟齬なく連携してくるのだ、使いこなせるのならファンネルといった兵器よりも有用となる

「そうーどうにもコーくん的能力がサイコミユ兵器を普通の武装と同じくらいには動かせるレベルになったみたいだからね、私なりの解釈で組み上げたシステムを搭載したんだ。あ、アンテナ使えば装備さえすれば普通のビット兵器も使えるよ」

「そうですか、ニュータイプ能力が……」

少なくともオレの意識としては何か変わったとは感じられない、だがデータではそうなったのなら少しは自信を持つて名乗っても良いのかもしれない

それでもアムロ・レイのように奇跡を起こせるかと言われれば全くそんな気配もないのだが

渡された資料を見て改めてシステムを確認すると今までの無人機と同じくオレの戦闘データが入ってるから大まかな指示でもある程度は動いてくれるらしい

なら何が変わったのかと言われれば対応力だろう、それまでに経験のない状況でもオレの反射的な思考も反映して動けるとか

実際に使ってみなければ分からないが、それはこれから行う試験の結果次第だ

「あ、それとそこに置いてあるのは今後のストライカーパックスシステムの試験用の機体だよ。装甲がEカーボン製な以外はコーくんの知ってる通りだと思うから」

と、先に説明されていたテスト用の機体も見ると

真紅の装甲を持ち、前に角が伸びるといふ特徴的なアンテナを備えたガンダムタイプの機体、テストメントである

「特別な機能はないし、本当にテスト用の機体だから此処に置いておくよ。まあ、戦闘が出来ない訳ではないけど核エンジンもVPS装甲もないからコーくんは普段使いはジェガンの方が良いかもね」

デザイン含め割りと好きな機体ではあるのだが扱いが悲しい事になっっていた

専用装備とも言えるデバインストライカーも無いし、実験場の隅

にポツンと置かれているだけなのが哀愁を誘う

いつか宇宙に出た時にP S装甲が出来たら試験機として使おう、そう思いながらオレはジェガンのテストに入るのだった

◆ 流石にジェガンが計十三機ともなると試験を行うには実験場では手狭になってしまう為に特別にI S学園の第六アリーナを使用する事となった

通常の円形のアリーナとは違い特徴的な形をしているタワーを含む広大なアリーナであり、主に高機動訓練、キャノンボール・ファスト等の訓練に使われるアリーナである

夏休みという事もあって人の少ない中で関係者以外の立ち入りを禁止して行われる試験、その準備をしている途中、オレはこの場に居るのがおかしい人物と話していた

「何で此処に居るんですか、痴女会長」

「その呼び方止めてくれないかしら!? コホンツ、私が此処に居るのは学園の生徒会長だからよ。先生方を説得して代わりにアリーナ使用の監督をしているのだからおかしな事ではないでしょう?」

「その説得、何か脅迫めいた物があつたりしません?」

「大丈夫よ。やけに自分が担当するって力説してたちよつと教員資格に怪しい点のある外国籍の教師がしつこく食い下がって来たけど、少しお話ししたら分かってくれたから。それとその人は一身上の都合で来週には故郷に帰るらしいわ」

「確実に外国から派遣されていた工作人員を釣り出して排除したようにしか聞こえないんだよなあ」

「というか実際にその通りなのだろう、フォンに負けて簞巻きになっていた姿しか見てないが暗部としての仕事はちゃんとやってるらしい

暗部の長とか言う割りには何か処女っぽいんだけどなあ

「正直なところ、日本政府も篠ノ之博士と繋がりをもちたいのよ。博士の産み出す技術はとんでもないわ。例えばラボに使用してるっていう核融合炉。それが数基あるだけで日本の消費電力が賄えてしま

う。おまけに石油なんかの化石燃料を一切使用せずにだから、資源の多くを輸入に頼っている日本という国にとっては喉から手が出る程に欲しいのよね」

「分からなくはないですけど、核融合炉に関しては軽々しく扱える代物ではないですからね」

「そうね。特に日本は核アレルギーだから、そうなるわよね」

「いや、あの核融合炉に関してはクリーンですよ。水爆みたいに放射能を出したりしませんから」

「あら、そうなの？」

「爆発させれば流石に放射線は出ますけど、ずっと放出したりはしません。核融合を起こす時に原爆を、プルトニウムなんか使わず、強力なレーザーで着火してますからね。そう言った点を考えればクリーンな核兵器を作れるとも言えますから、技術を応用されて今の核兵器以上に引き金が軽くなればどうなるか、分かりますよね？」

「そう、ね。その辺りの技術的のところは専門外だったわ。発電所を作って、その管理をラビットフット社がやって日本は電力を買う形とかどうかしら？」

「人手がないので無理です」

「人員なら更識から派遣しても良いわよ？」

「そこまでお互いに信用ないですからね。あと他には中東情勢も理由にあるんですよ。仮に日本に核融合炉を設置しても他国が黙ってません。そちらに核融合炉を設置しても、石油の輸出に経済を頼っている中東からの反発は必至です。プラスチックなんかの原料になるとはいえ経済に大打撃が来るのは確実です。宇宙に上がるのに地球に余計な火種を作って足を引っ張られるのは御免なので」

核融合炉を広められない理由は色々だ、そうでなければ多額の報酬と引き換えに設置して資金調達が可能なのだから

「そっちも大変なのね。そういうえば、前に話してた研究所の襲撃はどうなってるのかしら？」

「マフィアの端末をハッキングしましたけど研究所の場所が分かりませんでした。なので明後日開かれるオークションを張って、そこから

尾行しますよ。明日動くのでクロエがその準備をしてくれています」

なのでこうして機体のテストをしているのだ

この一個中隊も持つていくが基本はジェガン・サーガでの行動となる

とはいえ尾行にISを使って米軍に探知されるリスクがあるから研究所の位置を特定するまでは別手段での尾行になるのだが

生身で動く事になるが、そこは今までの訓練で得た能力を信じるしかない

そうこうしている内に機体の方も準備が終わる、オレのジェガンの他に十二機の無人機がサブフライトシステムであるノツセルの後継機でありISサイズで新たに作られたノツセラに二機ずつ乗り込み、オレのジェガンも火力を補うという意味で一機だけ製作されたメガライダーに乗り込む

これらのサポートマシンもISコア十三機分という破格の拡張領域に格納されていた物であり、速やかな部隊を展開を可能とする為の物だ

「よし、と。ロンド・ベル隊、試験開始！」

オレに与えられたジェガン部隊には左肩やシールドにロンド・ベル隊のマークが描かれ、そのまま部隊名もロンド・ベルとなった

とはいえパイロットはオレ一人な辺り、一人軍隊ワンマン・アーミーな訳だが、仮面でも着ければ良いのだろうか？

まあそれは置いておくとして、オレはフラッシュシステムの試験の為にも無人機を引き連れて空へと上がるのだった

◆
アリーナ使用時の監督という名目で第六アリーナに来てラビットフット社の試験に立ち会っていた楯無は地上からアリーナ内を飛行する康太のジェガン部隊を眺めていた

ISを遠距離に速やかに移動させる為のサブフライトシステムは臨海学校の際にラビットフット社がテストを行っていたという情報を得ていた為に驚きはない、より飛行に適した空中バイクといった様相の新型を使用しているが、より適した形へと進化したと捉えるな

らば不思議はない

メガライダーに乗った康太のジエガンを先頭に左右後方へと続く形で編隊を組み一糸乱れず飛行する様子は見事だが機械制御の無人機なら珍しくもない

新型システムの試験、とあつただけに興味は尽きなかっただけに拍子抜けといった感想が出てくる楯無だが、無人機の内二機が見慣れない装備なのに気付く

(あの赤い機体、背中の装備から見ても支援型ね。ラビットフット社の光学兵器って康太くん達が使ってる物は特別火力が高いって有名だけど、どれだけの威力があるのかしら?)

楯無が目をつけたのはキャノンガンだった

とはいえそれも重装甲高火力を追求した支援機として珍しくもない存在であり、部隊行動を行うなら居て当然だと考える、尤も十機以上のISが部隊行動を行っている時点で既におかしいが

やがてサブフライトシステムの方は問題無かったのかジエガンのみで空に留まる

そしてロンド・ベル隊はデータで送られてくる仮想の敵を相手に行動を始めた

データ上の敵機はデビルガンダム軍団を想定しているのだが楯無には見えない、なので端から見ると集団でパントマイムをしているかのような光景に見える

だが自信のISを利用し事細かに分析をしていると康太を中心としている中で気になる動きが見えた

「無人機特有の、指示を出してからのタイムラグが無いわね。コアネットワークを利用していても、スムーズ過ぎる。有人機って言われても納得出来る人間らしきもある。おまけに機体が似通っているから一瞬でも目を離せば康太くんを見失いそうね。無人機の制御システムが新型だったって事なのかしら?」

持ち前の勘の鋭さで観察した内容から予想を立てる楯無、その視線の先で時に味方を紙一重で掠めるような動きをするジエガン部隊を見て改めて敵対など無意味だと悟る

学園最強と同義でもある生徒会長の座に居る彼女も流石に十三機ものISを纏めて相手にする事は不可能であり、更にはこれ以上の部隊を編成する事も可能なのが篠ノ之束なのだ

目の前で行われている事こそニュータイプの方の片鱗なのだが、それを知らない楯無は今後、どうやって信頼関係を築いていくか、更識として思考していくのだった

46話 自由の国

アメリカ西海岸にある代表的な州であるカリフォルニア、海に面しているこの州の海岸沿い、道路が通っている近くの崖に一人の男が居た

全身を黒のパイロットスーツで覆い頭はスモークシールドのされたヘルメットと、一切の露出がないその人物は今しがた沖に一キロ程の位置に停泊している船から海に潜り、潜水服としても使えるパイロットスーツを利用して誰にも見つかる事なく崖下に到着、高さ十メートルはあろうかというその崖を命綱も無しによじ登って来たのだ

道路が近く誰かに見付かる可能性もある中で比較的背の高い草が生い茂っていた場所を選んだその男は姿勢を低く保ったままISのコアネットワークを利用し通信を行った

「此方SNARK、予定地点に到着した」

『予定通りだな、ブランクがあるとは思えん。えっと、この台詞は本当に必要なんでしょうか?』

「その辺りは博士の悪ふざけだろうな。オレでも知ってる有名ゲームの台詞だった筈だ」

無事に崖を登りきった後で連絡する際の符丁としてゲームの台詞を使用したのは彼と通信を行う彼女の上司でもある一人の天災の悪ノリだった

しかし海から崖を伝って潜入する、ISに頼らない動きを行っているのは米軍による探知を避ける為だ

そしてそんな無茶な入国を果たしたのは今回の任務が明らかでない法行為であると理解しているからである、何処に違法な研究所を破壊しに来たと申告して入国する者が居るというのか、男は正規の手続きを踏まない不法入国という手段で自由の国アメリカの地を踏んでいた

『では、気を取り直して。今回の目標は第一に研究所の所在の確認。第二に研究所への強襲になります。米軍へ察知される事を避ける為

に第二段階までISの使用は厳禁。第二段階完了後は被験者を確保していた場合はその護送を行います。その後、第三段階で離脱になります。予想では研究所に車両があると考えられています。ですから被験者を保護する場合はその確保も忘れないで下さい』

「ああ、分かっている。移動中もずっと頭の中に叩き込んでいたからな」
『私は今回ノッセルからサポートのみになりますので、どうかお気を付けて、コウタさん』

「了解した。SNARK、作戦行動に入る」

◆ そう言ってSNARK、紫藤康太は行動を開始した

上陸地点から移動した康太は初めの内はISが使用出来ない為に足として用意されたバイクを拡張領域より取り出す

その際に周囲から見えないように隠れ、タイミングを見計らってバイクを押ししていく

崖の方は特に柵があったりする訳ではないが海が一望出来る高さはある、なので傍目から見れば海を眺める為に道を逸れていたように見えるだろう

そして道路の端に着いたところでエンジンを吹かして跨がる、カワサキ製ニンジャH2、それが今回の足として確保されたバイクである
日本ではレース専用車のみで市販モデルは正規で販売していない車種であり入手には海外から逆輸入する必要があるそんなバイクが選ばれたのは性能の高さからである

通常はリミッターが掛かっているもののその最高速は優に時速300kmを超える、そして当然のようにリミッターは外してあった
流石に目立たない為にそのような速度を出す事はないが康太は慣れた様子でバイクを操作して道路を走る

当然ながら本人はアメリカどころか運転免許を持たない為に無免許運転になるのだが不法入国の時点で今更である、そんな康太が自然な手付きでバイクを動かせるのは以前からISが展開不能な場合の逃走手段として叩き込まれたからであり、イギリスへの教導の際にも使用したシミュレータの導入によりその技量は主に訓練中に悪ノリ

して難易度を上げまくった何処ぞの天災兎のせいで更に高まっていた

他にも車くらいは動かせるようになっていたのだが今は関係ないので置いておく、そして機動性が大事という事もバイクが選ばれた理由である

康太はバイクに乗って道なりに北上していく、それから一時間程度走っていると大都市の姿が見えてくる、アメリカ西海岸でも随一の都市、サンフランシスコである

街中に入った康太もその都市の華やかさに思わず目移りする、急な坂道やそこを走る路面電車といった風景は観光地としても有名であり、海に目を向ければサンフランシスコ湾に有名な刑務所のあるアルカトラズ島が見える事だろう

任務でなければ観光で来たかった、事故を起こさない程度に周囲の様子を眺めた康太はそう感想を漏らしながら目的地へと向かう

そしてサンフランシスコ・オークランド・ベイブリッジを渡り、アメリカで最も危険な街とも呼ばれるオークランドに足を踏み入れたのだった

とは言っても直ぐにスラム街が広がっている、という訳ではない

此処は海運で重要な役割を果たす場所でもあり昼間はまだ比較的安全である、夜や路地裏といった場所に近付かなければ無事で済む事も多い

しかし一番治安が悪化しているウエスト・オークランドでは現在頻繁にマフィア同士の抗争が行われている

1960年代から悪化し始めた治安は近年は改善傾向にあった、だがとある事件を切っ掛けに再び治安が悪化する事となったのである

それこそが『白騎士事件』、ISが絶対の兵器として君臨する事になる出来事だ

直接的に影響があった訳ではない、だがISの兵器としての有用性を世界に知らしめたその影響は世界を変えるには十分過ぎる出来事だった

ISの存在により増長した女尊男卑の流れ、過激化する女性権利団

体の増加、そういった社会の流れからやがて企業の中に『男だから』という理由で解雇するということ例が現れる

当然ながら抗議しても聞き入れられない、そして数が多くなると政府が対応しようとも浸透していた女性権利団体の手の者が妨害を行い対策が遅れる

働ける人材を手放した企業は業績が悪化、それに対して更に男性社員のリストラを行うという動きが全てではないが少なくない数、起きたのだ

そうして理不尽な失業から薬物に手を出す者が増加した、その市場に目を付けたマフィアは薬物の流通量を増やす

多額の利益が見込める状況、そしてオークランドは海運の要とも言える土地である、大量の薬物を密輸するのに適していたし、ISの登場以前から警察も夜間のパトロールは躊躇うような土地だった為に薬物の売買で都合が良かったのもある

結果、マフィア達の間でオークランドという土地の価値があがり利益を独占しようと抗争も激化し治安が急速に悪化した

加えてISの台頭により通常兵器の軍縮も行われる事となる、それによりリストラされた元軍人達が溢れる事となり、彼等もまた薬物に溺れたり、中にはマフィアの武力要員として雇われたりする者が一定数現れる事になる

マフィアに雇われた者達が訓練を行う事で素人だったマフィアの武力要員は高度に組織化され、更には軍縮の流れで廃棄される筈だった武器が横流しされ、警察の手に負えなくなる

しかし組織化された事で理性的な行動が出来るようになったお陰で無闇に民間人を巻き込むような事は起きなかった、勢力を拡大した事で軍隊が派遣されるのを恐れたマフィア達の暗黙の了解として広まっていたからだ

その間に各マフィアは政府の要人とも独自に繋がりを持つようになる、そうしてマフィア達は余程の真似をしなければ手出しされる事のない地位を手に入れた

後は余計な同業者を排除すれば栄華は約束されたも同然、そう確信

出来る状況なだけに複数の勢力が入り乱れたこの地は規模こそ大きくはないが銃声が途絶える日はないのである

「これも女尊男卑の弊害か……」

メインストリートは特に問題ないように見えて歩道を見れば一人か二人は地面に転がったり壁に凭れかかって無気力そうにしている者達の姿が見えていた

先程まで見ていたサンフランシスコとたった13km程しか離れていたにも関わらず対岸のそんな有り様を眺めつつ康太は小さく呟く

目的地へ向けてバイクを進めメインストリートから離れていく程にそのような光景は増えていく、中には薄汚れた服を着た子供達の姿もある

ここ数年で急激に増えた、生まれた子供が男だったからと、女児であつてもIS適性が低いからと親から捨てられた子供達

救いたいと康太が願つてもその数は膨大だ、故に康太では救えない、なら初めから手を差し伸べたりしない

そこまで考えて康太は自嘲する、それでも被験者となっている子供達は助けるのか、彼等もまた恵まれない子供達じゃないのか、と

「結局は自分の為のエゴだな」

そもそもが偽善だと分かっている、そんな事をして世界が変わりはしないと

この土地にも残留思念は残っており康太はそれを感じている、以前のように呑まれる事はないがその訴えは聞こえている

薬物の使いすぎで死んだ者、抗争で死んだ者、生き延びれなかった子供達、様々な者達の声が聞こえるが最終的には女尊男卑に対する恨み言に帰結する、ISさえ生まれなければこんな事にはならなかったと言っていた

「世界を変えたいか。ソレスタルビーイングではないが、確かにこれは変えたいと願つても仕方ないな」

フォン・スパークがヴェーダからの情報のみでなく己の目で世界を見て回る事に拘った理由も康太には理解出来ていた、これは直に見な

ければ分からない事だと

しかし康太はそこで思考を切り替える、予定していた地点に到着したからである

考え込む事は止めて任務に集中する、康太は建物と建物の間にはバイクを進める

その間隔は狭くバイクがギリギリ入る程度しかない、そこを中頃まで進んでから一度バイクを量子化しようとし、子供が数人居る事に気付く

流石に目の前でバイクを量子化すれば怪しまれる、それがIS絡みだと気付かれると面倒な事になる、だから穏便に追い払おうとした時に背後から近寄ってくる足跡に気付く

「へ、へへ、随分高そうなバイクに乗ってるじゃねえか。それをこんな路地に持つてきてよ。俺が何を言いたいか、分かるよなあ？」

康太が振り返れば男が手にあまり整備された様子のない拳銃を持って立っており、康太に英語で話し掛けてくる

多くの国から留学生がやって来るIS学園に在籍しているとはいえず学園が日本にある事から日本語を使っており、その関係でISパイロットの間では日本語が共用語となっている

その為に先日のイギリスでの教導も康太は日本語で話していた、そんな彼に英語で語り掛けても意味は通じない

「Get out of my sight. And don't show y

——事はなくアメリカ英語とイギリス英語の中間の辺りの発音をするカナダ訛りの英語で丁寧に答えた、この男、実は話せるのである

対する男は激昂し持つていた拳銃で康太を撃とうとする、どうせ殺しても此処では珍しい事ではない、血を洗い流してからバイクを売り捌けば良い、薬物で目の焦点がやや定まらない状態で理性的な判断があまり出来なくなった男はそう考えていた

狭い路地裏で響く銃声、だが撃たれたのは銃を持つていた筈の男だ、その拳銃を握っていた手の方の肩を撃ち抜かれている

「ぐ、ぎ、ああああッ!？」

「何の備えもしない訳がないだろう、間抜けめ。これ以上オレの銃の機嫌が悪くならない内に消えるんだな」

相手が銃を向けるよりも早くホルスターから抜いた銃を構える康太、今回の任務に限りエウクレイデスにあったソレスタルビーイングのパイロットスーツならば撃たれても特に問題はないのだが、わざわざ撃たれてやる必要もないので早撃ちで倒したのだ

この場で殺しても誰も気に留めない、それは男に対しても同じであり撃たれた肩を押さえて足を纏れさせながら逃げていく

それから康太が視線を正面に戻すと先程の子供達は路地の向こうから此方を覗いており、康太が視線を向けると素早く逃げていく

そんな子供達の手にも様々なナイフが握られていたのを見た康太は深いため息を吐いた

「全く、嫌な世界だ……」

だが結果として目撃者は居なくなつたのだ、康太はバイクを量子化し任務を続けるのだった



「此方SNARK、第一段階の目的地に到着。偵察行動を開始する」

『了解です。ISの一部使用を許可します』

「了解」

建物と建物の間で手足を伸ばして体を支えながら屋上に登った康太はそこでノツセルで待機しているクロエに状況を報告した

そのクロエから許可を得た事で康太はISを部分展開する、今回はセンサーユニットを装備するEWACジェガンの腕である

そんなセンサーユニットを向けている先はメインストリートに近い位置にある大きめのレストラン、その裏口だ

一見すると何の変哲もないように見えて経営しているのは今回の目標である研究所と繋がっているマフィアであり、その地下で人身売買のオークションが行われるのである

商品の搬入計画を手に入れていたことから時間にして今から三十分程で到着するのは分かっている、多少の差を考えて早めに到着し見張っているのだ

距離にして1km程は離れているがISの、それも索敵に特化したEWACジエガンのセンサー系であれば目と鼻の先である

そうして暫く待機していると一台の大型トレーラーが停車した荷台には運送会社のロゴが描かれ、運ばれていく荷物も野菜などの絵が入った大きめの段ボール箱であり、一見レストランで使う食材を運んでいるかのように思える

だがセンサーユニットはその中の生体反応をしつかりと捉えていた上に、その反応を解析すると体の中に様々な機械が埋め込まれている人間の少女だと判明する

「ビンゴだ。あのトレーラーをマークしてくれ」

『はい。街中の監視カメラや人工衛星にアクセス、進行ルートを押さえます』

ヴェーダの演算、情報処理能力を利用してネットワークに繋がっている監視カメラ等からあのトレーラーが来た場所を探る

とはいえ完全ではなく、監視カメラの無い場所や人工衛星が通っていない場所までは終えない、運が良ければ最後まで追えるが、今回は追えなかったらしい

『駄目です、ルーカスバレー保護区の辺りで足取りが消えました』

『そうか。まあ地域を絞れた辺りで十分な収穫か。最悪、EWACジエガンで探査すれば見付けられるだろう』

少なくとも広いアメリカの中でそこまで割り出せたのは幸運である、時間さえ掛ければ問題ないと康太は判断する

『これからどうしますか？』

「引き続きトレーラーの位置は追ってくれ。オレは連中に仕掛ける」

『大丈夫ですか？』
「一人だけだが被験者を見付けたんだ。確保出来るならしておきたい」

そう言うと康太は二つのコンテナを拡張領域から取り出して担ぎ、建物の屋上を駆け抜けた

◆
康太達が見張っていたレストランの裏口、食材の搬入口としても使

われる大きめの出入口の建物側では四人の男達が警備についていた

男達は手にM4A1カービンライフルを持っており幾ら治安が悪化した場所にあるとはいえレストランの警備にしては過剰な装備である、その為に表向きは一般のレストランを装っている事から怪しまれない様に建物内で待機しているのだ

とはいえこのレストランにこの街でも大きめのマフィアのボスが入りしているのは周知の事実となっていた

レストランとマフィアの繋がりが分からなくともマフィアのボスのお気に入りの店、そう判断されるだけで強盗の類いは狙うのを避ける

逆にそのボスを狙う敵対する組織が襲撃してくる事もあるがその際は直属かつ精鋭の護衛が片付ける、どちらにしろ男達の出番は殆んどない

なので今も気を抜いて雑談に興じている、出番があるとすれば無知な間抜けの強盗が来た時くらいで、その時は米軍が廃棄した物を横流しの武器と防弾チョッキで出て蜂の巣にすれば良い、それで金も女も、そして薬も手に入る楽な仕事だ

だから彼等は初め気付かなかった、その裏口から隠れる様子もなく堂々と、まるでそれが当然、自分も関係者だと言うように通り抜けようとする康太の姿に

スモークシールドのフルフェイスのヘルメットで見慣れない格好に、背中に見たこともない型だがライフルを背負って右腰の辺りにもサブマシンガンを携えていてまず通してはいけない人間だ

だが堂々とし過ぎて実は連絡を見逃してただけで来客の予定があったのではないかと他の仲間達と顔を見合わせる、そして誰もが首を横に振ると大慌てで手に持っていたカービンライフルを突き付ける

「お、お前ッ！何も——」

一番近くに居た男がヘルメットの部分に銃口を向ける、だが康太はその銃口を左手で下から押し上げると男の懐に飛び込み右掌で男の顎を打ち据え、次の瞬間には両手をその頭に回して首を振り折る

「野郎ッ！」

仲間が殺された、それを理解した他の三人はカービンライフルをフルオートで発砲するが康太は今殺したばかりの男を楯にする、防弾チョッキと死体に阻まれた銃弾は康太に当たらず防がれる

そして男達が弾切れになった瞬間ホルスターから拳銃を抜き素早く男達の眉間に銃弾を叩き込む

幾ら防弾チョッキを着ていようと頭は剥き出しである為に意味はない、崩れ落ちていく男達を尻目に康太は先に進む

ふと監視カメラを見つけたが直ぐに視線を戻す、その辺りのセキュリティは既にネットワークから侵入したクロエにより掌握されているからである

康太は音を立てないように進む、目的の被験者が居る場所は監視カメラのログから割り出している為にその動きに迷いはない、ヘルメット内で身に付けている青いバイザー状のディスプレイにマップも表示されているから尚更だ

それに加えて康太には絶対的なアドバンテージもある

『通路先より三人、武装は何れもサブマシンガンです。少し前の通路に』

「了解」

掌握したセキュリティの監視カメラの映像から敵の動きを把握し、電子ロックの扉であればクロエが解除する

セキュリティを掌握しても先程の男達が派手に銃声を響かせたお陰で他のマフィアの構成員も何か起きていたのを察知していた

連絡がないのと、セキュリティが機能していない為に直接確認に向かった者達が近付いてくるのを事前に伝えられた康太は少し戻りに裏口に続く通路とは別の通路に隠れる

『3、2、1、今です』

そしてそれに気付かずに通り過ぎていく構成員達、それらが通路を通り過ぎた事をクロエが康太に教えたと康太は陰から飛び出して構成員達を背後からサブマシンガンで銃撃する

その奇襲に対応出来なかった三人の構成員はそのまま通路に倒れ

伏す、被験者を回収した後で退路に立ち塞がる事になるから予め排除されたのだ

それから二度同じように構成員を排除した康太は被験者の居る場所まで辿り着く、他とは違い此処だけ電子的なロックの掛けられた扉だった為に康太が近付くとクロエが解除して扉が横にスライドする

康太がその中に入ると拘束衣に包まれ、大きめの機械の首輪を嵌められた少女が更にベルト付きの椅子に拘束されていた

「目標を発見。これより確保する」

『映像でも確認しました。ですが彼女の首輪は恐らく発信器などが仕掛けられていると思います。先に解除しましょう』

「分かった」

バイザー状のディスプレイに備えた小型カメラからの映像を確認したクロエからのアドバイスで首輪の解除を試みる康太

その為に少女に近付くと当然ながら少女は抵抗しようとするが拘束されている為にモゾモゾと身動きする事しか出来ない

そして康太も言葉で説明するよりは早いと何も言わずにUSBメモリのような装置を取り出すと機械の首輪の端子部分に近付ける

すると装置の方から端子の規格に形式を合わせ接続される、それから一秒も経たない内に首輪が外れて地面に落ちる

それからナイフを抜き周囲のベルトを切断していく、拘束をある程度解かれた少女は自由になった両手で舌を噛み切って自殺する事を防ぐ為に着けられていたマスクを外すと多少の警戒を滲ませながらも康太に問いかける

「あなたあ、誰え？」

多少間延びした独特な口調で話す少女、少なくとも被験者という事は戦闘用に鍛えたり改造されたりしていると思うのだが、どちらかと言うとおっとりした様子の彼女に康太は少しばかり驚きつつも手短かに答える

「オレは……今はSNARKと名乗っておこう。少なくとも君と戦うつもりはない。余計なお世話かもしれないが、助けに来た」

「助けにいい？」

「そうだ。人体実験を行う研究所を破壊したり、君のような被験者を保護したりしている」

「本当にいい？」

「そこは簡単には信用出来ないよな。君が良ければ一緒に此処から出よう。強制はしないが、どうする？」

「行くよお。けどお、ちよつと聞いても良いい？」

「何だ？」

「わたしを連れ出した後お、研究所には行くのお？」

「ああ、これから正確な位置を割り出して襲撃するつもりだ」

「そっかあ。じゃあねえ、その正確な位置を教えてあげるからあ、わたしの友達も助けてくれるう？」

「友達？その子も被験者なのか？」

「ううん、その子は研究者だよお。でも無理矢理連れて来られたらしくてえ、いっつもわたし達にぐめんない、ぐめんないって言ったのお」

「成る程……その子の特徴は？」

「ミネツサちゃんって言ってえ、一人だけ子供の研究者だから直ぐに分かると思うよお」

「分かった、ミネツサだな」

「うん、お願いねえ。それとお、他の研究員はみーんな殺してねえ。嫌がるわたし達を見て面白そうに笑ってたしい、特にわたしの事をイヤらしい目で見ってたあ、所長とかいう人は絶対の絶対ねえ」

「お、おう……」

元より研究データ含めて目撃者は保護対象以外は全員排除するつもりだった康太だが少女の念の押しように少しだけ気圧された

「とはいえ取引成立だな」

「うん。あ、わたしはリアナだよお、よろしくう」

だが取引は成立した、互いに合意した以上はこの場に留まる必要もない

だが康太はライフルを背中から手に持つと部屋の出入り口に向け

て構え、扉が開くと同時に突入しようとしてきた男達に銃弾を浴びせていく

「まずは此処から脱出だな」

「そうだねえ。武器拾ったからあ、わたしも戦うよお」

「使えるのか？」

「バツチリい」

敵の持っていたサブマシンガン、MP7を拾い康太と同じようにファイアの構成員達を的確に撃ち倒していくリリアナ

その様子に康太は感心し、強化兵士として改造されたのは伊達ではないかと認識を改めた

そしてそのままリリアナと共に敵を薙ぎ払いながら康太は地上へと駆け抜けていくのだった

47話 研究所強襲

レストラン地下から抜け出し、バイクで道路を駆け抜け、意外と対応が早かった追っ手の車が三台程来て、防弾にもなっていないフロントガラスをライフルで破り運転手を仕留めて追っ手を撒いた後、康太達は一度移動拠点であるノツセルに帰還していた

といってもISを展開した訳ではなくクロエがノツセルを動かして崖下に来たところに康太達が崖を伝って降りてきたのだ

それからはまた一度沖に戻り、その中で改めた自己紹介という形となった

「改めて、オレはSNARKこと紫藤康太だ。一先ずは信じてくれた事、感謝する」

「クロエ・クロニクルと申します。今回はコウタさんのサポートをしていました」

「わたしはリリアナだよ。こつちこそ助けてくれてありがとうねえ」

「色々と聞きたい事はあるが……まずは着替えるか。いつまでも拘束衣のままじゃあ大変だろう？」

「幾つかのサイズの服もありますから大丈夫ですよ。拘束衣は脱ぎにくいと思いますので私もお手伝いします」

そう言ってクロエはリリアナを連れて空いている部屋に入っていく

その間に康太は使用した弾薬の補充を済ませていた、とはいえ使った量はそこまで多くないので直ぐに終わる

次の戦闘では使用する場面があるか分からないが自らの生命線である武器の扱いが雑では赦されない、時間があるならと簡単に点検整備も行いつつ過ごしていると部屋からクロエ達が出てくる

「まともな服なんだか久しぶりだよ。なんだか変な感じい」

そう感想を述べるリリアナの格好は白い無地のTシャツにカーゴパンツというラフな格好である

そしてクロエは着替えたりしていないのだが、康太にも目に見えて

落ち込んでいるのが分かった、その原因も

「この歳であの大きさだなんて……私もあのくらいのサイズになるのは分かってますけど、それでも……」

クロエが自分の胸を押さえながらそう呟いている、そして何の事か分かってなさそうなりリアナだが、その胸には自己主張の激しい二つの膨らみがある

リアナの体格は小柄な方であるがその部分だけが歳不相応とも言える状態に研究所の所長がリアナにイヤらしい視線を向けていたと言っていた理由に康太は合点がいく

そして目に見えている地雷を踏みに行くほど馬鹿ではない為話題を逸らす

「着替えたか。早速で悪いが研究所の位置を頼む」

「良いよお。それじゃあ空から見た写真ってあるかなあ？」

「これで良いか？ルーカスバレー保護区の辺りで足取りが途絶えたのは分かっているんだが」

リアナからの要求にノッセル内に作戦会議用という事で備えたモニター機能の台にルーカスバレー保護区周辺の航空写真を表示する康太、それを眺めるとリアナは一点を指差した

「多分ここで合ってるよお。前にヘリコプターで運ばれた時、こんな感じだったからあ」

「曖昧だな……けど、闇雲に探すよりは良いか。分かった、信じる」

「うん。それとお、ミネツサちゃんの事もよろしくねえ」

「分かった。最優先で保護するでしょう」

「出来なかつたらあ、わたしも本気で怒っちゃうかもだからあ、頑張つてねえ」

「ああ。そういえば、他に被験者の仲間とか居ないのか？同じ時期に実験をされていた奴とか」

「もう居ないよお。みんな死んじやったからあ」

「そうか……悪い事を聞いたな」

実験に耐えられずに死亡した、康太はリアナの言葉からそう判断したが気にした様子もなくリアナは驚愕する内容を口にする

「だってえ、みーんなわたしが殺しちやっただからあ」

「……何だって？」

「最後の試験でそれまで残ってたみんなで殺し合ったのお。時間内に一人だけになれなかったら毒ガスでみーんな死んじゃうって言われたからねえ」

「それは……」

「悲しかったけどお、みーんな死んじゃうよりは一人でも生き残った方が良いよねえ。それでえ、わたしも死にたくなかったからあ、みーんな殺しちやっただあ」

それはまるで蠱毒のような内容であり、それをやって笑ってられるリリアナの異質さを物語っていた

「そうしないと生き残れないならやるよお。だってスラムだとずっとそうやって生きてきたからねえ」

「そうか……」

そもそも生まれ育った環境が違う、その為に形成された常識や倫理観に大きな隔たりがある、それを実感した康太はそこまでやる必要がある研究所に対して怒る事でその気持ちを誤魔化し、再び出撃するのだった



強化兵士を生み出している研究所で一人の少女が頭を抱えて自分のデスクに突っ伏していた

何もかもが嫌になる、それでも耳を塞ごうとも同じ研究所で働いている研究員達の話し声は聞こえてくる

「今日出荷されたのってL57だったか？」

「L57？ああ、あのやたら胸のデカかった実験体か。そうだぞ」

「そうか。実験の時、ちよつと触るの楽しみだったのにな」

「お前、そんな事してたのか？所長にバレたら怒られるぞ、真面目にやれって」

「その所長だってそういう目で見てたんだから良いだろう別に。それより、次の出荷予定の製品はどんな仕上がりなんだ？」

「まだ数が揃ってないから最終試験は先だろうな。けどそれなりの仕

上がりにはなってきた。データの方も期待出来るな」

そう言つて笑い合う研究員達、そんな彼等の会話を耳にしながら少女、ミネツサ・トムソンは嫌悪していた

(イカれてる、コイツら絶対にイカれてるわ!)

ミネツサは今年で十五歳になった、その歳で大学を卒業し機械工学や生体工学、脳科学といった分野を博士号を取得している、所謂天才というものであった

だが大学を卒業した後は散々であった、何処の研究室もミネツサを引き取ろうとはせず、腫れ物扱いしていた

なのでミネツサの実績は全て単独でのものだ、それだけの頭脳があったものの、逆にそれが災いした

研究者達の間で年若い天才というのは忌避されるようになっていたのだ、その原因は稀代の天才にして天災、篠ノ之束という存在にある

ISという存在を独力で造り上げた能力は評価されている、だがその能力を評価させる為に『白騎士事件』を引き起こした点は当然ながらそれ以上に問題視されているのだ

それから年若い天才は危険だと見なされる傾向が強くなった、ミネツサはそんな風潮の犠牲者だ

それでも論文と、自らの修めた学問の全てを注ぎ込みミネツサはある発明をした、それらが博士号取得の理由となるのだが、それらは設計だけで止まっていた

ミネツサが発明したのは義手である、しかし従来の物と違い完全に生身の腕と変わらない程の使い心地となっている

IS技術の応用により脳から送られる電気信号のパターンを完全に解析、それらを送る為に義手と人間の神経を接続し、更に生身の腕と同じく動きを可能とした義手本体により使用者は生身と変わらない感覚で義手を動かせるようになるのだ

しかしその義手の設計を発表しても何処の研究室も取り合わなかった、その為にミネツサは予算も得られず設計だけで実際に義手の開発が出来た訳ではない

試作も出来ていない為に設計が良く見えても机上の空論、おまけに使用している技術は高い物が必要とされコストも嵩むとなれば企業も二の足を踏む

結果として彼女の研究は誰にも評価される事なく埋もれる事となるのだった

そしてそんな彼女に声を掛けたのが今の彼女が居る研究所である
その義手の技術は素晴らしいと、誰にも認めて貰えなかった中で声を掛けられた事で誘いに彼女は乗った、乗ってしまった

それが彼女の望む結果とかけ離れた場所であるとも知らずに

「とはいえ、L57が出荷されたのは惜しいな。いや胸とかいう意味ではなく、アレのデータはかなり興味深かっただろう?」

「そうだな。手足を改造する時に麻酔無しで手足切り落としても泣き言一つ溢さなかった。加えて戦闘能力も高い。これまでで最高傑作と言える仕上がりだったからな」

「だから出来るなら手元に置いておきたかったのに、上が早く成果を見せろとうるさいからな」

「全くだ。予算は潤沢だが、それさえなければ此処は良い職場だ」

訪れてみれば行っている事は子供を何処かからか調達してきて、その手足を切り落として義手義足に付け替えて生身の人間を凌駕した身体能力の兵士を生み出す事だった

そもそもミネツサがこの道に進んだのは歳を経るにつれて足腰の痛みに苦しんでいた祖母がまた趣味の登山を問題なく行えるようにという願いを込めてのものだった

残念ながら祖母は五十代という比較的若い時期に癌になっていた事もあり既に亡くなってしまったものの、そこから手足を失った人の為にという目標に切り替えたのだ

だが研究所はそれを兵器としての能力に転用した、子供の身でも常人を遥かに超える膂力が出せるなら被弾面積の縮小や暗殺時などに相手に警戒を解かせる外見、成熟していない常識、何より今の世界では実験体はスラムに幾らでも居るなど、様々な要素から子供が都合が良いとされた

手足を失った人々の為にと開発した医療用の義体が、自分よりも幼い子供達の健全な手足を切り落として出力の上げられた戦闘用の義体に取り替えられていく、それはミネツサの精神に大きな影響を与えるには十分過ぎる事だった

(殺す、この研究所に居る狂人共は全員殺す。 例え、露見したとしても一人でも多く道連れにして殺す)

こんな研究所など存在してはならない、その想いでミネツサは研究所の食べ物や飲み物に毒を盛ろうと画策していた

幸いにもその材料はある、遅効性の毒になる化合物を調査して食堂で使われる材料に混ぜれば良い、その為の隙を探っているところだった

子供を実験体にする事に何の忌避感も抱かないどころか切り刻んだ時の泣き叫ぶ反応を楽しんですらいる狂人共を排除する為にミネツサは計画を練る

だがその時、研究所に大きな振動が広がる、アメリカでは地震が起きる事など滅多になく、そして連続して響く中に僅かな爆発音も聞こえて来ていた事から自然に起きる事ではないと理解する

◆ ミネツサが手を下すまでもなくこの日、死神が訪れるのだった

リリアナからの情報通りの座標で空から見ただけでは分からないように偽装された明らかに人工的な扉を見付けた康太はトレーラーが数台は並んでも余裕がありそうな扉にジェガン・サーガのビームアサルトカービンで穴を空けた後、そこに腰のコンテナから取り出したハンドグレネードを設置して抉じ開けるという方法で研究所内部に侵入していた

それと同時に基地周辺にジャミング装置、散布した後で暫く滞留するミノフスキー粒子よりは滞留しないという理由でGNコンデンサーに散布装置を付けただけの簡易的な装置によるジャミングを行っていた

おまけにコンデンサー内部のGN粒子を使い切れば自爆するようになっていたので回収の必要もなかった、構造も単純でありジャミン

グ目的なので初期型擬似太陽炉のGN粒子でも問題ないのである

そうして無線で増援が呼ばれる事を防いだ康太は施設内部を進む、途中で見付けた端末にリリアナの首輪を外した際に使用した装置、コアネットワーク経由でヴェーダに接続する為のハブ機能を持たせた通信機により量子コンピュータからのハッキングでそのセキュリティも奪っている為に行動も早い

更には隔壁を降ろす事で研究所の人間が移動する事も防いでいた、彼等が叩いている隔壁が開いた時は康太が移動する時であり、彼等が死ぬ時だ

研究データもハッキングの際に吸い上げられており、その実験内容、子供達を兵器とする人体実験を行い最終試験と呼ばれる子供達同士を殺し合わせる性能評価の話も真実だと知った康太の手には一切の加減がない

『コウタさん、データの中にリリアナさん達に必要な化合物のデータがありました。成分の他に製法も一緒です』

「そうか、一先ずは安心だな。ミネツサという研究者の方は何か分かったか?」

『現在地より一つエリアを隔てた先です。直進すれば到着します』
「了解」

隔壁を通る度に現れる警備兵は康太により排除されていく

そんな中で最優先に確保する相手の所在を掴んだ康太はそのまま隔壁を通り抜けて進んでいく

『それと被験者達ですが、首輪には発信器の他に遠隔操作で電流や爆破する機能が盛り込まれていました。今は解除してあります。それと独房の扉も開いているので既に脱走が始まっています』

「そうか。人数は?」

『今の研究所内には五人の被験者が居ます。自由になった途端、警備兵を殴り倒して武装を奪ってますね。可能な限りで誘導しておきます』

「分かった。頼んだぞ」

『はい』

その子供達とも後から合流しよう、突然の自体にも関わらず的確な対処を行う被験者となった子供達をそう思いながら康太はミネツサの元へと向かうのだった

◆ 初めの振動と爆発音がしてから暫く、ミネツサは何が起きているのか正確な事は何も把握出来ずにいた

電子的に制御されている扉は動かない、端末を操作してみようと試みても恐ろしい早さで制御を奪われている為に操作を受け付けない

完全に閉じ込められる形となったミネツサ達、先程まで雑談をしていた男性研究員二名も同じ部屋に居るが扉を蹴りつけるばかりでろくな解決策が見付かっていない

そんな時、唐突に閉じられていた扉が開く、まだ蹴り続けていた研究員はその勢いのままつんのめり体勢を崩すが扉の向こうに居た相手につつかる

だが普通の人間ではあり得ない固い金属の感覚に血の気が引いていく

「ア、IS……!?!」

それは康太のジェガン・サーガだった

今現在研究所で起きている非常事態、その研究員は目の前の存在こそがその元凶だと理解したが、既にビームピストルの照準が合わせられていた

心臓の位置をビームによって穿たれる研究員、先程まで話していた同僚の死に直面したもう一人は出口が無いのを分かっているも康太から少しでも離れようと背を向けた

しかし走り出そうとした時には無慈悲に放たれたビームが背後からその心臓を撃ち抜く

糸が切れたように倒れる男はそのままミネツサの近くに転がる、光のない瞳が見開かれており、それがミネツサと目を合わせる

「ひいっ!?!」

それが自分を見ている訳ではないと理解していてもミネツサにはその男がまだ生きている自分を恨めしそうに見ているように感じら

れた

そして不用意に悲鳴を上げた自分の口を咄嗟に塞ぐが視線を動かすと攻撃をしてきた機体の頭部が此方を向いていた

「ス、スナーク……」

通常のジエガンとは違い黒を基調としバイザー等のセンサー系は赤に変わっているその姿、何より赤い文字で肩にSNARKと書かれている機体、少し前にニュースにもなっていた存在に思わず声を漏らす

そして他の機種よりも歩行する事に長けている脚部でゆつくりと地面を踏みしめながらジエガンがミネッサに近付いてくる

その右手には未だに先程研究員を殺害したばかりのビームピストルが握られている

「あ、ああ……」

自分も同じように殺される、目前に迫った死への恐怖とこのまま死ねばもうおぞましい実験が行われる事はないという頭の片隅に思い浮かんだ事実、それらがミネッサの許容量を超過した事で今のミネッサは泣きながら笑い、恐怖で失禁して自分が座り込んでいる床を濡らすという状態になっていた

そしてその手を伸ばせば捕まえられる距離に来たところでジエガンから機械を挟んだマシンボイスが聞こえてきた

『研究員ミネッサで間違いないな?』

「……えっ?」

唐突に呼ばれる自分の名前に多少の冷静さを取り戻すミネッサ、その事を理解するよりも早く再び康太は問い掛ける

『研究員ミネッサで間違いないな?』

「そ、そうだけど……確かに私はミネッサ・トムソンよ」

少なくとも直ぐに殺されるような事はない、そう理解したミネッサは問い掛けられた同じ質問に今度はしつかりと答える

『被験者であったリリアナより保護を頼まれている。同行願おう』

「リリアナ……もしかして、そのリリアナって金髪のショートヘアーで、体格の割りにふぎけた胸の大きさをしている、あのリリアナ?」

『そうだ。必要なら中継しよう。彼女は今、我々が保護している』

「そう……お願いするわ」

自身の知っている名前、被験者として実験を行われていた歳の近い少女の名前を出されてミネツサは完全に冷静さを取り戻した

少なくとも彼女の味方なら目の前の相手は敵じゃない、研究員を殺害したがそもそも自分が手に掛けるつもりは相手だったので仲間意識なども無いのだ

そしてミネツサが望んだ事で康太は通信を開く、康太の状況はノツセルの方で映像付きで把握している為に直ぐにリリアナが通信を代わる

『ミネツサちゃん聞こえるう？わたしだよお、わたしい』

「リリアナ！本当にリリアナなのね!？」

『うん、そうだよお。さっきまでミネツサちゃんが色々言ってたあのリリアナだよお』

「うっ……」

自身には全くないものを持っているだけにリリアナに多少の嫉妬はしていたミネツサはそこを指摘されて少し言葉に詰まる

とはいえほんの少しいである、自分が色々な方法に出したりしているのに効果が無かったのにスラム育ちの栄養状況でどうやったらあのサイズに、等は思っていない

『大丈夫だよお、怒ってなんかないからあ。ミネツサちゃんはそこでもわたし達にこっそりお菓子とかくれたもんねえ』

「リリアナ……」

『だからミネツサちゃんも一緒にそこから出ようよお。わたし、待ってるからねえ』

「ええ、直ぐに行くわ！こんなゴミ捨て場みたいな場所、今日限りで退職よー!」

実際にリリアナの声を聞いた事でミネツサの意思は固まった、このような機会を逃せば次はないからだ

「そういう訳だから保護をお願いするわ！えっと、何て呼べば良いのかしら?」

『今は任務中だからな、S N A R Kと呼んでくれ。顔見せは後でにしよう。今ちよつと厄介な事になった』

「厄介な事?」

『所属不明のI Sが急速接近中だ。ジャミングから此処の襲撃を気付かれたな』

ジャミングをせずとも無線で増援を呼ばれるのなら、通信で詳しい情報が伝わらないようにした方が良い

その為のジャミングであったが、そこで何かが起きている事に違いはないので確認の為に送られた存在だろうと康太は推測する

そしてクロエが米軍の動きを確認しても動いたように見える部隊が不明な事から表向きは存在しない事になっている特殊部隊の類いだと当たりをつけていた

「ちよつと、大丈夫なの!?!」

『退路を塞がれた形になるから大丈夫じゃないな。だが閉鎖空間内の戦闘なら此方に有利だ。保護用のカプセルを展開しておく。手榴弾を喰らっても無事だから多少は安心出来るだろう』

「そう……頼んだわよ!」

『当然だ』

ミネツサの問いに自信を感じさせる声で答えた康太はカプセルを展開した後、通路を出口の方に向かって戻っていくのだった



上層部より特命を受けた米軍特殊部隊『名も無き兵たち^{アンネイムド}』で『隊長』と呼ばれている女性は詳しい情報を与えられずに現地に派遣されていた

その事に疑問はない、『^{必要}need ^{だけ}to ^{知る}know』、それは特殊部隊以前に軍人であれば基本とも言える事だからだ

敵は不明、だがI Sが投入されている可能性が高い、施設の間人は攻撃禁止、但し敵が人質に取る等の行為をした場合は迷わず諸ともに排除、短く簡潔に伝えられた命令に従うだけである

ジャミングによりハイパーセンサーにも多少の影響がある、電子戦にも既存の兵器を上回る能力を持つI Sにこれ程のジャミングが行

える事は隊長にも予想外だったが任務に変更はない

セキュリティを奪われているのか開かない隔壁を破壊しながら進む彼女の駆る機体はフアング・クエイクである

だがそれは代表的なパイロットであるイーリス・コーリングの機体とはかなり違う、サンドカラーではなく紺色に近いネイビーブルーに、特徴的な大型のクローは外され予備のナイフを格納する改造が施されたステルス仕様だ

だがステルス仕様といえどもISのパワーにより隔壁は軽々と破られていく、元より反乱に備えて歩兵用の火器を想定した隔壁はそこまで厚くないのだ

そしてまた立ちほだかる隔壁を破壊しようとした時、不意に彼女の進路上の隔壁が全て開いていく

それと同時に通路の奥から飛来したビームが直撃、フアング・クエイクのシールドエネルギーを削る

「クッ!? あれは、スナークか!」

頭部を狙った狙撃はシールドバリアで防いだ、だが正確無比な狙撃を行った相手を見て隊長は警戒する、それは単機でヴァルハラを壊滅させた事で軍からも警戒されている謎のIS、ジエガンの改造機であるSNARKだからだ

その機体が片膝立ちで機体を安定させビームアサルトカービンを構えていた、その事からこの施設を襲撃していた敵がSNARKであると隊長は把握する

加えて装備から見ても向こうは射撃主体、フアング・クエイクは近距離での戦闘を得意とする機体である事からまずは接近しなければ戦闘にならない

故に隊長は機体を加速させる、ISなら大した距離ではなく、多少の被弾は覚悟しても距離を詰める事を優先する

その間も狙撃が続き、その何れもが頭部や胸部といった人間の急所を狙ってくる為にシールドバリアで防いでも多めにエネルギーを消費してしまう

その事に気を取られた隊長は移動しながらアサルトライフルによ

る牽制を行い接近する、それによりS N A R Kも左肩に装備している小型のシールドを動かして防御を行う

S N A R Kが手に持つビームアサルトカービンは明らかに両手で保持する事を前提とした武装、片手で撃てなくはないがその命中精度は落ちる

だがS N A R Kの武装はなにもビームアサルトカービンだけではない、狙撃を諦め武装を右肩にマウントすると膝立ちになる為に床に置いていたビームサブマシンガンを手に取り先程までの狙撃とは打って変わって弾幕による攻撃にシフトした

更に隊長は知る由もないがジェガン・サーガのシールドにはセンサーが内蔵されており攻撃を防ぎながらも敵の姿を捉える事が出来る、それにより安定した姿勢と正確な照準によりフアング・クエイクの被弾は重なる、ビームアサルトカービン程ではないが威力に優れたビーム兵器の連続被弾ははつきり分かるレベルでシールドエネルギーを削っていく

更にはビームの一部が構えていたアサルトライフルに命中、弾薬の詰まった弾倉が爆発し武装を失ってしまう

だが距離はかなり詰めていた、膝立ちで射撃をしていたS N A R Kも今では二本の足で立って射撃している

ならばこのまま押し切るとI S用の大型ナイフを抜いて瞬時加速を行う隊長、相手の武装は銃で高速切替ラピッド・スイッチでも間に合わない距離になる

だがS N A R Kは左手で背部に備えているビームピストルIIを抜くとナイフを受け止める、ビームコーティングが施されているだけでなく斧のように使用する事も考慮して作られているだけに頑丈なのだ

そして右手に握っていたビームサブマシンガン_を床に落とすと右脚のホルスターからビームピストルを抜いて隊長へと突き付ける

完全な至近距離から頭部を狙った攻撃、咄嗟に後ろに下がろうとするが引き金を引く方が早い

ビームピストルとビームピストルIIによる変則的な二挺拳銃によ

る射撃、それによって更にエネルギーが削られ隊長の中に焦りが生まれる

完全に向こうのペースに乗せられている事から挽回する機会を窺おうとする隊長、だが距離を離してもどうにかなるという問題でもなかった

「しま——ッ!？」

両手にビームピストルではなくビームサブマシンガンを二挺持ったSNARK、距離に応じて対応する銃を使い分けるジェガン・サーガによって先程の倍の弾幕を受け今度は距離を詰める間も無くシールドエネルギーを削り切られるのだった

48話 不死鳥狩り

ジエガン・サーガの武装による機体特性と施設内という地理的な要因から米軍特殊部隊『名も無き兵たち』の『隊長』を退けた康太だったが、エネルギーを失い機体を解除された彼女を殺す事はなかった

以前のヴァルハラの際は犯罪者相手だったが今回の相手は曲がりなりにも米軍である、貴重なISコアを失ったとあれば死に物狂いで追跡してこようとするだろう

それに比べれば姿を見られた程度は今更である、以前の暴走の際に既に存在を知られている為である

ならばコアとパイロットは放置する、研究所の喪失という痛手は負うだろうがそれはそれ、そもそもが非人道的な行為をやっている方が悪いと康太は割り切る

その場にパイロットを放置する康太、機体を展開出来ないパイロットなど大した戦力にはならない為に捨て置き、一度ミネツサの居る部屋に戻ると保護用のカプセルを抱える

『敵は倒したの?』

「倒したが殺してはいない。今はまだ本格的に米軍と事を構えるつもりはないからな。とはいえISが来た以上はコアネットワーク経由で情報が漏れる。そうでなくてももう少してジャミングが切れるかな。増援が来ない内に撤退する」

ジャミング装置のコンデンサー内部の粒子残量は五分も経たずに尽きる

加えてGN粒子の散布下でもある程度の通信が可能なコアネットワーク経由で増援を呼ばれては康太でも厳しい、これが本来の機体ならば何機か相手にしても問題ないがエネルギー量が一機分のジエガン・サーガではこの辺りが限界となる

最後に康太は部屋の中に幾らかのグレネードを放り込み進んでいく、道中の幾つかの部屋も同じで徹底的に破壊した

中の研究員の死体も原型も残さず判別が出来ないレベルで損壊させて出口を目指す、これでミネツサの行方が分からなくなっても他の

研究員と同じく身元の照合が不明な中の誰かだと判断されるだろう

『……他の被験者達は大丈夫かしら?』

「道は開いた。後は彼等の運を信じるしかない」

幸いと言うべきか彼等が奪った端末にクロエが彼等の生命維持に必要な化合物の保管されている倉庫や武器庫の場所をメッセージ付きで表示してある

その後で可能ならば回収する為に合流地点をマップに示してあるのだがリリアナとの取引でミネツサの保護を最優先としている為にそこまで辿り着けるかは彼等次第となっている

そして康太達が外に出た時、コンデンサー内部の粒子を使いきったジャミング装置が機密保持の為に自爆していく

だが地上近くを移動すれば敵に探知される可能性は低い、その為低空飛行を続け海まで出ようとした時だった

『コウタさん、南方より高速で接近するIS反応二機!米軍のファング・クエイクと銀の福音です!』

「クツ、あの二人か!米軍のISの配置場所は把握していた筈なのに、動きが早すぎる!」

『それが、たまたま休暇でサンフランシスコに居たようです』

「運が悪いってレベルじゃねえな!とはいえ、この状況であの二機を相手にするのは……!」

かつて臨海学校の際に共闘した事のある二人、使用されている機体から康太は近付いてきている二機がナターシャ・ファイルスとイーリス・コーリングだと把握した

同じ戦場で戦っただけにその技量は康太もよく知っている、加えてどちらかと言えば閉鎖空間での戦闘を得意とするジェガン・サーガでミネツサという御荷物を抱えて戦闘する事は現実的ではなかった

追加ブースターをくっ付ければ振り切れなくはないが、その場合は加速に生身のミネツサが耐えきれない、手詰まりとも言える状況に康太は歯噛みする

仕方なくこの場にミネツサを置いて撃退する為に戦闘をするか、そう考えた時だった

『これは!?!コウタさんの後方より所属不明機!進路上の米軍と接触、交戦状態に入りました!』

「何だと!?!」

立て続けに大きな変化を迎える状況、それに対して追加の情報がクロエからではなく日本のラボに居る東の方から送られてくる

この世界のISコアは全て篠ノ之東の生み出した物であり、そこで何か仕込んでいたのか不明機と交戦に入った銀の福音とファング・クエイクのコアから情報を得るといふ篠ノ之東にしか出来ない手段で集められた情報、そこに表示された機体を見て康太は己の目を疑った「なっ!?!RX-0 3号機、フェネクスだと!?!」

そして、そこには追加で新たな漂流物だと記されていた



久し振りの休暇を楽しんでいたナターシャとイーリスの二人ではあるが軍の上層部より唐突に伝えられた出撃命令により渋々ながらもそれぞれの愛機を展開、指定された座標に向かっていった

加えて相手は正体不明のISであるSNARKとなれば警戒もする、だが追い付こうとしていたところに上層部より伝えられる新たな所属不明機の情報、そこから放置すれば遠からず背後を突かれる形となる為に追撃を断念、SNARKよりも更に急速に接近してくる相手への対処をする事となった

しかし不明機の性能は二人の予想を超えていた、最新鋭の第三世代機が二機で当たれば大抵の相手に負けはしない、そう考えていたからだ

にも関わらず現実はどうか、大量のエネルギー弾を放つ銀の鐘は避けられ、命中しようとも装甲が強固な為か有効打になっているか不明だ
そして機動性も高く、イーリスのファング・クエイクが接近しようにも逃げられるのだ

加えて、その不明機の外見に関してナターシャとイーリスの二人が見覚えのある機体でもあった

「あの機体、色とか幾つかの違いはあるけどラビットフット社の機体

よね?」

「ああ、名前は忘れたが白いのと黒いのが居たな。どうなってんだ? ラビットフット社がやってるのか?」

二人が対峙している機体、それは金色の全身装甲を持ち額に一本の角を備えた機体だった

加えて装甲の形状は一夏の使っているユニコーンと全く同じであり、ユニコーンには無かったが背中に二つ備えられているシールドが翼のように見える

考えられるのは同型の機体であり追加装備を加えたという線だが仮にラビットフット社だとしても目的が不明だ

まるでSNARKの撤退を支援するかのように現れたが、それならば身元を隠すのが一般的にも関わらずラビットフット社の機体で現れている

これが目撃者を全員排除するという事ならまだ納得はするが、相手は先程からずっと回避してばかりで攻撃もしていないのだ

明らかにおかしい、だが戦闘開始前からずっと呼び掛けていても不明機からの返信がない為に目的を知る事も出来なかった

しかし今になって通信機から声が聞こえてくる、それは年若い少女の声であった

『コウ、何処に居るの?この世界に居るのよね?何処?何処なの?答えてよ、私は此処に居るよ?』

「通信が繋がった!?貴方、何者?何が目的なの?」

『そつちななの?そつちに行けばコウは居るの?うん、ちよつとだけだけど感じる。コウは海の方に居るんだね。待ってて、私も直ぐに行くから』

「ちよ、ちよつと待ちなさい!貴方が何者なのかを——」

通信は繋がったが少女の言葉は要領を得ない、誰かを探している事だけは分かるが、黄金の機体はそのままナターシャ達を置いて海に向かって進もうとする

流石にそれは見逃せない為、ナターシャは福音の手で黄金の機体の肩を掴む

だがそれに対する反応は今までの比ではなかった

『邪魔を、するなアツ!!』

「キヤアツ!」

「ナタル!? テメエツ!」

パワーに任せて銀の福音を振り払う黄金の機体、相方が弾き飛ばされた事でイーリスが声を荒げるが、そのイーリスに向けて黄金の機体が翼の先端を向ける

直感で危険だと判断したイーリスは横に瞬時加速すると、先程まで居た空間を強力なビーム兵器が通り抜ける

「マジかよ……」

その威力は下手をすれば絶対防御を破りかねない、そう思わせる圧力にイーリスが気を取られている間に黄金の機体はその場を離脱しようとする

だがその進路上に放たれた福音のエネルギー弾がその行く手を阻む

「イーリ、仕方ないけど倒した後で事情聴取をするわよ!」

「チツ、折角の休暇だったのに面倒な事になったな!」

唐突に敵対行動に出た不明機に対して警戒を新たにするナターシャとイーリス、何が原因かは分からないが彼女は探し物の手懸かりを見つけたのだろう

だが米軍としての任務がある以上は簡単に取り逃がす訳にはいかない、その為に覚悟を決めて二人は黄金の機体に仕掛けようとする

しかしそんな二人の元に別方向からデータと通信が送られてくる

『米軍IS部隊へ。射線上より退避されたし。繰り返す、射線上より退避されたし』

「今度は誰!」

男の声で伝えられる通信、先程から次々と切り替わる新たな情報にナターシャが困惑するが声は答える事なく続けた

『指示に従わない場合の安全は保証しかねる。10、9、8、7——』

「クツ、イーリ、下がるわよ!」

「ああツ!? 従うのかよ!」

「いいから、急いで！」

「チツ！分かったよ！」

『——3、2、1、今！』

一方的に伝えられる内容、しかしナターシャは相手の言葉が嘘ではないと仮定し迅速に行動する

イーリスも不満げな様子だがナターシャに従う、それからカウントダウンが終わるまでの間にナターシャは思考した、先程は気付かなかったが英語で語りかけてくる男の声に聞き覚えがあったからだ

しかしそれを思い出すよりも早くカウントダウンが終わり遠方より巨大なエネルギーの奔流がその場を駆け巡る

先程の不明機の砲撃よりも更に強力はビーム兵器、それはナターシャ達が元居た場所を貫き黄金の機体の横を通り抜けていく、まるで当てる気が無かったかのように

そしてビームが通り過ぎると同時にナターシャ達のセンサーが新たに北方より近付いてくるISの反応を捉える、その数十三機

「この数、まさか!?!」

この世界に於いて十を超える数のISを同時運用出来る存在はそう多くない

大国でも各地の防衛の為に分散して配置している、なので実際にそういった運用をするのは防衛する範囲の狭いIS学園ともう一つ――

『此方ラビットフット社IS部隊ロンド・ベル。フェネクスのパイロット、聞こえるか？我々はそちらと積極的に戦闘を行う意思はない』

資源さえあれば幾らでもISCコアを生み出せる天災の私兵である

◆ ミネッサをノツセルまで送り届けた後、オレは改めて篠ノ之博士からの指示を受けていた

現れた新たな漂流物はフェネクス、ユニコーンの三番目の兄弟である

とはいえその存在は一夏やクロエの機体とは違う、二人の機体は篠

ノ之博士が組み上げた模倣した存在であり、あれは正真正銘別の世界から流れてきた本物だ

そして回収する方法だが正面から接触となる、米軍のナターシャ・ファイルスやイーリス・コーリングといった人間がその場に居るが篠ノ之博士の方で米軍と交渉するらしい、まともに交渉出来るかかなり不安ではあるが

だが出撃が決まった以上は指示に従うだけだ、オレは本来の機体であるジェガンR型に乗り換え、無人機として残りのジェガンは二機をキャノンガンとして残りを全てM型に換装して出撃する

メガライダーにはオレが、無人機は二機ずつノツセラに乗って出撃していく

その後はノツセルの位置を知られないように多少迂回し戦場と なっている場所の北から進入する

そして米軍とフェネクスの両方に射線上から退避するように指示を出した後でメガライダーのメガ・バズーカ・ランチャーを放つ

丁度両者の間を通るようにビームを放った後はようやくフェネクスと接触だ、漂流物であり動いているという事はパイロットかそれに準ずる何か動かししているという事だ

フェネクスで有名なパイロットはリタ・ベルナルとヨナ・バシユタであるが他にもジョリオン・デイというパイロットが乗っていた事もある

例えそれ以外の人間でも同時代の地球連邦軍の主力機であるジェガン、そしてロンド・ベルの名を聞けば何らかの反応を返してくるだろう

例えネオ・ジオンの人間だとしてもこの世界で何も分からない状態よりは良いと判断してくれる事を願う、攻撃されたらその時はその時だが、少なくとも相手の正体は探れる

問題なのは人間が乗っていない時である、前述のリタ・ベルナル等はフェネクスのテスト中に死亡、以降はその魂が機体に宿って動かし ていた

その場合は確保がかなり困難となる、最悪の場合は確保出来ず取り

逃がす形になるだろう、だから可能ならば前者であり尚且つ連邦軍所属の人間であつて欲しい、そう思いながら通信を開き問い掛ける

だが返つてきたのはオレにとつて予想外の人物であつた

『コウー・コウなのね!』

「ま、さか……」

その声を聞いた時、始めに思い浮かんだのは『有り得ない』という言葉だつた

だがオレの事を『コウ』と愛称で呼ぶ彼女が、目の前の機体、フェネクスを動かしている者の名がその言葉を打ち消す

『私よー! 貴方の幼馴染のリナよー! ずっと、ずっと会いたかつた!』

「リナ、リナ! ゴールデンバグ! 何故だ、どうしてお前が此処に居る!? 何故フェネクスに、ガンダムに乗っているんだ!?!」

二度と会えないと思つていた人物、この世界でもガンダム世界でもなく、オレが元居た世界に居る筈の幼馴染、リナ! ゴールデンバグだつたのだから



「良からう、ならば家までの水先案内人はこの紫藤康太が引き受けた!」

彼に対する私の印象は率直にいつて『変なヤツ』だつた

当時小学生の中頃だつたが、少なくとも同い年の口調としては明らかにおかしいというのはカナダで貿易関係の会社に勤めているパパの仕事の都合で日本に来たばかりの私でも直ぐに分かつた

見知らぬ国、慣れない気候、拙い日本語、様々な問題はあつたものの世界をその目で見て回るのも勉強の一環だと日本へ転勤していつた両親について私も同じように日本へと渡つた

そして日本の小学校に通つたりしていたのだが、私はそこで孤立した

私のママは日本人だつた、そのママから日本語に関しては教えて貰つていたけど実際に聞いて話すのとは全く違つた

ママはゆつくり話してくれていたから聞き取れる、でも回りの子供達は日本語で話すのが普通だし、時として不思議な言葉を自分達で

作ったりしていたから私には何が何だか分からなかった

転校してきたばかりの頃は皆が物珍しきから話し掛けてきてくれた

私もそれに答えようと必死になったけど上手く聞き取れなかったり、発音や意図した言葉とは同じにならなかつたりして上手く話せなかつた

そして子供というのは堪え性というのがあまりない、そのまま私の事を話しても答えない面白くもないヤツだと思って離れていく

それに対して私は意固地になった、こつちも一生懸命にやつてるのに、だったら友達なんて要らないと私から話し掛けようとしてもしなかつた

それから暫くした時だ、ママからちよつとしたお使いを頼まれて外出した事がある

場所は近くの商店街、ママと何度か来た事があるから迷わずに辿り着いて買い物を済ませた

そのまま帰れば良かったのに私は物珍しい日本の風景に興味が出て必要な場所以外にも歩き回っていた

少しだけ、ほんのちよつと寄り道しても直ぐに元の場所に戻れば問題ない、そう軽く考えて、そして案の定迷子になってしまった

道を聞こうにも周りには誰もいない場所だった、方角も分からなくなつて途方に暮れていた時だ

「何を泣いている？」

どうしようもなくなつて道に座り込んで泣いていた私に彼は気付いてくれた

ロボットの描かれた箱を手にとって、その時は読めなかつたけど『武士道』と書かれたTシャツを着ていた彼は私の話を聞くと一つ頷き、冒頭のセリフを言い放つた

私の家の場所なんて分からないだろうに、私の日本語での会話をしっかりと聞いて、少しの手懸かりを頼りに歩いて、暗くなつても諦めずに探してくれていた

それから歩いている内に見覚えのある場所に着いて、そのまま家ま

で着いた

帰らない私を心配したママが家から出て私を待っていてくれた

家に帰れたという思いが先に溢れて私は泣いていた、それから彼にお礼を言おうと振り返った時、彼の姿はなかった

その代わり、隣の家の玄関が開く音がして彼の声で『ただいま』と言っていたのが聞こえた、どういう偶然だろうか彼の家は隣だったらしい

私は慌ててその家に走って彼を追い掛けた、インターホンを鳴らして玄関を開けて貰うと彼のママと、頭を押さえて踞っていた彼の姿があった

私に付き合わせて遅くなってしまったのを怒られてしまったらしい、私は必死に日本語で説明して謝り、それから改めて彼にも謝ったでも彼は笑って気にしてないと返してくる、自分がやりたいからやっただけだと

その次の日から私は学校でも彼に話し掛けるようになった、同じ年ではあったけれど別のクラスに居たから今まで知る事はなかった

それでも彼は私の友達だ、日本で初めて出来た友達だ、休み時間の度に彼に会いに行つて、彼と話した

彼はどれだけ時間が掛かっても私の話を聞いてくれる、それから三ヶ月も経つ頃には学年が一つ上がつてクラスも一緒になった

そんなある日、彼は所々間違えながらも英語で話し掛けてくれた、彼のパパが話せるからと教わっていたらしい

私が間違いを指摘すると彼はちよつとだけムツとした顔になって私の日本語の間違いを指摘してきた、それからは日本語と英語、どっちが早く習得出来るか競争になった

そして勉強方法を聞くと彼は映画を見て英語を学ぶ方法もしていると知った、じゃあ私はどうやって日本語を勉強しようかと思つたら、彼からアニメで勉強したらどうかと言われた

日本という国はアニメ大国とも呼ばれる程に沢山のアニメがあった、その中から色々と観ていく、彼から勧められたアニメの中にガンダムがあった、そして観ていると彼の口調に似たキャラクターを見付

けて、私にはそれが彼の憧れなんだと理解した

そうして日本に来てから一年もすれば日本語もかなりマスター出来た、その頃には彼も英語が一通り話せるようになっていたからカナダで通じるスラングを教えて、彼も私が分からない日本語を教えてくださいました

日本語が話せるようになれば他の子供達とも話せるようになる、彼の他にも友達が出来たけれど私は彼と一番多く話していた

彼の事をもっと良く知りたい、そう思うようになったのはいつからだろうか

詳しい事は分からないけど、彼は将来宇宙に行きたいとっていた単に宇宙飛行士になるのではなく、宇宙に人が住めるようにしたいのだという

ガンダムに夢中な彼らしいと思うけど、いつも自信に満ちた表情をする彼を見ていると本気で実現してしまいそうな気持ちになる

次点で戦闘機パイロットを選んでいたのは彼が憧れるキャラクターに関してだろう

彼と過ごす日々は本当に楽しかった、叶うならずっと続けばいいと思っていたけれど、いつかは終わりが訪れると理解もしていた

小学校を卒業すると同時にパパの仕事の都合でまたカナダに帰る事になったのだ

その頃にはただのご近所さんから家族ぐるみでの付き合いが出来ていた彼ともお別れだ、離れたくないと泣いたけど、お互いにメールや電話をする事、それからいつかまた会う事を約束して私はカナダに帰った

カナダの学校でも友達が出来た、彼から勧められて今ではすっかり私の趣味にもなってしまったアニメ鑑賞の繋がりで、だ

私が観る時は日本語音声で問題なく観れる、歌と可変戦闘機と三角関係な超銀河ラブストーリーやら、妖怪首おいてけな侍を始め偉人達が異世界に漂流する話やら、劣等生な最強のお兄様やらなのは声変わりして憧れのキャラクターに似た声になった彼の影響が大きいだろう

また、彼とのメールのやり取りも続いている、本当なら毎日したいが一週間に一通、週末にその週にあった出来事を互いに書き連ねていた

その頃には彼の口調も普通と変わらない物に変化していて宇宙を目指すという夢は諦めているような雰囲気ではあったが、特別な事のない日常、それでも彼が元気に過ごしている証明だと私は読んでいただけで嬉しくなる

そうしている内に私も自分の気持ちが分かってくる、私は彼の事が好きなのだ、彼とずっと一緒に生きていけたら、そう思っていた

そしてそれは実際に彼がカナダまで会いに来てくれた事で大きくなり、彼が帰った後で抑えきれなくなった

だから今度直接会う日が来たら私はこの気持ちを彼に伝えよう、そう決意してからハイスクールに上がる前の夏休み、今度は私の方から日本に会いに行ける事になった

けれど不安があった、彼との連絡が取れなくなっていた事だ

四月からずっとメールに返信がない、これまでの彼なら絶対にそんな事はなかったから心配になる

試しにパパの方から彼の両親に連絡を取って貰った、でも向こうははぐらかしているみたいで細かな事は分からないらしい

その間に私は色々な考えが頭を過った、何か彼を怒らせたのなら今度会う時に直接謝ろう、でももしも彼に原因が無いのなら、例えば彼が付き合い始めた女の子が居てその子が自分以外の女の子とメールをするなど束縛してくるような相手なら直接決着を着けると決意した

私は彼が幸せならそれで良い、身を退こうとも思えるけどそんな相手ならば彼に相応しくない、そんな妄想から発展した考えで遂に日本へ向かった

けれど現実とは全く違った、彼は四月からずっと行方不明なのだという

ある日を境に忽然と姿を消したのだという、携帯も財布も家に置いてあり、靴さえも無くなっていないのに夜の内に消えた

警察にも届け出ているが何の手懸かりも見付かっていない、たった一人の息子である彼を失い憔悴していた二人はそう語った

突然の失踪、手懸かりもなく生死も分からない、そんな彼の状況に私もその場に崩れ落ちた

それでも何か手掛かりになる物がないか、僅かな希望にすぎる私は冷静な部分では意味がないと悟りつつも彼の部屋に入らせて貰った

小学生の頃にも何度も遊びに来た彼の部屋、記憶の中のあの頃よりもガンプラを始めとするガンダム関連のグッズがかなり増えている部屋

微かに彼の匂いが残っている部屋は物の配置は変えていないが掃除は彼のママが続けているから綺麗なままだ

何事もなく彼が此処に居ても不自然じゃない、だけど居ない部屋に泣きそうになりながらも、極力物を動かさないように気をつけて手掛かりを探す

当然、警察が一度は調べているだろう部屋にそのような物が残っている筈もなく、日が暮れても何も見付けられなかった私は一度休む為に彼のベッドに腰掛ける

その枕元にはフラッグ、マスラオ、スサノオ、ブレイヴ指揮官用試験機といった彼が憧れたキャラクターの乗機の他に、今の彼が好きだというジエガンシリーズが並んでいる

ガンダムに囲まれた空間を彼らしいと思いつつ、その中に混じった機体に違和感を覚える

一人のキャラクターに関連する機体とジエガン、その中にある黄金の機体、フェネクスだ

特に彼が言及している事はなかった、ジエガンと同じく宇宙世紀の機体だからあってもおかしくはないが、そんなに思い入れがあるだろうか

何気なく触れてみる、すると突如としてフェネクスが光ったのだ

普通はガンプラが光るなんて有り得ない、だが不思議と私はこのガンプラが彼の元に連れていってくれるのではないかという直感にとらわれた

言うなれば女の勘という不確かなものであるが、この時の私には妙な直感があった

「お願い、私を彼の、コウのところに入れて！」

例えそれがどのような場所だとしてと彼に会いたい、フェネクスはその想いに答えるかのように光を放ち、私の視界は埋め尽くされるのだった

49話 二つの世界

幼馴染との邂逅という有り得ない筈の出来事があったものの、リナの乗る機体がフェネクスである事を思い出しオレは咄嗟に動く

「リナ、フェネクスから今すぐ降りろ！」

『えっ?』

「そいつにはNT-Dがある！」

篠ノ之博士の言うようにオレにニュータイプとしての能力があるのならフェネクスが反応してもおかしくはない、そう警戒しての事だが一歩遅かった

フェネクスの装甲から青い光が漏れ出し、各部のパーツが開いていく

デストロイモードへの変形、それはNT-Dの発動を示すものでありオレを明確な倒すべき敵として認識した事の証だ

だが機体が何か分かり、予想も出来ていた為にオレも素早く動ける、変形をするフェネクスに向けて二重^{ダブルイグニッションブースト}瞬時加速で接近、展開されそうになっていた頭部アンテナ及びアームドアーマーXCに対してビームサーベルで切り捨てる

ニュータイプでもないリナが感応波を扱えるようにするにはアームドアーマーXCに搭載されている『ナイトロシステム』が必要となるのは分かっていた

そしてユニコーンタイプの機体は額のブレードアンテナを用いて感応波の送受信を行う以上、その機能を司るアンテナを失えばオレの発する感応波を感知する事も出来なくなる

結果、『敵性ニュータイプ又は強化人間の感応波を感知する』というNT-Dの発動条件を満たさなくなった事で変形が解除された

「危なかった……」

本物のNT-Dと戦闘を行うような事にならずオレは一先ずは安堵の息を吐く、あと一歩でも遅れていてばリナはシステムで脳を弄られ下手をすれば廃人に、オレもまた最悪の場合は『デストロイ・アンチエンド』と呼ばれるニュータイプを抹殺する為だけの状態に陥っ

たフェネクスを相手にするところだった

そして、今度こそフェネクスを量子化し格納する事が出来たりナをオレが抱える、その手にはガンダムNTに於いて主人公ヨナ・バシユタの持つていたペンダントが握られている、あれがフェネクスの待機形態という事だろう

とはいえ回収して直ぐに帰れる訳ではない、福音とフアング・クエイクが目の前に居るのだ、米軍として二人は職務を果たす必要がある『まずは久し振り、と言った方が良いのかしらね』

「一応釈明すると、篠ノ之博士が今の状況を含めて米軍と交渉してる途中ですよ」

『そうだろうと思ってるわ。何しろ、正規軍の前で名乗って戦闘行為を行ったんですもの。けれどそれとこれは別、私達は新たな命令が下るまでは貴方達を押さえしておく必要があるのよ』

その理由は分かる為にオレも大人しくする、強硬突破は最後の手段だ

そのまま空中で待機すること五分くらい、篠ノ之博士からメッセージが届き、福音の方にも通信が来たらしい

『上層部から追加の命令が来たわ。「ラビットフット社に協力して暴走していた実験機の確保」ってね。もう終わっちゃったけど、これで正式に貴方達の行動は認可された物になったわ』

「此方もですよ。協力すればコアを一つ進呈。米軍だけで捕縛に成功すれば追加で更に一つ。この場合は前者になるんですかね？」

『残念ながらそうでしょうね。けどISCコアが増えるなら一つでもありがたい事だわ』

どの国でもISCコアは欲しい、それがオレ達の不法入国やら戦闘行為といった犯罪行為を見逃す事得手に入るなら安いと上が判断したという事だろう

そしてリナとフェネクスも確保した以上はこれ以上の戦闘もない、この後は山中に移動し待機しているノッセルに戻り日本へ帰還するだけだ

「では我々はこのまま撤収します。お疲れ様でした」

『そう、もう行くのね。もう少しゆっくりして行けば良いのに』

「そこはまた正式な手順で入国してからにしますよ」

『そうね。英国でのようにアメリカでも教導をお願いしたいところだわ』

「イギリスでも色々大変だったので暫くは絶対に嫌です」

『それは残念ね。さてイーリ、そろそろ私達も移動するわよ』

『あー、もう終わりか？全く、休暇から駆り出されたと思ったら直ぐ終わって、この後は報告書だろう？せめて埋め合わせが欲しいよなあ』
『その前にS N A R Kの追撃があるわよ。もう逃げられたと思うけど、可能な限りで痕跡を見付けろですって。今回はI S コアが追加で手に入ったのだから我慢しなさい。他国に先駆けて新規コアを入手したのだから、上も悪いようにはしないわよ』

『だと良いけどなあ。じゃあな、紫藤康太！叶うなら今度も味方として会おうぜ！』

そう言うとき米軍の二人はS N A R K、オレが撤退していった西へと飛行していく

ノツセルも移動してるから何も見付かる事はないが、この場から離れたというのはいがたい

オレもまたその場を離れ、ノツセルのある座標へと移動するのだった

だがリナをかかえて移動を始めた時、そのリナから衝撃的な言葉が告げられた

「ねえ、コウ。さっきのつてもしかして銀シルバリオ・ゴスベルの福音？」

「ああ、アメリカとイスラエルが共同開発した第三世代型I S ……………。待て、何でお前がそれを知っている!?元の世界とは違ってI Sはこの世界にしか存在しない筈だぞ!」

「えっ?でも、前の世界で『インフィニット・ストラトス』ってアニメに出てきた物と全く同じ外見だったよ?」

そんな爆弾とも言える情報をオレは幼馴染の口から伝えられるのだった



リナルゴールデンバーグは始めは戸惑っていた、幼馴染である康太がなんとなく居ると思われる場所を指さそうとし、そこでどういう事かフェネクスを起動して飛行していた

その後はアニメで見たような敵に襲われて、余裕がなかったから反撃して暴れてしまったものの、そこを探していた幼馴染の手で救出された

そのままいわゆるお姫様抱っこ状態で幼馴染、此方もまたガンダムに登場するジェガンの姿だが不思議と康太だという確信がある中で抱えられている

アニメの敵が居たり、フェネクスやジェガンといった代物が存在していたりとまだ上手く現実と飲み込めない事は多いが幼馴染と一緒になら何とかなる、リナルはそう考えていた

日本のアニメでありカナダの友人から勧められた『インフィニット・ストラトス』の話をした途端に康太は考え込むように黙ってしまったが、そのまま山の中に停泊している船のような形の移動拠点、ノツセルに辿り着く

地上に降りた事でお姫様抱っこが終わったのは多少不満ではあるが、そう言えばこうして直接会えた以上は自分の気持ちも伝えるチャンスだと思い出した

後は告白するのに良さそうなタイミングを見計らうだけ、そう考えた時の事である

「お疲れ様でした、コウタさん。今後は出撃する予定はないので少し休んで下さい。コーヒーでもお淹れします」

「ああ、頼む。けど、その前に。被験者の子供達との合流地点は此処だよな?。」

「はい。裏口とも言える場所から歩いて一時間程の場所になりますので、もう暫くしてから到着すると思います。五人全員の脱出は確認してあります」

「そうか、ならもう少し待機しておくか」

ノツセルのキャビンから現れたクロエが康太ととても親しそうに話している、人形のように整った顔立ちでクールそうに見えるながらも

康太と話していると嬉しそうに表情が変化しており、リナの目には明らかに特別な感情を抱いているように見えていた

「——ナ。おい、どうしたリナ？」

「えっ？あ、どうしたの、コウ？」

「改めて紹介するが、コイツがこの世界で色々世話になってるクロエだ。クロエ、こっちはリナIIゴールデンバーグだ。オレの幼馴染で、さっきのフェネクスに乗ってた。どうやって此処に来たのかは知らないが、簡単に言えばオレの同郷という事になる」

「クロエ・クロニクルと申します。コウタさんのサポートを含め、ラビットフット社と呼ばれる企業で色々な活動を共にしています。よろしくお願ひ致します」

「ええ、よろしく。私はリナ、リナIIゴールデンバーグ。コウの幼馴染よ」

手短に自己紹介をするクロエとリナ、そして互いに笑みを浮かべながら相手を観察し、同時に同じ結論へと辿り着く

ああ、この子は確実に恋敵ライバルだな、と



さて、被験者となっていた子供達と合流する時間まではそれなりの時間がある、リナが言っていた『インフィニット・ストラトスの世界』というのも気になるがこの場には他にリリアナやミネッサも居る、下手な話題を出すのは得策ではない

なのでその辺りの話は日本に帰還してから、篠ノ之博士辺りも含めて話をしようと思う

それで今は何をしているのかというところ——

「ふ、ふーん、そう。クロエはコウと同じ部屋で過ごしてるのね……」

「学園側が纏めておいた方が便利と判断したからのようです。私生活でも、コウタさんにはお世話になっています」

「そ、そうなの……」

「あの、リナさんはコウタさんの幼馴染という事ですが、どのように知り合ったのですか？」

「ああ、それはカナダから引越してきた後で少しして私が迷子に

なって、そこを助けられたの。その後は家が隣同士という事もあって、色々と一緒に動く事が多かったわ。夏には海とかプールとか山とか、家族ぐるみで遊びに出掛けた事もあったわ」

「そうなのですね……」

なんとというか、空気が重い

クロエとリナ、共通の話題がオレの事なのは良いとして、何故かお互いに牽制するかのようピリピリとした雰囲気漂っている

ミネッサも居心地が悪そうにしているし、リリアナは自分の前にノツセルの中に置いてあったお菓子を持ってきて食べている、この状況でそこまで自由に振る舞えるのは素直に尊敬する

そしてオレは取り敢えずは余計な事をしないように気を付け、コーヒーを飲みながらタブレットを操作、ニユースを確認している

おっと、イギリスのレイネシア王女殿下が声明を出したのか

『イギリス王女、欧州各国にIS連合軍の結成を提案』か、確かに欧州各国が一機ずつ派遣すれば二十を超える数が直ぐに揃う

表向きはテロ対策とか色々言っているが真実はデビルガンダム対策だろう、市民には伝えられていないが各国の首脳陣には伝えてあるのだ、前向きに検討するとしてある

まあ参加しとけばいざという時に援軍としてIS二十機は確定、他国だとしても一機の派遣でも義理は果たせるとなれば受けるだろう、国民感情的にもISの派遣が期待出来るとなれば安心感が違うだろうからな

「おっと、センサーに反応か。そろそろ来たな」

まだ各国の派遣メンバーは決まってもいないが、その続きを見るよりも先にノツセルのセンサーが接近してくる人間を捉えた

人数は五人程度、予定していた被験者の子供達だろう

直接会い、これから先をどうするのか話し合う為にオレはこの場を後にするのだった



被験者達は全員が十代の子供ばかり、奪ってきた武器や弾薬、缶詰めといった食料、そして何よりも彼等の命を繋ぐ為の化合物をありつ

たけバッグに詰め込んでいる者達が近くの茂みから様子を伺っていた

そこに非武装かつ両手を挙げて近付き、警戒を解かせた後が本題である

向こうも脱走に手を貸して此処まで誘導してきた相手が敵だとは考え難いのだろう、武器を向けてはいるが目を見れば警戒しているだけだと分かる

内訳としては少年が三人、少女が二人である

そんな中で一人の少年が前に出てくる、残りは後ろで銃を構えたままだから彼が交渉役という事だろう

「アンタが助けてくれたのか？」

「そうだ。正確にはオレは表で襲撃、お前達を誘導していたのは仲間の方になる」

「……何が目的なんだ？」

「二つは人体実験の停止。そして被験者の保護だ。二つ目は他で救出した被験者からの依頼だな。そちらが望むなら身柄の保護は可能だ。その手足の維持も、化合物の提供も続けられる」

少なくとも彼等だけで今後も化合物の精製が出来る訳がないので選択肢はあつてないようなものだ

だが目の前の少年は首を横に振った

「その保護ってのはおれ達五人だけだろうか？ だったらおれ達は行かない」

「そうか。それなら何処へ向かう？」

「元のスラムに、オークランドに戻る。そこで仲間が待つてる。三十人程度の人数だけど、それまで助け合って生きてきたんだ。今度は無理矢理だったけど改造されて力もある、武器も良い物を手に入れた。おれ達は成り上がるんだ、あの街で」

「……そうか」

ラビットフット社で作った孤児院には流石に三十人も入る事は出来ない、そして彼等が望む以上は無理に連れていく事も出来ない

そして彼等の命は化合物が尽きた後、長くは持たない

だからせめてもの餞別として、その命を長らえさせる手段を教えておく事にした

「なら、化合物が切れた時はキャラメルを食べると良い。必要な化合物はキャラメルにも多く含まれている物と同じだった。スラムで手に入れるには厳しいかもしれないが、少なくとも希望にはなったか？」

「勿論だ。それにしても、キャラメルなのか？」

「キャラメルだ。冗談抜きでキャラメルなんだ」

研究員も摂取する化合物に関して元から食用である物から取ってきた方が余計な影響が出ないと考えてのものらしい、まあ下手に毒性がある物を摂取させて体調を崩したりすれば兵器として使えないからという理由だろうがな

「それと、オレ達への連絡先をそっちの端末に登録しておけ。武力が必要な時、もしもタイミングが合ったりすれば何らかの協力が出るだろう。化合物の方も都合出来るかもしれないしな」

「本当か？おれ達を研究所から助けて、他にも色々都合してくれて……兄ちゃんには借りが出来てばかりだな」

「気にするな。研究所への襲撃も、何もかも勝手にオレ達がやってるだけだ」

「それでも、だぜ。おれ達の中では受けた借りは必ず返すって信念があるんだ。そうやってスラムでも信頼を築いてきた。だから借りは覚えておく、何か兄ちゃんの手伝いになれそうな事があったらその時には教えてくれ。借りを返すからな」

「なら、その時は頼らせて貰うさ」

「おう！それでこそスラム魂だぜ！」

何やらシャングリラ魂的な事を言う少年だが、取り敢えず互いに信頼はした、保護は出来ないが別の方向で協力するという形で

「そういうえば名乗ってはいなかったな。オレは康太だ、紫藤康太。とはいえあまり他人に吹聴しないでくれ。一応はテロ行為をやった訳だからな」

「分かった。おれはイーノだ。姓はない。捨て子だからな」

ますますシャングリラ魂がありそうな名前だった少年ことイーノ
その後はお互いの端末に連絡先を登録し、その場で別れる事になっ
た

彼等は彼等でスラムに拠点を作ってあるらしい、鉄屑やら武器やら
スラムで拾える物を色々と拾って生計を立てているのだとか

その稼業の途中でマフィアの連中に拉致されたのだとか、今後は何
人かで武装して行動するから再び捕まる可能性は少なくなるだろう

此処からオークランドまでは結構な距離があるがイーノ達は大き
夫だという、スラムという環境でスリや窃盗を行い走って逃げていた
為に体力やはかなりあるらしい

イーノ達がそのような真似をせずとも済む世界になれば良いのだ
が、その道は長いだろうな

「じゃあな、兄ちゃん。またいつか会おうぜ！」

「ああ、その時は出来れば平和な時が良いな」

情報を交換し、イーノ達の今後の活動の予定を聞いたりした後、山
を降りる為にイーノ達は行動を始めた

既にある程度は森の外の景色も見えている、山の中で迷う事はない
だろう

「さてと……」

イーノ達が去った事でこの国でのオレの目的も全て果たされた、後
は日本に戻るだけであり、その間は結構な時間が空く

オレはオレで向き合わなければならない事があるのだ



ノツセルのキャビンに戻った時、一度休憩にでもしたのかクロエと
リナは一緒に紅茶を飲みながらお菓子を食べていた

そのお陰か先程までのピリピリとした雰囲気は霧散している、話を
訊くならば今か

「リナ、少し良いか？」

「ん、どうしたの、コウ？」

「少し訊きたい事がある。二人だけで話したい内容だ」

「分かったわ。私も、改めて話したかったから」

そう言うとりナは椅子から立ち上がる、オレはリナをキャビンの一室に招く、此処ならば他の人間に聞かれる心配はない

「改めて、久し振りだな、リナ」

「ええ、本当に。まさか別の世界に行っていたなんて思わなかったわ」
「全くだ」

まずは再会した事に対して改めて挨拶を交わす、このような常軌を逸した事態に直面しているが互いの表情には苦笑が浮かんでいる

「ねえ、コウ。コウはこの世界でどう過ごしていたの？」

「ああ、そうだな。オレは四月辺りにこの世界に来た。IS学園の敷地内で倒れているのを見付かって、紆余曲折あったがラビットフット社という企業の所属になって活動している。今は夏休みだが、普段はIS学園に一年生として通ってるよ」

「oh! やっぱ『インフィニット・ストラトス』の世界なのね! それにしても、一年生……もしかしてワンサマーとか居るの?」

やはりというべきか、元の世界には『インフィニット・ストラトス』というISの正式名称のアニメが存在しているのか

リナの反応は明らかにISを知っていたものだったが、そういう理由なのだろう、オレはそんなアニメ全く知らなかったけど

それにしても、ワンサマー?

ワンサマー、ワンサマー、1、夏?

「ワンサマー………一夏のことか?」

「そう……それで、IS学園って事は、色々トラブルがなかった? 例えばクラス対抗戦で無人機が乱入したり、タッグマッチでVTシステムの暴走があったり、臨海学校で銀の福音が暴走したり!」

どうやらリナの知るアニメではそのような展開だったらしい、確かにどのイベントでも似たような騒動は起きている、とはいえ無人機ではなくクロエとBD1号機、銀の福音ではなく、デビルガンダム軍団と違いがあるのはオレを含めガンダムシリーズが介入しているから、と見るのが正確か

「概ね、そのイベントの時にトラブルが起きてはいるが色々違いがあるな。まずはクラス対抗戦だが――」

その為、オレはこの世界での出来事をリナに伝えた、リナも自分の知る作品との違いに驚いてはいたが許容範囲内といった様子だ

「むむむ、ガンダムがこの世界に……」

「そもそもオレの機体もジエガンD型だったからな。そして普通に過ごしていてもオレというイレギュラーが存在する以上、お前の知る作品と解離していてもおかしくはないさ」

とはいえ、これは上手くすれば未来の情報を得る事が出来るという事でもある、当然ながらオレ達という存在で変化している分、正確なところを予測する事は出来ないにしても目安にはなるだろう

だがそれらを考えるにしても、まずは――

「なありナ。この世界がお前の言う『インフィニット・ストラトス』の世界なのは分かった。けど、それでもオレにとつては紛れもない現実だった。どういう理屈か知らないが、ガンダム世界の人達とも出会って実際に話もしたんだ。だからお前がどう思ってるのかは知らないが、この世界で出会う人達の事をアニメキャラクターだとか思わず、一人の生きた人間として接してくれるか？」

「当然よ。さっきのクロエって娘とも話したけど、あの娘はちゃんと一人の人間だもの。アニメじゃ見なかった人間だけど、ちゃんと生きてるって感じたもの」

「そうか、なら良いんだ」

少なくともリナの言葉に嘘は感じられない事から一先ずは安堵する

だがクロエはアニメに出てないのか、篠ノ之博士の従者といった感じだったから居てもおかしくはないのだがな

とはいえまずは懸念事項を一つ解決出来た、そして次こそが本命とも言える内容だ

「リナ、オレ達はこの世界に迷い込んだ形なんだと思う。正直、どうやって来たのか、どうすれば戻れるのかも分からない」

「それは……うん、分かってる。ねえ、コウ。コウのパパとママ、どうしてるのか、知りたい？」

「……ああ、実はそれも訊こうと思ってた。オレが消えて、親父達はど

うしてるんだ？」

リナに訊ねたかった内容、それはオレの両親についてだ
心配してくれているだろう、叶うならもう一度顔を合わせてしっか
りと話したい

そしてリナはさっきの口振りから確実に二人がどのような状況に
置かれているのか知っている、だからオレも覚悟を決めて訊いた
「二人は、健康的な意味なら元気よ。病気とか、そういった事にはまだ
なっていない。でも、コウが居なくなつた事でとても落ち込んでる。コ
ウの事を心配して、あまり休めていないようだから……」

「そう、か……」

やっぱり心配してくれているのか、それを知れただけで自然と目頭
が熱くなり、二人の顔が鮮明に思い出せた

視界が歪み、鼻をすすりながら、少し自分を落ち着かせる

「オレは、幸せ者だな」

一人息子という事もあるが、ここまで愛してくれていたのだと両親
の想いを感じる事が出来た

そして、そんな二人に何もしてやれない自分自身の親不孝を呪う

「そうね。だから、早く帰れるように方法を探しましょう！何が出来
るか分からないけど、私も手伝うから！」

「ああ、その事なんだが——」

親父達の事を教えてくれたリナが、元の世界に帰る為の手段を探す
という

どうしてオレ達がこの世界に来ているのか、その理由も何も分から
ないが、オレは一つの決意をしていた

それは右も左も分からない世界で自分を奮い立たせる為に立てた
目標とは違う、明確な目的があつての事だ

だからこそオレはオレの意思をしつかりと込めてリナも言葉に返
した、これがリナと二人で話したいといった理由の中でも半分くらい
を占めるものだった

そしてオレは——

「——オレは、元の世界には帰らない」

明確に、例え親不孝だと罵られようとも、自分の意思を告げた

50話 決意

元の世界に帰らない、その言葉を聞いたリナは一瞬だけ何を言っているのか分からないという顔をしていた

そして色々と言いたい事はあるだろうが、一言だけ絞り出すように答えた

「何、で……?」

「この世界は歪んでいる。少なくともデビルガンダムが存在する限りは世界が滅んでも不思議じゃない。そしてオレにはガンダム作品の知識がある。少なくとも対抗は出来る」

「でも、この世界は——」

「アニメの世界、オレ達には関係ない。お前が言いたいのはそういう事かもしれないが、さっきも言ったがオレはアニメの『インフィニツト・ストラトス』なんて知らない。此処はオレにとつては紛れもなく現実だ。まだ4ヶ月程度だが、此処で過ごした日々も、此処で出会った人達も多く居る。そんな人達を置いて、デビルガンダムという脅威のあるこの世界から帰るなんて真似はオレには出来ない」

「コウ……」

短い間とはいえ、何もせずにいられる程、この世界での経験は軽いものではない

「それに、これから先も同じような事が起こらないとは限らないからな。ガンダム世界には文字通り世界を滅ぼすような存在が多い。デビルガンダムの他にも、世界に大きな影響を与える存在が現れるかもしれない。その時に対応策を知っている人間が居ると居ないでは大違いだろうか?」

直接的な破壊をもたらす兵器としてコロニーレーザー等に限らず、ガンダム世界にはそれ以外の物も数多く存在する

例えばアスタロスという植物がある、元はスペースコロニーの過酷な環境でも生育可能な植物として開発されたが、繁殖力が旺盛過ぎて既存の生態系を大きく歪めるような存在だ

コアラ等の動物は特定の植物しか食べられない、もしも地球がアス

タロスで覆われるような事になれば今の自然は永久に失われる事となるだろう

例えばニュートロンジャマー、この世界ではまだ原子力発電に頼り切っている国の比率は多くないが、オレの居た世界と同じように国内の発電の大部分を原子力発電に頼っているフランス等で使用すれば大混乱は必至だ

核戦争を未然に防ぐという意味では有効かもしれないが電波障害は防げない、それにより世界経済への混乱が予想される、オレ達だつてミノフスキー粒子を用いる火器の使用に関しては都市部での使用に制限を掛けている程だ

例えばエンジェル・コール、地球のあらゆる技術を用いてもワクチンの開発が出来なかつた宇宙細菌だ

焼却するしか処分方法がなく、一度大気中に放たれてしまえば全ての生物が溶けて死滅するのは間違いない

その他にもカイラスギリやラジエネシス、サイクロプスといった大量破壊兵器は勿論、バグに軍用オートマトンといった生々しい殺戮兵器まで多岐に渡る

そういった力がこの世界に与える影響は予想出来ないレベルだ

「それに、オレは既にこの世界で引き金を引いた。敵の命を奪う事を、自分自身の意志で戦う事を決めたんだ。それを、元の世界に戻るからと逃げるようは真似はしない」

「それは……」

「372人、それがこの世界でオレが直接手に掛けた人数だ。そして今日、更に26人の人間の命を奪った。既にお前の知ってるオレではないんだ。済まないが、それだけの事をやった以上は元の世界には――」

帰れない、そう続けようとした時、リナがオレに抱き着いてきた
その肩は震えている

「――らない……」

「はっ」

「帰らない！ コウが帰らないなら、私も帰らない!!」

「いや、お前何を言ってる——」

「コウばかりが一人で全部背負ってるけど、だったら私も背負う！何でコウばかりが苦しもうとするの!?絶対にそんな事、させないから！私も一緒にコウと戦う！」

「あのな、戦うって言ってもそんな簡単に割り切れるようなものじゃないだろう！」

「だからってコウだけがやる事でもないでしょう！もう決めたから！絶対の絶対！」

「おま……」

こうなるとリナは昔から梃子でも動かないヤツだ、単に駄々を捏ねているように見えて意思は固い

だからオレはため息を一つ吐いた後でリナに向き直る

「お前を実戦に出すかどうかはまだ決めてないが、それなら覚悟はあるんだな？」

「……良いの？」

「どうせ直ぐにどうにか出来る訳ではないからな。だったらまずは受け入れるしかない」

「ありがとう、コウ！」

そう言っただけで抱き締めてくる力を強めるリナ、半ば諦めたのでその背中を軽く叩いてやる

取り敢えず、オレだけでなくリナの両親も心配している事だろう、ならば何とか連絡だけでも取れないか努力はするべきだ

世界を渡る通信なんて前代未聞だが、この辺りは篠ノ之博士に頼るしかないな

「ん？あれ、今気付いたけどコウの体って結構筋肉質になってる？」

「あ？まあISの操縦って最後はやっぱり体力勝負なところがあるからな。他にも生身である程度は戦えるようにこの世界に来てからはずっと鍛え続けてきたんだ。元の世界の頃とは比べ物にならないくらいに鍛えてあるさ」

「へえ……ねえ、ちよつと脱いで貰っても良い？」

「何でだよ!？」

「男の子だし、別に減るものでもないから良いでしょう!？」

「主にオレの尊厳とか気力が減るわ!」

ならば実力行使、とばかりにオレの服を脱がそうとしてくるリナを引き剥がすべく格闘戦になるのだった

さつきまで真面目な話をしていただけに、リナの行動に翻弄されてしまう

結局、引き剥がすのに三十分は掛かり、その分だけ日本へ向けて出発する時間が遅れるのだった



その後、脱がされる事なくリナを引き剥がした後はノツセルを操縦して日本へと帰還した

最終的に騒ぎを聞き付けて部屋に入ってきたクロエにも手伝って貰って引き離れた辺り、どれだけの執念を持っていたのか呆れる程だとはいえそれ以降は落ち着いたものだ、大人しくしていたがそろそろIS学園に近付いて来た辺りで声を掛ける

「見えてきたぞ、あれがIS学園だ」

「おお、本当にあの変なタワーもある!本物のIS学園なんだ!」

確かに中央部に耐久性に喧嘩売ってるような奇妙なデザインのシンボルタワーは一度見れば忘れないだろうが、そこに食い付くのか

だがIS学園の様子を知っているのならばリナの言っていた事は改めて真実なのだと理解出来る

「そろそろ着水するぞ。各自、シートベルトを着用しろ」

オレは訓練も兼ねて操縦席で装置の誘導に従い操縦している、他の全員がちゃんと着席してベルトを着けた事を確認し海に着水する準備をする

オート化が進んでいる事から操縦はそこまで難しくはないが多少は緊張する、だが特に問題らしい問題は起きず無事にノツセルは海に浮かぶ

「よし、後はドックに入るだけだな。その後は改めてオレ達の上司に会うとしよう」

IS学園に海から近付いていくと岸辺の一部が開いて内部へ入れるようになる

ノッセルを入手してから置き場に困った事で篠ノ之博士が学園内に増設した設備である、学園側に無断で作って完成してから事後承諾で報告したものだ

しかし作ってしまった物は仕方ないと正式に認可されている、この近くに試作のマストドライバー施設を建造予定でありそちらは正式に許可を取っているから、ついでに見逃された可能性も高いが

ドック内でノッセルを停泊させた後はラボへの通路を進む

今回連れてくる事になったのはリリアナ、ミネツサ、リナの三人だ
篠ノ之博士とエイフマン教授に挨拶して、その後は戸籍関係で生徒会長のところに行くか

事前に帰還の連絡は入れておいた為、ラボの一室に入ると既に二人は待機していた

「只今戻りました、束様、エイフマン教授」

「やあやあ、待ってたよーちゃん、こーくん。色々大変だったねえ」
「フェネクスに関しては完全に予想外でしたが、米軍の追撃を撒けた事はプラスでしたよ。とはいえ、幼馴染がこの世界に来た事には驚きでしたが」

「そうだねえ。じゃあ報告はまた後にしてまずは自己紹介といこうか。初めまして、私が人類史で最も天才な人間こと、篠ノ之束さんだよ！」

自らを天才と称する篠ノ之博士、否定は出来ない為そのままスルーし、各々の反応を見る

リリアナはそもそもそういった知識に乏しいのか無反応、ミネツサは多少は驚いているがオレという存在から予想していたのかその反応は小さい、そしてリナが一番驚いた表情をしている

『インフィニット・ストラトス』という作品が元の世界にあるならば劇中でISの開発者として篠ノ之博士の名前が出ないとは考え難い、ならばその名をリナも知っていたとしても不思議はないか

「コウ。コウの上司って、篠ノ之束なの？本当に？」

「ああ、オレがこの世界に來た事にいち早く気付いて身元を保証してくれた人だ。そして、宇宙を目指す為に色々協力している」

「大丈夫だった!? 人体実験とか、頭を弄くられたりとかされてない!? この人、かなり常識外れな人だよ!」

「その辺りはされてないが、正直言うとやりかねないから擁護出来ないんだよなあ……」

そもそもニュータイプ能力の片鱗を見せた途端に積極的に実戦に投入しようとする辺り、リナの言葉は正しいように思える

「むむ、こーくんの幼馴染だからってこの私に随分な態度だね。お前が東さんの何を知ってるって言うのさ!」

「ISの力を世間に認めさせる為に『白騎士事件』を引き起こした事とか!」

「あー、篠ノ之博士。リナに関しては後で別途報告すべき事があるので、その時まで少々お待ち下さい。かなり重要な案件なので、今は置いておいてくれませんか? リナも、色々知ってるとは思いますが今は落ち着け」

「ふーん、こーくんがそう言うなら今は退いてあげるよ」

「私も、コウがそう言うなら……」

何で自己紹介だけでこんな事にならないのか、そう思うがまずは他の面々も自己紹介をする必要がある

そういう訳でリナ、リアナ、ミネッサの順で自己紹介をしていく
「成る程、他の二人はともかくミネッサ・トムソンは技術者としてラビットフット社で雇っても良いけど、どうする?」

「本当!? あ、いや、本当ですか?」

「うん、本当だよ。世間に発明品が認められない悔しさは私も良く知ってるからね。それに、私ほどじゃないにしてもキミも天才の部類だし。私ほどじゃないにしても」

大切な事だからか二回言う篠ノ之博士、そもそも『白騎士事件』の影響でミネッサの能力が認められなかったという事もあるのだが、ミネッサとしては自身の研究が進められるならそれで良いらしい

「ならお願いします! 主な研究分野は機械工学、生体工学、脳科学です

！」
という訳でミネツサもラビットフット社に所属する事になったのである

研究所での事から表舞台には登場し難い過去になっているので今後どうなるか分からないが、それでも自由に研究出来る環境は彼女にとって理想的な環境だろう

と、そのミネツサがさつきから気になっていたのか、最初から居たが何も喋らないエイフマン教授の方を気にしている

「あの、そちらの方は一体？」

「レイフ・エイフマン教授だ。この世界で篠ノ之博士の他にISCコアを完全に解析し、製造も出来る唯一の人物になる。が、どうにも様子がな……」

「ええっ?!?ISCコアを?!?」

ISCコアの製造が可能という点で大きく驚くミネツサの反応は当然の事だろう

しかしエイフマン教授は御年73歳ながら杖を突く事はあつても腰が曲がっていたりはせず老いを感じさせない御仁のだが、今の教授は多少ふらついており、目にも隈が出来ている

「むう、シドウ君が説明してくれた通り、わしはレイフ・エイフマンという。主に材料工学、機械工学を得意としている」

何度か呼ばれて自分の事だと気付いたのだろう、エイフマン教授が挨拶を返すが、やはり声に覇気がない

「教授、かなりお疲れのようですが、GNドライヴの研究が煮詰まっているのですか？少し気分転換に休まれた方が良くと思いますよ」

「いや、心配せずとも研究自体は上手く進んでおるよ。しかし、進み過ぎてつい時間忘れてしまつてな。なに、先程も一時間は仮眠をとつておる、何も問題はあるまい」

「今すぐ寝て下さい」

ゲームが良いところまで進んでタイミングを外したみたい感覚で言わないで欲しい

何はともあれ深刻な理由でない事は一安心したが

その後、ミネツサが技術者として、リリアナがパイロット候補としてラビットフット社に所属する事を希望したので、クロエが二人を連れてラボの方を案内しに行き、エイフマン教授には休息を取って貰う事にした

そうして人払いが済んだ所でリナに関する事、『インフィニット・ストラトス』という作品の存在に關しての話となる

リナの口から語られるのはオレ達の元居た世界には『インフィニット・ストラトス』というライトノベル作品があり、篠ノ之博士を始めとする人々もまた同じように登場しているらしい

リナはアニメ版しか観ていないらしいが、それでも多くの情報を得られるというのはかなりアドバンテージとなるだろう

聞いていた篠ノ之博士も最初はリナの事をあまり良い印象を持っていなかったようだが、興味を惹かれたのか話に聞き入っていた

「成る程、それで私とか色々な事を知ってた訳だね」

「実際のところ、篠ノ之博士ならやりますか？白式のデータを取る為にゴレムを送り込んだり、紅椿のデビュー戦の為に銀の福音を暴走させたりといった事は」

「うーん、今とかなり状況が違うけど……やるだろうね、私なら！」

「成り行きとはいえ篠ノ之博士の下に着く形で良かったですよ。まあ、今もあんまり変わってませんけど……」

経緯が変わっているだけで学園のイベントの度に何かしらのアクシデントに見舞われている事に違いはない、それが篠ノ之博士ではなく外的な要因に変わっているだけで

「そうなるか今後のイベントでも警戒した方が良いのか。リナ、取り敢えず近い中でどんなイベントでアクシデントが起きるか分かるか？」

「それなら学園祭ね！多くの人間が入り込むのに紛れて亡国機業のオータムってヤツが二次移行した白式を奪おうと襲撃してくるわ」

「学園祭か……二学期最初のイベントで外部からの客も多い。確かにISコアを狙う連中からすれば絶好の機会だな」

とはいえ事前に襲撃がある事を把握出来ているなら心構えとか、何

より襲撃に対して準備をしておく事が出来るのは大きい

おまけに敵の名前まで分かっているとすれば、それはちよつとしたチートだ

「そのオータムって奴の情報は？」

「えっと、確か機体は蜘蛛みたいなアラクネって機体だったわ」

「米国の第二世代だね。因みに機体スペックはこんな感じだよ」

そう言つて篠ノ之博士がモニターにアラクネのスペックを表示する、正直に言つて見た目はゲテモノだな

とはいえ腕が多いからな、武装を持たせれば火力は多くなるし格闘戦も有利に進められる、警戒するに越した事はない

「あつ、あと主人公のワンサマーを誘拐したのもコイツね！第二回大会の決勝戦の時！」

「うん？一夏を誘拐？」

軽くアラクネと対峙した時のシミュレートをしていたがリナの語る内容に違和感を覚える

「第二回モンド・グロツソの決勝戦で誘拐されたのは兄の千秋の方だろう？」

「千秋って、誰のこと？」

誘拐された事が原因であの豆腐メンタルになった訳だし、一夏が誘拐されたのならそれは逆だ

だがリナは千秋を知らないという

「織斑一秋、一夏の双子の兄だ。そして白式のパイロットでもある」

「私の知ってる『インフィニット・ストラトス』の主人公はワンサマーこと織斑一夏だけよ。そして白式のパイロットも織斑一夏だけど？」

オレの過ごしてきた現実と、リナの観てきたアニメの世界は多少の差がある事は分かつていた、だが一秋という人物の有無は大きな違いだ

「ふむふむ、カズくんはアニメには登場していない、と。ならやっぱり何らかの差異が影響してるのかな？並行世界とか、色々面白そうな話になってきたね！」

それに対して篠ノ之博士だけは楽しそうな様子を見せている、科学

者として何らかの考えで頭を回転させているのだろうか

しかしそうなるトリナの言う知識を鵜呑みにするのも危険になってきた

「リナ、お前が分かる範囲で良い。襲撃が起きるタイミングは何処だ？」

「私の知る限りだと文化祭と専用機限定のタッグマッチ、それから修学旅行ね。アニメはそこまでだったわ」

「そうか。文化祭はある、修学旅行もある、だが専用機限定タッグマッチっていうのは無い。そもそも今年が異常なだけで、本来はそこまで多くの専用機が集まる事なんて無いからな。そんなイベント自体存在しないぞ」

「そうなの!?!」

「ああ。代わりにキャノンボール・ファストっていうレース系のイベントがある。て、どうした?そんな深刻な顔して?」

専用機限定タッグマッチとやらが無ければ何が起ころんというのか、ぶつぶつと小声で呟いていたリナは突然顔を上げると一言だけ大声で叫ぶ

「かんちゃんの専用機が危ない!」

「は?かんちゃん?」

誰の事だ、と思うと同時に誰かがそんな呼び方をしていた人が居たようなと頭の片隅に引っ掛かるが、それを思い出すよりも早くリナがオレの手を掴んで廊下へと引っ張っていく

「おい!」

「コウ、学園でISを開発出来そうな場所に案内して!今すぐに!」

「はあ?開発も何も、普通は学園内で開発なんて——」

「いいから案内して!手遅れになる前に!」

「何だつてんだよ……まあ、出来るとしたら整備室とかか?」

「整備室ね、ならそこに行くわよ!」

「だから待ってって!各アリーナに隣接して存在してるから複数ある上に、距離も離れてるんだぞ。それに今は夏休みだから残ってる生徒も居ないって」

「それでも可能性はあるのよ」

「いやお前そもそも学園からしたら部外者だし……ああもう、分かっただよ付き合ってやる！博士、何か起きるみたいなのでちよつと出ます！」

「行つてらっしやくい、後でどんな結果になつただかだけ報告してくれば良いからねえ。原作知識とやらが何処まで正しいか把握出来るチャンスだし」

廊下に出る前に一言篠ノ之博士へ告げてからラボを出る

よもやリナのこの行動によってオレは一人の少女と深く関わる事になるとは思いもしないのだった

51話 水色の髪の少女

リナに手を引かれ地上に出た後はまず一番近くにある第二アリーナへと向かう事にした

が、今のところは部外者であるリナが出会すのはまずい人物と早々に出会したのである

「むっ、紫藤か。隣に居るのは、見ない顔だな。誰だ？」

「織斑先生……」

この場合では一番会いたくなかった相手である織斑教諭である

「あー、コイツはリナと言いましたオレの幼馴染です。簡単に言えば、オレと同郷です」

織斑教諭はオレの素性を知っている、だからその同郷という言葉で察したのか一つ頷く

「アメリカの方に向かったと連絡を受けていたが、その関係だったのか。だが一応は部外者だ。あまりうるつくのも感心はしないな」

「二学期から入学予定ではありませんよ。今はその前の学校見学的な物です」

「だとしても事前に申請を出しておけ。だがお前達の事情も分かっているからな。お前が絶対に側に居る事を条件に許可してやる。後で形だけ申請を出しておけ。日付を遡って処理しておいてやる」

「ありがとうございます、織斑先生」

「なに、多少の融通は利かせてやるさ。まあ限度はあるがな」

そう言つて織斑教諭は通路をオレ達とは別の方向に進んでいく、規則には厳しいが事情があるなら寛容なところに助けられたな

「あれが本物の織斑千冬……雰囲気は半端じゃないわね」

「入学試験の時、模擬戦したけどかなり気圧されたからな」

少なくとも未だに近接戦闘で勝てるビジョンが全く見えない相手である、その迫力だけでリナが圧倒されたとしても不思議はないだろう

あまり他人に出会いたくない中で織斑教諭と穏便に事を済ませられたのは運が良かった、そうして目的地である第二アリーナに到着

し、中にある整備室を目指すのだが、今度はある意味で早めに会っておきたかった人物に出くわす

生徒会長であり日本の暗部の長をやっている更識楯無、その人が整備室の前でうろうろと行ったり来たりしているのが見えたのだ

リナとリリアナとミネツサの戸籍を用意して貰う事とか色々話しておきたかったのでついでに軽く報告しておくでしょう

「会長、何やってるんですか？」

「ひゃっ!? て、康太くんじゃない、びっくりしたわ。アメリカから戻ってたのね」

本当に暗部の長なのか疑いたくなる程に注意力が散漫になっていた様子の会長、明らかに不審な行動だったから別の要因があるのかもしれないけど

「おー、裸エプロン先輩ね！」

『^{かつこ}つけて話しそうなアダ名で呼ばないでくれないかしら!? そして私がやったのは水着エプロンよ! と、思わず突っ込んだけど、そっちの子は初めましてね。どちら様かしら?』

「オレの幼馴染で二学期から転入希望のリナ||ゴールデンバーグと言います。あと戸籍リナ含めて三人分お願いします」

「リナです。よろしくお願いします」

「私はこの学園の生徒会長の更識楯無よ、よろしく。それにしても、康太くんの幼馴染ね……」

「オレの過去を探ろうとしても無駄ですよ。口止めはしてありますから」

「それは残念ね。取り敢えず戸籍の件は分かったわ。でもね康太くん。用意はしておくけど、そろそろ私にも報酬があっても良いと思わない?」

「コアの返還の代金分ってどのくらいが相場ですかね?」

「まあ、そう言われると釣り合っていないように思えるわよね。でも適度に利益を渡す事で相手に裏切られるリスクは減らせるわよ。誰だって好き好んで自分の利益になる相手を裏切るような事はしないもの」

その辺りは承知しているが報酬にどういった物が必要かは別の問題である、暗部という性質からISによる武力が必要な事もあると考えても、ISコアを渡すのでは釣り合わないのだ

なので複数の仕事の対価となるのだろうか……まあ篠ノ之博士に相談しておこう

「そういうえば、二人はどうして此処に居るのかしら？」

「リナの案内を兼ねて、リナが行きたい場所に引っ張られています。ああ、織斑先生にさつき会いましたよ。後で学園見学の申請を出しておくように言われました」

「それなら私がおかしい理由もないわね。ところで、途中編入って事は専用機もあるのかしら？」

「ありますよ。ユニコーンタイプの三号機です」

リナと共に現れたフェネクスは現在は篠ノ之博士が解析しているが、終われば得られた技術を一夏のユニコーンとクロエのバンシィに反映する予定だ

ただ軽く解析してもNT-Dに関してはOSとして機体の根幹に組み込まれている為に手出しが出来ないらしい、そこでオレに反応する事を避ける為に感応波の送受信を行う機器を全て外すという物理的な方法で対処する

頭部もユニコーンタイプの特徴である角が無くなり、代わりに情報を投影する為にゴーグル状の装備をする事になったとか、加えて機器を外している内にクロエと同じようなMS少女のような形の形状に変わっていた

ガンダムタイプの機体なのに勿体ないが暴走すると中学生達の式典を襲撃してニュータイプの本質を持った子供達も持たない子供達もまとめて虐殺したりするから仕方ないね

「本当に専用機が増えると戦力的にありがたいわね」

「なおパイロットの技量は素人同然です」

「……夏休みの間に可能な限り訓練をしておいてね」

それは当然、技量も無いのに専用機持ちとかコネだとかの陰口の他にも亡国機業といった連中からすれば格好の的だからな

と、亡国機業で思い出した、会長に確認しておかなくては

「会長、報酬代わりと言ってはなんですが、一つ情報があります。確定ではないにしても、参考程度にはなるかと」

「あら、どんな情報なのかしら？」

「亡国機業という組織を知ってますか？」

「……何処でそれを知ったのかしら？当然、私もその組織の事は知っているわ。今のところ、一番動向に注視している組織ね」

「オレが知ったのはイギリスでのエクスカリバー事件の後です。亡国機業から直接コンタクトされたという人物から、連中がエクスカリバーに関与していたと聞かされました」

「そう……康太くん、この話は此処でするにはマズいわ。後日、正式に日時を決めて話し合います。何処にその目があるか、分からないから」

「そうですね。では日程が決まったら連絡をお願いします」

「ええ、後程手形で連絡させて貰うわね」

直接紙でやり取りする事で盗聴などの危険を避ける為という訳か

確かに正体不明のテロ組織を相手するには廊下で話すというのは無用心に過ぎた

先程までの迷っていた様子は欠片も見せず、会長は暗部の長らしく真剣な表情で廊下を進んでいく

そういえば、あの人は結局ここで何をしてたんだ？

「コウが本当に大人の世界に仲間入りしてる……」

「まあ篠ノ之博士がアレだからな、交渉関係を一部引き受けたりはしている。とはいえ、本職相手は骨が折れるが」

先に釘を刺した事でリナから情報が漏れる事はなかった、空気を読んで黙っていてくれたらしい

そのお陰で助かったが、リナが単独の時とか色々聞き出そうとするかもしれないから油断ならないな

「でも、あの人が居たなら此処で間違いないわね」

「そうなのか？此処に何があるっていうんだ？」

「それは中に入れば分かるわ。という訳でコウ、扉を開けて」

「はいはい」

会長が居なくなつた後、リナに促されて扉を開く

一応はISを扱う場所だ、生徒が使えるところはいえ入るにはセキュリティを通す必要がある

だから生徒であるオレがセキュリティ認証を行い扉を開く、中にはISを整備する為の設備が並んだ部屋が広がっている

そしてリナが探していた相手なのか、既に先客が居た

「だ、誰!？」

「あ、しどつちだ、久し振り」

「のほほんさんと、更識簪か……」

それはオレの顔見知りでもある二人だった

◆

夏休みという事もあり大して知り合いも残ってはいないだろうと思っていたが、思わぬ者が残っていたという事に軽い驚きはあった

しかし直ぐに二人の近くにある物に目を引かれる、設備に固定されているのは一機のIS、既存のどの機体とも違う機体だ

そして更識簪の専用機と聞いていた打鉄式式の存在を思い出し、この機体がそうだと思ひ出した

それからのほほんさんが更識簪の事を『かんちゃん』と呼んでいた気がする、リナが言っていた『かんちゃんの専用機』というのは打鉄式式の事だったのか

「確かに夏休みの間は会わなかったから久し振り、になるな」

「そうだね。おや、そっちは誰かな?」

「私はリナ、リナIIゴールドエンバグ。コウの幼馴染で、二学期から転入するの。よろしく」

「そうなんだね。私は布仏本音だよ、のほほんって呼んで良いからね」

「よろしく、のほほんさん。で、そっちは……」

「あ、更識簪、です……」

「よろしく、更識さん」

「う、うん……」

互いに自己紹介を済ませる二人とリナ、リナの方は二人の事を知っているのかもしれないが、話を合わせている

「そういえば、しどっち達はどうして此処に〜?」

「リナに学園内の案内をしていたところだ。アリーナに来て、整備室に入ったら偶然な」

「そうなんだね〜」

「オレも聞きたいんだが、二人もどうして此処に?」

「それは……」

「かんちゃんの専用機開発だよ〜」

「本音ツ……!?!」

今日で何度も行ったやり取りをするが、今回は逆に夏休みというこの時期にこの二人が学園に残って整備室にいた理由が気になった

それをあつげらかんと話すのほほんさんと、対照的に咎めるような声を上げる更識簪

そして専用機開発という理由から改めて打鉄式式を見る、装甲は大分形になっているように見えるが武装らしき物が見えない、それどころかブースターの類いも数があり存在しないのだ

「未完成という事か?」

「それは………そう……」

「本当は倉持技研が造ってたんだけど、白式が優先になったから開発がストップしちゃったんだよね〜。で、かんちゃんがそれなら自分で造るって機体とコアを貰って来たんだ〜」

「成る程な……」

白式、というよりはそのパイロットが貴重な男である事からデータ収集と解析に人手が取られているのだろう、おまけに世界でも更に貴重な二次移行を行った機体だからより力が入れるようになった

とはいえ白式は篠ノ之博士の手も加わっているワンオフ機、技術を解析するのは良いが、だからといって次期主力機になりそうな打鉄式式の開発をストップさせるとはな……ふーむ

「防御重視だった打鉄より機動性が上がってるのは分かるが……搭載する武装は?」

「何でそんな事を聞くの?」

「ぶつちやけるなら単なる興味本位。それがどういう機体で、どういうコンセプトを基に考えられた機体なのか、考察やら運用やら考えるのが好きなだけだ」

「一応は、こんな予定……」

そう言つて更識簪が見せてくれたのは打鉄式式の完成予定図なのだろう、各種武装が施された機体のCGが表示されている

「夢現、春雷、山嵐……夢現はともかく、荷電粒子砲の春雷に独立稼働型誘導ミサイルの山嵐……これが設計通りの性能を發揮するならば……」

武装のデータと設計を見てコンセプトを想像する、追尾性能の高い大量のミサイルと火力のある砲、加えて機動性の高い本体の組み合わせ、そして手持ち武器としては近接格闘戦用の超振動薙刀のみという構成、そこから設計した者の出した答えを導き出す

「ミサイルは相手の動きを封じる為の物。回避にしろ迎撃にしろ、数が多い。そして相手がミサイルに対処している間に威力の高い荷電粒子砲による攻撃を加える。当たれば良し、当たらずとも足を止めさせる事に成功すればミサイルが殺到する。そうして被弾して足の鈍った相手を荷電粒子砲や薙刀で仕留める。大体はこんなところか?」

戦術としてはクロスボーン・ガンダム ゴーストに登場したバンゾが近いだろう、あちらは事前に決めた弾道しか出せずミサイルで撃破ではなく損傷を与える事に特化し重装甲で鈍重な点を考えると別物ではあるが

そういつた事もあり更識簪に確認を取ると、少し驚いたような表情をしていた

「どうして……」

「別で似たようなコンセプトの機体を知っていたただけだ。まあ向こうはかなり重装甲な機体だけだな」

残念ながらバンゾのデータは作成していないので資料として見せる事は出来ない、だが更識簪はその事に興味を示したらしい

「詳しく聞かせて」

「良いぞ。軽くイラストに書いて説明するが、あの機体は——」

データが無いので適当な紙に簡単なイラストを書いて説明する

土偶に似た独特なシルエットの機体なのだが、更識簪は大分参考になったのか聞き終えると満足そうに一つ頷く

「ありがとう、とても参考になった」

「一番の違いはミサイルの誘導性だな。自分に返ってくる心配がないから装甲を厚くする必要がない。その分を機動性に回せばミサイルに頼らない通常戦闘も可能になる」

一つの事に特化したコンセプトってというのは強いが、逆に言えば対策されると完全な無力になる

バンゾの仕様だってミサイルの威力が低いから全身をビームシールドで覆うという手段で無効化出来る訳だ、ビームに触ればミサイルが起爆するからレガンダムフィン・ファンネル・バリアとかの形は天敵と言えるだろう

それを考えれば他にも強みを持たせておく事で幅広く対応出来るというのは利点だ、打鉄式式ならば機動性という強みを持っている事になる

「ところで、コレ本当に一人で完成させる気か？」

「そうだけど……何か？」

「いや、単純に凄いと思っただけだ。オレにはその辺りは出来ないからな」

少なくともオレが出来る設計はガンダムに登場する機体をモデルに組み合わせた機体くらいだ、こういうった機体の設計をゼロからやれと言われてもどうしても引っ張られてしまう

そして自分では新たなテクノロジーの開発も出来ないのです、自分で全てを組み上げようとしそれが出来るだろう更識簪は素直に尊敬する

「そうなの？ラビットフット社のテストパイロットなの？」

「別にラビットフット社だからって全員が新規のISを組める訳じゃない、というか寧ろそれが出来る人間の方が少ないさ。オレは主に既

存の機体と既存の技術を組み合わせるパイロットに応じたカスタマイズをする方が得意なんだよ。例えるなら、この学園の専用機ならシヤルロット・デュノアのラファール・リヴァイヴ・カスタムⅢとかラウラ・ボーデヴィツヒのフルアーマー・シルヴァ・バレットみたいな機体を造るのが得意って事だ」

どちらかと言えば機体より武装のカスタマイズの方が得意なのだ、その関係で機体バランスやら出力調整やらも出来るが基本は組み合わせのみである

そして機体を設計したとしてもオレの腕が足りなければ結局は篠ノ之博士に手伝って貰う事になる、一応は簡単な開発が可能ないように設計図さえ作れば製造してくれるビルダーがあるから簡単な物は自作してるが

「へえ、それならコウは打鉄式式の装備って作れたりするの?」

「そうだなあ。夢現と春雷は割りりと早く完成するだろうけど、山嵐がなあ……ハードは頑張ればなんとかなるかもしれないが、マルチロックオンシステムが……」

別口で開発されているS N A R K隊用のオレの機体のデータを転用すれば可能かもしれないが、アレを晒すのは危険だ

しかし夢現はフラッグのソニックブレイドを、春雷はS E E D系ビームライフルを転用すれば作れるだろう

だが山嵐はハードなら何とか作れるだろう、ミサイルも問題ない、だが一番の目玉とも言えるマルチロックオンシステムの構築は難しい

「コウ、それなら開発を手伝ってあげるのはどう?」

と、そこにリナからそんな言葉を掛けられる

此処に来る前にリナが言っていた『かんちゃん専用機』とやらが更識簪の打鉄式式だという事は分かっている、だが手伝うと軽く言うが幾つか問題がある

「リナ、軽く言うがオレはラビットフット社のテストパイロットだ。

そんなオレが勝手に倉持技研の新型を弄くればどうなると思う?」

「どうなるの?」

「お前な……少なくとも、表向きは打鉄式式は倉持技研の所有物になる。それを他企業のオレが弄つたりしてみろ、訴訟起こされても文句言えんぞ。それが例え白式という存在に釣られて開発ほつぽり出した間抜け共相手であつてもな」

「あ、そっか……」

やるにしても手順という物がある、とはいえ苦しい言い訳くらいはあるんだけどな

それに、オレが手伝う事を前提にしているが、それをする為の障害はまだある

「手伝いは、良い。打鉄式式は、私が完成させるから」

そもそのパイロットである更識簪の意思を無視して開発する訳にはいかない、完成しない機体を引き取つてまで開発を続けようとしたのだ、それにも何か理由があるのだろう

だからオレは手伝わない、少なくとも今はまだな

「そういう訳で、オレは手伝えない。けどな、更識簪。オレから一つだけ言わせてくれ」

「なに？」

「打鉄式式、これは良い機体だ。それが兵器であれ何か別の機械であれ、これまで多くの存在が生まれてきた。だが中には歴史の表舞台から消えていった存在も数多くある。だからこそ、これだけの機体が政争やらの理由でまともに開発が進まず完成しなかった、なんて事にはなって欲しくはない。いざという時には手伝わせてくれ」

「……さつき、企業が違うから出来ないって言つてた」

「なに、その時は趣味で個人的に協力してた、とでも言い張るさ。それに、ラビットフット社が秘密裏に開発に協力していた、なんて事も倉持技研からすればプラス要素になるんじゃないか？ ああ、開発ほつぽり出した連中に『お前ら居なくても学生だけで完成させたぞ』ってプライドへし折るのも面白そうだな」

苦しいかもしれないが、その時は開発を止めてた向こうが悪いって事で更識簪にも証言して貰うとしよう

そしてオレの言葉に対し、更識簪は小さく笑うと一つ頷いた

「わかった、本当にどうしようもなくなった時は助けて貰う。でも、それまで、出来る限りのところは私がやってみる」

「ああ。飛ぶために生まれてきたのに、飛べないなんて事は打鉄式式も望んでないだろうからな」

ISにはそれぞれに意思がある、にも関わらず飛ぶ事も出来ないというのには不本意でしかないだろう

宇宙を目指す為の翼ではなくなってしまったが、それでも地上に残されたままよりは空を駆ける事を望む筈だ、だから整備室を出る時、オレは一つだけ更識簪へと伝えた

「ISはただの機械じゃない、パイロットにとっては自らの命を預ける大事な相棒だ。信頼し愛情を以て接すれば機体は必ず応えてくれる。あまり一人で考え過ぎて、頭ハツカネズミになるなよ」

ISとは何か、その大事な事を伝えてオレは整備室を出る、なおその後置いていかれる形になったリナが追い掛けてきて怒られたりするのだった



康太達が立ち去った後、簪は先程の康太の言葉を咀嚼していた

「ISは飛ぶ為の翼。ただの機械じゃない、か」

世間一般の認識からすればISは最強の兵器であり、実際の扱いも宇宙へ進出する為の物から圧倒的な性能を誇り世界の軍事バランスを左右する存在になっている

それは康太の機体であるジェガンも同様であり、そもそも学園でも上位の実力者である康太の言葉とは矛盾しているようにも思えた

ただ、そんな矛盾しているように見える康太だが、簪の目には一つ確かな事が分かった

「あの人は私が更識とか関係なく、打鉄式式の事を考えてた。本当に、ISが好きなんだ」

少なくとも機体の設計思想を訊いてきた時の康太の顔は純粹に興味だけが存在していると言わんばかりに輝いており、その後で別の機体を解説する時も本当に楽しそうに話していた

それは好きなアニメの事を語る時の自分にも似ており、幼少の頃か

ら更識という家に生まれた事で彼女が身に付けた人を見る目にもそう映っていた

だからこそ完成しないISを放っておく事は出来ないのだろう、色々と不利な立場になるかもしれないのに協力する事も約束してくれた

そして何よりも彼はISを相棒と称していた、ISには意思のようなものがあるかもしれないと言われているが、康太はまず意思があると断言した

それはそもそもISの開発者たる篠ノ之束に近い存在だからかもしれないが、それだけ機体を信頼しているのも事実だった

それに対して簪は己を振り返った、倉持技研の開発が停止し自分で開発を続けるのは打鉄式式が自分の機体だからというのはあるが、それとは別に自身が抱えるコンプレックスの為でもある

簪の姉でもある更識楯無、更識の党首となった彼女は自分の機体を自分だけで組み上げた、幼い頃から周囲に優秀な姉と比較され続けた劣等感、同じように自分でISを完成させれば少しは近づけると思っていた行動だった

しかし康太の言葉によってそれが揺らぐ

ISに意思があるのは確定として、康太の言うように宇宙へと飛ぶ為に生まれてきたにも関わらず、空さえも飛べない今の状況に、打鉄式式は何を思うだろうか

そして打鉄式式の事をただの機械、自身のコンプレックスを解消する為の手段として見ていた事を思っていた彼女は決意した

「本音」

「なに〜、かんちゃん？」

「今更だけど、都合が良い事だけど、本音にも打鉄式式の開発、手伝って貰っても良い？」

「かんちゃん……うん、もちろんだよ！だって私は、かんちゃんの従者で〜、なによりも大切な幼馴染だもんね〜！」

「うん、ありがとう、本音」

姉からの指示で動いているかもしれないと疑って拒絶していた幼

馴染でもある布仏本音、彼女は簪の言葉に心の底から嬉しそうな微笑みを浮かべて簪の手を取る

それを見て簪は自分の被害妄想だったと実感し申し訳ない気持ちになる、だから今度からはちやんと本音とも向き合う事を決める

自分を心配してくれた幼馴染にもちやんと頼る事を決め、そして簪は改めて打鉄式式を見る

まだまだ未完成な機体、でも色々な都合に振り回され未だに空を飛ぶ事さえも出来ないこの子の^{打鉄式式}為にもまずは飛べるようにしようと決意した簪は気持ちを一新して打鉄式式の開発に取り掛かるのだった

52話 妹たち

私には好きな人が居た、同じ学校に通う男の子で、サッカー部のエースでもあった人だ

ISという存在が現れてから世界は変わっていった、学校でも男子に対して大きな態度を取る女子が年々増えていったし、男子もそんな女子達に表立って逆らうような真似はしなくなっていった

けど彼はそんな中でひたすらにサッカーに打ち込んでいた、プロになりたいたと夢を追い掛ける姿は他の女子からも人気が高かった

そんな彼と私が付き合う事になったのは彼の方から告白されたからだ

当時はまだ気になる程度だったけど、共に過ごす内に好きになっていた

でもそれも長くは続かなかった、原因は私の母親だ

私の母はISが誕生してから勢力を伸ばしてきた女尊男卑を掲げる女性権利団体である『ヴァルハラ』に参加していた

それも結構高い地位にいるらしい、理由は私が簡易検査でIS適性を叩き出した事だ

優秀なISパイロットの卵を産んだ女性だから、そんな理由で高い地位を得られたのだとか

それで私は『ヴァルハラ』によく連れ出されるようになった、そんな人達の姿を間近で見ってきたから逆に私は女尊男卑に染まる事はなかったのだろう、反面教師というやつだ

だからだろう、私が男の子と付き合い始めたとき知った時の母の怒声は

男は穢らわしいだの、ISパイロットとして相応しくないだの、思いうすだけでも呆れるような主張をしてきた

当然、そんな言葉をまともに受け止める必要もない私はそれを無視し続けた

そんなある日の事だった、彼は突然に逮捕された、罪状は不法薬物所持、体内からは薬物の成分が検出されていないが麻薬といった代物

は所持しているだけでも罪に問われる

学校で手荷物の中から、女子生徒からの通報で見付かった事、その女子生徒が女尊男卑に傾倒していた事は偶然ではないだろう

そして『ヴァルハラ』は警察や司法にもその手を伸ばしていた、彼が有罪判決を受け少年院に送られる事になるのは間違いがなかった

そんな状況になって、母は「所詮は男なんてこんなものでしよう」と言った事は覚えている、私は反射的に拳を握っていた

その後の事はあまり覚えていない、気付けば暗い地下の牢獄に幼い子供達と一緒に押し込められていた

頭を冷やし悔い改めるようにと言われたが、誰がそんな事をするものかと

それでも同じ牢獄に捕らえられていた子供達が少しづつ連れていかれる事に私は不安を覚え、牢獄の扉が開かれる時に抵抗した

それは向こうがスタンロッドと呼ばれる警棒とスタンガン併せたような武器で打ちのめされて叶わない

そして連れていかれた子供達は二度と戻る事はなかった、あの子達がどうなったのか、それを知ったのは後になってからだった

それでもろくな事にはなっていないのだろう、そう確信していた私は一つの覚悟を決めた

表向きは『ヴァルハラ』に従順になった振りをしよう、望んだものではないがIS適性はSランクである、ならば将来的に私にISを与えようとするだろう

だからその時までには堪え忍び、その時が来たならばこの手で『ヴァルハラ』を壊滅させる、だがその計画は意外な形で頓挫する事になる後にSNARKと呼ばれる事になる存在、義理の兄という関係になる紫藤康太との出会いによって

◆ 「朝か……」

懐かしい、という程には昔でもない過去の記憶を夢で見ている紫藤奏はそう呟くとベッドから降りる

枕元の時計は朝の五時を示している、いつもその時間に起床してい

る奏は軽く身嗜みを整えるとジャージに着替えると外に出て夏ではあるが夜の間に冷えた空気を感じながらランニングを始める

今出てきた建物、『紫藤院』と適当に名付けられた家は奏が保護されてから他の義妹となった小さな子供達と共に暮らしている家だ

そして奏は義兄曰く「ISだろうが何だろうが、戦闘するならば最後は結局体力勝負」という言葉に従って体力作りとしてランニングをしていた

それまで住んでいた街とは違う街での新しい日常を奏は送っている

それから一時間程度は軽く走った奏は家に戻ると掻いた汗をシャワーで洗い流す、その頃になると義妹達も起きてくる時間だ

そんな義妹達の為にも朝食を用意しておく、とはいってもトーストに目玉焼きを乗せただけの簡単なものだ

そしてある程度朝食の用意が終わると廊下の方からパタパタと騒がしい足音が聞こえてくる

「おーつす、奏ー」

「お姉ちゃん、おはようなのです〜」

「おはよう、奏お姉ちゃん」

「ええ、おはよう、菊代、萌、静流。ほら、まずは顔を洗って来なさい。それまでにはこつちもちゃんと完成させておくから」

若干生意気そうな雰囲気のある菊代、おっとりとした様子の萌、一番幼いながらもしつかり者の静流、その三人が奏と同じように康太に保護され、そのまま家族となった妹達の名前である

それぞれ十歳、九歳、八歳と奏とは少し歳が離れるが共に同じ境遇を乗り越えた事もあり義理とはいえ姉妹仲は良好と言える、そして長女というポジションもあり奏は三人の面倒を見ていた

炊事洗濯掃除など、色々と大変ではあるが夏休みが明ける頃までにはイギリスに行った際の流れでこの家に康太の友人であるセシリアの使用人だったチエルシー達が来る事になっているので、奏はそれまでは頑張るつもりだった

黄身が半熟になるくらいに焼いた目玉焼きをそれぞれ先に焼いて

いたトーストの上に乗せ、エッグトーストの完成となる

そのタイミングで洗顔を終えた妹達も戻ってくる、その後はそれぞれ各自の分を乗せた皿を運んでテーブルに座り手を合わせる

「いただきます（なのです）」

そうして思い思いに食事を始める四人、奏も自分で作った朝食を食べ、一つ頷く

「うん、こんなところね」

いつもと同じように仕上がっている事に一先ずは満足し、残りを食べ進める

奏は塩コショウが掛かった目玉焼きのままだが、妹達はそこに醤油やらソースやらマヨネーズやらで自由に味付けしている

それから朝食を終え、奏は調理器具を洗いながら今日の予定を考える、世間では学校は夏休みであり、そもそも表向き前の自分達は死んだ事になっているので以前の学校には通えない奏達は学校からの宿題がある訳でもなく今の時期は割りと時間が余っていた

とはいえまだ中学生と小学生の年齢なので義務教育を受ける必要があるので夏休み明けから通う学校で置いていかれないようにと問題集などを買ってきてはあるのだが

「パンが少なくなつて来たから買っておかないといけないわね。丁度良いからお昼はいつものお店で菓子パンにしようかしら」

そんな奏は朝の家事を終わらせた後、残っている食べ物を思い浮かべながらいつもパンを買いにいづく近くの商店街にあるパン屋に寄ろうと考えていた

普段の朝食に使う食パンの他にも様々なパンを作っている店であり、その味も絶品なので妹達も喜ぶだろう、そう奏は決めると洗濯物を干し、妹達の勉強を見たりしながらその事を伝える

妹三人もそのパン屋の味は知っているので直ぐに全員一致で賛成となり昼になる少し前に商店街に向かう

日本の商店街にしては珍しいちよつと肥満体型な白人の中年男性の店主が営む『ぐっどパンや』にて食パンや昼食のパンを購入していった奏達、その後は適当に商店街を歩いてしたが、至るところに貼

られている花火大会のポスターが目に入る

「わあ、花火見てみたいのです!」

「祭りって事は屋台とかあるよな!行ってみようぜ!」

「良いかな、奏お姉ちゃん」

篠ノ之束という世界の軍事バランスを簡単に左右出来る存在との繋がりがあある事から体制が整うまでは誘拐といった事を懸念してあまり外出も出来ない奏達、だが幼い妹達はそれだとフラストレーションも溜まる一方であり、奏としてもなんとかしたい事だった

こうして近場には買い物に来る程度なら固まっていれば専用機を持つ奏が対処も出来るから問題ないが、それでも時には遊びたいものだけ分かったわ。ちよつと兄さんに応援頼むから、少し待っててね」

人の多い中に行くにしても奏一人だと妹達を守りきれるか不安が残る、その為に康太にも手伝って貰った方がより安全だと奏は携帯端末を操作して連絡を取る

忙しいかとも思ったが、直ぐに呼び出しに応えた康太に奏は事情を説明、奏は少し身構えたが康太はその事を二つ返事で了承、結果として義理の兄妹達の外出が決まったのだった



奏達から連絡を受けてオレも了承したが、その夏祭りが行われるという神社を見て少しだけ驚いた

神社の名前は『篠ノ之神社』と言い、篠ノ之博士の生家でもあるのだというのだから

しかし篠ノ之博士は今日には来ていない、此処に居るのはオレの他にクロエとリナ、ミネツサ、そしてリリアナだ

神社の鳥居の部分で合流しようとしていたがオレ達の方が早く着いたようだ

「もぐもぐもぐもぐ」

「リリアナ、ちよつと食べ過ぎじゃない?」

「ん?まだまだ食べられるよお?」

「普通こういうのって全員集まってから店を回るものだと思うのだけど……」

「お腹が減っちゃったから仕方ないよねえ」

そして早速とばかりにリリアナが屋台の料理を大量に買い込んでいた

スラム育ちという事で主にミネツサが一般常識を教え込んでいた途中であり、実践として連れてきた側面がある

ちゃんと事前に渡しておいたお小遣いをちゃんと使っている辺りは成長しているのだろう、最初の方は盗めば済むというスラムの常識が染み付いていた

まあ、ミネツサが必死に教育していても理解しなかったがオレが『日本の警察はスラムと違って賄賂が効かないから小さな犯罪やるのは割に合わんぞ』といったら直ぐに理解していた辺り、価値観が違うのだろう

尤も、この言い方だと割に合うならやってよし、とも受け取れるのだが武力を行使して数百人の命を奪ったオレが言える義理ではあるまい

と、そこに奏達がやって来た、他の妹達も一緒だ

「こんばんは、兄さん」

「おーっす、コーター！」

「お兄ちゃん、こんばんはなのです！」

「コウタお兄ちゃん、こんばんは」

「ああ。奏に、三人も元気そうだな。新しい生活には慣れたか？足りない物があればいつでも言ってくれよ」

奏に続き菊代、萌、静流の三人も挨拶してくる

体調などは問題なさそうだが、それでもあまり面倒を見てやる事が出来ないから何か不足している物とかはないか訊ねる

「家事がちよつと大変だけど、でも直ぐにあのメイドさん達が来るから頑張るわ」

「そうか、苦勞を掛けるな」

奏は一番の年長だからかあまりそういった要求を出さないのかもしれない、まあそれとは逆に――

「うーん、色々用意してあるけど、やっぱずっと家に居てばっかだから

ゲームとかあると退屈しないかなあ」

「えっと、萌はぬいぐるみが欲しいのです。寝る時に抱っこできるような大きなぬいぐるみが良いのです」

「私は絵を書きたいから、絵の具とか貰えたら嬉しいかな」

子供らしく、ちゃんとわがままを言える三人が素直なだけだろう

とはいえ奏にも何かプレゼントを贈るとしよう、訓練に妹達の世話と色々引き受けてくれてるからな

「分かった、それぞれ用意しておくよ」

オレが約束してやると三人は無邪気に喜ぶ、今まで辛い目に遭ってきたのだからこれくらいは叶えてやりたい

「本当にお兄ちゃんやってるのね、コウ」

そしてオレが三人と話しているとオレが一人っ子だった事を知っているリナが近付いてくる

「えっと、どちら様なのですか?」

「私はリナⅡゴールドエンバーク、コウの幼馴染よ。よろしく、えっと――」

「萌は萌なのです!よろしくなのです、リナお姉ちゃん!」

「お姉ちゃん、お姉ちゃんかあ、良い響きね!よろしく、萌ちゃん」

「えへへへ」

当選ながら初対面になるリナの事を知らない萌は首を傾げるが、その後は自己紹介をして直ぐに打ち解け、リナに頭を撫でられた萌ははにかんでいる

ミネツサとリリアナも奏達とは初対面だし、それぞれ紹介するが二人は日本語をまだ勉強している途中なのでオレが通訳として動く

「ミネツサ・トムソン、ラビットフット社に新しい技術者として入る事になったわ。今回は息抜きと日本の勉強を兼ねて参加したから、これからよろしくね」

「もぐもぐ、リリアナ・トムソンだよ。もぐもぐ、よろしくねえ、もぐもぐ」

「せめて自己紹介の時くらいは食べるのを止めて欲しいが……まあ良いか、今後の教育に期待しよう」

ミネツサはともかく、リリアナは今も食べ物食べている

そしてリリアナの姓だがミネツサと同じ物を名乗る事になった、まあ紫藤を名乗っても違和感あるから仕方ないよな

奏達の方もそれぞれ自己紹介を終えてようやく祭りを見て回る

「でも、兄さんは本当に大丈夫だったの？普段、パイロットとして忙しいんじゃない？」

「ん？別に問題ないぞ。最近は訓練だけだし、それも日課になってるからな。教授の研究がもう少しで一段落しそうだからそこからは分らないが、折角の機会だからな。それに、子供つてのは目を離すと直ぐに何処かに行ってしまうものだ。例えば動物園でライオンの檻に入って子ライオンを驚掴みにするとかな」

「いや、それは流石に有り得ないでしょう」

「H A H A H A H A H A」

「ちよつと、冗談よね？冗談の類いなよね？」

流石に菊代達くらいの年齢ではないが二、三歳の頃に実際にやらかった人間は居るからな、此処に

「それはそれとして、オレもまだ高校一年だ。夏休みなのに撮影して出撃して教導に行つて出撃して、遊んだ記憶がないのは流石に、な……」

普通ではないのは自覚しているし諦めた、だが大人になった時に思い返してそれは悲しすぎる、だからせめて家族と遊びに行つた思い出くらいは欲しいと思つたのもある

という訳で今日は普段の訓練とかを忘れて遊ぶ、そう決意してオレは祭りの喧騒の中に向かうのだった

□金魚すくい

「金魚さん、かわいいのです」

「横に亀すくいってあるんだが……え？同じポイでやるの？マジで？」

ミネツサとリリアナは馴染みがないから、オレ達は夏祭りとはいえそこまではしゃぐ程でもないから見る屋台は菊代や萌、静流に任せた

ところが、萌が金魚すくいに興味を持った

が、金魚の隣の水槽に亀すくいとして小さな亀が何匹も居て、同じようにポイで掬おうとされていた

「おう、兄ちゃん亀すくい見た事ないのか？うちは大丈夫だぜ。ちゃんと登録もあるし、亀の種類も表示して台帳も付けてるからな！」

そう言つて屋台には『第一種動物取扱業者標識』と書かれた紙が額に入れて屋台の見える位置に掲げられていた

こういつたのが必要なのか、屋台も大変なんだな

「亀もそうだが、金魚も水槽とか用意してないからなあ」

「それならほれ、売ってるぜ。金魚のエサの他に水槽用の砂にエアポンプと水草、カルキ抜きも一セットで三千円、大分安めだぜ？」

「お願いします」

という訳で亀すくいはやらないが金魚すくいの代金の他に水槽他一式も購入する事となった、上手く商売しているものである

「ん〜？魚を掬ってどうするのお？食べるのお？」

「流石に食べないわよ。見て楽しむペットにするの。これは有名だから私も知ってるわ」

やる気のある面々は既にポイを受け取って参加している、リリアナは食べ物でないからか興味が薄かった

「あく、破けた！」

「こつちもなのです……」

「難しいね、これ」

「ははは、お嬢ちゃん達残念だったな。でもちゃんと一匹はやるから安心しな」

そういつて予め水草と一緒に一匹ずつ袋に入れられた金魚を渡す店主、それを受け取つて萌も嬉しそうな笑顔をしていた

「水槽も買ったんだから、ちゃんと世話するんだぞ」

「はいなのです！萌がすっかりとお世話するのです！」

生き物を飼うという事には責任があるという事だが萌がしっかりと返事をする

そう言つて世話をしない事も多いのだが、これも経験だな

「ふふん、なら今度は年長組の出番ね。おじさん、次は私もやるわ！」
「私も、こういった事は初めてなのでやってみたいです」

そして年少組が終わった後はリナとクロエが参戦した
そうして意気揚々と挑戦するのだが――

「あつ」

「はい、嬢ちゃんも残念だったな。ほら、金魚一匹だ」

「ぐぬぬ、このポイ細工してないわよね？」

「ははは、人間の悪い事を言うなあ。正真正銘、市販のポイに何の手も加えてねえぜ。それに、そちの嬢ちゃんは上手いもんだろう？」

リナ、あつさりとポイが破けて失敗、一匹だけ貰って終了となる
そしてクロエだが初挑戦とは思えない慎重さで三匹の金魚を掬ってみせた

リナは小さい頃、オレと一緒に近所の祭りでの経験があるのに負けた形だな

結局リナはクロエに負けたのが悔しかったのか更に三回程挑戦したのだが一匹掬えただけで終わるのだった

□型抜き

「型抜きか。まだ残ってるんだな」

「コウタさん、これはどういう遊びなんですか？」

金魚すくいをした後でまた屋台を巡っていたのだが、そんな中に型抜きを見付けたオレは思わず足を止めた

他の面々も型抜きは知らないようで、クロエがオレに訊いてくる
オレも小さい頃に見ただけであまり経験はない屋台だ

「簡単に言えば板状のお菓子に書かれた絵を針や爪楊枝でくり貫くん
だ。上手く割らずに抜けたなら景品と交換って形だな」

「手先の器用さが大事な遊びなのですな」

「まあ、そんな簡単にはいかないんだけどな」

具体的には上手くいっても店側が何だかんだと難癖つけてくるので
実際に景品と交換可能なのは少なかつたりする

まあ割れても食べられるし、過程を楽しむ感じの遊びだなこれは、

最近は味も向上してるらしいし

という訳で興味のある面々でこれも参加する、リリアナが参加するのは意外だなと思っていたのだが――

「もぐもぐ」

「せめて一度くらいは針を入れようぜ……」

「んー、まあまあ？」

実際に型を抜く以前に速攻で食べた、一応ルールは教えた筈なんだがなあ

と、それはそれとしてオレも自分の分を進める

店側に聞いたら手で折っても良いという事だから早速だ

「あ、割れちゃったのです」

「結構難しいね」

菊代は細かいのが合わないからと参加しなかったが萌と静流は参加していた、だが簡単な方の型でも針を入れる力が強すぎで早速割ってしまっていた

そしてオレはまず手で折る前に針で溝を掘っていく

元からある溝に沿って、真つ直ぐになるようにだ

掘れたら折る、そうすれば溝にそって大きなパーツが削れていく

無理なところは力を入れすぎないように、描かれた溝を掘り進める、削っていく針も、押さえる手も、力を入れすぎると割れるから慎重に、だ

そしてそれも終わると残った細かい部分、そこはもう少ないから溝を掘るのは止めて直接削っていく

一通り終わったところでチェック、削り残しがないか確認してから終了だ

「ほい、難易度上、リスの完成だ」

曲線が多く尻尾といった細かい部分もあったから難易度が高めに設定されていた、それを店主に見せると店主は渋い顔をして項垂れる

「ま、負けた……」

「よし」

型抜き自体は小さい頃にやったくらいだがガンプラで器用さは上

がったのかもな

成功した景品はお菓子の詰まった大きな袋だった、難易度が上中下の三段階あって、それぞれの難易度で袋の大きさが違っていた、その袋をオレは菊代達に渡す

「ほら、ちゃんと仲良く分けろよ」

「やった、サンキューコータ！」

「ありがとうございます、お兄ちゃん！」

「でも、折角コウタお兄ちゃんが取ったのに、良かったの？」

「別に良いさ。中身的に、お前達の方が良いだろうしな」

「そっか。ありがとうございます、コウタお兄ちゃん！」

「おう」

中身は駄菓子的大量に詰まっていたが、こういったお菓子なら菊代達の方が喜ぶだろう

そしてリリアナ、物欲しそうに見ているが流石に取るなよ、そのりんご飴買ってやるから

「出来ましたー！」

「どれどれ？ふむ、難易度下のコマ、合格だ」

そうしているとクロエの方も終わったらしい、直線の多いコマの形をしたものは初心者であるクロエにもクリア可能であり、持ち前の集中力で合格したらしい

オレが取ったのと比べるとかなり小さめだが駄菓子の入った袋を受け取ったクロエは嬉しそうに微笑む

「やりました、コウタさん」

「初挑戦でいきなり成功は大したものだ。オレも初めてやった時は結構割ったからな」

おまけに一回百円と安かったのもあって、もう一回、もう一回とやっている内に結構お金を使ってしまうんだよなあ

それでも上手く抜けた時の達成感はかなりのもものだ、集中して作業した後ともなれば尚更な

おまけに此処のはお菓子の詰め合わせだったが、大抵の店は賞金と交換という形だったから、子供ながらに熱中したのも良い思い出だろ

う

その後、ミネツサが割りと熱中して二千円くらい使い込むまでこの場に留まる事となるのだった

□射的

その後はりんご飴を人数分買い齧りながら祭りを進む、花火の時間も迫ってるし何かゲームをするなら次で最後にした方が良い時間かなと思っっていると菊代が射的の屋台を見付けて走っていった

射的ならばオレもかなりやっている、というか現在進行形でパイロットとして訓練してるし実戦も経験してるだけに得意な部類だ

当然ながらコルク銃とでは勝手が違うが弾道さえ把握すれば攻略は容易い、なのでオレも乗り気で参加しようと思っていた時だった

「あれ、康太？ 久し振りだな。夏休み中あんまり会えなかったけど、元気してたか」

「一夏、それに一秋に筈にラウラもか。そっちは元気そうだな」

声を掛けられ、振り向けば普段着姿の一夏と一秋、和服姿の筈とラウラが居た

夏休みの間、訓練で学園に来る時以外は顔を合わせてなかったが、四人ともこの祭りに来ていたのか

一秋とラウラは恋人同士なので良いとして、よく見ると一夏の隣には赤毛でバンダナを巻いた和服姿の少女が立っている

同年代、と言うには少し下、奏と同じくらいの歳に見える少女だった

53話 夏祭り

お互いに此処に来ているとは思わなかったが、偶然とはいえ合流したのであれば共に回ろうと一夏から提案される

それに一秋とラウラ、箒も賛成した事で決定する

「それにしても康太の方は大所帯だな。クロエ以外は初めて見た顔ばかりだ」

「そういえばそうだな。ついでだし、紹介しておくか」

夏休みになってから仲間になったり家族となった面々なので一夏達が初対面なのは当然の事だ

なのでまずは自己紹介となる、ミネツサとリリアナに関しては日本語がまだ上手く話せないので通訳込みで、だ

「まずは妹達の方から紹介するか。上から奏、菊代、萌、静流だ」

「紫藤奏です。一応はパイロット候補です。今後も訓練等で一緒になる事があるかもしれないのでよろしくお願いします」

「紫藤菊代。まあよろしく」

「紫藤萌なのです。よろしくなのです」

「紫藤静流です。いつもコウタお兄ちゃんがお世話になってます」

手短ながらもそれぞれの性格を反映したような自己紹介をする四人、改めて同じ紫藤姓が並ぶのは不思議な気分だ

「い、妹!?!康太にか!?!」

「血は繋がってないけどな。というか此処に居るのは殆んどが孤児だ。四人も普段は紫藤院っていう施設に居る」

「そうか……それは不躰だったな……」

「気にするな、悪気がないのは分かっているからな。それで、次は外国人チームか？」

以前にオレが天涯孤独の身だと聞いていた事から箒が驚いた様子を見せていたが仕方のない事だろう

四人もそれは受け入れている事だ、実の親が親だっただけに未練も少ないらしい

それでも幼い子供なのだから支えられるところは支えていきたい

が

そして残りの外国人三人の方だが取り敢えずリリアナとミネツサは英語で話しておきたい事を聞いておきそれを代弁していく、リナは自分で話せるからスルーだ

「まずこの小さい方がリリアナ・トムソンだ。詳細は話せないが任務で外国に行った際にスラムで保護した。コイツもパイロット候補になる」

リリアナは紹介を丸投げしてきたから当たり障りのない事を紹介するに留める、アメリカでマフィア襲撃して救出したとか言えないからな

「そしてこっちがミネツサ・トムソンだ。ラビットフット社の新たな技術者になる。専門は機械工学、生体工学、脳科学といった分野だ。リリアナと同じように任務先で拾ってきた。主に機械式の義手義足、パワーアシストスーツの開発をしている」

「えっと、ヨロシクオネガイシマス」

オレが一通り説明するとタイミングを見てミネツサは日本語で挨拶をする

まだ発音やら拙い部分はあるものの意味も理解してきている為にミネツサが日本語を習得するのも近いだろう

「リナは自分でやれ」

「私だけ扱い酷くない!? まあ日本語話せるから当たり前だけど! 初めまして、私はリナII ゴールデンバーグ。コウの幼馴染よ。よろしく」

「あれ、康太の幼馴染?」

オレの出自を知っている一夏だけが幼馴染という単語に引っ掛かる、まあ別の世界から来た人間の幼馴染となれば気になるだろう

「本当、偶然出会ってな。詳細はこれまた機密に触れるから話せないが、オレの幼馴染だ。カナダ系のハーフになる」

「そっか、良かったな、康太」

「ああ、そうだな」

会えないと思っていた人間との再会は素直に嬉しいものである、一夏の言葉に素直に頷くが、今度は向こうの番だな

「それで、そっちも自己紹介したらどうだ？オレも一人知らない顔があるからな」

「そういえばそうだな。まずは俺からにしようか。初めまして、俺は――」

一夏、一秋、箒、ラウラがそれぞれ奏達へと自己紹介をしていく、ミnetzサ達へは同時翻訳をしつつ、リナは余計な口を滑らさないように釘を刺しておく

そして一夏達の一行の最後の一人、オレも見覚えのない赤毛の少女が最後に自己紹介をする

「あの、初めまして。私は五反田蘭と言います。普段は私立聖マリアンヌ女学院の中等部に通っています」

「ああ、オレは紫藤康太。ラビットフット社のテストパイロットをやってる。一夏とは同じ企業のパイロットという事になるな」

初めて会った少女、五反田蘭に対してオレは名乗ってもなかったので軽く自己紹介をしておく

年下かと思っていたが中等部という事で正解だったか

「あ、一夏さんからも聞いています。とても優秀なパイロットだった！」

「成る程、一夏がなあ」

反応から見て、この子もまた一夏に心惹かれている一人なのだろう、普段会う機会は少ないしIS学園には他にもライバルが多いが頑張ってくれと思うしかない

それにしても、聖マリアンヌ女学院か

「奏、お前達が通うのも聖マリアンヌ女学院だよな？」

「そうだけど」

「そうなんですか？あの、私は今中等部三年生で生徒会長をやってます。何か困った事があったら言って下さいね」

「あら、私と同じ年なのね。改めて私は紫藤奏。よろしくね、五反田さん」

「蘭で良いですよ。その代わり、私も奏さんって呼ばせて貰いますね」「良いわよ。よろしく、蘭さん」

「はい、奏さん」

奏達だが近くで且つ名門は何処か無いかと探していたら聖マリアンヌ女学院という場所があったので全員で確認してそこに九月から編入する事になっていた

エスカレーター式の学校だから高校まで進路に悩まなくても済む、奏は兎も角として菊代達の方も問題ないと言っていたから初等部に編入する

成績の方も、意外と全員頭が良かったので大丈夫だろう、本当普段の態度から想像もつかないが菊代が頭が良かったのは驚いた、その時に思わず感想を漏らしたら脛を蹴られたけど

「取り敢えず射的でもするか。花火の時間的に終わったら移動しよ。ぜ。実は綺麗に花火が見える穴場を知ってるんだ」

ある程度の自己紹介が終わったところで一夏からの提案により射的をする事になる、今からレクリエーションを交えて親睦を深めれば良いからな

という訳でまずは一夏達の番となる、箒と蘭の二人に挟まれる形だからか屋台の主人がおまけ無しにしていたが

その後、コルク銃を受け取った三人と一秋にラウラの五人が並んで射的を始める

そんな五人だがそれぞれ銃の構え方に特徴がある、箒やら一夏、一秋は適当に、蘭は一見すると堂に入っているが強張っている様子が見える事から緊張しているな

そして軍人だったラウラは見事な構えをしていた、とはいえそれの結果が伴う訳ではないのだが

「兄ちゃん、小物ばっかだな……堅実と言えば良いのか、地味と言えば良いのか……」

「あはは……」

一秋はかなり当てていた、とはいえ落としたのはキャラメルやチョコレートといった駄菓子ばかり、当たれば倒し易いが単価的には低い目標ばかりだった

「くっ、弓ならば必中なのー！」

「くっ、実弾ならば命中していた筈だ！」

そして箒とラウラは殆んど命中していなかった、箒は普段の様子を見ていれば射撃が苦手なのは分かる、ラウラは単に構えが良くてもコルク銃の弾道に慣れていないからだな

まあその後は一夏と一秋がそれぞれフオローしていたから本人達は満更でもなさそうだったけどな

また、残る最後の一人、蘭はと言うと

『おー』

なんと液晶テレビの代わりとなっていた鉄の板を倒していた、緊張も合間ってラッキーヒットだろうが、それが偶然にも景品を倒すのだから中々の強運の持ち主だな

まず絶対に店側も取らせるつもりがないだろう景品を撃ち倒したことで周囲からも拍手が上がっている

まあ、本人が微妙な顔をしている辺り、箒と同じように一夏にフオローされたかったのかもしれないが

そして一夏達の番が終わった後はオレ達の番になる、参加者は年少組とオレだけだな

「大将、四人分」

「おう、見ての通り今日は大損だったからな。お手柔らかに頼むぜ」

「ははは、それは状況によるかな」

菊代、萌、静流の分も合わせた四人分の代金を払いコルク銃を受け取る、だがオレは装填はしておくだけで三人の様子を眺める

「それで、何狙うんだ？」

「萌はあのひよこさんが欲しいのです」

「結構大きいね。これで取れるかな？」

「なら三人で一緒に当てれば良いだろう。ほら、せーので撃とうぜ。ひよこが取れたら次はあのゲーム機な！」

と、まずは萌の希望でまんまるなひよこのぬいぐるみ兼クッションを狙う事にしたらしい

とはいえそこそこ大きめのぬいぐるみだ、おまけにクッションにもなるからコルク銃で撃つても衝撃を吸収されそうだ

それでも三人はぬいぐるみを狙う、五発ある弾を使い、最初の内は狙いもタイミングも合わなかったが四回目でかなり揃っていた

それなりに台から押しているのもあって、あと一押しといったところだろう、だから三人に合わせてオレも同時にぬいぐるみを撃つ、四発のコルク弾が一齐に命中し、それが切っ掛けとなりぬいぐるみを台から落とす

ラウラが構えも綺麗で狙いも正確だったからな、弾道を見極める手間が省けたのが良かった

「がはは、嬢ちゃん達の仲の良さに兄貴の手助けが加わればそりや落とされるわな。ほら、嬢ちゃんのお望みのひよこだ」

「ありがとうございます、おじさんー」

そして萌がひよこのぬいぐるみを受け取り胸に抱き抱える、さてオレは一発しか撃ってないから残り四発か

「菊代はゲーム機として、静流は何か希望はないのか？狙ってみるぞ」「えっと、それじゃああのシャボン玉セットじゃダメかな？」

「あれか。ゲーム機よりはずつと簡単だろう」

静流が示したのはよくある小さなシャボン液が入ったプラスチック容器が二つにストローの付いた小さなシャボン玉セットだった

正直に言うとかかなり簡単な部類だからな、新しい弾を装填して構え、一撃で倒す

「自分じゃなくて妹達の欲しい物を狙うとは最近にしちゃよく出来た兄貴だな。それで、ゲーム機を狙うのか？」

「ああ、やるだけやってやるさ。ところで、そのゲーム機、台に固定してないよな？」

「がはは、その点は安心しろ。ほれ、ちゃんと空き箱の方を設置してあるからよ」

台にある箱を持ち上げ、中身のゲーム機を別の棚から見せる店主、だが箱を持ち上げる際にちよつと力を入れた辺り、中に重りを仕込んでるな

さて、残り三発で足りるかどうか、取り敢えず作戦を立てて実行出来るかオレ自身の動きを確認する

コルク銃はよくある空気式のもので動作方法はボルトアクションライフルと同じものだ

射撃訓練の時に同じボルトアクションライフルを扱ったとはいえ、あれは実弾で、尚且つ速射ではなかったからな

空撃ち禁止なので実際にレバーを動かしたりする事はなく動作確認だけだが、重りの重量次第ではいけるか？

「よし、やるか」

構えてまずは一発、ゲーム機の箱の上部に当たった事で対象は倒れる程ではないが大きく揺れる

そのまま振り子のように前後に揺れるのを見て上手く作戦が決まれば成功するのを確信して素早く次弾を再装填、まだ揺れる標的が奥へ向かって倒れるタイミングを合わせて再び箱の上部に命中させる

それにより更に大きく仰け反る景品、オレは先程と同じように素早く装填を終えると最後の一発を標的へと命中させ箱を倒す

箱の中から重りが転がる音が聞こえてくるのに苦笑しつつ、オレは静かにコルク銃を置く

「重りの量が足りなかったみたいだな、大将」

「がはは、あんなやり方されたら仕方ねえわな。全く、未恐ろしい坊主も居たもんだ。がはは……」

豪快そうな性格の店主が力なく笑いながら景品を渡してくる、まあ液晶テレビに加えてゲーム機まで一回分の代金で取られたからな、大損だろう

「まあゲーム機は俺が商店街の福引きで当たって持て余してたものだから、あんまり痛手って訳じゃないんだがな」

「成る程、それは良かった」

「がはは、だが目玉商品を持ってかれた事に変わりはねえ。来年はもつと取り難く工夫する事にするぜ」

◆ そのようなりベンジを誓いながら店主はオレへと景品のゲーム機を渡してくる、それを菊代に渡してオレ達は店を後にするのだった

射的屋の後にもオレ達は様々な屋台を巡った、遊んで食べて、おお

よそ祭りという物で思い付く限りの事はやったつもりだ

そして時刻も夜の八時に近付いてきた頃、そろそろ花火が始まるという事で一夏達が知るといふ花火を見れる穴場とやらに案内して貰っていた

神社の境内の裏手にある林の中を進んでいくオレ達、この林を抜けると一ヶ所だけ綺麗に木が存在しない場所に出るらしく、殆んど知られていない場所らしく他に人が居ない中で見られるというのだ

屋台を回っている間は軽くだった食べ歩きも、そこでならゆっくり腰を下ろして食べられるという事もあり、屋台の料理やラムネといった飲み物を買って込んで大所帯で薄暗い中を進んでいく

だがそんな時の事だった

「きゃっ!?!」

「おっと。大丈夫か、クロエ?」

「は、はい。ですが、急に足元が……」

ある程度進んだ辺りで隣を歩いていたクロエが躓いた為、オレは腕を前に出して受け止める

明かりもなく薄暗い道の為に木の根にでも引掛かったのかと思ふ足元を携帯端末のライトで照らす、するとクロエの履いていた下駄の鼻緒が切れていた

「あー、鼻緒が切れたのか」

「今日の為に束様から頂いたものなのですが……」

今さらだがクロエは此処に来る時に、祭りに行くと言った篠ノ之博士から、博士が小さい頃に着ていたという浴衣を着て来ていた

紺色に朝顔の柄が描かれた浴衣であり、それと一緒に女性用の下駄も受け取っていた

だがお下がりだったからか、下駄の鼻緒にガタが来ていたのかもしれない

「それだと歩けないな。仕方ない、一秋」

「ん、どうした?」

「すまん、ちよつと荷物預かっておいてくれ」

「分かった」

此処に来るまでに買っておいいた食べ物やらラムネやらを一秋に預かって貰い、オレは一度身軽になるとクロエに向き直る

「鼻緒が切れた時の応急処置は博士から習ったから後で直せるけど、あと少しのところの良い場所があるならそこでやろう。それまでオレがクロエを抱えていくな」

「えっ？大丈夫、なんですか？」

「ああ、クロエ一人なら軽いし、鍛えてるから問題もない。まあ、クロエが嫌ならこの場で直すが」

「いい、いえ！大丈夫です、お願いします！」

「そっか、ならちよっと失礼して」

クロエが許可してくれたので足と背中の方に手を回してその体を抱き上げる

小柄なクロエだから軽々と持ち上げる事が出来たし、後はオレが転ばないように足元に注意すれば良い

そうして予想外のアクシデントこそあったものの穴場という場所に来た

確かにその周辺だけ木々が存在しておらず、また花火が打ち上げる方に向けて緩い斜面がある事から腰掛けて花火を見るには最適と云えた

「それじゃあ、降ろすぞ」

「あ、はい……」

鼻緒を直すまでは片足だけ裸足になる為に適当なシートを敷いておいた

そして鼻緒の切れた下駄を受け取る、よりしつかりと見ると親指と人差し指の間に挟む前ツボという部分が切れているが、これなら応急処置が可能だ

「これなら直せるな。ちよっと待っておいてくれ」

財布の中の硬貨を見て五円玉があったので、これを使うか

「大丈夫ですか？」

「ああ、歩ける程度にはな」

簡単な修理だからそこまでの時間は掛からないだろうな

適当な紐を取り出して五円玉の穴に通す、それを下駄の底の方から前ツボが通っていた穴を通して鼻緒を通すように紐を結ぶ

そうする事で簡易的ではあるが歩ける程度には使えるようになる、五円玉は底の方で紐が抜けないように引っ掛かる役割をしている

「よし、出来た」

「ありがとうございます、コウタさん。あつ、花火が始まりましたね！」

軽く引っ張ってみて問題なさそうな事を確認したところで下駄を目線の高さに持つていつていたところ、その向こうから花火が上がってくるのが見えた

一夏や箒からこの花火は一時間は続けて打ち上げると聞かされているが、見事なものだな

「これが花火なんですね」

「クロエは花火を見るのは初めてなのか？」

「はい、映像では兎も角、直接目にするのは初めてです」

そういうクロエを見ると珍しく普段は閉じている瞼を開き、その黒と金の瞳で花火を眺めていた

「来年も同じように見れるさ。オレ達はIS学園の生徒だ。この町の近くに居る以上、来年も、再来年もな」

「そうですね。あの、コウタさん。その時はまた、一緒にお祭りを回ってくれますか？」

「ん？オレで良ければ別に構わないぞ」

「それでは、また来年も楽しみにしておきますね」

「そうだな。来年はもう少し遊びたいもんだが」

夏休みに入つての事を思い返すが、撮影やら戦闘、教導といった事ばかりで学生らしく遊びに行った記憶があまりない

そして夏休みといえば一つ思い出した事がある

「そういうえば、プールとかに遊びに行く約束してたが、結局行けなかったな」

「そうですね。ですが、私はこれまでの日々も十分に楽しかったですよ」

「そうなのか？」

「はい。以前までの生活ではこうして学生生活を送る事なんて考えも
しませんでしたから。それもこれも、コウタさんのお陰ですね」

「そんなにか？」

「そんなにです。コウタさんがこの世界に来て、そこから色々動き
出したんです。そうでなかったら東様が表舞台に出る事もなく、私も
また同じように外に出る事は無かったと思います」

そう言うときクロエは体ごとオレの方へと向き直り、言葉を続けた
「だからこうして花火を見る事が出来たのもコウタさんのお陰なん
です。コウタさん、私は貴方と出会えて本当に良かったと思っていま
す」

とても綺麗な笑顔で面と向かって言われると恥ずかしいが、オレも
クロエと同じような気持ちだった

「オレも、この世界に来て良かったよ。初めは何も分からない事だ
らけで不安もあったけど、また夢を見る事が出来た。惰性で生きてい
た状態から、生きてると感じられるような状態になれた。だからオレ
もクロエと出会えて良かった」

だからオレもまた同じように自分の思いを素直に伝える事にした
流石にオレは面と向かって言うのは恥ずかしいから視線を花火の
方に向けてだからクロエの反応は見えないが、お互い様という事で良
いだろう

「コウ〜！もっと集まって見ましようよ！料理も冷めちゃうわよ！」

「分かった！やれやれ、クロエも行くだろう？まだ下駄の調子が分か
らないから、手を貸すぞ」

「そうですね。では、少し手をお借りします」

言ってから恥ずかしさで何を話せば良いか分からなくなったが、そ
こでぴったりのタイミングでリナから声を掛けられた事でこれ幸い
と立ち上がる

その際にクロエに手を差し伸べ、クロエもまたその手を取って立ち
上がる

向かう先に居るのは学友に幼馴染、会社の同僚に義理の妹達、殆ん

どがこの世界で結ばれた縁だ

両親に会えなくなった寂しさもある、自身の手を血に染めた事への
負い目もある、それでもオレはこの世界で生きていく、この世界で結
ばれた縁を守っていく

今クロエとそうしているように、繋いだ手を離さないよう守ろう、
花火の光に照らされてクロエの瞳のような月が浮かぶこの夜に、オレ
は改めてそう誓った

此処が、オレの生きる世界なのだから

54話 鋼のレジスタンス

地上から空へと向け幾本もの火線が放たれ、逆に空から地上へと砲撃が叩き込まれる

戦闘機だけでなく攻撃機やヘリコプターといった本来は空戦には向かない機体までが駆り出されて、ミサイルや機銃を放つては反撃の砲火により翼がもがれる

唯一対抗出来ているのは数の少ないISのみ、だがそれも徐々に撃墜されていく、何故ならば敵はそれ以上の数のISだからだ

2032年の夏、男女戦争とも呼ばれた第三次世界大戦を経てその結果により、女尊男卑によって抑圧された男達、そして愛する者を女性権利団体によって奪われ復讐を誓った女達、ただ家族と共に居たいというだけの者達、そういった人々が集まり暮らしていた一つのコロニーが今、女性権利団体からの攻撃により滅びの危機に直面していた既にこの世界には国家という存在も無く、ISという圧倒的な力を背景に弾圧を行う女性権利団体によって支配されようとしていた

そんな中でかき集められるだけの兵器によってなんとか弾圧をはね除けてきたコロニーだが、戦力を集中させた女性権利団体の攻撃がこの日、開始されたのだ

高い機動性を誇るISに対して対空砲は目標を追う事が出来ず、元より空の敵に対して攻撃する事を想定していない戦車は陽動という役割しか出来ない

多少は対抗出来る戦闘機も、旋回性能の違いから直ぐに後ろを取られ撃墜される、戦闘機だけでは数が足りないからと本来は地上の目標を攻撃する筈の攻撃機やヘリコプターといった兵器はそもそも足の遅さからのしかならない

それでも人々は諦める事無く弾が尽きるまで攻撃を続ける、敵が此方を狙えばその分だけ残弾を消耗させる事が出来る、そうすれば虎の子であるISがきつと女性権利団体のISを撃墜してくれると信じて

ISを信奉し、IS以外の兵器を持たない女性権利団体は数が少な

い、故に数では勝っているコロニー側だが、今回ばかりは数が違った。コロニー側が保有するISが六機程度に対して敵は三十を超える、だが元より他に生きていける場所など存在しない為に彼等は例え自分達が倒れようとも後に続く者達の為に戦う。

そんな他の兵士達の希望を一身に背負うISパイロット達、その中で一人のパイロットが二機のISを相手にしていた。

女性にしか動かせないというIS、しかしそのパイロットは男でありながらISを起動し、このコロニーに合流してから幾度もの戦いを生き延びベテランと呼ばれるだけの場数を踏んだ少年だった。

「男の分際で神聖なISに触れるなんて！」

「その命で罪を購いなさい！」

故に女性権利団体の側からは優勢して狙われる、乱戦の様相を呈しているが位置情報が共有されている以上、長引かせれば他のISも集まってくるだろう。

その為あまり時間を掛ける訳にはいかない少年は敵のISと斬り結ぶ、ジエガンと呼ばれる機体がベースになっているそれは幾度の戦場を経て少ない物資を遣り繰りしてきた事で最早その原型を留めてはいない。

装甲は全身を覆っていた物から別の機体の物を継ぎ接ぎしており、塗り直す時間も余裕もなかった為に斑になっている。

武装も航空機用の機関砲を無理矢理転用しており、唯一IS用の近接武装であるレーザー対艦刀であるエクスカリバーだけが正規品の状態を保っていた。

今、鉄板を厚く重ねただけのシールドで一機の斬撃を防ぎ、エクスカリバーでもう一機と鏝迫り合いをしている少年、機体を回転させて二機の体勢を崩すと片方の敵に蹴りを叩き込み、距離を大きく離す。

その隙を狙って近くを飛行していた戦闘機が残っていたミサイルをISへと全て放ち、撃墜する。

そして残った一機にはエクスカリバーで直撃を与え、撃墜する。

「ハア、ハア……これで四機目……」

ミサイルを放った戦闘機に向けてサムズアップし、僅かな余裕を

持った少年、獅子堂劫火は戦場を見渡す

味方が不利になっていている場所、敵の数が多い場所、自身の機体のコンディションを鑑みて補給も視野に判断する

しかし戦場をマップで確認していた時、先程ミサイルで援護してくれた戦闘機が一条の閃光に貫かれ撃墜された

同じような閃光は無数に放たれており、その全てが味方を次々に撃破していく

つい先程まで同じ空を飛んでいた戦友の死に歯を食い縛りながらそれを行った敵を確認する劫火、だがその姿を見た時、戦場にありながら劫火は呆然とその場に佇んでしまった

「何だ、アレは……!?!」

それは異様な機体であった、円盤のような形状をした頭部らしきものに鳥の脚のように逆に関節が曲がっている脚部を備えた胴体という外見もさることながら、通常のISと違い十メートルを優に超える巨体を誇る黒い機体であった

その威容に吞まれていた劫火、だがその頭頂部にある四門の大型砲が自身に向けられる事に気付き、即座に瞬時加速を行う

だが時既に遅く、砲口より放たれた大出力のビーム砲により劫火の機体は半壊、地上へと墜落していくのだった

◆
女性権利団体の側が持ち込んだ巨大兵器、その巨体は戦場の中であつてかなり目立つ

そして見たところ巨体故に動きも鈍い、その為、地上に展開していた戦車や各地に設置されている砲台、空を行く航空機から一斉に攻撃が行われていた

空を駆け抜けるISに対しては牽制にしかならずともあれだけの巨体ならば命中させる事が出来る、今まで防衛に貢献出来なかった彼等はその思いを今此処で返すかのように砲撃を集中させた

爆煙の中に消えていく敵機の姿、これだけの火力を集中させればという思いが防衛側に流れる

だが次の瞬間、爆煙を幾つも切り裂きながら無数のビームが戦車

を、砲台を、航空機を貫いていく

大勢の悲鳴が木霊する戦場、自身の姿を覆い隠していた爆煙が晴れ、巨体が一步踏み出す

異様な機体であった筈の敵機、だが煙の中から現れたそれは大きく変わっていた

円盤状の頭部はバックパックとして背面に移動し、円盤内に格納されていたのかそれまで見えなかった腕が存在している

加えて鳥の脚のような脚部は腰から前後が反転した事で人間と同じ関節を持つものにならっていた

そして指や円盤状のバックパック側面より追加で放たれたビームが容赦なく全てを薙ぎ払う

「味方機、半数以上が大破!」

「他の敵ISも次々に防衛線を突破していきます!」

「怯むな!我々の背後には戦えない市民達が——!!」

コロニー内に設けられた司令部ではなんとか侵攻を阻止しようと必死に部隊の立て直しが行われていた

だが圧倒的な戦力差を前に残存戦力を再編する間もなく味方の被害報告が入ってくる

それでも諦める事は出来ない、元よりこのコロニーに居る者達に行き場などない、他のコロニーも此処と同じような状態であり、よしんば脱出出来たところで此処に住む者達を受け入れられるような余裕など存在しないのだ

故に彼等は最後まで戦う、そうしなければ守れない為に

「司令、あのデカブツが!」

「何だとツ!?!」

しかし現実には非情であった、先程から強大な火力で以て味方に多大な損害を与えていた巨大な敵、中央モニターに映し出されたそれは胸部に三つ備えた巨大な砲口を此方へと、コロニーへと向けている光景だった

「いかん!奴の狙いは——!?!」

非戦闘員であるコロニーの住人ごとの殲滅、そう司令官が悟った時

には敵機はエネルギーのチャージを終えたのか三門ある胸部の砲口より強力なビームを放つ

コロニーは高い防壁によって囲われており防衛力を高めてはあるが、砲弾ならばともかく大出力のビームを防げるものではない

瞬きする間にも到達せんとする熱量、だがそれらは割り込んだ何者かによりそのビームが弾かれる

拡散したそれは勢いを殺せずに後方へと流れるが防壁に当たるが、拡散された為に耐えきれぬ程度まで威力が下がっていた事で居住区への被害は皆無となっていた

そしてモニターにはビームを防いだ機体の姿が映し出される

「あの機体は……」

それは見慣れない機体であった、既存の機体のどれにも当てはまらず、白と赤紫を基調とした装甲に包まれているが、一番に目を引くのは背中から展開される翼であろう

機体本体のものよりもより赤みがかった赤紫色をしている機械の翼、良く見ればその背には二門のビーム兵器と身の丈程の剣が二本、備えられている

司令官はその剣に見覚えがあったが、先にオペレーターからの報告が入った

「ISコアの照合確認！あの機体は、獅子堂君の物です！」
「何と……」

先程撃墜されたとの報告を受けたが、機体形状が一変して出てくるという予想外の事態にその場の誰もが困惑する

そして、それと同時に、この世界のありとあらゆるモニターに一人の女性の姿が映し出されるのだった

◆
世界中のモニターをジャックして再生される映像、それは各ISを起点として発せられていた

ISコアからネットワークに繋がり、そこからありとあらゆる場所に接続されていたのだ

そして、それは大本であるISパイロット達にも閲覧が可能な代物

であった、というより強制的に見えるようにされていた

『このメッセージが再生されているという事は、残念ながら私が求めていた世界にはならなかったようだね』

『篠ノ之束!?!既に地球を見限った人間が、今更何を!?!』

モニターに映った女性、それはISの生みの親であり、数年前の男女戦争の際に地球を捨て宇宙へと去っていったとされる人物であった

それは元より数の少ないISコアの新規生産が不可能となったことに加えて撃墜されたISの補充も出来ないという事実でもあった

完全に失われたISコアの製造方法、その事もあって女性権利団体からは目の敵にされていた、ISの開発者であっても自分達に協力しないならば不要だという勝手な理屈でだ

『人間は未だ愚かで、戦いを好み、世界を破滅に導こうとしている』

だがこれは事前に仕込まれていた録画映像であり、実際に篠ノ之束本人が今に話し掛けて来ている訳ではない為に女性権利団体のパイロットの言葉に反応せずに、淡々とメッセージを再生していく

『宇宙へと上がる為の翼であるIS。それを軍事利用する事を企んだ何者かによるミサイル攻撃。この私でも流星に自分の住んでいた国を簡単に焼かれたくはないから白騎士を使った。他に方法が無かったとはいえ、翼を兵器として利用するしかなかった』

それは篠ノ之束という人間の回想だった、世間一般ではISの利用価値を示す為のマッチポンプとされた白騎士事件、その通説と真逆の事を示す内容であった

『結果として私の懸念通りに、人々はISを兵器としか見なかった。そしてISコアを造れる私にその生産を命令してきた。だから私は自分の子供とも言えるISを汚い大人達に利用される事を避けるため、生み出したコアは全て男には使えないように調整した』

それは全ての人間が驚愕する事実であった、ISが女性にしか扱えないという原因が不明だったのが、たった一人によって仕組まれた事だったのだから

『だけど、世界は何も変わらなかった。女性をパイロットにして兵器

としての運用を続け、あまつさえISを自身の欲を満たす為だけに利用する女性権利団体なんて集団が生まれ、世界に女尊男卑なんていう思想が蔓延する事になった。そして、あの大戦が起きる事になった』
第三次世界大戦、男女戦争とも呼ばれるようになった大戦は世界秩序を完全に破壊した

ISの迎撃の為に、核の使用も行われた大戦により地球上の多くの範囲が汚染され、人類の総数はかつての七十億という人数から一億にも満たない数となり、その生活圏は限られ、少ない物資を利用して生活するしかなかった

そして、今もまた人間は自らの過ちを正そうともせず、戦いに明け暮れている

『だから私は人類を捨て、これから宇宙に旅立つ事にする。けど、もしもまだ人類に良心とも言えるものがある事を信じて、私はこのメツセージを残そうと思う。ISコアには意思がある。私はそう生み出した。そして、このメツセージが再生されているという事は、ISコア自身が認め、自らの担い手として選んだという事なんだろう』

そう言うのと映し出されている篠ノ之束の雰囲気が変わる、その目はまるでモニターの向こうに居る誰かを見据えているかのような光があった

『男でありながらISに選ばれた誰か。君が何を願ってISが応えたのかは分からない。でも、ISが選んだというのなら、私は人間という種に対して最後の希望を、ISコアの全能力を君に託してあげようと思う。このどうしようもない世界で、唯一ISに選ばれた君が、望む未来を勝ち取る為に』

それは明らかに特定の人物に向けられた言葉であった、そしてこの世界に存在する、その男性パイロットとなれば目の前の一人しか該当しない

「獅子堂劫火、デステイニーインパルス、未来を切り開く！」

それまでの静寂を打ち破るかのように、背中に背負っていた二本の巨大な剣を両手に持ち、運命を関する機体が飛翔した



篠ノ之束の仕組んだプログラムによりISコアのリミッターが外され真の能力を解放された機体は、獅子堂劫火という人間の意思により二次移行セカンドシフトを行った事も合わさり、圧倒的な力を振るった

残存していた敵ISに肉薄すると二本の大剣にて切り裂き、距離があれば背中から伸びた二本の砲により撃ち抜かれる

火力を集中させ攻撃を命中させようとすれば両手より発生したビームによるシールドで悉くが防がれる始末だ

そして弾切れのタイミングを見計らうと再び飛翔した機体は更に撃墜数を増やしていくという結果となった

三十は超える数が居た筈にも関わらず、既にその半数以上がたった一機のISによって撃墜されたのだ

その光景に巨大ISに乗っていた女性権利団体幹部の女は歯噛みし、忌々しいという感情を全て乗せるかのように全ての火器の照準を獅子堂劫火へと向ける

「例え二次移行したとはいえ、そのISに使われているコアはたったの一つなのよ！ISコアを五つ搭載したこのデストロイの、敵じやないわ!!」

敵対した全てを焼き尽くしてきた巨大IS、デストロイは目の前の空間全てを滅ぼさんと四方八方にビームを放つ

それは時として味方までも巻き込んでの攻撃であったが、当たるような奴が悪いと悪びれる事もしない

だがその一つも獅子堂劫火を捉えるには至らない、避けられ、防がれ、全く損傷を与えられない事に女は焦れる

対して獅子堂劫火は機体の翼を展開する、今まで使用されなかった飾りに思われたそれは、翼を延長するかのよう光が展開され幻想的とも思える姿を現す

その事が更に女パイロットの勘に障る事になるが、次の瞬間にはそれを消え失せる

それまでも高い機動性を誇っていたデステイニーインパルスと呼ばれた機体が更に加速したのだ

その速度からか残像が発生して見える程であり、それが両手の剣を

組み合わせた状態で構えてデストロイへと迫る

慌てて迎撃しようとする女だったが、あらゆるセンサーを凌駕する性能を誇るISのハイパーセンサーであっても捉えるには至らず、それどころか残像にまで反応が検出される為に本体を捉える事が更に難しくなる

そうしている間にも獅子堂劫火は接近し、デストロイのその巨大な腕を切り落とす

「ぐううっ!?何故だ!?何故、そうまでして戦える!?お前の何をISが選んだというんだ!?!」

それは女の口から咄嗟に漏れ出た言葉であったが、通信によって獅子堂劫火のもとへと届いていた

「破壊する、認める事もせず人を見下し続け、相容れないからと気に食わないもの全てを破壊していくお前を止める為だ!」

だからこそ獅子堂劫火も答えた、自身の望みと、自らが駆るISのコアとの対話によって得た答えを

「世界がこうなつたのも全てISに原因があるというのなら、この世界からISを無くす!人を殺す事を望んでいないISコアに宿る意思達の為にも!」

「そんな、勝手な事を——」

「その為にも、アンタ達は俺が討つんだ!今日、此処で!!」

機体の各部を切り裂かれていき戦闘力が失われていくデストロイ

女が視線を正面に向ければ大剣を構え、一直線に矢のように飛んでくる獅子堂劫火とデステイニーインパルスの姿、そして幻のようにその傍らへと寄り添う銀の髪を持つ少女の姿が見えた

だがしかし、それが本当に幻だったのか確かめる余裕もなく、デステイニーインパルスの持つエクスカリバーがデストロイの腹部を貫き、コックピットでもあったそこに居た女の意識はそのまま永遠に閉ざされる事になるのだった



激闘の後、獅子堂劫火が、コアの回収を終えたら全てのコアと共に宇宙へと向かう事を告げ、残りのISコアの回収の為に旅に出たとこ

ろでエンディング曲とスタッフロールが流れる

それから暗かった部屋が明るくなり、映画の試写会が行われていたホールの壇上に映画の監督や脚本といった製作陣と主要キャストが登っていく

獅子堂劫火役を演じたオレこと紫藤康太もまた同じように他キャストに混じって壇上に上がっていく

夏休みに入って映画の撮影依頼があったが、八月の中旬の今に完成したその試写会が行われる事になり、撮影協力と出演の事もあってオレがラビットフット社の代表としてこの場に呼ばれたのだ

それからは監督の方から映画のコンセプトやらの話となり、事前情報で色々注目を集めていた事からマスメディアによる質問も行われていく

「——いやあ、本当に幸運だったのはラビットフット社の協力のお陰で本物のISを撮影に使えた事ですね。本当、篠ノ之博士にも、そしてこの場に居る紫藤君にも改めて感謝を伝えたいです」

「成る程。では紫藤康太さん、質問よろしいでしょうか？」

「ああ、はい。可能な範囲になります」

と、記者からオレにも質問が飛んでくる

予想はしていたが、改めてとなると少し緊張するな

「ありがとうございます。これまで映画への出演などは無かったと思うので、今回の初出演はどのような感じだったでしょうか？」

「結構NG出したので共演者の方には本当に申し訳なかったと思います。けど、役になりきったというか、恥とか感じなくなった時点からは自分でも上手く演じられたと思いますよ。ただ、一つだけ気になる事があります。佐渡監督、今回私は出演依頼に準主役ってありましたけど、途中からあれ主人公交代してませんか？」

撮っている途中から違和感があったが、改めてスクリーンで見れば結末はあれだった、なので監督に確認したのだが

「あれねえ。本当は紫藤君の役の獅子堂劫火から男性でもISを動かせる秘密が見付かった、てシナリオだったんだけど、紫藤君の演技力が予想より大分高かったのと、篠ノ之博士からのあの重要な情報と、

撮影協力の出演で、つい熱が入っちゃって。それもこれも、紫藤君が良いメカデザイン持ってきてくれたり、篠ノ之博士が爆弾情報放り投げってくるからだよ」

「まあ、そこは理解してますが」

撮影途中で篠ノ之博士が色々とやってた事は聞いている、だがそこまで暴露するとは思わなかった

お陰で上映中に篠ノ之博士が出てきた辺りのシーンでは観客の方からも動揺が伝わってきていたのだ

「えー、紫藤さんに質問ですが。劇中、篠ノ之博士が語っていた件に関しては真実なんでしょうか？」

だからこそこういった質問も来るのだろう、ラビットフット社の紫藤康太に正式にインタビュー出来る場として、映画ではなくオレを正当てに来る記者も居るとは予想されていた

なのでオレは事前に篠ノ之博士から伝えられた事をそのまま伝えるだけだ

「一部は真実、だそうですよ。何が何処から何処までかは聞いてませんが、一つだけ確実に伝えて来いと言われました。『例え男性でもISCコアに願う事があって、それをコアの方が力を貸そうと決めたなら男であってもISを動かせる。男性が基本的に扱えないのは兵器利用される事を防ぐ為だった』らしいです」

そしてこれが試写会に参加したもう一つの理由でもある

オレはISCコア共々特殊ケースなので当てはまらないが、一夏や一秋がこれに当てはまるらしい

その基準はかなり厳しく、そう易々とISCコアが力を貸そうとは思わないだろうが、それでも今まで男には使えないという常識を打ち破る事が出来る希望が出てきただろう

この事が記事にされて世界中で公開されてどのような影響があるか、正確なところまではまだ分からない

希望ではあるが、中には余計な事をしたと篠ノ之博士に批判的な事を言う人間も多く出てくるだろう、ISを利用してきた女性権利団体はこの情報を嘘だと決め付けたりするだろう

世界中で混乱はあるだろう、それでも未来の為に、あの映画のような男女間の戦争なんて事が起こらないようにする為にも

だからこそ篠ノ之博士はこの事を公開する事を決めたんだと思う、もう一度世界を変える為に、オレ達の夢である宇宙への道として、余計な火種を抱えない為にも、世界は、人類は、変わらなければならぬのだから

55話 変わる世界

映画の試写会に関しては様々な反響があった

各メディアではISの起動に関する特集が生まれ、ネット上でも議論の的となっている

そんな中で女性権利団体は認められないと声明を出したりしたが、そもそものISの開発者である篠ノ之博士の言葉に対して何の説得力もない発言だ

ラビットフット社に関しては、ISに余計なリミッターを掛けたから女尊男卑になったんだ、といった内容や、そのISのリミッターを外せ、という抗議の電話やらメールやらが世界中から殺到、したらしいのだが全てシャットアウトされている為にオレ達は普段通りの日々を過ごしている

そして夏休みも残り一週間を切った頃、オレはクロエと共にフランスのシャルル・ド・ゴール国際空港に降り立っていた

目的は、デユノア社が行う新型機、ストライク・ラファールのデモンストレーションを兼ねた完成披露式典への参加、そしてデユノア社への技術提供の見返りとして依頼していたマストライバー施設開発の為の部品受け取りである

とはいえレール部分はそれなりの量がある為にこれまでのようにノッセルでは積載量が足りない、その為に今回は新たな輸送機を使用して此処に来ていた

全翼機のような形状をしている黒い大型の輸送機、それはガンダム00の二話に登場したユニオンの輸送機である

グラハム・エーカーがユニオンフラッグで出撃したあの輸送機だが、エイフマン教授がラビットフット社の輸送量の増加という目的で再現してくれた物だ

とはいえラビットフット社の拠点となっているIS学園には飛行機用の滑走路なんて物は存在しない為に海上に着水可能な用に改造されていたり、エンジン部を水素プラズマジェットにしている為、いざとなれば海水から水素を補給する事で理論上は無限に飛行する事

が可能という、割りと同んでもない仕様となっていた

更には着水時は格納してあるランディング・ギアを展開すれば陸上の滑走路でも着陸は可能となるので、こうしてシャルル・ド・ゴール国際空港にも着陸出来るという訳だ

なお元の輸送機からかなり別物に変わってしまったので、この機体に対してエイフマン教授は『アルバトロス』と命名している

日本語ではアホウドリという意味だが、そんな名前に反して大型で長距離を飛び、海鳥なのでピツタリの名前だろう

そんな高性能輸送機を使用し、着陸してからは既に空港に用意してあったデュノア社からのパーツが入ったコンテナを確認して運び込む作業を行っている

ユニオンフラッグ等のモビルスーツを二機搭載する事で空中空母としても利用可能なだけにかかなりの積載量を誇るアルバトロスに次々に積み込まれていくコンテナの山、念のために行う中身の確認作業がオレとクロエの仕事だ

そんな作業を続け、半分程の積み込みが完了した時の事だった

「康太、クロエ、久し振り！」

「んん？ああ、シャルロットか。暫く会ってなかったな」

「お久し振りです、シャルロットさん」

輸送機の方に近付いてきて声を掛けてきたのはシャルロットだった

明日のデモンストレーションの為にフランスに帰国していたのと、夏休み期間中オレ達は基本的にラビットフット社として行動していたから直接会うのはかなり久し振りと言えた

「二人は元気そうだね。夏休みは楽しめた？」

「いや、こうして仕事に駆り出される事が多かったよ。まあ、夏祭りに遊びには行ったけどな」

「シャルロットさんの方もデュノア社で新型機の最終調整があったと聞いてましたが、今は大丈夫なんですか？」

「うん、ボクは夏休みの前半の方は遊べたからね。それに調整も終わってるから、今は明日に備えて休憩中だよ。それで二人と一緒に食

事でもと思っただ。パリのオススメのお店を紹介するよ?」

そういう事ならとオレもクロエも了承する、そろそろ昼食の時間という事もあり切りの良いところまで作業を終わらせてシャルロットと共にパリの街に進む

そうしてシャルロットのオススメの店で昼食を頼んだ

まあ英語ならともかく、フランス語は読めないのでメニューは写真とシャルロットに聞く事で決めたのだが

「鴨肉か。日本じゃあまり馴染みがないな」

「そうなの? フランスだとメジャーな食材だよ」

「昔は狩猟してたらしいが、日本だと牛と豚と鶏が主流になったからな」

とはいえフランスでは代表的な料理という事なので鴨肉のコンフィという料理を注文しておいた

鴨肉を低温の油でじっくりと加熱した料理という事らしい

結構濃い目の味付けの料理という事だが、実際に食べてみると確かに少ししょっぱい感じはあるが、此処の料理は一緒に掛けられているオレンジソースと上手く調和している

「美味しいな。それに、こっちのオニオンスープも絶品だ」

「そうでしょう。小さい頃にお母さんとよく来てたお店なんだよ。そして、お母さんはお父さんからこのお店を紹介されたんだって」

「成る程、そういう事があったのか」

デュノア家にとって大事な思い出の味という事なのだろう

クロエはオレとは別でガレットの方を食べているが、美味しいのか口元が綻んでいた

それから暫くは美味しい料理に舌鼓を打ち、ゆつくりと堪能していた。そして食休みに飲み物を飲みながら雑談をして話す、なおオレが選んだのは珍しいからとフランスの国民的な炭酸飲料であるオランジーナ、のブドウを掛け合わせた商品であるルーージュを飲んでいる、そもそものオランジーナ自体日本の物とは炭酸量とかに差があったが

「そういえば明日のデモンストレーション、別企業も同時に新型兵器

の発表を振じ込んで来たんだよね？」

「うん、かなり強引だったみたいだよ。でも、事前に発表する新型兵器はISじゃないって通達があったから、何が狙いなのか全く分からななんだよね。一部の政府関係者が絡んでるらしいから、お父さん達も強く出れなかったんだって」

実際には数日は後に行われる筈だったデユノア社のデモンストレーション、だがそこに別の企業も参加する事となったのだ

シャルロットの言う通り政府関係者からの指示があったらしく、政府から補助金を受け取っている立場のデユノア社は従うしかかなかつたらしい

だが問題となるのはそこではない、その相手が発表するのがIS以外の兵器という事だ

「余程の自信があるのか、それとも……」

元はデユノア社の行う式典にも関わらず、相手の都合に合わせて開催を数日早める事になったのも、その相手企業というのがヨーロッパにも支社を持つとはいえ本拠は北米にある企業という事も不穏な気配を感じずにはいられない

何かしらの妨害工作を目論んでいるのか、疑念は尽きないがデユノア社からすれば社運を賭けてようやく完成した新型機の御披露目なのだ、中止する訳にもいかないのだろう

「向こうの狙いが何であれ、きな臭い事に変わりはないか。何にせよ、身の回りにも気を付けてくれ。何かあれば通信で伝える。直ぐに応援に向かう」

「そうですね。シャルロットさん、私も微力ながらお力になります」

「二人とも……うん、何かあったら是非とも頼らせて貰うよ。ありがとう、康太、クロエ」

「気にするな。まあ、相談に乗ったのが一夏でなくて悪いとは思うけどな」

「そ、そんな事はないよ!?ま、まあ、一夏が来てくれたなら嬉しかったかもしれないけど、二人だってボクの大切な友人なんだからね!今日もこうして一緒に話せただけでも十分だよ!」

「そうか。そうだな」

何か裏があるという事はシャルロットも感づいていたらしいが、今は緊張も解れたように感じられる

その力になれたというのであれば、オレも友人として安心出来ると言うものだ



シャルロットと別れた後はまた積み込む荷物の確認を行い、警備の関係でアルバトロス内に設けてあるキャビンの中で一夜を過ごした

そして式典の行われる翌日、オレはクロエと共にデユノア社の敷地内にある機体の試験用区画に設置されている観客席に座っていた

大型のモニターも設置されており、試験場の各所に配置されているカメラの映像が映し出されている状態だ

天気は快晴であり、青々とした空が見えているのもあって御披露目には最適な日和と言えるだろう

そんな中で司会進行を務めるのはアルベール・デユノア氏であり、社長自らが壇上に立っている

周囲を見渡してみても客席にはオレ達の他にも様々な来賓が居た、スーツ姿の者から各国から参加したと見られる階級章やら勲章やらを大量に付けた軍服に身を包む軍関係者の姿から、新型機であるストライク・ラファールの注目度合いが伺える

ラビットフット社の技術協力によって完成した機体という事もあるからか、幾人かはオレ達にも視線を向けていたりするが、デユノア社長の挨拶が始まると視線をそちらに移す

まずは挨拶と来賓に対する感謝の言葉といったお決まりの言葉が続き、多少の時間を於いて本題に入った

『それでは御覧下さい！デユノア社の開発した第三世代型IS、ストライク・ラファールの姿を！』

そう言うとき空から一機のISが観客席の前へと舞い降りる

基本は前身となるラファール・リヴァイヴと似通った姿ではあるがよりシンプルにも見える姿をしており、各部にはハードポイントが見られる

機体色はデモンストレーションという事もありシャルロットのパーソナルカラーであるオレンジ色ではなく、フランス国旗に因んだ青、白、赤を基調としたトリコロールカラーとなっている

奇しくもそれは元となったストライクガンダムと同様のカラーリングである、現在の武装もビームライフルとシールド、そしてエールストライカーと基本とも言える装備だ

機体スペックを語るデュノア社長、そしてその説明を裏付ける為に機体を動かし、ビル群を模した試験場内を高速で飛行していくシャルロット

途中で設置されている仮想敵である銃座から放たれる模擬弾を軽々と避け、銃座に繋がっているバルーンを右手のビームライフルで次々と撃ち抜いていく様に観客達からも感嘆の声が上がる

「順調そうだな」

「そうですね。この調子なら心配ないかと」

昨日、シャルロットと会った時は不安を抱えていた様子だったが話した事で緊張が解れたというのは本当の事だったらしい

エールストライカー装備の速度や機動性の高さをはつきりと見せ付けた辺りでシャルロットも自信を持ったのか表情は晴れやかだ

『続きまして、ストライク・ラファールの最大の特徴であるストライカーパックシステムの御紹介に移ります。右手を御覧下さい』

ある程度の動きを見せるとデュノア社長の指示で観客席の全員が右を見る

その方向から接近してきたのはランチャーストライカーを装備したコスモグラスパーだった

『此方はラビットフット社より提供されましたコスモグラスパーになります。御覧の通り、小型の無人戦闘機といった様相ですが、この機体の真価はストライク・ラファールと共に運用する事で発揮されます』

まずこの世界で生まれる事は無かったであろう無人の小型支援戦闘機という存在に懐疑的な表情を浮かべる観客達、だが実演して見せると今までで一番のどよめきが起きる

エールストライカーパックを外しランチャーストライカーパックを空中換装するシャルロット、そうやって簡単に装備の変更が可能な点も特徴ではあるが、一番の注目は換装した途端にストライク・ラファールのエネルギー総量が回復した事だ

『このように、ストライカーパックには大容量のエネルギータンクが内蔵されています。これによりISへ装備を届けると共にエネルギーの回復も可能となります。また、それぞれ特色の異なるストライカーパックを装備する事で容易に機体の方向性を変える事が可能です』

先程までのエールストライカーが機動力と汎用性に優れていたが、今のランチャーストライカーは圧倒的に砲撃戦の火力に重きを置いた装備である

シャルロットが試しにアグニを撃てば標的として置かれていた退役した戦車が易々と貫かれて撃破される

同様に先程と同じ手順で換装したソードストライカーのシユベルトゲベルが戦車を一刀両断にする、そこまでやれば観客の誰もがストライク・ラファールの特性を理解出来ていた

「成る程、背部のプラグを利用しての装備換装を——」

「あのエネルギー回復能力は画期的だ。是非我が国でも導入を——」

「既存のラファール・リヴァイヴを全て置き換えるとして、追加発注は——」

周囲に居る観客からの声もあり、オレとしては完璧にデモンストレーションが終了出来たと思う

此処までの手応えはそうそうないだろう、シャルロットも観客席に向かつて手を振った後、待機場所へと飛行していった

これでデユノア社のデモンストレーションは終了、性能にも自信を持っていただけに安心したが、この式典では他にも発表される機体が残っている

『それでは、続きまして我が
GORDON アイアン・WORKSの発表に移らせて頂きます』

す』

デユノア社長が壇上から降りた後、代わりに別のスーツの男が登壇してくる

GORDON IRON WORKS、通称G・I・W・と呼ばれるその企業は北米を拠点として幾つかの軍事産業関連の企業が同盟を組んで生まれた企業だ

ISの登場により既存の兵器の立場は格段に低くなった為に、そういった兵器の生産を行っていた企業が生き残りを賭けて組んだ同盟は一定の成果を挙げていた

通常兵器であれば生産性の向上やコストの削減といった事から整備性、信頼性の高い兵器を生み出すようになったのだ

加えてIS用の火器の生産も行っていた、それまで蓄積したノウハウから造られた武器は火力だけでなく多少の無茶な運用にも耐えられる程の堅牢性を持っていた

そんな企業の新兵器という事もあり、多少の注目は集めていたがISではないと聞いていたので観客からの反応は鈍い、それもデユノア社が大成功とも言える売り込みを成功させたとなれば尚更だ

しかしそんな中でG・I・W.の新兵器が登場する、人間のような形状でありながらその高さはISと殆んど変わらない大きさであり、全身を薄緑色の装甲で覆っている機体が三機、その場に舞い降りる「IS?。」

「あれはISではないか。ISの発表ではないと聞いていたのだが」「しかし三機か。結構な数を集めたものだな」

その姿はこの世界の人間であればISを思わせるものだろう、だがオレはその機体を見た瞬間からずっと視線を外せずにいた

丸みを帯びた装甲を主体とし、右肩には大型のスパイク、左肩にはスパイクを備えたシールドを持ち、頭部には大きな単眼^{モナアイ}を備えている中でも中央に立つ機体は両肩がシールドになっており、頭部から伸びる一本の角が目を引く

「あれもIS、なのででしょうか?それにしても、少し違和感が……」

「ああ、あれはISではない。あの機体は——」

『御紹介しましょう、この機体の名称は——』

隣に座っていたクロエが困惑した表情を浮かべているが、オレから見てその機体はISではないと分かるが、それ以上に外見が問題なのだ

『ザク・ウォーリア並びにザク・ファントム』です！』

そしてオレと司会との言葉が重なる

G・I・Wの新兵器の見た目は殆んどザク系列に酷似した見た目をしており、シールドの配置などからザク・ウォーリア等のタイプだった

とはいえ違いはある、ウイザードと呼ばれるバックパックを切り替えるというストライカーバックシステムを研究する事で生まれた換装能力が見たところ存在しないのだ

今日の前にいる三機のバックパックも本編や外伝に登場したウイザードのどれにも当てはまらず、どちらかと言えばグフ・イグナイテッドのフライトユニットに似たような形状をしている

その三機は先程シャルロットがやったような動きを実演していくが、その性能は明らかにストライク・ラファールどころかラファール・リヴァイヴといった第二世代機より以前、初期の初期である第一世代型ISよりも格段に劣るような性能しかしていない

表示されるスペックも同じであり、そんな機体を発表した事に観客からも戸惑いの声が表れる

武装のビーム突撃銃は確かに革新的かもしれないがストライク・ラファールの物より圧倒的に低威力であり、直撃してもユニコーンのビームガトリングガン一発程度の威力しかないだろう

だがオレの直感はあるの三機に対して警戒するような訴えを発している、それが分かったのは一通りの動きを見せた三機が着陸し、その場に膝を着いた後の事だった

通常のISであれば量子化すれば済む、全身装甲の機体ともなれば尚更であり、わざわざ機体を残したままで降りる意味は薄いだらう

尤も、それはアレがISであればの話だが

膝を着いたザクの上半身部分が上に向けて開き、中からパイロット

達が降りてくる

ザク・ウォーリアのパイロットは緑の、ザク・ファントムのパイロットは赤のザフトパイロットスーツに酷似した物を着用していた

だが何よりも着用すべきはパイロット達の体格だ、そのボディライスは女性では有り得ない男性の特徴がすぐに見て取れた

そしてパイロット達がヘルメットを外しその素顔を見せるが、その顔もまた男性のものであり、この場に居た観客達からは困惑の声が漏れる

『皆さん驚きの事でしょう。ですが、これこそが我々の新兵器なのです！ISではない、男性達の新たな力！ISに対抗可能な新たな分類の兵器、モビルスーツです!!』

司会のそんな声に観客席からはより大きなどよめきが始まる

その反応は様々だが、大まかに二つに分ける事が出来るだろう

第一世代型ISにも劣っている性能、ISのようにシールドエネルギーによる防御方法もなく、火力も低い事からその性能に懐疑的な者から、ISと同じような動きは出来る事から多少の希望を見出だす者だ

「コウタさん、これは……」

「ああ、不味いな。確実に世界が動くぞ」

そんな中であつてオレとクロエは同じ結論に達していた、それは臨海学校での経験からくるものだ

G・I・WのモビルスーツはISには劣るだろう、だが飛行能力を備えそこそこの火力を持ち、ISコアを使わず量産可能な機体、それは単機ではどう足掻いてもISに敵う事はないが、その真価は数で圧す事にある

あの圧倒的な物量を仕掛けてきた、デビルガンダム軍団を相手にしたオレ達だからこそ、直ぐに気付けた事実だ

そしてそれはモビルスーツという新兵器が世界に発表されてから三日後にそれは起きた

G・I・Wが公開した動画、そこに映っていたのはモビルスーツによつて撃墜された一機のISの姿だった

新たなる剣

56話 墜ちた翼の真実

『新兵器モビルスーツに関する報告書』

先日GORDON IRON WORKS(以下G・I・W.)によって発表された新兵器モビルスーツ(以下MS)、ザクシリーズと呼称されたそれは『機動戦士ガンダムSEEDシリーズ』に於ける第二作、『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』に登場した物と酷似機体である。

この事からG・I・W.が我々の呼称する『漂流物』としてその技術を得た事は明白である。

ザクは元は初代である『機動戦士ガンダム』に登場した機体をSEEDの舞台であるコスミックイラ(以下C・E.)に準じた形でリメイクした存在ではあるが、その性能は大きく異なっている。

ビーム兵器の運用が標準化しており、シールドと肩部スパイクの位置が左右反転している事に加え、一番の特徴がウイザード・システムと呼ばれるストライカーパックシステムと同様の装備換装能力だ。

しかしG・I・W.の発表した機体はザクを踏襲しているもののその機能を備えていない、これはG・I・W.の持つ技術力ではウイザード・システムの完全再現が不可能だった事が原因と思われる。

その代わりにフライトユニットを固定式で装備しているが、その形状が同作品に登場したグフ・イグナイテッドに酷似している事から、それらのデータも取得している事が予想される。

以下、それらの機体の中でG・I・W.が発表した機体を、原作情報と比較しながら分析していく。



○ザク・ウォーリア、ザク・ファントム

……名称はザクと同様であり、前述の通りバックパックがフライトユニットに固定されている。

ザク・ウォーリアが一般機、ザク・ファントムが通信能力等を強化

した隊長機という扱いになる。

武装はビーム突撃銃やビームトマホーク、グレネードといったシンフルな物を基本としており、他にも様々な武装が用意されており、主力機として必要な武装は一通り揃っている。

G・I・W が公表しているカタログスペックからISに遠く及ばない性能なのは当然の事であるが、IS程でないにしても同じような動きが可能である為、数が増えればISでも脅威となり得る機体である。

○コマンドザクCCI

……人間大というMSの大きさの制約上、レーダーが標準装備出来ないMS部隊の目となる機体である。

元となった同名の機体は偵察能力と通信能力の強化された機体であるが、この機体はレーダーユニットを搭載する事でMSでは不可能な索敵を担当する。

レーダーユニットを搭載した結果、フライトユニットを搭載出来ず飛行能力を持たないが、ベースジャバー等のサブフライトシステムと同様の能力を持つグウルによって部隊行動を可能とすると推測される。

なおその機体の特性上、戦闘に直接参加する可能性は低い。

○ザク・ガズウート

……ザクをベースにシールドを撤去、背部に大型の連装ビーム砲を二基、計四門備え、両腕にM66キャニス短距離誘導弾発射筒、脚部にM68パルデユス3連装短距離誘導弾発射筒を備えた重砲撃型機体。

名称からガズウートと呼ばれる別機体の武装を組み込んでいると思われる。

ビーム砲以外はザク以前の主力機であるモビルジンと呼ばれる機体の要塞攻略用装備（通称D装備）の武装である事から、恐らくはC・Eに於けるザフトと呼ばれる勢力のデータを広く取得している可

性能がある。

この機体もまた飛行能力を持たないが、グウルによって他の機体に追従し、その火力を以て支援を行う為の機体と思われる。

カタログスペックより、肩部のビーム砲はIS用の携行ライフル並の威力があると思われる為、相対した際は早めに対処する事を推奨する



以上がG・I・Wの発表したMSの分析となる。

これまでこの世界に於けるIS以外のパワードスーツはEOSが挙げられる。

しかしEOSが三十キロの次世代型バッテリーを搭載しているにも関わらず全力稼働で十数分しか持たないのに対し、MSは同じバッテリー駆動でありながら飛行、ビーム兵器の使用といったエネルギーを多く消費するにも関わらず全力稼働でも一時間は稼働する事が出来る。

これはC・Eは他のガンダム世界とは違い核融合炉という膨大なエネルギーを半永久的に供給する動力源が基本的に使用出来ない事からバッテリー駆動という他に無い特徴があり、そのバッテリー技術を応用した物と推察される。

これらの性能を遺憾無く発揮したMSでも一機ではISに遠く及ばない、だが数を揃え圧倒的な物量による戦闘ではISも苦戦する事は必至である為、今後の作戦行動に於いては機体性能による圧力はあまり推奨しない。

※追記、今のところ完全に兵器として誕生したMSではあるが、全身を装甲で覆い男性でも使用可能、宇宙空間に於いても高い機動性を発揮するポテンシャルから船外作業中のデブリ対策として十分な性能を持っていると判断出来る。

よって宇宙開発用にラビットフット社でもMS開発は一考の余地があると思われる。

詳しくは別資料として添付した『ワークスジン』『レイスタ』『シビ

リアンアストレイ』を参照されたし。

西暦2022年8月30日

作製者：紫藤康太』

◆ 九月一日、夏休みが明けたばかりであり多くの学生は長期の休みが終わった憂鬱な気分と、久し振りに級友に会えるという楽しみとをない交ぜにした気持ちを抱きながら出校する日だ

そんな中でオレこと紫藤康太もまた教室に居る、手短に終わった始業式の後で詰め込み教育であるIS学園では直ぐに授業が行われる、オレはその授業開始までの僅かな時間も利用してレポートの作成を行っている

作成している内容は簡単、昨日の内にG・I・Wにより公表されたMSによる対IS戦闘、その動画からISの敗北した原因を分析しているのだ

『——以上がMSによる対IS戦闘の概要であり、世界で初となるIS以外の兵器によるISの明確な敗北の敗因である。再現性は兎も角とし、この戦闘によりISが絶対無敵の兵器という世間の認識は大きく覆される事となった。今後、女性権利団体の動きだけでなく、女尊男卑の風潮により抑圧されてきた男性達による不穏な動きにも警戒する必要がある、と——ふう』

一通り切りの良いところまで作成したところで一息入れて買っておいた缶コーヒーを飲む、最近ブラックが美味しいと感じられるようになってきたな

「ふう、ではない馬鹿者！」

「グフっ!？」

あ、頭が……それに鼻に……喉を通ろうとしたコーヒーが鼻に……脳天に強烈な一撃が叩き込まれたオレは噎せながら顔を上げる、ここには出席簿を構えた織斑教諭が仁王立ちしていた

「既に授業は始まっている。お前にも仕事があるのは理解しているが、学生である以上は学業が優先だ。それで、何を作成していたんだ？」

「あつ……」

言うが早いか織斑教諭はオレが先程までレポートの作成を行っていた端末を見る

キーボードは空間投影式である為に必要ないからあつさり持っていかれた

他の機密情報、例えば『シビリアンアストレイ』といった作業用MSのデータも近くにあるのだが、まあ織斑教諭はオレの正体を知る数少ない人間の一人だから見られても吹聴するような事はないだろう

そんな織斑教諭だが、レポートを目にしてからは集中した顔でじつと端末を眺めていた

そして最後まで見たのか一つ頷くとオレに視線を戻して言った

「紫藤、このレポートだが学園に提出しても問題ないか?」

「その戦闘分析レポートなら問題ないです」

「そうか。ならば後でこのレポートをコピーして学園に提出しろ。先程の件はそれで相殺してやる。ああ、それと今からこのレポートを使って一つクラスの前で発表しろ」

「えっ?」

レポートのコピー自体は全く問題ない、『MSによる対IS戦闘と今後の課題』という題名のつけられたそのレポートにはオレの正体に関する事はなく、あくまでG・I・W.の公開した動画から読み取った情報を分析した事だけが書かれているからだ

「驚く事はないだろう。実際、今朝の職員会議でこの件をどう教えるか議題に挙がったんだ。これから教材を作る予定だったが、これを使わせて貰う事にする」

「ええ……」

仮にも教師が学生のレポートを教材にするのはどうかと思うが、織斑教諭は至極真面目な表情を崩さない

「お前はもう少し自分の立場を考えるんだな。ラビットフット社のテストパイロットとしてだけでなく、戦術眼といった物にも長けている。臨海学校の一件もお前の書いたレポートが正規のISパイロット達の間でシドウ・レポートとして広まった件を忘れたか?お前のレ

レポートはそれだけの価値があると世間からも評価されているんだ。そういった意味ではこれもまた第二のシドウ・レポートという訳だ」「そういうものですか?」

「そういう物だ。お前のレポートは資料の配置も見易いからな。束の側近という立場も併せれば嫌でも注目は集まる。それに、私の目から見ても的外れな意見は見当たらない。そういう訳で発表しろ」

「言いたい事は分かりましたが、最後に一つだけ。何で織斑先生ではなくオレなんです?」

「レポートを活かすのに書いた本人以上の適任が居るか? 安心しろ、フォローはしてやる」

「了解……」

実際、先程怒られたという負い目もあるので仕方なくだがオレは教壇まで行って端末をセットする

黒板がディスプレイだからそこに資料を映せば簡単に教材に早変わりだ

「という訳でつい先日に来たI S撃墜事件に関してオレなりの分析を述べさせて貰う。とはいえ専門家という訳ではないから素人意見になるが。まずは何故そのような事態に至ったかの説明からだ。今回の一件、皆はそこに至るまでの経緯は知ってるよな?」

壇上上がったところでクラスの様子を確認する、全員が真剣な顔でオレに注目しているが、撮影やらを経てオレもこういった事に慣れてきた

そしてI Sの撃墜事件に関しては朝から大きくニュースで取り上げられていた、それこそ他のニュースはちよつと触れて延々と、だネットニュースでも一面を飾っていた事と、この場に居る誰もが将来はI Sに関わる事を目標としているだけに、殆んどの人間は知っているようだ

まあ、一夏とか一秋とか、あと転入生として来たばかりのリナは首を傾げていた、リナの自己紹介とか全く聞いてなかったな、それだけレポートに集中し過ぎていたって事か

「知らない人間も居るみたいだから説明しておくが、MSの発表を

行った時、製造元のG・I・WはMSをISに代わる主力兵器となると豪語した。それに反発したアメリカの女性権利団体がどうやってか保有していた第二世代型IS『スタウト』で襲撃を掛けた。大方ISの力を示そうと考えんだろうが、『スタウト』の製造元でもあるG・I・Wに襲撃を掛けるとは皮肉だな」

『スタウト』という機体はアメリカの第二世代型ISだ、堅牢な装甲と実績のある堅実な設計の武装で高い信頼性を持つ機体である

重量が重く機動性が低いのがたまに傷だが、まだ新しい兵器であったISで信頼性というので現場からの支持が厚かった名機と言えるだろう

そんなISを保有していた女性権利団体だが、どうせISの性能でMSを蹂躪してやろうとか考えていたのだろう、まあ連中の思想でいけばISが敗れる事があつてはならないのだから、墓穴を掘つたとも言えるが

「さて、そんな経緯で起きたG・I・W本社襲撃だが、結果は知つての通りISの敗北、MSという兵器がISを倒したという、IS不敗神話の終焉だ。とはいえ完全にMSがISを上回つたかと言えば、それは絶対でない。それを分析していこう」

そうしてオレが表示したのはG・I・W本社の見取り図だ、なんとG・I・W本社は製造工場を含めて殆どどの施設が地下に建設されている

防衛、機密保持の観点からそのようなようになったという、地上にあるのは輸送機を飛ばす為の滑走路やそれを誘導する為の管制塔、地上を進むトラック等が通る為の通路くらいというのだから徹底している

そして荷物の運搬を行う巨大なエレベーターにて地下五十メートルという深さを降りた先に工場等がある、軍事関係の生産をメインとしているが、これなら核戦争が起きても生産能力を失うといった事はないだろう

アメリカとしても自国の国防に関する事だけに建設には多額の補助金が出しているらしい、そんな場所の見取り図をオレが入手した方法だが、実はG・I・Wのホームページに少し前から掲載されてい

た

それを鵜呑みにするのもあれだが、実際に同じような構造になっている部分はある為に今回使わせて貰った

「見ての通りG・I・Wの施設は大部分が地下に建造されている。核戦争にも耐えられる代物だが、故にISはMSの生産拠点でもある地下施設の破壊に向かう為に自らそこに侵入してきた。だがこれは悪手だ。さて、此处で一つ問題を出そうか。ISが最強の兵器として君臨出来ている理由は何だと思う？」

ただオレが話しているだけなのもあれなので授業らしく質問を飛ばしてみせたりする

それに対して手を挙げたのは……専用機持ちを除けば谷本さんだけか

「じゃあ谷本さん」

「え、本当に？じゃあ、ISが最強の理由、それはシールドバリアがあるからだよ！どんな攻撃も防ぐから無敵だよね！」

「悪くない、が全てではないな。確かにエネルギーがある限り殆どどの攻撃を防ぐシールドバリアはISに大きなアドバンテージを与えてくれる。だがオレ個人が思うISが最強たる所以は、その機動性にあると思う」

谷本さんの言うシールドバリアも大きな力だ、どんなに強力な火力を持つのが紙装甲では意味が無い

だが如何にシールドバリアと言っても被弾すればエネルギーを消費するのだ、なら対策はそもそも当たらなければ良い

「ISは既存の兵器と比べても機動性が桁違いだ。戦闘機がマッハ1の巡航速度に達したのに対してISは既にマッハ2で飛行可能な機体も存在している。更にヘリコプター以上に自由な運動能力、加えてそんな激しい機動を行ってもパイロットに負担を掛けさせないPICによる耐G性能。おまけに瞬時加速で静止状態から爆発的に加速も可能ときた。これを捉えるというのは至難の業だろう。そして、こんな滅茶苦茶な動きをする相手に攻撃を当てたところで谷本さんの言ったようにシールドバリアがある。これで戦闘機や戦車が勝てる

訳がない」

戦闘機は速度でも小回りでも、武装によつては火力でも劣り、戦車に至つてはそもそも空中目標を相手にする事を苦手としている

そして先程のISでの地下施設攻撃に話を戻す

「だが何事にも例外はある。極端な話、シールドバリアもエネルギーが尽きれば使えなくなる。武装の火力によつては貫通も出来る。まあ今回の件でそんな武装はなかった訳だが。話を戻すと、ISが兵器として君臨した理由は機動性にある。だが今回のケースでは、ISは地下空間に自ら飛び込んだ。先程オレがこの事を悪手と言つたのは、地下では外と違い自由な機動が行えなくなる事にある」

そう結論を出して表示するのはG・I・W.の動画から切り出した画像だ

そこには地下の通路で大量のミサイルやビーム兵器によつて集中砲火を受けるISの姿があつた

「事前に述べたが、高速機動を行うISに攻撃を当てるのは至難の業だ。しかし地下という閉鎖環境ではその問題がある程度は改善出来る。このように点で当てられないのなら面で押し潰せば良いんだからな」

画像で行われている攻撃は単にISのみを狙うのではなく、満遍なく埋め尽くすかのような攻撃を行つていた

おまけにMS部隊は敵が一ヶ所しかないエレベーターから来ると分かつているのだ、事前に待ち構えておいて敵が来れば決めておいた場所に向かつて撃つだけで良い

光速で迫るビームも、近距離でのミサイルも、不意を打たれたISに対して大きな効果を発揮した事だろう、結果シールドバリアはパイロットの保護をメインに張られる為に機体へのダメージは通してしまい、スラスターを破壊されて機動力を奪われたISに追加の一斉射が加えられてしまえばあつという間にシールドエネルギーが枯渇してしまう

これこそがISの敗れた真実、MS側の物量による作戦勝ちという訳だ

「ついでに言えば、待ち構えていたMS部隊とISの火力では突破が難しい三メートルの厚さの隔壁など、G・I・W・は初めからISを誘い込む為に誘導していたんだろな。ホームページにわざわざ見取り図を載せたのもその一環だろうし、倒せなくても閉じ込められるようにするくらいの設備が整っていた事からも確定だな」

相手を煽って、情報をリークして、用意しておいた隔壁で閉じ込める、何がどうあっても確実にISを仕留めるといふ執念を感じさせる程の代物だ

G・I・W・が漂流物を確保しているのは確実だが、それ以上に何としてもISに対抗する事を目指していたように感じられる

「結果として正面から拵じ伏せた、と言える訳ではないがG・I・W・は大きな声でISを使わずにISを倒したと喧伝している。その流れは影響は大きくG・I・W・の株価は急上昇、世界各国も軍にMSを導入しようと注文が殺到してると話だ」

この事を話した途端、クラスの女子達は程度の差はあれど表情を歪める、中でも一番表情を曇らせたのはシャルロットだ

デュノア社が開発し、ラビットフット社が技術提供を行って発表したストライク・ラファール、それが完全に当て馬のような形にされたのだから当然だろう、協力したオレもあまり面白いとは思わない、向こうが漂流物を確保していた事への焦りや仕事に追われていたけどな

なのでデュノア社にはまた支援を行うつもりだが、今は授業だ、とは言っても後はパイロットに関するものだが

「さて、ISパイロットや整備士を目指す皆には面白くない話だっただろう。だがこれは現実だ、地下空間でなくとも圧倒的な物量で押し寄せてくる敵の厄介さは、此処に居るリナ以外の専用機持ちならば理解している事だろう」

思い出すのは臨海学校の際のデビルガンダム軍団を相手にした戦闘の事だ、向こうのように再生したりはしないが数という脅威を知る面々もまた険しい表情をしている

「本来ならMSを相手にする際にもっと厄介な点があるのだが……今

は語らない方が良いでしょうな。織斑先生、こんなところで大丈夫ですか？」

一通りの事を話し終えた為に織斑教諭へと確認を取ると、そのまま織斑教諭は一つ頷いて教壇に上がる

オレは自分の端末を回収して席に戻った

「悪くない発表だった、紫藤。さて、聞いての通りISに追い付けそうな兵器が登場し、以前よりもISの価値というものは低下しただろう。だがパイロットになるにしろ、整備士になるにしろ、はたまたモンド・グロツソに出場するにしろ、そのどれもが高い技量が必要とする。諸君がどのような道に進むかはそれぞれだが、今後はより一層の努力が必要となるだろう。その為にも精進しろ。では授業の続きを行う」

オレのレポートに対して織斑教諭がそう締めくくり、授業が行われていく

再び始まった学校生活、夏休みの間に世界が大きく変わっていった事からIS学園一年一組の他の生徒達は各々思うところがあるのか表情を引き締めて授業に臨んでいった

57話 小兎の短剣

授業の方は滞りなく終わり今は昼休み、昼食の時間という事でオレ達は学食を訪れていた

この場に居るのはオレとクロエにリナ、一夏、一秋、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの一年生専用機持ちの殆んどだ

純粹に昼食を食べる為でもあるが、転入生として入ってきたばかりのリナと他の面々と改めて交流の場という理由もある、特に鈴はクラスも違うから初顔合わせだな

尤も、リナは『インフィニット・ストラトス』というアニメから一方的に知っているらしいが

「それにしても康太に幼馴染が居たなんて知らなかったわ。何で黙ってたのよ?」

「特に言う必要も無かったからな。というかオレも再会出来るなんて全く思ってたなかったんだ、仕方ないだろう」

誰が違う世界に来たのに元の世界の人間に会えると思うのか、鈴の問いに軽く返しつつオレは昼食として購入したハンバーガーを食べる

「そういえば部屋割りってどうなってるんだ? 康太とクロエってまだ相部屋だよな?」

「私は今はラボの方から登校してるわ。ええ、コウと相部屋が良いって主張したけど学園側に通らなかつたわ」

「今のところ篠ノ之博士が一番近いのがオレとクロエだからな。学園としてもセキュリティを二つの部屋に分けるより纏めておいた方がリソースが少なくて済むんだろう。もうクロエとの生活も慣れてきたからな」

「私達は通常のパイロット扱いだからな。姉上は勿論、康太もテストパイロットという地位に居る事と、外部との取引の窓口だから当然だろう」

「それで大体合ってます。当然、私達の方でも独自のセキュリティを敷いてますが。あと姉ではないです」

オレとクロエが寮で同室だと聞いた時のリナは面倒だったからなあ、何とか自分も同じ部屋に住もうとしていたが元から寮の部屋は二人部屋として作られていたからそんなスペースはなかった、寝袋でも敷けば寝られるだろうが他がベッドでそれはキツイ

「あとはまあ、その部屋割りには何処ぞのウサミミ研究者の圧力が学園側にあつたとか無かつたとか」

「姉さんが本当にすまない……」

「気にするな、最初は戸惑ったが今ではこれが日常だ。それに、こういうのも悪くない」

たまに仕事に熱中しているとクロエが休憩するように促してくれたり、コーヒーとかを淹れてくれるのだ、オレだけだったら今頃は体を壊していたかもしれないと思えばクロエには感謝しかない

「うううううう〜」

あと何か身の危険を感じるからリナと同じ部屋になるのはちよつと……

「ところで、康太さんは最近何の仕事をしていますの？ 今日も授業中に油断するなんて、珍しい事ですわよね」

「そういえばそうですね。アタシはクラス違うけど、そんなミスするなんて康太らしくないと思うわ」

何か唸り声を上げているリナから視線を外し、丁度良いタイミングで話し掛けてきたセシリアの話に乗っかる

今朝はレポートの作成だったが、それまでは別の仕事をしていた

丁度良いしシャルロットに話しておくか、他の面子も基幹技術は話さないでおけば大丈夫だろう、どうせ後から公表するし

「今朝のは兎も角、此処のところ忙しかったのはオレがMSの設計をしてたからだ」

「そうですね、MSの設計を……えっ」

『ええっ!?!』

が、話したら話したでとんでもない大声でクロエとリナ以外の全員から驚かれた

「声を落とせ、周りに迷惑だぞ」

「ご、ごめん……って、そうじゃないわ！何でMSの設計なんてやってるのよ!？」

「そ、そうですわ！康太さんもISパイロットではないですか!？どうしてですの!？」

「いやいや、別にそこまで驚く事でもないだろう。確かにMSの登場でISパイロットが危機感を持つのは分かるが、オレとか篠ノ之博士からすれば宇宙開発が最優先なんだ。MSの利用価値に気付いたかには、それを使うのも当然だろう?」

篠ノ之博士にもMSの設計を軽くやって提出したら二つ返事で許可が降りたからな、本格的に組んでみたら思いの外上手く出来ていた。そんなオレが作った雛型に興味を示した篠ノ之博士が片手間で調整や最適化をしてくれたから、その性能ほG・I・Wのザクをも多少は上回るものとなった

「こ、康太。それ、どんな事をしていたの?」

「フレームに装甲貼り付けて動力にストライカーパック用のバッテリー積み込んで武装を設計して組み込んだら完成したんだ、動作だって基本は肉体の追従式、その辺りもISのプログラムを流用したから楽だったぞ。まあ、多少の粗があったから篠ノ之博士が最終調整をしてくれたけどな。これがそのデータだ」

シャルロットに見せたのは二機のMSのデータだ、まずはオレが作った『ダガー』の方になる

「機体名は『ダガー』、デュノア社に売り込んだストライクの簡易量産型ってところだ」

ストライクの方は新型ISとして売り込んだのだが、原作ではその量産型としてダガーが居る

「これ、もしかしてストライカーパックを使えるの?」

「そりゃあストライクの簡易量産型だからな。とはいえコイツはオレが設計したんだが、ぶっちゃけISとあんまりコストが変わらなかつた。ISのパーツそのまま流用したからな」

寧ろ過剰性能だったからエネルギー消費も多くてバッテリーだと稼働時間かなり制限されるという機体だったから出力を落として

調整したんだが、それだとパーツの性能を完全に発揮出来なくて宝の持ち腐れ、おまけに装甲も対IS戦闘を前提にISの標準的なライフルにある程度は耐えられるようにしたからコストが嵩んだ

そこで色々簡略化したりしてなんとかコストを抑えにいったのだが、オレの技量では限界になった辺りで篠ノ之博士に提出したら色々改良がされていき、結果として二機目のデータになった

「そしてコレが篠ノ之博士に手直しして貰った『ダガーL』だ」

過剰性能だった各パーツを見直し簡略化を進め、装甲を対歩兵携行火器まで落とし込む事で装甲を削減、燃費の改善と共にコストの大幅削減が可能となったのだ、値段としてはザクと同じくらいになった、大量生産すればもう少し下げられるだろう

その辺りの事を掻い摘まんで説明すると全員が感心したような反応を示す

とはいえ懐疑的な心情の人物も居る訳で

「康太は、この機体をどうするの？」

「デュノア社でまた生産して売り出して欲しいと思つてな」
「えっ？」

MS発表の当て馬にされたからかシャルロットはMSという兵器に対してあまり良い思いをしていない

自分の父親の将来も掛かっているから当然だが、オレの言葉に目を白黒とさせていた

「ストライク・ラファールの発注が減ったり、後回しになっているのは知っている。何処もMSの数を確保するのに予算を回そうとしているからな。だが、だからこそ早く設計して発表するべきだったんだ。コイツが何でストライカーパックを標準装備にしたか、分かるか？」
「えっと、開発期間の削減とか？」

「確かにそうだが、規格統一と汎用性の向上だ。ザクはベースこそ同じだが装備換装には時間が掛かる。対してダガーはストライカーパックを換装するだけで空中戦闘も砲撃支援も直ぐに、同じ機体で行う事が出来る。加えてISと装備も同じ、場合によってはダガーにランチャーストライカーを装備すればISにも通用する高火力をMS

に持たせる事も可能だ、当てられるならという前提があるが。そして、このデータを見てくれ」

シャルロットに見せるのはストライク・ラファールを中心としてダガーLが複数で飛行しているデータだ

そこに敵ISを捉えるとストライク・ラファールが先行、それをダガーLが周囲から援護していく

更にストライク・ラファールのエネルギーが減少していくとダガーLが装備していたストライカーパックを外し、ストライク・ラファールが受け取って戦闘を継続していく

周囲のダガーLの射撃は正確であり、ザクの戦闘とは比較にならない程だ

「ダガー系列はストライク・ラファールとの連携を前提として設計した。露払い、援護、補給、そういった役割を担える。そしてストライク・ラファールはISのハイパーセンサーからの情報を味方のダガーLにデータリンクで共有、ISの演算によって高い連携力を発揮する事が可能となる」

具体的には、ストライク・ラファールから送られてくる敵機の予測進路を基に射撃する事で対IS戦闘でも高い命中率を発揮すると予想されているのだ

勿論ストライク・ラファールが居ない時もデノア社のガンナーストライカーといった大型センサーを装備した機体を組み込む事で似たような事は出来る、ISという壁役が居ないから厳しい戦闘になるだろうが

「MSはISの代替品？まさか。共に長所を活かして連携する事でより高度な作戦行動を可能にする。それがオレの考案したMSの運用方法だよ」

互いに対立する事しか考えていないような連中に、一石を投じさせて貰った訳だ

「それと、新しいストライカーパックを二つ用意した。とは言っても構造はかなり簡単な物だ。飛行用のジェットストライカーに、砲撃支援用のドッペルホルン連装無反動砲だ。それぞれオレが使っていた

I・W・S・P.の機能を分割したような物だと思ってくれればいい」

ジェットストライカーはそのまま空中戦闘用に、ドッペルホルン連装無反動砲は砲撃に、どちらも機能を絞ってある為に他のストライカーパックに比べてコストが安く済むというメリットがある、数を揃える必要のあるダガーLにはぴったりの装備だ

そしてドッペルホルン連装無反動砲等を装備したダガーLは飛べないので、前にラビットフット社で作ったがノッセラに取って替わられたベースジャバーをデュノア社でライセンス生産できるようにするつもりだ

「という訳で、オレはこの機体のプレゼンの為に明日またフランスに行く事になってる」

「康太、どうして此処まで……」

「デュノア社に倒れられるのは困るんだよ。ようやく見付けた信頼出来る提携先だからな。なに、MSの装甲材をラビットフット社から購入する事とライセンス料でうちにも十分に利益はある。その為に、このダガーLはストライク・ラファールを導入した所にしか売らないようにするつもりだ」

「えっ？それはどうして？」

「ストライカーパックシステムを採用してるからな、そもそもストライク・ラファールとの連携前提だし、そんな条件を付け加えればダガーL欲しさにストライク・ラファールを導入するところも出てくるだろう」

ザクは飛行用、索敵用、砲撃用の三種類をそれぞれ買い揃える必要があるが、ダガーLは何機か買っておけば後はストライカーパックを複数用意するだけで柔軟に対応出来る

機体のコストがあまり変わららず、ストライカーパックの分だけダガーLの方が費用が掛かるように見えて、戦場で状況に応じた換装能力というのはそれだけ魅力的なのだ、状況によってはザクが役に立たない状況でもダガーLなら装備換装で対処出来た、等と出来るからな
「後はG・I・W.のやり方にムカついたからだ。ウチが技術提供し

て完成したストライク・ラファールの披露式典を利用してきた事に対する意趣返しとでも思ってくれ」

「康太……本当に、ありがとう!」

「ラビットフット社の利益にもなるから、本当に気にするな。それと、あんまり兵器ばかり作っていると色々外部が煩いのと、宇宙開発を見越してこんな機体を設計した。どちらかと言えば此方が本命かもしれない」

シャルロットから感謝の言葉を伝えられる、悪い気はしないがオレも篠ノ之博士もG・I・W・に対する報復といった理由が割りと多かったので多少の罪悪感があった

だからという訳ではないが、デュノア社で委託生産するつもりのもう一機のデータを端末に表示する

「康太、これは、ガンダムか?」

「定義としてはそうなるな。機体名『シビリアンアストレイ』、完全な作業用、民間向けのMSだ」

「民間向け、ですか?」

一夏は表示されたMSの頭部形状からそう呼んだが、アストレイはガンダム顔の量産機という珍しい機体だからな

SEED系で言ってもM1アストレイのOSが『G・U・N・D・

A・M・』だからガンダムと呼べなくもない

そしてシビリアンアストレイだが、これはJGカスタムと呼ばれるタイプになる

「オレと篠ノ之博士が目につけたMSの有用性っていうのが『装甲のある宇宙服』として使えるっていう点だ。宇宙だと小さな破片が弾丸のような威力で飛び回っている事がある。そこに今の宇宙服だと穴が空いた時に危険だし、なにより細かな作業が難しいからな。そこでこのシビリアンアストレイは破片から人体を守りつつ、作業をより簡単に出来るように考案した機体だ」

動きにくい現行の宇宙服よりは機敏に動ける、中にラビットフット社で使っている軽装ノーマルスーツを着込めば気密もバッチリ対応可能という訳だ

「後は背面にあるスラスターで宇宙空間でもある程度は自由に動ける。他には作業用のツールを持たせておけば内部のバッテリーからのエネルギー供給でトーチ等を使用可能だ。その他にも地上での土木作業への従事だな。人より力があるから重機の入れない場所での活動を想定している。更には消防関連への導入だ。燃え盛る炎の中でも消防士を保護しながら突入、要救助者の探索などで役に立てるだろう。ダガーLやザクでは過剰性能だから警察組織への導入も考慮してあるぞ」

使いだはそれこそ幾らでも考え付く、現にオレが挙げていった例に全員が頷いている

「成る程、確かに民間シビリアンという訳だな」

「アストレイというのも、MSとは兵器であるという今の考えから外れるという事ですわね」

「色々考えてるのね。確かに、災害救助とかでISだと数が足りなくても、これならその穴を埋められるわ」

「姉さんも、たまには人の役に立つ物を作るのだな」

そういった具合で概ね好評と言えるだろう、オレは端末を操作して更にデータを表示して説明を続ける

「他にもストライカーパックシステムのように独自規格の追加装備を背面に取り付ける事で様々な用途に使用可能だ。例えばこのフライトユニット『シユライク』だな。飛行能力を備える事で火災現場や山岳救助といったレスキュー用途での使用を想定している」

「あれ、ストライカーパックシステムじゃないのか？飛ぶだけならさっきのジェットストライカーとか言うのを使えば良くないか？」

「良い質問だな、一夏。確かに規格を合わせればそれで済むんだが、それはこのシビリアンアストレイを完全に民間向けにする為なんだ。フレームとか多くはダガーLと共有出来るようにしてるが、シビリアンアストレイには基本的に射撃プログラムといった戦闘に必要な物は全て排除してある。この機体はダガーLから戦闘に必要な物を削った事で更に軽量でコストを低く抑えてあるんだ。で、民間に広く普及させるつもりなんだが、その安さからゲリラやテロリストに渡る

事を懸念している。だからこそ、ストライカーパックシステムを搭載すると兵器が使用可能になってしまう危険性が高くなる。だからシブリアンアストレイのバックパックはわざと規格を別に行っているんだ」

加えて購入した組織に対してカスタマイズするが、相手によってはそういったオプションパーツにも販売に制限を掛けるつもりだ

警察や消防といった公共機関ならカスタマイズは無制限だが、一般企業などには多少の制限を掛けるといった具合にな

そうでないとテロリスト等に悪用される恐れがある、無くなりはないだろうがその数は限りなく減らしたいのだ

「そんな訳でこれをデュノア社に売り込んでライセンス生産して貰うって訳だ。後は丁度良いデモンストレーションの場でもあれば、つてところだな」

食事を終えて話し込んでいたが、端末を見ていると昼休みの時間が終わりそうになっていた

まだ何分があるが移動時間とかを含めると早めに行動するに限る

セシリアや鈴は代表候補生としてそれぞれの国にもさりげなく売り込みが出来ないかと思っていたからもう少し話したかったが、遅れると織斑教諭から出席簿が来るからオレ達は大人しく教室に戻るのだった

◆ さて、午後からの授業も恙無く終わり、放課後となった

今日はミネツサが新しい装備を作ったとかでテストして欲しいと言われていたのでラボの方に向かおうかと思っていた時の事だった

「しどつちく、今日ちよつと大丈夫？」

「のほほんさん、珍しいな。何かあったのか？」

「うん、しどつちに生徒会室に来て欲しいんだつて、生徒会長から」

「ああ、なるほど。分かった、行くよ」

以前に会っていた更識楯無という名のIS学園の生徒会長であり日本の暗部でもある更識家の当主、その人からの呼び出しとなれば多少は優先した方が良い

テストは後でも出来るが更識という会長の本職を考えると火急の要件の可能性もある為に無視できない

夏休みの間は結局オレがあっちこっち動き回っていたからな、亡国機業の事でも話があるのかもしれない

なのでそういった理由を書いたメールをミネツサへと送り、オレは生徒会室に向かおうとした時だった

「その呼び出しはコウタさんだけなのですか？」

「コウが行くなら私も一緒に行くわ」

そこにのほほんさんからの話を聞いていたらしいクロエとリナが割り込んでくる

「リナ、遊びじゃないぞ？」

「分かってるわよ。でも、それこそ私の知識が役に立つかもしれないでしょう？」

「まあ、確かに」

アニメの知識があるリナが居れば亡国機業の企みに先手を打つ事が出来るから、確かに会長の要件が文化祭関連の事ならば役に立つかもしれない

そう言われては断る理由も無くなった為のほほんさんに確認する

「そういう訳で、人数が増えても大丈夫か？」

「うくん、多分大丈夫だと思うよ」

「そうか。ならよろしく頼む」

「うん！それじゃあ三名様ご案内」

こうして、改めてオレとクロエとリナの三人はのほほんさんの先導で生徒会室へと向かうのだった

「ところで、何でクロエには何も聞かなかったの？」

「クロエとはこういった場は何度も一緒に行ってるからな。ぶっちゃけお前より頼りになる」

「私の評価低くない!？」

「お前はまだこういった場にあまり慣れてないんだから当たり前だろう」

なお、道中そんな会話をしていたりするが細かい部分は割愛させて貰おう

「ここが生徒会室だよ」

改めて、のほほんさんの案内で辿り着いた生徒会室、その扉を開けたのほほんさんはそのまま中へと入っていく

「ただいま」

『失礼します』

その後について生徒会室の中に入ると、執務を行う机が部屋の奥の方にあり、その向こう側には会長が居り、その隣には初めて会う女生徒が控えていた

「どうしよう、知らない人が居たわ……」

「自信満々に言ってるそれか……まあ本題に入ってからになるだろうさ。それと、あまり迂闊に口を開くなよ、相手はプロだ」

「分かったわ」

どうやらのほほんさんや会長の事は知っていても他の生徒会メンバーの事は知らなかったらしいリナと小声で話しつつ、オレはあらかじめ釘を刺しておいた

そして改めて対峙したオレ達だが、まずは会長が口を開く

「ようこそ、生徒会へ。私は以前に自己紹介してるから、今回は初顔合わせの人だけ名乗る事にしましょうか。生徒会会計の布仏虚よ」

「はじめまして、布仏虚と申します。生徒会では会計を担当しています。三年生なので貴方達の二つ上ですね」

「紫藤康太です」

「クロエ・クロニクルです」

「リナ・ゴールドデンバーグです」

手短かに挨拶を交わすオレ達、そこでオレは布仏先輩について気付いた事があった

「布仏先輩、布仏って事は——」

「虚で良いですよ。それと、いつも妹がお世話になってます」

布仏先輩、もとい虚先輩はやはりのほほんさんの姉だったらしい

虚先輩は雰囲気からも真面目な性格だと分かる、少なくともおつと

りとしたのほほんさんとは似ても似つかないと思えてしまう程だ

「こちらこそ、のほほんさんとは仲良くさせて貰ってます」

「えへへ、たまにしどっちにはかんちゃんの子のISの相談したりして
るんだ」

のほほんさんの言うように、たまに更識簪の専用機の事で質問をさ
れる事がある

それに対して外に流しても問題のない程度の情報提供や機体構成
に関して意見を出したりしている、開発は今のところ順調に進んでい
るらしい、もう少しで推進系が完成しそうだと言った

「簪ちゃんの事もお世話になってるのね……今の私には言う資格が無
いかもしれないけど、お礼を言わせて貰うわ。今後とも、簪ちゃんの
力になってあげて」

「同じように機体開発が出来る同世代の人間なんて希少なので、此方
こそ、ですよ。それより、オレが此処に呼ばれた理由って何ですか？」

更識簪の件で会長からお礼を言われ、それを受け取る

それから本格的に本題に入るように促す、挨拶としてはこの辺りで
十分だろう

会長の方も同じように思っていたのか、顔を上げると単刀直入に切
り出した

「更識として、生徒会長として、様々な立場からになるけど、簡単に纏
めるわね。康太くん、生徒会に入らないかしら？」

58話 生徒会

「生徒会に、ですか？」

会長から言われた言葉をそのまま返す、それも様々な立場からという事を考えれば直ぐには理由が分からない

特に更識という立場だけでなく、生徒会長としての立場というのが分からなかった

「順を追って、まず生徒会長としての立場から説明するわね。康太くん、部活に入っていないわよね。この学園の校則では生徒は必ず何かしらの部活動をしなければならないの。それは知ってるかしら？」

「聞いてはいますけど、特に入る予定の部活が無くて、ですね……」

会長に言われた通り、この学園に居る男子の中でオレだけ部活動に入っていない、一夏は剣道部、一秋は料理部に入っている、ISの訓練があるから実際に部活動を行えているかは別として、所属ははっきりしていた

オレはそもそもラビットフット社のパイロットとして活動している事が多いから部活動に所属する選択をしていなかったのだ

「そうね。そもそも男子だから、既存の部活動に組み込もうとしても色々と問題があるのも確かだわ。文化系ならともかく、運動系の部活だとユニフォームへの着替えもあるから、更衣室の問題とかね。でも、康太くんが何処にも所属してないって知った子達から少しずつ要望が増えてるのよねえ」

「はあ、それはまたどんな？」

「自分達の部活動に加入させたいって要望ね。幽霊部員でも構わないうっていう事なんだけど、同じような事を言ってる部活動も多いから大変なのよ」

「ええ……」

そもそもオレを加入させるメリットが見えないのだが、何故そこまでするのか

「剣道部や料理部の様子を見て、羨ましくなったらしいわ。花の女子高生ですもの、男子生徒との青春を謳歌したいって子が居てもおかし

くはないわ」

「なるほど」

ようは物珍しさからという事か、それで訓練の時間が削られるのは正直に言えば迷惑でしかない

「という訳で、康太くんには三つ選択肢があるわ。何処かの部活動に加入するか、生徒会に加入するか、それとも自分達で部活動を立ち上げるか、ね」

「何処かに入るのは論外として、自分達で立ち上げるっていうのは？」
「三人の部員と誰か顧問になる先生が居れば新しい部活動として申請出来るわ。康太くん達の場合、他にクロエちゃんとリナちゃんが居るから人数的には問題ないわね。それに加えて顧問にはあのエイフマン教授を迎えれば完全に身内だけで部活動を作れるって訳よ。けど、私としては生徒会に加入して欲しいとも思ってるわ」

「ふむ、生徒会に。何かメリットがあるんですか？」

「普通の生徒なら内申点とか有利になるけど、もう企業所属の康太くん達にはあまり関係ないわね。けど、生徒会に入れば部活動の件は解決よ。校則だと生徒会のメンバーは部活動への加入義務はなくなるから。それと、これが更識としての理由ね。私達はラビットフット社に、IS学園防衛に関するより綿密な連携を提案するわ」

その話を聞いてオレはなるほどと納得した、生徒会のメンバーは更識の人間だけしかない

そんな生徒会に入る事になれば、それは更識と手を組んでいると事情を知っている人間であれば推測する事が出来るだろう

「IS学園は条約により他国からの干渉を受け付けない事になっている。けどそれは同様に、有事の際は外部からの応援を呼べない事と同義なの。多少は日本からの支援も期待出来るけど、政治的にあまり干渉したくない。だから私は此処で生徒会長として活動してるのよ。更識の長として、諜報関係を駆使して怪しげな動きを掴んでは先んじて潰す形でね。でも今年はいレギュラーが多過ぎたわ。クラス対抗戦の所属不明機という名のラビットフット社所属機の暴走事件に始まり、学年別トーナメントでのVTシステム暴走事件、臨海学校での

デビルガンダム襲撃事件と、立て続けに事件が起きている。おまけに、以前に康太くんが話していた亡国機業の件もあるわ。少なくとも、生半可な戦力では心許ないのよ。自分達で学園を中立という事にしたのに、何かあれば日本のせいとして世界各国から批難されるのだからやってられないわ」

確かに今年は色々あった、去年までと比べてみた事があるのだが、まず今年あった事件のような事は一件もない

これによりIS学園のセキュリティが疑問視されるような状態であり、ISコアを狙った連中が襲撃してこないという保証もないのだ。そして、ラビットフット社に協力を要請している理由だが、ラビットフット社の主要な施設がIS学園敷地内にあるからだろう

本社はあったが既に世界に篠ノ之博士の存在が知られてからは利用していない、此処ならばIS学園のセキュリティにタダ乗りするよ。うな形で安全だったのだが、襲撃が来るようなら手伝えという事だな、何らかの形で学園が閉鎖になるようなら今後はセキュリティ関連を自前で整えなければならぬというのは面倒だ

そう考えれば諜報面を更識に丸投げして、必要なら武力を提供するというのは此方への負担が少なくて済む、向こうは情報を、此方は武力をという事だ

「理解しました。とはいえ即答は出来ないの篠ノ之博士達とも話し合った後でまた明日回答します。良いですね？」

「勿論よ。良い返事が聞ける事を願ってるわ」

今日のところはこの辺りで話し合いを打ち切る事にして、オレ達はそのまま篠ノ之博士のラボの方に向かい今回の件を報告、今後について方針を定めた後、翌日に会長に伝えた



そして、更にその翌日の事だ、SHRと一時限目を利用して行われた全校集会に於いて、会長の挨拶の後にオレは壇上へと登る

「新しく生徒会に庶務として入る事となった紫藤康太です。それと、同時に立ち上げた部活動、『戦略戦術技術研究会』の部長にもなりました」

結局、オレは生徒会に入る事に決めた、それと同時に折角だからと自分達の部活動も立ち上げている、長い名前になってはいるが通称で『戦技研』と呼ぶ事にした部活動だ

そしてその詳細だが、此処からは会長に丸投げで良いだろう

「康太くんが今話してくれた『戦略戦術技術研究会』、通称で『戦技研』だけど、色々と特殊な部活動になってるわ。活動内容はその名の通りにISを活用した戦略、戦術、操縦技術に機体開発といった物の研究。その為にラビットフット社のバックアップがあつて、今学期から新たに導入されたISのシミュレーターその他、新規のISが五機、『戦技研』で使用される事になっているの」

会長の説明に生徒達どころか教員の方からも驚きの声が聞こえてくる

そりやそうだろう、建前は部活動なのに内容は他の企業では絶対に揃えられないような代物なのだから

『戦技研』の場所も場所ね。既存の建物では収まらないから新規で一棟、『戦技研』専用の建物が作られているわ。そこで各自の活動を行うの。その詳細に関しては実際に康太くんの方から説明して貰いましょうか」

まだまだ驚くべき内容は存在する、ラビットフット社は積極的に関わらないとはいえ機体開発も行えるからな、情報流出に備えてセキユリティの強化された建物が一棟学園の敷地内に追加されている

とはいえ幾らオレ達の立場が特殊とはいえ、これでは明らかな優遇に見えるだろう、なのでオレからは『戦技研』のより細かな活動内容と共に、請け負う責務に関して説明していく

「我々『戦技研』は前提として競技としてはなく、兵器としてのISの運用を研究していく事になる。その理由は明確であり、今年度で立て続けに起きている学園の襲撃事件などに対して独自の防衛能力を持つ事で備えるという理由だ。故に、有事の際は他の生徒を守る為にも率先して出撃する義務を負う事となる。シミュレーター、実機、予算、その全てはIS学園の防衛という目的の為に用意されているという事だ。よって、入部する際も厳正なる審査の下で行わせて貰う。」

はいえ戦闘が苦手な人も居るように、全員が戦闘要員という訳でもない。次は簡単な具体例を挙げていくとしよう」

そう、学園の防衛に関してよりセキュリティの強化の為に立ち上げられた部活動なのである

教員部隊もいるにはいるが、正直練度が心許ない為にこのような方法を取った

無論、この部活動の目的はラビットフット社が大手を振って防衛に参加する為のものでもあるが、どうせならより高い質のパイロットを育成して戦力に加えようという思惑もある

そして次から発表するのが『戦技研』の内訳だ

「まずパイロット部門、これは基本的なパイロットとして技能の向上に努める事になる。ISの実機を用いた訓練、シミュレーターによる訓練、そういった物を磨いていく。また、成績優秀者は学園の敷地内や行事での移動先に限り『戦技研』のISを預けられる事になる。これは有事の際に機体を展開し、防衛に参加しなければならないという事でもあるが、『戦技研』での花形と言える役職だろうな」

まずは率先して敵と交戦する事になるパイロット部門の紹介だが、聞かされた内容とプロジェクターを使って映し出されている内容に今日一番の歓声上がる

IS学園というISパイロットになる為に此処に来た者からすればその反応も無理はないだろう、学園に関連した場所でしか使えないとはいえ専用機持ちのような立場になれるのだから

なお預けるにしても三機だけの予定なので、その枠を勝ち取る為に一層の努力に期待するとしてしよう

「続いて戦闘指揮部門、防衛のみならず強襲、護衛、救出など様々な状況で全体を見通し的確な判断を下せるようになる事を目的としている。主に状況を考えてシミュレーターで対処法を見つけ出し、状況を切り抜ける。シミュレーターではそれぞれパイロット部門の者を指揮下に置いて他の指揮官と模擬戦、という事も出来る。目立たないかもしれないが重要な役割だ。それとパイロットに状況や指示を伝えるオペレーターも此処に含まれる。戦闘が苦手でも誰かを守りたい

という人にオススメだな」

実際の戦闘では周りを見る余裕というのは余程でなければ無い、そこを指揮官やオペレーターが補うのだ、目立たずとも必須な役割、その重要性を理解してくれる人が集まってくれる事を願う

「そして最後に整備開発部門、パイロット部門が使用した実機の整備の他、機体のカスタマイズを行う部門だ。学園の機体は大きく形を変えざる事が出来ないが、此処では予算が許す限りは自由に機体を改造して貰って構わない。テストパイロットはパイロット部門の人間に頼む事になるだろう。自分の作りたいものを形にしたい人にオススメする」

これに驚いたのは主に整備課の生徒達だった

前述の通り、学園の機体は不特定多数の生徒が使う訓練機の為に基本の形から大きく変える事は出来ない、だが『戦技研』の機体はそのような制限はない

機体の数に限りがあるから全ては無理でも、自由に装甲の形状からスラスターの配置、武装を作り出してISに搭載する事が可能だ

仲間内で機体を設計して自分達で形にしていく、それは将来的にISの設計に関わる仕事を目指す者であれば破格の環境だろう

付け加えれば整備開発部門の方はエイフマン教授が監督する事になる場所だ、教授自身の研究もあるから必ず居る訳ではないが世界でも最高クラスの技術者の意見が貰えるというのは他では絶対に有り得ない場所だ

そんな訳で『戦技研』の紹介はそんなところだ、後の詳しい内容、主にどのような設備が揃えられているか等は別でパンフレットを配る事になっていくからそちらを参照して貰うとしよう

「以上が『戦技研』の簡単な説明になる。詳しくは別にパンフレットを配布するので、そちらを参照して欲しい。それと、最後になるが『戦技研』が目指すのは最精鋭だ。生半可な気持ちで入ろうとするなら、覚悟しておいた方が良くと言っておこう」

授業とは違い訓練内容に制限がないのだ、加えて一般生徒を戦力に加えられるレベルまで鍛え上げるには半端な訓練では足りない

その意味を込めて告げたが、何人が選抜試験を突破出来るか楽しみだな

生徒達の反応はそれぞれだが、少なくとも自身を良く見せる為のファッション感覚なら合格は絶対でない、そう思いながらオレは下がり、再び壇上では会長が話を続けていた

「さて、今聞いたように『戦技研』は色々な意味で特別よ。兼部は認めてあげるから、是非とも入りたい人は多いんじゃないかしら。でも入るにはとても大変な努力が必要な。だから『戦技研』の本格稼働の前にこの私からチャンスを与えるわ！」

当初の予定では『戦技研』の発表の後は軽く話し、学園祭の話題に移る筈だったが、会長が此処で事前の打ち合わせにはない行動に出た「今度の学園祭、いつものように投票で一番多くの票を獲得したクラスや部活動には部費の特別助成金が出る仕組みだったが、今年はそれだけでは終わらないわ。『戦技研』の正式な部員の応募は学園祭の後だけど、その前に試験運用を兼ねた一週間の体験入部を行える権利を追加する事にしたの。当然、部長である康太くんが手取り足取り、丁寧に教えながら訓練を行うし、その期間は自由にシミュレーターも使えるわ。つまり、色々な意味でリード出来るチャンスって事ね！」
待つてほしい、オレはそんな話など全く伝えられていない、勝手に決められるのも困る、と思つていたのだがよくよく考えれば悪い事でもなかった

そもそも具体例な『戦技研』の活動内容は話に聞くのと実際に見るのとは印象も変わるし、オレが考案し織斑教諭に確認して貰った訓練内容に普通の生徒がどれだけ耐え切れるのか試しておく事にも使えるからだ

多少の修正は必要だがメリットの方が多いのでオレは会長の言葉に反論する事はなかった、そして生徒達の反応の方は――

「うおおおおっ！」

「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」

「こうなったら、やってやる……やあああつてやるわ！」

「今日からすぐに準備はじめるわよ！秋季大会？ほっとけ、あんなん

！」

——先程の今日一番の歓声というオレの感想をあつさりを超えていった大歓声と雄叫びが響く

熱意があるのは結構だが、会長の言い方だと別の方にも受け止められる……まあ、優勝したグループにはテスターとして参加して貰うのだから、今回だけは甘んじて受け入れるとしよう、正式に申請してきた人員は徹底的に抜き抜くつもりだがな

騒がしくなった生徒達の方を眺めながらオレは今後の流れを考えていくのだった



全校集会の後は各教室に戻り学園祭の出し物を決める事となった

それぞれの意見を出し合い、メイド・執事喫茶へと決定した訳ではあるが、その準備を始める放課後、オレは生徒会室に来ていた

「それじゃあ、学園祭の警備体制と亡国機業に対する会議を始めるわよ。それぞれ当日の役割は認識してるわね？」

「私は受付で来場者の警戒ですね」

「私は学園祭の見回り」

「オレはエイフマン教授が表に出ている間の警護の他、遊撃だな」

「私は主にエイフマン教授の警護と、クラスでの出し物に参加ですね」

「私もクラスの出し物で、いざという時に応援ね」

そして会長の言葉に従いそれぞれの役割を確認する

学園祭だが、オレは『戦技研』として学園の警備に参加する事になっている、とはいえクラスの出し物も設営などの手伝いはするつもりだ
こうして生徒会のメンバーも同じように警備に参加するのだ、ここに不満はない

それから生徒会の方だがオレの他にもクロエとリナが庶務として参加している、将来的に会長が卒業した後も円滑に生徒会の運営が出来るように、との事らしい

そんなクロエ達も含めて布仏姉妹、オレ、クロエ、リナが順に当日の予定を述べていく

「皆大丈夫そうね。通常の警備は教員部隊にもそれぞれ訓練機の方を

持たせるようにするけど、ISが過剰戦力になる場合はテーパーガン等で鎮圧する事。一応、康太くんには正式な帯銃許可が降りたから学園内でライフルの武装も可能よ。その場合はゴム弾を使用して良いわ」

「了解、室内戦用と狙撃用を拡張領域に備えておきますよ」

というよりは常に備えられている、会長も学園内での自衛は拳銃かサブマシンガンまでだったが、今後を見据えてオレにライフルの使用許可を出したのだろう

屋内でも取り回しが良いようにカスタムしたHK416と狙撃用にカスタムしたHK417、それがオレの持つライフルだ、主に訓練でしか使っていないが表でオレが活動する際にはその二つを、裏で活動する際にはソレスタルビーイングの装備を使っている

「今年の学園祭は間違いなくこれまでの年以上に余計な事を考える輩が増える筈よ。皆もその事に留意してね」

ISがMSに敗れた、その話が流れてから女尊男卑の流れが変わり、反動からか男尊女卑の動きも活発化してきている

そんな考えの人間から女尊男卑の風潮が広まった原因となったISを学ぶ為の場であるIS学園に入り込める機会が得られればどうなるか、考えるまでもないだろう

一応、学園祭に入れるのは企業の人間や生徒に配られるチケットを持っている者だけではあるが、モノレールでIS学園のある人工島までは来れるのだ、用心するに越した事はない

尤も人目のある学園祭でライフルが一般客に対する印象から過剰とは思いうから拳銃に頼る事が多くなるだろう、以前ラウラが仕掛けてきた時の教訓から拳銃だけは制服の上着の下にシヨルダーホルスターで備えている、整備は怠っていないが念の為に後でもう一度見直しておくか

「さて、これで学園祭の通常の警備は以上よ。念には念を、学園祭のゲートに空港でも使う金属探知機を導入するから多少は改善されるとはいえ絶対とは限らないわ。各自、無理はしない事。何かあれば教員部隊を始め直ぐに応援を呼べるようにしておいて。良いわね」

『了解』

「よろしい。じゃあ次、ある意味で更識やラビットフット社としては本命とも言える事、亡国機業に対する会議を始めましょう」

通常の学園祭での警備に関しては終了、後日修正があれば適宜調整していくとしよう

そして今からは裏の顔を見せる時だ

「亡国機業に関してはこの場に居る全員が把握している事から省くわね。まず間違いなく今度の学園祭で仕掛けてくる筈。そしてその狙いだけど、私達が得た情報によれば最優先目標は康太くん、貴方よ」「オレですか？篠ノ之博士やエイフマン教授ではなく？」

先程までも真面目に会議をしていたが、より緊張感を持った雰囲気
で会長が告げた亡国機業の狙いは意外なものだった

世界中でISを強奪している亡国機業ならISコアを作り出せる
篠ノ之博士やエイフマン教授が狙われるかと思っていたが、会長が言うにはオレが狙われているという

それとは別にアニメ知識を持つリナの話では白式が狙われると聞いていただけに、全く予測出来ない内容だったのだ

「私達も詳しい理由までは掴めていないのだけど、亡国機業に潜り込んでいた人員からの報告によれば全ての部隊に康太くんの捕縛命令が下されたんですって。しかも必ず生きて捕らえるよう厳命してね。それが最優先という事で理由を探っているけど、残念ながら今は不明ね」

「成る程、そうなるとオレの目の前に敵が来る、と。会長、もし会長が相手の立場だとして、確実にオレを捕らえる為にどんな手段を使いますか？」

理由は不明だがオレを狙ってくるのは确实、少なくとも狙いが分かっているから対処は簡単な様に思えて、実は難しい事になる可能性も高かった

「そうね、その日は学園祭であって一般人も多く集まっているから、その人達を人質にして康太くんに降伏するように呼び掛けるかしら。もしも康太くんが降伏せず、一般人に危害が加えられれば康太くんの

パイロット生命やラビットフット社が世間からどんな突き上げを喰らうか、私達更識の力でも抑え切れないでしょうね」

「ですよねえ」

少なくとも人質を助けられなければラビットフット社にも批判が押し寄せてくるだろう、それは宇宙開発にも大きく支障を来すかもしれない

だが何処に亡国機業の人間が潜んでいるかも分からないのだ、チケットの関係で人数は多くないにしても特定が出来なければ意味がない、民衆に紛れて突如としてISを展開され人質を取られれば詰みなのだ、狙撃で仕留めようにもシールドエネルギーがあるから直ぐに仕留められない、そのまま民衆に危害を加えられてお終いとなる

ならばどうするか、対策を練っていると意外な人物から手が上がった

「ねえ、コウが狙われる事は変わらないのよね？ならリスクはあるけど、コウを相手が食い付くような状態にすれば罠に誘導出来るんじゃないかな？例えばだけど——」

そうしてリナの口から語られた策はオレのリスクがかなり大きい、確かに有効であると言えそうなものであった

そこからはリナの策をより深く検討し、その実現の為には何が必要かを逆算し、策を完全なものとしていくのだった

59話 仮想の戦場

新学期が始まり生徒会に入ったり戦技研を立ち上げたりと様々な事があり、更には学園祭の準備などやるべき事は多いものの、やはり学園なので授業も普段通りに行われる

そんな訳でいつもの実機を使うI Sの実技授業の時間だ、とはいえ今回は訓練機を運び出してはいない、アリーナに新たに建設された地下に全員が集まっている

そしてオレはそこに設置された機械の操作を行っている、学園にラビットフット社が設置した新型シミュレーターだ

「設定完了、使用ステージはアリーナに設定。いつでも使えますよ、織斑先生」

「助かった、紫藤。まだ上手く操作を覚えて無くてな」

「自由度が高い分、設定項目が多いですからね。とはいえこれを使えばアリーナだけでなく市街地、砂漠、密林、水中、宇宙と様々な環境でI Sを動かしているような経験を積めますし、機体も壊れないので便利です」

「そうだな。取り敢えず初回は慣れているアリーナで問題ないだろう。現実との差も体感出来るしな」

「個人的には色々な状況が再現出来るので戦術を考えるのが楽しいですね。まあ、電子で構成された世界だからかどうにも勘が鈍るような気がするんですが」

まだ導入されたばかりであり、その操作も割りと複雑なシミュレーターの設定を織斑教諭に代わって行い、後は実際にシミュレーターを起動するだけにする

実機を使わないと感覚のズレがあるように感じられるのが難点だが、市街地などは絶対に戦闘を行えない場所であり、対テロ戦闘などを想定した訓練などが行えるのは大きい

今回は初めてのシミュレーターを使った授業という事でアリーナを再現したステージを設定してある、その方がクラスの皆にも受け入れ易いだろうからな

「ああ、それとこのシミュレーター、結構な数、データ上ですが機体を登録してます。今回、オレはそれを使いますね」

「そうか。それは他の生徒も使えるのか？」

「使ってもいいですよ。ああ、当然ながら戦闘データは収集させて貰いますけどね。ウチも完全な慈善事業ではないので」

「そんな事だろうとは思っていたさ。さて、見ての通り今学期からラビットフット社より新型のシミュレーターが提供された。その為、これで授業を行っていく事も増えるだろう。では、実際に使ってみるでしょう。紫藤、続けてで悪いが実演を頼めるか？」

「分かりました。相手は誰にしますか？」

「ふむ、そうだな。織斑弟、お前がやってみろ」

「えっ、俺？わ、分かりました、織斑先生」

とはいえ実際にシミュレーターで何処までやれるのかクラスの皆は知らない、一年一組と二組の合同授業だが、この中で実際にシミュレーターを使った事があるのはラビットフット社の関係者を除けば夏休みで指導を行った時のセシリアくらいだからな

そんな訳でオレと一夏はシミュレーターに接続された楯円体のカプセルに入り込んでいく、色々改良されてシミュレーターを利用中の利用者の肉体を保護する為に用意されたものだ

ロックも掛かるし、もしもカプセルが外から開けられるような事があればシミュレーター中の本人に通知が行くようになっていく

カプセルの中でオレは一夏の使用機体をユニコーンに設定しておく、オレは登録してある機体、ガンダムシリーズの中で主要な機体、主人公機やライバル機をメインとして登録してある機体の中からランダムで選出されるようにしてシミュレーターを起動、意識を電子の世界へと飛ばした

◆ シミュレーター自体は夏休みの間に完成した為、話には聞いていても実際に体験するのは初めてだった一夏は起動と同時に遠のいていた意識が覚醒すると自身の愛機であるユニコーンを纏った状態でアリーナのカタパルトに居た

その再現度は初めにシミュレーターと言われなければ気付かない程であり、実際に視界の端にシミュレーター中と表示されてなければ信じられなかったかもしれない

「おお、本当に本物みたいに動けるんだな」

軽く体を動かして調子を確かめた一夏、それが終わるとカタパルトに機体をセットし、アリーナへと向かう

そして空中で待機しているのだが、周囲を見渡しても康太の姿はなかった

まだ来ていないのか、そう思っていると向かい側のピットから一機のISが現れる、白を基調として青や赤が目立つカラーリングをし、頭部には四本の角を備えており二つの目のようなセンサーがある事から一夏はそれがガンダムである事を察する

しかしその機体は初めて見た機体であり、どのような戦闘スタイルなのか、その手に一切の武器を持たない事で推測する事も出来なかった

その機体を駆る康太は一夏と同じように空中の開始位置に着く、それから開始の合図であるブザーが鳴った事で両者は動き出した

だが一夏が空中でビームマグナムを構えたのに対し、康太は地上に降りていき、その足を地に着ける

そのまま仁王立ちをする姿に本当に戦う気があるのか戸惑う一夏、そこに康太の声が響く

「織斑一夏、貴様にガンダムファイトを申し込む！」

「はっ？えっ、ガンダム、ファイト……？」

「貴様もファイターであれば分かる筈だ！さあ、降りていざ尋常に、勝負！」

さていつもの様子とは随分と違うなあ、と一夏は思いつつも地上での戦いの康太が望んでいるのは伝わった事で一夏は同じように地上へと降り立った

それは地に足つけて戦う方が己の剣道の経験を大いに活かす事が出来る為であり、ビームマグナムを格納した次に背中からクレセントムーンを引き抜く

「では行くぞ、一夏！ガンダムファイト！レディイイイイツ！！」
「ゴーツ！！」

康太のノリは一夏にはわからない、だが何故か言わなければならぬという義務感のようなものに突き動かされた一夏は康太の呼び掛けに答える

合図と共にそのまま駆け出した二人は真正面からぶつかり合う、クレセントムーンによる上段からの振り下ろしを放つ一夏に対して康太はその場で回転、スラスターを加えた鋭い回し蹴りをクレセントムーンの刀身の横から叩き込む

それにより攻撃を逸らされた一夏であるが、更に康太が一步踏み込んだ事で剣の間合いより更に距離が詰められる

「おおおおおッ！」

「うわああああッ！」

そして繰り出されるインファイト、素早く繰り出される拳がユニコーンを打ち据え、一夏は咄嗟に後ろへと下がろうとする

「逃さん！ゴツドスラツシュ！」

「え、遠距離もツ!?ぐあッ!？」

だが康太により居合いのように振るわれたビームソードからエネルギーの斬撃が宙を舞い、一夏を捉えた

それにより空中で体勢を崩す一夏、その隙を逃さず康太は両腕を上へ伸ばし、片膝を上げさらなる技を繰り出した

「超級霸王電影弾!!」

頭を除く全身を回転させながらエネルギーを放出する事でエネルギーの渦を生み出しそのまま敵へと突撃する技、見た目もさる事ながら初見で、体勢を崩した状態で対応出来る訳もなく直撃を食らった一夏は吹き飛び、地面へと叩きつけられる

仮想空間で擬似的に再現されているとはいえ、その衝撃で意識を朦朧とさせる一夏、そこにさらなる追撃が加えられた

地面に着地した康太の機体の胸部の装甲が開かれエネルギーマルチプライヤーが露出、背部のバックパックから伸びたエネルギー発生装置が展開し光の輪が発現する

「流派東方不敗が最終奥義——」

そのまま両手にエネルギーを込めるように合わせ、右腰の辺りに移動させる康太、構えているとエネルギーが段々と蓄積されていつているのが分かった

「——石破天驚拳!!」

蓄積されたエネルギーが極限まで溜まったのか、その両手を前に向けて伸ばすと同時に拳のような形をしたエネルギーが一夏へと迫り、大爆発を起こす

そのまま戦闘終了を示す文字が表示され、残心を取った康太と一夏は現実へと送り返される事となった



「なんだ、お前としては真面目にやっていたつもりなんだろうが、アレはどうかならなかったのか?」

「そう言われてもゴッドガンダムはああいった機体で、ランダムに選ばれた結果なのでオレにはどうしようもありませんよ」

「それはそうなんだろうが、他の生徒が使えるのか、アレは?」

「正直近接戦闘の中でも完全な格闘機体なので初心者にはオススメしません」

シミュレーターでのデモンストレーションが終わった後、オレはシミュレーター前で正座しながら織斑教諭からの意見を聞いていた

正直オレも幾つも登録している機体の中からゴッドガンダムを引くとは思わなかった、相手が近接戦闘が得意な一夏でなければ苦労していただろう

あと流派東方不敗の動きは流石にアシストがあるようにされている、氣の力を利用するとか普通の人間には出来ないからな

「ともかく、今のは他の生徒に対して参考にならない。もう一度別の機体で頼めるか?」

「分かりました、ファイター系の機体は条件から外しておきます」

正直なところ、オレも他の生徒がゴッドガンダムを始めとしたGガンダムの機体を扱うのは厳しいと思う

なのでランダムに選ばれる機体の中からGガンダムの機体は除外

しておく、そして次の対戦相手であるが——

「紫藤、このシミュレーターは何人かで同時に稼働可能だったな？」

「はい、このシミュレーターだと最大二十人の同時接続が可能ですよ。『戦技研』の物は更に倍の四十人を予定しています」

「ふむ、ならばそうするか。オルコット、デユノア、凰、お前達もやってみるか？」

——織斑教諭の指示で代表候補生の三人が選ばれた

が、その前に一つだけ聞いておかなければならない事があるな

「その前に、このシミュレーターはラビットフット社の量子コンピュータに接続してある。流石に他社の機体は正確なデータが入ってない。ISを一度接続すれば機体データを読み込んで再現可能になるぞ」

「そうなの？ だったら読み込ませるのが先ね」

「いや、そっちの特殊兵装から機体構造まで全部抜かれる事になるから機密情報の保持という意味で慎重になって欲しいんだ」

織斑教諭の言葉に特に問題ないのかセシリアとシャルロット、鈴の三人はシミュレーターに接続しようとするのに待ったを掛ける

なのでオレの説明を聞いても危険性に気付かなかった鈴により詳しい説明をするとピタリと動きを止める

「それ、マジなの？」

「マジだ。一応、これまでの訓練時のデータとかを使って再現した機体はあるんだが、やっぱり本物との誤差はあるだろう。だから訓練なのに実機との誤差があるのは、正直どうかと思っただ」

三人の機体はラビットフット社の機体ではない為に正確なスペックや操縦方法が再現されているとは言い難い

だがそもそもその機体はそれぞれの国の、企業の物だ、その誤差を埋める為にデータを勝手に取るのは流石に憚られる

「ボクの機体はラビットフット社からの技術提供で完成した機体だから大丈夫だよ」

「私も、以前の教導の際に国から許可があったと聞いていますわ。なので私も問題ありませんわね」

尤もセシリアとシャルロットはその辺りはクリアしていた、片やラビットフット社との合作とも言える機体と、既にシミュレーターを利用した事のある機体だからだ

なので残るは鈴だけなのだが、やはり迷っているようである

「ぐぬぬ、私だけじゃ決められない問題ね……とはいえ本国に許可を取る時間もないし……」

「という訳で鈴、こんな機体があるんだが？」

「ん？何よこの機体？」

「これなら青竜刀もあるし、なんなら一部武装を外して二刀流にしても良い。初めて乗る機体で不安はあるだろうが、オレもランダム選出だから大丈夫だろう」

「んー、まあ良いわ、今回はこの機体を使ってあげる！で、この機体の名前は何て名前なのよ？」

「ふふん、聞いて驚け、『神龍』だ」

「あら、『甲龍』繋がりで良い名前ね、気に入ったわー！」

こうして鈴の代わりの機体も決まり、シミュレーターが開始されるさきで、次の機体は何が出てくるかな？



以前にも体験した事のある感覚と共に仮想空間に降り立った事を自覚したセシリアはまず戦場となる場所がアリーナではない事に気付いた

そこは都市だったのだろう、だが幾つも並び立つビルは殆どが途中で折れ、地上にその瓦礫が散乱している

シミュレーターの設定を確認してみれば、その名称が『廃墟都市』となっている事からも確定だろう

「ですが、これならこれで好都合ですわね」

まずセシリアがこのフィールドを見て思ったのは広さだ、少なくとも数キロに渡って広がっているフィールドは遠距離からの狙撃を可能とするブルー・ティアーズに有利に働くだろうと予測していた

そして周囲を確認し、狙撃に適した場所を確保しようと考えていた時、コア・ネットワークを通して通信が入る、相手はシャルロットだっ

た

『あ、通信は繋げられるみたいだね。聞こえてるかな、セシリア?』
「ええ、聞こえてますわ、シャルロットさん。それで、どのような用件
ですか?」

『うん、実はこのシミュレーターの設定って今はバトルロイヤルに
なってるみたいなんだけど、折角なら共闘しないかなって思ってたよ』
通信を繋げシャルロットと話すセシリア、その内容に少し興味を惹
かれた事で続きを促した

「それはどういう理由で、ですか?」
『まず今回のシミュレーターだと、康太って新しい機体を使ってるよ
ね』

「そうですね。事前にそう聞いていましたわ」
『で、ボク達ってその機体がどんな機体なのか知らないし、向こうは
知ってるよね。それから、機体によっては康太の戦闘スタイルがガラ
リと変わったのはさっきのシミュレーターで見たから、もし個別
に当たって初見殺しとかあったら直ぐに落とされると思ったんだ』
「それは、確かにそうですね」

言われて思い出すのは先程のシミュレーターでの様子、基本的に射
撃の方が得意な康太が、その射撃を投げ捨てて超至近距離の格闘戦を
行っていた様子だ

機体特性もあるのだろうが、明らかに率先して格闘戦を仕掛けに
行っており、更には動きにも迷いはなかった事から、ランダムに選出
された機体も乗り慣れていなくとも扱えない訳ではないと分かる

特に先程のシミュレーターでは一夏がその差に対処出来ずに一方
的に敗北していた、そしてセシリアもまた仮にも代表候補生としてそ
のような結果を晒す事は望んでいない

結果、シャルロットの提案に乗ったセシリアは同じように鈴にも声
を掛け、三対一でまずは康太と相對する事に決めたのだった



特に康太に捕捉される事もなく指定した場所に集結する事が出来
た三人は改めて互いの状況を確認していた

「ところで、新しい機体はどのような感じですか？」

「悪くないわ。情報を見てるだけでもこの装甲凄いわよ。実弾にも光学系にも高い耐性があった、おまけに電磁波とかを吸収するからステルス性もあるみたいね。武装も近接戦闘が得意な物で揃えてあるから問題ないわ」

「じゃあ作戦としては鈴が前衛、セシリアが後衛でボクが遊撃って感じだね」

この状況で一番の不確定要素は康太がどのような機体を扱っているかだが、次点で乗り慣れない機体を扱う鈴である

だが全身装甲という普段の機体と全く違う機体であっても動きが阻害される事もない事を確認した事で問題無しと判断した

そしてシエンロンガンダムに乗る鈴、ブルー・ティアーズに乗るセシリア、エールストライカーを装備したストライク・ラファールに乗るシャルロットと、機体特性からそれぞれの役割を決めた三人は索敵を開始する

普段のアリーナとは違い遮蔽物も多く視界が利かない中でセンサーを頼りに都市を移動していく

半壊しているビルとビルの間を飛行し、影すら見えない康太に対して嫌でも緊張感が高まっていく中で、気付けたのは偶然であった

縦一列に並んで飛行する中で一番後方に居たセシリアがふと視線を向けた崩れ掛けたビル、残っているビルの中でも一際高いそのビルの最上階付近が光ったと思った時には咄嗟に動いていた

「回避!!」

「ツ!?!」

たった一言、だが殆んど本能的に動いた事で一步遅れてではあるものの鈴とシャルロットは咄嗟に瞬時加速を行い離脱する

その判断は正しく、直前まで鈴が居た空間を始めとしてシャルロット、セシリアの位置までを薙ぎ払うかのように極大のビーム攻撃が通り過ぎた

もしもセシリアが気付かなければ今の一撃で終わっていた、そう思えるだけの威力に一瞬だけ血の気が引く思いの三人、だが直ぐに思考

を切り替えると即座に今の狙撃地点を確認する

「捉えましたわよー」

そして三人の中で一番センサーの性能が高く、狙撃に秀でているセシリアが康太の機体を捉える

ビルの内部、最上階より少し下の階で片膝を着き機体全高と同じくらいの長大なライフルを構える機体の姿を視界に入れると同時にデータベースがアップデート、康太の駆る機体が『ウイングガンダム』と表示される

「まずは接近するわよ！各自で接近、的を絞らせないように動きなさい！」

「なら私がお二人を援護しますわ！行って下さいまし！」

康太の狙撃地点まで凡そ三キロ、ISなら直ぐの距離であり武装の関係で近付く必要のある鈴とシャルロットが二手に別れて康太への接近を試みる

唯一射程距離に入っているセシリアのみその場で康太への狙撃を行う、回避機動を取ればその分だけ二人が楽になり、康太から撃たれる心配が減るからである

何より先程の威力を見るにチャージまで時間が必要となる、そう睨んでいたセシリアだが回避機動を取りつつ右手のライフルを自身へと向ける康太の姿にセシリアも回避機動を取る

だが康太の持つライフルから放たれたのは先程と同様のビーム攻撃であり、直撃こそ避けたものの余波だけでセシリアの体は大きく揺さぶられる事となった

「くうう、何て連射速度ですの!?!」

体勢を崩されたセシリアが再び康太へと目を向ける頃には既にライフルを此方へと向け直していた、向こうも動きは止まっているのだが狙撃する余裕もなく回避に専念する事で再び放たれたビーム攻撃を回避する

だが時間を稼いだ事でシャルロットも射程範囲内に康太を捉えた事で連射性に優れたビームライフルを撃ち、回避行動に入った康太はそのままビルの裏手に回り込んでいく

「逃しませんわよー!」

それならそれでビルの裏手から出てきた瞬間に撃ち抜く、そう闘志を燃やすセシリアだが、康太はビルの壁を突き破り内部から現れる、その姿は先程までの二対の翼を持つ人型と大きく異なり鳥のように見える姿へと変貌していた

「鳥?!」

「可変機でしたのね。ですが、以前にも見た事がありますわ!」

思い出すのはイギリスでの教導の際に未確認機として現れた時の戦い方である

あの時は一撃も有効打を与える事が出来なかったが、今度こそはと精神を集中させる

その最中、ウイングガンダムの機体下部に吊り下げるように配置されているパーツの中で片方の中身が無くなっている事に気付いた

そしてその中身は良く見ればウイングガンダムの持つライフルに装着されており、それがカートリッジである事をセシリアは見抜く

スラスターが全て後方に向けた事で人型の時とは比べ物にならない速度で空を駆けるウイングガンダム、そのライフルから再び極大のビーム攻撃が放たれセシリアへと向かう

「此処ですわ!」

だが康太が攻撃に移る時こそ最大の攻撃のチャンスとなる、人型の時と違いバード形態になったウイングガンダムがバスターライフルを撃つには機首を標的に向ける必要があるからだ

その瞬間は康太の動きを完全に見切る事が出来る、そう判断したセシリアは康太が攻撃に移った瞬間に狙撃で返した

回避はしたが機体の左半身がビームを受け絶対防御の発動によりブルー・ティアーズは半壊する、だがスターライトMkIIIより放たれたレーザーは的確にウイングガンダムの残っていた予備のカートリッジを撃ち抜く

被弾と同時に切り離し距離を取る康太、だがエネルギーを物質化寸前まで縮退させ詰め込んだカートリッジ三分の誘爆は激しく、咄嗟に変形して左手の盾を構えるも防ぎ切る事は出来ず、その機体が大

きな損傷を負う

「一気に畳み掛けるよ！」

「ようやく私の得意な距離ね！」

そこに追撃を仕掛けるシャルロットと鈴、康太はバスターライフルに残ったカートリッジの内の一つを外すとシャルロットへ向けて蹴り飛ばす

狙いが分かったシャルロットは機動性を活かし全力で回避に移り、カートリッジを狙い放たれたビームが到達するよりも早く爆発の範囲内から離脱する

しかし距離を取る事になり鈴との連携は断たれる、鈴は構わずビームトライデントを右手に、？牙と呼ばれるシールドに備えられた青竜刀型の武装を左腕に康太との距離を詰める

カートリッジを全て使い切ったバスターライフルを捨てた康太も同じようにシールド裏に懸架されていたビームサーベルを抜く、だがリーチと手数、どちらも鈴に軍配が上がり、切結ぶ度に微かではあるが損傷が増えていく

加えてシャルロットが地上で換装したランチャーストライカーのアグニを攻撃を背後から受け、スラスターを破壊され満足に飛行する事さえ覚束なくなってしまう

そんな動きの鈍った相手の隙を鈴が逃す筈もなく、？牙の振り下ろしをまともに受けた康太は地上へと叩き付けられる

撃破を確認する為に鈴とシャルロット、そして機体が半壊しつつも辛うじて飛行が可能だったセシリアは康太が墜ちた場所へと向かっていく

そこには傷付き満身創痍な状態ながらも立ち上がるウイングガンダムの姿があった、だが機体が立つと康太は機体から生身で降りて来た為、三人は訝しく思いながらも警戒しながら距離を詰めていく

そして生身でも声が聞こえる位置まで近付いたところで康太は右手に握ったスイッチを三人にも見えるかのように前へ突き出す

「任務達成は不可能と判断。機密保持の為、自爆する」

その言葉にギョツとする三人、淡々と言い放った康太は何の躊躇い

もなくスイッチを押すと、直ぐ後ろにあるウイングガンダムの胸部を中心に各部が光を放ち、次の瞬間には爆発した

その爆風から逃れた三人だが、煙が晴れた時、三人の目に映ったのは地面に叩き付けられ、瞳孔が開き切った目をして事切れた康太の姿であった



「何故あそこで自爆した!?何故自爆した!?!」

ウイングガンダム
「あの機体で敗北したら自爆する、当たり前じゃないですか」

「お前の常識が周りの常識と同じだと思ふな!他の生徒がトラウマになるだろう!」

その後、シミュレーターを中断されてオレは現在シミュレーター前で織斑教諭に正座をさせられていた

だが、オレが何の覚悟もなく自爆したとは思わたくない

「伊達や酔狂で自爆したなんて思わないで下さい。他と違ってオレは痛覚軽減なんて施してないんです。文字通り死ぬ程痛い上で覚悟して自爆したんですから」

「尚更悪いわ、馬鹿者!」

「ギャンツ!?!」

だが反論はあっさりと出席簿によって返される

まだ全身に自爆した時の痛みの余波が残っている中で新たに増えた頭の痛みに身悶えながらも、尚も反論させて貰う

「ですが痛みの無い訓練に意味なんてないですし、敗北すればどうなるかの覚悟も無いよりは良いじゃないですか」

「それはそうだが、やるにしても事前に心構えはさせるべきだ。突然画面にクラスメイトの死に顔が映った級友の事を考えろ」

そう言われて納得する、確かに事前に伝えておいた方がまだ気持ちの整理は出来るだろう、と

「分かりました、次からは『見ておくがいい、戦いに敗れるとは、こういうことだ!』と言ってから手榴弾抱えて自決します」

「それを止めろと言っているのだ、大馬鹿者!!」

「グラブロッツ!?!」

再び出席簿を頭に食らった事で再び身悶える事になってしまった
そんなオレを見下ろしながら、深い溜め息をつきながら織斑教諭は
オレに問う

「もつとこう、普通の機体は無いのか？扱い易く、自爆もない機体だ」
「逆に多すぎて絞り切れませんよ。ああ、実際には作れるけど相手が
居ないから作ってない機体ありますね」

「ほう、どんな機体だ？」

「超大型の追加パーツがあつて大量のミサイルや巨大なビーム砲、大
型ビームサーベルを備えて、核融合炉搭載の為にシールドエネルギー
も無尽蔵、通常のISなんて十機束になっても敵わないような機体で
す。サイズもあつて通常戦闘では使えず、もう艦隊相手ぐらいしか使
い道ないんじゃないかって機体ですよ。開発コードは『わがままな美
女』です」

「却下だ！何処が普通の機体なんだそれは！」

「でも今のところ臨海学校の件で真面目に開発が検討されていますよ、
これ」

「確かに、それを考えればな……他には無いのか？」

「仮想敵としてMSでも使いますか？母艦含めてオレが指揮執ります
よ？」

「ふむ、そういう方向性か。数はどれだけ出せる？」

「MSだけで三百機、後は母艦が戦闘します」

「まあ、普通では出来ない体験を出来るという点では有効か。で、お前
が自爆したりする可能性は？」

「艦橋に乗り込まれない限りは指揮に専念しますよ」

「では最後のデモンストレーションとして、それを行うとするか。参
加人数はどれだけ必要だと思う？」

「専用機持ち全員で良いと思いますよ。それを相手にするだけの戦術
もあります。今後を見据えて多数の敵を相手にする訓練、そう思えば
必要かと」

「良いだろう、これで最後だ。オルコット、デユノア、凰、さっきのア
レの後でキツいかもしいれないが、参加するか？」

此処まで色々調整してようやく決定したところで織斑教諭が先程のシミュレーターに参加した三人を見る

三人は少し青い顔をしていたが参加するようだ

こうして、最後のデモンストレーションとなるシミュレーターに一年一組と二組の専用機持ちが全員乗り込む事になるのだった

60話 教典に近いもの

前回と同じような浮遊感の後、覚醒した意識で一夏が周囲を見渡すと、そこは見覚えのない部屋の中であった

窓もなく外の様子は分からない、だが長いソファが部屋の壁際に設置され、中央にはテーブル、出入口らしきドアと、その反対側には大型のモニターが置いてある

何処かカラオケボックスみたいだなと思いつつ、他の面々も同じようにこの部屋に転送されてきているのを確認する

その中でクロエは真っ先にモニターに近付き、モニター横に備えられているパソコンの操作を始めた

「やつぱり、コウタさんが使うのはアレみたいですね」

「そうね、アレね」

何をしているのかと思っていたが、そのモニターに表示された物を見てクロエは隣に来て同じようにパソコンを覗き込んでいたりナと共に頷き合うと、まだ全容を知らない者達に向けてパソコンに表示されているものを大型モニターにも表示する

「まず、今回のシミュレーターでコウタさんが使う兵器ですが——」

そして、ブリーフィングが始まった



織斑千冬は他の生徒達と共にシミュレーターの画面を観ていた

その出自が独特な、ズレた価値観を持つある意味問題児とも言える少年と、同じくズレた価値観を持つ自身の親友が手掛けたシミュレーターの価値は十分に認めていた

流石に先程の自爆には面食らったものの、今度はそのような心配はないと聞いて一先ずは信用している

シミュレーターに表示されている戦場は海上、専用機持ちの発進場所はラビットフット社の保有する大型輸送機アルバトロスとなっていた

その輸送機自体は千冬も知っている、簡易的な移動拠点兼商業目的の輸送機だと報告を受けているからだ

なので千冬は康太の指揮する母艦の方に視線を向ける、雲に隠れているようだが海上という事は何らかの船舶、恐らくは空母や揚陸艦といった船にMSを載せているのだろうかと予測する

そうしている内にモニター内にその艦が現れる、白を基調とした塗装がされ前方に伸びる三本のカタパルトが特徴的であり、一对の翼を備えたその艦が空を飛び雲を切り裂きながら現れたのだ

「あの大馬鹿者め……」

どのような母艦か先に聞いていなかった自分も悪いが、誰がこのような空中戦艦を持ち出してくると予想出来たというのか

モニターに姿を現した事で『ネエル・アーガマ』と表示された艦を眺めながら、千冬は内心頭を抱えるのだった



頭を痛める千冬の心情など知らず、ネエル・アーガマの艦橋にてオットー・ミタスと同じ軍服に身を包んだ康太は艦長席に腰掛け正面に視線を向けていた

「艦長、レーダーに敵輸送機を捕捉、本艦の前方二十キロの位置です！」

「始めるとするか。ブリッジ遮蔽、ミノフスキー粒子戦闘濃度散布！MS隊は順次発艦始め！後部ミサイル発射管、全弾ビーム攪乱幕を装填！各砲座、照準敵輸送機！」

擬似的に再現されたオペレーターからの報告に対して矢継ぎ早に指示を出す康太、それに応じて艦橋の窓を装甲が覆い、ミノフスキー粒子が戦場に広がっていく

それと同時に原作通りの大きさの艦に対してISサイズのMS、ジムⅢがベースジャバーに乗りカタパルトから発艦を開始する

サイズの違いから特徴的とも言えるカタパルト甲板に増設されたISサイズのカタパルトにより四機ずつ横並びで発艦していくジムⅢ、それが後部を含めた四基のカタパルトから発艦する為、搭載されている三百機が次々と飛び立っていく

「主砲並びに単装ビーム砲、サブ・メガ粒子砲、発射準備良し！」

「主砲発射！他は次に備えろ！」

そうして状況が刻一刻と推移していく中で砲術長の席より攻撃準備が整った事を受け、指示を出す

ネエル・アーガマの上下に備えられた二連装メガ粒子砲が稼働し、アルバトロスへと狙いを定めると同時に発射された強力なビームが途中に存在した雲を散らしながら突き進む

計四門の砲から放たれたメガ粒子は、航空機と言えども足の遅い輸送機であるアルバトロスを問わず撃ち抜き、その巨大な翼をもぎ取った

「主砲命中！敵輸送機、墜落して行きます！」

「まだまだ、まだISが出てくるぞ！MS隊の発進状況は?!」

「八割が発艦完了しました！」

「よし、残りは本艦の直掩に回せ！ミサイル発射管、MS隊が敵部隊と交戦する前にビーム攪乱幕を展開する！接敵までに準備急げ！」

「了解！」

「観測機の状況は!？」

「全機上空にて待機中！ミノフスキー粒子に上手く隠れています！レーザー通信は感度良好！これは、観測機より入電！敵IS部隊を確認！数九、本艦に向け針路を取っています！」

「よろしい。これより対IS戦闘を開始する！ミサイル発射管、諸元入力！敵の鼻っ面に叩き込んでやれ！MS隊はビーム攪乱幕の展開と同時に攻撃開始！」

「MS隊、敵部隊との接触まで残り二十！」

「ビーム攪乱幕発射！」

「了解、ビーム攪乱幕発射します！」

展開される部隊の状況、敵の状況、それらを把握し行動に移していく康太、その指示によって放たれたミサイルが複数、戦場へと向かうが、到達と同時に炸裂する筈だったミサイルが幾つか迎撃され、効果を発揮する事なくレーザーにより撃ち落とされた

「敵がミサイルを迎撃！ビーム攪乱幕、当初の予定より拡散していません！」

「やはり対応してきたか。となると、クロエだな。狼狽えるな、第二次

攻撃を開始する。ミサイル発射管、再びビーム攪乱幕を発射せよ！MS隊にはビーム攪乱幕の展開が完了するまで無理に仕掛けるなど伝えろ！」

「りよ、了解！」

だが即座に次の手を打つ康太、自身の取った戦術はネエル・アーガマを運用する際の戦術として考案していたもので、それを知っている相手となると自ずと限られてくる

第二波として新たなミサイルが発射、今度は既に展開されていたビーム攪乱幕の影響によりレーザーで迎撃される事もなく全てのミサイルが新たなビーム攪乱幕を形成する

展開までに十機近くのジムⅢが落とされたものの、まだ大勢に影響はないと見て攻撃を続行する

「全機、攻撃開始！可能であればバンシィ並びにフェネクスを優先して攻撃、撃墜せよ！」

そうして場の準備が整った事で全ての部隊に攻撃指示を出す康太、そこには自身の戦術を知るクロエとリナを真っ先に倒すように仕向けていた

「この艦の全力は出せないとはいえ、此方の戦術を把握されている以上は無視も出来んからな。仲間とはいえ、戦いは非情さ」

同じ企業に所属し、幾つもの戦いを切り抜けてきた戦友であり、幼馴染でもある二人ではあるが、今の康太は完全に指揮官として振る舞っており手心を加えようという考えは一切なかった

◆ こうして、戦闘の火蓋は切って落とされたのであった

「し、死ぬかと思った……」

撃墜されたアルバトロスからISを展開して脱出した一夏はそう安堵の息を吐く

作戦会議として康太の指揮する戦艦のスペックを大まかに説明されていた時に襲ってきた強力なビーム攻撃により大きく揺れる機内、劈くような音を立てて軋んでいく輸送機の内装を見てそれぞれが思い思いにISを展開して脱出していくというまず普通では体験出来

ない経験に冷や汗をかきつつ、砲撃が飛んできたであろう方向を見やる

『皆さん、ご無事ですか？今のは輸送機を狙った攻撃です。次は私達を狙ってくるでしょう。ですが、康太さんならその一段階前に仕掛けて来ます』

少し落ち着いたところでクロエからの通信に耳を傾ける一夏

自分も康太の出自を知るだけに、それが指揮する戦艦が普通ではないと予想は出来ている

そして康太と共に居る事の多いクロエならば自分達以上に康太の取る戦術を知っているだろう事から自然と指揮を任せていた

『クロエさん、このジャミングもその一環ですか？』

『まさかISのハイパーセンサーで此処まで見えなくなるなんてね』
『確実にミノフスキー粒子の影響です。私達のビーム兵器に使用している粒子ですが、レーダー等を阻害する効果もあります。それを戦艦の出力で散布されればこうなるのも仕方ありません』

そんな中でセシリア、シャルロットの現状で一番の厄介な点を挙げ、その理由を知るクロエが答えた

本来ならば広大な宇宙でも運用が可能なように数百キロであろうと見渡せるISのハイパーセンサーが、現状では三キロ程度しか鮮明に把握出来ないというのはISに乗り慣れている者からすれば信じられないような現象であった

『逆に向こうは戦艦サイズのセンサーを備えているので、私達よりも眼が広いです。更にはコウタさんの事なので念には念をと観測機を飛ばしている筈です。なので、恐らくは上空に既に敵機が居ます』

『本当に念入りだな』

『うむ、戦術的には正しい判断だな。不測の事態というのは何時如何なる時でも起こり得るものだ。ならば、誰かが上空の観測機を止めなければなるまい』

それらの事から彼我の戦力差を冷静に伝えるクロエ、敵に回り本気で仕留めに掛かってくる康太の容赦な無さに筈は頬を引つらせ、元軍人のラウラは逆に感心しながらも対策を練っていく

だがそれよりも早く、この場で一番センサーの性能が高いセシリアが警告を発す

『戦艦からミサイル!』

レーダーが阻害されていなければより早く接近に気付けたであろうが、既に距離は近く着弾まで幾許の猶予もない状態であった

いち早く気付いたセシリアは可能な限り迎撃を試みるが全てを撃ち落とすには至らず、他の専用機持ちがそれぞれ回避に移る中、唐突にそのミサイルが自爆する

『不発?!』

『いえ、これはビーム攪乱幕です! エネルギー兵器の射程が殆ど発揮出来なくなり! 直ぐに実弾に換装して下さい!』

事前に情報共有が出来なかつたのが痛かった、クロエは自分達を覆うよう広範囲に展開されたビーム攪乱幕を見て悔しがる

その後の展開が予想出来るだけに、直ぐに手を打たなければ何も出来ずに撃墜されてしまう

『そんな事を言われましても……』

『セシリア、コレ使って!』

『これは、感謝しますわ、シャルロットさん!』

それぞれ実弾兵装に装備を切り替える中、装備が基本的にレーザー兵器しかないセシリアにシャルロットが自身の装備の中から六一口径アサルトカノン、ガルムを貸し出す

同じように射撃がビーム主体の紅椿を駆る筈にも一夏が自身の拡張領域内からジム・ライフルとバズーカを、近接戦闘主体の千秋と鈴にも同じ装備がラウラとクロエから貸し出していた

そうして準備を整えた時、センサーにネエル・アーガマより発艦したMS隊が捉えられる、まだ向こうは射程距離に入っていないのか攻撃はしてこないが、ギリギリで射程圏内に入っていたセシリアとシャルロットがそれぞれガルムで狙撃を行う

それらの攻撃は変わらずジムⅢを捉え、制御を失った機体がベースジャバーより落下していく

そのまま立て続けに落とす二人だが、十機を超えた辺りで再

びミサイルが着弾する、弾頭は先程と同じくビーム攪乱幕であり、より濃度を増したガスによりビーム兵器の射程は絶望的となった

『敵部隊、来ます！』

そんな戦場になり今まで回避を優先していたMS隊の動きが変わる、率先して距離を詰めるように動いており、セシリアとシャルロットが狙撃で数を減らすよりも遥かに多くの敵が殺到する

そして双方の距離が一キロを切った時、MS隊の方から大量の白煙の尾を引くミサイルの群れが放たれた

「うおおおおおっ!？」

ジムⅢの肩部と腰部に備えられているミサイルポッドより放たれたミサイルの数は一機につき十発、ここまでに十数機が撃墜されているとはいえまだまだ総数二百を超える数から放たれたミサイルは文字通り視界全てを覆い尽くす程の物量となり一夏達を襲う

ジム・ライフルや散弾入りのバズーカを使い迎撃するも圧倒的な数を前には僅かな量に過ぎず、一発でも被弾すれば体勢が崩れ立て続けに被弾が重なる

それでも全身装甲であるユニコーンを纏う一夏はまだ楽な方であった、ミサイルの被弾により激しく揺さぶられはしたもののシールドエネルギーの減少はまだ少ない

同じだけの攻撃を受け、全身を装甲で覆っていない者達は被弾によりシールドエネルギーを大きく減少させ、衝撃を受け止められなかった為脱陸する者も出た

「一秋兄!? 箒!？」

機体が全身装甲ではなく、パイロットとしての経験が浅い一秋と箒の二人が脱落、意識を失い海へと落下していく

その二人を受け止めようと一夏はユニコーンを動かそうとするが、そこに散弾の雨が襲い掛かる

「くそっ、こんな時に!？」

攻撃のあった方向を見れば数機のジムⅢがバズーカを構えて接近してきていた

早く救助に向かいたいという焦りの中、一夏に向けて機体から戦場

の状況が変わった事が知らされる

「ビーム兵器が使えるようになった、これなら！」

伝えられたのはビーム攪乱幕の濃度が下がったという情報であった、それを受けて一夏はジム・ライフル等の実弾兵器を格納すると新たに拡張領域の中からビームガトリングガンを取り出し、弾幕を形成する

弾切れのある実弾兵器よりも弾数の多いビームガトリングガンによる弾幕で射撃の苦手な一夏でも次々とジムⅢを落としていく

そんな状況に堪らなくなったのか、大きく散開していくMS隊、この隙きに救助に向かえばまだ二人を助けられると一夏が思ったその時だった

『いけません、艦砲射撃が来ます！回避をツ!!』

「えっ?」

クロエからの警告、だがその言葉を理解するよりも先に一夏の視界がピンク色をした光に覆い尽くされる

その光が通り過ぎた時、一夏の姿は何処にも見当たらなかったのがあった



「敵IS、三機撃墜しました！それぞれ白式、紅椿、ユニコーンと断定！」

「ふむ、クロエはともかくリナが生き残ったのは意外だな。近くにシャルロットが居たのは運が良かったという事か」

エネルギー兵器を封じてからの実弾の物量により疲弊させ、艦砲射撃による攻撃による戦果を聞きながら康太はそう呟く

事前の予想では先程の戦術に対して一番有効に対処するのは実弾兵器を多く持ち、高速切替により状況に応じて素早く対応する事の出来るシャルロットだと予想していたからであり、その近くにたまたま居たりナが生き延びた事も不思議ではなかった

対してクロエは最初に比べてその技量も格段に向上しているのを康太は直ぐ近くで見してきた、可能な限りで攻撃を集中させて砲撃で仕留められなかったとしても、多少の期待こそあったものの仕方ないと

直ぐに割り切れている

とはいえこのままでは数に任せて押し潰す事が可能となる、ジムⅢの装備はバズーカの他にビームライフルとシールドを持たせてあり、その全てがジェガンの物をそのまま使用している

その為、火力だけならジェガンD型と全く同じであり、それが四方八方から撃ってくる中で掠めただけでも撃墜される危険性のあるネエル・アーガマのメガ粒子砲がある、康太としても同じ状況に放り込まれば苦戦は免れない状況にどう対処するのか、康太はそこに興味があつた

「艦長！敵I S部隊、本艦に向け接近してきます！」

「ほう、そう来たか。観測機の方は戦線に参加するように伝えろ。距離が縮まれば本艦のセンサーで十分に捉えられる。初撃が肝心だ、上手くやれよ」

「了解！」

そしてオペレーターより伝えられるクロエ達の動きに康太は小さく笑みを浮かべ、軍帽の位置を直しながら指示を出す

それはこの状況での最適解であり、それを成し遂げられるかどうか、その勝負が分かれ目となる事を悟っていた



周囲を包囲するように展開するMS隊に背を向けるようにしてネエル・アーガマへと向かうクロエ達は移動し、時折飛んでくる砲撃を回避しながら通信をしていた

『それで、何で向こうに突撃するのよ?』

「この戦闘の勝利条件は三つ、『敵MS隊の殲滅』と『敵艦の撃沈』、そして『敵指揮官の排除』です。先程の状況では敵の殲滅しか勝利条件はありませんが、あの数と艦砲射撃を同時に相手取るのは分が悪いと言わざるを得ません。加えて、あの場に居た全てのMSを撃破したところで、まだ直掩に残された機体が敵艦周辺に残っています。なので他の二つの条件も狙える敵艦周辺での戦闘の方が私達に有利に働きます」

『成る程、合理的な判断だ。この中であの艦や康太について一番知っ

ているのは姉上だ。私はその判断に従おう』

「他にも、敵艦に乗り込めば向こうは攻撃を躊躇い、艦砲射撃は死角に入る事で封じられます。そこに辿り着くまでが厳しいですが、この状況を覆すにはそのようなリスクを負う必要があるのです。あと、姉じゃないです」

『私は問題ありませんわ。それに、そろそろ一度くらいはまともに康太さんに勝ちたいですもの。このまま勝ち逃げなんて許しませんわ！』

『そうだね、さっきのシミュレーターも色々と問題あったし、ちよつとは返さないかね』

移動しながら作戦を伝え、全員の同意が得られた事で団結して動き出すクロエ達、だがそんな中で一人、リナだけが何かに引つ掛かっているように首を傾げていた

『ん〜、でもコウの事だからまだ何かありそうなのよねえ』

「そうですね、コウタさんならまだ何か仕込んで居ても不思議ではないです」

『その何かが、具体的に何なのよ？』

『そうね、例えば——狙撃とか？』

次の瞬間、上空より放たれたビームがリナの駆るフェネクスの背部に直撃し、スラスターとアームドアーマーD Eを接続しているアームを破壊した

「全機緊急回避！」

『何で私が言った時に撃ってくるのよおおおおおッ!!』

リナの被弾を確認した途端に回避に入った事で幸いにして他のメンバーへの被弾は無かった

その中でセシリアは狙撃手の姿を捉えようと背面飛行をしながらスターライトMkⅢを上空に向ける

未だに狙撃が飛んできている事から射点の特定は容易であり、その光学センサーが相手の姿を捉えた

それは機体本体はジムⅢであるものの、背中には航空機を背負うように接続し、長大なライフルを構える機体であり、航空機の方には丸

いレドームが備えられている

捕捉と同時に情報が更新、機体名ジムⅢ・ディフェンサーと表示され、細かな情報も他の者達に共有される

「観測機！完全に失念していました……ッ！」

『成る程、あれが我々の上を飛んでいたから砲撃の精度があれだけ高かったのだな』

『本当、数が多くても力押ししてくるだけデビルガンダム軍団の方がマシだったんだね！性格悪すぎるよ、康太！』

『何を言う、部隊指揮官として有効な手を打つのは当たり前的事ではないか。康太はその当たり前を実践しているだけだ』

『そう言うラウラさんはどっちの味方ですよ!?』

奇襲により散開しながら通信は繋がっている、クロエは存在を知っており、戦闘を開始する時には言及していたにも関わらず今になって思い出した事を悔やみ、シャルロットは数と戦術の組み合わせによる手強さを嘆き、ラウラは隊を率いる立場に居た事から康太の手腕を評価し、そんなラウラにセシリアがツツコミを入れる

先程まで希望が見えていたが完全に浮足立つクロエ達だが、そこに発破を掛ける者が居た

『色々と面倒な手を打ってくるけど、結局は康太を倒せば勝ちなのよね！ほら、前から来る砲撃と後ろからの狙撃、どっちも避けながら進むわよ！』

「そう、ですね。早くしなければ他のMS隊も加わってより状況が苦しくなるだけです。なら、前に進みましょう！」

『鈴さんの仰る通りですわ。それに、向こうが狙撃出来て此方が無理という話はありませんもの。進みながらですが、私がああ狙撃手を対処します。ですので、皆さんは回避に専念して下さい！』

『私はさっきのでスピード出ないし、此処で足止めするわ。まあ、ちよつとだけだろうけど、無いよりはマシよね！』

難しく考えるよりも即行動に移した方が良いと述べる鈴に、全員がそれぞれに出来る事をしていく

位置が露見しているのに一切移動する素振りを見せない狙撃手に、

同じ狙撃手のセシリアが撃ち負ける筈もなく砲撃の合間を縫ってはレーザーによりジムⅢ・デیفエンサーを撃ち落とす

スラスターを撃ち抜かれた事で足の鈍ったリナがその場に残り、当たらずとも派手に攻撃を放つ事で追撃してくるMS隊の注意を引く

それらの活躍により遂にネエル・アーガマの眼前まで迫るクロエ達、その接近を阻もうと直掩のジムⅢが動き、ネエル・アーガマの対空砲が火線を放つ

中でも一番に厄介なのがネエル・アーガマの対空機銃であり、セシリアの持つスターライトMkⅢと同等の威力のレーザーを雨のように撃ち続けていた

『この火力は反則ですわよ!?!』

「サイズと出力の差です、諦めて下さい」

『それはそうだけど、どうやってあの中に入るの!?!』

「対空砲を潰しつつ、あのカタパルト甲板に降ります。あそこなら敵も迂闊に撃てません」

『その後はどこかに穴を空けて突入するって訳ね?』

「そうです。ですが生半可な火力ではあの艦の装甲は抜けません。

ビームサーベルで切り裂くか、或いは――」

『私の機体にあるハイパー・メガ・カノンの出番という訳だな、姉上!』

「はい、この艦の単装ビーム砲並みの威力ですが、十分な威力が期待出来ます。あと、姉じゃないです」

この場に残った五人は襲い来る攻撃の嵐を回避し、時に対空砲を砲座ごと吹き飛ばしながら即座に作戦を決める

全ての対空砲を潰す必要はなく、左舷の対空砲を無力化したところに生じた穴を抜けて船体中央にあるカタパルト甲板に着地する

なお康太が艦橋で此処ぞとばかりに「左舷砲撃手、弾幕薄いぞ!何やってる!」と言っていたが、当然クロエ達は知らない

『チャージ完了まで十秒は掛かるぞ!』

『それまで敵を寄せ付けなければ良い訳ね!』

『分担してラウラさんの周囲をカバーしますわよ!』

『向こうも、何とか排除したいみたいだね』

「ですが此方は艦への被害を無視出来ません。このまま勝ちます！」

そうしてネエル・アーガマに取り付いた五人は行動を移す、ラウラが自身の機体が備えているハイパー・メガ・カノンを艦橋へ向け、その周囲を囲むように他の四人が盾となる

チャージが完了すれば撃たれる、その事が分からない訳もなく阻止しようとして直掩のジムⅢがベースジャバーから降りてビームサーベルとシールド、或いはビームジャベリンを構え近づけば鈴がビームトライデントを振るい貫き、他の三人から近づく前に撃たれ撃墜されていく

それでも気を抜けない状況で実際の時間よりも長く錯覚しながらもハイパー・メガ・カノンのチャージが完了した

そうして放たれたのは戦艦の火力にも引けを取らない威力のビーム攻撃、それは艦橋の前方部分を撃ち抜き、ISが通り抜けるには十分な大きさの穴を空ける

「今です、突入しましょう！」

『ええ！』

『そうね！』

『うん！』

『うむ！』

道は出来た、残っているMS隊も無視出来る、ならば躊躇う必要は何処にもないと五人は艦橋へ足を踏み入れる

そこには黒い軍服を身に纏い、艦長席から立ち上がって侵入してきたクロエ達に鋭い視線を向ける康太が居た

「ふむ、まずは見事だと言っておこう。よくぞあの戦術を打ち破つてみせた。クロエの情報があつたとはいえ、勝たせる気は無かつたのだかな」

「それでも、今回は私達の勝ちです、コウタさん」

「まあ、そう見えても仕方ない。だが私はまだこうして立っている、外に居るMS隊を突入させる事も出来る、艦の大型核融合炉を臨界状態に持っていき、核爆発により道連れにする事も出来る。戦争には制限時間も得点もない。スポーツの試合のようなね。ならどうやって勝

ち負けを決める?——敵である者を全て滅ぼして、かね?」

対峙し、懐から取り出した現実でも康太の愛銃となつているカスタム品のGSRが五人に向けられた

拳銃程度、ISを相手にするには殆んど意味を為さない、にも関わらず康太から発せられるプレッシャーのようなものにセシリアと鈴、シャルロットとラウラは思わず一步後退つてしまふ、が——

「今は訓練です。コウタさんを拘束すれば此方の勝ちでシミュレーターも直ぐに終わるのですから大人しくして下さい」

「えー、もうちよつとこう、ラスボス的なムーブしたかったんだけど、あ、ちよ、分かったから腕を擦るなISのパワーだと洒落にならないアーツ!」

何も影響を受けた様子のないクロエの言葉にあつさり威圧感を霧散させた後、無理やりに拘束され腕に手錠を掛けられる

そのあまりの落差に四人は呆然としていたが、クロエの言っていた通りに手錠が掛けられた瞬間、勝利条件を満たした事でシミュレーターは終了、全員の意識が現実へと帰還していくのだった



「で、何でオレは正座させられてるんです?」

「ほう、何も心当たりがないと言うか?」

「ちゃんと言われた通りに自爆は無しにしてたじゃないですか。やろうと思えば甲板に取り付かれた時点で融合炉を臨界に持っていった自爆も出来たんですよ」

「そもそもあの様な戦艦を持ち出した事が問題なのだ、馬鹿者!」

「ザクレロツ!」

あの後、現実に戻ってきた途端にオレは織斑教諭に正座をさせられ、今日何度目かの出席簿を食らっていた

「MSは良い、あの性能なら直ぐに束の奴が作れるだろうし、今のMSもあの様な代物だからな。だが、あの空中戦艦はどうみてもおかしいと思わなかったのか?」

「痛た……あー、織斑先生、一つ言い訳していいですか?」

「何だ、言ってみろ」

「ネエル・アーガマですが、此処だけの話、地下ドックで既に七割方建造が完了してます」

だが話を聞く限り、ネエル・アーガマの姿があまりにも常識と掛け離れていた為に怒られているらしい、なのでオレはネエル・アーガマの事を一部教えた

そう、あの艦は今現在地下のラボの一角で建造中なのである、それには回収してきたエウクレイデスが大いに役立っていると言っ
ておこう

そもそも核融合炉を始め幾つもの技術を保有しているのだ、建造に着手したのは臨海学校の後だが、リソースを大きく割いての建造はかなりの速度で進んでいる

だから決して空想上の産物、という訳ではないのだ

「お前達は一体何と戦っているんだ……」

「仮想敵はデビルガンダム本体ですよ。ISが突入して攪乱。ビーム攪乱幕は突入部隊の掩護。ISでデビルガンダム本体の注意を引きつけ、先程は封印してましたがネエル・アーガマのハイパー・メガ粒子砲で仕留める。そういう想定で建造しているんです。後は宇宙に出た際の拠点として使ったり、他様々な技術が実際にどのように動くかの技術実証艦という訳です」

つけ加えるなら、本来は宇宙での活動の目処が立った辺りで、もつと武装の少ない別の艦を建造する予定だったのを、対デビルガンダムという目的の為に計画を前倒しで、武装が豊富で艦載機の運用に長けた艦、という事でネエル・アーガマの建造が決まったのだ

デビルガンダムとの戦いが終われば宇宙で使用するという役目もあるので無駄ではない、建造の技術料はともかく素材でかなり高くないけど

技術実証としては重力ブロック、ミノフスキー・クラフト、大型核融合炉の建造といった物が挙げられ、宇宙に出れば順次研究を行う為の設備も追加する、そんな予定である

「……まあ、分かった。詳しくは束からも聞いておこう。ところで、先程のシミュレーターでこの艦を使ったのは、もしかしてだが――」

「理論値ですが、実際に操艦した際の戦闘データ等の収集もありますね。各国の代表候補生等と本気で戦闘出来る、良い機会でした」

「やれやれ、随分と強かになったものだ。話はもう良い、お前は今から他の生徒達がシミュレーターを使う際のサポートに回ってくれ。お前の用意した機体を使う場合、その簡単な説明も頼む」

「分かりました、織斑先生」

と、どうやらオレの言葉に色々と納得がいったのか、怒気の失せた様子の織斑教諭から言われた通りの役割を熟す為に端末を用意し、登録してある機体の説明をする作業に移るのだった

61話 兎の巣穴

IS学園の文化祭までの期日は残り二週間とない、それでもオレ達は生徒会としての狙いもある為に訓練は続けており、ある程度の準備を手伝った後はラボでシミュレーターを使う、という日々が続いている。

そしてクラスの出し物も既に衣装や内装の準備は終わっており、前日に飾り付け等を手伝うだけであり、他の接客担当や料理担当の生徒達がそれぞれの役割の練習をしているくらいに落ち着いている。

なので比較的時間は取りやすく、生徒会のメンバーとして当日は文化祭の見回りという役目もある事と相まってオレは訓練に打ち込めていた。

そんな中、一年生の専用機持ち全員が揃って訓練をしようという話になったので、オレは全員を訓練の為に学園の地下にあるラボまで招待する事にした、当然ながら篠ノ之博士の許可は取り付けてある、というより話したら特に箒とかに仕事場を自慢したいという事で見学ツアーが企画される事になった。

「それにしても珍しいな。束さんのラボに全員を招待するなんて」「今のところ、各アリーナに設置されているシミュレーター六基の中で四基は三年生が独占してるからな。最新鋭の訓練が出来るのに卒業までの時間が無いと、不満が多かったからな。かと言って残りの二基を一年二年でそれぞれ一基ずつ使っても学年全員で、だから順番待ちだ。実機で訓練しても良いが、シミュレーターでの状況設定に慣れると物足りなく感じるだろう?」

現在、シミュレーターはかなり先まで予約で埋まっている、三年生は追い込みの時期でもあるので少しでも多くの訓練が行えるように、その鬼気迫る様子は文化祭での勝負を捨ててでもという想いが伺える程だ。

そして他の学年も、此方は文化祭で一位になれば暫く『戦技研』でのシミュレーター独占も出来るとあって文化祭の方に力を入れていく様だが、人数が多いから使っても一日だけ、なら文化祭の準備期間

でも一日だけ抜けても大丈夫と、予約が殺到している為に今更予約したところはずっと先になる

専用機持ちの全員も一度シミュレーターを使えば、可能ならシミュレーターを使いたいという点には同意のようだった

という訳でどうせならと誘った、シミュレーターでもAIを相手にするだけというのは味気ないのもある

それでオレ達はシミュレーターのあるラボに向かっている、実際のところ学園のあちらこちらに入口を作っているのだが、表向きの入口となつているゲートに向かう

場所は職員室の直ぐ隣、そこにゲート兼エレベーターが存在しており、厳重なセキュリティによって閉ざされている場所だ

しかし、そんな入口の前に一人の人物が立っていた

「待っていたわよ、康太くん」

「何か用があるにしても事前連絡くらい寄越して下さい、会長」

「というか生徒会長である

「それで、何の用ですか？生徒会の方は特に何も無かったと思いますけど」

「実は康太くんに聞きたい事があったのよねえ。地下で造ってるっていう戦艦の事よ。流石に真偽の程が気になるみたいで、学園長からも可能なら調べて欲しいって頼まれたのよ」

「拒否権は？」

「此処はIS学園、少なくとも土地を提供してる中で戦艦なんて代物を建造してるのに学園に何の情報もありません、じゃ外間も悪いのよね」

「まあそれはごもつとも」

ある程度は自由に研究開発させて貰っているとはいえエネルギー・アーガマは流石に向こうの許容範囲外だったという事だろう、それは分かる

「とはいえ会長は更識だ、そう簡単にラボの中に入れる訳にもいかな

い
しかしラビットフット社はIS学園の防衛等に協力する代わりに

土地を借りている身、貸してる側が強いというのは世の常だ、ネエル・アーガマは対デビルガンダム用という点でゴリ押せない事もないが、筋は通すべきだろう

少し悩んだ末に、オレは一つの決断を出す

「……オレの権限の及ぶ範囲で、セキュリティ付きでならラボへの立ち入りを許可します」

「随分慎重ね」

「外から命令されるのを嫌う篠ノ之博士を通すんです。多少の不便は受け入れて下さい」

「……まあ、それもそうね。その条件でお願いするわね、康太くん」
「はいはい」

取り敢えずは篠ノ之博士へは連絡を入れておく、許可は割りと直ぐに出た為にオレはエレベーターのセキュリティ認証を解除していく
その間、会長はあまり接点の無かった一年生専用機持ち達に自己紹介をしている

網膜認証を始めとした各種生体認証のみで開くエレベーター、登録の無い者達は今回限りのゲストとして登録しておき、地下のラボへと降りていく

それなりに降りたところでエレベーターの扉が開くが、そこには四機の軍用オートマトンが並んで待ち構えていた

機動戦士ガンダム00の二期から登場する視聴者に軽くトラウマを植え付けたこの兵器だが、警備用のセキュリティとして開発し配備しているのだ

普段は鎮圧モードで警告を聞き入れない場合、もしくは有事の際には戦闘モードに入るように設定してある、入口のエレベーターでゲスト登録もしていない相手なら即座に襲い掛かってくるだろう

完全な機械であるが故に冷徹さすら感じられる存在が扉の向こうで待っていた事に何も知らない面々は一步退いていたが、成る程こうする為に簡単に許可を出した訳かとオレは納得する

「気にするな、妙な真似をしなければ害は無い」

試しにオレが前に出てみれば軍用オートマトンは左右に分かれて

道を空ける、それを見て全員が一先ずは安心したように続き、通路を進んでいくと軍用オートマトンもまた前後左右を挟み込むような形で着いてきた

「ねえ康太くん、何で私だけこの警備ロボに照準されてるのかしら?」
「オレは軍用オートマトンに何の指示もしてませんよ。やったとすれば篠ノ之博士です」

なお四機の軍用オートマトンの本体下部にある機銃だが全ての照準が会長に向いていた、今は鎮圧モードだから撃つのはゴム弾だろうが、銃口を向けられて良い気がする訳もない

とはいえ本当にオレは何も手出ししてないので犯人は篠ノ之博士だろう、恐らくは本気で撃つ気はなく、からかっただけだと思われる

尤も、分かっているとはいえ止めるつもりは毛頭ない、今のオレは生徒会の紫藤康太ではなく、ラビットフット社の紫藤康太だからな
そうして少し歩いていると通路の一部がガラス張りの窓の付いた物に変わる、会長のお目当ての物は此処にある

「此処が造船ドック、会長のお目当てのネエル・アーガマを建造してる所です」

「うわ、本当に造ってるのね。改めて見ても、凄い巨体だわ」

「しかも殆んど形が出来上がってますわ。七割が建造済みというのも嘘ではなかったという事ですわね」

窓の向こう側では大きなパーツの取り付けを行っているエウクレイデスと、散らばって細々とした作業を行っている作業メカであるカレルの姿が見て取れ、その様子に先日のシミュレーターで戦闘を行った面々からは感嘆の声が上がっている

「今後、武装の方も取り付けを行っていく予定になります。エンジンもまだですし、重要な物はもう少し後ですよ、会長」

「そう。それで、完成したら進水式でもするのかしら?」

「最新技術の塊なんで盛大にお披露目するか、戦艦という形から秘匿するか、まだ未定ですね。篠ノ之博士はドヤ顔して見せびらかす気のようにですけど」

理論があつたとはいえ形にしたのは篠ノ之博士なのでその気持ち
は分からなくもない、誰だつて自分が創り出した物は誇示したいも
だ

「個人的には外部が煩そうなので公開は気乗りしないですけどね。各
国には対デビルガンダム戦での切り札として伝えておいて有事の際
にスムーズに動けるようにする程度、ですかね」

それも篠ノ之博士の方針によっては切り替えるつもりだ、原作とは
違いミノフスキー・クラフトにより単独での大気圏離脱能力を付与し
たのだ、宇宙での航行能力に加えその積載量は既存のロケットの比で
は無い事から宇宙開発に対する本格的な活動の開始として印象付け
られる為に悩みどころなのだ

「あまり此処に留まっても仕方ないですし、次に行きますよ」

「もう少し見ていたら駄目かしら？」

「構いませんけど、離れた途端に軍用オートマトンから機銃掃射され
ても知りませんよ」

「それは残念ね」

あくまで今日の目的は訓練であり、シミュレーター置いてある部
屋まではそれなりに距離がある

とはいえ半ばラビットフット社の見学ツアーみたいなものなので、
他にも寄る場所はあるのだが

「代わりに、此処にある物を少しだけ紹介しますよ」

「あら、今度は何があるのかしら？」

「見れば分かりますよ」

造船ドックのある区画の次の区画にある扉を開くと、まず眼に入る
のは巨大な航空機であるアルバトロスだ

この部屋は格納庫、作った物や待機中の機体等を保管しておく為の
部屋である、ちゃんと地上への入口も設けてある部屋だ

そしてその他にも色々と置いてあり、一夏がその一つに目を向けて
いた

「すつげえ、これ戦車か！こんな物まで束さんは造つてたんだな！」

「61式戦車、操縦士と砲手兼車長の二名で運用可能なMBTだ。1

55ミリ連装砲をメインに、7.62ミリ主砲同軸機銃を備え、車体上部には重機関銃と取り外して携行も出来る軽機関銃も搭載してる。後部ハッチのある収納スペースには物資の他、兵員を四名まで搭乗させる事も可能だ。詳細なスペックは省くが、現行の戦車より一回り大きい事を除けば世界最強の戦車だと自負してる。バッテリー駆動で、コロニー内での治安維持活動なんかを想定した車両だ」

正に陸の王者とも言うべき威容を備えたその戦車はガンダムシリーズに登場する地球連邦軍の主力戦車である61式戦車5型である

いざという時の為に治安維持活動にISは過剰戦力かつ絶対数の不足が予想される為、一般兵でも使用可能で見た目にも分かりやすい兵器、更にコロニーという閉鎖空間で大気汚染を行わないバッテリー駆動という点に着目し、篠ノ之博士にプレゼンを行った上で試作した物だ

ラビットフット社の人員不足により部隊として運用する事は叶わないが、将来を見据えて生産しておいて損はないと思ってる

「康太くん、これ外に販売する予定とかあるかしら？」

「ありませんし、出来ません。あと自動化や衛星とのデータリンク能力とか電子機器も多く搭載してるので、売るとなると値段もそれなりですよ」

多くの部品をこのラボで生産可能とはいえ、売るなら売るで技術料は多めに取るつもりだ、現行の戦車より多少安くしてやったとしても、数十億はするだろう

まあ、生産能力は限られるから売るにしてもライセンス生産になるだろう事は間違いないが

「じゃあ、このタイヤの見当たらない装甲車は何かしら？」

「74式ホバートラック、通称ブラッドハウンドです。通信、レーダーの他に地面に杭を打ち込んで音で索敵可能なソナーを装備した指揮車両です。ホバーエンジンにより水上さえも移動可能な高い走破性能を誇り、後ろの荷台には物資を積み込む事も出来、積み込んだ物によつてはISの整備も可能になります。その分、武装は20ミリバル

カンしかないので直接戦闘はオススメしません」

次に会長が興味を示したのは61式戦車の隣に置かれていたホバートラックであった

08小隊を始め様々な外伝作品に登場する本車は主に部隊の指揮を行う為に用いられる事が多い

トラックと名前のついているだけに荷台も広く、地上での走破性能も高い事から生産している、此方は戦車よりも実用性が高い為に使うかどうかは別としてアルバトロスで移動する際には常に搭載している

それよりも小回りを求めるならば1/2tトラックのラコタがあるが、そこらは単にオフロード車の電気版みたいな感じなので特に触れなくて良いだろう、それをベースにエレカー作れるからある意味で一番有用ではあったのだが

「他には、あのストライカーパックシステム試験用の機体と、新型動力炉搭載型MSくらいですかね？」

「新型MS、それは是非とも気になる話ね」

「まあラビットフット社は人数居ないので量産しませんし、それなら最初からIS配備するから使わないんですけどね」

もしもISを扱えない男性がラビットフット社に入ったら使う事になるかもしれないが、まずそのような信用出来る者が何人も入って来る事が想像出来ないのですその日は来ないだろう

しかし一機だけ試作はされてるので、それを全員に見せる

機体色が白一色なのは装甲材の元の色であり、胴体からX字状に伸びる粒子発生機が外観の一番の特徴と言えるだろうその機体はガンダム00に登場したジンクスである

夏休みのあの日、疑似太陽炉を手に入れた事で本格的に研究が進み、実際にGN粒子を用いた機体が作れるかどうかのテストで作られた機体だ

ISコアを使わず、事前に供給された電力に応じてGN粒子を生産する特徴を活かして機体駆動用のバッテリーと併用する事でMSでありながら高い性能を発揮するようになったジンクスだが、第二世代

ISくらいなら十機も揃えば対抗出来なくはない性能に仕上がった

GN粒子を利用した武装と装甲により火力や耐弾性も高く、もしも世界に公表すれば今以上に兵器としてのISの価値が下がるだろう機体になってしまった

なのでこの機体は大つぴらにする気はない、この場で見せはしたものの、それは此処に居る者達を信用しての事である、会長もこの機体の齎すであろう影響を考えれば不用意に漏らす事はない筈だ、正確なスペックは伏せておくしな

「あら？背中の方が空っぽになってるわね？」

「件の新型動力炉なら外してありますよ。それがあってこそこの機体の真価が発揮される訳ですが、それは別の場所で嚴重に保管されています」

具体的には此処よりセキュリティの高いエイフマン教授の研究室である、初期型疑似太陽炉であるが故のGN粒子の毒性を解決する為に疑似太陽炉の改良に取り組んでいるところだ

とはいえ初期型疑似太陽炉を使い一通りのテストは行っている、ライフルとサーベル、バルカン、シールドという基本的な装備のみのリンクスだからテストにも最適で、特に問題無く動けたからな

因みに、人が着込むような形で搭乗する都合上、太陽炉は後ろの方に移動する形で搭載している、結果としてオリジナルの機体よりも更に後方へと太陽炉搭載スペースとコーン型スラスタが配置される形になっていたりする

格納庫内には他には特に目に付く物はない、此処でもカレルが動き回っていたりするが、主にメンテナンス作業をしているくらいだな

「そろそろ次の区画に行くが、大丈夫か？」

「ほう、まだ他にもあるのか？」

「ああ、次は研究室のある辺りだな。研究内容によって更に区分分けされてるが、今回は表に出しても問題ない代物が主に集まっている場所だ」

「その言い方だと、表に出せない研究もしてらって意味に聞こえるん

「だけど……」

「大丈夫だ、人体実験とかの倫理的に問題のある研究なんて真似はしてないからな。どちらかと言うと機密レベルで表に出したらマズい物を秘匿してる感じだな。核融合炉とか、転用すれば純粹水爆が出来るからセキュリティは必要だろう?」

その言葉には納得したのか、質問をしてきたシャルロットを含む全員が頷いていた

それで次の研究室になるのだが、今度はセキュリティ認証の扉を一つ潜ってから新しい区画に入る、表に出しても問題ないとはいえ大事な研究成果があるのでセキュリティは怠っていない

今回はその中の一室を全員に見せる事にした、そこには幾つものコンテナが並んでいた

「此処は食糧生産プラントだ。宇宙に出た時に自前で食糧生産が出来るように研究してる。此処にあるコンテナ一つ毎に異なる植物を育ててるんだ。遺伝子操作によって収穫サイクルも早めてある。この大豆なんて一週間もあれば収穫可能だ」

「それは食べて大丈夫なものなのかしら?」

「特に変異とか見られませんよ。まあ自然界に放たれたらあつという間に繁殖してしまうので、こうしてコンテナ内で完全管理しているとも言えますが」

遺伝子操作に関する倫理観? リソースの限られた宇宙での食糧自給と地上からの輸送コストを考えたらあつさりと蹴飛ばせる程度のものだな、あと人間の遺伝子操作とかじゃないからセーフ

それと味は保証する、栄養価とか諸々も問題ないからうっかり自然界に放つたりとかに気を付ければ問題ない、収穫したものは全て此処で加工してるし

「この隣で食品を加工してあります。此処も梱包材に可能な限り自給自足が出来るよう、寒天を利用したプラスチック等を利用していきます」

「姉さんは食品会社でも始めるつもりなのか……?」

「今のところ幾らかの備蓄の他は、ちよつと外に流してるぞ。以前、外

国に行つた時に知り合つたスラムの孤児達が居てな。可能性は無いと思うんだが食べて問題ないか、試して貰つてるんだ」

「それこそ人体実験ではないのか？」

「他にも医薬品を渡してるし、スラムじゃ他より真つ当な食い物なんだとよ。ちゃんと合意も取つてる。お互い利益しかない取引だよ」

箒に言つたように、此処で生産した物は以前にアメリカの実験施設で保護したイーノを始めとした子供達に体の維持に必要な化合物と一緒に送っている

向こうは大量の食糧と化合物を、此方は実際に食べた際の影響を知る事が出来る、限りなく低い危険性があると伝えたら「明日よりも今日の飯が心配だ」とのことだった、ちよつとした拠点を手に入れたらしく其処にラビットフット社という事を隠して送つてる

「ただ、大豆なんかの植物性タンパク質から作つた代替肉を使つたポーク風ランチョンミートを多く送つてたら、飽きたつて返事が来たな」

「康太さんの話を聞いていたら祖国の古いコメディ番組にそんな話があつたという事を思い出しましたわ」

「あー、アレか。スパムメールの語源になつたつていう」

正直に言えば一番初めに成功したのが大豆だったからそうなつただけで、今はこうして複数の種類の生産に成功した事でメニューも豊富になつてきている

米と麦、ジャガイモに人参、トマト、トウモロコシ、キャベツといったメジャーな植物の生育に成功し、それらを用いて保存の効く料理として各国のレーションをモデルに作り、それをイーノ達へと送つていくのだ

「これ、日本の食糧自給率の向上に使えるそうね。けど遺伝子操作つてというのがネックね。でもいざという時の為に………ねえ、康太くん。今気付いたのだけど、ラビットフット社つて最悪此処だけで生きていけるつて事よね？」

「ああ、会長は気付きましたか。そうですよ、水はまだこれからですが、将来的にコロニーでの事を目的として一種のアーコロジとなつ

てます。現状でも海さえ干上がる事がなければ核で世界が滅びようが、氷河期で地球が覆われようが、此処だけは生き延びられるようになっていきます」

会長の言ったように、此処の設備はコロニー等の宇宙開発を目指して開発されたものの、応用すればシエルターとして機能するのである。今のところは水のみ完全循環に至ってはいないが、IS学園の周囲にある海を濾過すれば問題はない

食糧はこの生産プラントで、エネルギーは核融合炉、地下という構造上核にも強く、対EMP防御も完璧、つまりは方舟とも言える場所なのだ、此処は

「世界がどんな事になってもしぶとく生き残れるって事は分かったわ。本音を言えば、上に居る他の生徒達の避難所として開放されれば嬉しいわね」

「状況次第で考えなくもないかもですね。まあ、地下シエルターを別で建設する事くらいは検討しておきますよ。それより次に行きましよう。あ、興味があればお土産に其処に積んである保存食幾らか持っていつでも良いですよ。健康被害はまだ把握出来てませんけど」

「ふふ、丁重にお断りしておくわ」

オレの軽口にそう返しつつ、食糧生産プラントを後にして別の場所に向かう

例えばトレーニングルーム、主に肉体を鍛える為の器具を揃えた部屋や射撃訓練を行う為の射撃レーンを見せ、実機での訓練や機体のテストを行う実験場を経由し、本来の目的地であるシミュレーターのある部屋へ到着する

此処は学園に設置したシミュレーターより小型で同時接続可能な人数は十人になるが、此処に居る人数なら十分な数の為に問題はない

「あら、今日はとても人数が多いのね」

「やつほく、こーたん、みんなあ。あれえ、今日は多いねえ」

しかし此処には先客が居るのだった

62話 Zの鼓動

シミュレータールームに居た先客、それはミネツサとリリアナの二人だった

基本的に自由に研究をしているミネツサと、基本的に何か食べているかトレーニングをしているリリアナ、この二人は良く二人で行動している事が多く、訓練をする時は割りバラバラな時間で利用している為に放課後の時間帯に会う事は少ない

なので今日会ったのも割りりと偶然である、向こうにも今日はオレ達が来る事を伝えていなかったからな

とはいえリリアナの訓練にもなると思えば丁度良かったとも言える、いつもはAIかオレやクロエ、リナといった固定メンバーなので初めて戦う相手は新鮮に感じられる事だろう

リリアナの技量も一月とはいえそれなりに向上している、一方的に敗北するような事はないだろう、特に生身での戦闘経験の多いリリアナは戦いの素人という訳ではないからな

そんな訳で取り敢えずは自己紹介となった、以前夏祭りに行った際に一夏や一秋、箒やラウラとは会った事があるので、まだ会った事のない鈴やセシリア、シャルロットに会長などと挨拶を交わしていく

「あ、そうだったわ。頼まれてた強化装備、完成したから渡してくわね。細かな調整もするから、今着てきなさいよ」

「お、完成したのか。分かった、何処にある？」

「大丈夫よ、持ってきてるから」

軽く自己紹介が終わった後、シミュレーターを始めようかというその時、ミネツサが唐突に思い出したようにそう言うと、何も無い場所から小型のトランクケースを取り出してオレに渡してくる

ISの拡張領域を利用した機能であり、ミネツサもまた作業用に自作したISを持っているのだ、コアだけは篠ノ之博士が与えたものではあるが

まあそれはともかく、取り敢えず受け取ったそれに着替える為にオレはシミュレータールームの隣に備え付けられているシャワールーム

ムにて着替えを済ませ、再びシミュレータールームまで戻ってくる

受け取った強化装備の見た目は全身をびつちりと覆うような黒いスーツであり、背中には小さいながらもバッテリーのような物を背負う為のバックパックが備えられている、頭にもバイザーのような物を着用しているが様々な情報を表示可能にしている、全体的に着用した感覚としては多少厚く感じるものの、注文していた内容に対してはかなり薄く仕上がっていると思えるものだ

「康太、それは何なんだ?」

「ああ、これはな——」

「ゴウタの注文を受けて私が作り上げた歩兵用強化装備、名付けて『強化服パワードサイレンス』よ!」

そんなオレの姿を見た一夏からの質問に、オレが答えるのを遮るようにミネツサが自信満々に答えた

「ゴウタからのオーダーで身体能力を向上させて防弾性と防刃性を持たせて、かつISの展開が難しい屋内での使用を前提として、何よりも普段から着用出来るような装備なんて無茶苦茶とも言える代物だったけど、こうしてきちんと完成させた私の自信作なの!」

「へ、へえ……」

「二番外側に見える黒い生地はドクター・シノノノの開発した最新の防弾・防刃繊維を使用してるから対物ライフルでもない限り貫通はされないわ!加えてその一段下は衝撃吸収材になっているから歩兵のライフルくらい当たっても大した痛みは感じないわよ!そしてその下には私が開発した人工筋肉を採用する事で着用者の身体能力を超人レベルまで高める事に成功したの!それ等を動かす為のバッテリーは背中の小型バックパックに収めているわ。日常生活だと不便だから外せるけど、内蔵の小型バッテリーだけでも十分は稼働出来るから、それまでに追加のバッテリーを装着すれば問題ないわ!加えて屋内戦闘での使用だけど、手の中指の先に小型カメラを備えているから、そこから入手した情報をバイザーに表示出来るの!銃の方にも対応したカメラセンサーを取り付ければそれも表示出来るから遮蔽物に身を隠しながら正確な射撃も可能よ!その銃もバックパックの側

面に懸架出来るようになってるわ！当然、コウタがISパイロットである事も加味して、コウタの持つISが待機形態で収集する情報も連動する事でバイザーに表示出来るの！そして一番凄いのはそこまでの機能を搭載しながらちよつと厚めのインナーってレベルまでコンパクトに纏めた事ね！これなら普段の制服の下に着込んでも問題ない、ドクター・シノノノには流石に敵わないかもだけど、天才たる私はスゴいって事ね!!」

「そ、そうなんだ。それはスゴいな、うん」

強化装備、正式名称は『強化服パワードサイレンス』というらしいが、その説明をミネツサは一気に捲し立てた為に一夏が引いていた

その間にオレは着込んでいる強化服の調子を確かめる、動いてみて体が軽くなつたような感覚を感じ、更には軽く跳躍しただけで一メートルは跳び上がるという能力に感嘆の声を漏らす

それからは実際にISの中に量子化しておいた歩兵用の装備を取り出し、その全てを身に着けてみる

言われた通りにオレが使用しているライフルであるHK416とHK417は背中の中のパックパック側面に懸架し、普段から懐に収めている拳銃のGSRは右の脚にホルスターを巻いて仕舞っておく

加えて近距離での銃撃戦を想定して本来ならHK416との選択式にするUMP45をスリングで前に掛ける

体の方にはマガジンポーチを兼ねたタクティカルベストを強化服の上に着込み、前後二列横四列あるマガジンポーチにそれぞれのマガジンを詰めていく

続いてに左足、GSRとは逆の位置には同じようにマガジンポーチを巻き、そこにハンドガン用のマガジンを二つ収める

最後は左腰、そこにはそれまで身に着けていた銃とは違い刃物を携えている、鞘に収められているが見た目の刃渡りは三十センチといったところだろう、だがそんな刃の長さに反して柄は両手で握る事が可能な程に長い

これには理由があるのだが、実際に抜く必要もない今は説明する必要もないだろう、最近篠ノ之博士より渡された物だが、要はそれまで

使用していたナイフの代わりである

空いているのは右腰くらいで、そこは状況に応じて薬品やらスタングレネード等を収めるポーチがあるが中身は入っていない

総重量は数十キロ、しかし強化された身体能力によりその重さを全く感じさせない事に感嘆しつつ、バイザーの方を起動

付属のカメラセンサーとやらを銃のスコープの横に装着すると、そのセンサーの映像がバイザーの一部に表示される

その状態で走れば普段よりも速く走れ、跳べば軽々と一階の屋根に飛び乗れるくらいには跳躍力も上がっている

「——という訳で、この強化服から戦闘能力をオミットした簡易版を作成すればより低コストの物が出来るわ。装甲部分が必要なくなるからもつと薄手の物になるから楽に着込める、それこそ普段のインナーみたいな使えるわね。これを使えば現行のちよつと大きめのサポート機械なんかより嵩張らずに使えるから、介護の現場などで活躍が期待出来るわね。その他にも怪我なんかで筋力が落ちた人が日常生活を送りながらリハビリを行えるようになるし、良いこと尽くめだと思わない?」

「あ、ああ、そう思うぜ……」

なお、その間もミネツサの説明は続いていたらしく、一夏が頑張つて相槌を打っていた

オレの方は一通り試したから銃は外していく、細かな調整とやらが残っているようだし、そろそろ止めておくか

「ミネツサ、調整は良いのか?」

「あ、そうだったわね。でもサイズはある程度の伸縮性があるから問題ないみたいね。残りはセンサーとISの連動だから、ちよつとIS借りるわよ」

言われてオレは自身のISの待機形態となっているドッグタグを渡す

それをミネツサは機材で少し作業をすれば直ぐに返され、受け取ったそれをオレは元の首の位置に戻しておく

「これで全部完了よ。強化服専用銃の方はもう少し掛かるけど文化祭

までには仕上げておくわ」

「分かった。色々思うところはあと思うが、次も頼んだ」

「まあ、アンタなら悪いようには使わないだろうから別に良いわよ。けど、今度データの提出をしなさい。もつと最適化出来るようにしておくから」

「ああ、そうしよう」

ミネツサは以前の研究所で非人道的な実験に協力させられていただけにこういった兵器類は作らないのかと思っただが、結構乗り気で作ってくれた

それは自身の研究にも繋がるものだったからなのか、正確な理由は分からないがそうして生み出されたのがこの強化服だ、有り難く大事に使わせて貰うとしよう

「さて、少し時間を取らせて悪かったな。シミュレーターを始めようぜ」

「色々とツツコミたい事があるけど、一つだけ聞いわ。何でそんな装備作ったのよ？」

「そりゃ、文化祭の時の警備用だ」

「康太は何と戦おうとしてるんだらうね……」

なおシミュレーターを始める前に鈴とシャルロットからツツコマれたが力はあるって困るものでもないからな、余計な敵が生まれる事はあるが無力よりはマシだ

「その強化服、私も頼めば作って貰えるかしら？」

「コウタのは正真正銘の一点物よ。新しく作るつもりはないわ」

それと会長が強化服に興味を示していたが、呆気なくミネツサに振られるのだった



大分遅れたものの、シミュレーターによる訓練が開始され各自で自分がやってみたい訓練をする事になった

それというのもラビットフット社に置かれているシミュレーターは特別な物であり、学園に置かれているシミュレーターには無い機能が追加されていたのである

それこそがミッションモードと、対エース戦モードの二つである

ミッションモードは決められた内容に沿って戦闘を行うものであり、様々なフレーバーテキスト等と相まってストーリー仕立てになっており、ミッションをクリアすると次のストーリーが現れる仕様となっていた

ぶっちゃけてしまうと康太が各ガンダムシリーズのストーリーを再現したものである、難易度も三段階あり、エースといった一部の機体のみIS仕様となる初級、一部の敵以外も多少のシールドバリアを使用してくる中級、全ての敵がIS仕様となる上級の三つがあった

もう一つの対エース戦モードはその名の通りガンダムシリーズに登場するエースパイロットをモデルにしたAIと、劇中の戦場を再現したフィールドで戦闘を行う事になる

これはミッションモードとは違い基本的に一対一での戦闘になる、例外は黒い三連星などのチームで一つのエース部隊となる場合などだ

そんな訳で各自興味のあるモードで訓練を行っている、だが通常の訓練を行う者もおおり、そういった者達は康太と共にリリアナとの訓練を行っていた

そして今回、再現された青空、眼下に広がる海を眺めながら飛行する一夏と箒がその相手となっている

「一夏はリリアナがどのような機体を使うのか、聞いてはいないのか？」

「いや、俺も知らないんだ。会ったのも箒と同じで夏祭りの時が初めてだったからな。パイロット候補っていう事しか聞いてないんだ」「そうか。しかし相手には康太が居るのだ、どちらにせよ油断は出来ぬな」

「そうだな。こうしてる今も、何処かから狙ってるかもしれないからな」

リリアナ自身の実力は未知数、だがこと戦術という点に於いて互いの機体を知り尽くしている康太が加わる事が重大な懸念事項として存在していた

先日のネエル・アーガマを使用した模擬戦に於いて光学兵器を封じ大量の実弾によつて圧倒するという戦術のように、相手の得意な分野を潰してみせるような戦術を取ってくるかもしれない、その為に一夏達は警戒を強めている

そんな時である、センサーに反応が一つあり、真つ直ぐに二人の下へと突き進んできていた

それは康太の駆るジェガンよりも遥かに速く、リアナの機体だと当たりを付ける一夏達、雲に隠れて姿が見えないものの、雲が光つたのを見た瞬間、左右に分かれる

直前まで二人が居た空間を貫く高出力な赤いビーム、それを追うようにして現れたのは戦闘機のようなシルエットを持つ青い機体と、その背に乗っているジェガンの姿だった

「サブフライト、システム？」

「兎に角追うぞ！また見失つては狙撃されるかもしれぬ！」

「あ、ああー！」

既存のどれとも違う形状のそれは新型のサブフライトシステムのように見えるが、どうにも違和感を拭えない一夏、だが直進を続け離脱していこうとする康太を逃がす訳にもいかないと筈が追い、一夏もその背を追う

しかし康太の乗るサブフライトシステムの速力は凄まじく、現行のISの中では殆んど機体の追隨を許さない程の速さを持つ紅椿でも少しづつ引き離される程だ

「何という速さなのだ、アレは!?!」

「そこまでスラスターを使つてないように見える、マツハ3を超えてるなんて！」

加えてジェガンが背後に向けて正確な射撃をしてくる為に二人は回避せざるを得ず、その分だけ速度が落ちた事で更に引き離されてしまふ

完全に追いつけなくなった事で追撃を止めた二人は、今度は大きく旋回して再び此方へと向かってくる康太を迎撃しようと身構える

先程と同じように高速で近づいてくる康太の姿を見据えていた中、

ある程度の距離が詰められたところで康太は武装を量子化すると両腰からビームサーベルを抜き二刀流で構え、それまで乗っていたサブフライトシステムらしき機体から飛び降りる

「狙いは私だなー」

そのままジェガンが自分に向けて接近してきている事を悟ると同じように二刀流で迎撃しようとする筈、一夏は何か引つ掛ける思いで康太が乗り捨てたサブフライトシステムに注意を向けていた

乗り手が居なくなつたからか軌道変更する事もなく真つ直ぐに進んでいく青い機体、取り越し苦労かと思ひ始めたその時、スラスタを噴きながら制動を掛けたその機体の戦闘機然とした姿が崩れ去り、一秒にも満たない時間で人の姿を取ると機体全長程もある巨大なビーム砲を構える、その銃口の先には康太との鏢迫り合いを行っていた筈に向けられていた

「筈ー」

それを見て咄嗟に割り込みシールドを構える一夏、シールドに搭載されているIフィールド発生装置が稼働するのと引き金が引かれるのは殆んど同時だった

「一夏!？」

「無事か、筈!」

「あ、ああ……だが、今は……」

「あの青い機体だ。あれは可変機、あれがりリアナの機体だったんだ!」

「な、何だところ!」

誤射を避ける為だったのかビームが放たれる直前には鏢迫り合いを止め離脱していた康太、それによりフリーとなった筈は一夏からの警告を受けて初めて背後からの攻撃に気付いたのだった

青い機体、一夏達は知らないがリゼルを駆るりリアナは攻撃が防がれたのを見ると直ぐに構えていたメガ・ビーム・ランチャーを切り離すとビームライフルを装備し、攻撃を始める

ビームライフルとシールドのビームキャノンから立て続けに連射されるビーム、それらもシールドで防いでいると背後よりビームサー

ベルを構えたジエガンが接近してくる

「一夏、後ろだ！」

「うおあっ!？」

箒からの警告により咄嗟にシールドをそちらに向ける一夏、Iフィールドとビームサーベルが拮抗する、だが康太は首を振りながら頭部バルカンを発射する事でシールドのIフィールド発生装置を破壊する

それにより先程までの拮抗は無くなり、ビームサーベルがシールドを少しずつ切り裂いていく

すかさず一夏の救援に向かおうとする箒だが、そこに可変形態へと変形したりリアナのリゼルが射撃しながら突っ込んで来た為に足を止めざるを得ず、リアナは康太の直ぐ近くを通り抜けるように通り過ぎていく

更にはその時に康太がビームサーベルを格納した右手でリゼルの主翼部分を掴み、そのまま引つ張られる形で離脱していく

置き土産とばかりに左腕のグレネードランチャーから二発のグレネードを一夏へと叩き込んだ後は移動をリアナに任せ空いた左手に持ったビームライフルを一夏と箒に向けて撃ち続ける

その後も同じような一撃離脱を繰り返す戦法により翻弄され続けた一夏と箒、逃げに徹されては追い付く事は出来ず、移動を全て任せる事で射撃のみに集中する康太の命中率は高かった事により、やがてそのエネルギーを全て消耗し、燃費の悪い紅椿を駆る箒が墜ちた時点で近接戦による猛攻を二機掛かりで行われた為に一夏も程なくして撃墜される事となるのだった

後ほど、ミッシヨンモードや対エース戦モードなどのシミュレーター機能を存分に体験していた鈴やセシリアといった代表候補生の面々も同じように康太とリアナのペアに挑み、追い付けないなら狙撃でリアナを落としたセシリアを初め、様々な手段で二人の連携を阻害するなど、貴重な経験を積んだりリアナは今日一日だけでも機体の動かし方を学んでいき、一夏達もまた様々な機体を相手に戦闘経験を積む事が出来たのであった

また、全員の動きを見て改善点などを指摘していく楯無の活躍もあり、それぞれに足りない物を見つめ直す等、有意義な訓練となっていた

◆ なお、シミュレーターでの訓練を行った後日の事である

「紫藤、束の奴がシミュレーターにはミツシオンモードや対エース戦モードといった機能もあると言っていたんだが、本当か？」

「難易度高めに設定してありますが、ありますよ。ただ普通の学生レベルだとあまり練習にならないと思つて廃止してます。代表候補生レベルでクリア出来るかどうか、ってレベルですね。ああ、アリーナに設置してあるシミュレーターでも本体と接続すれば利用は出来ますよ」

「ほう。ならどちらか試しに実演してみろ。それで希望者が居れば試しにやってみるとしよう。なに、代表候補生レベルなんだろう？多少は動けるようになってきたひよつ子達に体験させてみるのも悪くはない」

「うわあ、スパルタ……調子に乗る前に叩き潰す気だこの人……コホン、ならミツシオンモードで、敵エースが出てくるので、可能なら一騎打ちに近いシチュエーションで条件設定して、ランダムに選出と………あー、『第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦』かあ……確かに難易度は高いなあ」

ラビットフット社のラボで専用機持ち達がシミュレーターによる訓練をしていた事を束との世間話の時により伝えられた千冬がシミュレーターの機能に興味を示し、授業中に康太に実演を頼んだのである

ミツシオンモードが戦場を模していると言うことから、ISパイロットとしてそのような事もあるという事を生徒に伝えようとした千冬、康太が引き受けた事で行われたシミュレーターが開始される

宇宙への進出を果たした人類、しかし過酷な宇宙での活動の為に遺伝子操作により生まれたコーディネイターと、遺伝子操作を行っていないナチュラルとの対立が激化、コーディネイター側の勢力であるプ

ラントが地球連合に対して独立戦争を開始、地球連合軍による核兵器の使用が為された『血のバレンタイン』などの出来事を含め戦局を軽く説明するプロローグと、ミツシヨンの内容を説明するブリーフィングを挟んでシミュレーターが開始される

フリーダムと呼ばれた翼を持つ機体を操り戦場を駆け抜ける康太、ミーティアという巨大な拡張ユニットを使用しての殲滅力は千冬としても見事なものだと感心していた

核ミサイルの迎撃、第三勢力として圧倒的な戦力を誇る地球連合軍とザフトの両陣営と渡り合い、使用された巨大なガンマ線レーザー砲ジェネシスの破壊を目指す、目まぐるしく戦況が変化していく中を攻略していた

核ミサイルを一発でもプラントに通したら失敗、ジェネシスの地球への発射の阻止と、やるべき事が多く確かに高難易度だと千冬は思った

しかしそれだけで終わりではなく、一機のISとの戦闘により康太はそれ以外の戦闘から離脱する事となった

灰色の装甲を持ち、大型のビーム砲とシールドを兼ねた大型ビームサーベルを装備し、背部の円盤状のバックパックから無数のビーム砲を射出しオールレンジ攻撃を行ってくる機体、プロヴィデンスと表示されている機体である

『また君か。厄介な奴だよ、君は！在ってはならない存在だというのに』

『何をツ?!』

だがその機体との交戦を始めてから、康太の声に熱が籠もる、このシミュレーターは味方との交信により個別に指示を出す事も出来るが、敵との交信は今回が初めてであった

『知れば誰もが望むだろう！君の様になりたいと！君の様でありたいと！……故に許されない。君という存在も！』

『僕は……それでも僕は！力だけが、僕の全てじゃない！』

『それが誰に分かる。何が分かる。分からぬさ！誰にも！』

オールレンジ攻撃を大型のミーティアを巧みに動かす事で避け、反

撃として大量のミサイルを放ち、ビーム砲で攻撃する、その間にも康太と敵機は言葉を交わしていくのを見る内に、そもそも敵機がガンダムタイプであるのを見て千冬はミツシヨンモードがそもそも康太の言うガンダムシリーズの再現だと悟った

それでも行われている戦闘は高度なものであり、現に同じくビット兵器を使用するセシリアは自身の成長に取り入れられるものが無い
か、真剣な表情でモニターを見つめている

ならば多少は見逃すか、そう考え千冬はモニターに視線を戻す、加えて先程の会話の中であつた言葉が千冬の胸に残っていた事もある

その後もミーティアに被弾し、武装をパージし、ビームサーベルを抜いて撃たれたビームを切り裂くといった高度な技術を見せる康太、だが大型であるが故に避け切れない攻撃もあり、遂には致命的な損傷を受けてしまう

本体であるフリーダムは無傷だがミーティアは使用不可能となつた時、近くを救命艇が浮遊している

プロヴィデンスが、そのパイロットが笑いながら右腕に構えたビーム砲を救命艇に向け、ビームを放ち、それに手を伸ばす康太は間に合わない、だがミーティアより射出されていたシールドが偶然に割り込みビームを防いだ時にはモニターを見ていた全員が安堵した

だが次の瞬間には別の方向から放たれたビームにより救命艇は被弾、推進部に命中した事で誘爆し、爆散する

その爆発に煽られたフリーダム、それを見たプロヴィデンスは去っていく

その後、煙の中から現れたフリーダムは翼を広げ、その後を追う
フリーダムが発進した母艦を狙うプロヴィデンス、それに追い付き
ビームを放ちながら接近していく

ミーティアを失った代わりに小回りが利くようになったフリーダムとプロヴィデンスは先程よりも激しい攻防を繰り広げ、人類を否定する言葉と、可能性を肯定する言葉を交わしながら互いに被弾し、傷を負っていく

右手右足を失い、それでも戦意を衰えさせる事はなくビームサーベ

ルの柄を連結しプロヴィデンスに肉薄する康太、対するプロヴィデンスも被弾し、その右腕は無く、幾つかのビーム砲、ドラグリーンも失っている

『それでも、守りたい世界があるんだ！』

一度は避けられた、しかし直ぐに追い、ドラグリーンから放たれたビームを頭部に受けながらも強引に突き進んだ康太は、そのままビームサーベルをプロヴィデンスに突き立てる

それと同時にジェネシスが発射、レーザーにプロヴィデンスが貫かれるもフリーダムは離脱する、だが誘爆した余波を防ぎきれず翼が折れていく

それでも何とか生き延びた康太、停戦を呼びかける通信が入ってきたところでミツシヨンがクリアとなったのであった

「それで、あの会話は何だったんだ？確かにお前という存在と、その地位を羨む人間は多いだろうが、微妙に食い違っていただろうか？」

「それはそもそものミツシヨン、フリーダムのパイロットの設定がコーディネイターの中でも、『最高の能力を持った人間を創造する事を目的として生み出されたスーパーコーディネイター』だからということ、対するプロヴィデンスのパイロットが『クローンとして生まれ、望まれた能力を持たなかったが故に捨てられ、世界の全てを憎んだ者』だったからですな」

「……………そうか」

シミュレーターが終わった後、康太にミツシヨンの詳細、というよりは康太の言葉の意味を訊ねた千冬、正直やり過ぎたかと思っていた康太は一撃くらい出席簿が叩き込まれる事を覚悟していたが、それに反して千冬は重苦しく一言だけ告げて済ませた

その後、当初の通り希望者のみミツシヨンモードや対エース戦モードを体験し、他は通常通りの訓練に励む事となった

中にはプロヴィデンスに対エース戦モードで挑む者も居たが、康太と同じくフリーダムを使用しても勝てた者は他に居なかった

それは専用機持ち達も、自身の機体を使用して挑んだ時も同様であり、そのような敵が本当に出てこなくて良かったと、シミュレーター

の後に苦笑いしていた

しかしこの時は誰もまだ知らなかったのだ、シミュレーター上の敵だと思っていた機体が、本当に存在するという事を

63話 学園祭

日付は九月の第三日曜日、新学期が始まり今日という日の為に生徒達が準備を重ねてきた事の集大成を発表する日、遂に学園祭の本番となる日が来たのだ

各クラスや部活でシフトなどを調整し、それぞれの出し物に生徒達は参加するが、オレは学園のアリーナにある整備室の一つを貸し切りにして貰い、この学園祭の為の準備をしていた

「よし、全機起動！」

整備室のメンテナンス設備に収まっている十機の機体、それは一見するとジェガンに見えるだろう

しかし実際はデュノア社でライセンス生産するようになったMS、シビリアンアストレイであり、学園の練習機の廃棄された装甲パーツをリサイクルしてガワだけジェガンの形にした無人機なのだ

ヴェーダに制御を任せ、今回の学園祭に於ける警備を一部担当させる事が出来る、学園祭で警備の役割を与えられているオレのように『警備』と書かれた緑色の腕章をした教師や生徒会のメンバーからの要請に応じて応援として駆け付けるようになっていて、後は警察組織に対してMSの警備業務の有用性のアピールをする事も目的だ、人手が足りないから無人機だが、有人機ならもっと効率的に動けるといふところも売り込まないとな

なおこのジェガン、無人機であり中身がMSという事でカラーリングで見分けが付くように塗装を変えてある、白と黒を基調として警察組織への売り込みを目的としているので赤色回転灯を両肩部分に装備しておいた

尤も、それを逆手に取って学園のISジェガンも塗り直して教師陣が乗り込んでいるので、MSと思ったら実は、という事もある訳ではあるがな

「会長、警備用MS、全機発進準備整いました」

『分かったわ。そのまま所定の位置に移動させておいて頂戴。武装はA装備よね?』

「ええ、問題ありません。全て非殺傷兵器で統一してあります」

準備が完了したところでオレは会長と通信を行う、会長は生徒会室に居て警備関係の最終確認の最中だ

そして話の通り、このジェガンの装備は対人用の非殺傷兵器で揃えてある、十手型のスタンロッドに、相手の動きを止める為の提灯型トリモチガン、指の間に仕込まれている腕部テザーガンがその全てで、便宜上A装備と読んでいる

これが万一にでも人質事件などが発生した場合は犯人の制圧を目的として対人用に調整したりボルバー拳銃やショットガン、シールドを装備したB装備を持ち出す事になるが、そうならないように事前に不審者は排除しておかないとな

篠ノ之博士やエイフマン教授が居る事から例年よりも嚴重な警備体制を敷く必要があったのだ、わざわざ正門に於いて空港のように金属探知機や手荷物検査をする事が盛り込まれた事からもその本気度が伺える

オレは警備ジェガンこと『白衛丸』^{じえがん}に配置に着くように指示を出しアリーナを後にした、この後は規定のルートを巡回し何かあれば動く事になっている、クロエとリナの二人は生徒会のメンバーではあるが、クラスの出し物であるメイド・執事喫茶に参加している

のほほんさんが学園祭を楽しんでる体で巡回するが、本人の気質からあまり期待は出来ないかなあ

エイフマン教授がアリーナを利用してMSの民間利用のプレゼンを行う時はクロエとリナとも合流するが、それまではオレも巡回するとしてよう

そんな訳でオレは整備室を後にし、いつもの制服に腕章を付け、下に強化服を着込んで懐に拳銃とナイフを忍ばせて学園を進むのだった



IS学園の学園祭は中に入るには専用のチケットが必要となる、それぞれ生徒一人につき一枚と、学園側から幾つかの企業に向けて配られる物が存在する

今年は学園内にISの生みの親である篠ノ之束が居るという事で例年よりも多くの声が学園に寄せられる事となった、具体的には何処もチケットを欲しがり、発行数を増やせとクレーム紛いの声が殺到したのである

これにより流石に生徒の分は増やせないまでも、厳正な審査をクリア出来た企業には追加でチケットの配布や新たなチケットの配布も行われた

その企業もIS関連の企業ばかりであり、自分達がISを扱うのに馬鹿な真似はしないでだろうという打算込みでの判断であった、警備を任されている者達からすれば堪ったものではないが、それだけ多くの声が寄せられたという訳である

ではチケットを手に入れられなかった者はどうするか、篠ノ之束という人物と接触出来る可能性がある中で何もしないというのは考えられない事であり、直接インタビューをしようかと画策した命知らずなフリージャーナリストやら一国の諜報機関に所属するエージェントまで、身分も目的も様々な者達が取ったのは学園への不法侵入という手段であった

そして幸いな事にIS学園は海上に浮かぶ人工島、空からは目立つが海という姿を隠しながら近づくには打ってつけの地形をしていた

正面のセキュリティは硬いが、中に入り込めば後は一般の来客に紛れるだけ、そう計画する者達は数多く居た

「はい、そのまま無駄な抵抗は止める。感電して海に沈みたくはないだろう？」

尤も、そんな事は学園側も警戒している事であり、あっさりと捕まる人間が続々と陸へと釣り上げられる状況となっていた

何の対策もされていない筈がなく、海側には対人センサーが取り付けられ、反応があった辺りに駆け付け付いたら端子を落としてバッテリーと接続、スイッチを持って呼び掛けているのである

大人しく投降したなら竿で釣り上げてから陸で拘束、抵抗や逃亡を試みるなら電気を流して感電したところを釣り上げて拘束といった具合である

ただその数が多い、康太もこの場に応援として来ており、学園に配置した十機の自衛丸も半数をこの場の応援に駆り出さなければならぬ程であった

五分としない内に新しくセンサーが反応するので正に入れ食い状態である

結果、カツオの一本釣の如く次々と人間が海から水揚げされるといふカオスな光景が学園の海に面した場所で展開される事となったのであった

あまりの数に康太も一々学園内に設けた臨時の拘置所に連れていくのが面倒になり、武装解除するなどした後は縛り上げ、持ってきた台車に適当に積み重ねて置いておき、ある程度溜まったら運ぶという方法を取っていた、もう既に本物の魚と大差ない扱いである

取り上げた荷物の中身がカメラ等の場合、中のデータを没収して本体は返却するので、荷物の入っていた防水バッグと釣り上げた人間に番号を書き込んでおく辺り、数に辟易としている事が如実に現れている

と、そこに新たなセンサーの反応を示す情報が康太の装着しているバイザーに表示される

「はあ、またか。三号、お前はA6区画に行け。オレはC2だ」

複数箇所からの反応に近場の区画の鎮圧の為に自衛丸の一機を差し向け、康太は遠めの場所からの反応に、近くに停めておいたエレカートのラコタに乗り込んで向かう

その際に牽引している荷台に載せられた人間が呻き声を上げるのだが康太は無視して現場に向かう、その様子は完全に家畜を出荷するかのような光景であった

◆ IS学園一年一組の教室、学園祭の間、そこはメイド・執事喫茶として営業しており、更には世界でも希少な男性ISパイロットである織斑兄弟が執事として接客しており、且つ美少女揃いとして知られる各国の代表候補生もメイド服姿で接客してくれるとあって長い行列が作られていた

その為に朝早く入場と同時に訪れる者も居る程であり、更にはそんな織斑兄弟や実の妹を目的として篠ノ之東が現れるのではないかという推測もされている為、学園の中でも圧倒的な人口密度を達成している

そんな中、比較的行列の先頭に近い位置に一人の女性が居た、濃い青色のセミショートの髪をし、右の瞳は青く、しかし反対の眼は眼帯に覆われている

だが何よりも特徴的なのはその服装であり、黒を基調とした軍服をピシツと着こなしており、明らかに周囲から浮いていた

しかし当の本人はそのような事を気にしていないのか涼しい顔をしており、時折一年一組の教室の方を気にして視線を向けるなどしている

そう、彼女こそかつてラウラが隊長を務めていたドイツ軍のIS配備特殊部隊シユヴァルツェ・ハーゼこと黒うさぎ隊の現隊長であるクラリツサ・ハルフオーフであった

何故そんな人物がこの場に居るのかと言うと、話は数日前に遡る
急な隊長の軍籍剥奪により繰り上がりで隊長に就任し少佐へと昇進したクラリツサであるが、その混乱も収まり通常の軍務を普段通りに遂行していたある日、クラリツサ宛に一通の手紙が送られてきたのだ

メールが主流となった昨今、わざわざ書面に書き出して送る手紙を珍しいと思う、その差出人を見れば件のラウラ・ボーデヴィツヒではないか

まだ自身が副隊長ですら無かった頃、能力が落ち精神的に追い詰められていた時からずっと見てきた小さな隊長、上から突如としてISコア損失の責任を取って軍籍剥奪となったとしか知らされてなかった彼女からの手紙に、クラリツサは驚いた拍子にデスクの上に置いていたコーヒーを零してしまう程であった

慌てて零したコーヒー等を片付けたクラリツサは深呼吸をし、やや緊張した面持ちで手紙を開封する

中には一枚の便箋と、IS学園学園祭のチケットが収められてい

て、クラリツサは便箋に目を通す

そこには謝罪の言葉や近況が書き綴られており、無事に学生らしい生活を送れているのだと安堵した

しかしクラリツサは手紙の内容に首を傾げた、隊長だった時の部下に対する態度を自ら省みて謝罪しているのは良い、しかし和解しようと手紙を出すのはコレが最後にするという文面は理解出来なかった

和解を望むなら何度か試みるのではないか、そう思い続きを読めば、今までも何度か手紙を送ったが返事が無かったから、自分が赦される事はないと思っている旨が微かに感じられる文面となっていた

クラリツサは今までの記憶を思い返すがそのような手紙が来ていた覚えはない、最後に罪滅ぼしとしてIS学園学園祭のチケットを同封する事が記されており、もし赦さないのであればそのチケットを軍に渡して多少なりとも手柄として扱って欲しいと贖罪する旨が書かれている

これは流石におかしいと感じたクラリツサは直様基地司令の部屋に駆け付けた、半分脅しに近いような言葉を交えながら問い質してみれば、以前に送られてきた手紙にはISコア損失の正確な情報が記されており、隠蔽を試みた上層部により差し押さえられていた事が判明それで今までラウラからの手紙が届かなかつたと知ったクラリツサは激怒し、その場の勢いで休暇を申請、IS学園の学園祭に合わせ三日間の休暇を獲得し日本へ向かうのだった

それにはラウラとの和解の為に直接言葉を交わした方が良いという思いと、実際にラウラを見て今の状況が本当に幸せなのか確かめるという親心のようなものがあつた

流石にISの持ち出しは許可されなかったが、それでもクラリツサは副官に三日間の業務を押し付け日本に向かう

まだラウラが隊長だった時はラウラの部下に対する当たりの強さと部下からの不満との間を取り持ったりと苦労をした思いのあるクラリツサだが、初めから見てきたからこそラウラの心情にも理解はあつた

そんな彼女が良い方向に人間として成長しているのだ、にも関わら

ず和解する機会さえ無くして良い訳がないと、クラリツサは強く思い、こうして学園祭に朝一で並んでいる

なおクラリツサ本人が、個人的に小さな隊長のメイド服姿を見たいという欲求があったといのも、ほんの少しだけ、本当の本当にちよつとだけあつたりするのは否定出来なかつたりする、上と下との板挟みに耐え抜く事が出来たのも小さな可愛らしい隊長が小さいながらも気丈に威厳があるように振る舞おうとする姿を間近で見ることが出来たから、という可能性が微粒子レベルで存在したのかもしれない

さて、そんなクラリツサだが遂に列が進み入店する時がやってきた、ラウラは居るだろうか可能なら接客して欲しい、そんな事を思いながら開かれた扉から喫茶店として飾り付けられている教室の中に入った

「いらつしやいませ、お嬢様……ではなかった、おかえりなさいませ、お嬢様！」

「んくうっ!？」

次の瞬間、目の前にメイド服姿のラウラが居り、出迎えの挨拶をしてくれるという不意打ちにクラリツサは大ダメージを受けた

軍に居た頃は殆んど支給品の軍服や野戦服を着用していただけにフリルが多くあしらわれた、実用性ではなく可愛らしさのみを追求されたデザインの服を着ている姿は自身で妄想したものより数段は可憐に見えており、初めに挨拶を間違えた事も本来ならマイナスであるが不慣れな初々しさがあがり全く魅力が損なわれる事なく寧ろプラスに働いていた

咄嗟に堪えたが、そのまま崩れ落ちそうになりそうな足を気合のみで抑えた事をクラリツサは自分で自分を誇っていた

「ク、クラリツサか!？」

「え、ええ、隊長。お久しぶりです」

「本当に来てくれたのだな、クラリツサ……それと、私は既に軍の人間ではない。適当に読んで欲しい」

「それでは、お言葉に甘えてラウラとお呼びさせて頂きます」

「うむ。と、今の私はメイドだったな。お嬢様、お席にご案内致しま

す」

初めは店員として振る舞っていたラウラだが、相手がクラリツサである事に驚愕し、クラリツサもまたぎこちないながらも会話をぽつぽつと続ける

その中で名前呼びを許可された上にラウラがメイドとして接してくれるという事に内心舞い上がっていた

「うーむ、話したい事は色々あるのに、今の私はメイドだからな……」

「今はお互いに個人で話しましょう。私は気にしません」

「そうか。ではそうさせて貰おう」

「そうですね。では、まずはお互いの近況からいきましよう。私はあれから臨時で隊長の後を継ぎ、その後正式に昇進と共に黒うさぎ隊の隊長へと就任しました。今は落ち着いて来ており、今回こうして日本を訪れる事が出来た訳です」

「なるほど、クラリツサが隊を率いているのなら私よりもよっぽど上手く部下を纏め上げる事が出来るだろうな」

「隊長、そんな事は!?!」

「良いんだ。今振り返ってもあの頃の私の態度は酷いものであったのは自覚しているからな。次は私の方だが、I S コア損失の経緯は知っているか?」

「いえ、機密となっており私では知る由も有りませんでした」

「なら私から詳しい事を伝える事は出来ないな。だが事故によりI S コアを失った私は、その後医務室で目覚めた時には既に除隊を決められた後だった。軍法会議も何も無かったが、意識が無かった間に素早く進められたようだ」

「そんな、今からでも異議を申し立てれば正式に軍法会議を受ける事は出来る筈です! 隊長が再び部隊に戻ってくる事だって!」

「良いんだ、力を求め続けていた私よりお前の方が部隊を指揮するには適している。恨まれているであろう私が今更戻っても部下はついて来ようとは思わないだろう」

「しかし……」

「私は今の状況で満足している。互いに距離を取った方が幸せだと思えるからな。ああ、それと近況だったな。医務室で目覚めた後、私は一人の男にスカウトされた。紫藤康太と言えばお前にも分かるだろう？」

「はい、有名人ですので」

ラウラが頑なに軍に戻る意思は無いと悟ると、クラリツサはラウラの復帰を諦める事にした

ならばせめて今のラウラが本当に幸せかどうか見極める、そう思いを新たにした後、まず出てきた名前にクラリツサは頷く

紫藤康太、ラビットフット社のテストパイロット、世界でも希少な男性I.S.パイロットにして、あの篠ノ之束の側近である男だ

ドイツ軍の情報部も探つてはいるが過去の経歴が驚く程に掴めず、未確定ではあるが非正規戦も可能なラビットフット社に於ける武力担当と目されている人物である

加えてラウラの同級生でもあるとなれば、接触の機会は当然ある、軍籍を剥奪されたラウラのスカウト等は可能だとクラリツサは予想がついた

「その康太が目覚めた時にやって来てな。ラビットフット社との契約書を持ってきてくれたのだ。それには姉上が動いたという話でな、一日考え抜いた結果、私はラビットフット社のパイロットになったのだ」

「成程……あの、姉上とは？」

「姉上は姉上だな。少し呼んで来るとしよう。クラリツサにも是非紹介したいしな」

あの氷のようだったラウラが無邪気に姉と慕う人物、自身もラウラからお姉様と慕われたかっただけに、本当に相応しい人物が見極めてやると、先程以上に剣呑な雰囲気待つクラリツサ、そこにラウラが一人の少女を連れてやってくる

「姉上、こっちが私が軍に居た時に副官を務めてくれたクラリツサだ。クラリツサ、この人が私の姉上だ」

「まだ接客中だったので……初めまして、クロエ・クロニクルと申

します。ラビットフット社にてパイロットを務めています。あと姉ではないです」

だが連れてこられた少女を見た途端クラリツサは目を見張った、それはラウラと似た容姿でありながら何処かミステリアスな雰囲気を持つ少女であり、姉妹と言われても何ら違和感が無いどころか納得してしまうものであったからだ

「お察しかと思いますが、私の出身も色々特殊です。なのであまり深入りすると軍機に触れる可能性があるのでお気をつけ下さい」

「分かりました。私はクラリツサ・ハルフオーフです。ドイツ軍にて特殊部隊の隊長を務めています。以後、お見知り置きを」

クラリツサも自身の左目に施した施術を知っているだけに軍が後ろ暗い事をしている事は察していた、なのでクロエの言葉にも素直に頷く事が出来た

そして藪を突くような真似はする気がないクラリツサはその忠告を素直に受け取り、余計な口を開く事は避けた

「それで、私に何か？」

「私が姉上をクラリツサに紹介したかったのだ。今の私は幸せで、何も心配する事はないと教えておきたくてな」

「そうでしたか……暫く私が貴方の分の仕事も回しておきます。それまでに存分に話し合っておいて下さい」

「良いのか、姉上!？」

「貴方の過去に関する事ですから、しっかりと話し合っておいた方が良いと思っただけです。本当に、それだけです」

そう言うところクロエは接客の方へと戻っていった、ラウラの為に時間を作ってあげようと、自身への負担を増やすつもりで

その姿は妹の為に何かしてあげようとする不器用な姉のような姿であり、口で姉妹と否定してはいるが何かと気に掛けているというのが感じられる言葉であった

そんなクロエの様子に、この人ならば精神的に幼いところのあるラウラを任せても何も問題ない、そうクラリツサは確認出来た事から殆んどこの場に来た目的は達成されたようなものであった

「姉上のお陰で時間は出来たが、あまり姉上に負担を強いるのも悪いな。色々と話したい事はあるが、時間が足りぬのは明白だな」

「では最後に私個人の連絡先を教えます。それでいつでも電話やメールをして下さい」

「おお、それは良いな。では後で連絡先の交換をしよう。それで、私の今の近況だが、そうだな……実は、その………私には、付き合っている男が居てだな……」

「そうですか、付き合っている男性が………えっ?」

ラウラと連絡先の交換を約束した事で内心舞い上がっているクラリツサ、だがラウラが頬を赤らめながら呟くように告げた言葉に何かの聞き間違いだろうか、己の耳を疑った

「隊長、その付き合っているというのは、友達としてではなく、男女の仲として、でしょうか……?」

「う、うむ。そうだな。既に恋人……だな。うむ、うむ」

頬を赤らめながら、しかししっかりとはいかみつつ答えるラウラの顔は完全に恋する乙女のものであった事に、クラリツサはここに来て一番の衝撃を受けた

この場で叫び出さなかった事は奇跡だと自覚していた

「そ、その相手というのは……」

まさか紫藤康太ではあるまい、もしそうなら一度しっかりと話し合う必要があると身構えつつ、その相手を訊ねる

「そのだな、今あそこで接客している、一秋だ……」

「……………は?」

クラリツサはラウラが示した方向に視線を向ける、そこには執事服に身を包み慣れた様子で女性客の相手をしている一秋の姿があった

何よりクラリツサはその相手の名前に驚いていた

「隊長、確か織斑一秋と言えば、ドイツに居た頃は一番に目の敵にしていた相手ではなかったでしょうか?」

「そ、そうではあるのだが……そのだな、私がI S コアを失う事になった事件があつた際に、一秋は率先して前に立ち、私を救い出してくれたのだ。その後は医務室で意識が戻らない私を心配してずっと側に

居てくれたり、私の事を、あ、愛していると……だからこそ私を救い出そうと危険を厭わなかった事を教えられたりしてだな……」

クラリツサ自身も教導を受けた織斑千冬、その栄光に泥を塗ったと織斑一秋の事を敵視していたラウラが此処まで心を許すという事にクラリツサは信じられないものを見た思いであった

昔の様子からは全く想像のつかない惚気話をするラウラの姿、それを眺めながら人は変わっていくものなのだなど、クラリツサは遠い目をしながら聞いていたのだった

64話 学園祭2

時刻は十一時を過ぎようとしていた頃、初めこそ侵入を企てようとする者達の対応に追われていた康太であったが、それも時間と共に減っていき、今では自衛丸が三機で十分に対処可能となっていた。それ以外では大きなトラブルもなく、至って平穏な時間が流れている。

そして昼も近いという事と、手軽に食べられるという利点もあり康太はトルコ出身の生徒が中心となって開いていたドネル・ケバブの屋台にいた。

「うん、やっぱりヨーグルトソースの方が美味しいな。砂漠の虎の言い分は正しかった訳か」

本場の味に近付けた為か香辛料の量が多めで味付けがされたそのケバブにヨーグルトソースのさっぱりとした酸味で中和した事で後味も良く幾らでも食べられそうであった。

なお既にヨーグルトソースとチリソースの二つを食べ比べた後であり、今が三つ目のケバブであったりする。

そしてその三つ目を頬張っている時のことだった。

『こちら虚です。正門にて不審者を複数名確認。武器は見えませんが、懐に何かを隠しているのか拳動不審な動きをしています。別件の不審者への対処で現在、正門付近に警備部隊が不在となっております。可能な限り時間稼ぎをしますが、至急応援をお願いします』

正門にて受付と不審者の判別を行っていた布仏虚、彼女からの応援要請を聞いた康太は口に含んでいたケバブを直ぐに呑み込み応答する。

「こちら紫藤、了解です。今から向かいます」

手短に答え、まだ残っていたケバブを口に押し込むと一緒に買っておいたコーヒーで流し込む。

それから額に押し上げていたバイザーを下ろし、身に着けている強化服を起動、地面を蹴ると大きく跳躍し手近な建物の屋根に着地、そのまま屋根を伝い最短距離で正門の方へと向かうのだった。

◆ 時間は少し遡る、正門にて受付を担当していた布仏虚は来場者の持つチケットを確認し、問題なければそのままゲートに設置された金属探知機などの設備にて危険物の持ち込みがないかをチェックしていた

そして今もまた、金属探知機に反応は無かったものの対象の動きに僅かな違和感を覚えた虚は警戒しつつ訊ねると、声を掛けられた男は素早く懐に手を伸ばし、取り出した物を虚に向ける前に腕を掴まれ、足を払われた事で受け身も取れずに地面に叩き付けられる

そのまま呻いている男を手錠で拘束し、近くで待機していた自衛丸に指示を出して運ばせる

虚は男が取り出した物、金属探知機に引つ掛からないポリカーボネート製であり殺傷力を高める為に研がれ、先端の鋭くなったナイフを拾い、それもまた自衛丸に渡して持ち場に戻る

なお念の為に二機一組で不審者を運ぶ自衛丸なのだが、なにも十手に提燈と、そこまで岡つ引きの装備で揃えなくてもと思う虚であった
ひとまず不審者の移送は自衛丸に任せ、虚は先程の男が持っていたチケットを調べる、埋め込まれたタグは正規のものであり、このチケットが本物である事を証明している、そしてチケットだが調べれば九州出身の生徒に割り当てられた物である事がわかるが、その生徒と先程の男との接点が見出だせず、学園内に来客として紛れている更識の配下に警戒するよう伝えておいた

なお出身地が遠方故に親族が来れない事で余ったチケットをオークションに出していた事が後程判明する、それを善からぬ事を企む輩が落札した為にこのような事になったのだが、まだ全てを把握出来ない虚は一応警戒するようにしたのだ

そして引き続きゲートにて受け付けを行う虚、そんな中で数人が一塊になって行動しているのに気付いた

「うおお、此処が女の園、IS学園か……」

「ちよつと、キョロキョロしないでよ、お兄。不審者丸出しじゃん」

「け、けどよ、周り女の子しか居ないんだぜ？しかも皆レベル高いし

……」

「そういうキモいこと言ってるからモテないんだよ、お兄は」

まず頭にバンダナを巻いた兄妹と思われる赤毛の男女

「良い、人が多いんだから絶対に逸れないこと。もしも迷子になったら直ぐに近くの人に助けを求めるの、分かった？」

「ほーい」

「はいなのです」

「分かったよ、奏お姉ちゃん」

そして小学生を三人引き連れた虚よりも少し歳下と思われる少女

「此処がセシリア様の通われる学園、楽しみです」

「ええ、たまにはこうして楽しむのもいいですね。ですが普段の授業とは違います、お嬢様がどのように過ごされているか、折角チケットを用意して頂いたのですからそれもしつかりと確認しなければいけませんよ」

「はい、姉様ー」

そしてそして、最後に何故かコスプレのような物ではなく着慣れている様子でメイド服を着用している姉妹と、一塊になっているが繋がりが全く分からない者達の集まりであった

それだけの人数がチケットを入手するのは並大抵の事ではない、だが四人の少女とメイド姉妹に関しては虚も書類で見ることがある、ラビットフット社に関係のある者達という事で警戒対象から外す

残りの赤毛の兄妹に関しては不明だが、残りの者達と顔見知りだと思われる為に、警戒レベルは下げられた

そうして全員が受付に来たところでチケットを確認していく、四人の少女達とメイド姉妹に関しては康太とリナ、クロエにセシリアといったラビットフット社と関係のある面々と、生徒会権限で追加発行した分のチケットだと確認する、基本は駄目なのだが重要度の高さから特別に行ったのである、可能なら将来的にIS学園に、更に言えば生徒会に取り込みたいという打算もある

それで残りの赤毛の兄妹に関してであるが――

「配布者は……あら、織斑一夏くんと織斑一秋くんね」

「え、えっと、知ってるんですか？」

「もう一人の男子の康太くんを含めて、この学園で彼等を知らない人は居ないでしょうね。はい、返すわね」

学園に通う双子の兄弟、その友人であれば兄妹揃ってチケットを持っていてもおかしくはないと判断した虚は赤毛の兄の方の質問に答えながらチケットを返す

「あ、あのっ！」

「何かしら？」

「い、いい天気ですね!？」

「そうね」

それから唐突に天気の話振ってきた兄の方であるが、そのまま話が続く事なく会話終了、なにやら重い空気を漂わせて落ち込む姿を不思議そうに眺めつつ、虚は元の受付の業務に戻る

なおそんな兄の姿に妹の方は残念なものを見るような目を向け少し距離を取るのだった

そうして次にやって来る者達の受付を始める虚、そんな中とある四人組の、恐らくは高校生と思われる男子に視線を向ける

髪を染め、耳にピアスやイヤリングといった装飾を施しお世辞にも柄が良いとは言えない姿をした四人組、虚は更識に仕える者として磨いてきた観察眼で不穏な気配を感じ取り、四人組が自分達の懐を気にする様子から何かを隠しているのを感じ取った事で素早く連絡を取る

「こちら虚です。正門にて不審者を複数名確認。武器は見えませんが、懐に何かを隠しているのか挙動不審な動きをしています。別件の不審者への対処で現在、正門付近に警備部隊が不在となっております。可能な限り時間稼ぎをしますが、至急応援をお願いします」

先程の不審者に対応してからまだ警備の自衛丸が戻って来ていない為、応援を求めた虚、そこに手短に返答が返って来る

『こちら紫藤、了解です。今から向かいます』

一人でもやれなくはないが、他の来客に被害が及ばない為に確実性を取る虚、後は康太の到着まで時間稼ぎをするだけである

そして、警戒対象となっている四人組が受付までやってくる

「失礼だけど、チケットを見せて貰ってもいいかしら？」

まずはチケットの確認から、十中八九持っているとは思えないが万が一という事もある為に必要な事だ

「は？・ねーよ、んなもん」

とはいえ予想通りの反応、どちらにせよゲートを通す訳にはいかなかった

「学園の警備の観点からチケットを持たない人は通せないの。申し訳ないけど、今日のところはお引き取り願えるかしら？」

「るせーな、良いから通せよ」

「規則は規則だから、そういう訳にはいかないのよ。もう一度言うわね。帰りなさい」

「チツ、とにるせーな、良いからどけつつつてんだろ!!」

男の中の一人が実力行使に出ようとする、元より話を通じる相手ではないと思っていたが、今のやり取りで一般客は距離を取っている為に大丈夫と判断、仕掛けてくると同時に反撃に移ろうとした時だ

「おおお前ら、そ、そういうのは良くないと思う！・ぜ!!」

男たちと虚の間に先程の赤毛の兄が噛み噛みながらも咄嗟に割り込んで来たのだ

「ああっ!!?何だデメエは!!?」

「馬鹿、下がってなさい!!?」

「お、女の子に対して暴力とか、い、いい、いけない事だろ!!?」

「るせえっ!!関係ねえヤツは引っ込んでろ!!」

「ぶはあっ!!?」

しかし呆気無く左の頬に拳を打ち込まれ、後ろに吹き飛ばされて虚に受け止められる

急に割り込まれた為に虚も反応出来ず、殴られた兄の方を受け止めるのに精一杯だった

「お兄!!?」

「このっ!」

それを見て妹の方が悲鳴を上げ、一人の少女が自身の保有していた

ISを起動しようとする

だが次の瞬間、学園側よりゲートの上を跳び越えて現れた人物により追撃でもう一度拳を放とうとした男は腕を掴まれ背負投げの要領で地面に叩きつけられる

「チツ、少し遅れたか。貴様ら、今大人しく投降するなら、余計な怪我はせずに済むぞ。が、抵抗するなら関節の一つや二つは覚悟しておけ」

その人物はそう言うと言いつつ実際に今投げた男の掴んでいた腕を捻じり肩の骨を外す、途端に男の絶叫が響き、残りの男三人は思わず後退る。それだけ目の前の人物、康太から放たれる怒気は凄まじいものであった

「フウー……フウー……お前ら、コイツを殺れ！早くしろ!!」

まだ痛むのか関節を外された男が肩に手を当てつつ、息を荒げて残りの三人に指示を出す

言われた三人はそれぞれ懐に手を伸ばすとそこからバタフライナイフを取り出し、刃を露出させる

武器を握った事で多少は持ち直したのか笑みを浮かべる男達、だが康太はそれを冷めた眼で眺め、同じく懐からナイフを取り出す

鞘に収まった状態では刀身は短いながら柄が長く、刃が短めの脇差のような印象を受けるそのナイフ、だが鞘から引き抜かれた刀身は60センチ程の長さがあり、浅く反り返っているその姿は完全に日本刀という打刀と呼ばれるものであった

相手も武器を、それも自分達よりもリーチの長い刀を持つ姿を見て男たちは明らかに動揺する、その隙を見た康太は一気に踏み出すと刀を振るい、男たちの持つナイフの刀身だけを斬り飛ばす

あつという間に使い物にならなくなったナイフに驚く男たち、更に広がった大きな隙を逃さず距離を詰めた康太は刀の柄尻で一人目の顔を殴打し、続く二人目は刀を放した手で殴り飛ばし、三人目の側頭部に回し蹴りを叩き込む

康太は強化服を着ている為に全力ではない、それでも強烈な衝撃を受けた男たちはそのまま倒れ伏す

そうしてあっという間に三人の男たちを無力化した康太、残ったリーダー格の男に死線を向けると、残った男は目に見えて動揺する「……」

「ま、待て、来るな。ほんの出来心だったんだ……やめてくれ、来るな、来るなああああ!!」

無言のまま歩いて男に近付く康太、男の方は先程外された関節の痛みを思い返したのか腰が抜け、地面に座り込みつつも必死に距離を取ろうとする

しかし直ぐに追い付かれ、肩を外された腕を康太に掴まれ、更に訪れるであろう痛み恐怖で顔を歪める

「フンッ」

「い、ぎやあああッ!?!」

そのまま康太は外れていた関節を元の位置に嵌め直した、とはいえず痛みが走った事に違いはなく、男は再び痛む肩を押さえながら地面に転がる

と、そこに先程の不審者を留置場に運んできた自衛丸が二機、走って戻ってきたところで、康太は男たちに手錠を掛けていくとその身柄を自衛丸に預け、自衛丸は元来た道を再び運んでいく

「ハア、ISの撃墜から余計な事を考える馬鹿が出るとは思ってたが、本当に来るとはな……」

完全に場を鎮圧したのを確認した康太はため息を吐くと当事者達に向き直る

「遅れてすみません、虚先輩」

「いえ、来てくれて助かったわ。ありがとう」

「とはいえ、一般人に危害が加えられたのはオレが遅れたからです。そちらも、この度は大変ご迷惑をお掛けしました。後日改めて謝罪に向かわせて頂きます」

「えっ? はっ、いや、単に俺が割り込んだだけで……というより、紫藤康太、で良いんだよな?」

「そうですが、何か?」

「いや、いつも一夏と一秋が世話になってるって言ってたし、夏休みの

時は蘭も世話になったみたいだったから、会ってみたいと思ってたんだ。俺は五反田弾、同い年だしタメ口で構わねえよ。呼び方も弾で良い」

「五反田……一夏達の友人で、蘭の兄っていう、あの。じゃあお言葉に甘えて。改めて、オレは紫藤康太、康太でいい。ラビットフット社のテストパイロットで、一夏とは同僚、一秋とはクラスメイトになる。妹さんにはオレの義妹達も世話になってるから、これからもよろしく頼む」

当事者の内、赤毛の兄、五反田弾は以前から友人である織斑兄弟に康太の事を聞いていた事と、この学園に於いて他の男子生徒は一人しか居ない事、夏休みに自身の妹も会った事があり、荷物持ち等を手伝ってくれた事などを聞いていた

その為に他人の気がしなかった事もあり、康太に対して友人のように話す事にしたのだ

そもそも同年代の相手に格式張った話し方をされるのがキツかったし、そもそも自分が咄嗟とはいえ割り込んだ事も原因であり、謝罪も必要ないと思っていた

「とはいえ、実際に殴られたわけだし念の為に治療を受けた方が良い。虚先輩、医務室に付き添いをお願い出来ますか？その間、受付の方はオレが担当しておきます」

「えっ、マジで!?!」

「それは別に構わないのだけど、大丈夫かしら?」

「問題ありません。流石に銃を持った相手に馬鹿やるような人間はそうそう居ないでしょうから」

言いながら懐のホルスターより愛銃であるGSRを取り出し、マガジンを抜いて弾頭がゴム弾である事を確認した康太がマガジンを戻し初弾を装填、安全装置を掛けてから制服の上にホルスターを持ってきて外からも見えるような位置に銃を収める

その明らかに手慣れた様子に弾は引きつつも虚を医務室への付添としてくれた事に心の中で盛大に感謝しながらその場を去っていった

そうして残ったのは妹達やメイド姉妹の方であるが

「という訳で案内とか出来なくなつたから自由に見て回ってくれ。警備上の理由で地図がないから、行きたいところは他の人に聞いてくれると助かる」

「あ、はい。それと康太さん、あれはお兄が自分からやった事なので気負わないで下さいね。謝罪も要りませんから、本当に」

「ああ、ありがとう。そうそう、一夏は今から二時間くらい後に執事としてシフト入ってるから、今から並べば丁度いいくらいじゃないかな？」

「分かりました、ありがとうございます康太さん！行こう、奏ちゃん！」

「え、ええ。それじゃあ兄さん、また」

赤毛の妹の方、五反田蘭は康太からの情報を得るとお礼を言つて素早く学園の方に向かつていった、それに奏や年少組もついていく

「ところで康太様、お嬢様のシフト等はご存知でしょうか？」

「セシリアの方は逆に今から一時間後くらいに休憩に入るな。一緒に学園祭を見て回るには良い時間帯かもな」

「感謝致します。では私もこれで。行きますよ、エクシア！」

「はい、姉様！あの、康太様、失礼します！」

「おう、ごゆっくり」

そしてメイド姉妹、チエルシーとエクシアの二人も自分達の主であるセシリアの情報を聞いて同じように学園の中へと進んでいく

それらを見送つた後、康太は受付の場所に向かうとそれまで遠巻きに様子見をしていた一般客の方に向き直り、口を開く

「では次の方どうぞー」

「お、お願いします……」

なお康太が男たちを鎮圧し、その後拳銃を右腰の辺りに装着したのを見ていた彼等は多少声に怯えを含ませながら自分達のチケットを提示していくのだった

◆ その後、一時間程受付にて業務を担当していた康太、戻つて来た虚

と交代した後は再び学園内の警備を続けていたが、一時になったところで第三アリーナに居た

そこで行われるのはラビットフット社並びにデユノア社の新型MS発表会、世界初の民間用MSの発表に幾つかのマスメディアや主要先進国より招かれた警察や消防といった公共機関の代表が集まっている舞台だ

そんな第三アリーナのピットにて、発表されるシビリアンアストレイを装着した康太は自身の出番を待っている

『それではお見せするでしょう。民間用MS、シビリアンアストレイの姿を』

通信機越しに伝わるのはプレゼンターとしてアリーナにて来賓に向けた司会と説明を行うエイフマン教授の声、そしてお披露目の言葉と共に康太は機体を立ち上げ、ピットより飛び出す

ISのように素での飛行能力は持たないシビリアンアストレイ、デフォルトで装備されているのは背部のロケットブースターと足裏のスラスターのみであり、慣れない人間であればピットから飛び出したところで着地するのは難しい

しかし康太は自身の技量のみで着地に合わせブースターを吹かし着地の衝撃を緩和すると、地面に足を着け、一拍置いてから地上を疾走する

全身を金属に覆われながら、その重さを微塵も感じさせない軽快さで進み、途中で設置されている障害物を時にスラスターにて飛び越えながら観客の前に辿り着く

その機動性には観客からも感嘆の声が上がる、訓練が必要になるだろうが、生身以上の走破性を見せたのは一定以上の評価があった

『機動性に関しては今御覧頂けたように、使いこなせれば生身の人間よりも速く、軽快に動く事が出来る。そしてパワーの方では、カタログスペック上は最大にして二百キロまで運搬可能だ』

次に用意されたのはそれぞれ百キロや百五十キロと表示された金属製の重りだ、この辺りはエイフマン教授の護衛兼補佐として控えていたクロエがISを展開して運んでいた

百キロの重りは割りと軽々と、百五十キロの方は少し慎重に持ち上げて見せた康太、カタログスペックでの二百キロの重りも用意されていたが、この辺りが安全に持ち上げられる限界という事で関節部に余計な負荷が掛からないようより慎重に持ち上げる

『このパワーを活かし、人間では運用の困難な装備の使用も可能となる。例えば、命中精度を追求した狙撃用ライフル、または防御力を重視したシールド等だな』

エイフマン教授の言葉に応じて次にクロエが用意したコンテナの中には大型のライフルが入っており、アリーナの端に設置されていた的に向けて康太が構える

直立して構えながら一切ブレる事のない照準、機械であるが故に手ブレを補正して狙いが定まらない事はなく、試しに発砲しても反動で銃口が跳ねる事もなく完全に抑え込んでいた

実際、撃たれた的の方は描かれているターゲットの持つ銃器に立て続けに命中しており、更に狙ってから撃つまでの速度も精度も高い

続けて紹介された大盾を装備すれば、生身で持ち上げるのは不可能と思える程の重量があり、厚さもそれなりのものだ

これを片手で構える康太、対してクロエが軍用のアサルトライフルを取り出し、躊躇いもなくフルオートにて引き金を引く

立て続けに放たれる小銃弾、しかし甲高い音を立てながらも盾が貫通される事はなく、弾切れになると同時に新たに構えられる対物ライフルに対しては両手で盾を構えるが、先程のように撃たれても耐え切ってみせる

これらのパフォーマンスは警察向けのものであるが、特に反応が良かったのはアメリカの警察からの代表者だった

銃犯罪が多発し、民間で売られているライフルはセミオートのみにしてあるにも関わらずフルオートに改造される事もあるアメリカ、しかし今のパフォーマンスで民間人でも手に入れられる可能性のある対物ライフルにも耐え切った姿と、武器のみを狙撃し無力化した精度は十分に魅力的なものであった

『続いて、シベリアンアストレイには専用規格によるバックパックが

用意されている。まず初めにお見せするのは、フライトユニットである『シユライク』だ』

そうして基本的な能力をある程度披露していった次は拡張機能による用途の多様化である

まず基本となるバックパックが下方に下がり、頭になったコネクターにクロエが持ってきたフライトユニットが装備される

それはM1アストレイが装備していたシユライクであり、大型のローター二基によりヘリコプターのような飛行能力を与えるものである

『この装備により、基本的には地上にて運用されるシビリアンアストレイは空という新たなステージを得る事が出来る。その用途は様々であり、警察機関であれば犯罪者の追跡、消防機関であれば災害現場への急行などが考えられる。その為、オプションとして様々な追加装備を装備する事も可能となる。詳しくはお手元の資料、その三十八ページより先を御覧頂きたい』

言われて、この発表会の初めに配られた資料を来賓達は目を通していく、そこにはシユライクと同時運用可能な装備の数々があり、それぞれ自分達の役割に合った装備を見付けては真剣に読み込んでいく

例えば、ガンカメラと呼ばれる手持ち式の複合センサーがあったアストレイアウトフレームの物と外見が同じそれは、カメラの名の通り撮影を行えるだけでなく、望遠機能にサーモグラフィ、暗視機能といった機能を備えており、現在はヘリコプターを利用して行っている様々な事を、これ一つで賄える能力を持っていたからだ

その分、値段もそれなりの価格となっているが、ヘリと装備一式よりもMS一機とシユライク、ガンカメラの方が安くつく計算となっている

山岳救助など、長時間の搜索が予想される任務などには追加のバッテリーを装着する事で稼働時間を延ばす物もあり、更にはそれだけの装備を一人で運用可能という事もあり、同時に複数の場所での搜索活動など使用用途が膨らむ可用性を感じさせる

中には医療用の設備を運び、現場でテントを展開し臨時の診療所と

する事も可能なホスピタルパックと呼ばれる物もあり、災害の多い日本の消防機関からは既に配備に前向きな姿勢を見せていた

そんな可能性の塊とも言えるシベリアンアストレイ、後日資料がそれぞれ本国に持ち帰られ、試験運用として一部に導入され、その有用性が評価された事で生産を請け負っているデユノア社に発注が行われる事となる

そして何処かで有用性が判明すれば招待されなかった国も揃って導入しようとし、注文が殺到した事で急遽生産ラインを増設する事になるデユノア社、過去最高の純利益を叩き出し翌年以降も生産が途絶えない状況になり、社長であるアルベール・デユノアは喜びはしたが、過労で倒れかけたのは余談である

なお、日本を含め一部の国の警察機関では素のシベリアンアストレイではなく、その日IS学園に展開していた無人機の自衛丸を気に入り、その有人型として導入する事になる

また、その日本に於ける導入を主導していた者達が密かに『特車二課』などと言う部署を新設しようと呼策し、本当に実現してちよつとした話題になるのは、もう少し先の事である

65話 灰被り姫

今回の学園祭に於いて、当日に一番働いているのは間違いないく康太であると言えた。

学園内の警備に加えラビットフット社として新型MSの発表を行った後、午後三時頃になり康太は学園の第四アリーナに来ていた

此処では生徒会による劇が行われる予定となっており、何より学園祭に入り込んで来た亡国機業を誘き寄せ為の餌場でもある

そんな思惑が交差する中、更衣室の一室にて康太は一夏と一秋の男三人でそれぞれ衣装に着替えている最中であった

「楯無さんに言われたから来たけど、何で一秋兄と一緒に俺も王子の格好なんだ？」

「気にするな、脚本はあの会長だ。このくらいで驚きはしないさ」

「いや、それは気にした方が良いのでは……？」

そうして用意されていた衣装に袖を通したは良いが、織斑兄弟の格好は如何にも絵本などに載っているような王子様といったものである

「そういえば、ロシアには『金の国 銀の国 銅の国』という御伽噺があったな。『三匹のこぶた』みたいに、三兄弟の王子が出てくる話だ」

「確か楯無さんがロシアの国家代表だから、その劇をやるのか？」

「いや違うぞ」

「では何故言っただ……？」

単に康太が記憶の中から引つ張り出してきただけの話であり、ついでに言えば三兄弟の王子の内、長男次男は割りと碌でもない事をした

りする
そんなこんなで雑談を交えつつ準備をしていると、外の方からナレーションを務める楯無の声が聞こえてくる

『むかしむかし、あるところにアシエンプテルという少女が居ました』

「アシエンプテル？」

「シンデレラの本名だ。グリム童話のな」

「あ、演目はシンデレラなんだな」

「それは良いんだが、台詞とか大丈夫なのか？特に、何故か王子が二人居るし……」

「安心しろ、適当にノリでやって大丈夫だ。いざという時にはコアネットワーク経由でカンペ出してやる」

此処で初めて演目の内容を聞かされた一夏達、しかし台本もなければ王子が二人居るといふ状況に一秋は不安を隠し切れずにいた

それでも康太達がサポートに回ると聞かされて多少は安心する事が出来た

「さて、オレはもう直ぐ出番だから先に行くぞ」

「ああ、頑張つてな」

「応援しているぞ」

楯無のナレーシヨンはシンデレラの境遇を語っていく、とはいえそれは簡潔に纏められたよく聞く御伽噺の内容ではなく、アシエンプテルという少女が母親を早くに亡くし、父親が再婚した継母とその連れ子達に苛められ、部屋を与えられず夜の寒さを凌ぐ為に暖炉の灰を被り、薄汚れた姿をしていた事から『灰被り』^{シンデレラ}と呼ばれている等の、より原典に近い内容を語っていた

ある日、父親が娘達にプレゼントを贈ろうとし、連れ子の姉達が高価な宝石やドレスを願う中、アシエンプテルはハシバミの木の枝を望んだ、その枝を実母の墓へ突き立てるとあつという間に大きなハシバミの木になる

その辺りで康太は舞台に出る為に準備を始め、それを織斑兄弟は送り出すのだった

「にしても、康太のあの格好って何だったんだろうな？」

「明らかに洋風な劇には似合わない姿だったが……？」



（何でボクは此処に居るんだろう？）

シャルロットは舞台上に上がり、演技を続けながらふと思いついてた

始まりは一年生の専用機持ち達を楯無が集め、少し演劇を手伝って欲しいと言われ、生徒会長権限で報酬があると言われたからだだった

そうして配役が決まっていくな中、唐突にシャルロットがシンデレラ役に決まったのだ

正直、何故自分なのかとシャルロットは思っていたが、コアネットワーク経由でカンペが送られてくる為になんとか演技を続けられていた、何より一度引き受けると言ったのを投げ出す事はしなくなかったのもある

そういう訳で劇は進んでいき、先程は宮廷で行われる舞踏会に継母と姉達が向かっていき、一人留守番を言い付けられたシンデレラことアシエンテルは実母の墓でもあるハシバミの木に祈りを捧げていた

(そういうえば、継母との関係が悪かったところとか、ボクと似てるのかな?)

自分は既に関係も修復されたが、それまでの関係などを思い返しなからシャルロットは自身とアシエンテルとの共通点を思い出す

そういう共通点から主役として選ばれたのかな、とキャスティングの理由を推測していると、ハシバミの木の陰から一人の男が現れる

「ふむ、何か困り事があるようだな、少女よ」

その男は和風な仮面を身に着け、濃い緑色を基調とした軍服の上に陣羽織のようなものを羽織り、左腰には一振りの日本刀が提げられていた

「ジャパニーズ・サムライ!？」

というかどこぞのブシドーな格好をしている康太であったが、シンデレラなのにとってもなく和風な格好で登場した事にシャルロットは思わず叫んでしまう

しかしそんな声にも全くの動揺を見せないのがこの男である

「フツ、違うな。私の事は、そうだな、旅の魔法使いとでも呼んでくれ」

「明らかに腰に刀挿してるよね?」

「魔法使いだ」

「陣羽織とか」

「魔法使いだ」

「面頬みたいな仮面とか」

「何度言えば分かる、私はミスター・ブシドーではない！」

「そうは言っていないよ!?!」

どう見ても魔法使いというには無理のあり過ぎる格好にも関わらず、魔法使いで押し通そうとする康太、終いには自分でブシドーと名乗っている事にシャルロットは思わずツツコミを入れてしまう

「そんな事よりも少女よ、何を悩んでいる」

「あ、流すんだ。コホン、実はお城の舞踏会に行きたいのに、私には着飾る為のドレスが無いのです。それで、どうしようかと考えていた内に、此処に……」

「ふむ、ならばドレスを用意すれば良い訳だ。魔法使いとして、そのドレスを魔法で用意してみせよう」

そう言つて右手をシャルロットに向ける康太、シャルロットはどうやってそのシーンを表現するのかわかっている、コアネットワークを通じて楯無より通信が入る

『シャルロットちゃん、康太くんの合図で貴方のISを起動させるのよ』

『えっ!?わ、分かりました』

「では行くぞ、3、2、1、今!」

ISを展開する、その指示に戸惑いながらもカウントダウンと共に指を鳴らした康太の合図に合わせてシャルロットは自身の愛機である『ストライク・ラファール・カスタム』をその身に纏う

「うむ、これならば城での舞踏会で後れを取る事もないだろう。活躍を期待しているぞ、少女よ!」

「え、えっと、ありがとうございます?」

「では、早速城に向かうが良い。ああ、そうだ。機体のシールドエネルギーが切れると魔法は解けてしまう。元の姿を王子に見られたくなければ、気を付ける事だ」

何でその辺りはIS準拠なんだろう、そもそもISをドレス扱いにする舞踏会って何なんだろう、と心の中で疑問は尽きないシャルロット、しかしそれらの疑問を必死に胸の内に押し込み、楯無のナレーションと共に舞台が暗転、お城の舞踏会のステージにする為にセット

を切り替えていく

そんな中でシャルロットは今まで出番が無かった他の専用機持ち達と共に暗転した舞台の中で配置に着く、箒、セシリア、鈴、ラウラといった一年生の専用機持ち四人の他には学園の訓練機を扱う五人の生徒の姿もあり、その全員がI Sを纏っている

何故I Sを展開して待機しているのか、そしてその中でもクロエやリナの姿が見えない事を気にしつつ、シャルロットは何が始まるのか待ち構える

心做しか箒や鈴、ラウラはどこかソワソワした様子なのが引っかけかっていると舞台がライトアップされ、お城の中のような内装の部屋と、部屋の奥に見える玉座には織斑兄弟が二人並んで座っている、というよりも手と足が玉座から伸びた枷に拘束されて囚われていた

まず初見で何が起きるのか予想出来ない中、楯無のナレーションが続く

『年に一度行われる王国の建国祭に於ける舞踏会、しかし今年の舞踏会は特別だった。次期国王候補である二人の王子、その婚約者には強さと美しさを兼ね備えた少女こそが相応しい！次代の国母を決めるため、今此処に舞踏会の幕が上がる！』

そんなナレーションと共に普段の試合でも聞こえるブザーの音が鳴り響く

それと同時に動き出す役者達、ある者は別の者との戦闘を開始し、ある者は真つ直ぐに王子の下へと向かい、ある者は行かせまいと妨害する

シャルロットにも隣の生徒が構えた銃器からの射撃が襲いかかり、反射的な動きで咄嗟にシールドを構えた事で防ぐもまだ理解が追い付かない、だがそんな状況でも一つだけ理解出来た事があった

「これじゃあ舞踏会じゃなくて武闘会じゃないかあ!？」

兎に角これが終わったら康太を一発殴ろう、それくらいは許される筈だと決意したシャルロットに、その康太から通信が入る

『他には舞台裏で説明していたんだが、此処でお前にも説明しておこう。一般参加枠の生徒含めて十人でのバトルロワイヤル形式での戦

闘だ。最後の二人になるか、玉座まで行って王子を確保すれば勝利になるぞ』

『それ早く教えて欲しかったかなあ!? って、それより一夏達は大丈夫なの!? あそこ流れ弾とか危ないよね!』

『安心しろ、あそこにはシールドバリアが張られている。流れ弾程度は問題なく防げる』

そんな言葉と同時に流れ弾が一夏の方へと飛んでいき、当たる直前にシールドバリアによって弾かれる

確かに無事ではあるが、何も知らない一夏表情は思いつきり引き攣っていた

精神的には兎も角、安全が確保されている事に一先ずは安心したシャルロットだが、そこでやけにやる気を見せている箒と鈴、ラウラの事を訊ねた

『ああ、それか。今回参加してるメンバーだが、報酬のスイーツ券の他に、王子を確保した者には更に特別報酬が用意されてるんだ』

『その特別報酬って?』

『確保した王子に対して、生徒会権限の許す限りで好きにして良い権利』

『そ、それって!』

『生徒会プロデュースでデートのセッティングをする事も可能だ。生徒会やらラビットフット社やらの指示で、一夏にお前と学園の外でデートさせる事も可能だぞ』

そんな康太の言葉にぐんぐんとモチベーションが上がっていく事がシャルロットは自分でも分かった

更には只でさえやる気が漲って来ているところに駄目押しとばかりに悪魔康太の囁きは続く

『それと、これは箒や鈴には言っていないが、望むなら生徒会権限でお前と一夏を再びルームメイトにする事も出来るぞ』

途端に、シャルロットの頭の中では短い時間ではあったものの一夏と同じ部屋で過ごした記憶が蘇る、それと同じ日々をこれからもという魅力に抗える筈もなく、実現したこれからの三年間をすこしばかり

のピンク色を含め妄想したシャルロットの目は、明らかに変化していた

『当然だが、シンデレラが絶対に勝つなんて決まってる訳じゃない。他の参加者もお前を狙ってくるだろう。だがそれで諦められるようなお前じゃないだろう？ さあ、武器を取れ、望む未来を勝ち取る為に、その手で勝利を掴んで見せろ！』

次の瞬間、一夏に接近していた一般参加の生徒に向けてシャルロットはビームライフルを放っていた

直ぐ目の前を通り過ぎた一撃に怯んだその生徒は足を止めるが、康太が要らないからと装備を引き継いだシャルロットはスペキュラムストライカーの推力で一気に接近、高速切替で展開した六二口径連装ショットガンのレイン・オブ・サタデイで刺突するように銃口を叩き付けると、そのままゼロ距離にて発砲する

弾頭をスラッグ弾にしており、それを連装式のショットガンよりゼロ距離で放たればその衝撃は計り知れず、攻撃を喰らった生徒はシールドエネルギーこそ残ってはいたが、そのまま意識を失い戦闘不能となる

『ラウラー！』

『む、シャルロットか。何だ、言っておくが一秋は渡さんぞ』

『大丈夫、ラウラの好きな人を取るなんて事はしないから。それより、此処は同盟しよう。ボクは一夏を、ラウラは一秋を、他の人達に渡さないように、利害は一致しているよね』

『ふむ、そうだな。シャルロットと共になら、私としても悪くない』

まずは一人を撃破したシャルロットだが、それで有利になる訳でもなければ逆に強敵として狙われる事になる

だが狙っている相手が明確で競合せず、現ルームメイトで気心の知れているラウラに呼び掛け、確実に勝利する為の布石とする

何よりも今注意を引き付けたのがシャルロットだ、ラウラはノーマークとなり一秋に接近するのも容易となった

ならば一緒に幸せな結末を迎えるのに力を貸すのは悪くないと、玉座の置かれた階段位置に辿り着いたラウラはその火力をシャルロッ

トを狙う者達へと向ける

シャルロットは四方八方から狙われていたが、機動力に関してはトップクラスであるスペキュラムストライカーを装備し、過去最高の集中力で以て致命的な被弾は抑えていた

そしてラウラの準備が整った事を確認すると瞬時加速で一氣に一夏の下へと向かう

当然、他の者達からの追撃が行われるが、その動きを妨害するよう放たれたラウラからの攻撃がその進路を確保する

此処に来て他の参加者達はシャルロットとラウラが組んでいる事を悟るが時すでに遅く、そのままシャルロットは一夏の玉座に辿り着き、支援を終えたラウラも直ぐ後ろの一秋を確保する

それにより勝者が決まった事で終了のブザーが鳴り響く、箒や鈴と一般参加の生徒達は出し抜かれた事で思わず声を上げてしまうが、シャルロットとラウラは満面の笑みを浮かべて王子の下へと近付いていく

そしてその手が玉座に触れようとしたその時、突如として玉座の下に穴が空き、一夏と一秋の二人はその中へと落っこちていった

『のわあああああああああああ………ツ!』

「い、一夏あッ!」

「か、一秋いッ!」

反応する間もなく消えていった二人の名を呼ぶシャルロットとラウラ、既に穴は塞がれ追い掛ける事も出来ずに呆然としていると、一人の男が拍手をしながら現れる

「こ、康太……」

「むう、どういうつもりだ、康太!玉座に辿り着く事が勝利条件ではなかったのか!」

「確かにその通り。しかし、次代の国母としてライバルを出し抜いた者が勝者と、民が認めるだろうか。否!そのような結果は決して認められる筈が無い!故にこの私、王国武士団団長、ミスター・ブシドーが貴殿らとの勝負にて全ての者に納得が行く形で引導を渡す!」

「王国武士団って何さ!」

「私は国王陛下より独自行動の免許を与えられている。そして王国武士団に所属するのは私のみ。つまりはワンマンアーミー、たった一人の軍隊なのだよ」

「答えになってないよ!？」

その男、あいも変わらずに仮面に陣羽織の康太が現れ次々に展開を変えていく中でシャルロットはツツコミを入れるが、康太はどこ吹く風である、そして先程否定したくせに自らブシドーを名乗っていた

「さあ戦え少女達よ!この私、ミスター・ブシドーとその愛機、新慈絵丸ねおしえがんが真に女王に相応しいか、見定めてやろう!」

そう言うのと康太は腰の刀を抜き頭上に掲げる、すると瞬く間にISが展開されていくが、その姿は通常のジェガンとは違い何処か日本の武士が着ていた鎧兜を彷彿とさせる装飾が施されている

そして日本刀型のブレードを構えると、シャルロットとラウラへと斬り掛かった

その踏み込みは力強く、動きも迷いなく鋭かった為に、やらなければやられると二人は意識する

『ほら、派手にやるぞ。さっきまでは割りとは本気の戦闘だったが、観客には多少物足りないものだ。だからオレ達は派手に観客を魅せるようにやるんだ。勝ちを譲るが、場を盛り上げてくれ。尤も、この程度で敗れるようならそれまでという事だが』

だがそこにコアネットワークを通じて康太から通信が入る、確かに先程の戦闘はシャルロットが勝利を優先した為に短時間で終わった、派手な戦闘が短時間で終わっては観客も興醒めだろう事は予想がつく

だからこそ康太は観客を魅せる為に殺陣をやるうというのだ、通信を聞いたシャルロットとラウラは理解したところで同じ様に近接戦闘を行うべく、シャルロットは装備をキャリバーンストライカーにし、ラウラも得意とするナイフ戦を行おうと拡張領域より予備武器であるアーマーシユナイダーを取り出し構える

それから展開されたのは剣劇の舞台、数的な不利をもとめせず刀一本で二人の猛攻を凌ぎ反撃までしてみせる康太と、演技を半ば捨て

本気で勝つという気迫で以て相對する

そして慣れない武装で苦戦するのは康太だ、新慈絵丸の装甲は裝飾が施されているだけで硬くはない、むしろ通常のジエガンよりも脆いものとなっていた

これは自衛丸と同じく単に外見だけを変更する為の物である事が理由であり、この事から康太が本気で勝ちを狙っている訳ではない事を二人は理解する

とはいえそれはそれ、シャルロットは説明不足で舞台に放り込まれた事に対する意趣返しを含め、止めとばかりにシユベルトゲベル改をフルスイングし、康太の新慈絵丸の胴を横薙ぎに捉える

それが決め手となりシールドエネルギーが枯渇した新慈絵丸、機体が解除され、生身の状態となった康太は、実際のダメージは少ないが瀕死の状態を演じ、ゆっくりと立ち上がる

「見事だ……それでこそ、次代の国母として相応しい……ならば、私がこのまま留まる理由もなし。武士道とは、死ぬことと見付けたり！」
次の瞬間、陣羽織の内側に隠していた短刀により自らの腹部を貫く康太、なお短刀の刃は本物ではなく、突き立てたところで刃の部分が柄の中に引っ込んでいく玩具である

とはいえ咄嗟だった為にそれが本物の刃に見えたシャルロットとラウラは驚くが、次の瞬間赤色の煙幕が康太の姿を包み隠し、その間に舞台に設けた穴から康太は姿を消す

『それじゃあ後はエンディングだから、上手くやれよ。オレの出番は終わったから、更衣室に戻るから』

『ええ、康太、今ハラキリしたけど大丈夫なの……？』

『あれは玩具だ、一切怪我なんてしてないから気にするな』

『あ、そうだったの？なら安心かな。でも心臓に悪いから、今度からは事前に説明してよ、本当色々』

『まあ、善処しよう』

出来れば確約して欲しいんだけどなあ、というシャルロットの声を無視し、康太はそのまま舞台の下を進み更衣室に辿り着く

一先ずは役を演じきった辺りで一息つき、仮面を外す

その時、誰も居ない筈の更衣室に足音と拍手の音が響いた

「なかなか個性的な舞台でしたね。そして、見事なアクションだったと思います」

「この場は関係者以外立入禁止の筈だ。部外者はお引き取り願いたいのだが？」

「それは大変失礼致しました。ですが、こうでもしなければ他社を出し抜けないと思ったので。申し遅れました。私、こういう者です」

姿を現したのは茶色の長髪が特徴的なスーツ姿の女性であった

更衣室は現在男子用となっており、それ以前に学園の関係者でもない者が入るのは常識的に考えても有り得ないのだが、女性は気にした様子もなく名刺を取り出すと康太へと手渡す

そこには『IS 装備開発企業みつるぎ 渉外担当・巻紙礼子』と記されているのだが――

「亡国機業所属のオータムさん、ね」

「テメエ……」

「気付かれていないと思ったか？こつちにも独自の情報網は存在するさ」

偽りの身分ではなく、真に属する組織とそこでのコードネームを告げられ、それまで浮かべていた人の良さそうな笑みを一変、鋭い視線で康太を睨む巻紙礼子改めオータム

リナのアニメ知識独自の情報網という圧倒的なアドバンテージにより相手の状態を看破した康太は薄く笑みを浮かべ相手を挑発する

「ハッ、けどテメエの IS はエネルギー切れだ！そんな状態でこのオータム様に勝てる訳がねえだろ！」

しかし先程の舞台にて康太は機体のシールドエネルギーを消耗している、その為正体がバレたところで有利な状況なのは自分だと信じて疑わないオータムは自身の IS であるアラクネを起動させた

「まあ普通はそう思うよな。けどよー！」

オータムがアラクネで康太を捕らえようとした次の瞬間、康太が手にしていたスイッチを押す

すると更衣室を埋め尽くすかのように白い煙が充満していき、康太

の姿を覆い隠す

「目眩ましーか！だが、ISのセンサーなら——なにッ!？」

ただの煙幕程度、ISのハイパーセンサーに掛かれば無いも同然、
そう高を括っていたオータムだが、著しく機能を制限されているセン
サーの反応を見て動揺する

その動揺した隙を突いて横合いから煙の尾を引きながら現れた康
太が警備の際にも使用していた日本刀型のナイフを振るうと的確に
オータムの喉元を斬り裂いた

当然ISを展開している以上は絶対防御により搭乗者の安全は保
護されている、今も絶対防御どころかシールドバリアのみで防げた事
からオータムには傷一つ付いていない

だが斬り付けられた時にオータムは気付いた、黒い強化服姿の康太
が明らかに小馬鹿にしたような表情でオータムを見ていた事に

お前なんてISが無くても十分だ、言外にそう告げているかの表情
にオータムは頭に血が上っていくのを感じていた

再び煙幕の中に身を隠していく康太、それを追ってオータムもまた
煙の中を突き進んでいく

そんな様子を背後から近付いてくる気配で察した康太、まず康太自
身が圧倒的に不利だと思わせる状況に持ち込むという計画の第一段
階は成功したと見て次の作戦に移るのだった

66話 摂理

ISを纏うオータムと強化服を使用しているとはいえ生身の康太との戦闘は既に五分を経過していた

後から追加される為に薄れる様子のない煙幕、加えて上司たるスコールより生かして捕らえる事を厳命されているオータムは射撃武器が使えなかった

しかし例えそうだとしても生身の人間一人に此処まで梃子摺る事など有り得ない、最初は怒りに吞まれそうになっていたオータムだが、現状に焦りが見えていた

「クソがッ！何処行きやがったッ！」

センサーを封じられ、正確な位置が掴めない為に無闇矢鱈と破壊して康太をうっかり殺しては意味がない、しかし大して損害のない攻撃を続けてくる康太が付かず離れずの位置に居るというのはオータムにも都合が良かった

なんとかカウンターで捕まえる、康太の動きにも慣れてきた時、煙幕の向こう側より放たれた火線がアラクネを打ち据える

「チッ、そこかッ！」

人間が個人で抱えられるような威力ではない、銃座に設置する重機関銃の類だと気付いたオータムはその先に康太が居ると踏んで銃弾を防ぎながら射点に突進する

その先に見えたのはブローニングM2重機関銃であり、対物ライフルに使用される銃弾を連射してくる代物であったが、決められた方向に撃つよう固定されたセンチリーガンとしての物であり、無事であったロツカーの中から展開されているが康太の姿はない

それが囷だという事に気付いたオータム、そんな彼女を強烈な発砲音と共に重機関銃とは比べ物にならない程の衝撃が襲う

「な、何だッ!？」

攻撃が来た方向、あまりの衝撃に弾が通り抜けた後は煙幕が晴れた空間の先には康太が居り、康太の身長以上の銃が腰溜めに構えられていた

それはミネツサが康太の為に用意した強化服用の銃であり、XM109という対物グレネードランチャーを、ライフルとして改造した代物であった

銃身を延長し、専用の徹甲弾の炸薬を増やし、発砲の衝撃に耐えられるように銃本体の強度を上げたそのライフルは、口径25ミリという既に銃ではなく砲という分類になる程の大口徑を誇っている

その重量、反動から強化服を着けていても反動制御は困難な化物のよくなライフルだが、その威力は既にIS用の火器にも匹敵する

あまりにも現実離れした武装の存在に思考が停止するオータム、その間に康太は煙幕が晴れた事からより正確な照準をつける事が可能となり、続けて発砲する

それはアラクネのサブアームの付け根に着弾し、二本の腕を破壊した

着弾の衝撃に踏鞴を踏むオータム、その隙に康太はライフルを拡張領域へと格納すると再び煙幕の中へと逃げ込む

それまでは取るに足りないと思っていたオータムは流石に認識を改めた、ISを使わずとも勝てるという康太の態度に嘘偽りは無かつたのだと、今の火力を見て理解する

「クソツタレがああああッ!!」

だがそれで納得出来るかは別である、それまで封印していた射撃武器を取り出すと更衣室の中を全周囲水平に薙ぎ払った

それでも捕獲という任務は忘れていなかった為に康太が逃げた方向から逆に時計回りに発砲はしていた、それによりオータムが発砲してきた事を察した康太は姿勢を低くし、銃弾は康太の頭上を通り抜けていく

だが銃弾が通り抜けた先は煙幕が一時間に晴れる、偶然にも間に障害物が無い場所に康太が居た為、その姿を見付けたオータムは今度こそ逃がさないという執念を滲ませて康太を捕らえようとする

そんなオータムを強化服の膂力で伏せた状態からの跳躍により上に逃れる康太、オータムも通り過ぎた後で即座に振り返るが、自身の首に何かが纏わり付いているのを感じた

次の瞬間、勢いよく首が締められ呼吸が出来なくなるオータム、混乱する中、見れば康太の手にはワイヤーが握られていた

「フンッ、シールドバリアに頼っているからこうなる」

康太のその言葉はオータムには殆ど聞こえていなかったが、ワイヤーを首から離そうと手を伸ばすも、食い込んだワイヤーをISの手で掴むのは困難であった

今にも意識を飛ばしそうになるオータム、ISの保護機能により護られているが、即座に命に関わるものではない為に保護機能の発動も遅い

しかし流石に命の危機が迫ってくるとISも搭乗者を保護する為に動き出す、オータムの首に繋がるワイヤーをシールドバリアの応用で焼き切ったのだ

ワイヤーが焼き切れた事で呼吸が可能になり、新鮮な空気を大きく吸い込み、荒く息を吐くオータム、最早命令も頭になく、此処まで自分を馬鹿にした相手を徹底的に痛めつけてやらなければ収まりがつかない、そう思い下手人の姿を探し求めると、煙幕が薄くなってきたおり、同時に阻害されていたセンサーも回復した事で康太の位置を捉える

逃さない、その一心だけを胸に康太の居る位置へ視線を向けるオータム、そこには床にある何かのハッチを開け、その中へと身を踊らせる康太の姿があった

「ふざっ!? 巫山戯るなよテメエツ!!」

此処まで自分を虚仮にしておきながら悠々とこの場を立ち去ろうとする康太の姿に、オータムはかつてない程の怒りを込めて突進する。追い付くが、既に康太は穴の中、その穴はISが通り抜けるには遥かに小さく、人間一人が通り抜ける程度であり、更にはその穴の向こうからエンジン音が聞こえ、小さく見える向こう側をバイクに乗った康太が一瞬だけ通り過ぎていった

それを見たオータムは直ぐにISを解除すると自身も同じ様にハッチの中へと身を踊らせる、そして着地する瞬間にISを展開すると遠目に見えるバイクのブレーキランプの光を目掛けてISを飛ば

す

康太の乗るバイクは既に角を曲がっていて姿は見えないが、オートタムは必死に追う、曲がり角を曲がればやはり遠目にバイクが見え、同じように先の曲がり角を曲がっていくのが見えた

逃げるにしても行き先を告げるかのような康太の姿、それは明らかに誘い込むような動きに見えるのだが頭に血が上りきったオートタムには関係がない

ISであるとはいえ蛇行するように通路を進むバイクを追うには速度を活かしきれず、ある程度の距離を詰める事に成功するも、最後には何かの部屋に入って行った康太だが、その隔壁が閉じられる

だがその程度で諦められる訳がないオートタムは隔壁に向けて残る全てのサブアームを射撃形態にすると、自身の持つマシンガンと共に隔壁を蜂の巣にして内部へと飛び込んだ

「やっぱり、あのオートタムなら挑発し続けられれば乗ってくると思っていたわ」

「康太さんを囷にするのは気が進みませんでした、此処までは計画通りです」

「なっ……あっ!?!」

だが部屋の中に飛び込んだオートタムを待ち受けていたのはフェネクスとバンシイを駆るリナとクロエ、そして横一列にずらりと並んだジェガンにキャノンガンといった機体達、そしてISの展開を行っている康太の姿であった

「オレ達はラビットフット社、篠ノ之博士の私兵だ。まさかオレの機体が新慈絵丸一機だけだと本気で思っていたのか?」

そう言っつてジェガンR型を展開した康太、更には先程破壊した隔壁よりも強固な隔壁が降ろされた事で、オートタムは康太の機体が使用出来ないという状態の初めから全てが罠だったと今更ながら悟った

「クッ——」

「撃て」

「クソがああああッ!!」

絶叫するも、逃げ場のない室内で十を超えるISからの集中砲火が

康太の合図と共に開始された

全ての機体が構えるビームライフルやビームキャノンが容赦なくアラクネを捉え、あつという間に原型を留めない程に破壊していく

オータム本人はISにより護られているとはいえ、最早戦闘どころかまともな飛行すら不可能な程に攻撃を受けたアラクネはそのまま地面へと崩折れる

そのまま油断せず無人機達にはアラクネに銃口を合わせるよう指示を出した康太は、一先ず亡国機業のエージェントを捕らえる事が出来た事に安堵する

「まずは一機、だな」

「お疲れ様でした、康太さん」

「ふふん、オータムは怒りやすいから煽り耐性が低いっていう私の情報、役に立ったでしょう?」

「そうだな。まさか此処まで釣れるとは」

事前にリナからの情報により亡国機業のエージェントに関してはプロファイリングが完了していた

だからこそ舞台上でシールドエネルギーを使い切り、ISが使えないという状況を演出し亡国機業のターゲットである康太自身を囮とし、その康太が生身でオータムを挑発する

そうして冷静な思考が出来なくなったオータムをこうしてラビッツトフット社の地下施設の奥の奥へと誘い込み撃滅するという策が無事に成功した事に一先ずは安堵する

「残る一機、バックアップ要員とされるMの方だが——来たな、構えろ！」

リナからの情報により亡国機業が投入してくるISは二機だという事は判明していた、多少の差異はあったとしてもIS戦力は敵リーダーのスコール・ミューゼルという人物が持つゴールデン・ドーンという機体だと分かっている

その為にIS学園最強の肩書を持つ生徒会長の更識楯無が遊撃として存在しているのだ、そして隔壁の向こう側からの敵意を感じ取った康太の警告により少なくとも一人は釣り上げられたのだと確信す

る

複数の装甲を束ねて作られた隔壁、貫く手段はそこまで多くないが、ビームサーベルのように高熱量を当て続ける武装は流石に防げない、現に今も康太達の目にはビーム刃により溶断されていく隔壁が見えていた

その為、敵が隔壁を突破した瞬間を同じ様に狙い撃つ、そういった作戦で、溶断された隔壁が倒れた瞬間、全ての機体が攻撃を開始する。それぞれのビームライフルのEパックが尽きるまで行われた総攻撃、隔壁の向こうには倒れた敵の姿があるか、確認しようとした時だった

「全機、緊急回避ー」

持ち前の勘で敵の動きを感知した康太、無人機を自身のコアに格納しスペースを確保した後、その場を離れていく、それに追従する形でクロエとリナもまた動くが、隔壁の向こう側より緑色をしたビームが飛来する

「この威力、荷電粒子砲か」

光速で飛来する為に避けるのは間に合わなかった、事前に前に向けていたシールドで受けた康太は、シールドの表面を焼いたその威力から敵がSEED系の武装に近いと判断する

その康太と同じく共にシールドで受け止めたりナとクロエ、だが突如として背後から衝撃が走り、前へと倒れ込む

そして二人が目にしたのは背部のバックパックに被弾し、メインブースターが破損したという機体のコンディションを示す通知だった

「嘘っ!？」

「私達の背後から!?!何故!?!」

康太よりも後ろに居た二人、当然ながら背後に敵機は存在せず、正面に居る敵から射線が通る位置ではない

何が起きたのか理解出来ない、しかし再び敵意を感じた康太はその感覚に従って機体を動かす、正面からの荷電粒子砲による攻撃、だがシールドを構える左手は正面に向けつつ、体を捻った事で直前まで

バックパックが存在していた位置にあった右手に被弾した

「ゲシユマイディツヒ・パンツァー……いや、BT粒子だと?」

しかし被弾した右腕は荷電粒子砲ほどの威力はなく、解析結果からセシリアのブルー・ティアーズと同じBT粒子と判明する

康太自身の知る曲がるビーム兵器とは違う存在に首を傾げるが、今のようにBT粒子を曲げられるというのは康太もセシリアから聞いた事もなかった

「思い出した! コウ、サイレント・ゼファイルスはビームを曲げる攻撃をして来るわ!」

「お前なあツ!!」

「だ、だって……見たのちよつと前だったから……」

事前にリナから聞いていた情報で亡国機業のMが使用してくる機体がブルー・ティアーズの二号機だという話は聞いていた、だが康太はその事からセシリアの一号機と同じくらいと予想していた為に、リナが今になって曲がるレーザーの事に言及し、それに大して怒号を上げる

しかし此処で言い争っても何の得にもならないと直ぐに思考を切り替えた康太、すると隔壁を超えて敵機が姿を現す

だがその姿は康太が予想した、ブルー・ティアーズの同型機という姿とはかけ離れた姿をしていた

灰色の装甲を持ち、大型のビーム砲とシールドを兼ねた大型ビームサーベルを装備し、背部の円盤状のバックパックから無数のビーム砲を射出しオールレンジ攻撃を行ってくる機体、康太の知るそれと比べると今の主流であるISの姿と同じ様に装甲に覆われていない部分もあるが、見間違える筈もなかった

「プロヴィデンス……」

G・I・W. が発表したMSのように流れ着いた漂流物を他の勢力が確保していたのは康太も理解していた、だがこうして目の前に存在し、それを敵が運用しているとなると康太の手にも汗が滲む

「手酷くやられたな、オータム」

「テメエ、どうして此処に……」

「それに答える義務は無い」

パイロットは装甲の存在しない箇所から見える身体から女だと分かる、ならばその正体はリナの言っていたM本人だと理解する康太
そんな康太達を無視するようにMはオータムに近づき、その体を抱き上げる

不満そうな表情をするオータムだが、機体の殆どを失っている為に口答えする事はなかった

そしてあるうことか康太達に背を向けると、そのまま立ち去ろうとする

「待て！逃すと思うな！」

「紫藤康太、多少腕に覚えがあるようだが、貴様如きが私に勝てると思うな」

「何をッ！」

離脱しようとするMに大して即座に追撃を掛けようとする康太、だがMは頭になっている口元に嘲笑を浮かべるとドラグーンを射出、その砲口の全てを康太に向けて発射した

それを反射的に避けていく康太、するとドラグーンは円錐形の大型三基が荷電粒子砲を、小型の八基がBT粒子による攻撃をしてくる事が分かった

そして火力はあるが直線的な軌跡を描く荷電粒子と、威力は劣るが変幻自在な軌跡を描くBT粒子によって波状攻撃を仕掛けて来る為、逃げ道が限定された屋内という事もあり康太の動きは制限される

荷電粒子砲は確実に避ける、BT粒子は避けきれない分は装甲の厚い箇所を受け止める、敵意から狙われている場所を瞬時に理解した康太はそうしてドラグーンによる一斉攻撃を凌いだ

それでも被弾した箇所にも多少のダメージはある、そこで康太は被弾した部分の装甲をパージし、現在量子化して格納されている無人機の装甲を代わりに装着してダメージコントロールを行った

しかしドラグーンの一斉攻撃からMは既に離脱を始めている、それでも距離は大きく離されていない為に、康太は追撃に移る

亡国機業の目的、機体の出処、その他様々な情報を得る為に絶対に

逃がす事は出来ない相手であり、何よりパイロットとして完全に見下していたMに対して一矢報いたいという意地もあった

その為、再び地下施設内の通路を行くMを追い、康太も通路を駆け抜けていく

元よりオータムを抱えている為に動きが制限されるMに対し、外という広大な空間でならドラグーンの回避も逃げ道が増え、自身の有利になると、決して勝算が無いとも言い切れなかったのもある

その為、康太は追撃するという選択肢を選んだのだ

狭い通路内、前から足止めとしてドラグーンによる射撃が飛んでくるがシールドを掲げ、センサーやブースターといったBT粒子でも損傷を与えられる箇所を狙ってくる攻撃は、逆に読みやすく、相手もまた高速で通路内を飛行するという神経を使う動きをしている為に先程より射撃の精度が甘くなっていた事も相まって康太はMとの距離を詰めていく

この調子なら外に出られる前に追い付く、そう思った時、康太は足を止めざるを得なくなつた

オータムの半壊したアラクネ、だがISとして拡張領域より武装を呼び出す機能は生きていたらしく、その拡張領域よりバラ撒かれた大量のグレネードを避ける為、足を止めるしかなかったのだ

それにより大きく距離を離される事となり、既にMは外に出た

グレネードが起爆し終えた後、康太も追跡し外に出るとセンサーで遠目にMの姿を捉える

距離は開いたがまだ追い付ける、そう判断した康太は拡張領域より二基の追加ブースターを取り出す

「逃さんと言ったー」

本来はベースジャバーの航続距離を伸ばす為のそれをフルアーマーユニコーンガンダムと同じ様に腰に接続すると、そのまま加速してMへと追撃を掛ける

そうして生み出された直線での推力はそれまでの比ではなく、あつという間にMとの距離を詰めていった、流星に追い付かれています事に気付いたMもまたドラグーンを射出し、康太に差し向ける

しかし速度があり、何よりも回避する空間があるというのが大きかった、それまでは最低限の動きで防御するしかなかった康太は大きく動き回る事で敵に狙いを絞らせない

更には射程に捉えた事でビームライフルによる攻撃も挟むようになった為、その回避に意識を割かれる分、Mのドラグーンの制御も甘くなる

康太はその隙を逃さず、左手のシールドを捨てると拡張領域からサザビーの物をモデルとしたビームショットライフルを呼び出すと、二門ある銃口の下部から拡散されたビームを発射する

ドラグーンからの射撃を回避する為、バレルロールを行いながら撃たれた拡散ビームは射線を読む事も難しく、大型一基、小型三基を撃破し、もう少しで格闘戦が可能な距離まで近付いた康太は両手のライフルを格納すると両腰からビームサーベルを抜いて迫る

「チィッ！」

そうすると流石に片手間で凌ぐ事は出来ないと理解したMは足を止め、ドラグーンの制御に専念する

途端に命中精度の上がったドラグーン、康太も荷電粒子をビームサーベルで斬り裂き、回避をしていくがMとの距離を狭めるに連れて回避は困難となり、遂には追加ブースターに被弾してしまう

IS用のエネルギータンクとなっているそれは荷電粒子を受けた事で反応し爆発する、その前にパージする康太だが、被弾していないもう片方のタンクも切り離す

そして切り離されたタンクは推力を最大にしてMへとロケットのように突進していき、プロヴィデンスの両肩に備えられた機銃で迎撃される

だがそれによって生じた爆炎を目眩ましに康太が迫り二刀を振るう、左手の複合防盾にて受け止めるMだが、懐まで入り込まれた事に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる

しかし斬り結んでいた時間は短く、周囲のドラグーンで自身を誤射しないように康太だけを狙い撃った事で後方に下がらせる事に成功する

とはいえ此処までの攻防でこの場を離脱するには康太を排除する必要があると判断したMは抱えていたオータムをその場に置くと改めてユーレイキウム・ビームライフルと複合防盾を構え、康太と相対する

大破した機体のPICで辛うじて浮いているだけのオータムはその事に抗議しようにも、康太の技量から文句は言えないという事は分かっていた

そしてどちらからともなく動き出した康太とM、数は多少減ったがその分制御は楽になったMの操るドラグーンは二つの攻撃方法を巧みに使い分けて康太を翻弄する

特にBT粒子を利用した曲がるレーザーは的確にジェガンの頭部センサーやスラスターを狙って来ており、避けなければ戦闘に支障を来たすのは明らかな部位を狙ってくる為に康太も回避に専念せざるを得ない

流石にエネルギー切れがある為に定期的にドラグーンを戻さざるを得ないのだが、Mは入れ代わり立ち代わりにドラグーンの補給と射出を行い隙を見せない

操る数が少なければMの負担も小さい為に動きの精度が高く、攻めあぐねるジェガンはBT粒子と言えども被弾が重なり装甲がひび割れていく

なんとか懐に飛び込んでもMは白兵戦能力も高く、斬り結ぶ事は出来ずとも複合防盾より発振される刀身の長いビーム刃を使い康太よりも有利な間合いで寄せ付けない

そして再びドラグーンによる射撃の嵐が襲い掛かり、康太との距離を引き離す、このやり取りが幾度となく繰り返された

しかしAMBAC機動を始めドラグーンの回避の為に負荷の掛かる機動を続けていた康太の疲労は激しく、本人が気付いていない内に動きが鈍り、遂には被弾してしまう

最初に左脚を撃たれ、脚部スラスターが破損、被弾により体勢を崩したところに追撃で放たれたビームライフルが康太の右腕を捉える

生身の部分はシールドバリアと絶対防御により無事とはいえ、運悪

く関節部を破壊された事で右腕の動きが著しく阻害される事となり、実質使用不可能となってしまう

「終わりだ、紫藤康太ッ!」

此処までの交戦で一番の康太の被弾にMは勝利を確信する、そのままユー・デイキウム・ビームライフルを構えジエガンの頭部に狙いを合わせ、引き金を引く

放たれた高出力のビームは変わらずジエガンの頭部を粉碎し、内部に収められていた康太が着弾の衝撃で大きく頭を仰け反らせる

「があっ——ま、まだだッ!!」

だが康太の戦意は消えていなかった、直ぐに視線を戻すとその眼は真っ直ぐにMを見据え、半壊しつつある機体を駆り一直線に突き進む残っているスラストを全てフル稼働させて繰り出された瞬時加速、勝利を確信した所で行われた突撃にMは意表を突かれるも既の所で振るわれたビームサーベルを回避する

半壊した機体でお繰り出された瞬時加速は予想外だったが、細かな動きが無理な瞬時加速の後は無防備な背中を見せるしかない、その背中へと銃口を向けようとした

「なっ——ッ!」

だが振り向いたMが見たのは既に反転し目前まで迫り、再びビームサーベルで斬り裂こうとしてくる康太の姿であった

これもまた反射的に回避するが先程より姿勢が崩れる、そして今の動きが再び来ると予想したMはハイパーセンサーで自身の背後へと駆け抜けた康太の姿を見た

強力な推進力によって流されていく康太、だがAMBACにより無理矢理に反転すると即座に瞬時加速、それだけでは先程の瞬時加速を相殺するだけだ、だから康太は即座に追加の瞬時加速を、ダブル・イクニッション・ブースト二重瞬時加速を行いMへと迫っていた

「ば、馬鹿な!? 貴様、そんな真似をしてどうなると思っっているんだ!」
背後から再三に渡り接近してくる康太の斬撃を回避しつつMは康太の所業に驚愕する、だがそれは無理のない事であった

瞬時加速はあまりの加速度からどうしても直接的な動きにしか

らないものだ、それをジェガンのパワーに物を言わせて無理矢理にAMBACを行い反転している

それだけでも各部に強烈なGが掛かるというのに、あろう事か康太は瞬時加速の慣性で背後に流されるのを再び瞬時加速により総裁し、あまつさえ瞬間的に二度の瞬時加速を行う事でより爆発的な加速度を得る二重瞬時加速を行う事で慣性の相殺と加速を同時に行っているのだ

ISでも制御の難しい瞬時加速を無理矢理に抑え込み、ゼロにするどころか正反対の負荷をその身に受けるような機動をすれば如何にISにPICによる慣性制御機能があろうと耐え切れる筈がない

事実、ジェガンの各部は負荷が掛かっているのか軋みを上げ、機械よりも脆弱な生身の人間である康太の体は疾うの昔に限界を迎えていた

Mから唯一見える康太の生身の部分、その顔も苦痛に歪み口の端や閉じられた目の端からも赤い血が溢れているのが見て取れた、にも関わらず康太は止まる事はない、文字通り腕が潰れようと血反吐を吐きながら、まだ動く左手に残された一刀を握りしめ、尚も己の勝利の為にだけに戦う事を止めようとはしなかった

そんな狂気とも言うべき康太の飽くなき勝利への執念に呑まれたMは思わず動きを止めてしまう、それはともすればほんの僅かな時間だったのかもしれない、だがこの瞬間に、それはあまりにも致命的過ぎた

「ぐあああああッ!？」

硬直したM、その体に袈裟斬りにビームサーベルの刀身が走る、傷付く事などないと思っていたその敵に、遂に一矢報いる事が出来た康太は満足気に口元に笑みを浮かべた

だがまるで役目を果たしたかのように、それまで幾度も瞬時加速をする事で酷使されてきたジェガンのスラスタ各部分が一齐に火を噴いた

それによりまるで墜落していくかのように眼下に広がる海へと落下していく康太、だがMは最後の交錯の際に康太が確かに発した言葉

を聞いていた

『——次は勝つ、織斑マドカ』

最後の最後まで決して折れる事のなく戦った男の言葉、それがMの耳にいつまでも残っていた

既に康太の姿は海の中へと消えた、海に落ちる直前に別の装甲が展開されていた事から離脱する為に海中を選んだのだろうか。とMは予想する

「お、おい。今ならあの野郎を確保出来るんじゃないやねえのか？」

「私の任務は万が一の際のお前の確保だ。それに、今の一撃でシールドエネルギーもかなり削られた。これ以上は帰投する為のエネルギーも怪しい」

「チツ、運の良い野郎だな」

それまで邪魔にならないよう、ただ空中に浮かんでいるだけだったオータムがP I Cでゆっくりと近付いてきてMに訊ねるが、それをMは否定する

それを聞いてオータムは舌打ちするが、背に腹は代えられないと大人しく追撃は断念する

そんなオータムを抱え、改めて拠点に帰る為の針路を取るM

『——次は勝つ』

「——それは私の台詞だ」

頭に残る先程の康太の言葉、今回は見た限りではMの、マドカの勝利の様に見える

だがマドカはそのような勝利でもなく、ましてや何故自身の名前を康太が知っていたのかという疑問でもなく、次こそは完全に雌雄を決するという戦意を漲らせるのだった

67話 折れた剣

IS学園の学園祭は特に大きな混乱もなく終わった、しかし学生達が集まる後夜祭の中、一夏を始めとして一年一組の生徒達は康太達の姿がない事に気付く。

姿が見えないのは康太とクロエとリナ、ラビットフット社に於いて篠ノ之束に近い位置に居る者達であり、一夏達はまた何か裏で動いているのだろうかと思する。

だが限られた者達、康太達と関わりのある専用機持ち達にコアネットワークを通じて伝えられた内容に全員が驚愕した。

『紫藤康太、敵ISと交戦し負傷。現在意識不明』

たったそれだけの文章、他に一切の詳しい事は書かれておらず、他には地図とパスコードが添付されているだけだった。

地図に記されているのはラビットフット社の地下施設、以前一夏達が訓練をしていた場所より更に奥であり、パスコードはそこに辿り着くのに必要な物であった。

その為、専用機持ち達は一斉に移動を開始、そこに康太が居て、より詳しい情報を教えてくれると思ったからだ。

以前と同じくエレベーターに乗り込み、道案内代わりのオートマトンに連れられ、その場に辿り着く。

そこには治療用ポッドに入れられた康太と、それを心配そうに見詰める楯無、そして近くにあった椅子に座り泣きじゃくるリナと、その隣に寄り添うクロエの姿があった。

「楯無さん！」

先頭に居た一夏はそれを見て一番話しを聞きやすそうな楯無に声を掛ける。

「あら、来たのね、皆……」

「何があったんですか!?!どうして、康太がこんな!?!」

「端的に言えば篠ノ之博士の送ったメッセージ通りよ。康太くんは学園祭を狙った敵のISと交戦して、結果負傷した。一矢報いる事には成功したけど、最終的には取り逃がしたわ」

「敵って……何で俺達を呼んでくれなかったんですか！皆で相手をすれば、康太だつてこんな事には！」

「そのこーくんが望んだからこそ、だよ」

楯無に詰め寄る一夏、他の者達も同様の気持ちではあるが、そんな彼等に横から声が掛けられる。

「東さん……」

「姉さん、康太が望んだとはどういう意味なのだ？」

「どうもこうも、そのまんまの意味だよ。学園祭で大きな混乱を生じさせたく無かった、だから裏で対処しようとした。ただそれだけだよ。そしてこーくんは敵と戦って、今回は負傷したけど引き分けたつてところかな？」

声を掛けたのはこの地下施設の主である東であった、その彼女が端末を操作すると、部屋の奥から一機のISが現れる。

「これは!？」

「何て損傷ですの……!？」

それは先程の戦闘に於いて康太が使用していたジェガンであったが、傷付いたその姿に全員が息を呑む。

右腕と左脚はビームに穿たれた穴が痛々しく、左腕と右脚は完全に摩耗し千切れたケーブルが飛び出していた。

頭部は無くなっており、極めつけは全身全てのスラスタが黒く焼き付いている、その他にも細かな傷は無数にあるがその損傷具合が激戦を物語っている。

「この機体の損傷は頭部と右腕、左脚以外は全てこーくんの動きに耐え切れなかった事による自壊だよ。そして、そんな動きをする為にこーくん自身の体もまたとんでもない負荷が掛かったんだ。これが現在のこーくんの容態だよ」

そんなジェガンの状態に言葉を失っていた専用機持ち達だが、気にする事無く東は空中にディスプレイを投影する。

そこには人型のモデルが浮かんでおり、負傷箇所を示す場所が赤く表示される。

「手足は例外無く関節部で千切れ掛ける、特に瞬時加速中にAMB

A/Cを行った左腕と右脚は酷くて、皮だけが辛うじて繋がってるような状態だよ。内臓も殆ど破れてる、というより折れた一部の骨が内臓を貫通してるんだよね、特に肋骨とか心臓を貫いてる。比較的無事なのは頭だけだけど、それも高Gに晒された時に視神経が切れてる。完全に無事なのは脳だけだよ。今のこーくんはね、I/Sと接続してギリギリ生きてるだけの状態なんだ」

「それは……」

淡々と語られる康太の容態、それは生きているというよりはただ死んでないといった方が正確な有様であった。

改めて康太の姿を見れば、胸の辺りでI/Sコアが康太の体と繋がっていた、ジエガンの物と思われるそれが今、康太の命を繋いでいるのだ。

「二応、折れた骨は全て除去してるし、治療用ポッドの中でナノマシンを使って治せる場所は治してる。こーくんからの細胞から培養したクローン臓器を作ってるから、完成すれば損傷の大きな臓器は移植する。大丈夫、眠ってるだけで脳はI/Sコアがちゃんと維持してくれてるから。体が元に戻れば目覚める事が出来るよ。この私が絶対に死なせないからね」

体は信じられない程に傷付いている、しかし絶対に生かしてみせるという束の言葉に、全員が安堵する。

「じゃあ、信じて良いんですね?」

「当たり前だよ。こーくんにはまだ未来がある。こんな所で終わるなんて、私が絶対に認めないからね」

興味のない人間にはそれこそ生死すら気に留める事もない束が此処まで言った事に誰もが希望を持った。

確かに康太は重症で生きてるのが奇跡と言える状態だ、それでも明確に回復の道筋が見えている事は全員の心を軽くする。

「まあこーくんが目覚めるのは暫く掛かるし、皆もこーくんが何と戦ったのか気になるよね。という訳でその水色、説明しといて。コレ使って良いから」

「み、水色!?!」

「お前以外に誰が居るんだよ。東さんは他にも色々忙しいんだぞ」
「分かってるわ。けど、私には更識楯無っていう名前があるんだから、せめて家名で——」

「その価値があるなら呼んでやるよ。じゃあね、いつくん、カズくん、
箒ちゃん！」

「えっ？あ、はい」

そうして全員が落ち着いたところで今度は何故このような事態に陥ったのか、その説明に入る前に全てを楯無に丸投げして東はその場を立ち去っていった。

そのあまりの切り替えの早さに一夏達は呆然と見送るしかなかった。

「うわ、必要な資料だけはちゃんと纏めてあるわね。此処までやるなら自分でやった方が早いでしょうに……コホン、取り敢えず頼まれたからには説明するわね。尤も、生徒会長として説明する義務もあるのは確かなのだけれど。まず始めに言っておくけど、この件はともではないけれど表沙汰にする事は出来ない話よ。他言無用、外部に対して話す事的一切を禁じます。良いわね？その覚悟が無いなら、早く立ち去った方が良いわ。一分だけ待つわよ」

説明を任された楯無は東が残していったタブレット端末を手に取り、そこに記されている内容を見て愚痴を零す、だが自身が康太を戦いに駆り立てたという面もあり、世界の裏側の事情も交える話である為に念を押す。

その気迫に全員が気圧されるが踏み留まり、一分後にもその場に残った。

「覚悟はあるみたいね。まず今回の学園祭の裏で暗躍してきた組織、その名を亡国機業というわ」

「亡国機業!?!」

「ああ、セシリアちゃんは夏休みの時に聞いていたんだったわね。他に、この組織の名を聞いた事があるって人は居るかしら?」

楯無はまず犯人の組織名を告げた、それに反応するのは自身の使用人に接触して来たという事を知るセシリアのみで、楯無からの確認に

は軍人だった頃に情報を僅かに知っていたラウラを除けば、全員が首を振る。

「じゃあ亡国機業の簡単な説明から始めるわね。亡国機業はいつから存在するのか、どんな目的を持っているのか、全てが謎に包まれている秘密結社よ。ただ、彼等は世界中の国々からISを強奪して自分達で運用しているわ」

「ア、ISを……」

「強奪……」

「康太くんはそんな組織と今回の件より先に、既に敵対関係にあったの。夏休みの時、詳細は私も把握していないけどイギリス絡みで彼等の計画を意図していなかったとはいえ妨害したのよ」

「まさか、あの時の事が原因で康太さんは狙われたんですの!？」

楯無の口から語られる亡国機業の内容、その全ては謎に包まれているがイギリスでの一件を知るセシリアは今回の件がその時の報復ではないかと憂慮する。

だが楯無は首を横に振った。

「それより先に康太くんは亡国機業のターゲットになっていたみたいよ。絶対に生かして捕らえるよう、亡国機業の全ての部隊に指示が出ていたの。ラビットフット社だからなのか、あの篠ノ之束の側近だからなのか、それとも康太くん自身に彼等しか知らない何らかの利用価値があるのか、それは分からない。でも今回の件も亡国機業は真っ直ぐに康太くんを狙って来たわ。そこで康太くんと私達で罠を仕掛けたの。相手に康太くんが完全な無防備に見えるようにして、確実に仕留められるよう誘導したのよ」

「それで康太を囮にしたんですか!？」

「そうね。でもそれは康太くん達の、ラビットフット社で立てた作戦よ。そして作戦は途中まで完璧に進んでいたわ。亡国機業のエージェントを一人、機体を完全に破壊して捕獲寸前まで追い詰めたの。でも、そこに予想外の強敵が現れた」

そう言つて楯無はタブレット端末を操作、空中に投影されているディスプレイに今回の作戦で交戦した二機のISを表示していく。

だがその片方の機体には全員見覚えがあった。

「あれは!？」

「プロヴィデンス!？」

蜘蛛のように見える機体と、かつてのシミュレーターで康太が交戦してみせた機体、細部は違えど見間違える筈がなかった。

「このアラクネと呼ばれる機体は罫に仕掛けて完全に破壊したわ。でもこの機体、プロヴィデンスと交戦して康太くんは今回の重症を負ったの」

ディスプレイに表示されるのはプロヴィデンスと康太との戦闘記録、ドラグーンによるオールレンジ攻撃は全員がシミュレーターの時に見ていた、だが大型ドラグーンは荷電粒子砲を放っているが、小型ドラグーンから放たれる赤いレーザーは空中で自由自在に弧を描き、四方八方から攻撃してきている。

幸いにも威力はそこまで高くなく、康太は避けきれないなら装甲で受け止めていた、しかしブースターやセンサーといった部位を狙ってくる為に決して無視できる攻撃ではない。

更にはそのレーザーだ、解析結果でレーザーはBT粒子が使用されていると表示されている。

「そんな、有り得ませんわ! 私以上にBT適性があるだなんて!？」

「ぐす、わた、私が忘れていたから! サイレント・ゼフィルスのレーザーは曲がるって、ちゃんと覚えてたら! コウは、コウは!!」

「サイレント・ゼフィルス!?! リナさん、知ってますの!?! あの機体は、元はサイレント・ゼフィルスなのですか!？」

「ちよつと落ち着きなさいよセシリア! リナも、落ち着いてからで良いわ。まず、全員で知ってる情報を掻き集めるわよ」

「ご、ごめんなさい、私、私……」

「良いから落ち着きなさいって。で、セシリア。まずはサイレント・ゼフィルスって機体の事を教えてくれるかしら?」

「ええ、そうですね。では、私の知る限りの事をお教えしますわ」

一時的に取り乱したセシリアとリナだが、そこを鈴が落ち着けて可能な限りでの情報共有となった。

そこでセシリアの口から語られるのは、イギリス本国で開発中であったブルー・ティアーズの二号機の話、試験的にシールドビットと呼ばれる兵装を組み込んだという機体の話だ。

そしてBT粒子を曲げる方法、BT兵器が高稼働時に可能な偏光制御射撃という能力であった。

しかし現状ではBT適性はセシリアがトップであり、そのセシリアでさえ偏光制御射撃は使えないのだ、例えセシリアのデータを利用し多少は扱い易くしたところで他の人間に使える筈がない、そうセシリアは締めくくった。

「加えて、あのパイロットは全てのビットを制御しながら自身も動き回っていました。悔しいですが、私よりも上というのは事実ですね」

「そう、ありがとうセシリアちゃん。リナちゃんは……まだ掛かりそうだし、先に記録の方を見た方が早いわね。敵が逃げた事で康太くんは追撃に移ったわ。けど、そこでの戦闘も決して楽なものではなかった。私も最初に見た時は自分の目を疑ったわ。執念、まさにそうしか言いようのない光景だったもの」

そうしてディスプレイに表示されている戦闘記録が再生される、先程の屋内の戦闘ではなく、通路を通って外に出たところからの戦闘の様子だ。

追加ブースターで速度を上げている康太、避ける為のスペースも広く取れる外では先程と違い被弾も少なく済んでいた。

しかし距離を詰めれば敵も狙いを付けやすくなる、追加ブースターに被弾してしまう。

康太はそれをパージし、無事な方のブースターをロケットとして使用するが、迎撃されて不発に終わる。

それでも爆発を目眩ましに康太は距離を詰め、ビームサーベルによる格闘戦へ移る、敵も格闘戦にて対処し、斬り結ばばドラグーンによる射撃で引き剥がしに掛かる、幾度もその流れが繰り返され、動き回る必要があった分だけ疲労した康太は遂に被弾してしまう。

その姿に思わず悲鳴を上げてしまう者は多かったが、康太はその状

態でも諦めなかった、残るスラスタをフル稼働しAMBACと二重瞬時加速を組み合わせた新たな機動により高速で絶え間ない斬撃という未知の戦闘技術を編み出してみせたのだ。

だがそれは正しく諸刃の剣、その身に掛かる加速度は一気にプラスからマイナスへ、そしてまたプラスへと繰り返されるものであり、いくらISが搭乗者に対してPICによる高い耐G性能を誇ったとしても、耐え切れるものではなかった。

あつという間に康太の体は限界を超え、それでもISは康太の脳だけは保護し、康太はその頭で思考し敵を見据え、手足や内臓、視覚さえも捨て敵に一撃を叩き込んだ。

それは自身の身を一切考慮しない捨て身の一撃、最早狂気の段階に足を踏み入れた一撃だった。

その気迫に誰も言葉が出なかった、仮に同じような状況になった時、自分達は此処までやって戦えるのか、全員が無理だと悟ったからだ。

それ程までに康太の動きは常軌を逸していた、そこまでやって機体が限界を迎えた為に追撃を断念して離脱に切り替えた辺りは冷静ではあるが、つまりは今の重症の状態でも気絶する事無く痛みに耐えながらこの場に帰還して見せたという事でもある。

あまりにも堅く固められている康太の覚悟、普段は同じ学生である筈なのにその背がとても遠く感じられた。

「以上が、今回の戦闘の顛末よ。敵も然ることながら、康太くんの執念も凄まじいものだったわね。さて、此処まで見て貰ったけど、もし仮に今後亡国機業との交戦があるとして貴方達に同じ事が出来るかしら？」

『……………』

そこに掛けられる楯無な言葉、誰もがあのプロヴィデンスのパイロットと対峙して最悪でも相討ちに持ち込めるかと言えば、誰もそのような技量は持ち合わせていない。

再び対峙する事があれば康太しか対応が出来ない、それではまた康太は己を犠牲にして戦おうとするだろう。

だが友人である康太に頼ってばかりでは居られない、セシリアやシャルロット、ラウラは少なからず康太に対する恩義もある、ならばやるべき事は一つだった。

「強くなりますわ。次は康太さんを護れる程に、強く」

「そうだね。放っておくとまた怪我をしそうだし、近くで見っておかないと危なっかしいもんね」

「早速訓練を———と言いたいが学園祭での疲労もあろう。疲労した状態での訓練が無駄とは言わんが、己を見詰め直すには冴えた状態の方が良からう。明日は振替休日だ、時間はたっぷりとある」

そう覚悟を決めた者達に釣られ、他の者達も戦意を高めていく。それを見て今まで泣いていたリナも立ち上がる。

「私も、もうコウを傷付けさせない。あの女は、次は私が倒す！」

赤く泣き腫らしているが、その眼には強い怒りの色が見える。

その事に一抹の不安はあるが、意志の強さに楯無は何も言わない事にした、危なければ修正するつもりだ。

「私も、少しは戦えるからと、それで何処か満足していました。ですが、本当の意味で強くなど無かったのだと気付かされました。私も、強くなります」

そしてまたクロエも目標を新たにする、此方も危うげな気配があるが、楯無が目を離さないよう注意しようとする。

「じゃあ明日から特訓しましょう。泣き言は聞かないから、覚悟しておいてね」

『はいー』

こうしてこの日、IS学園の一年生専用機持ち達は覚悟を新たにやり一層強くなる事を決めたのだった。

その後、康太の側にクロエとリナが交代でつく事になり、休息を取りながらも急な容態の変化に備える事となった。

他の専用機持ちも心配するが、この場合はラビットフット社の領域という事もあり退室する事となる、心配はあるが康太が回復する事を祈ってその場を後にしていくのだった。



初めに認識したのは、まるで宇宙に居るような重力の重みを全く感じない浮遊感だった。

次にゆっくりと目を開けば、そこにあつたのはただ広い、どこまで続いているかも分からない真っ白な空間だ。

「此処は……」

まだ多少はつきりとしらない頭で一番新しい記憶を探る、確かオレはプロヴィデンスと交戦し、機体が限界を迎えた事で離脱した筈だ。

墜落に見せかけて海中に飛び込む瞬間、機体の装甲をシージエガンに切り替えた事で光学兵器の威力が極端に落ちる海中を進み、IS学園にあるラビットフット社の水中ドックから拠点に戻った事は覚えていない。

あの戦闘ではかなりの無茶をした、勝つ事だけに夢中になり自分の体を全く顧みなかった事は覚えているし、拠点に辿り着いた辺りで倒れたような気もする。

帰路でISからオレの体が瀕死だった事は聞いていたと思う、だとすれば今オレが居るこの場はあの世という事だろうか？

『——ますか』

ふと、誰かの声が聞こえた気がする。

『聞こえ——』

少女のもののように聞こえる声だ。

『聞こえますか』

徐々に鮮明になってくる声、それと同時に目の前に誰かの姿が浮かび上がって来るのが見えた。

『おはようございます、ご主人様！貴方の忠実なAI、ハロロがお目覚めの時間をお知らせですよ！』

「チェンジで」

一気に覚醒した思考で状況を把握すると同時にそう告げる。

『何ですか!?ご主人様と共に歩み、ずっと側から支えて来たじゃないですか!?ほら、私ですよ!?ハロ系ヒロインで正妻のハロロです！』

「やかましい！あとハロ系ヒロインで言ったらお前より先にハナヨと

「いう存在が居るわ！」

「どうやらあの世という訳ではないらしい、こんな騒がしいお迎えとか本当にあつたらあの世のイメージが崩れる。」

「とはいえ、あの世でないというのであれば此処は夢の中という事だろうか、明晰夢という奴かな。」

『ヒドいです！この世界に来てからずっと尽くして来たのに！嵩張るからという理由でハロからドックタグに姿も変えたのに！少しは愛情以て労ってくれても良いじゃ無いですか!? AIにだって愛は必要なんですよ！』

「何を言って——いや、まさか。ジェガンか？」

『そうです！この姿はご主人様の記憶の中からそれっぽい物をトレースしたのですが、私はご主人様の愛機、ジェガンのISコアそのものですよ！』

ISにはそれぞれのコアに人格が設定されている、それは知ってはいたがこうして明確に言葉を交わすのは当然ながら初めての事だ。

オレの愛機たるジェガンのコア人格が目の前のハロロだという事には多少、いやかなり面食らったが、これが夢が現かは関係なく確かめておきたい事があった。

「ハロロ、お前がジェガンだというのなら疑いはしない。だが一つ聞かせて欲しい事がある」

『何でしょうか、ご主人様？』

「お前はオレを恨んでいるか？己の意地だけの為に、限界以上に酷使した乗り手の事を」

物には魂が宿るというのは八百万の神を信奉する日本人としての感傷かもしれないが、こうして意志がある相手なら尚更だ。

だからこそ確かめたかった、あの時オレは機体が壊れるのもお構いなしにスラスターを噴かせて手足を振り回した、それは乗り手として失格なんじゃないかと、こうして対峙して思ったのだ。

『恨んでなんていませんよ。私は特殊なISなんです。他の子は、好戦的な性格の子なら同じ様に思うかもしれませんが、私はご主人様と同じく、元は別の世界の存在ですから。私の望みは『ご主人様と共に

戦う事』です。寧ろ今回の事は私の方が不甲斐ないばかりですよ。ご主人様の反応速度に付いて行けず、私の方が先に耐え切れなかったなんて末代の恥です』

「お前にも死後の世界があるのか？」

『どうでしょうか？分かりませんが、それだけ悔しかったのは本当です』

「そうか。強くなりたい、な」

『そうですね、強くなります。乗り手の実力を全て発揮させる事の出来ない機体なんてお飾りでしかありません！』

「ならどうする？外装パーツをより性能の良いのにするか？」

『ふふん、甘いですねご主人様！私はISです！ISにはISなりに強くなる方法があるじゃないですか！』

「ほう、まさかとは思うが」

『はい、セカンドソフト二次移行です！楽しみにして下さいね！これまでの戦闘データ、シミュレーターでの適性、ご主人様の深層意識、全てのMSの設計思想！ありとあらゆるデータからご主人様に最適だと思う機体を選出し、その機体をご主人様色に染め上げて見せますよ！次にご主人様が目覚めた時、新しくなった私を十全に扱って下さいね！』

「分かった。機体のお陰と言われないよう、オレも成長すると誓おう」
最早この場の出来事をオレは夢だとは全く思えなくなっていた、目の前のコアの人格だというハロロは間違い無くオレが共に戦って来たISなのだろう。

『ところでご主人様。ご主人様は未だにご自身を凡人だと思つていますか？』

「唐突だな。まあ、篠ノ之博士とか織斑先生とかに比べたら凡人だろうよ」

『それは比較対象がおかしいだけで、ご主人様はとつくに凡人卒業してますよ。死を恐れないで夢を追うなんて覚悟、寧ろ修羅の類です』
「そう思うか？」

『そうですね。ですから、ご主人様も意識を切り替えましょう。貴方は既に凡人では^{量産機}ありません。これからは唯一^{ワンオフ機}になりましょう。私と

一緒に』

「そうか。そうだな」

自身に相応な夢だと思わなければ宇宙に手を伸ばそうなど、言えないのかもしれない。

ならば此処でオレは、もつと欲張りになっても良いのだろう、量産機が相応しいというのではなく、より高みを望んでも良いのなら。

『では、私は成長の為の準備に入りますね！あ、それと思いつ切り使い潰す気で動かしても良いですけど、ちゃんと私の事を後で労って下さいよ！具体的には身嗜みはキチンと、装甲をピカピカにお願いします！』

「分かった分かった。長い付き合いになるんだ。その位、手間でもなんでもないよ」

『約束ですよ？破ったらいざという時に本気を出せないかもしれないからね？』

「安心しろ。お前はオレの機体で、オレの相棒なんだから。雑には扱わないさ」

『あと、私以外のコアを使っても良いですけどあまり浮気はしないで下さいよ？』

「心配性だな。使うとすれば、機体テストか汚れ仕事だろうよ。それはオレにとつて本命って訳じゃないしな」

『なら安心ですね。最後に、ご主人様の為に一言だけ伝えますね。今後とも貴方と共に戦い抜く為に、貴方が貴方の目的を達成出来るように——あなたに、力を……』

ハロ口の姿をしながら、最後の方は元ネタとなった存在とは違い静かに祈るようにしてその姿は消えていった。

それと同時にオレの意識も遠のいていく、きつとこの眠りから目覚めた時には相棒の二次移行も終わっているのだろう。

ならば今は休もう、流星に今日は色々な事があり過ぎた、疲れも溜まっているのだろう。

次に目が覚めた時、体調不良で機体性能を全く引き出せませんでした、なんて笑い話にもならない。

ああ、相棒がオレにどんな可能性を見て、どんな機体でそれを体現するのが、今から楽しみで仕方がなかった。

68話 新たなる剣

ラビットフット社のラボ、IS学園の地下にあるその施設、その最奥部は夜中であつても明かりが消える事は少ない。

「成る程ねえ、こーくんの能力に合わせての二次移行。その為に資源を探してるのかあ」

そこで部屋の主は、篠ノ之束はラボの内部を映し出している監視カメラの一つに目を向けていた、明かりの無い部屋の中では一機のISが稼働していた。

ジェガン・サーガ、康太が汚れ仕事を行う際に使用する特殊戦用の機体である、本来なら康太が動かしているように見えるのだが、その中身が空である事を束は知っていた、何よりも康太本人が未だに治療用ポッドの中に居るのだから。

「そういう事なら私もちよつとだけお手伝いしてあげようかな?」

そう言う束はキーボードを操作して色々と物資を漁っているジェガン・サーガの元へコンテナを移動させる。

突如として現れたコンテナに対して驚くようなリアクションを見せるジェガン・サーガ、だが開封されたコンテナの中身が様々な物資に溢れているのを確認するとそのコンテナを運んでいく、どうやら束が送った物はお気に召したようだ。

「さてさて、どんな機体に仕上がるかなあ?強いのか?速いのか?それとも既存の枠には当て嵌まらないような特別な機体?」

束でさえも康太のISがどのような変化を迎えようとしているのかは把握していない、見ようと思えば見えるかもしれないが、それは無粋でつまらないと束は自制していた。

だがどのような機体になったところで、束の興味は一つに集約される。

「でもでも、どんな機体でもこーくんは戦うし、もつと強くなるんだよねえ。楽しみだなあ、次はどんな光を見せてくれるのかなあ?」

この日の束はとてつもなく上機嫌であった、気を抜けば顔が緩んでしまうのを抑えられない程に、流石に妹や親友の家族、そして自身を

慕ってくれる少女達の前で、康太が重症にも関わらず上機嫌な様子を見せるのが悪手だという事は分かっていた。

だからボロが出る前に康太の説明を楯無に投げたのだ、用意したデータを預けて、自身は誰にも顔を見られる事のないラボの奥に籠もった。

命を省みる事無く駆けた一条の光、人が己の全て賭してでも成し遂げようとする姿、ニュータイプとは違うが束の好きな人間の姿は今思い出しても鮮明に思い出せる程に鮮烈であった。

「こーくんにはまだ未来がある、これは本当。こんな所で終わるなんて私が絶対に認めないっていうのも、本当の事」

そんな束が一夏達の前で約束をした、しかしそれには束しか知らない意図もあった。

「だってこんな所で終わっちゃったらつまらないもんねえ。次があれば、こーくんはもっと光り輝くのは間違いないもん」

加えて自分からその身を投じる為に、束が誘導してやる必要性もないという点も素晴らしいと言えた、全て康太が康太自身の意志でやるからこそ輝けるのだから。

無邪気に笑う束、その近くのモニターには康太の脳波が映し出されており、ニュータイプの物と見られるその数値がこれまでよりも跳ね上がって安定しているのが記されていた。

◆ 全戦闘データ、シミュレーター履歴、マスター深層意識、参照完了。

—— マスターの適性並びに戦闘パターンより、移行先機体を可変・高機動型に設定。

—— マスターの記憶領域より全ての設計思想を確認、機体選出を開始。

—— 可変機構、該当。高機動性、該当。選出条件にマスターの特殊技能、ニュータイプ能力への対応を追加、該当。機体選出完了。

—— 選出機体を原型機とし、マスターに対して最適化を開始。機体構築シミュレーターを開始。

——内部制御システム構築、原型機より不要な特殊システムを削除、空き領域に対して新規システムを構築、完了後秘匿。

——内部制御システム構築、全行程完了。続いて本体の構築を開始。

——フレーム形成、既存フレームでは耐久値が不足。βが確保した物資を確認、要求値に達する剛性を確認、フレームに対してはサイコフレームの使用を決定。

——スラスタ―形成開始、既存部品をベースに改良、多少の大型化を黙認、推力確保を最優先。

——スラスタ―形成完了。機体各部への配置完了、パイロット保護機能の不足を確認。

——P I C最適化を開始………パイロット保護機能、不足。結論、コアの出力不足。

——P I C出力確保の為、コアの連結を検討。β、Γとの意志統一完了、統合開始。新型I Sコア、本機をトライコアと呼称。

——P I C出力確保。副次効果として機体出力、エネルギー総量の増加を確認。

——続いて部駆動部形成開始、出力増加によって既存部品を原型とし耐久性の向上を主眼に設計。

——駆動部形成完了。装甲部の形成を開始

——チタン合金セラミック複合材、強度不足。ガンダリウム合金、精製方法不明。

——マスターの記憶領域より、マイクロハニカム構造による装甲材精製技術を確認。ミノフスキー粒子に静電入力を行う事により立方格子状の力場が発生する事を利用した装甲材精製技術と認識。

——試行開始、実行可能と判断。本機の装甲に対し、チタン合金セラミック複合材をベースとしたマイクロハニカム装甲を採用。

——装甲部形成完了。これにて全行程を完了。

◆ ——二次移行、開始。

沈み込んでいた意識が呼び起こされる、目に入るのは水中の光景、以前にもお世話になった事のある篠ノ之博士特製の治療用ポッドの中だ。

そしてオレの治療が終わったからか、それとも意識を取り戻したからか、治療用ポッド内部の液体が排出され、ポッドが開く。

そして以前と同じように液体に浸かっていたから服は来ていない、近くに見覚えのあるオレの服があったから着込むが、それを済ませて改めて周りを見渡すとラビットフット社のラボの中だった。

主にオレが機体の調整なんかを行う部屋、半ばオレの機体専用の整備室のようになっていたラボの一角だ。

なら近くに、夢で見たのが本当の事であれば二次移行を果たした相棒が居ると思ったが、その姿は無い。

やはり夢は夢か、そう思いもしたがふと胸に、自分の心臓に違和感を感じて手を当てる。

普通なら鼓動を感じる筈の場所、だがその鼓動が一切感じられず、また今になってその存在に気付く。

「そうか、お前はそこに居るのか」

恐らくだが、負傷した臓器の中で心臓の機能を代替する為にオレと融合したのだろう。

その辺りは後で詳しく調べる必要がある、だが不意に頭の中に新たな機体の姿が浮かび上がり、相棒が二次移行していると確信出来た。

そして、相棒がどんな機体を選んだのかも判明した。

「なら行くこうか、相棒^{ガンダム}！」



IS学園の第六アリーナ、そこは学園内のアリーナで一番の広さを誇り、主にキャノンボール・ファスト等の練習などで使われる事が多い場所だ。

そんな第六アリーナは現在、急遽ではあるがラビットフット社に貸し出されていた。

一時間程度の予定とはいえ九月末には実際にキャノンボール・ファストもある為、この時期は予約で埋まっているにも関わらず、である。

当然、その時間帯に予約を入れていた生徒からは不満があったが、その辺りは完成した戦技研の建物内に設けられたシミュレーターの使用を許可する事でバランスを取っていた。

ではそんな第六アリーナで何が行われているか、貸し出されているとはいえ見学は自由にしても良いとされており、一年生専用機持ち達や耳聡い生徒は観客席にてアリーナ内で飛行するその機体を眺めていた。

「なあ箒、俺達って今日から康太に追い付く為に訓練するんだっとな？」

「そうだな。少なくとも、私はそのつもりだ」

「康太って、暫く復帰出来ない程に重症だったよな？」

「ああ、生きている方が奇跡というレベルだった筈だ」

「何でも復帰して新型乗り回してらんだらうな？」

「私にも分からん……」

だが眺めている者の中には遠い目をしてそれを眺めていた者達も居た、主に昨日の戦闘での康太の負傷の度合いを知っている者達である。

一応、説明はされているのだが、機体が二次移行すると同時に肉体の修復とISとの融合が行われたという人智の及ばない領域の話しをされ、そしてテンションの上がった様子で嬉々としてISを展開していた康太を見て、心配など何処か遠くへと吹き飛んでしまったのだった。

そんな彼等の視線の先には白を基調としつつ明紫が各部に配された派手めの塗装が為された機体が居る。

通常のISとは異なり戦闘機のような姿をしているのはそれが可変機構を備えているという証であり、キャノンボール・ファスト用の第六アリーナであつという間に端から端へと辿り着く程の推力を誇っていた。

あまりの出力に第六アリーナの敷地内では全力を出す事が出来ず、後日許可を取って海上での試験飛行を行うというのだからその出力の高さが伺える、また現在の見積もりではエネルギー消費を考慮せ

ず、加速する為の距離があれば最高速は大凡で時速8000キロ（マッハ7弱）に迫るのだとか。

そうでなくとも巡航速度で時速4,500キロ（マッハ4弱）は堅いというのだから、間違いなく世界最速のISと呼べるだろう。

そしてその推力は別の場面でも発揮される、ある程度の飛行性能を見たのか戦闘機のような姿が崩れ、手脚が伸びて人型を取る、その間は一秒にも満たない。

可変時は機体上部に固定されていた長大なライフルを右手に、可変時の機首と武装プラットフォームを兼ねているシールドは左手に移り、それが機体の主兵装なのだと分かる。

ジエガンから二次移行したというが、その姿は全くジエガンとは似ても似つかない、何より双眸とV字アンテナを備えたその頭部は康太の言うガンダムタイプの物である。

事前に伝えられていた名前はガンダムデルタカイ、それが康太の新たな剣の名前であった。

「ガンダム、か」

「康太さんの原点とも言える名前ですわね。つまり、康太さんのISコアがアレを選んだという事ですのね」

「そして、その性能を引き出す為に合計三つのISコアが融合した世界でも唯一のトライコアを搭載した、康太の為だけの機体だね。それだけの出力があつて漸くPICが慣性を相殺出来るって話だから、ね」

世界でも数の少ない二次移行機、だがその変化は機体の外見のみに留まらなかった。

三つのISコアが融合し、三倍の出力を得て漸く康太の機動に機体が耐えられるようになったという事実、そして可変時に折り畳まれる手脚から康太を保護する為に生まれた、それまでは不可能だった生体の量子化技術を備えた世界でも類を見ない機体なのだ。

それは搭乗者である康太の為だけの機体であり、扱い辛さもまた極端なものという、量産や別の人間が扱う事を一切考慮しない正に唯一のガンダムであった。

今も視線の先ではガンダムが人型の状態での機動力を確認していた、圧倒的な推力により機体の各スラスターが稼働する度に凄まじい速度で機体が動き回っている。

全開のほんの一割だとしても、推力が大きければ生み出される加速度は他の機体の比ではない、少しでも調整を間違えればあつという間に機体は制御を失ってしまうだろう。

だが康太は病み上がりの体でありながらそれを完全に制御している、文字通り人機一体となった康太にとっては最早己の肉体と何ら変わらないのだ。

機動性を確認すれば残りは武装のテストとなる、各種武装が展開され、標的に向けて放たれるのをデータ収集目的の無人機のEWACジエガンがセンサーで確認していく。

ロング・メガ・バスター、ビーム・キャノン、ハイ・メガ・キャノン、メガ・マシン・キャノン、炸裂ボルト、基本的な装備とシールドに装備可能な各種兵装を切り替え、順次試していく。

そして最後に使用されたのが、フィン・ファンネルである、セシリアのブルー・ティアーズを見慣れているとはいえ、その動きは二機のみでも速く、正確であり動きもまるで生きているかのように滑らかであった。

何より、一夏達は知らないが原型となったプロト・フィン・ファンネルとは違い、形状こそ似ているがガンダムの物と同じ様にファンネル自体がAMBAC可能という、強化発展を遂げていた。

更に操れるのは二機だけでなく、拡張領域より追加で四基のフィン・ファンネルが現れ、計六基のフィン・ファンネルが先程と変わらぬ動きで宙を舞い、ビームによる散弾を放出していく。

威力、練度、数、その全てがブルー・ティアーズの、それを操るセシリアの上位互換という姿、そしてそれだけの数を操りながら尚も自機の操作を行い、複数の標的を同時に、短時間で撃ち抜いていく姿は最早芸術的とも言えた。

『ハハハ、フハハハハッ！良いぞ、相棒^{ガンダム}！お前となら行ける！もつと強く、もつと先へ、もつと高みへ！あの宇宙^{そら}の先にだつて行けるんだ!!』

そして、それを成す康太は楽しそうに、無邪気とさえ言える程に歓喜の声を上げている。

そんな姿を見て、誰もがポツリと呟いた。

「遠いな……」

「遠いですわね……」

自分達よりも先へと行ってしまうた友人、その差を思いながら、それでも追い付くのだと覚悟を改め、何にも縛られない自由なその姿を目に焼き付けるのだった。



日本の某所、高層マンションの最上階、夜の帳が降りた頃、その一室の玄関が開かれ二人の人間が中へと踏み込んだ。

「やっと戻って来れたぜ……」

「意外としつこかったな、日本の連中も」

その二人の正体は亡国機業のオータムとマドカであり、この部屋もまた亡国機業の日本国内に於ける拠点の一つであった。

しかし此処に辿り着くまでの間、康太との戦闘の結果を見た楯無が直ぐに派遣した日本のISを要請し、近辺に網を張られた事で太平洋方面に逃げたと思わせつつ、大回りして日本に再び上陸する必要が出来たのだ。

結果、ISを使用して此処に辿り着く訳にもいかず、陸路を変装して進む必要があり一日以上を費やして今になって帰還したという訳である。

特にオータムは顔を見られており、変装も完全とは言えない為に一夜を山の中で過ごす事になったので二人はそれなりに疲労していた、食料はISの拡張領域の中にレーションが入っていたとはいえ、米軍のMREと呼ばれるそれはMeals, Rarely Edible（とても食べられたものじゃない食べ物）など、多少の改善はされたが他国の物と比較してもマズいと評される物であり、加えて不用意に火を使う訳にもいかない為に加熱パックがあるとはいえ味気ない食事を強いられたのだ。

その後も更識の追跡を警戒したりと、神経を酷く使う移動だった事

もあり、こうして辿り着けたもののオータムは何も言う気が起きない程であった。

「お帰りなさいませ。大変だったわね、オータム。報告は後で良いから、シャワーを浴びて来たらどう？」

「悪いが、そうさせて貰うぜ……」

そんな二人をドレスに身を包んだ女性、スコールが出迎えるが、恋人でもあるオータムの疲労困憊振りを見て先に労う態度を見せた。

その言葉に素直に頷いたオータムは山での潜伏で体を洗う事が出来なかった事もあり、動きは鈍いが真つ直ぐシャワールームへと向かっていった。

逆に、そこまで身嗜みに興味が無いマドカは先にスコールへの報告を済ませる、とはいえISのデータと簡単な所見を述べるだけだ、マドカには亡国機業への忠誠心など微塵も存在せず、ただ自身の体内に叛逆防止用のナノマシンが存在するから従っているに過ぎないのだ。「そう、今回の事は良く分かったわ。追って次の指示があるまで休んでいて良いわ」

「そうさせて貰う」

報告を終え、素早く自身に与えられた個室に戻ろうとするマドカ、だがその背にスコールが声を掛ける。

「それにしても、随分と機体に損傷を負ったみたいね」

「敵の力を見誤った、それだけだ。次は必ず私が勝つ」

わざわざ敗北した事を指摘してくるのか、自然と手に力が入っているのを自覚したマドカだが、続くスコールの言葉にそれも霧散する。「その貴方が痛み分けになった特異点、紫藤康太のんだけど、機体が二次移行したそうよ。レインが撮影した映像を送って来たわ」

「っ!?!寄越せ!」

「ええ、しっかりと確認しておきなさい。次は勝つのでしょうか?」

それはIS学園に居る亡国機業のスパイからの情報であり、観客席からスマートフォンでの撮影とはいえ康太の新たな機体、ガンダムデルタカイのテスト風景であった。

当然、スコールの方でも別の部署に回して戦力分析をさせている

が、映像データのコピーを収めたメモリを見せると、引っ手繰るようにマドカは掴み取る。

そしてメモリを持ったまま部屋へと戻っていった、それを見届けたスコールは自分も部屋に戻ると、デスクトップパソコンに表示されている、先程マドカに渡したデータの映像を眺める。

「威力偵察としてオータムを送ったのだけど、予想以上に強敵だったわね。でも、私の機体への例の武装の積み込みは完了して、後は調整を待つばかり」

オータムには黙っているが、そもそもスコールはオータムが勝てるとは思っていなかった、現在のIS学園の戦力を少しでも測り、紫藤康太に関する情報を少しでも集めてくる事が目的だったのだ。

しかし今回マドカとの戦闘の結果、康太の機体が二次移行し、その機体は軽く見たただけでも正攻法で勝つのは難しい機体となってしまうていた。

だがそれでもスコールは自身の機体、ゴールデン・ドーンに新たに組み込まれた武装とシステムがあれば勝算は十分にあると確信していた。

「フッフ、次の作戦はキャノンボール・ファストの時ね。特異点、紫藤康太、貴方を黄金の王の前に跪かせてあげるわ」

そして、再びIS学園にその魔の手が迫ろうとしていた。

短編集①

ラビットフット社の歌姫

一人の少女が廃墟の中に佇んでいた。

かつて平和だった時は多くの人が行き交っていたであろうビル街は無惨にも崩れ落ち、地面に敷かれていたアスファルトには爆発によって大小様々な穴が空いている。

一面の灰色の空は日の光が地上に降りるのを阻み、昼にも関わらず薄暗い。

そんな中で少女は歌う、儂げに、だが感情の込められた歌は聴く者達の心にもしつかりと染み渡っている。

歌は終始英語にて歌われていた、その日本語歌詞は画面横に表示されている為に、英語が話せない大多数のこの場に居る者達も歌詞の意味は理解出来ていた。

そして少女が歌い終えた時、ノイズと共に画面が暗転し、それまでミュージックビデオを流していたテレビは元のニュース番組へと変わる。

『以上が現在人気急上昇中の歌姫、紫藤未来しどうみくによる「EGO」でしたー』
『ラビットフット社の公式アカウントで突如として動画投稿サイトに投稿されたミュージックビデオという事もあり、話題を集めましたからね。そして歌唱力もかなりの物で、プロ顔負けの歌声はあっさりと百万再生を突破、既に二百万再生を目前としている事からも人気振りが分かるというものですよ。加えて此方の歌詞ですが――』

それは先日、動画投稿サイトに彗星のごとく現れた歌姫の話題であり、それがISの生みの親である篠ノ之束が保有する企業であるラビットフット社の所属ともなれば話題にならない方がおかしかった。

結果、歌姫自身の歌唱力もありあつという間に人気が広がった訳で、こうして朝のニュース番組にまで取り上げられる事態になったのである。

なおラビットフット社は基本電話対応をしていないので、メールに

よって謎の歌姫、紫藤未来のプロフィールを得ようと問い合わせが殺到しているのだが、世界中から問い合わせのメールが届くのを煩わしく思った束のプログラムにより振り分けられたメールは基本的に読まれる事もなく廃棄されているのだった。

結局、ろくな情報を集める事が出来なかつたマスメディア等は仕方なく予想を語るしかなく、姓が同じという事と、少女の外見は長い黒髪をストレートにし、日系の容姿からラビットフット社のテストパイロットにして束の側近である紫藤康太の妹ではないかと、騒いでいる。

「ふーん」

なお、その康太自身はその事について興味津々といった様子 of IS 学園の生徒達の視線を気にした様子もなく食堂にて朝食のサンドイッチを食べながら暢気に過ごしていた。

「予想以上に騒がれるものなんだな」

とはいえ全く無関心という訳ではなく、口には出さないものの紫藤未来という存在の影響力が此処まで広がっている事には内心驚いていたりする。

それというのも紫藤未来という人物は現実存在する訳ではなく——他ならぬ康太自身だからである。



事の発端は康太の機体が二次移行を遂げて三日後の事だった、学生として授業を受けた放課後、ラビットフット社のラボに来てみれば新たな漂流物を発見したと伝えられた。

座標を伝えられ、身元を隠す為に新造されたジエガン・サーガを駆って辿り着いてみればそこにあったのは脇に抱えられる程度のコンテナ、データが収められた物なら儲け物だが部品等の現物としてはあまり期待出来ないと開けてみれば、中に入っていたのは大量のCDであった。

では中身は何かと言われればガンダムシリーズの各主題歌やBGM等が収められたサウンドトラックアルバムの詰め合わせであり、技術を期待していた束からすればハズレであったが、康太からすればお

宝である。

持ち帰ったそれは束は興味がなかったので康太が全て引き取った、そしてそれを自室で自身のスマートフォンや音楽プレイヤーに即座にインストールのは当然の成り行きであった。

トレーニングでのランニング中など、様々な時に聴いている康太は自然とそれを口ずさむようになる。

そんな康太を見て、束がつい溢した一言が康太に衝撃を与えた。

「そんなに好きなら、動画とかで流して広めたらどうかな？」

「はっ!？」

その言葉はまさに康太にとって福音であった、ガンダムシリーズの魅力はストーリーや機体デザインのみならず、オープニングやエンディング、挿入歌、BGM、各シーンに合わせて奏でられる音楽によって作品が印象付けられ、場面が盛り上がるのだ。

ガンダムシリーズをそのまま公開する訳にはいかないが、音楽だけでもその魅力を伝える事が出来るなら、そう思った康太は止まらなかつた。

まず調べたのはアーティストに関して、各楽曲のアーティストはこの世界にも存在した、ガンダムシリーズが存在しないからガンダムシリーズに関する楽曲は存在しないが、某秋葉を拠点とする有名アイドルグループのプロデューサーのように、同じ人物は存在しているのだ。

それは歌手も同じであり、この世界では歌っていないとはいえ音源そのまま流すのは無用な混乱を生じさせてしまう、でも歌を広めたい、そんな葛藤の中で康太は一つの結論に辿り着く。

そうだ、オレが歌えば良いんだ。

正直に言うと康太はこの頃、キャノンボール・ファストに関する訓練や機体調整も同時に進行していた、そこで趣味であるガンダム関係の事も動かして多少——いやかなり寝不足だったのだ。

そんな訳で徹夜テンションで勢いだけはあつたし、寝不足で判断力は落ちていた康太は色々と暴走した。

まず音楽だが演奏は全て自身で演奏をし直した、作曲や作詞は変え

られないにしても、それをそのまま使うよりは全てを自身の手で再現する事がせめてもの礼儀だと思ったからだ。

とはいえ康太は中学生の頃に、自分でもガンダムシリーズの楽曲を弾きたいと思った事もありギターを始めとして幾つかの楽器を弾く事が出来た為に、問題はなかった。

とはいえ時間は少なかった為にその時は三曲のみとした、三曲分の各パートを一つずつ演奏し、それを編集で一つに纏めて楽曲は作る。

次に歌唱パートであるが、そこでも康太は妥協をしなかった。

ガンダムシリーズの楽曲は割りと女性ボーカルが多い、始めから男性ボーカルの楽曲をやれば良いのではという点に、曲を完成させていざ歌おうというタイミングで康太は初めて気付いたのだ。

しかし既に演奏は終わっている、ならばそのまま突っ走れと暴走して思考のまま康太は次にボーカル探しをする事にした、がガンダムシリーズを知っている者が少数な為、そして真にガンダムへの想いを持っている者が居ない為、何よりもこれは自分が始めた事だから結局は自分で歌う事を決めた。

そしてその結論に至った結果、また暴走してるままに康太は考えた、自分が女になれば良いのだと！

とはいえ実際に性別を変える訳ではなく、いつものシミュレーター上で自分のデータをベースに女性型のアバターを製作したのだ。

それには無駄にヴェーダを使用し、自身の遺伝子情報から女性だった場合の予想図を作り、それを元に声が形成されていく。

そして、そのアバターを使用して康太は歌った、作ったのは声帯だけでありそれだけで歌が上手くなる訳ではない、何度もリテイクを繰り返し、自分の歌を聴いて、駄目な部分をその都度直していった。

そうして完成した歌を康太が納得出来るレベルになった後、ようやく康太はそれを有名な動画投稿サイトにアップロードしたのだ。

選んだ楽曲は「EGO」「RE:i AM」「bL∞dy f8」の三曲、妥協を一切許さずに康太が歌い切った三曲が投稿されたのは土曜日の夜遅くだった。

しかもシミュレーターを利用していた関係で舞台も整えやすかつ

た事もあり、ミュージックビデオの撮影まで手早く行えたのだ。

楽曲によつては激しい戦闘シーンを交えており、普通に作ったのであればかなりの費用が掛かるような事も、康太は全て個人製作でやっていた。

そして何よりも歌唱力である、ファンとしての面倒くさ……一切の妥協を許さない精神が下手な歌を歌う事を禁じ、元より決して音痴ではない歌声が仮想空間なので現実の声帯にダメージが行く訳でもない為、どれだけでも歌い続けられる環境により上達し、プロに並べるまでになっていた。

そんな色々と常識とはかけ離れた要素が組み合わさり生まれた康太の歌は、歌詞が英語だった事もあり日本のみならず海外圏でも話題となり、再生回数が積み重なった結果、日曜日には既に百万再生を超えるに至ったのであった。



そんな訳で月曜日の朝、朝食を食べ終えた康太は食後のコーヒーを飲みながら先程から続いているニュース番組を適当に眺めていた。

テレビは再びミュージックビデオを流しており、「b L ∞ d y f 8」を流しながら紫藤未来——康太の女性アバターは、康太が女性らしい機体という事で天使と安直に選んだウイングガンダムスノーホワイトプレリユードを駆り戦闘シーンを繰り広げている。

完全に女性に成り切る為、男性が魅力的と感じる動きを取り入れたそれは無意識に歌舞伎の女形やシェイクスピアの時代に少年俳優が女役を演じていた歴史に通じる物があった。

とはいえ——

『また複数のレコード会社が紫藤未来さんと契約を結ぼうとしているとの情報もあり——』

「ん、キリマンジャロのフルシテイロースト、苦味が強いが……こりや良いな」

プロとしてのスカウトの話題が出て、当の本人は最近になって拘りだしたコーヒーの味についての感想しか出てこないのだった。

インフィニット・フォーチュン

それはとある日の事だった、学園は日曜日の為に休日、訓練ばかり続けていても体を壊すと一日休養にしようとする専用機持ち達で話し合った。

たまには学生らしく遊ぶかと決めた全員だが、そうになると何をするかと悩む事になる。

「そういえば、この間商店街の福引きで当てたんだけど、ハードがなく持て余しててき……確か康太がハード持ってたよな？」

そんな時に一夏が思い出して取り出したのが、一つのゲームソフトだった。

「これなら確かにあるが……これをやるのか？」

そのパッケージを見て、康太は以前に流れ着いた漂流物の中に入っていたガンダムゲームをする為に買っておいたハードのソフトだと頷くが、そのパッケージデザインを見て言葉を濁す。

パッケージの表には学生服に身を包んだ一人の少女の姿と、その周囲にそれぞれタイプの違い美男子が描かれているのを見てそれが女性向け恋愛シミュレーションゲーム、所謂乙女ゲーである事に気付いた。

タイトル部分には大きく『IF』の文字があり、その下に小さく『インフィニット・フォーチュン』と書かれている。

「なんか女子向けって感じだし、女子が多いから良いんじゃないかと思っただけけど」

「違う、そうじゃない」

確かに女性向けの作品なのだ、が一夏はそれがロールプレイゲームだとかアクションゲームだとか、そういったジャンルだと思っているに違いない。

多分、自分ではやらないからパッケージも全く見ていなかったんだろうと、康太は察していた、近くで一秋もまた弟の残念な姿に遠い目をしている。

「で、やるのか？」

「まあ、別に良いのではないか？」

「アタシは構わないわよ」

「日本のサブカルチャーに触れるのも一興ですわね」

とはいえ康太が念の為に確認してみると、女性陣からの反応は悪いものではなく、多少は興味がある事が伺えた。

という訳で康太が部屋からハードを持ってきてテレビに接続、ゲームを始める事となり、誰がコントローラーを持つかという話にソフトの持ち主である一夏からと決まった。

メインメニュー画面の『はじめから』を選択し、物語が始まっていく。

◆ 壺佳：私、折野壺佳^{おりのいちか}。今日からここ、IF学園に入学します！

『んっ？』

ゲームが始まり学園らしき建物の正門前に立つ少女の姿が映され、その名前と学園名を聞いて全員の声が揃った。

◆ 壺佳：(中略)……そこで私は本来なら男性にしか動かせない筈のIFを起動させてしまい、生徒、職員の全てが男性という学園に入学する事に。

壺佳：はあ、私これからどうなっちゃうんだろう……。

◆ 「なあ……これ……俺と、一秋兄になんか似て……」

「諦めろ、多分織斑兄弟混ぜたキャラクターだ」

「つまりは自分達がモデルという事か……コレが？」

名前は一夏の漢字を変えたものだが、IFとやらを起動させたシチュエーションは一秋のものだ。

パッケージの中に入っていたキャラクター表を見てみれば簡単な登場人物のプロフィールが載っている、主人公の壺佳の家族は兄が一人となっている、ならば双子の織斑兄弟を一人のキャラクターとして統合したのだろう。

「『このゲームはフィクションです。実際の団体や人物には関係ありません』と書いてあるが……?」

「名前でパクってるのバレバレじゃない。大丈夫なの、これ販売して……?」

パッケージの裏面を読んだ筈が疑問の声を上げるが、それを聞いた鈴があっさりとは本質を言ってしまう。

とはいえもう少し、もう少しだけ進めてみる事にした、もしかしたら偶然名前がかぶっただけかもしれないしな。

という事で多少怖くなつたが、一夏を促して先に進めさせた。

まずは学園初日という事で教室に向かう、そこには男子校の筈の学園だが壺佳と同じスカートを履いた女子生徒が居り、壺佳に気付くと笑顔で近寄って来た。

◆
??? : 壺佳ちゃん!

壺佳 : 氷莉ちゃん!? どうして I F 学園に!?

壺佳 : 教室に入った私に話し掛けて来た女の子は土藤氷莉、しどうこおり中学まで一緒だった私の友人だ)

氷莉 : 壺佳ちゃんが I F を動かした後、世界中でテストされたでしょう? それで、私も I F を動かせる事が分かってこの I F 学園に来たんだよ。

壺佳 : そうだったんだ。良かったあ、私の他に女の子が、それも氷莉ちゃんが居てくれて。 I F 学園でもよろしくね、氷莉ちゃん!

◆
氷莉 : うん、壺佳ちゃん! こっちこそよろしくね!

「オレかああ……」

だがその少女の名前が判明した途端、康太は崩れ落ちる。

実は康太が先程キャラクター表を見ていた時に、視界には入っていたのだが、康太は敢えて見なかった振りをしていた。

だがこうして出てきてしまったのは認めるしかなかった、何より大きな丸眼鏡に三編みという、容姿は地味な方と自覚はしていても自分がモデルのキャラクターもまた割りとは地味な見た目のキャラクターと

いう点にダメージを受けていた。

そんな康太の様子にクロエとリナはどう声を掛けたら良いか、戸惑っていた。

それを見て一夏も苦笑いしつつ、取り敢えず流れを変える為にゲームを進める。

初めての授業が終わったようだが、その内容が理解出来ないという事で壱佳は落ち込んでいた。

◆ 壱佳：初めての授業……理解できなかったなあ。

壱佳：でも、いつまでも落ち込んでても仕方ないよね。寮の自室に行こう……。

◆ その事に覚えがある一秋は何処か懐かしむ様子で苦笑いをする、だがそんな壱佳に背後から声が掛けられる。

◆ ???：壱佳。

壱佳：千尋兄さん……！

◆ 声を掛けてきたのはスーツ姿の男性であり、制服とは違う格好と生徒より年上に見えるその見た目から教師の方だと分かる、そのモデルも。

「これって明らかにそうだよな。格好とかそのままだし……」

「間違いなく織斑教官だろうな。命知らずな……」

◆ それに気付いたシャルロットとラウラは戦慄していた、主にあの織斑千冬をモデルとしたキャラクターを作ったゲーム会社に対して、その度胸に。

◆ 千尋：お前の部屋なんだが急な事で個室を用意できなかった。男子と相部屋になるのが嫌なら私と寮長室に住めばいい。どうする？

壱佳：(どうしよう?)

◎相部屋でも大丈夫！

兄さんの部屋に行きたいな……



「あれ、何か選択肢出てきたぞ!？」

「どうする、一夏?」

そして話が進むと初めての選択肢が現れる、そこをどうするか一夏と一秋が相談する。

「うーん……妹が男と相部屋なんて心配なんだろうな。この子も家族と一緒にの方が楽だろうし……よし、此処は寮長室に——」

と、一般論で言えば真つ当な回答をしようとする一夏だが、それをリナが止めた。

「待って、此処は敢えて別の選択肢よ。そっちの方が絶対に面白い事になるわ」

「え、でも——」

「良いからもう一つの方にしなさい。でないと一直線に兄ルートとかに行くわよ」

「あ、兄ルート?」

それが何なのか一夏には理解出来なかった、だがリナのその言葉を聞いて心当たりがあったのか、箒、シャルロット、鈴が少し引いた様子を見せていた。

「そうか……お前そんなに千冬さんの事を……」

「な、仲の良い姉弟だと思っただけ……」

「だからって肉親同士とかは……ちよつと……」

「何の話だよ!?!ゲームの話だろ!?!わかったよ!もう一個の選択肢にするから!」

自身に掛かるシスコン疑惑(何も間違っていない)を晴らす為にも一夏はもう一つを選択肢を選ぶ。

「そういえば、同じ女の子というのであれば康太さ……氷莉さんは何処に行ったのでしょうか?」

「クロエ、細かい事を気にしてはいけない。というか今も同室のオレ達が言っても説得力ないから」

まず普通であれば同性同士をルームメイトにした方が良いのだが、

ゲームでイベントを盛り上げる為には多少は整合性を無視するという事を知っている康太は軽く説明した、というより現在進行系で異性と同じ部屋で過ごす自分達にそのまま突き刺さっていた。

それを悟ったクロエも相部屋が解消となるのを避ける為に話題にするのを止めた。

◆ 壱佳：私のこと特別扱いしなくていいよ。私もみんなと同じように生活するね！

千尋：壱佳……。

◆ 教師でもある千尋があまり身内を特別扱いすると兄に迷惑が掛かる、そう思った壱佳は寮長室で共に暮らす事を諦め、他の生徒と同じ様に過ごす事を決めた。

「なんか……健気な子ね」

「良い子だな、この主人公」

「なんか……微妙な気持ちなんですけど……」

一応は一秋の要素も入っていると思うのだが、名前が同じ読みをする主人公に対して一夏は内心複雑な思いをするのだった。

そうして再びゲームが進行し、男子と相部屋になるという寮の自室に入る。

だがルームメイトは留守なのか姿が見えない、そう思っていると背後から足音がする。

◆ ???：ツ！お前……。

◆ 壱佳が振り返ると、そこにはシャワー上がりと思われる男が居た。男の方も壱佳が居ると思っていなかったようだが、引き締まった体をした下着姿の男とか普通は通報ものである。

「また新しい方が出てきましたわね。ですがあのような格好など、は、はしたないですわ……」

「なになに、東雲しのめそうじ総司、主人公の幼馴染みで剣道の達人、だそうだ」

その姿を見てセシリアが顔を赤らめるが、康太は冷静にキャラクター表を見て登場した人物が誰か軽く説明する。

そして、当然ながらその登場人物の名前に反応する者が居た。

「ま、まさかこの男……私か!？」

「だろろなあ……苗字からして」

そう、名前から見ても箒がモデルだという事が分かる為、一夏も乾いた笑いしか出てこなかった。

そして箒をモデルにしたキャラクターが出た事で鈴は嫌な予感を覚えた。

◆

セシル：僕はイギリス代表候補生セシル・オーウェルだ。僕は君たちとは格が違う。同じクラスである事を誇りに思ってくれたまえ。

鳳：二組に転校してきた鳳廉韻ファンレンインアル！久しぶりアルね壺佳!!

◆

と、ゲームが進めば如何にも貴公子といった雰囲気金の金髪の青年と肉まんを持った中華風の青年が出てくる。

そんなキャラクター達のモデルもまた分かりやすいものであり、当然ながらモデルとされた者達は反発する。

「ちよつと！何ですのこの鼻持ちならない男は!!」

「中国人馬鹿にしてんのか！アルなんか誰が言うかあああ!!」

と、怒り心頭の様子であったが、セシリア関しては康太がツッコミを入れた。

「でもセシリアって初めて会った時、こんな感じだったよな？」

「あー、分かる」

「あ、あれは最初の頃だけですわ！それに、今では康太さんや一夏さん、一秋さんと同じクラスで良かったと思いますし……」

半ば黒歴史と化している初日の事を思い返し、途端に赤面するセシリア。

付き合いも長くなってセシリアの本当の内面を理解してきただけに、既にあの頃の事を誰も責めようとは思っていなかった、たまに弄ろうとは考えたかもしれないが。

と、一悶着あったところでキャラクター表を見ていた康太はこの時点で大体の主要キャラクターが出揃った事に気付く。

その事を伝えると、リナが此処からが本番ねと言い、そもそもこれがどういうゲームなのか理解していない一夏が首を傾げる。

「そういうええこれって結局どういうゲームなんだ？」

「どういうって、どう見ても恋愛シミュレーションゲームじゃない。主人公の選択肢を選んで、それぞれの攻略キャラと恋愛をしていく、所謂乙女ゲーよ」

「れ、恋愛い!？」

ようやくゲームの趣旨を理解した一夏、だがそれとは大きく動揺した者も居る。

(い、一夏が……わ、私をモデルにしたキャラクターと、こ、恋……!?)

実際には性別が逆転している上に結局はゲームなのだが、恋する乙女の箒と鈴には関係なかった、なおセシリアはゲームはゲームと、取り敢えず様子見をする事にした。

「あ、なんかイベントが——」

「な、なにッ!？」

◆ セシル：この僕がIFの特訓を見てやろう。幸運に思うといい。

◆ 一秋が画面を見ており、イベントの発生を告げると食い入るように箒と鈴が画面を見つめた。

そこではセシルが壱佳に対してIFを教えようとしている場面だった。

「ど、どうするのよ一夏!？」

「え? 教えてくれるって言ってるんだし、そうしようぜ」

「ま、待て! 一夏!!」

とはいえ唐変木の一夏である、これが恋愛ゲームと分かってても能天気な答え、このままだと本当にセシルを選びかねない様子に声を上げる箒。

しかしゲームは別の展開を迎える。

◆ 総司：待て、ソイツには俺が教える約束になっている。

鳳：待つアル！近接タイプの我にするアルよ！

◆ そう、別の攻略対象もまた同じ様に名乗りを上げたのだ。

そうして誰と特訓をするのかという選択肢が現れる。

「うーん、親切心を棒に振るのも悪い気がするしなあ……全員に教えて貰うって事は出来ないんだよな？」

「無理だな。四択の内に、それはない」

と、選択肢を見て頭を悩ませる一夏、その様子を見てすかさず箒と鈴が仕掛ける。

「この優柔不断！先に約束したのは私だろう!!」

「何言ってるのよ！同じ近接タイプのアタシが適任に決まってるじゃない！」

「いや、これゲーム……」

最早本気で自分がモデルのキャラクターを選ぶように誘導する箒と鈴、その様子に困惑する一夏だが、そこにスツと割り込んで来る者が居た。

「でもほら、三人以外に先生から補習を受ける事も出来るよ。誰かを選んだら角が立つなら、先生にすれば良いんじゃないかな？」

「あ、本当だ。サンキュー、シャル」

「ううん、別に良いよ」

「「あーッ!?!」」

此処まで来て自分がモデルとなったキャラクターが存在しないシャルロットであった。

そして言い争っていた二人と同じく一夏への好意を抱いているシャルロットは箒や鈴、そしてセシリアがモデルのキャラクターとエンディングを迎えるくらいなら、せめてそのルートに進まないように誘導しようと画策したのである。

こうしてリアル恋愛事情も絡んだ攻防が、今ここに始まるうとし

ていた。

「これは面白くなってきたわね」

「現実に影響する訳がないのに……さて、茶と菓子でも用意するか」
「お前達、それは性格悪くないか？アレでも自分の弟なんだが……」

なおそんな様子を眺めながら飲み物やお菓子を楽しんでいるのがリナと康太だった。

その中に突っ込んで行くのは面倒だが端から見る分には面白い、そんな二人の様子を見て一秋はため息をつくが、だからと言って本人にも介入していく気はなかった、一秋とて馬に蹴られるのは勘弁なのだ。

その後、アニメを含めやたらと気合の入った戦闘シーンや、勉強会、修学旅行にバレンタインデーといったイベントを迎えていく度に繰り広げられる女の子達の攻防は続いていき、遂にはラスボス戦を迎えた。

全てのIFを破壊しようとする者、だが立ちはだかる最後の敵は、それまで各攻略キャラクターの好感度を教えたりする程度の役割しかしていなかった、主人公壺佳の友人である筈の土藤氷莉だった。

◆
壺佳：氷莉ちゃん！何でこんな事をするの!?

氷莉：ただ隣に居るだけで良かったの。それ以上は望んでなかったの。

壺佳：氷莉ちゃん……？

氷莉：でも気付いちやっただ。私には壺佳ちゃんしか居ないけど、壺佳ちゃんは違う。壺佳ちゃんは皆に愛される人だから……。

壺佳：……。

氷莉：隣に居るだけで良いなんて嘘。本当は貴方の手に触れたかった。貴方の髪に触れたかった。貴方の肌に触れたかった。貴方の唇に触れたかった！

壺佳：氷莉ちゃん、貴方は……。

氷莉：このIFがあれば、届かない筈だった私の願いは叶う。ねえ、壺佳ちゃん……。

氷莉：残るIFは貴方たちの物だけ。この戦いの果てに、全てが決まる。

氷莉：さあ、愛し合いましょう。互いの尾を喰らう蛇のように。そして、私は貴方を、手に入れる!!

◆ 「これが俗に言うクレイジーサイコレスビアンかあ……」

「ゴウ、しっかりしなさい！傷は浅いわ！」

「十分すぎる程に致命傷なんだよなあ……」

今の今まで高みの見物を決め込んでいた康太だったが、最後の最後で自分をモデルにしたキャラクターの所業に、その狂気に大きなダメージを受けて倒れ伏していた。

これには誰も掛ける言葉を見付ける事が出来ず、せめて今のシーンを素早く終わらせる事しか出来なかった。

だが戦闘パートでは氷莉が動く度に壱佳に対する想いを言葉にする為、その度に康太はダメージを受けていく。

結局、戦闘が終わり氷莉の出番が無くなって暫くするまで康太はそのまま倒れ伏しているのだった。

とはいえようやく戦闘も終わり、ラスボスも倒したという事で遂にエンディングを迎える。

それで誰を選ぶ事になるのか、主に攻防を繰り返していた面々は戦々恐々といった様子である。

◆ 壱佳：卒業後、私はIF関係の研究所で働くことになった。代表候補生にはなれなかったけど、みんなと過ごした宝石のような日々はきつと一生忘れない……。

◆ そんな独白と共に大人へと成長した壱佳は白衣を来て資料を手を歩いていく、そしてエンディング曲と共にスタッフロールが流れ始め、そこでどんな結果となったのか明らかになった。

「これはアレね、^{氷莉}誰とも一緒にならない所謂バッドエンドって事ね」

「ええ……あの^{氷莉}子の行動って結局何だったのよ……」

「ま、まあある意味では目的を達成したのではないか？誰のものにもならなかったのだから」

此処までやって、結局誰の好感度も中途半端になった事によるバツドエンドという事実には、これを狙っていたシャルロット以外はなんとも言えない表情をしていた。

しかし――

「なるほどお、誰が一人に絞って攻略しないと駄目なんだなあ」

という一夏の言葉に、普段の唐変木さで色々と苦労し、誰かを選んで攻略するという事のない一夏に対して怒りが湧いた筈、鈴、ついでにシャルロットによって一発ずつ拳が叩き込まれるのだった。

なお、後日このゲームはIS学園側より生徒のプライバシーを侵害しているとして販売中止となり、製品は回収される事となるのだった。

しかし既に売っていた分で回収を免れたものはプレミアが付き、高価で取引される事になったのだという。

なお――

「むう、結局私がモデルのキャラは居なかったのだな」

「ラウラとシャルロットのキャラは追加コンテンツみたいだな。多分、ゲームのシナリオが作られた時には間に合わなかったんだろう」

と、最後まで見て自分のモデルは居ないか気になっただけはいたラウラに、銀髪に眼帯をした軍人風の少年キャラクターがダウンロードコンテンツとして追加されているのを一秋が教えていたりするのだった。

人の革新

69話 高速機動訓練

九月も残すところあと僅か、つまるところIS学園でのイベントであるキャノンボール・ファストの開催が近付いてきた頃、学園でもまた高速機動を教えていた。

「はい、それでは皆さん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

一年一組副担任、山田真耶先生の声が第六アリーナに響き渡る。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能であることは先週いきましたね？それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

そういつて山田先生が手で示した先にはセシリアと一秋、そしてオレが居る。

授業前に声を掛けられていたのだが、各タイプのISで高速機動を行う際の比較にしたいと言われ、引き受けたのだ。

「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備した、オレコットさん！」

初めに紹介されたのはブルー・ティアーズのビット等を機体各部に固定して追加のスラスターとする事で速度と機動性を高めるという強化のなされたセシリアの機体。

「そして通常装備ですがスラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑くん！」

続いて一秋の白式だが、この機体はそもそも追加装備を受け付けようとならない為に通常装備ではあるが、そもそもの機動性が高速機動装備を備えた他の機体とあまり無い為にエネルギーの分配を調整するだけで済ませた機体だ。

「最後に、可変機構によって機動性が変わるといふ特殊なケースという事で、紫藤くん！」

最後に紹介されたオレはガンダムデルタカイ、ではなくリゼルを展

開する。

ガンダムだと性能が過剰なのと、ガンダムデルタカイに二次移行した際に生体の量子化という機能を獲得した事で、他の可変機でも同様の能力を持たせることが可能となり、リリアナのように義肢でなければ扱えないという制約が無くなったのだ。

という訳でジェガンとパーツの共用可能なりゼルがラビットフツト社のラインナップに加わる事となり、その宣伝を兼ねて今回のキャノンボール・ファストでオレはりゼルを使用する事となったのだ。

何しろ今年だけで量産機はジェガン、ストライク・ラファールと第三世代機を含めて二機もロールアウトしている、そんな中で積極的に売る事が目的ではないとはいえ、一応は可変機構により第三世代機扱いりゼルが加わるのだ、インパクトは残しておきたい。

なお売る事になったのはジェガンと大部分のパーツ共用が可能だからという理由だけだ、ぶっちゃけラビットフツト社はストライク・ラファールやダガー系列、アストレイといった機体のライセンス料だけでかなりの利益を挙げている為に積極的に売り込む必要はない、単に世界初の量産型可変機というインパクトを刻んでおくかという目的のくらいである。

一応、このりゼルもまた二機を学園側に提供する事になっている、サブフライトシステムとしても使えるから是非とも役立てて欲しいものだ。

そんな三機がスタート位置に立ち、山田先生が合図として旗を振る。

「では……3、2、1、ゴー！」

高く掲げられた旗が勢い良く振り下ろされた瞬間、それぞれのスタートが点火され各自の機体が空へと飛び出していく。

そんな中でオレのりゼルは変形をする為に他より少し出遅れる事となる、変形の所要時間は0.5秒と短い、それでも出遅れる事に変わりはない。

初めからウェイブライダー形態なら楽なのだが、スタート地点では人型で開始するよう指定されたので仕方がない。

だが動き出してからの速度は他の二人の比ではない、全身に配されているスラスタを後方の一点に集中させる事による爆発的な加速力は先行していた二人を直ぐに捉え、そのまま追い抜いていく。

今回はあくまでデモンストレーション、本番のように火器で相手を妨害するまでは行わない為に純粋なスピード勝負となるのだ。

加えて二人は第六アリーナにある学園の中央タワー外周を周る為に速度を抑えていた、そこをオレは敢えて速度をそのままに突き進む。

何も事故を起こす気はない、多少は曲がるように動いているし、アリーナの端を示す壁に近付いてからは人型に変形した。

そして迫りくる壁に向けて蹴りを放ち、その反動を利用してカーブを曲がっていく、その都合でアリーナ外縁部を通る大回りなルートとなるが、速度を可能な限り落とさないというのと、壁を蹴る際に瞬時加速を行う事で『シャアの五艘跳び』を再現したため最終的にはよりタイムを縮める結果になっている。

そうやって中央タワー外周を周り切れば残りは直線、再びウェイブライダー形態へと変形し一秋とセシリアの二人をぶっ千切ってみせた。

そしてゴール地点に辿り着いた時に一回転ロールを行う、戦闘機などが勝利して帰還した際に空母や基地の上空で行うビクトリーロールという奴である。

その後は人型に変形をして減速、着陸する。

それから少し遅れて一秋とセシリアもゴールまで辿り着き、同じ様に着陸を完了させた。

「康太さん、また新しいテクニクを編み出していましたわね」

「蹴りとスラスタ噴射の合せ技だから、多分セシリアも慣れれば出来るぞ。まあ、ミスするとそのまま壁に高速で叩き付けられる事になるんだが」

「確かに覚えておいて損はないテクニクですわね。でも、あくまでデモンストレーションのこの場でやる必要はありましたの？」

「無い。思い付いたから試しただけだ。今は練習だからな」

「思い付いて即実践という点で大概ですわよ」

それから先程の機動に関してセシリアと話し、呆れられたような顔をされたが、その辺りは可変機としての特性だからな、相棒がデルタカイになった以上は他にも模索していかねければならない。

デルタカイはデルタ系列でリゼルはメタス系列と可変機構が微妙に違うのだが、二つの形態を使い分けるといふ点では変わらない、キャノンボール・ファスト本番までに出来る事は可能な限りで増やしておきたいのだ。

そんな感じで話していると全員の注目を集めるように織斑教諭が手を叩く、当然それに誰もが私語を慎み織斑教諭に注目する。

「さて、高速機動の実演は諸君にも見てもらった通りだ。いいか、今年は異例の一年生参加だが、やる以上は各自結果を残すように。キャノンボール・ファストでの経験は必ず生きてくるだろう。それでは訓練機組の選出を行うので、各自割り振られた機体に乗込み込め。ぼやぼやするな。開始！」

織斑教諭の言うように、本来であれば科目が整備課と分かれる事になる二年生からなのだが、今年是一年生の専用機持ちが多い事から特例として一年生も参加となったのだ。

それというのも今この場に居る専用機持ちがオレ、一夏、一秋の男三人と来てクロエ、リナ、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの七人と計十人も居るのだ、まず例年通りなら有り得ない数である。

その為、専用機持ちちは専用機持ちちのみでレースが組まれている、後他の訓練機で参加する生徒達も殆どクラス対抗の形になっている為、一学期のクラス対抗戦で結局は勝者が居なかった為に放置されていたデザート無料券など、プールされていた景品が出るようになってくる。

なお専用機持ちちは一組に集中しているのでクラス対抗戦には反映されない、そもそも専用機持ちちの存在しない三組とかもあるしな。

さて、織斑教諭の指示で他の生徒達も訓練機で練習を始めたし、オレもオレで新しい戦術機動を練るとしようか、そう思っていたが――

「紫藤、お前は機体調整はあるか？」

「まあ、今回使ってませんが本番ではリゼル用の追加装備を使用する予定です。そのシミュレートを多少は予定していました」

「すまないが他の生徒達の事も気に掛けてやってくれ。初めての高速機動だからな、事故の危険性もある。私や山田先生もそれぞれ訓練機を用意しているが、目は多い方が良い」

「そういう事なら分かりました。シミュレートも本格的にやるのは実際に追加装備を装着してからのので問題ありません。訓練で飛びながら見ておきます」

「すまんが、助かる。他は調整が長引きそうだからな」

「そうやってオレは織斑教諭からの頼まれごとというか、仕事を引き受ける事にした。」

「最近は割りところやって織斑教諭から授業中に頼まれる事が多い気がするが、少し気になるな。」

「そういえば、最近割りところんな事が多いですが、何かありましたか？」
「何か、というよりは教師達の中でお前への指導をどうするか、という話になった事はある。実を言うと、学園祭の時のお前の戦闘記録を見て、お前が並の教師であれば圧倒してしまっていると判断されてだな。加えて授業の方もI Sに関して技術開発を行ったり、設計まで出来る事から必要なかと思いが出ている。私から言わせればお前はまだタマゴの殻が取れたヒヨコといったところだが、お前は先程のように独自で新たなマニューバを編み出す事もある。だから私としても下手に型に押し込むより、自由にさせた方が良いとは思ってる。当然、何か相談があればアドバイスはしてやる。そんなところだな」
「はあ、割りと高評価だったんですね」

「さっきも言ったがお前はまだヒヨコだ、後は経験で成鳥になっていくだろう。後は、誰かに教えるという事はかなり勉強になるぞ。教える相手を見てお前も基本に立ち返る事が出来る。戦技研とやらでも教導するんだろう？その練習とでも思えば良いさ」

「なるほど、分かりました」

「そこまで言われてオレは納得した、意外な高評価はむしろ痒い気もある」

るが褒められて嬉しくはある。

それに戦技研はキャノンボール・ファストが終わってから試験運用を挟んで本格的に動き出す予定だ、その為の準備と思えば織斑教諭の言う事もオレの利になる。

そんな訳でオレは改めて可変機の習熟に努めると共に、それとなく訓練機を扱う生徒達の事も気に掛ける事になったのだった。



リゼルの習熟はそれなりに済んだ、元より量産する段階でサポートプログラムを組む時に試しにサポート無しの状態でどんな機動をするのかテストを行っていたからだ。

ならどんな事をしているのかと言われれば、まず普通はしないマニューバをメインにやっている。

例えばわざと失速させて機体を下降させたり、そこから立て直したり、人型の時にスラスターの配置からどんな機動が出来るのか見たり、わざと中途半端な変形に留めて、そこからどんな動きが出来るのか模索したりだ。

シャンブロ戦の時にデルタプラスがウェイブライダー形態のままで腕だけ変形させてユニコーンを掴み上げたように、何も片方の形態のみでしか動けないという事はないのだ。

特にISにはPICがある、多少は無茶な飛行をしたところで墜落する可能性はかなり低い。

そうして色々試していたのだが、飛び続ければエネルギーは使いし、瞬時加速なんかもどんどん試していただけにシールドエネルギーの残りがかなり減っていた。

この機体はキャノンボール・ファスト用の為にデルタカイなんかとリンクしていないから複数のISコアとのエネルギー共有という真似が出来ない為、一度補給の為に地面に降り立つ。

そしてエネルギー供給設備に機体を接続し、終わるまで暫く待っていた。

「おーい、紫藤くん！ちょっといい？」

すると、そこに声を掛けられた、一組の生徒ではなく二組の冬野雪

菜さんだ。

以前、二組と合同で初めてのI Sの実機訓練の時に同じ班になった事のある生徒で、明るく元気な人だったと覚えている、あの後もその友人の姫島茜さん共々何度か授業で一緒になった事がある。

リゼルの補給が済むまでまだ時間もあるし、オレはその声に応える事にした。

「補給にもう少し掛かるから手は空いてるけど、何かあったのか？」

「うん、実はね。ちよつと操縦について教えて欲しいの。大丈夫かな？」

「まあ、少しだけなら」

「ありがとう！じゃあこっちに来て！」

キャノンボール・ファストでの高速機動に慣れない事からそのコツを教えて欲しいのかと思い、取り敢えず返事をする。冬野さんに手を引かれて訓練機の前まで移動する。

そこに置いてあるのはジェガン・ライトアーマー、学園に提供された機体の中の一機だ。

「みんなー！連れてきたよ！」

「ナイス、雪菜ちゃん！」

「よろしくね、紫藤くん！」

そしてその機体の周りには二組の生徒が何人か集まっていた。

「それで、オレは何を教えれば良いんだ？」

「それなんだけど、スピードを出すのが怖くて……」

「直ぐに壁が近付いてくるから、どうしても全力で行けないよね」

「絶対防御があるって分かってても、ケガはしちやいそうだし」

「なるほど、そういう事か」

その彼女達に呼んだ理由を聞けば、確かに慣れてない者にとっては超音速飛行というものに恐怖を感じるだろうと納得出来た。

何も無い空を真っ直ぐ飛ぶだけなら問題ないが、如何に広いとはいえ第六アリーナではスペースにも限りがあるし、それだけに壁が迫ってくるという恐怖感も増す。

本来なら臨海学校の際に海上でそれらの訓練もあったのだが、その

辺りは例のデビルガンダム軍団の襲来で流れてしまった。

それでも本来ならキャノンボール・ファストは二年生からなので問題なかったのだが、今年は専用機持ちが多くて特別に一年生も参加となった。

うん、臨海学校の件はともかくとして一年生の参加はオレ達にも原因があるな、半数以上がラビットフット社に関係するパイロットだし。

取り敢えず詫びを兼ねてという訳ではないが協力するでしょう、まず安全なラインで超音速飛行を体験させるのが良さそうだ。

「ひとまずこの機体借りて良いか？オレが飛んで、その飛行ルートを同じ速度でなぞるように飛べば超音速飛行を体験出来るようになるから」

「良いよ！同じ機体の方が参考になるしね！」

「んじゃあ、少し借りてくぞ」

なので実際にお手本を見せる為にもオレは学園のジェガン・ライトアーマーを借りて飛行してみる事にした。

基になっているのはジェガンD型、それを軽量化して現在主流のI Sの形に落とし込んだのがライトアーマーだ。

とはいえ飛行してみte感じたのは鈍いという感覚であった。

「重いな……」

この世界に來た時、オレが纏っていたのはジェガンA型だった、それが一次移行してD型に、それをベースにラビットフット社はジェガンを量産してきた。

だがかつて乗っていた機体を軽量化した筈のこのライトアーマーは遅く感じられた、それは強化したR型に乗り換えた事も理由ではあるが、二次移行を果たした相棒ガンダムはより速度に特化しているからというものもあるのだろう。

だが何よりもオレの反応速度に追従し切れていないというのがあった、動こうとしても多少のタイムラグが発生するのだ。

それ等のズレと摺り合わせ行おうにもカーブが迫ってきていた、また壁を蹴ってコース修正して、お手本となるコースは改めて飛び直す

かと思った時、ふと思い付いた事があった。

『シヤアの五艘跳び』を行うには足場が必要となる、だがその足場を空中に出現させる事が出来たらどうなるだろうか。

例えば格闘戦では斬り結ぶにしても、地に足をつけた方が踏ん張りが利く、そして格闘技の技を宇宙でも繰り出す為に対処法を考えたガンダム作品がある。

ガンプラをメインとするビルドファイターズトライに登場したビルドバーニングガンダム、それが宇宙マップでやった事を再現するにはどうすれば良いか、あれは足元にプラフスキー粒子を固めていたから出来た事だ。

それをISでやるにはもうすれば良いか、直ぐにシールドバリアを利用する事を思い付いた。

普段は被弾と共に自動的に展開するようになっていてそれを任意で展開し、それを足場とする。

設定を変更し、シールドバリアの展開を可能とする、蹴りにどれだけ耐えられるか分からないから最大出力で行動を起こす一瞬だけの展開にした。

そして実際にやってみると、本来は何もない筈の空中で確かに何かを踏みしめたような感覚が返ってきて、オレは壁に迫るより遥かに早い段階で壁蹴りを行った。

「ハハッ、なるほどー」

出来ると分かれば次いで改善と応用だ、最大出力で展開する必要はなかったので必要最低限の出力でシールドバリアを展開する、それが終わればこれをどう活かすか、オレはコースを飛行する事を忘れてこの機動を試した。

三角跳びのように左右に揺れるように跳び跳ねたり、宙返りしつつ上に向けて足場を形成する事で地上に向けて跳ねたり、色々だ。

そして分かった、これを利用すれば急な方向転換と急加速が両立出来る、流石に速度によっては正反対に動くのは無理だが、横や斜めに向けて移動する分には失速は少なく済むだろう。

空中を縦横無尽に駆け回る事が出来る事から、例え相手が進路を予

測して攻撃を仕掛ける偏差射撃をして来ても、その予測を空中でのジャンプという動きで読ませない事も可能だ。

なおこの後調子に乗って暫く空中ジャンプの練習をしてすっかりコース取りの予定を忘れてしまった事で、思い出してから戻ってきたオレは班の全員に怒られたりするであった。

70話 砲弾よりも速く

全ての授業を終え、生徒達はそれぞれ部活動などに取り組んでいる頃、I S学園に存在する円形のアリーナ、そこでは二機のI Sが戦闘を行っていた。

黒と金の機体、それぞれ装備に差はあるが基となっている機体は同じ物であり、またパイロットの技量にも大きな差はなかった。

それぞれバンシィ・ノルンを駆るクロエとフェネクスを駆るリナ、共にラビットフット社に所属している二人が戦闘を行っているのは自分達の技量を向上させる為である。

二人は康太の支えになろうとしていた、だが既に康太の技量と機体は遥か高みに至っており、下手な技量のままでは逆に脚を引つ張る事になりかねない。

何より文化祭の時に何も出来ずに動きを封じられた経験がより強さを求める原動力となっていた。

それもあり、二人でこうしてぶつかり合って訓練をしていた。

全力でぶつかり合う事もあれば、条件を絞って普段とは違う動きを取り入れたり、全く別の機体を使用したりと、様々な訓練を行っていた。

それもあり二人の技量は確実に向上している、だが康太が交戦した織斑マドカとの戦闘データを基にしたシミュレーターでは未だに勝てずにいる。

再現のみでのデータにも勝てない以上、本物に勝てる道理はない、加えて康太との交戦により直撃を喰らっただけにマドカもまたより腕を磨いているのは明らかである。

それでもリナはオールレンジ攻撃に対して反応出来るようになってきていた、完全に回避するにはまだまだ遠いが動きを予測出来るようになってきたのだ。

対してクロエは反応さえ出来ない事もあった、これは二人の機体操作の傾向の違いが生んだ差であった。

リナは機体を操る際に感覚的なものに頼る事が多く、クロエは理論

的なものに頼るのが多い。

仮に感覚派、理論派と分類した時に前者は一夏や鈴が挙げられ、後者はセシリアやラウラが挙げられる、どちらも一長一短であり、感覚派は急なアドリブに強いがその時の調子に左右される事があり、理論派は安定しているが咄嗟の判断が遅いという傾向が強くなる。

なお、これに康太を当てはめると、始めは理論派であったがニュータイプ能力に目覚めてからは感覚的な動きが目立って来ていたりする。

そして、今回の二人の戦闘ではリナの方に軍配が上がった、クロエが自身に向けて放たれたハイパー・バズーカを回避したのだが、その回避した先に置くように放たれたビーム・マグナムの直撃によってシールドエネルギーが消し飛んだのだ。

その後、アリーナは消えていき、二人は休息と反省の為にシミュレーターから一度出てくる。

水分補給などを済ませつつ、一休みしてから口に出るのは先程の戦闘、特に止めとなった最後の攻撃に関してだ。

「あの動き、コウタさんが時折見せる物と同じでした。リナさんはどうやって私の動きを予測したのですか？」

「んー、やったのも撃ったのも、全部咄嗟の無意識だったのよね。こう、当たるって思ったから撃ったっていうか、自分でも良く分からないのよ」

最後の決め手となった動き、弾速の遅いバズーカに相手の注意を向け、回避した先に本命を置いておくというのは康太がイライジャ・キールの必殺技を再現した物であり、数ある戦術の中でも割りと使用頻度の多い戦法であった。

しかし使うには相手が回避に専念するタイミングや回避する向きと距離を正確に予測する必要がある、使い熟すにはそれなりの観察眼を要する技である。

例えば相手が咄嗟に攻撃を回避する時、右に避ける癖を持っていたとしよう。

このような相手と相対した時、戦闘中にその癖を見抜き、相手の意

表を突き、動揺を誘ったところで相手に攻撃を見せ、回避に移った相手に偏差射撃で本命を叩き込む、相手を完全に理解してその動きを支配下に置かなくてはならないだけに、難易度は高い。

何度も模擬戦を繰り返した相手なら兎も角、所見の敵を相手に使うには厳しい技である、重力下で動きの遅いモビルスーツ相手ならまだしも、空中で三次元機動を得意とするI S相手には更に至難の業なのだ。

それをリナはクロエの動きを完全に理解した訳ではないにも関わらず、直感だけで最適解を導き出したのだ。

同じ事をやれと言われても再び出来る訳ではないが、そのようなアドリブに対する強さもまた感覚派の強みであった。

「勘は大事にした方が良いとは言われましたけど……」

「ゴウの場合、逆に勘がとんでもない事になってるのよね」

そう言って二人が思い出すのはニュータイプ能力によって殺気に対して敏感になった事で機体のセンサーより早く居場所を特定して来たりする康太の事だ。

その康太曰く、勘とは普段は意識せずに切り離しているが体が取得している様々な情報から脳が理解する前に発する警報のようなもの、という事らしい。

故に勘の鋭さとは直感的に最適解に到達する能力の高さと言える訳だ。

なお余談ではあるが、そのような持論を展開した本人は現在、漂流物として流れてきたガンダムシリーズの音楽を聞き、世界に布教しようとする歌い、演奏し、撮影をしていたりする。

そんな中で歌からとある機体を連想し、そこからまた新武装と共に新機体の開発をしていたりするのだが、此処では割愛する。

「まあ、私ってそこまで色々考えるのって苦手なのよね。だから取り敢えずはこのまま突っ走るわ。兎にも角にも訓練に訓練に訓練！まづ基本から鍛えていかないとしようがないものねー」

「そうですね。一先ずはもう一戦、模擬戦を行ってから夕食にして、また模擬戦をしましょう。次は勝ちます」

「良いわねーけど、次も勝つわ！」

リナは自分が感覚派だと理解している、だからこそ多くの経験を積みめば咄嗟の動きは経験を基にした最適解を取れるようになる、そう信じている。

それに加えて沈み込むのではなく顔を上げて真つ直ぐに突き進める精神こそがリナの強さだと、クロエは感じ取っていた。

しかし、だからこそ、理論派であり安定感こそが優位性となる自分の強みとは、高みとは何なのだろうか、クロエはまだ答えを見付けられずにいた。



キャノンボール・ファスト当日、見事なまでの快晴となった青空の下、IS学園の近くにある市営のレース場は満員となっていた。

キャノンボール・ファストはこれまで行われてきた既存のレースとは違い、絶対防御を持つISだからこそ可能な武器による妨害行為が正式に認められているレースだ。

故にレース運びに詳しくない素人目にも派手で、なにより空中を駆け抜ける姿は多くの者を魅了する。

それが入場者数に繋がりが、事前予約のチケットはとつとくに売り切れ、僅かな当日券を求めるも手に出来たのはほんの僅かであった。

また、それとは別口で専用の観客席が設けられ、そこには世界各国より訪れたIS関連企業の人間や軍属の人間、政府関係者の姿も見られる。

それぞれ優秀な人材を探したり、他国の新型機の情報を得ようとするなど、目的は違えど官民間問わず多くの人間が注目していることに間違いはない。

そして今、IS学園二年生の最後のレースが終了したところであった。

「二着はサラ・ウエルキンか。あの時よりも更に動きが洗練されてるな」

「知ってるのか、康太？」

「夏休みにイギリスに合同訓練しに行った時にな。あの時はセシリア

とイギリス王女の三人がかりで戦闘して、機体が中破まで追い込まれたよ」

「へえ、そんな事があったのか」

そんな中で見事一着でレースを制したイギリスの代表候補生の姿を見て康太は夏休みでの事を思い出し、一夏はその言葉に感心する。

そして今のレースが最後なので次は一年生専用機持ち達の番であった、その後に訓練機でのレースと三年生のエキシビジョンマッチに続く、特に三年生は外部に自身の実力をアピール出来る数少ない機会だけに他の学年とは空気が違っていた。

とはいえ一年生の内はまだそこまで鬼気迫る雰囲気はない、勿論代表候補生として国家の威信を背負ってはいるが、康太などは勝利よりも新型機としてリゼルをお披露目して来場している各国の軍部や政府関係者にプレゼンする事の方に重点を置いていた。

尤も、そのためには一位という分かりやすい実績があった方が良いのだが、機体性能を見せ付ける事も忘れていない。

出番となり、それぞれピットからコースに移動する専用機持ち達、その最後方から康太もまたリゼルを展開する。

しかし以前見た装備とは変わっている事にクロエとリナを除く専用機持ち達は動揺していた。

「紫藤康太、リゼル・ハーフディフェンサー、出撃る！」

機体本体に大きな変わりはなく、腰にブラスターが増設されている以外の見た目はウイングユニット装備のリゼルと似ていたがバックパックが大きく変わっていた。

肩幅までの辺りにはボックス型のコンテナがあり、背部には大型のビームサーベルが備えられている。

そして両端には先端部にビーム砲を備えた大型のブラスターを備えた主翼が伸びていた。

これはリゼルの二つのディフェンサーユニットを組み合わせた物で、前衛向けのaユニットではミサイルを撃ちきった後が重しとなり、後方支援向けのbユニットでは二門のメガビームランチャーは取り回しが悪い。

故にaユニットの中央部分とbユニットの端のブースターを組み合わせた形で康太が組んだのだ、そもそも僚機が存在しない為に連携を考慮せず単機での戦闘力を伸ばす目的で作成されたのだ。

そんな機体を駆り、事前のくじ引きで決められた順番に従い右端に立つ康太、コースには左右へ曲がりくねるように幾つものカーブがある為に完全に不利という訳ではないが、最初のカーブが左折になっている為に距離が少しだけ長くはなっている。

しかし康太は気にせずにスタートの時を待つ、それを示す赤ランプが一つずつ点灯していき、三つ点つた次の瞬間、緑色をしたランプが一気に点灯した事でキャノンボール・ファストの幕が上がる。

それと同時に、参加している全ての機体からの攻撃が康太へと集中した。

「お前ら後でぶっ飛ばす！」

「まあこうなるよな」

誰もが事前を示し合わせた訳ではないが、初見殺しの技や機能を多用してくる康太が見慣れない装備の機体でやってきた、その事実だけで全員が警戒するのは当然であった。

結果として九機のISからの集中砲火には流石の康太も抜ける事は出来ず、頭を抑えられた上に回避する為にコースを逆走し始め、その姿がコーナーの向こう側に消えていくまで続いた。

それだけのリードを得て全員が動き出す、中でも動きが一番早かったのは龍咆の射程距離の関係で早めに攻撃を打ち切った鈴であり、他の者達も康太に向けて牽制はしつつも後を追うように前進する。

兎に角まずは速度を稼ぐと誰もが攻撃を控え、最初のコーナーを曲がり、直線を利用して次のカーブを曲がれるまでに加速、そのカーブの次から本格的に動き出した。

一夏もまた先頭より少し下がった辺りで前に出るタイミングを図っている。

その機体はいつもと違い、フェネクスと同じ仕様となっておりユニコーンガンダムペルフェクティブリティイと呼ばれる物になっており、クロエのバンシイもまた同じ仕様となっている。

「先に行かせてもらおうよ、一夏!」

「シャルか!」

そこに後方より追いついてくる機体、シャルロットのストライク・ラファールが現れ、スペキュラムストライカーの翼下に備えられたミサイルポッドから無誘導ロケット弾やミサイルが放たれる。

「この程度なら!」

だがこれまでの戦いで成長してきた一夏は、この量なら捌ききれると右手にビームガトリングガンを呼び出し、後ろに向けて発砲する。

高速機動中であり、後ろから追いつく形のリケット弾やミサイルが着弾するまでは少しばかり余裕があり、弾幕を展開する事で一夏は次々にそれらを迎撃していく。

だが迎撃の方に気を取られた為、直線が終わり次のコーナーに入ろうとしている事に気付くのが遅れ、慌てて曲がろうとするがタイムイングがズレたことで外に膨らむ形でロスしてしまう。

その間にシャルロットはコーナーの内側を抜けていき、先頭争いに加わろうとしている。

レースだけでなく相手への妨害と、それらの対処、やるべき事が多く、一瞬足りとも気を抜いていい時はないと一夏は意識を改める。

それに対して先頭集団、鈴を先頭にラウラが追い、その後ろにリナの三人が固まり、少し後ろをシャルロットが追いかける展開となっている。

「折角のリード、このまま逃げ切らせて貰うわ!」

まだ油断は出来ないが、コーナーが続けば射線が通らなくなる為に中段で混戦となるよりコース取りのみに集中出来るという状態を維持しようと鈴が粘る。

元より射撃武装の少ない甲龍である、撃ち合いになれば不可視の砲弾とはいえ、今回は装甲が強固な機体が多い、体勢を崩そうにも、推力が高ければ無視して突っ込んでくる可能性もあるだけに先頭を突き進む事を選択した。

そしてコーナーを抜け直線に入ったところで瞬時加速により更に距離を稼ごうとする、その目論見は成功し再びコーナーに入ろうとし

た瞬間、強力なレーザーによる一撃が鈴を襲う。

「くっ、セシリアー！」

「あら、外してしまいましたわね」

直前に気付いた鈴が身を振らせて回避したことで直撃は免れたが、セシリアにそこまで気にした様子はない。

当たれば御の字、元より鈴の体勢を崩す事を目的として直線に入ったところで次のコーナーに入ろうとしていた鈴を素早く狙撃したのだ。

そして、体勢を崩した事で鈴は失速し、その隙を突いてラウラが先頭に立つ。

「っつて、速っ!?!」

「この機体、重装型と侮って貰っては困るな」

そんなラウラは普段のフルアーマーシルヴァ・バレットから、フルアーマーとなる武装を外し通常のシルヴァ・バレットの状態でこの場に参加していた。

重装型である為に鈍足に見られるかもしれないが、その分だけ大型のバックパックより生み出される推力も大きいのだ。

それに加えて正確な操縦技術を誇るラウラの技量が合わさる事で多少不利に思われる状況であっても他の機体に劣らないだけの力を見せていた。

「行かせないわよー！」

だがそれを阻もうとリナがアームドアーマーDEの先端にあるメガキャノンとビームマグナムによる高火力攻撃を仕掛ける。

余波だけでも損傷を受けかねないそれを鼻先に立て続けに放たれたらウラもリナに対処しようとし、左腕のシールドを向ける。

そこに備えられているのはシルヴァ・バレットの原型機であるドーベン・ウルフのビームランチャーをショートバレル化した物である、ビームマグナムには劣るものの十分な威力のビームが放たれ、リナに迫る。

それをアームドアーマーDEを向けてフィールドで防ぐリナ、そんな二人が争っている中をシャルロットが潜り抜けようとするが、そ

の動きに気付いたらウラが動く。

「させん！インコム！」

「流石に気付かれるよね」

オールレンジ攻撃を可能とする有線式のビーム砲、それがそれぞれ二つの方向からシャルロットを狙い、そちらに気を取られた瞬間にシルヴァ・バレットの右手が射出される。

インコムと同じく有線式ハンドと呼ばれる武装であり、その手にはビームサーベルが握られ、そのままシャルロットに斬り掛かる。

それを対ビームコーティング処理が施されたシールドで受け止めるシャルロット、そこにインコムからのビームが放たれようとするが、高速切替で呼び出したショットガン、レイン・オブ・サタデイで素早く撃ち抜き無力化する。

一瞬の攻防、だがそれにより完全に全員の脚が止まってしまった事で後続からの集団が追い付いてくる。

先行しつつ、足止めとしてハンドグレードを後方にばら撒いているクロエ、それを必要最小限の射撃で切り抜けるセシリアと散弾バズーカとビームガトリングガンによって強引に突破する一夏、最後方で斬り結びながら前に出るタイミングを虎視眈々と狙っている一秋と箒だ。

脚が止まってしまった為に後ろから追い上げる形で速度の乗っている後方集団の方が有利、直ぐに加速に移らなければあつという間に追い抜かれてしまうと判断した先頭集団は戦闘を切り上げて加速に移ろうとする。

だがそこにビームが飛来する、完全に直撃する軌道で放たれたそれを防ぐためにも、加速を止めてシールドなり回避なりを選ばなければならなかった。

そしてビームが襲ったのは先頭集団のみではなかった、追いつこうとしている後続にも一拍遅れて飛来し、同じように防御に回った事で足が止まる。

最後方からの射撃、それを理解した全員が攻撃してきた者の正体を悟る。

「康太！」

「もう追いついてきましたのね。ですが、可変機であれば弱点は分かっていますわ！」

かつての模擬戦に於いて、可変機は飛行形態の速度こそ驚異的ではあるが武装を腕で保持するという事が出来ない以上、射撃の際には武装を固定している部分を真正面に向けなければならないという事をセシリアは見抜いていた。

今回も同じ、初撃こそ反応が遅れたが、カウンターを狙うことが一番的確な攻撃のチャンスと見ている。

そして武装を向け、誰かを狙おうとした瞬間にセシリアは引き金を引く。

放たれる高出力のレーザー、それは変わらず康太の駆るリゼルを撃ち抜く直前、その姿が上へとズレた事で空を貫く。

「なっ!?!」

基本的に可変機のスラスタは後方へ向く事で爆発的な加速力を得ている、姿勢制御用のサブスラスタは存在するが、それも機体を大きく移動させるだけの推力はない筈だった。

ならばどうやって、セシリアが次に見たのは戦闘機然とした姿から足を生やしたりゼルの姿であり、脚部のメインスラスタからの推力で上へと移動したのだと理解した。

部分的に変形する、そんな予想外の手段で回避した事に誰もが意表を突かれ、そのままリゼルは高度を落としつつ地面を滑るように進んでいく。

バックパックのスラスタは後ろを向いており、その推力は前へと機体を押し進め、時として地面を蹴る事で左右への瞬発力を確保する、咄嗟に手に持った射撃武器で攻撃を加えるが、その尽くが当たらない。

点による攻撃はまず当たらない、面を覆う攻撃も最低限の動きで迎撃され、ガトリングによる連射は追い付こうとした次の瞬間には側宙によって全く別の場所に移動される。

まるで人型と戦闘機のいいとこ取りのような動きに誰も対処し切

れずにいる中で、リナだけは反応が違っていた。

「まさか本当に実現するなんて!」

「知っているんですか、リナさん?」

「ええ、前に可変機の勉強で戦闘機の映像を見ていたコウに、それなら良い物があるって勧めたのよ。そう、マクロスを!まさかバルキリーの三段変形を再現してくるとは思わないわよね、アハハハッ!」

『笑ってる場合か!』

リナの言うマクロス、バルキリーとやらが分からないまでも、そこからヒントを得た康太が更に予測困難な動きをするようになった原因という事は分かった為、全員の声が綺麗に揃った。

そしてそんなやり取りをしている間にも康太は距離を詰め、デイフエンサーユニットに装備されているコンテナより大量のマイクロミサイルが放たれる。

距離が詰まっている中でミサイルによる弾幕、一夏やクロエといった機体に頭部バルカンが備わっている者達は咄嗟に弾幕を張り迎撃していく。

撃ち落とせなかった物はシールドを使用し、それも無い者はシールドバリアにて防ぐ、幸いにもミサイルが小型だった事から炸薬量は少なく大きな損傷を負う事はなかったが、視界がミサイルの爆炎に包まれた瞬間を狙いウェイブライダー形態に変形したりゼルが間を抜けて全員の前へと飛び出した。

「しまった!」

「お先に!」

ミサイルによる攻撃は目眩まし、それに注意を集めた上で前へと抜け出す事が康太の目的だった。

そして一度離されてしまえば速度で人型の機体を上回る可変機であるリゼルに追い付くのは不可能に近い、全員が康太を追い、その背へと攻撃を仕掛けるが推力を全開にしつつ壁を蹴って無理矢理にコーナリングしていく康太の姿は直ぐにカーブの向こう側へと消えていった。

これで追い付くのは不可能、康太を止めなければ周回遅れで待ち構

えて完全に機体を破壊するしかないが、そこまでやる程に勝利に執着している訳ではない。

むしろアレは特殊過ぎる事例という事にし、二位の座を掴む方が現実的と判断した事でレースは再開される。

足が止まった分を取り戻すために加速し、自身より先に進もうとする相手には妨害を、独走状態の康太との差は開くが、そこはもう諦めた。

そして、そんな一人旅をしている康太だが、既にゴールを過ぎようとしていた。

このレースは全部でコースを三周するようになっていたのだが、独走状態になれた事でこのまま全員を周回遅れにしてやろうかと考えていた時、康太は直感のままに機体を操作、ウェイブライダー形態から変形し人型になると脚部を前に向けてスラストを全開、脚での瞬時加速をも利用しての無理矢理な急ブレーキを掛けた。

ゴールを目の前にし、二周目もあるということにも関わらず不自然な減速、その動きを見ていた観客達が疑問を抱く間もなくリゼルの目の前を上から通り抜ける火線があった。

「チィッ!!」

即座に残っていたミサイルを発射、撃ち尽くしたコンテナをパージし、左腕のシールドに内蔵されているビームキャノンを三連射、バツクパツクのビームキャノンも同じく連射していき、それらは全て先程のビームが飛来してきた康太の頭上へと向かっていく。

コンテナに半分残っていたマイクロミサイルは十を超える、だが網目のように張り巡らせたビームにより迎撃され、康太が放ったビームは回避され、またはシールドに受け止められる。

だが康太は相手がそれらの攻撃に対処している間に上昇する、全ての攻撃を捌き切った敵もまた同じように降下しながら迎え討とうとしている。

リゼルの右手に装備されたビームライフルの先端より出力されるビームサーベルを薙ぎ払うように振るい、相手もまた左腕のシールドより出力した大型のビームサーベルで横薙ぎにする。

互いのビームサーベルをシールドで受け止める形で鏝迫り合いになり、二人の視線が交差する。

「織斑マドカアアアアアッ!!」

「紫藤康太アアアアアッ!!」

通信などは一切使わず声のみでのやり取り、二人の間でのみ通じたのも束の間、互いに相手の横腹へと全く同じタイミングで放たれた蹴りにより体勢を崩し、次の瞬間には即座に距離を取り体勢を立て直す。

その際に康太は身に纏っていたリゼルを解除し、デルタカイへと乗り換える。

マドカの駆るプロヴィデンスに対抗する為に二次移行を果たした愛機、かつての文化祭での雪辱を晴らすまたとない機会であった。

そこまですてようやくスタジアム内では警報が鳴り響く、所属不明、正体不明のISの乱入、それが選手の一人である康太と戦闘状態に入った。

競技ではなく本物の戦闘、平和に慣れきった日本に於いて遠い世界の出来事のように感じられていたそれが目の前で繰り広げられる事に観客達はパニックを引き起こす。

それを視界の端に捉えるが康太にはそれに対処している余裕はない、右手の武器を威力と射程のあるロングメガバスターから陸戦型のビームライフルに換装し、左手のシールドにはメガシンキヤノンを装備し、油断なくマドカの動きを注視していた。

「康太!」

そこに康太の背後より他の専用機持ち達も集まってくる、エネルギーの総量こそ減っているものの、九機という数は決して無視出来るものではない。

「流石に一人でこの数は厳しいわよね、M。約束通り、事前のプランで行くわよ」

だがそこに一機のISが降り立つ、プロヴィデンスの隣へと降りてきたその機体は黄金の装甲を持つ機体、ゴールドデン・ドーンであった。「待て、スコール。この程度の雑魚共など、何の障害にもならん」

「確かに貴女の実力ならそうかもしれないけど、紫藤康太を相手取りながらそれが出来るのかしら？」

かつての戦闘では足手まといとなったオータムが居たとはいえ、最終的にはその場に放置して全力で落とすに掛かり、痛み分けに終わっている。

加えて今回は康太の機体が二次移行を果たした事で圧倒的に機体性能が向上している、そこに歯牙にも掛けない程度の実力とはいえ九機もISが居るのだ、スコールの言葉に即座に反論は出来なかった。その沈黙をスコールは肯定と受け取った、その機体の右手には本来の武装ではない、大型の杖のような物が握られている。

何か仕掛けてくる、それを感じ取った全員が攻撃を仕掛け、それを阻むようにマドカがスコールの盾となり、その隙にスコールは杖を起動させる。

「さあ、黄金の王の前に平伏しなさい！」

「まさか!? 全機センサーを切れ! 奴を視るな!」

黄金の王、その言葉に反応した康太は周囲へと警告を発するが、既に時遅く杖からは光が放たれる。

「うっ!?!……………あれ、何ともない?」

その光に対し全員が腕などで顔を覆うが、その光が消え去った時、機体に異常は見られず、一体何の意味があったのかと康太以外の誰もが不思議に思った。

だが次の瞬間――

「何だ!?! 機体の制御が!?!」

「お、落ちる!?! うわあああああつ!?!」

――全ての機体が制御を失い、高度を維持する事ができなくなった事で地上へと落下を始めるのだった。

71話 人の革新

「何が起きた!？」

制御を失い墜落していくIS、それ等を見ながら管制室に居た千冬は未曾有の事態に対し、まずは正確な情報の把握に努めた。

「分かりませんが!ですが、全てのISの駆動系などにエラーが出ているようです!生徒達の方はバイタルデータに異常なし、機体の保護機能は無事です!」

「動きだけが封じられたという事か?」

それに対し、各専用機の状態をモニターしていた真耶の報告から、敵が何らかの手段でISの動きのみを封じたのだと理解した。

管制室に設置された大型のディスプレイに映し出されている二機のIS、一機は以前に報告を受けていたプロヴィデンスだが、この状況を引き起こした黄金の機体にはどうしても警戒を強めなければならなかった。

だがその黄金の機体に対し攻撃が加えられる、シールドに接続された二門のガトリングガンから実弾を発射しつつ、右手に握ったビームサーベルで斬り掛かる機体、康太のガンダムデルタカイだ。

「紫藤は動けるのか!？」

「は、はい!紫藤くんの機体だけはエラーが発生していません。ですが、回線が閉じられています、此方からの呼び掛けに応じません!」

「回線を?どういう事だ?」

現状で戦闘可能であり、また敵が謎の光を放つ直前に何らかの警告を発した康太は確実に情報を持っている、それだけに可能ならば直接通信し敵の攻撃に対する情報を得たかったが、それが出来なかった。

ならば外から分かる範囲で分かる事はないか千冬は目を凝らす、とはいえISの戦闘は高速戦闘だ、あつという間に立ち位置が大きく変わり、静止する事などは殆んどない。

それでも世界最強としての眼は普段とは違う違和感を捉えた、それは撃ち合いを得意とする康太が今は格闘戦に持ち込もうと動き、また射撃も牽制などにしか使っていないという、普段の康太とは真逆の動

きをしている事だった。

加えて、回避する時も必要最低限の動きに抑えている普段とは違い、大きく保険を取っているかのように見える動きがあったのだ。

そして一番の違い、それは全身を装甲で覆うタイプの機体にも関わらず、頭部のみ何も身に付けていないという姿だ。

頭部は人体にとって弱点であり、それだけにISも保護機能をそこに集中させる、僅かな負傷も許さないようシールドバリアもエネルギーを多く割り振られており、康太はそれを軽減する意味でも頭部には何らかの装甲を装備する事を好んでいた。

それを投げ打つてまでも非装甲にする必要性、それに対して千冬はまさかという思いを口にした。

「もしや、有視界戦闘しか行えないのか？」

頭部を全て覆えば当然肉眼で敵を捉える事は出来ない、その為、モニター等を介してセンサーが得た外の情報をパイロットに表示するのが全身装甲フルスキーンの基本的な方式だ。

だからこそ今、センサーが使えない為に肉眼で視認しようとしているのではないか、千冬はそう考えた。

そしてそれは正しかった、自身を狙うドラグーンの攻撃を回避し、エネルギー切れで補給に戻った瞬間を狙い康太は通信を繋げて来たのだ。

『通信可能な全機に通達！敵の攻撃はミダス・タッチ・フラッシュシステムだ！あの光が一定の明滅パターンを取る事で、それをセンサーが読み込むと機体に対して運動プログラム停止信号を受けたよう誤認させるコンピューターウイルスだ！QRコード、その発展型だと思え！』

告げられたのは敵機の詳細、何故他の機体が動きを封じられ、康太だけが無事なのか、そして動けない以外は何の異常も起きていないISへの答えだった。

『此方はウイルスの感染を防ぐ為、センサーを始め全てをシャットアウトしてる。故に、通信も一方的に送信してるだけだ』

千冬は真耶を見た、通信について確認すると確かに送信だけしてい

るらしく、此方の通信を受信はしていないようであった。

『ワクチンプログラムを開発している時間はない。対抗策としては——クソツ、二つの眼と——フリツカー、融合頻度を——』
恐らくは切り札を見破られたからだろう、康太に話をさせないよう
に攻撃が苛烈なものになっていく。

そして、康太もまた回避する事に集中した事で自然と通信が途切れ
た。

「クツ、紫藤は何を伝えたかったんだ？」

眼とはセンサーであろう、それを二つ用意するという事は分かっ
た。

だが問題はそれに続いたフリツカー融合頻度だ。

どのようなすれば敵のシステムを突破出来るのか、数少ないヒント
から導き出すしかなく、また康太が通信をしてくるのを待っている訳
にはいかない。

今はピットに生徒が使っていた訓練機がある、それを教員が使い戦
線に加わる事が出来れば康太の負担はぐつと楽になるのだ。

だから千冬はその手の技術の専門家に託す事にした。

「整備班、今ので何か分かるか？」

『えーっと、二つの眼はセンサーを二個って事ですよね？で、フリツ
カー融合頻度ですが、フリツカーはテレビとかのモニターのちらつき
現象で、融合頻度はそのちらつきを認識する能力です。なので、恐ら
くはセンサーを二つ載せて、それを絶え間無く切り替える事で敵の光
を途切れ途切れに捉えて無力化するんだと思います』

「それは確かか？」

『光で送られてくる情報を全て処理したらウイルスとして完成するな
ら、一部を捉えるだけなら無意味な情報として処理可能かと』

「よし、直ぐに取り掛かれるか？」

『まず一機、急ごしらえですが二十、いや十分で仕上げてみます！』

普段整備課で教鞭を執る者に康太からの情報を全て話し、そこから
推理して貰った。

それが通用するかは不明だが、試さない事には何も始まらない。

そのまま戦力として利用可能ならば続けて別の機体にも同様の処
理を施せば良い、問題はそれとは別のところだ。

「何とか耐えろよ、紫藤」

◆ 敵との交戦を続ける康太が、それまで持ち堪えられるかだった。

苛烈極まる攻撃に曝される中、康太は必死に機体を操り続けてい
た。

マドカの駆るプロヴィデンスは拡張領域より予備のドラグーンを
取り出し、それぞれが攻撃と補給を行う事で常にオールレンジ攻撃を
可能とされていた。

それだけではなくゴールデン・ドーンを駆るスコールは腕部より火
球を放ちマドカの攻撃の穴を塞いでいく。

時としてシールドを用い、辛うじて存在していたスペースにて凌ぐ
康太だが、連携が取れてきたのか徐々にその穴も無くなってくる。

早々に手を打たなければ詰む、そう頭では理解している康太だがど
うしても攻め込むタイミングが掴めずにいた。

「このっ！」

「フッフ、無駄よ」

何より状況を打開するのに一番の障害となっているのはゴールデ
ン・ドーンに搭載されている防御兵装である『プロミネンス・コート』
だった。

現状、ミダス・タッチ・フラッシュシステムの影響から逃れる為に
康太はセンサーを利用した射撃が出来ず目測と経験による勘のみで
照準している。

それを補う為に弾をバラ撒くメガ・マシン・キャノンや散弾バズー
カといった兵装を利用しているのだが、それは一発当たりの威力が低
い為にゴールデン・ドーンの防御を突破出来ずに居た。

加えてマドカを倒すにはセンサーが無い状態では近接戦闘しか手
が無く、甘い照準では難なく避けられて終わりだ。

プロミネンス・コートを突破する為に火力のある攻撃、ハイ・メガ・
キャノンやビームマグナムといった武装は溜めが必要であり、その一

瞬さえもマドカの猛攻が赦さない。

ほんの一瞬、それだけの隙があれば打開策はある、ドラグーンの制御とBT粒子の偏向射撃の制御、その二つを同時に制御し続けるにはかなりの集中力が必要となり、それは長くは続かないと康太は見ていた。

だから相手の動きが乱れるのを待つ、康太とマドカの根比べが此処に始まるのだった。



「くっ……うう……ハア、ハア……どうにもならないんですの？」

レース場の地上、誰もが機体を動かそうと奮闘するもパワーアシストの切れたISは腕のみでも数十キログラムはある為に腕を持ち上げる事さえ出来ずに居た。

手足の一部のみに装甲を持つ者でさえその状態なのだ、全身を装甲で覆われている一夏などは身動きさえ取れずに居る。

その中でもセシリアは落ちた際に仰向けに倒れた為に上空で行われている戦闘の様子が目に入っていた。

無数のドラグーンとそこから放たれるBT粒子による偏向射撃、自分よりも遥かに使い熟しているそれを事前に知ってはいても、実際に目の当たりにするのは大違いであった。

加えて自分は地面に叩き落され、機体の解除さえも出来ず、何も出来ずただ転がっているだけだ。

「強くなると、誓った筈ですのに……！」

パワーアシストが切れている為に体を起こす事は疎か、腕のみを動かして銃口を向ける事さえ叶わない、また康太に全てを任せて頼り切りの状態となってしまうた。

そんな己の情けなさに自然と涙が溢れ、頬を伝い雫となって地面に落ちていく。

だがそれによってセシリアの思考に天啓が降りた。

（涙、雫、ああ、そうでしたの、ブルー・ティアーズとはつまり——）
自分にもまだ出来る事がある、改めてセシリアは機体の状態をチェックしていく。

(ブルー・ティアーズは反応無し、ですがイメージ・インターフェイスは使用可能、行けますわね)

使えないのは火器管制装置とパワーアシスト、そしてスラストユニットのみだ。

なら手に持っているスターライトMkⅢは問題ない、ゆっくりであるが指を動かすくらいなら問題ない。

通常は火器管制装置によって引き金を引かずとも発砲可能だが、セシリアは安全装置として引き金を引いても発砲可能に作った設計士に改めて感謝した。

ともあれ全ての準備は整った、成功するかも未知数だが奇襲となる初撃に全てを掛ける、その為に今にも引き金を引きそうな気持ちを抑え、一番最適な瞬間を狙っていた。



セシリアと同じように地面に落とされたクロエだったが、彼女もまた自分に出来る事をしていた。

(コンピュータウイルスによる機体のハッキング、それだけなら対応出来ます!)

クロエの駆るバンシイは動けない、だが元からクロエが所持し心臓と一体となっているIS黒鍵は外装を持たず、その能力は電子戦に特化している。

ミダス・タッチ・フラッシュシステムを受けた際、クロエはバンシイを通じてそれを見た。

それによりバンシイは動けなくなってしまうが、康太の説明を聞いて直ぐにウイルスの削除を試みたのだ。

とはいえベースとなっているのは宇宙世紀に於けるコンピュータウイルスだ、当然一筋縄でいかないが、それでも同じ宇宙世紀の代物に多く触れてきた経験を活かし解析、削除していった。

そうしてウイルスを駆除した時、上空では康太が苦戦していた。

根比ベをしていたところが、最終的に決着をつけようとマドカが全てのドラグーンを射出、本来の倍の数のドラグーンによる全力の攻勢を仕掛けているところだった。

これを凌げば全てのドラグーンはエネルギー切れにより康太の反撃のチャンスとなる諸刃の剣、だが外野から余計な横槍が入る事をよしとしないマドカが明らかな時間稼ぎを行っている康太に対して賭けに出たのだ。

それまでのドラグーンだけでも避けるのに精一杯だった中で一気に倍となった事で流石の康太も回避する事は出来ず、スラスターやセンサー、関節部といった比較的脆い部分への被弾を避け、残りはシールドや出力を高めたシールドバリアで受け止めていた。

トライコアに加え無人機分のISCコアによるエネルギー総量があるとはいえ燃費もそれなりに喰らうデルタカイは叶うことならできただけ被弾を減らしたいところだが、此処が使い時とばかりに康太はシールドバリアを使用する。

そんな中、康太の背後でスコールが巨大な火球を生み出し、放とうとしていた。

今の状況でそれだけの攻撃を受ければ流石に絶対防御が発動する、パイロット保護の為に通常のシールドバリア以上にエネルギーを消費するそれが発動すれば康太の継戦能力は更に低くなるだろう。

だから撃たせない、此方が動けないと敵が思っている今ならば不意打ちとして絶好の機会だ。

クロエは普段閉じているその目を開く、通常の間人よりも遥かに早く、遠くを見渡す事が出来るように強化されたその目を。

「リミッター解除、撃ちます」

アームドアーマーDEに装備されたメガキャノン、そして両手で構えたビームマグナム、そこから高火力のメガ粒子が放たれる。

「なっ!?ぐ、ああああああっ!」

突如としてクロエが動き出した事に対して完全に虚を突かれたスコールは火球を消すと回避に入る。

だが二門のメガキャノンからの攻撃は時間差によって放たれた事で一発目を回避しても二発目が直撃、それにより動きが鈍ったところにリミッターを解除されたビームマグナムの一撃が迫る。

普段の試合では絶対防御を貫通する事から使用と出力に制限を掛

けてあるそれを、完全な威力で受けた事でスコールは左腕を消し飛ばされる。

直前にプロミネンス・コートによる防御を行っていたとはいえそれも直ぐに貫かれ、ゴールデン・ドーンの左腕諸共に失ったのだ。

「バーンツ」

更にクロエの攻撃から一拍遅れてセシリアの放ったレーザーが弧を描きマドカの背に命中する。

それによって体勢を崩すマドカ、その隙に康太は切り札を使用する。

「サイコミュ系リミッター全解除！」

音声入力によって機体に施されていたサイコミュシステムの籜が外れていく、それと同時にデルタカイの各部から青い光が見え始めた。

「システム起動、『N T D』!!」
ニュータイプ・ドライブ

そして康太がシステムの名を唱えた瞬間、デルタカイの全身から青い光が溢れ出す。

それがデルタカイの姿をマドカから隠した事で目眩ましの効果も発揮し、何者に邪魔される事なく攻撃へと移った康太はビームサーベルを右手に保持すると後方のスコールに向けて振り抜いた。

「亡霊は、暗黒に帰れえっ！」

距離もある為に通常は届く事はない筈のそれは、突如として刀身が延長された事でゴールデン・ドーンの右手に握られていた杖が両断される。

同じく今しがた使用していたビームサーベルも限界を超えた出力を無理矢理に引き出された為に爆発するが、康太は既にその時にはサーベル本体を捨てていた。

そこに体勢を立て直したマドカが再びドラグーンを展開し康太を狙うが、康太もまたフィン・ファンネルを展開し、拡張領域からも追加で四基を呼び出し、自身の周囲を囲うように展開する。

そして全方位のドラグーンより放たれるビームとレーザーの嵐、だがそれは同時に展開されたフィン・ファンネルより発せられるビーム

の幕により阻まれ、デルタカイにまで貫通出来たものは一つも無かった。

それでも立て続けに射撃を続けるマドカだが、ドラグリーンとフィン・ファンネルのそもそもサイズ差に加え先に展開していた事でドラグリーンの方が息切れとなる。

「フルバースト！」

その時を逃さず、フィン・ファンネルと自身が持つ火器から全方位に向けて攻撃を放ちドラグリーンを撃墜していく。

撃ち洩らした物もあつたが、それは一斉射の後にエネルギー切れとなったフィン・ファンネルを高速で激突させて逃がさずに殲滅した。

それによりフィン・ファンネルも破損してしまうが、全てのドラグーンを撃ち落とす方を優先した事で康太もマドカも残る武装は機体に保持している分だけとなる。

そこに機体を回復させたクロエが背中合わせに並び立ちスコールへと相對する。

状況としてはそれで五分五分、そう見えただろうが康太は通信を繋いだ。

「一夏、リナ、シールドを寄越せ」

『えっ？わ、分かった』

『……勝ってね、コウ』

その相手は機体を封じられた一夏とリナで、二人は康太に対して武装のロックを解除する。

それと同時にユニコーンとフェネクスの二機の背中に取り付けられていたアームドアーマーDEはサイコフレームを青色に光らせ、スラストーを使わず浮遊すると康太達の周囲を囲むように展開した。

オールレンジ攻撃は互いに使えない、そう思われた戦場はあっさりと逆転したのだった。

「クロエは金色の方を頼む、俺はプロヴィデンスをやる。無理に仕留めようとせず、堅実に行くぞ！」

「はい、コウタさん！」

自身はマドカと戦闘しつつ、ドラグリーンへの対処が無くなった事か

ら二基のアームドアーマーDEをクロエの援護に回す康太。

クロエもまたビームマグナムの他に左腕にジエスタ用のビームライフルを装備し、連射の利かない欠点を補おうとする。

片腕を失った上に主兵装をも失ったゴルデン・ドーンには万全の状態となったクロエの相手は厳しい、康太は無理せずとは言ったが遠からず撃破は可能だろう。

加えて杖を斬り落とした事でミダス・タッチ・フラッシュシステムが使用不可となった、それにより康太もクロエもセンサーの使用が可能となっており、条件はレースでエネルギーを消費していたとはいえクロエに有利だ。

更にはセシリアからの援護射撃もある、それだけの材料があつてクロエが敗れる事は殆んど有り得ない状況だった。

しかし、戦闘を開始しようとしたクロエの背後に、地表付近から高出力のビーム攻撃が放たれる。

センサーに何の反応もなく、更には射点に目を向けても何の姿も見えない、完全に虚空より放たれたビームは、しかしサイコミュにより邪気を捉えた康太がシールドファンネルとなったアームドアーマーDEを割り込ませる事で防ぐ。

それと同時に康太はマドカを放置して射程に向かう、ビームの通った道は熱が残っており、その端が先程の攻撃を行った者の位置となる。

無視された形となったマドカは直ぐに康太を追うが、背後より撃つたビームは同じく康太が従えていたシールドファンネルに防がれる。

その間に康太はビームライフルを発射、姿の見えない敵の位置を予測して撃つが、既に移動したのか何もない宙を貫く。

すると逆に康太に向けて攻撃が虚空より放たれる、荷電粒子砲、散弾、ミサイル、連射される実弾、だがそれ等の攻撃から康太は敵機の正体を見破る。

「成程、ミラーージュコロイドだな」

声が聞こえた訳ではない、姿が見えている訳でもない、それでも敵機の動揺した気配が康太には伝わってきた。

その機を逃さず康太はシールドに懸架されているビームサーベルを左手に握ると投擲する。

回転しながら飛んでいったそれは先程の一斉射を行ってきた位置に向かうが、それを敵機はスラスターを使いギリギリで回避する。

未だに姿は消したままだが熱源は誤魔化せない、センサーにハッキリと映るその姿を見て康太はビームライフルの狙いを修正、再び射撃する。

「ビームコンフューズ！」

だが狙いは敵機ではなく、その背後を通り過ぎたビームサーベルだった。

ライフルの射撃により本体である柄を破壊されたビームサーベルは内部に収めていたメガ粒子を周囲に散弾のように撒き散らす。

それを背後から受けた為に装甲を持たないスラスターにダメージを受ける敵機、またメガ粒子を浴びた箇所は透明化が解除され、その姿を現す。

「クソがッ、何でバレた!?!」

「やはり、ヘイルバスターか！」

現れたのはバスターの改良機であるヘイルバスターであり、オータムが使用していた。

これはアラクネが破壊された事により予備パーツにISコアを組み込んでコアが馴染むまでともに戦闘が出来なくなり、ならば機動性を発揮出来ずとも限定的に戦闘が可能な機体として亡国機業が保有していた機体の中で一番適していた機体だからだ。

スコールがミダス・タッチ・フラッシュシステムでセンサーを封じ、その際にミラージュコロイドによって密かにアリーナへ潜入する、そのまま戦闘に勝利出来れば良し、出来ずとも超高インパルス長距離狙撃ライフルなどで不意を討つという作戦だった。

だがそれも全て破綻してしまう、ニュータイプとしての勘の良さを発揮した康太に初撃を阻まれ、その武装から正体を看破され、コアが馴染んでいない事によって機動性は悪化している事によりオータムはあつという間に窮地に追い込まれた。

そこに先程の一斉射を切り抜けた康太が瞬時加速により迫る、それに対してガンランチャーで弾幕を張ろうとするも、既に懐に入り込まれている。

打つ手無し、そう悟った時にはデルタカイの膝がオータムに叩き込まれていた、鋭利なパーツによりニークラツシヤーという武装として転用可能部位で瞬時加速を追加した膝蹴りを受け、大きく吹き飛ばされたオータムはアリーナの壁に激突すると意識を失う。

そんな康太の背に追い続けるようマドカが迫り、左腕から高出力のビームサーベルを発振するが、しかし複数の射撃が飛んできた事で後ろに下がった。

攻撃の飛んできた方角を見れば、そこにはジエガンや打鉄、ラファール・リヴァイヴといった学園の訓練機を身に纏う教師陣が居た。

ミダス・タツチ・フラツシシステムが無くなった事で千冬が即座に送り込んだ増援部隊、二十は下らないその数は半数はスコールと戦闘を行うクロエの援護に向かっており、二機はオータムの確保に向かうが残りは康太の援護に駆け付けていた。

その全てがマドカを取り囲み銃口を向けている、どう足掻いたところで圧倒的に不利な状況は覆す事は出来ない。

「この、雑魚共が！邪魔をするな！」

だがマドカは動いた、射撃を掻い潜り一機に迫るとその勢いのままタツクルを繰り出し、体勢を崩した相手をビームサーベルで斬り捨てる。

そして斬った相手を踏み台に別の機体へとビームライフルを撃ちながら迫るも、康太がシールドファンネルを左右から挟み込むような形でぶつけた事で勢いが止まる。

そこに殺到する集中砲火、あつという間に装甲は千切れ飛び、頭部を覆っていたバイザーも砕け散りながら、マドカは地上へと叩き落される。

「ぐう……お、おのれ……」

割れたバイザー、その下から出てきた素顔は織斑千冬に酷似してい

た、それを怒りで歪め、なおも立ち上がろうとする姿に教師陣は動揺し思わず攻撃の手を止めてしまう。

その間に康太は地上へ向かうと、マドカの前に降り立つ。

「こんな決着はオレも望んではいなかったんだがな……」

「全くだ……」

センサーの回復と共に顔を覆っていた装甲を解除し、マドカに告げるその表情には不満の色が浮かんでいた。

それに対し決着を望んでいたのは自分だけでないと理解したマドカは一転して苦笑する。

「もし次があるなら、その時は互いに万全の状態で、真正面からやり合いたいものだ」

「私もだ。だが、今この時だけは——」

「ああ、今だけは——」

「——この一撃をッ！」

マドカは残っていた左腕のビームサーベルを発振させ振るい、康太もまた拡張領域より予備のビームサーベルを取り出して振るう。

示し合わせたように動いた両者は交差し、互いにビームサーベルを振り抜いた形で静止する。

その次の瞬間、デルタカイの左の主翼が斬り裂かれる、だがマドカの方はそのまま倒れ伏すと共に機体が解除された。

「これで一勝一敗、次に持ち越したな」

「は、前のアレを私の勝ちとするなら、そうなのだろうか……」

倒れ伏しながらも、満足気な笑みを浮かべるマドカ、時を同じくしてスコールもまた撃墜され、捕縛されようというタイミングであった。

予想外の事態は起きたものの、これで騒動は収束する。

——筈だった。

「あれあれ？あれあれあれえ？スコールちゃん達やられちゃったのお？だらしないなあ、亡国機業で一番強いって話だったのになあ、情けないよねえ」

突如として響く新たな声、咄嗟に全員が身構えるが、その声の主の姿は見えない。

そんな中、センサーが敵機の位置を捉える、場所はアリーナの観客席、そこに一機の黒い機体が居た。

その場の全員が新手に対して武装を向ける、アリーナと観客席の間には流れ弾による被害が及ばないようシールドバリアが張られているが、それも管制室で操作すれば消す事が出来る。

そうなれば一機程度、あつという間に排除出来るのだが、相手は余裕そうな態度を崩さない。

「おおお、恐い恐い。そんな殺気を向けないでよお。ワタシは確かに、そのMなんかの足元にも及ばない実力だけどさあ、弱いなら弱いなりに、準備してる物なんだよお？」

人を嘲るような口調のまま、その人物は左手で上を指差すと、同時に機体の上部に新たな影が浮かび上がっていく。

それは機械で出来た一対の巨大なクローであり、黒い機体の背後に繋がっている。

だが一番の問題はそのクローの中に人が捕らえられている事だ。

その人物は康太も知っていた、赤毛にバンダナを巻いた姿の少女、五反田蘭である。

そして、新手が身に纏っている機体も名を呟くのだった。

「ネロブリッツ……」

先程のヘイルバスターと同じくミラーージュコロイドを装備する機体、加えて空から円錐状に見える紅い機体が降りてきて、その隣に並び立つ。

「ロツソイージス……」

「アハハツ、流星は特異点だねえ、ワタシ達の機体も知ってるのかあ。まあ良いけどねえ、この状況で何が変わるって訳でもないしさあ」

更に、上空には大型輸送減ヘリであるCH-47チヌークが複数現

れ、その輸送スペースより無数のMS、ザクシリーズが降り立つ。

「そういえば名乗ってなかったねえ。ワタシ達は亡国機業の実働部隊が一つ、『トランプ』。単刀直入に言おう。投降しろ、特異点」

それ等の機体が展開し、観客席に降り立ち、その銃口をIS学園側に向けると、黒い機体、ネロブリッツのパイロットはそれまでの口調から一転、冷たささえ感じる口調で告げたのだった。

72話 亡国機業

新たな敵の出現によりIS学園側と亡国機業側は互いに銃口を向けつつ、しかしそのまま睨み合いの状況に陥っていた。

数こそ多いがISは二機のみと戦力で劣る亡国機業、膠着状態になっているのはこれみよがしに人質を掲げているからだ。

その人質を失えば亡国機業はあつという間に数に押されてしまう、だから殺す事は出来ずとも目の前で痛めつけてみせる事は出来る。

加えて後ろに控える撮影用の機材を背負ったコマンドザクCCIという機体が厄介だった。

「見ての通り、此方には人質が居る。知らない仲じゃないでしょう？そして今の状況をネットを通じて全世界に配信している。そんな中で、人質を見捨てて撃てる？」

人質を取り、その様子を世界に見せ付ける事で学園側の動きを封じる、もしこのまま五反田蘭を見捨てるという選択肢を選べば世界中からのバッシングが殺到するというのは明白だった。

だからこそ誰も動けなかった、康太もまた右手に握っていたビームライフルの銃口を下ろし、口を開く。

「何が目的だ、亡国機業」

「貴方の身柄と、この場にある全てのISコア、と言いたいところだけど欲張り過ぎても良い事は無いわね。数十のISコアと一人の命だと、天秤の傾きが怪しいところだもの。だから、貴方の身柄のみを要求するわ、特異点紫藤康太」

本来ならISコアも回収したいが、それが数十機分ともなれば話が違ってくる。

亡国機業はテロリストだ、そんな組織に数十機ものISが渡ってしまえば下手な国家の戦力を超えてしまう、将来的な脅威を生み出さない為の致し方のない犠牲として人質が通用しなくなっても困る。

だからこそ『トランプ』の指揮官は康太の身柄だけを要求する、そうする事で後の判断は康太だけの物になり、仮に五反田蘭を見捨てても康太に対するバッシングが強くなるだけだ、我が身可愛さに人質を

見捨てたと、外野から好き勝手に騒ぐに決まっていた。

「はあ……良いだろう、投降しよう。が、その前に一つ聞かせて欲しい。お前達はオレを特異点と呼び、その確保に拘っている。何故だ？ 篠ノ之博士ではなく、オレに固執する理由は？」

「それを訊くの？ ワタシ達の機体の名前を言い当て、その能力も知っている貴方が？」

「成程、愚問だったか。それにしてもGAT-Xシリーズか。やっぱり設計データ拾われてたんだな」

「その通りよ。だからこそ、我々は貴方を欲しがっているの」

「そうか。それで、投降するならどうすれば良い？」

「機体を解除して待機形態になったISは離れた場所に投げなさい。他の連中も、地上に降りて動かないように。余計な真似をすれば人質の命はないわ」

大人しく全てのISが地上に降り、康太は機体を解除すると腕輪とドックタグを外して地面に投げる。

それを『トランプ』の指揮官が近付いて拾い上げ、片方のクローで康太を掴むと蘭を下ろし、改めて両方のクローで康太を掴み直した。

これで蘭に代わって康太が人質という形になったのだ。

「ご、ごめんなさい康太さん……私のせいで……」

「気にするな、ミラージユコロイドステルスは捕捉が極めて難しいステルス能力なんだ。これは仕方のない事で、どうやっても防げなかった事だ。責めるなら自分じゃなく、そもそもこんな事をやらかしたコイツ等を責めろ。ほれ、早く教員部隊のところに行け。危ないぞ」

その際、震える声で蘭が康太へと謝罪するが、それを康太はあっけからんと受け流す。

そんなやり取りに指揮官は問いかけた。

「それにしても、随分とあっさり捕まったわね。ワタシ達には好都合だけど、何を企んでるの？」

「別に。そもそもISの防御性能が高いからな。撃つたらシールドバリアで防がれるし、絶対防御を貫通する威力となれば蘭を巻き込む。あの状況だと仕方ないと割り切るしかない」

「だとしても普通は嫌がるものよ？ 拷問に掛けられるだとか、考えていないの？」

「その時は、まあ何とでもなるはずだ。それに、オレも亡国機業に関して知りたい事がある。何が最終的な目的なのか、それをな」

「お喋りの時間ならこれからたつぷりあるわよ。各機、目的は達した。スコール達を回収し、我々も撤収する。負け犬とはいえ貴重な戦力には違いないからねえ」

派閥の間で権力闘争でもあるのだろう、最後の方はスコール達にも聞こえるよう、猫なで声のような口調をしていた。

そしてヘリにIS学園側から奪還したスコール達を載せ『トランプ』はその場を離れていく。

康太という生徒を人質に取られては教育機関の世間体として教え子を見捨てるわけにも行かず、動けずに渡してしまふ。

明確な敗北、途中で優勢になったもの人質という手段に対して無力であった事を明確に印象付け、この件は終わったのであった。



キャノンボール・ファストは中止となり、康太を除く全ての生徒は学園へと帰還した。

既に康太が連れ去られて数時間が経過している、人質という手段に對してアリーナでは他の観客が避難したシエルター前に陣取っていた楯無は専用機持ち達と共にラビットフット社のラボに居た。

そこには千冬も居り、今回の件に関する情報の整理と、今後の方針を定める為であった。

またミダス・タツチ・フラッシュによってウイルスに感染したISのウイルス駆除の為にでもある、各々のISは現在束の元であり、その作業が行われていた。

そして、ラボの一室で現状把握の為の報告会が始まろうとしていたが、その空気は重い。

「まず今の状況からだけど、ごめんなさい、結論から言うと亡国機業を見失ったわ」

そんな中でまず楯無が口を開くが、それは決して信じたくない内容

であった。

「日本側も衛星で追跡していたのだけど、彼らは海上で未確認の潜水艦に合流すると、そのまま潜航していったの。周囲に海上自衛隊の潜水艦は居なかつたし、恐らく巡回ルートも知られていたのでしょうね。それと、彼等のへりはアメリカ軍の識別信号を発信していた。けど、問い合わせたらそれは全て過去に戦地で撃墜された物ばかりだったのよ。文字通り亡霊の出現に彼等も慌てたらしいわ。そうでなくても二機のISが控えていた。康太くんが人質にされていた以上、追撃は出来なかつたでしょうね。それと、これが彼等の母艦よ。衛星写真だけど、何とか収められたわ」

ミーティングに使えるよう壁に設けられているモニター、そこに映し出されたのは一般的に思い浮かべる潜水艦とはかけ離れた姿だった。

船首に見えるのは四基の大型のハッチで、似たような物が甲板中央に三基、艦橋の左右に二基ずつ設けられていた。

その内、艦橋横のハッチではへりが着艦しており、航空機を運用可能なタイプだと分かる。

しかしどう見ても潜水艦とは思えない形状は、どちらかと言えば宇宙船のように見えるものだった。

「こんなタイプは見た事も聞いた事もないわ。かなり大型で、形状も独特なのに捕捉出来ないなんて技術の差が大きいのが分かるわね……だから、現状では彼等の足取りは全くの手掛かりが無い状況って事になるわ」

その言葉に更に場の空気が重くなる、誰もが顔を伏せて口を閉ざしていたが、そこに場違いなまでに明るい声が聞こえてくる。

「いやあ、流星はこーくんが警戒するレベル、中々に歯応えのあるウイルスだったね。これを狙われてないとはいえ戦闘中に処理出来たこーちゃんも偉いよ、うん！」

それは全員のISを受け取って早々に自室に引き籠もっていた束だった。

その時は康太の救出の為に素早く戦力を回復させようとしていた

のかと思っていたが、今の様子にそんな気配は微塵もない。

「姉さん、康太が捕まったというのに何も心配じゃないというのか!」
だからこそ束の妹として、部下であり仲間でもある康太の事を何とも思っていないような態度に筈が声を荒げる。

しかし束は何故自分が怒られているのか理解していない様子だった。

「えー、こーくんならその内大暴れして勝手に帰ってくるってば。それより何見てるの?潜水艦?ああ、これさつきこーくんが言ってたボズゴロフ級潜水空母だね。やっぱり宇宙船の方をベースにしてるから形もそんな感じなんだね」

「待て、今何と言った?いや、それ以前に、『さつき紫藤が言っていた』だど?」

その反論に更に声を荒らげようとした筈だが、発言内容に違和感を感じた千冬が先んじて訊ねた事により遮られ、加えて全員が同じ違和感に気付く。

「え?こーくんがコアネットワーク通じて写真付きでボズゴロフ級潜水空母を教えてくれたんだよ。魚雷と兼用のミサイル発射管を備えてるけど、武装自体は少ないってさ。ウチにはシージェガンとか居るし、深海で適当に穴開けたら水圧でペしゃんこに出来ると思うよ」

『ええっ!?!』

それに対して束が何となしに返答するが、それはつまり康太の手元にはコアネットワークに接続可能なISが存在するという事であり、全員が驚愕の声を挙げる。

あまりの大声に束は耳を押さえて顔を顰める程であり、それを見て全員が多少は落ち着きを取り戻す。

「全くもう、こーくんが武装解除に置いたISは二つ、予備のフラッグとキャノンボール・ファストで使ってたリゼルの二機だけだよ。それに、今のこーくんが生きてる限りISを捨てるなんて出来る訳ないじゃん」

『あっ……』

それを聞いて思い出す、康太が地面に捨てていたのは予備機でもあ

るフラッグの待機形態である腕輪と、ドックタグだった。

これまでドックタグがジエガンの待機形態としての姿だったが、今の康太の愛機であるガンダムデルタカイはそもそも康太と融合し心臓の位置にあるのだ。

そこまで知らされているのはこの場に居る者達のみ、何も知らない者からすれば未だにドックタグこそガンダムデルタカイの待機形態だと思うだろう。

「そもそも、コーくんなら人質交換であの赤毛の子が解放された時点で機体展開して攻撃に移れたよ。そして今も逃げたりせずその場に留まってるのは何となく分かるでしょ？」

「成程、捕まったと見せ掛けて潜入している訳か」

「そういうこと！あと、教えなかつたのはあの場で言つたら隠せそうに無さそうだったからじゃない？皆の顔に出るかもしれないし、後は私もだけど学園側の人間を完全に信用してないんだろうね。少なくとも教員か生徒の何処かに一人二人はスパイが居るって思ってるし」

その説明に誰もが納得し、そして安堵した。

束が始めに言っていた言葉はただの事実であり、本当に全てが終われば康太は勝手に暴れて戻ってくるのだ。

なにしろ今度は人質はなく、周りは全て敵、容赦する必要もなく全ての火力を叩き付ける事が出来るという訳なのだから。

「まあ実際に暴れるってなったら迎えに行くよ。実は、建造中だったネエル・アーガマが完成したのです！向こうの度肝を抜くと同時に試験航行を行うから、皆いつでも動けるように準備しててね！大気圏離脱して、大気圏突入までやるよ！フッフッフツ、色々なテクノロジーを思う存分試せるねえ」

そして康太の動きと連動して動けるように束もまた準備を進めていた。

実際のところ、空路よりも重力や空気抵抗の存在しない宇宙の方が遙かに速度を出せる為、宇宙に出るといのは理に適っているのだが、全員の目には束が救出作戦に託けて取り敢えずやりたい事を全部

やってやろうという思惑もあるように見えた。

それは間違いのない事実ではあるが、結果として康太の援護になるなら良いかと結論付けられた。

そんな中、束が持っていた端末から着信を知らせる通知音が鳴る、康太からの通信が入った事を知らせる音だ。

「丁度良くこーくんから連絡が入ったよ。何か伝えたい事があるのかな？」

そう言つて束は端末を操作すると康太からの通信をモニターに映し出す、写真などではなく康太の視覚を直接送信してきていたのだ。

映し出された光景、そこはレストランかと思ふばかりの内装が施された一室だった。

そこにはテーブルクロスが掛けられた長めのテーブルの上にパンやサラダ、ステーキにスープといった数々の料理が並べられており、康太が攫われた事とその対策を考える為にまともに食事を摂っていなかった全員が途端に空腹を覚える程だ。

加えて『A5ランク牛のサーロインステーキ』等と表示されている辺り、誘拐はしたが客人待遇で饗されているらしく、ひとまずは安心した、かと思えば『自白剤入りコンソメスープ』等と表示されている為に判断が付かない。

そして、康太の座る席の対面に立っているのはネロブリッツを運用していた『トランプ』の指揮官の女だろう。

黒のドレスに身を包み、武装こそしていないが胸元にはISの待機形態と思わしきネックレスがあり、側には赤い軍服のような物に身を包んだ女が控えているが、ロツソイージスのパイロットだろうか。

敵の指揮官との対談、だからこそ康太は通信を繋げてきたのだと理解し、全員がその様子に固唾をのむ。

『色々立って込んでいたけど、お腹も空いたでしょうし食べながら話しましょう。改めてワタシは亡国機業戦闘部隊『トランプ』の指揮官、コードネームはジョーカーよ。歓迎するわ、紫藤康太くん』

『ジョーカーか。確かにトランプに於いては鬼札だが……一人がジョーカーなら、もう一枚のジョーカーはどう呼ぶんだ？』

『私のコードネームはハーレクインだ』

『……ジョーカーと並ぶと、別のキャラクターを思い出すな。綴り違うけど』

『あら、博識ね。部隊の中にはコミックスがモチーフと思ってる人間も居るのよね。モチーフはイタリア喜劇のキャラクターよ』

食前酒代わりのジンジャーエールを飲みつつ、康太はジョーカーと名乗った女と会話をを行う。

そしてハーレクインと名乗った女の方に視線を移すと問い掛けた。

『ザフトの赤服を着てるのは？ザフトでも、ましてやコーディネーターでもないと思うんだが？』

『デザインが気に入った、趣味だ』

『そうか』

ザフト、コーディネーター、康太の口から何らかの固有名詞が飛び出し、それに対して亡国機業の二人もその意味が通じている様子だ。

それ等の固有名詞に対して何処かで聞いた覚えがあるが、しかし一夏達は思い出せなかった。

『ふふ、やっぱり知っているのね。ザフト、コーディネーター。単語とその意味はワタシ達も知っているわ。でも、細かくは知らない。是非教えてくれないかしら』

『あ、これ美味しいな。ん、ザフトはコスミック・イラと呼ばれた時代に於いて存在したスペースコロニー群にして国家、『プラント』の政党並びに軍事組織の名前だ。で、その国民の殆どがコーディネーターと呼ばれる、遺伝子操作によって生まれた人間達だ』

『そのコーディネーターというのは、試験管ベビーなのかしら？』

『いや、受精卵に遺伝子操作を加える形だ。そうして生まれてきたのを第一世代と呼び、コーディネーター同士の子供を第二世代と呼んでいる。ただし、遺伝子操作の弊害から第三世代以降の出生率が極端に低くなっていて、婚姻統制が敷かれていた。早晩、国家として維持出来なくなるだろうな。そして、コーディネーターに対して遺伝子操作をしない従来の人間はナチュラルと呼称されている』

『そういう形だったのね、よく分かったわ。それと、そのコーディネー

ターっていうのはどれだけの超人なのかしら?」

『身体能力は下手なオリンピックピック選手を超えるし、頭脳も遙かに優れ、加えて病気に対して高い抵抗力を持っている。まあ、生まれたばかりから超人って訳じゃなくて、ちゃんと努力しないと才能は開花しないけどな。それと、単に生まれつき天才になれる素質があるって確定してるだけで、ナチュラルの天才には及ばない、なんて事もある。その時代、『乱れ桜』の異名を持つエースパイロットはナチュラルでありながら並のコーデイネーターの反応速度を上回っていたそうだ』

コーデイネーター、そしてコズミック・イラ、その辺りの単語を聞いてまずセシリアが思い出した、その言葉が何処で使われていたのかを。

「コズミック・イラ、確か以前シミュレーターで康太さんがフリーダムを使用した時のミツシヨンがそんな時代ではありませんでしたか?」

「あつ、確かに!」

「いや、だがあれは架空の設定ではなかったのか?だが、そうになると、それを亡国機業が知っているというのは——」

「まさか、康太って本当はこの世界の人間じゃなくて——」

そんなセシリアの言葉で他の者達も合点がいく、そして康太の本当の出生を知らぬが故に深読みが始まっていく。

『そうなのね。因みに、貴方はコーデイネーターなのかしら?』

『いや、違うぞ。定義としては生まれはナチュラルだ。あとコズミック・イラ生まれって訳でもない』

しかしそれは直ぐに康太の口から否定される、だが康太の謎自体は残ったままだ。

『そう、違うのね。なら別の質問も良いかしら?』

『その前にオレからも質問だ。色々と答えたんだ、構わないだろう?』

『そうね。確かにフェアじゃないわ。機密もあるけど、可能な限り答えるわよ。何が聞きたいのかしら?』

『亡国機業の最終的な目的だ。各国からISコアを奪う、今回の様に人を拉致する、色々とやっている様だが、それ等は手段であって目的じゃない。世界征服だなんて子供みたいな目的じゃないだろう?』

だが康太からの質問はそれに匹敵する程の謎であった。

それに対してジョーカーは笑みを浮かべる。

『そうね、本当のところは世界征服を狙ってる人間も居るみたいよ。けど、少なくともワタシは別ね。時に、亡国機業がいつから存在しているかはご存知かしら?』

『第二次世界大戦の後から存在が知られるようになったという噂だけは』

『それは紛れもない真実よ。亡国機業は第二次世界大戦後、主に米国が中心になって生まれたわ。その理由は核よ。広島、長崎に投下された二発の原子爆弾、それが戦争を終わらせたけど当時の人達の中にはその力が自国に向けられる事を恐れ人達が居たの。いえ、大なり小なり全ての人がその力を危惧したでしょうね。その中でも強く恐れた、それなりの力を持っていた人達が中心となって設立されたのが亡国機業の母体となった組織よ。軍人、政治家、資本家、取り敢えず垣根を超えてアメリカに核の脅威が降り掛からないようにする組織だったのだけど、世界はそう単純じゃないわ』

『東西冷戦、相互破壊確証による睨み合いの時代か』

『その通り。核兵器は当時のソ連も持つようになった事でアメリカだけの物じゃなくなった。何かの拍子に小さな火種が核戦争の引き金になりかねない時代よ。特にキューバ危機ね』

『世界が核戦争一歩手前まで進んだ事件か』

『そう。当然、当時の人々は戦慄した。けど水面下で様々な動きをしている中、彼等はソ連にも似たような組織がある事を知った。その組織と協力し、なんとかキューバ危機は乗り越えられたわ。そして、二つの組織は同盟関係を結び、その後も似たような組織が合わさって、それが今の亡国機業という存在に変わったわ』

『成程、つまりISをかき集めているのは白騎士事件の影響か』

『その通りよ。ワタシ達の目的は核戦争を未然に防ぐ事。その為にもあれだけのミサイルを迎撃してみせたISは何としても集める必要があったの』

語られた内容は真実かどうかは分からない、だがジョーカーの語り

口は熱を持ち、真剣にその事を目指しているのだと感ぜられるものであった。

そして、だからこそISを強奪している理由にも納得がいく、白騎士事件によって放たれた二千を超えるミサイルを一基残らず破壊してみせたISの力は亡国機業にとつて希望に見えただろう。

『けど、最近は少し違って来たのよね。ISを集めて、貴方と同じようにテクノロジーを回収して、少し亡国機業は力を付け過ぎたかもしれないわ。力で世界をコントロールする事で核戦争を無くす、そんな主張をする過激派の数が増えてきたのよ』

『核の力を知らない世代の台頭、時代が移り変わった事で組織の腐敗も始まったか。まあ元より権力者が作った組織だからな、世界を支配して戦争を無くすのは良いが、その後は世界を自分達の好きなように書き換えるつもりか』

『そのつもりなのでしょね。しかも中心になっているのは女尊男卑の思想に侵されたISパイロット中心なのよ。本当に頭の痛い話だわ』

だが問題を抱えていない訳ではないらしい、ジョーカーは額に手を当てて思い悩んでいるような仕草を見せたが、そのまま視線を康太に移すと、本命と思われる言葉を切り出した。

『だからワタシ達と組まないかしら？紫藤康太くん』

73話 亡国機業2

手を組むように提案された訳だが、オレとしては今のところ何のメリットも無い。

だからまず訊くだけ訊いてみる事にする。

「その場合のオレのメリットは？」

「そうね、ワタシ達が確保した技術データの共有でどうかしら？」

そして返って来た答えに割りと惹かれた、今のところ亡国機業が確保している技術がどのようなものがあるのか、宇宙に出るのに役立つ技術があるのか、場合によっては多少の協力は吝かではないとつい考えてしまう。

「逆に何かの目的があるなら、可能な範囲であれば協力出来るわよ。具体的に、貴方がワタシ達に協力する対価とするなら何を望むのかしら？」

そこに畳み掛けるように告げられるのは魅力的な言葉だ、望めば可能な限りの願いを叶えようとしてくれるだろう。

そしてオレが仮に望んだものを一つ手に入れられるなら、何を望むかは決まっている。

「スペースコロニー」

「……えっ？」

「スペースコロニー、可能ならオニールシリンダー型、島3号で頼む」
「冗談、という訳ではないみたいね」

「当然、オレも篠ノ之博士も宇宙に出ることを目的としてるんだ。その拠点となる場所が貰えるなら協力するさ。多分、篠ノ之博士も食い付くぞ」

「……初志貫徹、と言えばいいのかしら？少なくとも全く嘘を言っていないのがたちが悪いわね。でも宇宙に出て何をするというのかしら？」

「んー、篠ノ之博士は多分だけどそのうち外宇宙に向かって行くだろうな。オレは宇宙開拓が出来ればそれで。可能なら火星まで行ってテラフォーミングとかしたい」

オレの望みは宇宙世紀のような世界で生きたいというものだ、だから地球圏で遠くても火星や木星辺りまでしか行く気はない。

対して篠ノ之博士は宇宙の未知を求めている、それこそ太陽系を外れ別の銀河に行こうとするだろう。

宇宙を目指すという目的は同じでも最終的な目的は違う、何時の日か別れの時が来るだろうが、その前段階として宇宙での拠点、スペースコロニーの建造は共通の目標だ。

後はコロニーを増やすか、そのまま外に行くかの違いでしかない、ある程度形になったらオレは火星に行ってテラフォーミングに従事するつもりだ。

その間にコロニー公社やらデブリ回収のジャンク屋みたいな仕事もしてみたい、それと木星船団のような資源回収で宇宙を行く船乗りも良いな。

「何にせよ宇宙の拠点が欲しいのは事実だ。それに、お前達の機体、装甲は何を使ってる?」

「チタン合金セラミック複合材よ。他国に販売されたジェガン、その装甲を一部流して貰ったの」

「後でルート探った方が良いのかね。まあ、フェイズシフト装甲が使えないんだな。あれは低重力下か無重力下でしか精製出来ない代物だ。それ等の研究開発の為にオレ達は宇宙に上がる、それだけだ」
「やりたい事にしか興味がない、兵士としての側面もあるけど貴方も典型的な研究者気質なのかしら?」

「まあ趣味人なのは否定しない。で、コロニーをくれるのか?」

「流石に一朝一夕には無理ね。それに、ワタシ達だと建造するにしても動きが活発になりすぎるわ。残念だけど、コロニーの提供というのは不可能ね」

「だろうな、知ってた」

とはいえ本当に貰えるなんて期待していない、そんな物が造れるならとつくの昔に発表していてもおかしくないからだ。

そうなると交渉は振り出しに戻る、まあテロリストに協力するような理由なんて早々ない訳だが、他にどんな手札があるのかは気になる

からな。

「他に提供出来そうなのは……過激派の情報とかかしら？ 敵対派閥だから完全に情報を共有してる訳ではないのだけど、向こうはパイロットの育成に力を入れてるらしいわ」

「育成か、それはどんな具合に？」

「初めから戦闘に特化した形で遺伝子操作を行ったクローンをある程度の年齢まで試験管の中で急速成長させるのよ。さっきの定義からして、コーディネイターという事かしら？」

「定義としてはな。他には？」

「体内インプラントに、薬物による強化で身体能力や反射神経を向上させているわね。反乱防止の為か、薬物には依存性を持たせてあった筈よ」

「ブーステッドマン、か？ つくづくコスミック・イラの技術を多く有してるらしい」

「加えて遺伝子に何らかの細工を施して自分達に服従するように製造しているみたいよ。細かな情報は分からないのだけど、薬物で自我を消し去っているとか、眉唾物な話もあるわね」

「ソキウスシリーズ、戦闘用コーディネイターの技術だ。そうか、生まれた者達はただ命令に従い戦うだけの人形だろうな」

「貴方はその事について何も思わないの？」

「自らの意思で考え、動く者こそ人間だ。言われるがまま、状況に流されるがままの人間なんてどうでも良い。ソキウス達は薬物で自我を消されても、その範囲で自分に出来る事はやっていた。自我を焼かれずに居た個体も服従するように定められていても、より人類の為にしろうと動いていた。ならお前達もやってみせろ、お前達の大本の存在はやってみせたぞ、そうとしか言えんな」

「厳しいのね……それを実際にやれる人間がどれだけ居るか……」

「少し前まで惰性で生きてきたオレが此処まで変わったんだ。出来ない筈がないだろう？」

何の目標もなく生きてるより、明確な目標があった方が活力が湧いてくる、それはオレ自身が身を以て知った事だ。

ならやれ、やりもせず無理と言うな、無理だったなら改善しろ、そしてまたやれ、また無理なら改善しろ、後は繰り返せ、それだけだ。「だが過激派のやり方が気に食わないのは確かだ。本当なのはこの眼で確かめるとして、もしも真実なら潰しに行くかもしれない」

「あら、ならその辺は協力出来そうね。ワタシ達は過激派が邪魔で、貴方は過激派が気に入らない。共通の敵が出来たわ」

「その前に先に襲撃してきたのお前等だつて忘れてないか？」

「ちよつと過激な招待だったのは自覚しているわ。けど、時間は有限よ。彼等が組織の主導権を握るのは何としても阻止しなければならぬ。だからこそスコールの動きに便乗したのよ」

「そういえばアイツ等はどうな派閥なんだ？過激派とも、お前達みたいな保守派とも違うように思えるんだが」

「そうね、立ち位置としては中立なのでしようけど、保守派寄りかしら。まあ陰謀を巡らせるのを楽しむタイプではあるわね。その辺りがもう少しマトモなら協力出来るのだけど」

「煽るような事をしておいてか？」

「所属した時期が近かったからライバルのようなものなのよね。あとは予算や戦力の取り合いとか。貴重なISコアの所有権を過激派と争っていたら横から搔つ攫われた事もあるわね」

「予算の取り合いって、何処の組織も割りとき辛いな」

明らかに世界の裏側に存在する秘密結社という感じなのに予算という一気に俗っぽい言葉が出てくるとは思わなかった。

まあこれだけの戦力を維持するにも費用は掛かるもんな、その辺りは仕方のない事だ。

「スコールも予算をドレスとかに使ってはいるけど、それ以上に社交界で出資者から引き出してくるから良いのよ。けど自分達の豪遊にも使う過激派は許せないわ。ワタシ達が技術開発に予算を回してより装備の低コスト化を目指してる中で、リゾート地に向かう？それが組織の目的とどう結び付くっていうのよ。他にもアレとかコレとか、本当にもう——」

ジョーカーの口調だが、途中から愚痴になってきていた。

加えて少し前から嗜む程度だったワインの消費スピードが上がってきていたし、頬にも赤みが差している。

チラツと後ろに控えているハーレクインの方を見ると、気まずそうな表情を浮かべていた。

「こんな高級デイナーも貴方を饗すから用意したのよ。普段なら味気ないレーションで済ませる事もあるんだから。本当に、こんな事でもないで滅多に食べられないんだから」

「ジョーカー、その辺りにしておいた方が良いでしょう。今日のところは話し合いは此処までにしよう。紫藤康太、そちらもそれで良いだろうか？」

「ああ、それで良い」

「本当に申し訳無い。デイナーの方はゆっくり楽しんでくれ。何かあれば手元のベルを鳴らせば人が来る」

もう愚痴がメインになって来た辺りでハーレクインがジョーカーを抱えて退室していった。

仮にも誘拐した相手を一人放置していくだろうか、出入り口は施錠されているし、部屋の中に監視カメラもあるみたいだが、真面目な話をしていた筈だっただけに、その落差が酷い。

「さてはアイツ、かなりのポンコツだな？」

組織内では有能なのだろう、パイロットとしての腕も悪くはない筈だ、それでもこうして間抜けというか、何処か締まらないところがあるところ、ジョーカーという人間は完璧という訳ではないらしい。

まあそれが人間なんだが、当事者としてはどう反応すれば良いのか困惑する。

「まあ、酒が入ったの言葉だから嘘って事はないと思うが……」

あれがオレを信用させる為の演技なら大したものだが、完全に素だと思ふ。

少なくとも、亡国機業という組織で設立当初からの理念を守ろうという保守派とも言うべき派閥は真つ当に人類の行く末を案じているというのは分かった。

対して武力による人類の管理と統治を行おうとしている過激派は

ガンダム世界の強化人間系の技術にも躊躇いなく手を出す存在だと分かった。

個人的にも付き合うなら保守派の方が好ましい、当然ながら実際に過激派の連中を見てみないことには分からないが、仮にジョーカーの話を真実とするなら厄介な連中なのは確かだろう。

何にせよオレは亡国機業という組織の全てを把握した訳ではない、なら暫くは様子見として組織の事を見極めるのが良いだろう。

あ、過激派に関しては本当にブーステッドマンや戦闘用コーディネイターに関与してるなら潰す、容赦無く潰すつもりだ。

しばらくは情報収集に努めるとして、可能なら連中の保有している技術は回収したい。

この艦は世界中にある亡国機業の拠点の一つに向かっているという話だ、本格的に動き出すのはそこに到着してからにして、今は大人しくしておく。

取り敢えず繋げたままだった通信は解除、あとはその時に応じて写真や動画を篠ノ之博士に送るとしよう。

その後、試しにベルを鳴らしてやってきた人に部屋まで案内して貰い、そのまま休んだ。

広めの部屋、装飾などはないがシンプルで机やベッドなど生活に必要なものは揃っており、ユニットバスまで完備されていた。

加えて部屋も出られない訳ではない、重要な区画に入るのは禁じられているが、それでも艦内を見て回る事も出来る。

左腕に鍵としての機能を持つと共に発信機にもなっている腕輪こそあるが、それで開かない扉の向こうが立入禁止エリアという訳だ。

とはいえ腕輪も扉もハッキングすれば開く事は出来る、それをしないのは艦内で強い悪意や悲しみを感じないからだ。

ニュータイプとしての力なのか、仮に艦内に強化人間のような人間が居たりすれば違和感を感じるだろう、少なくとも夏休みに行った作戦で感じたような残留思念を此処では感じない。

その研究をするスペースがないのか、本当にその手の技術には手を出していないのかは分からないが、直ぐに敵対する必要はないという

事だ。

篠ノ之博士の方も此方の動きに合わせて行動を開始するらしい、本物のネエル・アーガマが動く瞬間に居合わせる事ができないのは少し惜しいが、合流すれば幾らでも見れるから良しとしよう。

そんな訳で最近の訓練やらゴタゴタしてゆっくり休めていなかった為に大人しく過ごそうと思っただが、そうもいかない理由があった。

「何しに来た、織斑マドカ」

「無論、決着を着けにだ、紫藤康太」

ベッドに寝転んでいたところに部屋に入ってきたMこと織斑マドカ、その手には二振りのナイフが握られていた。

74話 成長する者たち

正々堂々真正面からいきなりやってきた襲撃者こと織斑マドカ、それに対処する為にベッドから起き上がり、いつでも動けるように構えを取ると、マドカは二振り持っていたナイフの片方をオレに放つてくる。

それを空中で受け取り咄嗟に構えるが、握ってみて違和感に気付く、本物にしては軽過ぎるのだ。

「ゴムナイフ？」

夜戦にも使えるように艶消しの施された黒いナイフかと思ったが、刃に触れてみれば触感も違うし、力を込めれば簡単に曲がる訓練用のナイフだった。

殺傷力など無い代物を何故用意したのか、マドカの真意を測りかねていると、向こうから口を開いた。

「本当の決着はISを用いてと決めている。だがそれはそれとして、私はお前と決着を着きたい。格闘戦でも射撃でも、何でもだ」

「何故そこまで拘る？無論、オレもいつかは雌雄を決するべきだと思っっているが、それは今やらなければならない程か？」

「そうだ。それが私の存在意義なのだからな」

「存在意義ね。勝利する事が？」

「そうだ。お前は私がお前なのか、知っているか？どうして生まれたのか」

「いや、名前しか知らない。そして織斑という姓とその容姿から織斑家と何らかの関わりがあるという事くらいだな」

織斑マドカ、その名前はリナから聞いていた。

亡国機業のM、その本名という事だが、逆に言えばそれしか知らない。

「プロジェクト・モザイカ、かつてそう名付けられた計画があった」

「うん？」

「日本語に直すと織斑計画と呼ばれたその計画の目的は究極の人類を生み出す事であり、その一番初めの成功例となったのが織斑千冬であ

り、それを男性にしたのが織斑一秋と織斑一夏という存在だ」

しかしマドカの口から語られたのは予想以上にぶっ飛んだ内容であった。

一瞬何を言っているのか分からなかったが、改めて噛み砕いてみると織斑家の人間は全員が純粹な意味での人間ではないという事になる。

「そして、私はその計画には無かった失敗作と呼ばれている」

「成程なあ……」

そう言われてオレは天を仰いだ、似たような出自のガンダムのキャラクターを知っており、それ故に何をしようとしているのかを。

「お前の目的は、オリジナルにして成功例とされる織斑千冬や織斑兄弟を倒す事か？」

「その通りだ。その為に私に敗北は許されない。故に、まずはお前に勝つ」

自身のアイデンティティの問題なのだろう、同じように生み出されて一方的に失敗作という烙印を押された者達は多く居る。

カナード・パルス、ゾルタン・アツカネン、特にカナード・パルスはマドカと境遇が似ている、究極のコーディネーターとして生み出されたスーパーコーディネーター、キラ・ヤマトの失敗作とされた人物に。

そして、失敗作の烙印を拭い去る為に、その成功例を越えようというのだ。

「それに関してだが、何を以て超えたと証明するんだ？真正面からの戦闘で打ち負かしてか？」

「そうだ」

「それ以外はどうするんだ？戦闘以外の分野で、だ」

「何だと？」

「例えば、生活に関してだな。一秋は料理が上手い。家事も一通り熟せる。逆に織斑先生、織斑千冬だが、人間としてはダメ人間な部類だぞ。まず掃除だが、部屋が汚い。色々とゴミやら脱ぎっぱなしにした衣服が散乱していたりする。そういった点ではオレの方が上だ。究

極の人類って定義は何処に設定されているんだ？」

「ムツ……」

少なくとも、オレには究極の人類なんて存在が眉唾物だ、織斑教諭はさつき言った通りだし、一秋はマイナス思考だし、一夏は唐変木だし、その織斑計画で生まれた成功例という者達は誰もが欠点を抱えているただの人間にしか思えない。

何が究極なのか、その辺りは結局は決めた人間の主観でしかない、戦闘能力の高さなら全員当て嵌まるかもしれないが、それが普段は何の役に立つのかと言われてしまえばそれまでだ。

身体能力の高さも、あつて困るものではないが無くても大きな問題にはならない、スポーツ選手として活躍するなら必要だが、生き方はそれ以外にもある。

結局、何のための能力なのか、それをどう活かすかが重要なのであつて、それは本人の自由だ。

「だが、貴様だつて強さを求めているではないか！私と何が違う！」
「オレは強さは手段であつて、お前は強さが目的という事だな。余計な横槍を入れられない為に強さを必要で、オレの夢に必須という訳じゃない。だがお前は織斑千冬を超える強さが目的なんだろう？」

オレの目的は宇宙開発であり、そこに武力は必要ない、持っているのは邪魔をさせない為だ。

だがマドカの目的は織斑千冬を超えること、そこには強さという手段が必要で、それでしか果たせないと考えている。

確かに勝ちたいという思いはオレにもある、だがそれだけで生きていく訳でもないのがオレだ。

互いに強さを求めてはいるが、そこだけは明確に違うのがオレ達なのだ。

「なら、どうすれば良いのだ……私は何の為に生まれたというのだ！」
「知るか、自分で決めろ。織斑千冬に勝ちたいなら勝てるようになれば良い。けど、人生なんてそれだけで成り立ってる訳じゃないからな。オレだつてISの訓練やつてるが、色々と技術開発をしたりしてる。アニメや音楽を楽しんだりもしてる。単に狭い世界しか知らな

いなら、色々見て探せば良いんじゃないか？自分探しの旅、なんて言葉もあるくらいだからな」

兵器として創られたクロエやラウラだって人として生きているんだ、最高の人間として創られたなら、人間らしく生きて良いだろう。

そう考えてマドカに伝えてみたが、マドカは暫く考え込むと一つ頷き、己の答えを出した。

「ならば私は織斑千冬を超えよう、戦闘能力だけでなく、人間として」「良いんじゃないか？人生なんて楽しんだ者勝ちだろう、事実俺は楽しく生きてる」

「だろうな。よし、では改めてナイフファイトを始めるぞ、紫藤康太」
「待て、今の流れで何故そうなる」

戦いだけの人生なんて勿体ないと思ったのもあるが、もしかしたら口先で丸め込んで格闘戦を回避できないかと少しだけ思わなかった訳でもない。

「それはそれ、これはこれだ。やはりお前とは決着を着けたいというもの私の偽らざる願いだ。さあ、構えろ紫藤康太！」

「いやマジかよグワーっ——」

結局、ろくに構えている暇もなくマドカはゴムナイフで斬りかかってきた。

咄嗟に迎撃するのだが、結果はナチュラルがコーデイネイターに格闘戦で勝てるか想像して貰えば察して貰えることだろう。



康太と亡国機業の会談がぐだぐだになった事で通信も切られたが、IS学園一年生専用機持ち組は早速とばかりに訓練を始めていた。

そんな中で新たな兵装をラビットフット社より提供された者たちは、その新装備を扱う為の訓練もまた並行して行っていた。

「がつ!？」

「ぐっ!？」

「キャンボール・ファストの疲労もあるだろうが、徹底的に絞れと言ったのはお前達だからな。ほれ、休んでる暇はないぞ」

この為にアリーナを一つ丸ごと貸し切つての特訓である、甲龍を纏

う鈴と紅椿を纏う筈の二人が、共に二刀を手にして斬り掛かるのは学園の訓練機である打鉄を纏う千冬だ。

それも四本の刀を一本のブレードのみで凌ぎ切るといふ、手数之差を完全に覆した技量を見せられていた。

「ISによる剣技は生身のそれとは勝手が違うと言っているだろう。加えて機体ごとに出力も違う。機体に適した剣技というのは蓄積が無い分、パイロット自身が最適化させるしかないぞ」

ISの近接戦闘用の装備は人間の物をスケールアップしたような形状をしているが、それでも生身の感覚をそのまま使える訳ではない。

そもそも空を飛ぶのだ、踏ん張りの利かない空中での剣技など経験のある者など皆無なのだ。

加えて機体ごとに形状や出力の差がある、更には剣技のみならず相手からの射撃を掻い潜る必要もあるなど、その立ち回りは剣道などとは比べ物にならない程に複雑怪奇となる。

おまけに康太などはビームサーベルを利用して為、罅迫り合いの状況から唐突にビームの発振を切って拮抗状態を打ち切ることで体勢を崩すなど、武器の特性を利用した戦術もしてくるのだ。

実体剣を持つ為にならぬような戦法は不可能な鈴と箒だが、彼女たちはそういった戦術を警戒し、対処する必要もあつた。

今は打鉄の日本刀型ブレードだから大丈夫だが、慣れてくれば千冬もまた同じようにビームサーベルを使用した訓練をしてくるだろう、だからこそ二人はまだこのようなどころで止まっているわけにはいかないのだ。

「もう一本お願いしますー!」

「アタシも、まだまだこれからよー!」

「良いだろう、来い」

◆ 故に得物を握り直し、再び千冬へと向かって行くのだった。

「決戦用に武器を提供するって言ってたけど、流石にこれは多すぎじゃないかな?」

ところ変わって、ラビットフット社の武器庫と呼ばれている部屋にて大量に並べられている武装を前にシャルロットはそう独り言ちた。幾つも並んでいる棚にジャンル毎に分けられている武装の山、それは康太が時折思い付いたように試作したり、束がガンダム世界の技術を見てインスピレーションを受けた事で生まれた産物だった。

「しかも、これで一割って……」

更に付け加えると、そこに並んでいる物は全て実際に制作したものであり、設計だけ済ませたが制作には踏み切っていない武装は更に大量にあり、それも希望すれば生産するというのだ、なので設計のみではあるがそれらを纏めたデータベースにも目を通さなければならぬ。

理論値に設定されたデータはシミュレーターの中にも入っていて、一部を除けばそれらは学園のシミュレーターでも使用可能だ、しかし数が数だけに全ての武装を把握しているのは康太くらいのものである。

だからこそ、シャルロットは自身が扱う武装に関して全てに目を通して時には試用する必要もあるのだ。

端末に表示されているリストの長さに気が遠くなりそうな思いだったが、シャルロットは一つ深呼吸をすると真剣な表情で一つ一つに目を通していく。

何故このような事になっているかというのと、シャルロット自身の戦闘スタイルを考慮し、予想される亡国機業との決戦ではシャルロットの得意とする高速切替を主軸とした数多の武装を使用してのものに決めたからだ。

ストライカーパックはがらりと機体特性を変えることが出来るが、それでも対処可能な戦術には限りがある。

そこで一番汎用性の高いスペキュラムストライカーを装備し、かつて使用していたリヴァイヴの戦法を取り入れることで、本来のシャルロットの戦闘スタイルに戻す事にしたのだ。

とはいえそれだけでは心許ないため、こうして武装の強化を図っているという訳である。

「んー、参考になるのはやっぱり康太の戦法だけど……康太が使っていない武装もあるからね。というより、本当に多すぎない？絶対に使わない武装とかもあるよね、これは」

しかし流石に量が多い、シャルロットも真剣に見てはいるが、中には何に使う為に作ったのか分からない武装も多く、使い道を考えるのにも時間が過ぎていく。

そんな中で一つのジャンルのページに行き着き、その目が留まった。

「複合武器、複合武器かあ……」

それは複数の機能を持つ武装を纏めたページだった、射撃武器を備えた剣や、盾と一体化した銃など、様々なものが雑多に纏められている。

だが複合武器とは幾つもの機能を併せ持つと言えば聞こえはいいが、実際には扱いの難しい武装だ。

敵や距離に応じて機能を切り替えたり、場合によっては他の機能が使えず重荷にしかならないということもある。

また剣と銃の機能を備えていたとして、十全に使いこなすにはパイロット自身が両方の技能に長けている必要もあった。

それでも幾つもの武装を使いこなしてきたシャルロットにはそれらの武装が魅力的に映っていた。

「取り敢えずはコレとコレ、後はコレだね。似たような装備でも使い方が違うし、片手武器なら両手を使えば両方使えるし、高速切替で武器を持ち換えるよりも早いし、良いかも」

残念ながら設計のみで現物は存在しない武装だったが、ピックアップアツプした武装にチェックを入れてシャルロットはシミュレーターへ向かった。

シャルロットの強みは対応力の高さだ、大抵の場合にはチームを組めば欠けている前衛や後衛といったポジションを問わずに代行することが出来る。

格闘戦も射撃戦も卒なくこなせるシャルロットにとって複合武器を扱うのは何ら難しいことではなかったのである。

そうしてシャルロットはそれから更に複数の武装を試し、選び抜いたあとは武器の習熟を行い、来る決戦の時を待つのだった。

◆ 「まだ、足りませんわね……」

ラビットフット社のラボは現在、専用機持ち達には許可が与えられ自由にシミュレーターなどの使用ができるようになっていた。

シャルロットのように必要ならば武装の手配もされるし、学園のシミュレーターには無いデータを利用することも出来る。

そんな中でシミュレーターに一人籠もっているのはセシリアだ、他にもシミュレーターを利用している者は居たが、セシリアは一人でデータ上の敵機と交戦していた。

その相手はジェガンだ、それも機動性と格闘戦能力を高めてあるR型である。

セシリアは両手で構えるスターライトmkⅢと機体に接続されたままのブルー・テイアーズからレーザーを放つ。

レーザーはそれぞれ不規則な軌道を描きジェガンへと殺到し、しかしジェガンもまた回避し、シールドで防ぎ、ビームサーベルで斬り払っていく。

そのジェガンはかつての康太を想定して設定が施されていた、具体的には学園祭の裏でマドカと交戦していた際の戦闘データを基に組まれている。

とはいえ康太はニュータイプ特有の勘の鋭さにより撃たれるより先に行動に移すことがある、そこで今回はセシリアの思考を読み込みジェガンの動きに反映する事で擬似的に康太の動きを再現している。では何故こうしてセシリアが対康太を想定したシミュレーションを行っているかと言うと、マドカの実力が自分より上だと判明している為に、そのマドカに近付く為の指標としてマドカと単独で交戦したこのある康太を目標に定めたのだ。

しかしマドカが駆っていたプロヴィデンスとセシリアのブルー・テイアーズではそもそもレーザーを放つ砲門の数に大きく差がある。加えてオールレンジ攻撃を仕掛ける際のビットの数も違う為、未だ

に有効打を与えることは出来ていない。

「やはり手数で劣る私では同じ戦法は使えせんわね。そうになると、私の長所を伸ばす方向に舵を切る方が良さそうですね。——」

一通りジェガンへと攻撃を行い、その尽くが防がれたことでセシリアは戦術を変更する。

元より砲門の数でプロヴィデンスには及ばない、故にセシリアが極めるのは精度の方だ。

「この方、確かに複数のビットを操り、偏向射撃まで行える点は見事としか言いようがありませんが、一度外したレーザーの制御をしていないところを見るに、一発ごとの制御は甘くなっていますわね。なら、そこで差をつけて見せましょう」

康太とマドカの戦闘記録を見直し、セシリアはマドカの偏向射撃の癖を見抜く。

確かにマドカの技量は高いが、それでも完全に偏向射撃を使いこなしているとはいえない。

偏向射撃は理論上、大気中でレーザーが減衰してしまうまで自由自在に操ることが可能だ。

しかしマドカのそれは、死角などからの攻撃の為に曲げたりはしているが、康太に回避されると制御を打ち切り、新たに射撃することを選んでいた。

操作するビットの数も、偏向射撃の数も多い為に無理ならさっさと割り切って新たに撃つ方が早い、そう判断したのだろう。

その点でセシリアは砲門の数が少ない為、撃ったレーザーを最後まで制御していても負担は少ない、慣れれば偏向射撃の制御をしつつ、新たに撃ったレーザーの制御まで可能となるだろう。

良さそうな手を思い付いたとなれば即実践、セシリアはビットからレーザーを放つと四方からジェガンに向けて攻撃した。

今回は防御のみに設定してあるジェガンはセシリアの攻撃が来るまで待機している、それがレーザーを撃たれる前には動き出し、シールドとビームサーベルで防御、二発は機体を捻って回避する。

しかし回避された二発のレーザーは軌道を変えて再びジェガンに

迫る、そこにセシリアは追加でビットより四発のレーザーを追加し、計六発となったレーザーがジェガンに迫る。

回避と防御、上手く使い分けてレーザーを凌いでいくジェガンだが、動けば動くだけ次の動きを取るまでの時間が長くなる。

そして避けきれなかった一撃を被弾、セシリアもまたジェガンの装甲を避け関節部を狙ったことで損傷を受けたジェガンは徐々に動きが鈍くなっていく。

砲門の数が足りなければ、撃ったレーザーの数で補う、撃たれたレーザーは制御され、四方八方から襲い掛かる、それがセシリアの考えた対抗策であり、全身の関節部を撃ち抜かれたジェガンが四肢を失った状態で墜落していった。

「あくまで康太さんを模した劣化コピー、本物にどこまで通じるかは未知数ですが、私もいつまでも負ける気はありませんわよ」

撃墜されたジェガンの姿が消えていき、同じ設定のジェガンが新たに出現する。

今の攻撃はセシリアに向かって反撃することがないように設定されていたからこそ、セシリアは攻撃のみに集中出来た。

ならば実戦で攻撃を回避しつつ、高速機動中にも同じことが出来るようにならなければならぬ。

その為に、セシリアは偏向射撃の練度をより高めていく為にシミュレーションを続けていくのだった。



セシリアとはまた別のシミュレーター、海上というフィールドが設定された中、五機のISが移動していく。

まず先頭を進むのは一秋の駆る白式だ、こちらはそもそもの拡張性の少なさから変化はない。

だが周囲を固めるように隊列を組んでいる三機のユニコーンガンダムは装備が普段と違っていた。

その姿は一言で言い表すならば「刀や槍の束を背負って見栄を切る古代の戦士」といったものであった。

それこそが多数の武装によって火力が大幅に増強されたユニコー

ンガンダムの新たな姿、フルアーマーユニコーンガンダムであった。それが現地改修であるが故に本来は装備されなかったバンシイとフェネクスにも装備されており、その三機で弾幕が形成されれば突破は困難なものになるだろう。

しかしこれまでの四機はまだ普通と言えた、その四機が囲むように展開している最後の機が一番特異な姿をしていた。

全体的に見れば人型をしている、各部にビーム砲やコンテナを装備し、一見すると普通のISのように見えるだろう。

だがそのサイズが規格外だった、パイロットはラウラだが、そのラウラが普段使用しているシルヴァ・バレットは通常仕様となり、その機体の胸部に収まっている。

その様子はまるでISがISを纏っているかのようで、それだけでも機体のサイズが桁違いだとわかるだろう。

かつて対デビルガンダム用に康太が提案していた機体、『わがままな美女』と開発コードを呼んでいた機体、その機体コンセプトを受け継いだ機体に手足を追加した機体だった。

対巨神兵器形態と名付けられたそれは機動兵器としては最高レベルのものに仕上がっていた。

そんな巨体が並のISと同等の速度で飛行しており、更に機動性でも引けを取らないのだ、相手からすればたまったものではないだろう。

「大丈夫そうか、ラウラ?」

「問題ない。確かに体への負荷は大きいが、この程度ならば軍に居た頃にも似たような訓練を受けたことがある。それよりは少し軽いくらいだ」

そして、巨大さに見合うだけの重量を誇る本機には追加で配置されている小型核融合炉が搭載されているとはいえ、その加速力から生じるGはかなりのものだ、強化されたPICによる保護があるとはいえ通常のISよりもパイロットに掛かる負担は大きい。

その機体のパイロットとしてラウラが選ばれたのは強い耐G能力を持つことが理由であり、他の四人は巨体故の死角をカバーする為の

随伴機としての役目であった。

対巨神兵器形態という圧倒的な戦力による一点突破、それがラウラの役目であり、一夏、一秋、クロエ、リナの四人はその露払いとなる。「慣熟飛行は終了。皆さん、構えて下さい。これより戦闘開始です」そして、新しい機体に慣れてきた辺りでクロエがシミュレーターの設定を変更、フィールドが一面の平野となり、敵機が出現する。

それらは地表を、空を埋め尽くさんとばかりに現れたデスアーミーの群れ、かつて臨海学校の際に接敵したデビルガンダム軍団、その再現だ。

あの時は此処に居る五人だけでなく、他の専用機持ちや無人機部隊、教員部隊と共に戦闘を行った。

設定された数はその時と同じだ、だがそれを五人だけで攻略するのが今回の目的であった。

「やっぱり、数が多いな」

「でも少なくとも、俺達だけでこれを乗り越えれば確実にあの頃より強くなったって事だよな」

「私その時のことを知らないんだけど、本当にこんなに居たの？」

「必要なら後で私達の戦闘ログを参照しといて下さい。それより、間もなく交戦しますよ」

「いざという時、康太が使う機体を預けられたのだ。その期待にも応えらしよう。私が先制攻撃を放つ、行くぞ！」

その数を見てそれぞれが感想を述べる、その上で誰もが戦意を漲らせ、火蓋を切るその時を待っていた。

そしてラウラの乗る機体がまず動き、機体の各部に備えられている武装を解放した。

まず機体に備えられた二門のハイメガキャノンが収束した状態で撃たれ、機体の向きを変える事で薙ぎ払うように敵機を呑み込んでいく。

地表を進むデスアーミーはそれによりかなり減らされ、続けて両手の指に備えられたビーム砲やが空を行く敵を撃ち落としていく。

とはいえ敵の数も多い、当然ながら撃ち漏らしというのは出てくる

のだが、そんな敵機を別方向からの弾幕が削り取っていく。

「クツ、数が多い……」

「下手に避けるより、シールドバリアで受けて反撃した方が良さそうね！」

「敵機、更に来ます。後方に回り込まれないように注意して下さい。上方より敵機接近、三機です！」

「こっちで対応するー！」

射撃は得意ではないため、兎に角弾をばら撒くことを意識する一夏、可もなく不可もなしなりナ、そして高い情報処理能力によりの確な武装選択と指揮を熟すクロエの三機のユニコーンガンダムがラウラと射線を被らせないようにカバーしていく。

そして小回りが利かないラウラのカバーは一秋が行っていく、一度高度を上げ、ラウラの頭上から襲い来る三機のデスバーデイに対してライフルで一機落とし、大型クローに内蔵されているビーム砲をシールドで防御、吸収しながら接近、すれ違い様に残る二機を雪片にて斬り捨てた。

白式は元より一対一を想定した機体である、二次移行によって刃風となった今も多数の相手を一度に撃破する手段は持たない。

だが速度は一級品であり、的確にラウラの死角となる場所をカバーするように立ち回っていた、そんな一秋を信頼するからこそラウラも攻撃の方に集中出来ている。

場合によっては一夏たちは個別に動くことも想定されている、故に一秋はラウラの盾となることを自ら心掛けていた。

恋人同士のタッグはその息も合っており、ビームなどのエネルギーシステムであれば吸収可能なシールドもあり、一秋はこのシミュレーションの間、一発の有効弾も通さないのであった。

◆ 「関係各所への根回しは既に済んだわ。例の戦艦、問題なく使えるわよ。後は実際に発進する時に周囲の航空機に退避を促すだけ、そちらのタイミング次第ね」

「りよーかい、私の方も全ての動作確認は行ったからね、いつでも動け

るよ。だから動くのはこーくんが動く時だね」

「捕まったと思えば実際は潜入だった、知らされるまでは焦ったわ。情報操作も今のSNS全盛の時代には難しいし、学園にも批判の嵐ね。だからこそ、作戦が終わったら大々的に戦果を発表して矛先を逸らす。でも良いのかしら、あんな物を世間に出せば世界が騒がしくなるわよ」

「別に良いよ、凡人たちの声なんてどうでも良いし。本当に宇宙開発が進む、そう意識づける良い機会でもあるからね」

ラボの一室、各自が特訓を始めてから数日が経ち、それまでキャノンボール・ファストでのテロ事件に対する情報操作に専念していた楯無と束は作戦の打ち合わせを行っていた。

ネエル・アーガマを使うことは事前に決まっていた、元より康太が連れ去られた場所によってはISの長距離飛行が厳しいと見られていたからだ。

エネルギーは温存した方が良く、何よりパイロットの負担は極力減らすべきであり、また最前線で補給や整備が可能というのは大きい。

とはいえ戦艦という巨大な兵器を動かすのだ、日本政府への根回しや各国への通達は必要となる、所属不明として軍から攻撃される可能性も高いため、事前の通達は必要だった。

表向きは亡国機業の拠点が判明次第の出撃となっている、それで時期は伏せているが、世界中に潜伏している亡国機業のスパイには奪還作戦を計画していることが知れ渡ることだろう。

とはいえ誰も戦艦が宇宙に出て大気圏再突入してくるなど予想もしないだろう、それだけで奇襲としてのアドバンテージは大きい、だからこそデメリットにはなりえないのだ。

「それで、康太くんは今どうしてるのかしら？あれから何か連絡があったのよね？」

「んー、こーくんならもう少しで動くかもだって。亡国機業の基地にガンダムがあったから、ついでに強奪するってさ」

「ついでで奪うって、何だか亡国機業が哀れね……」

「機体が機体だから、むしろ強奪しない方が失礼だと言ってたよ」

束も楯無も知らないが、康太が亡国機業の基地で見付けた機体は劇中で強奪されたことのある機体であった。

そして、そんな中で束の端末に通知が来る、そこには康太が動くという一言だけがあった。

「あ、こーくん動いたね。よし、直ぐに動こうか！」

「ちよつと、いきなり過ぎるじゃない！皆にも伝えないとだし、もうちよつと段取りを考えて欲しいわ！」

「なんかハプニングで潜入が難しくなつたんじゃない？まあ、やるかには急ぐよ。ほら早く早く！」

それを受けて大急ぎで準備を始める束と楯無、ネエル・アーガマの核融合炉を本格的に稼働させ、専用機持ちの全員を招集すると共に各国政府への通達も行っていく。

「ところで、目標は何処なの？」

「そういえば言っとなかったね。場所も分かってるし、先に教えてあげよ。目標——南米、ギアナ高地」

75話 反撃開始

さて、オレが亡国機業に捕まってから一週間が経過した、流石にそれだけの時間があれば亡国機業の基地に辿り着くのに十分すぎるほどだ。

その間、オレが何をしていたかといえば、ISを介して篠ノ之博士に現状報告をしたり、マドカと様々なことで競ったり、部屋の中で適当な物を楽器代わりにして歌っていたり、色々だ。

そんな中で基地に着いてから一つの自由が与えられた、仕事とも言えるがオレの中では殆ど趣味と変わらない内容だ。

「これは？」

「ワタシ達の派閥とスコール達の派閥が保有する機体データよ。ワタシ達はこれをギフトと呼んでいるけど、要は貴方が知る世界の技術ね」

「ほほう」

与えられた部屋の中にはやけに性能の良さそうなPCが置かれており、それまで殺風景な部屋だったのに比べて目立っていた。

加えてそれがガンダム世界の技術、オレ達が漂流物と呼んでいるそれだとなると興味は尽きない。

「それで、オレにどうしろと？」

「貴方の好きなように研究して貰って構わないわ。勿論、その内容は共有させて貰うけど、ワタシ達の機体データを見せるのはせめてもの誠意ね」

「普通は拉致してきた相手に協力なんてしないだろう。まあ、オレは普通じゃないけど」

むしろ興味津々だ、危険過ぎる代物には手を出すつもりはないが、多少は研究してもいいだろう。

そんな訳でしばらくの間、オレは亡国機業の技術開発に少しだけ協力することにした、ファイルが二つあり、片方にはトランプと、もう片方にはモノクローム・アバターとあり、それぞれの派閥という事らしい。

ざっと眺めてみると、トランプの方はS E E Dに於ける連合側の機体が揃っており、モノクローム・アバターの方は連合、ザフトの機体が幾らか揃っているような状態だ。

恐らくだが過激派とやらはザフトの機体データを持っているのだろう、更に細かく見ていけばデータは虫食い状態らしく、根本的な部分で機体のコンセプトが分からないという状態のようだ。

例えばフォビドウンのデータがあったが、ゲシュマイディツヒ・パンツァーの記述が見当たらない為に、そのままだとビームを曲げるという一番の特徴が無くなってしまう。

具体的な研究開発は後回しにしても、この辺りの情報が抜けているのは喉に魚の小骨が引つ掛かったような気分だ、取り敢えず先に研究しているらしい技術者が書き込んでいるメモがあったから、そこにゲシュマイディツヒ・パンツァーの大まかな概要を書き込んでおいた。

そうして色々と夢中になってデータを漁っていると、チャットらしきものが表示された。

どうやらメモに書き込んだのを見た技術者のようだ、色々と質問がされるのに答えていく。

そもそもどのような機能を持つ機体なのか分からなかった為、そのコンセプトが分かったことで研究開発が進みそうだということだ。

ついでに何か情報を得られないかチャットを続けていく、加えてこれらの情報は全てオレの心臓のI Sを通じて篠ノ之博士の元へと送られている、こっそりとコピーした機体データを含めて全てだ。

データの中にはサイクロプスなんて物騒な代物のデータもあったが、それも本来ならば月面での採掘用の機材だ、活用出来るだろうかそれぞれ送らないとな。

それと、ついでにゲシュマイディツヒ・パンツァーの研究はしておきたい、今思いついたのだが、海底都市を建造してみるということを思い付いたのだ。

今の宇宙飛行士は宇宙服を着込んでプールで無重力空間に対する訓練を行ったりする、勿論地球の重力の影響はあるが、少しでも無重

力空間に近付けるためだ。

そしてオレが海底都市の建造を思い付いたのは、そこでのデータは必ず宇宙開発に必要なデータを得ることが出来ると思ったからである。

例えば海底都市だけで酸素や水の循環システムを作ることが出来れば、それはそのまま宇宙で月面都市やスペースコロニーを建造する際に応用が利く、加えて地球上に建造する為、有事の際に宇宙に比べて素早い対処が可能となる利点もある。

その建造にはISやMSを使えばいい、そのノウハウは先程も述べたように宇宙開発にも応用出来るからだ。

しかし水圧という難点があり、既存の水陸両用MSはそのまま装甲だけで耐えきることでは無い。

そこにゲシユマイディツヒ・パンツァーを利用すればフォビドゥンブルーのように深くまで潜ることも出来る、エネルギー切れに関しては船から有線ケーブルでの電力供給を行えば解決だ。

オレの研究対象ではないが深海に関する研究をしている人達にも有用だろう、建造した海底都市はそのまま研究機関として利用しても良い。

うん、そんな訳で長々と述べたが目の前にエサが置かれているからといって、決してガンダム作りたい欲が出た訳ではないぞ、これは今後のラビットフット社の活動にも有用と言える研究なんだ、使う使わないはともかくとして、ラビットフット社の予算は全く使わずに研究開発が出来るからなのだ。

技術的な目新しさのないカラミティやレイダーより研究対象としては適切だし、別の技術に繋がるかもしれないからな。

というよりも、オレがこの場を離れるとなったら研究データは全て削除するからな、恐らくだがこの基地も大きな被害を受けることになる筈だ、だから問題ないだろう。

よし、取り敢えずはミラーージュコロイドを応用したビームサーベルの磁場固定技術から調べてみるとするか。

◆ 「それで、彼の様子はどうかしら？」

康太が研究に入ってから更に数日、ジョーカーはスコールと対面していた。

互いに別の派閥の長であり、同時期に活動を始めたこともありライバルのような関係ではあるが、それでも過激派よりは話も通じるというところでこうして顔を合わせての情報交換などは行っていた。

まずは過激派の動きに関して互いに把握していることを共有し、そのあとでスコールの方からジョーカーに訊ねたのは康太の現状に関してだ。

今は研究に取り組んでいるとマドカを通じて把握しているが、具体的にどの程度まで研究が進んでいるのか気になったのだ。

「それに関しては順調といったところね。パイロットではあるけど、技術者としても中々に優秀だわ。その機体を知っていたというアドバンテージがあっても行き詰まっていた機体データの解析と研究開発が驚くほどに進んでいるもの。既に実証実験の段階に入っているわ。とはいえ進行状況を聞く限り、既に殆ど完成したと言ってもいいわね」

「そう。此方のデータには手を付けていないみたいね」

「そもそも研究対象としてあまり魅力を感じていないといったところね。今の実証実験も別の機体に繋げる為の試験らしいわ」

そんな二人の視線の先には分厚い防弾ガラスの向こうに居る康太の姿だ、フォビドウンのシールドを模した装置が一枚だけアームに固定されており、そこに有線で繋いだ端末で作業を行っている。

「ところで彼の後ろにある機体は何かしら？」

「今回の実証実験では実際にビームを撃つ必要があるのだけど、流石にISを渡すわけにはいかないからザクをあげたのよ。そうしたら片手間に改造してたわ」

「データで見たグフ・イグナイテッドに似てるわね。けどバックパツクからして違うし、武装も左腕に集中しているように見えるから別の機体かしら？」

「本人もグフ・カスタムって呼んでいたわ。恐らく、専用のカスタム機が装甲の形状が違うことから別の機体なのでしょうね」

そんな作業中の康太だが、その背後には一機のMSの姿があった。その正体はジョーカーの言う通り、与えられたザクをベースに康太なりに改造を施したグフ・カスタムだった。

原型機と違うのは実験の為にビーム兵器の使用が可能な点であり、その為に左腕のガトリングガンもビーム仕様に変更されていた。

何故ザク・ウォーリアからのグフ・イグナイテッドではないのかといえ、その時の康太の気分の問題でしかない。

そして中身の方は康太の動きに可能な限り追従できるよう駆動系を強化されており、MS同士に限るが原型機同様に近接戦闘では無類の強さを発揮する機体となっていた。

そんなグフに、全ての準備を整えた康太は乗り込んでいく。

機体を立ち上げると近くに立て掛けていたザク・ウォーリア用のビーム突撃銃を持つと固定されたシールドへとビームを放っていく。

それらのビームはシールドの表面で屈折し、その後方へと逸れていくことでシールドは全くの無傷であった。

同じく左腕のガトリングガンも試すが細切れに放たれるビームは先程と同様に後方へと逸れていき、完全にゲシュマイディッヒ・パンツァーが機能している事が確認できた。

「成功ね。あとは技術は出来たのだから、次は攻撃に転用するだけだわ」

その結果を見てジョーカーは満足そうに頷いた、フォビドウンのゲシュマイディッヒ・パンツァーは攻撃として誘導。プラズマ砲フレスベルグがあり、一度しか曲げられないがビームの直進するという性質から射線を読まれにくいという利点がある。

現時点でビーム兵器はジェガンをはじめとして広く配備されるようになり、対ビーム処理を施したシールドなどで防ぐか、もしくは銃口の向きから射線を読んで回避するしかない。

その対処法を潰せるのだから、この兵装がどれだけのアドバンテージを獲られるか、ジョーカーは頭の中で戦術を構築していた。

だがそんな思考を直ぐに塗り替えるような出来事が起きた、康太の居る試験場の隔壁が一部開き、その中から一機のISが現れたからだ。

現れた機体は打鉄だ、広く普及しているだけに亡国機業でも扱っているが、そのパイロットを見てジョーカーは一気に表情を険しくさせる、打鉄を駆るのは過激派に所属する人物だったからだ。

「その貴方、今は大事な試験の真つ最中よ。訓練がしたいなら他へ行きなさい」

それでも怒気を抑えつつジョーカーは打鉄のパイロットへと告げる、だが言葉はなく、嘲るような笑みと共に中指を立てるというジェスチャーが返ってくるのみだった。

「このつ……！ハーレクイン、直ぐに第二試験場へ向かって。過激派の連中が彼を奪いに来たわ」

それを見て一瞬血が登りかけたが、直ぐに通信を信頼できる副官に繋ぐと指示を出す、過激派が何をしに来たのか、それは康太の身柄を押しさえ、次は自分達の持つ技術の研究をさせようという魂胆なのだろう。

だがそれを許すわけにはいかない、だからこそ実力行使を行ってでも阻止する必要があった。

しかしハーレクインからの副官は予想を裏切るものであった。

「すまないジョーカー、直ぐに動けそうもない。向こうのエースが私を足止めに来ている」

「なっ!?」

その頃、ハーレクインを行かせない為に過激派きつてのエースが別の場所で彼女と対峙していた。

基地内での私闘は御法度であり、訓練施設以外でのISの展開など行わないという暗黙の了解がある中での強硬手段に、いよいよ過激派は自重しなくなったかとジョーカーは察した。

現に基地内の通路ではハーレクインの行く手を遮るように一機のISが展開しており、ハーレクインもまた対抗して愛機であるロツソイージスを展開している。

二機のISは原点となる世界で開発元が違う勢力の機体だ、だがその姿は何処か似通った部分を感じさせるものであった。

それはそもそのベースとなった機体が同一だからであり、もしも康太がその機体を見たのであればその対決を興奮した様子で眺めていただろう。

過激派のエースが操るダークグレーの装甲色を持つ機体、その名をプロトセイバーと言った。



さて、暇すぎたのと趣味を満足させる為に軽く研究を進めていた訳だが、見知らぬISとそのパイロットが唐突に現れた辺り、とうとう過激派とやらが仕掛けに来たのかね？

対立派閥のジョーカーは役に立たなそうだし、この場合は自力で切り抜けるのが正解か、幸いにもオレが趣味で改造したグフ・カスタムに搭乗しているタイミングで助かった、乗り込むにも少なからず隙きが出来るからな。

相手はジョーカーの方を挑発するとオレに向き直る、打鉄の代名詞とも言うべき日本刀型のブレードたる『葵』を突き付けながら。

「さあ、此方に来てもらうわよ特異点。言っておくけど拒否権なんて無いわ」

そして一方的に要求を述べるが、それに従う道理はない。

オレを拉致するという形になったジョーカー達ですら礼儀は尽くしてきたのだ、データ欲しさもあつたとはいえ、こうして研究はしているようにな。

だから返答は決まっている、左腕にマウントしているシールドからヒートソードを引き抜き、一言だけ告げる。

「断る」

「そう、だったら手足の一本くらい覚悟しなさい！」

その答えにむしろ望んでいたとばかりにブレードを構えスラストを噴かせる打鉄、斜めから袈裟斬りにしようとするのが見て取れた。

最高速度はやはりISの方が上、色々といじったグフ・カスタムだ

がグフ・イグナイテッドに似たバックパックを取り外して軽量化した代わりに瞬発力の高いロケットモーターを搭載したバックパックを付けている。

それは燃料を大量消費する代わりに爆発的な加速を得られる装備だ、今の状態では役に立たない。

あつという間に距離を詰めてくる打鉄、構えの通り斜め上段からの袈裟斬りが来るが、オレは前に倒れ込むようにしてその一撃を回避する。

「なっ!？」

「ふんっ!!」

だがそんな攻撃は織斑教諭の太刀筋に比べれば天と地ほどの差がある、ISのパワーの使い方が下手くそ過ぎだ、本当に上手い使い手であれば全身の駆動系を連動させてスペック以上の斬撃を叩き出すことも可能だ。

そして避けられるなんて想像もしていなかったのだろう、一瞬呆けた顔をしていた打鉄のパイロットに対して飛び上がると同時にバックパックのロケットモーターを起動、肩部スパイクで相手の顎を打ち上げるようにタツクルをお見舞いする。

「ッ!？」

流星に装甲の無い生身の部分とはいえ絶対防御によって防がれる、だが下からかち上げられた勢いは殺す事が出来ず、大きく後ろに仰け反る形になった。

「そっ!？」

そしてそんな大きな隙を逃すわけにはいかない、仰向けに倒れる形となった打鉄の脚をヒートソードで斬りつけ、その装甲を抜く。

更には追撃として今の切断面に向けてヒートロッドを射出、電流を流して内部の電気回路を破壊していく。

普段は装甲などで防護されているが、直に電流を流すというのは想定外なのだろう、立ち上がるとうとした打鉄の脚は全く動作せず、パワーアシストの切れた状態では生身の人間が機体を動かすのは厳しい。

その際にもう一度ロケットモーターで移動、背後に回ってカスタム・ウイングも斬りつけ飛行能力を奪う。

ISの厄介な点、機動力さえ奪ってしまえばそこまで脅威にはならない、被弾にさえ気をつければ良いのだから。

そして両腕もヒートソードで切断し、同じくヒートロッドでショートさせてしまえば身動きのとれなくなったISの出来上がりだ、ISコアは流石に篠ノ之博士謹製だけあってヒートロッドの電流くらいではビクともしないが、周辺機器はあくまで工業製品だ、幾らでも突ける点はある。

屋内という戦場、パイロットの練度、機体に対する理解度、様々な要因が噛み合いながら起きたのは一対一という状況でMSがISを撃破するという結果だ。

「さて、このままISコアを強奪して基地から離脱、でも良いわけだが――」

もう少し潜入できないか粘ってみるか、いざという時にはデルタカイを起動するだけだが、それだけに何処まで欲張ろうかと悩ましい。

ここで見たのは亡国機業の一派閥のことだけに過ぎない、可能ならば別の派閥の様子も見て多角的に見定めたいところではある。

いつそのこと強行偵察としてこのまま軽く押し掛けてみるか、そう考えたところで機体のカメラを入口に向ける。

移動の為ではなく、新たな気配を感じ取ったからだ。
「ロングダガーとデュエルダガー？」

感じたのは二つの気配、それらが同じように室内に入ってきて、纏っている機体を見るとカラーリングこそ違いが同一の構成の機体だった。

コーデイナーター用のロングダガーと、ナチュラル用のデュエルダガー、名前こそ違いが基本的な能力は同一の二機が並んでいたのだ。
「紫藤康太、我々は貴方を連れてくるように命令を受けている。共に来て貰いたい」

「断ると言ったら？」

「無理矢理にでもと言われている。しかしそれを為すことは本意では

ない。そして、そちらも我々と戦闘を行うには万全とは言えない筈だ」

先程のISパイロットと違って平坦な声ながらも理性的な内容だ、最初からこんな態度なら偵察も兼ねてついでに行くこと一択だったんだがな。

とはいえ中性的な声だ、乗ってる機体もだが話し方を聞いているとどうしても関連付けずにはいられない。

「良いだろう、機体から降りる。とはいえ一つだけ要望がある。顔を見せて欲しい、流石に相手の顔が見えないというのは不信感がある」
「それで貴方が納得するのなら。ただし機体を降りるのは私だけです」

「それでいい」

機体を降りたとはいえ何かしないとは限らない、だからこそ一人は顔を見せるがもう一人は機体に乗ったまま備える、しかし誠意を見せるならそれには応える、向こうが機体を降りると同時にオレもグフ・カスタムから降りる。

そして実際に見たその顔にオレはやっぱりかという思いを抱く、中性的であり無表情なその顔は見たことがあるからだ。

「ああ、なるほど。これで見極めることが一つ増えたな」

機体もその繋がりなのだろう、頭になったその顔はソキウスと呼ばれた者達と酷似していたのだから。



「それで、お前達の名前は？」

「僕はナインと呼ばれている。彼はファイブだ。姓を聞きたいのであれば、全員がソキウスと呼ばれているよ」

「やっぱりソキウスシリーズか」

その後、機体はその場に放置して、オレは一応ということでハンドカフによって両手を前に拘束された上で前後をソキウスに囲まれたまま通路を進んでいた。

既に二人はロングダガーに乗り込んでいる為、傍目から見れば今の状況で逃げ出すことなんか出来ない。

勿論、最終手段としてISを展開して逃げることは可能だが、やはり情報収集は必要だ。

「僕たちのことを知っているのか？」

「ナチュラルに従うように作られた調整された戦闘用コーディネーター、服従遺伝子を持ちマインドコントロールによって制御下に置かれている。そう言われて、どんな気分だ？」

「別に。けどナチュラルに従うように、という命令は僕たちにはない。きつと、元になった存在は貴方の言うような存在だったのかもしれない」

「何？」

「僕たちは試験管の中で生まれてきたんだ。急速に成長させ、一般的な知識を機械で書き込んで生産された兵士。そして今はあの方に従うように命令されている」

「あの方ってのは？」

「革新派のトップにして、これから貴方に会って貰う方だ」

ソキウスだがナチュラルへの服従ではなく、個人への服従か、出来なくはないのかもしれないが、それはつまりソキウスのような戦闘用コーディネーターを生み出す技術を保有しているということだ。

そしてそれに伴うマインドコントロールの技術も保有している、天才的な素質と絶対の忠誠心を持った兵士を量産可能とか厄介なことこの上ないぞ。

だがそうしている内に着いたらしい、扉が開かれ中へ案内されると、まず正面には豪華な椅子に座り高い位置から見下ろしている女の姿があった。

それはまるで王が座る玉座のようで、自分こそが支配者だと主張しているようだ。

「来たか、紫藤康太よ。私が亡国機業、改革派を率いているレッド・クイーンだ。クイーンと呼ぶがいい」

そしてその女は自らを赤の女王と名乗った、よく見れば玉座の背もたれはチェスのクイーンを模しているようにも見える。

「それで、女王様はオレに何の用があるのです？」

「うむ、単刀直入に言おう。我が軍門に降り、紫藤康太」

「そつちもスカウトって事か？それにしては手荒な勧誘だったか」

思い出すのはさっきのパイロットだ、一方的に上から目線で要求するだけ、そして目の前のコイツも大して変わりはない、それでも多少は接触を行う。

「我々改革派の目的は力による管理だ。分かるだろう、圧倒的な性能を持つISはその保有数によって簡単に国家間のパワーバランスを左右することが出来る、そして多くても一国に二十のISしか存在しない。だが我々が少なくとも全体の過半数のISを持つことが出来れば、それは国どころか世界でさえも凌駕する力となる。そうして他国のISを奪い、その殆どを手中に収めることが出来れば対抗勢力など存在しなくなる。反乱を起こそうとも、勝てぬと分かっていたら反乱など起きようがない。そうすることで世界は真に統一され、平和な世界を実現することが出来るのだ」

語られた内容は、ISという力による統治だ、抵抗が無意味とすればそもそも争いは起こらない、そうかもしれないが、その程度で止まるなら戦争など存在しないのも確かだ。

「無理だろう、ISは単体の兵器として見れば確かに強いが、それだけで世界がひっくり返ることなんて有り得ないことだ」

例えISを倒せずとも、兵站を狙う手もある、碌な整備も補給も無しに戦えるなんてことは幾らISでも不可能だ。

「だからこそお前を誘っているのだ。あの天災は殆ど表に出ないが、お前は違う。そしてお前には天災との繋がりがある。お前達が我々に協力してくれるなら、この統治は盤石なものとなる。その技術力、生産力、何よりISコアの製造技術があればな！」

そういうクイーンの言葉は確かに正しいだろう、オレ達は独自の生産拠点を保有し、更にはISさえも増やせるのだ、もしも一国に肩入れすれば、あつという間に軍事力のバランスは壊れてしまう。

だからこそオレ達は戦力として何処かに加担する気はない、そんな事よりも早く宇宙に出たいからだ。

なので返答は最初から決まっている。

「断る」

「そうか。ならば、力尽くで従わせてやろう！」

当然ながら受け入れる気はない、その答えにクイーンは玉座から立ち上がる。I Sを展開、右腕の巨大な爪で切り裂こうと突っ込んでくる。

コイツ等自分の思い通りにならないなら武力行使って短絡的すぎるだろう、ちよつとは交渉って言葉を知らないのか。

取り敢えず初撃は地面を蹴って横っ飛びに避ける、それに対して向こうはオレに反撃手段が無いと思ってるのか、余裕綽々といった様子でゆっくりと此方を向く。

「流石に避けるか。だが何処まで続くかな？」

改めてクイーンの駆るI Sを見る、名前の通り赤い装甲を持ち、右腕には盾と一体化しているクロー状の武装、何よりラビットフット社にて現在はストライカーパックの試験用として作ってあるだけに見間違いようもない機体。

「テストAMENT……」

別にウチの格納庫から奪取されたとかではないだろう、どうにも亡国機業はSEED系の機体を多く保有しているらしいし、単純に被っただけだな。

原作でもテストAMENTは二機存在したし、ある意味では運命とも言えるのだろう、まあ中身まで同じとは限らないけどな。

「知っていたのか。とはいえ感謝するぞ、お前達のがストライク・ラファールとやらを開発してくれたお陰でこの機体の優位性は飛躍的に高まったのだからな」

確かに戦場でストライカーパックを使う機体が増えれば、同じストライカーパックを使うテストAMENTは装備を奪って活動時間の延長などの戦術の幅が広がる。

それは確かにクイーンにとって都合だっただろう。

とはいえ、いい加減にこの茶番にも飽きてきたな。

「今後とも、同じように私の為に働くがいい、紫藤康太」

「お前の為に作った訳じゃない、それはシャルロットたちの為のもの

だ。そして、何度でも言うがお前に従うつもりは毛頭ない」

「ならば心変わりするまで痛めつけてやろう。それでも従わぬというなら、脅威の芽は摘ませてもらうとしようか！」

再び向かってくるクイーン、今度は逃がすつもりもないのだろう、右腕のクローと、左側からデイベインストライカーを変形させたクローで挟み込もうとしてくる、だがもう避ける必要もない。

「なっ!?!」

即座に心臓のISコアからデルタカイを呼び出し、身に纏う。

向こうはオレがISを持っているなど予想もつかなかったのだろう、動揺して動きが止まった瞬間を見てビームサーベルを両手に握り、それぞれのクローに対して斬りつける。

それによって武装に損傷を受けたテストAMENT、思わず後ずさるが、そこを逃さず左腕のシールドに武装を呼び出し、先端部分で相手の腹部に打突を見舞う。

「持ってけー!」

加えてシールドに呼び出した炸裂ボルトによって爆発による追加ダメージも与えておくのも忘れない、それによりテストAMENTは打突と爆発で大きく後方へと吹き飛んでいった。

「クイーン様!」

そして、主人が傷つけられた事でソキウス達も前に出てくる、だが機体はMSであり、パイロットがコーデイネーターだとしても苦戦のしようもない相手だ。

「さて、これまでの分、しっかりと利子つけて返して貰うとしようか」
具体的には格納庫に行こう、オレの予備機のジェガン・サーガとフラッグ、それとキャノンボール・ファストで使ってたリゼルの回収もしないとだからな。

そして、お前達の持っているガンダムやら何やら、根こそぎ奪わせて貰おうか!

76話 脱出

康太が脱走を始めた頃、亡国機業の基地は混沌の坩堝と化していた。

康太を確保しようと保守派と過激派が小競り合いを始めた中で、康太が脱走の為に様々な工作を始めたからである。

「第三防壁突破されました！ハッキング済みません！」

「馬鹿な、我々のメインフレームは量子コンピューターなのだぞ!?電子戦特化のISでもこのような短時間で突破できる訳がない！」

その中でも警備部隊は目の前の現実には打ちのめされていた、漂流物の理論を基に組み上げられた量子コンピューターはそれまでの常識を打ち破り、圧倒的な演算能力によって各国のセキュリティを無力化してきた。

だがそんな実績を誇る量子コンピューターが今、破られようとしていた。

演算能力は相手の方が上手であり、それだけでなく演算能力の差によって既に半分以上の障壁が突破されている。

そして残った障壁もまた、今破られた。

「掌握完了。全データの吸い出しを開始。お、あつたあつた。一番これが欲しかったんだよな」

そんな中、基地内の監視カメラを破壊し、そこから警備システムに侵入した康太は目当てのデータを確認してほくそ笑む。

ISを通して康太が見ていたもの、それは基地の見取り図だった。「研究データはそれぞれの実験場付近にあるとして、二箇所あるのは保守派と過激派で別れてるからか。オレの機体とかは格納庫か？まあ、全部回るだけだが」

量子コンピューターは既存のスーパーコンピューターが数十年掛かりで計算するような物を数秒で計算してしまえる次世代型コンピューターである。

コスミック・イラの世界ではこのコンピューターが一般的となり、それらの技術を利用した亡国機業も保有している。

これによつて電子戦では無類の強さを誇つた亡国機業だったが、康太がバックアップを受けたのは第5世代量子コンピュータと呼ばれるヴェーダだ、根本的な能力が違い過ぎた。

既に警備システムは掌握した、亡国機業は基地内の監視カメラを確認することも出来ず、既に康太の現在位置を見失っている。

その上で未だに保守派と過激派の内部抗争は続いている、単騎で動くには丁度いい状況であった。

「んじや、一番近いのは第二研究室だな。お宝、あると良いけどなあ」
そう言つて康太はデルタカイで移動を開始する、天井近くに張り付くように停まつていた為、時たま亡国機業の構成員が通り過ぎても混乱が続く基地内では見落とされていったのだ。

そして今もまた人知れず動き始めた康太を阻む者は周囲には誰も居ないのだった。

◆ 「ガフツ!?……クツ、あの男め……よくも私の機体を……!」

その頃、過激派トップであるクイーンは痛みを訴える身体を押さえながら移動していた。

康太との交戦に入った後、ソキウスが先に仕掛けるも結局はMSでしかないダガーでは相手にならず、武装を全て破壊するという手加減を加えた上で無力化された。

そして体勢を整えたクイーンに至つてはISの絶対防衛があるからと一切の手加減なしに攻撃が加えられ、その機体は既に大破した上でISコアまで回収されてしまったのだった。

力の象徴であるISを失つた今、彼女の頭にあるのは自己保身だ。

過激派といえども権力闘争はある、むしろ誰もが隙あらば周りを蹴落としてでも自分の地位を上げようとしているだけに他の派閥よりも激しいと言えた。

彼女等の中にあるのは自分が権力を握ることだけであり、同じ派閥の人間は仲間ではなく、目的は共通しているが、いずれは出し抜くことになる相手という、潜在的な敵という認識だけである。

だからこそISを失つたクイーンは既に後がなかった、このままで

は直ぐに他の過激派の人間に引き摺り下ろされてしまうのは明白だった。

「終われない……私はまだ、終われないのよ……！」

そうして彼女は最後の手段を取ることにした、自身の部屋から続く隠し通路を使って基地の地下深くへと移動していった。

「これこそが最強の力……あの男が論文を出してまで警戒する程の、圧倒的な力なら……！」

それは地下に封印されていた、危険性を他ならぬ康太によって指摘され、不用意に動かすべきではないと亡国機業でも認めたが為に。

しかしその封印がクイーンの手によって解かれた、彼女は悪魔と契約したのだ、どうせ自分には破滅しか無いのなら、全てを道連れにするという邪気に満ちた心で。



混乱続く基地内であっても重要区画は命と引き換えにしても守らなければならぬ場所である。

例えば発電設備、此処が落とされれば使用可能な防衛設備も制限されてしまう。

そして研究施設も重要な場所だ、技術力によるアドバンテージは戦闘に於いて勝敗に直結する分野である、特に国家と比べて地力に差が出る亡国機業では少数精鋭を極めるしかなかったとも言える。

だからこそ機密情報も多い研究施設には常に警備がついている、しかし二機もISをつけたとしても、それ以上の戦力が相手ではどうすることも出来なかった。

「あああああッ!?!」

「二つー!」

研究施設を守っていたのはラファール・リヴァイヴとジェガン・ライトアーマーの二機であった。

どちらも広く普及している機体だが、デルタカイを駆る康太を相手にするには力不足だった。

康太の姿を見つめるや即座に射撃を行った判断は良いが、リヴァイヴの実弾兵器ではデルタカイのマイクロハニカム装甲を貫けず、販売

用として荷電粒子仕様のビームライフルを持つジェガン・ライトアーマーの攻撃は点でしかない為に回避される結果に終わる。

そんな射撃を掻い潜って接近した康太はシールドに懸架したままビームサーベルを発振し、二本の光刃がリヴァイヴを切り裂く。

距離が詰まったことでジェガン・ライトアーマーもまたビームサーベルで応戦しようとするが、斬り結ばれた互いの光刃は、しかし一瞬の拮抗の後、ビームサーベルごとジェガンが斬り裂かれた。

「ば、かな……」

「これで三つ！」

理由は簡単なことだ、ラビットフット社に関連する機体のビーム兵器は康太達が使用する機体と販売用の機体とでは使用する粒子が違うのだ。

ラビットフット社の機体はミノフスキー粒子を使用するが、販売用の物は荷電粒子を使用する、共に刀身の生成にはIフィールドを使用しているが、出力の差によってジェガン側が押し負けた結果となる。

同じ粒子を使っていたなら鏢迫り合いになったであろうが、その差によってクロスボーンガンダムとビームザンバーと同様の現象が生じたのであり、当然そのことを知っていた康太はこれを狙ったのだ。

残るのは機体の中枢を破壊されて擱座した二機のISのみであり、その両方からISコアの回収も行った康太はパイロットはその場に放置し、目的であった第二研究室に侵入する。

中にはISの研究開発を行っていた技術者が詰めており、また少数ながら居た警備兵も康太の姿を見ると手に持ったライフルを構える。

しかしその程度の火力ではISに有効打とならず、逆にデルタカイの頭部バルカンによる短連射によってライフルのみ破壊されてしまふ。

「ほら、きゃっさと逃げるなら命だけは保証するぞ。それ以降は手加減する気もないがな。三分待とう、賢明なる判断を期待する」

とはいえ康太も好きで虐殺するような趣味はない、武器を突き付けながらも逃げるなら追わず、その機会を与える。

三分という制限時間で、しかし誰もが顔を見合わせると一人、また

一人と出口の方へ殺到していく。

研究室内に誰も居なくなったことを確認した康太はビームサーベルを抜くと唯一の出入口である扉を炙るように振るう。

熱によって融解した金属製の扉はそれによって壁と溶接され、物理的に開く事が困難な状態になる。

部屋から出るときは扉を斬り裂けばいい、時間が稼げればそれで良いのだと康太は判断した、その理由はただ一つ、研究室の中に置かれている機体にあった。

「まあお宝と言えればお宝だな。ザフトのセカンドステージ、やはり開発していたか」

開発中だったのだろう、置かれていた機体はカオス、ガイア、アビスの三機、劇中に於いても強奪された機体だった。

機体を見る限り殆ど完成しているように見える、少なくとも外装は完璧だ。

それぞれメンテナンス用のベッドに寝かされており、その各端末にデルタカイを接続することで康太は今現在の開発状況を確認した。

「なるほど、有人での可変機構の解決に至ってなかったのか。最悪の場合、リリアナと同じように四肢を義肢に変えてでも、か」

セカンドステージの特徴として全ての機体が変形または合体機能を有している。

しかしモビルスーツならいざ知らず、生身で扱うISではその可変機構を行おうとすれば中身のパイロットの関節は完全に折れ曲がってしまうという問題があった。

そこを解決したのはリリアナのように元より手足が義肢の者か、デルタカイのように生体の量子化という離れ業を成し遂げた機体のみだ。

ラビットフット社ではデルタカイのデータからリゼルにフィードバックされているが、それこそ過激派が康太に目を付けた理由でもあった。

「ま、その辺は帰ってからゆっくり弄るか。取り敢えず手土産に貰っていいこうつと」

とはいえ問題点はそのみであり、人型のまま運用するだけなら問題ないレベルまで完成はしていたこともあり康太は三機とも強奪することにした。

どの機体にもISコアは搭載されていないが康太の手元には過激派の機体から回収したそれが三つもある、それぞれの機体に搭載した後、空のエネルギータンクを満たすまでの間、康太が目をつけたのは研究開発に使われていたデータベースだ。

量子コンピューターを使用したそれは今まで積み重ねた研究開発のデータが収められている、そんな美味しい獲物に何もしないという理由もない康太は早速デルタカイで接続、コアネットワークを経由してヴェーダに繋ぎ、ハッキングとデータの吸い出しを開始した。

「博士、今聞こえますか？」

『おや、こーくんじゃないか。どつたの？暇になつて暴れ始めた？』

「そんなところですね。今は連中の開発データとか奪つてるところですよ。それと、その試作機も見付けたので強奪中です。もう少し暴れたら脱出するので迎えをお願いします」

『りよーかい！それにしても、試作機つてどんな感じなのかな？珍しい機体？』

「技術的にはそこまで。ただ、空戦、陸戦、水中戦に特化した感じの機体ですよ。しかもアニメでは三機とも強奪された機体です。運命的なものですね」

『アハハ、それは確かに面白いね！ま、迎えの件は分かったよ、ネエル。アーガマで行くから期待しててね！』

それとデータの吸い出しを行っている間に同じくコアネットワーク経由で康太は束と連絡を取る、単独でも帰還出来なくはないが、お土産も持って帰りたいことから迎えを頼んだのだ。

その間にデータの吸い出しも終わり、セカンドステージ三機のエネルギー補給も完了する。

康太は三機のISコアにデルタカイを繋げ、配下の無人機部隊と同じ機能を書き込んでいく。

「ISコア接続完了、パワーフロー良好。全兵装アクティブ、オール

ウエポンズ、フリー。システム、戦闘ステータスで起動」

サイコミュが無い為、普段のジェガン、リゼル部隊と同様とはいかないが、ある程度の自律行動を可能とした三機は康太の指揮下に置かれ、立ち上がっていく。

「さあ、次は格納庫だ、敵が出てくる前に潰すぞ」

◆
ラビットフット社の地下ドック、ここでは集められた専用機持ち達が目の前の巨大な船を見上げていた。

「本当に完成してたんだな……」

「なんか、両端に青いパーツ追加されてるんだけど……」

ネエル・アーガマ、かつてシミュレーターで戦ったことのあるラビットフット社が建造していた強襲揚陸艦である。

以前工場見学として建造中のところを見てはいたが、それが完成した上で目の前に鎮座しているというのは圧巻の光景だった。

全長380メートル、米軍の最新鋭空母であるジェネラル・R・フォード級の337メートルを上回る巨体という身近に感じることはない大きさにただただ圧倒されていた。

「はいはい、呆けてるところ悪いけど早速乗り込むよ！移動しながら説明するから、ちゃんと聞いておくようにね！」

『あ、はい』

とはいえいつまでも眺めている訳にもいかず、タラップを伝って乗船を始める面々を引っ張るのは束だ。

本人はいつものエプロンドレスにウサミミといった格好だが、その表情はいつも以上に輝かしい笑顔となっていた。

理由としては自分の作った宇宙船が動き出すのと、念願の宇宙に短時間とはいえ行けることなど、色々とある。

これから亡国機業と一戦交えるというのに嬉々とした表情との差が全員を困惑させるが、その内心を知るクロエや千冬は軽いため息をつく。

その間、束から作戦内容に関する説明が行われ、束と指揮を行う千冬、楯無は艦橋へ向かい、現地に到着して直ぐに発進できるよう専用

機持ち達は格納庫横の待機室に集まった。

これから宇宙に上がるため、そこにあるシートに座りしつかりとベルトで身体を固定するのだ。

「遂に始まるんだな……」

「訓練は積んだとはいえ、いざその時となるとな……」

「だが私達がやると決めたのだ。ならばやるしかあるまい」

「そうね。でもコウが暴れてるんだもの、案外私達の出番なんてないかもしれないわよ」

「あ、言ってる。着いたら何食わぬ顔して船に乗り込んでくる感じが想像つくわね」

「確かに、自由に暴れだすとそうなるかもしれませんがね」

「うん、初めは心配だったけど、定期的に送られてくる報告で直ぐに不安も薄れちゃったもんね」

「むしろ亡国機業に同情することになるかもしれないな。そうだろう、姉上」

「そうですね。むしろ現在進行系で敵のISを鹵獲しているようなので、皆さんの予想通りといったところですよ。あと姉ではないです」

決戦に対する不安はある、だが最後のクロエからの報告に誰もが康太らしいと苦笑する。

訓練は積んだ、対策も身に着けた、連携は強化された、ならばあとはその全てを亡国機業にぶつけるだけ、そう意気込みを新たにする。

対してネエル・アーガマの艦橋では――

「よしっ、全気密隔壁閉鎖！ドック注水始め！」

艦長席に座る束、指揮の為にセンサー長の席に千冬が、オペレーターとしては楯無が、機関長の席にエイフマン教授が座り、砲術長の席にリリアナ、操艦を担う航海長の席にはミネッサが着いている。

「おい束、本当にこの面子で戦艦を動かせるのか？」

「大丈夫大丈夫！結構な部分をオート化してるから、最悪の場合は音声入力で艦長だけでも動かせるよ！」

「まあ、僕は戦闘には詳しくないのでな、核融合炉の機嫌を見たり機体を見たりしか出来ぬが、問題はなからう」

「んー？取り敢えず、敵を見つけたら撃てばいいんだよね？」

「何で私ここで舵を握ってるのかしら……私って研究者の筈よね？」

「本当に大丈夫なのかしらね……」

まずまともに軍艦を動かす訓練や教育を受けた人間はおらず、この場の半分が技術者という有様である。

それでもやるしかない、これ以外の方法だと目的地に着くまでに何時間も掛かってしまうからだ。

幾ら康太でもそんな長時間、補給なしで戦闘は出来ない、だからこそこの手段しかない。

技術面にそこまで詳しくはない楯無は上手くいくことを祈るだけである、そしてネエル・アーガマが収められていたドックへの注水が終わり、その船体が完全に海水に覆われた。

「んじゃ、メインゲート開放！固定アーム解除！微速前進、ネエル・アーガマ発進だよー！」

その中をネエル・アーガマが進んでいく、ラビットフット社がIS学園の地下にある都合上、発艦時は水中にゲートを作らざるを得なかったことから、水中での運用も可能としたネエル・アーガマはそのまま動き始める。

「日本政府には連絡済みよ。周辺の航空機、船舶にも退避命令を出してあるから、存分に行けるわ」

「センサーにもそれらしい反応は無いな。浮上出来るぞ」

そうしてゲートを完全に抜けたネエル・アーガマは針路に何も障害物が無いことを確認すると浮上を開始する。

海水を船体のあちらこちらから滴らせつつ、次の瞬間にはシールドバリアによって完全に海水が弾かれたネエル・アーガマの姿はIS学園のみならず、最寄りの街からも目にすることが出来た。

「フン、此処までは問題ないね。それじゃあ次に行くよ、ローエングリン1番2番、発射用意！照準、成層圏！」

「えっと、これだね。チャージ完了、いつでも行けるよお」

「射線上にも人工物なしだ」

「なら発射！」

そんなネエル・アーガマの両舷に取り付けられた青いパーツから砲門が迫り出し、放たれたのはアークエンジェル級などに装備されている陽電子破城砲ローエン格林である。

何故このような装備がされているのかといえば、実験装備である。ミノフスキークラフトを装備している為、ネエル・アーガマは自力での宇宙に上がれるが、今回は速度を重視していることもあり採用された。

元よりマスドライバーだけでなく様々な方法で宇宙に出ることを検討しているラビットフット社で、今ある装備で一番に速度を確保出来るのがアークエンジェル級と同じくプラズマブースターを運用するという方法だった。

故にネエル・アーガマに装備されていないローエン格林をブースターに追加し、その発射によって生まれた真空状態によって空気抵抗の存在しない中を進み、更には発生した地場を利用して船体表面のプラズマをブーストさせることによって一つの誘導体として発進させるのだ。

これによりネエル・アーガマという巨体からは想像できないような速度で地球の重力を振り払っていった。

そしてこの日、ネエル・アーガマという存在は人類にその姿をありありと示したのであった。